ナザリック最後の侵入者

三次たま

モモンガ様が「最終日に侵入者がいたらなぁ」みたいなこと言ってたから書いてみた。

能力的には強く設定してるけど、ストーリー的理由がちゃんとあるからセーフだよね？大丈夫よね？

※注意点

・オリ主設定は基本捏造

・他にも設定捏造や拡大解釈する場合がある

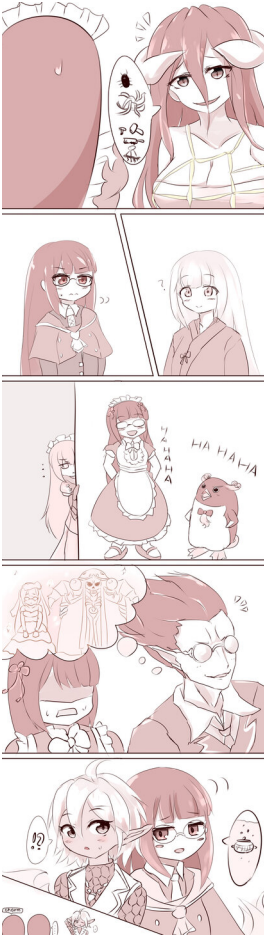
・原作と似たり寄ったりのところはスキップするかも

・敢えて原作キャラを登場させない場合がある

・オリ主以外のオリキャラは作らない

☒オリ主とアインズ様はそこまで仲良くない（重要）

●オリ主とアインズは結ばれない（これも重要）


HA HAHA
HA HAHA

鬼豆腐様からありがたーい挿絵を頂きましたので、ここに貼らせていただきます
ありがとうございます

あとこちら、自分がきゃらふとというアプリで作ったオリ主のキャラデザです。
参考までに

目次

約1巻位 …… 1
始まりから玉座の間まで …… 1
忠誠の儀 …… 15
42人目の〇〇〇 …… 34
第4話 …… 58
孤独な至高と子猫な孤高 …… 78
カルネ村まで …… 94
至上命令まで …… 116
地下労働メイド暮らし …… 130
肉球に埋もれし魔爪 …… 159
辺境集落への出向 …… 159

精神年齢詐称……185
トブの大森林まで……212
木天蓼　前編……230
木天蓼　後編……260
悪神……283
幕間……320
悪意を自覚する不死者　知恵に溺れる淫魔……328
影から生ずる光明……356
非公式ラスボス戦……382
同族……409
気にしすぎ……440
隙間……461
アドバイザー……461

another under ground 前半……483
another under ground 後半……505
嫌な予感……530
君の脳漿を吸いたい……552
王国編なのに王国がほぼ背景 573
犬のリビドー……573
退かない奴には後押しを……592
番外編：アゼリシア山脈の霊廟……606
悪魔のキューピット的苦悩……633
事前報告と凶悪な影響力……656
ham actress……677
考察と協力……693
戦士長宅訪問……709

オリ主：マタタビの設定……736
メイド・メイド・ドッペルズ……745
八本指？　六腕？　知らない子ですねぇ……771
英雄と魔皇と竜鎧と偽妹……785
言い訳と言う名のエッセイ……806
番外編2世界を愛する君に焦がれて……820
禁断の果実……854
和解失敗……874
信頼の壁……898
演武……914
借り物闘争……936
脅威の者共……949
物申す……965

決着……984
エピローグ……1009
隙間2 1033
事情説明・上：アルデバランと蒼薔薇……1033
事情説明：下……1054
探し物……1073
獣①……1111
獣②……1134
侵入者の告白……1152
シャルティアのパッド……1183
情緒クラッシュ……1190
嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い……1216

状況証拠……1237
IFルート　悟と桜……1260
夢の悪魔の告白……1302
支配者の告白……1327
甘々外交　上……1352
甘々外交　下＋α……1372
最終章　1391
プロローグ……1391
ツアー戦　上……1417
ツアー戦　下……1448
回帰不能点……1478
黒幕の裏側……1498

貴方以外のこの未来をKill it、kill it……1552
ナザリック最後の支配者……1582
オーバーフロード現象……1611
モノローグ：影道化の告白……1651
偽物対決……1684
二りぼっちの決戦……1696
オーブ・オブ・モモンガ……1717
宣誓……1745
ナザリック最後の侵入者……1762
エクレアの反逆……1808
マーレ・ベロ・フィオーレ……1833
屈服……1870

約１巻位

始まりから玉座の間まで

繰り返しになりますが、オリ主とモモンガ様はそんなに仲良くありません

『ＤＭＭＯＲＰＧユグドラシル 最終日 ナザリック地下大墳墓９階層円卓の間』
ギルド:アインズ・ウール・ゴウンのギルド長モモンガの背中は、円卓の間にて一人取り残され哀愁を漂わせていた。

『ナザリック地下大墳墓がまだ残ってたなんて思ってもいませんでしたよ』
先程話していたヘロヘロとの会話を反芻する。
『またどこかでお会いしましょう』
そしてその度、心の奥底に突き刺さった棘が疼いていった。

「どこでいつ会うというのだろうね」

（わかってる　みんなにもリアルがあるんだ。　夢を叶えた人だっている）

ギルド:アインズ・ウール・ゴウンの加入条件は2つ。アバターが異形種であること。プレイヤーが社会人であること。社会人であれば、当然スケジュールが詰まってユグドラシルをプレイする時間は限られてくる。かつては41人という大所帯なギルドだったが、この結末ははじめからから予想がついてたはずなのだ。

しかし、頭のなかでいくら理屈を整えようとも、彼の中でどす黒い何かはグツグツと沸騰する。

「ふざけるな！みんなで作り上げたナザリック地下大墳墓だろ！なんで簡単に捨てることができる?!」

モモンガは憤らずにはいられなかった。そして衝動的に叩きつけた円卓に発生した0ダメージカウントがいかにも虚しい。

終焉のときは迫ってきている。嘆いていたって仕方がないし、せめて最後のときくらいましな終わりかたでいたい。モモンガはそう考えて気持ちを切り替えた。

ふとモモンガは、部屋の壁際に埋め込まれていたギルド武器のスタッフに目を向

けた。
（スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン、これを作るために奥さんと喧嘩したひともいたっけ）
ギルド:アインズ・ウール・ゴウンは多数決を重んじるギルドである。そしてそれは、その方針を決めたモモンガ自身がそれを何より尊守してきたといっていい。だからここで、独断でギルド武器を手に掛けることに躊躇を覚えていた。もっとも、今ここで反対意見を述べることができる者はいない。
「最後くらい、俺が勝手にしてもみんな許してくれるよね」
それは、このギルドにおいてのモモンガの、はじめての我儘かもしれなかった。
白磁のような骸骨の手を伸ばし、仲間との思い出の結晶に手をかける。すると、黄金のスタッフから苦悶の表情を浮かべる黒い影が現れた。
「……」
こんな時でもなければ手にかける機会すらなかったのに、演出設定が無駄にクオリティが凝っていたことに、モモンガは呆れつつも微笑ましく思った。

「行こうか、ギルドの証よ。いや——我がギルドの証よ」
モモンガは、最後の時を過ごすため、玉座の間へと歩を進めた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『同時刻　ナザリック地下大墳墓10階層　玉座の間』

かつて１５００人の侵入者すら退けた難攻不落のナザリック。その前人未到の10階層玉座の間に、前代未聞の侵入者が居た。
「……やれやれだぜ　ホント、やれやれだぜ……」
彼女の名は『マタタビ』。異形種のケット・シーであり、現在変身スキルによって紺色セーラー服を着たメガネで黒髪の女子高生の出で立ちをしている。「シノビ」「シーフ」「アサシン」「マスターアサシン」など多くの隠密系クラスを持つ密偵型ビルドであり、ソロでのPKを基本スタイルとしている。
もともと彼女は、ユグドラシルの異形種PK差別に襲われたところをクラン：ナインズ・オウン・ゴールに救われた者の一人であった。訳あってメンバーにはなっていないが、ＡＯＧのＰＫＫ活動に協力したり、１５００名のギルド防衛戦時にも

その一員に加わりつつ、影で裏切り情報を流したりなど数多くの貢献をギルドにもたらしてきた。

ＡＯＧの活動メンバーがモモンガただ一人になった後も交流を持ち続けてモモンガとフレンド登録している仲でもある。

そんな彼女がナザリックに侵入している理由は、最終日にモモンガへサプライズするためであった。

ギルド協力者の地位にあった彼女は、ナザリックのギミック情報を手にする機会があった。１５００名のギルド防衛戦時に、裏でこっそりナザリックのギミックを調査しており、おおよそ８階層までのギミックは知り尽くしていたのだ。

入念に計画を立てた上で彼女はナザリックに侵入。ＮＰＣや性格最悪のトラップ達を慎重に躱していった。最奥につくまでに３日はかかっているのだが、リアル体には点滴を繋いで、安全地帯に着いては寝落ちするという離れ業でフルダイブを継続させていた。　採点式であれば満点間違い無し。完璧な侵入計画といえただろう。あくまで侵入計画としては。

（モモンガさんもギルド武器も見つからないじゃない！あーもどうしてこうなっ

たの!?）

知略と精神と課金とを尽くし、幾度の試練を乗り越えた彼女だが、肉球に包まれた彼女のツメは砂糖菓子もかくやというほど甘かった。

現在彼女は、玉座の間にて絶賛迷子の子猫中であった。そこには親切に導いてくれる犬のおまわりさんはいない。かわりといってはなんだが傾国の美女風の堕天使的ＮＰＣが女神のごとく微笑み続けてくれている。

（なんだろう、隠密スキルでバレてないはずなのにひたすら微笑み続けてくるのがすごく不気味。ん？　あのロッド、《真なる無（ギンヌンガガプ）》ね、まぁどうでもいいけど）

（ってそんなことよりどうすんのよ！　潜入に不要とか言って《メッセージ/伝言》のスクロール作ってなかったとかバッカじゃねぇの……私　これじゃナザリックのどこにモモンガさんがいるかわかんないじゃない！）

（下手に《ロケート・オブジェクト/物体発見》のスクロール使えば攻性防壁に引っかかってモモンガさんが来るまでに私ホトケになってるし！）

ちなみに彼女にはモモンガがナザリック外で最後を過ごすかも知れないという発

想はなかった。そもそもサプライズ計画そのものに重大欠陥があったというのに。

玉座のそばのＮＰＣは自分のマヌケぶりをまるで嘲笑ってるように見えて、マタタビは八つ当たりしたい気分になった。だが自制心には敵わず泣く泣くこらえることとなる。

「(……ハァ)」

隠密スキルのランクが下がるため溜息すらできない彼女は、仕方なく心中でそれらしき発音をつぶやいた。

『ガチャリ』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

玉座の間にたどり着いたモモンガは、側に仕えていた戦闘メイドプレアデスと執事のセバス、玉座の間にて佇んでいた守護者統括のアルベドをＮＰＣコマンドによって待機させていた。

「《真なる無（ギンヌンガガプ）》じゃないか⁉ どうしてここに」

ギルド：ＡＯＧといえど、11個しか所持してなかったワールドアイテム。これ

を独断で持ち込んでＮＰＣに持たせる暴挙に腹を立てたが、最後なのだから持たせたやつの意思を尊重しようと思いとどまる。結局没収はしなかった。

ワールドアイテムの玉座に腰掛けて一息つくと、傍にいるアルベドが視界に入った。どんな設定だったのか気になったモモンガはコンソールからアルベドの設定情報を開く。

（長っ！そういえばアルベドを作ったのは設定魔のタブラさんだったか）

長々とスクロールされる大量の設定文に気圧されるモモンガ。しかし文章容量の最後の一文を見ると……

『ちなみにビッチである。』

「……はぁ。ギャップ萌えだったけ、タブラさんは。それにしてもいくらなんでもこれは」

―酷すぎる。

モモンガはおもむろにギルド武器のスタッフをかざして、ＮＰＣ設定の編集コンソールを取り出す。　件の一文を削除したあと、空白の一行が妙に気になり悪ふざけで『モモンガを愛している』と書き直した。

仲間のＮＰＣにいたずらをしかけるなど普段の彼からすればあまりに常軌を逸する行動だった。それがどのような心境の変化だったかは、モモンガ本人でさえ知り得ない。

「くふっ！　恥ずかし、何やってんだろ俺」

今はただ、背徳感と羞恥心が胸のうちに燻っているばかりである。

「……別にいいと思います。最後なんですし、お好きになさっても」

「!?」

突如虚空に響いた女性の声。まさかいまのを見られたのか？そもそもだれだ？情報がないからギルメンじゃない？侵入者？モモンガは突然のことに驚愕し、骨ばかりで空っぽの脳みその中に大量のはてなマークが広がっていった。

玉座の前にある段差の下の方。アルベドがいるのと反対側の空間がぐにゃりとネジ曲がり、だんだんそれが人型に変化していく。

そしてそこに現れたのは、大和撫子風の長髪をたなびかせた制服姿の女子高生で

あった。日本人然とした整った顔立ちに細フレームのメガネをつけたそれはいかにも優等生というイメージを与える。

ただ一言いえるのは、その姿がこの玉座の間に盛大にミスマッチしていることであった。

「久しくお目にかかります非公認魔王さま。マタタビです」

もっとも、セリフ選びと玉座の下に丁寧に跪く動作はそれなりに様になっている。

「マタタビさん!?　どうしてここに…ひょっとして今の見てました？」

対する魔王は玉座から飛び上がりあたふたと狼狽してしまう。その様は、隠していたエロ本が見つかってしまった思春期の少年そのものだ。

慌てる魔王に跪くJK。「中身が逆なんじゃないの？」と思うくらい、その光景はシュールであった。

マタタビの謎の臣下ロールは、おそらく気まぐれであると思われる。

「見ておりましたが……気にしないでください。人間大抵、生きていればそんなことの1つや2つありますから」

JKは魔王を懸命に諭す。魔王は、内心尾を引かずにはいられない小心者の魔王

だったが、JKの好意を無下にしないため極力気にしないように努める。
「……はい、すみません。ところでどうしてマタタビさんがここに？まさかここまで侵入してきたんですか!?」
「ほんの余興ですよ。お気に召していただけましたか？」
「ええ！結局10階層に攻め込んできたプレイヤーは居なかったな～って思って少し寂しかったので、嬉しかったです。　ありがとうございます」
『m(*-ω-)m』モモンガは感謝の意を持つアイコンを出す。
「もったいないですよ～。
　隠れるつもりはなかったのですが、NPCに待機コマンドが出されるまで部外者の私はすがたをあらわせなかったものでして。
　それと、計画立案ひいてへ準備のために3ヶ月程連絡が取れなかったのでご心配をおかけしました。」
「そのためでしたか。たしか「やることがある」と、てっきりもう辞めてしまわれたのかと……」
　ふと、モモンガの表情に陰りが表れるような錯覚をマタタビは感じ取った。本

来、ゲームのアバターが表情を動かせることはないのだ。

マタタビは、モモンガの周囲と、部屋の両脇に掲げられている41種の御旗を見回し何かを察した。そして何を言うべきか、あまり自信のないオツムを回して考える。

「仕方ないとはいえ、魔王さまにはあんまりな話です。　最後に残ったのが私だったなんて、思ってもみなかったですから」

今の言葉は半分が嘘だ。彼女は端からモモンガが一人で最後を迎えるだろうと目星をつけていた。

「……いいえ、気持ちはとても嬉しいですが、リアルを優先させるのは当たり前ですよ。成功した人や夢を叶えた人もいますしね。間違ってるとしたら俺の方です。」

魔王の小さなつぶやきは、マタタビの耳にはしっかり届いていた。

（どの口が言ってるんだろう。この魔王は）

最終日まで居残ったマタタビをしても、モモンガのギルドへの執着は異常である。そんな彼の理性的な物言い、それが彼自身の救いようもない人格を如実に表していた。

（そういう所が良いんだけど　モモンガさんは）

だからこそ彼はＡＯＧのギルド長を務められたのかもしれない。ＡＯＧは誰も彼も癖が強く、決して少なくない諍いも確かにあったのだから。

マタタビとモモンガはあまり仲が良い方ではなかった。今日は最終日ということで会話することになったが、普段は金策の工面取引をするだけのドライな関係である。しかしマタタビは、モモンガの協調性というものを非常に尊敬していた。

「やはり相変わらずですね。」

「何がです？　っと時間ももうないですね。会えて良かったです。マタタビさん、ありがとうございました。」

話し込んでいるうちに、気付くとサービス終了に10秒切っていた。

「ではごきげんよう。　今生の別れやもしれませんが、何卒達者で」

次は忠誠の儀までやって終わりです

忠誠の儀

そういえば特典小説で42人目のギルドメンバーは男性だと判明したそうですね（遠い目）

一通り書き終わったあとにｗｉｋｉで確認したけどビックリしました。TSタグつけたほうがいいのかな。

「あれ？ゲーム終わらない」

ふとマタタビさんがつぶやいた

ユグドラシル最終日、俺とマタタビさんは共にゲーム終了の瞬間を待っていた。

しかし予定時刻を過ぎてもログアウトは行われず、それどころかコンソール、アイコンが消えGMコールも届かなくなってしまっていた。

「これは……」

「どういうことだ!?」

考えられるのは、サーバーダウンが延期になった、またはユグドラシルⅡなどの新たなＤＭＭＯＲＰＧに転送されたといったところか。満足にゲーム終了もできないなんて、最後の最後で糞運営のやらかしに腹が立った

「ひえっ!?」

マタタビさんが口を抑えながら驚愕した声を上げる。彼女の視線の先に居たのはＮＰＣアルベド、だがその様子がいつもと違うことに気づく。

「どうかなさいましたか　モモンガ様」

口が動いている!?　誰かが最後にAIでも仕組んだのか？　いやしかしこれは……

おもわずこちらが怪訝な様子で見返すと

「モモンガ様？」

（あ、あれ？　感情が勝手に沈静化されて）

状況についていけず動揺していたところで突然感情の起伏がおさまり、強制的に思考が冷静化される。

「GMコールが効かないようだ」

「お許しを、無知なわたくしではGMコールというものに関してお答えすることができません」

（ＮＰＣが会話をしている!?）

「この失態を払拭する機会を頂けるのであれば、これにまさる喜びはございません」

「そ、そうか」

アインズ・ウール・ゴウンのＮＰＣは、ヘロヘロさん制作の特殊AIが組み込まれており多少複雑な動作が可能だが、自律的に会話ができるまでの域には達していない。と言うか不可能だ。　ではこの現状は一体……

マタタビさんを見ると、驚愕のあまり口を抑えてガクガク身震いしている。まるで借りてきた猫のようだ。

（ありえない、何か異常が発生しているのか）

確認のため、ギルド武器のスタッフを手中から放すと　空中に漂いながら浮遊して止まった。

こういうところはゲームの時と同じなのに、GMコールは効かない、コンソールも開かないしどうすればいいのだろう。　とりあえず、ＮＰＣに命令してよいのな

ら……

「セバス。大墳墓を出て、ナザリックの周辺地理を確認せよ。　プレアデスからソリュシャンを同行させ、知的生物と接触した場合丁寧に交渉しこちらに連れて来い。だめだったらソリュシャンを逃し、情報だけ持ち帰るように」

「承知いたしました、モモンガ様」

　コマンドを用いない命令に従っているのか？　よくわからないがとりあえず命令しても良さそうだな。

「他のプレアデスたちは９階層に上がり、侵入者が来ないか警戒に当たれ」

「仰せのままに」

　指示を承けたＮＰＣ達は玉座の間から退場していく。

（何これ疲れる）

　とりあえず上位者として接して於けば間違いはないのかもしれない。まさかゲーム時代にやっていた支配者ロールが役に立つなんて思いもしなかった。でも素じゃないからこれは相当気を使うなぁ。

「僭越ながらモモンガ様、よろしいでしょうか？」

「何だ。申してみよ」
何だ何だ？　知らぬ間にNG行為に触れていしまったとかか？内心気が気でない俺に対し、神妙な面持ちのアルベドはマタタビさんのほうを一瞥してみせる。
「はい、その者は一体、モモンガ様とどのようなご関係なのでしょうか？
先程からモモンガ様を魔王と敬い、慕っている様子でしたが…」
まるで般若のような鉄面皮で問うてくるアルベド。マタタビさんは増して体を震わせ、怯えているのがわかる。
そうか、ＮＰＣが俺には無害だとわかっても、マタタビさんは侵入者だから敵対される危険性がある。　だからさっきから震えっぱなしだったんだ。
ここは出来る限りフォローして置かないと彼女の身が危ない。
「とりあえず彼女は敵ではない、よって手出しは許さん。
そうだな　シモベ達にも彼女を紹介せねばなるまい。　アルベド」
「……はい」
なぜか突然、般若から反転しおらしい反応をするアルベド。タブラさんには悪いが、ギャップ可愛いと思ってしまう自分がいる。

「1時間後　第六階層の闘技場に、4階層と8階層以外の全階層守護者達を集めるよう手配してもらいたい。アウラとマーレには私が直接話しておこう。そして会議のついでに、彼女についての話をする」

「……承りました」

再度マタタビを一瞥するアルベド。

マタタビはというと、何か言いたげな視線を俺のほうに向けている。　どうした？俺なんか悪い事したの？

「では失礼させていただきます」

一礼して、アルベドは玉座の間から退場した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

NPCたちが居なくなった玉座の間で、一段落つき緊張感から解き放たれた私とモモンガさん。　ワールドアイテムの玉座に座る死の支配者はなかなか絵になるが、当の本人が「…はぁ」とか「うわぁ」とか言いながら両手で頭を抱えこんでいて色々と台無しだが。

そもそも制服姿でこの場の世界観と致命的に乖離してしまっている私がどうこう

言えるもんではないけれど。

そういえばこの世界に来てからと言うもの、ゲームシステムの能力に様々な変化がもたらされた。玉座の間で行った幾つかの成果を箇条書きで言うと

・魔法やスキルがフィーリングで発動できるようになった。
・自分のMP・HP量などのステータスがなんとなくわかるようになった。
・フレンドリファイア有効化された。
・黒い穴からアイテムを取り出せるようになった。
・精神異常無効化にMP消費がかかる等の一部仕様変更。
・18禁に触れても垢バンされない。

まだ要実験ではあるけど、全体的に利便化されているといっていい。このレベルの機能性は現状の技術力だとゲームとして再現不可能だからここが異世界だという確信を後押しすることとなる。

「ねぇねぇ魔王さま、やべぇ死ぬかと思った？」

「どうしたんですか？マタタビさん、これでも敵対されないよう精一杯フォローしたんですけど」

「そりゃ最初は咄嗟の状況判断に『誰だこの魔王様は!?』って思ったけど！
モモンガ様が別人になって私ひとりきりで異世界転生しちゃったの？って思ったけど！」
突然動き出したＮＰＣに、とっさに的確な指示を出して送り出すその手腕は、流石曲者揃いのＡＯＧをまとめ上げただけのことはあると素直に感心した。
もっとも、自己評価の低い隣人が、私の素直な感心を素直に受け取ってくれることはないだろうけど
「いやいやそれは言い過ぎですよ。　で、何が不満なんですか？」
「さっきそこにいたＮＰＣのアルベド？でしたっけ、彼女に何したのか覚えていますよね」
「そのことはもうなしにしてくださいよ。　ってそれになんの関係が？」
「やっぱり気付きませんでしたか……。あの女の人、終始私に殺気を放ってたんですよ。　私を魔王さまの嫁かなんかと勘違いして」
怖かった。死ぬかと思った。生まれてこの方あそこまで体が震えたことはない。
吊革を離した通勤電車のほうがまだ安定するだろう。

「マジですか!?」
「……私、骨じゃなくて普通にお肉の付いた男の人が好きなのですがね。リアルに彼氏はおりませんが」
「俺だってリアルじゃ普通の男ですよ！リアルに彼女はいないですが……」
「告白ですか？ボーナス全部課金ガチャにつぎ込むような金銭感覚の旦那なぞ、それはそれで普通にお断りです」
「ちょっ!?　違いますって！　大体ここは異世界ですよ？魔法スキル色々検証しましたが、リアルに戻れる公算薄そうですし、その話をしても仕方ないでしょう。」
「冗談ですよ、私とて低収入のフリーターなんですし。
しかし魔王さま的にそこのところどうなんですか？　リアルに未練とかありますす？」
「さっきのセバスの《メッセージ/伝言》を聞く限り、少なくとも自然環境はまともなようですね。　この異世界の住民の強さが不明ですが。
何にしても未練はありません。　リアルには何もないですから」
まだこの世界に何があるともしれないのにさすがはモモンガさん。自分のギルド

が現実化したというゲーマの夢的シチュエーションを逃さないとは。
「右に同じです。じゃ、そういうことで行きますか」
私もリアルじゃしがないフリーターだったから、身の安全さえ確保されれば異世界生活というのもまんざらではない。そのへん隣の彼はやたら臆病だが、今の私には妙な慢心があった。
「ええ、では手を出してください」
モモンガさんは骸骨の手を差し出した。私がそれを取ると、彼の指についている赤い指輪が煌めく。
突如場が暗転し、気づくとそこは薄暗い石造りの廊下だった。
「転移の指輪は普通に作動するようだな」
「壁の中に埋め込まれちゃうとかじゃなくて良かったです」
「……さらっと怖いこと言いますね。」
「では私、これからスキルで隠形しますから。自己紹介のときにお声をかけていただければ」
「了解」

さっきのＮＰＣアルベドさんの反応からして、最高責任者っぽい立場のモモンガさんの横に、突然見知らぬ輩がいれば不快感を誘発して良くないという結論に至った。

だから、ＮＰＣがモモンガさんに無害だと知れるまで私は姿を隠し、安全とわかってから登場して自己紹介するという手筈を組んだ。私を感知することができるＮＰＣは５階層のホラー的なアレだけみたいだから無難な作戦だろう。

「ではスキル《隠形Ⅴ》《気配遮断Ⅴ》《認識阻害Ⅳ》っと。さて魔王さま、私が見えますか？」

「はい、自分が見えない誰かと話しているようで恥ずかしい感じがします」

スキル名を宣言してその後果がちゃんと発動しているということを自分自身でもしっかり認識できる。初体験の感覚なのに不思議と違和感を覚えないのが不気味だけど。

（とりあえず会話するときにはメッセージ繋ぐので）

（かしこまっ！）

ギルド武器の杖をコツコツつきながら歩み出すモモンガさん。置いていかれ無い

よう、私も忍び足でついていく。行く先は６階層にあるという円形闘技場だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ほぼ原作通りの流れ。

モモンガさんが内心うろたえながら、ビビりまくるマタタビにメッセージを送るだけなのでカットします

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

守護者のＮＰＣとの打ち合わせ、状況確認がひとしきり終わったところで、モモンガさんが質問を投げかけます。

「お前たちにとって私とはどのような人物だ　まずはシャルティア」

妙に威厳のある言い方ですが、ようは「みんな僕のことどう思ってるの？」ってやつです。

「まさに美の結晶　この世界で最も美しい御方でありんす」

美の結晶を自称出来そうな彼女自身がそのようにいうのもなんか不可解ですが。

（……彼女ネクロフィリアなんですよ。ペロロンチーノさんが製作者なので）

（なるほど…あのエロ翼王ですか）

脳裏に、垢バン覚悟で蕩々とエロスを語るバードマンの姿が浮かんでいく。
「コキュートス」
「守護者各員ヨリ強者デアリ、マサニナザリック地下大墳墓ノ絶対ナル支配者二相応シキ方カト」
（実際どうなんです？　守護者相手に立ち回るのは）
（単機でならまぁ出来なくもないですが……シャルティアがちょっとキツイですね。　あれでもガチ構成ですから）
「アウラ」
「慈悲深く、深き配慮に優れたお方です」
「マーレ」
「す　すごく優しい方だと思います」
この子だけ妙に頬が紅潮している気がするけど気の所為？
「デミウルゴス」
「賢明な判断力と、瞬時に実行される行動力を有されるお方、まさに端倪すべからざるという言葉がふさわしい御方です」

（……めっちゃプレッシャー感じるんですが）
（前半は合ってる気がしますけど……タンゲイスベカラザルって何？）
「セバス」
「至高の方々の総括であり、最後まで私達を見放さず残っていただいた慈悲深きお方です」
見放さずって、そういう扱いなんだ。
「最後になったが、アルベド」
「至高の方々の最高責任者であり、私共の最高の主人であります。
そして私の愛しい御方です」
「な!?　ぅうんなるほど……各員の考えは十分に理解した」
「「はっ！」」
（何、この高評価っ!?）
（……知らんがな。まぁ合っていなくもないのでは？）
（他人事だと思いやがって！　そろそろマタタビさんの紹介ですよ）
緊張するなぁ。殺されたりとかしないかなぁ。

「それと最後になるが、皆に紹介したいものがいる。　気付いたものはいるか？私の側にずっといるのだが」

「「!?」」

守護者の人たち驚愕です。まぁ自分で言うのもなんですが、１００レベルを誤魔化せる隠形使いはユグドラシルでもそうはいないと自負してる。むしろ私にはそれくらいしか能がないからバレたら立つ瀬がないのだが……。

「さっさと出てきなさい」

「ぼふっ!?」

隠形を解くのを渋ってたらモモンガさんが本気の$$絶望のオーラＶ$$出してこっちを炙り出してきた。レジストには成功したが、うっかり隠形を解いてしまう。

いやだから、そんな能力でバレたりしたらこちらの立つ瀬がないんですって！

「……マタタビです」

お間抜けで妙ちくりんな登場の仕方に呆然とするＮＰＣの皆様。

「続けて、もっとちゃんと、詳しく」

さっきから他人事のようにからかっていた報復でしょう。なんか普通に怖いです。

「種族はケット・シー、得意なことは隠形と罠はずし。

モモンガ様とは懇意にさせてもらっていて友好かんke「従属の間違いじゃありんせんの？」間違えました、従属関係にあります。

ナザリックに直接仕える者ではありませんが、同じ主を持つシモベとしてどうか仲良くさせてもらえると嬉しいです」

（マタタビさんっ!?あんた何いってんの!?）

トゥルーヴァンパイアの凄みに負けて、うっかり二言を吐いてしまいました。NPCの皆さんからは訝しるような微妙な視線。あ～あと約一名、殺気も少々。

先程からよく殺意を読み取れるのは、《読心感知》というエネミーの敵対認識を確認するパッシブスキルの効果です。この世界では相手の悪意敵意殺意、好意善意愛情などをフィーリングで感じ取れるように変化した模様。

ちなみに骸骨はわかりません。

なにこれ人間不信まっしぐらなんですが。いやここに人間いないけど。

（へるぷ・みー　魔王さま！）
「う、うむ。彼女は昔からアインズ・ウール・ゴウンと付き合いがあってだな。
　かつて１５００人もの軍勢がナザリックに侵攻を受けたとき、その一人に彼女がスパイとして紛れ込んで、敵司令官その他戦闘員のいくつかを殲滅したという功績があってな、それを認められシモベの一人（フレンド）になったのだ」
（シモベ以外は大体同じだね）
（アンタが言った嘘だろうが！）
　とにかくナイスフォローですモモンガさん。と、内心エールを飛ばしつつＮＰＣを見やると、歓迎の気配が若干。しかし、約一名殺気が尚強くなってるような？
「では彼女の配属だが……アルベド、お前に委ねよう。」
「では一人、シモベの中で人手を求める者に心当たりがあります故、そちらに配属させようかと思います。」
（いつの間にか私の配属先が決まってるのですが……　魔王さま？）
　アルベドさん、女神のように慈愛に満ちた微笑みでこちらを一瞥します。しかし、その内心がこちらへの敵意で満ちているとわかれば戦慄する他ありません。

（自分で言ったんでしょう？　まぁ、突然来た奴がいきなり上にのさばるのも歓迎されませんし、身の振り方としては妥当かもしれませんね。私も目は通しておきますし、アルベドに決めさせれば問題ないでしょう）

（まぁ理屈は分からないでもないですが、一番問題ありそ――）

――うなの彼女なんですけどと言おうとした寸前で、

「うむ、では今後共、忠義に励め」

突然、モモンガさんの姿が消えました。おそらく先程使った拠点移動のアイテムでしょうか。

それにしてもまずいですね。アルベドさん、っていったけ？　彼女が私の人事を決めるなんて嫌な予感しかしない。途方もなくブラックな職場に務めさせられ過労死させられるＥＮＤとか嫌だなぁ。　ま、結局モモンガさんの目を通す訳だし大丈夫かもしれないけど。

モモンガさんも大変だなぁ。部下の異常な忠誠心に当てられ、今頃は見えない胃袋がきゅうきゅう締め付けられていることでしょう。

濃ゆい部下達に突然忠誠を誓われて、御可哀そうに……。

濃ゆい部下達に……。アレ……私置いて行かれた？　この濃ゆい人達と一緒に……。

刹那、私の中に芽生え始めていたモモンガさんに対する同情心は１８０度反転して憤怒と恐怖心に入れ替わった。

（ふざけんなぁー！）

誤字脱字が見つかったら報告お願いします。

42人目の○○○

今回でオリ主の背景設定をやっておきます。

「私の好きなマンガに、新米メイドのヒロインがご主人様に一目惚れするラブコメディ漫画があります。

ご主人様の幼馴染や秘書官、同僚メイドなど数多くの恋敵たちと女特有の陰湿な蹴落とし合いをしながらご主人様の御心を奪い合うという昼ドラ的なストーリー。それを可愛らしいイラストで描くという独特な作風で人気を博し、かなり有名なマンガとなっていました。その漫画の作者がＡＯＧのホワイトブリム様だという衝撃の事実を知るのはもう随分前の話、ＡＯＧが全盛期だった頃です。

当時の私は、１５００名の大侵攻防衛戦の功労者の一人として、ＡＯＧから報酬アイテムを貰えることとなりました。ホワイトブリム様の大ファンだった私は、是非とも御方のサインを貰いたかったのですが、それは無理なので代わりに記念にな

るアイテムをオーダしました。そのアイテムこそホワイトブリム様のフェイヴァリット、メイド服なのです！

ホワイトブリム様は、ギルド内に自作品を評価してくれる者が誰一人いなかったという境遇から、ユグドラシルで初めて出会ったファンの存在に感動し、記念アイテム制作に猛烈な熱が入ることとなりました。

そうして生まれたのが、ホワイトブリム様の最高傑作アイテム

《メイド・オブ・ヘル・アルマゲドン（メイド服は決戦兵器）》

ワールドエネミーからのみ採取できる希少素材や希少金属、それら最高級の素材たちをふんだんに使い込み、アシスタント泣かせのプロフェッショナルなデザイン技術で作り上げたそれは、神器を超えかのワールドアイテムに匹敵する圧倒的性能を誇ります。

物理的、魔法的な高水準の防御力。全属性攻撃耐性、全状態異常耐性という理論上不可能だと言われていた完全耐性。その卓越した性能を持ってすれば、紙耐性ステの私ですら本職のタンクとタメを張れる防御力を得ることができるでしょう。

これが作られた当時、制作に費やされた膨大な資源のことで議論が起こって、ギ

ルド内の別の御方にこのアイテムを渡そうという話になりました。誰が能力的に適任かという話になり、それならばと粘液盾の二つ名を有するぶくぶく茶釜様が自ら名乗り上げたそうです。しかし、ピンクの肉棒のお姿が最高級メイド服を着用する絵面を想像し多くの御方々が苦言を呈します。そのあとＰＶＰに発展しかける大論争が起こりましたが、モモンガ様これを執り成し多数決をとって、結局所有権は私のものとなりました。

まぁ悲しいことにこのメイド服を装備すると、私の十八番の隠形と素早さに若干のマイナス補正が掛かってしまうので、これまで殆ど使われることがありませんでした。が……今こうして使う機会が与えられたので、御方々は全てを見通されていたのでしょう」

話が終わると、頼んでもいないのに盛大な拍手が起こります。正直困惑しかない。

ハロ～エヴリヴァディ～　マタタビです。状況を説明すると、私が今しがた着替えた最高級メイド服に疑問を持ったホムンクルスの一般メイドの方々に、このアイテムのルーツをお話していたところです。

いつの間にか41人全員のメイドとプレアデス、メイド長のペストーニャさんまで集まり熱心に耳を傾けていました。

話が終わると、質問するためにメイドたちがお行儀よく手を挙げます。とりあえず反応した方がいいのかな？

「どうぞ、インクリメント先輩」

「その、ホワイトブリム様がお作りになられたという「まんが」なるものは一体どこで見ることができるの？」

「10階層にある、アッシュールバニパル大図書館に蔵書されているようです。新刊が出るたびにモモンガ様が寄贈なさっていたらしいですね。」

「それは本当ですか！」

メイド達の中で歓声とも嬌声ともつかない甲高い声が上がった。この時ばかりはメイド長のペストーニャさんですらそんな粗相を気にも留めなかった。

次々に上がる質問の挙手。プレアデスの方たちも自分の製作者の逸話を催促し始めました。

宗教団体の司教様ってこんな気分かな？　ＡＯＧの他愛もなかった逸話が、こ

こで神話として語られるとはまさか思いもしません。
結局この流れは、廊下を通りかかったセバスさんがメイド全員に喝を入れる形で終了を迎えます。
　正直助かりました。自分で切り上げられる空気じゃなかったので。

ああそれで、どうしてこんなことになったかって？
むしろ私が知りたいです。
まさか本当にＡＯＧのギルメンが、こんな未来を予想していたとでも？
バカバカしいったら無いじゃないですか。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
時は遡り、６階層の円形闘技場

モモンガさんに、キャラの濃ゆいＮＰＣたちと一緒に置いて行かれたことで私は内心呪詛を吐き散らしていました。これが間違って口から出てしまえば、あっという間にＮＰＣの皆様から敵対認証されて殺されてしまうでしょう。

ところでＮＰＣの皆様方はというと、モモンガさんの謁見の余韻に浸りなにやら楽しそうに話しています。　モモンガさんに絶対の忠誠を誓うという彼らからすれば、それはごく自然なものなのでしょう。彼とはただの友達でしかない私にはどうしようもなく理解しがたいものなのですが。

この蚊帳の外感はちょっと寂しいけど、どうしようもないものですね。

「す、すごく怖かったね、お姉ちゃん」

「ホント、押しつぶされるかと思った」

「マサカ、コレホドトハ」

「あれが、支配者としての器をお見せになった、モモンガ様なのね」

「ですね」

「我ワレノ忠義ニ答エテクダサッタトイウコトカ」

「アタシたちといる時は、全然オーラ発していなかったしね。モモンガ様すっごく優しかったんだよ。　喉が渇いたからって、飲み物まで出してくれて」

おや、アルベドさんの様子が変　なんか腰元の羽パタパタしとるけど。

「あれが　支配者として本気になったモモンガ様なんだよね。すごいよね！」

ふむふむ、スキル《読心感知》によると…嫉妬、歓喜、興奮状態？　どゆことこれ、なんか呼吸荒くなってるし。

「まったく、そのとおり！」

突然後ろを向き直し、感嘆の声を挙げるアルベドさん。その顔は、歓喜、興奮、畏敬、など他様々な感情が積み込まれた結果、酷い歪み方をしていた。いわゆる顔芸ってやつ。

「ワタクシ達の気持ちに応えて、絶対者たる振る舞いをとっていただけるとは、さすがは我々の造物主！　至高なる41人の頂点！　そして最後までこの地に残りし、慈悲深き君！」

顔は酷いけども、言ってることは他のひとたちも概ね同意らしく、なんだか温もりのこもった視線をアルベドさんに向けていた。

一拍、場に沈黙が置かれたところで、ランドスチュワードのセバスさんが言った

「ではわたくし、先に戻ります。　モモンガ様がどこに行かれたのか不明ですが、お側に仕えるべきでしょうし。」

「セバス、何かあった場合はすぐにワタクシに報告を。特にモモンガ様がワタクシ

をお呼びという場合、即座に駆けつけます。
　他の何を放おっても！」
　美人が台無しになる酷い顔芸だった。口裂け女なんて異形種あったかなと記憶を探るが、心当たりはない。
「ただ、寝室に御呼びという場合、それとなくモモンガ様に時間が必要だと伝えなさい。湯浴みとうの準備は、勿論そのままでいいから、ということであれば―」
「了解しました。　では、守護者の皆様もこれで」
　呆れたセバスはアルベドの言葉を遮って、丁寧に挨拶したあと居なくなりました。
　彼女の惨状は、モモンガさんは最終日の時アルベドさんの設定文弄った結果でしょう。しかし「ビッチ」を削除したにも関わらず未だビッチとはこれ如何に。
「ん？どうかしましたか、シャルティア」
「ドウシタシャルティア」
　シャルティアと呼ばれる、トゥルーヴァンパイアの少女。モモンガさんに伺った話によると、その胸中には巨乳へのコンプレックスと幾重にも重ねられたパッド、そして数多なる異常性癖が秘められているという変態のハイブリッド。エロの申し

子、ペロロンチーノさんの愛娘だそうだ。
「…うぅ　あのすごい気配を受けてゾクゾクしてしまって、すこぉーぅし下着がまずいことになってありんすの」
　おまえもか
「このビッチ！」
　おまえがいうな　！
「はぁ？　モモンガ様からあれほどの力の波動、ご褒美をいただいたのよ？それで濡れんせんほうが頭がオカシイわ大口ゴリラぁ！」
「ヤツメウナギ！」
「あたしの姿は至高の方々に作ってもらった姿ですえぇ？」
「それはこっちも同じことだと思うけどぉ！」

　彼らＮＰＣの騒がしいやり取りが、どことなく創造主たちのそれらに重なって見えた。ギリシャ神話をエロ方面から語るペロロンチーノと、それを浅はかだと断じるタブラ・スマラグディナ。方面の違う両者のオタク気質が、以前満遍なく衝突し

てうざったらしかったのを思い出す。
頭痛がしたような気がしてこめかみに手を当てるが、間もなくそれが幻痛だと気づいた。

……はぁ、ダメかもしれない。　就職仕立てで配属前に考えることではまず無いのだが、転職先について考えたほうが良いかもしれない。　最悪、この世界に知的生命体がいないとするなら……諦めるしか無いのかなぁ。　万一私は逃げることができるけど、モモンガさんは代表責任者だしなぁ。ほんと、御可哀そうに……

明後日の方向に大爆発している修羅場の炎を対岸越しにぼんやり眺めていると、紳士服を着込んだお耳トンガリの上位悪魔、デミウルゴスさんがこちらに歩み寄ってくる。なんか見覚えがあるなぁと思ったら、あいつが作ったＮＰＣだ。
「お初にお目にかかり初めまして、ではないかな？　私の記憶が正しければ、あなたを以前お見かけたことがあるのですが……　まぁいいでしょう。
ナザリック地下大墳墓第７階層守護者デミウルゴスと申します。以後、お見知

りおきを」
　デミウルゴスと名乗る上位悪魔、彼のこちらを見る目、それは少々の警戒心を孕みつつも、大部分はおそらく好奇心だろう。アルベドさんの放つ殺気とはまた違うが、器の小さい私に不快感を抱かせるには十分な代物だった。
「新手のナンパですか？　まぁとにかく初めまして、マタタビです。こちらこそ今後とも宜しくお願いします」
　悪魔は少し意外そうにキョトンとした顔をした。
「どうしました？」
「ああ　いえいえなんでもありませんよ。ただ少々意外でしてね」
　悪魔は続ける。
「これは助言ですが『ナザリックに仕えるのであれば』もう少し、協調性を大事になさったほうがよろしいですよ？」
「助言、痛み入ります。　昔からそういうの苦手でして。ついツンケンしてしまうんです。　気を付ければ、どうにかなるんですけどね……
　ところで何用でしょう、デミウルゴスさん」

「同じ主に仕える同胞として、あなたのことをよく知っておきたくてね。あなたは一体何者なのでしょう　お教えいただけませんか？」

んー、普通に下僕じゃないってバレてたか。仕方ないよね超不自然だったもん

「いいですよ別に。大したことではありませんが。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

同時刻　９階層　ロイヤルスイートルーム　モモンガ自室

（あいつらマジだ！）

マタタビの大方の予想通り、モモンガは存在しないはずの胃袋がキュウキュウ締め付けられる錯覚に苦しんでいた。

その理由は言うまでもなく、自我を持ち動きだしたＮＰＣにある。

彼らのモモンガに対する高評価と、モモンガ自身の低い自己評価。この二者のギャップにモモンガは苦しんでいた。　彼らと接する時は常に、その期待に応えるように振る舞わなければならないことを考えると、モモンガの架空の胃袋は更に悲鳴を上げて穴が空きそうなほど苦しくなった。

『まぁ合っていなくもないのでは？』

「他人事だと思いやがって！　他人事だと思いやがって！」

鈴木悟は嫌なことがあったとき、一人で抱え込んでしまうタイプの人間だ。しかもそれを結構粘着的に引きずってしまう。この本性がＡＯＧのギルメンのうちでも暗黙の共通認識であったのを、モモンガはもはや知る由もない。

「はぁ……」

マタタビの先程のセリフが概ね本意で言ったものであると、モモンガの方も薄々感づいてはいた。ただモモンガ自身の自己評価の低さによって、マタタビの慰めの言葉が素直に受け入れられなかったのだ。

さらに言えばゲームが現実世界になるという途方もない状況についていけず感じる心労、これを発散させる対象がモモンガにはどうしても必要だった。それを知ればマタタビは、何かとモモンガに皮肉をを投げかけるだろうが、本心ではきっと攻めてこないだろう。

「……マタタビさん、置いてきちゃったな」

急いでＮＰＣから逃げ出したモモンガは、結果的に６階層にマタタビを置いて来

てしまったことにすぐ気づいた。しかし、アルベドに出した指示内容からして差し障りはないし、万一守護者全員を敵に回してもマタタビなら逃げることは可能だろう。そんな打算から、モモンガは結局マタタビのことを放ったままにしておいた。

しかし、今思えば事前打ち合わせもなしに初対面の集団に放り込む仕打ちは酷すぎたと、モモンガは反省していた。　自分一人転移していたらどうしようもなく心細かったに違いないのだから。

他のギルメンに対しては普通に接することができるが、どうしてか彼女とだけは面と向かって話すことが難しい。基本的に会話するときだけは明るい調子なのだが、集団の中での距離のとり方が独特で苦手だったのだ。

ふと、マタタビというプレイヤーについてモモンガは思いを巡らす。

クラン：ナインズ・オウン・ゴール

それは、ＤＭＭＯＲＰＧユグドラシルで異形種ＰＫ差別が横行していた時代、ワールドチャンピオンたっち・みーが異形種保護を掲げ作り上げたクランだった。異形

種PKに対するPKKを生業としていたそれは、名前の通り初めは9人のメンバーが居るだけであったが、最終的に27人にまで勢力が拡大していった。

当時、年齢のことが関係して課金アイテムがクラン内でもマタタビだけ使うことができなかった。そのためモモンガ、ウルベルト、ペロロンチーノらの無課金同盟に加盟していたのだが、ペロロンチーノがたっち・みーの課金エフェクトに憧れたのをきっかけに徐々に無課金同盟が崩壊していった。課金していないのが彼女だけという状態になったところで、彼女の口の悪さも起因してクラン内で孤立してしまう。

クランリーダーであるたっち・みーは、マタタビが孤立したことを問題視し、歩み寄る話し合いをしようと提案したが、ウルベルトがそれを迷惑がったマタタビを思いやって彼女のクラン脱退を提案した。二者の意見によってクラン内が分裂しかかるほどになる。

この混迷を極める会議を執り成したのはモモンガだった。白熱する議論をどうにか鎮め、多数決でマタタビの今後の扱いを決めようということになる。

モモンガはたっち・みー派に、マタタビはウルベルト派の方に投票していた。結

果、僅差でウルベルト派の意見が通り、マタタビはクランを退会することとなった。この事件がきっかけで、クランのリーダーたっち・みーは後のギルド長の役職をモモンガに譲ることとなる。そして新ギルド長はこれを戒めとして、ギルド加入条件に社会人を加えることとしたのだ。

その後もマタタビはＡＯＧと付き合いを持ち続け、ギルド戦やＰＫＫ活動にも協力し続けていた。結果的に良好な関係に収まったといえるが、それは時を経てマタタビがフリーターとして課金できる様になってからでも変わらなかった。

結局未成年を皮肉るような学生服に身を包んだ彼女が、客人としてナザリックに踏み入れたことは、ただの一度としてなかったのだ。

「マタタビさん……」

何を思ってか、モモンガはアイテム欄からひとつの指輪を取り出す。

リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン：ＡＯＧギルドメンバーにのみ所有を許された、ギルド拠点の自由移動を可能とするアイテム。

骸骨の指でそれを摘んで、通路のシャンデリアの光にかざし、眺めた。

「あとでちゃんと謝らないとな　置いて行ったこと」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ゲームの話とか課金とかは別のワードで置き換え、モモンガさんが話したことと矛盾しないように話すのには少し骨が折れた。

デミウルゴスは話を聞けて随分と満足気だった。

「なるほど実に、興味深い話でした。アインズ・ウール・ゴウンの起源まで知ることが出来たのは思わぬ収穫でしたが」

「まさか貴方様が一時期とはいえ御方々と肩を並べていらっしゃったとは」

彼の大げさな言い方に嫌なものを覚えた私は早々に釘を刺した。

「別に敬称とかいりませんからね。
私はＡＯＧのメンバーだったわけではないですので、どうか気安く呼んで下さい」

「ご厚情痛み入ります。我々が忠義を尽くすのはあくまで、アインズ・ウール・ゴウンひいては至高の41人の皆様方ですから。」

「ところでこの話、バレてないなら内緒にしてください。ちょっと気まずい関係かもしれませんし」

ふむ、といって何か考える素振りをしたデミウルゴス。やがて何かに納得したよ

うだった。

「なるほどわかりました、そのように致しましょう

では改めてこのデミウルゴス、ナザリックの一員として、あなたを歓迎いたしましょう。今後とも宜しくおねがいします。」

胸に手を当て丁寧にお辞儀をするデミウルゴス。こちらもお辞儀を返しましたが、彼を見ると見劣りしてしまう拙さです。

「ど、どうも」

『ではこの辺りで』　そう言って会話を切り上げたデミウルゴス。未だ続いていた女同士の醜い（異形種的な醜悪も含む）争いを止めに入っていった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

正気を取り戻したアルベドは、守護者の皆さんにひとしきりの指示をし終えたあと、私を連れて9階層まで向かいました。

途中の道のりでデミウルゴスに言われたことを思い出して、アルベドにも私自身の身の上の話をしてみました。　すると、彼女が私に向けていた殺気が殆どなくなりました。

しかし私の境遇って、AOGのNPCにとってどんな風に映るのでしょう。ちょっと気になります。

機嫌が良いのでしょうか。アルベドはいい感じの笑顔で優しく教えてくれました。

「私達ナザリックのシモベにとって、御方々は唯一無二にして至高の存在。　対等なモノがあってはならないの。

私やデミウルゴスはまだ話の判る方だけど、他のシモベにあなたの素性がバレてしまえば、かなりの悪感情を与えるでしょうね」

「そう、なんですか？」

だとすればやっぱりここで働くのは前途多難だなぁ。ま、事情を考慮してくれるアルベドならマトモな働き口を紹介してくれるでしょうか。

「だけどあなたがモモンガ様の后、とかでないのであれば、私も貴方を歓迎するわ。ま、悪いようにはしないわよ。」

「違いますよ！」

あー、この人の殺気の正体やっぱりモモンガさんへの恋慕だったか。　未だにじ

わじわした悪意が感じ取れるのもそのためだろう。うんきっとそうだ。
アルベドは、とある部屋の前に差し掛かるとその扉にノックをしました。
「入るわよ」
「どうぞ」
返事が来るや、豪奢な扉の取っ手を掴み、アルベドさんは扉を開けて中に入ります。私もそれに続きました。
「これはこれはご機嫌麗しゅう　守護者統括殿。先程メッセージで伺いましたが、件の新たなシモベとは横に居る彼女のことですかな？」
「ええ　彼女はケット・シーのマタタビ　今は人間体に化けているようだけれど立派な異形種よ。」
背中は真っ黒、お腹は白くて胴長体躯。
ペチペチ音立つおみ足は、平べったくて小ぢんまり。
両手の代わりに翼かな、飛ぶには小さいようだけど。
オレンジくちばしその上に、凛々しい黄色な眉毛あり。
その名も――

「イワトビペンギン!?」
比喩でもなんでもありません。直喩です。一分の一イワトビペンギン。
お腹にネクタイをかけてますが、それ以外は生まれたまんまのお姿です。

「……何やら不躾な娘ですな。何故御方はこのようなものを」
ペンギンの表情はわからないけど、見た目の割にやたら尊大な様子だということはわかりました。
ペンギンが不満そうに値踏むような視線で私の方を見ます。逆に、横にいたアルベドさんは女神を連想するほどのとてもいい笑顔でして、同性の私でもコロッと堕ちてしまいそうです。
「紹介するわ、今日から彼があなたの上司よ。
ナザリック地下大墳墓執事助手エクレア・エクレール・エイクレアー
こと清掃において言えば、ナザリック内でも右に出るものはいないわね」
「……そうですか」
何、こんなＮＰＣいたの？っていうかこいつが私の上司？

「ではよろしく、マタタビとやら。今日から貴方は栄えあるナザリック地下大墳墓９階層所属、執事助手秘書官です。至高の御身に遣える身としての自覚をつねづね忘れぬよう！」

……マジでか。おそらくペンギン上司を持つ奴なんて人類史上私だけなのではないだろうか？何この初体験、今後に不安しか見いだせないんですけど

かくして私はエクレアさんの部下、執事助手秘書官となりましたが、彼の望む使用人としての技能が私にはありませんでした。そのためこれからは、新人研修としてメイド長のペストーニャさんのところに回されて、メイド見習いとしてコッテリ絞られることとなります。

こうして暫定的な地位として、私は42人目の一般メイドになりました。

冒頭に続きます。

今回の捏造

・ホワイトブリムの漫画について

・ナインズ・オウン・ゴールの過去
・オリ主の設定全般
タイトルは半分ミスリードというわけでした
誤字脱字、感想や気に食わぬところがあったらコメントお願いします
暇つぶしに「きゃらふと」でつくたよっと。
黒歴史化不可避

第４話

【マタタビの至高の41人大百科】

No・1：タブラ・スマラグディナ

ホラー映画と古今東西の神話体系をこよなく愛するマニア。一見理知的なようでいて、話題が自身の領分に触れると途端口が止まらなくなる典型的オタク気質。しかも厄介なことに自分の話が迷惑がられている自覚に乏しいタイプだから結構ウザい。

タブラは他メンバーから中二病扱いされているが、マタタビは案外ホントに狂ってるんじゃないかと踏んでいる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ナザリック地下大墳墓９階層　スイートルーム　元予備部屋　現マタタビ私室

至高の41人と呼ばれるアインズ・ウール・ゴウンのメンバーの居住区。そこは、彼らに仕える数多くのシモベにとって神聖で不可侵なる絶対領域である。

現在この領域に住まうことが許されているのはモモンガを除き２名。
その二人が小さな円卓テーブルに向かい合わせで座って何やら話している。
一人は紺を基調としたセーラー型の学生服の少女。長くまっすぐに切りそろえられた黒髪に細渕フレームをつけたその姿はまるで旧時代に言われた優等生、清楚という概念そのものかとも思われた。
もう一人は純白のドレスに身を包んだ黒髪で妙齢の女性。その美貌は国の１つや２つ傾けてしまいそうな程だ。しかし頭部には山羊のような白い角、縦割れした金色の瞳、腰元からは黒い天使の翼が生えており、彼女が異形の者であるとわかる。かえってそれが人外的美しさをもたらしていた。
それぞれ正反対の美貌を持ち合わせた両者だが、話の様子は非常に穏やかだ。
「それでどうかしら、メイドとして働いてみて」
妙齢の女性、アルベドは女神のように優しく微笑みを浮かべて、尋ねる。
対して学生服の少女、マタタビは伏し目がちに、どこかバツの悪そうな顔で答えた。
「仕事はそんなに辛くはないです。ですが……、先輩たちがどうも苦手で……」

マタタビがナザリックでメイド見習いとして務めるようになって数日。メイド長のペストーニャ指導の下、メイドとしての振る舞いや仕事の仕方を学びつつ、実際に一般メイドと混じって奉仕をするという生活が続いていた。

１００レベルの肉体ステータスや疲労無効アイテムなどのおかげもあって、マタタビはかなり順調に仕事内容を覚えていった。

しかしメイドたちからは、「至高の御方に遣える自分達の尊い仕事を奪いに来た部外者」としてあまり良く思われていない。ホワイトブリム謹製最高級メイド服の存在や、スイートルームへの居住許可などの特別待遇も彼女たちの不興を買う要因となっていた。

「彼女たちも決して悪い子達じゃないのよ。　それをわかってくれると、私としては嬉しいわ

だけど難しい立場だものね、あなたって。」

「……はい」

アルベドとマタタビの居住許可が降りた際、必然的に二人が住まう部屋は隣同士となっていた。それからと言うものアルベドは、内政の片手間マタタビの元へ訪れ

ては気にかけるようになっていた。
　メイド見習いという立場から、マタタビにとって現状ただ一人の知り合いであるモモンガと直接話せる機会は無い。日に何度か《メッセージ/伝言》を繋いで互いの近況報告をしているのだが、マタタビはモモンガを心配させまいと自身の境遇について詳細に語ることはしなかった。
　アルベドから、モモンガが日夜休まず働いていると聞かされてからは特に気をつけた。そんなマタタビにとってアルベドは、自身の心情を話せる唯一の相手なのであった。
「そういえば、このナザリックでは他に余ってる仕事とかってあったんですか？エクレアさんも、人材欲しがってる割には全然私なんて要らなそうでしたし」
「エクレアの場合事情が特殊なのよ。御方から『アインズ・ウール・ゴウンの簒奪を企てている』とのように創造されていて、その為にめぼしい存在を片っ端から集めているのよね。」
「うわぁ。言っちゃなんですがそれって……」
「言っちゃだめよ。　御方にそうあるべしと定められたものは、私達の存在意義な

の。　思うところもあるでしょうけど」
「ご、ごめんなさい」
「いいわ、これから気をつけてもらえば。
　ちなみにメイド以外で空いてる仕事といえば、コック●ーチで満たされた部屋の掃除係、体内寄生型触手生物の世話係、特別情報収集官の拷問の実験台とかね
　メイドに不満なら、アインズ様に異動届を出してもらってもいいわ」
「いいえいいえお気遣いありがとうございます！そしてありがたくも遠慮させていただきます！今の仕事に十分なやりがいを感じているので！」
「あらそう？」
　いつも女神のよう微笑みを絶やさないアルベドだが、時々小悪魔のような邪悪さを覗かせる。案外こっちのほうが素に近いのかもしれないなぁと思うマタタビであった。
「しかし、自分で言うのも難ですが、そのエクレアさんに私みたいなの任していいんですか？　自分ガッツリ不穏分子でしょ？　見てたでしょうけどこれでも単身でナザリックに侵入したんですから」

「確かにエクレアの野望に一番近いところにいるのはアナタでしょうけど、あれでもナザリックのシモベの一人、忠誠心はちゃんと持ち合わせているのよ」
「なんかアバウトですね　その辺」
「あとアナタに関して言えば、外の世界の情報が不足している現在私達に手をかけるのは愚策以外の何物でもない、という打算ね。」
「そりゃそうですけども……」
　目の前の人物に言うことかな？　と、やるせない気持ちになるマタタビ。割り切れてはいないが、目の前で言うからこそ意味があるということも頭では一応理解していた。
「そんな顔しないでちょうだい。　ところで今日は何を話してくれるのかしら？　外でのモモンガ様の武勇伝」
「じゃあ今日はですね～」
」
　事情を知ってるアルベドとデミウルゴス以外のＮＰＣにとってマタタビの存在は疎ましいものなのだが、立場上至高の御方々と行動をともにすることの多かった彼

女の語るＡＯＧの過去話は、ナザリック内でも高い需要を誇っていた。普段特にマタタビを邪険にする者であっても、コッソリ聞き入ってることがあるくらいだ。ギルド：アインズ・ウール・ゴウンの逸話。それが現状、ナザリック内での彼女の人間関係的命綱であった。

「今回はワールドエネミーに立ち向かった時のモモンガ様の話でもしましょうか」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「くふー　さすがモモンガ様ね！　とても素晴らしい話が聞けたわ」

「どういたしまして。時間が空いてたら、良ければまた来てください。今度は習ったお茶とか淹れますから」

「ええ、また来るわ。あなたも頑張るのよ」

「はい」

アルベドは特にモモンガについての話をよく聞きたがっていた。他のＮＰＣは自身の創造主を所望するのに彼女だけが例外である。

（アルベドの設定文を弄ったモモンガが造物主という扱いになっているのかな）

そんな彼女のためにマタタビは、モモンガと《メッセージ/伝言》した際に彼自身の過去話を聞き出すようにしていたのである。

マタタビがアルベドにここまで懐くようになった理由は、マタタビの持つスキル《読心感知》にあった。これは相手がこちらに向けている敵意や好意などの感情をフィーリングで感じ取ることができるという効果で、異世界転移してから効果仕様が変わったものの一つである。

アルベドがマタタビに向ける思いの中には 多少悪意が見えてくるもなかなか好意的なようである。だがそれ以上にアルベドの中にマタタビを同情するような感情が一切なかったということが、マタタビの心を強く打ったのである。

（憐れまれるのって大嫌いなんですよね）

このような感性から、マタタビは当時のクランリーダーたっち・みーに対して苦手意識を持っていたのだが、それはまた別の話。

「さて、私も仕事行かなくちゃな」

マタタビはアイテムボックスからメイド服を取り出して着替える。そのまま自室

から出て仕事場に向かっていくのであった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ナザリック地下大墳墓9階層　アルベドの執務室

先程マタタビの部屋を出たアルベドはその足で自身の執務室に向かっていた。モモンガから与えられた勅命である「情報共有システムの作成と警備の強化」についての事務処理をするためである。

これまでは至高の御方が直々にナザリック防衛についての大部分を担っていたが、しかし謎の転移に見舞われた現状では他にもやるべき必要事項が数多くあり、今後は雑務で御方の手を煩わせる訳にはいかない。

アルベドが現在確認しているのは、ナザリックに仕える他のＮＰＣ達の種族クラス、職業クラス、会得スキルといった個人情報だ。

ユグドラシルでギルド拠点でＮＰＣを作る際、その拠点ごとに作れるＮＰＣの合計レベルには上限があり、最低でも７００、最大で３０００にもなる場所があった。ナザリックでの初期ＮＰＣ製作可能レベルは２７５０レベルであり、課金によってその上限値を上昇させているためＮＰＣ総数は平均より圧倒的に多い。

その膨大な量の資料を頭に入れつつ、それぞれに適した担当防衛場所を割り振る彼女の手腕はまさに圧巻ものである。

しばらくしてひと束分の資料を片付けたアルベドが一息ついていたところ、入口の扉からノックする音が静かに響いた。

「どうぞ」

「失礼します。アルベド様、お茶をお煎れしました。」

入室者はお茶汲みをしに来た一般メイドのシクススだった。

「あらありがとう。ちょうど一仕事終えたところだったのよ。　お茶はそこに置いてちょうだい」

「はい」

清楚な顔立ちと星の如き輝きを灯す金髪が特徴の彼女は、音を立てないよう優雅に歩いてアルベドの机にお茶を運んだ。

「ではこれで失礼します」

「ちょっといいかしら」

目的を終えて部屋を去ろうとするシクススに、アルベドは制止をかける。そして

優しい様子で訪ねた。
「彼女がここに来てから数日経つけど、どんな様子かしら？」
『彼女』という言葉が先日やってきた見習いのマタタビを指すものだと気づいてシクススは答えた。
「まだ振る舞い方や仕事に拙い部分は見られますが、物覚えがよくかなり早いペースで仕事を覚えているようです。　特に歩法については既に他のものとも遜色がありません。」
マタタビのことを話すシクススの様子が、わずかに後ろ暗いのをアルベドは見逃さない。
「歩法についてはきっと身体能力の高さが影響しているんだわ。
彼女は階層守護者に匹敵するレベルを有しているから、持ち前の身体能力で体幹を整えるのはそれほど難しくないでしょう」
「そ、そうなのですか⁉　」
両目を見開き顔をひきつらせるメイドの反応からは、言い知れぬ恐怖が見て取れた。部外者であるマタタビは、レベル１の一般メイドにとってただでさえ恐ろし

い存在だというのに、それがナザリック内でも屈指の実力者に引けを取らないという事実を、その実力者である彼女自身が語るというのだから当然だ。
「だから他の仕事も紹介したけど、何故か彼女飛びつかなかったのよね。」
「……!?」
それを聞いて彼女の心中には「何故、どうして」という理不尽に対する疑念と憤りが湧き上がった。やがてそれは一つの可能性の存在に行き着く。彼女の中で疑念が消え去って恐怖に、憤りは明確な怒りへと変貌する。
「まさか……！」
一般メイドの業務は９・10階層での給仕や清掃などの雑務一般。それを部外者が選り好んで行う理由。それはナザリックでもっとも重要な存在の……
坂を転がるボールのようにひとりでに加速するシクススの思考。それを「待ちなさい」と言って止めさせたのはアルベドだった。そして厳然な態度に打って変わり、アルベドは言った。
「何を想像したのかも解るし、早合点するなとは言わないわ。
だけど彼女をここに置くという最終決定をしたのが誰なのか、それをよく考えな

さい。」

その言葉に、悪寒に打ちひしがれ青ざめていたシクススは、突然鋭い電撃が頭頂部から脊椎へと走る錯覚を覚えた。愕然とするシクススに構わず、アルベドは続ける。

「もし事態があなたの考えている通りのものだとしても、危険分子というのは闇雲に外へ放つのではなく内側に置いて注視し続ける方が賢明よ。

ましてや我々が仕えているのは、至高の41人の頂点であるモモンガ様。　御方に誤りなどあるはずないわ。」

アルベドの言は最もだ。シクススは直前まで自身に渦巻いていた恐怖心を猛烈に恥じた。人知れずモモンガに『智謀の王』という二つ名をつけていたのが他ならぬ彼女自身なのである。にも関わらずそのモモンガの判断に疑いの目を向けてしまったのだ。

「私はなんと罪深きことを……この不敬は命をもって償わなければ…」

「落ち着きなさい！

シクスス、あなたの生殺与奪権を握っているのはモモンガ様よ。　それを無断で

散らすことこそ御方に対する不敬だと知りなさい！」
アルベドは毅然とした強い口調で半ば恐慌状態で慌てふためくシクススを諭す。
我に返ったシクススは重ねて及ばぬ自身を恥じた。
「……はい！」
「わかったら行きなさい　あなたも私も、他の仕事が残っているのだから。
あと、ここでした話はあくまで憶測に過ぎないから、他の子達に話してはダメよ
？　いいわね」
「承知しました。では失礼いたしました、アルベド様！」
少し慌てた感じが残っていたがシクススは丁寧にお辞儀をして、アルベドの執務
室を後にした。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝
アルベドは一人きりになった執務室で先程汲まれた茶を飲みきると独り言をつぶ
やいた。
「……気持はよく解るけれど　流石にあれで自害されてしまってはかなわないわね」

ため息をつく。しかし状況は彼女にとって非常に都合よく運ばれていた。

アルベドの狙いは、一般メイドたちにマタタビへの悪印象を抱かせて孤立させることである。　さっきのシクススとの応答のように思考を誘導させてやれば、わざわざバレるかもしれない嘘をつく必要もない。

ただし、あまりやりすぎないことが重要だ。口止めしたのもそうだが、露骨にやりすぎると犯人がアルベドであると看過されてしまう。だがそこまでやる必要なんて端からない。

形のない悪印象が個人々々のバイアスを通して徐々に伝播し、最終的にアルベドの望む環境が生み出せればそれで良い。そういう意味では一般メイド達の閉塞的な人間関係は非常に都合が良かった。

そしてもう一方、孤立したマタタビに寄り添うことで高い信頼を勝ち得てアルベドに有利に動くようにする。アルベドの真の目的は、孤立無援のマタタビを籠絡させて自身の手駒とすることであったのだ。

自分の目でしかと見たマタタビの隠密能力は、高い防衛能力を有するナザリックすらも脅かすにたる強力なものだ。しかも彼女自身のナザリックに対する帰属意識

は非常に薄く、危険な存在であることには違いない。
だがもしこれを自身の手で制御することが叶うのなら、かえってアルベドにはこの上なく心強い道具になるだろうと思われた。

異世界に転移する直前のことをアルベドは思い起こす。玉座の間でモモンガの側で跪いていた時、突然姿を表したマタタビが何やら楽しそうにモモンガと話をしていた姿だ。待機の指令が出ていたため動くことができなかった当時のアルベドだが、今でも思い出すだけで心の底から嫉妬心が湧いてくる。ただ、重要だったのはそこではない。
プレアデスやセバスには聞こえないくらいの声だったが、我らが主は確かに言っていたのだ。
『……いいえ、気持ちはとても嬉しいですが、リアルを優先させるのは当たり前ですよ。成功した人や夢を叶えた人もいますしね。間違ってるとしたら俺の方です。』
この言葉が具体的に何を指し示すのかは不明瞭だが、ただ一つ明確に解ることがあった。　他の至高の御方々はナザリックを捨てたのだ、ギルド長のモモンガをた

だ一人残して。

アルベドは至高の御方々の望みとあれば、どのような屈辱にも恥辱にも耐えることが出来た。端から我が身可愛さなど何一つ持ち合わせてはいないのだ。だからこそ、御方々が何も告げずにナザリックを捨てた事についてで、彼らを恨むことなどしたりはしない。それは他のシモベも同様だ。

しかしアルベドは許せなかった。御方々がナザリックだけでなく、愛しのモモンガさえも取り残して去っていったことを。モモンガがいったいどんな思いでナザリックの財政管理を成し、仲間の帰還を待ちわびたことか。その様子を傍で見守っていたアルベドの想像にもつかない。だが結局『最後の時』まで彼のもとに残った御方はいなかったのだ。

故にアルベドは憎む、モモンガを悲しませるすべての存在を。それが自らが忠誠を捧げるアインズ・ウール・ゴウンそのものであろうとも。

「そういう意味では彼女も、非常に好ましい存在なのよね。」

最後の時までモモンガの側に居続けたマタタビ。そんな彼女にアルベドは僅かな好感を抱いていた。ひょっとしたらこれから掲げる自分の野望に賛同してくれるか

もしれないという期待を抱いて。
　計画は順調だ。現状マタタビは想定以上にアルベドに懐いており、かえって不気味な程である。着実に人心掌握を進めていると言えよう。
　アルベドは前髪で顔を隠しながら邪悪に笑みを浮かべた。
『ゴンッゴンッ』
　しかし突然の執務室を打つ荒々しいノック音に、サッと平常の様子に戻る。
「どうぞ　あらセバス一体何の……」
　やって来たのはナザリック地下大墳墓執事を務めるセバス・チャンであった。意外な訪問に戸惑うアルベドだったがセバスの宿す剣呑な雰囲気にただ事ではないのだと悟る。よもや寵愛の……
「アルベド様。モモンガ様より完全武装で来るようにとの伝言を預かりました」
「なんですってすぐ行くわ！　状況はどうなっているの？」
「モモンガ様直々に近隣で発見した村に出撃されるようです。　後詰めとして隠密能力を持つ下僕の配置も仰せつかったのですが、いかが致しましょう」
「では八肢刀の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）を展開しなさい。あとそうね

あなたのところのエクレアの部下に丁度良いのがいるでしょう。彼女もそれに加えて頂戴」

彼女の名前は平時では微妙にタブー化されている。『エクレアの部下の彼女』というワードがマタタビだという暗黙の了解が二人の間で成された。

アルベドとしては、せっかくの機会なのでマタタビの力量を見極める材料にしようと考えたのである。

「仰せつかりました。では、モモンガ様が執務室にゲートを展開されておりますのでそちらから行かれると良いでしょう。」

「わかったわ」

アルベドは瞬間換装によって完全武装の黒鎧の姿に変身する。そしてそのまま全速力で９階層の廊下を疾走していった。ちなみにその時のアルベドの顔は、主人に直接お呼ばれされた喜びで、それはそれは酷い具合となっていた。

幸いヘルムの下のそれに気付けるものは誰一人いなかったが。

次はカルネ村編ですが、書き溜めのやつを書き直すつもりなので時間がかかります。

感想や誤字脱字があったら是非コメントお願いします。

孤独な至高と子猫な孤高

さり気なくモモンガさんが世界征服をつぶやく下りをカットしてますが流れは基本的に原作と同じ。デミウルゴスの勘違いは発生します。

【マタタビの至高の41人大百科】

No.2：モモンガ

アインズ・ウール・ゴウンのギルド長。個性の強い面々をまとめ上げてギルドを運営していた手腕は尊敬に値する。温厚でおとなしい性質だが、しかしいつもギルドの中心にいるのは彼である。28人とは普通に仲が良いし、るし★ふぁーみたいなはぐれものすら受け入れる度量の持ち主はそうそういない。

とはいえその根底にあるのは異常なまでの執着心であり、マタタビはそれが自身に向けられることを嫌がっている。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ナザリック地下大墳墓　９階層　モモンガ執務室(モモンガ)

ユグドラシルサービス終了直後、ナザリックが素知らぬ平原に転移した。拠点用ＮＰＣが自我を持って動き出し、魔法やスキルなど世界法則が大きく変異していた。そしてそれから数日が経った。

とりあえずＮＰＣたちは自分に忠誠を誓ってくれているため、一先ず身の安全を確保することは出来た。

新たな世界法則については未だ要実験だが、それと同等にこの異世界の情報を集める必要がある。それにいるかわからないが他のユグドラシルプレイヤーがどう出てくるのかわからない。

現在はアウラのシモベ達がナザリック周辺の警戒網を構築しつつ森林の調査をしてもらっているが、それだけでは時間がかかり過ぎる。

「この〈遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモート・ビューイング）〉の操作方法がわかれば、ナザリック周辺の警戒網作成に役立つはずだが……」

今格闘している〈遠隔視の鏡〉は、距離に関係なく指定ポイントを見ることができるマジックアイテムだ。一見すると便利アイテムだが、魔法による隠蔽や攻性防壁に対しての脆弱さがありユグドラシルでは微妙なアイテムだった。とはいえ未知の多いこの世界では非常に有用だろう。

この世界に来て操作方法が変化しているらしく、それが何なのか確かめるために現在悪戦苦闘している。

「ん？」

コマンド音がしたと思いきや、ようやく鏡の情景が動き出した。どうやらタッチパネル方式だったようだ。

「おめでとうございますモモンガ様」

「ありがとうセバス、付き合わせて悪かったな」

傍にいた執事のセバス・チャンが賛辞の拍手を叩いた。しかしこんなことに一々拍手されてぶっちゃけ気恥ずかしい。頼まなくてもずっと側についてくるんだよなぁこいつら。

「主のそばに控えご命令に従うこと。それこそが、たっち・みー様によって生み出

された執事としての私の存在意義です」
「……そうか」
上位者として振る舞おうと決めたからにはそれを辞めることはできない。しかし
（疲れるんだよなぁ）
普段慣れないことをしていたからか、存在しないはずの胃がキリキリ痛む。
「さて、人がいる場所を探してみるか」
鏡の情景を動かしてしばらくすると、村のような人里が見えてきた。ただその様子が少し変だ。人々が慌ただしく村中を走り回っている。
「祭か？」
「いえ、これは違います」
画面を俯瞰図からストリートビューに変化させてみると、馬に乗った騎士風の者たちが村人を一方的に虐殺しているのがわかった。かなり惨たらしい死に方をしているものまでいる。
「野盗ではないようだが」
おかしい。この世界にやってくる前であれば卒倒していた筈なのに、何故冷静に

見ていられるのだろう

どうやら体だけでなく、心までもがアンデットのものに変貌してしまったのだろうか。マタタビさんも、来たばかりの俺に「誰だこの魔王」とか言っていたけど、彼女自身はどうなのだろう？

「どう致しますか」

「……本来であれば、助けに行く理由も価値もないのだが」

この世界に来て初めて発見した知的生物の集落。襲われる前であれば友好的に親交を結びこの世界の情報収集の足掛かりとすることができた。しかし助けるという場合、敵の戦力があまりにも未知数なため危険が大きすぎる。正直な話、村人は見捨ててしまいたかった

（マタタビさんはこのことどう思うんだろう）

今の彼女がどういう精神構造をしているのかまるで不明だ。俺のように倫理観を排した思考が出来るのか、最悪ここで袂を分かってしまうのかも判らない。ギルメンではないとはいえ、最後まで残ってくれた友人が消えていく姿は想像したくはなかった。

どうすればいいのかわからず俺が頭を抱えていたところ、心配したセバスが声をかけてくれた。
「如何なさいましたか？　モモンガ様」
（たっちさん!?）
一瞬、セバスの姿が懐かしい白銀の騎士のそれと重なるも、直後それが気のせいだと気付いた。
思い起こすのはとあるオーバーロードがまだスケルトンメイジだった頃。ユグドラシルにすら絶望しかけた自分に、彼はなんと言っただろうか。
（誰かを助けるのは当たり前……か）
「セバス、私はこの村に行く。ナザリックの警備レベルを最大限引き上げろ」
「御意」
「アルベドに完全武装で来るように伝えろ
次に後詰の準備だ。この村に隠密能力のある者か、透明化の特殊能力が使えるものを複数送り込め」
「畏まりました」

気づくといつの間にか勝手に口が動いていた。支配者としての振る舞いにある程度慣れたからなのか、億劫なくＮＰＣたちに指示が出せていた。
迂闊な行動かも知れないが、どのみちこの世界に来たあとの自分の戦闘能力は確かめておく必要があったのだ。幾分かは私情で動いていると言えど、おかげで躊躇う気にならなかった。
「《ゲート/転移門》」
俺はギルド武器試作版の杖を取り出しユグドラシルでの最上級の転移魔法を発動させる。空間が裂けては捻じれ曲がり、やがて虚空に混沌の穴が現れた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1分後　カルネ村近郊（マタタビ）

さて休憩も終わったしメイドとしてしごかれますか、マジだる～い。そんな具合に腹をくくっていたところで、執事長のセバスさんがやって来て突然後詰をやれと言いなすった。

神器級学制服に急いで着替えて執務室のゲートから出るとそこは森の中。なにげに異世界に出るの私初めてなんですよね～。ずっと昼夜の区別もつかない地の底でメイドさんやっておりました故。

出れなくもなかったですが、万が一バレたら怒られちゃいますし。ま、その話は置いておいて

転移門から飛び出すと、《アンティライフ・コクーン/生命拒否の繭》と《ウォール・オブ・プロテクションフロムアローズ/矢守りの障壁》を被った姉妹らしき女の子達が森のなかで失禁しておりました。

面倒だから無視（ちなみにケット・シーの嗅覚は尿臭を鋭く察知します）。

10メートル先でモモンガさんとアルベドさんが仲良くのんびり歩いておりましたが、せっかくの逢瀬を邪魔するのはいけないのでこれまた無視します。

というか二者の間で一体何があったの？事案発生ですか？

まぁともかく仕事仕事。後詰をやればいいんですよね。あれ、でも後詰めってどういう意味？

仕方がないので普通に敵情視察というのをやってみたいと思います。

ワタクシめの十八番、偵察です。まずは隠形の次くらいに得意な気配察知系スキルで周囲５キロ程度のフィールドに検索をかけます。ユグドラシルでは漁業でやるソナー映像みたいなのが浮かんでくるのですが、この世界に来てからはこれまたフィーリングでわかるようになりました。

ただ脳みそに負担かかっちゃうみたいで、使うとちょっとだけ頭が痛くなります。精神だけでなく、物理的に頭痛の種が増えてしまったみたいだ。

ともかく、頭痛をこらえた結果見えてきたのは３種類の人間種集団でした。

ひとつが今モモンガさんたちが歩いている方向、村で騎士風の人たちが村人と一緒にレッツパーリーしているところです。デスナイトが現れて若干かき乱されましたが。

もうひとつは少し離れたところから村へ直進する集団、村の騎士の奴とおんなじかも？いや、村の殲滅程度に別働隊なんて普通は必要ないから別物と考えるのが自然か。

最後の集団は、二つ目の集団をちょこまか付け回しているようでした。ただ隠密

について一家言もつ私から言わせてもらうと、高い統率力は見受けられるのですが尾行に慣れているとは思えません。ちょうど、傭兵魔法職ギルドの連中が最上級不可視化魔法ごときで幼稚な隠密ごっこやってたのに似ている気がしました。

これらの話を総合すると

「村を囮に後ろからグッサリ作戦」

という筋書きでしょうか？これではまだ仮説に仮説を重ねたペテン未満ですけども。

なんにせよ、一番動きが怪しいのは最後の尾行集団です。偵察に行くならばそちらから先が一番良いでしょう。

隠形スキルを目一杯使ってから、全速力でダッシュ開始。私のステータスはあらゆる防御を捨てての素早さ一点振りとなっておりますのであっという間でしょう。

３番目の集団のところに到着しました。スカッシュレモンみたいな頭の男性がリーダーでしょうか。整列状態の集団に何やら御高説唱えています。

「各員傾聴、獣は檻にかかった。汝らの信仰を神に捧げよ！」

宗教家のようです。言ってるセリフからして私の予想してたグッサリ作戦がビンゴっぽい。

しかし妙なことに、皆さん弱そうですね。私が普段装備しているこの〈地味子のメガネ〉の特殊効果にはド〇ゴン〇ールのスカ〇ター的能力がありまして、目視でおおよそのレベル、能力値、職業系統、所属ギルドが判るようになっています。

スカッシュレモンさんのレベルは20代後半、年齢は30代後半、第四位階を齧った程度の信仰系魔法詠唱者、スレイン法国・陽光聖典所属？

他の隊員たちは三位階までしかない初心者集団、かと思いきや統制力やチームワークが今まで見てきたどのプレイヤーものよりも抜きん出ているからそこのチグハグがなんとも言えない。

あれ？　おかしいな、隊員全員目がガラス玉みたいになっちゃってる。どういうことでしょう。　スキルで調べてしまいましょか。

ふむふむ、皆さんどうやら条件付きデスペナルティ系統の呪術がかけられているようですね。どういうつもりかわかりませんが、これも一応報告しておきましょう。

では次に戦士集団を見に行きますか

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

カルネ村　村長宅個室　デスナイトによる騎士殲滅から間もなく(モモンガ)

「という次第にございます魔王さま。　殲滅するもよし、友好を結ぶもよし、拷問するもよしと言う具合にどうとでも料理できる連中でした」

「後詰の意味についてはあとで教えてやるとして……ともかく報告ご苦労」

突然現れたマタタビさんが、頼んでもないのにいつの間にか周辺情報を網羅していた事実に、思わず精神沈静化が起こってしまっていた。

かつて彼女を敵に回して崩壊したギルドがどれほどあったことか。こっそりギルド拠点深奥まで辿り着き持ち去ったギルド武器は数知れない。「屋台崩し」の異名を取るほどだ。

ぶっちゃけ今回はオーバーワークもいいところだが、やはりこの人は一番敵に回したくない。

ところで幸いにもマタタビさんも俺同様に精神構造が変化していたようで、人間が虐殺されているところを見ても特に何も思わなかったようだった。

『チンパンジーの虐殺動画見てるのと同じ感じですね』

……そう感じて何も思わなかったのもどうかと思うが、まぁいいか。

今後ナザリックを運営するにあたって、仄暗い部分も確実に出てくるだろう。NPCは全体的にカルマ値が低く、食人を好むものも多いのだから。それに対して悪感情を持たれて彼女に離反されてはたまらない。

マタタビさんは昔から何考えてるのかさっぱりわからない掴みどころのない人だった。最終日に侵入してきたのもそうだし、突然メイドになるって聞いた時は度肝を抜かされた。アルベドが本人の希望と言ってたけど未だ信じ難い。

ひょっとして彼女は外敵よりもよっぽど警戒するべき相手なのではないだろうか

ひととおりマタタビさんからの報告が終えたところで、アルベドは窘めるように言った。

「マタタビ、御方は現在アインズ・ウール・ゴウンと名乗られておいでなのです。お呼びする際には気をつけなさい」

自分がこんな感じに注意されたら恐縮してしまうだろう、そんな感じの口調だったが、マタタビさんはどこか慣れた具合に軽く切り替えした。

「あー　ひょっとしてアルベドさん、私がひとりだけ『魔王さま』呼びしてるのに嫉妬してました？　ごめんなさい、これからは普通に呼びます」
「っちち違うわよっ!?」
「いえいえ女性にとって男性の唯一はかなり大きいものでしょう。なんでしたら二人の時だけ『あなた』とか呼んでいいか頼んでみたらどうです？」
「ちょっと、おま、何いってんの!?」
「くふーっ!!」
「アルベドさん大丈夫ですか!?　アルベドさんっ!?」
顔を真っ赤にして両耳と頭頂部から『クフーッ』っと蒸気を上げながら憤死するアルベド。どうやらマタタビさんもアルベドとはだいぶ仲良くなったらしい。
自分もこんな風にＮＰＣたちと打ち解けあえたらどんなに良いだろう。かつての仲間達の時みたいに面白おかしく楽しくて、それはきっと素晴らしいことのはずだ。
二人の楽しそうなやり取りに、かつてのアインズ・ウール・ゴウンの姿が重なる。懐かしくも愛おしい日々が
俺は思わず、うつろな幻視に手を伸ばそうとした。

だが当然といえば当然、過去の思い出は時間の流れに遮られ、今目の前の彼女たちとは主従の壁が立ちはだかる。伸ばされた手は人知れず膝下に戻った。

一瞬こちらを見たアルベドが何か言いたそうだったが、思い出したようにマタタビさんの方を一瞥し、結局何も言ってこなかった。

俺は柄にもなく、マタタビさんが羨ましいと思ってしまった。まるでかつての仲間たちがそうであったように、彼女はＮＰＣと肩を並べている。昔の俺がそうであったように。

そして今の俺は、昔の彼女のように一人きりだ。

（まるであべこべみたいじゃないか）

昔の彼女はあの事件の後も、他のメンバーがいなくなっても、アインズ・ウール・ゴウンと友好的に付き合い続けてくれていた。しかし、ナザリックに招待されても固辞するなど一定の距離間を欠かさなかったのも事実だ。

多数決という形をとりなし結果的に彼女を追い出すようにした俺のことを、一体どう思っているのだろうか。彼女の中でどのような折り合いがなされているのかは

わからないが、それを一歩踏み出して問いただす手段を俺は持たなかった。

アルベド「モモンガに寄り添いたっかったけどオリ主が邪魔で出来なかった」
マタタビ「自業自得じゃね？」
今回の捏造設定
・オリ主の能力全般
・地味子のメガネ
今回のオリ主はちょっとテンションおかしいかも。作者も後詰の意味がわからなくて辞書引いたのは内緒。
誤字脱字や感想及び気に食わぬところがあればコメントお願いします

カルネ村まで

愛されキャラのあの男。あいつを救う方法は、非常に意外なものだった。

カルネ村近郊（ガゼフ）

王国戦士長として国王の勅命を受けたガゼフ・ストロノーフは、国内の村々を襲う何者かを討伐するため、精鋭部隊を率いて辺境地に出向いていた。

しかし、行く先々の村では既に焼き討ちに遭っており手遅れとなるばかりであった。焼け残りからわずかばかりの生存者を探し出しては、人員を割き護衛とともにエ・ランテルに連れていくよう指示を出す。

厳格な面持ちで惨状を見渡していたガゼフに、部隊の副長が話しかけてきた

「戦士長」

「なんだ」

「王の御下命は、国境周辺の村を襲う集団を調査し、討伐せよとのことでした。帝国騎士の襲撃も考えられます。しかし、実際に出動を命じられたのはわずか50名。　これは戦士長を嵌める陰謀に違いありません」

「そうかもしれないな」

ガゼフが仕えるリ・エスティーゼ王国。近年は農作物の収穫期を狙った隣国バハルス帝国による軍事政策によってその国力は着実に減衰しつつある。ところが王国内では国王派閥と貴族派閥で対立していることもあり、ロクな対策を取ることも叶わない。それどころか犯罪系裏組織につながりを持つ者や、帝国と秘密裏に手を結ぶ者もいるくらいだ。

そんな彼ら貴族にとって、周辺国家最強の戦士にして国王直轄の懐刀であるガゼフは邪魔な存在でしかないのだろう。事実此度の遠征でも何かと難癖をつけてきて、ガゼフは自身の主装備を外させられていた。

「最悪の場合を考えるなら、このまま人命救助のために部隊を分断するより、いっそ全員でエ・ランテルに戻り体制を立て直しましょう。

このあといくつの村が犠牲になるかはわかりません。しかし、最強の剣士である

あなたを失うほうが国の損失は大きいのです。」

副長の提案は無辜の民の犠牲をやむなしとするものだ。だがそれを罪悪であると断ずることは容易ではない。周辺国家最強の戦士であるガゼフ、その存在は王国内での軍事力としても無視できないものだ。失うとならば、帝国の侵攻により危ぶまれていた国力低下に拍車をかけることとなる。また、それによって国王派が墜落し貴族派が台頭した場合、国民の暮らしぶりは悪化して結果的に多くの犠牲者が生まれることだろう。

剣一筋で生きてきたガゼフとは言え、事態を理解できないほど馬鹿なわけでもない。しかし決して副長の意見を是する様子は見られなかった。

「今や王国戦士長なんて大層な肩書で呼ばれてはいるが、私も元は一介の平民に過ぎなかった。　それはお前も同じだろう」

「はい」

かつてガゼフは王国主催闘技大会の優勝を経て、国王より地位を賜った。そんな彼と自身を比較してはたして同一なのかと訝しむものの、そんなガゼフの着飾らない部分を好ましく思う副長であった。

「だから我々は知っている
村の生活は死と隣り合わせ。モンスターに襲われることも日常茶飯事だ。
なればこそ期待したはずだ、力を持つ貴族や冒険者が助けに来てくれることを。」
異形種や亜人種と比肩しても、人間種は圧倒的に脆弱である。戦士として鍛えた者でさえ非戦闘員のビーストマン相手に苦戦を強いられる程度には。ましてやただの村人、いつ村にモンスターが襲って来て命を奪われるかもわからない。
故にモンスター退治をなりわいとする冒険者や、個人で軍隊を保有する貴族もいるわけだ。しかし、冒険者の総人数は王国全土をカバーできるものではないし、貴族たちも自身の身が可愛いだけであるため進んで出兵しようとはしない。
「期待しなかったといえば嘘になりますが、実際は誰も現れなかった。」
「そうだ　そしてこの『期待』の虚しさは、王国民であれば誰もが知っている。
しかしだからこそ、虚構の希望に縋らなければ夜安心して寝床につき明日の働きに備えることもできない。非力な民とはそういうものだ」
ガゼフは拳を握り、胸部鎧の前にかざす。
「ならば我々が示そうではないか、危険を承知で命を張る者の姿を。　弱きを助け

る、強き者の姿を」

「！」

副長自身、諭すことが無駄なのだと薄々気付いてはいた。

ガゼフ・ストロノーフは決して曲がらない。自分の中の正しさにひたすら正直に生きてきた。

その気高き生き様に魅せられたからこそ、副長は彼に付いてきたのだから。

＝＝

カルネ村

屈強な戦士ガゼフの胸中にあるのは、少女の如き純真な祈りであった。民を心から思い、立場は違えど志同じくする国王に忠誠を誓う王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。

（どうか次こそは無事であってくれ）

そんな願いが聞き届けられたのかどうかは分からないが、次の目的地であるカル

ネ村の平穏無事な姿が遠目から見えてきた。
村の入口のところまで来ると、どうやら何者かがガゼフ達を出待ちしているようである。数は４人。
一人目はこの村の村長らしき中年の男性。あからさまに恐怖のこもった視線をこちらに向けてきている。
もう一人が漆黒の全身甲冑を装備した長身の女戦士、彼女からもジリジリとした敵意が感じられた。
その女性に付き添われるようにして佇むのが、常闇をそのまま布の形にしたようなローブを羽織り、形容しがたい表情を浮かべた赤黒いマスクを被る魔術師らしき男性。
最後の人物、先の二人の影に隠れるようにしていたのですぐには気付かなかったが、こちらを覗き込む黒髪黒目の少女の姿。おそらくガゼフと同じで南方の血統が色濃く受け継がれたのであろう。
ガゼフはボソっと呟いた。
「……３人の家族か？」

怪しい３人だが、夫婦とその子供みたいな関係かもしれないと考えた。すると二人も南方系の民族だろうか。

「くふふふ……家族、親子、夫婦なんて甘美な響き！」

僅かな声にもかかわらず、黒甲冑の女性はその音を聞き取るとくねくねと身悶えはじめ、とてつもなく気味が悪かった。

ガゼフは特に黒甲冑の女性に対する警戒を上方修正した。

「私は、リ・エスティーゼ王国、王国戦士長ガゼフ。この近隣を荒らしまわっている下手人を退治するために王の御命を受け、村々を回っているものである」

「王国戦士長……」

仮面の男はガゼフを値踏みするような視線を向けたあと、背後の少女と何やらアイコンタクトを取っていた。ガゼフは視線を村長の方に向ける。

「村長だな」

「はい」

「横にいるものが誰なのか教えてもらいたい」

「いいえそれには及びません」

仮面は一歩前に出て自己紹介を始めた
「はじめまして、王国戦士長殿。私はアインズ・ウール・ゴウン。この村が騎士に襲われておりましたので助けに来た魔法使いです。　横の者は……」
「妻のアルベドと申します」
「ムスメノ……マタタビ……デス」
何故か高らかと勝ち誇ったふうに妻を名乗る黒甲冑の女性アルベド。対し、娘を名乗った少女はどこか遠い目をしている。仮面の男は少し慌てた様子であったが、間もなく平常を取り戻した。
「村を救っていただき感謝の言葉も無い」
王国戦士長という立場がありながら突然頭を下げたガゼフに、アルベド以外の３名は不意を突かれたような具合であった。
「いえいえ。実際は私も村を救ったことによる報酬目当てですから、お気にされず」
見たところ立派な装備を身に着けていると、審美眼に疎いガゼフでも一目瞭然で理解できていた。そんな彼らが取り立てて見所のない村落にどんな報酬を求めたのかガゼフは気にかかった。　あるいは何らかの方便かもしれない。

ガゼフは、強者の立場にいながら謙遜する余裕すら持て余すアインズの振る舞いに好感を抱いた。
「では申し訳ないが、どのような者達が村を襲ったのか、詳しい話を聞きたいのだが？」
「村長殿がよろしければ、私は構いません」
「私も構いません　どうぞ私の家であれば狭いながら腰を落ち着けて話すことができますので　よかったらそちらで」
「それはどうも」
「お言葉に甘えさせていただこう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

カルネ村　村長宅（マタタビ）

普通にお気づきになったかもしれませんが解説しておきます。私に唆されたアルベドさんが、ガゼフ達が来る直前にモモンガさんに内緒で私と示し合わせて夫婦設定を捏造したのです。

ちょっとびっくりしたモモンガさんですが、すぐに精神安定化の効力が発動して、めんどくさいしそれでいいかと流してくれたという経緯です。
ちなみにそのあとアルベドさんがモモンガさんを『あなた』呼びし始めたのですが、声がやたら艶っぽくなったり『クフーッ！』と水蒸気を上げたりしてウザくなったので《メッセージ/伝言》ごしにモモンガさんが禁止令を出したようです。
その時のアルベドさんの凹みっぷりったら見ものでしたけど……ゲフンゲフン。
「というわけで鎧の取引についてなのだが　ゴウン殿」
「そうですね　金銭以外となれば……」
と、いつのまにかだいぶ話が進んでいますね。何のお話してるんでしょう
唐突にモモンガさんから《メッセージ/伝言》が届いてきた
（マタタビさん、頼みがあるんですが、このガゼフという男と手合わせしてもらえませんか？）
（あー〈地味子のメガネ〉の検証ですね？　）
（そういうことです　マタタビさんの見た限りで30レベル程度らしいのですが、この世界ではどのくらい信憑性があるものなのか気になるので）

（承りました魔王さま……いえアインズさま？）

（呼び方はどっちでもいいです。　別にデスナイトで調べても良かったのですが、力の推し量りみたいなことをする場合、力加減が得意なマタタビさんのほうが適任なので）

（わかりました）

「よろしければ王国戦士長直々に、ワタシノムスメと手合わせしてもらいたいのですが。構いませんかな？」

「そちらの黒髪のお嬢さんかな？」

何を言ってるのかわからないというふうに　ガゼフさんは私の方を向きました。そりゃそうでしょう、娘を王国戦士長とガチンコさせる父親は普通いません。事実赤の他人ですから。

「……所詮どっかの処女サキュバスの茶番劇ですし」

うっかり声に出してしまいました。アルベドさんがギョロッと私の方を向いて睨みつけます、めっちゃ怖い！ところが話し込んでるガゼフとモモンガさんはちっとも気づかない。

あとでモモンガさんから聞いた話ですが、この時の私はガゼフさんに恐縮していたように見えたらしいです。
違いますよモモンガさん、真の敵は身内にいるのです。
「これでも彼女は戦士としての心得がありましてね。　彼女の今後のため、ぜひ戦士長殿と手合わせをと思いまして」
「ほうそれはそれは。ゴウン殿程の御仁であれば、娘さんもそれなりの使い手なのだろうな。逞しい奥方もお連れのようだし、そういうことならこちらとしてもぜひ相手してもらいたいものだ」
『奥方』という言葉に対し、モモンガさんは存在しない頬を引きつらせ、アルベドさんはヘルムの下にて『くふー』とキモく微笑み、私はそんなアルベドさんが可愛いなぁと思うのでした。
どうやら最近私は、ヒドイン萌えにめざめたようです

＝＝

カルネ村　広場

帝国騎士？がデスナイトに蹂躙されて「おかにぇあげましゅううぅぅ！」と断末魔していた広場にて、いざ尋常に私とガゼフさんの立ち会いが始まります。

観客として、生き残りの村人やガゼフさんの部下たち。　戦士長が少女を相手取るということで、兵士の方々からは侮るような視線がちらほらと。正直めっちゃ恥ずかしいです。

対して広場向かい側に佇むガゼフさんはそれなりに真剣な表情をしています。立ち会う相手に敬意を払う態度が非常に好印象。戦士然とした野蛮な風像に反して、結構紳士な方のようですね。

ここで立会人を引き受けたモモンガさんが、尊大に両手を広げて試合のルールを説明します。

「一本勝負、相手にこの木刀を当てた方の勝ちとする。両者それで異存ないな？」

「それでかまわない」と、ガゼフさん。

もちろん私も同意します。私にとって実はめちゃくちゃ有利なルールなのですけど。

確認が取れたところで、モモンガさんは片手をチョップ風に振り上げました。両者武器を取り、サッと身構えます。
えっと、こういうとき名乗ったほうがいいのかな？
「マタタビです　よろしくお願いします」
お辞儀と声を合わせないようにしてピッチリ挨拶
「改めて　ガゼフストロノーフだ」
あーお辞儀いらなかったのね
試合開始を告げるような、一陣の風が吹きました
「それでは　はじm「せいやっ！」
モモンガさんが開戦の狼煙をあげる直前、私が地面を思いっきり蹴りつけて大きな砂埃があがりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

(ガゼフ)

少女を見た第一印象は気弱とか臆病。どちらかといえば小動物的な雰囲気であっ

た。

とても戦士としての心得を持つ者のようには思えず、ガゼフはゴウンを訝しんだものだった。

しかし、こうして武器を握り目の前で立ち会ってみるとだいぶ印象が変わる。

今の彼女の雰囲気は獲物に相対する野良猫に似ている気がした。

普段ちいさな物音にも敏感な猫は、大型動物である人間が近づけばあっという間に逃げ出してしまう。だが一度獲物と決めつけた相手にはさながら獅子のごとく立ち向かい、あっというまに追い詰めてしまうものだ。

（ひょっとして自分はこの少女からして鼠程度の存在でしかないのでは？）

そんな発想が脳裏をよぎるも、戦士としての矜持によって容易く霧散する

「マタタビです　よろしくお願いします」

「改めて　ガゼフ・ストロノーフだ」

互いに名乗り挙げたところで、アインズが開戦の狼煙をあげようとしたその直前

「それでは　はじｍ「せいやっ！」

突然少女が地面を盛大に蹴りつけ、前後が見えないほどの砂埃が発生した。周囲

の村人や兵士は大きく咳ごんでいる。
（まさかこの立ち合いで目眩ましなのか!?）
別にルール違反とかではないが、１体１の試合形式でこのような手段を使ってくる相手をガゼフは知らなかった。人から猛獣のようだとも比喩されるガゼフではあったが、今思えばそれは実に馬鹿らしいことだと解る。真の野生とは、生存のために手段を選ばぬことなのだ。
少女―マタタビはそれを見事に体現していた。暗黙の良識に囚われているガゼフとでは圧倒的にステージが違っていたのだ。
〈可能性知覚〉
砂埃の発生からわずか数瞬、少女相手にガゼフは気配感知系の武技を発動させていた。それが直ちに正解であると悟る
マタタビは瞬時にガゼフの懐へ突っ込んできていた。気付いたガゼフが横薙ぎに木刀を振るい距離を取る
（速い！）
速度的な話だけでいえば、ガゼフが過去に戦ったブレイン・アングラウスよりも

上だ。ガゼフの中にあったマタタビへの侮りはもはや影も形もなくなっていた。
今度はガゼフが少女の方に詰め寄り、鋭い一閃を叩き込む。木刀を後ろ向きにして受け流し、懐がガラ空きになったところをマタタビが足技を入れる。彼女の爪先は的確に男性の急所、金的を捉えていた。
（っぐ!?〈即応反射〉）
『木刀を当てた方の勝ち』というルール上、足技を受けたとしても負けにはならないが、ガゼフは己の人生設計を大きく揺るがしかねない一撃に対して戦慄し、思わず武技により全力で回避を取った。
ガゼフも戦いの最中足技を使うこともあるが、剣士としてのセオリーに反する為か、自分の他に使うものなど殆ど知らない。ただ彼女らしい一撃だと納得できた
「！」
武技による超即反応に戸惑うマタタビに空きが生じる。そんな隙を見逃すガゼフではない。蹴りが躱され体勢の崩れたマタタビにつかさず打突を入れる。
瞬間マタタビは身体をグニャリと反り返らせた。その動きは軟体動物を連想する程の柔軟さでとても人間業とは思えないものであった。結果、ガゼフの突きは躱さ

れる。
しかしその急激な姿勢では反撃の攻撃は入れられない。ガゼフは勝機と見るや大地を踏み締め渾身の一撃を叩き込もうとした、しかし
―礫かっ!?
マタタビの片手から３個の小石が放たれた。
一つはガゼフの利き手の指元。指がしびれるような衝撃に木刀の握りが弱まってしまう。
もうひとつが胸部装甲、若干鎧が凹む程の威力。
３個めがガゼフのおでこ、これにはたまらずガゼフは怯んでしまう。
瞬時に体勢を立て直したマタタビはガゼフの一撃に対して、身を屈めるようにして回避した。そしてそのままガゼフの足元に木刀を振るう。
これにて勝負が決まるかと思いきや、ガゼフも足技を使ってマタタビを攻撃する。くらったマタタビは地面をゴロゴロと転がっっていった
試合開始の時のような一陣の風が吹いた。ただ違うのは、その風が試合の終わりを告げるものであるということ。

「あはは、わたしまけましたわ」
「良い勝負だったよ」
砂埃が晴れ渡り姿を表したのは、意外と満足そうな笑みを浮かべて仰向けに倒れ込んだマタタビ。そして木刀を向けながらそれを見下ろすガゼフの姿であった。
目眩まし、金的、飛礫　たしかに卑怯染みた手段ばかりであったが、勝利に対する貪欲さが強く感じられた。そんなマタタビのやり方を、ガゼフはどことなく好ましく思っていた。それも彼自身の器の大きさに由来するものだが
そしてアインズの声が響く。
「――そこまで」
どうみても勝負は戦士長の勝利。だがパチパチと軽い拍手が鳴る程度で、大して歓声は挙がらなかった。実のところ試合時間は十秒にも満たなかったし、相手が少女では当然の結果として受け止めるものが多かったからだ。
もっともそれがマタタビなりの気遣いであることをガゼフは見抜いていた。初手の砂埃は目眩ましというだけでなく、少女が戦士長と渡り合う姿を見せないためのものでもあったのだ。

「……さすがは王国最強ですね。ガゼフ殿　彼女にもいい勉強になったことでしょう」

圧勝に見えて息を切らしていたガゼフへ近づき、声をかけるアインズ。ガゼフの獰猛な微笑みを前にしてもアインズはたじろぐ様子もない。

「いいえ、実際娘さんにはかなり手こずらされました。ところで鎧の件だが……」

「鎧の一着は村長殿の家に置いてあります。どうぞお持ち帰りください。我々はそろそろ帰ろうと思います。約束通り、私達のことは内密にしてください」

「了解した。ではアインズ殿、村を救ってくれた恩は忘れない。私の屋敷が王都にあるから、訪ねてきた際にはぜひ歓迎する」

王国内では魔術師に対する風当たりが強い。それを見越してのことだろう。アインズは自身のことを誰にも言わないように要求してきた。帝国あたりにスカウトされてしまえば王国の脅威ともなりうるので正直遠慮願いたかったが、「帝国の軍門には下らない」と言うので渋々承諾した。

結局その後、アインズ一家はどこへともなく去っていった。

そのあと王国戦士団は、カルネ村にて復興の手伝いのためしばらく駐在すること

となった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

復興作業の休憩中、ガゼフはカルネ村の広場にてあるものを見つけた

「これは！」

血の付いた小石2つに、同じ大きさの木片が一つ。

小石の方は、マタタビがガゼフとの試合で指とおでこを狙い撃ったときに使ったものだろう。

その順繰りで行けば、血のついていない木片はガゼフの胸部装甲を撃ったものだとわかる。　その木片にガゼフは見覚えがあった。

木片の材質は、試合の時に使った木刀と同じ材質だったのだ。

おそらく『木刀を当てた方の勝ち』というルールを見越して木刀を千切り、礫に紛れ込ませて投げたものだろう。

「実戦では勝ったが、試合に負けたということか！」

相手を追い詰めたのはガゼフに違いない。しかし試合ルールを逆手に取って勝利したのはマタタビであったのだ。

事実に気づいた途端、先程勝利を誇ってしまった自分を叱責したい衝動に駆られた。そして同時に言い知れぬ闘争心が湧いて出てきた。

「また、会いたいものだな」

その後、ガゼフ一行は無事王都へ帰還した。危惧されていた何者かの策謀が起こらず、副長はホッとしたという。

前回で登場したのはスカッシュレモン頭の信仰系魔法詠唱者。

誰もニ●ンだなんて言ってない。

注意事項でも書きましたが、敢えて原作キャラを登場させない場合があります。

感想、気に食わぬところ、誤字脱字があればコメントお願いします

至上命令まで

５ｃｈで感想をくださった方や誤字報告をしてくださった方に改めてお礼申し上げます。

今回の話は書き直そうか悩んでたけど、結局そのまま投稿することにします。

ナザリック地下大墳墓10階層玉座の間（マタタビ）

ガゼフさんとの勝負は意外と楽しいものでした。

〈シノビ〉のスキル「影分身の術」、自身の四分の一程度のステータスの分身を作り出すスキルです。これにより25レベル相当の強さとなった私の分身を、ガゼフさん相手にぶつけてみました。

全力ではありませんが、本気ではありました。戦士職でない私の25レベルではガード硬めのガゼフさんに一撃与えることも叶いません。故にあの手この手の卑怯

を尽くしたのですが、意外とガゼフさんには受けが良かったようです。
たっち・みーに同じことした時は笑って許してくれましたが、以来二度とＰＶＰしてくれませんでした。ただウルベルトは、私の卑怯さを大層気に入ってくれたらしい。
そしてガゼフの強さが判明し〈地味子のメガネ〉の検証が済み次第カルネ村を去った私たちは、その足で陽光晴天とかいう実にシャイニングな名前の魔法詠唱者集団をコッソリとナザリック送りにしました。
根っからの宗教肌だと決めつけていたレモン頭の隊長さんですが、俗物臭い命乞いをしていたのでちょっと見直しました。無論慈悲はありませんけど。
このままレモン達をガゼフを襲わせて恩を売る事もできたように思えたので、気になってモモンガさんに《メッセージ/伝言》で質問してみました。
（マタタビさんが報告してくださったでしょう？　偽帝国騎士や陽光聖典の装備に比べて、王国の精鋭部隊の装備は圧倒的に魔力耐性が低い。たぶん王国とやらは、魔法詠唱者という存在を軽んじているのでしょう。
そんな連中に恩を売っても大した利益は出てきませんし、ここは出方を伺うべき

です。）

とのことです。いやー結構考えてるんですね頭蓋空っぽとか言ってすいませんほんと。いやマジでさすモモですわ。

（聞こえてるんですが……）

……おっと失礼しました。

ところで現在、この玉座の間にはナザリックのＮＰＣたちが全員総出場しております。まさか百鬼夜行を生きてみることになるとは思いませんでした。

私は一般メイドの最後尾、下っ端感パない。

対する我らがアインズ様は、ワールドアイテムの玉座に座して如何にも魔王さまやっています。実はこれで内心ビクついているなんて夢にも思いませんよね。

「面をあげよ」

オーバーロードがそう告げると、場にいたすべてのＮＰＣたちが一糸乱れずに顔をあげます。私も反射でギリギリ間に合いました。

「まずは、私が個人で勝手に動いたことに詫びを入れよう。詳しい話はアルベドか

ら聞くように」
セバスさんに怒られてるときはたっち・みーの時よろしくめっちゃ凹んでいたモモンガさんですが、現状ろくに反省してる気配なしの支配者モード。人間慣れれば成るもんですね、もう人間じゃないけど。
「そして私は名を変えた。これより私を呼ぶときはアインズ・ウール・ゴウン――アインズと呼ぶが良い。異論あるものは立ってそれを示せ」
異論あるものは立ってそれを示せ」
この名称変更にどのような意味があるのかを私は予め聞いていた。
彼はアインズ・ウール・ゴウンの名を世界に広めて、この世界に来ているかもしれないギルドメンバーの道標になろうとしているらしい。
（所詮、ゲーム上での付き合いなのにね）
理解できないわけではなかった。私だって彼と同じでアインズ・ウール・ゴウンの外に気のしれた相手なんていない。たった唯一のものに拘る気持ちはよく分かる。
だけど、ゲーム仲間にここまで執着されるなんて、相手側は思いもしないだろう

しいい迷惑なんじゃなかろうか。気持ち悪いし重たい、狂ってる。そんな思いを受け止めてもらおうだなんて大した我儘じゃないか。

でも自分の主義じゃないというだけで彼の一大決心を否定するつもりはないし、居る筈もない人達への心境なんて正直どうでも良かった。

彼の突然の名称変更にＮＰＣの皆さんは騒然とする。やがて他の人達もおのおの納得した雰囲気になりました。私と同じく事前に聞いていたアルベドさんは、表面上冷静だった。

それがなんとなく気に入らなくて私は眉を顰めました。《読心感知》のスキルによって、アルベドさんの悪感情はバッチリ伝わってきていたのです。

彼女が何を考えているのかは知りません。スキルが読み取るのは感情であって思考じゃない。憎しみや悲哀の意味は、原因は私にもわからないから。

愛に呪われし純白の悪魔は、正体不明の激情に蓋をして、間もなく返礼の口上を述べようとした　―その時、

何者かが立ち上がりました。

声にはならない動揺が玉座の間いっぱいに広がり、絶対支配者へ異論を述べる不届き者に対して、これでもかというほどに殺気が集中する。

殺意という名の槍が豪雨のごとく降り注がれながらも、不届き者とやらは妙に平然としていた。というか私だった。

（もうだいぶ慣れたもん）

ここ毎日ＮＰＣからの悪感情をダイレクトに受けていた私の心は敵意にすっかり麻痺していたので、ＮＰＣ達の殺意にもほとんど無関心でいられた。ただアルベドさんの敵意だけが他より一層強く、それがなんだかショックだった。

「静まれ」

骸骨の彼はスタッフをコツンと床へ突いただけで周囲の動揺をあっさりと治めてしまった。そして支配者然とした態度で強く私に問いただす。

「マタタビ、ならば聞こう。何故お前は立ち上がった？どのような不満があったのだ」

無意識か、それとも意識的だったらもっと嫌だ。モモンガさんからは絶望のオーラがうっすら広がっていく。一度は承認した私が公の場でＮＯって言うの、モモン

ガさんからしてみれば意味不明でしょう。そりゃ腹も立つ。

私はすうっと息を吸い込み、意を決して全身全霊高らかと、そしてやけくそ気味に言い訳をぶちかましました。

「モモンガ様は、40柱もの至高を失ったナザリックにおいて、まさしく夜陰を照らす月光の如き御方にあらせられます」

「各々が造物主という名の太陽を見失ったシモベ達は、その反射光を宿すモモンガ様に蛾のごとく群がっては絶対の忠誠を嘯いているに過ぎません。真の忠誠は、やはり自らを生み出した主にのみあるのです」

「モモンガ様はそんなシモベ共の気持ちを鑑みて自らギルド名を名乗られようとしておられるのでしょうが、私はそれに我慢ならないというわけです」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

【モモンガ】

「ふむ、お前の言いたいことはよくわかった」

（いや全然わかんないんですけど⁉）

一体全体どうしてマタタビが、モモンガの一大決心に口を挟むのか、モモンガ自身ちっとも心当りがなかった。ひょっとして何かの嫌がらせではないのか？そんなふうに勘ぐってしまうくらいに動揺してしまい、咄嗟に精神安定化が発動する。

しかし、彼女の言い分はＮＰＣたちには都合の悪い部分であるらしい。全方位からマタタビに向かっていた殺気はかなり減衰していた。モモンガはマタタビとの〈メッセージ/伝言〉による定時連絡のことを思い出した。

彼女曰く、ＮＰＣの忠誠心にはギルドメンバー内でも格差があるらしいのである。

自らの創造主　＞　モモンガ（ギルド長）　＞　他のギルドメンバー

そして自らの創造主がいない現状では、ギルド長であるモモンガに忠誠心が集中しているのだと言っていた。逆を返せば、彼らＮＰＣたちにとってモモンガは創造主の代替品という側面も確かにあるようなのだ。それを聞いたモモンガは、何かのきっかけで彼らに裏切られてしまうこともあるのではと、多少の危惧を募らせたと

もあった。

（ひょっとしてマタタビさんははこのことを心配して、俺がＮＰＣたちに敵対されないように泥をかぶってくれているのでは？）

その発想に至った時、モモンガはマタタビに対して申し訳ないような気持ちになった。打ち合わせもなく突然こんなことを始めたとは言え、なんだかんだとモモンガのことを心配してくれている様子であったからだ。

とはいえ今の状況は少々まずい。彼女のセリフが波紋を残して、ＮＰＣ達は無用に自虐心をつのらせている様子だった。「見捨てられてしまうのでは」という危機感が沈黙によって広がり、まるで通夜のような有様になっていた。それはある意味では、墓にふさわしい雰囲気なのかも知れないが。

マタタビは「絶対の忠誠を嘯く」などと言っていたが、彼らのモモンガに対する忠誠心は紛れもなく本物である。自らの創造主を第一とするのも、モモンガからしてみればそちらのほうが嬉しかった。

モモンガは言った。

「私がお前たちシモベに忠義の在り方を求めることは決してない」

その言葉に、「棄てられるのだ」という確信を見出し、彼らの中で、絶望感が一気に広がった。

しかし、絶望を与えるのがモモンガの声であれば、それを引き上げるのもモモンガの声である。

「忠義を尽くしてくれるのは非常に嬉しい。だが、無理はして欲しくないのだ。お前たちのありとあらゆる個性は、いいところも悪いところも、かつての仲間たちが作り出したのだ。故に、私はそれに反するようなことをお前たちに求めたくはないのだよ。

その為にも、自分自身がどうあるべきかは自分たちで考えてもらいたい。当然、それについてで思い悩むということもあるだろう。その時は、他のシモベでもいいし、私に言いたいことがあれば彼女―マタタビのように堂々と意見してほしい」

モモンガの慈悲深き言葉に、ナザリック総幸福量の折れ線グラフは突如直角の方を向いていった。忠誠心は限界をはるか超越し、地の底から大気圏にまで急上昇していった。

更に追撃と言わんばかりのモモンガの言葉が、彼らを翻弄する。

「そうだな、また反論があると困るし、私がアインズ・ウール・ゴウン、ギルドの名を名乗る理由を話そう」

一瞬、何を思ったか黙り、再び口を開く。

「現在ナザリックは原因不明の自体によりこの平原に転移してしまった。よって、どんな現象が起こるのか予想がつかない。万が一、かつての仲間もこの地に転移していたのであれば、何を持ってしても探し出さねばならない。

だからこそ道標のためにも、アインズ・ウール・ゴウンの名を世界に知らしめなければならないのだ」

「これよりおまえ達の最大となる行動方針を厳令する」と言ってモモンガ

―もといアインズは続ける。

「生きとし生きる全ての者に知らしめてやれ！　より強きものがもしこの世界にいるのなら、力以外の手段で。数多くの部下を持つ魔法使いがいるなら、別の手段で。今はまだその前の準備段階にしか過ぎないが、将来、来るべき時のために動け。このアインズ・ウール・ゴウンこそが最も偉大なものであるということを知らしめるためにだ！」

絶対支配者の厳命が玉座の間じゅうに響き渡り、魑魅魍魎共の雄叫びがあちらこちらで起こりだした

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（マタタビ）

彼がそのまま転移でいなくなって、私は九死に一生を得た感覚だった。名前を訂正させることには失敗したけど、どうにかうまく誤魔化せたらしい。アルベドさんやデミウルゴスに何らかの反論をされるかと思いきや、結局何も言われなかったのは奇跡だ。

これからは二度とこんなことしないように気をつけよう。

ところで３人称で彼をどう呼べばいいのか少々迷いどころですが、とりあえずアインズ様にしておきましょう。

しばらくして玉座の間から転移でいなくなったアインズ様。主役を失った玉座の間は静かですが先程の熱気は確かに残っています。

沈黙を破ったのはアルベドさんでした。
「デミウルゴス　アインズ様とお話をした際の言葉を皆に」
「アインズ様が夜空をご覧になられたとき、こうおっしゃいました。
『私がこの地に来たのは誰も手に入れていない宝石箱を手にするためやもしれない』と。そして最後にこうおっしゃいました。
『世界征服なんて面白いかもしれないな』と」
何いってんのデミウルゴスさん？ロマンに焦がれる少年の如き純粋な笑顔で言う事じゃあないでしょう？　まさか世界征服なんてそんな……ほらほらアルベドさんもなんとか言ってやって。
「各員、ナザリック地下大墳墓の最終目的は　アインズ様に宝石箱を、すなわちこの世界をお渡しすることだと知れ」
『ウオオオォォォォォ！』
OH～!?
（多分……冗談だよね？）
きっと彼は何気なく夢見がちに呟いたのでしょう。なんだか目に浮かぶくらいリ

アリティのある話だ。
しかしそんなこと言っちまえば連中がどう解釈するかなんて、普段肩を並べてる私からすれば明白なのでした。

勘違いで無理やりゴリ押しした感じして気に食わない。ひょっとしたらこの話を次回まるごと書き直すかもしれません
けど予定どおりなら次回はメイドの話です
誤字脱字、気に食わぬところ、感想があればコメントお願いします

地下労働メイド暮らし

そういえば1話でオリ主の職業に〈シノビ〉というのがありましたが、あれは捏造です。
原作では〈ニンジャ〉〈ハンゾウ〉〈カシンコジ〉しか確認されていません。
作者は〈シノビ〉の方が気に入っているのでこちらを採用しています

【マタタビの至高の41人大百科】
No.3：ウルベルト・アレイン・オードル
ウルベルトはギルド内でも数少ないマタタビの友人だ。とはいえ彼と仲良くなるのは、実はそれほど難しくない。悪という概念にこだわる彼はそれにまつわる多くの持論を有しており、ようはその話を文句を垂れずに最後まで聞き通せるかという点に限る。
たっち・みーと仲が悪いのは似た者同士だからだろう。ウルベルトはマタタビの

ことを親友と呼ぶが、本当に深いつながりがあったのはたっち・みーであるはずだ。二人の仲を切り裂く原因となったマタタビは、その点でウルベルトに強い負い目を持つ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ナザリック地下大墳墓　９階層

〔マタタビ〕

ナザリック地下大墳墓　９階層（マタタビ）

ナザリックにおいてトイレの存在意義は薄い。ＮＰＣは飲食不要な者がほとんどだし、逆に飲食する者がいたとしても何故か排泄不要だからだ。

ユグドラシルの時にそういったゲーム的システムが存在しなかったからこその反映だろう。普通ギルド拠点にトイレなんて設置することはありえないし、逆に必要だった場合はあまり想像したくない。

ところがナザリックにはトイレがある。かつてのアインズ・ウール・ゴウンのメンバーは凝り性な連中ばかりだったしあまり驚きはしない。しかしいざ現実化し

てその施設を運営しなければならないとすると「どうしてこんなもん作ったんだ」という恨み言の一つでも言いたくなる。連中からすれば逆恨みもいいところだろうが。

大理石や黒曜石などで荘厳に造られた帝国ホテルみたいに豪奢なトイレは、時折洗面台を使う使用人がいる程度でしかなく、正直ぶっちゃけるとひたすら無駄の一言に尽きるわけであった。

そんな誰も使わないトイレ掃除程空しいものはない。

（……私はいったい何をやってるんだ？）

あるかもよく分からない汚れと雑巾片手に格闘する、それが元ユグドラシルプレイヤー：マタタビのここのところの日常風景であった。

こういった異世界転生モノのファンタジーを他にも知らないことは無いが、思っていたのとなんか違う。もっとマジカルパワー的なものでドッタンバッタン大騒ぎする類のモノではないのだろうか？　今のところは良いのだが、せっかくの異世界なのだから一生地下労働でメイドを続ける気もさらさらなかった。

「ふうー終わった」

洗面台の掃除が一段落ついて一息ついたのも束の間、横にいたイワトビペンギンの眼がギョッと光る。彼はレベル１のバードマンでしかないが、醸し出される威圧感には、レベル１００である私をも戦慄させる何かをはらんでいた。

「どうでしょうか？」

おそるおそる、掃除結果の合否を尋ねる。

私の上司、エクレア・エクレール・エイクレアーは鷹のような目付きでトイレ内を一通り見渡し、無慈悲な宣告を告げる。

「全然ダメですな、やり直し」

「えー、ダメですか？これでもう３回目ですよ！」

駄々コネみたいな私の抵抗に対し、エクレアさんは呆れたように言い捨てた。

「むしろ３回のやり直しをしても不完全なままというのはどういうことですか。少しは学習するということを覚えるべきです。」

エクレアさんは餡ころもっちもちに作られたＮＰＣで、掃除に強い拘りがあるというような設定を与えられたらしい。

それが反映されてか、現実化された彼はとてつもない掃除魔と化していた。

「じゃあ一体何がいけないんです？　学習って言ったって何がダメなのかわからなければ同じことの繰り返しですよ」

私の反論を聞いたエクレアは信じられないようなモノでも見るかのように驚き、やがてヤレヤレ顔（推測）をして答えた。

「あなたは目に見えない部分の清掃が杜撰なのですよ。　見なさい、あなたが入念に掃除したつもりの鏡ですが……ホラ」

洗面台の鏡と壁の接合部分に手（※羽）をかけるエクレアさん。直線状をすっと撫でると手（※羽）の先が黒ずんでいるようだった。

それを見た私はショックを受ける。わかりっこないだろうこんなの

「いいですか、普段滅多に使われないといえど、空気中のほこりは常に流動し、壁やモノなどに吸着されるのです。こういった見えない部分の汚れを疎かにすると、手も付けられないようなひどい汚れになるのですよ。」

次にエクレアさんが指摘したのは水道部分です。

「一般的に水道水の中には炭酸カルシウムなどのミネラル分が微妙に含まれており、水滴をそのままにしておくと溶けていた成分が固形化し汚れとしてこべりつい

てしまう。水垢と言われるものの正体がこれです。あなたの使った中性洗剤ではこの汚れは落ちないのですよ」

リアルでは洗剤の種類なんか気にしたこともなかった。精々混ぜるな危険に注意するくらいだ。

「ではどうしたらいいんです？」

「1から洗面台掃除の手本を披露します。よく見ておきなさい。」

エクレアさんの眼が再び鋭くなりました。幾種類かの洗剤を横に並べて掃除を始めます。

「まずは化粧直しやうがいの時にこべりついた脂分を洗いましょう。弱酸性洗剤でさっとふき取ります。そして排水溝などのスキマ部分は特に汚れが残りやすいから特に入念にやります。」

ペンギンの手（※羽）で布巾を持ち、洗剤をつけて満遍なくふき取る。私がさっきやったような力任せではなく、顔を洗うような優しいソフトタッチです。一旦拭き終わると蛇口から水を流して洗剤を押し流しました。続いて別の洗剤を取り出します。

「水垢の成分はアルカリ性、であるならば酸性洗剤で落とすのがセオリーでしょう。しかし蛇口部分は腐食に弱いステンレス製です。ふき取る際に細心の注意が必要となります。」

先ほどは撫でるように優しい拭き方でしたが、反面蛇口拭きでは手早く正確な手つきでした。時折拭いた部分を水入りの霧吹きで吹きかけます。

「酸性洗剤の濃い成分が乾燥してしまうと、ステンレス素材はたちまち腐食してしまいます。ですから成分が凝固しないよう定期的に水をかけ、そして手早くふき取る必要があるのです。」

この作業はエクレアさんをしても一筋縄ではいかないらしく、横顔に一筋の冷や汗が垂れているようでした。その後姿には鬼気迫るものがあり、掃除というより一種の職人芸です。

「酸性洗剤は癖が強く扱いには注意が必要ですが、汚れの付いた表面部分だけを的確にそぎ落とすことができれば……この通り」

仕上げに蛇口で水を流して洗剤を取り除き、布巾で水切りをして終了です。

「凄い！」

元々それほど汚れてもいなかった筈の洗面台ですが、先ほどとはまるで違う洗面台の姿に、私はただひたすら感嘆しました。

僅かにあった虹色の油汚れは跡形もなく、どれだけ目を凝らしても水垢は見当たりません。そしてステンレスの蛇口は本来の輝きを取り戻したようにピカピカと輝いていました。

掃除というもの奥深さを思い知り新たな見地に眼を見開かされて、驚きのあまり私は痴呆のごとくその一言を連呼し続けました。

◆

従業員食堂

ナザリックには食堂まで存在します。

食堂は仕事終わりのメイドたちで溢れています。基本的に同じ創造主で集まってグループを作っているけど、他の創造主の者とおしゃべりしたい者たちが集まるグループもあるか、中には一人で食事する人もいる。

彼女たちの現在の話の種は、私が先日紹介したことから始まった漫画についてです。私が紹介した一般メイドの製作者の一人であるらしいホワイトブリムの漫画は、メイドの皆様の間で大人気。

図書館には何故か漫画教本がいくつか蔵書されていましたから、中には自分たちで漫画を作ってみようという試みを行っている者も現れました。ホワイトブリムに作られたメイドは何故か絵がうまいのです。

彼女たちの書いた漫画は、私の話したエピソードを元にした至高の41人の英雄譚（神話？）や、何気ないナザリックでの生活を描いたものなどです。

見た中で一番びっくりしたのはセ〇ス☒デ〇ウルゴ〇の薄い本ですね。本人等が見たらＳＡＮ値直送間違いなしでしょう。

エクレアさんは、いつもは男性使用人の方を呼んで食事の手伝いをさせるのですが、今日は使用人の担当箇所が違い、加えて彼が上機嫌なこともあって珍しく私と二人で食事をしようということになります。

彼は餅ころもっちもちに作られたＮＰＣであり「アインズ・ウール・ゴウンの簒奪を企てている」というふざけた設定を与えられているため、忠誠心は認められる

ものの他のＮＰＣには距離を置かれています。
　ウザいやつですが嫌いではありません。掃除上手は普通に尊敬するし、事情が違えど私と似たような境遇にあるエクレアさんに対して私は妙な親近感を感じていました。
「エクレアさん今日は何食べます？」
「ふむ、ではＢ定食にいたしましょう」
「じゃあ私も同じものにしよっと。二人分取ってくるので待っていてくださいね」
「うむ」
　普段この従業員食堂を使うのは一般メイドの皆様方に、ペストーニャ先生、プレアデス、そして私とエクレアさん。特に一般メイドの人たちは、ホムンクルスの種族ペナルティによって大食いになっているので、調理場の作業量は膨大です。
　メイドの仕事の一つに調理場の皿洗いがあり、個人的にあれが一番つらい仕事だと思っています。ちなみに他の人にとっての激務は、四六時中骸骨顔を眺めるだけのアインズ様当番で、一番辛いのは当番前日の休暇らしい。大いに理解しがたい。

私がB定食の配膳トレーを2つ分持ってエクレアさんの待つ自分の席に戻ろうとしたら、戦闘メイドプレアデスのシズ・デルタさんが座っていました。

プラチナブロンドをストレートにした髪型に、アイパッチを当てて片側だけのエメラルドの瞳。可愛い容姿をしているけど、作り物めいた能面のような視線は非常に凍えていた。

（エクレアさんを抱えてるけど、仲良しなのかなぁ）

エクレアさんは口元を抑え込まれてフガフガ言っていました。口封じの手慣れ感からして相当親しい間柄なのでしょう。

なんだか話しかけづらい人物だったので距離を取っていたのですがここは勇気を持って声をかけます。

「……あのー　デルタさん　そこ私の席なんですが～」

「知ってる」

シズさんは私の方を向きぼそっと呟くように答えました。いや知ってるって言われてもー困りましたねぇ。仕方ありません、エクレアさんはほっといて隣の席に行きましょう。

「エクレアさんのエサ、置いておきますね　では」
「……待って」
ガシッと腕を掴まれました。
「ななな何でしょう!?」
突然のことに私は思わず顔をひきつらせました。
能面無表情の自動人形は、何故か陽炎の如きオーラを漂わせていました
「……あなたとエクレアとは、どんな関係なのか教えて欲しい」
こいつもか、こいつもアルベドさんと同じパターンか！
「存じておられるとは思いますが、私は最近エクレアさんの下に配属されたただの部下ですよ？　なにもないですって」
エクレアさんの口元を握る力がだんだん強くなっていきます。ペンギンがキュウキュウと声を絞らせて何事か訴えようとしていますがスルーします
「……ならば一緒に食事を取ろうとしていたのはなぜか。　普段エクレアは食事の時、男性使用人に手伝ってもらっていた。　だが今日はいない」
「本日彼らは別の場所での清掃担当をしているんです。今日だけが特別ですって」

（……まずいですよ）

一般メイド人気ナンバーワンのシズ・デルタさんと胡散臭い新米メイドがイワトビペンギンを取り合って修羅場を催す様を、噂好きのメイドたちが放って置く訳ありません。ジリジリと好奇の視線が詰め寄ってきました

「シズちゃん頑張れ！」

「でもエクレアでしょ？　あの子が貰ってくれるんならむしろ…」

「…除け者同士、かえってお似合いの二人ではあるかもね」

「揃って寿退職してくれればいっそ」

「けどシズちゃんが～！」

うるせぇ！姦しいわ！　そっちは聞こえないようにボソボソ言ってるんでしょうけどコチトラ盗賊なんですよ！　バッチリ耳に入ってくんだかんな！

これだから女という生き物は好きになれません。うるさいだけならエクレアさんのほうが数倍マシだ。

エクレアさんからは「へるぷみー」というアイコンタクトが伝わってきました。メイド共の評判よりは、彼との関係が悪化することのほうが嫌でした。やれやれ、

世話のかかる上司ですこと。

〈口寄せ身代わりの術〉

シズ・デルタさんが抱えていたペンギンは仔猫ちゃんに姿を変えました。エクレアさんはと言うと私の手元の中にいます。シズさんは、何が起こったかわからないという具合に困惑していました。

軽く解説しておくと、この〈口寄せ身代わりの術〉は、〈口寄せの術〉という召喚魔法の忍術版スキルと、〈身代わりの術〉というスキルを併用して行うまぁまぁな高等テク。本来は集団戦で味方を守るのに使ったりします。

今回〈口寄せの術〉で召喚したモンスターの強さは第一位階相当。見た目が可愛い猫である以外は取り立てて見るところもありません。

ただ子猫を抱えるシズ・デルタさんはなかなか絵になったようで、野次馬をやっていたメイド達からは黄色い歓声が起こります。戸惑うシズさんを尻目に、我々はそそくさと食堂をあとにしました。

「やれやれ助かりました。　シズ・デルタにも困ったものだ」

「いいですよ別に　それより、ご飯どこで食べましょうか」

先程のＢ定食は、食堂に置いたまんまです。ぶっちゃけ私のスキルでこっそり取りに行くことも出来ない訳じゃないのですが、力を見せつけたくないので使わないに越したことはありません。

「それなら、副料理長がマスターをやっているバーにでも行きましょう　まぁあそこなら彼女も来ないでしょうし」

バーまであるんだナザリック。せっかくだし行ってみましょう

「さぁ私を運べ」

「はいはい」

◆

９階層　バー

アダルティな雰囲気を醸し出すバー。マスターの副料理長ことピッキーさんは、毒々しい見た目に反してカマーベストが妙に様になっています。カウンターには一人先客がおりました。

席にかける後ろ姿が、とある旧友のものと重なって見えました。しかしどうやら別人のようです。

「おや　エクレア君と、そしてそちらは珍しい客じゃないのかい？」
「シズ・デルタに絡まれてしまいましてね。食事のひとときを静かに過ごしたかったので、情けない話ですが彼女とともに逃げてきたのです」
「デミウルゴス様、お久しぶりでございます」
　第七階層守護者デミウルゴスさんです。彼は役職では上の立場にいるので、出会った際はこのようにきちんと挨拶をするようにとペストーニャさんから教わっていました。ナザリックのシモベの上下関係は形式的なものでしかありませんが、無視することも許されません。
「君もだいぶ淑女としての立ち振舞が様になってきたようだね、マタタビ君。
　しかし今はオフタイムだ。折角の機会なのですから、君と腹を割って話してみたいのだがよろしいかな？」
　これはこれは珍しいお誘いです。橙色のスーツとバーの独特な雰囲気が彼のダンディズムを相乗させ、悪魔であることを度外視すればあらゆる女性がうんと頷く魅力を持っていました。
「謹んで……　いや普通に了解しました」

「ああ　その話し方でかまわないとも　ところで君は酒を飲んだことはないだろう。良ければおすすめを紹介させてもらってもいいかい」

ご明察の通り、私は未成年なので飲酒はしたことありません。そういうのって見ただけでわかるもんなんですね。デミウルゴスさんは気遣いができるイイ男です。

「それじゃあお願いできますか？」

今の私は、見た目がJKでも真の姿が化け猫なので年齢的問題は皆無です。せっかく異世界にやってきたのですから、新たな発見の扉を開いてみてもいいんじゃないかな、ということで快く提案に承諾します

「マスター、彼女にドメーヌ・ドゥ・モントリューを」

お酒の名前はよくわかりませんが「ピッキー　私も彼女と同じものを」とエクレアさんも言っていますし、デミウルゴスさんのオーダーならなんとなく信用できる気がしました。

ピッキーさんは「ふむ、あれですな」と言って、そそくさと戸棚の名から一本のワインボトルを取り出しました。同じく戸棚から取り出されたグラス（よく手入れされているのが素人でもわかります）を2つ、カウンターに差し出します。

「どうぞ」
ピカピカなグラスが、ボトルから注がれる液体により一気にワインレッドに染まっていきます。ほのかに甘い香りがしました。
「いただきます」
普段食事でそんな挨拶をすることはないのですが、初めての体験ということで多少萎縮していたのでしょう。思わず呟いてしまいます。そんな私のウブな様子を、バーの皆さんは微笑ましく見守ってくれました。
グラスが唇に触れ、口の中にワインが流れ込んでいきます。三温糖のようなほんのりとした甘さと、蜂蜜のような風味がうっすら感じられました。でも甘すぎず、丁度よい具合です。私からはちょっと背伸びした感じの、大人の味がしました。
「お気に召していただけたかな？」
「とても美味しいです！」
「それは良かったよ。ところですこし話があるのだがいいかね？」
「どうしました？」
「先日の玉座の間での君の発言なのだが―」

「っ!?それが……一体？」

液体であるはずのワインが喉に詰まるような感覚をおぼえました。

あの話は、うっかりスタンダップしちゃったのを誤魔化すためのその場しのぎです。メイド生活の経験を活かし、それなりに痛いところを付いてやったはいいものの、後で思い出せば矛盾だらけのデタラメもいいところ。どうしてあの場が凌ぎきれたのか、今でも不思議なくらいです。

それを今ここで、ナザリック随一の知恵者に蒸し返されるなんて最悪もいいところ。

こうしてお酒を紹介してもらった身分としては、茶化して逃げ出すこともできないのです。なんと用意周到なことでしょう

「実に正論だ。感動させてもらったよ　君ほどアインズ様のことを重んじているものはナザリックにおいても居ないだろう」

え…？ナニイッテンノコイツ

※ここからデミウルゴスさんの、ちょっと長い一人演説が始まります。彼を責め

ないであげてください。後で聞いた話ですが、彼はどうやら若干酔っ払っていたようなのです。

「私は常々考えてきたよ。最後までお残りになってくださった慈悲深きアインズ様に対して、我々しもべはどのように忠義を尽くせば良いのかをね。

たとえば君も一般メイドに話していただろう。我が創造主、ウルベルト・アレイン・オードル様と、セバスの創造主であるたっち・みー様は幾度も衝突を起こしておられた。

不敬を承知でこのような話をさせていただきますが……もし御二方が対立なさったのであれば、間違いなくセバスはたっち様へ、私はウルベルト様の方へ付くこととなるでしょう。

これは言うまでもなくナザリックのしもべの間では共通認識です。シモベにとっての優先順位は己が主にこそ絶対だ。そういう意味では、君の言っていたことはどうしようもなく正しい。

ならば、アインズ様と他の御方が対立なさればナザリックはどうなるのでしょう

？　我々に与えられた使命は、ナザリックを守ること。しかし、最後までこの地に残ってくださった慈悲深き君にもしものことがあれば、……最悪ナザリックは内部分裂によって崩壊します

そして……不敬極まる考えであることは、重々承知の上で言わせてもらいますと、他の至高の御方がナザリックに帰還なされないほうが、ナザリックの安寧という意味では都合が良い。断っておきますが、あくまで»安寧»です

しかし、アインズ様は他の御方がこの地へ帰還してくることを強く望まれておいでです。付け加えるなら、すべてのシモベも同じ望みを抱いています。

だからこそ、この不安要素を誰かが声高に主張せねばならなかった。それは絶対支配者であるアインズ様が行うには少々分が悪い。もっと客観的な立場からの意見である必要があり、今回はそれが君だった。

おそらく事前にアインズ様と口裏を合わせられていたのでしょうね。君がナザリックに忠誠心を持つ存在ではないことは知っているが、反面アインズ様の為に汚れ役を請け負われる程の信頼関係がみてとれる。

君の正体を知っていた私には、不可解に思っていたことが一つありました。

御方と肩を並べたこともある程の人物が、何故メイドの役職へとまわされることとなったのでしょう。はじめはアルベドの姦計を疑いましたが、結局アインズ様はそれを良しとなさりました。少々気になり調べてみたところ、ペストーニャから興味深い話を伺ったのです

メイドというのは昔から、家事や掃除、礼儀作法を学ぶことができる職業であるため花嫁修業という意味合いを持っており、貴族などの上位階級の者も娘を王族の使用人として働かせることがあるのだとか

つまり君　―貴女は」

―アインズ様の許嫁であらせられるのではないかね。

・　・　・

話が長ぇから最後の部分しか聞いていませんでした。

「……あのぅ　冗談は嫌いなほうなんですが」

「うん、否定してくるであろうこと、予め予想できていたとも。君の現状の立場は、

ナザリックの統治において非常に重要だ。知る人間は少ないほうが良いだろうね。

というわけで、エクレアに副料理長。ペストーニャは知っているが、あなた方にもこの話は内密にしてもらいたい。よろしいかね？」

副料理長は了解の意を示すように頷きます。エクレアさんも同様です。私の意志はどこかに置いてきぼりを食らったようでした。

「承りました。しかし『花嫁修業』となれば彼女の指導にも腕がなるというものですな。ペストーニャとも相談して、彼女には本格的なカリキュラムを導入していかなければなりません。」

練習時間が増えるのはすごく嫌です。

「いや……ですから私は……」

「アルベドのことを気にしているのかい？

心配することはないさ、彼女のアインズ様を慕う気持ちも並外れたものではあるが、シャルティア同様に時折タカが外れてしまうことがあってね。アインズ様の正妻としては、問題が無いでもないんだ。」

何故こいつはアルベドさんより私を推すのでしょう。その部分になんとなく恣意

的なものを感じ取りました。
私は説得を諦めました。思い出すのはナザリックへの１５００名の大侵攻直後のことです。
アインズ・ウール・ゴウン側へ加担していた私は、戦後そのままの足でウルベルトさんからナザリック７階層へ招かれたのです。そして紹介されたのは、まだマネキンだった頃のデミウルゴスさん。
ウルベルトさんの『悪』の美学がふんだんに詰め込まれた自らのＮＰＣの話を30分ずーっと聞かされました。その時の彼の饒舌と馬耳東風ぶりは凄まじく、今のデミウルゴスさんの比でありませんでした。相当うざかったと記憶しているけど、そんな思い出すら今ではなんとなく眩しい気がした
「デミウルゴスさんって、如何にもウルベルトの子供って感じがしますよ」
うっかり敬称を付け忘れてしまいました。しかし、私が自然に零した一言は、彼の琴線に触れたようで、尚の事上機嫌になりました。
「その言葉、最上級の賛辞であると取らせていただきます」
褒めてねーよ　　って言うのは、果たして無粋でしょうか？　案外そっちの

ほうが嬉しかったりして、なんて私は考えました

◆

マタタビ私室

「ということがあったんですよ」

「思いのほか随分と楽しそうね。　ところであなた、本当に許嫁であったりしないでしょうね。もしそうなったら……」

「いやいやアルベドさんにまで勘違いされたらホント敵いませんからやめてくださいよ。大体私をメイドにしたのはアルベドさんでしょ？」

「そそそそうよね　まさかあなたがアインズ様となんて……くふふふふ」

アルベドさんは、ガチガチ食器を震わせながらゆっくりお茶をすすって言いました。相変わらずこちらへの疑惑は晴れないようです。

「ところであなたの人間形態の外装データは、ひょっとして至高の御方から賜ったものでなくて？」

「はい、この外装はホワイトブリム様から頂いたものですよ。確かシーゼットって

いう娘のボツ案だとかなんとか」
「なるほど、シーゼットね」
　どうやら知っている方のようです。ま、知っても気まずいだけだから興味も沸かないけどね。
「でも安心したわ　案外エクレアとも上手くやれているようね　彼がうまくやれる相手はあなたくらいかもしれないわ」
「そーなんですかね……」
　アインズ・ウール・ゴウンの簒奪を公言している彼はＮＰＣから疎まれています。つまりそんなやつと仲良くできるのは、アインズ・ウール・ゴウンに忠誠しない私くらい、と暗に言われているようです。
　ふと思いました
「ねぇアルベドさん　私ってナザリックにいてもいいのかな」
「どうしたの？急にそんなこと言って」
「私にはＡＯＧに対する帰属心も忠誠心も全くありません。
　ＡＯＧの雇われ傭兵にすぎない私が、こうしてナザリックの忠臣達に混ざりこん

でいるのは間違ってるんじゃないかなって」

もとはと言えば、シャルティアさんが「従属の間違いじゃありんせん？」と凄んできたのにビビってメイドに就職した次第でした。　今思えば食客としてナザリックに転がり込むだけでよかったのに、どうしてややこしい話になってしまったのでしょう。

「確かにあなたに忠誠心はないけれど、あなたなりにアインズ様のことを思いやっているのではなくて？

先日のこともそうだし、アインズ様に頼み込んで今から食客となっても良いのに遠慮しているでしょう？おそらくあなたの頼みならアインズ様は快く快諾してくださるのでしょうけど、そうなればあなたの立場が変動することに疑念を抱くシモベが現れる。

それを気にしているのよね、違うかしら？」

「まぁ、はい。　別にそうなったからって、アインズ様への忠誠が揺らぐことなんてないってわかってるんですけど、甘えてばかりじゃいられんって思って」

アルベドさんは続けた

「あなたの言うとおりナザリックに忠誠を誓わないシモベがいるという事実は、私を含め多くのシモベが眉をひそめるでしょう

でもアインズ様を愛する一人の女として言わせてもらうならば、あなたの心遣いはとても素晴らしいものだと思う

あなたの友人として言わせてもらうならば、あなたにはここにいて欲しい……なんてね、うふふ」

「……ありがとう」

ナザリックで必要とされていない自分を思うと辛くなる。

カルネ村のことがあって外の世界を知ってから、ナザリックから逃げ出して異世界生活するのも悪くないかもって思うことがあった。

モモンガさんは追跡しようとするだろうけど、私のスキルならきっと逃げ切れる。彼は本来私なんかに執着するべきではないのだ。

でも、アルベドさんが許してくれるなら、私はまだここにいていいかもしれない。だから私はナザリックに居続ける。

それがたとえ嘘だとしても、彼女になら騙されても嬉しい

ウルベルトとの関係上、オリ主はデミウルゴスと好相性です。
オリ主とアインズ様は結ばれません
＊ねつ造設定
・清掃に関する科学知識を知るエクレア
・バーに現実の酒が置いてあること
・マタタビの忍術スキル
・ナザリックのトイレについて
誤字脱字、気に食わぬところなどがあればコメントお願いします

肉球に埋もれし魔爪

辺境集落への出向

誤字脱字報告して下さった方々、どうもありがとうございます。作者の国語力が追いついて、いつかはミス無しで出せるといいな。

これやって残り2話で書き溜が切れます。そうなったら更新速度が遅くなります。

城塞都市エ・ランテルのとある宿屋〔モモンガ〕

エ・ランテルに着くなり冒険者組合で登録を済ませてきたアインズと戦闘メイドナーベラル。先輩冒険者に絡まれたりもしたが難なく退き、現在宿屋にて今後の打

ち合わせをおこなっていた。

なぜ二人がわざわざエ・ランテルに赴いて冒険者になろうとしたのか。理由は2つある。一つはこの世界独自の慣習や一般常識を生身で体感するため。二つ目は、支配者ロールに疲れたモモンガのストレス発散のためだった。

「冒険者……予想以上に夢のない仕事だな」

組合にて受付嬢から伺った業務説明によると、冒険者の仕事は要約すれば「対モンスター用の傭兵」であるらしい。

「冒険」という言葉にユグドラシル的な未知への探求を期待していたアインズにとっては非常につまらない肩透かしだった。冒険者の起源はスレイン法国にあるらしいので、この世俗とズレた紛らわしい名前も六大神とやらのネーミングかも知れない

「陽光聖典とやらの情報から、六大神が数百年前に転移してきたユグドラシルプレイヤーの可能性が非常に高いからな。」

現在のところナザリックの捕虜としている陽光聖典は、「三回質問に答えたら死ぬ」というペナルティがかけられており、情報の引き出しに非常に苦労している。

事前にマタタビからの情報がなければ一番情報を持っているであろう隊長の男を真っ先に殺してしまったであろうから、彼女の功績は大きい。
お陰で順調に情報収集ができているため、この世界での情勢にもかなり迫れてきている。
「御身を惑わすなど、たとえ意図がなかろうとも無礼極まりません」
「落ち着け、ナーベよ。たかが名前の一つくらいだろう」
アインズ個人としては、気を使わないで済むマタタビと二人だけで行きたかったのだが、それではマズイとマタタビが言ってきたのだ。
アインズは《メッセージ/伝言》で彼女と相談した時のことを思い出す

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『二人きりで外になんて……NPCの皆様方相手にそんな信頼関係を見せつけたら、私がアインズ様の妃だと勘違いされちゃいますよ？』
「へ？」
『9階層のバーに飲みに行ったとき、デミウルゴスさんがそんな感じで勘違いし

てました。

至高の41人の居住区である9階層スイートルームを与えられた一般メイドという不自然な待遇。そして私が元々、ナインズ・オウン・ゴール所属でありＡＯＧに協力していたという経歴。

結果、デミウルゴスさんが辿り着いた結論は『花嫁修業のためメイドとして礼儀作法を学んでいる』ということらしいです。そんな風習があったのは初耳でしたが『

「えー!?　ホントですかそれ…正直さっき教えてもらった世界征服よりインパクト大きいんですが……

それでどうなったんです？その話は」

『あの人の思い込みが強過ぎて、説得したけどダメでした。幸い口封じの方はできたんですけど、

もしこんな話が他の一般メイド共にバレれば、肉を貪るハイエナの如く喰らいついてはあっという間に拡散、既成事実化してしまうでしょう』

「あぁそれで二人で行くのがダメなのですか。

１００レベルの随伴がいればアルベドとかにも反対されないと思ったんですけ

ど。」

『いっそアルベドさんを連れてっては？

人間蔑視なんて、ナザリックのＮＰＣではほとんど共通していますよ』

「角や翼の見た目も人間社会ではかなり目立つし、彼女にはナザリックの管理運営を任せたいから外には出せません。ですから今回の供はプレアデスのいずれかにしようと思います」

『仕方ありませんね。アルベドさんには『愛する殿方の家を守るのは妻の役目』とでも言っときますよ。多分、納得してくれるんじゃないかな？』

「……妙にアルベドを推しますね」

『設定変えたんだから責任取れーなんて無責任なことは言いませんが、アインズ様も、勘違いで私と結婚するより彼女を嫁に取ったほうがマシでしょう？

まぁこれもただの身勝手な保身ですけど』

「さいですか。じゃあ随伴してくれるＮＰＣを選びたいのですが、差し当たってナーベラルかルプスレギナのどっちかを考えているんですけど、どっちがいいと思いますか？　メイドとして働いているマタタビさんの意見を聞きたいです」

『うーん　二人のどっちって言われると悩みますねぇ。人間への対応力という意味ではルプスレギナさんに軍配が上がりますが、彼女には少し問題があってですね……』

「問題ですか？」

『なんていうか、ルプスレギナさんは、るし☆ふぁーさんみたいに、自分の快楽を優先しちゃうところがあるんです。　ナーベラルさんは、若干ポンコツだし人間蔑視が凄まじいけど、基本的には従順で致命的なこともありません。アインズ様はどっちがいいですか？』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

アインズはナーベラルの方を向いた。

対人コミュニケーションに優れるルプスレギナにすれば良かったのではないか？と後悔する気持ちがなくはない。しかし、「るし☆ふぁーみたい」という評価から、彼女が致命的な失態をする可能性も考えられる気がした。

ナーベラル・ガンマは、言ってはなんだがかなりのポンコツだ。物覚えは悪いし

人間を虫けら呼ばわりしてしまうところがあるが、それでも自分に対して忠実に動いてくれている。

「アインズ様、如何なさいましたか」

「少し考え事をしていた。……それと今の私はモモン、お前は冒険者仲間のナーベだ」

「承知しましたモモン様」

「モモンだ」

「はい、モモンさーん」

「ちょっと間抜けだが……まあよい」

最終的にナーベラルを連れて行くことを決定したのはアインズだ。後悔するかどうかは彼女たちの今後の働きを自分の目で見て考えよう、そう決心したアインズであった。

=================================

同時刻　カルネ村〔マタタビ〕

ナザリック地下大墳墓から１０ｋｍ程のところにあるカルネ村。
国王直轄領であるため王国では比較的徴税が軽いのと、森の賢王という魔獣のテリトリー付近であるため襲ってくるモンスターが少ないこと以外は取り立てて見るところもない、そんな程度の村である。
先日の帝国騎士（偽）の襲撃により村の人口が激減したため、人手が足りず農作業をこなす村人たちはどことなく忙しそうであった。そしてその様を眺めるのが、最近メイド服が様になり始めてきた新人メイドのマタタビだった。
彼女は天候影響無効のデータクリスタルが組み込まれたパラソルテーブルの座席に淑女然と腰掛けて飲み物片手に読書をしていた。その優雅な佇まいには、１週間みっちりメイド長に叩き込まれた礼儀作法が既に染み付いていた。
この上達速度のからくりは、〈シノビ〉の職業スキルの一つ〈影分身の術〉にある。自身の思考形態と25％の能力値を持つ分身体を発生させるこのスキルは、実験の結果、転移後の世界では解除後に経験値をオリジナルにフィードバックする効果があると判明した。

つまるところ、分身体を大量（体数制限はあるが）に作って作法の練習をすればとてつもない練習効率を得られるということである。上司にとやかく言われるのを嫌った彼女がなるたけ早く技術習得する手段を考えた成果だった。

ところでマタタビがどうしてここにいるのかというと、それはアインズに週三回のペースでカルネ村に視察に向かうよう命じられたからだ。

「入社して１週間で辺鄙な村に出向とか、ナザリックブラックすぎアハハハ」

などと彼女はふざけて呟いたが視察とは名ばかりで、これはアインズがマタタビに休暇を与えるための口実であった。こうでもしないとナザリックのシモベという立場ではおいそれと休暇を取ることもかなわないからであり、マタタビ自身重々承知している。

以前アインズに冒険者となって共に羽根を伸ばさないかと誘いを受けたが、結婚関連の面倒事が増える（のと、単純に面倒くさい）ので遠慮したため代案としてこのような手段を取ることとなったのだった。

日がなジュースを片手に少女漫画を読みふける。リアルの世界では逆立ちしてもありえない職場環境を堪能していたとき、バッシブスキルの〈読心感知〉によって

何者かの悪意が近づいてきていることに気づいた。
「……ルプスレギナさん、不可視化で近づいて何かイタズラしようとすんのやめてください」
「あちゃー、バレちまったっすか。プレアデスの他の娘たちはこれで引っかかるんすけどね。やっぱマタちゃんは一筋縄ではいかないっすわ」
「その下半身みたいなあだ名もやめてくださいね」
接近者の正体は、戦闘メイドプレアデス：ルプスレギナ・ベータだった。
表面上は太陽の如き笑顔で接しているが、内心マタタビへの敵意で満ちていた。マタタビと同じくカルネ村への監視が命じられている彼女は、マタタビのことを自身の仕事の領分を奪っている存在として疎ましく感じているらしい。
「えー、折角親睦を深めようと二三日の間ずーっと考えてたんすよ、このあだ名。」
「それって単に暇なだけでしょう。」
「仕方ないじゃないっすか。アインズ様に監視を命じられたとはいえこの村って何にもないんすから。殺戮の一つでも起これば面白いんすけどね～」
マタタビは内心嫌な顔をしたが、冷静な表情であろうと努める。

「だからって不可視化の魔法使って悪戯するのもどうかと思いますけども。それに暇だったら村近郊の弱い魔獣相手にでも無双してればいいでしょう？」

ゲーマー思考で言えば雑魚敵無双というのはそれなりに快感である。体感覚が現実化されているのだからマタタビからすれば尚の事だ。

「ちっちっちっ、私の趣味を全然わかってないっすねーマタちゃんは。悲鳴が飛び交い恐怖に慄きながら絶望していく相手をじっくりと嬲るからこそ殺戮は面白いんすよ。動物本能しかない雑魚敵とかを虐めまくるのは趣味じゃないっす。」

マタタビにとっては殺戮の嗜好なんて聞いてて不快な話だ。ルプスレギナもそれを承知しているからこそ、そんな話を自慢げに語るのであった。

「ふーん」

ルプスレギナはマタタビに何かと嫌がらせをしようとしているが、それら全てはマタタビ相手に通用するものではなかった。

ただ、悪意に敏感なマタタビにとって、かまってくるルプスレギナの存在そのものがひたすら鬱陶しかった。

冒険者モモンの随伴相談を受けたときも、自分がルプスレギナのことを正直に話

してしまえば慎重派のアインズがナーベラルを選ぶだろうと予測していたためなお座りが悪い。事実を知ればルプスレギナはマタタビをさらに敵視するだろうと思われたからだ。

（不運な人事、というか私が自分の待遇をアインズ様に話してないから当然といえば当然だよね。万一バレたら彼の気苦労を増やしてしまうし、アルベドさんに火の粉がかかるのはまずいからなぁ）

アルベドがマタタビをメイドたちの間で孤立させようと画策していることは、こっそり彼女の執務室に行ったときに気づいていた。彼女の悪意は端から解っていたことだったので、ショックというより合点がついたような感じだった。

表面上は取り繕っているが、モモンガとマタタビは折り合いが悪い。それに勘付いたからこそ、アルベドは隙きを突いたのだ。

結果どんな形にしても、この異世界に来てマタタビを初めて受け入れてくれたのは、彼女にとってアルベドに違いなかったのだった。だからこそ、マタタビはアルベドの悪意は黙認し続けていた。

（ルプスレギナさんは駄目だけどね）

アルベドと違い、彼女の悪意は明確な敵意であって、マタタビを排除しようとするものだ。つまり暗に、アインズの人事をルプスレギナが不満に感じているということでもある。

（ブラック企業出身だし、職場でいじめとか絶対アインズ様ショック受けるだろうな。）

マタタビ自身は嫌になったらいつでも逃げられる気でいた。しかし、真実を知ったアインズが心を痛める姿を想像して眉をしかめる。彼にはそんな表情をして欲しくないと思った。

（何か仕返しして二度とちょっかい出さないようにした方がいいかな）

どんな方法が良いか、直接痛めつけるのではなくて、屈辱を与える系統が良いだろうか。サディストは受けにとことん弱い。

良い方法が閃いた。マタタビは突然ルプスレギナに向かって言った。

「すいません、ちょっと私お手洗いに行くのでついてこないで下さい」

あからさまな嘘である。

「なにいってんすか？」

しかしマタタビはユグドラシル最高クラスの隠形スキルによって姿を消してしまった。普段マタタビは自身の力量を警戒されないように、このような隠形の発動などは極力控えてきたのだが、今回は特別だった。

「居なくなっちまったすね、つまんないっす」

マタタビは人狼の種族スキルによる感知にもさっぱり引っかからなくなったようだ。

ルプスレギナは殺戮に関する話でマタタビが、実は嫌なのに強がって無関心ぶっていたのをちゃんと勘付いていた。

嘘の理由は当然ルプスレギナにあるだろう。楽しみが逃げ出してしまうのは少し残念でもある。

だがつまらないと言う割に、彼女の胸のうちには相手を追い出せたことへの達成感も確かにあった。

そういえばと思い出し、ルプスレギナは先ほどマタタビが座っていたパラソル

テーブルを見やった。飲みかけのジュースと少女漫画の横に、キャンディやらチョコレートやらが入っているお菓子の入りの皿を見つけた。

ルプスレギナはプレゼントを貰った子供のような無邪気な笑顔を浮かべる。その実、邪気に満ち満ちた笑顔でもある。これを彼女は、自身のささやかな勝利の報酬にしようと身勝手に決めた。マタタビも当分戻って来ないだろう。

ルプスレギナは躊躇なくお菓子に手を伸ばす。キャンディの包みを開き、自分の口の中に放り込んだ。

刹那、彼女の意識はそこで途絶えた。

「警戒心なさ過ぎ」

一部始終を眺めていたマタタビは、自身にかけていた隠形を解除し、いびきを嗅いてぐっすり眠っているルプスレギナを改めて眺めた。

催眠効果のあるお菓子をテーブルに配置しただけなのだが、あっさり引っかかったルプスレギナに若干引いていた。上手くいくにしても、もうちょっと考えると予想していたのだ。

何はともかく、これでルプスレギナはダメージを与えない限り数分は目覚めない。ここから弱体化系統の魔法をかけまくるのがユグドラシルでの一般的な催眠の使い方である。だがマタタビがここで取り出したのはサインペン。

それによってルプスレギナのおでこに『駄犬』と書いた。丁寧に異世界文字と日本語の両方で。

彼女が起きた頃には村人やナザリックにて大恥を書くこととなるだろう。顔色と髪色を同化させて顔中真っ赤になるルプスレギナを思い浮かべ、マタタビは僅かに微笑んだ。

しかしこのままにしているのもどうかと思い、崩れ落ちたルプスレギナを起こさないよう慎重に椅子に腰掛けさせる。そしてマタタビはその場を後にした。

ちなみに起き上がったルプスレギナは、机に置いてあった菓子を再び食べて眠るのを、皿の菓子が尽きるまで延々繰り返すことになる。期せずして文字通り一杯食わせることとなるのだが、マタタビには知る由もなかった。

ルプスレギナが寝ぼけて顔をテーブルに擦り付けるうちに、マッキーのインクは

落ちて『駄犬』の文言は次第に読解不能となっていくのである。

◆◇◆

ルプスレギナを片したマタタビは、機嫌よくスキップで村の周りを歩き回った。

何もなかった村の外周には木の柵が置かれている。村人たちは集まってゴブリンたちから護身法を学んでいた。先日の襲撃が彼らの意識を一変させたのは間違いなかった。

収穫時が近いようで、普通に農作業に従事するものもいる。その中に見知った姿があったので声をかけた。

「こんにちはエンリさん」

「ゴウン様の娘さ……お嬢様ですか⁉　どうしてこちらに」

（あぁ、そういえばアルベドさんの茶番で娘ってことになってたんだっけ）

拙い口調でお嬢様と言い直したのはエンリ・エモット。騎士襲われていたところがアインズの目に止まり、奇跡的に助かった強運の持ち主だ。

彼から賜った〈ゴブリン将軍の角笛〉で召喚したゴブリンは、パワーデフレの激しい異世界ではそこそこの強さに位置するらしい。それにより現在の彼女は実質的に村長的なポジションに収まっていた。本人は断固否定しているが

「普通にマタタビでいいよ。私達、同い年くらいでしょう？」

人間化スキルによって変身したマタタビの外見年齢は16歳程度。リアルを換算した実年齢ではもう少し上なのだが、エンリの年齢に合わせてついた虚言だ。

「わか、うん　なんかこう言うの馴れないけど、よろしくねマタタビ」

現状では互いに同性の知り合いは少ない。二人は軽く握手をしてからなんとなしに話しだした。

「なんかマタタビって不思議な感じ。

あんま詳しくないけど礼儀作法とかしっかりしてるぽいし、すごーく上流階級だってことはわかるけど、全然気取った感じがしないのね。」

エンリの何気ない洞察にマタタビは冷や汗をかいた。彼女は上流階級……な訳ないのだ。

「うんまぁ……どっちかって言えばウチは引きこもり気質だからね。礼儀作法はうるさく言われてるから結構頑張ったの。」
「やっぱりゴウン様の家って厳格なんだねぇ！私は普通の村娘だからそういうのよくわかんないけど、ゴウン様とかすっごい厳しかったり？アルベドさんは絶対そうだってわかるけど」
（なんで貴方は私が答えたくないところをピンポイントで捉えられるのでしょう。これがいわゆるタレントってやつですか？そうなのですか？）
「あーうん そういうのはリョウシンより使用人の人たちがすごいの。私ってあんまり使用人たちの受けが良くないから、必要以上にスパルタされちゃってさ」
「大変なんだー」
マタタビはどうにか話題をそらそうとする。
「村の生活のほうがよっぽどだと思うよ。農作業なんて私できるかなぁ？すぐ逃げ出しちゃいそうだよ」
「ふーん」
ねぇ、と続けてエンリは言った。

「なにか隠してない？　というのもゴメン、なんかマタタビってゴウン様の話になると途端歯切れ悪くなるし、こないだもちょっと仲悪そうだったけど」
（なぜばれた!?）
「えっとそれは……」
「ごめんね？　話したばっかの人にこんなこと聞くのは間違ってる気がするけど、私の両親、ちゃんと親孝行する前に……いなくなっちゃったから、そういうすれ違いがあったらほっとけなくて」
（そんなヘビーな話を偽親子相手にされてもどうしろと？）
両親をなくしたばかりのエンリにとって、親子関係の不和など見える限りではあって欲しくなかったのだ。そしてエンリの直感はかなり鋭く的を得ていた。マタタビがアインズと若干気まずいのは事実である。
あれからアインズとは《メッセージ/伝言》で何度か話をしたが、元々仲の良い方ではないため結果的に気まずいことのほうが多かった。
エンリの直感は正しかったが、状況認識のほうがどうしようもなく間違っていた。
（あはは、悪意よりも、勘違いからくる善意のほうが質が悪いなんてね）

マタタビは、先日のバーでのデミウルゴスとのことを思い出す。彼らの厄介さに比べたら、ルプスレギナやアルベドなんてかわいいもんだとシミジミ思った。

「別に大したことない話だよ。

トウサンは今の家族よりもいなくなった友達のことばっか気にしてるんです。カアサンが哀れでなりませんが、本人が重々承知してるっていうんだから救いようがない、ただそれだけ」

マタタビはいかにもどうでも良さそうな冷めた調子で、その場しのぎに虚実織り交ぜた話をする。事実本人にはどうでも良いのだが、かえって無関心な雰囲気が作り話に真実味を吹き込むことになるのを彼女は気づかない。

「ゴウン様が最近まで引きこもってたってそういう……」

アインズが友人のことが忘れられずに引きこもっていたのだと、エンリは考えたようだった。

的はずれなようでいてその実妙に的を射るエンリの直感に、マタタビは吹き出しそうになるのをこらえた。こらえきれずに口元が緩んでしまうのだが、それをエンリは苦笑いだと納得する。

「面倒なのでこれあんまり人に言わないでくださいね？」
マタタビはこれ以上勘違いが加速するのを防ごうと、件のアルベドと同じ台詞回しを使った。なんだか聞いてはいけないようなアインズの人間的一面を知ってしまった気になったエンリは、頭を縦に振って頷く。
彼女は非常に同情的な眼差しをマタタビに向けていた。
その眼差しが鬱陶しいため、マタタビはまた違った話題を持ち出した。
「そういえばこの村に少しモンスターがやってきてるようですけど、今までゴブリンが居なかった時はどうしてたんです？」
「この村は森の賢王という魔物の住処の近くだから、あまり他のモンスターは寄ってこなかったの。もしも来たときにはラッチモンさんっていう野伏の人が対処してきたわ。」
「ラッチモンさんは見たけど、あの量の魔物をやっつけるなんて本当にできるの？
馬鹿にするつもりじゃないけど、あの調子で村に来る魔物をすべて追い払えるとは思えないよ」
マタタビの感知能力は秀でている。村周囲までの敵感知であれば造作も無いこと

だった。
　そしてマタタビが戦士長とも立ち会いすることができる程度の実力者だとエンリは知っていたので、マタタビの言葉を完璧に誤りだとは考えられなかった。
「え？」
「うん？今まではそれで大丈夫だったてことかな。なんか最近変わったのかも」
「それって大丈夫なの？今はゴウン様から賜ったこの角笛があるけど」
「しっかり外周の守りを固くできれば、ゴブリン達もいるし今のところ余裕だよ。ただ、ウチから外周調査で派遣している人も今のところは派手にやってるわけじゃないし、生態系を崩すとかありえないと思うんだけどねぇ。もし他の要因があるなら詳しく調査したほうが良いかも。」
　階層守護者アウラがトブの大森林の調査を命じられていることは、カルネ村に在留しているルプスレギナとマタタビに予め知らされている。
　そしてアウラが入り込む前後で村の周囲を感知したことのあるマタタビは、森林の様子があまり変わっていないことを知っていた。
（つまり変化はナザリックがやってくる以前からのものってことだよね）

「ごめんねもう時間なの。またねエンリ　私はこれくらいで」
「うん、ゴウン様にもよろしく言っておいてね」
二人は互いに手を降って別れた。別れた直後、マタタビは再度隠形によって姿を消した。
さてこれからどうしようかと、マタタビは今後の予定を考えた。ルプスレギナがここにいることを考えれば、カルネ村で羽根を伸ばすことなどもとより不可能である。ならば別の場所での暇つぶしが必要だった。
（さしあたって、トブの大森林でもほっつき歩いてみますかね。こういうのはどっちかって言うと、アインズ様の領分だけど）
本来マタタビはユグドラシルで言われているような冒険の類があまり好きではなかった。とはいえルプスレギナの居る村に残り続ける気にもならなかったので消去法としてそうすることを選ぶ。
実際のところこれから彼女が行おうとしていることのほうが、冒険者になったアインズよりも『冒険』らしいという具合になるのだが、これまた彼女には知る由もない。

（一般メイドからは不穏分子、デミウルゴスさんやエクレアさんからは嫁候補、村人からは魔王の娘って、私は一体何になりたいんだろうか）

自身に向けられたバリエーション豊かなレッテルに、マタタビは頭が痛くなる感じがした。彼女の状況をキチンと理解しているのは、良くも悪くもアルベドだけである。

（ともすれば、アインズ様よりは幾分マシかなぁ）

自身がアインズの理解者であることをすっかり失念しながら、彼女は思った。

作者はナザリックのメイドが特別嫌いなわけじゃないんだけど、オリ主のポジション的にアンチな表現になってしまうのが悲しい。やっぱキャラ再現って大変ですね。つい話の都合で動かしてしまうから不自然になる。

※独自設定

・ルプスレギナがカルネ村に来るのが原作より早いかも

・影分身の経験値効率はNA●UT●のパクリです

感想、気に食わぬところ、誤字脱字があったらコメントお願いします。

精神年齢詐称

毎度誤字報告してくださった方、どうもありがとうございます。
今度こそ誤字が起きないように見直し数回やりました。
今度こそいけるはずだ間違い無い（フラグ）

【マタタビの至高の41人大百科】
No・4：ぶくぶく茶釜
ぶくぶく茶釜は、豪胆ながらも気遣いがよく出来る姉御肌な印象だ。弟を相手にする時なんかでたまに裏表ある人なのだが、そこまで悪い人ではなかっただろう。しかし他人の気遣いが苦手だったマタタビは彼女にややキツく当たってしまうことがあった。次第にぶくぶく茶釜の方も、マタタビに構ってやることはなくなった。多分、それもマタタビへの気遣いなのだろうと思われた。
◇

トブの大森林〈マタタビ〉

トブの大森林の外周部分に立った私は気配遮断のスキルを解除した。すると、こちら目掛けて猛スピードでやってくる森の探索者。

彼女は侵入者が私のことだとわかった途端、鬼気迫る表情を引っ込め吐き捨てるように言った。

「……誰かと思ったらあんたか」

「どうもこんにちは！アウラ・ベラ・フィオーラ様」

学生服のスカートをちょこっとつまみ上げ、先言後礼に礼儀正しくお辞儀をする。

これまでメイド長から何度も注意されながらも頑張って習得した礼儀作法は、我ながら完璧な出来だった。ところが相手は嫌なものでも見たように顔をしかめる。

「気色悪いからアウラでいいよ」

「アッハ　ワッカリマシター」

どうやらお気に召さなかったよう。堅苦しいのが嫌いなのか、それとも私が相手だから？どっちにしてもやるせない。

アインズ様が支配者ポーズを必死に考えてノートに記しているのはこっそり覗いていたから知っているけど、メイド長による教練や影分身による効率強化によって猛練習している私のほうが努力は上だ。

なのにこの格差である。

やってられっかという気分になるが、おくびにも出さぬようポーカーフェイスは崩さない。

「で、こんなところに何の用？　あんたはメイドじゃなかったけ」

アウラはどうやら私がアインズ様の命でカルネ村に来ていることは知らないようだった。

元サラリーマンとはいえアインズ様の情報管理能力にも限界があるのだろう。冒険者になる際、執務はアルベドさんに引き継がれることになったので今後はこういうすれ違いも減るだろうと思われた。

「ルプスレギナと一緒にカルネ村へやって来たんですよ。

村人の話によると、カルネ村周辺のモンスターの生態系が我々がやってくる以前から少しずつ変化しているようでして。それでアウラならなんか知っているのかな

と～思って訪ねてきた次第です」

実際は、ルプスレギナの居るカルネ村から距離を取るための口実にすぎない。

デミウルゴスさんによると、この間の玉座の間での私の振る舞いは、シモベの中での好感度を著しく上げたらしい。とは言えまだまだ胡散臭さは拭いきれぬようで、アウラは怪訝そうに私を見つめてくる。

「ふーん、でもそれってあたしじゃなくてアルベドとかに報告する内容じゃないの？」

本来異なる部署同士が情報を共有する場合は、無用な混乱を避けるために管理部門を中継ぎして行うのが常識である。つまり私がこうしてアウラを直接尋ねるのは社会常識的にガッツリアウト。

とはいえ言い訳を考えずやってくる程私も馬鹿ではない。

「しかし、私とルプスレギナがカルネ村に在留していることがアウラさんに伝わっていないことから分かる通り、出来て日の浅いナザリックの情報管理システムではまだまだ穴が多い。

ですから重要な案件はなるべく直接話しておいた方が良いかなーと思ったんで

す」

「そういうもんなのかなー」

「まぁ、あんまり褒められた方法ではないですねぇ」

私がメイド新人であるのと同様、本来防衛の為に作られたＮＰＣのアウラも外の仕事は初心である。いくら指揮管理に優れたぶくぶく茶釜のＮＰＣとはいえ、経験不足で幼いアウラを丸め込むのはあまり難しくなかった。

もっとも結局彼女は最後まで煮え切らない様子だったが、ある意味正しい反応だ。

「何か心当たりはありますか？」

多少ごまかしを持ち越したまま、私は大森林の生態系についてを彼女に尋ねた。

すると意外にも親切に色々と教えてくれた。

「今んところナザリックを中心にして調査範囲を広げているところだけど、結構な種族数が生息してるから、自然淘汰によってあっさり環境が変化することもあるんじゃないかなぁ。

あるいはまだ調査してない地域に原因があるのかもしれないけど。」

「どんなのが生息してるんです？」

「戦闘力皆無な小動物がほとんど。確か悪霊犬、ゴブリン、オーガ、トロールにリザードマンなんかの亜人種もいる。トードマンっていうユグドラシルじゃ聞かないのも居たわ。

強いのでもレベル30くらいで、銀色の良い毛皮持ってるのが一匹、あとはウォー・トロールとショボい不可視化を使うナーガかな。」

「その良い毛皮ってのは多分、カルネ村で森の賢王って呼ばれてる奴でしょうかね」

「あいつ？……あいつが賢王ねぇ、慈悲深く叡智に富むアインズ様にこそ相応しい称号でしょ。やっぱ人間共の目は節穴よね。そう思わない？」

（うわぁ出た人間蔑視のナザリック魂。）

「そうですねぇ無知というものは、かくも罪深きことでありますなぁアハハ」

「なんか声上ずってない？」

「気のせいっすよ」

何故か唐突に某赤髪メイドの口調が移った。

「そ、別にどうでもいいけど」

興味の色をなくしたことに、私は内心胸をなでおろした。

アウラと接していると、言動から滲み出る隙の無さが非常に際立つ。
アインズ様と共にいるときは見た目相応の無邪気さを表すのだが、妹のマーレさんを始めとした他のＮＰＣ等と接するときには今のような大人びた具合になる。
周囲が年上ばかりの環境だからこんな人格形成がなされたのだろうか。いやそもそも彼女の人格が誕生したのはついこの間の筈だ。情報のない現在、このあたりは考えても不毛だろう。
「あとはまだ見つけてはいないけど、この規模の森林ならドライアードくらいいると思うよ。円周上に調査範囲を少しずつ広げてるから森林全体まで把握するにはもうちょっと時間がかかるね」
「そうですか もしこっちの村に何か悪影響のあるものが潜んでたら困りますね
私はタマにしか来ないし、プレアデスのルプスレギナで手に負えないレベルの魔物とかいたらちょっとマズイんです」
「そんなに強いのいなかったけどなぁ～。
あ、でも思い出した。土地の栄養は十分なのに木々が枯れてるところがあったんだ。原因不明だし調査範囲に入ってないから放置してたけど、あそこなら何かいる

かもしれないね」
「う～ん気になるなぁ。行ってみてもいい？」
ダメ元の要求は当然アウラの機嫌を損ねる事となる。
「やだよ！この森林の調査はあたしがアインズ様から直々に与えられた勅命なのよ。それをあんたなんかに奪われてたまるか！」
「ですよねぇ。ダメ元ですあんまりお気を悪くしないで」
「でもあんたさぁ、６階層でやったのと同じようにあたしの目を誤魔化してコッソリ森林に入っていくことも出来んじゃないの？」
「……あーうんまぁ、できるのかなぁ？」
ぶっちゃけやる気満々だったのだがあっさり看破されて焦る。
ナザリック内で盗賊特化の私の存在を探知できるのは情報魔法特化ビルドであるアルベドさんの姉だけだろう。
職業を幾らかビーストテイマーに割り振ってるアウラ位なら余裕で誤魔化せるのだ。
「それじゃあたしから許可を取ろうが取るまいが変わんないじゃない。アホらし

いいよわかったわ。入りたいなら好きにすれば？」
「いいんですか？」
「ただ好き勝手ウロチョロされるのもイヤだし、あたしもついていくわ」
「……えぇ」
「なによなんか文句あんの？」
あれれぇーおかしいぞぉ？なんで目は子供なのに頭脳は大人なのでしょう。
設定で実は76歳だったからか、それとも茶釜のＮＰＣだからなのか。実際どうなんだろう。

◇

（アウラ・ベラ・フィオーラ）

アウラのマタタビに対する印象は「得体の知れない気色悪い奴」だ。
６階層のアンフィテアトルムで彼女が自己紹介した際、協力関係と言おうとしたところをシャルティアの剣幕に押されて従属関係と言い直したことは、シャルティア以外に見逃した者はいなかった。

彼女が自分たちと同じシモベでないことは明白である一方、絶対支配者アインズが彼女の従属について不問にしている為、シモベ達もまたマタタビへの追求は許されていないのが現状であった。

経歴不明で話をしたこともないため得体の知れない感が強く、マタタビの存在はただただ不気味であった。

そんな彼女とのファーストコンタクトがアウラの縄張りへの侵入である。

能力が能力だけに、全面的に信頼できるヤツのほうがどうかしている。

こんなやつを自身の領域にのさばらせる訳にはいかないが、かといって秘密裏に行われれば止める手立てはない。

自分の作業を止めて彼女をつきっきりで監視するというのが今のアウラにできる精一杯の抵抗だった。

「でも大丈夫なの？作業止めてまでって凄く申し訳無い気がするんだけど」

「あんたどの口が言ってんのよ……。ま、調査は無理でも魔獣をそのまま行進させて警戒網を広げることくらいは出来るし、怪しいところを先に調べるってのもやり方としては妥当だからね」

「そういうことなら私もあんまり気にしなくていいのかな。」
「そこは是非とも気にしなさい！」
素直にカルネ村に帰ってくれるならそれ程楽な事はないが、言動が逐一信用できないからこうして面倒見る他ないのである。
事が終われば必ずアインズ様にチクってやろうとアウラは心に決めた。
「フェンリルおいで」
アウラの掛け声に応じて森の中から一匹の魔獣が姿を現す。
体は全長20メートルにもなる巨大な黒い狼で、尻尾は鋭い眼光を宿す蛇だ。
フェンリルはアウラの手持ちの魔獣の中でも最高位の強さを誇り、強力な直接戦闘能力を有する。
そんな獰猛な魔獣が、アウラを見た途端子犬のように懐いて戯れてくる姿にマタタビは「おおー！」と言って感嘆した様子。
アウラは少し得意気になる。
しかし魔獣の方はマタタビの姿を捉えると獣独特の鋭い感性からその危険度を察知し体毛を逆立てた。

アウラが「どうどう」と宥めて暫くようやく落ち着いたようだった。
「私って最近こんなのばっかだなぁ」
「あんたのレベルじゃ無理ないでしょ。１００レベルなんて守護者や至高の御方を除けば、ナザリックへの侵入者以外会ったことないのよ」
何故かバツの悪そうな顔をするマタタビ。
「……アハハ」
以前ナザリックに１５００名の大群が来たときには守護者全員が全滅したのだ。
最終的に戦いは御方々の勝利で終わったものの、その時殺された記憶はアウラの中でも鮮明に残っている。
「じゃ、とっとと行ってとっとと終わらせるからフェンに乗って。」
「いいの？乗っても」
「……早く終わらせたいの。ホントは乗せたくないんだからね」
「ツンデレかな？ではアウラさんの面倒見に甘えて、あらよっと。」
マタタビも跳躍し、アウラの後ろフェンリルの上に跨った。
フェンリルは当然機嫌を悪くしたが、最終的にアウラがティマーの職業スキルの

吐息を使って宥めさせた。
（アインズ様や茶釜様が乗ってくれたらなぁ～　断じてこんな奴ではなく！）
「じゃあいくよ　フェン！」
「うわぁっ！」
フェンリルはアウラの掛け声に合わせて走り出した。
アウラは普段から慣れているが、魔獣への騎乗が初めてであるマタタビはそのスタートダッシュの勢いの良さに驚かされた。
無論カンストレベルの身体能力があるため振り落とされることはない。
二人を乗せた魔獣は、樹齢幾許かも知れぬ大樹たちが鬱蒼とひしめき合う中をグングンと風の如くくぐり抜けていった。
「凄いっ、気持ちいいっ！」
アウラには知る由もないが、マタタビがかつて住んでいた世界は汚染物質によってあらゆる自然が穢されてしまった死の世界である。
反面亜人や魔獣の跋扈するトブの大森林は、彼女の知る現実世界のように人間が手を加えてしまうことが一切ないありのままの大自然だ。

騎乗感覚に次第に慣れてきたマタタビは、魔獣の上から眺める風景と風になって飛ぶような感覚に魅了され始めていた。

仮想現実では感じ取ることのできなかった森の匂いや風圧を、異形種ケット・シーとして与えられた鋭敏な感覚器官によって感じ取り、魂に強く刻み込んでいく。マタタビは感激の余り思わず涙を零した。

（目にゴミでも入ったのかな）

一方アウラはどうしてマタタビがそこまで感動しているのか理解できないでいた。

そもそも住居がナザリック第６階層のジャングルであるアウラにとって、森林の風景は飽きるほどに見慣れている。

言うなれば都会の風景に感激する田舎者を見る心境か、もしくはその逆である。

アウラの冷めた視線に気づいたマタタビは、一旦興奮を落ち着かせて何か思い出したように、申し訳なさそうな顔をして言った。

「……あーそういえば、無理言って森に入れてもらったのにお礼言ってなかったね。ありがと。それと…ごめんね」

（なんだよ今更）

「…別に」

ややそっけない謝罪。しかしアウラは、何故だかマタタビの謝意が嘘偽りのものではないのだと直感してしまった。

結果、沸騰しきれず怒りの域にまで達せられない、モヤモヤとしたわだかまりがアウラの胸の中で燻る。

扱いに困る

ナザリックというある意味閉鎖された環境で生活してきたアウラにとって、このような対人関係の悩みはかつてないものであった。

数多いるナザリックのシモベは、精神性や価値観が非常にまばらであり、セバスとデミウルゴスを筆頭に分かり合えない者同士も多い。

そんな彼らを結びつける絆こそ、至高の41人への忠誠心なのだ。忠誠こそまさに、ナザリックを治める唯一にして最大の秩序とも言えた。

しかしマタタビは違う。

数多くのシモベが感づいているが、マタタビはナザリックへの忠誠心を持ってお

らず、他のシモベに対しての接し方も決して友好的とは言えない。
ならば敵なのかというとそれもまた違うらしく、アインズからの一定の信頼は勝ち得ているようだし、玉座の間のあの出来事からも、彼女なりにアインズに対して気を遣う気持ちがあったことも垣間見えた。
ただ実際に話してみると、興奮したアルベドやシャルティアとはベクトルが違うウザさというのがある。一々相手を逆なでして癇に障るような話し方は、ナザリック内でコミュニケーションに長けたアウラをしても心底ウザいと思わせた。
「ごめんねー、私の話し方を嫌いな人多いんだよ。わざとじゃないけれど」
その発言も信用ならない。
（いっそ本当に敵なら楽なんだけどなぁ。アインズ様から討伐指令が下されれば、喜々として赴いていけるのに）
考えても仕方のないことである。アウラはこのことについて悩むのを後回しにした。
マタタビに対する扱いに苦心しているのはアインズも同様だったりするのだが、これもアウラには知る由もないことである。

大自然を駆け抜ける快感に大興奮していたマタタビだったが、冷淡なアウラの機嫌を伺っているうちにハイテンションをすっかり抑えていた。

いつのまにか移動中のフェンリルの背中の空気は気まずくなっていた。そんな空気を打ち破ろうと明るい調子でくだらない話を振ったマタタビだったが、その態度が余計にアウラを苛立たせた。

そわそわして落ち着かないマタタビ。

ふと何かを思い出したような顔をして、アウラの方を向き言った。

「そうだ、今回森林に入れてくれたお礼に至高の御方の御話でもしましょっか？」

マタタビが神話とも言うべき至高の御方のエピソードを語っているという話は、シモベの中でも比較的仲の良いペストーニャやユリ、エクレアから聞いていた。

このトピックスに、当然アウラは強い興味をそそられる。

マタタビが至高の御方々とナザリックの外で共に活動していたという紹介はアインズから直々になされたものである。

それならばナザリックの守護を任されたアウラたちと違い、彼女が外の世界での

御方の伝説についてを知っていても別段おかしくはない。
相手がマタタビでなければ直ぐ様その話に飛びついただろう。
逆にマタタビだったからこそ、アウラは冷静に言動の矛盾をつくことができた。
「で、でも今回のお礼っていうなら普段からメイド達にしてるよーな話にするのもどうなの。仕事を一旦休めてるんだからもうちょっとなんか無いの？」
「うーん確かになぁ、いいゴネ方です、さすが茶釜様の娘」
アウラの言い分にふむふむと納得したマタタビはさらっと爆弾発言を零してしまう。
アウラをぶくぶく茶釜の娘と呼び褒め称えたことに対し、アウラは一瞬どう反応していいか分からなくなる。
だが上記への思案は、次のマタタビの発言の衝撃で間も跡形も無く吹き飛ばされた。
「じゃあ、ぶくぶく茶釜様について私が知ってることでも教えてあげようかなぁ。どう？聞きたい？」
マタタビはアウラの方を伺う。僅かに微笑み、返事も待たずに話を始めた。

「顔にＹＥＳと書いてあるから」

アウラは思わず、真っ赤になった自分の顔に手を当てた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

セイユウとは、いわゆる人形劇で人形のセリフを代弁するような声だけの役者なのだそうだ。

それはある意味で花形な職業とされていたが、実態はたった一つの座席を大勢で奪い合うような過酷な競争が待ち受けている厳しい現実がある。

ぶくぶく茶釜は元々語学関連の仕事を目指していたが、その最中彼女の声質に目をつけた人物からセイユウになることを勧められ、セイユウの養成所へ入会し数年後本格的に活動を始めた。

恵まれた声質も然ることながら、仕事を選ばずどのような役でも精力的に演じていこうという気概が評価され、熾烈な競争を勝ち進み有名役者の一員になったという。ぶくぶく茶釜の実弟であるペロロンチーノは複雑な心境を抱えながらもその躍進ぶりを喜んでいた。

演じる役柄の影響らしく何故か芸名が多かったようだが、本人が最も気に入って

いたのは「カザミクミ」。そのために至高の一柱やまいこや、彼女の馴染みのファンは「かぜっち」と呼んでいる。
彼女がユグドラシルに訪れたのは、セイユウの活動が軌道に乗って余裕ができ始めた頃だった。
ぶくぶく茶釜の姿は一見男性器そのもの。この異形は世界各地でも生殖器崇拝として恐れ崇め建てられており、その余りある威光の凄まじさによりユグドラシルで彼女に声をかけた者は、純銀の聖騎士たっち・みーをおいて他に無かった程である。
後にたっち・みーが率いるナインズ・オウン・ゴールに加入。タンク役及び指揮官としての頭角を現していき、粘液盾の二つ名を轟かせるに至る。今日のギルド拠点の原型であるナザリック地下墳墓攻略の際にも、他の至高の方々を指揮官としてまとめ上げ、自動湧きアンデッドの攻略などに大きな貢献を与えた。
ナインズ・オウン・ゴールがギルド：アインズ・ウール・ゴウンに移行した後も、数多の偉業をユグドラシルに轟かせていった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「それから数年後、ぶくぶく茶釜様はナザリックからお隠れになられました。

これが私が知る茶釜様の全てです。私は御方ともそれほど近しい関係ではなかったので、どんな理由があったのかも何処に行かれてしまわれたかも存じませんけども。」

マタタビの話を聞き終わったアウラだが、話を聞けて嬉しいという感情よりも先に、大きな違和感を感じた。

（あたしの知っている茶釜様と……違う？）

アウラはマタタビの話を聞いて、自らの創造主のことを自分自身よく知らないのだということに気付かされた。

アウラの知っているぶくぶく茶釜という人物は、至高で絶対なる神の如き存在だ。ナザリックを攻略、統治するという偉業を成し遂げ、そのナザリックの管理を行うためにアウラ達シモベを生み出した。

アウラ自身の居住でもあるナザリック６階層のツリーハウスで、やまいこや餡ころもっちもちと共に談笑したり、時々アウラやマーレを着せ替え人形にしたりする。

ただそれだけの僅かな記憶だが、それは思い出すだけで今でもふわふわするよう

な多幸感を味わえる程に思い入れのある大切な記憶である。
しかし、マタタビが語るぶくぶく茶釜は自分が思っていたイメージとまるで違う、だが何故かフィットしてしまう意外性がそこにはあった。
この感触は、６階層の闘技場で初めて話し、優しげなアインズの姿に感じたものと非常によく似ている。
アウラは知らなかった。創造主が語学について取り組もうとしていたことも、セイユウが声の役者だということも、「カザミクミ」という呼び名を好んでいたことも。
マタタビは「ぶくぶく茶釜様ともそれほど近しい関係ではなかった」と言った。そんな彼女すら知っていることを、作られたアウラは知らない。
（どうして……）
これの意味するところは何か。御方にとって自分はどんな存在なのだろうか。自分は取るに足らない存在であり、だから御方に見捨てられたのだろうか。
アウラは階層守護者として与えられた自分の任に高い誇りを持っている。
だが、階層守護者とは言えど敵襲がこなければ存在意義は無いに等しい。

そういう意味では、現在ナザリックで待機を命じられているコキュートスを見ていると哀れでしょうがない。
たった1度、１５００名の大群が攻めてきた際には守護者も駆り出されたが、自身と同格の存在を複数相手にするのは流石に厳しい。
当時は結局、時間もろくに稼げずあっさり殺されてしまったのだった。
そこでさえマタタビは大活躍をして守護者を差し置き褒美を賜ったというではないか。ならば自分は何なんだ。ただの役立たずではないのか？
森林を駆け抜け感じる冷たくて心地よい空気抵抗は、思考がマイナスに下るにつれて爽快感は薄ら寒さに取って代わり、繊細な心を嬲るようになる。加速していくネガティブシンキングは止めどなく溢れていく。
このままではマズイ。
生存本能によく似た何かが、頭のなかでガンガンと警鐘を鳴らしだした。別のことを考えて、別の考え方を考えろ。考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ
絶望が漂う思考の海を一人きり、縋るアテを探してひたすら足掻いた。

存在意義は揺らぎ、海に広がる振動は瘋癲の津波を引き起こして少女をより一層飲み込んだ。

狂気の深海に沈んでいく中、朧気に見えたのはアウラがよく知る死の支配者の御顔。

表情筋は伺えないが、優しげに、心配そうな様子でこちらに向かって……

「―いじょうぶ!?　ねぇだいじょうぶってば！　アウラさん!?」

（あれ、違う）

突如、内向空間から現実へと引き戻される。目の前に居たのは骸骨ではなく制服を着た女子高生。けど、何故か失望感は小さい。

（……白昼夢か）

頭がオーバーフローを起こしてトランス状態になっていたようだった。深淵から帰還したての精神は思いの外落ち着いていた。だが目の前の女子校生はかなり慌てている。

「やっぱり働き過ぎのせいかなぁ、大丈夫!?なんかデリカシーの薄いこと言っちゃった？えっとえっと、精神回復系の魔法スクロールあるから使ってあげよっか？たし

かアインズ様も常時同じヤツ張ってるから効果はちゃんとあるはずなんだけど……それとも何か具体的なエピソードみたいなヤツのほうが良かった？いやいや子供だからアメ食べる？違う！76歳だから私より年上じゃん、そんな年齢じゃないよねまずいよねえーと」

目を白黒反転させてながら、何やら一人で焦って呟きまくるマタタビ。アウラを気遣って色々考えてるのだろうが、今度は彼女自身がトランスしそうな具合である。

そんな様子が、アウラにはおかしくてたまらなかった。

「あはははっはっ！あはっ！あはっはは！あはははは！」

笑った

見た目相応、子供っぽい無邪気な笑い方だ。

腹を抱えて涙目ながらバシバシとフェンリルの背中を叩いた。

これほどまでに笑ったことがかつてあっただろうかという程の、心の底からの大爆笑だった。

笑いだしたアウラを見て、マタタビの混乱はより一層深まった。

いよいよ半狂乱でもしたのだろうかという明後日方向の戦慄を抱くが、それがま

た、アウラの笑い袋を刺激することになる。

（そっか）

ある程度思考が落ち着いて、アウラは先程抱いていた一つの疑念に結論を見出した。

（確かにあたしは茶釜様のことを意外と知らないかもしれないけど、それは他のシモベもきっと同じだし、マタタビの地位がちょっと特殊だからかもしれない。

……それに少なくともアインズ様はあたし達を必要としてくださるんだから）

御方にとってのアウラが一体何であろうと、マタタビが何者であろうと、今のアウラにできるのは目の前に与えられた仕事のみ。であるなら抜かりなく全力で取り組むべきである。そうすれば、いつかはきっと……

（あたし必ずやり遂げますから、茶釜様！）

ヴェールに包まれた朧気な思い出を抱いて、ダークエルフの少女は自身が知る唯一の神の名に祈り、誓った。

そんなアウラの自己完結のことなどマタタビには理解できるはずもない。ただスキル〈読心感知〉によるとアウラからの好感度が上昇しているらしい。大方また訳

もわからない勘違いが生じているのだろうと、マタタビは経験則から勝手に納得した。

実際のところアウラは最も真実に近づいていたのだが

10歳の頃ガ〇ジだった作者の数万倍賢いアウラは凄い！

※捏造設定

・ぶくぶく茶釜様の経歴（アニメの中の人を参考）

・アウラがカルネ村への人材派遣を知らないこと

感想気に食わぬところ誤字脱字があったらコメントよろしくお願いします。

正直句読点の入れ方とか自信ない。

次の次から山場です。がんばれオリ主

トブの大森林まで

誤字報告3件もあった……内2つは自分だけど。めっちゃありがたいけど、自分自身にいやんなっちゃう

そして書き溜め終了。嫌なことは重なるらしい。

・ザックリ概要

マタタビ「大森林行きたい！」

アウラ「ウゼェ」

トブの大森林〈マタタビ〉

大森林の木々が枯れているエリアを目指し、アウラの騎乗獣に二人乗りしていた

ところ、突然何者かの気配を感じ取った。
盗賊系特化である私は当然、レンジャーであるアウラも気付いたようで、相槌をして一旦フェンリルを止めさせた。
「突然気配が現れるなんて不気味です、一体何者でしょう？」
「誰かが森林入り口でやった手口とそっくりじゃん。日に二度もこんなことがあるなんてね」
「アハハ一体誰でしょう」
そういえば私がトブの大森林に入ったときも同じ感じでしたね。ごめんなさい
「突然現れたってことは、私達では感知出来ないレベルの隠形？」
ビーストテイマー兼職のアウラはともかく、専業盗賊の私を誤魔化せる隠形使いなんてユグドラシルではそうは居ない。ともすれば後者の可能性が高いけど、この世界にはタレントとかあるらしいからなぁ。
とりあえず正体を確認するため、右目を手で覆いユグドラシルでも大人気だった探知スキルを発動させた。
「《ピープ／覗き見》」

手に閉ざされて見えないはずの右側の視界が、本来見えないはずの場所の景色を映し出した。

そこにいたのは全身に黄色タイツに身を包んだヒト型の何か。頭に生えた植物からして明らかに植物系のモンスターである。一応その姿には見覚えがあった。

「ドライアードですか？」

マジックアイテム《地味子のメガネ》の能力を併用させて簡単なステータスを測るが、レベルはそんなに高くないみたいだ。ではどうして気配を感じなかったんでしょう。アウラが教えてくれました。

「ドライアードの本体は木だから、実体化するまで様子がつかめなかったんじゃないのかな。木なんてそこらじゅうにあるから」

なるほど、木を隠すなら文字通り森の中ってことですね。わかりやすい

「どうしますかアウラ？」

「うーん、一応アインズ様から知的生物がいたらまずは交渉しておくようにって言われたから、話だけでもしていこっかな。

あんたが言ってた生態系の崩れってのも気になるし」

「了解です」

生態系とか……やけに知的な子供ですこと。少なくとも10歳の時の私よりは頭いいですよ。これでまだ将来があるってんだから怖い怖い

◇◆◇

「あのー、あなたがダークエルフで……そちらの変な格好してる人は、人間？」

ドライアードは見事に私の機嫌を損ねさせる。第一印象は最悪だ。

「変な格好って言ったけど、故郷じゃこれ正装なんだからね？それに私人間じゃありませんケットシーです。」

別にケットシーに拘りはない。

苛ついたのでちょっと睨みつけてみました。当然ドライアードは狼狽するも、アウラが「まぁまぁ」と宥めて間を取り持つ。

へそを曲げた私と反面、アウラは子供っぽく親しみやすそうな雰囲気で自己紹介をした。

「こんにちわ、あたしの名前はアウラ・ベラ・フィオーラ。隣のこいつがマタタビ

あなたの名前は？」

「えーとピニスン、ピニスン・ポール・ペルリアだよ」
「わかった、ピニスンね。ピニスン、あたしたちこの森の生態系が崩れているようだから調べているんだけど、最近何か変わったこととか知らない？」
会話そのものに慣れてない様子のピニスンでしたが、柔らかい物腰のアウラに促されて言葉を紡いでいく。
「……あーとうん、多分……それなら、あの魔樹のせいだと思うよ」
アウラは首を傾げます。
「魔樹？」
名前からしてイビルツリーとかのことでしょうか。
「あたしが生まれるずっとずっと大昔、突然空を切り裂いて幾多の化け物たちが大地に降り立ったことがあったんだってさ。そいつらはドラゴンの王様たちと渡り合い、世界をも滅ぼすことができる力を持っていたんだ。でも結局、すべて退治されたらしいんだ。」
「世界をも滅ぼす」という互換を聞いて私が連想するのはワールドエネミーだ。ユグドラシルでも「ワールド」の名を関しているだけあって最強のボスキャラである。

もしそんな奴がレベルの奴が複数体いたとして、逆にそれらと渡り合うドラゴンというのも一体何者なのだろう。

ピニスンによるとその化物の一体がこの森の奥地に封印されてて、時々触手を伸ばして動物や植物の栄養を奪おうと暴れまわり迷惑しているらしい。

以前はとある７人組とやらが触手退治をしてくれて、もし魔樹の封印が解かれたら今度は魔樹を滅ぼしてくれると約束してくれたらしい。ところが今現在になって封印の解除が近いにも関わらずその７人組は現れない。

「君たちその７人組について何か知っていない？出来れば居場所とか知っててくれたら最高なんだけど……」

知らんがな。

「あたしたちここに来たばかりだからその人たちのことよく知らないんだ。力になれなくてゴメンね」

アウラの内心も７人組に無関心なことは《読心感知》でわかりきっています。演技派の彼女は外面では非常に親切です。

「しょうがないかぁ……約束してくれたんだけどねぇ……約束」

アテが外れたと見るやピニスンはがっくりと肩を落とした。
このドライアードの時間間隔は結構アバウトのようだし、ひょっとしてその７人組は死んでるんじゃないだろうか？まぁ私とてわざわざ指摘してやる程鬼ではないけど。
「どうします？強敵だったらちょっと不味いし、様子だけでも見に行きましょうか？」
「そうしよっか。あたしたちだけで処理できる相手ならそれに越したことないし」
するとドライアードは食いつき、これでもかと言わんばかりの反論を訴えました。
「ええーっ!?　倒すって君たちがかい？　あいては世界を滅ぼし尽くすことの出来る魔樹だよ!?　前に来てくれた７人組も、その一部とだって苦戦したんだからね!?私たちに出来ることなんか何一つとしてないんだよ！倒したいならドラゴンの王様でも引っ張ってこなきゃ！大体君たち年端も行かぬ少年少女でロクに武装もしてないじゃないか！そもそ（ry）」
―少年少女……少年
張り詰めた糸がプツンと切れるような景気のいい音が鳴った。

「ちょっと黙れ薪の材料、殺すぞ」
アウラのドスの効いた子供声に、私はどこか懐かしいモノを憶えました。
『黙れ、弟』
しかし、男装してるくせに男扱いされるのが嫌って理不尽じゃありませんか？
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
キレたアウラが嫌がるピニスンを無理やり引っ張って魔樹のところまで案内させると、そこは私達が目指していた木々の枯れた場所でした。
〈地味子のメガネ〉でユグドラシル後期登場のレイドボス、ザイトルクワエがいることを突き止めたので、私が爆弾を使って無理やり叩き起こし、アウラが魔獣を沢山呼び込んで殲滅することになりました。
「マタタビさん、私はちっぽけな世界しか知らなかったんですね、ぅん。
私の目は今日見開かれました。世界を滅ぼせる化物なんて、その辺にいるんです。石を投げれば当たるのです。そう考えれば何もおかしいことはありません。」
「それは良かったですねぇ～」
なんということでしょう。あれだけやかましかったピニスンが今では悟りを開い

た釈迦のようです。

目の前の光景がそれほどに衝撃的ということでしょうか。

ザイトルクワエ、全長３００メートル程にもなる「歪んだトレント」ともいわれる植物系モンスター。竜王とも互角に渡り合い、世界を滅ぼす力を持っていたソレは一時の封印から解き放たれ世界に大いなる災いをもたらす……筈でした。

今ではその大木の体も何十という数の魔獣の群れにバキバキと齧られまくり、中には火を噴く魔獣から火炎放射を浴びせられています。なかでもアウラが一番大暴れしておりまして、ビュンビュン鞭を振り回して幹を叩き折っていきます。見た目に反して超パワフル、ピニスンが卒倒するのも頷けるというもの。

この魔樹の寿命（それとも樹命？）はあと数分も持たないでしょう。

まもなく魔樹、ザイトルクワエは消滅しました。

一見無秩序に大暴れしてたように見えて、アウラは残った木材資源を後で活用できるようなるたけ痛めつけないよう魔獣にも指示していたらしく、おかげで推定樹齢５００年以上というまぁまぁレアな木材を大量入手することが出来ました。

あとピニスンが教えてくれたのですが、ザイトルクワエのてっぺんの苔はかなり貴重な薬草なのだと。運良く残っていたのでそれも回収しました。

「村の脅威となるモンスターを討伐して、木材資源を大量入手しつつ希少な薬草まで手に入れるなんて大手柄ですね。つまり私が来たこともそう悪いことではなかったのでは？」

「……恩着せがましいなぁ。べつにこいつが目覚めたところでぴゅっと飛んで行ってやっつけることくらいわけないんだから。

ま、久々に体動かしたから退屈しのぎにはなったけどさ。あんたは良かったの？割り込んできても別に良かったんだけど」

うーん運動でストレス解消かぁ。考えたこともなかったなぁ。

「それも悪くなかったけど、私の取ってる職業に〈トリックスター〉ってのがあって、そいつのペナルティが『レイドボス、ワールドエネミーに対する攻撃力50％ダウン』なんですよ。

だからユグドラシルのレイドボスだったアイツじゃ私では分が悪いんです。」

そもそもなんでユグドラシルのレイドボスがこんなところに居るのかもよく解ら

ないけれど、確かピニスン曰く空から落っこちてきたんだっけ？倒す前に詳しく調べときゃよかった？……いや無理か。

「何そのペナルティ!?　シャルティアの〈血の狂乱〉よりも酷いじゃん」

「ま、ペナルティ度外視すれば中々強いし捨てたもんじゃないよ。無論ユグドラシルでは不人気筆頭だったけど。」

ふーん、とどうでも良さそうな反応をしてからアウラは言いました。

「じゃ、用事も終わったしちゃっちゃっと帰ろ。あんたもこの森林にはもう用事ないでしょ」

「ですね」

ドライアードに今日のことは内緒にするよう言い含めて（ほとんど脅し）私たちは帰ることにした。

◇◆◇

（アウラ）

今日一日マタタビと過ごしたアウラだが、彼女は一体どんなやつなのかという疑

問は結局先送りにした。

御方に何らかの形で一目置かれている。口調がうざく、テンションが軽い。それでも案外悪いヤツではないことなど、断片的な特徴は少しずつ集まったがそれでもマタタビへの全体像は未だぼやけがちだ。謎が謎を呼ぶようで掴み所がない。

（嫌なやつだけど、嫌いではないかも）

自分でも訳の分からない複雑な心境に、アウラは眉をひそめ不機嫌そうに頭を掻いた。

行きと同じくマタタビとアウラは、フェンリルの背中に二人乗りで帰ることになった。

日没の差し迫る夕暮れ時、生まれたときからナザリックの防衛に従事し続けていたアウラはこの世界に来るまで夕焼けを見た事は無かったが、マタタビのように感動する気分にはならなかった。

アウラにとっては本物の星空なんかより、第六階層にある星空模様の天井のほうが遥かに輝かしいのだ。

マタタビも今日のことで疲れたのか、フェンリルの背中に掴まりながら器用に居眠りしているためリアクションの取りようがない。疲労無効の装備をつければ眠る必要はないのだが、趣味で装備から外しているらしく、やっぱりアウラには理解しようもない嗜好だ。

アウラからしても起きて軽口を叩かれるより眠ってもらった方がありがたかったから、フェンリルに速度を落とすよう指示したのは内緒である。

マタタビの寝顔は間抜けそのもので、柔らかな獣毛に顔を埋めながら涎をこすり付ける行為はフェンリルもアウラにも不愉快だったが、今は注意しようもないので我慢するしかない。

あまりに無防備な姿を見せつけられたアウラは、彼女に自分が気を許されたのだという決定的な証拠を前に、なんとも言えないもどかしいような苛立ちを感じた。

マタタビのことを思うとイライラしてたまらないので、アウラは別のことを考えることにする。

今日挙げた成果についてだ。

（マタタビが押し掛けてきたことがきっかけだったのはともかく）アウラはこの

世界でも屈指の強さを誇る脅威に打ち勝って、大量の木材資源と貴重な薬草を手に入れることに成功した。

以前六階層で炎の原精霊を倒した時に、アインズがアウラとマーレを非常によく褒めていたことを考えると、倒した敵（名前は既に忘却の彼方）も同程度の強さだったので今回はなお賞賛されると思われる。

それも全てアウラを作り上げた創造主が優れていたということなので、結局のところあらゆる成果は御方に還元されるであろう。

しかし自身の行いが御方の超越性の証明になるというのであれば、アウラはこれ以上の誉れを知りえない。

主人に賞賛される場面を空想して機嫌良く鼻歌を口ずさむアウラの姿は、親に褒めてもらうことを嬉しがる年相応の少女にしか見えなかった。

フェンリルに速度を落とすよう指示したせいだろう。マタタビを送り届けるカルネ村までまだ距離はあったが、日はすっかり沈みきって、木々の影は夜陰と同化していた。

アウラやフェンリル、おそらくマタタビにとってもこの暗闇は一切障害足り得ぬものだったが、夜の森から運ばれる風はどことなく不気味で不吉じみていた。

別にナザリックにおいて門限などがある訳ではないが、このままの状態というのもどうかと思い、アウラはフェンリルに速度を上げるよう指示しようとした。

「！」

約2時間ほどフェンリルの背中のもふもふに夢見心地だったマタタビが、ピタッとスイッチが入るように目を覚ました。

先程までの判然せぬ寝ぼけ眼には肉食獣のような閃光が宿り、かつて無いマタタビの豹変に何かを感じ取ったアウラは、おそるおそる「何かあったの」と尋ねる。

マタタビの表情には、さっきまであった喧しい程の喜怒哀楽は消え失せていて、刀剣のような鋭さだけがあった。

以外と大きい犬歯をギラつかせながらも、マタタビは淡々と答えた。

「推定レベル95以上が2つ、感知に引っかかった。」

95レベル以上。アウラの記憶上、シモベや至高の方々を除いたらその領域に立ちうる者は唯一つしか考えられない。

「プレイヤー……！」

かつて１５００名の大群がナザリックを襲撃した時、６階層まで突破されてアウラの前にまで立ちはだかった存在。立ち会ったのは、アウラにとってたった一度でしかなかったが、忌々しい死の記憶がフラッシュバックして戦慄する。

前回は数の暴力により壊滅させられたとは言え、今回は二人だ。決して油断できる相手ではない。

「あんたがやった時みたいな、誘い出しだったりしない？」

「多分違うと思う。今回は私の索敵範囲に入り込んだだけだから、意図してやるならば、私達の位置情報と、この私の能力を把握していなければならない。」

もし全バレしてたら逆に終わりだけどね、とゾッとするような付け加えをする。それから状況を詳しくアウラに伝えた。

「２者の因果関係は、発見した私達の存在をも含めても皆無。これはどう見ても偶然ですよ」

片側は50レベル以下30レベル以上の雑魚集団を数人連れてカルネ村の方向へと移動中。もう片側はそれを気にせず、何やら洞窟で暴れているようだが詳細は不明。

一通り聞いたアウラはフェンリルを止めさせてしばし考える。

偵察しに行くかどうか、リスクとリターンとを推敲して顎を擦る姿は、彼女の幼い風貌にどうしようもなく不相応だった。

チラリとマタタビの方を見ると、彼女のアウラへの眼差しは真剣そのものだ。

アウラの判断に任せるという信頼感がひしひしと感じ取れる。どうして今日話したばっかの自分なんかを信じられるのか、アウラには理解できない。とにかく自身の判断に伴う責任の重さが一層増した気がした。

自らの主人はこれ以上の重圧の中で常に最善手を取り続けているのだなぁ、というやや現実逃避気味な思考がよぎる。

しかし実際時間ではそれ程たたないうちに、彼女の判断は決した。

「よし、行こう。案内して！」

ここでエタッたら最悪すぎる。次話の完成度50％くらい？

※今回の捏造

・ザイクロさんはユグドラシル後期のレイドボス
・オリ主の設定全般
・アインズ様がいなければピニスンとアウラは結構話せる。
感想気に食わぬところ誤字脱字があったら報告くださいな。おねげーします。

●次回予告（一度やってみたかった）
「精神支配は完璧だというのに、何故こんなことが！」
「せめてメイドさんが優しく冥土までエスコートして差し上げましょう。」
「なんて綺麗なの」
「信じたあたしが馬鹿だった」
次回「木天蓼」
「きっとそれが正解です。」

木天蓼　前編

時系列が前回からちょっとズレるので一見整合性が取れないように見えますが、次回でちゃんと保管するので大丈夫です。

やりたくてたまらなかった次回予告だけど、尺の問題で分割投稿になるから、微妙に嘘予告になってしまった。

誤字脱字報告してくださりありがとうございます。

とある盗賊団の拠点跡地

シャルティア・ブラッドフォールンは焦っていた。

「……叱られる……どうしよう……。でも……」

彼女はアインズの命により〈武技〉という能力を持つ存在を回収するため、セバ

スらが誘い出した盗賊の中からそれを探し出すことになった。
ソリュシャンとセバスによる誘い出しは順調に進み、シャルティアは見事盗賊の拠点にいた〈武技〉使いに接触することができたのだが、相手の力量を舐めてかかっていたらシャルティアはうっかり捕縛対象を逃してしまい、隠密活動のためにわざわざ盗賊を狙ったというのに、やってきた冒険者に自分の存在が露見してしまったのである。
何もかも、〈血の狂乱〉が発動してしまったことがいけなかった。あれさえなければ今よりましな対応ができたに違いない。
とはいえ〈血の狂乱〉を自身に与えたのは創造主であるから、そのせいにするというわけにも行かない。
考えるということを苦手とするシャルティアは、失敗続きで結果思考が沸騰してしまいそうになった。
そんな中、苦し紛れに森に放った眷属から消失反応が送られる。
「……見つけたの？」
眷属のレベルはそれほど高くないが、しかし余りあるほど消滅の速度が早い。

ひょっとすると先程逃した目的の男が居るのかもしれない。
「後から付いてきなさい！　マーカーを準備しておく！」
おざなりに吸血鬼の花嫁へそう告げると、シャルティアは風のような速さで森の中へと駆け込んでいった。

眷属の消失地点まで駆けつけると、そこにいたのは先程逃した男ではなく、装備やら何やらがこの世界で見たものの中でも段違いである12人の人間だった。
（あれは……強い？）
その中でもシャルティアが特に注目したのは、身に纏う装備に反してみすぼらしい槍を持った黒髪の少年。
他の連中は雑魚だが、そいつだけは侮りがたい強者の雰囲気を漂わせている。
シャルティア自身は戦士特化ではないので目視での能力判定に自信はないが、少なくともプレアデスの姉妹では歯が立たないであろうことは明白だった。
始めは彼らをどうするべきか迷ったが、よくよく考えてみるとこれが実に恵まれた巡り合わせなのだとシャルティアは気づいた。

（そうよ！こいつらを生け捕りにすればさっきの失敗をチャラにできるじゃない！）

シャルティアが放つ殺気が狼煙となり、両者は臨戦態勢を整える。

その時『強者』の少年は小さく呟くように言った

「……使え」

その一言がどんな意味を持つのか、数瞬かかってシャルティアはようやく悟った。

12人の陣形の中でも後ろの方にいる老婆、ソレが身に纏う中華服の余りある魔力を感じ取ってシャルティアは戦慄する。

（よく解らないけどあれはまずい、真っ先に処理しなければ！）

第6感とも呼べるその直感は自ずと彼女に最善手をもたらす。

陣形の中心へ捨て身で突進するシャルティアだったが、先程思慮に費やした数瞬が命取りだった。

シャルティアの意図を察した『強者』の少年が彼女の前に立ちはだかり、両者の武器が凄まじい衝突音を轟かせる。

「邪魔！」

全力の拳で少年を殴り飛ばした。

１００レベルの腕力によって吹き飛ばされ、大地が弾けるような衝撃波が起きるも少年は無事だ。

やはり、と歯噛みしたくなるシャルティアだったが今はそれどころではない。

老婆を守るように、また別の複数人がシャルティアに襲いかかる。

「〈集団全種族捕縛〉！」

魔法は成功し数人が動きを止める。

今度こそとシャルティアが目標を捉えた次の瞬間、老婆から繰り出される光の束が目鼻のすぐ先に差し迫っていた。

これはまずいと、今更気づいても遅い。こんな一瞬では彼女とて躱しようもないのだ。

しかし―

「危ない！」

―閃光に飲み込まれる直前、甲高い女の声が聞こえたこと思うと、何かがシャル

ティアの背中を突き飛ばした。
凄まじい威力で遠くに突き飛ばされたシャルティアは隕石のように大地に炸裂する。
「んきゃあ！」
シャルティアを含めた場の一同は、突如現れた乱入者の方に注目した。
その意外な正体に、シャルティアは唖然とする。
（どうしてあいつが⁉　たしか名前は……マバタキ）
先程までシャルティアが立っていた場所に、夜陰と同化するような黒髪をたなびかせた学生服の少女が佇んでいた。
ただどこか様子がおかしい。目はどこか虚ろで、たった今「危ない！」と声がけした姿とはどうしても結びつかない。
シャルティアの知る限りその状態に当てはまる言葉は一つだけだ。
（精神支配！まさか１００レベル相手に通用する程なんて）
状況からして、彼女がシャルティアの身代わりになったということだろうか。
何故彼女がここにいて、どうしてそんなことをしたのかはまるで見当がつかない。

その困惑は、彼女が何者かすら知らないあの人間たちの方がよっぽど強いだろう。
各々状況に対する意見をかわしだす。
「どういうことだ！あの吸血鬼は逃げたのか、そしてこいつは何者なんだ！」
「支配は成功したようじゃ……、この女もさっきの奴の仲間か。」
「人の見た目こそしているが、人間ではないようだ。どうしましょう、隊長」

シャルティアはこの時、またしてもミスを犯した。
さっきあまりにも遠くに吹き飛ばされたためか、敵側からシャルティアは姿を消したのだと思われたらしい。
だからこそ遠目から何が起こっているのか確認して、それから転移で「撤退」しようと考えたのだ。
しかし、何もかも手遅れである。

怪物の名はマタタビ。
最凶最悪の殺戮兵器の産声は、既にあがっている。

最早この場に『彼女』を止められるものは「誰一人」としていなかった。

隊長と呼ばれた少年は、平静を保ち毅然に指示する

「カイレ様、事は一刻を争います。この者を操って尋問しましょう」

「うむ」

謎の少女を睨むように一瞥してから、老婆はアイテムに意識を込めようとする。

だが突如、少女の目に光が差し込んだかと思うと、少女の指先から鋭い獣爪が生えて老婆に襲いかかる。

伸ばされた白魚のような手は、老婆の眼球を的確に捉え潰す。有り余った威力はそのまま頭蓋骨を貫通した。

僅かコンマ一秒にも満たない一瞬の出来事である。

被支配状態にある存在が支配側に反旗を翻すという常軌を逸した現象に、それを見た一同が驚愕する。

「バカな！神々の遺産であるケイ・セケ・コゥクが命中して精神支配は完璧だというのに、何故こんなことが！」

完成された殺人マシーンはゆっくりと声のした方に反応する。今さっきの獣のような雰囲気を一変し、温和で友好的な口調で答えた。
「私が精神支配？　へぇーそうなんですかこれが……なぁるほど。思ったよりも悪い気はしませんね。」
両手を夜空にグイッと伸ばして背伸びをする。おおよそ殺戮とは無縁な、無邪気な少女の姿だった。
足元をよく見ていなかったようで、すぐ横に転がっていた老婆の死体を踏んづけて「ぐぇっ」と唸る。靴が血に汚れて不満そうだった。
気を取り直すようにニカッと魅力的な微笑みを浮かべる。

少女は虚空に開いた暗黒の中に、血まみれに汚れた手を伸ばした。
取り出したのは、カタナと呼ばれる刃渡り１メートルにもなる剣である。
少女の風貌にはあまりに不釣り合いな獲物だと思われたが、彼女がそれを掴み取って抜刀した瞬間空気は凍りつく。
「いやはやそう考えると、みなさん本当に運がお悪い。これでも殺しは初めてで、

私正直内心ビクつきまくりなんですけれど仕方ありません。
せめてメイドさんが優しく冥土までエスコートして差し上げましょう。冥土の土産に自己紹介、私の名前はマタタビです。」
オーバーに演技掛かった彼女の振る舞いは明らかに滑っていた。
少女―マタタビは口が割けんばかりに頬を引きつらせて獣の如き鋭利さを表す。
一同が、加えて遠くから傍観していたシャルティアでさえも戦慄を覚える程の殺気は、背景に積み重なった死屍累々を容易く想起させる。
そして、もって回した死刑宣告はやはりどこか意味不明だ。
「うーんやっぱ『あの人』みたいに格好良くはならないか。ウルベルトもよくやってたけど、中２口上やるやつって大した勇者ですわ」
吐き捨てるように言うと、老婆の死骸が纏っていたチャイナ服を汚物にでも触れるように刀の切っ先で持ち上げ、先程の暗闇の中へ無造作に放り込む。
続いて取り出したのは１枚の〈羊皮紙〉だ。軽く投げ上げると蒼炎が灯り、あっと言う間に焼失した。
「〈次元障壁〉」

（しまった！転移を封じる魔法、これでは逃げられない！）

逃げられない

シャルティアは、先程から使っていたその言葉に、主に目的語に大きな違和感を覚える。

何から逃げるというのだろう。先程のチャイナ服の効果内容も、効果範囲もすでに見切った。あれがアンデットであるシャルティアに有効なのだとしても、それを扱う者の程度は所詮知れている。最早シャルティアの敵ではない。つまりは……

（あいつを？　御方に創造された私が、あんなやつを恐れているとでも言うの!?）

シャルティアのマタタビに対する認識は非常に薄い。

高位の隠形を使えるという話だが、そもそも探知系の能力を持たないシャルティアにとってはそれがどの位凄いことなのか判らないし、配属先が異なるので交流なんてある訳がない。

面識は、六階層へ招集された時が最初で最後で、シャルティアにとっては覚えている方が奇跡と言えた。

微かに覚えている印象は、ただ臆病で脆弱な小動物。

あの時はこちらが一瞥しただけでも、全身を強張らせて敏感に身を縮ませてしまっていた。それでも無謀に挑んでしっぺ返しを食らった先程の剣士よりは賢明かもしれないが。

噂で自身と同じ１００レベルだと聞いたときには、ありえないと一笑に付してやったものだった。

それがどうだろうか。現在彼女を中心に、濃密な死の気配が辺り満遍なく広がっている。

ザラついた猫舌で直接心臓を舐め回されるような悪寒。

少年もシャルティア自身も、彼女の前にしては等しく小動物に成り下がってしまうようだった。

人間たちは動揺を抑えて冷静に、先程シャルティアを手こずらせた陣形を組み直していた。

否、彼らの所業は理性的ではあったが、冷静とは程遠いかもしれない。

殺気に当てられ、かえって理性の暴走を許してしまった。

彼らは本能に従いみっともなく逃げるべきだったのだ。

１％にも満たない誤差だろうが、生存率も上昇してくれただろうに。
捕食者はそれを嘲笑うような目で眺めつつ、自身も刀を構えて臨戦態勢を整える。こうなるといよいよ本当に獣じみてくる。
シャルティアが恋しくてやまない絶対支配者は、死を司る神である。
そう考えると甚だ不敬でしかないのだが、今の彼女を見るとどうしようもなく「死神」という言葉が相応しい気がしてならなかった。
「なんて……綺麗なの！」
殺気に酔いしれ正気を失っていたのは、どうやら彼女も同様らしい。
もしアインズがこの場に居ればまず間違いなく、撤退を指示していただろうから。

◇◆◇

「はっ！」
軽い一呼吸とともに捕食者の狩りは開始された。

彼女の狙いは明らかだ。老婆が死んだ今、彼女の眼中にあるのは少年唯一人。しかし『強者』と付け加えるには、今の彼の背中は小さすぎた。

たった一歩を踏み込んだだけで、転移と見紛う素早さで少年の懐に潜り込んだマタタビは、何の躊躇もなく鋭利な手刀を彼の首元へ突きつける。

彼は体幹をズラし、見事最短の動作で攻撃を交わすことに成功する。

だが上半身への攻撃に気を取られて居る内に、強烈な膝蹴りが少年の股間部に向かっているのを気が付かない。

次の瞬間、男児にのみ与えられた宿命的痛感が少年を襲った。

「ぶぐっ!?」

痛みに耐えかね、マタタビの顔に唾液を吹きかけた少年。それがどうやら彼女の眼球に入りこんだらしく、奇跡的な目潰しとなる。

「ッチ」

瞬時、非常に顔を顰めて目を瞑るも折角の攻撃チャンスを逃す気はないらしい。

両手で刀を構え、装甲を貫いて槍を持っている右側の肩を縦に切り裂いた。

そのまま追撃を仕掛けようとするが、その時陣形の後方から回復魔法を詠唱する

魔法詠唱者の姿が確認された。

マタタビは追撃を中断し、バックステップで少年の間合いから離れた。アイテムボックスの〈無限の背負い袋〉から手早く何かを取り出して、尋常ならざる脚力で上空へ飛び上がった。

「失せてください」

彼女の両手にそれぞれ構えているのは、黒鉄色で刃が付いた礫のようなもの。すなわち手裏剣である

マタタビの手から投擲される手裏剣が、雨のように陣形全体をまんべんなく襲った。

手裏剣は忍系統の職業会得者にのみ使える武器だ。

今マタタビが使っているのは、わざわざ一つ一つ作っては使い捨てにするタイプ。これは、威力は見込める代わりに膨大に資源を食うので、わざわざ実践に使っている者は少ないというなかなかのゲテモノである。

数多くのPKとギルド拠点荒らしを繰り返した結果、中小ギルドを容易く凌駕する財力を有しているマタタビだからこそ使える贅沢品といえよう。

圧倒的レベル差から繰り出されるそれらは、一発一発の威力が必殺級。被弾者の肉を容易く貫き、骨を豆腐のように砕いていく。

手裏剣のうちいくらかは〈低位武器貫通〉などの微弱なデータクリスタルを仕込んでいるので、複数回被弾していく間に伝説級のフルプレートを着込んだものですらダメージを免れ無くなっていった。

鋼鉄のゲリラ豪雨がようやく止むと、少年の他の戦闘員は既に全滅していた。

少年自身も手裏剣で全身は傷だらけ、槍を握る腕の肩には大きな切り傷があって使い物にならなくなっていた。

人数差によるアドバンテージをあっという間に覆され、絶望的な戦況を前にしてようやく少年は悟ったらしい。自分が相対しているのが、化物すら超越した怪物なのだということを。

「あなたは一体何者なんだ!!まさか罪人なのか！」

今の彼は、それがどんなに陳腐な質問なのだとしても、尋ねずにはいられなかった。

少年の必死さに反比例するように、少女の顔は冷めていくようだった。
「ただのメイドです。強いて言うなら、あなたより強い、それだけだよ」
そう言い捨てて、今度はまたアイテムボックスを開き、先ほどとは別の〈羊皮紙〉を複数取り出した。
「そういえばあなた達。といっても今は貴方だけだけどさ、私に洗脳アイテムを使ったんだよね？
きっと私を辱める気だったんでしょう？エロ同人みたいに。」
「……」
「アハハごめん冗談ですよ。でも某国では洗脳って殺人より重罪らしいからさ、仏ならぬ私としてはやり返さないと気がすまないんだよ。」
彼女は持っていた〈羊皮紙〉をバサッと宙へ投げ上げた。
その枚数は11枚、奇しくも先程死んでいった人間と同数である。
「まさか……それだけは止めてくれ！」
「やーですよ」
ふわふわと宙で燃え上がる十一の蒼炎は、夜陰の中で蛍火の如く優雅に揺らめい

ていた。

無慈悲で単調な詠唱が紡がれていく。

「〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉〈不死者創造/クリエイトアンデット〉」

彼女が〈羊皮紙〉で発動した魔法は第三位階。

カンストクラスの戦闘に於いてかなり心もとない値だが、この魔法こそ少年に最も大きなダメージを与えるであろうことは明らかであった。

魔法の効果対象となるオブジェクトは、当然彼の仲間の死体。

偽りの生命は阿鼻叫喚の如き産声を上げて現世へと再誕された。

『アアァァアアぁ『ウアアァァアアァ『アアアァァァ』』』

『アァァァアアァァァア『アアアウウウゥ『ゥアァァアアアァ』』』
『『アアァァアア『ァッッァア』』ア『ァァ『アアァ『アァアア』』』
瞳は濁れ、不自然極まる青白い肌には幾多の致命傷と食い込んだ手裏剣。変わり果てた仲間達の姿に、少年はただ一人慟哭する。
「罪人めっ！信仰深き同胞の、その死までをも冒涜するか！」
「死を冒涜？」
一瞬何を言われたかわからないとでも言うように呆けた顔をした。
やがて何かを悟り、鉄面皮を崩して呵々と笑い出した。
「あはははははは！バッカじゃねぇの。　洗脳アイテムで生者の尊厳踏みにじろうとした奴が死者の尊厳をほざくとかギャクですか？それともネクロフィリアなの？
さぁさぁ、ゾンビな皆様ハッピーバースデーおめでとう。プレゼントはあの可愛い可愛いショタ野郎です、早い者勝ちだよヨーイドン！」
動死体の強さは、元となった人間の強さに依存する。
今しがた死んだ少年以外の人間もこの世界では屈指の実力者だ。前衛後衛などで

差は出るが、生み出されたゾンビはこの世界でも皆伝説級の性能を有するだろう。

11体のゾンビはあっと言う間に少年を取り囲んでは襲いかかる。

仲間の亡骸を相手取り精神をすり減らしながらも、唯一残された信仰心にどうにか寄り縋った。

使えなくなった右腕の代わりに左手で槍を構える。

目の色を変えて、少年は反撃を開始する。

「クソっ！……皆……許してくれ！　ウオォォォォォリャアアアアアアア！」

まず三名。レイピアを持ったゾンビと修道服のゾンビに、ウィッチハットのゾンビを横一閃に槍で切り裂く。

「ハァァァアア！」

巨大な盾を構えたゾンビには、槍で盾ごと貫き頭部を破壊。

大斧を振り下ろさんとするゾンビ、チェーンを身に纏うゾンビ、漆黒のローブと杖を持つゾンビを続々と片す。

そして金髪ボブのゾンビに、大剣を振りかざすゾンビは直線状に一緒に貫いた。

「うわぁぁぁああ!!」

全裸の老婆ゾンビが上から飛びかかってきたのを、槍の槍の峰で地面に叩きつけて頭部を繰り返し、執拗に粉砕した。
今度はマタタビが自ら飛び込んで来て、背後から斬りかかろうとする。
「隙ありですよー」
「お前だけは絶対に許さない！ハアアアアアア！」
憎しみによって超加速された反射神経が、素早い彼女を捉えることに成功する。
「ゴブっ!?なんで……」
槍は彼女の腹部を刺し貫く。致命傷である。
血が滴り、槍伝いに少年の手を濡らした。
突然刺されたことに驚愕するマタタビ。
が、演技とばかりにおどけてみせ、少女はそのまま武器を掴んでニンマリと凄惨な笑みを浮かべた。
「な～んてね〈身代わりの術〉解除」
「なっ!?」
煙が広がりマタタビの姿が隠れた。

そして煙が上がると、槍に突き刺さっていたのはマタタビではなく、彼女によく似た学生服装備を纏ったゾンビであった。
―しかも、体中にダイナマイトを巻きつけている。
どこからともなく声が聞こえた
「ポチッとな」
ダイナマイトは徐々に赤色発光していく。
間もなく凄まじい爆風が舞い上がった。
「ぐわあぁあああああ！！！」

マタタビがゾンビに仕掛けていた無数のダイナマイトは、火薬の合成材料に微量な希少金属を含有しているというこれまた贅沢品。
アインズが放つ〈現断〉と同等の威力であり、至近距離の爆発に巻き込まれたのであればカンストレベルでも瀕死寸前のダメージ量となるであろう。

「かぁ、かはぁ、かぁ、かぁ」

爆風が止むと、ゾンビの残骸すら焼失したらしい。
その場に残っていたのは、全身黒焦げな少年だけであった。
しかし、そんな原型すらわからない姿の少年に対し、隠形を解いて姿を表したマタタビが送るのは、素直な賛辞の言葉である。
「よく生き残りましたね。それだけの耐久力と技量があるんなら、刀で真っ向勝負してたら絶対負けてましたよ。流石です」
それは皮肉でも何でもなかった。
実は元よりマタタビは、少年たちに対して何も恨みや敵対心など微塵も持っていなかったのだ。
少々卑劣な戦法を組んだのも純粋に戦術的打算によるところが殆どで、先から言っていた皮肉も相手を煽るための布石でしかない。
今の彼女はただの機械。
敵を排除するため最善手を模索し実行する、最凶最悪の思考体。
皮肉な話ではあるが、そんな怪物を生み出したのが、他ならぬ少年たちなのであ

る。

自覚より一回り分聡明なマタタビは、自分の状態が一体どうなっているのか、少ない情報からすでに導き出していた。

「少年や、褒美に一つメイドさんが講釈して差し上げましょう。

精神支配の待機状態の行動は、被支配側のカルマ値に依存します。

私のカルマはマイナス５００。この値では、近付いた相手に対する無差別攻撃ですね。

当然支配側に攻撃したりはしませんが、それにもたった１つ例外があります。

被支配側は外部から攻撃されたり敵対認証を察知すると、それに対して反撃するようになるのです。

ですから多分今回の場合は、私のスキル〈読心感知〉が貴方達の「敵意を認識」してしまったことが発端というワケ。」

黒焦げになった少年の前に立って、マタタビはゆっくりと長刀を振り上げる。

「みんな本当に、私のせいで運がお悪い」
神速の剣閃が炭素の塊を透過した。
かつて首だったものであろうか。
サッカーボール大の黒い何かがボトッと大地に転がって、ボロボロ崩れていった。

役目を終えれば、彼女の意識は闇に沈んで指示を待ち続ける。
結局、彼女を御する洗脳アイテムは彼女自身が握っているのでそんなもの来る筈ないのだが。

「……それでも意識を保っているということは、次の敵か。
やだなぁ、魔王さまに殺される。
シャルティア逃げて、超逃げて。
こっちはMPもスキルも殆ど残ってるっていうのに……」

マタタビは、自身の有利を憂鬱気味にぼやいた。

オリ主設定
◇マタタビ［異形種］　ｍａｔａｔａｂｉ
◇性別：女性
◇年齢：19
◇二つ名
・屋台崩し
・42人目の???

◇嗜好
・趣味：恋愛モノの小説・漫画
・好物：なんでもよく食べる

・好きな人：アルベド？
・尊敬する人：モモンガ
・嫌いなもの：集団の和を乱す者
◇役職
・旧クラン：ナインズ・オウン・ゴール　元構成員
・ナザリック地下大墳墓 執事助手秘書官 兼 一般メイド見習い
◇住居
・ナザリック地下大墳墓 第九階層スイートルーム予備部屋
◇属性アライメント
・極悪　［カルマ値：-５００］
◇種族レベル
・ケットシー１０ＬＶ
・ハイケットシー５ＬＶ
◇職業クラスレベル
・アサシン：５ＬＶ

・マスターアサシン：１０ＬＶ
・シーフ：１５ＬＶ
・ファントムシーフ：５ＬＶ
・シノビ：１５ＬＶ
・ハーミット：１０ＬＶ
・シカケニン：１０ＬＶ
・ポイズンメーカー：５ＬＶ
・スレイヤー：５ＬＶ
・トリックスター：５ＬＶ
◇［種族レベル］＋［職業レベル］：計１００レベル
・種族レベル：15
・職業レベル：85
◇能力表（最大値を１００とした場合の割合）
・ＨＰ（ヒットポイント）：70
・ＭＰ（マジックポイント）：70

・物理攻撃：70
・物理防御：40
・素早さ：測定外
・魔法攻撃：60
・魔法防御：40
・総合耐性：70
・特殊：測定外

◆能力値出典：パンドラズ・アクターの能力形態データNO・42

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝

※捏造設定
・オリ主の道具
・精神支配に関する設定
・少年たち御一行の強さ

感想気に食わぬところ誤字脱字があったら報告ください。おねがいします。

次回、シャルティア逃げて！超逃げて！

木天蓼　後編

戦闘メインで構成するつもりじゃなかったのに……どうしてこうなった……
そして戦闘シーンが気に食わないなら、最後のところだけ読んで要領つかむだけでもありかと。まぁ普通気に食わなかったらブラウザバックだよね。
更新遅れたごめんなさい

木天蓼　後編

私はゆっくりと、まるで散歩でもするかのような軽い足取りで、彼女が隠れているクレーターの影まで歩んでいく。
だけども私がそこに辿り着く前に、彼女が自ら私の前に出てきてくれた。
彼女、シャルティア・ブラッドフォールンは、いつもの漆黒に紫の刺繍が入ったボールガウンではなく、血のように紅い全身鎧を身に纏っている。天翼を広げ銀色

に輝く月光に照らされた姿からは、格好いいとも美しいともつかないような、何とも言えない感動を私に抱かせた。

普段はエロばかり頭に詰め込んでいるペロロンチーノだが、こういうところで私の中二心の残症を煽ってくれるから隅に置けない。

しかも変なところで真面目な彼のことだ。きっとＮＰＣのビルドにすら遊び心を加えず、ガチで組んでいるだろうことは容易に想像がつく。ウルベルトとは大違いだ。

「こんばんわ、シャルティア・ブラッドフォールン様。良い夜ですね。個人的にこんな日にはお茶とお餅でも拵えて月見でもしていたいところなんですが、どうかその殺気を止めていただけませんか？」

彼女はちっとも脅威ではなかったが、背後についているモモンガさんと敵対したくない。そうなれば彼は相当苦しむだろうし、アルベドさんにも嫌われてしまう。ついでに言えば死にたくない。

「よしなんし。おんしは、今でもこうして守護者である私との上下関係を気にして振る舞っているんでありんしょうが、一度６階層での振る舞いを見た後では、そ

の後の猫かぶりの巧妙さが鼻について仕方ありんせん。」

なるほど、通りで私の礼儀作法の受けが最悪だったわけ。無理やり支配ロールしたモモンガさんと真逆な結果とは、ひどい皮肉じゃないか。

「しかし、猫の裏側に居たのが獅子だったなんて思いもしなかったでありんすよ。よくもまぁこれまで騙し通したものでありんすね。きっとおんしを気にかけていたアルベドもデミウルゴスも気付かなかったんじゃありんせんか？」

「本題お願いできます？どーして人畜無害なワタクシめが、あなたに狙われなきゃならないのよ」

「自分で言っていたではありんせんか。おんしは強力な精神支配に侵されていて、敵対認証を察知しては暴れまわるという厄介な状態なのでありんしょう？

であれば、守護者最強の私が直々に一度殺害してそれを解いてあげるというまでのこと。感謝しなさい」

その割に血気盛んな楽しそうな顔。馬鹿馬鹿しい、大方アウラと同じで欲求不満なんだろう。

「言っておきますが、私は撤退をオススメしますよ。」

私の挑発に見事シャルティアは引っかかる。もっとも挑発を兼ねた本音だけれど。

シャルティアはこめかみに力強い血管を浮かび上がらせ、殺気が最高潮に達した。

最早デタラメ廓言葉は完璧に鳴りを潜めていた。正直ウザかったのでちょっとありがたい。

「あぁん、大した自信だな！ペロロンチーノ様に生み出されたこの私が、負けるはずがねぇんだよ！」

「ｿﾚﾊｽｺﾞｲ」

勝利を確信しているのだとすれば、そんなあいてにわざわざ全身鎧を着込むのだろうか？

なんとも分かり易い虚勢である。

彼女は巨大な片手槍を構え、両翼をはためかせて臨戦態勢を整える。

きっと転移前の私だったら逃げたくなるような鬼気迫る程の迫力だろうが、案外嫌われメイド生活も無駄ではなかったらしい。

敵意に感覚麻痺した私は、彼女のそれが只のウザいそよ風のようにしか思えな

かった。あるいは洗脳によって気が狂っただけかもしれないが

「井の中の蛙というよりは、墓穴の蝙蝠かな。貴方じゃ私には勝てないよ。」

◆◇◆

（殺す！絶対殺す！至高の御方に作られし私をコケにした代償に、死の寸前には地獄を見せてやる）

憤怒と殺意に塗れたシャルティアの思考は、一周回って冷静さを取り戻した。

彼女を相手取るときには特に、取り乱してはならない。それが、先程の少年たちとマタタビの闘いを見て分析した成果である。

殺した敵をアンデットに変えてそのままぶつけるとは、今度機会があればシャルティア自身試してみたくなる位に良く出来た方法だ。相手の精神を揺さぶっている合間に強力な罠を仕掛ける手腕は純粋に感心した。だが、自身が同じ過ちを犯す訳にはいかないだろう。

「ふー、やりますか」

マタタビは右半身を後ろに引いて、刀を隠すように後ろ方向に構える。

一見すると隙きだらけだが、シャルティアからは刀身の長さが掴みづらい上にカウンターの体制が整った嫌な構え方だ。

先程の戦闘では白兵戦を避けていたようだが、前衛としての技能を身に着けていることは一目して理解できた。

戦士職は取っていないのであろうが、それはシャルティア自身にも言えることだ。

手の内の知れないマタタビに対し、序盤から近接戦闘に持ち込むのは勇み足が過ぎる。

まずは遠距離からの攻撃で動きを読む取るのが望ましいだろう。

「〈魔法最強化・ヴァーミリオンノヴァ/朱の新星〉」

「遅いよ」

マタタビの周囲が紅蓮の炎で包み込みこまれたが、気付いた時には彼女の姿はなかった。

次の瞬間、シャルティアの背後にマタタビが肉薄している。そこから神速の袈裟斬りが見舞われようとしていた。

「ぐっ！」

シャルティアは反射で身を捩り、スポイトランスを盾にしてどうにかその攻撃を受け止める。受け止めた一撃は思いの外軽かった。

ところがその後の追撃では、手数の多さと素早さに間に合わず何回か直撃を食らってしまう。

一撃一撃の数値的威力はそれ程でもないが、攻撃箇所が一々的確過ぎる。装甲の隙間や顔面部分スレスレに掠める感覚は怖気が走った。攻撃力はなくとも急所に当たれば致命傷なのだ。

対してシャルティアが仕掛ける攻撃は、その尽くを風のように躱されてしまう。

シャルティアの武器、スポイトランスはダメージを与えた時その何割かの体力を回復できる凶悪な効果を有している。前衛同士の打ち合いには有利な武器なのだが、当然といえば当然、当たらなければ無意味である。

（こいつ本当に盗賊系!?真っ向勝負じゃ勝てないんじゃなかったの？）

「そんなんただのブラフですよ。」

このままではダメージレースでシャルティアが負けることは明らかだ。

一旦距離を取るため、回数制限系の近接スキルをシャルティアは発動させた。

「〈不浄衝撃盾〉！」
「あがっ!?」
武器攻撃よりも範囲のある衝撃波攻撃を、マタタビはモロに食らった。そのまま後方の大地に吹き飛ばされていく。
どうやら彼女の物理防御力はあまり高くないらしく、手足に擦り傷ができていた。
「……くそぅ、受身取ったのに痛いなんて」
（これだけで効いてるみたいね……）
「《ライフ・エッセンス/生命の精髄》」
確認してみると、たったこれだけの攻撃でマタタビのHPは半分を切っていた。
それならばと、シャルティアは片手を振り上げて手中に光の塊を顕現させる。
今度は必中効果のある遠距離攻撃を目論みる。
「これで終わりよ〈清浄投擲槍〉！」
素早いマタタビでも回避は不可能。そして命中すれば絶命に至るだろう。
「〈生口の術〉大福招き猫」
マタタビが大地に手を翳し、墨色の独特な文字で魔法陣を発生させる。

そこから煙を巻き上げて召喚されたのは、文字通り大福のようにまんまるとデフォルメされた巨大な招き猫の像。

猫像は壁のように立ちふさがり、光の槍と相殺されるように消えていった。

（……厄介ね、これが忍。神官職の私では良く判らないけれど、今のは召喚魔法の忍術版かしら？）

忍は盗賊系の中でもアサシン関係のスキルを多く必要とするクラスだ。

直接戦闘能力を多少失う代わりに忍術を多く収める〈カシンコジ〉、逆に直接戦闘能力を高める〈ハンゾウ〉、または両者の間をとった〈シノビ〉などのクラスが存在する。

忍術は魔法と同じでMPを消費して発動し、その威力はその忍術に込めたMP量に依存する。

例えば第三位階相当のMPを込めて発動した〈生口の術〉なら《第３位階怪物召喚》とほぼ同じものと考えて良い。

だが一見すると、どの程度のMPが消費されたか相手には解からないのが非常に厄介な点なのである。

シャルティアはまじまじと相手を注視した。
一瞬でも気を許せば、マタタビはあっという間に詰め寄ってくる。ならば隙を見せないまでの事。
放たれる威圧感に気圧されて自分を見失ってはいけない。彼女は決して倒せない相手ではないのだ。
戦う者として生み出されたシャルティアは、戦闘においてあくまで冷静を失わない。蹂躙とは根本的に異なる行為だから。
自身に暗示をかけるように、念入りに気持ちを切り替える。

相手が、動き出した。
「〈炎弾の術〉」
太陽の縮小図の如き巨大な火の玉がシャルティア目掛けてやってきた。
躱せる速度ではあるが、まず間違いなく囮だろう。既にマタタビは移動している。
最適な逃げ道としてシャルティアが選んだのは空だった。

シャルティアの背中から生えている翼は飾りではなく装備だ。スキルにより強化された飛行速度は〈飛行/フライ〉より上。彼女が〈羊皮紙〉で飛んでくれば今度はシャルティアに軍配が上がる。

地上移動しか出来なさそうなマタタビには有効な手立てかと思われた。

しかしそれを待ち構えていたとばかりにマタタビの顔がニヤける。

また別の〈羊皮紙〉を取り出し盗賊スキルで発動させた。

「逃がしゃしませんよ、〈要塞創造/クリエイト・フォートレス〉」

「拠点作成系の魔法？」

瞬時に大地から、１００メートルほどの巨大な漆黒の重厚感のある円筒状の塔が地鳴りを上げて飛び出した。

マタタビは、そのまま塔の外壁を駆け足で登り上がってシャルティアのもとまで走り出す。

わざわざ足場のためだけにこんな魔法を使うなど、与えられた能力の知識しか持たないシャルティアでは驚く他ない。

完璧に、常識の埒外にいる存在だった。

「なっ！」
戸惑うシャルティアの間合いに肉薄し、マタタビはシャルティアの背中に飛びついた。束縛耐性のあるシャルティアに通用したということは、盗賊系のスキルで強化されている可能性が高い。
翼にしがみつかれ、飛行バランスが著しく崩れる。
マタタビは体制を組み換え、両翼を両手で引張り、背中を両足で押さえつける。
「クソっ離しやがれっ」
「せーのっ」
そのままシャルティアの翼は引き千切られた。
飛行手段を失い、二人はもみくちゃに取っ組み合い名がら真っ逆さまに地面へ落下していく。
「仲良くしましょうよ」
「〈ミストフォーム〉！」
シャルティアはとっさに幽体化のスキルを発動させ、マタタビの拘束から逃れることに成功した。

対し一人地面に降下するかと思われたマタタビだが、取り出したワイヤーフックを塔の積石の隙間に引っ掛け、もう一度壁面を駆け上がる。

「……やれやれつれないですね。スクロール〈霊体接触〉インヴィジブル・タッチ〉からの～」

マタタビが懐から大量の手裏剣を投げつけ続々とシャルティアの幽体に突き刺さる。

苦悶を上げて実体に戻ったシャルティアの口元からは血が垂れていた。

両者は再び地面に降り立って互いを見つめ合う。共に相手の隙きを、一瞬たりとも逃すまいとした緊迫した空気が漂う。

受けたダメージ量は大きいものの、試合の流れはマタタビに握られているようだった。

しかしシャルティアにとって見れば、「流れ」なんてまやかしだ。あと一発まともに攻撃をぶつけるだけでマタタビは負けるという事実は揺るがない。

素早いとはいえ徐々に慣れていけば、マタタビ相手に一撃を当てるくらいそれ程難しくはないだろうと予想する。

そんなシャルティアの落ち着いた態度に、マタタビは素直に感心を抱いた。
「ったく、想定していたより強いですね、シャルティアさん。」
「馬鹿にしてるのかしら？」
「いえいえ、見直したんですよ。貴方みたいなガチビルド纏っている奴なんて、大概はテンプレパクっただけの雑魚ばかり。モンスター相手なら武器振り回すだけで済むから、前衛技能をちゃんと身に付けたプレイヤーって凄く稀なんですよ？
それに貴方、一見頭が弱いように見えて、プレイヤースキルもいい線に行っています。アインズ様ほどじゃないけどね。
最初にやった挑発も逆効果みたいだし、これなら素直に不意打ちしとけば良かったな～。
まったく変なところで真面目なところが、あいつに……いやなんでもない」
「なんだか微妙に貶されている気がするのだけれど」
「まぁともかくです。シャルティアさんの強さはバランス良く組まれた能力と、それを活用しきる技能。
確かにこのまま持久戦にもつれ込めば、ビギナーズラックが決まって逆転される

可能性も十分あるね。」

（……こっちの戦術を読まれてる）

「だから簡単な話、その強みを殺してしまえばいいのさ。」

それだけ言って、再度マタタビはシャルティアの間合いに接近する。

とはいえシャルティアもいい加減、彼女の速度には慣れてきていたため簡単に懐へは近付けさせなかった。

刀とスポイトランスがぶつかり合う間、マタタビは空いた片方の手で別のアイテムを取り出した。

それはバケツ大程度の蓋付きの壺。それに特別魔力が感じられるわけでもない。

そのまま取っ手を掴んで、シャルティアの方へと振りまわした。

壺程度ぶつけられたところでシャルティアにはダメージは無いが、マタタビが只の壺を出すわけもない。半信半疑ながらもスポイトランスで殴りつけて弾いたところ、あっさり割れて中に入っている液体がシャルティアへとぶちまけられた。

（血液！マズイ、〈血の狂乱〉が）

「アウラに聞いたんです。
確かにその武器との相性上、自由意志のないマネキンには相応しい能力だとは思いますが、ＰＶＰでは些か致命的過ぎますよ？」

「ぐぅぉあああぁぁぁぁぁぁだめぇえええええおさえられなあぁぁぁぁあいいいいいいい」
たった今までは麗しき戦乙女の姿を保っていたシャルティアだが、この瞬間〈真祖〉本来のおぞましい姿へと変貌した。
殺戮衝動があらゆる思考を塗りつぶし、戦士は魔獣に成り下がっていく。
「肉体能力は上昇されちゃうけど、これまで戦って体感した肉体能力からして十分対処できると判断しました。
唯一厄介な飛行能力はさっき潰しちゃいましたしね」
「このぉぉぉおおよおぉぉううくもおおおぉぉおお」
「あははは、いくら威力があったってそんな大振りじゃあ当たらないよ」
空気すら引き裂くような連続攻撃がマタタビに向かってくる。

命中すれば即死必定だが、優雅に舞うようにその尽くを平然と躱されてしまった。
「それと一つ誤解を解いておきたかったんだけどさ、あなた私の攻撃力を軽視してるよね？
私のこの日本刀、武器属性なんだと思う？
答えは霊属性、つまり一番あなたに効き目の薄い属性って訳。
ちなみにこれ、製作が面倒なことで定評のある神器級なんだけど、お金持ちな私は同じ能力を持つ武器を全属分揃えているの。」
一撃必殺の雪崩を軽々避けつつ、マタタビは鼻息混じりに武器を取り出した。それは元から持っていた日本刀と瓜二つだった。
「ホラ見て全く同じでしょ？　ちなみにこれ、あなたの弱点の神聖属性ね。
……そろそろ終わりにするか」
先程使っていた刀を乱雑に地面に放り捨て、新たに取り出した刀を構えた。
隙きに塗れたシャルティアへ、神速の剣閃を浴びせ掛けられる。
「ぐうっがっががあがあああああああ！！！！！！！」
異形の絶叫が月夜に響き渡った。

刃と触れ合う肉から、「ジュウゥッ」という蒸発音が煙とともに流れ出て、神業とも言うべき速さと正確さにより、四肢は切断され眼球が切り取られていく。〈真祖〉の怪物には、達磨のような無様な姿だけが残された。

◆◇◆（視点変更）

「ぁかぅ……はぅ」

私はダルマの爪をぎゅっと食い込ませ首を絞め上げてた。気道が狭まり、辛うじて残っていたシャルティアの虫の息がさらに弱まっていくようだ。

もっともヴァンパイアに呼吸は不要だから、この現象の意味合いは少しだけズレている。

「まぁ、もちょっとだけ生きてもらわにゃならんのですけど」

彼女ほどではないが、私もだいぶ消耗してしまっていた。

私のHPは実質飾りみたいなもんだから良い、浪費しまくった消費アイテムもストック全体からすれば微々たるものだ。けれどMPの消費はかなり痛い。特に〈要塞創造/クリエイトフォートレス〉の燃費は結構悪く、使ったときの脱力感が凄まじい。

ユグドラシルにはMP回復アイテム等は存在せず、自然回復を待つしかないのが常識だが一応例外もある。他人から貰えばよい。

普通プレイヤー同士のMPのやり取りは、譲渡スキルを持った側が相手に任意で送りつける者なので、一人きりの私では不可能だ。しかしこれにも例外もある。

「スキル〈魔力泥棒〉」

職業〈トリックスター〉で会得できるこの〈魔力泥棒〉はその名の通り相手から一方的にMPを根こそぎ奪う事ができる。直接触れ続けることが発動条件だから、こうして無力化してから出ないと使えないのがちょっと不便。

ダルマの首を握る手首をつたい、力の波動みたいなものが私の中へ流れ込んでいった。

全部を吸収しきったので、ぽいっと地面に放り捨てる。

見ていてなんだか気の毒な気がしてきたので、さっさとトドメを刺してあげようとしたその時、いつかバーで飲んだ、甘ったるいお酒みたいな匂いが鼻腔に張り付いた。

「え？」

私は酔っ払ったように体のバランスを崩して倒れてしまった。
どういうこと？なんだか思考がまとまらない。これは……吐息？
遠距離からのスナイピングのスキルで狙い撃ちにされたのか。
でもこんな芸当できるやつが、どうして私の感知に引っかからなかった。
まさか、私の感知範囲がバレてるのか？範囲外ぎりぎりから吐息のスキルを発動させるなんて……
とすれば、考えうる相手は一人しかいない
「……うーん次はアウラさんかぁ～。折角仲良くなったのに……」
私の感知範囲の円周上全体から、何かが勢い良くこちらへと進んでくるのを感じ取った。
この世界では非常に高レベル、先程の人間たちとも比べ物にならない用な力量の魔獣たちがいっぱい近付いてくる。それは、いつか魔樹で感じ取った気配そのままだ
刀を杖にしてなんとか立ち上がった頃、魔獣軍団は私の周囲を取り囲んでいた。

その先頭で指揮を取っているのはアウラだ。子供ながら、視線だけで人を殺せてしまいそうな、強烈な殺意を感じ取れる。

多分、弟……妹分のシャルティアがやられて腹を立てたのでしょう。あれでも茶釜姉弟は仲が良い。窮地に駆けつけるお姉ちゃんなんて、一人っ子な私では妬けてしまいそうな光景だった。

「一応先に手出ししてきたのはシャルティアさんなんですよ？逃げる機会はあったのに、あの人そのまま居残りやがるから……」

私は悪いことをした子供みたいに言い訳じみた調子で白状した。

しかし、怒りが最高潮に登っている故でしょう。底上げされた平常心は一切揺るがず、こちらへの敵意に何ら変化はない。

多分シャルティアと同じで、挑発が逆効果になるタイプなんだろうと思う。

「全部知ってる。始めっから見てたんだ、あんたが洗脳される前から。

まったく……あんたなんか信じなければよかった」

少女の声にしては、やや低い声域。

今の彼女の気配には、非常に覚えがあった。あれは、怖いぶくぶく茶釜だ。

嫌になるような懐かしさ。でもどこか、憎めなくて愛おしい。
どうしてだろう？　もう随分前のことなのに
信じなければ……か。確かにそうかもしれない。
私が居なければ、あんなことには……そして今みたいなことにはならなかっただろう。
「そうですね、きっとそれが正解です。」
ここには居ない魔王さまへ向けて願う。
今度は、間違えないでくださいよ？

あともう一話だけオリ主が暴れるの続くから、書くのが苦痛。
いい加減にしやがれオリ主と言いたいところ。
※今回の捏造

・オリ主の能力

気に食わぬところ感想誤字脱字あったらよろしくお願いします

コメント荒れるかなぁ……

シャルティアへの対処は趣味じゃなくて合理性の追求なんだけども。グロ嫌いやし

悪神

更新遅れた言い訳
・新作ポケ●ン発売、
・未だ不明なアウラの戦闘設定の補完、
・俺ＴＵＥＥ！を書く俺ＴＵＲＥＥ！

これまでのあらすじ☆

1トブの大森林をアウラと散策。ザイトルクワエ撃破
2帰り道で漆黒晴天とシャルティアの気配を感じ取る
4シャルティアの身代わりで洗脳されたマタタビ
5洗脳したチャイナババア達は、色々訳あり暴走したマタタビに返り討ち
6シャルティアVSマタタビ

７負けたシャルティア。四肢切断で動きを封じられた上にMP根こそぎ奪われる
８とどめ刺される寸前で、魔獣軍団引き連れたアウラ登場

※ちなみに今回登場するアウラのモブ魔獣のデザインは、まんまポ●モンのパクり

※更にいうと、マタタビの捏造忍術もN●RU●Oのパクリです
駄目な方は即座にブラウザバックすることを推奨します

カルネ村へ向かっていく者たちと、洞窟内で暴れている存在、マタタビから計二種類の１００レベルの報告を受けたアウラ。最近実質的支配地として治めたカルネ村のほうが緊急性が高いということで、ひとまず二人でカルネ村側の１００レベルを監視しに行くことを決断する。

より隠密能力の高いマタタビが接近し、遠視に優れたアウラが遠距離で監視するという手筈を組み、二人は別れて行動することになった。

ところが、監視していた部隊に、突然現れたシャルティアが急襲を仕掛け始めて様子が一変する。

シャルティアに謎の光弾を打ち込まれる寸前で姿を表したマタタビがシャルティアの身代わりになった。

直後は様子がおかしかったマタタビだが、普段の間抜けた雰囲気を一変させたかと思うと、洗練された手際であっという間に敵部隊を殲滅させる。そこまでは良かったのだが、何故かその後シャルティアと戦闘を始めてしまったのだ。

高速移動で斬り合う二人の速度では、流石にアウラのスナイピングでも捉えきれない。

一旦手持ちの魔獣を集めてから奇襲援護を仕掛けようとマタタビの感知範囲から退避したのだが、魔獣を集めきった時シャルティアは既に瀕死状態だった。

これほどの短期決戦で守護者最強のシャルティアが追い込めれることをアウラは想定していなかった。

シャルティアへとどめを刺す寸前に出来た僅かな隙を狙い、アウラは〈吐息〉でマタタビを狙い撃ち酩酊状態にしてから急いで魔獣を動かしマタタビを包囲したの

であった。

・・・・

・・・

・

「一応先に手出ししてきたのはシャルティアさんなんですよ？逃げる機会はあったのに、あの人そのまま居残りやがるから……」

「全部知ってる。始めっから見てたんだ、あんたが洗脳される前から。まったく……あんたなんか信じなければよかった」

アウラの中には最悪な形で裏切られた期待感への失望、友人を殺されかけた怒り。けれども……

「そうですね、きっとそれが正解です。」

重みの篭った言葉でマタタビは強い同意を示す。まるでアウラの思考を遮ろうとしているようにも思えた。

「さ、そろそろ始めましょうか」

バッティングフォームのように刀を立て、マタタビは半身で刀を構える。剣先の

間合いには濃厚な殺意だけがただ渦巻いていた。

◆◇◆

トブの大森林近郊（マタタビ）

（よりにもよってアウラさんだなんて、二重に最悪……くそ）

マタタビは心の中で力なく嗤う。ケットシーには相性最悪なビーストテイマーの〈吐息〉の効果で、思考が霞がかかり、正常な機能を著しく侵されているようだった。

慌てて解毒のポーションを取り出し体に叩きつける。酔い覚めの気分は最悪で、これが俗にいう二日酔いなのだろうかと考えた。

気付けば周囲には、アウラと彼女が従える魔獣たちで包囲されていた。地上だけではなく夜空にも、翼を持つ者や羽虫の群れによって閉ざされている。圧倒的数の暴力が視界いっぱいに広がっていた。感知によると地中にすらもワーム系やモグラ系のモンスターが蔓延っている。

４πステラジアン全体から徹底的な包囲が完成していた。
これが階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラの完全戦闘態勢なのだろう。
大森林をともに探検した時の面倒見のよい風情はどこにも残っていない。それが昨日だったか一昨日だったか、更にもっと前だったかは判然付かないが、仲良くなった人から向けられる敵意には、マタタビでも流石に堪えた。しかし、敵ながら同情されるよりは余程マシかもしれない。
もっともそんな感傷は、完成された戦闘マシーンには一切関係ないことだ。
邪魔な感情だけがピンポイントで溶けて消えていくのがわかる。
刀を構えると、思考形態が戦闘時のそれへ半強制的にシフトされていった。
アウラの戦闘力考察を開始する。
〈地味子のメガネ〉の能力測定による大雑把な能力分析によると、アウラはビーストテイマー系とレンジャー系の二種類に特化した職業編成のようだ。
特にレンジャーの中でもスナイパーやシューターを取っているらしく、回避が得意なマタタビでも必中コンボで〈吐息〉を狙われると致命的だ。
本人に近づいて叩くには、遠距離攻撃に注意しつつ総数１００体からなる魔獣軍

団を潜り抜けなければならない。回避速度に自信はあるが、１００体の猛攻を躱せるかはわからない。

アウラはマタタビにとってシャルティア以上に厄介な相手なのだが、そんな能力編成を組んだぶくぶく茶釜の真意なぞ今更知りようもない。ただ恨めしく思った。

（とりあえず、シャルティアのトドメは諦めるかね）

ほぼ無力化した状態だ。アンデットであるシャルティアには、MPが空である現状有効な回復方法は存在しない。

ともかく今は、目の前の相手に隙を見せるわけには行かなかった。

先程のシャルティア戦でもそうだったが、自律思考を獲得したＮＰＣの戦闘技術というのはユグドラシル内一般の戦術体系とは少しズレている。

フレンドリィファイアやソニックブームの有無など、この世界特有の物理法則を想定した戦い方を知っていること。使用する武器やスキルに関する技能が完全習熟されていること。反して戦闘行為への経験が圧倒的に不足していることなど。

例えて言うなら、ドライビングテクニックは完璧なのに、交通マナーを理解していないようなちぐはぐさがある。

うかうか信号機で止まってたら、相手に追い抜かれてしまうなんて事があるかもしれない。
（悠長な気もするけどまずは様子見かな。）

「突撃！」
アウラの発破から、一切に魔獣たちが襲い掛かってきた。

一角獣の突進、複眼怪鳥の滑空を、バッティングフォームの日本刀で迎撃。
蝙蝠からの衝撃波攻撃、巨大マンモスのじならしに対し、希少金属ダイナマイトで相殺する。
こちらは最善手を淡々とこなすが、息を付く暇すら与えず追手は次から次へやってきた。
魔蜂の毒針、ケルベロスの咆哮、魔眼の大蛇、３０ｃｍ台の蛍蛾の毒鱗粉、サボテン型植物モンスターのミサイル針、鉄装甲をかぶった怪獣の尻尾撃ち、火

狐の火炎車、電気鼠の雷撃、二足歩行クワガタのギロチンバサミ、

ただ頭数があるだけではない。マタタビの呼吸をずらすように2，3手先まで組まれた多様な連携攻撃が放たれた。

数の利点を活かし、各個体のダメージ量を分散させるようにヒットアンドアウェイを繰り返していく。

ユグドラシルのビーストテイマーでもこれほどまでに微細に魔獣をコントロールできる者はマタタビの記憶にはない。

以前、マタタビはアルベドに、ＮＰＣの戦闘技術について聞いたことがあったのを思い出す。

その時のアルベドは「ナザリックのシモベは皆、与えられたすべての力をあますところなく使えるようになっている」と答えていた。今ならばそれは非常に恐ろしい事だと理解できる。実践経験が蓄積されていないにせよ、一部プレイヤースキルに於いては究極的高みにあるということではないのか。

ましてやアウラを創造したのは粘液盾の二つ名を冠するぶくぶく茶釜だ。ホワイトブリムに創造された一般メイドが絵描の技術を持っていたならば、指揮官として

ユグドラシル屈指のプレイヤースキルを持っていた彼女の因子を受け継いだ場合、一体どうなるだろうか。

そろそろ攻勢に出るつもりでマタタビは、自身の習得忍術の中でも珍しい全体攻撃型の技を最大威力で発動させる。

「〈爆炎陣の術〉！」

出力最大の忍術は第10位階魔法よりも基礎威力は上である。テイマーのスキルで強化されたといえど、低レベル帯の魔獣ならばまず殲滅できる筈だ。

間もなく爆炎が噴き出されて周囲一体を焼き尽くした。

ところが魔獣の断末魔は一向に聞こえてこない

（そりゃ範囲攻撃の対応も出来るか。マネキンじゃないんだから）

予めマタタビからの範囲攻撃のタイミングは読んでいたらしい。術が発動する間際に高レベルの魔獣を前方配置して攻撃を防いでいたようだ。

アインズやシャルティアならともかく、マタタビの魔法攻撃力では80レベル以上に強化された魔獣では範囲攻撃で倒すことはできない。そもそもマタタビの能力

編成ではモンスターを相手取ることを全く想定されていないからだ。そのことをアウラに教えたのは他ならぬマタタビ自身である。

炎の海の干潮際を見計らい一転して、先程の猛攻がお遊びだったような一際大きな攻勢をアウラは仕掛ける。

地面から奇襲する八爪口のワーム、自爆し石礫を飛ばす顔岩、回転突進する毒ハリネズミ、鼻から砂埃を巻き上げるカバ、氷柱の鉾を構えるホッキョクグマ、

追尾する銀色のトビウオ、溶岩の体を持つ蝸牛、丸めた耳でパンチを繰り出す兎、粘着糸を吐き出す巨蜘蛛、目から怪光線を放つ蝶、背に雷雲を背負う虎、

瘴気を垂れ流すムジナの動物霊、甲羅に放水ランチャーが取り付けられた二足の水亀、巨大な舌をブンブン振り回すピンクのカメレオン、無数の毒手を操る赤目のクラゲ、

岩の表皮を持つTレックス、綿雲の翼をした歌い鳥、背中にラフレシアを背負う緑の大蝦蟇、鋼の翼を振るう鷹、絶えず自壊する泥の人形、骨棍棒を振り回す骸骨のマスク

（……こいつら一々相手にしてたらキリねーですね）

消耗戦を繰り返していくとなるとこちらのほうがやや分が悪い。消費アイテムを浪費して持久戦にもつれ込むこともできるが、ナザリックから援軍を呼ばれる可能性も考えてなるべく早期に決着をつけたいところだ。

戦士職や魔法職の戦闘はMPとHPの消費合戦という節があるが、アサシンは違う。不意打ちでも陽動でも罠でも良い、とにかく相手の隙を作って一方的にこちらの勝ち筋を押し付ける短期決戦を最も得意とする。

しかしこの対面は非常に不利だ。先手を取ったのはアウラだし、マタタビ一人では陽動も難しい。これほどの数を相手取ると分っていれば事前準備で戦場に多重トラップでも仕掛けておきたかった。

いつものマタタビなら得意の逃げ足で即座に撤退するところだが「精神支配状態」らしいからそうも行かない。勝ち筋が全くなくならない限り。

「〈レインアロー/天河の一射〉」

更に遠方から無数の光の矢がマタタビをめがけて殺到してくる。

アウラからの遠距離射撃援護だろう。状態異常や束縛系の追加効果持ちで威力はそれほどでもないが、一撃でも当たればマタタビには致命的だった。

回避しようと移動するが、ホーミング効果が含まれているらしい。軌道を曲げて追尾してくる。

マタタビは自身のアイテムボックスに手を突っ込んだ。

彼女のアイテムボックスは戦闘に最適化された特殊な整頓がなされており、欲するモノがあれば瞬時に取り出すことができる。これはアイテムボックスが乱雑なモモンガの反面教師として考案された、マタタビオリジナルのテクニックである。

「〈アクティブデコイ・フレア〉起動！」

マタタビの体から幽体離脱するように、半透明の分身体が複数体現れ四方八方散り散りに走り去っていく。すると光の矢の束は分身体の方へと向かって分散し、やがて分身が突進した魔獣たちへと炸裂してしまう。

魔獣の苦悶、そして奥にいるアウラの眉間が寄っているのが伝わった。

このアイテムはホーミング攻撃に対し分身体のデコイを放って誘導する事が出来

るのだが、誘導先がフレンドリィファイア有効かつ敵味方問わずランダムなのがタマに瑕。

MPを消費する癖に一対多を想定した混戦でなければまず使い道はないという不人気アイテムだ。マタタビはこれを非常に愛用している。

（本丸抑えてちゃちゃっと終わらせますか！）

穴が出来た包囲網を抜け出て、一直線にアウラの間合いに直進するマタタビ。しかし、アウラの周囲には〈吐息〉の酩酊効果が広がっていたらしく、ポーションで抵抗力を上げた状態でも一瞬怯んでしまう。

アウラ一番のお気に入り魔獣、フェンとクアドラシルが主を守らんと立ち塞がる。手榴弾を二発取り出し二体の顔元へ投げつけ爆発させるが、近距離であったためにマタタビも一部爆風にかすってしまう。ゲーム時代ではあり得ない自爆ダメージだったため、思わぬ不意打ちだった。

その一瞬の間で弓をしまい、アウラが居合いの如く腰から抜き出したのは青白く輝く鞭。これまたマタタビには最悪の武器チョイスである。

（茶釜ぁ!!絶対私のことメタってるだろ！）

自意識過剰を通り越して半ば確信を抱くに至る。

マタタビの直接戦闘能力は規格外の素早さに大きく依存している。物理防御力は50レベル台であるため、相手の攻撃をすべて躱して自分は急所に当てるという戦法を取る他ない。

並の前衛であればある程度は通用する戦法なのだが、鞭系の武器だけには最悪の相性だった。

人力で操る武器の中でも、鞭は史上最速の攻撃速度を有する。マタタビの知るホモ・サピエンスでもうまく扱えば最高ヘッドスピードは音速域だ。一方癖の強い武器でもあるため精々サブウェポン止まりで、かつてユグドラシル内に鞭のプレイヤースキルを極めた者は見たことがなかった。

しかし、ナザリック地下大墳墓第６階層守護者：アウラ・ベラ・フィオーラは「与えられたすべての力をあますところなく使える」技能と、レベル１００の超常的身体能力を持つ。

彼女の鞭術を全て回避するなど、生身で針穴をくぐり抜く方がまだ易しかろう。

「ちょっと使いたくなかったけど……スキル〈瞬間換装〉！」

体表を覆っていた学生服が掻き消え、代わりに繊細な刺繍を施されたメイド服の姿に変身した。

〈メイド・オブ・ヘル・アルマゲドン／メイド服は決戦兵器〉

普段はただの作業着に成り下がっているが、元々はマタタビがギルド：アインズ・ウール・ゴウンから報酬として与えられた世界級に匹敵する最強防具。

隠形能力の不能、そして素早さを平均値にまで減少させてしまう代わりに、耐久力と総合耐性を限界まで上昇させるという破格の性能を持つ。

この装備を纏ったマタタビの攻撃力は前衛戦士としてやや劣るものの、盾役としては十分な防御力をほこる。ただし防御系のスキルは一切持っていないので、本職に比べると性能面では劣ってしまうのだが。

しかし、職業レベルを野伏とビーストテイマーに割り振ったアウラを屠るにはこれで十分だ。

「効かないっ!?」

アウラから、神器級の鞭の連撃が暴風の如く押し寄せる。しかし元来攻撃力の低い鞭では、今のマタタビに有効な打点とはなり得ない。

〈吐息〉のスキルで陽動を仕掛けるも、常識外に広域なメイド服の耐性の前に防がれ、アウラは驚愕以外の反応を示せなかった。

「終わりです」

子供の細い胴体の僅かな中心部、小さな心臓へと目掛け必殺の斬撃が叩き込まれようとしたその刹那、鳴り響いたのは肉を抉り切り裂く音ではなく、硬質同士の衝突する金属音だった。

狩人と獲物の二者、突然の乱入に心を一つにして息を呑む。

先程の自身の失態を非常に悔やむ狩人。

獲物は間一髪で生き残った安堵と、反転し「何故逃げなかった」という怒りを露わにした。

「ちっ、文字通り死に損ないですね」

マタタビの一撃を防いだのは、儚い輝白色の光子が凝固して象られた月光の化身。シャルティア・ブラッドフォールンそのものだった。

〈エインヘリアル/死せる勇者の魂〉

発動者のステータスと武装を完全コピーした分身体を生み出す能力。魔法や特殊

スキルは使えないとは言え、単純に１００レベルクラスの敵を召喚する能力なのだから弱い筈もない。しかし不可解な点がある。

瀕死寸前のシャルティアでも一応は発動できるが、隙を見計らって分身体に自身を担がせて逃げる事も出来たはずだ。

何が彼女を目覚めさせたのか、何故逃げなかったのか。

浮かび上がった仮設を思い、自分が意外にロマンチストなのだなと自嘲した。

（……なんと恨めしい姉弟愛でしょう）

火力不足に加え、先程の戦闘でマタタビの剣技が見切られてしまったらしい。シャルティアの分身体を薙ぎ払おうにも、一撃一撃を堅実に防がれて上手くいかない。この場合異常なのはシャルティアの学習速度だった。

特殊技術が使えない点も〈血の狂乱〉の誘発が出来ないのでかえって厄介だ。

「これでもくらえ！」

起き上がったクアドラシルとフェン、破れかぶれの体当たりが横からマタタビを直撃した。数十メートル吹き飛ばされて、受け身も取れずに大地へと衝突した。

「……痛い怖い逃げたい死にたくない嫌だよぅ……」

実質レベル１００二人の連携。ゲームのＰＶＰと異なり、実際に死ぬ可能性を秘めた本気の殺し合いだ。有利対面ならまだしも、１週間前までただの少女だったマタタビには恐ろしくてたまらない。

だがそんな思いとは裏腹に、洗脳効果によって思考はたちまち合理化されていき、感情は闇夜に溶けて消えてしまった。

◆◇◆

（アウラ）

１００体もの魔獣による包囲網をいともたやすく潜り抜け、鞭攻撃や〈吐息〉を物ともせずにあっという間にこちらの命を取りに来たマタタビ。

シャルティアのエインヘリアルに助けられなければまず死んでいただろう。それほどまでに絶望的で恐ろしい相手だ。

しかし、フェンとクアドラシルがマタタビを吹き飛ばしたのを見て、またダメージを受けたマタタビが一瞬元の少女に戻ったのを見て、勝機が見えた気がした。

このまま連携を組んでいけば勝てるかもしれない。

だが期待を打ち消すように突然エインヘリアルはアウラの手首を強くつかんだ。その手は酷く強張っている。

「え、何？」

分身体の造形はシャルティアそのものだが、顔の表情を表すことも意思疎通することも不可能である。ただ親友としての勘で、恐怖しているのではないかと思った。

けれどそれこそアウラには不可解だ。マタタビを仕留めるチャンスは今しかないだろう。

（……いや違う）

相手を見ると、これまで戦闘中僅かに垣間見えていた彼女の感情意識が、最早完全に抜け落ちている。

吸い込まれそうな真っ暗闇の瞳孔と、鋭く月光を反射する艶やかな黒髪。思わず見とれてしまいそうな恐ろしくも美しい立ち姿。

意思を持たない「死」という概念そのもののような濃密な気配、死を慈悲とするアインズとは正反対の超理不尽的存在だけがそこにはあった。

先程戦ったシャルティアはこれを知っていて、だからこそいち早く感じ取れたの

だろう。

納得して瞬時、示し合わせるように目を通じ合わせる。エインヘリアルは掴んだ手首を振り上げて、アウラのことを思いっきり投げ飛ばした。方角は言うまでもなくシャルティアの本体だ。

「〈火遁・鳳仙花〉」

数発の炎弾がアウラを撃ち落とそうとするが、スポイトランスを投擲したエインヘリアルに妨害される。

エインヘリアルは小手越しの腕を構え、そのままマタタビへと襲いかかった。

「……」

小手と日本刀が激しくぶつかり合う。神器級武器と伝説級武器ではやや分が悪く、やはり破片が散っている。

飛ばされるアウラは後方から激しい金属音が鳴り響くのを無視して、シャルティアの方へ向かっていく。

四肢と両目を切り裂かれた無残な真祖の姿を改めて目にし、マタタビへと強い憎悪が沸いたがそれを振り払った。

状態的に一番適している姫様抱っこの姿勢で抱え込み、フェン以外の魔獣を全てマタタビの方へと回した。

「みんな突撃！フェンは私達を乗せて、逃げるの！」

魔獣の大群を全て陽動として使い捨てる判断にビーストテイマーとして心が傷んだが、今はなりふり構ってはいられない。

今回の件をどうにかしてアインズに報告しなければ、恐らくナザリックそのものが危ない。あの存在はそれが出来るだけの力を持っている。

のしかかる勢いでフェンに跨り、背中を蹴って逃げるよう指示する。スタートダッシュをかけたところで、後方から凄まじい爆風と爆発音が追ってきた。

振り返ると魔獣達やエインヘリヤルとマタタビが熾烈な攻防を繰り広げている。あれで倒せるかと言われれば怪しい気もするが、足止めはできている。とにかく今を逃げ切れればそれで良い。

そう思っていた矢先、〈メッセージ/伝言〉みたいなテレパシーが脳へと直行した。

マタタビの声だった。

『〈Ｗｅｌｃｏｍｅ ｔｏ ｔｈｅ ｓｔｏｍａｃｈ ｏｆ ｔｈｅ ｇｉａｎｔ.〉我が胃袋へ

とご招待〉』

起伏なく、ボソリと呟やかれたそれは、歓迎というより呪詛のよう。

肌がピリッと逆立ち、「何かが来る」と本能的に身構えた。

最初の異常

引っ切り無しだった剣戟、爆音とそれに喘ぐ魔獣の唸り、大地が抉られる音。

それらが一斉に沈黙へと閉ざされた。

あまりに常軌を逸した現象に、何が起きたのかと振り返るとコールタールみたいな暗黒の波が既に戦場の一切を飲み込んでおり、夜すらも闇へと侵蝕せんと押し寄せてくる。間もなくアウラ達も飲み込まれてしまう。

（これは！）

するとそこは、音も光も匂いも無い、死後のような世界だった。

◆◇◆

異形種：ケットシー：マタタビ

約10年というロングセラーなＤＭＭＯＲＰＧユグドラシルに於いて、発売当初

から最古参のプレイヤーにあたる彼女の、現在の実年齢は19歳。

旧クラン：ナインズ・オウン・ゴールに加入した当時はメンバーの中でも最年少。幼女だった

この話の恐ろしいところは、当時の彼女が後にＤＱＮギルドとして名を馳せるクラン：ナインズ・オウン・ゴールの悪質PK戦術を貪欲に吸収していったという点だ。ぷにっと・萌えやたっち・みーを筆頭に、数多の上級プレイヤーの戦闘技術を幼少期から目の当たりにしてきた彼女の境遇は、まさにPKの英才教育といっても過言ではない。

そういった数々の影響を受けた彼女のビルド選択は「モンスター戦闘は切り捨て対プレイヤー特化」という、ユグドラシル本来の楽しみ方から大きく逸脱したものとなった。クランを離れた彼女が、後のギルド：アインズ・ウール・ゴウンの化身とも言うべき能力を得るとは皮肉な話だが。

脱退後の彼女は、様々なギルドに忍び込んで荒らし回るギルド荒らしと、人気のモンスター狩場に大量の即死系トラップを仕掛けやってきたパーティを尽く壊滅させる悪質pkをソロで繰り返し行っていった。蓄積された財力は中小ギルドを優に

超えて、個人規模として規格外な域に達する。

そんな彼女の職業レベルの中に、ユグドラシルの元ネタの北欧神話の三代神の一柱、悪神ロキを示す〈トリックスター〉というものがある。

このクラスの会得条件は『単独潜入によるギルド武器破壊回数累計61回以上』。

職業設定は『数多の悪行と悪戯により世界を引っ掻き回したユグドラシルの悪神』となっており、運営からの害悪プレイヤー認定と言っても過言ではない。

最大レベル5で会得するスキルの名は、《Ｗｅｌｃｏｍｅ ｔｏ ｔｈｅ ｓｔｏｍａｃｈ ｏｆ ｔｈｅ ｇｉａｎｔ》

使用者が単独で、なおかつ95レベル以上の者を二体以上を相手にしている時のみというピーキーな条件だが、その効果は凶悪だ。

発動時半径２００メートル内にいる効果対象者の五感を全て奪い取る能力だ。

視覚だけでなく嗅覚、聴覚、感知能力も封印。

更にアウラの魔獣等にかけられているような強化効果や〈メッセージ/伝言〉などによる通信効果の完全無効化すら引き起こす。

結果連携が取れなくなるどころか、互いの存在を認識できず同士討ちが頻発し甚

大な被害が発生することになる。

そして加えて効果対象者が自然回復する分のHPとMPは発動者へと吸収されていく効果があるので、多数が被弾してしまえば量的攻撃による消耗戦も困難。

これこそかつて１５００名によるナザリック地下大墳墓侵攻の際、その内50名を「単独」撃破したマタタビの対集団戦最凶の切り札である。

◆◇◆

（マタタビ）

ただ一つだけこのスキルには重大な弱点があって、それは五感が閉ざされた暗闇の中でも何故か使用者の姿だけは見えるということだ。

なのでこのスキルを食らった連中は皆私のほうを注目する。

でもこれだけで十分戦況はひっくり返るのだ。

言うまでもないことだが、指揮官のいる百獣の軍団と、ただ獣が百体居るのとでは戦闘能力に絶望的なまでの開きがある。ましてアウラの強化スキルを引き剥がされたのだから、戦況の悪化は悲惨の一言に尽きるだろう。

緻密な計算によって行われていた巧みな波状攻撃は無謀な神風特攻に成り下が

り、回避を繰り返すだけでそこらじゅう同士討ちの火柱が立つ。壊滅するのも時間の問題だろうが、それ以上に包囲網が穴だらけになっていたのでマタタビが相手をする理由がもはや存在しなかった。

アウラとシャルティアを追いかけることに注力する。

一方アウラ達側は、遮断効果により騎乗用のフェンが使い物にならなくなったため、シャルティアを抱えて足で逃亡する他無くなっていた。

触覚だけは辛うじて生きているので、元から抱えていたシャルティアとはぐれる事はなかった。ただ周囲風景が見えなくなっているので、木々や岩に衝突しながら少しずつダメージが蓄積されている。

こちらが魔獣の幕が薄い部分を縫うように進んでいくと、そこを待ち伏せの如くエインヘリアルが槍による刺突攻撃を仕掛けてきた。

咄嗟に半身を反らせて回避するが、その時相手の武器に違和感を覚える。

バックステップで距離を取り、改めて相手の方を観察した。

元々持っていたコピー武器は放り投げたときに消失している。今エインヘリアルが持っていたのは、本体の四肢切断の際に消失した本物のスポイトランスだ。どさ

くさにまぎれ上手く拾ったのだろう。
相手はこちらを迎撃しようと、じっくりこちらを伺いカウンター体勢を組んでいる。
時間稼ぎであろうことは明白だが、防御重視のメイド服ではエインヘリヤルを振り切れない。逆に学生服では〈吐息〉と鞭を使うアウラに勝てない。
どうしたものか。
「〈烈風刃衝〉」
片手を翳し、乱回転する空気の塊を発生させて投げつける。
対しエインヘリヤルは直撃すれすれのところをスポイトランスで受け流し、リニアを彷彿させる猛烈な勢いで突進を仕掛けた。
槍の切っ先は一点の曇なく頭部を目指してくる。
比類なき防御性能を有する防具ではあるが、メイド服という形に拘った結果頭部だけ無防備なのだ。
「〈不動金剛盾の術〉」
虹色に輝く六角形の盾を出現させ防ぎ、逆に盾の硬度を利用してそのまま体当り

する。
続いて装甲の右肩口の隙間へ刀で突き刺そうとするが、相手の左手に刀を掴まれ動きを封じられた。
隙アリと言わんばかりに槍を振り上げて攻撃してくる。しかし端から頭部を狙ってくると判っていれば躱すのは容易い。
決死の一撃は体幹をずらす極小の動作によって目標を見失い、宙になびく黒髪をかするのみ。
この一連の流れには憶えがあった。
直後シャルティアから放たれる膝蹴りを、目視するまでもなく膝で受け止める。
鮮血の装甲と純白のスカートが交差しけたたましい金属音が響いた。
掴まれた日本刀を捨て、数多の神器スペアからギラついた刀身のサバイバルナイフを取り出した。
そのまま首元を狙いとどめを刺そうとするが、遠距離から放たれる光の矢に被弾してしまう。
ダメージはないものの、ノックバック効果により吹き飛ばされ大地に叩きつけら

れた。
地面から這い上がり遠視すると、シャルティアを抱えながら器用に弓射撃するアウラの姿が確認される。

（遮断状態で援護射撃ですって!?）
驚きのあまり、薄れかかった感情が再び息を吹き返した。
今のアウラ視点からすれば、虚空に武器を振るうマタタビの姿しか見えず、斬り合っているのがエインヘリヤルかさえ不確定のはずだ。
つまりマタタビの動きを見るだけで状況を悟り、絶妙なタイミングを見計らって矢を放ったということになる。
そして矢の追加効果がノックバックであるという点がミソだ。
仮に状況が掴めたとして、それでもこの状況での援護射撃では、姿が見えないエインヘリヤルに被弾する可能性も考慮すると愚策でしかない
しかしノックバックであれば、たとえ被弾した場合もマタタビのナイフによる致命傷を回避することは出来ただろう。

（ＮＰＣ天性の戦闘センス、なまじ柔軟性に富んでいる分下手なプレイヤーより厄介かもしれない。もしこれが実戦経験でも得た暁には……いや違うな）

先程のエインヘリヤルとの斬り合いを思い出す。

あの時彼女が繰り出した膝蹴りは、マタタビが槍使いの少年に使ったのと全く同じ動作だった。その時に覗き見たのを真似たのだろう。

当の本人にそれを使う辺りがまだ甘いものの、この戦闘中にも貪欲に経験値を蓄積させていると考えると恐ろしいものだ。

（シャルティアが前衛で時間を稼ぎ、逃げるアウラが片手間に援護射撃。

これじゃ茶釜とエロ翼王のあべこべですね。ならそれを利用してやろう）

「〈火炎弾〉！」

口から龍を象る巨大な灼熱業火を吹き出す。

ＭＰ吸収効果に物を言わせた最大出力なのだが、放つ方向はエインヘリヤルから右に大きくそれている。

一見意味不明の行動だが、半端に回る頭で察した彼女はむしろ自分から炎龍へと飛び込んだ。

そっちがアウラとは逆方向だとは知らずに。
そして走るアウラへと距離を詰めようとダッシュするものの、今度は追い付いてきた魔獣軍団、――もとい魔獣の群れが襲いかかってくる。
こちらへの対処は簡単だ。指令塔はもう居ない。
「邪魔っ！〈爆炎陣の術〉」
風に乗った火炎が渦巻きを作り出し周囲の魔獣を一掃する。盾役は不在で、尚且つスキル強化が剥がされた分魔法防御も低下しているので先程より圧倒的に被害が多きい。
こちらを遠ざるために走りながらアウラがノックバックアロー連射するが、こちらは魔獣の方へ被弾するような避け方で回避して距離を詰める。
無駄を悟ったアウラはただ走ることに集中しはじめたが、追いつかれていく恐怖と絶望感は〈読心感知〉を持つマタタビには筒抜けだ。
ようやく囮攻撃を悟ったエインヘリヤルも追いかけてきたが、彼女の召喚時間も無制限ではない。
シャルティアとアウラにトドメを指すまであと十数メートルまで追いつき、あと

もう少しでというところ。
しかしまたしても、今夜三度目の妨害がマタタビへと去来した。
突如強大な敵意がマタタビへと降りかかったのだ。
（援軍？……いや違う。こいつ、気配がしない）
記憶では、マタタビの気配感知を潜り抜ける芸当ができるＮＰＣはナザリックには居ない。
だが半径１００メートル範囲の〈読心感知〉で敵意は感じ取れるのに、何故か更に広範囲な別の感知能力に一切反応は無かったのだ。
つまり考えうるは、ユグドラシル由来ではないこの世界独自の異能による気配遮断能力だということ。
少なくともそいつはプレイヤーではないが、何故かこちらに強い敵意を持っている。
（……結構まずいかも）
であるならどうするか。最善手は、間もなく屠れる筈だった眼前の獲物は見逃すということ。

さもなくば、こちらがとどめを刺している隙間を狙われる可能性がある。

死ねば最悪、誰も始末することが出来ないで、最悪よりマシな選択肢をマタタビは選んだ。

「ッチ、スキル〈瞬間換装〉」

舌打ちしつつ、メイド服から使い慣れた神器学生服へと着替え直す。

「……まったく、つくづく命拾いしましたねあなた達。そうね、良ければアインズ様によろしくって伝えてね」

眉間に皺を寄せ憎らし気な視線で睨んだ後、マタタビはそう言い捨ててアウラ達の前から姿を消した。

◆◇◆

（アウラ）

結局マタタビが二人を見逃した理由は考えてもわからなかった。謎の暗黒空間は、彼女が姿を消して間もなく解除された。

走りながら振り返ると後方には、アウラの魔獣の死骸がこれでもかと積み重ねられている。

生き残ったのは80レベル以上の極小数だけで、更にそれすらほぼ瀕死状態であるために、マタタビの脅威を想起させる材料にしかならなかった。

「うぅ……なんで！」

階層守護者二人がかりでも惨めに敗走する他ないという事実がアウラに死にたくなる程の屈辱を与え、絞り出すような涙を流した。

何事もなく順調に帰っていれば、魔樹を滅ぼし薬草と木材資源を持ち帰ってアインズから褒められたかもしれないというのに。

常時の頼れる姉御気質は「自分がちゃんとしていれば」という自責を一層強めるばかり。

唇を噛み締め、重体のシャルティアをぎゅっと抱きしめる。頬から垂れる雫がピタッとシャルティアの頬へと垂れる。

それに応えようとパクパク口を動かし反応するシャルティア。しかし潰された喉

には、掠れた空気の流動しか出すことが出来なかった。
「バカ、無茶しないで。もうすぐナザリックよ」
冷たい肌から感じる温もりが、今は愛おしくてたまらなかった。

ちなみに最後にやってきた謎の気配は、評議国の鎧ということにしています。
今後登場させるかは決まっていません。もし王国編を書きおえられたら登場させようかな？無事行けたらいいんだけど……
あとオリ主の切り札スキル、あれは単独で50人斬り出来る糞チート能力です。
作者の文章力の問題でめっちゃ分かり辛いですけどね。
どうしても気になるという方は、これから活動報告に詳細載っけますんでそこからどうぞ

感想、気に食わぬところ、誤字脱字があればどうぞコメントしてくださいお願いします

次回ようやくアインズ様が主人公がを始めます。

幕間

身内では雑魚キャラ臭漂わせておいて、敵に回ると強キャラ化するマタタビとかいう無能オリ主

おそらくオバロオリ主界隈でも屈指の無能っぷりでしょうな。

幕間だから今回は短めです。

カルネ村空き家　（アインズ）

あれからアインズとナーベラルは、名指し依頼によりある人物をカルネ村まで護衛をすることになった。途中色々あったがここでは省略する。

ともかく現在は、カルネ村の空き家に宿泊することになったということだけを押さえておけば良い。

天井から吊り下げられた蛍光ランプの弱々しい灯火は誘蛾の羽ばたきによって見え隠れし明滅を繰り返している。薄汚れた白塗りの壁の所々、拭いきれなかった茶色いシミが残っており、見るものが見ればそれが何なのか理解できるだろう。

鈴木悟ならば怖くて一泊するにもご遠慮したいところだが、幽霊を恐れる死の支配者とはいかにも馬鹿らしい。

絶対支配者休業中のアインズは、硬いベッドに腰掛けて溜息……のような何かを零した。

不潔感が嫌なのか、それとも主のそばでくつろぐことを躊躇っているのかわからないがナーベラルはドアの横で仕えるように立ち尽くしている。

宿泊と言っても夜はまだ長く、やることは別にない。沈滞したようななんとも言えない空気の中を二人は過ごした。

（あー暇だ、やっぱりナザリックに帰るべきだったか？）

部屋は当然密室なのでやろうと思えば転移で帰還することも当然出来たのだが、そもそも冒険者となった本音の理由はナザリックのストレス空間から逃れるためなのだ。

そう考えるとナーベラルがついて来たのは本末転倒だったが、あの場所から距離を置いただけでも意外と気分が軽くなった気がする。これまでたった一人で維持し続けてきたナザリックだというのに、それこそ矛盾しているかもしれない。

暇にあかせてルプスレギナから預かったマタタビの少女漫画を読んでみた。

しかし、現実離れした異性像やキラ付いた画風がどうも好きになれない。青臭くて甘酸っぱい人間模様のやり取りは見ているだけでお腹いっぱいになる（骸骨に腹はないけれど）。

異性で尚且つ倍近い年齢差があるマタタビと趣味嗜好が異なろうと、それは仕方ないことだ。最近の子はこんなのが好きなのかぁ、という年寄りくさい感慨に耽る。

しばらくして、室内でじっとこちらを見てくるナーベラルの視線が居た堪れなくなり、結局ページ数半分程度で閉じた。

（そういえば、ナーベラルは退屈しないのか？）

ちらっと彼女の方を見る。公私混同というか、公＝私みたいなところのあるナーベラルは別段不満そうなようには見えない。

強いて言うなら、至高の存在がただの民家で一晩過ごされる、ということに苦言を呈していた程度だ。こちらが問題ないと言うと一応は引き下がってくれた。むしろ二人きりのこの状況を、どこか嬉しがっているような気さえする。

ひとつ屋根の下で美女と二人きりというシチュエーションに男として何も感じないこともなかったが、友人の娘的な存在に手を出してしまうほど、鈴木悟は節操のない人間でもない。ましてや今はアンデッドなのだから。

（……うーん、それにしても気まずい。）

アルベドの場合は事務的が多いし設定改変のこともあって非常に構ってくるのに対し、ナーベラルの場合はかなり物静かである。

アインズ個人では後者のほうが好ましいのだが、密室の沈黙は別ベクトルの心労をもたらすことになった。身に纏った全身鎧の内側に疼くようなムズムズを感じて

も、やはりどうすることも出来ていない。
薄暗い部屋の中、ベッドから見上げる凛としたナーベラルの横顔は天上の月光のようであり、主従を分かつ絶壁はかくも果てしなかった。
今日で異世界転移から十日目、幾度となく繰り返した自問は未だアインズを飽かすことはなかった。

（かつての仲間達みたいにＮＰＣ達と肩を並べることが出来るだろうか？）
世界征服の方がまだしも優しいかもしれない。彼らを傷付けてしまうかもしれない。それでも思わずにはいられなかった。
なぜなら
見てしまったからだ、カルネ村でアルベドと親しげに話す姿を
聞いてしまったからだ、トイレから響くエクレアと共に笑う声を
知ってしまったからだ、バーでのデミウルゴスとの一部始終を
頭蓋裏にこべり付いた情景は渇望の業火の薪となり、アインズの身を冷酷に焼き焦がした。

自分はどうしようもなく一人なのだと、求めてしまうくらいなら気付かなければよかったと思う。

それでも狂いたくなるくらいの妬みを押さえ込み、共に外出しないかと彼女を誘ったが断られた。

それらは今に至るまでアインズを苛み続け、剥き出しの精神を徐々に削り取っていき

泥水に満たされたお盆は、とうとう一滴、どす黒い涙をこぼした。

「……おまえなんて、いなければよかったんだ」

静かな水面に垂れた一雫が波紋を広げるように、小さく呟かれた一言は無音の部屋にはっきりと響いた。

「あああああぁあいんじゅさま!? どどどどぅどうされたというのですかっ！私が、今度は一体どのような失態をしてしまったのでしょう!?」

アインズはテンパるナーベラルを見て自身も驚愕したが、間もなく沈静化により正気を取り戻した。

自分が口にしたことがあまりにも信じられなかった。

ひとまず支配者ロールを緊急発進し、恐慌するナーベラルを諭した。
「すまないナーベラル、お前では……お前のことを言ったわけではない。紛らわしいことを言って悪かった、許せ」
「いえ、アインズ様が謝られることはないのです！悪いのは、アインズ様を煩わせたその者に決まっております」
「いや、それは……」
覆水盆に帰らず。
八つ当たりだということは、アインズ自身イヤというほど理解している。
無意識にこぼれ出た悪意は理性に抑制されるも、呪い返しのような後悔になって本人を蝕んだ。
（俺、何言ってんだ……こんな）
そんな時、〈メッセージ/伝言〉が届く。
『アインズ様』
「……アルベドか」
『執事長助手秘書官マタタビが、反旗を翻しました』

「え」

筆遅くてごめんなさい。次回分は６割り程度出来ています。

実はもっとギャグやる予定だったのです。

だのにどうしてこんな構成になった……

感想、気に食わぬところ、誤字脱字があればコメントお願いします

そういえば今更ですが、オリ主の見た目は「ひまわりさん」で検索するとわかります

まか当然性格は全然違います

悪意を自覚する不死者　知恵に溺れる淫魔

オリ主の「猫可愛がられ～」のくだりを全カットしました。
メアリーさんがどうとか言われたし、自分でも気に食わなくて納得できなかったからです
相変わらず投稿ペースが遅くて嫌になる……一応毎日書いてるんだけど

マタタビの反逆を知らされた俺は、宿泊場所の留守をナーベラルに任せ、急いで転移でナザリックへと帰還。出迎えたプレアデスから転移の指輪を預かり、アルベドとともに執務室へ移動して詳しい報告を受けていた。
「――その後、シャルティアがとどめを刺される間際でアウラが参戦しましたが、敗北寸前にまで追い込まれました。
しかし、詰めのところで何者かの気配を察知したマタタビが撤退し、辛くも敗走。
以上が今に至る経緯となります」

「そうか……シャルティアとアウラの状態はどうだ」
「重症のシャルティアは現在ペストーニャを主導に集中治療が行われておりますが、命に別状はありません。
アウラの方は特に手傷はありませんでしたが魔獣軍団は壊滅的被害を被っており、シャルティアのこともあり軽度の心神喪失状態にあります。
二名共に戦線復帰はあまり薦められません」
「いや、二人共、彼女を相手によく無事で帰ってきてくれた。
もしこの状況で情報も得られないままであれば、最悪の事態も想定せねばならなかっただろうからな。」
だが、シャルティアを精神支配から庇うなんておかしな話だ
アンデッドであるシャルティアには精神支配は無効のはずである。それを知らずに身代わりとなるような彼女ではないだろう。一体何の意味があるというのか
「マタタビ本人による供述であるため、ブラフの可能性も考えられますが」
「いやまて、一つ心当たりがある。アルベド、精神支配の術者はどんな姿をしていた？」

「アインズ様の御耳を汚す冒涜的な格好なのですが……」

曰く、純白のチャイナドレスを纏った老婆ならしい。

想像してみるとかなりアレすぎる格好だ。死獣天朱雀さんでも顔を顰めることだろう。

……ともかく謎は解けた。どうして今まで警戒してこなかったのか不思議なくらい、大きな見落としだった。

「まさかチャイナ服とは〈傾城傾国〉、ワールドアイテムのことか!?

マタタビさんがシャルティアの身代わりになるなんて、それしか……いや」

それでもおかしい。そもそもどうして彼女は、ロクに面識のないシャルティアの身代わりになんかになったのだろうか。

ＮＰＣを庇うプレイヤーなど、ユグドラシルでは笑いものにされたに違いなかったろう。

しかしアインズは知ってしまった。たっち・みーの面影を残すセバスを、姉弟のようにじゃれ合うシャルティアとアウラを。

眼窩の赤い灯火を閉じて思い浮かべたのは、バードマンの影を被ったシャルティアを突き飛ばす、黒髪の少女の姿。

多分、何も考えてなかったのではないだろうか。

普段は計算高いのに頭に血が上ると体が勝手に動く、彼女はそういう人だ。

端から見ればただの馬鹿者だろう。それでも今のアインズには、ひたすら気高く映った。

果たして自分に出来るだろうか？討たれる「子供たち」を前に、駆け出したい衝動を抑えることが。

結局答えは出なかった。今の自分はこの地を守る主人、しかし我が身可愛さがまったく無いとは断言できない。

途端、ＮＰＣの事で彼女に嫉妬する自分が酷く矮小で、馬鹿らしい存在に思えてならなかった。

「糞！　糞！　糞がぁ！」

思いのままにまかせ床を何度も蹴りつけた。１００レベルの身体能力は強烈な地響きを部屋全体へと轟く。

だが九階層の床はびくともしない。
最終日と違ってダメージカウント表記は現れなかったが、それでもやはり虚しかった。
激情と鎮静化を数度反復し、思考はやっと冷静さを取り戻した。
気付くと、側にいたアルベドの瞳は潤み、含意のある悲しげな面持ちで黙ってこちらを見ていた。
「……すまないな。少しばかり我を忘れていたようだ。今の失態は忘れてくれ」
「アインズ様が謝られることはありません！　全ての非は、常日頃マタタビを監視していながらこのような事態を招いた私にあります！」
なんだかやたら食い気味で、（色事関連でもないのに）アルベドにしてはらしくもなく強引な論調だ。
しかし、自分が悪いのだと一切疑っていない。
「気負いすぎだ、アルベド。彼女の上司はエクレアだし、そもそも事件はナザリックの外側で起こったこと。
断じてお前のせいではない」

言った言葉が、自分に跳ね返ってくるような気がした。
「違うのです！　私は――」
「違わない」
守護者統括という立場から、余分に責任感を覚えているのだろう。
まるでそれが今の自分自身に重なって見えて、妙なシンパシーが感じられた。
だからこそ、そんな悲しそうな表情をして欲しくはなかった。
「アルベド、おまえには感謝しているのだ。あの子をずっと見守ってくれていたのだろう？」
「ですから！」
「メッセージではアルベドの話ばかりしていたぞ。あれでかなり気難しい奴だから、彼女が懐くなんてウルベルトさん以来だ。
おまえに話をするために、俺の過去の冒険譚を聞いてきたりもしてきた。「武勇伝」と聞かれたから、答えるのも気恥ずかしかったがな」
こちらが何か言うたびに嗚咽を漏らし、やがてアルベドは涙を流してしまう。
女性経験に疎い自分ではどうすれば良いのか解らずたちまち困惑した。

先程読んだマタタビの少女漫画を思い出して、おもむろに骨の手をそっとアルベドの頭へと伸ばした。
漆喰のような豊かな黒髪へと指が優しく包み込まれていく。その柔らかさに驚きつつも、表には出さず優しく撫でつけた。
「よすのだ、どうしてアルベドが泣く必要がある。
本来彼女とは私が相手をしなければならなかったのに……そう出来なかったのは私の弱さ所以だ。
あぁ……まったくこれではかつての仲間達に顔向けできない。
それでもアルベド……彼女を一人にしないでくれて、本当にありがとう」
「あああああぁぁぁぁぁあああ!!」

アルベドは、顔を手で覆って泣き崩れてしまった。
（……そんなにマタタビさんのことを思っていたなんて……）
自身がマタタビに歩み寄れない怠惰さを見せつけられるようで、忸怩と胸が傷んだ。

ＮＰＣとして与えられた忠誠心ではない、純粋な思いやり。自分には到底手に入れられないものだ。

こんな状況でもなお、嫉妬心が湧くのを止めることは出来なかった。

●

結局アルベドは自室で休ませることにした。

当然本人は固辞しようと抵抗したが、やつれた彼女の言質を取るのは悲しいくらい簡単だった。

今はアルベドの穴埋めとして、外部で働かせていたデミウルゴスの帰還を待っているところだ。

無駄に豪奢な回転椅子にもたれ込み、大理石の天井に吊るされたシャンデリアをぼんやり見上げた。そして本日何度めかもわからぬため息もどきを呟いた。

「……あぁ」

緊急時なのだから転移魔法で早く済ませたほうが良いのだが、あえて執務室まで

呼びつける遠回りをさせている。
自分の気持ちに整理をつけるために。
だが、宙に舞う蝿を取り損ねるように、その試みは上手くいっていなかった。
「……糞が」
もう手遅れだからである。
白いチャイナ服の術者という供述から、彼女を洗脳したアイテムは世界級：〈傾城傾国〉と見て間違いない。
ところが術者は〈読心感知〉で敵対認証されて、中途半端な洗脳状態のまま世界級を奪われたのだという。
彼女が敵の手中に堕ちるというナザリックにとって最悪の事態は免れたものの、ある意味どうしようもない状況だった。
世界級の洗脳効果は、アインズ・ウール・ゴウンの所有するとある世界級アイテムを消費すれば解除することは可能である。
仲間を救うためなら世界一つ分とて惜しくない。
ところが今の彼女にはそれが出来ないのである。

何故なら、彼女を救う為に二十の世界級を発動させても、既に〈傾城傾国〉を手にしたマタタビには効果が無いからだ。
つまり自体を解決する手段はたった一つしかなく、まさにそれこそ最悪の事態のようにも思える。それは、彼女を――

そこから先は考えるなとでも言うように、扉の向こう側から軽快なノックオンが鳴り響く。しかし続いて述べた口上はやけに重々しかった。
「アインズ様、厳命に従い馳せ参じました」
デミウルゴスだ。
「……構わん、入れ」
「失礼します」
一瞬、入室してくるデミウルゴスの気配が、ウルベルトさんに重なって写った。
今しがたの思考を責められるような錯覚を覚える。
「〈メッセージ/伝言〉で要件は聞いた筈だな？　今から第５階層のニグレドの元へ行って捜索をさせる」

「御心のままに」
表情は固く、彼らしくもない短い台詞だった。
「では行くぞ。ついてきてくれ」

◆

第５階層　氷結牢獄

氷河を意識して作られた第５階層の大地は鉛色の曇天から降り注ぐ粉雪によって白く塗りつぶされている。
巨大な氷塊が山脈のように連なっており、透明な結晶は青白く発光していて見る者の心を凍てつかせる。同じ光でも太陽光とは正反対な印象だ。
そして氷の世界の只中にポツンと置かれた洋館は、牢獄という名前に反して童話『雪の女王』を彷彿とさせるメルヘンチックな雰囲気を醸し出していた。
洋館の中は外部よりも尚寒いが、冷気耐性のある俺とデミウルゴスには何の問題もない。淡々と目的地へ歩いて行く。

ただ精神的な意味で、二者間の空気は凍りついていた。
どちらかと言えばお喋りな部類のデミウルゴスだが、先程からずっと寡黙を貫いている。見るからに不機嫌であり、話しかけるのは非常に憚られた。
そして多分、彼から見たら今の俺も相当不機嫌なのだろう。
互いを腫れ物のように扱う空気は不快で堪らなかった。
（……彼女が抜けたあとのウルベルトさんも、こんな雰囲気だったなぁ）
だがここで押し黙っていては彼女を羨む資格もないだろう。俺は意を決してデミウルゴスに話しかけた。
「なぁデミウルゴス、お前は彼女をどう思っているのだ」
質問するまでもなく、彼の心情についての検討はなんとなくついていた。
無闇に痛いところを突いたことに罪悪感が湧いた。しかし、他に何を話せば良いのかわからなかった。
眉をひそめ、喉元に言葉を詰まらせ苦悶しながらも、デミウルゴスはゆっくりと返答した。
「マタタビが、一時期は御方と肩を並べられた人物であることは本人より伺ってい

ます。
それを踏まえた上で私が正直な心情を述べれば、御方々に対する不敬に違いないでしょう。もし不快になられましたら――」
「この状況、そんな下らないことで自害なんてしてくれるなよ」
思わず高圧的な言葉が出てしまい、自分が嫌な上司像と重なってうんざりした。
「……すまない。自らが下らない失態を犯したことで、不機嫌になっていたようだ。許して欲しい」
「何をおっしゃいますか、頭を上げください！　軽率な発言をした私こそ責められるべきです」
そう言われてもやはり気になったが、ここで張り合えばイタチごっこになるであろうことは明らかだった。
「よくわかった。では話してくれるか」
――はい　と言ってデミウルゴスは続ける。
「初め見た時は臆病で内向的な性質に思われたのですが、実際に話してみると、協調性に欠け周囲に対し摩擦を生み出しやすい人物でした。

しかして何故か、私自身彼女に対し親近感が湧いてきて放っておけなく思ったのです。まるで旧知の間柄だったかのような気すらしました」

「そ、そうか……」

ある程度の好意があるのは見越していたが、その斜め上くらいの返答がやってきたため狼狽した。

今にして思えば「彼女をどう思っている」という質問は部下に対するセクハラ染みていたのではとすら思った。

精神沈静化をしているうちに、デミウルゴスから一本釘を差される。

「しかしアインズ様、もし私めの心情を慮って彼女への対処を緩めることを考慮されておいででしたら、それだけは何卒おやめください」

「……わかっているさ。彼女は危険だ」

デミウルゴスなら彼女の処遇について自分と違う結論を出してくれるかもしれない。そんな淡い期待は、やはり儚く消えていった。

彼とデミウルゴスは別人なのだから、当然といえば当然の話だ。

ややこしい状況と拗れた自分の感情が、二重螺旋をおりなして頭の中で無限ループを描いていていた。

思考は混沌の渦で濁っており、どれだけ頭を抱えて見せても光明は見いだせないでいた。

ただしばらく渦の中心を眺めていると、光明の代わりにある人物の影がちらつくようになる。

それが誰なのかは最早言うまでもなく、やがて彼女を取り巻く濁りの正体に気が付いた。

――もとい、思い出した。

それはなんてことない、だたの負い目であった。

今更ながら白状する。

彼女がクラン：ナインズ・オウン・ゴールを辞めた時、俺は内心ホッとしていたのだ。

ふと、クラン時代の思い出のとある１ページを偲んだ。

◆（回想）

当時まだ初心者でビルド選択について悩んでいたマタタビに「たっち・みー」がこう持ちかけたのが始まりだ。

『マタタビさんには前衛としての才能があると思うんですよ。

よろしければ戦士職の職業編成について相談に乗りましょうか？』

ワールドチャンピオン直々の職業相談というのは、ユグドラシルプレイヤーなら誰もが羨む魅力的な提案である。

だが当時、年上に囲まれてマセていた彼女は、早くも反抗期を迎えていた。

『お断りします。どうせ戦士じゃあなたに勝てないのに、相談だなんて嫌味ですか？』

幼女にしてはあまりに嫌味すぎる嫌味を受けて、イケメンスマイルはビシッというひび割れた幻聴を響かせた。

見ていた周囲は気の毒そうな視線を注ぐ中、一人手を叩いて笑い転げまわる山羊悪魔がいた。

『たっちさん振られちゃいましたねぇｗｗ』

凍りついた笑顔が灼熱によりたちまち氷解し、ギロッという鋭い視線が声の主へ

と向けられる。
『……ウルベルトさん』
『アハハハハ！　いやはやごもっともな反論ですねぇマタタビさん。よければ私が魔法職の職業編成手伝って差し上げましょうか？
彼に一杯食わせるってんならぜひ協力しますよ』
仇敵の消沈を見て得意げになったウルベルトが語りかける。だが、無自覚に仇敵を認めている言動は相変わらずであった。
『魔法職は興味ないので結構です』
『え……ﾌｯﾍﾞ』
氷柱みたいな一言がお調子者を貫いた。
先と同じく同情的な眼差しが向けられるが、やはり彼だけはむしろ愉快そうであった。
『あはははは！　結局ウルベルトさんも断られてるじゃないですか』
『私があなたと同類だなんて聞き捨てなりませんね。嫌味なたっちさん』
『なるほどもっともな話です。ならここは一つ、剣と魔法をぶつけて雌雄を決しま

しょうか？』

魔法職最強と戦士職最強が燃え盛る闘気をぶつけ合い、見守る周囲の間にも緊張が広がっていく。

蚊帳の外に放り出された元凶は嫌そうに眉を顰めた。

『うわぁ……ないわ』

ボソリとつぶやかれた一言は、ワールドの名を冠した最強職ホルダー二人を一辺に打ちのめした。

雌雄は決し、爆心地に残されたのは二名の敗者だけである。

『……もちっと自分で考えてきます』

屍を背にどこへともなく歩み出す彼女を引き止められる者は誰も居なかった。

幼女から罵られたくて「〈スナイパー〉系どうっすか？」と宣うバードマンもいたのだが、ピンクのスライムに取り押さえられその発言が耳に届くことはなかった。

◆（回想終わり）

天邪鬼で口が悪くてぶっきらぼう。協調性に欠け周囲と不協和音を奏でる彼女の存在は、正直言って苦手だった。

でもそんな彼女も、仲間の一人として認められていた。だから俺も仕方なく、認めていたに過ぎなかった。

自分の嫌いな人を好きな人もいる

自分の好きな人を嫌いな人もいる

彼女への嫌悪を認めたくなかったのは、そんな当たり前の理屈に納得できない自分を直視したくなかったからだ。

そして嫌悪しながらも今更になって、たった一人残った仲間としての彼女の存在に都合よく依存する自己矛盾を避けたかったから。

俺は、最後までナザリックに居た者として、自分と彼女を同一視してしまっていたのだろう。

多分それに気付いていたから、彼女は冒険者になる誘いを断ったのではないか。

『やはり相変わらずですね』

どちらにしても彼女は俺の、たった一人の理解者だったのだ。

唯一の理解者を失った喪失感は、骨ばかりの俺の胸中が、これでも存外満たされていたのだと嫌という程知らしめた。

どうしてこんな時になって気付かされるのだろう。
あるいは、今回の事件が起きるまで気づけなかった自分自身は、なんとも救い難いことだろうか。

考え事をしていたことで再び途切れてしまった会話を、今度はデミウルゴスが拾い上げた。
「御身をして『危険な存在』と言わしめる彼女とは、実際どれほどのものなのでしょう。
どんな力量を持ち合わせていようと、所詮個人であるならば数の利にまさるナザリックの敵ではないように思うのですが？」
「ああ、確かにそれは正しい。たとえ〈ワールドチャンピオン〉と言えど、同レベル帯を複数相手にして勝利することは難しいだろう」
「では一体？……」
「彼女の得意戦術は撹乱だ。ギルド荒らしとして活動していた彼女には敵対勢力が多くいたが、討伐隊相手に彼女は単独で渡り合ってきた。

１００レベルが複数体相手といえど、半端な連携では容易く返り討ちにされるのがオチだ……アウラとシャルティアのようにな……」

それを聞いて一瞬くぐもるように眉をひそめるデミウルゴスを、アインズは見逃さなかった。仲間に対する心配と、無力な自身への叱責のように見えてならない。

「……なるほど不見識でした。さしずめ彼女は対集団戦のエキスパートという訳ですね？」

「そうだな。だからこれからの対処を考えるにあたり、まずは状況確認が必要だ。……さて、そろそろニグレドの部屋だな。用意はいいか？」

「はい、問題ありません」

タブラさんの仕掛けた茶番劇を一通り終えて、落ち着いたニグレドにマタタビを探知するよう頼んだ。

「しかしアインズ様。私はその、マタタビという者と会ったことは無いのですが、何を手がかりに探知すれば良いのでしょう？」

「そういえばそうだったな。では彼女の保有しているスクロールを依代に〈ロケー

ト・オブジェクト/物体発見〉を発動してくれ。
彼女の持っているスクロールの殆どには、私の魔法が込められている筈だ」
「そうなのですか？　では、承知しました。そのようにさせていただきます」
《カウンター・ディテクト/探知対策》
《クリスタル・モニター/水晶の画面》
《クレアボヤンス/千里眼》
《ディテクト・ロケート/発見探知》
《フェイクカバー/偽りの情報》
《ロケート・オブジェクト/物体発見》
「これは!?」
ニグレドが続々と情報系魔法を発動させた。
モニターが写りだしたのは、平原に立ち尽くすマタタビと、その足元に転がる銀色の全身鎧の残骸だった。

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓９階層スイートルーム（旧予備部屋）アルベド私室　（アルベド）

ギルド旗の耐久力はそれなりに高い。並の者が引き裂こうとするなら手から出血するだろう。

ところが重厚で格調高い紋章の御旗、その布地は、バリバリと断末魔を上げながら見事２つにちぎられていた。

二枚になった布は部屋の入口扉へと投げつけられ、バシンという音が響く。

どうして扉なのかと言われれば、その方向しか投げられない為だった。

「あぁ、あいんず様あいんず様あいんずさまぁ、どうかどうかどうかぁ……ぁ」

アルベドは奇声を挙げながら部屋を逡巡する。

そこには一面のアインズで埋め尽くされていた。

ぬいぐるみ、等身大ポスター、フィギュア、枕カバー、写真

その全てが、彼女の敬愛するアインズ・ウール・ゴウンの肖像だ。
アルベド自作のアインズコレクションで埋め尽くされたこのハーレム部屋では、扉以外にモノを投げ飛ばす方向は存在しないのである。
そんな彼女にとって理想郷のような場所であるのに、気分は一向に晴れなかった。
むしろ、コレクションから目を背けたがる自身の存在に女は気付いている。
原因はわかりきっている。マタタビの件を報告した時だ。
実のところマタタビの離反そのものは、アルベドの計画にも都合が良かった。
守護者最強のシャルティアと、軍としての強さを持つアウラ。
二人を返り討ちに出来る実力を確認できたことは非常に大きい。もしも利用できるのであれば、場合によってはルベドより有用な駒になる。
そして何より、この事件からアインズとの関係性の溝が深まれば、彼女は更に利用しやすくなるだろうと思われた。
だがそこが大きな間違いだったのだ。

アンデッドであるアインズの表情は、白磁のような骸骨であるため読み取りづら

いく、故に仕えるシモベはその内心を想像していく他に、理解への足がかりを持たないのだ。

だがアルベドだけは唯一、その骨身の裏側にある内心を読み取ることができていた。

報告した際、アインズは強い動揺を示し、それがアルベドの想定を遥かに超えるものだったのである。

どうしてそんな誤算が起こったのか、思い返してみれば非常に馬鹿馬鹿しい凡ミスだった。

精神的接近を図るために隣部屋のマタタビの元には頻繁に訪れていたのだが、そこでは彼女からよく至高の方々のエピソードを聞かされていた。

その話を聞く限り、どうにもモモンガがマタタビを疎んでいるようなニュアンスが含まれていた。これを何度も聞かされていたアルベドは結果バイアスに踊らされ、アインズ自身のマタタビへの認識というものを完璧に見誤ってしまっていたわけだ。

アインズのマタタビへの想いはアルベドの想定以上に強く、実際は至高の存在へ

のそれと同等以上の域にあった。
これの意味するところは、非常に大きなものなのである。
だってそれはつまり、アインズにとって二人を引き裂く裏工作は、至高の存在に置いて行かれれる寂しさと同義の仕打ちだったということではないのか。
アルベドにとってこれほど耐え難い事実はない。
憎むべき至高の存在同様、他ならぬ自分自身がアインズを傷つけてしまったというのだから。
『彼女を一人にしないでくれて、本当にありがとう』
確かにマタタビはアルベドという理解者を得た。
だがその結果、アインズの孤独はより深まってしまったのだ。他ならぬアルベドの策略により。
主人から向けられる感謝はシモベにとって最上の幸福であるはずなのに、今のアルベドにはいかなる罰よりも苦痛であった。
いっそ罰されたほうが楽とすら思えるくらいに。
「あああああ!!　違うのですアインズ様、私は私は私は私がぁ……」

けれどその先を白状することも、やはりできなかった。
我が身可愛さなど微塵も持ち合わせていない。ただ、失望し落胆するアインズの姿を見るのも同様に恐ろしかったのだ。
アルベドがアインズに開けてしまった空白は、自分自身では埋め込むことすら出来ない。
今それが出来るのは世界で唯一人、彼女だけだ。

アルベドがオチ要員として定着しつつある。一辺倒な描写は良くないからこれから反省
感想、気に食わぬところ、誤字脱字があればコメントお願いします

※偽次回予告

マタタビ「シャルティアにアウラ、そしてアルベドさんすら退けた今！
アインズ様の御心は最早私のモノ！　正妻戦争に勝つのはこの私だ！」
ナーベラル「身の程を弁えなさい、オリキャラ風情が
ニューロニスト「得体の知れない小娘なんかに正妻の座は渡さないわよん？
マーレ「おねえちゃんの仇は僕が取ります！
マタタビ「あなたが仇取ってどうすんの……

全女性守護者を退けて正妻の座は間もなくかと思われたマタタビ。
しかし至高の花嫁への道のりはまだまだ遠い。
果たしてナザリックの将来は如何に？

影から生ずる光明

辛いアインズ様を書くのは凄く辛い。ホント筆が止まること止まること
更新めちゃ遅れてごめんなさい
ところで今回は原作の宝物殿シーンに沿った進み方になりますが、アインズ様のストレス状況と付き添い人物の変更によって、分岐が生じます。

第5階層　氷結地獄（アインズ）

「この鎧は一体何だ？」
情報魔法の表示画面に映し出されたのは、闇に閉ざされた平原に佇む少女の姿だ。
精緻な刺繍の施されたメイド服により華やかに着飾られているものの、手元に握られている血塗れた日本刀の存在とはアンバランスだ。
夜陰に溶けてしまいそうな艶やかな黒髪は月光を反射して鋭い輝きを放ってお

り、対象的に肌は白く際立ち病的なように映えている。
焦点のあっていない瞳は朦朧としていているようで、均整の取れた清楚な顔立ちは待機中の自動人形を彷彿とさせる寒々しい印象を与えた。
そんな彼女の足元にガラクタのように打ち捨てられていたのは、龍をデフォルメされた白金色の全身鎧の残骸だった。
「それ」は天を仰ぎながら大の字で大地に伏せており、腹部から首の根元にかけて大きな亀裂が走っている。
もし中に入っていた人物がいればただ事ではすまなかったであろう損傷だが、その鎧には一滴の血もついていなかった。
「ゴーレムの類か　？あるいはゴースト系のモンスターが乗り移っていたのだろうか」
放たれた疑問符に対し、ニグレドは首を横に振る。
デミウルゴスはクイッとメガネの付け根を持ち上げて自分の意見を述べた。
「情報が少ない故考察は困難ですが、恐らくこの世界固有の存在ではないかと思われます

あの二人にとどめを刺す寸前にマタタビが察知した者であるとすれば、合点が行きます」

「ふむ、たしかに辻褄は通る。あるいは例のシャルティアと対決した世界級ホルダーの集団が追撃してきたのかもしれんが」

「その可能性も十分検討できます。どちらにせよ警戒対象が増えるということに変わりありません」

例の集団の力量は実際かなり未知数だ。彼女に奪われたのとは別の世界級を保持している可能性もあり、プレイヤーギルド組織を敵に回したとなれば、メンバーのいない今のナザリックでは分が悪い。こういう時こそマタタビが頼りになるはずなのだが、無いものは強請りようがなかった。

彼女をどうするか

考えても仕方のないことは先送りにするしかない。それにも限度があるのはわかっているが、今回の場合、どんな結論を取るにせよ今やることは変わりない。

だったらその間くらいは、猶予を持っても良いだろう。

――執行猶予、そんな言葉がアインズの脳裏から連想されたが、頭の端っこに追

いやって見ないふりをした。
「その通りだな。これで一先ずの方針は決まった。
ニグレドは引き続き魔法による監視を継続してくれ、と言ってもMPの問題もあるからな。
しばらくしたら偵察部隊を用意させて、監視をそちらに引き継がせる。その間は頼むぞ」
「承知しましたアインズ様。御身の御心のままに」
「そして偵察隊の準備だが、その前にプレアデスのシズ・デルタとユリ・アルファを呼んでくれ
先に宝物殿に行かなくてはならない」
◆
ナザリック地下大墳墓　宝物殿
この際なのでと、アインズはデミウルゴスに転移の指輪を渡したところ、彼はそれはそれは大喜びし、若干涙目にすらなっていたので、アインズは内心やや引いた。

その後ユリ・アルファとシズ・デルタを連れてきて宝物殿に転移する為、アインズの手を二人に取らせたのだが、横で見ていたデミウルゴスのジト目が、アインズには妙に印象に残った。

そんな一幕を経て宝物殿へと転移する。

転移して間もなく視界いっぱいに広がる財宝の山が現れる。

アインズはこの世界に来る前の、一人でギルド維持費を稼いでいた時のことをに思い出した。

当時は稼いだ金貨を還元するために宝物殿へもよく訪れていていたので、金貨の山々も割りと見慣れた風景ではあったのだが、電子情報でない物体として存在しているそれらを見て得も言えぬ感銘がもたらされた。

目の前の光景から無意識的に息を呑んだデミウルゴスとユリ・アルファの様子に、多少シンパシーを覚えつつも優越感を覚える。

自動人形のシズ・デルタだけは、種族的特性のために窺い知れないが

本来ギルド維持費もここの財物を使っておけば良かったのだから、かつてはアインズが外貨を稼ぎに行っていたのも所詮自己満足でしかなかっただろう。

だが今こうして彼らに胸を張れたのだから、無駄ではなかったのだなと、報われたように思えた。

「行くぞ」

アインズは感傷を振り切り〈全体飛行〉の魔法を一団にかけて移動する。

黄金の山脈の更に上へと浮かび上がって、すると再び背後の二人が息を呑む音が聞こえた。多分、壁際に陳列されている宝物の数に圧倒されているのだろう。

やがて武器庫の入り口が見えてくる。扉というより丸く切り取られた黒い壁みたいに見える場所だ。

この扉は、ギミック担当タブラ・スマラグディナの凝り性が所以して、わざわざ暗証パスワード式にされている。

「シズは確か、ナザリックに仕掛けてあるギミックについてを全知しているという設定だったな」

「……はい。　　様から、ナザリックに現存する暗号、罠、防衛システムについての全知識についてを与えられております。

……また、それらが新たに組み変わった場合にも、その変化を自動的に察知する

ように作られております」
「そうか。ならとりあえず、武器庫のパスワードロックを解除してもらえるか。少し面倒だ」
「……承知しました。
……かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう」
サラリと暗唱された解除コードに反応し、中心部分の一点へ闇が吸い込まれていき扉は開かれた。
実はパスワードを忘れた時用のヒントコードが存在したのだが、彼女には不要なようである。
「ご苦労、シズ」
一行はアインズに続いて武器庫の廊下へと足を踏み入れる。
広間の絢爛な宝の山とは打って変わって武器は整然と廊下の壁に飾られており、博物館じみた印象を受ける。
先程財物に反応しなかったシズも、多種多様なここの武器には興味を惹かれてい

るらしかった。
「シズと、あとデミウルゴスにも後で頼みたいことがあるのだが、かまわないか？」
「我々は御方の忠実な下僕であります。何かありましたら、一言命じていただければよろしいかと」
同意するようにシズもコクリと頷いた。
「そうか……」
深読みに定評のあるデミウルゴスをしても、今のアインズの真意は掴むことは出来ないらしい。
（対等な立場として頼みたかったんだけどなぁ。やはり、そう簡単に上手くは行かないか……）
「ここでの用事が終わり次第また追って説明するが、二人にはナザリック第１から第３階層に仕掛けてある全トラップの配置換えを行ってほしいのだ」
「マタタビを警戒してのことですね？　しかし、全てとなりますと時間もだいぶかかると思われますが」
「これはなるべく早急に取り掛かってもらいたいな。無論必要な物資や人員があれ

ば手配する
期限はそうだな。丸一日くらいあれば可能だろう」
最終日に10階層へ侵入されたことを考えれば、マタタビが何らかの手段でナザリックのトラップ配置を知っていたのは間違いない。
であるならば、彼女がナザリックを襲う可能性がある以上、警備を固めてからでないと待機中の彼女に手を出せないのだ。
だがそれを知ってから知らぬか、デミウルゴスの見解は相変わらずアインズとはズレてしまっているらしかった。
「なるほど。ちょうどシャルティアの目撃情報が冒険者組合へ届く頃合いを見計らうとおつもりであられますか
表向きで冒険者モモンがその異変を解決し、一気に名声を得ると」
「……まぁあくまで予定に過ぎないから、打ち合わせで変更するかもしれんがなっと、そろそろ霊廟……いや、宝物殿最深部と言ったほうがわかりやすいか」
ぼろが出ることを恐れたアインズは、若干無理矢理に話を切り替えた。
その誤魔化しが微妙に爆弾発言であることを今のアインズに気付けと言うのは、

無理な話なのかもしれない。
薄暗い通路の先に見える広間は待合スペースのようになっていて、薄紫色のソファーが二脚向かって置かれている。
そのさらに奥の方に「霊廟」らしき、得も言えぬ厳かな気配をたたえる一本道が続いていた。
追順する3名の視線は一同にその方向へと向けられる。そして、浮かび上がった疑問もまた同様であった
「霊廟」が一体何の意味を持つのか。
口ぶりからしてアインズ自身も隠す気はなく、尋ねれば容易く答えられる。しかし彼らにとってそれも簡単ではない。
望まない真実に打ち当たるかもしれないという恐怖と、それでも知りたいとする心。
天秤の梁は、ギシギシと痛ましい軋みを上げながら平衡している。
「霊廟とは……一体」
それでもデミウルゴスは問いただすことを諦めきれなかった。知らねばならぬと

いう強迫観念が、彼を後押ししたのだ。
物憂げな彼の様子を見て、アインズもようやく自身の失言に気が付いた。
てっきりアインズは、ＮＰＣがここの事をすでに知っているとばかり思っていたからだ。
「まぁ私が名付けた場所だから、知らないのも無理はないだろう。
断っておくが、別に彼らが死んだというわけではないぞ
ここには仲間たちから「預かった」装備品を飾っているに過ぎん」
「なるほど、納得いたしました。御方々程の霊廟ともなれば、建造する手間もかかりますし当然の配慮でしょう」
デミウルゴスたちの顔が、ほんのわずかに安堵を表現したのをアインズは見逃さなかった。
別にアインズは虚偽を述べているわけではない。でも、敢えて誤解を解こうとしないのなら、騙しているのと何も違わないだろう。
アインズの中にまた一つ、鉛のように重く冷たい何かが流れ込んでいった。それを誤魔化すように続けて述べる。

「まぁ、霊廟も未完成だからな」

現在霊廟に配置されている課金ゴーレムは37体。予定する数ではあと４体必要であり、未完成と言うのも嘘ではない。

ただし完成する日は絶対に訪れないであろうと思われた。

●

嫌な思慮を巡らせていたところで、件の通路から一人の異形が姿を現したことによりそれが打ち止められる。

それは初め、人型の頭部に紫色のタコを載せたブレインイーターの見た目をしていた。

顔面の半分に施されたラテン文字の刺繍や黒革の衣服。

見た目は、ギルドメンバーであったタブラ・スマラグディナそのものである。

驚愕したＮＰＣ達が何か言おうとする寸でのところで、「それ」はこちらを見定めたところでグニャリと全身を歪ませ変態していった。

その姿は、ユグドラシルにおいてドッペルゲンガーを示すものだ。

ブレインイーターと同じく人型であり軍服を纏っているものの、指は細長い４

本、何より頭部がのっぺりした卵頭なのが特徴的である。
一切の凹凸や模様がなく、辛うじて目口を表した黒丸があるのみである。
「ようこそおいでくださいました、モモンガ様」
宝物殿領域守護者：パンドラズ・アクターは、引き締まりながらも無駄のない丁寧な所作で敬礼をする。
その仕草自体には何ら不自然な点はない。アインズ自身、他のＮＰＣから同じようなことを毎日されているので見慣れてすらいた。
だが、彼の落ち着きの払った礼に対して、アインズは違和感を禁じ得なかった。
アインズの記憶にあるパンドラズ・アクターの設定と、眼前の彼の様子には著しく乖離が起こっていたからだ。
（あれ？　もっと〝アクター〟って感じにオーバーアクションを取るかと思って覚悟していたけど……イメージと違う）
そんなアインズの戸惑いを察してか、ハッと思い出したかのように仰々しく立ち振舞っては言った。
「おおぉぅ！失礼致しました。

何やらモモンガ様から緊迫した気配を感じとりました故、つい、あなた様より定められし作法をすっかり忘れてしまっておりました！

大変、申し訳ございません！」

――あぁ、と内心合点しつつも、改めて彼の黒歴史たる所以を目の当たりにしてアインズの精神は沈静化される。

「いや、控えてもらったほうが非常に助かる。

それと今私は自らをアインズ・ウール・ゴウンを名乗っている。呼ぶときはそうしてくれ」

「……承知しました」

心なしか不服そうに見えたが、気にしないように努めるアインズであった。

「しかし、モモンガ様改めアインズ様。貴方様ほどの方が余裕を失くされる事態とは、一体如何程のことなのでしょうか？」

（お前のせい……違うよな。そういうことではなくて）

黒歴史が自己主張を抑えたことからも伺えるとおり、今日のアインズがやけにピリ付いている。

自覚はあったものの、面と向かって言われて落胆しないと言われれば嘘になる。
しかしてその事情を逐一彼に伝えるのも、なんだかんだ面倒だ。
どう説明してやるかと悩んだところで、とある事実を思い出し「もしや」と思って尋ねてみる。
「パンドラズ・アクター。おまえは『マタタビ』を知っているか？」
「えーとそれは、猫ちゃんをフラフラにさせるアレではなくて……あの方のことにございましょうか」
どうやら知っているらしい
再び体全体を歪ませて粘土工作でもするかのように変態していって、やがてそれは渦中の人物であるマタタビを象っていった。
パンドラズ・アクターはドッペルゲンガーとしては最高位の能力を保持しており、変身できる対象者のストック数は45にも上る。
そのうちの41はＡＯＧギルドメンバーのものなのだが、残り４つの枠の一つを占めていたのがマタタビだったのである。
そこから連想して「パンドラズ・アクターなら彼女について知っているのでは？

」と思いアインズは尋ねた訳だった。
しかし当然といえば当然、付き添いの３名は、マタタビを模したパンドラズ・アクターを目の当たりにして露骨な敵意の視線を浴びせかける。
戦闘態勢になる程ではないが、ユリとデミウルゴスはサッと素早くアインズの前側に庇うように立ち入った。
アインズは内心「はぁ」と溜息を零す。だがそれも仕方のないことと言えよう。
元からＮＰＣにとってマタタビの存在はうさん臭かった上に、離反して階層守護者２名を敗走させたという事実は非常に大きいことなのだ。
ここでアインズは、骨の手をシズの前に覆うようにかざし苛立った声で止めに入った。
「やめないか３人共。これはコピーなのだぞ」
この状況で気が立ってしまうのはアインズ自身も非常に共感出来るところではあったが、だからと言って無駄に険悪ムードを生み出すことはないだろう。
各々はハッと我に返って謝罪を述べた。
「申し訳ございませんアインズ様」

「先程軽率な言動を慎むよう注意されたばかりだというのに、大変失礼致しました」
「……申し訳、ございませんでした」
「まぁ私を守ろうとしての行動なのはわかるがな。以後気をつけてくれ」
強烈な殺意の奔流を浴びせられながらも、マタタビの見た目をした当のパンドラズ・アクターは飄々としていた。
マタタビの顔で、マタタビの声のままで「ふむふむ」と意味深に呟き顎に手を添える姿は、見ていてどことなくむず痒い。
「なるほど、そういう訳でしたか。よもやあの方がナザリックに反旗を翻すとは……」
「話が早くて助かるが、付け足せばこれは彼女の意思によるものではなく、洗脳効果を持ったワールドアイテムが原因だ
精神支配状態のまま術者側を殺害した為に待機状態で放置されている」
「おぉ……そうでありましたか。現在私が常在させている〈読心感知〉によるものですね？
ワールドアイテムで精神支配されてなお御されないとは流石という他……失礼、いささか不謹慎が過ぎました」

「彼女が完全支配されるより、余程マシなのは変わりないさ。
ふむ、パンドラズ・アクター。これから霊廟奥のワールドアイテムを取りに行くのだが、おまえと二人で少し話がしたい。付いてきてくれ」

●

霊廟

厳かに静まり返った一本道に、２名の足音だけがコツコツと響いている。
横並びに彼らをを睥睨する不気味なフォルムの化身ゴーレムを無視し、両者は淡々と進んでいく。
入口部分からいくらか距離を取ったところで、とうとうアインズが口を開く。
「ところで、いつまで彼女の姿を取っているんだ？」
パンドラズ・アクターは入口前で変身したときから姿を元に戻していなかった。
アインズとしては一緒に歩いていてこそばゆくなるし、その上付き添いの３人

は露骨に気を害したというのに、むしろそれを煽っているようにも思えた

言われたパンドラは直ちに元の姿に戻り、こたえる。

「おっと失礼いたしました。少々、拗ねていたものでして」

「拗ねるとは、どういう？」

意外な返答にアインズは戸惑った。

目の前の間抜けな卵顔には、むしろそんな悪感情は無縁なように思えたからだ。

どちらかといえばマタタビがよくやりそうだ。だが何となく、今のアインズには心の中に引っかかる部分があった。

その違和感を根こそぎほじくり返すみたいに、パンドラは続けて言った。

「今回の事件は、いくらナザリックに牙を向いたといえど「マタタビ様」からすれば精神支配にされた故の不可抗力状態と言えます。

むしろそのようになられて尚、敵に抗い一矢報われたというのは流石という他ありません。

ところがです。マタタビ様の写し身に対し、先のお三方は敵意を向けられました。

ですから私には、わざわざ気を遣って元の姿に戻るのが馬鹿らしく思えたのです」

「……あぁ、そうだったか。どうやら全ＮＰＣの中でも彼女のことを知っているのはお前だけらしいから、彼らがああするのも当たり前なんだがな

どうか責めないでやってくれ」

「事情はよく理解しました。しかしアインズ様は相変わらず、慈悲深くあられるのですね」

「どうだかな……」

まるで見透かされたかのような言葉だった。

パンドラズ・アクターがこぼした本音とは、仕方がないと思いながらもあの時アインズが不満を指摘できなかったことでもある

だから彼の言い分を聞いたアインズの心は、遠慮して隠した自分の本心が掬いあげられた気がして、少し軽くなった。

おかげでようやく、面と向かって尋ねる覚悟が、アインズの中で固まった

そもそもこのことを聞くために二人になったのである。

しっとりと何処か遠慮がちだが、それでも鮮明な発音でアインズは尋ねた。

「なぁパンドラズ・アクター。お前はマタタビさんについて、どのように認知して

いる？」

さっきデミウルゴスに質問をした時とは異なり、今の場合は自問に近い試みである。

今回の件を通してアインズは、自分の、彼女に対する心情というものがわからなくなってしまったのだ。

唯一残った同胞というだけで、それ以外には嫌悪の対象でしかないか

だとすれば、このふつふつと燻る正体不明な情動とは一体何なのか

たとえ魔法による蘇生が可能でも、これを気付かない限り、このままマタタビを殺してしまえば後悔するような気がしてならなかった。

そこでアインズは考えた。

パンドラズ・アクターの中でのマタタビの立ち位置を知れば、アインズのマタタビに対する心情を明確化できるのではないかと

ＮＰＣと造物主の間には精神性的なつながりがあることは既にわかっている。

我ながら妙案だなと思う反面、　言語化を他人任せにする自身の卑怯さに、アインズは自嘲気味な溜息をこぼした。

そんなアインズの葛藤を察してなのか、今の彼は人格設定文に反した神妙な面持ちである（少なくともアインズにはそう見えた）。

これが彼の素なのかは判然付かないが、少なくとも今から紡がれる言葉は、紛うことなき真実なのだろうと確信出来る。

今生味わったことがないほどの誠心誠意に圧倒されながらも、聞かねばならぬと自身を鼓舞してじっと言葉を待つ

気が遠くなるような一瞬を経てパンドラズ・アクターは答えた。

「私にとってマタタビ様とは、忠誠を尽くす存在ではありません。

そして正直に申し上げますと、かの御仁の名を耳にすると何故か癪に障ってしまうのです」

それこそ決して耳触りの良い言葉ではなかったが、受け取ったアインズはなんだか笑いたくなった。

自分が必死に秘蔵していた悪意がいとも簡単に証明されてしまったのが、可笑しくてたまらなくなったからである

続けて話そうとする彼と呼吸を合わせるように、聞く姿勢を立て直してアインズ

は臨んだ。

「ですが、ドッペルゲンガーとして生み出された私の使命は、モモンガ様の輝かしき思い出を永久に残すことです。

私の変身形態の一つに保存されたマタタビ様もまた、守るべき思い出の一つなのでございます。

故にマタタビ様は、私にとって他の御方々と同等に大切な存在なのであります」

晴れやかなる信仰告白を聞き届けると、彼の背後から曙光が立ち昇り、暗く濁った思考を強烈に照らし出した。

やがて奥底より一人の囚人が解き放たれる。囚人は、万年ぶりの娑婆に雄叫びを上げて歓喜した。

「はははは！　はは!!　あははは！　はは！」

振り切られた情動は間もなく沈静化されるが、水面に浮上せんとする気泡の如きそれは、種族能力程度で止めれる道理もなかった。

気分が抑えられたのはしばらく経ってのことだった。ただし沈静化ではなく、あくまで自制のおかげであった。

「済まなかったな、パンドラズ・アクター。ようやく覚悟がついたよ」
「いいえ、私が御身にお役立ちできたのであれば、これに勝る喜びはございません。ですが正直意外でした、まさか『そのような決心』をなさるとは」
どうやらＮＰＣは、創造主の心を見透かすことができるらしい。ただ、逆もまた然りである。
主従関係は相変わらずだが、心が通じ合う感覚は悪くもなかった。

「久しぶりに飾らないで話せて良かったよ、パンドラズ・アクター
今度また何も無い時に、こうして二人で話せたらいいな」
「是非もありません。私を〝アクター〟として創造されたのは、モモンガ様の御心と近く在るためだったのですね」
「あっうん、もうそれでいいや」
「私が演技を取り去るのは、モモンガ様と『二人きりの時のみ』というわけですか。承知いたしました」
（いや……全然意味がわからないんですけどぉおお!?）

つまり平時では、他ＮＰＣに自分の黒歴史が晒され続けるということになるらしい。

心が通じ合うと言っても、行き違いが撲滅されるわけではないらしかった。

意味不明に嬉しそうなドッペルゲンガーを指摘してやる気力は、今のアインズにはどうしてもわかなかった。やはりちゃんと話さなくてはだめなようだ

モモンガ様とアインズ様の表記揺れは、半分くらい意図的なものです

アクターさんは、唯一アインズ様が素で会話相手できるらしいけど、黒歴史ポーズ引剥してこうなるのかは解らない

因みに　パンドラさんの中での人物優先順位はこんな感じ

モモンガ様＞＞＞他至高41≧マタタビ＞＞＞その他ＮＰＣ＞＞＞＞＞＞ナザリック外

どうして他至高とマタタビ風情が同格なのかというと

モモンガ様からの使命＞＞他至高　だからです

誤字脱字、気に食わぬところ、感想があったらどうぞお願いします

今回の表現は結構不安なので、遠慮せずお節介を焼いてくれるとうれしいです

非公式ラスボス戦

ひょっとして自分はエたってしまうんじゃないかと危惧しました

【至高の41人レビュー　byマタタビ】
No・5：アインズ・ウール・ゴウン
コイツ絶対頭おかしいよ!!
◆◇◆

マタタビの事件に対する方針が決定してから作戦の実行が起こるまでに、約丸一日の時間を要した。
彼女をしばらく放置しなくてはならなかった理由は主に２つ
前者は冒険者モモンとしての体裁。
事件のことがアインズに報告されたのは、とある護衛任務でカルネ村に宿泊して

いる最中であった。

そして情報収集やその他諸々の調整をしているうちに夜が明けてしまっていたので、任務継続の為、彼女への対処をする時間がなかったのである。

デミウルゴスに言わせると、どこぞの支配者は冒険者へと漏れたシャルティアの目撃情報を利用した名声獲得計画を企てているらしいが、アインズがその意味を知るのは少しあとになってからだった。

もっともモモンとしてのアンダーカバーの価値など彼女に比べれば無に等しい。本命の理由は２つ目にある。

後者は、マタタビがナザリックのトラップギミックを熟知していることによる危険性であった。

現状は精神支配の待機モードによって静止しているが、戦闘モードに切り替われば、ナザリックそのものを攻撃してくる可能性も出てくる。

確率としてはあまり高くないが、万が一そうされればナザリックそのものが危機に瀕するだろう。

だからこそ、ナザリックのトラップギミック配置を入れ替える必要があった。そ

れにかかる時間が丸一日というわけである。
結局冒険者稼業は継続されることになり、内心気が気でないアインズだったが、共同墓地のアンデッド発生事件解決やとある女戦士との戦闘など、得るものがないでもなかった。
ゴタゴタしながらも一気に名声を稼いで、それによって冒険者組合を上手いこと丸め込みながらかくして今に至る。

◆

エ・ランテル近郊（アインズ）
一面の景色が一気に緑色へと染まる。周囲を見渡し、転移阻害は起きてない事を確認して、アインズはひとまず安堵する。
人の手のかかっていない自然林の間を抜け、やがて開けた崖のところへ出ると、既に二人の少女が膝をついて出迎えていた。
監視役を任されていたシャルティアとアウラである。二名はあどけない快活な声をもって、支配者への敬礼をする。
「「お待ちしておりました、アインズ様！」！」

「二人共、監視役ご苦労だったな。何も問題はなかったな？」
「はい。近隣の魔獣たちはあたしの〈吐息〉で退けておいたので、あの鎧のやつを最後に彼女へ接近した存在はおりませんでした。苦戦するような相手もいなかったです」
「そうかそうか、お前たちも無事で何よりだ」
そう言いつつも、アインズは二人の姿をざっと眺めて、汚れや外傷などがなく無事であったのを確認し改めて胸をなでおろした。もちろん杞憂であるとは承知しているが、先日の戦闘を思うとそうせずにはいられない。
しかし、アインズが二人を監視役に任せたのは、一度敗走したという経験があったからこそでもあった。
初期レベルから研鑽してきたプレイヤーと比べると、元から強者として生み出された１００レベルＮＰＣでは、戦闘における慢心がどうしてもついて回る。今回の二人の件については、そういった経験不足が露骨に現れ出た結果とも言えるだろう。
だからこそ、慢心から目を覚ました二人は今のアインズにとって非常に信頼できる存在となりえた。更に言えば、マタタビとの戦闘経験のある二人なら不測の事態

での対応も期待できる。
何よりレンジャーであるアウラの能力は、神官戦士のシャルティアの苦手な箇所を丁度補えるようになっており、コンビとしてはこの上なく優れていたのである。
ただ最初はアインズも、トラウマの残る相手の監視任務を頼んで良いのか迷っていた。
ところが、話を聞いたシャルティアとアウラは「失態を挽回させてほしい」と強く求めてきたので、アインズはその熱意を買ったのである。
（失態って言っても……シャルティアのアレはともかく……初戦闘がマタタビさんだったのは、単に相手が悪すぎただけなんだけどなぁ。
むしろ幸運とは言え生き残れたのは凄いと思うんだが、二人の成長に繋がったなら良いことのなのか……）
それでも気負い過ぎるのは良くないだろうと、アインズは考える。
なぜなら二人は「敗北」したわけではないからだ。
実質的に敗北したのはまさにそのとおりかもしれない。失点とすべきところも数多くあったに違いなかった。

だが実際には、互いにフォローし合い、引き際を見極めた上での逃亡に「成功」している。いくらかの幸運があったにせよ、この事実は決して軽んじてはならないだろう。

悲しい認識のズレを正さんと、アインズは優しく語りかけた。

「良いか、二人共。お前たちが逃げたことは決して恥ずべきことではない。むしろ引き際を見逃さなかったことは賞賛すべきことだ

初戦で能力情報を把握したら撤退し、後から対策を練るのは基本中の基本。これはぶくぶく茶釜さんやペロロンチーノさんもよくやる常套手段なのだぞ」

「かの御二方もでありんすか？」

アインズも、自身の失敗を引きずる心理は嫌というほど理解している。ましてや忠誠心を持つＮＰＣなのだから、説得にも狡い言い回しを使わざる得なかった。

「ついでに言えば私も、な。

お前たちがアインズ・ウール・ゴウンを誇り思ってくれていることは嬉しいが、だからと言って敗走を恥とすれば彼らの顔に泥を塗ることとなる。

大切なのは次だ。もし……あって欲しくはないが……次に彼女と対峙した時に、

しっかり対応出来るようにすればよいのだから

その辺の対策も、ちゃんと二人で考えていたりするか？」

答えたのはアウラだった

「はい！　その時はまず、シャルティアがエインヘリアルを出して足止めし、シャルティアと一緒に空中へ逃げてから〈吐息〉や狙撃を狙うつもりです。そのまま距離を取ってから転移で偽ナザリックに撤退します」

「うむ。たぶんそれなら逃げ切れるだろう」

プレイヤーへの対応を考慮する姿勢は、これからのことを考えても非常に好ましい。かつて教師である「やまいこ」が、子供たちは教えたことを素直にスポンジみたいに吸収してくれるので教えがいがあると言っていたのを思い出し、まさにそのとおりだとなぁとシミジミ思った。

「しかし、アインズ様。あやつ……マタタビの討伐についてでありんすが、どうして御方がお一人で向かわれなければならないんでありんしょう？

多少の損害を被むる覚悟をした上でも、守護者を交代させながら戦ったほうが、より確実に目的を達せられると思うんでありんすが……」

「ああ、そのことなんだが実は――」

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓９階層　待合室

「――彼女相手に過剰な戦力を出してしまうと、かえって逃げられてしまう

先日もマタタビは、二人を殺害する絶好のチャンスを前にして、直後敵の気配を察知した素振りを見せて撤退してしまったでしょう？」

「なるほど、つまりこちら側が盤石な布陣を用意しようものなら、卓上ごとひっくり返されてしまうわけですか。

彼女の移動速度に追いつけるシモベはいないし、逃した先でどんな問題が起こるかもわからないと。……実に厄介です」

例えば詳細は不明だが、謎の全身鎧との戦闘があがる。

あの場では結局事なきを得たのだろうが、鎧を動員していた存在の事も考えると単純な話では済まされないかもしれない。

「そのとおりよデミウルゴス。そして逃げられないための前提条件として、彼女側にも勝ち目のあるカードを切る必要がある」
「ええ、理屈は理解しましたとも。で？　それがどうしてアインズ様をお一人で行かせた理由に繋がるんだい？
　人間の都市に向かわれる御方をあれ程止めたがっていた君が、よりにもよってそれを許容するなど信じ難い」
「心外ね、本当はあなただってよくわかっているんではなくて？　今の彼女の相手は、アインズ様以外につとまりようがないってことぐらい」
　デミウルゴスのこめかみに、一筋の血管が浮かび上がってはピクリと脈動する。普段の冷静さとはかけ離れた様相だが、それが一線を超えることは決してない。
　その理由を、アルベドは嫌味たらしく言語化してきた。
「お節介でしょうけど、素直にシャルティアとアウラを信頼した方がいいわよ？　あなたが自身の配下を動員しても、かえって御方を危険にさらすだけだもの」

足手まとい

　至高の御方の戦いは、シモベごときが立ち入れる領域より遥か遠いところにあ

る。かつては頭では理解しているつもりだったが、今回の件でその認識すら甘かったのだと痛感させられた。

御方々に準ずる存在であるマタタビが、単騎でああも容易くシャルティアとアウラを退けるなんて思いもしない。

そうでなければ、アルベドの言うとおりに配下の魔将を動かしていたに違いなかっただろう。誰かに止められていなければ、だが。

デミウルゴスは自身の無力さがたまらなく悔しかった。

「……先日自室に謹慎させられた君に理性を説かれるだなんて、私もヤキが回ったようだ。

そもそも何に悩んでいたかは知らないが、一体どういう心境の変化だい？　個人的には大変興味深いのだが」

デミウルゴスは、この真実を知ってなお凛としていられるアルベドが不思議に思えてならなかった。

同じシモベであるはずなのに、彼女と自身が全く異質な存在な気すらする。この違いは一体どこから来るのか。

するとアルベドは、どこか遠い眼差しで《クリスタル・モニター/水晶の画面》に映るアインズの姿を目に止める。

自嘲気味なため息を零し、吐き捨てるように言った。

「御方の大事とするものが、私達と同じなわけではない。そんな簡単なことに気付けなかっただけよ」

義理は果たしたとでも言わんばかりに、それだけ言ってアルベドは閉口した。

デミウルゴスの求めた解ではなかったが、一つの真理であることには違いなかろう。

1日謹慎という罰が、アルベドの中にどういう葛藤をもたらしたのかはわからない。ただ、彼女の瞳が何かしらの堅い覚悟をたたえているのはわかる。

ならば自身もいじけているだけではいられまい。考えるべきはこれからのことだ。

全てはナザリックのために。

◆

二人と別れ、いよいよマタタビの感知領域に侵入する。これを誤魔化せるのは本人くらいだろう。脊椎がぞわ付くような感覚を覚えた。

もっともただ感知されただけでは敵対はされない。〈読心感知〉は種族的特性上アインズには通用しないし、監視者からの連絡はあるので現実的問題は微塵もなかった。それでも不意を撃たれる恐怖は否応なしに付いてまわる。

2～3キロほど歩いてしばらく、ようやっと目的地の平原へとたどり着く。時間帯こそ違うが、今見ている風景は情報魔法で覗いた時とそのままだ。

足元に白銀鎧の残骸を横たわらせる少女は、孤独な瞳で虚空を眺めながら静止していた。携える神器級の刀は拒絶的な輝きを灯していて、視界に入れると存在しないはずの網膜がチクチクした。

ギルド武器クラスの耐久メイド服を着用しているのは、先手を許してしまう支配待機の状況を見据えた不意打ち対策なのだろう。

思えばあのメイド服についてでも一悶着あったのを思い出した。たしか、たっちさんがホワイトブリムさんを誑かしたのがきっかけだった気がする。彼女にまつわる思い出は、不思議と不快なものばかりだった。

『マタタビ様は、私にとって他の御方々と同等に大切な存在なのであります』

じゃあなぜパンドラズ・アクターは、ああも堂々と言い切れたのか。

今なら思い出せる。皮肉にも彼女を仲間だと認めたのは、クランが彼女の処遇で紛糾していた際に自ら「退会」を選んだ時からだ。

ゲームの時は、アバターの表情は動かないからどんな表情をしていたかわからなかった。でもなんとなく、あの時の彼女の心は笑っていたような気がした。

「それはそれで気に食わないかもな」

同族嫌悪かもしれない

様々な逡巡を手のひらに握り込むように、骨の指で拳を象る。

無数の強化魔法を発動させ、最後に超位魔法の魔法陣を展開させた。やがて何も襲いかかってこないのを確認して課金アイテムを取り出す。

改めて視線のピントを彼女に向けて、僅かなつぶやきと共に魔法発動の宣言を行う。

「我慢して下さいよ？　超位魔法〈天地改変〉」

◆◇◆

唖々、在りし日の月曜日の如し糞ったれた目覚め。こんな現実には、堂々二度寝と洒落込むのが礼儀かもしれない

それは、私史上最悪の覚醒だった。

どのくらい最悪かって言うと、寝起きの顔に液体窒素をぶち撒けられるくらいの最悪だ。

瞬間的に凝固された空気中の水分は、体表全体に隙間なく殺到して霜の万年苔を象り、体温という体温を根こそぎ奪ってしまう。

メイド服で被服している部分はまだしも、手とか、特に粘膜がヤバイ。

凍りついた眼球から望む視界が想像できるだろうか？　寒い日の水道管みたいに網膜血管も凍結されるわけだから、瞼が開いても世界は真っ暗です。失明なのかと錯覚した。

やがて、その手の症状特有の眠気がやってきて、二度寝の誘惑にかられる。心臓、止まっちゃうんだろーなぁなんて、どこか他人事みたいな思考が脳裏をよぎった。

場違いな余裕は、かつてない熟睡の予感の歓喜故である。
そりゃ永眠だろうからかってないのも当たり前。理解していても、睡魔の皮を被った死神の誘いには抗い難かった。暴力的なまでの冷感が、徐々に外的触感を忘却させていった。

「って死んでたまるかっ！」
刹那、ノリツッコミじみた生存本能が、現世の出口付近を彷徨う私の魂を取り押さえる。
そして、二度寝の寝起きは先に輪をかけて最悪だった。
「ちぃ〈シバリング〉」
反射的に氷属性対策として保有している体温ステータス調整のスキルを発動させる。HPを削るデメリットが有るため連発は出来ないが、背に腹は代えられない。ゲームの時からの常套手段だったのだが、ここで手痛い誤算に見舞われる。
「ギィィィイイ痛い痛い痛い痛いいイィィィ！！？」
低体温から再起し、無理やり加速された血流は、強酸を点滴されたかのような灼

熱感で全身を焼き焦がした。ギシギシとした音が何かと思えば、氷を砕く関節の駆動音だったりする。

諸々の痛みを堪え、毎秒１００回程度瞬きを繰り返して凍結した眼球を解凍する。

光を取り戻した視界がまずはじめに捉えたのは、超位魔法でスケートリンク場と化したフィールドに佇む「敵」の姿だった。

４０ｍ先、格調高い漆黒のローブを羽織り眼孔から力のこもった紅い灯火を瞬かせる死の支配者を確認。

おそらくこの〈天地改変〉も彼の仕業に違いない。すなわち残念ながら私の敵だ。

しかし、視線を合わせて対峙してみると妙な親近感が湧いてきて、これから始まる殺し合いへの現実感が薄れていく気がした。

スケルトン系統には〈読心感知〉が不能だからかかもしれない。この世界に来てから極小の敵意すら感じなかった相手なんて、これまでエンリかデミウルゴスくらいだったから。

自然と口調が砕けていった。

「ハァ……再会早々超位魔法とはとんだご挨拶ですねぇ魔王さま。死んじゃうかと

思いましたよぅ」

「〈天地改変〉は攻撃用の魔法じゃないんですが、至近距離なら氷属性が弱点であるケット・シーには効果があるみたいですね

ゲームのときと比べても効果範囲は拡大されているようだし」

「うわー、友達殺しかけてその反応はどうなの？　サイコパスですか？」

「そりゃあ俺アンデッドですし。マタタビさんのこと嫌いだから、むしろスカッとしましたよ。まぁこれくらいで死なれては困りますけど」

閉じていた口元に僅かな隙間が生じている。ニヤけてるのだろうか。

「うわー外道だー、外道がおる」

軽く流しつつも、彼の意外な言動に内心驚かずにはいられなかった。

嫌われてるのは知ってる。ただ、「嫌い」なんて正面切って告げてきたのが彼らしくないなぁと思ったのだ。

何があったのだろう。

好奇心をそそられる、私の口元も緩んでいた。

そんな油断が、彼に先制のチャンスを与えてしまったらしい。
私は一瞬ここが闘争の場なのだと忘れていた。
「しまっ!?」
「〈魔法効果範囲拡大化・海皇神の憂鬱〉」
モモンガさんの前方より高さ２０ｍの大波が出現し、つるやかな氷上で加速されながらこちらへと迫ってくる。
フィールド利用で速さを兼ねた手堅い質量攻撃。対しこちらは寒さによる種族ペナルティがある。メイド服でダメージは軽減されるが、能力値ペナルティを無効にすることは出来ない。
瞬時、両手を氷の地に付けて魔力を籠める。
「〈土遁・地動核〉！」
私を中心とした直系２０ｍの正円に沿って大地が切り取られ、波より高い４０ｍのビルみたいに隆起する。
波は土ビルと衝突して弾け、辺りが水浸しになるかと思えば間もなく凍りついた。
早く距離を詰めようと体勢を整えるが、彼相手にそう簡単に行く筈もない。案の

定追撃も止まない。

「〈魔法位階上昇三重最強化・魔法の矢〉」

無数の光弾が周囲に浮かび上がり、私目掛けて一斉射出される。

躱そうかと思ったが、直前で追尾効果があった筈だと思い出して頭を掻いた。目の前の男は全魔法体系の知識を網羅しているが、私にはとても真似出来ない所業である。

「ちぃ！〈混凝土の術〉」

それなりの魔力を込めた土壁で防御するが、案の定防ぎきれずに何本か貫通してダメージが入ってしまう

いくらメイド服に防御力があっても痛いものは痛い。私もアンデッドに成ればよかったかしらん？

とはいえ受けてばかりではいられない。アイテムボックスに手を突っ込み、手早く所定のものを取り出した。

すぐさまその壺型のアイテムを彼の方向へ投げつけ、同時に忍術を発動させる

「〈爆炎陣の術〉」

口から火を吹き出す業火によって周囲は火の海に包まれるが、火属性と言えど私の魔法攻撃力では彼には大してダメージにならないだろう。

しかし投擲された壺が焼け崩れて中身の液体が漏れ出すとともに、火は橙から海のような群青へと変色する。

ここでようやく彼の表情にも苦悶と動揺が見て取れた。

「火力増強アイテム……〈蝦蟇油〉」

「よくもまぁ系統外のアイテムをご存知で」

骸骨が火の海に水葬されていく隙を見て、〈瞬間換装〉により学生服やその他現状に適した装備品へと着替える。

ここにしてようやく、私は戦いの土俵に立つにいたった。だがまだ不利だ。

良くも悪くも、彼と私の能力相性は最悪である。

彼からすれば近接戦主体の私は相手にしづらいし、刺突・斬撃に耐性のある彼はその手の武器を好む私にとって非常に嫌な相手なのだ。

私には膨大なアイテムストックがあるが、仲間の財を私有した彼なら五分。加えて７００の魔法を自在に使いこなしてくるので、状況対応能力はあちらに分がある。

〈地味子の眼鏡〉によると事前に魔法強化もされてるらしく、全体的に見て私が不利。さてこのディスアドはどうしてやろうか

「ここからが本番だな。〈魔法効果範囲拡大化・腐浄の霧〉」

負のエネルギーを孕んだ赤黒い瘴気が周囲一体に漂い始める。

あれを受けるのは不味い。HPに加えて肉体能力にも影響が出るだろう。

「〈砂塵大竜巻〉」

砂埃の風で目眩ましと同時に、瘴気の塊の一部を吹き飛ばして僅かに穴を作る。

視界不良のなかで感知により彼の位置を補足し、居合の型でもって刀を構え一目散に駆け出した。

接近し、殴打ダメージを与えられる峰打ちでもって上段から大腿骨へ叩きつける。が、期待していた骨折の手応えはなく、それよりも硬質的な感触だった

「その程度の攻撃は読めている。〈魔法最強化・負の衝撃〈ネガティブバースト〉！」

「がはっ！」

負属性魔法の衝撃波が全身を直撃し、HPがガリガリ削れ、身の毛のよだつ気持ち悪い感触と倦怠感がもたらされる。

巻き上げた砂塵が吹き飛ばされて互いの姿があらわになると、先の剣撃を受け止めた物体の正体が判明する。

驚愕を禁じ得なかったが、あからさまな反応をこらえて絞り出すように小さくつぶやいた。……こっちのほうが悔しそうな気がした。

「……スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」

「ガワだけ借りた試作品ですがね。使用した金属は同じなので耐久値は馬鹿になりませんよ。俺の物理防御もマタタビさんに比べればよほど上です」

「へぇそうですか、ならこういうのはどうですか？　〈瞬間換装〉」

杖と競り合っていた日本刀を消失させ、代わりの武器を手に装備させる。その獲物への意外性から彼の眼孔の赤い灯火が大きく見開かれた。

「メリケンサック!?」

「やまいこの真似ですが、下手くそですから許して」

身を縮ませてスタッフの下側へ素早く潜り込み、ローブから露出した肋骨部分を思い切り殴りつける。

いくら本職でないとはいえスケルトン系には弱点である殴打攻撃である。拳から

破砕感が伝わってきて肋骨の一本が砕けて地面に落下した。
続けて連撃を放つため一呼吸入れたが、その瞬間を狙って相手は事前にかけていた防御魔法を開放させてくる。
「〈光輝緑の体/ボディ・オブ・イファルジェントベリル〉」
みるみるうちに欠けた肋骨が再生していき、今しがたの一切のダメージが吸収されてしまったらしかった。やはりこういう事前準備の差は非常に大きい。
続いて至近距離でスタッフの先をこちらに向けて最強クラスの攻撃魔法を仕掛けてきた
「〈魔法最強化・現断/リアリティスラッシュ〉！」
今の私にはオーバーキル気味ですらある、第10位階最大級の火力を誇る斬撃攻撃。
〈瞬間換装〉を使うひまもなく、反射的にメリケンサックで受け流そうとする。このメリケンも神器級だが、いくつかあるサブウェポンの一つに過ぎないため、本職と比べれば能力は格段に弱い。
拳の先で凄まじい熱量の火花が散って、衝撃を殺しきれず手首に切り傷が走って

いく。

「くらうかぁぁぁぁぁぁぁ！」

なんとか気合で斬撃を跳ね上げた。我ながら脳筋臭いやり方だ。

ギリギリで生き残れた安堵感とともに、ある一つの確信が私の中で的中した。今の私には素晴らしい事実だが、期待ハズレな感もある。

即座にバックステップで距離を取って向かい合う。

「魔王さまぁ、どうして今の〈現断〉リアリティスラッシュ〉を三重詠唱しなかったんです？　そうすれば私は、受け止めきれずに死んでましたよ？」

「あらら。ユグドラシルも過疎ってて、ＰＶＰする機会もあんまりなかったし勘が鈍ってるみたいですね」

「嘘つけよ」

今は殺し合いなのに、まるでゲームのＰＶＰをギルドメンバーと話すような穏やかな口ぶり。

現在自分は確かに不利だ。先制の超位魔法により私の苦手な氷上のフィールドが組まれていたし、事前の強化魔法による能力差もある。

これだけの差があれば、私と彼のレベルでの戦いでは勝負がつくのに十分な条件だ。現にさっき、実質一回死んでいた。

じゃあなんで、最初から私は逃げなかったのか。そしてどうして今生き残っているのか。

考えられる答えは一つ。

「アインズ様。かつて仲間だった私を殺すの、躊躇してるんですね？」

それはそれで当たり前だろう、と内心では思ってる。

ましてやユグドラシルでの日々をあれほど愛した彼なのだから。

「躊躇はしてませんよ」

「よくそんなこと口走れますね。いつもの〈精神異常無効化〉ですか？

じゃあ手始めに「それ」を潰しちゃいましょう」

自慢の足で一足飛びに接近し、アイテムボックスに手を突っ込む。取り出したのはパーティ用のクラッカーだ。

「なっ!?　そのアイテムは！」

「〈完全なる狂騒〉――存じ上げてるとは思いますが、一部異形種の精神耐性を無

効化するアイテムです。
ピンポイントメタって当たるとすごく気持ちいいと思いません？」
ちょうど彼を見上げる体勢にもっていき、紐を引っぱて中身をパカンとぶちまけた。彼の感情線とともに

アインズ様「時間停止対策は基本
マタタビ「精神攻撃対策は基本（なお洗脳中）
戦闘シーンは次回までで終わりにします
まぁ散々心理描写やっといて今更小娘に手玉に取られるアインズ様じゃありません

アルベドの葛藤ついては、この章でやりきる予定ではありません
あるいは大幅修正する際に、デミウルゴスとの会話シーンがまるまる変更される可能性もあります

同族

戦闘シーンの裁定はかなりいい加減です
ご容赦ください

マジックアイテム〈完全なる狂騒〉は元々、アンデット系統の精神攻撃耐性を無効化するだけの、いわゆる微妙系に分類されたゲテモノだった。

しかしどうやら転移後の世界では、アンデットの精神構造に直接干渉するような効果に変わってしまっていたらしい。

静止していた心臓が鼓動を取り戻したかのような衝撃が、ドクッと肋骨の内側に響く。乾いた血管が潤うように、感情線に電撃が走りリミッターが故障した。

約1週間ぶりに突然再起された人間性は、アインズと鈴木悟の境界をハチャメチャにさせ、人格回路は過負荷にさらされた。

その混乱すら、いつものように鎮静してはくれない。だが眼前の相手を忘れるほど理性を捨てたわけではなかった。

「〈爆裂/エクスプロージョン〉！」

「んぬ！」

巻き込まれまいと慌てたマタタビは後方へと距離を取り、アインズもやがて発動した自身の魔法の衝撃によって意図的に後方へと吹き飛ばされる。

痛みと熱気が文字通り骨身に差し込んだ。

「流石はアインズ様。自爆ダメージで距離を取られるとは」

「ふんっ」

手でホコリを払い、表面上は強がりながらも内心アインズは焦っていた。

さっきは咄嗟の判断で爆裂魔法の自爆によって距離を取ったのだが、強化系のスキルを使っていないにも関わらず想定以上に痛みが激しい。

ダメージ量的にはマタタビから与えられた火炎系忍術とメリケンサックの拳撃の方が上なのに、今のほうがよほど大きなダメージに感じられた。

（アンデットの痛覚抑制効果も無効化されてるのか!?）

「ま、私も色々やりましたからね」
「どういう意味ですか？」
マタタビはサディスティック気味に口元を釣り上げ笑いかけてくる。
「保険です。そりゃあ私、あなたに嫌われてますからね。毎日、ナザリックに自動湧きするアンデット相手でいろいろ試してたんですよ？
殺されそうになったらこれ使って命乞いでもしとこうと思ってまして、カルネ村から帰還した後でアイテムボックスに仕込んでみました」
「やはり気づいてましたか」
「ええ。痛いのも、嫌われてるのも、どっちもね」
彼女が「この世界での戦闘」についてをここまで深く研究していたのなら、一体どれだけアインズを恐れていたというのか。
関係性の溝が最悪な形で露呈していた。
「おかげで肩身の狭いメイド暮らしでしたよ。アルベドさんがいなけりゃ、多分失踪してましたね」
彼女の暮らしぶりがあまり芳しくなかったのを知ったのは、宝物殿に向かった後

日、復活したアルベドから聞かされた。
どうやらメイドとして働き出した彼女は他の一般メイド達に疎まれていたらしい。
言えばよかったんじゃないかと思ったが、唯一プレイヤーとしての素性を知るアインズ自身との関係も不良好だったのである。
実は職場に不満だったとしても、彼女の立場から文句なんて言えるはずなかったのだ。
「……我ながらいい気味だ。これでは仲間割れした八欲王を笑えないな」
かつてスレイン法国の特殊部隊を尋問した際に聞いた、とある神話の話を思い出してアインズは自嘲した。
そんな情けない風体を見てますます失望の念を深めたのか、マタタビは目の色を冷たく変えて侮蔑の表情で睨みつける。
「とんだ拍子抜けだわ。命乞いなんて言ったけど、今のアインズ様なら簡単に殺せそうだよ」
瞬時に体躯よりも大きいガトリング銃に持ち替えて、容赦なくトリガーを回す。

〈飛行/フライ〉を発動させて空中移動で回避していくが、弾の一つが左肩を掠めた瞬間焼き付くような感覚が骨髄を貫いた。

「ぐっぬぅぅぅ神聖属性か！　〈骸骨壁/ウォールオブスケルトン〉！」

天地の間に無数の骸骨兵の集合体が壁となって立ちはだかり、連射弾幕は骨に埋もれて消えていった。

やがてカルシウムの質量体は万有引力に従ってマタタビの頭上へと崩れ落ちていく。

「〈要塞創造/クリエイトフォートレス〉」

漆黒のタワーの破城槌が、骸骨の壁を突き破ってアインズもろともを吹き飛ばした。

痛みにあえぐ間もなく、スパイク付きの城壁を駆け上がってマタタビが迫ってくる。だが何度も簡単に近付かれるわけには行かなかった

「〈上位道具破壊/グレーターブレイクアイテム〉！」

道具破壊魔法により城壁は建物と共に粉砕されていき足場を失うマタタビだったが、宙に和文字の魔法陣を描き咄嗟に忍術を発動させた。

「〈生口の術〉スフィンクス」

翼の生えた獅子が召喚されて、落下するはずだったマタタビの両足は白く大きな翼に受け止められた。

そのままマタタビを乗せたスフィンクスは、鋭い爪を突きつけて一直線にアインズの元へと飛びかかろうとする。

「〈上位排除/グレーターリジェクション〉」

アインズは手をかざし照準を合わせ、召喚獣を帰還させる。

だが消滅寸前のスフィンクスは踏み台とされ、気付いたときには彼女はアインズのもとまで辿り着いてしまっていた。

野獣の眼光を宿したまま、アイテム空間より抜き出された日本刀が横一閃に撃ち放たれた。

知っている。この一撃は、斬撃耐性と急所耐性を併せ持つアインズには決定打になりえず、彼女の得意な短期決戦は通用しないのだと。

だが現在は〈完全なる狂騒〉によってアンデットの冷静さを失っており、人間としての精神で戦わねばならない。

どれだけ意識で理解しようと常人たる鈴木悟が凶刃に慄いては、状況判断が曇らされるのも必定だ

一瞬の不意を見逃さなかったマタタビは、斬撃と共に頭蓋骨へと踵落としを放つ。アインズは硬質な凍土へと叩きつけられた。

架空の脳髄がシェイクされながら、不動な筈の視界がぐるぐると回り混乱する。

本当に脳振盪されたわけではない。四肢を欠損した者が、元は存在した触感を錯覚するようなものだ。

胃どころか、内臓全体が肋骨に引っかかって振動する。異形の器に人間の魂が入り込んだ故の苦痛に、更に実態の痛みが伴った。

戦況の有利も不利も関係なしに、激痛によって先んじ心のほうが折れかかったが、ここに来る際の不退転の覚悟を再念させて踏みとどまる。

弱い心を打ち砕き、腹の底から煮えたぎる鉛を沸騰させるように、二足で力強く立ち上がった。しかし、

「いや遅いですよ？」

マタタビはそんな奮闘を冷たく嘲笑う。振り降ろされた刀の峰がまたもや頭蓋骨

へと炸裂した。

手元よりレプリカのスタッフが離れて、絢爛な造形が氷につきささった。レプリカのスタッフには、浮遊効果なんてものついていない。

それに続くようにして、アインズは再び地に伏した。

◇◆◇

言い訳なつもりはないが、これでもマタタビは自分が根暗で生意気な糞ガキであることを、ちゃんと自覚している。

善意で歩み寄ってきた相手に嫌味を言って傷つけたり、皆が一致団結したり盛り上がってるところに水を差したりなんていうのは、昔からよくあったのだ。

クランを辞めるきっかけになった課金騒動の顛末は、今でも思い出すと気分が悪い。

もともと非課金至上主義を声高と唱えていたペロロンチーノがある日突然課金を始めたのがきっかけだ。

ムカついたマタタビは、課金していたプレイヤー全員に「口を利かない」という

嫌がらせを始め、それが巡り巡ってクラン全体を大炎上させてしまった。
始まりそのものは大したことなく、そして今となってはなんの意味も持たないことだった。何にせよいつかはこうなっていただろう。
見かねたウルベルトはマタタビに、クランから距離を取るべきだと提案し、マタタビもそれを受け入れた。
そして諸々の人間関係を犠牲にしたものの、モモンガさんの調停もあり、どうにかマタタビはクランを辞めることになったのだ。
ナインズ・オウン・ゴールの連中には、本当に嫌な思いをさせてきた。

それで何が言いたかったかというと
身内での諍いを好まぬモモンガさんが周囲に火種をばらまきまくったマタタビのことを嫌っていたのは、極めて自然なことだということだ。
ところがそんな彼が、最終日以降のマタタビとは話せるようになった。昔はロクに口も利かない仲で、取引的なドライなやり取りしかしてこなかったというのにだ。
大方、最後に残された「マタタビ」を、都合よく執着の対象としているのだろう

と思う。アルベドさんだったら羨む役回りだろうけど、マタタビにとっちゃ酷く気に食わない。裏切られた気分だった。

もしも自分のことを嫌ってるはずの奴が突然「冒険者になって羽根を伸ばしませんか」とか言ってきたらどうよ？　気味悪いと思わない？

本命相手に振られたから、じゃあお前でいいやって勝手に妥協されていたのと同じだ。

『各々が造物主という名の太陽を見失ったシモベ達は、その反射光を宿すモモンガ様に蛾のごとく群がっては絶対の忠誠を嘯いているに過ぎません』

玉座の間でモモンガさんの改名に異を唱えた時、私が言った台詞。

じつは彼宛の皮肉だったのだが、遠回しだったし気付かなくても無理はない。

ただやっぱりそのせいでマタタビを殺せないとなれば、感謝していいのか苛ついていいのかわからない。

◆

突っ伏したアインズ様を足蹴にしながら、手早くマタタビは〈瞬間換装〉でメイド服へと着替える。
そして彼のガラ空きな胴体に両手を上げて思いっきり押し倒した。
「ウグぁああ!!　〈魔法三重詠唱最強化〉黒曜石の剣・オブシダントソード〉」
苦し紛れに召喚系の攻撃魔法を発動させるが、今のマタタビには邪魔にもならない。
右手を肋骨の中心位置である彼の胸骨に添えて、墨字の忍術陣を起動させる
「無駄ですよ。〈契約封印〉」
直接接触が発動条件の除去忍術である。
条件が厳しいだけに、魔法職を極めたアインズ相手でもたやすく通用した。
続いては彼の両手を左右それぞれ握手して地面に押し付ける。
更に骸骨の顎下から私の頭頂部を潜り込ませ、無理やり上を向かせた。
手足と視線の向きを支配して、こっちに魔法を向けさせないようにしたのである。この魔法詠唱者専用の捕縛術はマタタビオリジナルのものだ。

しかし無力化してやったはいいが、この体勢ではダメージを与えることが出来ない。

とはいえ魔法職ならば、HPを削るよりも更に手っ取り早い解決方法が存在する。

「スキル〈魔力泥棒〉」

MP吸収系の希少スキルだ。

魔法詠唱者の生命線とも言えるMPがなくなれば、残るはただの案山子である。

万一〈完全なる戦士〉とかで戦士化されても、剣の素人に負ける私ではない。

これで詰み。

それでも負けじとアインズ様は足掻く。

「〈負の接触/ネガティブタッチ〉出力最大」

接触してMPを奪う〈魔力泥棒〉対して彼が使ってきたのも、接触により負属性デバフを与えるスキル〈負の接触/ネガティブタッチ〉である。

メイド服はダメージそのものにはめっぽう強いが、弱体化への耐性には若干穴があった。

MPとネガティブダメージを両方吸収する感覚は、言うなら腹を満たしながらも喉が渇いていくようなものだ

そんな気持ち悪い感覚をごまかそうと、マタタビは暇な口を動かした。

「あなたは他人というものを、とことん想い過ぎる。普通、実質初対面なＮＰＣ達の期待に応えるべく己を偽るなんて無茶は、誰もやろうとしないだろうに。

ギルド長やってた時だってそうだ。昔っからあなたは他人に譲るばかりで自己主張をほとんどしなかったですよね」

「……」

相手は答えず、ただ黙って負エナジーを押し流す。

だから独り言のつもりでこっちも好き放題に舌を回した

「あなたほど我儘という言葉が似合わない男は居ない。だからあんな個性集団のまとめ役が務まったんだろうさ

あなたのそういうところ、心から尊敬しますよ。でもね」

間もなく死ぬというのに、相変わらず彼は閉口していた。

その平然さが酷く気に食わなかった。意地でも反応させたくなって、おそらく彼

の一番であろう地雷を踏み込んだ。
「そういえばメイドから聞きましたよ。最終日に来てたんだってね、ヘロヘロのやつ」
「っ！」
鉄面皮が剥がれて、孤独な呻き僅かに空気を震わせる。
眼孔の中の赤い灯火が一瞬揺らいだのを、マタタビは見逃さなかった。
「大方、過労気味なあいつを引き止められなくて帰したんだろうけど。でももし引き止めてたらどうなってたろうね？」
「……黙れ」
らしくなく荒げた声。けれど毛を逆立てた小動物じみた威嚇は、恐怖ではなく寧ろ憐憫を誘った。
マタタビは、一人ぼっちの玉座の間が少しだけ賑やかになるのを、そして少し嬉しそうな骸骨顔を空想した。
きっとアインズ様にとって、人生最大の後悔に違いなかっただろう。
「そして今回もあなたは間違えた。

ちゃんと私を殺しておけば、このクソみたいな洗脳は解除されていたんだ。あとは蘇生魔法でも使えば良かったはずだ。

やっぱりあなたは殺しに向いてないよね」

もしこの勝負がただのＰＶＰだったなら、本来マタタビに勝ち目なんてあるはずがなかった。

ただでさえ、スケルトン系統のアンデットであるアインズには、マタタビが得意とする斬撃や刺突の武器は効果が薄い。

得意の短期決戦には持ち込めないというのに、加えて事前準備による能力差もある。

何より〈天地改変〉によってマタタビに不利でアインズに無害な氷雪フィールドで戦うことを余儀なくされたのが非常に致命的だ。

前提条件からして、このＰＶＰによるマタタビの敗北は必定だった。

けれど勘違いしてはいけないのは、この戦いはユグドラシルにおけるＰＶＰではなく、互いの生存をかけた真剣勝負だということだ。

もし彼が、本気の殺意ではなく偽物の友情を抱えながら立ち向かってくるのであれば、そこに唯一勝算があったということだ。

でも確信していた。

大相長々と語ったが、ようは彼の甘さに付け込んだだけである。

昔から、他人の揚げ足を取るのは悲しいくらい得意だった。

こうしてまた一人友人を失うのだから、損ばかりな特技なのは言うまでもない。

「……昔から食えない人だ。だから嫌いなんだよ。」

「心より同情いたします。私だって、嫌いと言いつつ甘くなりガチなあなたは大嫌いですよっと」

彼のMPは全て空になった。

拘束を解き、今度は魔法の鎖を取り出してガチガチに締め上げた。死体の芋虫の出来上がりである。

「ごちそうさまでした。せめて痛くないように殺しますからね。許さなくてもいい

ですけど」
アイテムボックスから筒状ダイナマイトを山のように出す。
これだけあれば、まぁ即死だろうか。即死って痛いのかな？
「……どういうつもりですか。俺を殺すだけなら、爆弾はその半分もいりませんよ」
「洗脳状態のまま生き続けたいとは流石に私も思わないよ。
別にあなたさえ殺せれば、私の安否は関係ないんだ」
「そう……ですか」

鎖でぐるぐる巻きになりながらも、彼は間もなく訪れる死に対してまるで無頓着な様子だった。
それなのに私にはどこか咎めるような視線を向けていた。たまらなく気に食わない。
私ははライターを取り出して、ボタンを擦り火を灯す。
「……折角ですし遺言くらいは聞きますよ。いやまぁ私も死んじゃうんだけどさ」

「じゃあ一つだけ。俺言いましたよね　『躊躇はしていませんよ』って。
この戦いで手を抜いたつもりは、まるでないんですよ」
「は？」

唐突に、頭頂部へポツンと雫が落ちてきた。
やがて雫は、落下してくる数を加速度的に増加させる。本降りの雨になるには数秒とかからなかった。
しかしこの雨がダイナマイトを濡らして駄目にしたのを、数秒かかってようやくマタタビは気付く。
第６位階魔法〈コントロール・ウェザー／天候操作〉。
敵意の気配が現れたのは、魔法が使われるのとほぼ同時。転移で援軍を呼んだのか。
振り返るとそこにいたのは、ありえない筈の姿だった
黒一色に統一されたスーツにシルクハットとマントを身につけた、山羊面のバフォメット。

マタタビはそれを知っている。最後に見たのが数年前でも、忘れるわけがなかった。

ギルド：アインズ・ウール・ゴウン41名が内、最強魔法職であるワールドディザスターを冠しながらも、数少ないマタタビの話し相手だった友人。

ウルベルト・アレイン・オードル

数瞬懐かしさに心奪われていたが、間もなく違和感を覚える。

マタタビの心の微細な動きを感じ取って〈地味子のメガネ〉はひとりでに起動した。レンズは無造作にソレの正体を暴露する。

「……ドッペルゲンガーですか」

我ながら、零した声音は思った以上に寂しそうだった。

そいつはグニャッと崩れるように溶けていき、粘土細工みたいに寄り集まっては真の姿を露わにする。

ゆで卵の埴輪ヅラが軍服を纏ってるというシュールなデザイン。かっこいいと思って作ったんなら、製作者は悪趣味に違いない。

埴輪は大仰な手振りで会釈し、やたらハリのある声を上げて自己紹介をした。

「お初にお目にかかります、マタタビ様。
ワタクシナザリック地下大墳墓が宝物殿の領域守護者、パンドラズ・アクターでございます。以後お見知りおき――」
「くたばれ！」
ご口上を逐一聞いてやるほどマタタビは人間ができていない。
不意を突きノータイムで放たれる、刀による本物の居合い斬り。
これこそ今のマタタビに出来る最善の攻撃手だ。
……けれど案の定、刀身は相手を傷つけるには至らなかった。
いや厳密に言えば、攻撃は相手の身体に届いていたが、ピンクの肉棒型スライムを相手には文字通り刃が立たなかった。
言うまでもなく、ぶくぶく茶釜の現身だろう。
如何にもこの人らしいＮＰＣである。ウルベルトに化けた時点で予想はしてたが、最初からアインズは囮で本命はソイツならしい。
すべてを悟って無駄なことだとわかっていたが、それでもマタタビは足掻き出し

た。

刀を捨てて踵を返し、敵に背を向けなが敗走を踏み出す。

全身くまなく負ダメージを食らいながら、ましてや凍てつく氷上においての疾走の不快感は想像を絶した。

四肢は重たく、手指は腐って千切れてしまいそうだ。

駆けるマタタビに並走するようにして、今度は全身黒装束の忍者衣装、弐式炎雷の写し身が差し迫ってきた。

しかしいくら弐式炎雷がスピード特価の能力編成でも、ステータスを８割コピーした程度では、本来マタタビに追いつくことは不可能なはずだった。

今ならわかる。彼が散々負ダメージでマタタビの身体能力を削っていたのは、移動速度を抑えてマタタビを逃さないようにするためだったのだ。

締めは純銀の聖騎士、たっち・みーへと変身する。

大ぶりの聖剣の峰部分によって、マタタビは盛大に凍土へと叩きつけられた。

◆

少し気絶していたらしい。
目が覚めると、マタタビは冷たい地面に寝そべっていた。
多分体中の骨がバキバキになっており、僅かに身動ぎするだけでも痛くて痛くて死にそうだ。
それなのに何故か、さっきアインズ様に巻きついてた筈の自分の鎖で、元々動かない手足が更に縛られていた。

傍らでそんなマタタビを見下ろしていたのは、アインズ様ともう一人。多分、パンドラズ・アクターとかいうやつだ。
その姿を見たマタタビはひたすら呆れるほかにしようがなかった。
黒長の髪をたなびかせ地味なメガネを掛けた制服姿の美少女。つまりはマタタビの姿そのものである。
ギルドメンバー全員をコピーするだけでもアレなのに、加えてマタタビまで入れていただなんて。
「嫌がらせか。いくらなんでも悪趣味すぎますよ」

その一言が彼（彼女？）の琴線に触れたのだろうか。
顔は動かないが〈読心感知〉でものすごく不機嫌そうなのは伝わった。
それを察したアインズ様が手を前に出して宥めるように制した。
「もともとその外装データはナザリックの所有です。あなたが使っても良いという許可を与えただけですし、何も問題ないですよ」
「……釈然としない」
さっき続々とギルメンに姿を変えたパンドラが、最終的に自分の姿になったこと。そして自分の姿が、アインズと肩を並べているという光景が、なんだか妙にむず痒い。指摘できるはずもないけれど。
「まぁ、それはいいや。ところでここまで大層お膳立てして、結局あなたは何がしたかったの？」
どうやら見るからに、マタタビは生け捕りにされたらしい。
でもそうしたところで殺さなければならないという事実は変わらないだろうに。わけがわからなかった。
「わかりませんか？　この状況が何を意味しているのか」

「うーん？　自分の手では殺せないけど、それでもやっぱり自分で殺りたかった。だから生け捕りにした、とか？」

それくらいしか考えられなかった。

ところがその答えに対して何故かパンドラが憤る。

「その程度の考えしかできない愚者でいらっしゃったとは。

貴方様は御方の意思を侮辱するおつもりでしょうか？　あなたを仲間として認め、この状況から救い出してみせようとする深いご覚悟を」

「……やめてくれパンドラズ・アクター」

「は？」

聞き間違いだろうか。今とてつもなく阿呆なフレーズを聞き取った気がする。

救う？　掬うでも巣食うでもなく、救うですって？

この人は今の私の状況を本当にわかっているのだろうかと、敵ながら急に不安になった。

ところがそんな私を「珍しく察しが悪いみたいだ」と悪戯気味にからかって、アインズ様は答えた。

「世界級アイテム〈傾城傾国〉の精神支配効果を解除するには、同じく世界級アイテムを使用しなければならない。

しかし今のマタタビさんは精神支配されながらも〈傾城傾国〉を所持しており、よって他世界級アイテムによるアプローチが無効化されてしまうだろう。

俺も最初はどうしようもないと思っていた。だが――」

僅かに横の彼（彼女？）に目配せをする。

「要するにこれは、マタタビさんから〈傾城傾国〉を取り除けばそれで済む話だったんだ」

「……」

あまりの衝撃に言葉を失った。

いやわかる。全く予想外だったというだけで、言っていることはわかった。理屈としてはこれ以上なく納得できる。

『躊躇はしてませんよ』

ようやく合点が行った。

わざわざ自らマタタビに戦いを挑んだというのに何度か殺し損ねる場面があった

のは、覚悟が中途半端だったからじゃない。
むしろ逆だった。本気で助ける覚悟で挑んでいたから、そもそも殺害という選択肢をもっていなかったのだ。
そして今パンドラズ・アクターがマタタビの格好を取っているのは、コピーした盗賊のアイテム奪取スキルによって〈傾城傾国〉を奪うためだ。
本来この奪取スキルは、盗賊特化であるマタタビには特に効きづらいのだが、その成功率を上げるためにHPをレッドまで削り被ダメージによる弱体化を施したのだろう。
この状況を作り上げるためにアインズは動いてきたのだ。だとすれば、殺る気と思ってたマタタビはとんだ道化である。
まったくもって完敗。ボロクソだ

「じゃあパンドラズ・アクター、始めてくれ」
「御意。スキル発動〈最上位窃盗〉」
パンドラ（マタタビ）は、私の方へと手を伸ばす。しかし指先は触れ合うことも

なく暗黒の空間、おそらく私のアイテムボックスへ吸い込まれた。
やがて拾い上げられたのは一着のチャイナドレス。
シルクのような純白の布地には、派手ではないが華のある美麗で精緻な描かれている。
ただ謎の老婆の血液がべっとり付着しているがたまらなく惜しい。かえってその芸術的価値を、審美眼の無いマタタビにすら理解させた。
どうやらこのままでは、ということで〈無限の水差し〉で洗い流されているらしい。汚れ自体は簡単に落ちた。

世界級アイテム〈傾城傾国〉は、マタタビの中で忌々しいモノとして深く刻み込まれた。
けれど今は、それ以上に許せないことがあった。
「……ふざけんな！　なんでよりにもよって私なんかを、命賭けてまで助けたんだよ」

わかっていた。アインズがそういう奴なのは、とっくにわかっていた。
けれども感情として割り切れなかった。
理解するのを拒みたがる駄々っ子な自分が、頭のなかで暴れ狂っていた。
「もしも私じゃなくて別のメンバーが洗脳されたのなら、助けようとするのもまだわかります。
でも私は違うでしょう？　あんたにとっては本来、私なんざただのウザイ糞ガキでしかないはずだ」
声を張り上げるたびに、微小な振動が砕けた肉骨に響いて凄く痛い。
それでもなお叫ぶことをやめられなかった。

「それを一時の寂寥感の為に、仲良しごっこで命をかけるなんて、まるで馬鹿みたいじゃないですか!!
ふざけんな！　万一あんたが死んだなら、ナザリックの連中はどうなるんですよ！　もっと自分を重んじろ。このクソ骸骨が!!」
裏返して言えば、マタタビにはアインズほどの価値はないということだ。

当然である。マタタビは嫌味で生意気で、対しアインズは謙虚で慎み深く和を重んじる。集団の中でどちらを好くものが多いかは明らかだったろう。

言ってるうちにいつの間にか、目元の端より涙が流した自分が腹立たしい。

ところが決死の訴えを聞き届けたアインズは、何故かなお上機嫌に笑い出した。

それはそれは心の底から嬉しそうであり〈精神異常無効化〉が無効化されてることもあって尚更だった。

「勘違いしないでもらいたいが、これは俺の我儘です。

マタタビさんは、最終日に俺がヘロヘロさんを引き止めなかったのは遠慮してたからだろうって言ってましたよね。本当は違うんですよ

最終日にヘロヘロさんに言われたんです。ナザリック地下大墳墓が残ってるなんて思わなかったって。

過去の思い出に拘泥して、来るかもわからない仲間を待ち続けるなんて確かにどうかしてる。わかってるんだ。

でも彼の一言ですべてを否定されてしまったような気がして、いや。自分で自分

を否定するのが怖かったから、俺は心の中で……みんなを拒絶したんです

気づけば引き止める言葉を紡ぐこともできなかった

多分俺は、自分の居場所を守りたかっただけなんだと思います」

「……それがどうしました。何が言いたいの」

「だから俺は、仲間のために居場所を捨てたマタタビさんのことを、結構尊敬してたんです」

――嫌いなことには変わりありませんがね、というどうでもいい注釈をつけて彼は言った。

「……あんた、バッカじゃねぇの？」

クソ骸骨と肩を並べた、チャイナ服が似合わない自分の姿を最後に見て、マタタビの意識は闇へと沈んだ。

もう二度と戦闘シーンは書きたくないと思いました
そして書く習慣を一度サボると後もツケが回ってくるとは……
今度こそ本気でエたると思った
次でこの章は終わりです

気にしすぎ

気分的にはエたってました
どうもごめんなさい
あと前回の救出時にアインズ様がマタタビに話したセリフを大幅に修正しました
時系列的には、アインズがパンドラズ・アクターの力を借りてマタタビを救出してからそう経たない頃です

【至高の41人レビュー　byマタタビ】
No・6：ペロロンチーノ
自由人。
女性の前で厚顔無恥に猥談を語るこの男は、軽蔑を通り越していっそ憧憬にすら値する。

ちなみにエロ翼王というアダ名は、クラン時代の騒動でマタタビが流行らせようとしたものだが、言うまでもなく流行ってない。

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓９階層：バー・ナザリック

生まれて初めて自棄酒というものをした。

飲み場は当然、先日エクレアさんと共に夕食時を過ごしたバー・ナザリックである。

とはいえ月月火水木金金なナザリックにおいて、ましてや真昼間から飲酒に付き合える使用人なんて居るはずがない。

ちなみに私はアレだ、体裁的には懲戒解雇って奴。

多分、このナザリックにおいて死よりも重たい重罰なのだろう。

凹んでフラフラしていた私を拾ってくれたのが、バーテンダーのピッキーさんというわけだ。……いや別に、解雇されたことに凹んでいたのではないんだけど。

彼には彼の仕事があるはずなのだが、曰く「わざわざ厨房でなくとも夕食分のド

リンクならここでも作れますから、気の済むまで居ても構いません」というハードボイルドっぷりである。情緒が不安定であったこともあり、彼が菌糸類でなければあるいは惚れていたかもしれない。

最初こそ浮遊感に似た快感と深くも透き通る美酒の香りに舌鼓をうち我を忘れていたものの、脳漿や舌もとろけて味覚が鈍り次第に何を飲んでいるのかわからなくなる。

あっと言う間に

「少々飲み過ぎではないですか？」

「うるさいでずっ！……おかわりください」

飲酒経験の浅さからたちまち酔っ払ってしまったのだった。

ハァ、とため息をつきながらも、ピッキーさんは七色で10階層を模したカクテル：ナザリックを差し出してくれた。

面倒な女を憐れみつつも内心やっかんでる心象が、読心感知でありありと伝わってくる。ごめんね。

いっそ毒耐性を切ってるのが丸わかりなのだから、睡眠薬でも調合して一服盛ってくれればいいのになと思った。

調理人としての矜持なのか、はたまた発想自体がないのだろうか。少なくとも、ピッキーさんが優しいということだけが事実だった。

飲んで忘れるなんて言葉があるらしい。けどむしろ飲めば飲むほどネガティブシンキングの振れ幅が広がっていき、より憂鬱の坩堝に嵌っていく感じがした。

さりとてグラスを手放すのも今更怖い。薬物依存とはこういう感じなのだろうか。

うつらうつらと鉛のように重くなった瞼。だが決して下ろしはしない。

肉蓋の裏側には悪夢がこべりついているとわかっていたからだ。

隣人に刃を向けるという凶行を、なんの躊躇いもなく実行できてしまったという悪夢を。

でも

「許されちゃったんですよねぃ……」

彼が、よりにもよって私のことをである。

まったくもって信じられなかった。

『俺だってあなたにはひどい仕打ちをしてしまった。やはり最初から誤解を解くべきだったんだ。メイドなんてさせてしまって申し訳ない』

彼は――だから気にしないでください――と。また、こんなふうにも言っていた。

『こちらの損害は皆無で世界級アイテムのオマケまで付いたんですから、こちらから言うことはありません。

もしマタタビさんがいなかったなら、シャルティアだけ連れ去られて最悪だったかもしれませんし』

もっとも、かく言う彼自身の顔に陰りがあったのは間違いなかった

だから私は、その後尋ねられた『世界級を所持していた謎の集団』については「何もわからなかった」と答えたのだ。実際は〈地味子のメガネ〉の効力で〈スレイン法国特殊部隊：漆黒聖典〉とバッチリ判っていたが、今のアインズ様が知れば碌なことになるまい。流石に国家相手に報復を成す気にはなれなかった。

最早アインズ様にとって、私とはそういう存在であるらしい。邪険にされてるのは相変わらずだが、体感的には「るし☆ふぁー」の二段階下程の扱いのように思う。

まさか彼が、私のことを『仲間のために居場所を捨てた』なんて風に思ってたなんて思いもしなかった。

私としては極めて個人的な居心地の悪さから距離をとっただけのつもりだったのだが、他人がどう解釈するかなんて案外読めないものである。

それからアインズ様は〈リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン〉を私に対して差し出した。湾曲的なギルメンの勧誘としてか、利便性を考えた単純な気遣いか、多分どっちも。

『いらんです』

けれど私は断ってしまったのだ。自らのこじらせっぷりが嫌になる。

酒色のため息を吐き出しながら、ぼやくように私は呟く。

「こういうの、本当に苦手。ただでさえ大迷惑をかけたっていうのにさ」

他者の好意に恐れを覚える性質は、昔から変わっていなかった。
腹立たしい事実だが、今辛うじて表面上を取り繕えるのはＡＯＧの連中との付き合いがあったからだろう。
唯一救いだったのは、断られた彼自身がそれをあまり気にしてなさそうだったことだった。
『いつでも待っていますから』
それはそれで、気色悪い気もしたけれど。

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓：宝物殿・霊廟入り口

壁面に所狭しと広げられた、ここに来る時点でもはや若干見飽きた宝物の山を見上げながら、アルベドは待合室のソファーにゆったりと腰を下ろした。
この待合室には普段何も置かれていないらしいのだが、緊急措置として仕方なくこういった形にしているのだと、向かい合わせに座るパンドラズ・アクターは不満

げに語った。

今ここに積み上げられてるマジックアイテムは全て、警備上の問題、精神支配から解き放たれた直後ということもあって、一時的にマタタビから預かっているモノだというのだ。

ナザリック内でも屈指の知恵者であるアルベドといえど、立ち上がって驚愕の声を挙げるのも仕方がないことだった。

間もなく我に返り、席について再び財物の山々を細かく見てみると、品々からは確かに明らかな偏りが伺えた。

まず圧倒的に武器関係が多い。

刀剣関係や各種銃火器、はたまた飛び道具系や鎖鎌などの変わり者まで取り揃えられており、しかもその七割近くが制作困難な筈の神器級である。

耐久に乏しい盗賊系なためか、防具に関しては極々軽装なものばかりだ。

また、現状のナザリックでは貴重品であるスクロール関係。最上位のポーションなど、その他高位のアーティファクトばかりが取り揃えられている。

武装やアイテムの絢爛な装飾で誤魔化されているものの、物品一つとっても明確

な目的意識が込められているようで無駄がない。コレクションというよりは武器庫と言い表すのがふさわしいだろう。

そしてそれらの圧倒的物量。

パンドラズ・アクターは無機質に答えた。

「世界級を除いた、ナザリック地下大墳墓が保持する全てのアイテム・武器の４分の１に値する財物が、現在一時的に仮置きされている状態です」

「４分の１……」

ただの個人が保有するには余りにも過ぎた値だった。

少々不敬な勘定ではあるが、単純計算で至高の存在10人分の稼ぎを立った一人でやり遂げたということになる。

マタタビ曰く、大体のモノが略奪品か、それらを資本に委託制作させたものらしい。礎として積み上げられたであろう死屍累々の山と、アルベドが知る彼女の人物像とは若干乖離があるように思えてならない。

（……見かけには寄らないということね。成り損ないとはいえ流石、至高の御方々に次ぐ存在なだけのことはある）

むしろ情緒不安定なあの娘がこれほどまでの武装、即ち戦力を個人で所有している事実というのも、それはそれで恐ろしいことのように考えられた。

先日こそアインズ様より大敗を喫したものの、そもそも精神支配の待機状態という極めて特殊な状況下にあったのだから、実力の底を見せたとはまだ言い難い。

そして忘れてはならないが、彼女の本職は盗賊であるということである。戦闘以外での戦い方など山程持っていることだろう。

アルベドは、把握しうる限りのナザリックが持つ防衛力とマタタビ個人の脅威度を頭の中で比較する。

ナザリック側が敗北することは万に一つもありえないだろうが、推算された被害額は収入源を絶たれた現状において馬鹿にできない程であった。

もっともこの手の悩みも既に杞憂と等しくなっていたのだが。

「ところでパンドラズ・アクター。先日彼女に『かけ直した』精神支配の経過は順調に行っているかしら？」

「現在のところ、特にこれと言って問題はありません。アインズ様にも未だ見抜かれてはおられないようです」

先日、アインズ様がマタタビを救出なさる時のこと。
仕上げとしてパンドラズ・アクターが〈傾城傾国〉の効果を解除する間際。パンドラは支配の解除ではなく上書き、更新を行ったのである。無論、アインズ様には内密で。
発案者はアルベドだ。アインズ様が救出作戦を発表した直後デミウルゴスと大揉めを起こした最中、パンドラに口添えをしたのである。
「しかし如何様な手段を閃くとは流石、守護者統括殿といったところでしょうか。ワタクシめでは到底思いもつかなかったでしょう」
確かにその通りかもしれない。マタタビの正体を知った上でそれを手篭めにしようなどと思いつくのは、全下僕の中でも恐らくアルベドだけだろう。
たとえ同等の知性を持つパンドラズ・アクターや、ましてやデミウルゴスでも同じことを考えられるとは思えなかった。
「共犯者がよく言うわ。それもあなたは、アインズ様の眼前で欺きを行った実行犯じゃない」
「あの時自分がとった行動が正しかったかは今でもわかりかねます。少なくともア

インズ様が望まれることではありますまい

もしあの時統括殿がおっしゃった事が虚実であったなら、すべてを洗いざらいアインズ様に白状し、然るべき処罰を賜りたく存じます」

「残念ながら事実よ。疑わしいなら彼女に直接聞いてしまえばいいわ」

今のパンドラズ・アクターであれば尋問など容易なことだろう。

アルベドは既に、マタタビから聞かされていた。

かつてのギルド：アインズ・ウール・ゴウンの絆の薄さと、それに縋る他ない今のアインズ様の切なさを。

「そのような真似、できることならしたくはありませんがね」

現状〈傾城傾国〉でマタタビにかけてある制約は

【アインズ様及び、配下の下僕へ危害を加えないこと】

【アインズ様の赦しなく勝手に隠遁しないこと】

【精神支配されている状態であることを認識できない】の３つのみである。

今のところは万が一の枷に過ぎない。パンドラズ・アクターも彼女に手荒な真似はしたくないだろう。

「彼女は至高の存在に対する切り札よ。あなたの思いは理解できるけれど、そういうわけにはいかないもの」
最悪の事態も想定しておかねばならない。
その最悪とは言うまでもなく、他の至高の存在との衝突である
当初はアインズ様と対面する前に、秘密裏に抹殺してしまったほうが安全だと思っていた。だが今のアルベドの見解は、違う
もし他の至高の存在がこのままナザリックに帰還することがないのなら、アインズ様には永久に幸福は訪れない。
流石にマタタビだけでは役者不足だし、下僕ではまったく論外だ。
「至高の存在の選別を、いずれ行う時がやってくる
アインズ様と共に悠久の時を生きられる覚悟があるならば、心からの歓迎を
気安く捨て去ろうとする者は、排除する」
リミットは、アインズ様の眼が世界へと届くその前に
もし手遅れになれば最悪、下僕を絡めたナザリック地下大墳墓の空中分裂が予想された。これに比べれば、マタタビによる被害など到底生ぬるかろう。

「いいでしょう。地獄の底までお付き合いしましょうとも、守護者統括殿
アインズ様の思い出を守るためなら安いものだ。たとえそれで御方に憎まれることがあろうと」
アインズ様と我々下僕の目的が一致するとは、必ずしも限らない。破滅願望などもっての外だ。
もし、「アインズ・ウール・ゴウン」が御方自身へ牙をむくと言うなら、取るべき行動は言うまでもない。
「そうね……本当に」
その言い分は、どうしようもないくらい正論だった。
「おや、統括殿はアインズ様の正妻を目指されておいでではなられなかったのでしょうか？
しかしなんと言いましょう、今の貴女はどこか諦めているように見えますが」
「……」
正妻なんて……今更何の意味があるというのだろう。
今のアルベドにはわからなくなってしまっていた。

真に愛されることが有り得ないのなら、肩書だけを背負っても惨めに思えて仕方ないのだった。

アインズ様が見ているのはアルベドそのものではなく、アルベドの背後にあるタブラ・スマラグディナの影に違いないだろう

所詮一シモベに過ぎない者への心象など大したものではない。

ましてや自分は、かの裏切り者の落とし子なのだ。

そもそも果たして、愛される資格なんてあるのだろうか？

「決めるのは貴方ではなくアインズ様だ。たとえタブラ・スマラグディナ様に何があったとしてもね」

パンドラズ・アクターは、アルベドの手に握られている漆黒のロッドを一瞥する。

「それに案外、我々下僕の立場というのも捨てたものではないかもしれませんよ？」

◆◇◆

目覚めると、いつの間にかピッキーさんは居なくなっていて、何故か代わり銀髪赤眼の吸血鬼。シャルティアさんが隣の席からジッとこちらを見つめていた。

「……っ！」
私を見定めるなり彼女は、やや怯える様子でビクッとなって半歩身を引いた。
彼女には結構ひどい仕打ちをしたのを覚えている。どうやら若干トラウマになったらしかった。
それでも何らかの矜持は持っていたらしく、引いた半歩を改めて踏み戻した。
「……目が覚めたのね」
「ええ、見ての通り。ピッキーさんは？」
「そろそろメイド達の食事の時間だからとか言って、通りかかった私にあなたを任せて行ってしまったでありんすよ」
「ですか」
不思議だ。このあいだまで殺し合った仲だというのに、思いの外普通に話している。
息苦しさは多少感じられたが、不快というほどでもなかった。
シャルティアの場合は一度痛い目を見ているから、というのもあるだろう。

けれど一番大きいのは、彼女側の中にある萎縮。同情というより、申し訳無さのような感情だ。
〈読心感知〉は相手の感情を読み取る事ができるが、思考の理解までは不可能だ。
聞いてやろうか少し迷い、そしてやっぱり尋ねることにした。
「なにか言いたいことでも？」
うつむきがちになる彼女に嫌なものを感じて、口調が尖りつつあった。わかっていてもどうしようもない。嫌な傾向だ。
「マタタビ。あなたにはあの時助けられた礼を言わなければいけんせん」
まさしく案の定な要件だった。
「……お前それ、意味わかって言ってんの？」
「わかっていんす。御方より与えられた任務を遂行できず、挙句の果てに無闇な突貫をして失敗してしまったのでありんす。
もしあの時あなたがわたしを庇わなければ、精神支配されていたのはわたしでありんした」
個人的にはなぁなぁで済ませてくれても構わなかったというのに、真っ直ぐすぎ

る性格も考えものだと思った。
無論、捻くれてるよりはよっぽどマシなんだけど。
「逆を言えば私は無事だったわけだ。つまり、私がアインズ様と戦う必要も一切なかった」
意識と切り離され脊髄反射で放たれ始めた悪舌を、止めることは出来なかった。
「まったくもってその通りでありんす。
でも、これがどれだけおんしにとって辛いことだったとわかっていても……
いざ自分がアインズ様へ牙を向くことを考えると、感謝せずにはおられせんのでありんすよ……」
「自分じゃなくてよかったぁって安心してるだけじゃん
ならもし私じゃなくて、あなたが精神支配されていたほうがアインズ様の心が傷まなかったとしたら？」
「……それは」
事の顛末を知っているのなら、シャルティアもわかっているはずだ。
アインズの中で、私がどれだけ大切な存在なのかということを。

愛され自慢をしたいわけじゃなかった。むしろ逆だ。
「お前が洗脳されてた方が、アインズ様にとってもまだ良かったはずだよ。
だから、どれだけ頭下げようと勝手だけど、私はお前を助けたことは心底後悔してる」
突き放すように言ってやる。
けれどシャルティアはまっすぐこちらを見据えたままだった。
「でも、あなたが私を助けてくれた事実は変わりありんせん」
どうして嫌味は何万編でも吐き出せるのに、本音は全然出てこないんだろう。
彼女にエロ翼王の影がちらついたのはこれで二度目だ。
どうしてこいつらは、自分の云いたいことをはっきり口にできるのだろう。たとえ下ネタでも謝罪でも。
真っ直ぐな人間は嫌いだ。自分が曲がっていると思い知らされるから。
そして
「……ごめんね」
憧れてしまうからだ。

「どうしてあなたが謝るのよ？」

もしもあの時、〈傾城傾国〉に捕捉されたシャルティアを見ても飛び出さず、冷静に対処していれば最良の結果が得られたはずだったのだ。

アウラさんの後方支援と私の突破力で協力すれば、ババアから〈傾城傾国〉を奪ってシャルティアを取り返すのはそれほど難しいことでもなかっただろう。

じゃあ何故出来なかったのかといえば、私が昔から連携プレイが大の苦手だったからだ。

仲間がいると理性的に動けず、クラン時代もレイドボス戦なんかでは大概お留守番だったのである。

私がちゃんとしていれば、アインズ様やシャルティアさんも変に気に病む必要はなかったんだ。

「……なんでもないよ」

「……そう、でありんすか」

なんだい、いっちょ前に気を遣いやがって。

吸血鬼相手に人格で負けたような気がして、なんだか可笑しかった。

ようやくこの章もおしまい

次からは王国かな？　リザードマンなんて知らない

隙間

アドバイザー

カタツムリ投稿でごめんなさい
執筆速度や時間が足りなくて今の有様です。
これからはもっとちゃんとやりますんで、なにとぞ、なにとぞ

「ここもしばらく久しぶりだな」
というのも、先日の『吸血鬼騒動』によってアダマンタイトへと昇格して以降、アインズは冒険者として引っ張りだことなったのである。
モモンとしてしばらくナザリックを開けていて、ようやくできた暇な時間に自室に帰ってきたアインズは感慨深く呟いた。
とはいえかつてプライベートのほぼ全てが『ユグドラシル』に集約されていたも

のだから、ゲームが現実化してしまった今では『暇』な時間の過ごし方が行方不明となっていた。

だからかえって、帰宅して間もなくＮＰＣが訪ねてきたのは幸いだったのかもしれない。

コンコンと控えめなノックが扉に響く。

「失礼します、アインズ様。偽ナザリック建設計画についてなのですが」

「アウラか。どうした」

「現在ダンジョンに仕掛ける罠ギミックの草案をまとめているのですが、恥ずかしながら難航しておりまして」

「なるほどな」

事情を聴いてアインズは得心した。

現在アウラには対プレイヤーを想定した偽のナザリック建設の仕事を任せている。

ナザリックのダミーとしての機能は言わずもがな、有事の際の避難拠点やアインズの作り出したアンデットの保管スペースなど、多目的にわたる活用が想定されて

おり、現行の『アインズ・ウール・ゴウン』における重要プロジェクトの一つである。

もちろんそれなり防衛力が要求されるため、金額的に言えば今最も予算をかけている計画でもあった。

難航しているというのはおそらく、先日マタタビに敗走した経験によりプレイヤーに対する警戒が強くなり目標水準が高くなったからだろう。

アインズ自身これまでもプレイヤーの存在には強い警戒を示していたのだが、外の世界を知らないＮＰＣたちにはいまいち実感が伝わらなかったので予想外ではあるが嬉しい変化に思えた。

だからアウラの口から「難航」と聞いてアインズの気分は悪くなかった。しかし同時に悩ましくもあった。

もし親心が叶うのであればつきっきりでアインズのプレイヤースキルを伝授してやりたいところではあるが、しかしアインズ自身忙しい身である。

（どうしたもんかな。俺だってこの後また出かけなくちゃならないし、こういったことで当になりそうなアルベドやデミウルゴスだって暇じゃない。パンドラズ・

アクターは……絶対人前には出せないしな……）

ところがアウラの成長はアインズの想定の上を行っていたらしく、思いもよらない一言が放たれる。

「それでアインズ様がお許しくだされば、その……マタタビの、力を借りたいなぁって思うんですが、だめでしょうか」

（えぇえええ!?）

親心を抱いた途端に子が離れる衝撃でアインズの顎が大きく下がった。

◆◇◆

『なんで俺じゃなくてマタタビさんなんかに……。俺に頼ってくれれば後の予定蹴っても良かったのに』

「知りませんがな」

久しぶりにアインズ様から急に〈メッセージ/伝言〉が飛んできたかと思えばとばっちりな恨み言である。

アウラさんと会うとなればこっちだって気まずくて仕方がないじゃないか。変われるものなら変わりたいのはこっちも同じである。

『でもアウラは自分のトラウマ乗り越えようとしているんですからすごいですね。当の『トラウマの方』はあれからずっと部屋に籠ってるっていうのに』

「そのくらいにしねぇと切断しますよ？」

あれ以来、アインズ様の私に対する接し方は大きく変わった。

以前は表面上とても好意的だった反面、無自覚な嫌悪感があったからか要所要所では塩対応だったのだ。６階層で私のことを置いてけぼりにしたり、メイドになったのを放置したりとか。そのくせ仲間面して外出に誘ってきたりしたもんだからムカつくことムカつくこと。

それが自覚化されて以降はこの通り、むかついたら容赦なく嫌味を言ってくるように『改善』された。転移直後に比べれば私としてはこっちの方が千倍マシである。

『真面目な話良い機会だと思いますけどね。マタタビさんだってアウラに負い目があるはずだ。

借りを返すと思ってやってくれれば、俺としてもうれしいですよ』

「……どうだかね」

かの世界級アイテムの騒動以降、メイドもクビにされ必然的にやることもなく

なった私は、必然的に自室に引きこもることとなっていた。
　することと言えば、隠形を使いながらナザリック内を探検するとか、無駄に広い自室を影分身を使って掃除するとか、読書とか、時々バーで顔見知りのＮＰＣと話すとかそのくらい。
　……まぁトラウマという程のことではないけど、例の件があってから少しだけ外に出るのが億劫になっていて、精神衛生上あまりよろしくないとは薄々思っていながらも「また明日」を内心毎日繰り返しながら怠惰に過ごしていた。
　アルベドさんは多少気にかけてくれるそぶりは見せるが、こちら側が拒否すると簡単に引き下がってくれる。
　彼女に関して言えば「マタタビを気にかけている」というポーズをアインズ様側に表示する必要があっただけで本意ではないらしい。〈読心感知〉で感じ取ると、私が引き籠ってくれることに対しむしろ安堵している節がある。先までは私を利用しようとしていた彼女らしくない、安堵などという妙に消極的な姿勢には引っかかりを覚えたが
『まぁ強制はしませんしマタタビさんがどうしようと勝手ですよ

ただ、社会人ギルドの『アインズ・ウール・ゴウン』にニートが巣食ってるというのは気に食わない話だ』

ああもうこれだ。

結局この人は変わってない。どれだけ悪態をつくようになっても肝心なところでぶれていない。

前に進まず、私みたいな奴にすら執着する始末だ。

「……わかりましたよ、手伝ってやればいいんでしょ。　ったくそんなんだからアルベドさんに愛想つかされるんだよクソ骸骨」

『は？　どうしてアルベドが――

「自分で考えて。じゃあ切りますね」

◆

昼過ぎごろ、アウラさんとは偽ナザリック建設地にて待ち合わせた。

なんだったら転移してもらうこともできたのだが、世話になるであろう輸送係の

シャルティアさんのことを考えると気が咎めたので地図だけもらって自力で向かうことにした。

コンパスと地図とを交互に睨み、変哲もない森林地形の僅かな特徴を頼りにどうにか切り抜けていってようやく霊廟らしき建物の屋根部分が見えてくる。

さらに近づいていくと森林開発に従事するゴーレムや現場主任らしき様子で指揮を執るエルダーリッチという珍風景を散見する。彼らにも既に話は通ってるようで、こちらを一瞥すると手を止めて軽く会釈してくれた。

やがて木々が開かれた偽霊廟前に到着すると、待ち受けていたアウラさんはパラソルテーブルに茶菓子とファストフードを広げてくつろいでた。

「お待たせしました」

「遅かったね。まぁ座りなよ」

彼女は椅子を後ろに傾けて退屈そうに振り返った。一見して危なっかしい姿勢だが後ろに転ぶイメージはできなかった。

敵意は感じられない。恐れを抱いてるわけでもなさそうだ。まったくもって落ち着いている。

言われるがままに空いている向かい側の席に座った。
「意外ですね。てっきりアウラさんには恨まれても仕方ないと思っていたんですけど」
「あんたを恨むなんて筋違いでしょ。憎むならシャルティアを襲ったっていう連中か、無力な自分くらいなもんだよ」
なんていう出来た割り切り方だろうか。相変わらず子供気の無い少女だなと思った。
……でもなぁ、言わなきゃなぁ
出来ればこのままアウラさんの厚意に甘えてあやふやにしておきたかったが、それはそれで自分の矮小さが顕著になって嫌な気分になる。
結局諦めるようにして、謝罪の旨を打ち明けた。
「でも悪かったですね。あの時私がポカしなければもっと穏便に事を運べたっていうのに」
「だからそのことはもう気にしてないよ。それに――まぁいいや。けどあんたにしてはやけに素直だね？」

短い付き合いの癖によくわかってらっしゃる。
先日シャルティアさんに言い損ねたからだとは、恥ずかしくてとても言えなかった。
「あんたのことを呼んだのは、あんたの『嫌な性格』を少し見習おうと思ったからなんだ」
「ふぇ？」
「戦ってるところもさんざん見たし、罠仕掛けとかが得意なんでしょ？」
「……あぁそういうこと。ならまぁ、それなりにね」
プレイヤーキャラクターとしてのマタタビは元々純粋な戦闘タイプではなく、欠落した能力値をいつも外付けのアイテムによって補って戦っていた。
だからユグドラシルでPKやPVPをする際には地雷仕込みをはじめとした様々なトラップを駆使してきたし、それでなくてもかつて他所のギルド拠点を散々荒らしてきたものだから防衛拠点のノウハウは体感的に理解しているつもりである。
自分で言いうのもアレだが、そんな私をアドバイザーとして選んだアウラさんはやっぱりなかなかの人選であると思った。

「それじゃあ手始めに軽く偽ナザリックの設計概要を説明するね」
偽ナザリック――略して偽ナザは地下五階層から構成されており、1～3層が防衛ライン兼召喚したアンデッドの保管場所。4、5層が緊急時の拠点と物資の保管場所となっている。
現在4、5層に工事が集中している一方、1～3層は計画が練り切れてないのでフロア中が空っぽという具合なのだそうだ。
「防衛能力の要求水準としては、平均80レベルのパーティ1つを壊滅させられる程度。
そしてもしそれ以上の存在が侵入してきた場合には、こちら側の迎撃準備ができるまで十分な時間稼ぎができればいい」
「あまり厳しい条件とは思えないのですが？」
「そうなんだけどさ……」
困った顔をしながら彼女は1枚の羊皮紙を取り出して見せる。
促されるように羊皮紙を覗き、記されていた予算額の桁を見て得心した。
「前述の条件を満たすだけならこの半分も要らないですね。エルダーリッチや即殺

不可なデスナイトもいるんだし」
　おそらく石橋クラッシャーなことで定評のある某骸骨が余計に気を利かせたのだろう。
　要求条件に釣り合わない高すぎる自由度。これは迷うのも無理はない。
「アインズ様は遠慮せず使って構わないって仰られたんだ。何か意図があるのかなと思ってデミウルゴスに相談したんだけど」
　デミ曰く――
『私やアルベドを含め、これまで我々シモベはプレイヤーという存在を過小に評価していた節があった
　だから先日の件から学び取ったアウラがプレイヤーに対しどこまで気を回すのかということをアインズ様は測っておられるのでしょう』
　深読みだ。あの人そこまで気を回すタイプじゃない。
　湧きあがりそうな心の声をのど元でキュッと抑えて飲み込んだ。これでまたアインズ様の胃痛の種は着々と発芽して行くのだろう。
　自業自得な部分もあるんだし、彼が自身の過大評価に苦しめられようと知った

こっちゃなかった。彼以外、誰も不幸にはならないしね

「一応予算を最低限にした場合の設計プランを作ったからまずは読んでくれないかな」

「いーですよ」

プランニングに目を通して第一に思ったのは、モンスター配置がなかなか巧いということだ。

例えばアンデッドの徘徊するエリアに酸・負・冷気のダメージを与える広範囲トラップを仕掛け、耐性を持たない侵入者だけに一方的にダメージを与えるとか。蜘蛛型モンスターを天井に這わせて床に地雷を仕込むトラップ部屋とか。用水路の抜け道があると思いきや水中に無色透明のスライムが潜んでいるとか。

魔獣の造詣が深く感じられ、流石ビーストテイマーといったところでしょうか。PKばかりでモンスターに関する知識に疎い自分には却って出来そうにない所業だ。

だが同時に欠点もある。トラップ単体の扱いとなると途端に雑になってしまうのだ。

「ここの地雷トラップさ、少し目を凝らせばスキルを使わなくても見つけられるようにして、さらに下に別の爆弾を仕掛けるんです。上の方を解除して気が緩んだら下の方が起動してボカンってね

……能力的に看破できたはずの盗賊でもついつい引っかかったりとかするんですよねこれが」

「ひょっとしてアンタもあるの？」

しまった顔に出ていたか。

「まぁね。昔、ぷにっと萌え様が戯れに仕掛けていたヤツに少々痛い目を見たんです。

元々ゲリラ戦争なんかで使われていたブービートラップの手法なんだってさ」

ギルメンの名前が出てきたからか、アウラさんの目の色が変わる。

罠に引っ掛けられたことなんぞに嫉妬されても困るんだけど。

「他にはないの？」

「あるよ。ほらここの〈狂気ガス〉トラップのところ。これを幻術魔法と組み合わせれば直接被害は無いにしろ、精神的にかなりダメージを与えられると思うよ

喩えるなら五大最悪の恐怖公さんが〈絶望のオーラ〉を使って近づいてくるイメージ。わかります？」

「……端的に言ってすごくヤダね」

おそらくナザリックのＮＰＣの中で最もプレイヤー撃退スコア、厳密にいえば戦意喪失による回線切断が多いのが彼だろう。

製作者は知らないが、あの手の悪辣な手法を好むのは大抵るし☆ふぁー辺りだ。

しばらくはガールズトークならぬ戦術トークで盛り上がった。３時間ぐらい話し込んできたところでとうとう日が暮れてきた。

「やっぱりあんたに相談して良かったよ

計画書にもまだ見直しの余地がありそうだってわかったし」

「なら何よりです」

ここまで他人と長話したのは何時以来だろう。小さいころまで遡っても思い出すことができなかった。

ユグドラシルにおいても、アウラさんの制作者であるぶくぶく茶釜とはここまで

打ち解けられた覚えはない。アルベドさんみたいに、気難しい私のご機嫌取りをしてくれたわけでもあるまいし、まったく不思議だ。

なんでこんなに素直なんだろ、自分

そんな疑念を頭の片隅に浮かべていたところで、対するアウラさんも何やら気になっていることがあるらしい。彼女は鷹揚と訊ねた。

「先日マタタビが戦う姿を見て、それと今日色々教えてもらって思ったんだけど、あんたの戦い方って至高の御方々のものと凄く似ているよね

マタタビは御方々から師事を仰いでいたの？」

「違うよ

私は、私にはどうしても勝ちたかった人がいたんです。だから連中の……御方々の傍でひたすら戦略を盗み見ていただけ」

ぷにっと萌えの『誰でも楽々PK術』から始まり、ウルベルトの時間操作テクやペロロンチーノの狙撃術、弐式炎雷の暗殺技、やまいこの体術

そしてその他諸々のメンバー技能を、多様な魔法を駆使するアインズ様の戦い方をモデルにして自分の戦略として確立させた

対応力には自信があるが、おかげで酷い器用貧乏だ。武器のストックも大量に用意する必要があるし、１戦ごとのアイテムの消費量が馬鹿にならない。この戦い方を維持するために盗賊職となってギルド荒らしを始めたといっても過言ではないくらいだ。

「もっとも、それだけやっても勝てはしませんでしたがね。無駄骨です」

「ひょっとしてアインズ様のこと？」

「え？　何で、全然違いますよ。いやまてよ……」

ここで意外な名前が出てきて戸惑うもしかしょくよく思い出してみると自然な流れなのかな。

たしかアウラさんは、私とアインズ様が戦うところを監視していたんだっけ。ひょっとして会話も聞かれてた？

『簡単に殺せそうだよ』

『嫌がらせか』

『バッカじゃねぇの？』

『クソ骸骨が!!』

恥ずかしさで蒸気する顔面に冷や汗が伝った。

こうなると最早不敬どころではない。敵対ルートまっしぐらじゃないか？　なるほどだから今日アウラさんに呼ばれたのかなるほどなるほど。『抵抗せず一方的に殺されなきゃいけない』んですねわかります。

「……なんか今、スッゴク馬鹿なこと考えてない？」

「ほへ？」

呆れ気味な溜息を浴びせられて思考が冷静になり、そもそもアウラさんからは一切敵意を感じないのを思い出した。

じゃあ……どない？

それから一転、柔いこめかみに年齢不相応な血管を浮かび上がらせ苛立たし気にアウラさんは言った。

「よもや何かされるとでも思った？アインズ様は今のマタタビを生かしたんだよ。あんたを手にかけるなんてそれこそ背徳行為も甚だしい。

まったく、馬鹿にしないで！」

つまるところ私の勘違いは、アウラさんの使命と忠誠心を侮辱してるのも同然だ。
ああしまった、これは怒られて当たり前じゃないか。
「ごめんなさい」
「わかってくれたならいいよ。それにあたしは『何も知らない』からね。元々あんたの振る舞いにどうこう言える立場じゃないし
だから教えてくれないかな、マタタビとアインズ様がどんな関係なのか」
乗り気はしなかったが、直前に失言してしまった手前断りづらい。それにもうアウラさんはアインズ様と私の会話を聞いてしまってるんだから、下手にごまかしても仕方ないだろう。
だから観念して白状することにした。
「セバスさんとデミウルゴスさんの関係に近いんじゃないですかね。互いに気が合わないんです
正直今アインズ様がどう思ってるのかはよく解らんですが、私みたいな厄介者にすら執着する様は見てられなかった
だから最初はそのうち出奔しようと思ってたんだ」

「それなのにどうしてナザリックに居続けることにしたの？」
「私が自分でも思ってる以上にアインズ・ウール・ゴウンが好きだったからかな。もっと言えばギルドメンバーの面影が残るあなた達のことを存外気に入ってしまったってのもある
　それでもアインズ様の好意なんて絶対受け取りたくはなかったから、アルベドさんの悪意に甘えてでメイドにさせてもらったんです」
「アルベドが悪意を？」
「おっとしゃべりすぎましたね。そこは出来れば追及しないでください
　んで何か感想は？」
「よくわからないところもあるけど、アインズ様がマタタビを気にかける理由はなんとなくわかった気がする」
「あっそ。今更ですけど、喋り方とか気にしないでくださいね？　今になって敬語なんてされたら迷惑です」
「わかってるよ。アインズ様も気にされていないし、今更整えるのは正直やりづらいから

……それと話してくれてありがとう」
「どうもどうも。自分でも何でこんな饒舌なのか不可解なんですけどね」
まるで〈魅了/チャーム〉でも使われたみたいです。ビーストテイマーが魔法なんて使ってくるわけないけれど。
ビーストテイマー？　ありゃもしや……
「〈影分身の術〉」
嫌な予感を感じ、咄嗟に分身体を生み出した。
そして〈地味子の眼鏡〉により分身体のステータスを確認すると、案の定状態異常の項目に『軽度のヘイト値減少』と記されている。
「あっちゃ～」
スキルの使用がばれ、旗色を悪くしテヘペロ顔するアウラさん。
「……うわぁ、ないわぁ」
スキルの使用自体はまぁ許せる。アウラさんも仕方なかったんだよね。
悪いのはわざわざスキルを使わないと碌に話せもしない私の方なのだろう……

今度こそ仲良くなれたと思ったのだけど

オリ主のナザリック勢に対するスタンスは
「私なんかを好きになるわけがない」
「私なんかを好きにならないで」
です。だからアウラが何となく察した『理由』なんて本人には至極どうでもいい、というか聞きたくもないのでしょう。
でも愛情には飢えていますから、つれなくされれば普通に凹みます。
狂ってはいないけど至極面倒な奴

あー、ちゃんとアインズ様主体の話も書いていきたい。

ａｎｏｔｈｅｒ ｕｎｄｅｒ ｇｒｏｕｎｄ 前半

10月14日に投降した出来損ないに後ろからくっつけた奴です。
思った以上に文章がかかり、これで後半もこれと同じくらいになると思います
10月14日のを見た人は★印から読んでください
焦って未完で投稿した挙句継ぎはぎして読みづらくしたこと、深くお詫び申し上げます

わずか1週間という異例の速さでアダマンタイト級にまで上り詰めた冒険者チーム『漆黒』だが、早急すぎる成果は何かと軋轢を生みがちだ。
今は亡きミスリル級チーム『クラルグラ』との衝突が最たるもので、都市の英雄たるモモンを称賛する声が多くあれど、妬み嫉み訝しむ者たちも一定数存在する。
だからここ数日モモンとナーベは二手に分かれて冒険者組合内のボードから依頼

書を片っ端から千切ってはこなしていくこととなった。圧倒的能力差を宣伝していくことで手っ取り早く不満の声を黙らせるためだ。

とはいえやり過ぎれば下級冒険者の稼ぎ口が減りかえって逆効果となる。

その点を考えれば討伐金目当ての魔獣狩りは良い。基本的にやり過ぎることはないし、狩り過ぎて組合側が料金を出せそうもないなら提出しなければいいからだ。

というわけでモモン、もとアインズはいつものように漆黒の鎧で擬態しながらカッツェ平野を彷徨い歩いていた。

漂う薄霧はただの水蒸気ではなく常にアンデッド反応を放ち続けている。基本的には体に無害だが、他のアンデッドの気配を丸ごと包み込んで隠してしまうので急に不意を突かれる可能性があった。

この地では敵に囲まれることも想定し常に気を張っていなければならない。エ・ランテルの冒険者の間で「カッツェ平野を生きて帰れりゃ１人前」と言われるのはこのためだ。

とはいえ出てくるアンデッドのレベルは基本的に一桁程度。たまにエルダーリッ

チやスケリトルドラゴンなども出てくるが無論アインズの相手ではないし、加えて先日の一件があってからＮＰＣやアインズが外出する際には80レベル以上のシモベを複数体同行させることにしていて、今も隠形状態のハンゾウを周囲に忍ばせている。最悪格上のプレイヤーと遭遇することとなってもどうにかなるのだ。

未踏地に足を運ぶ感覚は嫌いではなかったが、如何せん緊張感がない。

退屈に任せ最近扱いなれてきた気がするグレートソードを振り回し、同族意識のわかない同属種たちを屠っていく。

始めこそ悪くない無双感だったが飽きるのに時間はかからなかった。剣を操る片手間で最近癖になりつつある一人語をつぶやいた。

「そういえばアウラが設計したあの仕掛けにはたまげたなぁ！」

先日アインズのもとに提出された偽ナザリックの建設計画書の事を思い出す。

プレイヤーなどの脅威対象が明確でない現状では、下手に防衛力を高くしても無駄な骨折りになりかねない。だからとりあえず『平均80レベルのパーティ１つを壊滅させられる程度』という要求水準に留めたのだが、予算を決めるときにそのことを失念してしまい大きく割り振り過ぎてしまった。

当然アウラも困惑したに違いない。

結局彼女はそのノルマを最低限の予算で完遂させ、余った資金は全てとある仕掛けに注ぎ込むことで対処した。

「絶対アレはマタタビさんのアイデアだろうなぁ……」

その仕掛けとは、偽ナザリックの１～４階層をすべて爆破する大規模な自爆装置である。

避難拠点として使う予定を考慮すると少々難のあるギミックだが、上手くいけば侵入してきたプレイヤーたちを一網打尽できるという、如何にもアインズ・ウール・ゴウンらしい悪辣さが気に入ったので採用することにした。

恐らく没にされることも織り込み済みで、その場合余った予算は返上する予定だったのだろう。アウラのそういう気遣いを含めて非常に好感の持てる計画だった。

マタタビはマタタビでアウラとも上手くやれてるようで何よりである。アインズからすればむしろ妬ましい立ち位置だが。

「……チッ！　剣を振りながら彼女のことを考えるのは良くないな」

そこである嫌なことを思い出し、抑制されるギリギリ程度のイライラが浮かび上がった。

というのは世界級アイテムの事件以降、アインズが習得した剣術をマタタビに見てもらう機会があったのだがそこで酷い酷評を受けたのだ。

『技術面は基本を押さえたって程度で、まだまだ体力頼りなところがあって粗削り。辛うじて及第点ですかね。

だけどロングソードの二刀は論外。アンデットだから膂力の疲労はないだろうけど、両刀長くて可動範囲被るしもう本当に色々と論外。

見た目派手だし冒険者としての宣伝効果を考えるなら悪くないですけど、私や弐式炎雷みたいな機動性重視の前衛相手じゃ格下相手でも簡単に見切られる

素直に片手外して盾を装備した方がいいですよ』

（何もそこまで言わなくてもいいじゃないか。そんなんだから温厚なギルドメンバーですら不評を買ったっていうのに）

意見そのものは正論だし、今のアインズにとって容赦なく評価してくれる相手は貴重だったが、それでも辛辣な物言いや上から目線っぷりがどうしようもなく腹立

たしかった。

やはりまだマタタビとは距離を取った方がいいだろう。とはいえこのままというわけにもいかない。

マタタビのことが嫌いなのは昔から変わっていない。

だが皮肉なことに、アインズは彼女の『アインズ・ウール・ゴウンへの愛着』をかつての仲間の誰よりも信用していた。

本人はそれを絶対に認めようとはしないだろう。

しかしそれならどうして、メイドになってナザリックに居座り続けたり、世界級アイテムからシャルティアを庇ったり、何より自身を救出しようとしたアインズを非難したというのか。

無理に仲直りなんてしなくてもいい。ただアインズは、マタタビの本当の想いを知りたいのだ。

そしてもし、今でもギルドの加入に未練があるならば……

そこまで考えてアインズは思考を打ち切った。

（……いや無いな。メンバーだってもう俺だけだし、俺の事もどうせ嫌いだろう

し、今更いろんな意味で面目が立たない）

なんにしても、とにかく今はマタタビの本音を知らなければならない。どうするべきかを考えるのはその後でいいのだ。

アインズは少しクールダウンしようと剣を置いた。

思えばずいぶん時間がたったような気がする。もしやと思い背後を振り返ると、アンデッドの残骸が二対の山脈のように一本道を切り開いていた。

「おっと、これは少々やり過ぎてしまったなぁ。全部を組合に持って帰るのはやめた方が無難だな。というかここはどこなんだ？」

周囲を眺めると、何もなかったはずの平地にいつの間にやら朽ちかけの廃墟やらがいくつも並んでいる。

カッツェ平野の深部には数百年前の建造物が立ち並ぶ区画があるという話を冒険者組合で思い出した。どうやら切り進んでいくうちに迷い込んでしまったらしい。

迷ったといっても転移魔法で帰還できるので遭難の心配はないが。

「こういう雰囲気、タブラさんが好きだったよな。俺はアンデッドになってしまっ

たから怖いとは思えなくなってしまったけど、見せてあげたかったな……」

ホラー好きの仲間を思い出してわずかに切ない逡巡をするが、考えても仕方ないと切り替え真新しい光景に心躍らせた。

文明の痕跡がみられるが、一体どういう歴史背景があってここにあった集落――都市は無くなってしまったのだろう。ここのアンデッドにもユグドラシルにいた種族があったが、ひょっとしたら過去に転移してきたプレイヤーが関係しているかもしれない。

あれやこれやと取り留めもない想像が掻き立てられ、心地よい好奇心が胸の中に広がっていく。

案の定振り切れた喜びは沈静化されていくが、それでも感情の波が完全に途切れることはなくじわじわとした喜びが滞留する。

「これこそまさに冒険だな！　あぁけどあと２．３時間後には別の依頼予定があるし、準備もしてないしなぁ！」

しかし何もしないでこのまま帰るのはあまりにも惜しい。本格的な調査は後日にまわすとしても、軽い下見くらいはしておきたい。

というわけでモモンとしての活動は一時ＯＦＦ。いつもの神器級のローブを羽織りなおし、関節をウキウキと鳴らしながら散策を開始した。

★（追加分）

◇◆◇

アインズ様直々の依頼書が私の自室に配送されたのはつい昨日のこと。

封筒には90レベル以上の盗賊職、つまりナザリックでは私にしか解除できない厳重な封印がかけられていました。

むろん私は特殊技能でこじ開けて読みました。

それは私が、精神支配をくらって待機状態にあった時のことです。

エ・ランテルにてアンデッドの大群が暴走するという大事件があったのだが、その首謀者は運悪く、イライラ気味のアインズ様とナーベラルさんにバッティングしアッサリ殺されしまったそうな。

しかしその後、事件関係者の死体は冒険者組合に引き取られたものの、翌日行方

不明になってしまったんだと。

うち一人はアインズ様の正体がバレた（というか舐めプでばらした）らしく、もしその死体が蘇生されて情報が抜き出されれば一大事。

アインズ様は後になって失態に気付いたが、今更部下に相談なんてしづらいし（馬鹿じゃねぇの？）、そもそもＮＰＣには調査任務に向いてる人材が居なかった。

ここまで言えばおわかりでしょうが、結局、部下でもなく見栄を張る意味もない、加えてこういった水面下での捜索が得意である私の方にお鉢が回ってきたというわけです。

ようは尻拭いだが、このあいだ自分がやらかしたことに比べれば大したことではありません。

互いに最近ますます悪態が増えてきたものの、クラン騒動やら先日のことやら、今まで彼から受けてきた恩は計り知れない。

無論引き受けることにした……のだけど。

依頼書類には二枚の写真が同封されていた。

一枚は金髪ボブカットにスケイルアーマーの獣然とした女戦士の姿。
そして……二枚目は、怪しく濁ったオーブを握りしめ小汚くぼろいローブを羽織ったぬらりひょんのような禿げジジイの姿。
パット見どちらも見覚えのある顔立ちと姿だ。
特に二枚目。何故かジジイの方は妙に身近な雰囲気を感じる。
寂しい色をした、今を写さず過去を遡るような眼光から連想するものと言えば
（多分この写真って、アインズ様が幻術で再現した姿をアイテムで撮影したんだよね？
だとしたらコイツの目は……なら尚更、まさか、そんな？）
その時荒唐無稽な閃きが頭の中に電撃を走らせた。
それは『ほぼ』ありえない可能性だが、もしあり得たとしても事実として非常にしっくりきてしまう。
途端、本能と理性が大音量で警鐘を鳴らし始めた。これは、関わってはいけないタイプの案件だ。
下手すれば全力をもってナザリックから離れないと、さもなくば近い将来地獄を

見る羽目になるかもしれない。
しかし『アインズ様を一人で残してはならない』。そんな声がどこからか聞こえる。
恐怖と反比例して、逃亡という意思は瞬く間に消失した。
それが『自分の意志』によるものなのかは怪しかったが、賛同はできる
心の底から。
何故なら彼は今も昔もどうしようもないくらい、私の恩人だったからだ。
仕方ない。
まずはジジイの身辺調査から始めよう。幸いアテはいくつかある。
「最近会っていないけど多分まだ生きてるよね？　あいつら」
見ないうちに数人は死んだだろうが全滅はあるまい。
忘れた名前の代わりに間抜けたレモン面を脳裏に浮かべる。
信じない神に彼らの無事を、そして私の徒労と杞憂を祈った。

◇
◆
◇

約小一時間廃墟群を散策したアインズ。最初こそたかが廃墟探索なのにはしゃぎ過ぎたかと内省したが、これが思った以上に楽しかった。

朽ちていく建物の在りし日の姿を思い描き、そして今に至るまでの経緯に哀愁を味わう。

リアルに存在した廃墟マニアという人種は、廃墟の持つ独特の崩壊の美に魅了されてるのかもしれない。

いわゆるファンタジー的なものではないにしろ、なるほどこれも冒険である。

まだ若干時間があったのでもう少しだけ見てみようかなと思ったところで、水を差すように大地を削る重低音が薄霧の中で響いた。

「なんだ？　あれは」

音のする方向から延びるのは巨大な霧のシルエット。

それが建物の陰ではないことは、不気味に移動していることから一目瞭然だ。

なら巨大モンスターの類だろうか？

当然必ずしもデカけりゃ強いという訳でもないが、巨体には巨体の利があるので

油断はできない。
だが何より姿が見えないというのが厄介だ。
「この霧がアンデッド反応を持っているとするならいけるか？〈ドミネート・アンデッド/死者支配〉」
霧そのものがアンデッドモンスターの一種ではないかと予想して、アンデッドモンスターをコントロールできる魔法を使ってみたところビンゴだった。
さすがにカッツェ平野全体までは無理だが、アインズの周囲に漂う霧を退かすことには成功する。
かくして影の塊は徐々に輪郭を露わにし、最終的には巨大なガレアス船の残骸として姿を現した。
側方にはところどころ亀裂や穴あきが見受けられた。帆はボロボロに敗れ怪風を受け流すばかりで、側方から無数に延びるオールもひたすら無意味に空を泳ぐだけ。
動くはずのない残骸が異なる理で行進する様はまるで船のアンデッドのように思えた。
そこでようやく目の前の物体と記憶していた内容が合致する。

これは噂に聞いたエルダーリッチの幽霊船という奴に違いないだろう。
一般のエルダーリッチよりも強力らしいが、それでいて目撃証言や敗戦記録が多く残り結果有名化しているという妙な個体だ。
その矛盾点が気にかかり、前々からアインズもマークはしていた。
どうやら積極的に人間を害そうとしていないので、何らかの交渉ができる程度の知性や理性を持ち合わせている可能性があったからだ。
もしそうであってくれたならナザリックの陣営に招き入れ、冒険者などから身の安全を保障するのを対価にこの世界の情報を引き出すつもりである。
まぁ無理なら無理で滅ぼすだけだが。
思ってもみなかった遭遇に僅かばかりのときめきを感じながら、しかし同時に心を引き締める。
「〈飛行・フライ〉」
定番の飛行魔法で身を浮かせ、甲板を超えマストの頂点部分まで上昇し船内を俯瞰した。
噂ではアンデッドの軍団を率いているという話だった。しかし甲板には人っ子一

人、骨っコロ一つ落ちていない。
幽霊船という割にはキチンと整頓されているようで、木樽や木箱などの備品は一塊にされて隅に置かれている。
というか不要だから適当にうっちゃっているというのが正確かもしれない。
少なくとも日ごろから、この廃船を手入れしている者がいることは間違いない。
うまく交渉できるだろうか。そんな不安が肋骨あたりに溜まるが、支配者としての自覚と自負がたちまちそれを打ち消した。
やらなければいけない。やれなければいけない。
皆の支配者たり得ねば
自室で密かに励んだ練習を思い出し、喉元に残った不安の残渣を吐き出すように声を張り上げた。
「我が名はアインズ・ウール・ゴウン。噂に名高い幽霊船の船長殿、こちらに敵意がないことは我が名に誓う。
話がしたい、姿を見せてくれないだろうか」
すると奥の扉がひとりでに開き、両脇の外灯が青い灯を灯す。そして頭の中に声

が響いた。

『面倒だから、勝手に入って自分で見に来てくれよ』

投げやりで遠回りな、入室許可。

これは特殊なテレパシーでも何でもない只の〈伝言/メッセージ〉だ。

しかしユグドラシルでモンスターとして登場するエルダーリッチが習得しているはずがない魔法である。

この世界のエルダーリッチだからという理由も考えられた。しかしもう一つの可能性の方が高い。

（俺と同じスケルトン系統のプレイヤーか？　迂闊だったが、しかし呼び出してしまった挙句勝手に帰るのは……）

ここで「あなたはプレイヤーですか？」などと尋ねても意味はない。こちらは既にアインズ・ウール・ゴウンとして名乗ってしまっているから、プレイヤーなら感づいているだろう

こっちは個人的なこだわりなので仕方なかったが、自身が相手の立場ならプレイヤーであると正直に自己紹介することは決してない。

幽霊船という自身の陣地から迎撃しようしている場合も考えられる。
だがいきなり交渉を持ち掛けた相手を殺しにかかるほど軽率な相手なのだろうか。
噂からして凶暴性は低いはずなのだ。
様々な可能性が考えられたが、折角の交渉のチャンス。ここを逃せば次がない可能性もある。
以後水面下でプレイヤーの可能性に怯えなければならないのは損失だ。
それに別に相手は『一人で来い』とは言っていなかった。
慎重に行くに越したことはないが、石橋でも鉄橋でも、いつかは渡らねばならない橋ならば今渡ったほうがマシだ。
「もう仕方ないよな。『わかった、少し準備してから入る』」

◇

（まさかカッツェ平野への探検がこれほど大ごとになるとは思わなかったな）
ナーベラルに依頼の破棄を伝言。

その後すぐにアルベドに連絡して、後詰とニグレドによる監視を手配してもらい、その間強化魔法を身に纏った。

共に入室するのは、元々連れていたしていた隠形状態のハンゾウ達だ。

マタタビを連れてくるのもアリだったが、彼女には別件の用事を出しているのと、個人的な心境の問題から。

そして一番大きい理由として、彼女の隠形がバレた場合取り返しがつかなくなるから呼ばなかった。

ナザリックにとって対プレイヤーの切り札である一方、数多のギルドを滅ぼしてきたユグドラシル屈指の危険人物であるマタタビを傍に潜ませていた事実が明らかになれば最悪戦争である。

（まったくマタタビさんは、使い勝手がいいんだか悪いんだか。いや多分絶対悪いよな。

能力は器用なくせに性格と悪行のせいで色々台無しなんだから）

思い出してイライラするのは毎度のことだが居ない奴のことを考えても仕方ない。

準備完了。かかった時間は５分程度。
アルベドはまるでこのような事態を事前に想定していたかの如く、手際よく戦力を整えてくれた。
「急用だというのに迅速な対応、本当に感謝するぞアルベド」
『これはその……とんでもございません。　やはりアインズ様の仰る通りプレイヤーはナザリックにとって強大な脅威ですから』
〈伝言/メッセージ〉越しにも鬼気が伝わる必死さである。
直接体感したシャルティアやアウラが顕著だが、悪くも良くもマタタビの影響が色濃かった。
「お前が深く理解してくれたこと、重ねて感謝するぞアルベド。まぁとはいっても、今回の場合プレイヤーが無関係な可能性もある。
それにシャルティアたちにも言ったが、先日のマタタビなんかは特殊な例だし気負い過ぎなくて――」
『お言葉ですがアインズ様、常に最悪の、最低の結果を想定するべきと、このアル

ベドは愚考します』
「アルベド？」
　これまでと違う反応だ。
　いつもならどんなに小さな称賛でも、受け取ったＮＰＣはこれでもかという程大げさに反応しただろう。
　だが今日のアルベドは違う。
『この世界はひたすら未知にあふれています。一歩踏み誤れば全てを失うこととなりましょう』
　自主性が芽生えた。それは恐らく間違いないし、自ら意見するようになれたのも喜ばしいことだ。
『先日、恩方に牙を剥いたのが何者であるか、またそれが何によって引き起こされたか、くれぐれもお忘れなきように』
「そうだな……まったくだ」
　それにとても手痛い指摘だった。
『ではこれにて失礼します。どうかご武運を』

だがそれ以上に……ひょっとして

「ありがとう、アルベド」

ひょっとして自分は失望されてしまったのだろうか？

『っう!?　……はい』

〈伝言/メッセージ〉は途切れた。

アルベドがオリ主に嫉妬してるのを、アインズが勘違いしただけ。

とは言ってもあながちアインズも的外れではなく、アルベドはアインズの執着に少し呆れてる。

大体オリ主の悪影響です

ａｎｏｔｈｅｒ ｕｎｄｅｒ ｇｒｏｕｎｄ 後半

冒頭でオリキャラは禁止にしてましたが、苦渋の決断で今回は出番なしの既存キャラを捏造満載で登場させることにしました。申し訳ございません。

？＋？Ä}{£+？Ä}*？Ä}*+ＰＯＫＪＪＫＯＰ£*

男には願いがあった。

それは切なる想いであり、深い愛情だった。

ただどういうわけかその願いが、彼が彼であり続けることを否定した。

これまで積み重ねた地位を、名誉を、誇りを、人生を、『願い』は彼から捨てさせた。

慄く周囲はこれを引き留めようとするも既に手遅れだった。

男は歪み、やがて年月を経た『願い』は無形の妄執へと変質する。

ならば『願い』と外道がすれ違うのも時間の問題でしかない。
誰もが望まぬ凶行に手を染め、邪法への探求は十数年にも亘って行われた。
そしてようやく一歩前進できるというところで、しかし理不尽な運命が男を挫いた。
成就の寸前に来訪した敵こそ、後に漆黒として名をとどろかせる王国最強の冒険者チームの片割れ。
女はナーベと名乗った。
『不本意だけど、ナーベとしてとれる最短手で手早く終わらせるわ
今は下等生物（ミノムシ）の相手をしてるほど暇ではないのよ』
《次元（ディメンジョナル）の異動（ムーブ）》
背後に転移で迫った女は手早く懐から抜いた片手剣を男の腹に突き刺した。
彼の人生で初、そして最後となるであろう激痛の電流が全神経に迸る。
『あぁあぁぁぁぁぁあ!?』
痛い、死ぬ、避けられない
何故、どうして、ここに来て？

かつてない苦痛は男の思考から理性と冷静さを強引に引きはがす。
女が第三位階の転移魔法で急接近し物理攻撃を仕掛けた、ただそれだけの事象を認識することすらままならない。
しかし男の本能だけが、不可避の死の訪れを絶望的に理解していた。
『腹を突かれたぐらいでうるさいわね、虻の方がまだ静かだわ。虫けら以下の下等生物（アオミドロ）が』
喘ぐ男にひたすら冷徹な女。
嗜虐心の欠片すらない純粋な無関心、明後日な方向への焦燥感だけが向けられる。
女は無造作に人差し指を男へ向ける。
流れ出る魔力が白魚のような指先へと集約し、鋭く輝く閃光となって間もなく男の死を生み出すのだろう。
男の脳裏に流れる走馬燈には一人の女性――目の前の女ではない――の微笑みが浮かぶ。
会いたかった、そのためならば世界のすべてを敵に回しても構わなかった、母の姿。

『おかぁあさ』
《電撃（ライトニング）》

激しい雷光に包まれながらカジット・デイル・バダンテールの意識は潰える。

＞＞}＊＋L+$¿$?+L$¿$?+$¿$?£+$¿$?Ä{}+*KLIUJ

……

◆◇◆

おそらく船長室なのだろう。

開かれた扉から入って、ほの暗い燭台が並ぶ廊下を渡ると、奥には木製のボロい両開き扉があった。

恐らくこの先に意中の人物がいるはずだ。

湧きあがる緊張を投げやりな気持でもって追い払い、指骨で二回扉を小突く。

「勝手に入れと言っただろうに……」

不機嫌そうなしわがれた声が扉越しから聞こえてくる。
しかし勝手に入れと言われたとして、それを躊躇なく真に受ける奴は人としてどうかと思う。
「では失礼する」
半ば意地を張って入室の礼を崩さないまま、ゆっくりと扉を開き入室した。

船長室という見立ては正しかったのだろう。
少し広い程度の小部屋である。壁際にはカビ臭そうな本を敷き詰めた本棚や、潮風を浴びすぎて読めなくなったと思しき地図が広がっていた。部屋のサイズに見合わない、でかでかと意匠の凝ったシャンデリアが窮屈そうに天井を占拠していて、そのシャンデリアの直下にはコンパスや油の染みた書物と地図で散らかった執務机が照らされていた。
全体的に賊船のような野蛮さが垣間見える雰囲気だ。
そして机の奥の回転椅子に腰掛ける者が一人。
紺色の外套に身を包み、退廃的なまでにギラギラとした指輪やネックレスをこれ

でもかと下品に着こなす男。
ただしその顔は白骨死体のそれである。
目の前のエルダーリッチは短く自己紹介を切った。
「パーミリオンだ。今はこの汚い船の船長やってる、しがない愛猫家だよ」
パーミリオンはそう言い捨て、白磁の腕を虚空に伸ばす。
その意図に反応し空間がねじ曲がって『穴』が開いた。
穴に突っ込んだ腕は一本の上等なパイプを取り出して、そのままパーミリオンの剥きだしの歯に咥えられた
「……！」
それら仕草の一部始終は間違いなくアイテムボックスの使用、
そして何よりわかりやすい自己紹介である。
プレイヤーと相対する覚悟はしていたが、的中してもなお動揺は負えなかった。
同族のアンデッドだからか、そんなアインズの心境も筒抜けのようだ。パーミリオンはパイプの煙を、からかうようにアインズへと吹きかける。

「……んでもって、いわゆる魔神って言えば通りがいいかい？　プレイヤーさん」
「魔神だと？　てっきりあなたは――」
「――その驚きぶりからして聞きたいことは山ほどあるんだろーが、その前にアンタの、アインズさんの話を聞かせてくれよ。
さもなきゃアンフェアだぜ？」
親し気に二の句を遮り、パーミリオンはアインズの疑念を窘めた。
続いてアイテムボックスから悪趣味な趣向を凝らした黄金の玉座を取り出し置いて、座るように促した。
なんとなく嫌だったので、アインズは普通に地味な木椅子を取り出し勝手に座る。
「……そうだな失礼した。ではこちらから開示できる範囲のことを話すとしよう」
「ぐぬぬ」と唸るパーミリオンはなんとなく無視した。
◆
「へぇあんたも最近ハウスごとユグドラシルからこっちに引っ張られたクチかい。
んでもって今は部下と一緒にこの世界の情報をかき集めてる最中と」
「そんなところだ。だから事情通らしきあなたの話は是非聴かせてもらいたい」

話を聞いて満足げなパーミリオンは、手前の気怠さを嘘のようにかき消し無い舌を饒舌に前し始めた。
「〝あなた〟なんて他人行儀は結構、パーミリオンと呼んでくれ。
むしろハウス持ちなんて知らなかったし、おたくの部下が怖いから、アインズ様とでもお呼びしましょうかい？」
「……嫌な奴を思い出すからそのままで結構。部下にはこちらから言い聞かせる」
「そりゃども失敬、頼んまっせ」
「初対面の不気味な面影がまるで嘘のようだな」
「よく言われ……無いな。引きこもりだから」
重厚な声の響きに対して存外明るい性格である。
不気味な装束と幽霊船の雰囲気から醸し出される独特の気配とまるで乖離している。
これでも周辺国から恐れられるエルダーリッチだというのに威信も何もあったもんじゃない。
アインズは自分は決してこうはなるまいと内心で戒める。

ただ実のところ、部下の忠誠に内心あたふたするオーバーロードのほうが１００倍滑稽だったりするが、本人に自覚はない。
「さて何から話したもんか。客人と話すなんて久しいからな。俺の生涯１から10までエッセイするのもやぶさかじゃあねぇぜ？」
「どれだけ人恋しさに飢えてるんだ……。心意気感謝するが、正直そこまで聞いていられない」
とはいえアインズも気持ちはわからないでも無かった。
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!　辛辣なこった！　でもいいさ！　自己紹介の続きをしようか。
まず魔神のことを話さにゃならんが、そもそも魔神って何か知ってるか？」
「私が知りうる限りでは、数百年前に突如大量発生した強大な力を持つ有象無象。この世界に甚大な被害をもたらした亜人や異形や人間種など個々纏まりの無い者達のことで、世界中の種族が手を組んで滅ぼしたという話のはずだが……」
ここまではアインズが現地で調べた伝承そのままだ。
だがもしそれが額面通りであれば、目の前の存在と矛盾してしまう。

つまりまだ裏があるのだと、パーミリオンは言いたいらしい。
「しかしどう言ったもんか、ハウスの主にはちと言い辛いことなんだが……」
パーミリオンは痒いはずのない頭蓋骨をガリガリ引っかき言い淀む。
その仕草からアインズも、前々から考えていた仮説が脳裏に浮かんだ。
そして結局ドンピシャだった。
「端的に言えば魔神っつーのは、ギルドが拠点崩壊して行き場をなくしたＮＰＣのことだ」
「やはり……そうか」
「……そらちょっと頭まわせば勘づくよな、わりぃ。あんまいい話じゃなくてよ」
「別にお前が謝ることじゃない」
目の前のパーミリオンは、エルダーリッチにしてはあまりにも情緒が豊か過ぎる。
だがそれがＮＰＣとして作られた設定ならば納得がいくものだ。
きっとかつては信望する何者かがいて、恐らく今はその人も、忠誠心も失われている。
もしＮＰＣとしての忠誠が残っていたなら、冗談でもアインズへ『様』の敬称つ

けたりなんてしないだろうことはよく知っている。

「本題に戻ろう。何なら私の推測を述べようか。

６００年前に転移した六大神のギルド拠点を５００年前に転移した八欲王が破壊し、六大神のＮＰＣが魔神化。

八欲王が自滅した後、そのまま残った八欲王のＮＰＣが13英雄にアイテムを貸し与え魔神を殲滅させた。状況としては恐らく全体的に八欲王側にコントロールされていたのだろう。

これが伝承に残る魔神戦争の実態ではないかと私は考えているのだが、どうかね？」

「凄いな、まるきり正解だぁ……と言いたいところだが生憎満点は上げられないな」

「違うのか？」

急に硬い表情――と言っても骨なのだが――をとって渋面をするパーミリオン。

「アンタが言ったことは、そんで八欲王がバカでワルなのも事実だぜ？

ただ俺らにとっちゃ、六大神に仇討ってくれた恩があるということさ」

「ならばお前は、というかここは！」
「ご察しの通りだ。おいでユダ」
パーミリオンは指骨をパチンと打ち鳴らす。
それに釣られて一匹の子猫、正確に言うなら骨格だけのキャット・ボーン（骨猫）というモンスターが、執務机の下から這い出て木椅子に坐したアインズの大腿骨上りあがる。
そして口元に咥えた一枚の布を見せつけるようにしてアインズを見上げる。
それはアインズも良く知るとあるギルド旗だ。
「ネコさま大王国の骨猫飼いパーミリオン、それがかつての俺の名だ。
愛しいハウスは六大神に潰され、今じゃ死霊の巣窟で
カッツェ平野と、そう名付けたのも他ならぬ俺なのさ」

ネコさま大王国とはその名の通りネコ好きたちによって結成されたギルドであり、その成り立ちもあってユグドラシルにおいても指折りの勢力を誇っていた。
当然「誇っていた」と言ってもそれは最盛期の話であり、最終日ごろにどういう

状態だったかはアインズも知る由がなかったが

「そうか、来ていたのか……」

正直複雑な心境である。

同じくして異世界へ迷い込んだ同郷とも言えるし、あるいは敵対していたかもしれない可能性を考えると既に滅んでいてくれたことは都合が良い。

ただ眼前のパーミリオンのことを思えば、そういう打算は酷く気が咎めるようにも思う。

「いやいや、どう考えたってアインズさんが気にすることじゃあねぇと思うぜ？

身内びいきを度外視すりゃあはっきり言って、『滅ぶべくした滅んだ』んだからなぁ」

『身内びいき』などと宣うが、かつてＮＰＣだった者がそれを口にすることがどれほど異常なことだろう。

そんな冷めた客観視など、アインズの知る子供たちなら決してしないし、不可能だ。

数百年の時空の流れか、はたまた魔神化による影響が彼の在り方を歪めたという

のか。
そんなアインズの戦慄を知ってか知らぬか、パイプの煙を噴き上げ自嘲気味に肩をすくめながら、パーミリオンは経緯を語った。

大昔、元々この地はとある亜人種族の集落だったらしい。
それが実に７００年前、数名のプレイヤーとＮＰＣを引き連れたネコさま大王国の拠点が突如転移してきたことで、その運命が大きく歪む。
時間をかけて亜人と密接に関係を深めたネコさま大王国は亜人と周辺人間国家との抗争に介入し、一時はそれらすべてを支配下に治めるほどにまで至った。
ところが６００年前に転移してきた、今で言うところの六大神達が今度は人間側に付いて、プレイヤー同士の戦争にまで発展する。
結局自力で負けたネコさま大王国とその亜人達は歴史の闇に葬り去られ、魔神化した者たちも尽く殲滅される。
やがて現在に至るまでのスレイン法国の信仰心、ヒューマニズムの礎となった。

そしてそれから約７００年間、唯一の生き残りであるパーミリオンは拠点の残骸の周囲を亡霊のようにずっと彷徨い続けている。

「ＨＡＨＡＨＡ！　かれこれ主人に仕えていた期間より、一人の存在として在り続けた生涯の方が断然長い。

だからまぁ、今にして思えばあんまりいい主人じゃなかったぜ？　無駄に見栄張るもんだから、おだてるこっちが大変だっつのよ、ＨＡＨＡＨＡ！」

「……」

そんな話を何気なしに語ってしまえる平然さが怖い。

もっと言えば、平然とならざる得なかった７００年という深い虚空が。

自分だったら耐えられる気がしない。

しかし仮に耐えられなかったとして、アンデッドの精神はどんな狂気や悲嘆も沈静させることだろう。

永遠に、正気のままで孤独にあり続けるのだ。

目の前の男が立つ境地はきっと限りなく地獄に近しく、そしてきっと――

「今じゃ一人きりっつっても、ほら来なペットども」

快活な声で、何かを呼ぶように手をたたく。
するとそれにつられてか、棚や机の隙間などから10匹のケット・ボーン(骨)(猫)が姿を現しパーミリオンの傍に寄り添った。
「ペトロ、ヨハネ、アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス・ヤコブ、タダイ、ヤコブ と、それにさっきのユダ。
主人が残した忘れ形見で、今なお残る俺の御役目にして唯一の生きがい。
こいつらがいたから俺は寂しくなかったよ」
「……なら、良かったな」
——そしてきっと、今のアインズもそう遠くない場所にあるだろう。

虚構の肺から息を吹き込み、パーミリオンはパイプを蒸かしてまた紫煙を放った。
なるほど煙草ならアンデッドでも味わえる。よく考えられた娯楽だ。
鼻腔をくすぐる甘い香りが心地よく感じる自分自身に嫌悪した。今度自分もやってみようかなどと、思える自分が恐ろしかった。
だから恐怖に反射するようにして、かつてマタタビが侮蔑した一つの感情が再び

浮上した。
「パーミリオン」
「なんだい？」
「ナザリックに来ないか？
あなたを狙う冒険者は多い。そのうち討伐隊が編成されて、あなたの身に危険が及ぶこともあるだろう
当然ケット・ボーン（骨猫）も一緒だ。こちらとしても、この世界の情勢に詳しいであろうあなたはぜひ引き入れておきたいのだが」
「すまん、ムリだ」
「なら時々でいい。こうして面会し、情報交換する機会をまた作ろう！」
「……あのなぁあんたっ！」
感情に任せに机が叩かれる。地雷を踏んだ音がした。
温和で陽気な彼がアインズの前で初めて感情を荒げ、薄笑いの下の本物の想いで殴りつける。
「年端も行かぬクソガキが。馬鹿にすんなよ、俺が何年生きてると思ってる。眼を

見りゃわかるさ、あんたが俺と同じなことくらい。
そのおまえが、よりにもよって俺の在り方を否定するのか？
俺が手にした安穏と平穏、これを手にするのにどれだけ心身削ったか。お前もいずれ知ることになる」
エルダーリッチがオーバーロードを小僧呼ばわり。
知ってか知らぬか、しかしあまりにも状況に相応しい。
「……もう十分なんだ、こいつらが居れば。この船さえありゃ。お前だって、家と家族、それさえありゃ十分だろ？　この世界にそれ以上の幸福があるか？　無いだろ？
無いだろ、無いんだ、無くなったんだよ、そもそも存在しないんだ！　お前が何より知ってるはずだ、アインズ・ウール・ゴウン」
そうだ、知っている。
この世界にはもう心許せた仲間たちはきっと居ない。彼が仕える主人と同じだ。
居たとして、それは恐らく……
『ふざけるな！　みんなで作り上げたナザリック地下大墳墓だろ！　なんで簡単

に捨てることができる?!』

主人ではなく、仲間は居ない。

ならそうだ、閉じてしまえ。

全て思い出の中に閉じ込めて、叶わぬ想いを想い続けて、忘れ形見と慰め合おう。

それしか無くて、それしか無いならそれでもう……

なんだ、誰だ

『ったくそんなんだからアルベドさんに愛想つかされるんだよクソ骸骨』

あぁそうだ、思い出に埋没することを拒絶した声があった。

そして彼女は思い出ではない。思い出ではない彼女をの想いを、アインズはまだ知らない。

これから知ろうと、ついさっきだって思っていたはずなのに

だから

「知らないな、老いぼれがほざく幸福論なぞ欠片ほどの興味も沸かない。俺が知り

たいのはもっと別のことだ」
「……話が違うな。こんな奴だったのか？」
彼のいう話が、何の話かはわからない。
ただ確かに、あれから何かが変わったのだろう。
マタタビを嫌いだと自覚した時と、そんな彼女が嫌いではないと気付いた時から。
「あんただって、ホントは来ない方がいいんだがなぁ……」
「また来るよパーミリオン。あなたとは友達になれそうだ
あぁだがしかし、何の土産もなのは少しアレだな。何か良い物は……」
整理されてない乱雑なアイテムボックスを漁る。
友好の証に相応しいものは無いだろうか。
「そうだこれがいい」
死の宝珠。前回の依頼で手に入れた戦利品だ。
40レベルのアイテムはアインズには不要だったが、能力的にもパーミリオンなら丁度よいだろう。
ああだこうだ叫ぶ宝珠を無視し掴んでほいっと投げ渡す。

「おまえ、こいつは！　最初から知っていたのか？」
「ん？　なんだ、この世界では有名なアイテムだったりするのか？」
デスナイトが伝説扱いされるなら案外それもありうるのか。
余りものを押し付ける意識と相手の反応のギャップが少しつらい。
「知らバックレやがって。へぇ、やっぱアンタ気に入った！」
「あぁそう……なら良かった」
知らない間に好感度を上げてしまうのはもう慣れた。ともかく歓迎してくれるなら何よりである。
出した椅子をしまい込み帰り支度を済ませた。
「……とりあえず今日のところは根負けってことにしといてやる。
来るなら勝手に来てくれよ。ただし俺にも事情があるから、この地から離れることは出来ないがな」
「わかった、今日はありがとう。また会おう」
「じゃあな」

意味深な視線に見送られながら転移門を開き帰還した

……こいつを真面目に解説すると１話書けそうで怖い。

推しキャラではなく、あくまでアインズ様の合わせ鏡。舞台装置として作ったつもりです（遊び心はありますが）。

オリキャラの解説

☒◆パーミリオン［異形種］　ｐａｒｍｉｌｌｉｏｎ

☒◆性別：男性

☒◆年齢：推定７００歳以上

☒◆二つ名

・幽霊船長

☒◆役職

・フライングダッチマン号船長

・？？？

・旧ギルド：ネコさま大王国骨猫の番

☒◆住居

・フライングダッチマン号の船長室（カッツェ平野）

☒◆属性アライメント

中立［カルマ値：０］

☒◆種族レベル

・スケルトンメイジ１０ＬＶ

・エルダーリッチ５ＬＶ

☒◆職業クラスレベル

・チョーセン・オブ・アンデッド：５ＬＶ

・ネクロマンサー：１０ＬＶ

・ビーストテイマー：１ＬＶ
・レッドローブウィザード：５ＬＶ
・ハーミット：１０ＬＶ
・ロード・オブ・キャッスル：１０ＬＶ
☒◆［種族レベル］±［職業レベル］：計56レベル
・種族レベル：15
・職業レベル：41

ネコの骨格標本を愛したプレイヤーが課金で設置したケット・ボーン（骨）（猫）の飼い主として創造したエルダーリッチ。

ネコさま大王国で唯一の猫以外のＮＰＣなのだが、その作成経緯上から創造主の思い入れは皆無だった。

転移の際には創造主も同行していたのだが「俺も猫のＮＰＣにすりゃあよかった」など散々。種族上、猫ばかりの他のＮＰＣと打ち解けられるはずもなくひたすら孤独。

ＮＰＣは拠点崩壊の影響で忠誠心を失いその多くが暴走したのだが、彼の場合精神構造上暴走せず生き残った。むしろ虚しい忠誠心を失ったおかげで救われたまである。

ケット・ボーン[骨猫]にはキリストの十二使徒の名前が付けられているが、見分けがついてるわけでは無い。本人には見分けがついてるつもりなのだが、ネクロマンサーの能力で操ってるだけなので名前（ユダ）を呼んで最初に現れたヤツがそう（ユダ）呼ばれるだけ。ツッコミは不在。

アインズが好印象だった理由はケット・ボーン[骨猫]が敵対反応を示さないアンデッドだから。

※原作ではアウラあたりが交渉役だったということにしておく（ねつ造）。

アンデッド以外のキャラがコイツと交渉したら魔神うんぬんまで喋らないが、巻みたいに船に旗飾るくらいなら条件次第でやってもらえる。

嫌な予感

話の都合でオリ主の察し力がエスパー並みになってしまってやや強引な展開です。

昔から、嫌な予感ほどよく当たるほうだった。

これの逆のパターンで、嫌な予感が尽く外れまくり取り越し苦労連発なのが愛すべき支配者、我らがアインズ様だ。

あれはあれで大変そうだが、やっぱり嫌な予感は外れてくれるに越したことはない。うらやましい限りである。

本題に戻りましょう。それで今回の嫌な予感というのが、カジットのことである。

写真で一目見た時からただ事ならぬ感じを受けたのだけれど、なにせそれはただ

の直観であり妄想に過ぎないから、誰かに具体的に説明するにはまだ情報が足りない。

強いて言語化するならば、ただなんとなく、何者かのすさまじい邪悪と冒涜の思惑を感じた、となってしまう。

だからまず裏取りが必要なのだが幸か不幸かアテはあった。

「ごきげんようスカッシュレモン。久々の娑婆の空気はいかがですか？」

「うっ、ここは」

木造建築、六畳間ほどの素朴な一室。薄汚れた白塗りの壁につけられた小さな窓辺。差し込む陽光は長らく地下幽閉されていた彼にはやはり眩いようで、目覚めと共にうめくようにシーツを被る。

やがて瞼越しからゆっくりと目を慣らし起き上がって、ベッドの傍に腰掛ける私の方へと視線を合わせた。

「ここはお前らが襲って滅ぼした旧村の空き家の一つです。喜べよ、私がわざわざおまえを釈放してやったんですから。

怖い怖いニューロニストはここに居ない。尿道結石ごっこも聖歌隊ともこれでお

さらばですよ？」

「……」

一方的に喋りかけるこちらに対し、眉間にしわを寄せ硬い表情で押し黙るスカッシュレモンさん。まぁ無理もないでしょう。

陽光聖典にかけられている呪術ペナルティを私が看破してしまったがばかりに、カルネ村での騒動以来ずっとこいつは６階層の捕虜施設に収容されていたのだ。

それで時々、ニューロニストの実験台にされたり幾ばくかの尋問によって呪殺したりと散々だったご様子で。

こいつらのやったことを思えば同情には値しないけれど、解放されたことに少しは気を緩めてくれてもらわないとこちらが困る。

わざわざアインズ様に釈放手続きを取り、希少アイテムである超位魔法版の魔封じの水晶で〈星に願いを（ウィッシュ・アポン・ア・スター）〉を行使し呪術ペナルティまで解いてやったのだから。

あぁしかし最近実に馴染み深いような、こちらを見定める彼の懐疑な眼差し。

どうしたもんか。アウラさんならもっと気楽に対話が見込めるだろうがそうはいかない。

今のこいつをナザリックに引き渡すと〈傾城傾国〉の件がバレて、スレイン法国がアインズ様に潰されかねないから。

そう考えると私って案外、彼らの祖国の救世主になるのかも。仇を恩で返す慈愛っぷりが我ながら半端ない。

現実逃避的な思考を巡らせていると、向こうから会話の口火を切り始めた。

「聞きたいこと、知りたいことは山ほどある。だがまず一つだけ確認しておきたい。お前はあの恐るべき魔法詠唱者、アインズ・ウール・ゴウンの何だ？」

それは非常に深い問いだ。

敵か、味方か、あるいはどちらでもないのか、どちらでもあるのか。

質問者にとっては我が身の運命に直結するから言わずもがな真剣で、回答者にとっても己がアイデンティティの定義に他ならない。

これまでの不安定でふわふわとした立場が許されていたのは、私の甘さとアインズ様の優しさのせいだ。

けれどここから先に踏み出すならばそうはいかない。

「アインズ・ウール・ゴウンは恩人だ。基本的には味方だけれど、アイツと相反す

る思惑が無いわけじゃない。
この尋問自体アインズ様も実は知らないからね。これで満足です？」
我ながら凄まじい胡散臭さだ。
せっかくの初対面なのだから、馬鹿正直に白状せずに堂々と敵対声明でもあげて信用させる方が賢いのに。
「お前についてはひとまず、いい。そもそもこちらは多くを求められない立場だ」
「なら早速質問に～」
「……待て」
「多くを求められない立場じゃあ無かったの？」
「お前については、だ。駆け引きというものをまるで理解していないようだな」
すると呆れたように首を振り、多少何かをためらうようにしながらも答えてくれる。
「詳しいことは知らないが、私の処遇がこれほどまでに変わったということは相応の事情があったのだろうと予測がつく
私との尋問に対しそれだけの価値を見出したのなら、それに答えた私には、或い

は答えなかった場合には一体何がもたらされる？」
「考えてなかったですね」
「……おい」
だってどうでもいいんだもん。
「生殺与奪を握られてるのは確かなようだ。しかし国家機密を暴露し祖国を危険に晒した挙句、用済みだからと捨てられるのは割に合わない。
ならば沈黙を貫き殺されたほうがマシだ」
「つまり国家機密でも何でも喋るから殺さないでくださいと？」
「……解釈は自由だ」
プライド張るのも忘れないとは面白い人。
「いいでしょう。答えてくれた暁には衣食住不自由の無い極楽監禁生活か、条件付きで祖国に返還してやるのもやぶさかではありません
そして信じるか信じないかはあなた次第です」
「好きにしろ」
どのみち不信の先に彼の命は無い。

けれど祖国のことを慮るなら、不信を貫き情報を死守するほうが大事だと思いますがね。

「おまえ存外俗人だねぇ」

「真偽はともかくそこまで破格の待遇を並べるのだから、一体私から何を聞き出そうというのだ。国宝の隠し場所なら――」

「じゃあ聞くけど、カジット、もしくはクレマンティーヌの名前に聞き覚えがあったりしない？」

「そんなことで……よかったのか？」

・

カジットとクレマンティーヌ、そして目の前のレモン。

三者を結び付けた発想の根拠は、それほど複雑なものでもない。

以前カルネ村でニアミスしたレモンは〈地味子の眼鏡〉の効力により『スレイン法国陽光聖典』の所属であると看破済みだ。

アインズ様から渡された資料によると、クレマンティーヌとカジットは所持していたマジックアイテムによってスレイン法国の出自であると既に冒険者組合が特定していた。

そして特にクレマンティーヌに関しては、私が精神支配中に遭遇した『スレイン法国漆黒聖典』に兄妹のようによく似た顔の奴がいたから、加えて実力からしても中枢に近い人物であると予想した。

最悪クレマンティーヌのことだけでも聞き出せれば良かったのだが、運がよくカジットとも面識があったらしいので助かった。

曰く、クレマンティーヌ。

優秀な兄に恵まれ本人も英雄の領域へとたどり着いた実力者で在りながら、その力を人類のために行使することをせず猟奇的な快楽殺人にばかりかまける人格破綻者。

私がぶっ潰した漆黒聖典の第九次席だったらしいのだが、つい先日祖国を裏切り

国宝である〈叡者の学環〉を奪い逃走していたらしい。別働隊である風花聖典が追跡中だったのだとか。

「まさかズーラーノーンに身を隠していたとはな……」

「しかし優秀な兄ねぇ。個人的には色々と思うところが無いではありませんが、まあいいでしょう」

快楽殺人者、〈叡者の学環〉に亡命者。

アインズ様の報告書と符合する箇所がいくつかあるし、彼自身〈読心感知〉でも嘘の気配はしないから情報の正確性は立証できたといってよいだろう。

「ちなみにズーラーノーンについてはお前の立場なら何か知ってるんじゃないの？

死霊系魔法詠唱者が集った国際的カルト集団っていう私の認識が正しければ、当然スレイン法国とも対立関係にあるんじゃないかな」

「確かに思想上対立こそしているものの、宗教国家として完成している我が国とでは実際のところ相容れないのが現実だ。

生憎、私や最高神官たちの認識もおそらくお前のソレと大差はない。王国や帝国のほうがまだ事情に通じているくらいだろう」

「そりゃ残念」

とはいえ問題はない。期待してない訳ではなかったが、今一番欲しい情報は別にある。

そもそも何のために希少アイテムである超位魔封じの水晶を使い捨てたのかといえば全てはあいつのためなのだ。

「じゃ次。これが本命なんだけど、カジットについて教えて。生い立ちや、闇落ちした経緯何かが分かれば出来るだけ詳しく」

レモンにしてみればわけがわからないだろう。とるに足らないような奴の情報を、どうしてそこまで聞きたがるのかと。

心を読み取るまでもなく顔に描かれる疑念の様相。しかしそれらを飲み込んで、「わかった」と、二つ返事で語り始める

「カジット・バダンテール、洗礼名を含めてカジット・デイル・バダンテール。辺境の村落出身で、かつては神官を目指していた実に信心深い男だった。

信仰系魔法における深い造形を持ち、以前陽光聖典に勧誘したこともあったのだ

が断られた経緯があって、以降短い期間だが付き合いがあったのだ

なんでも彼は、生命力を喪失しない新たな復活魔法を生み出すことが長年の夢であったらしい」

「復活魔法の研究？　それって……」

たしかこの世界で一般的に知られている主な復活魔法は第５位階の〈死者復活（レイス・デッド）〉だけだったはずだ。

ユグドラシル基準で言えば低位な部類に入るこの魔法は、復活の際に大量の経験値を喪失する。精々１～２レベルしかない一般人では復活させることが出来ないだろう。

前々より感じていた嫌な予感。あいまいだった予想図が徐々に輪郭帯びていく。

「確か母親だったか。幼少期に亡くして以来、故人を復活させるために研究を続けている。

しかし本人の魔法の才の問題もあって行き詰まっていたらしいのだが、ある日突然その方針が大きく変わることとなった

とあるアイテムを譲り受けたと言って、当時自慢げに見せてくれたのだが――」

「まさか死の宝珠？」
「なぜそれを……いやいい。
ともかくあの男はそのアイテムで自らをアンデッド化させ、研究に必要な悠久の時間を手に入れると言っていた。
馬鹿なことだと私や周囲が言い聞かせたが聞く耳を持たず、奴は洗礼名であるデイルを捨ててスレイン法国から姿を消してしまった。
以上、これが私が知りうるカジット・バダンテールとクレマンティーヌの全てだ」
「ねぇ、その死の宝珠をカジットに渡したヤツってわかる？」
「知らないが、奴がズーラーノーンに加入したという話が本当ならば大方の予想はつく。
自らをアンデッド化させる魔法と言えば第７位階の〈死の螺旋〉。その昔、ズーラーノーンの盟主がこれを行使して、都市を一つ滅ぼした逸話は非常に有名だ
つまりはそういうことだろう」
「……よぉーくわかった、ありがとう。本当に助かりました」
「何が役に立ったのかは知らんが、約束は本当なのだろうな？」

「ただし条件付きでね。
でも大丈夫。あなたにとっても悪い話では、というか聞いたら絶対引き受けてくれるだろうけど」

・

「実はさぁ、おまえをフルボッコしたアインズ様のことはよぉーく覚えてると思うんだけど、先日あいつの部下がカルネ村近辺に潜伏していた漆黒聖典ってーのと衝突して危うく死にかけたんですよ。
それで激おこしたアインズ様が返り討ちにして滅ぼしたんですが、不幸中の幸い、結局どこの国の回し者なのかあの人知らないままなんです。
ここでクエスチョン。バレたなら、スレイン法国はどうなるでしょーねぇ？」
「何を言っている！　あんな奴に勝てるわけがない！　滅ぼされるにきまっているだろう!?」
やはり相当トラウマなようで、話を聞いたレモン面はすっかり青ざめて絶望色に

染まっていった。
変に疑われると厄介だったので話が早くて非常に助かる。
「そうそう。ちなみに私も個人的な事情があって奴にスレイン法国が滅ぼされると大変気分が悪いんです。
だからお前にはこっそり祖国に帰ってもらい、国家首脳と口裏合わせて知らんぷりしてもらうと凄く助かる。もちろん私も援助もするからさ
それで答えは？」
「無論是非もない。最高神官たちの説得は難航するだろうが、絶対にあの男を法国にぶつけるわけにはいかない。
尽くせる限りの力を出すが、おまえは良いのか？」
「はい？」
「お前がアインズ・ウール・ゴウンの味方なのだとしたら、これは大きな裏切りであるはずだ。
あのおぞましい拷問部屋から解放してくれたことと、裏切りかけた祖国へ挽回のチャンスを与えてくれたことは非常に感謝している。しかし私が祖国に戻ってお前

を裏切らないとは限らないだろう。
おまえにとってこの共謀はあまりに綱渡りが過ぎるのではないか？」
「優しいね。でも最初に言ったでしょう？
基本的には味方だけれど、アイツと相反する思惑が無いわけじゃないって。
万が一バレたら土下座するし、許してもらえなくてもあの人に殺されるならそれはそれで良い」
味方でも譲れない一線はある。
よりにもよって、私に対する好意なんかのためで国家を滅ぼされるなんて真っ平ごめんだ。
かといって私が滅ぼさないよう頼みこんだとしても、結局彼の殺意を『私への好意』で押さえつけてしまうなら本質的には同じこと。
だから人知れず証拠隠滅してしまうか、あるいは裏切った私のことを彼が見限ってくれたならそれでも良い。
それで私や仲間に対する執着が薄れてくれて、アルベドさんに少しでも日の目が当たれば儲けもんだ。

どうせ、彼に拾われてしまった2度目の生なのだから。

「それとお前の裏切りに関してだけど、これでも人を見る目はあるからね。

残念ながらこれだけの恩義を吹っ掛けられて裏切ってしまう根性はお前にはなさそうだし、万一でも裏切らないように監視もつけるつもりだよ」

「……覚悟はよくわかりました。いいでしょう、貴方の企てに乗らせていただきます」

アイテムボックスに手を突っ込み取り出したのは一冊の皮造りの重厚な魔導書だ。

ページを開き、ユグドラシル金貨を零して落とすと見る見るうちに吸い込まれていく。

やがて一枚のページが千切れ舞い上がったかと思うと、切れ端に描かれた魔物が飛び出すように召喚される。

「傭兵モンスター、レベル80のハンゾウくん。

基本的にはお前の言うことを聞くようにしておくけど、裏切ったりナザリックの連中に見つかりそうになったらお前共々心中してもらいます。

そのほか情報工作については追々考えましょう

それでは改めまして自己紹介、私の名前はマタタビです。これからどうぞよろしくね？」

「私の名前はニグン。ニグン・グリット……いえ、ニグン・ルーインです」

◆

実は少し前、くだんの騒動が落ち着いた少しあとで殺人実験をしたことがあった。

カルネ村でアインズ様が殺戮じみた振る舞いをしていたのは今の私の記憶には新しい。

しかしデスナイトに襲われる甲冑の皆さんの悲鳴とかダイレクトな感情反応を感知しても、人間だった時ではありえないくらい私の心境は無感情だった。

まるで蟻とか虫がつぶれてるだけのような感覚だ。

それなら私自身が誰かを殺すことになる場合はどうなのだろうと。

まぁ厳密には精神支配状態だった時に漆黒聖典の人間たちを結構むごく殺害してしまったのだけれど、あれは状況が状況だから除外する。

今日みたいに陽光聖典の捕虜から適当に一人かいつまんでから、適当な刃物でぐさぐさしてみた。焼いたり削ったり煮たり切ったりとかもしてみた。

結果はやはり何もない。

罪悪感に押しつぶされて死にたくなったりもしないし、生理的嫌悪感も皆無。かといって過剰なアドレナリンが出て高揚感に浸るわけでも無い。ちょっと汚いな、ってくらいだった。

小さいころ好きだったものが今じゃなんとも思わないなんてのは誰しも経験があるだろうけど、そんな範疇は超えている。

異形化して精神が変質したことは火を見るよりも明らかで、その変化自体に恐怖を覚えないわけではない。けれどもしこれからもナザリックの連中と付き合い続けていくことを覚悟するなら、この変化を受け入れあまつさえ「都合がいい」と思えるくらいじゃなきゃダメだ。

こういう擦り合わせはらしくないとわかってるけど、それほど難しいことでもないのだし。

と、ずっとそんな風に割り切るつもりだった。ところがそこへ来て今回のニグンである。

もともとニグンは殺すほうが都合がよいとは分かっていたし、スレイン法国への情報工作なら私がやれば良かったのだ。ところが結果はどうだろう。

先ほど私は、高価な傭兵ＮＰＣやその他諸々を握らせて、転移魔法でスレイン法国に彼を送り届けてやってしまった。

どうしてそこまでの厚遇を彼に与えてしまったのか。

理由は私が最低に甘ちゃんだからだ。

先ほどのやり取りの中で懐疑にかられながらも正体不明の私に対し慎重に言葉を選ぶニグン。

しかしその心の奥底では、解放してくれたことへの感謝とさらなる救済への切望がずーっと渦巻いていた。

ありがとう、そして頼むからどうか助けてくれと。

「困っている人がいたら……なんてばっかみたい、私」

偽善ここに極まれり。まったくもって反吐が出る。

「まぁいいまぁいいそんなことより問題はアイツ！」
ごちゃごちゃして収集つかなくなりそうな思考を放棄し、また別の厄介ごとについて考える。
どのみちニグンがいなくても、現在の状況は非常に頭が痛いのに変わりはない。
カジットにまつわるとある突飛な疑惑は、否定されるどころか着々と確信へと近づいてしまっている。
それでも未だに妄想の域を出ないのだが、如何せん、未だ直観のほうは煩わしく警鐘を鳴らし続けていた。
「なんたって似すぎにも程があるんですよねぇ。擬人化アインズ様かよアイツ」
カジットの写真を見て思った感想が正にそれだったのだ。
単に怪しいローブの魔法詠唱者ってだけだったら気にも留めなかったのだが、あの目だ。
行き場をなくした愛情と異常な執着心と寂寥をぐつぐつに煮込んだものを、そのまま眼孔に流し込んだかのような異様な眼色。
片手に握る切り札であるらしい玉、〈死の宝珠〉を持つ死霊系魔法詠唱者。

それでモモンガ玉とアインズ様を連想した私はバカでいい。
念のため、気になって素性を洗ってみれば、アンデッド化してまで母親を復活させたがるという、どこぞの誰かとよく似たマジキチだと発覚する。
しかも〈死の宝珠〉を渡し〈死の螺旋〉まで手引する何者かの存在がいたようだ。
まるでモモンガさんみたいな人を再現しようとしてるみたいだなぁって、思った私はバカでいい。
もしそんな悪趣味なことする奴がいるとしたら、きっとアイツくらいだろうなぁって、思った私はバカでいい。
私はおもむろにアイテムボックスから連絡用のスクロールを取り出しメッセージを送った。
「もしもしアルベドさん。実はですね――」
昔から、嫌な予感ほどよく当たるほうだった。
これの逆のパターンで、嫌な予感が尽く外れまくり取り越し苦労連発なのが愛すべき支配者、我らがアインズ様だ。
あれはあれで大変そうだが、やっぱり嫌な予感は外れてくれるに越したことはな

い。うらやましい限りである。

もっとも彼には身内の悪意なんて気付きようがないだろうけど。

嫌な予感の正体は、４話目くらいから微妙に存在をほのめかしていたあの人です。原作で登場される前に完結させたいけどたぶん無理でしょう

しかしまさかニグンを再登場させるとは自分でも思わなかった。死亡シーンカットしてキープしといて本当に良かった。

君の脳漿を吸いたい

タイトル読めば大体察してもらえると思います

;/@pl,./:@;/:/:::,:・¥」:;。・

弱者に縋る女がいた。

女にとって、弱者の存在は救いだった。

悲痛にあえぐ顔を覗きながら内臓をかき回す興奮。憎悪にまみれた形相で襲い掛かる者たちを足蹴にする快感。

強者としての矜持を崩した時の、何とも言えぬ幸福感。

何故それらが救いになりえたかと言えば、女もまた、ありふれた弱者の一人であったからだ。
両親の愛情を奪いつくした兄の弱者だったからだ
色情の滾った似非神官の弱者だったからだ
目の前で無二の親友を食い尽くす亜人達の弱者だったからだ
絶対的な力によってこれまでの研鑽を否定する先祖返りの弱者だったからだ
足元に積み重ねた骸の上が唯一安息をもたらす揺り篭。迸る鮮血こそ魂を潤す生乳。
女にとって殺人は生涯に寄り添う伴侶であった。

それは今日も今日とて変わらないはずだった。
漆黒の全身鎧に身を包む男は少々手ごわい相手だが、動きが雑で読みやすい。
全速力で間合いに飛び込み、ヘルムの隙間へスティレットを滑り込ませればそれで終わる。
あとは武器に仕込ませていた魔法を起動させ、超至近距離で打ち放つ。

『まだまだ終わりじゃないんだよぉ！』

さらに腰元のスティレットを追加で差し込み同じように魔力を放つ。執拗に執拗に。

手ごたえはあった。

スッといってドスっとやって、それで生きていられた者を女は知らない。

しかし未知であることが必ずしも不在の証明になるとは限らない。往々にして現実とは常識の先にあるものだ。

『本当に、お前には感謝しているよクレマンティーヌ

後に待つ大きな戦いの前にお前と戦い、戦士としての戦い方を知ることが出来て良かった』

声が聞こえた。

それは女が望んでいた悲鳴でも断末魔でも、ましてや命乞いなんかでもない。圧倒的優位に立つ強者が眼下のものを見下す声色だ。

やめろ、そんな目でワタシを見るな。

次の瞬間、鋼鉄に覆われた男の両椀が女の矮躯を尋常ならざる膂力によって抱擁

する。それは押さえつけ胸部のプレートで潰すようにして決して女を離さなそうとしない。さながら巨大な地割れに飲み込まれたかのように。

つづいて、男の着こんでいた全身鎧が光の泡となって掻き消えて、その下にあるおぞましい正体が外界へと露になった。

一言でいえば『死』の具現体。

絢爛な漆黒のローブをまとった大柄な白骨死体の魔法詠唱者の姿。女の知識に該当するとすればそれはエルダーリッチだが、目の前の存在がそんなものと次元が違うことくらい馬鹿でも理解できる。女を締め付ける剛力と、感触からして前の鎧以上とおぼしき白腕のありえない強度。祖国の宝具をも凌駕しかねない魔力を宿したローブと、何より全身を突き刺するような絶対的威圧感。

そして鉄の皮とともに、傲慢なある種落ち着いた態度もその表層から剥がれ落ちる。

吸い込まれてしまいそうな深淵な眼孔から女をうかがう赤黒い光はベタ塗りの憎悪に彩られていた。

男、否『死』は世界の条理を語るがごとく不遜で傲慢な己の身の丈を女に告げる。

『良かった、本当に良かったとも。しかしだ、今日の私は史上稀にみるほど機嫌が悪い。

そんなところへノコノコとお前たちが私の依頼人へ手出しをしてきたとなれば、わかるか？　わかるよな？』

わかるかと問われれば言われるまでもない。自分が竜の尾を、いやそれ以上の何某かの逆鱗に触れてしまったのだということくらい。

半分とばっちりだが。

『やはりマタタビさんの助言を無視してルプスレギナを連れてくるべきだったか？

五体をじっくりと擦りおろし、治癒で破壊と再生を繰り返せば少しは気が晴れたかもしれないが、いや

……時間の無駄だしナーベラルで問題なかったな。ではそろそろ終わらせよう』

『おまえぇえ!?　まさかぁああア』

女を閉じ込めていた白骨の檻がゆっくりと、しかし着実に折りたたまれていく。スケイルアーマーのプレートがポロリポロリと剥がれ落ち、女の終幕に喝采するように朽ちた大地で跳ね上がった。間違っても肉体から奏でられるはずがない禁断の

圧迫音が静寂の墓所に響き渡る。

大概の者なら命の先に心が潰れる絶望そのものの極限状況でありながら、けれども女の魂は潰えていなかった。

女にとっての絶望は眼鼻の先にある『死』という結果ではなく、自分が弱者である事実と敗北そのものであったから。

だから抗ってしまう。

絶望に浸り諦めることを忘れた狂戦士の四肢はがむしゃらに眼前の『死』へ向かっていく。

引っ掻いた爪ははがれ、つかみかかる指は捻じれ曲がり、打ち付けた膝の皿は粉砕されて、噛み付いた歯は抜け落ちて、なぶりつける腕は折れ、蹴りつけたつま先は逆側へ向いた。

それでも衝突する魂は砕けない。

絶望という名の安寧に抗い永遠に続くように思われた苦しみの中で、クレマンティーヌの意識は潰えた。

ｌｌｐ、。；ｌｐ@ｋｈｊｋｍ、。」；ｌｐｌ；。

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓：９階層 守護者統括執務室

山のように束になった執務を片付けていた合間に一本の〈伝言（メッセージ）〉が届いた。

うるさい女だ。唐突に連絡するなり、ズーラーノーンという組織のカジットという魔法詠唱者について頼んでもいないのに詳しく一方的に説明してきた。

情報源を伏せているというのもあるが、そもそも非常にわかりづらい論調であったため彼女が何を言いたいのかを理解するのに手間取った。そして理解とともに胸中に去来したのは大いなる呆れだった。

「マタタビあなた、そんな馬鹿げた偶然があっただけで本当にタブラ様がいると思っているの？」

『でもさ、あのアイツの存在を見過ごして最悪の事態を招くよりは、その馬鹿げた

妄言を信じて馬鹿を見る方がマシなんじゃないかって思うんです』

「大した確信ぶりのようだけど、確証が得られていないのであればやることに変わりはないでしょう

どうせ、ナザリック側からあなたの調査を支援することは出来ないのだから。気になるのなら一人で勝手にやりなさい」

『端からそのつもりですよ。ただタブラのことに関してだけは、アルベドさんにも頭の端っこに留めてもらっておいた方が良いと思いましてね』

「……それはどうもありがとう」

有難迷惑だった。

『アルベドさんがアインズ様の幸せを願い続ける限り私もアルベドさんの味方ですから。どうぞ好きなだけ利用してください』

「……」

拗れた自己否定精神からくる自分を投げ売りするようなスタンス。アインズ様からの好意を受けている彼女はもっと自分を労わるべきなのだが、それを口にすれば彼女の拒絶を招く。アインズ様の言葉ですら彼女の根底を覆すことは出来なかった

のだからアルベドは黙っているしかない。

『ではでは失礼いたします。アインズ様から許可は取りましたが、私の方はしばらく王都で情報収集とかその他ｅｔｃでナザリックから離れますんで、何か御用があれば連絡ください。今後ともよろしく』

「ええ、じゃあね……ふぅ」

魔法の効力が切れたのを感じ取ると自然にため息が出てきてしまった。

まだしもデミウルゴスやパンドラズアクターのような知恵者と読み合いをする方が、彼女の相手より幾分か楽だ。

出合った頃はぶっきらぼうだが人懐っこい愚かな少女であると踏んでいたのだが、なかなかどうして食わせ物だった。

彼女はナザリック内で唯一人アルベドのうちに燻る憎悪を見抜いたうえで、至高の存在にまつわる絶望的真実を告げたのだ。

シモベが神々のごとく奉る至高の41人の集いは、その実ただの遊興の集いでしかなかったこと。お隠れになられた至高の存在とはつまり、ナザリックという玩具を飽いて捨てて行った薄情者たちだったということ。そしてそんな儚い繋がりに友

愛を尽くしてしまったアインズ・ウール・ゴウンという男の生きざまを。

アルベドがそれらを知ることをアインズ様は決してお望みにならないだろう。それでもマタタビがアルベドに真実を語ったのは、その事実を知ろうが知るまいが結局アルベドがこれからとる行動に大した変更が無いからだ。

そしておそらくマタタビはその行動を止めようとはしまい。彼女もアインズ様ほどではないにしろギルド：アインズ・ウール・ゴウンに心を縛られている上に、大恩あるアインズ様にとって不都合な他の至高の存在を見過ごせるほど薄情にもなれはしないだろうから。だからマタタビはアルベドに自身を道具として利用させようとしていたのだ。

ならば望み通り使い潰してやろうと思っていたのだが、一方アインズ様にとっても今のマタタビは唯一無二の存在であるため、無暗に酷使して彼女の存在を損なってはならないのは難しい問題だった。

「ああ妬ましい！　いくらアインズ様のためとはいえこんなことって無いわ……」

自己を投げ捨ててまでアインズ様を守ろうとするマタタビと、最後まで残り続け

た彼女に心動かされるアインズ様。
この世界においてアインズ様の伴侶に最も相応しいのは、認めたくない事実であるがマタタビを於いてほかにいないのだ。
他の至高の存在についての問題が片付いたら、今度はお二方を結びつける謀略を巡らせなければならない。こちらの問題についてはデミウルゴスの手を借りられるので、パンドラズ・アクターと合わせ三人でじっくり練っていくことになるだろう。
果たしてこれから気が休まる時はやってくるのだろうか。
頭痛で重くなる頭を手で押さえながら、アルベドは山のような雑務を再開した。

◆◇◆

旧ネコさま大王国拠点：王城地下室

アンデットであるパーミリオンはかつてネコさま大王国のＮＰＣの中で唯一飲食不要な存在だったのだが、当時はそれが酷くコンプレックスだった。

なにせ猫一色だったあの城の中でたった一人きりなのだから。飲食に限った話じゃないが、その隔絶っぷりはというと桃色の耳の象なんか目じゃない。

せめて飼っていた骨猫くらいにはそれらしいことをしてやりたかったので、食事の時間には全員集めてネガティブエナジーを吹きかけてやったものだ。今思えば劣等感から無意味なことを押し付けていただけだった気がして彼らには少し申し訳ない。

今でも食事行為に憧れみたいなものを抱いているが、目の前のソレには流石に心がなびかなかった。

心なしか、ヤシの実ジュースを飲む時のそれに少し似ている気がする。

金髪ボブで、多分女の生首だろう。どんな凄惨な最期だったのやら、恐怖に歪んだ死に顔は今にも叫びだしそうだ。それを鷲掴みにしながら後頭部に突き刺ささったストロー、のような触手で脳液を啜る光景のおぞましさったらない。

もしこの世界に創造主がいるならばブレインイーターなんて種族を生み出した真意を是非問いたい。偶然の産物であってもおぞましい話に変わりはないのだが。

薄紫色の細長いのひょろり触手の手足と人型に、紫色のタコがそのままのっかたような異形の姿。

やがて脳漿を啜り切ったタブラ・スマラグディナは残った首を触手の根元の口の中へと飲み込んで満足げに腹をさすった。

「先ほどから人の食事をじろじろと。相変わらずマナーがなっていませんよ？パーミリオン君」

「そちらこそ相変わらず悪趣味なこったぜ。カニパリズムには多少の理解があるつもりだが、お前のソレは食事と言えるかも怪しいだろう」

反論を言い切ったところで失態に気付いたが、しまったと思った時にはもう遅い。タブラは眼の色を喜悦色に変え、犬がしっぽを振るようにおぞましく顔の触手を振り回しながら、自身の否定の言葉にまっすぐ飛びかかった。

「趣味だなんてまったく酷い言いようですね。あなたと食の定義を論ずればいずれ平行線に至り収拾がつかなくなるのは眼に見えてますが、異形と化したこの身にとってはこの行為こそ唯一の生きる糧であることは厳然たる事実です。たしかに脳に残された海馬から対象の人生記録を吸収する『脳食』は実際食事というよりは読

書に近いかもしれませんし、そもそもブレインイーターも飲食不要な種族であることも相まって趣味的な側面を完全に否定するのは難しいでしょう。しかし世界から永劫の時を与えられてしまったわが身にとっては、ちっぽけで限られた儚い時を生きる者たちの在り方に共感する瞬間こそ唯一生への実感を得られるのです。特に死の間際、命の灯は消えかかる寸前で極一瞬大きく輝きます。たとえば今のクレマンティーヌ女史は本当に最高でしたね。絶対的、絶望的な状況でもなお弱者であることを認められない彼女は、常人なら砕けてしまうであろう精神的負荷を身に受けても止まるに止まれないのです。そして戦士として優れた過ぎた知覚能力によって体感時間を引き延ばされ永劫に近いほどの恐怖と苦痛を味わいながらやがて命尽きました。これこそ超越者である１００レベルでは決して味わえない真なる恐怖！　生の実感！　わかりますかね！」

「……」

どうでもいい、なんて本音を口にすればそれが１００倍くらいで帰ってくるのは眼に見えていたので沈黙を貫いて切り抜けようと試みる。

こんな狂人が付き合いだけはこの世界のだれよりも長いのだという事実を改めて

思い、いつものように辟易とした。

彼との出会いは４００年前のことだ。

当時パーミリオンは城跡に住み着く強大なエルダーリッチとして馳せたくもない悪名を広げてしまい、近隣諸国から度々やってくる討伐隊に迷惑していた。

そんなある日タブラ・スマラグディナは噂を聞きつけやってきて、〈死の螺旋（アンデスアーミー）〉によってカッツェ平野を包み込み露払いをしようと提案する。手伝ってやるから色々言うことを聞いてくれという条件で。

以来タブラは城跡に居候しながら様々な意味不明な要求でパーミリオンを振り回し続けた。秘密結社ズーラーノーンを結成してパーミリオンを勝手に盟主に仕立て上げたり、ホラー趣味で作った幽霊船にパーミリオンを乗せてカッツェ平野をうろつかせたり。先ほどタブラが脳食したカジットとクレマンティーヌの死体も、わざわざエ・ランテルの冒険者組合に忍び込んでパーミリオンが回収したものだ。

自らをこき使い続けるタブラの存在は腹立たしい。

しかし一方で魔神化し忠誠というアイデンティティを失ったパーミリオンはこ

の偽りの主人に依存していて、それをわかっているからこそタブラも容赦がなかった。それが二人の関係である。

長年の付き合いですっかり慣れてしまったからか、こっちが閉口してもしばらくするとタブラは性懲りもなく話しかけてくる。

「ところで前に君に話したモモンガ君のことを覚えておりますか？」

「あぁ雛形だったカジットの元ネタだよな？」

雛形とは端的に言えばタブラの悪意に人生を狂わされた、タブラに言わせれば『調理』された被害者のことである。

自分好みの人生を食すため、時にタブラは他人の人生に干渉してその人物を狂人に仕立て上げるのだ。

例えば今挙げたカジットの場合、母親への執着心を死霊系魔法研究へと向けさせるとか。

ズーラーノーンの十二高弟の大半はこんな連中ばっかりなのだが、タブラのカジット・デイル・バダンテールへの入れ込みようは特に強かった方だ。

というのもカジットはタブラの旧友であるモモンガという男とよく似ていたのだという。

方や己が過ちで失った母親を外道に身をやつしてまで取り戻そうとするカジットと過去の栄光に心を置きざりにしたモモンガ。

彼らの人となりはタブラから既に聞かされていて、実は前からパーミリオンはモモンガ（アインズ？）にはシンパシーを感じていた。

「モモンガ、本人はアインズって名乗ってたけど奴とは今日会ったぜ？」

「……わざわざ自分から言わないとは意地が悪いですね。実はクレマンティーヌを殺害したのもどうやら彼のようでしてそれを話したかったのですが

そうですか既にカッツェ平野に来ていましたか」

マイペースなタブラが気を落とすのは実は珍く、それが愉快でパーミリオンは追撃を図る。

懐から一つの珠を取り出しこれ見よがしに見せつけた。

「死の宝珠だ、懐かしいだろ？

今日来たアインズに友好の印だとかでもらったんだが、これはどういう意味だと

思う？」

死の宝珠は錬金術師であるタブラがこの世界の素材を用いて生み出した唯一無二のインテリジェンスアイテムだ。

だから死の宝珠から製造者について問いただせば、タブラ・スマラグディナの存在に辿り着くことは可能なのである。

とすればアインズは、カジットから奪い取った宝珠の手引きでタブラの関係者であるパーミリオンの元に訪れ、背後にあるタブラの存在を見越したうえで宝珠だけ置いて帰ってしまったということになる。

もしもタブラの言っていたモモンガの人物評『仲間の作り上げたもので完結し、それ以上の宝はないと思考を閉ざした者』が正しければそれは妙なことだ。

タブラに気付けば一目散にやって行きそうだったのに。そうでなくともパーミリオンに探りを入れもしないとは。

「察するにつまり餞別と言ったところでしょうか。彼がこの世界に来ていた可能性は想定していましたよ。

しかし単独ならまだしも拠点付きで訪れていたとすれば、あの凝り固まった妄執

がどうにかなるわけないと思っていたのですがね」
「あんたが実は相当嫌われてたとかじゃねぇの」
「ふむ、その可能性は……いや彼女たちならもしや、彼の考えを変えられるのか？」
「おいおい」
一つの可能性に思い当たり、なにごとかぶつぶつ呟き今度はタブラは自分の世界にこもりだした
「……まったく、最終日の戯れがこんな失態に結びつくとはわからないものですね。さらにマタタビ君がいるとなれば一筋縄ではいかなくなる。しばらくは状況が動くのを待つしかないでしょう。既に手は打ってしまいましたが、やはり早まらないで正解でした。このぶんだとモモンガ君に看破されてる可能性も高いでしょうし」
何を言ってるか理解できないが、こいつの悪だくみが傾いてくれればこちらはご機嫌だ。目を付けられたアインズのことは少し気の毒に思っていたところだし。
「しかし本気なんだな。俺には理解できないぜ、かつての旧友を食べようとする意気込みなんざ」
「理解を求めた覚えはありませんよ。スケルトンの『脳食い』には少し手順が必要

ですが、それでも彼は特別ですから」
ゾッとするようにパーミリオンは自身の頭蓋に手を当てた。
「おや嫉妬ですか？」
「馬鹿言ってんじぇねぇよ……」

ちなみにタブラは次の王国編以降しばらく出番ありません。むしろタブラの動きを止めておくために今回ズーラーノーンの話を挟み込ん見ました。

王国編なのに王国がほぼ背景

犬のリビドー

それはあくる日、珍しく非番のクライムが王都の街中を歩いていた時のことだった。

王都の中でも馬車の通行が多いメインストリートの隅っこに路上駐車している馬車が一台あった。馬車の主人であろう有力貴族フィリップが、石畳に降りて一人の女性に言い寄っている。

女性のほうはどこかの屋敷のメイドであろうか。外に出歩くには不自然なくらい精緻に編み込まれた上等のドレスに匹敵するであろうメイド服からは魔力の気配すら感じさせた。艶やかな黒髪を肩かた鎖骨にかけて緩やかに伸ばし、透き通る白い肌に気品の感じさせる清廉な顔立ち。通り過ぎるモノは皆、自然と彼女の方へと意識が引き寄せられてしまう。

一見して二人は主従の間柄なのだろうかと通りかかったクライムもそちらを覗き見るが、どうやらそうではないらしい。
「こんな昼間に使用人が出歩いてるなんておかしなことだ。大方粗相を働いて追い出されてしまったのだろう
よければウチの屋敷へ来ないかい？」
「結構でございますフィリップ殿下。ワタクシめは主人にお使いを頼まれていますので失礼します」
「それは変じゃないか。君のような見目麗しいレディが使用人などという小間使いに身を窶し、あまつさえお遣いだなんて馬鹿らしい。
ならどこの屋敷の者か言ってごらん、すぐに君の身元を引き取ってあげるから」
「……本当に結構でございますから」
どうやら女性のほうが訳ありなのは間違いない。それに付け込んでフィリップが手籠めにしようと寄り掛かっているというところだろうか。
仮に女性がついさっき放浪の身となり街中をさまよっていたとすれば、有力貴族であるフィリップに魅入られたことは一見幸運なことに思えるが、彼の女癖の悪さ

は王国中でもっぱらの評判だ。大抵は使い潰され最終的に娼館送りになり不幸を迎えることになる。

ともすれば誰かが庇ってやるのが正しいのだが、貴族に楯突けばろくなことにならないのは言うまでもない。周囲は気の毒な視線を投げかけながらも口出しを控えた。

フィリップを撒こうとする彼女のイラつきには、そういった気持ちだけの同情に対する嫌悪が含まれてるようにクライムには思えた。

ならクライムが取りべき行動はただ一つ。自らの主人に迷惑がかかることは当然懸念したが、迷惑以上に主人は目の前の有様に納得しないだろう。

クライムは一歩踏み出し二人の間に割って入る。

「フィリップ殿下、そのあたりにしていただけないでしょうか。彼女は嫌がっています。これ以上詰め寄るようであれば、殿下の気品が問われるでしょう」

「なんだお前は。誰かと思えばラナー姫の腰ぎんちゃくではないか。

平民上がりの分際でこの私に楯突こうというのかね？　少しは分をわきまえたまえよ！」

あまりに予想のついた身分差による常套句を投げかけられてもクライムは物怖じしない。

しかし状況は芳しくない。こうする他にないとわかっていたが、それでもあまりに分の悪いこと。役に立たないなら無暗に突っ込んでもお節介に変わりなかったと後悔してももう遅い。背中の彼女の方からも先ほどの比ではないほど腹立たし気な雰囲気を感じ取った。

そんな膠着する状況の中で動き出したのは女だった。突然彼女はクライムの足元へ跪くと、口元から細長い舌を伸ばして

――あろうことかクライムの靴を舐め始めた。

「あぁ！　ご主人様！　ご主人様ではないですか！　この卑しい雌豚めをまだ見放しておられなかったとはなんと慈悲深いことでしょう！

先日私はご主人様の言いつけを守れずに、疼くわが身の可愛さに負けて●●●で●●●●を●●●してしまったというのに。

でもでもやっぱり仕方なかったですよね！　わかってくださいますよね！　私

はご主人様無しではもう生きていけない体にされてしまったのですから！

ある日は●●の●薬を飲まされ発狂寸前だった私を●●●の●●●●の元へ放り込み、ヌルヌルの●●で三日三晩●●●●ました！　ある日は●で貧民街の●●に●●●けられ、数日間●●●●どもの●●●にされました！　●●の魔法で●●に●●させられた状態で●●●の●●がはびこる●●に放置されました！

始めは嫌で嫌で仕方なかったのに、段々癖になっちゃって最後に自分がどうしようもない●●●だと気づかされてしまいました！　最高です！

でもでもでもやっぱり一番良いのはご主人様の●●●で！　もうご主人様の●●●の●●●●●になっちゃって、他所では生きていけないのですよ！

だからだからありがとうございますこれからもご主人様に――」

「変態だぁー！　こんな娘付き合ってられん！　早くしろ馬を出せ！　こいつらの言ってること聞くと頭おかしくなりそうだぁー！」

自分の知らない異世界の変態性に恐れおののき、とうとうフィリップは馬車に逃げ込んですぐに走らせた。

少女は下から馬車が見えなくなるまで伺って、居なくなったとわかった突端立ち

上がって地面に砂利交じりの唾を吐いた。
「……アハハハハ！　ざまぁみやがれ処女厨め！」
顔を真っ赤に染め上げて目尻に雫を垂らしながら、勝ち誇ったように握りしめた拳を天に掲げた。
「……えぇ」
クライムと周囲はあまりにも無残すぎる勝鬨を見て、胸のすいたような、それでもやっぱりモヤモヤするような、何とも言えない感を抱いた。

◆

あれからしばらく時間がたって、場所は昼下がりの飲食店。
クライムと共に円形の食卓を囲む黒髪のメイド少女は上目遣いに容赦のない文句を垂れ流した。
「……こんなことになったのは、大体クライムさん――もといご主人様が悪いのですよ？」
「出来ればその呼び方だけはやめてくれませんか？」

そういいながらも詫びだと言って少女は飲食店でクライムを食事に誘ったのだ。むしろクライムの方が奢りたいくらいだったが、メニューを頼んですぐに少女の方が先払いで会計を済ませてしまったのでどうしようもなかった。

「ハイハイ。もしクライムさんが声をかけなくても、連れていかれた先から逃げ出すくらいどうってことなかったんですよ？

ところがどこぞの平民風情が横槍入れて面倒になりそうだったから、仕方なく私が淫語マシンガンしてフィリップの野郎を撃退してやったんです。

これで野郎はクライムさんの変態性に度肝を抜かれ、無礼を働いたことなんか気にもならないでしょう。ほれ見たまえ、仇を恩で返す私の聖人っぷりを！」

「私が介入してしまったことに関しては本当に申し訳ございません。……もっとも別の意味でよからぬ風潮が立ちそうですが」

「仕方ないし、きっと大丈夫ですよ。私のアレが演技だったことくらいみんな察してくれますし、フィリップのクソ野郎一人がどう喚こうが『お前が言うな』って思てくれます」

「そう、ですね。本当に申し訳ありませんでした」

今後の展開が読めなさすぎるのがネックだが、結局後の祭りなのだから気にしても仕方がないのだろう。

もっと禍根を残さずやり過ごす手があったのではと振り返っても、悔しいが彼女のアレ以上のモノが思い浮かばないのも事実だった。彼女の言う通り、自分のお節介が招いた結果なのだ。

反省しながらしばらく、互いに無言で卓上の料理に手を付けて、やがて食べ切ったころに少女が会話の口火を切った。

「ところでクライムさんて本当に人間ですかね？」

唐突な一言にいかなる含意が含まれているのか咄嗟に判別がつかず、ムッとしながらも生真面目にクライムは応答する。

「人間です。少なくとも私の主人に拾われ忠誠を誓ったその時からは」

「あーいやいやそういうことじゃあなくってさー」

少女は猫背気味にクライムを見上げ、右手で横から自分の顔を指さした。

まるで芸術品のような端正な顔立ち。南方人種固有の艶やかな黒髪は透き通る白

い肌によってより映えて、周囲のものは皆彼女の一挙手一投足に目を奪われている。
そんな彼女が今度は自身のメイドドレスの襟元に手をかけ、ボタンを一つずつおろし胸元の肌を外界に晒はじめた。クライムは何事かと不思議そうに訝しむ視線を送り、それを見て彼女は呆れたように手を戻した
「やっぱりだね。クライムさんは私のことを性的対象としては一切見ていない。普通男ならその気がなくても美少女のお開けには、不快感を含め、何らかの性的反応を示すはずなんだけど、クライムさんは全くの無反応です」
「？」
そういって今度は向かい側のクライムからして斜め後ろ方向に指を向ける。クライムが振り返ると後方席に掛けていた青年がビクッと顔を赤くしてそっぽを向いた。
彼女がこういった反応を求めていたのは合点した。確かに少女、マタタビが美少女と自称することは全く傲慢でも何でもない。しかし思うところが無いこと自体はしょうがなくないか。
「別に気にしてないですよ。ただクライムさんの朴念仁っぷりが不可解だっただけ。

欲情ってのは生物が子孫を残すための重要な能力の一つですし、それが見るからに欠陥してれば心配にもなります。自覚はなかったんですか？」

「そんなことで人間性を疑いますか、普通……」

自分の女性を捉える機能はおかしかったのだろうか。思えば主人との縁故で冒険者チーム蒼の薔薇の方々とは懇意にさせてもらっていて、リーダーのラキュースを始めガガーランやティア・ティナなどの魅力的な女性との交流はあったが、特にこれといって性的魅力というものを感じたことはなかった。

「身近に同性の知人がいれば少しはわかりやすいのでしょうが、生憎巡り合わせがないもので」

「そうなんですか？　意外です。　……というか異性の知人はいるのね」

やはり自分はズレてるのだろうかという思考がよぎったが、しかしクライムは考えを改める。この世で唯一、よりにもよって自らの主人にだけは分不相応な傾慕を抱いてしまっていたことに思い至ったからだ。もっともそれが普通のことかと言われればやはり自信はない。クライムは顔を赤くしながら心の袋小路に潜り込んだ。

「良かった、好きな人自体はいるんですね」

「んなっ!?　い、いませんよ」
　そんな心中の葛藤を覗き込んだかのように少女は安堵を口にする。少女のこういった鋭さがクライムは非常に苦手だった。自分も人のことは言えないが、友達が少なそうな人だと思った。
「きっとクライムさんの中ではそのヒトの存在があまりにも大きすぎて、他の異性に一切意識が向かないんでしょう。一途なのは素敵なことです」
「やはり……そうなのでしょうか」
「自分に嘘ついても碌なことありませんよ」
　本来は許されざる恋慕であるため、改めて認めることに抵抗が強くあったがここまで見透かされてしまったなら恋心自体は認めてしまうしかなかった。そしてきっと彼女が言うように、クライムは他の女性へ意識が向かなくなるくらい主人への想いが強いことも真実なのだろう。
　もっとも諦めて忠義を尽くすように割り切るしかないのだが。
「ところで私が人間じゃないというのは、正直申し上げますと言われ過ぎのように思うのです」

「あっとごめんなさい。ただまぁ何と言いますか、モノのたとえで、あなたが私の知ってるとあるサキュバスによく似てまして」

大の男に向かってサキュバスに似てるとはどういう言い分だろう。というかサキュバスが知り合いというのはいろんな意味で聞き捨てならない。

「何ていうか結構変わり者なんですよねぇ、そのヒト。サキュバスって本来万年発情期で全方位の異性に色情を感じる種族なはずなんですけど、彼女はよりにもよって精力皆無のエルダーリッチにゾッコンなんです。

男性だって理性剥がせば大抵はケダモノだから、そうじゃないあなたもひょっとして人外に惚れる異常性癖でも持ってるのかなぁって疑ってかかっただけです。気を悪くしないでください」

「……どうやったらそれで気を悪くしないんですか？」

謂れのない言いようには流石のクライムも腹を立てた。もっといえば想い人が人外扱いされたような気がして、王国の第２王子とのやり取りを想い出していい気はしなかった。

あからさまに不快感を示すとようやく自らの失言に気付き、少女は急に申し訳な

さそうにクライムを見た。

「そうですよねそうですよね本当に、ごめんなさい……」

クライムでも強く納得できるくらい彼女から悪気は感じなかった。普通なら許す気にはなれないのだが、撤回を求めても応じない陰気な男（第王子）を思い出しアレよりマシだと思い許すことにした。

「撤回してくれたのなら……もういいです。あぁそういえば、エルダーリッチに惚れるサキュバスって伝奇小説かなんかですか？」

「あぁ……えっと、そうですね。もう絶版になってて本屋には売ってないと思いますけど、タイトルは『オーバーロード』です」

「そうですか」

クライムは気にしても仕方ないと追及を諦めた。思えば出合ったばかりの間柄なのだから、何の事情があるにせよ詮索するのは失礼すぎる。

果たしてこの少女が如何なる理由で街中に躍り出てるのかなど、今の自分が聞くものではないのだ。

「ところでさっきフィリップの野郎がクライムさんのことラナー姫の腰ぎんちゃくって言ってたけど、
ひょっとしてクライムさんが好きな人ってそのお姫様のこと？」
「ブフッ!?」

◆◇◆

その昔、茶釜が声優をやっていると聞いたので、彼女が出演したアニメというのを視聴してみたのです。
今思えば、いくら弟だからってエロ翼王にアニメ紹介をしてもらったのは間違いでした。あれはセクハラです、間違いない。
まさかＲ１８のベリーハードなエロアニメを普通、年端もいかぬ少女に見せますか？　頭おかしいでしょ。おかげでしばらく茶釜とは近づけなくなったし、年端もいかぬ少女とか自称したせいでうっかり実年齢バラしてさらに面倒なことになってしまったのだ。

しかし人生わからないものです。こうして当時の彼女のセリフを覚えていたことが、変態貴族を撃退する口撃手段になりえたのですから。エロをもってエロを制す。素晴らしい護身術です……あぁ死にたい。

そもそもの話、こんな美少女外装のメイド服姿なんかで街中をうろつかなければ良かった話なのです。本当に失策でした。

歩くたび周囲からの欲情が〈読心感知〉でダイレクトアタックされてメンタルがやばい。もう止めようと思った寸前でクソ貴族に絡まれてマジで最悪。

唯一良かったことは、クライムさんと親交を持てたことくらいでしょう。彼からまったく、同情心と性的視線を向けられなかったので対面してもすごく楽でした。お礼に食事がてら、軽い恋愛相談にのってあげましたよ。もっともお節介だったでしょうけど、それは御相子ということで。

かくして彼と別れた現在、二度と人目につかぬよう最高位の隠形で身を隠しながら、予約していた宿屋へ向かっています。

王国での情報収集の一日目は都市の探索と拠点確保だけだったのですが、明日か

らは忙しくなるでしょう。シャワー浴びてとっとと寝て翌日に備えるに限ります。

屋根伝いに街中を駆け回り、そろそろ遠目に宿屋が見えてきました。恥ずかしながら気を緩めていたその時に、強大な力を感じさせる気配を受信した。

「１００レベル？　誰？」

瞬時に弛緩していた脳内血管に血が巡る。アイテムボックスから扱いなれた日本刀を取り出して臨戦態勢を整えた。

それからプレイヤーの可能性を懸念したが、直ちにそれは打ち消した。

「この気配の色は彼ですか？」

この世界に来てからというもの〈読心感知〉をはじめとして様々なスキルの能力が変質された。

その中でも広範囲系の索敵感知スキルについては、ゲームの時には不可能だった索敵対象の識別までもできるようになっていた。

さらに言えば、その対象が臨戦常態なのかそうでないのかも。

「知っている気配。それが単独で戦闘モードにまでなるとすれば考えうる対戦相手

は……ツアー？」

先日マタタビが敢えて逃がした白金の鎧ならば、マタタビの感知に引っかからない一方で彼が必然臨戦モードへ追い込まれることにも納得する。

彼の身の安全からも、マタタビの個人的事情からもツアーと彼の接触は好ましくない。ならば――

「ちくしょう行くしかないか」

遠慮してはいられない。近隣の屋根の瓦を踏みつぶし気配を消しながらでの最高速度でその地へ向かう。

やがて辿り着いた場所は治安の悪い貧民街の路地裏だ。

ここまで近づけば〈読心感知〉の範囲内に入り、ツアーも索敵できるかと思いきや実はそうでもない。ややこしい事情なのだが〈読心感知〉は元々敵対認証スキルである。対象者が術者であるマタタビを認識していなければ、あるいはマタタビ側が対象者を認識していなければ発動しないのだ。

それに対戦相手の方はツアーであるとは限らないので、屋根上から俯瞰しながら先に感知できる彼の姿を探し出す。

見つけた。
ズタ袋に包まれた瀕死の女性を抱え込んで、暴力の気配を感じさせるガラの悪いチンピラと対峙する、白髪の矮躯な老人の姿。
臨戦態勢ってまさかこんなチンピラに喧嘩吹っ掛けてたの？
その光景を眺めながら驚愕と失望が渦巻いた。マタタビが靴まで舐めて回避した準戦闘行為に、これからセバスは及ぼうとしているのだ。
対戦相手の気配が感じ取れないなんてそりゃ当たり前だ。こんな低レベルな奴に力を見せつける愚か者だったとは流石のまでマタタビも予想ができなかった。
マタタビは盗み聞きのスキルを発動させる。
『そうそう、白金貨10枚はこの状態の彼女にはつりあわないほどの高額だと思いますが。これで双方あったことを忘れてはどうでしょうか？』
『あ、ああ……』
『それに、次回あったときは彼女の治療に掛かった金額は請求させていただきます。無論、これはあなたが彼女を引き取りに来た場合ですが……金銭には糸目をかけずに治療行為を行うつもりですので、高額になることを約束しますよ。それと保証金

ですので彼女を引き取りに来る場合は、全額の返済もお願いします』

「……おじいちゃん何してんの」

馬鹿者にも程がある。

振込詐欺に引っかかる後期高齢者を見るような目で眺めながら、私は溜息を吐いた。

ようやく今回から王国編です。長かった、すごく長かった

ところでオリ主の淫語セリフ読みたい変態さんは活動報告へどうぞ。

でもまさか居ないですよね？

一月八日　運営さんからクロスオーバータグ付けるように警告されてしまいました

多分オバロ世界での忍術の設定にＮＡＲＵＴＯのモノを混ぜ込んでしまったせいだと思います

ストーリーそのものには特に影響はありません

退かない奴には後押しを

今回少しこじんまりに纏まってしまって短いです

【至高の41人レビュー　byマタタビ】

No・7：たっち・みー

類稀なる人間的魅力で周囲の人間を引っ張っていく先導者。周囲にはいつも頼りにされている一方で、実は本人はあまり他人を頼りたがらない。何かにつけて一人で抱え込みたがる部分があり、そんな彼と真の意味で対等に付き合える人物は極めて稀だ。

ちなみにリアルの女性事情はドン引くくらいだらしない。

◆◇◆

「帰り道にはお気を付けください」

「どうもありがとう、それでは良いお返事を期待しておりますよ？」
「精々馬鹿なことは考えないようにな」
下卑た笑みを浮かべた男二人組が離れていくのを、セバスは暗澹たる気持ちで玄関先から見届けた。やがて姿が見えなくなり、気が抜けて出そうになったため息を押し殺す。
振り返ると背後の屋敷が迫るような重圧を放っていた。それは２階の窓枠からずっとこちらを睥睨していた者の正体と等しいと言える。その痛烈な視線を見上げてセバスは独り言のように話しかけた。
「今戻ります。ソリュシャン」
あえて大きく声をかけずとも盗賊職であるソリュシャンの聴力なら先のやり取りを含めてすべて耳に入れていることだろう。その証として、視線は凍てついたまま金色をたなびかせた美貌はコクリと軽く上下に揺れた。それを見てセバスは屋敷に入る。

困ったことになった。つい昨日、スラム街で今にも廃棄されそうになっていた女

性の身を引き取り介抱したのだが、さきほど女性を雇っていた事業所とやらから人身売買のやっかみをかけられてしまった。主人からは荒事を起こさぬよう厳命されていたというのに、自身の愚かな行いによってそれに背いてしまったのだ。

果たしてこれからどうしたら良いか。相手が八本指となれば公正な手続きでこの場をしのぐことは難しい。ハイエナのような連中には下手に金銭で解決しようとすると膨大な損失を被ることになる。

結局碌な解決方法も見当たらぬままソリュシャンの部屋に辿り着いた。待ち受けていたソリュシャンの視線はやはり非難的である。至高の方々のそれとは違い、六芒星（プレアデス）の上下関係はあくまで形だけのモノであり尊敬や啓蒙は存在しない。あるいはレベル差や役職の差が多少はそうした感情をもたらしていたかもしれなかったが、それもセバスの背信によって容易く吹き飛ばされてしまった。

しかし多少の失望を招いたからといって与えられた執事（バトラー）としての自負をセバスが崩すわけにはいかない。ソリュシャンもそれはわかっているだろう。

だから毅然と、あくまで上官としてセバスは部下に話しかける。

「話は聞いていましたね」

「はい。ではどういたしましょう？　彼女をあの者どもに返しましょうか？」
「いえ、それだけでああいった手合いが手を引くとは思えません。アレは弱みを見せると骨の髄までしゃぶりつくそうとする手合いです」
「……本当にそうでしょうか？」
　目を細めチラリと横の壁を睨むソリュシャン。その壁の向こうにはすやすやと寝息を立てる女性　――ツアレの気配があった。言外にソリュシャンが言いたいことは理解できる。
　彼女を返せば表向きは八本指がセバスを非難する理由は無くなる。無論それだけで手を引く連中だと考えるのは楽観的だが、時間稼ぎにはなるしそもそもツアレが居なくなってもセバスたちに損害はない。
　しかし今更地獄から拾い上げたツアレを再び地獄へ叩き落す選択肢をセバスは選ぶわけにはいかなかった。セバスの人助けが王都で知れ渡っていたのだろうか。八本指はそんなセバスの善性に付け込んだに違いなく、ソリュシャンが批難しているのはつまりそういった部分だった。
「ではこれからどうなさるのですか？」

「それは、少し外を歩きながら考えてまいります」

時間だ。時間が欲しかった。

忠義、正義、すべてを都合よく収める手段を求め、刺すような視線を背中に浴びせられながらセバスはその部屋を後にした。

再び玄関口から外へと歩み出す。すると突然、悩ましい煩いに思考を奪われていたセバスの右方から虚を突くように快活な声が投げかけられた。

「どうもこんにちはぁセバス様」

セバスをして驚愕に目を開かされた訳は、その人影が急に現れたことにもあるのだが、それ以上に彼女がセバスに話しかけたこと自体にあった。

黒い長髪を背中まで流したメイド姿の少女。顔は真っ赤に上気していて、低質の麦酒の匂いをごまかすように香水がかけられていて、その混じり合った悪臭にセバスは内心眉を顰める。

「マタタビ御嬢様、どうしてこちらに？」

声の主、マタタビはセバスにこれまで見せたことのない笑顔を向け、そして嗤い

かけた。
「王都にって意味なら、アインズ様の密命を賜ったからとしか言えません。なにせ極秘なので。
おまえの前にって意味なら、今のセバス様がおもしろおかしく困っていらしたからだよ」
彼女の態度はセバスのよく知る上位悪魔（アーチ・デビル）を想起させた。以前から薄々わかっていたことではあるのだが、やはりセバスは彼女に毛嫌いされているらしい。
というのもセバスが情報収集でナザリック外に出張する前、メイドとして仕えていたマタタビと接する機会があったのだが、その時はことごとく殺気の籠った視線で睨みつけられ邪険にされていたからだ。もっとも不思議なことにセバスはマタタビのことが嫌いになれなかったのだが。ともかくセバスがマタタビとまともに会話したのはこれが初めてだった。
「恥ずかしながら御嬢様のおっしゃる通り、私のくだらぬ失態によって少々面倒が起きています。解法を探るためこれから練り歩こうと思っていました所存です。
僭越ですが御嬢様はどこまでご存じなのでしょう？」

セバスがそう尋ねるとマタタビは、透かした嘲笑をより色濃くして悪魔のように微笑んだ。

「全部ですって。昨日セバス様がチンピラ風情に調子こいてた時から、ソリュシャンさんに軽蔑されつつ屋敷から逃げ出した今までずっと、傍にいてあげたんですよ？

気配消してたから気付かなかったですかぁ？　あら悲しぃわぁうぇんうぇん」

マタタビはわざとらしく目の下に人差し指を擦り付けて衝撃的な事実を口にした。はじめは彼女の性悪さにあっけにとられ呆然としていたセバスだが、次第にその意図を鑑みて訳が分からなくなった。本当にただ嘲笑いに来ただけののだろうか？　それならそれで相手にしないまでなのだが……

「要件は以上でよろしいでしょうか。では失礼します」

「そう邪険になさらないでくださいましぃセバスさまぁ」

かつて散々邪険にしたのはそちらの方だろうと、さすがのサバスも胸の内から湧き上がる苛立ちを抑えきらなかった。

セバスが振り切ろうとしたところ、案の定、マタタビが素早くセバスの手首を掴

んで捕らえ引き留める。彼女を本気で振り切るのは不可能だろうとセバスは悟り、諦めて対話に応じた。

「一体どういうおつもりなのでしょう」

「どうって、そりゃ最初に言っただろうが。折角セバス様が困っていらっしゃるんですから、助けて差し上げるのが道理でしょ？」

困っている人を助けるのは当たり前

彼女の言葉は、セバスの心の中の芯の部分を足蹴にされたかのようで、強烈な不快感をもたらした。

「私にかかれば八本指なんてどうとでも料理できる。証人全員闇に葬りさるでもいいし、トップを牛耳って好き放題するでもよし、組織そのものをこの世から消し去るでもよし

だからもしセバス様がお嫌で無いのなら、どうぞ望みを言ってくださいまし。このマタタビが、全力を尽くしてあなたを助けて差し上げますから」

今度は一転、甘えるようにセバスの首に両腕を絡ませ、掌一重分まで顔を近づけて誘惑した。麦酒の残差を孕んだ吐息が顔にかかる。

セバスはマタタビの柔い両肩を掴みゆっくりと、それでも力強く突き放した。
「ありがたいご提案ですが、御嬢様の御手を煩わせるわけにはいきません」
マタタビの提案は確かにセバスには魅力的だったが、今の様子がおかしい彼女に全てを委ねるには信用が足りないのも事実だった。
突き放されたマタタビは指先から爪を伸ばしてセバスの襟首に突き立てた。
「はぁ!?　何調子こいてですかあんた。そうやって自分の身の丈わきまえず不相応にあちゃこちゃ救いの手を差し伸べるくせに、自分が助けられるのが嫌だって？
あなたはただ身勝手に自分で何でも背負いこんで楽したいだけだろが。さもなきゃどうしてアインズ様に報告しないんだよ、バレるのが怖いからだろ？」
「ッ！　それは……」
的確に、セバスの痛いところをマタタビの言葉が抉り出す。
たしかにその通りだ。どうしてアインズ様に報告することをセバス考えなかったのか。それこそまさに背信ではないのか。
失望されることへの恐れがその判断を捨て去ってしまっていたのだ。主人に騙りを働いて楽なほうに逃げたがる身勝手さ、それは断じて忠義と同じにしてはならな

い。

「だからさぁ、もし私に任せてもらえればアインズ様に報告しなくても丸く収まるようにしてあげるから。ねぇ？」

「……」

自分の弱さに気付かされたセバスは改めてマタタビに目を向ける。

情緒は安定しておらず、先ほどからの滅茶苦茶な言葉遣いは彼女の支離滅裂な心情がそのまま現れ出ているように思えた。

きっと真意と呼べるような一つの意思が定まっているわけではなく、セバスには推し量りえぬ様々な感情が彼女の内側で飛び交っているのだろう。

どうしてマタタビがセバスのことをこうまで知り尽くしているのか、どうして毛嫌いされているのか、どうして施し紛いのような真似をしようとしているのか。

セバスは何一つ理解できない。

理解できないが、やはりマタタビのことはどうしても嫌いになれない。それだけは確かだった。

掴みかかったマタタビの黒い頭頂に手を伸ばし、柔らかい感触を掌に感じながら

優しく撫でた。

「我が身の至らなさをご指摘くださり深い感謝を申し上げます。そうですね、ただいま引き返してアインズ様に連絡させていただこうと思います。」

「！ッ～～～」

暴れた獣がおとなしくなる具合でマタタビは静かになる。やがて何も答えないまま　ポンッ　という軽快な音が響いたかと思うと彼女の姿は煙となって掻き消えてしまった。

「おや？　影分身でしたか」

◆◇◆

「！ッ～～～」

「一体どうしたというの？」

窓辺から玄関口で話し合う二人を静観していたソリュシャンは、同じく横で覗き見していたマタタビの突然の豹変に目を丸くした。

今先ほどセバスと話していた影分身が姿を消したのとちょうどのタイミングだったのでなんとなく状況を察する。

「ひょっとしてあなた、セバス様のことが」

「ないないない絶対にありえない！　まだしもアインズ様の方が可能性あるから！」

「それはそれで聞き捨てならないけど……あ、セバス様が中に戻ってくるわ。まさか本当に説得できたのね」

「えっと……うん、なんかアインズ様に報告するらしいですよ」

なぜかマタタビが微妙な顔をしたのを尻目に、ソリュシャンは手元に握っていた〈伝言（メッセージ）〉のスクロールを体内に押し戻す。

本当はセバスが屋敷を出た時点でこれを使いアインズ様に報告しようと考えていたのだが、突然陰から現れたマタタビに止められしばらく待って欲しいと言われたのだ。

半信半疑ながら玄関口でセバスに話しかけるマタタビの分身を眺めていたのだが、会話内容は〈凪（カーム）〉のスキルで聞こえないようにされていたのでソリュシャンに

はわからない。
　セバスの人となりは部下であるソリュシャンもよく知るところで、彼が一度決めたことを折り曲げたとは信じられなかった。
「どうやってセバス様を説得したの？　どうやら分身体は酩酊状態にしていたようだけど」
「……セバス様と素面話すのはキツかったんですよ、アイツ嫌いだから会話にならないと思って。
　（でも失敗したぁ、まさかアインズ様に報告するようにするとは思わなかったなぁ）」
「え？」
「なんでもないないんでもない」
　いろいろと聞き捨てならないことを聞いてる気がしたが、本当にどうしてこんな間抜けがセバスを説得できたのやら。
　色仕掛けで動く人物でもあるまいに。
「あーうんまぁ強いて言うなら、退かない奴には後押しするってかんじ？」

わけがわからない

戻ってきたセバスのノック音が聞こえると、悔しそうに慌ててマタタビは姿を消した。

「本当に、なんだったの？」

結局戻ってきたセバスに問いただしても答えてもらえなかった。

オリ主×セバスも多分無い

番外編：アゼリシア山脈の霊廟

更新ペース遅れてしもうてごめんなさい
ストーリー的にはそこまで必要は無かったんだけど、リハビリとして戦闘シーン描きました。例によって捏造モリモリです

人生、人外に生まれ変わっても思い通りにはいかないのは変わらない。
そんな風に考えると自分の中の根本は結局変わっていないんだなーと思えて、安心半分がっかり半分。人間性への未練はまだ少し残っているようで、どうしてかなと考えてみると親の顔が浮かびあがる。逆にそれさえなければ自分はもっと残酷になっていたのだろうかと、そうを考えるとやっぱり怖い。
ところで今頃本体は王都でちゃんとやれているだろうか。本体と切り離された影分身が心配するの考え物だが、基本的に私は私を信用してない。きっとあっちでもしょうもない失敗をするだろうし、こっちの私も何かをしないということはあるま

い。

そもそも考えてみれば今こうしてアインズ様に黙って彼と密会を図るのも、すでに重大な失敗と言えないだろうか。アインズ様を恩人と称えまくっているはいいものの、実際のところ彼には仇しか返していない気がする。

彼が知れば激怒必至の裏切りを、私はいくつも犯しているのだ。

1つ目、ギルドメンバーを憎んでいるアルベドさんの意向を黙認してること

2つ目、私に手を出したのが法国の連中であるという事実を伏せていること

3つ目、情報握らせたニグンをスレイン法国に送還してしまったこと

4つ目、実は精神支配中の戦闘でツアーの全身鎧をわざと逃がしたのを黙っていること

他にも何かあったっけ？　こうして羅列してみると凄まじいものがある。これからは誰かに向かってホウレンソウを説くなんて真似一生出来そうにない。あるいはしくじり先生の卓上で反面教師を振るうのもアリかもしれない。

冗談は半分として、でも実際この4つを私の思い通りに解決しようとするならばやっぱりアインズ様に報告するわけにはいかないと思う。

１つ目がバレればアルベドさんは処分されるというのと、ぶっちゃけ彼女の考えにも一理あるから。２、３つ目がバレれば法国は只では済まずそれは嫌だ。４つ目は……下手したらプライベートに関わるので報告できるかまだ分からない。

え？　お願いすれば許してくれるかもしれないって？

馬鹿言うな。それは嫌だと散々言っているだろう。私がアインズ様に甘えればアインズ様がダメになる。あんなヤンデレ骸骨に依存されたくないし、依存するなら私じゃなくてもうちょっとマシな奴を選んで欲しい。例えばアルベドさんとかアルベドさんとか。まぁそれも今じゃややこしい話になってるんだけど。ああひょっとしてこれが５つ目か。

で、何の話だったか。そう今は４つ目の話がしたいのだ。

どうして分身の私がえっちらおっちらマンモスに乗って雪山登山してるかと言いますと、彼もとい、自称ドラゴンの全身鎧に話を付けに行くためだ。

それがまたどうしてって話になると、彼が私のリアルネームを口にしたからである。

『やはり君が、ナツウメサクラだね』

※以下回想

◆◇◆

アウラさんたちを見逃す羽目になった後、夜風を切りながら木々を駆け抜け、人外境地の六感を研ぎ澄ませてその原因の気配を探る。

帳の降りた深淵の森にて我が身を照らす敵意の灯を頼りに前へ前へ。

やがて少し開けたところへ出ると風が止みいつの間にか空が晴れていたのに気づく。

月光と星々に照らされてまばゆく平原の中心に、地面からわずかに浮遊しながらそれは待ち受けていた。

「驚いたね。まさか鎧の私の気配に気付ける者がいるとは。そしてそれがよりにもよって君だなんて」

それは、身に纏う白金色の全身鎧（フルプレート）の威圧感に反し気安く親し気な口調で語りかける。一方で口調以外が攻撃的なことは肌に刺す敵意の具象が示していた。

ならばコイツはマタタビの敵だ。

彼の姿や気配を消しきるその能力は記憶にないが、ひょっとしてユグドラシルで私にギルドでも荒らされた被害者だろうか？

ご愁傷さまではありますが、ゲームでの感情をこの世界に持ち込むなんてあまり感心はしない。約一名の知り合いがそれをやって友情お化けになり果てたから。

「まったく何のことやら知ったこっちゃないけどその敵意、納めてくれないと困ったことになるよ。

普段ならまだしも今の私は、敵意の灯が消えるまで本気で殺しにかかるから。おかげでアウラさんたちを殺さず済んだのは礼を言うけど」

世界級アイテム〈傾城傾国〉の効力により、今の私は相手の敵意を受信して襲い掛かる殺人マシーンと化している。さっきの二人に王手寸前までかけたところで、こいつが邪魔してくれたから本音を言えば助かったのだ。しかしその恩もあだで返すことになると思えば心苦しいことである。

「君が妙な様子であることは始めからわかっているさ。流石はスルシャーナ君の忘れ形見、スレイン法国の国宝だね。

この身にその力が及ぶことを想像するだけで背筋が凍りそうだよ」

スルシャーナと言えばスレイン法国で信仰されている六大神の一柱にして、アインズ様と私の間では推定プレイヤーとして警戒されている要注意対象だ。もっとも伝承通りなら既に八欲王に滅ぼされているはずだけど、全身鎧（フルプレート）の３人称はまるで旧知の間柄のソレだ。

「お前何者？　プレイヤーや、どうやら私のことを知ってるようで」

「自己紹介が遅れたね。私はアークランド評議国永久評議員にして白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）のツァインドルクス＝ヴァイシオンという。

呼びにくいならツアーで結構だよ。もしくは十三英雄『白銀』と言った方が通りが良いかな？」

こいつ呼び名めっちゃ多いなと思いつつも、残念ながら何一つ記憶にかすりません。

「君にはとても及ばないだろうが、おそらくこの世界では最もユグドラシルのことを知っていると自負しているよ。

ついでに言えば君のこともね。マタタビ」

「初対面の女子に凄くキモイこと言いますね。おまえ絶対モテないだろ。」

できればもう少し話していたかったが、こいつを殺せというオーダー待ちがそろそろ限界。

相手が知ってくれてるのなら名乗りをしなくても良いだろう。刀を抜き出し、敵に向かって刃を向けた。

「……彼の言う通りならこの鎧では歯が立たないらしいが。仕方ない、気のすむまで遊んであげよう」

諦めるようにぼやいて、ツアーは数々の神器武具を

――神槍を、妖刀を、宝剣を、聖盾、鉄鎚、魔剣などを召喚し、浮遊させながら自身の周囲に漂わせる。驚くなかれその数は１００。

ユグドラシルでは見たこともない戦闘形態である。まったくもって厄介。たどいうのに、ひとたび意識を切り替えた途端体中が熱くなり、全身の細胞が眼前の未知との戦いに歓喜を露にした。

「精々、戦いの中で語り合いましょう」

戦闘狂だった覚えはないのに洗脳のせいか、はたまた段々と肉体が精神を侵し始めたのか。

凶悪な笑みが抑えられない原因は出来れば前者であってほしい。……いや、どうせこのまま死んでいくならどちらであろうと意味はないか。

先手必勝というより後手必敗。基本的に〈地味子の眼鏡〉でも読み取れない未知の敵相手には安易にペースを掴ませるわけにはいかない。

自称ドラゴン、全身鎧、浮遊状態、同じく浮遊する無数の武器、徒手。読み取れる限りの情報から瞬時に取るべき手段を考察。その一瞬の考慮を経て、右手の二本指を突き立て意中の忍術を起動させる。

「〈雹塊砲（ひょうかいほう）の術〉」

十位階ぶんの魔法が込められたその術は直径10メートルほどの氷塊を生み出してそのまま勢いよく飛んでいく。

「ドラゴンだからってただの氷が通用するとでも？」

しかしツアーが右手をかざすとともに浮遊していた武器たちが一斉に飛び掛かってそれを砕きにかかる。魔力を込められたとてたかが氷塊、無数の神器たちにかかれば水を切り裂くことに等しく、破砕音と共に勢いそのまま今度はマタタビへと刃

の雨が降り注いだ。
それらはあらかじめ飛び道具として作られた矢や銃弾の類ではない。どの武器にも持ち手があり、すなわち肉体によって用いられるための武具である。見た目としては悪くないが、まさか謎の念動力で操ることを想定されていたわけでもあるまい。
仮にこれらのうち一本を喰らったとして、いくら神器武器であろうとも守護者やアインズなどを筆頭とした同じく１００レベルの者たちならば大したダメージにはなるまい。
ところが防御耐久が極めて低いマタタビには一本どころか掠った程度でも深傷になってしまう。
そんなことを誰よりも知っているマタタビが、しかし数多の武具の奔流へと弾丸のように投身した。
◇
無謀すぎる。ツアーはあまりに偏ったマタタビの能力を知っていた。だから彼女の自殺行為を見て攻撃を仕掛けたツアーのほうが驚愕し、まもなく迎えるであろう少女の凄惨な最期に戦慄を憶えた。

だが次の瞬間そんな未来予想図を超えた狂気の光景にツアーは重ねて戦慄した。

「正気じゃないね、君は！」

それは降り注ぐ無数の神器がすり抜けるように躱されていく光景だ。

ツアーとてただ直線的に動かしてるわけはなく、大雑把ではあるものの常に彼女を追尾するように操作している。だというのに、である。

四方八方から向かってくる武器を、まるで全身に目が生えてるかのようにマタタビは躱し続ける。時には蹴り飛ばして他のとぶつけ、別方向から砕けた氷塊の残骸を足場にしながら立体的に動いて攪乱する。ただ素早いだけでは説明がつかない戦技の頂点を極めた神技である。

氷の結晶を弾き飛ばしながら百の神器と共に宙を舞う少女の舞踊はいっそ神秘的ですらある一方、そんな生死の境目を行き交う無茶苦茶な戦い方を何故覚えたのだろう？

「正気で殺し合う方がよっぽど狂ってるでしょう？」

だが相手はわずかな思慮の隙すら与えない。飛び交う武器を今度は軽々足蹴にし、ツアーの視線よりはるか上空から斬りかかる。

刃を携えた彼女が飛び掛からんとする咄嗟のところで受け止めようと腕を交差させるツアー。しかし次の瞬間、刀はツアーの両腕をすり抜けて首の隙間に刺し込まれていた。

「!?」

宙に飛んだマタタビが既に刀を振り下ろしていたのを見て、ツアーの意識がようやく追いついた。

彼女は斬りかかるフェイントを見せ実際には刀を投げつけたのだ。回転させながらちょうど両腕を躱す具合に、かつ寸分たがわず首元を狙ってだ。

防御タイミングを外されて攻撃を受けては大樹のようなツアーの自我すら容易く揺らぐ。生まれた意識の空白を塗りつぶすようにマタタビの追撃はやはり続いた。

「ギミック起動、〈爆裂刀〉」

鎧に突き立てられた鋼色の刀身が赤色発光したかと思えば間も無く空を切り裂く爆撃が舞起こった。

◆

夜空の儚い輝きをかき消すように赤い爆炎と硝煙が勢いよく立ち込める。

自爆効果を持つ神器の刀で急所を貫き、そのまま自壊させてやったのだ。消費は痛いが、敵が未知数であったからこその大奮発である。並みの前衛プレイヤーなら十分仕留められただろう。

しかし期待に反し我が身を貫かんとする殺意は一層強烈なものへと変貌しただけだった。

「……まぁだ生きてやがる」

ならまぁ前向きに考えて、神器を使い捨てただけの意味はあったと言えるのかな？　まさか世界級エネミーのような馬鹿げた体力を持ってるわけでもあるまいし、即死級のダメージを回避する方法は非常に限られるはずだ。即死もしくは一定量のダメージを一度だけ無効化する類の特殊効果か、それともそもそも……

私の感知能力を持ってなお読み取れない気配、高すぎる耐久性。一つの仮説が思い浮かぶが、まだ情報が足りない。

すぐさま思考を切り替えアイテムボックスからガトリング砲を取り出し、爆炎に向けてトリガーを回転させる。

けたたましい発射音。空薬莢が転がる音。弾丸が黒煙を貫いて何か硬質の物体へ

炸裂する音。どうやら命中はしている。

「うっとうしいね」

手を横へ振って黒煙を薙ぎ払うツアー。向かい来る弾丸が雨風程度でしかないかのように悠然とたたずんでいた。一方鎧の損傷度はそれなりで多少はダメージがありそうなのに、姿勢は一切崩れていない。

今度は右掌を差し向け光の粒子を収束させる。

「〈エマルフ・タハイル・スエルブ〉」

流石にドラゴンを自称するだけあってか、光り輝く炎のブレス攻撃を前方に放ってきた。さらにダメ出しとばかりに背後から武器の嵐で挟み撃ちだ。

「〈千防ガマの術〉」

大地に手をかざし自身を取り囲むように忍術で岩石の壁を生み出して防御する。しかし光波の火炎と刃の嵐を同時に受けて保てるほどマタタビの忍術は強くない。まもなく数秒で亀裂が入り、先んじて火炎が壁内へと流れだした。

◇

念動力で操れる最大数の武器と限定ブレスの合わせ技。これが容易く防がれてし

まったなら今回の勝利はあきらめざるをえなかったのだが、彼女の防御術式を突破できたため一先ず安堵する。

やがて白炎が晴れ渡ると彼女が立っていた場所は剣山のように連なった武器の山と荒れ果てたクレーターだけが残っていた。

「やり過ぎてしまったのかな」

万が一殺害してしまうことがあれば蘇生させるだけのつもりだったが、死体の肉片すら残らない事態までは想定していなかった。リーダーからは彼女の危険性を嫌というほど聞かされていたため油断せず挑んだというのに、これではむしろ合わせる顔がない。マズイことになったと頭を抱える。

『こちとら厄介さが売りなんだ。まさか死んだとでも思ってるんです？』

「!?」

不意にどこからともなく掛けられる声。周囲を見回せど姿は見当たらない。ところが次の瞬間ガリガリと大地に割れ目が生じ、大穴が掘り開かれたかと思えば無数のマタタビが滂沱のごとく大量噴出された。そしてそのまま勢いよくツアーめがけて殺到する。

「イジャニーヤの使っていた影分身だね。これほどの数まで分身できるとは驚きだが、無駄だよ〈エブ・タハイル〉」

前方発射のブレスとは打って変わり今度は全身から輝く魔力を放出する。飛びついてきた無数の分身体たちは瞬く間に消失。したはいいが、肝心の本体がいない。

不意打ちに備え周囲を見回すと斜め上方向から彗星のごとくこちらへ突っ込むマタタビの姿があった。

「〈瞬間換装〉カモン！〈メイド・オブ・ヘル・アルマゲドン〉さらにメリケンサック！」

黒白のドレスへと姿を変え、魔力を展開させたままのツアーの方へ拳を向ける。ドレスの恐ろしき魔力強度がツアーの体表に放出した輝く魔力を尽く弾き、換装した金色の拳鍔による強烈なストレートジャブが撃ち込まれる。

打たれた勢いで背面の大地へ叩きつけられたツアー。マタタビは猛撃の手を緩めず、今度はツアーのヘルムを鷲掴みにして地面の凹凸へ擦り付けながら音速で疾走した。

「おらぁあああああ！」

大地を抉り轟音を響かせながらしばらく滑走し、大岩へと叩きつけられてようやく勢いが止まる。かと思いきや、マタタビは拳鍔を纏わせた両腕を振り上げ、次の瞬間に怒涛の連拳を叩き込んだ。

「シャアアアアアァラァアアァアラララララ！」

拳を一撃受けるごとに地響きのような振動が装甲を徐々に削り取り、鎧の中へと強く響く。

なるほどプレイヤー相手でも只では済まない強烈な攻撃だが、今のツアーには痒みすら感じない。

だから結局気の持ちようなのだ。

濁流のようなラッシュを喰らいながらそれら動作をじっくり見切って、その一撃に向かって掌を向ける。

やがて掌へ吸い込まれるようにして彼女の右手の一撃は止められた。あれだけ恐ろしい攻撃を繰り出す手だが、掴めば意外と小さいものだ。

「チッ！　怯みもしないのですか⁉」

「言っただろう、無駄だって」

◆

「無駄かどうかをぞお前が決めるな。〈行動阻害耐性Ⅳ〉！」

掴まれた手をスキルで振りほどき、後方から迫っていた武器達の猛攻を紙一重で躱していく。躱した武器が勢いそのままツアーの方へとぶつかるが、やはりダメージを受けた様子はない。

決定打のないまま接近していてもらちが明かないので高速移動でツアーからいったん距離を取り、隠形を発動させて夜闇に紛れた。

「怖気づいたかい？」

うるさい黙ってろ。

手の出しようのないツアーは武器達を自身の周囲へ浮遊させこちらが仕掛けるのに備える態勢を整えた。そして手の出しようがないのはこちらも同じだ。

いくら何でもタフすぎやしないか？

メリケンサックを仕舞い込み、アイテムボックス出した上級ポーションのボトルを握りつぶして零れた薬液を掌の傷口へなじませた。

この掌の傷は今のメリケンサックのギミック、〈震動波〉の反動だ。

マタタビのメリケンサックには、本職のソレに劣るマタタビの拳撃を実践レベルで通用させるために、反動ダメージをくらう代わりに高威力を出せるデータクリスタルを込めていたのだ。しかしそれでもツアーには全く効いていなかった。

さっきだって自爆機能を持つ神器をクリーンヒットさせてもびくともせず、あまつさえすぐさま反撃に打って出られるほどの余裕ぶりを残していたし。

これが普通に世界級エネミーみたいな化け物だったら素直に納得できたのだが、仮に防御を１４０レベル相当であるとしても攻撃能力や機動性能は精々あって80レベル。ありえないだろ。

とはいうものの、今さっき猫パンチ喰らわせたところで大体の種は予測ついた。あとは確証さえ得られれば勝ち目はある。

ツアーから直線距離１００メートルほどのところまでとぼとぼ歩き、最も使い慣れた武器の日本刀〈珀狼王〉を抜き出し左手に握ってから隠形を解いた。

「さてそろそろ勝負を付けましょうかツアーさん。もしくは白銀クン？」

「ああ良いだろう、勝敗はともかくいい加減君との戦いには飽きてきたところだ。

じゃあ

――十三英雄『白銀』

「わた、いや……クラン：ナインズ・オウン・ゴール『永久欠番』マタタビです」

大地を強く蹴り潰しスタートダッシュを切り飛ばす。加速して４歩目でＭＡＸスピードへ突入し、前方から放射される剣群へと一直線に突き進む。

この超高速では先ほどやったような曲線的回避は困難。だが本当はさっきみたいな技術だけで無理やり乗り切るような曲芸を行う必要は無かったりする。というのも端からちゃんと防御用のスキルは持っているのだ。

「〈旋風陣の術〉！」

「何!?」

駆け抜けるマタタビの周囲に風の障壁が発生し、向かい来る凶刃の数々はことごとく後方へと受け流される。先ほどの技術だけでの超回避を見た手前、まさか普通に防御できる手段があったとは予想がつくまい。

武器の嵐を乗り超えた先には、案の定オフェンスに全ての武器を費やしてがら空

きなツアーの姿。そりゃそうだ、その防御力で更に守りを固める判断なんて普通しないだろう。

「〈タハイル（光）・ノガルド（竜）・レウェジェ（宝）（玉）〉」

ツアーは両手を前に向け輝く魔力を収束させ間も無く解き放った。

直径20メートルの巨大な光弾は大地を削りながら、突進してくるマタタビをそのまま光の奔流へと飲み込まんとしていた。

負けじとマタタビも日本刀にMPを食わせギミックを起動して対抗する。

「〈氷狼牙〉」

氷属性特化の神器武器〈珀狼王〉、マタタビの掛け声とともにその刀身から凍てつくオーラが溢れ出す。その冷気は大気を凍えさせるのみならず、所有者であるマタタビの腕にすら霜を張りめぐらせる。

しかしそれを一向に気にせず、オーラを纏った剣を振るい猛吹雪のごとき斬撃をツアーの光弾へと撃ち放った。

力と力がせめぎ合い、火花を散らして世界が揺れる。

数秒均衡していた両者。だが徐々に天秤はマタタビの方へと傾いて、氷刃が光を

押し退いていく。

「波ッ！」

次の瞬間巨大な光弾の中心から氷晶眩く一本道が切り開かれ、その先に待ち受ける標的（ツアー）へ向かって再びマタタビは走り抜けた。

やがて刃に冷気を宿したままで横薙ぎにツアーの首元へと斬りかかる。

「懐かしい太刀筋だ」

間も無く刃が届くその刹那、ヘルム越しのツアーの瞳が強く輝いてマタタビの視線を捉えた。

反撃だろうか。だとしても、今更刀を振るう腕は止まらない。たとえばそう――

「やはり君が、ナツウメサクラだね」

誰にも言った覚えのない真名（まな）を告げられたとしても。

刀の切っ先は狙い定めた鎧の間隙へ正確に食い込んで、やがて夜空高くへツアーのヘルムを斬り飛ばした。

・

切り跳ね上げたツアーのヘルムは月光に照らされながら空中で放物線を描いて間も無くカツンと音を立て着地した。
すると今度はぷわぷわ浮かび上がって、首なしで屹立していた全身鎧の本体の方へうごめき元の頭部へとおさまった。
「はぁ……やっぱり」
その光景に思わず気抜けした一言がこぼれる。
「その様子だと薄々感づいてはいたんだね」
「まぁね。殴りつけたとき、感触が軽すぎたんだよ」
結果を言えば私の推測は当たっていた。
どれだけ痛めつけてもピンピンし過ぎていたもんだから、おかしいとは思っていたのだ。
なるほど鎧だけならどんなに攻撃しても碌なダメージにはならない。そしてこいつの気配が感じ取れなかったのだって、そもそもここに存在しないからだ。ただの防具を感知するスキルなんて私は持ってないし。
「あーもうまったく、どーりでそっちは余裕だったわけだ。ずるいねぇ、安全地帯

からずっと睥睨してただなんて」
「そうでもないさ。直接的な死の危険はないにせよ、この鎧を失う覚悟はそうそうできない。
プレイヤーによって世界法則を歪まされた今ではもう二度と作り出すことは出来ないし、それ以上にこの鎧には強い思い入れがある」
そう言って私にボロボロにされた胸板に手を当てるツアー。
「さいですか。その思い出とやらには興味ないけど、ひょっとして私の名前を知ってる理由と関係あるのかな？
次第によっては思い出ごと、本体のお前も滅ぼさなきゃいけなくなるんだけど」
もしも推測通りなら、ナザリックの連中には絶対に知られるわけにはいかないだろう。
とはいえ今の私にはどうしようもないから、ただの脅し文句にしかならないが。
「ササキマサヨシ、それが今の君に話せるすべてだ。」
「おーけー十分、ぶち殺し確定です！　白銀だか竜王だか知りませんけど精々首を洗って待っててくださいね？　手始めにその鎧をぶっ壊してやる！」

アイテムボックスから一つの拳銃を取り出し引き金へ指をかけ銃口を向ける。
やれやれと両手を手を振るうツアー。気抜けした動作だが、今日一番の敵意が手向けられた。
「真実が怖いのかい？　２００年もの間、愛情から逃げ続けてきた愚か者め」
「ドラゴンのお前に私の何がわかるんだよ！　つーか２００年てなんだ！　こちとらユグドラシル最終日からまだ２週間だっての！」
「最終日から……二週間？」
なんだ？　妙なところで食いつきやがって。
２週間って聞いた途端、敵意が急に小さくなっていく。
「……フハハハは、２週間！　そうか２週間か！　なんていう皮肉な運命だろうね！」
「狂った？」
「狂ってるのは今の君のほうだろう？　真実を語るなら、正常な君の方が良いのだがね。
そのかわりにこの鎧のことは見逃してもらえないかい？　やはり今ここで壊さ

れるにはとても惜しいんだ」

何様だろうか？

とはいえ手段がないこともない。真実が怖いだのとほざかれるのは我慢ならないし、せっかくだから乗ってやろう。断じて罪悪感などではない。断じて。

「しょうがないなぁ。どうせ壊したっておまえ本体じゃないし。それならお前の敵意だけを消す方法はなくもない」

拳銃をしまい、アイテムボックスから一枚の呪符を取り出した。

「どうせお前に選択肢はないんだ。精々私を信じて抵抗しないことですね。この札は、貼り付けたマジックアイテムの効力を無効化する札です」

「それで遠隔操作を無効にするんだね？　でもそしたら鎧は無防備になってしまうけど」

「今の私はお前の敵意に反応してるに過ぎないんだ。その鎧から感情が読み取れなくなれば、私の方は何もしない。

札の効果時間の5時間後。目覚めた私をまだあなたが恨んでるっていうなら同じことの繰り返し」

「逆に君に対する敵意を消すことが出来れば、そのまま立ち去ることが出来るんだね？

なるほど。理屈はわかったが、それだと君の方はどうなる？」

「余計な心配はしなくても良いよ。私のことなんかどうせ……どうとでもなる」

「今度は正常な君に出会えるのを願っているよ。もしも解放されたなら、私はアゼリシア山脈の霊廟にて待っているから尋ねてくるといい。

あるいは王都にかつての仲間のイビルアイという冒険者がいるから、先に彼女を頼るのもかまわないが」

◆

以上がことのあらましだ。

鎧が機能停止したことにより一旦は敵意が消失したと判断して、私の方は待機状態に戻った。

5時間かけて頭を冷やしたのであろう。ツアーはいつのまにか消えてくれてい

た。ただ姿だけはニグレドさんにばれていたのが唯一の誤算である。
いや、というかこの一連の流れ全てが誤算だったといった方が正確だろうか。
「ったくマサヨシの野郎！」

※マサヨシはオリキャラではありません。既存キャラのリアルネームを捏造したものです
ヒント：名前を漢字にするとすぐわかる
あと鎧のツアー、原作だと多分ここまで強くないと思います

悪魔のキューピット的苦悩

うえーん、デミウルゴスがかってにうごいてぼくのプロットこわしやがったー

（更新遅れてごめんなさい）

隠し娼館の制圧、及びその後の現場処理は意外なほどにアッサリと終了した。かかった時間は10分ほど。

昨夜セバスを発見した段階で場所はとっくに割れていたので、まずはその施設構造を盗賊のスキルを使って丸裸にした。

外目の分にはボロい掘立小屋なくせして、どうやら地下施設が本業らしい。王国でもリョナ系パブは違法だからこういった構造になっているのだろう。

これだけ大規模なものを作り上げたとなると不動産の動きが怪しくなるし建築組

合も一枚噛んでる可能性が高い。

同じ地下でも、アインズ様含めナザリックの連中にとっちゃ一笑にも値しないだろうが、せめて私くらいは褒めて遣わす。

いや潰しますけど。

攻め手は地下施設なら必ずあるはずの排気管。

ナザリックの場合は謎のマジカルパワーで勝手に空気清浄されるわけだが、幸いこの世界での換気設備は普通に現実的なものだった。

室外の排気管から、レベル30以下まで有効の催眠ガスを放り込む。

やがて〈気配感知〉で全員の行動が止められているのを確認したら影分身を15体ほど送り込み、あらゆる物資や人間を〈異開門（ゲート）〉のスクロールを使って事前に王都内に購入していた屋敷へ運び込んだ。

空になった施設には何の証拠も残さぬよう、魔術師組合でダース買いした〈清潔〉のスクロールを使用。

残されたのは元が娼館だったとすら思うまいただのデッカい空きテナントである。

表向きに刑事告発できない八本指相手にはこのくらいが丁度良いだろう。
屋敷にはおなじみの傭兵ＮＰＣ、半蔵くんを残して〈異開門（ゲート）〉をとじる。
カーペットすらはぎ取ったむき出しの石畳に靴底を鳴らしてスキップし、唯一残した照明設備の魔鉱石を天井に見上げて思わず口元を吊り上げた。
「ま、こんなもんでしょ。あはは」
我ながら惚れ惚れする完璧な手腕。これなら たっち の野郎――もといセバスさんも私のことを見直してくれるに違いない。
あのムカつく面の彼からちょっと申し訳なさそうな視線を頂ければこちとらお腹いっぱいだ。見下し気味に「どういたしまして」と言ってやれればより最高。
ちょうど今頃他の影分身がセバス達を説得させてるところだから、そろそろいい返事がいただけると思いきや……
「！ッ～～～」
なぜか突然、顔中が火のように熱くなる感覚に襲われる。
遅れて脳の海馬に情報が刷り込まれ、ようやく状況を理解した。
影分身の情報統合はいまだ慣れない。

……えぇ、説得失敗とかマジか

何とも言えない不完全燃焼感と不毛感に胸中を支配されながら、幽鬼のごとく足取りですごすごと宿屋へ引き返した。

宿屋で高級似非フレンチもどきの夕食を頂いた後で自室で晩酌という名のヤケ酒にしゃれこもうとしていたその時、突然脳内に声が響いた。

『夜分遅くに失礼、マタタビ君。君もよく知ってるであろう娼館の件で話があるんだ。今夜会えるかい？』

「で、デミウルゴスさんっ!?」

◆

待ち合わせ場所は宿屋にあったバーコーナー。

デミウルゴスさんの見た目で大丈夫なのか？　と思っていたのだが半信半疑言われた通り来てみると、カウンターに待ち受けていたのは人間姿にデフォルメされた彼の姿だった。

どこぞの豪商のように見える上等な服装やら一体どういう種なのかと思っていると、彼の隣にいた金髪ぼんきゅっぼん美女の姿を捉えて納得した。

配下のサキュバスさんを呼んで幻術を使わせているみたいだ。

「へぇずいぶんとまぁ、粋な装いをなさりますね！」

「やぁマタタビくん、久しぶりだね。君のドレスも似合っているよ」

「……あー、うんどうも」

そう言って優しげな顔で微笑みかけるデミウルゴスさん。宝石ではない人間化した瞳も同様に柔らかい表情を見せていて、セバスさんやたっちとは別ベクトルの男性的色香を醸し出していた。男にかける言葉じゃないかもしれないが、なんというかエロい。

ちなみに私が今着ているのは、潜入捜査用に購入した王都随一のブランドものだという黒いドレス。

多分今の私の見た目も彼には負けず劣らずなのだろうが、ゲームアバターとしての仮初の姿を褒められても正直反応に困る。

ただでさえ今の彼は眼に毒だというのに。

店主に適当な酒を頼み腰かけてから〈凪（カーム）〉のスキルで防音（or盗聴対策）を済ませて、再び話しはじめた。

「悪いね、ありがとう。

丁度私の方も王都にいたし、ここにいるはずの君と会うためにわざわざナザリックにもどるのも馬鹿らしいからね。

このとおり、横の彼女の幻術でカモフラージュしてもらってるというわけさ」

ここでようやく後ろのサキュバスさんが私の方へ一瞥し、無言で軽く礼をする。

彼女は確か、かつてデミウルゴスさんとナザリックのバーで相席したときに、たまに連れてくる魔将の一人だったはずだ。

意外と寡黙な方で、特に私とデミウルゴスさんが話をするときには空気のようになってしまう。

己がその場において無価値であると自覚しているらしく、当のデミウルゴスさん

もそんな彼女が眼中にない。自然と私も彼女を無視せざるを得なくなる。

ナザリックのバーではいつものことだ。

だからついついいつもの流れで頼んだお酒に口を付けようとしたところ、ハッと思い出し慌ててグラスをテーブルに立て戻した。

それを見てデミウルゴスさんがクスッと噴き出す。

「いや別に構わないよ。何も私は君を叱りに来たわけじゃないからね」

「えっ、そうなの？　てっきり娼館を勝手に潰したことで怒りに来たかと思ってたけど……」

うっかり謎の歓迎ムードで忘れそうになってしまったが、彼は娼館の話があると言って私のことを呼んだのだ。「セバスの件」とか、その「ペットの件」とかではなく、はっきりと「娼館」と言及したのだから私の暗躍がバレているのは間違いない。

組織においてこういった独断専行は許され難い。さっきのセバスさんが良い例だが、彼も危うくソリュシャンさんにアインズ様へ告発されかけたのだ。

ともなれば、そんな彼の有り様を助長するような真似を働いた私の方へも処罰が及んでしかるべきだろう。

そう覚悟していたのだが……

「先に言っておくが今回の件、自己申告を行ったセバスは不問とされたそうだよ」

「……へぇー、デミウルゴスさんは不服そうだね」

「本音を言えばその通りだが、これは他ならぬアインズ様の決定だ。それに私の彼に対する感情には私怨が混じる。この場ではやはり不問にするのが最も合理的だろうね」

どうやら自覚はあるようだ。

しかしやっぱりそれって製作者であるたっちとウルベルトの関係性が反映されてるんじゃなかろうか。

そう思うと二人を引き裂いた元凶である私として心が痛む。

「もっとも彼は栄えあるナザリックの家令（ハウスチュワード）だ。

上に立つものとして、失態を招いたことへの筋を通す必要はある。軽い禊のようなものは行われたよ」

「そりゃまたどんな」
「確かツアレ、と言ったか。彼の失態の象徴であるあのニンゲンを自らの手で殺害するよう命じ、それを遂行できるか試すものだ」
「不問ってことは合格したんだよね？」
「当然さ」
妙に強いトーンで応じるデミウルゴスさん。無意識だろうが、迂遠で遠回りながらも強固な信頼感が感じ取れた。
指摘したらきっと眉を顰めるだろうけど。
「本当に殺してはいないがね。彼女の近親者にアインズ様と縁があったらしい。実に運のいいことだよ」
「さいですか、ふーん」
全てバレたのだからてっきり殺されるものかと思っていたが、おっしゃる通り本当に悪運のいいこと。
もっともこれまでの境遇だけに、総合的にみれば全然不幸な女だが。
一つの納得を済ませてから、私はグラスに再び手をかけちびりちびりと口元へ麦

酒を注ぐ。
コク深い苦みと柔い泡沫の触感を舌に転がせ、食道に滞留したアルコール臭い一息をふっと零した。
「つまり主犯のセバスさんが不問になった手前、いろいろ勝手にやったとはいえ私の方を摘発するわけにもいかないと」
結局、私が何かしなくても事態はたいして変わらなかったらしい。我ながらとんだ道化を演じたもんだ。
徒労感に気が重くなり、酒が入ったのも相まって瞼が下へと引っ張られる。
「少し違う」
「違うの？」
「今回の件において君は、独断専行しようとしていたセバスを説得させたという扱いになっている。
もっと言えば娼館を壊滅させたことは普通に功績だ」
「……えぇ」
なんというバカみたいな好意的解釈だろう。実際やりたかったのは説得ではなく

後押しだったというのに。

ところがホッとするべきか残念がるべきか、目の前の友人もどきはマタタビのことを見誤らなかった。まるでかつての彼を思わせるように。

「もっとも君の本意については私にも推測がついてるさ。端的に言えばいわゆる同類哀れみという奴だろう？」

マタタビがあえて濁していた自覚を、デミウルゴスは最も的確で辛辣な言葉で掬い上げた。

同類哀れみ

何と何が、なんてのは言うまでもない。

「無論、君とセバスがだ。指摘されるのは至極不服だろうがね」

自覚はあるし不服だ。

しかし、心中を底まで見透かされて良い気がしないのはまさか私だけではあるまい。

分かったうえでそれでも彼は、他人の心の玄関口へと躊躇なく踏み入っていく。拒絶されようとも必要なことだと分かっているから。

彼のそんなところが私は嫌いになり切れない。
「今回の失態を招いた根幹であるセバスの性質、弱者への甘さと困難を一人で抱え込みたがる独善性。
それと同じものをマタタビ君も持っているはずだ」
「……」
図星もいいところだった。
私は甘い。敵であったはずのニグンに縋られて、情報持たせて祖国へ帰してあげちゃうくらいには。
そして様々な重大な秘匿を独り善がりで抱え込んでしまう身勝手さなんか、下手したらセバスのソレより悪質だ。
言い当てられたまらず返答できず、無言でうつむき目を細める。
ぶっきらぼうな無言の肯定を読み取ったデミウルゴスは淡々と話を続けた。
「共感と同情、今回における君の動機の主たる部分がこれだ。反して君のセバスに対する言動が攻撃的だったのは同族嫌悪があったからだろう。
加えて恐らく、君のたっち・みー様へのコンプレックスもあったのではないかね

？　後者については事情を図りかねるので追及はしないが」

私の複雑で醜悪な乙女心が悪魔的知性によってすらすら紐解かれ、白日のもとへさらされていった。

「もっといえばセバスの失態を最初から眺めていたのも、あのツアレという女に――」

「……わかったから、もういいです降参します。やめてください」

私はたまらず白旗を上げて恥ずかしげにうつむいた。

デミウルゴスさんはして悪戯な笑みを浮かべ丸眼鏡を持ち上げる。

それは在りし日のウルベルトと私のやり取りそのものであったが、あまりに二人を重ねすぎるのは間違いだ。

ウルベルトにはなくて、デミウルゴスさんが持っているはずのもの。それが見るからに欠落していていたので不可解に思い、私は訊ねた。

「ねぇ、なんで本当のことを知っているのに、デミウルゴスさんは私のことを怒らないの？」

もしこのことをウルベルトが知ったとしても精々『可愛いもんだ』とか何とか

言って笑って済ましてしまうであろうことは容易に想像がつく。
だが忠誠心の塊であるデミウルゴスさんなら、私の行為に嫌悪を示さないはずがない。
そんな疑念に帰ってきたのは私にとって最低ともいえる回答だった。
「君の不問を決定したのも、他ならぬアインズ様だからだよ」
「それだとまるで、私の心の奥底をあの方にも覗かれてしまったみたいな言い方だけど？」
「何を言ってるんだい？　私程度が気付いたことに、あの方が考えが及ばないなんてわけがないじゃないか」
そこでようやく不可解そうに眉を顰めるデミウルゴス。
賢いくせに信仰心だけはバカみたいな盲目さだ。
「ソリャソーダネ」
良かった。多分絶対、鈍いアイツは私の真意に気付いちゃいない。
仮に気付けるくらい彼が鋭かったとしたならば、私たちの関係性はもっと別の形になっていただろう。

でも今回の件について言えば、事の本質に大差はない。だって

「君が不問とされた、もっと言えば赦された理由は、君自身が一番よくわかっているはずだよ。それは」

「アインズ様にとって私が特別だから、でしょ？」

他人に言われるくらいならと、先んじて彼のセリフを投げやりに奪い取った。

認めるわけにはいかない事実だ。

だから私は、続けざまにデミウルゴスへ真実を語った。

「でもねデミウルゴスさん。私には本来『特別』になんてなる資格ないんです。

偶々タイミング悪くアインズ様の傷心に居合わせてしまったに過ぎなくて、でも実際はこの世界で最も相応しくないのが他ならぬ私。

だってモモンガさんは本当は、私のことが死ぬほど嫌いなんだから」

「……先日アインズ様に命を救われた者の言葉が、よりにもよってそれですか？」

◆◇◆

「そうですが何か、無いよね？」

デミウルゴスが苛立ちのあまり強くぶつけてしまった言葉に、マタタビはさも何

ともないように応対した。
一周回って呆気にとられ、デミウルゴスをしてつい諦観のこもった呟きを零してしまう。
「ええまったく、かける言葉がありませんよ。本当に困ったお方だ」
他人の弱みを鋭く時に悪辣に見破るマタタビが、まさかアインズ様から本当に悪しからず思われていることを気付けないわけがない。
彼女は気付いてなお、それをかたくなに認めようとしていないのだ。
なるほど、アインズ様すら彼女相手にてこずった理由が非常によく理解できた。

ここまで観察した結論を言えば、マタタビとは自己嫌悪とコンプレックスの権化のような人物である。
精神の内に根強く取りついた卑屈さが他者からのあらゆる肯定を弾いてしまうのだ。
その自己否定の要因の一つは対人コミュニケーションの不協和。思わず出てしまう攻撃性や配慮に欠けた言動にある。

おそらくそれによってもたらされた旧クラン：ナインズ・オウン・ゴールでの悪影響が、今なおずっとマタタビの中で尾を引いているのではないだろうか。

もしくはアインズ様やデミウルゴスも知りえない何かがあるのかもしれない。

なんにしてもそのあたりを解消しなければ、アインズ様との今後の関係改善は困難であろう。

資質だけで言えばアインズ様の正妻筆頭であるというのに、その道のりは万里のごとく遥か険しい。ナザリックの将来を思えばこそ、デミウルゴスとしてはマタタビの立場が落ち着いてくれなければ困るのだ。

ならば手をこまねいて待っているわけにはいかない。徐々にでもマタタビをナザリックの中へと馴染ませる必要がある。

一足飛びに事実を認めさせる試みは一先ず諦める他ないだろう。

「この話はとりあえず置いておこう。折角の酒場で平行線をひた走り続けるものではないからね」

「そですね。つっても話はこれくらいじゃないの？」

事前に準備していたプランBだ。

「いやもう一つ話があるんだ。覚えているかい？　アインズ様から命ぜられた任務の一つである『魔王計画』のことを」

こめかみに指を当てうろ覚えを思い出すようにマタタビは答える。

「えーと確か、どこかの国に80レベルくらいのモンスターを送り込んで暴れさせその国家の防衛力を計測するとともに、水面下に潜んでいるプレイヤーを炙り出すってヤツでしたっけ？」

「概要はそんなところだ。それを近日この王都で計画しているんだが、マタタビ君の力を借りようと思っていてね」

「私を？　いや悪いことは言わないから辞めときなさいな。

自分で言うのもアレですけど、きっと碌なことにならないと思うぜ？」

帰ってきたのは想定通りの返答だ。

デミウルゴスとて不確定要素の塊であるマタタビを計画に組み込むリスクは重々承知している。しかし高いからこそ挑戦しなくてはいけない理由がある。

結局彼女自身の集団行動へのコンプレックスは、なんらかの成功体験を積み重ねて解消する他ないからだ。

それは単に彼女とナザリックとの関係性を強く結びつけるだけではなく、彼女自身が持つ高い能力をナザリックにとって有益に活用するためにも必要なことである。

「謙遜することはないだろう。八本指の隠し娼館への対処は実に素晴らしい手際だった」

実はマタタビの暗躍にデミウルゴスが気付けた理由というのが、今回のために王国に張り巡らせていた情報網にある。

部下から隠し娼館がもぬけの殻になっていると報告を受け自ら現場に出向き、あまりの痕跡の無さから〈清潔〉の魔法が行使されたのではないかと予想した。

なので魔術師組合での売り上げ記録を覗き、〈清潔〉のスクロールを大量購入した人物がマタタビであることから、ようやく特定に至ったわけであった。

特定が遅れた決め手は何といっても、施設制圧と後処理にかかった時間があまりにも短すぎることだった。

デミウルゴスの推測が正しければ10分もかかっていない計算になるはずである。

そしてそんな彼女の優秀さが人格的問題で役立たずに陥る様は、デミウルゴスと

してもあまりにも見ていられなかった。
「もちろん君が不安に思う気持ちもよくわかるが、そのあたりは私の方でしっかりフォローを入れるつもりだよ」
「うーんでもなぁ、いろいろ申し訳ねぇですし……」
無論、全霊を尽くした補助役になることだろう。
そんな予想図を思い浮かべたマタタビも気乗りしなさそうな暗い顔をする。
だからここでもう一押しだ。
「ところでマタタビ君、娼館から移送した物資やニンゲン共は今どうなっているんだい？」
「え？　あぁ、王都の中古物件でテキトーな倉庫を購入して全部突っ込みましたよ。物資の方はとても現場で整理できる量じゃなかったので、倉庫の方で影分身たちに整理させました。
人間については負傷者も多いしその他色々厄介だったので、時間停止の結界に放り込んで凍結封印させてます。こっちの方はちょっと処理に困ってて……」
なるほど手際は優れているがやはり甘い。詰めも人格も。

デミウルゴスからしてみれば、取るに足らないニンゲンに慈悲を与える思考はさっぱり理解が及ばない。娼館の経営者を生け捕るならまだしも使い道があるが、何の価値も無くおそらく本人すら生を望むまい被害者女性達をあえて生かしてどうするつもりなのか。

もっともマタタビに付け入るスキとなった彼女達は今のデミウルゴスにとって有益と言えた。

「物資の方と八本指の従業員については私が引き取ろう。

そして女性たちの方だったら、今ちょうど適任の引き取り手がいるんだ」

「誰です？」

「セバスだよ」

「うげぇ」

その名を出した途端にしかめっ面で嫌悪を示すマタタビ。

デミウルゴスの考えを察したためであろう。

「見ただろう？　あのツアレという女の、セバスに対する異常と言える依存具合を。苦境的人生経験を味わったものが人格者に救済されると自然ああなる。

実はかねてよりＮＰＣによる生殖実験を予定していたんだが、彼女のおかげでその手間も省けそうだと安心したところだったんだ。

しかし欲を言えば、モルモットは多いに越したことはない」

「けっ、確かにこの上ない適任ですね。でも……」

マタタビがセバスを直接頼れるわけがないのだ。

「だから交換条件だよマタタビ君。君がゲヘナに参加してくれるなら、女性たちの引き取りを私の方からセバスに頼んであげよう。

逆に君が断るというのなら、女性たちはアインズ様から直接嘆願して私が引き取ることにする。今ちょうど新設した牧場で人手が足りなくてね」

退路をふさがれた子猫は虚勢で悪魔を睨みつけ、やがてうなだれるように負けを惜しんだ。

「……いいよわかった。どうなっても知らないからね？」

このSSのゲヘナはかなりマイルドな内容にアレンジする予定です。そもそもの

目的が原作と微妙に異なりますので色々とご注意を。

事前報告と凶悪な影響力

執務室にて、はたから見れば独り言のように〈伝言/メッセージ〉で喋るアインズ。

それはマタタビとの定期連絡だった。

「セバスの件、マタタビさんが居てくれて助かりました。

セバスが自分から報告してくれたおかげで話が早く済みましたし、マタタビさんが関係施設を処理してくれたおかげで後腐れなく王都から撤退させることが出来ました。

でも正直言えば、マタタビさんにしては気が利きすぎて気持ち悪いくらいです」

『……察しろ。言いたくない色々があったんですよ』

「あーセバスの製作者がたっちさんだから……まぁ言いたくないならいいですけど……ところでそれよりなんですかアレ！　あのクソ爺にメイドハーレムけしか

けたのあなたでしょマタタビさん！」
『違いますよ。私じゃなくてデミウルゴスさんが提案したんです』
「生殖実験ってナザリック強化の為だから横槍入れられないのが性質悪いですね。
……ところで女性としてはハーレムってどうなんですか？」
『個人的には理解がありますよ。
まぁ女性同士の仲が良ければ、セバスさんとあの雌豚の群れなら問題ないでしょ』
「言い方、っていうかそんなもんですか？」
『私の場合リアルで実物見てるんでね。つーか何？　アインズ様もハーレム作りたいんです？』
「いやそういうわけじゃ」
『いいんじゃないです？　アルベドさんの他にもシャルティアさんナーベラルさん他プレアデスと一般メイドに、あーあとアウラさんとか綺麗どころ揃いじゃないですか。
アインズ様さえちゃんとしてりゃあ、ピンク色の火花とか散らないでしょうし。
それにいい加減、デミウルゴスさんの視線がウザくて仕方ない』

「……当事者じゃないからって上から目線で」

『当事者ですよ。万が一外堀埋められて私とアインズ様が婚約する羽目になったら逃亡許可くださいね？

絶対ドタキャンしてやりますからさ』

「あたりまえじゃないですか」

アインズとマタタビは同郷でありユグドラシルでの思い出も分かち合う唯一の存在である。

しかし二人の間でなされるコミュニケーションは〈伝言/メッセージ〉によるものが大半で、もっと言えばそれも不定期だ。

それでもユグドラシルだったら一月にあるかないかという頻度だったのが、異世界に転移したため必要に応じて一週間に2～3回へと変わったのは当事者からすれば大きな変化である。

一回につき大体1～20分ほどの時間。

暗黙の了解で過去のギルドメンバーについてはほとんど触れないことになっている。抜けたマタタビからすれば気まずい話だし、アインズも届かない過去を思えば

つらくなる。
やり取りしている間こそお互いに早く終われと悪態をぶつけあうものの、終わった後から二人はその時間の貴重さを思い出すのがいつものことだ。
過去を共有する者同士にしか分かち合えないシンパシー。
異形種として転生してしまった自分たちが、かつては紛れもなく人間だったのだというアイデンティティの確証。
互いへの微妙で歪曲な思い遣りを感じた時の、何とも言えない脱力感。
口数以上に意味合いが深いこのやり取りには、二人それぞれに共通しない意味合いも多くある。
支配者としての孤独の発散や、自己否定への賛同などその他色々。
アインズにとってのその一つが、ナザリック内における情報把握だった。
『そういえば私、デミウルゴスさんのゲヘナに巻き込まれちゃったんです。断ろうとしたけど巧いこと丸め込まれちゃいました』
「……何ですかそれ」
『まさか知らないの？　えっと、近々王都で行われる魔王計画の一部のことです

よ。

デミウルゴスさんが魔王役として王都で暴れ、最終的に聖王国でアインズ様に潰されるってシナリオの」

「全然聞いてないんですけど」

心当たりのない話に骸の額へ青筋を浮かべるアインズ。

『そりゃないでしょう？　そうとう大規模な作戦だからまさかデミウルゴスさんが報告してないなんてことは……

せめて兆候くらいはあったはずですけど』

確かにそうだとアインズも思い、これまでを振り返ってそれらしきことがなかったのかと頭をひねらした。

結局思い浮かんだのは執務室に積み上げた、怪文書のごとき報告書の連なった白き巨塔だった。

「いやー、全然心当たりありませんねー」

『ダウトですよ、イきり骨太郎様』

メッセージ越しでもマタタビの勘は甘くはなかった。

『……まぁいいですけど、わかりました。後で企画書類横流ししてあげます』

「本当にありがとうございます！」

珍しく心からの感謝をマタタビに向けるアインズ。思わずメッセージ越しに頭を下げていたのは内緒だ。

『じゃ、切りますよ』

「ではよろしくお願いします……ふぅ」

念話が途切れた直後、もしやと思い怪文書の山をあさってみると案の定それはあった。

A4紙が幾枚も綴じられた書類。表題には『ゲヘナ計画書』と記されていた。

横流しの約束をしてしまった手前、すぐ見つかってしまったとなれば間違いなくマタタビはアインズを罵倒するに違いない。

それを思ってアインズは折り返しに〈伝言/メッセージ〉を飛ばすことを辞めにした。

すると天罰が当たったのであろうか。書類に手を付け読み込もうとした直後、執務室の扉をたたく音が響き渡る。

「デミウルゴスです。先日ご報告いたしました『ゲヘナ』の予定変更と要望についてで御話しをしたいことがあるのですが」

まさに噂をすれば、とでも言うべきか。

あまりに間の悪いタイミングでの来訪に思考が混乱するアインズ。

思わず素の対応で「ちょっと待って!?」と出そうになったのを精神正常化によって何とかこらえる。

そしてロールプレイを気取って、後にしてもらう旨の台詞回しを捻り出そうとしたところそれを遮るように、聞きなれた女性の腹立たしげな声が聞こえた。

「私は反対よデミウルゴス！　彼女をゲヘナに組み込むのはリスクが高すぎるわ」

守護者統括アルベドの声だった。

反目するようにデミウルゴスも声を荒立てる。

「アルベド、君は彼女の名前を出しただけでやたら過剰反応したようだが、そんな体で冷静な判断が下せるとでも？

大体君の意見は聞いてないんだがね」

会話内容を聞き、ユグドラシルでも異世界でも諍いの火種となるマタタビを想っ

て感慨深い趣を覚えたアインズ。

だがすぐに切り替え二人を鎮めるために、訓練していた支配者ロールを切り出した。

「扉前で騒々しいぞ。静かにせよ。

アルベド、デミウルゴス、共に部屋に入れ」

「はっ、御前にて見苦しい様を見せてしまい申し訳ございません。

では失礼します」

アインズの一喝に声を合わせて応対するアルベドとデミウルゴス。

うんうんとアインズが思ってる合間に、扉に手が掛けられて二人が入室していく。

入ってきて扉が閉められた次の瞬間、アインズは「やっちまった」と後悔した。

◆◇◆

執務室の扉は意外と薄い。

まるで聞きなれない朗らかな声色が、廊下越しから耳に入ってしまうくらいには。

「……ところでそれよりなんですかアレ！　あのクソ爺にメイドハーレムけしかけたのあなたでしょマタタビさん！」

「……当事者じゃないからって上から目線で」

その声の持ち主が絶対の主人であることを、アルベドは絶望的な心境で受け止める。

おそらくアレが、支配者としての表体に隠されたアインズ様の真の姿なのだろう。

配下の者には決して見せないありのままの表情。

こっそり扉の隙間から覗き見たくなる衝動が沸き上がるがこらえる。自分にはそれを見る資格が無いし、あるいは見たところで女としての敗北感がより深まるだけだろうから。

そう考える自分を鑑みて、いまだ自分はマタタビへの完全敗北を認めていなかったのだなと意外に思えた。

彼女と違い、自分は土俵にすら立てていなかったというのに。

扉の装飾を眺め呆然としていたアルベドに、小声で声をかける者がいた。

「やぁ、アルベド」

「……デミウルゴス」

橙色のスーツに身を包み、鋭利なオールバックヘアーと長耳を伸ばした悪魔。デ

ミウルゴスは扉の向こう側の声を聴き、愉快気な顔をアルベドに向けた。
ムカつくが、下手に同情されるよりは全然良かった。
「アインズ様は〈伝言/メッセージ〉でマタタビ様と談話中だね？」
「ええ、だから終わるまで待っているの」
そっけなくアルベドが返事をすると「そうかい」と軽く流し、手元に持った書類を差し出した。
おそらくアインズ様にこれから提出するモノなのだろう。
「どうせならこれでも読んで気を紛らわせるといい」
「ありがとう」
受け取って表題を見ると『ゲヘナ計画修正案』と記されていた。
どうやらこの間提出した計画書を再構成したもののようだ。
何故またこんなものを。
紙の端に指をかけ、何気なしにパラパラと内容を捲り見る。
主な変更箇所は二点。一つは王国民への被害が減らされていること。二つ目は作戦にマタタビを参加させていることだった。

「ねぇこれって」
「本当にありがとうございます！　ではよろしくお願いします……ふぅ」
アルベドが口を挟もうとした直後に室内のアインズ様が会話を終えた素振りを見せる。
それを感じ取りアルベドにかまわず扉に掛けようとするデミウルゴスの腕を、アルベドは思わずサッとつかみ取って強く言った。
「これはどういうつもりかしら？　わざわざナザリックへの収入を疎かにしてまで、ママゴトに興じるなんてらしくないわよ」
「ママゴトとは心外ですね。たかが一国を手中に収めるより、彼女を御せることの方が遥かに重要でしょう」
正論だ。
素直にそう思い、アルベドは自身の失言に内心歯噛みする。
たった今の自分は感情の赴くままに非難を吐き出してしまった。その感情とは端的言えば、マタタビへの嫉妬心。
マタタビをアインズ様と近づけるための試みの一つに対し、感情の部分が先んじ

て反目したのだとアルベドは冷静に自己分析する。
既に覚悟はしていたはずなのに、存外に己とはままならないものだ。
掴まれた腕を振り払い、デミウルゴスは今度こそ扉に手をかけアインズ様へと呼びかけた。
「デミウルゴスです。先日ご報告いたしました『ゲヘナ』の予定変更と要望についてで御話しをしたいことがあるのですが」
言ってしまったことは仕方ないと諦め、アルベドはすぐに意識を切り替えた。
状況を最善へとコントロールするための行動を逆算し、直ちにそれを実行する。
「私は反対よデミウルゴス！　彼女をゲヘナに組み込むのはリスクが高すぎるわ」
あえて奥の方にも聞こえる声で見せかけの反論を繰り出した。
デミウルゴスもこめかみに血管を浮かび上がらせ反応する。
「アルベド、君は彼女の名前を出しただけでやたら過剰反応したようだが、そんな体で冷静な判断が下せるとでも？
大体君の意見は聞いてないんだがね」
案の定一触即発の空気が生まれ、そしてそうなれば我らが主は黙っちゃいないだ

ろう。
ありのままの態度は鳴りを潜め、表層に再び支配者としての威厳が浮上した。
「扉前で騒々しいぞ。静かにせよ。
アルベド、デミウルゴス、共に部屋に入れ」
「はっ、御前にて見苦しい様を見せてしまい申し訳ございません。
では失礼します」
後味悪そうにデミウルゴスが睨みつけるのをすまし顔で流して部屋へ入る。
机上越しに構えて座したアインズ様はやはり威厳に満ち満ちていた。
しかし瞳の色を伺えば守護者同士の諍いに対して慌てているのが感じ取れた。
本当は取るに足らないはずの従僕にすら心遣いを示すアインズ様の慈悲深さに、アルベドは忠義と愛しさを爆発させる。
同時にそれを都合よく利用してしまうことへの罪悪感にも胸を痛めた。
「デミウルゴスの要件はわかったが、アルベドの方は何の用だ？」
「いつもの定時報告にございます。さして火急を要することでもないので先にデミ

ウルゴスの件についてで話を済ませるべきと愚考します」
「わかった。ではデミウルゴス、修正したゲヘナの計画について元の計画書との共通点を含め最初から詳細に話してくれ」
「承知しました」
マタタビが加入するという話を聞いて、どうやら既にアインズ様は計画の根底自体が大きく変わっていることに気付いておられるようだ。
「行う作戦は基本的に当初の計画と大きく変わることはありません。
八本指と国王派閥を衝突させ、そこへ第三勢力の魔皇ヤルダバオト一行に王都を強襲させます。王国にヤルダバオトの悪名を広げさせ、聖王国で起こす事件への布石を作るのが狙いです」
「以前私が命じた『魔王計画』へと繋げるのだったな。
やはり先までの概要と大して変わらないようだが、しかし修正案というのだから何かが大きく変わったのだろう？」
「その通りにございます。
当初の計画におけるもう一つの狙いであった王都の資源の簒奪についてですが、

これは今回八本指を除く一般市民については対象外とします。
その理由こそ、修正したこの作戦における最大の目的であるマタタビ様の作戦参加に関わってくるのです」
「彼女の参加が最大の目的、か」
アルベドがママゴトと称し、デミウルゴスが最大の目的と豪語したマタタビの作戦参加。
元の作戦と修正案の違いを端的に言うなら、手段と目的の逆転というのが的確だろう。
「元のゲヘナ計画をマタタビ様の研修に利用させ、当初の狙いでありました資源獲得や魔王計画もあくまで副次的成果として扱います」
「う、む……なるほど。共同作戦の実践経験を踏まえ、あの性格難を解消させようというわけか」
本人が聞けばさぞ顔をしかめることだろうことを想像し、アルベドは内心苦笑いを零した。
一見――アルベド自身そうだったが――彼女のためだけに大それた作戦を用意す

るのは非常に馬鹿らしく思えるだろう。
だが先日の精神支配事件以降ナザリックでは、特に守護者の間で良くも悪くも彼女の重要度は変容した。
守護者すら圧倒する実力と、アインズ様の求心を受ける程と発覚した高い地位。一方でその求心を退けてしまう性格難。
一国を手中に収めるより彼女を御せることの方が遥かに重要。デミウルゴスはそう言ったが、付け加えるなら、一国を手中に収める程度なんて生易しいくらいマタタビは難攻不落で厄介だ。
だから決してデミウルゴスの行動は大袈裟ではない。
今や彼女の影響力は、ナザリック全体の方針を歪めてしまう程に凶悪なのである。
「はい、ですので善性の強い彼女の反感を買わぬよう、ヤルダバオトがもたらす王国への被害を極力抑える必要があるでしょう」
「デミウルゴスは、マタタビがナザリックに無関係な人間共が傷つくことを気にすると、そう思うのだな？」
意外そうなアインズの反応にデミウルゴスとアルベドは揃って冷や汗を垂らす。

アインズ様がその一点を見逃しているとはまるで予想がつかなかったからだ。

現行のナザリックにおける至上命令は世界征服である。

仮にアインズ様の征服欲とマタタビの善性が食い違ってしまったなら、最悪のシナリオが出来上がることは想像に難くない。それを回避するための保険としてパンドラズ・アクターと共謀し精神支配をかけているのだが、それで抑止する状況というのも長期的にみればあまり望ましくない。

ましてやそんな事情を知らないデミウルゴスの戦慄はアルベドの比ではないだろう。

「殺生自体に嫌悪を抱いてる訳ではなさそうなのですが、ナザリックの者で喩えるならばセバスが一番近いと思われます。

彼の場合は……例外もありますが……基本的にナザリックの利益を優先した行動がとれます。しかし忠誠心の無いマタタビ様でありますと修正前の計画ではやはり厳しいかと」

突っぱねられれば最悪今後、マタタビのメンタルケアという地獄のような工程を続ける必要があったのだが、幸いアインズ様はすんなりと受け入れてくれた。

揃って二人は胸をなでおろす。

「デミウルゴスが言うのならきっとそうなのだろう。であるなら今後の計画についても多少調整を入れる必要が出てくるか。

私としてはこの計画で推し進めるのも悪くはないと思っているが、アルベドは反対なのだったな？

ここまで話を聞いて、アルベドの意見はどうなのだ。是非聞かせてくれ」

扉前で繰り広げた諍いを気にしたアインズ様がアルベドにも意見を求めるのは必然的行動だ。

そしてこういった流れから出される意見への比重は、普通の反論よりやや高い。和を重んじられて慈悲深いアインズ様は、守護者同士でもなるべく円満に話が進んでほしいと考えておられるからだ。

究極的叡智を誇るアインズ様にはこのような小細工は無意味なのかもわからない。

ただアルベドは、やれるだけのことはやろうと思った。今後挑まなければならないであろう至高の存在を想って。

「僭越ながら正直に申し上げますと、反対です。
ナザリックへの収入が減ってしまう点も問題ですが、それ以上に不確定要素の強いマタタビを参加させるにはにリスクが大きいかと。
まして魔皇役のデミウルゴスがそのフォローを兼ねるとなると相当の負担になってしまいます。
そこで妥協点として、デミウルゴスの副官にパンドラズ・アクターを付けるのはいかがでしょうか？」
「パンドラズ・アクターをか？」
実際のところアルベド自身、作戦そのものには反対ではなかったのだが、同時にマタタビの抑止力となる彼も参加させたいと考えていた。
しかしアインズ様はパンドラズ・アクターを表舞台へ立たせることに何故か抵抗感が強い。今も強い動揺がアインズ様の中で巻き上がるのをアルベドは確かに読み取っている。
だから癇癪した振りをしてまで意見が通りやすいように仕向けたのだが、果たして受け入れられるかどうか。

心音の脈動がうるさく鼓膜を叩きつける。
やがて困ったように指骨の先で額を引っ掻き、アインズ様は諦めがついたようにけだるげに告げた。
「……うーむ仕方ない。パンドラズ・アクターをデミウルゴスへ預けよう。好きに使ってくれ」
「承知しました」
「要望のほど、聞き入れてくださり感謝します！」
「いやいいさ。とはいえアイツだけでは不安だからな。私もモモンとして王国に向かうとするか」
パンドラズ・アクターの加入とアインズ様直々のバックアップ。
想定以上の譲歩を頂くことが出来たというのに何故だろう。アルベドは何だか胸騒ぎを覚えた。

アインズ様がゲヘナに参加するよってだけの話なのにテンポ悪すぎ。全然話が進まない。

もっと軽いノリで救済とか虐殺とかサクサクやりたい

ｈａｍ ａｃｔｒｅｓｓ

更新遅れてごめんなさい

【至高の41人レビュー　byマタタビ】
No・5：アインズ・ウール・ゴウン
こいつ絶対頭おかしいよ！
『補足』
多少バイアスがあるとはいえ、知恵者のデミウルゴスや心情を丸覗き出来るアルベドすらも欺く技量は、もはや才能だけでは説明がつくものではない。周囲がもたらす期待感への異様なまでの執着が為せる業、とでも言うべきだろうか。
マタタビには決して持ちえないモノであり尊敬の念も抱いているが、本人の有り様はちょっと救いようがない。

◆◇◆

何て無駄な時間だったろう。

迂遠な旅路を経てようやく王都へたどり着いたナーベラル・ガンマは、ウンザリとした心地で守衛門を見上げた。

わざわざ冒険者組合のツテを利用して用意させた弱小魔法詠唱者二人組の〈浮遊板（フローティング・ボード）〉と〈飛行（フライ）〉による空の旅。

使い手が十数程度のレベルしかないこともあり、それはもはやナーベラルからすれば亀のような速度である。結局朝一でエ・ランテルを発ってから王都につくまで一時間もかかってしまった。

そもそもナーベラルが転移の魔法を使えば一瞬で済むことなのだが、そうしないのは長距離転移魔法の最低が第５位階からだったから。

何とも馬鹿らしいことに、第５位階はこの世界において逸脱者と恐れられる領域にあるらしい。突出し過ぎる能力を持つことを知られれば無用に警戒を煽ることになる、とは他ならぬアインズ様の言葉である。

とはいえ自身はまだしも至高の存在であるアインズ様の時間を潰させた無能さは万死に値するだろう。

万回殺してやるほどナーベラルも暇ではないので、下等な魔法詠唱者については軽く睨みつける程度で済ませてよしにする。

「……ご苦労様」

社交辞令としての最低限の労いも忘れない。少し前の自分なら罵声でも浴びせてやったかもしれないが、それは従者として主人の品格を貶めることに等しい。

多少は成長出来た実感があるがそれでも自分はまだまだだと思う。

「早朝に呼びつけて申し訳ない。だがおかげで単純な〈飛行（フライ）〉の運用とも違うなかなか趣のある旅であった

帰りがけに魔術組合長とザナックさんにもよろしく頼む。しばらくは王都に滞在するつもりだがそう長くはならないだろう」

僅かな労いを絞り出すのがやっとなナーベラルには、下等生物に対するアインズ様の寛大な対応はとても真似できたものではない。

支配者としての存在感を抑え、まるで同等な人間のようにしか見えない完璧な擬

態だ。演技力においても流石は至高の存在である。

気をよくした二人組が〈飛行(フライ)〉で折り返して帰っていくのを少しだけ振り返る。

やがてアインズ様と共に、守衛に組合長から預かった通行手形を差し出して門を通過し街中へと躍り出た。

比較的見知ったエ・ランテルと比べるとやや古臭い様式の街並みだが腐っても王都という肩書である。

朝一から多くの馬車や人々が行き交い石畳の無いむき出しの地面に埃を巻き上げている。

これから各々の仕事や用事に精を出そうとしている者たちだが、ひとたびアインズ様とナーベラルの姿を見かけると、我を忘れたように手足を止めて一斉に視線を向けた。

それはアダマンタイト製の全身鎧への驚嘆かもしれないし、尋常ならざる美貌への瞠目でもあるだろう。あるいは『漆黒』の名を聞き及んでいる者も中にはいるだろうか。ただその中に至高の存在への畏敬が無いことに苛立ちを感じる自分がいる。

しかしかつては煩わしくて堪らなかった衆目も無関心を割り切ればなんでもない。もはや慣れ切った光景だった。

路傍の砂利のごとき観衆を関さず、主人に追順して目的地に向けただ歩く。

そんな中ふと思い立って話しかけようとするが、寸出のところでモモン様と声かけしそうになるのを舌を噛んで堪えた。

「ところでモモンさん。以前より常々思っておりましたが、どうしてモモンさんはそれほどまでに卓越した演技力をお持ちなのでしょうか？」

「え、演技力!?　ロールプレイのことを既に……」

「？　申し訳ございません。無知な私（わたくし）にはろーるぷれい、とは何のことか心当たりがありません

ただ先ほどの人間たちへの御対応が実に見事でいらっしゃったものですので、如何様にすれば私（わたくし）もそのようできるのだろうかと思いまして」

すると会話に妙な間が生じた。

ひょっとして、たかが造物に過ぎぬナーベラル程度が御方の御業を真似するなどおこがましいということだろうか？

ならば直ちに撤回しようと思ったが、間も無くアインズ様は安堵を孕んだ朗らかな声で返した。

「……なるほど。ヒトとの対話のやり方について悩んでいるのだな？

だがナーベよ。突き詰めて言えば、お前に必要なのは演技力というより演じる意識だと私は思うぞ」

「意識、でしょうか？」

「そうだ。そもそもお前の礼儀正しさは私もよく分かっている。例えば私や守護者たちのような本当に敬意を向けるべき相手なら、お前もそれに相応しい対応が取れるだろう。

ただ逆に蔑視しているニンゲンには本心のまま辛辣になってしまうというだけだ。ナーベは正直過ぎるのだろうな」

その金言に目から鱗が落ちる心地を憶えると同時に、主人がナーベラルのことを日ごろから良く見ていてくださったことを実感させた。

辛(から)い指摘を受けたのだと分かっていても、その事実を前にして天に昇るような幸福感が沸きあがるのをナーベラルは抑えきれなかった。もし自身に尻尾があったら

ぶんぶん振れてることだろう。そんな心境だ。
だからこそすぐに夢見心地な感情を振り払い、改めて主人の言葉に全神経を集中させる。
「無論、お前が改善に取り組んでいることも知っている。
結局そうやって少しずつ本心を隠す意識に慣れていく他ないだろう。演じる技量についてはその先の話だ」
「尊き御言葉、我が魂に深く刻み込ませていただきます」
歩きながら跪くことは出来ないので、アインズ様の背面に向け胸に手を当て敬礼をする。
アインズ様は口をとんがらせながら軽く零した。
「まったく、ありふれた精神論だのに大袈裟だな。
ただナーベのことを色々言えたのは、お前によく似た正直者を知っていたからだ。お前ほど真面目でも礼儀正しくも無い奴だが。
……時々羨ましいよ」
「さ、左様でございましたか」

何か重要なことを言われた気がしたが、不意打ち気味に真面目などとの身に余る御評価を頂いたことによってナーベラルの思考は真っ白になった。

改めて、シモベの中でも最もアインズ様と接する時間が長い自分は、一体なんて幸せなのだろうと思う。

アルベド様に嫉妬されるのは仕方ないことではあるが、仮に譲れたとしても決してそうすることはないだろう。

しかしふと最近、アルベド様からの小うるさい『花嫁計画』の密命がすっかり途絶えていることを思い出し、ナーベラルは首を傾げた。

◆◇◆

ゲヘナにおけるマタタビの仕事の一つは、御目付け役であるパンドラズ・アクターと襲撃予定である八本指の拠点の事前調査をすることだった。

各場所の施設構造から、そこには誰が居てどのくらいの戦力や警備があるのか。機密書類の複写や奪う価値のある貴重なアイテムについてのリストアップや査定など。やってることはまるで引っ越し回収の段取り組みのようで、やっぱりなんだか異世界っていう感じがしない。

もっともいくら守護者みたいな過剰戦力を整えて来ようと、これほどの規模の施設の物品回収をぶっつけ本番で行おうとすれば必ずタイムロスが生まれるだろう。

引っ越しを一瞬で片づける魔法でもない限り、ファンタジーと現実の折り合いをつける役割は必要なのだ。

深夜０時から調査を開始して全８個所の調査を終えたのが朝７時くらい。リアルでも夜勤には慣れていたし夜行性のケット・シーにとってはなんでもない。

とはいえ面倒さは強いが。

「ぶっちゃけ私が全部襲撃と回収をしてしまえば半分の時間で終わるんだけど」

「たしかに大変不服ではありますが、マタタビ様の手法が優れていることは認めざるをえません。

物品回収の際に施設全体を覆いつくす範囲で〈保存〉の魔法をかけることによって、回収する物品を気兼ねなく乱雑に放り投げられますし施設そのものを傷つけずに済み、作業効率が飛躍的に上昇させられる。

ただその手腕の使いどころについては熟慮された方がよろしいでしょう。

娼館が神隠しのごとくもぬけの殻になった怪事件を処理しなければならないデミ

ウルゴス殿の苦労は計り知れません」
「……それは本当にごめんなさい」
「言う相手が間違っておられます」
「ですね、今度言ってきます」
　そこからパンドラズ・アクターと共に拠点にしていた宿屋へと戻って、今は防諜対策を揃えたリビングにて襲撃計画書を編集中。
　一方私の方は暇なのでパンドラズ・アクターが各施設ごとに査定した物品価格を計算機片手に集計中だ。
「ねぇアクターさん、調査はとっくに終わったんだからいい加減私の恰好のままでいるの止めてくれないですか？
　キモイんですけど」
「いつ何時誰かがこの場を覗き見ないとも限りません。人間国家に滞在する限り、この姿を取るのが最も合理的だと判断ただけのことです
　至高の御方ならともかく、マタタビ様からの命令を受け入れる義務はありませんので」

こいつは今、よりにもよって私の姿をコピーしながら計画書を執筆中なのだ。だから傍から見たらちょうど双子がテーブルを囲んでいるようで、実に奇妙な作業風景である。

自分の姿を見ること自体は影分身を多用していてむしろ慣れているが、同じ容姿でも中の人が違えばずいぶん印象が異なるようだ。いつもよく見る影分身の私がやかましい小娘ならば、アクターさんは淡々とした無表情系美少女である。

しかし、調査の時だったなら能力的に一番向いているマタタビに変身するのはまだわかる。同じ盗賊職の弐式炎雷でも良くねとか思わなくはなかったけれど。

でも情報対策を済ませた部屋でまで続けているとなると、どう考えても嫌がらせ以外の理由が思い浮かばない。というかコイツのイライラが私の方へとむけられてるのは感知したところ間違いないから絶対そうだ。

とはいえ正直わからなくもないが。

「ま、わざわざ私の為なんかに来てもらっちゃったのは申し訳なく思ってますよ」

「それも多分にありますが

ただ一言忠告させてもらえばマタタビ様、デミウルゴス殿にはお気をつけられた

方がよろしいと思いますよ」
「ん？」
少し意外な名前が出てきて、おやと思う。
アクターさんは紙上に走らせる羽ペンをピタリと止めてうつむいたまま細々と口を開いた。
「あれも存外欲求に忠実な男です。彼はあなたを相応しいと判断しただけに過ぎず、あなたに対する一個人的好意はそこまででもありません」
「知ってますそんくらい」
「やはり〈読心感知〉ですか。こうしてあなたの姿に変身してみると非常に厄介な能力だと実感できますね。術者本人にとってもですが」
「わかります？」
感情を読み取るこの能力の不便さにまさかの共感者が現れた。
能力自体をｏｆｆにできないので、ひとたび町中に繰り出せば町中目につく人々の感情がドカッと心の中に入り込んでくる。
その暴力的な情報量、もし人間だった時にこれが発動していたなら精神がやられ

ていたのは間違いない。異形種ケット・シーの精神構造により死ぬほどつらいというわけではないが、それでもやっぱり負荷は感じる。

そしてそれ以上に自分に向けられる感情をダイレクトに受け入れるというのが普通につらい。蔑視とか憎悪とかならまだマシで、この間王都へ繰り出したときなんかエロい視線で視姦されてナニコレどこのエロ同人な具合になった。あんのエロ貴族マジで去勢しろ。クライムさんはEDじゃないかと心配だけど。

「ただ別にデミウルゴスさんに関して言えば感知するまでもなくわかり切っていましたよ。

あの人私のことを気にかけていたのは違いないけど、私自身の意思についてはホントにどうでもよさそうでしたから」

主に、何度も嫁にはならんと否定してるのに全く気にかけてくれないところとか。

中途半端に似ているだけに、ウルベルトとの違いはむしろくっきり分かった。

「でしょうね。私情が欠けている統括殿とは違い、彼は忠義を尽くす存在を絶やさぬよう奔走しているだけなのですから」

「気に食わないんですね？」

「ええ。個人的な問題にはなりますが、彼とは最初に会った際の第一印象があまり良くなかったもので。

事情が事情とは言え、あの態度をとって今更手の平を返す厚かましさは少々目に余ります」

何があったというのやら、相当お気に召さないようで。

二人の製作者であるウルベルトとモモンガさんが仲が悪かったようには全く思えない。

だというのにＮＰＣ同士でこうしたギスギスが生まれるというのは非常に興味深いことである。

ただそのギスギスの元凶が私にあるのだとしたら笑い事では済まないけれど。

というそんな独白が耳に入っていたかの如くアクターさんは答えた。

「いえ全くマタタビ様がお気になさるべきことではありません。下手なご心配なさらぬようにお願いします」

「……さいですか」

なるほど多分これが読まれるという感じなのだろうか。やられてあまり良い気は

しない。

「正直私としてはデミウルゴス殿や統括殿の思惑には気乗りがしません。

ただ今回の作戦は許容できる範囲です。マタタビ様にとって必要なことでしょうし、なによりアインズ様も納得しておられますから」

アインズ様の云々という最近非常に聞きなれたフレーズで言い締めて、アクターさんは再び羊皮紙に筆を走らせ始めた。

「へぇしかし、デミウルゴスさんを私情と断じた手前、そんな親切な忠告を私にしてくれるあなたは一体何様のつもりですか？」

「私はアインズ様の御心に沿う者に他なりません。ただ敢えていま現在の私情を述べるとするならば、あなたのことは苦手です」

アインズ様の御心、か。それが一番わからないんだが、少なくともコイツに聞くのは色々と間違いだろうなと、私は思った。

聞くのが怖い、という気持ちの方が大きいけれど。

だって愛されてたら怖いじゃん。

だから私はアクターさんの慇懃な本音を快く聞き入れ、心の底から笑顔を浮かべ

て答えた。

「そりゃどうもありがとうございます。

あといい加減姿を戻せ、殴ru……あれ」

私は冗談で拳を模ったが、間も無く指先が痺れて一人でに掌が開かれる。

目の前の黒髪の少女はそれを、酷く凍えた眼差しで眺めていた。

考察と協力

先日アダマンタイト級に昇格したばかりで話題の冒険者チーム『漆黒』。アンデッド騒動から都市を救い強大な吸血鬼の片割れを滅ぼしたことで瞬く間に世間へ勇名を馳せた彼らの存在は、同じくアダマンタイト級冒険者チームである『蒼の薔薇』の面々にも当然届いていた。もっとも王都をホームグラウンドとする『蒼の薔薇』とエ・ランテルに拠点を置いている『漆黒』では顔を合わす機会なんて殆ど無いはずだったが、あくる日のこと『漆黒』から『蒼の薔薇』への面会の嘆願書が冒険者組合ヅテに送られてきた。

用件は会ってから話すらしいが、わざわざエ・ランテルから王都まで出向いてくれるというのだから、丁度予定が空いていた『蒼の薔薇』としても断る理由は特になかった。

場所は『蒼の薔薇』が拠点としている宿屋にある、会議室のような広い部屋。

自分らの拠点で客を待たせるわけにもいかないので、リーダーであるラキュース、ガガーランとそしてイビルアイは、待ち合わせ時間の少し前から待機していた。

そこへ甲高く素早いノックのが三回続けて叩かれたかと思うと、間髪入れずにドアが開かれティアとティナが遅れて到着する。
ラキュースは鷹揚と二人を出迎えた。
「お疲れ様ティア、ティナ。それで、頼んでいた『漆黒』についての情報収集はどうだったの？」
「時間が足りない」
「あまり詳しくはできなかった」
「ま、しょうがねぇよ。元々八本指の調査も並行していたところで、それでなくても今回の話が急だったわけだしな」
成果に対して不満げな双子をガガーランが宥めすかす。
面会の話が持ち込まれたのが昨日の夕方で今日の待ち合わせが午後過ぎなので、ガガーランの言う通り調査へ割ける時間が足りないのは仕方ないことだろう。
話によると『漆黒』は今朝早くにエ・ランテルを発って王都に向かったとのことで、妙に急いでいる様子であるらしいことは確かにラキュースも引っかかっていた。
「いつもだったら同じ冒険者相手に素性調査なんてやらなくてもよかったんだけど

ね。
　ただ私たちの存在が八本指にマークされてる可能性を考えると万が一ってこともあるから」
「だな。さすがに冒険者、しかもアダマンタイト級程の者と八本指に縁があるとは想像したくないが、真逆の例にあたる我々がその危険性を考慮しないのは実に愚かだ」
　イビルアイも皮肉を交えながらラキュースに同意した。
　真逆の例とはまさにイビルアイの言う通りで、八本指と敵対関係にある『蒼の薔薇』の立場も十分に例外中の例外。組合にばれればタダでは済まないのは言うまでもない。
　この現状は、王国の平和を願うラキュースのわがままをチームに押し付けてしまっているようなものなので、今更ながら申し訳なさが心の中に募っていく。
「みんな、ごめん。王国出身なのは私だけなのに」
「それこそ今更だぜラキュース。そもそもあんたが俺たちを巻き込まず一人で突っ走っていく方が、よっぽど不安で見てられねぇぜ」

「一理ある」
「むしろ真理では」
「ちょっとー！　私だって一人でそんな無謀なことはしな……しないわよ！　私一人の力じゃどうしようもなかったし、皆が居てくれたから立ち上がる決心ができたんだから」
それが弱がりなのか強がりなのか、ラキュースは自分で言っていて判別がつかなかった。顔を赤くするラキュースに対し、仲間たちはからかうように笑いかけた。
やがて、見た目に反しなんだかんだ最年長なイビルアイが乾いた手を叩き話を本筋へ戻そうとする。
「今日のところはそういうことにしてやるさ。時間もないし横道へそれるのは止めにして本題を進めよう。ティア、ティナ」
促され、二人は『漆黒』についての調査情報を説明した。
「『漆黒』のメンバーはリーダーで剣士のモモンと魔力系魔法詠唱者のナーベの僅か二人」
「二人の実力に匹敵するチームメンバーが揃わなかったらしい」

「調べて特に気にかかったのは二点。一つは二人の出身地が詳細不明であること」
「そして二つ目。故郷を滅ぼした強大な吸血鬼を追いかけ王国に流れ着いたということ」
視線は『国堕とし』ことイビルアイへと集中した。
「……誤解を誘発する言い方は止めろ。
知ってるぞ、その吸血鬼は二人組だしそもそも私の名が現役だった頃に人間種であるモモンが生まれていたわけがないだろう。
戦士では延命の秘術は使えないだろうしな」
「半分は冗談。もう半分はイビルアイがその吸血鬼について知ってるんじゃないか疑惑」
「モモンとその吸血鬼の勝負を決めたのは彼が持っていた第八位階を封じた魔封じの結晶なんだとか」
「威力は平原が半径一里に亘って砂漠に変質するほど壮絶だったらしい」
「何、第八位階だと？」
「そこまでくると神話レベルのお話ね……」

一般的に魔法詠唱者は第三位階まで習得すれば大成した者とされ、英雄の領域に踏み入ったラキュースとイビルアイですら第五位階までが限界だ。

つまりそれほど大層な魔力の込められた魔封じの結晶を持ち出さなければ滅ぼせなかった程に、その吸血鬼が強かったということになる。

不死である吸血鬼として悠久に時代を渡ってきたイビルアイならば何か知っているだろうか。

「いや、私に匹敵する程の吸血鬼の魔神には心当たりがないな。

ただ私の知識も完全ではないし戦いの現場を確認したわけではないので滅多なことは言えないのだが……

いくら第八位階魔法を行使しても、半径一里の平原を砂漠に変えることは不可能じゃないか？　そこまでくると神人か、もしくは神々の領域の話になってしまう」

「おいおい、神々って六大神とか八欲王のことだろ？　話が大きすぎてついてけねぇぜ」

「……ああすまない。証拠もない憶測だけの話だったな。

ただまぁ素性の怪しい冒険者なんて腐るほどいるだろう。かく言う我々がそう

だ」

暗殺集団首領、完全不明、そして国墜とし。

このメンツを考えれば確かに、素性がどうこうと問いただすのは馬鹿らしかった。

大事なのは今である。

その点エ・ランテルでの『漆黒』の評判は、アダマンタイト級としても決して悪くはない。

むしろ最高の部類に入るだろう。力を持ちながらも奢らず、誰彼とも平等に接する人格者だ。

それならば、とラキュースは淡い願望を思い浮かべ、意識の外から口が動いた。

「あわよくば王国の闇との戦いに協力してくれないかなー」

「無いな」

「鬼バカなボス」

「鬼ボスはバカ」

「いくらなんでもそりゃねーだろ」

◆

用心として軽く調査はしたものの八本指との直接関係が見えてこない以上、最終的に、冒険者が犯罪組織と積極的に関わることは無いんじゃないという結論に全員で落ち着いた。

のだが、展開はラキュースたちの予想の斜め上方向へと転がった。

あの後『漆黒』の二人が部屋へ訪れ、同性愛者のティナがナーベのあまりの美貌に硬直しかけたのだが放置。

各チーム軽く自己紹介を済ませてから戦士モモンがとんでもない切り出しをかました。

「本日『蒼の薔薇』の方々に伺いたかったのは、秘密結社ズーラーノーンについての情報です」

ズーラーノーンと言えば、邪悪な魔法詠唱者たちによって組織された国際的犯罪組織だ。

各地で非合法な宗教活動やテロ行為を働き悪行を重ねている連中であるが、当然冒険者がちょっかいを出していい相手ではない。

「失礼ですが、我々にその件についてで尋ねてくるのは的外れですよ。犯罪組織への介入は冒険者の規約に反していますし」
我ながらどの口で言ってるのだろうという心の声を無視して答える。
が、横にいたティナとティアが唸ってラキュースとモモンを交互に睨んだ。
「鬼ボス鈍い。彼はティアたちの実家稼業を知っている」
「ズーラーノーンはイジャニーヤのお得意先だった」
「そういうことです。身内に情報通がいましてね」
説明されてようやくラキュースも合点がいった。
ティアとティナは暗殺集団イジャニーヤの関係者だ。その縁を調べ上げて利用しようとするとは、偉丈夫な風体でありながら周到さも持ち合わせているようだ。
理由については出来れば内密にしていただきたいのですが――　と前置きをして彼は自らの事情を明かす。
「先日私は自身が長年追いかけていたとある吸血鬼の片割れをようやく始末しました。
ここまではいいのですが、偶然にも彼女の目撃情報が送り込まれたのが、エ・ラ

ンテルで発生したズーラーノーン首謀のアンデッド騒動の解決直後だったのです

当時は二者の関連性は皆無だと考えていたのですが、時が経つに連れ妙な予感めいた考えが浮かびましてね。

どんな些細な情報でも報酬や協力は惜しみません。ティナさん、ティアさん。お二人からズーラーノーンついてで知っていること教えていただけないでしょうか」

切羽詰まっていることが伝わる破格の申し出だ。

ズーラーノーンを相手取ることに躊躇しない彼の意識を鑑みるに、この話をダシに対八本指への協力を要請しても受託してくれそうではあった。

しかし話が双子の実家であるイジャニーヤに関わってくるのであれば、これは彼女たちの問題だ。他人がどうこう言えるものではなし、ましてや組織から二人を引き抜いたラキュースでは尚のことだった。

「イジャニーヤとは縁を切った」

「その手前、重要な顧客情報を暴露するのは仁義に反する」

「だから話せない」

二人は顔を見合わせるまでもなく一心を二体で共有し毅然と答えた。

横のナーベがわずかに眉間を揺らしたがそれ以上の反感は示さずあっさりと引き下がった。

「なら仕方ありません。顧客情報の重要性は我々もよく理解しているつもりですから」

「ほぉん、わざわざ王都まで訪ねてくれたっていうのにやけに物分かりがいいんだな」

ガガーランは半分関心半分怪訝といった様子だ。

「ダメなら他を当たるまで。これでも尽くせる手は尽くすつもりです。ひょっとしたら八本指にでも打ち当たってみれば手がかりが掴めるかもしれませんし、あるいは――」

「ちょっと待ってください！」

最終的にラキュースからの誘いで、モモンとナーベは『蒼の薔薇』と一緒に対八本指への共同戦線を張ることとなった。

◆◇◆

『蒼の薔薇』との面会を済ませてから取った宿屋の部屋にてアインズは内心胸をなでおろした。

うまくいって本当に良かったと。

アインズの本当の目的は、対八本指の勢力の中に参加することだったのだ。ズーラーノーンについてはあくまで話の出汁にしただけに過ぎず、そっちの方はマタタビに任せてしまっているからどうでもいい。

アインズがナーベラルとともに王都へ訪れたことを含め、これら全ての目的は言うまでもなくデミウルゴスが企画したゲヘナ計画である。

この作戦におけるアインズことモモンの役割は、魔皇ヤルダバオトが大量の悪魔を引き連れ王都を襲撃した際にそれを食い止め追い払う、マッチポンプの火消し役だ。

その前段階として、冒険者チーム『蒼の薔薇』が執り行う犯罪シンジケート八本指への襲撃に参加する必要があった。

理由は、この作戦において、１００レベルであるヤルダバオトとモモンの強さを

立証する現地の存在が欠かせないからだ。セバスの調査によると王都において唯一それが可能なのが『蒼の薔薇』に所属する魔法詠唱者イビルアイのみだという。

なので八本指への強襲作戦に遭遇する形でヤルダバオトを登場させ、彼女をモモンとヤルダバオトの戦いに立ち会わせる手筈と相成った。

元々（マタタビというより）パンドラズ・アクターのことが不安だったからゲヘナに首を突っ込んだアインズにとっては、自分のためにデミウルゴスが立ててくれた修正案に文句を言う筋合いはない。

とはいえさも簡単そうに、「不自然なく八本指襲撃に参加していただきさえすれば、襲撃配置の調整はこちらでやっておきますので」などと雑にアドリブを求められると、非才の身であるアインズとしてはすごく困る。

冒険者組合にすら内密にして水面下で行っている『蒼の薔薇』の工作活動に不自然なく介入するなんて容易ではない。

不自然性を排除するには絶対に『蒼の薔薇』側から誘う形にしなければならなかったから、思考誘導などという慣れない分野に当時のアインズはひどく悩まされ

たものだった。

なんとかズーラーノーンや吸血鬼設定を出汁にして引き込んでもらえたが、どこで襤褸が出るかわからないのが怖い。

きっとデミウルゴスからしてみればなんてことない根回しであり、完璧な主人に対してそれを手伝うのは若年に排泄の世話をするレベルの不敬な御節介なのだろう。ただ、計画に横やりを入れたことからのエチケットと解釈すれば納得せざるをえない気もした。

マタタビからは「愛想つかされた」なぞ言われているが、最近アルベドからの視線が冷たくなっている節がある。

先日の苦言や今回のパンドラズ・アクター派遣を含め反対意見をもらえる点は嬉しかったが、最初の羨望からの落差に対して思った以上にアインズは堪えていた。

有能ぶる無能ほど愚かな奴は居ないだろう。

わかっている。わかっているが、それでも未だ残る期待の重圧に耐えかねて水のように軟弱なアインズの理性は下へ下へと落ちていくのだった。

原作ではレエブン公がこっそり依頼して王都に連れてこられたアインズ様。本人はホウレンソウ言ってるけど、依頼された時点ではデミウルゴスに報告してなかった模様。でもなんだかんだ豪運チートで解決しちゃうアインズ様が大好きです。

何もしなくても自然に介入できたと知るわけがない当SSのアインズ様は何とか自力で襲撃に参加。なおイビルアイからモモンにプレイヤー疑惑がほんのりかかりました。

真相は知ってるくせに「愛想つかされた」なんて半端な助言未満を投げつけ更に行き違いを深める無能マタタビ。本人的にはどうすりゃいいのかわからなくて半ば匙を投げてる。なお諦め切ってはいない模様。王国編ではまだこいつの株が下がり続ける

誤字脱字批判なんでもお待ちしております

戦士長宅訪問

・今SSのガゼフ

原作ではデスナイトと戦ったりニグンに殺されかけたりとか色々あったわけだけど

このSSでは、カルネ村を救済直後のアインズ一行と居合わせるも、オリ主の影分身(レベル25)と手合わせしてそのまま帰還しただけ。陽光聖典も秘密裏に抹殺されてしまったので遭遇しない。オリ主への好感度はそこそこあるが、アインズとの相互認識はすごく薄い。

アインズ「レベル30とかザッコ」⇔ガゼフ「怪しい魔法詠唱者。村救ってたし多分いい人」

原作における様々なフラグが(主にオリ主によって)粉砕済みですありがとうございました

「砂で作られた城にどれだけ丹精込めようとも、やはり足蹴のもとに容易く蹴散らされる宿命にある。それと同じだ。
大いなる力を持って生まれた超越者からすれば、これまで俺たちがやっていたのはガキのチャンバラと大差なかった。何もかも無駄だったんだよ」
「一体何があったというのだアングラウス。お前ほどの男が何故そこまで落ちぶれた！」
「……ハハッ、怒ったな？　そうだそれでこそ俺を倒したガゼフ・ストロノーフだ
王国最強が己が剣を愚弄されたなら、決して平静であってはならない」
「違う！　俺が何より怒っているのは今のお前がかつての自身を裏切ったことだ！
だからこそ再三問う。何があった」
「……ダメだ。その自信と輝きに満ちた眼が俺に悟らせる。今のお前が聞いたところで大した意味はないだろう。
じゃあな、お前は……夢から覚めてくれるなよ」

「待てっ！　待つんだアングラウス！」

◆◇◆

完徹ぶっ通しで行われたゲヘナ計画の下準備が終わった頃にはお天道様もすっかり高く昇り切っていた。

収入会計も終わらせたことだし、作戦計画の詳細手順書を執筆していたアクターさんの横で私はソファーにて惰眠を貪っていたが、彼の仕事がお開きとなったのを聞き取って伸びをしながらゆっくり起き上がる。

リアルの頃からもっぱらショートスリーパーだったので３～４時間ほど眠れれば十二分にリラックスできた。

手串で髪を軽く直し眼鏡をかけてから、自分と瓜二つの顔をしたドッペル・ゲンガーに声をかける。

「アクターさん。ゲヘナの下調べも終わったことですし暇ですよね。

前から王都で会いに行きたかった人がいたんですけど、付いて来てもらえませんか」

仕事終わりの彼をすぐさま連れまわすのは気が引けたが、アインズ様から私のお目付け役を任せられた彼を気遣うのは最悪の侮辱になる。一人で行くのが一番良かったが、そういうわけにもいかなかった。

「その方の名前は？」

「ガゼフ・ストロノーフさんです。かなり前にカルネ村で面識があったんですけど、王都に来たんだから一応会っておきたくて」

「王国戦士長ですね。秘密裏に王城へ侵入するなどの行為は看過できませんが、本人の邸宅への訪問でしたら問題ありません」

「べ、べつに不法侵入とかするつもり無いよ？　勘違いしないでよね！」

めちゃくちゃつもりあった。勘違いなんてなかった。

というわけでいざガゼフ邸へ。

隠形状態のアクターさんを背後に引き連れ、私自身もおとといた大失敗をやらかした反省で今日は認識阻害を使って衆目からスルーされている。

屋根伝いにひょいひょい飛んで行けばあっという間に着くわけだけど、それだと

なんか味気ないから歩いてる。地図は、慣れない色目を使って酒場のおっちゃん数名から聴取したメモ頼り。心もとない気もしたが、間違いもまた旅の醍醐味だと内心言い訳する。

互いに隠形状態なので周囲の目を気にする必要もなく、私たちは下らない話を始めた。

本当に、くだらない話だ。

「そういえばあなたもアルベドさんから聞いてるの？　至高のオン方々の実態って」

「存じております」

話題にされただけでも動揺すると思っていたが、存外淡々とラリーが返された。

気まぐれに投石を試んだ水面はその実氷塊だった。

そしてようやく自身のデリカシーの無さに気付いたが、そんなもの糞ほどの価値もないと開き直る。今更過ぎるのだ。

「えーっと……感想とかないの？」

「事実であるとすればという但し書きが付きますが、まったくもって虚しい真相に

違いないでしょう。
アインズ様が愛されるギルド：アインズ・ウール・ゴウンの集いは既に崩壊していたなどと。
至高の方々の心はとうの昔よりナザリック地下大墳墓から離れていて、あるいは万が一ご帰還なられたとしても敵対する可能性すらある。
かの実態をひた隠しにされておられたアインズ様の御心を思えばこそ我が無力さが恨めしく、それを公開するマタタビ様の神経の在処が疑わしくもその軽率さに感謝を覚える己を感じます」
「軽率か。あなたの私への毒を絶やさない一貫性はいっそ清々しいね。嫌いじゃないですよ」
「冗談ではなく、軽々しく口にする事実ではないと言っているのです。
もしアルベド様が自棄を起こしこの真実を他の者へと漏らせば、最悪ナザリック全体に狂乱が舞い起こるに違いありません」
情報は時としていかなる武具にも勝るが如くだ。
確かに他ＮＰＣがこのことを知れば、ユグドラシル防衛力序列第一位のナザリッ

クが容易く内部崩壊する未来はバカな私でも予想がつく。
とはいえ私も考え無しにアレコレ言いふらしたわけではない。
「アルベドさんも薄々勘付いてたっぽいよ。なら遅かれ早かれ。曖昧で半端な認識のままよりは振り切っていた方がまだマシです」
私はアルベドさんから最終日にタブラからどんな扱いを受けたのか直接聞いていたのだが、ＮＰＣの転移前の認識と言うのは曖昧模糊とした側面が強い。特に直後で設定改変が行われた彼女なら尚のことだろう。
根拠に乏しい憎悪の感情は危うい。だから真実を告げたに過ぎなかった。
「それに、これでも私は信頼しているんだよ。アクターさんもアルベドさんも、たとえ本当のことを知ったところでアインズ様に不利益になるような真似はしないだろうって」
「其処を突かれると痛いですね。やはりマタタビ様は一筋縄ではいかない方だ。
元はただ一つの忠誠心。それがあなたの言葉によって、御方の意に沿うものでろうとする意志と、御方の不幸を排したい願いに背反させられる。
魂を弄ぶ技術においてあなた様の右に並ぶものはなく、あらゆる知性は心裏を射

抜くその感性を前に為す術がないでしょう」

訳：揚げ足取りだけは超一流だね☆

「……やかましいです」

「では改めて確認しますが、万が一アインズ様に不利益をもたらす至高の存在が現れた場合、マタタビ様は抹殺の協力、あるいは少なくとも容認をなされるということでよろしいですね？」

「あーうんそうだね。二人と同じく消極的賛成ってことで。万が一ギルドメンバー同士が対立したなら、さすがに私もアインズ様の方につく。

思い浮かべるだけで怖気走るけど」

◆

王国戦士長がどのくらいエライのかはよく知らんけど、かつての私じゃあるまいし少なくとも平日の真昼間から暇になったりするものか。だから王城に直接乗り込みたかったわけだけど、アクターさんに釘を刺されてしまったからには仕方がない。

まぁ別にそこまでガゼフさんに思い入れがあるわけでもないので会えなかった

ならそれはそれで。家人に適当に言付けしつつ、創造主のブロマイドと交換でピッキーさんから買い上げたワイン瓶を置き土産しとけばよかろうという腹積もりだった。

メモ通りに進んでいくと、住宅街の合間にそびえるそこそこ大きな二階建てのお屋敷へと辿り着く。デスナイトくらいの背丈の塀に囲まれており、鉄格子の門扉の奥には花らや樹木やらが小奇麗に手入れされた中庭。その更に奥には玄関口。多分ガゼフ邸。門扉の表札らしき文字を盗賊スキルで読解したところガゼフ・ストロノーフで間違いないようだった。

おっさん共曰く屋根に刀剣ぶっ立ててるという話だったが、その辺は酔っ払いだからということで目を瞑り場所が合ってることにただ感謝。

どうせ本人はおるまいと思いつつダメ元で索敵スキルを起動させて屋敷の気配を探ったところ、いつぞや感じ取った30レベル弱の気配が嗅ぎ取られた。

アクターさんを背後に忍ばせたまま私だけ隠形を解除するも、格子に手をかけとある事実に途方に暮れる。

「インターフォンが無いや。この時代のヒトってどうしてたんだろ？」

「この形状の扉の場合、格子に付属してる金属製のリングを叩くのです」
「えっと……こういうこと？」
アクターさんの助言に従い門扉のわっかをコンコン叩いてみる。えらく原始的なチャイムだがこんなので家人が気付くものかと訝しんでいたところ、間もなく遠まきに「はぁい、お待ちくださいませ」としわがれた女声が響いた。
ささやかな関心を抱きながら待ち受けていると奥の玄関から柔和そうな白髪の老女が現れた。
老女は駆けつけて敷地へいざなうように門扉を開く。
「あんらまぁエライ別嬪さんだことぉ。わずわざ尋ねに来てもらって悪いけんど、今ぁガゼフさん寝ず番の護衛勤め帰りなんでさぁ。出来れば後日出直してくんねぇか？」
「夜勤上がりか～それなら無理して起こしてもらわなくてもいいですよ。
ガゼフさんとは以前少しだけご縁がありましてね。所要で王都に立ち寄った折のついでに寄ろうと思っていただけですのでお気になさらず。
カルネ村の……マタタビ……いや、マタタビ・ウール・ゴウンと言えば多分わ

かってくださると思うのですが……」

所詮、カルネ村でたまたま遭遇し軽く手合わせしただけの仲だ。

でもそれだと印象薄いかなーと、いつぞやの偽親子設定を引きずってみたものの、それが背後でスタンド化してるアクターさんには特大級の地雷であると気付いた時にはもう遅い。とりあえず後で事情を聞かせてやるとして、背後から耳打ちするドイツ語の呪詛はシカトを決め込む他にない。

私は肩掛けしていた長いきんちゃく袋から一升瓶を抜き取り差し出した。

「えーっとこれウチで醸造していた葡萄酒です。味は保証しますんで良ければどうぞ」

「はーいよ。ありがとねぇ」

「……おぉ、こんな時間に誰が訪ねてきたかと思えば、ゴウン殿のところのお嬢さんじゃないか」

背後からの野太い声で老女がたまげたように振り返り、普段着っぽい装いのガゼフさんへ苦言を示す。

「あらやだ。だーめだよぉガゼフさん。まだ寝てなきゃ」

「どうもお久しぶりですガゼフさん。覚えててくださったんですね」
夜勤明けと言うのは確かなようで、動作は緩やかで瞼も若干釣り下がっている。頭髪が不規則に跳ね上がっているところを見ると、チャイムの音で目覚めて寝床から起き上がってしまったのか。
「まあったくガゼフさんったら、お酒の話になると勘付いて飛び起きちまうんだから意地汚いったらありゃあしないよぉ。
嬢ちゃんもありがとねぇ。でもこのワインもまたこっそり飲まれねぇように隠しとかねとなぁ」
「……ハハハ」
土産が取り上げられ苦笑いするガゼフさん。家人と主人の微笑ましい力関係がそこにはあった。
「奥さん、寝るのはもう大丈夫さ。どうせあと1、2時間くらいだったしな。
それよりせっかく珍しい客人が来たんだ。私は顔を洗ってくるから、奥さんは茶でも出してくれないか？」

◆

主人に女気がないと見るや、側仕えが余計なお節介を働くのはどこでもあることらしい。

老女曰く、ガゼフ邸へ若い女性が尋ねることは殆ど無いそうで、まして自分で言うのもアレだが今の私は美少女だ。確かこの世界の女性の婚期が16からで、この外装の私がドンピシャである。

ガゼフさんが寝間着から着替えてる間に、私は居間へと連れてかれて「ガゼフさんとはどんな風に出会ったのか」とか「けっこいい男じゃろ？」とか「馬鹿に生真面目なくせ女には弱いんじゃ」とかあれこれ聞かれ聞かされウザいことウザいこと。文字通り老婆心もいいところである。可哀そうだから機会があればエンリさんあたりでも紹介してやろうかしら？

それで何が一番嫌だったって、着替え終わって部屋に入ろうとしたガゼフさんが扉越しに老女のマシンガンスピーキングを耳に入れ、しばし入りづらそうに悶々としていたあの時間である。この時ばかりは自身の感知能力が恨めしくてたまらなかった。

老女の押しつけがましさとガゼフさんの情けなさに耐えかねて虚言を吐いた。
「ワタクシ、幼き頃より唯一人心に決めた殿方がオリマスノ」
待ってましたと言わんばかりに、その言葉を契機にガゼフが入室。
老女は『虚言である』ということだけを見抜き、照れ隠しと勝手に解釈して「ごゆっくり」と言い残し退場した。
「その……うちの者がとんだご無礼を働いてしまった。申し訳ない」
「いいですよこんくらい。おかげで気兼ねなく茶菓子を食べつくせます」
「ハハ、そうだな。大した名売れじゃないがこれでも王都の名物品だ。私は甘いものが好きじゃないから遠慮せず食べてくれ。」
私は卓上の中心に置かれた木皿を自分のところに引き寄せ、クッキー的な見た目のお菓子をつまんで口元に運んだ。サクサクとしたミルク風味の甘さを味わい、紅茶の香ばしさで乾いた後味を押し流す。
「……」
普通に美味しい。普通においしいのだけれど、普段ナザリックで出されている甘味類を思い出すとどうにも色あせてしまって仕方ない。

「失礼、お気に召さなかったかな？」
「いや、あなたは悪くない」
何が悲しくて外食の度にあの味をリメンバーされにゃならんのか。　さながら地の底より伸びる魔手に胃袋を鷲掴みされたかのような……ヨモツヘグイかな？
苛立った腹にまたクッキーを放り込んで気を紛らわせる。
「しばらく久しいがマタタビ嬢のご両親のアルベド殿とアインズ殿は今どうしておられる。
君程の使い手を育て上げた御二方となれば相当な腕利きなのであろう。帝国などの国家組織にでも与していたりしたなら少々厄介なのだが」
『ご両親』と言うパワーワードによって背後の大賢者アクターさんが内心大発狂とIQ大暴落真っ逆さま。
ったくうるさいなぁアルベドさんに言えっての。
それはそれとしてガゼフさんも思い切ったことを聴くものだ。
「だいじょうぶですよ。私も大概そうだけど、二人ともどこかの下につくような柄じゃないし。

んで私は今ちょっと王都にお使いをしてまして。ズーラーノーンって組織をご存知です？」
「随分物騒な名が出てきたな。ああ知っているとも、私もかつて渡り合ったことがあるぞ」
「おや奇遇。こっちは私じゃなくてアインズ様なんですけど、詳しいことは明かせませんがその12高弟関連でイザコザありまして。
各地を回って手掛かりを探しているのです。情報料は惜しみませんので、どうか知ってること教えてくれませんか？」
「いや、どうせろくでもない連中だし報酬なんか気にしないでくれ。かつてカッツェ平野にアンデッド狩りで遠征へ向かった時、ズーラーノーンの12高弟の一人名乗る魔法詠唱者と遭遇したことがあった。
その時は〈飛行/フライ〉を使われ逃してしまったのだが、どうにも私はあの周辺に連中の拠点があるのではないかと踏んでいる」
「カッツェ平野って結構危ない場所って聞きましたけど、そんなところに？」
「ああ消え方が不自然でな。そのあとかなり大規模に平野を捜索したのだが、逃げ

た痕跡すらなかった。
　連中のことだ、アンデッドの気配が濃いところに居を構えていても全く不思議ではない」
「……へぇ」
　レンジャーとかではない戦士のガゼフさんの言い分はちょっとアテにならないようにも思うが、念のためメモ帳にカッツェ平野と書き記す。
「あとこれは貴族の間での噂らしいが、隣国の帝国貴族とも癒着しているという話だ」
　ふむふむ帝国貴族っと。
「ですかですか、貴重な情報どうもありがとうございます」
「この程度何でもないさ……ふぅ。おっと失礼」
　話し終えたガゼフさんは、やっぱり夜勤明けだからか眠たそうにあくびをかみ殺した。
「夜勤、結構生活リズム狂いますよね。わかります」
「正直苦手だな。とはいえ国王の安全を考えれば毎晩だってしたいくらいだ。いつ

暗殺者に命を狙われるかも限らないのだから。
　しかし自慢じゃないのだが、王国の戦士には私以外に碌な手練れがいない。これが帝国の四騎士のようであったらある程度時間分け出来るのだがな」
「たーいへーんですねー。でも冒険者とか含めれば王国も結構粒ぞろいな気もしますがね。むしろ人材層だけで見れば周辺諸国でも屈指です。
『蒼薔薇』も『朱の雫』も、各リーダーが騎士位を会得可能な貴族出身ってところからして国家体質が見え透いてますよ」
「ほぅ、痛いところを突いてくる」
「法国の知り合いの受け売りです。特に宮仕えなんて人材殺しもいいところだって」
「随分辛辣なのだな、その知り合いというのは。まぁまったくその通りなのだが」
　辛辣どころかあなたを殺そうとしたのだけれどね、ソイツ。
「というわけで私は宮仕え勧誘パスしますから」
「ハハハ、誘う前に断られてしまってはしようが無いな。……きっとアイツも立ち直ってくれたところで、共に王の為に尽くすというのは難しかったろう」
　アイツ誰それ？　突然振られて傷心の乙女みたいなツラになるガゼフさん。

「ああ突然すまない。君の雰囲気が少しだけ知り合いに似ていてな。アングラウスという男なんだ」

異性に似てるって言われるのはちょい複雑。クライムさんの気持ちが今更ちょっとわかった気がする。

「アングラウス？」

すると背後のアクターさんが背中をつつき耳打ちをする。

『先日シャルティア嬢が逃した剣士の名前です』

ああそう思い出した。当時私の大失敗が炸裂して有耶無耶になりかけたけどそんな話もあったなぁ。

生還したシャルティアさんが報告していたその人間の名前は、一応シャルティアの情報を持っているからということで現在ナザリック中で指名手配されている。

「……ちょっとガゼフさんその人詳しく」

「興味を持ってくれるのはいいが、大した話じゃないぞ？」

「ヤツは３年前俺が王国戦士長の地位を賜るきっかけとなった大会の決勝で渡り合った、俺の生涯で出会った最高の剣士だ。いや、だった。

風の噂で各地を放浪しつつ武者修行していると聞いていたが、先日死人のような目で路地裏にへたり込んでいた奴と再会した。私は放っておけず自宅に連れて介抱し、事情を聴こうとしたのだが。

しかし一向に口を開かずそのまま姿を消してしまったのだ。どうだ、つまらん話だろう」

「つまり再開したライバルが急に落ちぶれていてガッカリな話ってことか。ねぇ、本当に彼からは何も聞かなかったの？」

「努力が無駄だと言っていた。事情は分からんが、まるで何か強大な者と衝突し挫折したようだったな。

しかしマタタビ嬢。その様子、何か心当たりがあるのか？」

ああくそ顔に出ていたか。関係をほのめかすだけでも面倒なことになるというのに。自分の演技力の無さが腹立たしい。

すると突然背後のアクターさんが私の頭を掴んで首を後ろ向きに向かせると、私の声で言った。

「……いえ、ただアングラウス殿のファンだったもので。まさかあの方がそのよう

なことになっておられるとは」
「そうか、道理で剣気が……
良い語らいができた、今日はこのくらいにするか。今度訪れてくれたら、アングラウスの話でもしてやろう。ご両親にもよろしく」
私は頭を押さえる手を振り払い、答える。
「はい。あの、今日は本当にありがとうございました
やはり色々お世話になりましたし、ガゼフさんに受け取ってもらいたいものがあるのです」
背中に手をまわしてこっそりアイテムボックスを開き、シンプルデザインな一振りのブロードソードを取り出した。
どこから出したのかと怪訝そうにするのも一瞬、鞘を被った剣を一目見てガゼフさんは硬直する。
「なんという！　こんな魔力、王国の国宝すら凌駕しかねない代物じゃないか！
いけないぞマタタビ嬢、これほどの物は受け取れない。とても自分の身の丈に合ったものとは思えない」

「すぐ断るあたりいい性格してますね。でも、身の丈に合ってないと言えばこの間のガゼフさんの装備も大概じゃないですか。

ランクは伝説級ですが、低レベルの戦士職でも装備できるように造られています。私にはあんまり必要ないものですしどうぞ受け取ってください」

「いや、しかし」

「ちょっと今むしゃくしゃしてるんです。

私の気が向いたら返してもらいますから、それまで持っておいてください」

あまりに抵抗が強いのでレベル40程に調整した殺意をぶつける。一瞬面喰ったガゼフさんに畳みかけるように剣を押し付けた。

「……わかった、そういうことなら」

ああ糞。なにがそういうことならだ。威圧して言わせるような真似して何様だ糞野郎。

こんな下らない施しなんて偽善にもならない、醜悪な自己満足未満の何かだ。

「ほんと、ごめんなさいね。じゃあ失礼します。本当に今日は重ね重ね、ありがとうございました」

◆

今にも魂が零れ落ちてしまいそうなポカンと開かれた口元。頬や眉間の筋肉が全く弛緩している一方で、眼球運動だけが残った意識を感じさせる。しかし微かに視線を送り出そうとする瞳孔に反し、やる気のない瞼が黒目を遮る怠慢さ。きっと焦点もあっていない。

死人の顔というのは言い過ぎだが、その虚ろな瞳孔の奥に望む絶望の海は覗こうとすれば引きずり込まれそうで質が悪い。死人の顔を見ていた方がまだマシだ。

彼を探すのにはそう時間はかからなかった。

ガゼフさんと拮抗しそうな30レベル弱の気配を王都中で探し回り、ガングロ禿のモンク爺の次に見つかった。

ガゼフさんの介抱も虚しく、私が見つけた時には結局いつぞやのごとく路地裏に力なくへたり込んでおりました。

あまり長い問答にしたくないな、と思った。
ただ何と言ってやろうかわからなくて、結局気の向くままに煩わしい舌を回し口を滑らせることにする。
「シャルティアさんから逃げおおせ、遠路はるばる王都までの旅本当にご苦労様でした。
初めましてブレイン・アングラウスさん。私の名前はマタタビで、ご察しの通りシャルティアさんの関係者です」
いけしゃあしゃあと上から目線で何様か。
しかし戯言に腹を立てる程の気力もない彼は、投げやりなドッジボールを返球する。
「俺は、死ぬのか？」
「ほぼその通り。恐縮ながらこちらの事情で生かして返すことはできません。
ただあなたの口の堅さとガゼフ・ストロノーフに免じて、出来る限りお望みに沿う形にするようこちらも努めさせていただきます。
あなたに与えられた選択肢は３つ。

ここでこのままゆっくり野垂れ死ぬか、私に優しく介錯されるか、それともシャルティアさんの眷属となって悠久の従属を誓うか。

個人的には２番目あたりがお勧めですよ。これでも私腕に自信はあるので、安楽な即死を約束できます」

「……なんでもいい、勝手にしろ、もう疲れた」

「そうですかそうですか。となると個人的には一番お勧めできない選択肢になっちゃうんですがね～いいですね？　はいわかりました。

ではではシャルティアさんいらっしゃい」

手を挙げパチンと指を鳴らすと、私の右隣りの空間が歪みやがて黒い孔となる。

孔から優雅な足取りでもって現れるのは、文字通りこの世のものではない美貌の少女。満月のように透き通った銀髪と血のように赤い瞳、基調となる紫に赤いフリルの付属するゴシックドレスを身を包み、同色のフリルをあしらったパラソルを肩にかけて気まぐれに回す。

そしてこの世のありとあらゆる者を見下したような凍えた笑みと、そこからはみ出すように輝く白い八重歯が彼女を何者か雄弁に言い表していた。

「茶番は終わったでありんすね？　マタタビ」
「茶番とは言ってくれますね。リザードマンを押さえた今じゃ武技使いとしての需要はこの人にもないし、精々問題になったのはあなたとの面識くらいでしょ？
だったら私がやりたいようにやるのは道理だよ」
「いえいえ、コレのことは私も本当に感謝してるでありんすよ？　なんだかんだと尻拭いさせてばかりでお前には本当に頭が上がらないでありんすから。
ただお前の言う「やりたいように」がコレにとっての「やりたいように」だったならこうなることは自明の理。ちょっと黒歴史ではありんすが……過去、コレには無駄にいたぶり過ぎたでありんすしね」
「……あっそ。じゃあとっととやっちゃってよ」
「そうでありんすね。ではニンゲンよ、感謝なさい。
おまえはこれからシャルティア・ブラッドフォールンの眷属となり、ナザリックのために仕えることが許されるようになる。
精々足りないなりに、血を尽くし肉を尽くし魂を尽くして至高の方の大望の一端となれるよう努めなさい」

口上の意味など理解できやしないに違いない。ただ彼は、眼前に繰り出された絶望に両眼を見開き呆然とする他にないのだろう。冷たい抱擁に為されるがまま、露になった首筋へと鋭い牙が突き立てられる。

それを見て、心の波紋が揺れ動くことはない。

ただ加害者意識が私の中のどこかに残るヒトの残滓を刺激する。

耐えられない、程でもない。

男の肌から血の気が失せていき、伴って生命の気配も薄れていく。ゼロへ、そしてマイナスへと傾いた瞬間新たな存在となって甦った。

オリ主とブレインが似てるというのは、どちらの剣技にも特定人物への劣等感が入り混じっているからという解釈。意図していないが二人ともメインウェポンは同じ刀。

オリ主：マタタビの設定

今回の話は元々ラナー関連の小話でしたが、後になってシナリオ変更して削除する必要が出てきたのと、それに伴いナンバリング弄りたくなかったので、活動報告のオリ主設定をこっちに持ってきました。

飛ばし推奨です

――あんたにとっては本来、私なんざただのウザイ糞ガキでしかないはずだ

◇マタタビ［異形種］　ｍａｔａｔａｂｉ

◇性別：女性

◇年齢：19
◇二つ名
・屋台崩し
・42人目の???

◇嗜好
・趣味：恋愛モノの小説・漫画、散策・散歩、戦闘技法の収集
・特技：技術の模倣・習得、読心、脊椎反射、アドリブ、物品の整理、揚げ足取り……ｅｔｃ
・不得手：倹約、コミュニケーション全般、事前の準備、演技、報連相……ｅｔｃ
・好な食べ物：なんでもよく食べる
・好きな人：アルベド？、父親、母親、ウルベルト……ｅｔｃ
・尊敬する人：モモンガ……ｅｔｃ
・嫌いな人：集団の和を乱す者（自分）、敵意を持つ者、偽善者、色狂い……ｅｔｃ

◇役職
・旧クラン：ナインズ・オウン・ゴール　元構成員
・ナザリック地下大墳墓 執事助手秘書官 兼 一般メイド見習い
◇住居
・ナザリック地下大墳墓 第九階層スィートルーム予備部屋
◇属性(アライメント)
・極悪　［カルマ値：-５００］
・(実数置換算だと＋２００で、善にして中立～混沌くらい)
◇種族レベル
・ケットシー１０ＬＶ
・ハイケットシー５ＬＶ
◇職業クラスレベル
・アサシン：５ＬＶ
・マスターアサシン：１０ＬＶ
・シーフ：１５ＬＶ

・ファントムシーフ：５ＬＶ
・シノビ：１５ＬＶ
・ハーミット：１０ＬＶ
・シカケニン：５ＬＶ
・テロリスト：５ＬＶ
・ポイズンメーカー：５ＬＶ
・スレイヤー：５ＬＶ
・トリックスター：５ＬＶ
◇［種族レベル］＋［職業レベル］：計１００レベル
・種族レベル：15
・職業レベル：85
◇能力表（最大値を１００とした場合の割合）
・HP（ヒットポイント）：70
・MP（マジックポイント）：70
・物理攻撃：80

・物理防御：40
・素早さ：１４０（限界突破）
・魔法攻撃：60
・魔法防御：40
・総合耐性：70
・特殊：１３０（限界突破）
・合計値：７００

◇能力値（メイド服ＭＯＤＥ）
・ＨＰ：70
・ＭＰ：70
・物理攻撃：80
・物理防御：１００

・素早さ：70
・魔法攻撃：60
・魔法防御：１００
・総合耐性：１００
・特殊：50
・合計値：７００

モチーフは大アルカナの愚者、もしくはトランプのジョーカー。大富豪ではどんなカードの役もこなせるワイルドカードだけどババ抜きとかでは一人で残る外れ札。

ちなみに誰も信じないだろうけど、意図してモモンガの反対キャラとして作ったつもりは殆ど無い。偶然

メタ的に見ても逆運命の人なのでアルベドさんが勘違いするのも仕方ない気がする。

実際のところナザリックでも現地勢でもコイツを娶ってくれそうな奴がいないと

いうか、申し訳なくてくれてやれない。ババ抜きよろしく孤独なメイド（オールドミス）がこいつには相応しい。

メイド・メイド・ドッペルズ

ようやく本筋を進めます。６巻の内容開始です
できるだけパパっと進めたかったので、ラナーがレエヴンやザナックを口説く下りをほぼ原作通りにしてなおかつカットします
ここから原作としっかり分岐させるから許してください

◆◇◆

ラナー王女が方々に尽くした人脈により八本指への戦線は整えられた。
まずはラナー王女の友人である冒険者ラキュースと、彼女率いるアダマンタイト冒険者チーム『蒼の薔薇』の５名。
宮廷内で蝙蝠伯爵ともっぱらの噂のレエヴン公率いるは、元オリハルコン級冒険者チームの直轄親衛隊５名。
王国内では言わずと知れた近隣国家最強の戦士長ガゼフに、先月から名を広めた

ばかりのアダマンタイト冒険者『漆黒』の2名。
襲撃前の作戦会議は王都のとある貸家にて行われた。
仕切り役のラキュースがテーブルに広げられた王都の地図に3か所のマークを入れる。面々はそれを取り囲み、ラキュースが説明を始める。
襲撃箇所は八本指麻薬部門の所有する三つの施設。
施設を強行制圧し、犯罪の証拠となる機密書類や麻薬の実物と関係者を取り押さえるのが今回の目的だ。
「ラナー王女が解読した暗号文書によると、それぞれ麻薬倉庫、宴会用の屋敷、金品と書類の管理所となっています。
ですので先も言いました通り3チームで同時に襲撃することになりますので、戦力を考慮したうえでチーム分けの相談を始めましょう」
かくして各々の陣営から意見が投げ入れられチーム編成が決められた。
ガゼフとレエヴン公親衛隊のチームで宴会場の屋敷を攻略。漆黒のモモンとナーベに蒼薔薇のティアと王女護衛の兵士クライムで麻薬倉庫を攻略。ティアを除いた蒼薔薇のチームで金品及び書類の管理所を攻略するという手筈となった。

敵側でアダマンタイト級の実力を持つとされる六腕が一ヵ所にフルメンバーで集中でもしてない限りほぼ確実に成功するチーム編成だ。

仮にその事態になった場合は突入せずに、他のチームの襲撃の終了後に合流するまで待機することに決まった。

しかし結果だけ先に言うと、今回の作戦で六腕と渡り合う事態にはならなかった。そのことをあらかじめ知っていたのは、この場では漆黒の二人　――もといアインズとナーベラルだけである。

今夜悪辣なマッチポンプの火ぶたが切られようとしていたが、転じて本物の大火災になることを知る者はまだ誰もいなかった。

◆

何を期待されてるのかわからない相手は苦手だ。どう振る舞っていいのかわからないから。

そういう意味ではアインズにとって我が子と言えるＮＰＣは相手にしやすい。尊大な主人として求められるなら応えられなくはなかった。有能な主人を求められるなら、難しいが、努力を怠るつもりはない。上っ面のいい冒険者を求められるなら、

実力に関係なく丁寧に対応すれば勝手にそう思ってくれた。
しかしそういう生き方が実は窮屈なのだと気づけたのは最近の事だったりする。というかああも間近に見ていると思い知らずにはいられない。
マタタビのどれだけ周囲と摩擦を生もうともありのままで通し続ける極端な生き方が、アインズには《昔から／・・・》眩しいくらい目障りだった。マタタビを嫌いと言うのは、そういう意味だ。
自分とは真逆な性格で何を考えてるのかわからない。
きっと、だから自分たちは臆病にも〈《メッセージ／伝言》〉でしか話したがらないのだろうと、アインズは他人事のように思った。
（少し浮つき過ぎだな）
作戦中だと言うのにとりとめもない思考に囚われていることに気付いて、アインズは自嘲した。
ともかく作戦だ。それも八本指襲撃のことではなく、ゲヘナについて。
今はもう極端なアドリブを要する場面はなく脚本通りに動けばよい。そう思えばこそ油断しがちになるが、プレイヤーの影がいつ迫るのかもわからないし、知って

る影に一泡食わされることも覚悟しなければならない。
今は夜の人通りのない道を襲撃地に向けて歩いてる。共に行くのはいつものナーベラルとそれに王女の衛兵のクライムと言う少年と蒼の薔薇のティアが一緒だ。
隠密行動ということになってるので、クライム少年の鎧は塗料系のマジックアイテムで黒く塗りつぶされており、目立つ体躯と《全身鎧〈フルプレート〉》のアインズは認識阻害系のマジックアイテムで隠形していて、ナーベラルはいつものローブと頭にフードを付けて顔を隠している。ちなみに蒼の薔薇のティアはなんと30レベル以下の能力値だというのにシノビ系の盗賊職を獲得しているという。
そんなわけでやってるわけだがなんと驚くべき事態が巻き起こった。
クライム少年とあのナーベラルが道中にて早速意気投合をしてしまっていたのだ。
「一寸の虫にも五分の魂と言うべきかしら。蟻の分際で見上げた忠義心ね。モモンさ……さん程では無いにしろ、あなたの主人の器を伺わせるわ」
「やはり流石、大英雄の相方を務めている程の方です。その御覚悟からして桁が違う」

「ふん、蟻から子犬程度には格上げしてもいいかもしれないわね。精々忠義に励むといいわ」

やめてほしい。せめてそういうの他人の前でやらないで欲しい。

どうして目と目を合わせた瞬間から同類と運命の出会いみたいになって、互いの主人を自慢し合うのか。

ナーベラルもナーベラルだけど、どうしてクライム少年はこれほどの美人を前にして純粋に尊敬の眼差しだけを向けられるのか。アンデッドになったアインズですら思うところはなくもないのに。

ＮＰＣは人間関係を身内で完結させがちなところがあり、ナーベラルは特にその傾向が強いと思っていた。そんな彼女と容易に打ち解けられる人物がいることを知り、アインズは世界の広さを思い知らされた。

「さてそろそろだ。二人とも小話はそのあたりにするといい」

「……大変失礼しました」

「あの建物が倉庫」

「アレですか？」

ティアが指さした平凡で小さな平屋をクライムは訝し気に見つめる。倉庫にしてはあまりにも小さくセキュリティーもザルに思えてならない。そんな表情だ。

しかしはっとなってクライムは我に返ったようだ。

「確か外見はカモフラージュで地下に本物の倉庫があるんですよね」

「そうだな。カモフラージュであるならば外観は目立たなければ目立たないほど良いものだ。ティアさん、念のため聞き直すが下取りは終わっているのだったな」

「事前確認は済ませてる。手筈通りティアがもう一度中を確認してくる。３人は目立たないところで小屋の出入りを見張ってて」

「了解した」

アインズ達３人は近くの茂みに身を隠し、ティアを一人先に行かせて見守った。

◆◇◆

敵側の防備を確認するためティアは前に出る。わざわざ蒼の薔薇からティアだけこちらに加わったのは、漆黒には探索能力を持つものが居ないから。

蒼薔薇のほうにはまだティアの双子のティナがいるし、レエヴン公の親衛隊にも『見えざる』のロックマイヤーがいる。

小屋の前に立って扉に手をつきティアは盗賊の特殊スキルを発動させる。建物内部にいる生命反応の数を調べられる感知能力だ。

数えられるのは……一つだけ。ありえない。

襲撃が事前にバレていたのか。だとするのなら今感じ取った一人は――

「ッ！」

刹那、氷が背中を這いずるような感覚が、ティアのフル回転した思考を断ち切って危険信号を叩きつけた。

特殊スキルではなく、数ある修羅場を潜り抜け蓄積されてきた戦闘経験からくる直観だ。

ティアは愕然として目を見開きながら、扉を蹴飛ばして後方へと跳躍する。

何事かとモモン達と隠れていたクライム少年が身構えるが、間もなく轟音が鳴り響いて扉が吹き飛び道端へと叩きつけられた。

焦げ臭い硝煙が盛大に巻き上がって見えなくなった入り口付近を、クナイを構えたティアは臨戦態勢で睨みつける。

煙の中から小さな破裂音が響く。ティアの鼓膜が反応するより速く、後方にいた

モモンがティアの前に飛び出して大剣を横殴りに一閃した。
次の瞬間、雷鳴にも似た金属音が辺り一帯へと飛び散って炸裂し、尋常ならざる膂力の一振りが硝煙を吹き飛ばした。
「……助かった、漆黒」
「かまわない」
今の衝撃波、盗賊職のティアをして見切ることができなかった。
モモンが弾いてくれなければ、地べたに四散した破壊痕を見るに良くて深手で最悪即死。
紙一重の生存に冷や汗をかくと同時に、戦士モモンの凄まじい動体視力と巨体に見合わぬ早業に内心驚嘆せざるを得ない。
その力量はどれだけ少なく見積もっても戦士長や魔法強化済みのラキュースすら優に超えてる。道中に相方が自慢げにしていたが、これほどとは。
やがて吹き飛ばされた煙の中から現れたのは、メイド服姿の小柄な少女。薄桃色の髪を背中まで伸ばし迷彩色の襟巻で首元を隠している。特に目を引くのは、顔を覆った奇怪で怪しげな紋様の仮面。

肩に構えた、身なりに不相応に大きな鉄の筒の先からは微かに硝煙が立ち昇っている。先ほどの衝撃波はアレから放たれたのだろうか。

どれをとってもちぐはぐな格好だが、間違いなく強い。蒼の薔薇で最強のメンバーであるイビルアイと同格クラスであると目の前の対象の脅威を確信した。

「……私は魔皇ヤルダバオト様の側近。メイドの悪魔、デルタ。よろしく」

ヤルダバオトもデルタも聞いたことのない悪魔の名前だ。

イビルアイなら知ってるかもしれないが、横のモモンも知ってはいなさそうだ。

「悪魔か。後ろのそれらはお前がやったんだな？」

「……そうです」

少女の後方、建物の入り口にて、手足と血飛沫を盛大にまき散らした死屍累々の光景が広がっていた。遅れて血なまぐさく濃厚な死臭が遅れて鼻腔をなぶりつける。

死体の特徴を見るにほとんどが男性。それも、後ろ暗い業務に従事する者独特の雰囲気が、死体ながら微かに感じ取れる。これらが生前に八本指の関係者であったなら、目の前の存在は八本指の意図した回し者ではないということ。

「……八本指、ヤルダバオトに対価を払わなかった。……これは徴収。他のところもみんな、こうしました」

つまり八本指が悪魔との取引を失敗して自爆したとか、そんなところだろうか。

勝手に悪魔が仕留めてくれたなら、襲撃作戦としては願ったりなところでもある。

しかしこれほどまでに強力とは。そして目の前のメイドの悪魔より格上の主人が居る可能性は非常に高い。

「どうする漆黒」

ティアは目配せしながら指示を仰ぐ。

モモンは一瞥して何も答えず、悪魔デルタへと向きなおした。

「つまりそれは八本指への報復が終わったなら、お前たちはおとなしく帰ってくれるということでいいのか？」

極力対話で戦闘行為を回避する方向で行くらしい。蒼の薔薇の他のメンバーや戦士長なら問答無用で切りかかるだろうが、実直的なティアとティナの考えには近かった。後方に控えてるであろう更に強力な悪魔の報復を考慮すれば、未知の相手

には戦闘はなるべく避けた方が賢明ともいえるだろう。
もちろんそれは、まともに話が通じる前提の仮定に過ぎないのだが。
「報復じゃなくて、徴収です。ヤルダバオトの召喚対価は、この都市全てのニンゲンの命です」
「そうか、ならここで見逃さない手は無いな」
同時にモモンがデルタの方へ切りかかり一足で間合いを詰めよった。しかしデルタは棒立ちしたままで、そのまま両断されるかと思われた。
しかし太刀筋がデルタを捉えるより速く、排気管から濁色の粘液が飛び出してデルタと大剣の間に滑り込んだ。水音を立てて粘液の盾がモモンの一撃を受け止めた。
ティアは再び瞠目する。スライムだ。
剣士であるモモンにとってはおおよそ最悪の相手だ。どれだけ超越した技量を持っていようとも、根本的にスライムには物理攻撃が攻撃手段になりえない。それどころか――
スライムはモモンの剣に流動してまとわりつきながら、触腕を延ばして襲い掛か

かった。

「させない！　〈火炎手裏剣〉」

「〈魔法最強化・電撃（マキシマイズマジック・ライトニング）〉」

ティアは横から手裏剣状の火炎弾を投擲し、後方からナーベ嬢が電撃魔法を打ち放ってそれぞれスライムを迎撃。

攻撃を受けたスライムからは蒸発音と煙が飛ぶが、まだモモンの剣をつかんで離そうとしない。

「あなた様は、この程度で手放すにはあまりにも惜しい御方ですわ」

「ヒト型に変身!?」

艶のある美声が響くと同時にスライムは女体を象り金髪の美女へと姿を変える。男を魅了する豊満な肉体美も擬態と知れれば悍ましさの方が強い。デルタと同様メイド服と仮面をつけていた。

胸部を貫く大剣を愛撫しながらモモンを見上げて言った。

「初めまして。デルタと同じくヤルダバオト様の側近、イプシロンと申します。極めて短い間ですが、よろしくお願いいたします」

「ふんっ！」
モモンは盛大に大剣を素振りして、纏わりついたイプシロンを建物の壁面へと吹き飛ばし、そのまま自身もティアの前まで後退する。
イプシロンは衝撃によってたちまち体形を液状に崩すが、すぐに流動して立ち昇ると何ともないように元のヒト型に戻ってしまった。
やはり物理攻撃ではダメージを与えられないようだ。
ティアの知る限りヒト型に擬態できるスライムの知識は無いが、おそらく極めて高位の個体なのだろう。デルタの盾に回った際の瞬発力は並みのそれではない。そして施設の排気管から飛び出した来たが、さきほどティアが確認できた生命反応はデルタ一人分だけだ。
「漆黒、こいつはさっきのティアの感知に引っかからなかった。なんらかの気配遮断能力も使えると考えたほうがいい」
「のようだな。機動力もなかなかもの。体質を生かした隙間からの奇襲も見事だ」
何を感心しているのだろう。ひょっとして天然なんだろうか。
だがそれはそれとして着眼点は間違ってない。モンスターのくせに先のような知

能的な奇襲などをするものはティアも見たことが無かった。
　否、敵として見たことはなかったが仲間のイビルアイがその例に該当する。ティアの知る彼女は吸血鬼にして魔法詠唱者だったが。
　気配遮断能力もそうだし、今の奇襲時の動作もティアには妙になじみを感じた。
「このスライム、盗賊職を修めている？」
　ほぅ、と横のモモンはまた感心したように声を出す。
「ティア嬢、目のつけどころがいいな。さすがに王国屈指のアダマンタイト級冒険者なだけはある。
　言う通りアレは盗賊職を身に着けた高位のスライムだ。奇襲性が高いうえに物理攻撃が困難な厄介な相手だぞ」
「知ってたのか」
「……まあな」
「あなた様ほどの天才剣士から御褒めにあずかれるなど、わが身に余るほどの光栄にございます」
「……むむ……むむむ……がんばる」

イプシロンはやたらに恭しく返答する。無論皮肉の類だろう。デルタのほうは侮られたとでも思ったのかより戦意を高めたようだった。

ティアも再び腰を低くしクナイを構えようとしたが、モモンが手を伸ばしてそれを制する。

「そろそろティア嬢は下がった方がいい。ナーベと交代してクライムを守ってやれ」

「わかった」

二つ返事でティアは後退し草陰に身を隠す。入れ替わるようにナーベが飛び出してモモンの後ろに立った。

モモンには暗に邪魔と言われたが、べつにそれで気を落とすことは無い。ティアはこの班において探索能力を求められて加わったにすぎず、先日会ったばかりの漆黒の二人に加わり連携して戦うことは困難だからだ。仮に蒼薔薇の中にモモン一人が再加入しても同じことになっただろう。

「良いのですか？　我々と戦えばあなた様もお怪我をなさってしまうでしょう。この戦いは我々としてもあまり望むところではありませんので、互いに見なかったことにしては？」

「わかっているだろう？　お前たちの攻撃で俺が傷つくなどありえん。それは侮辱と受け取っていいのだな」

これでもかと敵を前に自信をたぎらせるモモンと委縮するメイドたち。

普通に聞き取ればそんな流れだが、一瞬だけメイドがモモンを心配しているようにティアには思えた。スグに気のせいだと首を横に振る。

「……しかたありません。ではこちらから行かせていただきます」

イプシロンは両腕を前に差し向け液状化させ、前方に液体状の腕を伸ばしてモモンの方へと掴みかかろうとする。合わせて後方のデルタも鉄の筒から衝撃波を繰り出した。

モモンはそのまま真正面に切りかかり、そして後ろのナーベも魔法を発動させる。

「〈魔法最強化・嵐流波（マキシマイズマジック・ストームウェーブ）〉！」

ナーベの手先から凄まじい突風が巻き起こり、イプシロンを伸ばしかけた腕ごと吹き飛ばす。だけでなく、前方のデルタへ向かって切りかかるモモンの推進力となる。

放たれた衝撃波を切り裂きそのまま風の力を相乗して切り掛かるモモン。咄嗟に

デルタはナイフを抜き出し受け止めるが、威力を殺しきれずに背面の壁へと勢いよく叩きつけられた。
茂みの中でクライムが感嘆の声を挙げる。
「すごい！　露払いしつつ物理攻撃に攻撃魔法の威力を上乗せするなんて！」
「やってることは単純。ただあのスライムを吹き飛ばすほどの威力は並みの魔法詠唱者は出せない。背面とはいえ風を受けきるモモンの体力も尋常じゃない」
かなり力任せな戦い方だが、だからこそ強い。ただでさえ威力が上がっているところに、接触タイミングがズレて不意を打たれる形になる。
並みの手合いであれば堪らない一撃である。
「だがデルタは防いだ」
ぎりぎりと火花を散らして金属の擦れる音がする。
そこにあるのは、全身鎧を身に纏った大男の大剣を、小柄なメイド服の少女がナイフで受け止めるという目を疑う光景だ。
あの小さな体でモモンほどの男の一撃を受け止められる膂力。やはり見た目通りではなく、種族はわからないが人外に類するだけのことはある。

「よくぞ受け止めた」
「……わーい」
だから感心している場合ではないだろう。
「……でも……まだまだ……！」
デルタは両手でナイフを押し上げ大剣を払い、鋭い動作でモモンへと勢いよく切りかかる。
ティアがなんとか目で追える攻防だ。ナイフを怒涛の如く振り回し、モモンの鎧の関節部位を的確に刺し抜かんとするデルタ。一方それらを大剣や小手でいなし続けるモモン。若干デルタの方が押している。
ナーベが魔法援護をしようとするが。
「〈電（ライ）――」
「美姫っ！　後ろだ！」
「させませんわよ？」
「ぐっ！」
ナーベの背後から、気配を消していたイプシロンが背後からナイフで襲い掛かる。

魔法を発動できるスパンが無い中、何とか両手で受け止めるナーベ。血が滴るナイフを忌々しく睨みつけるが、次の瞬間イプシロンの背面から粘液が広がって二人を一気に飲み込んだ。

「〈魔法最強化・嵐　雷　衝（マキシマイズマジックボルテックストームバースト）〉！」

雄たけびと共に、風と雷の二重属性魔法が放たれナーベを包み込んだイプシロンを吹き飛ばす。

何とか脱出し、息を切らしながらも立ち尽くすナーベを、ティアは信じられないもののように見つめた。

今のナーベの魔法の威力は、イビルアイが放つ第５位階魔法に匹敵するのではないか。

だが驚きと同時に納得も沸く。なるほど、モモンとナーベの二人に立ち入れるものなどいるはずがなく、たった二人のチーム編成に合点がいった。

体がいくらか飛び散ったイプシロンは、直ちにそれらを再結集させて元のヒト型に戻る。

しかし先ほどは無傷であったが、今は体表からは立ち昇る黒煙や割れて口元が露

になった仮面の様子からダメージを負った痕跡が見て取れた。
だがイプシロンは不敵にナーベに微笑みかける。そしてナーベもまた、これまでの不愛想な表情から初めて獰猛な笑みをあらわにした。
「やってくださいましたわね、ふふふ」
「そちらこそ」
ティアにもどこか馴染み深い姉妹喧嘩じみた雰囲気すら感じた。いやまさか、それはないだろうけど。
一方でモモンとデルタの攻防では、疲労が溜まってきたようなのかデルタは徐々に動きが鈍りつつあった。生まれた一瞬のスキを見逃さず大剣を振り下ろしてモモンは切りかかるが、またしてもナイフで受け止められてガードされた。
「このままではらちが明かない。不服だが、真の力を出さざるを得ないようだ。時間を稼げ」
「承知しました。では〈輝衝（フラッシュスタン）〉」
「ッ!?」
ナーベは天へと手の平を伸ばして魔法を行使。次の瞬間朝日の何十倍も凄まじい

白い光、強烈な振動、耳をつんざくよう高音が周囲一帯に広がって、背後に隠れていたティアとクライムの網膜を麻痺させ体の自由が利かなくなる。

近距離にいたデルタとイプシロンはさらに麻痺がひどいことは容易に想像がつき、身動きすらも取ることはできまい。

そんな輝きと災音と振動の奔流のなか、モモンは一体何をするのか。真の力とは何なのか。

「〈完全なる戦士（パーフェクトウォリアー）〉」

背筋が冷え固まるような悪寒をティアは覚える。

魔法の効果が切れてようやく視界が再起して、改めてモモンの姿を見つめる。姿かたちや立ち振る舞いも先とは全く同じなのに、まるで別人のような圧倒的存在感がそこにはあった。

一方で対峙するデルタとイプシロンは委縮するようにオーラが弱まる。表情に先ほどまでの余裕は微塵もなかった。

モモンはブーツに包まれた足をガチャリと一歩、前に出す。すると空気が震えるように鳴いた。

この場の全員が張り詰めた空気を飲み込む中で、その中心にいた男はポツリと呟く。

「ゆくぞ」

男の言葉に鼓膜が震えるより早く、その光景は瞳孔へと差し込まれた。

デルタの上半身を切り飛ばしたモモンの姿。そこに至るまでの過程の時間が切り取られたのかと錯覚するほど、だがまごうことなく一瞬で。

時間が動き出す。両断されたデルタの体は、石クズのように変化して地面に砕け風化した。

「ナーベ」

「〈属性付与：雷（エンチャントオブエレメンタル：サンダー）〉」

合図に応じてナーベはモモンの武器に魔力を込める。ティアは知らないが、一時的に魔力武器の性能を与える魔法だろうか。

その隙に逃げようとするイプシロンだったが、魔法が完成した瞬間にモモンはイプシロンのスライムの体へと徹底的に連撃をくらわせ切り刻んだ。本来物理攻撃は効かないが、剣から流れ出る電流が執拗にイプシロンを攻め立ててとうとう限界に

達する。ふとした瞬間ピシリと音を立てて石化して、デルタと同様地面にたたきつけられ風化した。
　まさに圧勝。
　先ほどまでの拮抗は一体何だったのかと思わざるえない。手を抜いていたのとも違う気がする。
「漆黒、なんだその力は」
　ティアは草陰から飛び出して素直に心の内の疑問をぶつけた。遅れてクライムも起き上がり、同様の驚愕を顔に浮かべて無言に訴える。
　モモンは毅然と答えた。
「奥の手だ。一度解き放てば数日間はこの状態を維持できる」
「すぐに使わなかったのは代償があったから？」
「そうだ……この力は《魂を削る/経験値を消費する》捨て身の力。おいそれとは使えないが、この悪魔たちの首魁とやらの実力が今のメイドたちを凌駕するだろうと予想して先んじて使ったのだ」
「魂を削る……モモンは竜王の血を引く者？」

魂を削り行使する魔法と言えば古流たちの始原の魔法。扱えさえすればその力は強大だ。

イビルアイの受け売りであるが、真なる竜王の血を引く者はその力の一端を扱うことが出来ると言う。

「……さぁな。素性までさらす義理は無いぞ。イジャニーヤの元頭目殿と言えども」

しかし当然と言えば当然、モモンはすべてを語り切らない。手の内を安易にさらすものでは無いだろう。

興味は沸くが、今優先するべきことは他にある。

「それより今は他の襲撃班が心配だ。私とティアは蒼の薔薇の方へ。ナーベとクライム君はガゼフ達の元へ向かってくれ」

モモンの指示に全員が相槌を打って、二手に分かれて散開した。

しかしこの男は何者なのだろうかという、ティアの疑念が止むことは無かった。

◆◇◆

ちなみにモモンの正体は後日、とある事件によって晒され全勢力を驚愕の渦に巻き込むこととなるのだが、それはまた別の話である。

一応念のため言及しますが、モモンに切られて石ころになったデルタとイプシロンは某プレアデスのあの方々ではありません。

八本指？　六腕？　知らない子ですねぇ

だって尺長くなっちゃうし……

淡々と出来レースを消化する回です

王都：八本指麻薬部門：買取窓口兼事務所

ゲヘナ作戦の第一段階、王都における八本指所有全施設の制圧と金品の奪取は一切滞ることなく終了した。

各施設に人員を配置し同時制圧を直ちに済ませ、その後予定に含めていた高価金品、重要書類、生け捕った８割の人間だけを守護者シャルティアが〈異界門（ゲート）〉で順繰りに回って速やかに回収した。

その後は一応、もぬけの殻では演出が足りないということで残りの人間や死体を適当に散らかしておいた。

そして作戦の二段階目である魔王と刺客の襲撃のために、麻薬部門の３施設にプレアデスを配置する。ただし英雄モモンの襲撃施設には代理としてドッペルゲンガーを配置したらしいが。

かくして襲撃の完了した屋敷にて、ルプスレギナとエントマはこの施設にやって来る予定の『蒼の薔薇』という冒険者チームが来るのを待って、建物の中で時間つぶしをしていた。

壁や床やらに血痕の飛散した会食用の大部屋で、机の上に転がした人間の死体を椅子に座ってお行儀よく食べるエントマ。

ルプスレギナも同じく椅子に腰掛けながら、床に仰向けとなった男を嗜虐趣向の籠った笑みで冷酷に見下ろしていた。

麻痺で動けない男の太ももの上に、ルプスレギナはゆっくり優しく愛用の聖十字杖（サンタクロス）の先端を乗せる。

男の血走った白目がルプスレギナに懇願するのは苦痛なき死。ルプスレギナは凄惨に微笑んだ。

そんなもの（苦痛なき死）、お前には勿体ない。

ルプスレギナは聖十字杖（サンタクロス）を持ち上げていた力を少しずつ抜いていった。浮いて失われていた聖十字杖（サンタクロス）の自重が段々と、先端から男の足へと沈んでいく。

「っ～～～～～～!?」

10秒後、骨が砕ける音がした。しかし男は麻痺状態にされてるので動けない。

麻痺で喉までやられてしまったから悲鳴を聞くことはできないのが残念だが、叫びによって痛覚が鈍化されることが無いのを思えばそれはそれで悪くない。

声にならない悲鳴に鼓膜を揺らし、恍惚とした気分でルプスレギナは頬を緩ませる。

ただ時折男の意識が飛びそうになるので、指先を握って反対方向に捻って意識を繋ぎ止める。

じわじわと皮膚が裂けて血色のいい体液がじわじわと水たまりを作っていった。

それから約一分かけてようやく男の足は切断された。つまらなそうに傍観する横のエントマにちぎれた足を手渡すと嬉しそうに噛り付いた。

ところが目を離した隙に、男はすっかり泡を吹いてこと切れていた。脇腹をえぐってみたが反応はない。ショック死したようだ。つまらない。まだ手足合わせて

3本と、目玉も二つ残っていたのに。

脆い玩具だ。せっかく表立ってニンゲンの元に襲撃させてもらって、こうして少し遊ぶ赦しも貰えたというのに。

回復魔法が使えればまだもっと楽しめるけど、MPは無駄遣いしないようにとのお達しだ。エントマの蟲に協力してもらって麻痺状態にさせたりは出来るけど、サディストの享楽を知らないエントマはそれ以上の協力はしてくれない。第三階層の黒棺（ブラックボックス）みたいなことが出来ればより愉快だったのだが。

「せっかくのお食事中にぃ、ぎゃーぴーと横で騒がれちゃたまんないのよぉ」

「食いしん坊なエンちゃんらしいっすね」

人間を面白いおもちゃとして捉えるルプスレギナに対し、エントマはあくまで食料として扱っている。人間が下位種族であるという認識はナザリック内ではほぼ一致してるが、このように個人個人で微妙にスタンスが違ったりする。

「これでもダイエットしてるのよぉ？　アインズ様の思し召しだから仕方ないけどぉ、ここのところずぅーっとヒトの肉はお預けだったんだからぁ」

「なら尚の事、今回の作戦でつまみ食いが許可されてよかったっすよねー。カルネ

村じゃあそれはそれは退屈で。

もちろんアインズ様の厳命に元々不満はなったっすけど、こうして気遣ってくださったことには感謝してもしきれないっすよ」

エントマのように食料にしろ、ルプスレギナのように嗜虐趣向を満たすための嗜好品にしろ、ナザリック内で人間を欲する者たちは数多くいる。

とはいえ他のプレイヤーに敵対理由を作ってしまうことから、人間の供給はナザリック内でもごくごくわずかに限られていた。

それがナザリックを守るためにアインズ様がお考えになられたことなのだから不満なんてあるわけがない。むしろ、ナザリック全体に対するアインズ様の愛に対して幸福感すら湧いてくる。

だというのに機会を見計らってはこうして人間を与えてくださるシモベへの気遣いを思えばこそ、感謝なんて言葉では言い表しきれないほどの想いがルプスレギナの胸中で爆発するのだ。それはエントマも同様だろう。

ぶっちゃけ人間を虐める楽しさよりも、そっちのうれしさの方が強いくらいだ。

「私は食堂の料理のほうが好きっすけど、実際どうなんすか？　人間の味って」

普通、雑食や肉食の動物の肉は筋っぽかったり苦くてマズいと相場が決まっている。

なのにえてして人食を趣向するものが多いのは一体なぜなのだろう。今更ながらルプスレギナは疑問に思った。

「んぅー？　そりゃあ料理長の料理はおいしいけれどぉ、これはこれでまた違うのよぉ。なんていうかぁ、言葉に詰まるけどぉ」

「そっすか」

どうやら味覚が違うらしい。そして多分、料理による食事とはまた少し違う概念なのだと言うことも、なんとなくうかがえる。

それ以上は興味が向かなかったのでルプスレギナは追及をやめた。

床に伏して死んだ男の襟首をつかみ、既に跡形もなくなっていたエントマの食卓に並べた。

しかし今はもうおなか一杯らしい。彼女はアイテムボックスから安眠の屍衣（シュラウド・オブ・スリープ）と人一人はいるくらいの大きな麻袋を取り出した。安眠の屍衣（シュラウド・オブ・スリープ）で死体をグルグル巻きにし、麻袋の中に突っ込んで袋ごとアイテムボックスに仕舞い込んだ。持ち

帰ってから食べるみたいだ。

さてもう生きてる人間は居なくなった。拷問ごっこもできなくなって、時間まですることがなくなってしまった。

「やっぱ拷問には教養が要るって話、ホントだったすねー。私じゃすぐに殺しちまうっす」

「よくわかんないけどぉ、大図書館の司書長ならぁ、そういうの詳しいらしいわよぉ？」

「マジっすか？　そりゃいい話が聞けたっすよ。サンキューっす、エンちゃん」

「おしゃべりもいいけどぉ、そろそろぉ、くるわよぉ？」

エントマはピッと触角を立てて食べかけの足を口の中に掻きこんだ。

ふと、僅かな空気の流動をルプスレギナは感じ取る。音はしないが入口の扉が開かれたのだろう。今頃は、襲いに来たのに既に血塗れになった通路を見て驚愕しているはずだ。

侵入者達は足音を忍ばせて、ルプスレギナとエントマの待ち受ける部屋に向かってくる。知覚能力に優れた種族であるエントマとルプスレギナにはその動向が手に

取るようにわかっていた。
むこうはむこうでちゃんと知覚能力持ちの盗賊がいるようで、二人が待ち受ける大部屋の扉の前に立つと息を整えるように間を置いた。
「来やがったようっすね」
タイミングが良い。丁度退屈していたところだった。
「おらぁ！」
野太い掛け声とともに入口の扉の枠が外れて部屋の中へと倒れこんだ。
そして瞬時に４人が部屋の中へと滑り込み、陣形を組んでルプスレギナたちと向かいあう。
部屋の惨状を見渡して、瞬時にそれを作り出したのがメイドの２名であると確信したようだ。
デミウルゴスから渡された報告書にあった冒険者チーム『蒼の薔薇』の４人だ。
赤くトゲトゲした全身鎧（フルプレート）に戦槌（ウォーピック）を構えた、ガタイの良い女戦士（？）がガガーラン。小柄で身軽な服装の、クナイを逆手に握るシノビの女が多分ティナ。背面に浮

遊剣を並べさせ星空を切り取ったように黒光る魔法剣を向けてくるのが神官戦士ラキュース。そして深紅のローブに白い仮面で全身を隠す小柄な女、報告書において要警戒対象とされていたプレアデスに匹敵しうるという吸血鬼の魔法詠唱者イビルアイ。

このように事前に情報を知っていた二人であったが、悪魔の配下という設定のため初見ということにしておくと話を決めていた。

ルプスレギナは、事前に考えていたセリフをそのまま『蒼の薔薇』へと言い放った。

「んー？　あんたらちょっとだけ骨がありそうっすけど、こいつらが言ってた六腕ってやつっすか？」

ルプスレギナは床面に伏した死体の一つを指さした。

敵側と間違えられて、案の定一行は面食らって顔を顰める。予期せぬ第三勢力の到来で困惑しつつも、神官戦士ラキュースは一歩前に出て毅然と対峙した。

「いいえ、私たちは王国の冒険者よ。あなたたちこそ何者なの？　どうやら人間ではないようだけど」

「私たちは大悪魔・魔皇ヤルダバオト様の忠実なる側近、ベータ」
「ゼータですぅ。八本指がぁ、ヤルダバオト様に無礼を働いたのでぇ報復に参りましたのぉ」
「そうですか。では報復が終わったなら、あなたたちは帰還するのですか？」
「帰るっつったら見逃してくれるんすかー？」
なるべく相手の癇に障るように、ルプスレギナは笑いかける。
するとガガーランが戦士特有の獰猛な笑みを浮かべて睨み返す。
「もちろん、見逃すわけがねーだろうが。人食い化け物の悪魔の配下を放っといちゃあ、冒険者とは名乗れねーからな」
「でもでもっすよ？　あんたらが六腕じゃないんなら、そんなフル装備で何しに来たんすか？　これでも私鼻が利くっすんすよ。
後ろのアサシンのチビからは隠しきれない死臭がプンプンするし、覆面のチビは何やらアンデッド臭いようなんすが。
人殺しや化け物が世のため人のため化け物を成敗なんて、傍から見たらマジイミフっす。プークスクス」

ルプスレギナは手を当ててわざとらしく笑って見せるが、ラキュースは動揺することなく真っ直ぐと言い放った。

「ただの化け物にはわからないわ。ティアもティナも心を入れ替えたし、イビルアイはあんたみたいに邪悪じゃない。

ここの奴らは殺すしかないロクでなしばっかりだろうけど、あんたたちが罪のない人間を殺さない保証なんてどこにもないでしょ！」

つまらない手合いだ。自分の中の正義ががっちりと組みあがってしまってる連中には、何を言っても意味がない。

確かに人間は弱小種族で、それを害するモンスターを敵視するのは種の生存としては間違ってない。ただその罪のない人間とやらも戦争に狩り出されれば他国の同族を殺してでも生存を獲得しようと足掻くことだろう。

結局『死んでいい奴』というのはその人物の立場に依存した価値観に過ぎず、そういう意味ではナザリックのやってることも『蒼の薔薇』がやってることも本質的には変わらない。

善性を抱えつつも『正しさ』なんか存在しないと知っているマタタビの方が、ま

だしも公平な視点だし虐め甲斐もあるのだが。

カルネ村ではよくわからないうちに居なくなったが、彼女とはまた会いたいものだ。

退屈なので、とっとと言うこと言って始めてしまおう。

「……ま、確かに保証なんてしないすけどね。なんせ八本指の無礼に対する代償は、この都市に生ける全ての命っすから」

その言葉を待っていたとでも言わんばかりに、相手方は戦意を強めた。

「ならつまんねー御託はもういいだろ。やることは一つだ」

戦槌(ウォーピック)を高く持ち上げ、すぐにでも踏み込めるように筋肉を強張らせるガガーラン。しかし後ろのイビルアイがハンドサインを見せると、全員の表情が一気に険しくなる。

「そう……こいつらそこまでの強さなのね。わかったわ、イビルアイの言う通りにする」

「おいおいマジかよ。相手はモンスターだからせめてそこに期待したいがな」

「承知した」

大方、彼岸の戦力差を察知して、急場になったら転移魔法で逃げる手筈にしたのだろう。

無駄だと言うのに。『戦いは始まる前から終わっている』とは至高の方々の偉大な言葉。既にこちら側は『蒼の薔薇』の情報を知り尽くしている。

加えて、万一にも億が一にも負けたとしても、バックには既に魔王がついてるのだ。

イビルアイの正体やその他諸々のタレコミは某黄金さんから頂きました。

事前調査が原作よりしっかりしすぎている理由は、オリ主やツアーを警戒してデミウルゴスが慎重に計画を組み上げたからです。

代わりに聖王国などの襲撃計画の練り込みが原作よりも遅れています。

駄犬とか黄金とかIQ調整ミスってるけどまぁいいや

なんかノリでルプスレギナの武器捏造しちゃったけどまぁいいや

英雄と魔皇と竜鎧と偽妹

蒼薔薇VSプレアデスとか原作の焼き直しすぎるからダイジェスト。
相変わらず原作キャラの戦闘能力の設定を盛ってますので注意してください

蒼の薔薇とメイド悪魔の攻防は二手に分断されて行われた。
赤髪のメイドをラキュース、ガガーラン、ティナで抑え込んでいる隙に、蟲使いのメイドをイビルアイが一対一で勝負をつけるという非常に苦しい戦い方だ。
イビルアイと蟲メイドのゼータが水晶魔法と蟲を飛び交わせている合間、イビルアイより格上であるという赤髪メイドのベータに3人は必至の応戦を強いられる。
「ったくもー、ビュンビュン蠅みたいで鬱陶しいっすね」
実際、十字に天輪をあしらったような巨大なメイスを振り回す悪魔ベータの猛攻に、ティナ、ガガーラン、2名はかなり押されていた。
一報ベータは今にも欠伸をしてしまいそうなほどに顔を弛緩させ、まさに退屈と

言った具合だ。

遊ばれてるなと、ティナは半ば確信していた。

イビルアイの直観では、ゼータは自身と同格でベータは格上らしい。それ相手に2人が直接戦闘でどうにか対応できるということは、ベータの本領が白兵戦に無いのか、それとも単に直接戦闘で手を抜かれているのか。きっと、両方である可能性が一番高い。

ベータがティナへと振り下ろした一撃を紙一重で飛び上がって回避するが、代わりに部屋の椅子に当りバラバラの木片となって辺り一帯へ四散する。

木片の内ひとかけらが運悪く顔へと命中してティナの意識が一瞬飛んだ。ベータは更に一歩踏み出し、宙で無防備をさらした敵に振り上げるように打ち付ける。

「〈不落要塞（ふらくようさい）〉〈流水加速（りゅうすいかそく）〉」

「おおお!?」

ガガーランはその一撃に割って入り、武技で強化した強烈な戦槌（ウォーピック）の一振りで受け止める。結果ギリギリで運動エネルギーは平衡し、それぞれの体を通って衝撃が足から床へと流動した。甲高い金属音と共に、木板の床が軋んで割れて足の形に窪

みが生まれる

文字通り流水のごとき一時加速を可能とする〈流水加速（りゅうすいかそく）〉と、不可視の盾のような衝撃波を纏う攻防一体の〈不落要塞（ふらくようさい）〉。

ガガーラン程の戦士による複数の武技による合わせ技は、本来ならば受け止めるどころかそのまま相手を叩き潰しかねないほどの絶大な破壊力をもたらす。

それがただの一撃と互角であるなどという事実を前にガガーランは忌々しそうに歯噛みする。しかも互角と言えど、体を通った衝撃はさながら滝に打たれるように強く激しい。一方それを余裕尺々とはにかんで見せるベータの余裕に、改めて悪魔との完全なる力負けを思い知らされる。

だが力が無ければ技で、技が足りなければ仲間で継ぎ足し高みへ望む。それがチームの戦い方だ。

瞬時に意識を取り戻したティナが壁に足を強く踏み込み、ベータの首筋めがけて飛び掛かる。一体を一本の矢とするように、矢じりのクナイを強く握って頸動脈を鋭く狙う。

「はむ」

しかし敵も曲者。ベータはティナのクナイを口を開き鋭い牙で砕き割った。
僅かに過った動揺の隙に、ベータはメイスを手放してティナとガガーランを回し蹴りで一閃。横っ腹を蹴られたティナが壁にたたきつけられ、ガガーランは頭蓋側面の耳元を打たれて脳震盪を起こし地に伏した。
「〈大治癒（ヒール）〉」
しかしベータから少し離れた後方から、リーダーラキュースの回復魔法が飛来して容体が回復。更にラキュース自身の準備が万端となったことを理解し、二人は半ば捨て身で攻め立てた。
「〈爆炎弾の術〉」
「おらぁっ！」
しかしベータは、撃ち込まれた火の玉をメイスで殴って打ち消して、振り下ろされた戦槌（ウォーピック）を爪で掴んで受け止めた。
まさに余裕の対応だったが、ベータは闘争心をむき出しにして凄惨に口元を吊り上げる。二人への反撃をするより先に、強化魔法（バフ）をかけ終えたラキュースの猛攻がベータに襲い掛かった。

妨害しようとすれば出来たものを、ベータはあえて見逃していた。それは強大な力を持つが故の傲りに他ならない。

「待ってたっすよ！」

「くたばれ悪魔！」

英雄の壁を超越した神官戦士ラキュースの完全戦闘態勢（マックススペック）は、かの王国戦士長をすら凌駕する。しかしベータの肉体能力を超えるまでには至らないだろう。

だから手数でその差を埋める。ラキュースは愛用の魔剣キリネイラムで切りかかると同時に、マジックアイテム浮遊する剣群（フローティングブレード）を展開。

全６本の浮遊剣の連撃に加え、ガガーランとティナの手数も足しての飽和攻撃。熟練のチームワークによって攻撃範囲は一切抵触せず、ベータ一人にめがけて混戦一体の濁流のような猛襲がなだれ込んだ。

ここまで押し込みようやっとベータの顔に焦りが表出するも、あと一歩が届かない。

底知れぬ肉体能力と反射神経によって一手一手を着実に防がれて未だ五分五分。結果今の全力運動の迫り合いをどれだけ続けられるかという体力勝負になるわけだ

が、格上のベータ相手には分が悪い。
きっと勝機はここにしかないだろう。
散弾虫、千鞭虫、鋼殻虫、穿孔虫その他ｅｔｃ。文字通り多種多様の虫達の猛攻撃に加えて、特異な符術という魔術系統を駆使するゼータと、イビルアイは熾烈な攻防を繰り広げていた。彼女はゼータへの決定力となるうる特攻系オリジナルスペルを保持していたが、陽動が居ない中で下手なタイミングで打ってしまえば防がれて魔力を無駄に消費するだけ。それに警戒も高める羽目になる。
ゆえに最高の瞬間を求め慎重に粘り続けていた。しかし仲間たちの想像以上の善戦を見て切り札を放つ覚悟を決める。
「〈蟲殺し（ヴァーミンベイン）〉」
「〈蟲壁〉ぇ」
突如放たれた白煙を前に、ゼータは羽虫の群れを防御壁のように広げて防御する。
しかし虫特攻の〈蟲殺し（ヴァーミンベイン）〉を前には軟い盾だ。
「ぎゃあああ!!」
蟲の塊を貫通してゼータの手足に煙が降りかかる。すると想像以上の激痛を前に

絶叫を挙げた。

急場で放ったのでガードされクリーンヒットには至らなかったが、今はゼータの気を引ければ十分。むしろ最高以上のタイミングだ。

ラキュースが防御に回していた分も含めて浮遊する剣群（フローティングブレード）を全射出。６本それぞれ両手両足に胸部と頭部を狙いすませて撃たれたそれを、ベータは全て見事に防ぎ切る。

しかし生まれた僅かな隙で、４人一同息を合わせて、各々の最高威力の技をベータに向けて放つ。

「〈流水加速（りゅうすいかそく）〉〈剛腕剛撃〉」

「〈鎧炎手裏剣〉」

「〈Ｅ魔法最強化・結晶散弾《マキシマイズマジック・シャード・バックショット》〉」

「〈暗黒刃超弩級衝撃波（ダークブレードメガインパクト）〉！」

ガガーランが武技で振るった戦槌（ウォーピック）のギミックで衝撃波をぶつけ、ティナが身の丈ほどの手裏剣を召喚し炎を纏わせて投げつけ、イビルアイが無数の水晶の槍を射出、ラキュースも魔力を最大開放した魔剣キリネイラムの暗黒の斬撃を切り飛ばし

た。
完璧なタイミングの集中砲火。着弾寸前ベータは初めて驚愕を露にしたが、次の瞬間あざ笑うような冷酷な笑みを浮かべた。
「〈聖母独唱（アリア・オブ・サンタマリア）〉」
すると突如として鼓膜が切り裂かれんほどの大音響が響き渡る。神聖で荘厳なソプラノの歌声が斥力を纏い、ベータを取り囲んでいた敵をその攻撃もろとも弾き返した。
「〈蟲壁〉ぇ！」
唯一ゼータだけが咄嗟に反応して障壁を張り身を守ったが、他蒼の薔薇の面々は四方に飛ばされて床に伏す。そのあまりの威力に天井に巨大な穴が開いて、星空の景色が広がりを見せた。
叩きつけられた四人はベータの魔法の威力を前に、体が軋み立ち上がることがままならない。イビルアイでさえ、否むしろ彼女こそ最も甚大にダメージを受けていた。衝撃によって仮面が砕け、瀕死寸前の少女の顔が表出する。
比較的ダメージが少なかったラキュースですら、全身を振り絞って頭を上げるの

が精いっぱいだった。

「何故、悪魔の手先が神聖魔法を使うの!?」

「吸血鬼と組む神官戦士がいるなら、悪魔の手先が神官だっていいじゃないっすか。自分らばっかズルいっすよ

それとも私がどれだけ手心を加えていたがわかってビビったすか？」

「……」

状況に圧倒されてもはや返す言葉が無い。

ラキュース自身も直接戦闘に秀でたクレリックではあるが、それでも魔力を使わずに自分たちを追い込めるベータの強さは馬鹿げてる。

しかもよりにもよって、神聖属性は吸血鬼であるイビルアイには致命的な弱点。瀕死寸前の理由がそれだ。いざと言うときは転移魔法で離脱することを想定していたが、もはや命綱は断たれてしまった。

「……わたしもぉ、ちょっとヒヤッとしたんだけどぉ？　いきなり範囲魔法なんて使わないでよぉ」

横からゼータが恨めし気にベータを睨みつける。左手は〈蟲殺し（ヴァーミンベイン）〉で爛れてい

たが、もう痛みを気にした様子はない。

「てへぺろっす。エンちゃんそこそこやられたすね。お詫びに〈中傷治癒（マイナーヒーリング）〉っす」

低位階の回復魔法だが、魔力を受けたゼータの左手は見る見るうちに元通りになる。同じ魔法でも術者によって威力は変わる。ラキュースの〈中傷治癒（マイナーヒーリング）〉では同じことはできないだろう。先の神聖魔法と言い、ベータの神官としての能力の高さを思い知らされた。

蟲のメイドも健在で、もはや勝ち目はない。ただでさえ絶望的な状況だと言うのに、更に余計な追い打ちがやってきた。

空いた天井から、橙の背広に身を包んだヒト型の悪魔が舞い降りてきたのだ。

「おやおや。これはまた随分と派手にやりましたね」

あまりにも格が違う。声が出ない。

今のメイドなど比べ物にならないほどの凄まじい強者の威圧感が、今にも絶叫したくなる喉を締め付け息をすることすらままならない。

「ちーっす！えっと、ヤルダバオト様！」

「どうもぉ。たった今、この人間たちをぶっ殺すところでしたがぁ、ヤルダバオト

様がやっちゃいますかぁ？」

ヤルダバオト、目の前の男が彼女たちの主君ということか。メイドたちはやや親しげだが、ヤルダバオトも極めて寛大に接していた。そこだけ切り取れば微笑ましく映るやり取りだが、身内の外への冷酷さが際立ってラキュースたちには悍ましく思えた。

「ではお言葉に甘えまして。せっかくの星空ですし、こういう趣向はいかがでしょう〈隕石落下（メテオフォール）〉」

パチンと景気の良い指鳴りが響く。

夜空に赤く燃え滾った巨大な岩石の塊が召喚されたかと思うと、こちらめがけて自由落下で降り落ちる。全ての努力を台無しにする無情の鉄槌だ。

桁違いの力を前に、とっくに死を覚悟していたはずの魂が揺さぶられた。自分たちの命どころではない。こんな者がのさばってしまっては、王国どころか世界が危うい。

誰か助けて。そんな、あまりにも自分らしくない他人任せな嘆願が心から勝手に沸き上がった。

その時だった。

破滅の紅い輝きの前に、一人の黒い影が立ちふさがる。影は場違いなくらい悠然とした佇まいで一振りの剣を構える。次の瞬間、隕石は中心から両断された。

勢いを殺され真っ二つとなった岩石は、建物の両端へと墜落して轟音を鳴り響かせるがラキュースたちは無事だった。

影、はそのまま屋根の穴から飛び降て、悪魔たちと対峙する。雲の切れ間から月光が刺し込んで、見えかねていたシルエットが露になった。

大剣一振りと黒龍の紋様をあしらった盾を持った、漆黒の全身鎧（フルプレート）の偉丈夫。ヘルムからわずかに覗く紅い輝きが悪魔たちを断罪の視線で貫く一方、身を包んだ全身鎧（フルプレート）の漆黒色は夜陰に優しく溶けるようで、場違いな安心感をラキュースへともたらした。

一瞬、誰なのかわからなかった。しかし理性が記憶を呼び起こし、目の前の男がつい先ほどまで顔合わせしたその人であることを強く意識させる。

「モモン!?」

こちらに気付いたモモンは淡々と冷静に状況を説明した。

「襲撃場所はメイドの悪魔に先回りされていたので撃退した。我々の班を二分して、こちらには私とティナ嬢が救援に馳せ参じた次第だ」
「ほんとうに助かりました。あれと同じのを倒したのね……」
無論メイドの悪魔の実力が横並びである保証はないが、先の光景が目に焼き付いた後ではモモンの実力を認めるほかになかった。
「しかしあの三人を前に私一人では荷が重いだろう。時間は稼ぐ。あとは言うまでもないな？」
ラキュースが相槌を打つと、モモンはヤルダバオトへと向き直り毅然と告げた。
「貴様の可愛い部下から目的は聞いた。王都の人間の抹殺だそうだな」
「可愛いなどと、彼女たちが聞けばさぞ喜んだことでしょう。ええそれで目的ですが、おっしゃる通りにございます
八本指が我々を呼び出した召喚対価を、この都市のあらゆる生命で持って補填しようと思いまして」
「ならばこの私モモンに、切り倒されても構わないと言うことだな？」
「困りますので抵抗させていただきましょう。悪魔の諸相 鋭利な鈎爪」

ヤルダバオトが両手の指先から長く鋭い鈎爪を伸ばしてモモンへ向かって飛び掛かり、モモンもまた大剣を構えて切りかかった。

その攻防の激しさはラキュースの動体視力をもってしても目に追いつかず、回転刃のような残像が二人の間で行き交うのを捉えるのがやっと。けたたましく鳴り響く金属音を余所にして、ラキュースは自身と仲間たちに回復魔法を飛ばす

「〈大治癒（ヒール）〉〈大治癒（ヒール）〉〈大治癒（ヒール）〉……〈大致死（グレーター・リーサル）〉」

吸血鬼のイビルアイにだけネガティブダメージの波動を送り付ける。モモンに後で追及されるのではと思わなくも無かったが、なりふり構ってはいられない。今できる最善を尽くすだけ尽くして、後の祭りは後で悔やもう。

モモンが稼いでくれた時間でなんとかチームを立て直し、ベータとゼータが再び迫ってくるのを迎え撃つ。

そして

「……遅くなった」

おそらくモモンに置いてかれたのであろうティナが遅れてこの場に参上する。

敵方魔皇ヤルダバオトと配下のメイド悪魔２名。対しこちらは漆黒の英雄と蒼

の薔薇のフルメンバー。

「みんな、行くわよ！」

今夜、王都内での両陣営最高位の主力戦が行われんとしていた時に、更なる動乱が巻き起こる。

熾烈な斬り合いに少し息を切らしたヤルダバオトは一旦夜空へと後退した。

すると突如、無数の武器がトビウオの様に群をなして一体の悪鬼へ向かって殺到。ヤルダバオトを串刺しにせんと襲い掛かった。

「何!?」

モモンとヤルダバオトがそろって驚愕を口にするとと共に、剣群が差し迫り爆発がヤルダバルトを包み込む。

イビルアイが叫んだ。

「ツアーなのか!?」

ツアー、その名をラキュースたちはイビルアイから聞かされたことがある。

十三英雄の一人『白銀』にして、その真の正体である世界最強の白金（プラチナムドラゴンロード）の竜王。

月明かりと同じ輝きを反射する竜装の全身鎧（フルプレート）は悠然と宙を浮遊し、遥か高いとこ

ろから爆風を見下ろしていた。
「何者だ！」
モモンがここで初めて感情を強く爆発させたような声を挙げる。メイド悪魔だけでなく味方であるはずのラキュースたちにすら、背筋が凍るような戦慄が走った。
比喩ではなくその威圧感に空気が揺らぎ、ラキュースたちの戦闘は手が止まる。
「違う、彼は味方なんだ！」
「糞がああああ!!」
イビルアイが弁明を叫ぶが、モモンは構わず一足飛びに空へと飛びあがって大剣を振りかぶる。
ツアーを敵とみなしているのだ。はじめは誰しもそう思った。
しかしモモンが爆風の横を飛び過ぎようとするときに、振りかぶった彼の剣が金属音を立てて静止した。衝撃で爆風が晴れ渡る。
モモンの一撃を止めたのは、ヤルダバオトの肩に手を回してしがみ付いた、長い黒髪をたなびかせた仮面のメイド少女の刀。
そしてヤルダバオトの背面では、異様な面妖の猫を模した巨大な金像がツアーの

剣群を身代わりのように受け止めていた。
モモンは彼女を狙っていたのだと、ラキュースたちは遅れて理解する。
やがて数舜の鍔迫り合いの後、モモンは自重によって再び着地。ヤルダバオトを前にして余裕の態度を見せていたモモンの突然の変容。若干冷静になったようだが、ヘルム越しにも彼の動揺は激しく伝わった。
「非常に助かりましたが……」
若干冷や汗が垣間見えたヤルダバオトの困惑を余所に、仮面の少女は主人にしがみついたまま高らかに告げた
「私は魔皇ヤルダバオト陛下直轄メイド悪魔が筆頭、アルデバラン・シータ。私は陛下ほど甘くはないのでよろしくね！」
まだこのような超越者が仲間に居たことにラキュースたちは戦々恐々するほかない。ヤルダバオトが吐き気を催す邪悪の権化であるとするなら、アルデバランは殺戮のためだけに叩き上げられた一振りの刃であるようだった。どちらも相手にとって最悪だ。
高みで見下ろすツアーは怪訝そうに尋ねた。

「マタタビ、これは一体何の真似だい？
今の君には未だ悍ましき支配力がとり憑いているようだが、よりにもよってそんな悪鬼に与してるとはね
まったく、彼が知ればどんなに嘆かれることやら」
「ツアー、こいつがそうなのか!?」
ツアーの言葉にイビルアイが驚愕を露にする。
アルデバランの登場に場が一気に混沌として、流れについて行けず敵味方ともに当惑させられる。
しかしツアーは周囲の混乱を切り裂くように剣群を掃射してヤルダバオトとアルデバランを狙い撃った。アルデバランはヤルダバオトにくっついたまま刀を振るい、余裕綽々とそのすべてを直下のモモンへと叩き落とす。モモンもまた盾と刀で防ぎきった。
「一体君が何をしくじったのかは知らないが、どういう状況にせよ一旦殺せば済むことだろう」
「……そうだな」

「ならこっちは自慢の鎧を叩き壊してあげようか？」
「これは少しマズいですね」
仕切り直すようなツアーの言葉に呼応してモモンも殺気と戦意を浮かび上がらる。アルデバランは嬉々として刀を構え、反してヤルダバオトは苦い表情で蒼を顰める。
４人の超越者たちによる戦慄のハーモニーが空気を震わせ、間もなく空前絶後の大衝突が起きるかに思われた。
しかしヤルダバオトはアルデバランの手首を握り、凍えるような声で静止した
「潮時です。天才剣士モモン様と、そこのよくわからない鎧。二人を同時に相手にするには準備が出来てません」
「……はーい、承知しました」
「そう易々と逃げれると思うのかい？」
撤退指示に肩を下げるアルデバラン。
対しツアーは逃がすまいと剣群の発射体制を整えるが、ヤルダバオトに焦る様子はない。

「ここで戦うよりは断然易い。お互いにね
『吸血鬼を討て』」
「動かない!?」
「ぐっ……これはっ！」
「体が勝手に！」
「チクショウが！」
ヤルダバオトの号令にラキュース、ガガーラン、ティナ、ティアの体が操り人形のように突き動かされる、ゼータとベータの合わせて６人でイビルアイを囲んで武器を突き付けた。
「卑怯だぞ！　悪魔！」
「馬鹿々々しい、空が青いと言って何になるというのでしょう。ではアルデバラン、頼みますよ」
イビルアイが質に取られたことによりツアーの攻撃の手が緩む。
その隙にアルデバランは両手を強く叩き合わせて音を響かせた。
「〈暗影融解（メルトシャドー）〉」

するとアルデバランとヤルダバオト、ベータ、ゼータの姿が突然渦巻き向きに歪む。

やがて渦巻の中心の中に４人はそれぞれ消えていった。

次回、全ての元凶オリ主の見苦しい言い訳が木魂する！

言い訳と言う名のエッセイ

毎度誤字報告してくださる方、どうもありがとうございます
今回は言い訳と言う名の説明回です。内容がちょっと重そうなので前後編にわけます。
とある原作キャラの性格をかなり残念な方向に捏造しました。
糞だなと思ったら迷わず１ｏｒ０評価へＧＯ！

◆◇◆

私とデミウルゴスさんとルプスレギナさんにエントマさん。４人同時で転移スキルで仮拠点の御屋敷に戻ると、まず案の定３人からの訝しむ視線がグサグサと突き刺さります。
「なんすかアルデバラン・シータって。新妹が出来たなんて聞いてないっす」

「そもそもぉ、あんたが前に出てくる予定も無かったじゃないのぉ。　あのへんな鎧のこともしってるんでしょぉ？」

「……これには訳がありまして」

「私が聞きましょう。エントマとルプスレギナは下がってなさい」

デミウルゴスさんが険しい表情でそう言うと、煮え切らない気分を残しながらも二人は下がって行きました。

座るように促された私はソファーに腰かけて、デミウルゴスさんも向かい側に座りました。その空気はさながら教師と職員室に呼ばれた問題児でした。

「口にするのも馬鹿々々しいが、君が鎧のことを忘れたと言ったのが嘘だったのは始めからわかっていたよ」

「バレバレでしたか」

今更ながら筋の通らない嘘をついてしまったものだ。

シャルティアさんやアウラさんとの交戦記憶は残ってるのに、ツアーだけピンポイントで忘れるのは明らかにおかしい。

もっと言うなら、それが今まで誰からも言及されなかった事態はさらに不自然

だった。
「アインズ様が君の明らかな嘘を追求しなかったなら、我々にもそこに手出しは出来ないんだよ。
いい加減に認めたまえ、アインズ様はキミに甘いんだ」
おっしゃる通りだ。私はどうしようもなくアインズ様から厚意を受けている。
私がそれに甘えてしまえば、案の定こうなってしまうのだからいっそ嫌われてた方が楽なのに。
だがもはやその厚意を認めないということは、目の前の自身の失敗を見逃すのと等しいので逃げ場はない。
「……ずっと、わかっておりました。そのせいで私はデミウルゴスさんを殺しかけてしまったんだからね」
そうだ。悪いのは全部私だ。先は運よく防げただけ。
私がちゃんとツアーのことを周知してれば、万が一ということもまず無かった。だから全部が全部私のせいなのである。
「勝手に自分のせいにする前に、まずは先ほどの状況に至るまでの経緯を話してく

れないかい？　責任問題はそれからだ」

「ああそうでしたね。まず謝らなきゃいけないのが、あの鎧を王都に招いてしまったのは私だと言うことです」

デミウルゴスさん頭を抱えます。本当にごめんなさいだ。

「厳密に言えば、私がゲヘナ作戦に誘われる前に発動していた影分身ですね。その分身の私が、本来は中立に位置していたはずの白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）に接触したところ、不用意に刺激してこの地に呼び寄せてしまったのですよ」

自分で言ってはアレですけど、これではデミウルゴスさんやアクターさんには止めようもありません。

やっぱり九分九厘の責任は私なのでした。

むしろ私のウソを見抜きつつ、鎧の奴に備えて対応経験があるはずの私を遊軍に設置していたデミウルゴスさんはＭＶＰと言えるでしょう。

……いやそれ無くても今回の仕事では十二分にＭＶＰだったけどさ。

「……あらすじは結構だ。私が聞きたいのはそこの更なる詳しい事情だよ。そもそもキミがあの鎧のことを秘密にしたことも含めて、どういったやり取りが

あったのかをつぶさに聞かせてくれたまえ」
あぁやっぱり怒っていらっしゃる。そりゃそうだよね。最悪デミウルゴスさんやアインズ様に危害が及ぶこともありえたんだし。
でもま、私も悪いと自覚しつつ全て織り込んでの行動であり秘密だった。
もはやツアーが表舞台に出てしまった以上、秘密も行動も全て無駄になってしまったけれど。
だから、今の彼に対する最も誠実な態度は素直に叱られてることじゃない。やらかしたなりに責任もって、自分の意志を貫くことだろう。
あまりしたくは無いのだが、開き直りと言う奴だ。
「失望してくれて大変結構です。あなたはただ、本人の意思を汲み切らず勝手に期待して勝手に失望しただけ
あなたたち奴隷と一緒にされちゃあ困りますし、奴隷の奴隷にだってなってやるほど親切でもない。どっかの誰かさんと違ってね」
「……ではあなたは状況次第では、ナザリックやアインズ様に対して反旗を翻すことがあるということですか？」

「場合によってはそうですね。生憎と、恩を仇で返すのは昔から得意ですし
まぁその話は置いときましょう。ともかく私は私の価値観と考えで嘘をついた。
それを知りたいと言うのなら、精々覚悟しておくことです
これはお前たちの悲劇でもあるのですから」
「いいでしょう。どうぞ話してください」
「ややこしい事情なので長い話になりますよ。
手始めに私の生い立ちと、私の父がたっちー・みーであることから話さなければいけません」
「は？」
わかる。わかるよその反応。
私の生い立ちから話さなければいけない理由もそうだけど、どうしてアレから私が生まれたのか私自身でも不思議なくらいなのですから。

◆　※以下回想

自分語りは好きじゃない。私は底の浅くて薄っぺらいただの親不孝でしかなく、そんな奴の話を聞いても面白くもなんともあるまい。

それでも話さなくてはいけないなら腹をくくるしかありません。でははじめましょう

佐々木桜（ささきさくら）は父正義（まさよし）と母燈子（とうこ）の間に生まれた一人娘。

父は公安所属のエリート警察で母はどこぞの財閥の幹部の一族。社畜と言う名の奴隷制度が復興し大気や海洋はことごとく汚染されてディストピア極まった時代において、極めて恵まれた一握りの富裕層として私は生まれた。ところが非常に悲しいことに、父と母は娘には恵まれなかった。

小学校の入学前から両親にも不安はあったでしょう。

幼少期から急カーブを描いて螺旋くれた性根に育ってしまった奴が、同年代の少年少女と共に箱詰めされればどうなるか。

案の定、私は金持ち私立学校の閉鎖的な雰囲気に耐えかねて盛大にやらかした。ある時は小学生のガキ臭い恋人ごっこを嘲笑して怒った男子と殴り合った。女子グループから靴隠しなどの陰気ないじめを受けた時は、仕返しにそいつら全員の靴も

ごみに捨てた。教師にチクられた時には学長の電子端末を盗み見て横領の弱み握って封殺した。などなど他にも色んな黒歴史があり、結果問題児中の問題児となったわけ。

・

ん？　どうしてそんな風に育っちゃったのかって？　さてどうしてなんでででょうね。

責任転嫁するつもりなんて毛頭ないけど、ひょっとしたら父と母にも多少なりの落ち度はあったのかもしれません。

まず第一に、父は警察仕事が忙しのであまり家族と接する時間を作れません。

くわえて父は一級フラグ建築士並みにモテモテで、同僚や上司や後輩や幼馴染や実母や義母や姉や義妹や果てや捜査中の犯罪者など多くの女性から色目を使われておりました。

父自身に自覚は無く極めて母に一途なのですが、それでも母は不安でしょう。父が留守の家にて母と他の女性が昼ドラよろしいキャッツファイトを繰り広げいたのを、私は物心つく前から眺めておりました。私に対し「ウチの子にならない？」と

まで言ってきた女性もいましたね。

神経過敏をこじらせた母が、童心に「ぱぱのおよめさんになるぅ〜」などとほざいた私に殺意の眼差しを向けてきたことは今でもトラウマです。あとで泣いて抱き着き謝ってきたのも含めて。

私の性根が歪んだ原因が家庭にあるなら、おおよそその辺りではないでしょうか。確かなことは言えませんし、自分自身の性格の責任を環境に求めるのは私の主義ではありませんが。

ちなみに問題児扱いを知った母が父に個人指導のVR教室への転校を勧めたこともありましたが、「ここで逃げても将来同じことで苦労することになる」と身内に厳しい父は差し止めたそうです。結果その通りでしたしいかにも父らしいと思います。

・

閑話休題。問題児の烙印を押されて孤立し母親の心労を側で労う私でしたが、そんな中で一つ楽しみがありました。

父が仕事の時間の合間を縫って、剣道のオンラインVRゲームにて剣術指南をし

てくれたことです。

正直剣道自体はあまり好きじゃなかったのですが、父と真正面に向き合える機会がこれくらいだったので当時はかなり真剣に取り組みました。おかげで父に「神童」とお世辞を言われるくらいには習得できたのです。

ところがそれで調子に乗って、リアル剣道小学生の部大会に出場してしまったのが全ての間違いでした。

運よくそこそこ勝ち進めたのですが、翌日のブロックであたる相手さんが小学生とは思えないくらいデカかったので私は盛大にビビりました。ところが私の心境に反して両親の期待はすさまじく、どうにかして勝てないものかと足りない頭を悩ませます。

悩みに悩んだ挙句、ネットの怪しいサイトからドーピング薬を購入。そして本番直前で使用したところ拒絶反応でぶっ倒れて救急搬送とつながります。原因が判明した結果ニュースでも取り上げられるくらいのちょっとしたニュースになったのですが、何故かメディアが叩くのは私ではなく両親でした。両親くらいは私のことを盛大に叱ってくれると思いきや、むしろ泣いて謝られたのです。

その時の父の顔には誰かにぶたれた跡がありました。母がやったのに間違いありません。

当時の私は二人の喧嘩の原因である自分がいなくなれば仲直りするもんだと短慮して、小学生の身で家出を決行。

例の「ウチの子にならない？」オバサンの元に転がり込んで二人が仲直りするのを待ちましたが、後日両親が離婚したのを知りました。

嬉々として父に再婚を申し込もうとはしゃいだオバサンを殴りつけ飛び出し、私はそこから単身で自立生活を始めました。

その頃からですね、母親の旧姓である夏梅（なつうめ）を名乗り始めたのは。

時代柄、身寄りの無い小学孤児は珍しくありません。

それにくわえ一般校での中卒に匹敵する金持ち小学校の中退学歴のおかげで、私はどうにか働き口を得られました。

やがて生活が安定し出したころ、久しぶりに剣を振ってみたいなと思って購入したVRゲームが【ユグドラシル】。

よりにもよって初参加したクラン：ナインズ・オウン・ゴールのリーダーこそ、

父親である たっち・みー だったのです。

一応師弟だったこともあり、互いの剣筋で身バレするのは間もなくでした。

どうやらクランメンバーづてに聞いたところ、私が自活するようになって間もなく元の奥さん＝私の母と再婚できた模様。なんとか一時の喧嘩で済んだようです。

それで たっち・みー の方からお家に帰ってきて欲しいと催促があったのですが、私が戻って元の木阿弥になったら耐えられません。最初は「まともな妹か弟でも育ててやがれ」と言っては聞かせ追い返したのですが、それでも執拗に近づいてくるので本格的に拒絶しました。（ちなみにその後妹は出来たそうです）

すると反抗期と言う奴ですね。拒絶しまくってるうちに本気でウザく思えてきて、本気で嫌がらせを始めたら最終的にクラン崩壊レベルの炎上が勃発。

まったくクランの皆様には、親子のゴタゴタに巻き込んでしまい誠に申し訳ありませんでした。ｏｒｚ

◆

「というのが話の入り口になるのですが……えっと、デミウルゴスさん聞いてるの

？」

例のごとくリアル用語などは差し替えてお話ししたところ、デミウルゴスさん上の空で「ほへぇ～」となった。

なんか顔白くなってるけど大丈夫かな。

「……正妻筆頭どころか後継者……いやしかしこんな奴にナザリックを……」

こんな奴発言にはちょっとグサッとくるが、まぁ甘んじて受け止めるほかにない。

話したくなかった理由の一つは、こうなることが目に見えてたいたからだ。

「悪魔がＳＡＮ値でやられてるんじゃありませんって。ほらほらキャラ崩壊したらウルベルト様が泣きますよ？」

「っ！　これは失礼しました。ナザリックの今後についての話はまた後日として、話の続きをお願いします」

創造主への言及があまりにも効き目あったようです。

キリッという効果音が幻聴するくらい一瞬で立ち直りました。ＮＰＣとはなんとも面白い生き物ですね。

「要約すると私とたっち・みー……様にややこしい親子関係があったというわけで

すが――」
「端からまとめて話していただきたかったです」
うるさい。
「ともかくそんな親子関係を鎧の奴、つまりツアーの野郎が知ってやがってですね。それが事の発端なわけです」

我ながら親子設定無駄に引きずり過ぎました
いっそ要らないのではとか思わなくも無かったけどまぁいいや
オリ主の桜と言うは名前はサークルクラッシャーをもじったものです
アンケートというのが出来たらしいと今更知ったので使ってみました。今後の展望に関係するかも……

番外編２世界を愛する君に焦がれて

Q.今後ほかのギルメンは登場しますか？
A.あれ出るって言えるのかなーまあ秘密　by むちむちぷりりん

回想が馬鹿長いです。ご注意ください。

※以下回想
◆◇◆
佐々木正義（ささきまさよし）は未練がましくだらしのない男である。
長女の桜（さくら）が家出して、それが契機で妻から離婚を切り出された。

離婚した後時間がかかってどうにか妻には許しを得たが、独り立ちした桜の足取りは掴めなかった。正義は失意のうちに、逃げるように【ユグドラシル】にのめり込むことになる。

しかし数奇な運命の下【ユグドラシル】にて父と娘は再開を果たした。

桜は正義を表面的には拒絶したが、それが桜なりの愛情表現であることを正義は理解していた

悲しいことに桜は父を恨んでいない。全ての責は自身にあると子供ながらに背負い込み、自分の存在を両親から突き放したに過ぎなかったのだ。

父に似て、言っても聞かない頑固者。帰ってくるよう催促しても、彼女はいつも口癖のように「まともな妹か弟でも育ててやがれ」と言っては、両親夫婦の安寧を望んでいた。

しかし彼女の赦しがあったおかげで妻との関係は良好となり、妹の椿姫は無事に生まれた。

とある騒動により桜はゲーム仲間の内輪からこぼれたものの、それでも平穏無事な様子が伝わるだけで親としての喜びが確かにあった。ウルベルトと言う男に懐い

たのは非常に不愉快極まるが。

長女の反省もあって、妹の椿姫には育児休暇できっちりと父親としての時間を作っていた。しかし椿姫が育っていくにつれ、休みを取るのもままならなくなってくる。

ならば【ユグドラシル】に費やしていた時間を当てる他にない。今後はゲームにかまけていた時間を削って、父として娘と向き合っていかなければならなかった。それは妻にも、そして姉の桜にも口うるさく散々言われていたことであった。

正義の胸の内にはかつての過ちが刻印の様に根付いていた。

正義は自身の未練がましさを自覚していた。

【ユグドラシル】を引退するときキャラクターデータだけでなくゲーム仲間との連絡先も消去したのはそのためである。

ゲーム仲間に、そしてもちろん桜に対しての心残りは語るまでも無い。少しでも繋がりが残されていたら、せっかく引退しても堪え切れずにすぐに再開してしまうだろうという懸念は半ば確信に等しかった。

それでも娘と二度と会えなくなる決断をとったのは、他ならぬ桜自身の切なる願

いによってであった。

『マサヨシあんた、またそーやって奥さんと娘さん泣かせる気ですか？　いい加減懲りろよ、私に』

まだ見ぬ妹への健やかに育って欲しいという希望。もしくは自身が二度と家庭崩壊の引き金になりたくないという臆病心。

感情の形は何であれ、それが彼女の優しさには違いない。

家出娘が両親一家の幸せを望むなどあまりに親不孝で矛盾した願いだったが、最早それを咎める資格を正義（まさよし）失っている。

せめて娘の望むがままに身を引くことしか彼女のためにしてやれることはなかった。

『本当にすまなかった。せめて息災無事であることを祈らせてくれ』

『マサヨシこそもう家に変な女を入り込ませるんじゃないですよ。母さんが可哀そうです』

少々歪ながらも、こうして一つの父と娘の物語は終幕を迎えた。

かに思えたがそうでもなかった。

佐々木正義は未練がましい男である。

【ユグドラシル】のまとめサイトにてマタタビが『屋台崩し』の忌み名でギルド荒らしをしている評判から、遠目に息災を見守るくらいには。

そして【ユグドラシル】最終日に突如気が向いて、妻と共に新キャラを作ってログインを試みるくらいには。

ナザリックに侵入してるだろうとアタリを付けたまでは良かった。しかし、いくらサービス終了間際で敵ＭＯＢが活動してないと言えど、転移もできないレベル１アバターではナザリックのあるヘルヘイムの「グレンデラ沼地」の奥地までの移動は不可能であった。

夫婦は案の定の失敗に互いを慰め合ったものの、笑い合ってサービス終了の時間を迎えることができた。

ところが日付が変わった次の瞬間――

◆◇◆

ゲヘナ作戦開始当日の朝

アゼリシア山脈最高峰：スモッソルブ・リーチェ

マタタビの影分身は、マジックアイテムで召喚したマンモス君の背に乗って雪山の峰を進んでいく。彼女は黒いコートを身に纏って赤毛の耳当てに白い羽毛のついたフードを上から被っていた。

影分身の姿は発動時に本体が装備していた神器クラスの服装そのまま。再現できる装備の魔力情報は最大でも20レベル相当に制限されているが、氷点下17度程度の環境であれば順応するには十分だ。

マンモスに若干の方向指示を出しつつも、轡の上でぬくぬくと丸まっていた影分身は暇だった。

この世界に転移してからの数少ない娯楽の一つである書物でも読んでみようと試みはしたが、風が強くてページが吹き飛びやってられない。それに書物に霜がついてしまっては溜まったもんじゃない。

もっとちゃんとした防風や耐雪のアイテムを持ってくればよかったかと後悔もしたが、本体にしてみれば吹けば飛ぶような影分身に持たせるのもいかがなものかという葛藤もあった。

一応荒事になった時のために例のごとく傭兵ＮＰＣのハンゾウ君をつけてはいる。けれど25レベル程度の能力しか持たない影分身としての弱者の意識は根深かった。

ある意味それはこの世界の住人の立場に隣接できる極めて貴重な経験と言えるだろう。もしくは元の世界で弱い人間だった夏梅桜の立場に近寄ることにもなるかもしれない。とはいえ歓迎できることではない。

時々誰かから忘れられそうになるが、マタタビはケット・シーという異形種だ。なまじ人の姿に化けられるから尚の事。人と人外の行ったり来たりに、若干の生きづらさをおぼえる自分は確かに居た。所詮は小さい悩みだが。

目の前の、アゼリシア山脈の雄大さに比べれば全く大したことは無い。

しかしどうして大きく高く隆起した岩山に雪が被っただけの光景に、こうまで心を奪われるのだろう。

真白い山肌の上をゆらゆら這っては漂う靄も空気中の水分が冷気で凝固しただけで、やたら遠くの景色が見渡せるのも高所でなおかつ空気が澄んでいるから当たり前。

当然ユグドラシルでのヴァーチャルリアリティとも違うし、実体はあっても人工物だからか転移後のナザリックにおける6階層の森林や5階層の氷結地獄で感じた体感とも全然違う。

何者かの意図にかかわらず自然に形成されたという事実が神秘性を脚色しているだけなのか。それとも大自然の意志とやらを、ケット・シーである私のやたら鋭敏な感覚が無意識に受け取っているのか。元々私は心霊とか森の精とかは信じないタチだったのだが、剣と魔法の世界に流れ着いて今更、冗談で思いついた大自然の意志とやらも馬鹿には出来なかった。

もっともソレが私たちに悪意でも向けてこない限りには、ただ目の前の雪景色がきれいだなと思えたらそれでいいのかもしれないが。

かくしてとりとめのない思考を浮かべては掻き消し時間を空費していたが、そろそろ目的地である山頂が近くなった。

嫌でも現実逃避から引き戻される羽目になる。回れ右して帰っていいような気もしたが、道幅が狭くてマンモス君は旋回できない。

いっそ分身を解除したくなったけど、そもそも分身がここに来たのは本体が行くの嫌がったから。どうせ逃げても哀れな分身が贄に出されることだろう。せいぜい本体には、分身解除の時に嫌な気分になってもらおう。

とうとう山頂へと辿り着くと、そこには一人の老婆が待ち受けていた。細身の老躯ながらに杖も持たず、佇まいも歴戦の強者と言った風貌だ。

紫の刺繍が縫い付けられたおしゃれな黒いローブ。その下の顔は年齢相応な深みを感じさせる一方で、気安くも豪快そうな親しみやすい雰囲気も纏っている。

老婆はマンモスに乗った私の方を見上げてにっこりと笑ってみせた。

「よく来たねぇお嬢ちゃん。待ちかねたよ」

「てっきりあの鎧のツアーが出てくると思ってたのですが。時間指定も無かったのにおばあちゃんどのくらい待ってたの？」

「気にせんでいいさね。たまたまあたしが会いに言ったら、ツアーがちょっとだけここを空けるっていうから留守番を任されただけさ

元々あたしもあんたには興味があったしね。なぁサクラちゃん」

見た目通りに、やたら力強い元気な声だ。

私はマンモスの上から飛び降りてザクリと雪山に足を埋めた。
「そういうあなたはひょっとして、死霊使いのリグリット・ベルスー・カウラウさんじゃあないですか？」
「アタシのこと知ってたのかい」
「お互い様でしょ。それにおばあちゃんは有名人ですし」
この方もやはり私のことを知ってるようです。
以前ツアーと遭遇した時に十三英雄「白銀」を名乗っていたので、後日それ関連の英雄譚を読破して予習はとっくに終わってます。
服装とか容姿とかからの当てずっぽうでしけど、どうやらビンゴだった模様。
「なかなか悪くは無い響きだね、そのおばあちゃんっていうの。まるで孫でもできたようだよ」
「一人身なんでしょう？　雰囲気で分かりますよ」
「ハハッ、言いおるわい。でもサクラちゃんも気をつけな。女の方が強いと男は靡いてくれないもんだ。その点そこのソイツは惜しかった」
私の軽口を年の功であっさり流したリグリット婆が、横眼と親指を向けた先に

あったのは二つの墓石だった。
左右それぞれの台座には宝石を散りばめてあしらった魔法の杖と、鞘に納められた金色の宝剣が奉納されている。
分身がコピーした〈地味子の眼鏡〉は魔力の大半が消失していたが、何とも都合の良いことに文字読解の魔力情報だけは微かに残されていた。
墓石に横書きで書かれていた文字が翻訳されて、脳に情報として刷り込まれていく。
最初から予想はしていたが、それでも外れてほしかった可能性だった。
私の嫌な予感は凄く当たってしまうので、ナザリックの連中には言わないでおいた。
裏切るようで悪かったが、それでも間違いではなかった。間違ってたほうがマシだった。
ササキ　トウコ　　ササキ　マサヨシ
桜の両親の名前。同姓同名別人だなんて逃避できるほどの余白も無い。
最悪だ。糞オブ糞だ。

「……ツアーが私にブチ切れてたし、どうせこんなこったろうと思っていたよ」
知ったか振ったようにして虚勢でも張らないとどうにかなってしまいそうだ。
セリフの割に、こみ上げる吐き気を抑え込むのに精一杯。両手で顔を押さえ思わず雪面に膝まづいててうずくまった。
私のあずかり知らぬところで、あずかり知らぬ妹とでもむつまじく幸せに家族してればよかったものを。
それなのに、いったいどうしてこうなった。
間違いだらけの人生で、私はまた何を間違えたと言うのだろうか。

「顔を上げな、サクラちゃん。酷な運命ではあるが、サクラちゃんにはすべてを知る義務がある。
もっともマサヨシは嬢ちゃんに真相を知られることを望まなかったがね。遺言は破棄したが所詮死人に口なしさ」
知られたくないか。所詮親子で考えてることはいっしょか。
甘ったるい……マサヨシらしい。あなたの仲間だ。あなたの死因(わたし)が何も知らずに

安穏としてくれることを望むほど、あなたの仲間は薄情になれるわけがないのに。

「ついてきな」

リグリットの靴先が地面に出っ張った石を踏みつけると、地面に埋もれてガチャリと音がした。

隠し扉だ。何かのからくりで岩肌が持ち上がって、下に続く大きな階段が口を開いた。

リグリットに続いて私もそれを降りる。

マンモス君とハンゾウ君は寒天の中で悪いが留守番をしてもらった。

天井で等間隔に鎖で吊るされた蒼い結晶の儚い輝きが、暗い通路を仄かに照らす。

階段を一段一段と降りていくにつれ、血が上って蒸気した脳漿の温度もゆっくりと冷やされていくようだった。

長い階段を下り40分ほどかかって最下層へとたどり着く。既に思考は凍え切った諦観に支配されていた。

大きな両扉の前に立って見上げると自動扉なのか勝手に開いて出迎えられた。

扉の先は通路までとはまるで別世界のようだった。

それは荘厳な雰囲気を一帯に纏った青白く輝く大聖堂。空間は半球状に直径２００メートルの広大な間隔を開いた。

純白の大理石が六角に切り出され立ち並び、紺碧の壁面には無数にして多彩なる宝石が散りばめられて星空の如く輝いている。天井には壮大な壁画。多種多様なる姿の者達、ドラゴン・獣人・悪魔・天使・ゴブリン・トロール・鳥人・ドワーフ・エルフ・人魚・アンデッド・スライム・巨人・ゴーレム・人間その他有象無象などが団結して邪悪な有象無象と戦いを繰り広げるという迫力の一枚絵。

絵の中心には階段にあったのと同じ、しかしサイズは10メートルほどの桁違いに巨大な結晶が埋め込まれて聖堂を照らしていた。

そしてその直下、円形の台座の上に尻尾をくねらせ佇むのは巨大なドラゴン。

ここがボス部屋だとしたらボスは間違いなくこいつだろう。とっさに連想したのはナザリック10階層にて至高の金杖を掴んで玉座に腰かけるアインズ様だ。

鎧越しで感じた時とはわけが違う威圧感。もちろん今の自分が分身だから過剰にビビってると言うのもあるだろう。けれど相性的に考えても、本体がこれに勝てる可能性は極めて低い。

タイマンで勝てる可能性があるのは、そこそれ鱗越しにも超火力でゴリ押しできるウルベルトかトップクラスの能力水準と超人的な戦闘センスを持つ全盛期たっち・みーくらいではないかと思う。

「やぁ、随分来るのが遅かったじゃないか。しかもよこしてきたのが分身とはね」

身が竦んで半歩下がった私を尻目に、まるで安心させるように慣れた調子でリグリットが笑う

「よしてやんな、ビビってんじゃないかこの子。あたしにはそんなに悪い子には思えないんだが」

「本人の善し悪しにかかわらず危険人物ではあるよ」

暫定敵ながら、なんてわかりみが深すぎる一言。

「まぁ大目に見えあげるよ。なにせ君は待ちかねた客だからね。それじゃ話をとっとと終わらせようか」

※以下回想

◆◇◆

世界の頂点。

極めて退屈ではあるものの、その場所の居心地は決して悪いものでは無い。

ツアーがその座を手にしたのは４００年と少し前のことである。

八欲王のプレイヤーたちが同士討ちにより全滅後、残された従属神は当時世界最強の竜王であったツアーに一つの交渉を持ち掛けた。

ギルド武器を預かって守り抜いてほしい。そうしてくれればこれ以上この世界を侵すことはない無く、天空都市に残された財宝も好きなだけ持ち出してくれて構わない。

生まれ持った力のままに孤高に生きる竜王種にとっては世界の平穏など些末なことだ。

しかし八欲王の財物と究極の至宝であるギルド武器を手に出来ると言われては、竜種の本能が断ることを許さない。

当時のツアーが彼らの願いを聞き入れたのは、あくまで俗的な欲望に心動かされたからに過ぎなかった。

そして八欲王の従属神はギルド武器と共に、それを守り抜くための堅牢なる防衛力を伴った絢爛な大聖堂の住処を与えた。

それから時は流れ２００年後。やはり退屈ではあるものの、至高の財宝たちを囲んで寝過ごすだけの日々はある種満たされていた。

下界では従属神が暴走した魔神とやらが世を滅ぼす勢いで荒れ狂っているようだったが、ツアーにはやはりどこ吹く風。

ツアーの住処にも財宝の噂に時折迷い込む馬鹿者どもが現れたが、ブレスの一息でその全てを灰塵とさせ外の吹雪の中に混ぜるだけ。

しかしある日、一人の男がツアーの元を訪れることによって世界の在り方が大きく変わる。

そいつはツアーの持つ財宝や住処をも意に介さず、ただ真っ直ぐにツアー自身を見据えていた。

「世界最強の竜王よ。その力、魔神の悪逆に曝された弱き者達のために振るってはくれないだろうか？」

男がツアーに求めたのは財宝ではなく、ツアーの力そのもの。

男もそこそこ戦士としての力を修めているものの、ツアーからすれば吹けば飛ぶようなか弱い男。力の差は歴然であると言うのに男は一切竦むことは無かった。故に男はこの地に訪れた者達の中でも最上の馬鹿だった。

財宝を奪いに来るなら追い返さなければならないが、ツアー自身を奪えるものはこの世に居ない。

無益な殺生は血飛沫で住処を穢すだけだったので、ツアーは僅かな鼻息を吹いて男を壁際へと吹き飛ばした。

体中を叩きつけられた男は全身に打撲痕をつくり床へと沈みこむ。

死んではいないが瀕死の男をそのまま放置と言うのは気分が悪い。なので魔力で駆動鎧を動かして外の寒天に放りだした。

男が凍死するのは時間の問題と思われたが、しかしその寸前で何かの通りすがりが回収したようだった。

その時は、どの道生死どちらに転ぼうが再びツアーの前に姿をあらわすことはあるまいと思っていた。

ところが男は懲りずに翌日もやってきた。
「話を聞いてくれ！」
話を聞かずに鼻息で吹き飛ばした。
今度は外で待っていた何者かが回収したようだった。
「頼む！」
次の日も来た。吹き飛ばした。
「世界の危機なんだ！」
吹き飛ばした。
「キミにしか出来ないことだ！」
吹き飛ばす。
「」
吹き飛ばす。

こうしてツアーには、何度も何度も性懲りもなくやってくる男を鼻息で吹き飛ばすという謎の日課が出来た。

鬱陶しくはあったが所詮来るのは日に一度。退屈を紛らわせるには適度な加虐趣味であると思った。

それを一か月ほど続けたところ、興味深い変化が現れた。

ツアーはいつものように問答無用で鼻息を吹きかけた。最初は死なない程度にと手心を加えていた鼻息だが、日々耐え凌いで命を繋ぐ男の姿に興が乗って今では若干の火炎すら混ぜている。今日も同じように吹き飛ばせるだろうと思いきや、なんと男はその日とうとう両足で大地を踏みしめて耐えきってしまった。

「ほぅ」

面白いことがあるものだ。幾度も生死の境を行き来した結果、ツアーの鼻息を持ちこたえられるまでに身体能力が向上したようだった。

最初は半死半生であったのに僅かひと月でこうも成長するものか。竜種とて成長の上限は底知れないが、変化が目に見えるようになるには10年の歳月が要るというのに。

「名はなんというんだい、ニンゲン」

「佐々木正義（ささきまさよし）だ。」

その日、男は初めてツアーの口を割らせることに成功した。

◆

「六大神のＮＰＣ……じゃなかった従属神が暴徒と化している。彼らを鎮めるには世界中の全種族が団結して戦わなけらばならないんだ

何より世界最強種である竜王の力は欠かせないだろう。どうか協力してはくれないか？」

話を聞くに、ササキ マサヨシと名乗った男は下界で行われている魔神戦争とやらの代表戦士の一人なのだという。

悪化している戦況を打開するために伝説で知れていたツアーの元へ訊ねてきたらしい。

もちろんツアーには知ったこっちゃあない。

「他所を当たってほしいね。所在は知らないがニンゲンに所縁のある七彩（ブライトネスドラゴンロード）の竜王あたりなら手伝ってくれるんじゃないかい？」

「力ある竜王には皆、七彩（ブライトネスドラゴンロード）の竜王や常闇（ディープダークネスドラゴンロード）の竜王にも当然接触は試みたんだ。

けれどその時は問答無用で即殺された。その時は仲間が私の死体を取り返してくれたおかげでどうにか命を取り戻せたんだが。

だから私を生かして返してくれたキミが、一番話を聞いてくれる可能性が高かったんだ。そして現に今、こうしてキミとの対話が成立した」

なるほど二度も死に目に遭えばツアー相手に希望を見出せるのも納得――出来るわけがない。

それでどうして諦めるという選択肢に至らないのかツアーには理解できなかった。

「僕も君を生かして返す気なんてさらさら無かったんだけどね。そこまでの強さがあれば僻地で隠れて生き残れるものを、キミは戦闘狂か何かかい？」

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前。せっかく生まれ変わったんだ。それなら自分の信条に正直に生きていたい」

もはや狂人の戯言である。

それはそれとして、自身が他の竜王よりも手ぬるかったという事実がツアーの自尊心を微妙に傷つけた。

少なくとも男が他の竜王よりもツアーのことを侮ってると言えるのは確かである。

思えば一か月も生かし続けたのは温情あって余りあり過ぎる。竜王にはふさわしくないだろう。

ツアーは腕を振り上げ男の頭上の寸前で爪を止めた。

「ポリシー通りに死ねるなら本望だよね。それと死体は灰にして吹雪に混ぜてしまうから、現世を心配することもなくなるよ」

「キミたち竜王は本当に可哀そうな存在だよ」

「どうしてそこで同情の言葉が出てくるんだい？」

男は、マサヨシはツアーを見つめてあろうことか哀れんだ。死への恐怖より先にそれが出るのモノなのか。

「この聖堂に勝る芸術はないのかもしれない。ここに置かれた財物こそ至高のものなのかもしれない。

キミはそれを抱えたまま世界の頂点に一人きりで永遠に生きていくことになるんだ。それがどれだけ哀しいことかわかるかい？」

わからない。

一人きりを寂しいと思える感性なんて、竜種には生まれつき持ち合わせていない。本来それが必要なのは力なき弱者だけである。

「残念だ。君こそが世界を救うもっとも偉大な竜王であると信じていたのだがね。結局他の竜王たちと同じく力があるだけのくだらない存在だったんだね」

「……今なんて言った？」

◆

演技では無かっただろう。その時のマサヨシは心の底からツアーを救世主だと信じていた。

しかし煽り文句と受け取ったツアーは逆切れして下界に駆動鎧を送り込み、結果魔神戦争で大戦果をあげることになった。

そこで英雄として下々の者に崇拝される気分の良さが癖になり、以降度々力を振るい続けることとなる。

やがて時間がかかってリーダーであるマサヨシや戦友たちとも気心が知れるようになり、ツアーに生まれて始めての仲間が出来た。

その後しばらくしてリーダーと彼の妻だった神官のトウコが ぷれいやー だった知れるようになる。

弱い ぷれいやー がいるとは知らなかったが、二人の底なしの成長の所以が知れて納得した。

「この世界は美しいが、それを蹂躙するプレイヤー達には同族として反吐が出る。元の世界のように大地や空が穢されてしまうようなことがあってはならない」

世界が美しいなどと、これまで聖堂に閉じこもっていた時には一度も思わなった。

しかし駆動鎧を介して世界を見聞することによって、ツアーの価値観は変わっていった。力なきものと見下していた下界の者達も、それぞれの特徴が現れ出た興味深い文化や歴史を持っている。ドワーフの製鉄技術然り、人間やエルフの駆使する位階魔法の多様さ然り、クアゴアの採掘能力然り、スライムが衛生問題の解決に一役買っていたりなどほかにも様々。

魔神戦争が終わったら一致団結していた各種族は再び敵対することだろうが、それは凄く惜しいことに思えた。

リーダーに「王様をやってみたいかも」と言ったところ、元の世界とやらの革新

的政治知識を嬉しそうに伝授してくれた。民主主義とか選挙とか学校とか社会保障とか株とか色々。全てを覚えきれはしなかったが、現在のアークランド評議国が多種族国家として成功したのはリーダーの知識があってこそであった。

話を戻し、各隠しが時価色々あって、れいどぼす の一種とかであった神龍を滅ぼしようやく終結した。

しかし悲劇が起きたのは、終戦打ち上げの夜の宴が終わってすぐのことだった。

そもそも二人が魔神戦争に参戦した理由の３つあった。

１つがプレイヤーとして同族が招いた災厄にけじめをつけること。

２つめが次女のツバキが残された元の世界に帰る手立てを見つけること。

３つめがもしかしたらこの世界に来ているかもしれない長女のサクラを探すこと。

娘の自慢話については、トウコやリーダーから旅の道中で散々聞かされたものだった。八欲王たちに匹敵する能力値を誇り、リーダー並みの神かがり的な剣技と多様な戦闘スタイルを駆使し厄介なマジックアイテムを山のように持っているとい

う冗談みたいな話だ。
一つ目の目的はこうして達成できたものの、手掛かりのほうは戦争の旅路で世界中を巡っても一切見つからず、そのことで業を煮やしたトウコがとうとうリーダーと言い争いを始めてしまった。
酒に酔っていた二人の口論はやがて、トウコから魔法を繰り出したことにより刃傷沙汰に発展。
翌朝仲間たちが駆けつけると、トウコの亡骸にリーダーの剣が突き刺さっていて横たわっていた。呆然自失としながら側にいたリーダーは、起きたことを仲間たちに全てを語ったのちに遺言をいくつか残して自殺。
当然仲間たちは二人に蘇生魔法をかけたものの死者の魂が蘇生を拒否して失敗。
二人の墓は大陸中を見渡せるスモッソルブ・リーチェ山の頂に作られた。

※回想終わり
◆◇◆
「ものの見事に一家バラバラになっちゃったじゃん」

ハハッと力なく息を零して床にへたり込んだマタタビを、ツアーは細めた視線で見下ろした

彼女がショックを受けたのは言うまでも無いことだが、リーダーはそれを望んではいなかった。しかし無謀な遺言だ。

胸の内にわだかまりを秘めたままで何も知らずにのうのうと生きていく彼女を見守ってやる義理など、ツアーをにもありはしない。

本音を言えば憎しみもある。もっとも彼女が諸悪の根源であるなどと責任転嫁がしたいわけでもなかった。

「月並みな言葉だが、間違ってもキミだけのせいではないよ。これは捻じれた因果が招いたつまらない悲劇だ」

「それが私に先日殺意を差し向けてきた奴の言葉ですか？　誰が悪いかなんて、初めからわかっていたでしょう

私がもっとマシな性格をしてればこんなことにはならずに済んだ」

「それだけじゃない。キミが二人と生きていけなかったのはそう至った因果があってこそであり、次女ツバキと別たれ二人がこの世界に迷い込んだのはただの偶然。

二人が殺し合うのを気付けなかった僕らにももちろん落ち度はあった」
「なにそれ。わざわざ傷のなめ合いをさせるために私にこのこと教えたの？　まぁあなたたちにはその資格はあるけどさ」
リグリットがおどけるように両手の平を肩の高さで上に向けた。
「少し違うさね。あたしたちは、サクラちゃんのために世界を巡った二人の旅路が、サクラちゃんの心に何かを残してほしかっただけなのさ。それがたとえ心の傷であろうとも」
ツアーも同じ気持ちである。だがそれは死者の願いを踏みにじるだけの、浅慮で下らぬ自己満足に過ぎないのかもしれなかった。
「いやいやその心意気はありがたく受け取ります。知らないままの自分を想像するとゾッとするくらいですから
でも結局アレだよね、どうせ喧嘩別れをせずとも二人が老衰して死んじゃえばそんなに変わらないのかな」
プレイヤーがこの世界に来るのは１００年周期。人間種の寿命では追いかけようもないだろう。それを見越した結果言い争ってあの惨状に至ったのかもしれない。

もちろん人間種でも永遠の生命を得られる手段は存在するが、希望を手に出来るかわからないまま悠久を過ごすというのも精神的に現実的じゃない。２００年後にマタタビが姿をあらわしたのも奇跡のような話であった。

「僕が聞く筋ではないだろうが、気持ちの方は大丈夫かい？」

「さーね、ちょっと斜め上過ぎる話で頭の方が追いついてかないのですよ

それにこんな爆弾事実があったときたら、いろいろ身辺整理が忙しくて落ち込んでる場合でもないからさ」

そう言いながら自嘲気味に顔に手を当てる彼女の顔は、いっぱいいっぱいに追い詰められてるようだった。

「今度は墓前のお供え物でも持ってまた来るさね。あたしもツアーも暇だから話し相手くらいにはなってやる」

「ありがとうおばあちゃん、ツアーも」

「気にしなくていい」

結果的に傷のなめ合いの様になってしまったが、リーダーたちの話がひと段落してツアーは少し安堵した。なにせファーストコンタクトが最悪だったものだから。

そこでふと思い出してツーは訊ねた。
「ところでマタタビ、スレイン法国の国宝による精神支配の方はどうやって解決したんだい？
というか分身体だから判別がわからないが、本当に今の君は無事なのかい？」
「あーそれはですね、実は私には――」
「む？」
ところが彼女が事情を語ろうとしたその時、ツアーの竜種としての感知能力に強大な気配が引っかかった。
始原の魔法（ワイルドマジック）を駆使するまでに成長した竜王種の感知範囲は大陸全土にまで及ぶ。探知精度はさほどでもないが、プレイヤークラスの実力者が何の気配遮断や防諜対策もせずに力を振るった際には、遥か遠方からすらその足取りを掴むことが出来る。
今回の場所は、かつての戦友であったキーノが住まうリ・エスティーゼ王国の首都。
これまた類稀なるほど邪悪な意志だ。
「邪悪なプレイヤーが王国の王都で暴れているようだ。どうやら１００年の揺り返

しでこの地に訪れたのはキミだけではないようだね」
「え……わかるんだ。ちなみに鎧でも動かすの？」
「いや今回は無暗にちょっかいを出したりしない。君も知っての通りあの鎧は耐久性にこそ優れるがそれだけだ。
僕はここから動けないし、情報をじっくり集め他の竜王たちと掛け合ってこれからの対策を練る。仕方がないが、王国の人間たちを今救うことはできない」
するとホッと胸をなでおろした彼女は何気なく零した。
「そっか。まぁそれでいいんでしょうね。マサヨシだったら無策で助けにツッコむだろうけど、ツアーのやり方の方がより堅実だと思いますよ」
「……今なんて言った？」
「え？」

デミウルゴス「つまりどういうことだってばよ!?」
マタタビ「こういうことだってばね」
たっち・みー＝マタタビの父＝十三英雄のリーダー＝ツアーの友達＝マタタビの母と心中
ツアーがゲヘナで暴れたデミウルゴスを感知
←
横に居たマタタビが余計なことを吹き込んだせいで、ツアーが王都近辺に忍ばせていた駆動鎧を投入
←
分身解除してそのこと知ったマタタビが、ギリギリのギリで飛び込んでデミウルゴスを守った
デミウルゴス「」
マタタビ「アインズ様がツアーから直接に事情を聴くのも時間の問題かと思われます。あんな接触の仕方したんだし」

デミウルゴス「」

マタタビ「……ＳＵＮ値落ちしちゃってる。その、ほんとにごめんなさい」

禁断の果実

ギリギリ二週に一回のペースを守れた。良かった。

デミウルゴスが目の前で攻撃を受けたことにより、一度は我を忘れかけ血圧は急上昇。しかしマタタビの横槍によって肝を冷やされ急降下。

アインズは目まぐるしい状況変化に今にも目が回りそうだった。

早く状況を理解したいとことだが、今は冒険者モモンという役割を全うしなくてはならない。

当初の作戦から凄まじくズレ込んでしまったものの、結局デミウルゴスは予定通りに王城にゲヘナの炎を放ったようだ。マタタビから事情を聞いて、作戦続行が可能であると判断できたのだろうか。

アインズとナーベラルはと言うと、『蒼の薔薇』と共にそのまま冒険者組合へ足

を運ぶこととなった。
　デミウルゴスに奇襲を仕掛けマタタビとも交戦した可能性が極めて高い、謎の鎧も同行している。当然気が気でならならず殴り飛ばしてしまいたかったが、理性で持って全力で堪えた。
　どうやら蒼の薔薇とも所縁のある人物らしく、先ほど吸血鬼と発覚したイビルアイ曰く正体はなんと十三英雄『白銀』そのひとで愛称はツアー。ちなみにイビルアイの正体はどうでもよかったので公言しないようにだけ軽く約束しただけだ。
　ツアーさえ横に無ければ、隙を見計らい〈伝言（メッセージ）〉かパンドラズ・アクターと交代するかで情報を共有できるのだが上手くいかない。
　どのみちツアーからも後で事情を聞かなくてはならないだろうし、向こうもアインズ側に聞きたいことはあるようだ。
　冒険者組合では王城の異変を察知して既に緊急対策本部を開いていたが、アインズ達が持ち帰った新情報に場は騒然となる。
　敵は難度１５０以上のメイド悪魔ベータ・ゼータに推定難度２００オーバーのアルデバランとヤルダバオト。

ラキュース嬢が目を輝かせながら、こちら側にも対抗しうる実力者としてモモンとツアーの名を告げた。

ツアーの正体が十三英雄であることは、元チームメイトに同じく十三英雄死霊使いのリグリットがいたという『蒼の薔薇』の存在によって固く保障された。

ところが遅れて到着したレエヴン公親衛隊が予定にない情報をもたらした。

更に第三勢力としてモモンを追いかけているという謎の吸血鬼が乱入。戦士長ガゼフとメイド悪魔アルファを殺害後『悪魔がいるなんて聞いてない』と言い残し、そのまま王都上空から遥か彼方へ飛んで行って行方は不明であるという。

ガゼフは以前カルネ村にてアインズ、マタタビとの面識があった。そうなると、ツアーからアルデバランの正体がマタタビであると公言された場合マズいことになる。ヤルダバオトとアインズの関係が表沙汰にならないように、シャルティアによって始末されたのであろう。

当然組合では吸血鬼が再来することを警戒されたが、バックストーリー持ちのモモンから『臆病者の彼女が再び王都に来ることはまず無い』と太鼓判を押して保証した。

そのほか諸々王城の状況確認や作戦会議が行われ、ツアーと二人きりで話せるようになるのにはずいぶん時間がかかってしまった。

アインズとツアーはあてがわれた談話室に向かい合わせで腰を降ろした。

「さて単刀直入に聞かせてもらうよ。モモン、キミは ぷれいやー だね？」

『プレイヤー』のイントネーションが妙だ。アインズもツアーに同じ確信を抱いていたが、ここで初めて違う可能性を見出した。

「そうだがお前は違うのか？」

「ただ長生きなだけの原住民だよ。どうせ敵方の彼女にはバレてしまってるから先に言っておくけど、この鎧の中身は空っぽで僕が山奥から遠隔操作しているだけだ」

以前マタタビの前で転がっていた姿を思い出しながらアインズは納得した。

操り人形にしては先の攻防における強さが不自然だ。ユグドラシルにおける遠隔操作に長けた〈マリオネッター〉などのクラスでも、目の前ほどの強力な人形を作りだすことは不可能である。となればやはり、この世界独自の能力による存在。それもプレイヤーに匹敵しかねない実力者であると窺えた。

「そう身構えられても困るんだけどね。僕からすれば、キミも十分得体が知れない」

「まったくだ。互いの素性はこの際置いておき、先んじて示し合わせておきたいのは……アルデバラン。いや、マタタビのことだ」
「彼女が姿をあらわした時、キミは過剰なまでに動揺していた。やはりキミも彼女を知っていたようだね」
「……ああ」
あの時はデミウルゴスに強襲したツアーに反応したのだが、マタタビの土壇場なフォローが功を奏してなんとかツアーに気付かれずに済んだようだ。
しかしツアー側からアインズに対してどれだけ事情をは話してくれるかは、アインズとマタタビの関係性にもよるところだろう。
「ユグドラシルでは大して親しいわけではなかったが、彼女とは偶然この世界に転移してきた仲だ
今ではとんだじゃじゃ馬で散々苦労させられている。今回もいつの間にああなってしまっていたのやら。さっぱり皆目見当がつかない」
「……なるほど十分だ、よくわかったよ。とりあえず推測できる事件の原因を話そう」

アインズのマタタビに対する苛立ちを込めた言葉。それがツアーにも共振し一種のシンパシーが二人の間で繋がった。

とはいえ中心にマタタビの存在があるというだけで、今回の事件においてツアーとアインズが互いに見えている真相は対極に位置することだろう。

だからこそ、なんとしてでもツアーからの話は聞かなくてはならない。

「ああ、よろしく頼む」

「あとこの際だから伴って、マタタビが何者であるのかも話させてもらうよ

彼女は大層嫌がるだろうが、事が済んだ後を考えたらキミも知っておいたほうがいい」

◆

真相はアインズのちっぽけな正常性バイアスを置き去りにしながら、口の軽い鎧によって語られた。

信じられるわけがない。信じたくもない。

この際目の前の鎧の正体が数百年を生きる竜王だろうが世界最強だろうがどうで

もいい。

マタタビの両親がこの世界に訪れ心中死したという、馬鹿みたいに出来過ぎた悲劇に比べればなんてことはなかった。

そしてきっとアインズにとっての悲劇はこの先にある。

マタタビの両親は彼女がユグドラシルプレイヤーであることを知っていて、接触を図るために最終日にキャラメイクしてログインした。

となればまず間違いなく両親のどちらかが元ユグドラシルプレイヤー。そして基本的にマタタビが交流を持っていたプレイヤーはギルド：アインズ・ウール・ゴウンに所属する者だけだった。

すなわち導き出されるのはナザリックにとって最悪の事実。

かつての仲間がこの世界に飛ばされて不遇の死を遂げたということだ。

「そういうことか」

通りでツアーとの接触をマタタビがとぼけたわけである。

純粋に自身の過去に踏み入れられたくないという想いもあるだろうし、知っても悲しいだけの事実をアインズ達に知られたくなかったのだろう。

ツアーははっと気づいて心配そうに語りかける。
「もしやキミもマサヨシやトウコのことを知っていたのかい？」
「さぁ、誰のことだかさっぱりだ」
だが今のアインズは悲しむことすらできなかった。
心の中の確固たる何かが音を立てて崩れ去る。始めから何もなかったかのような更地の荒野に、剥き出しの魂が晒される心象が浮かび上がった。
そう、始めから何もなかったし、ナニカがあったとしてもアインズが立ち入っていい場所ではない。
「ふぅん？　意外だね、知ってそうな感じがしたがけど」
「おそらく会ったことはあるだろうが、誰のことかはさっぱりわからん」
なにせマタタビの真名（リアルネーム）をサクラと言うことすら今初めて知ったのだ。
考えてみれば当たり前だが、元はただのゲーム仲間でしかなかったアインズとマタタビは互いのパーソナリティをほとんど知らない。
いやマタタビに限った話ではない。ギルドメンバーたちですらリアルにおける素性なんて話に聞く程度でしか認識していないのだ。まさか40人のうち誰かがマタ

タビと親子の関係だったなんて思いもしなかった。
一体誰のことだか。しかし誰だと知れて、それでアインズが悲しむことが出来るのだろうか。
マサヨシとトウコは、アインズ・ウール・ゴウン以上に大切な娘とのつながりを手繰ってこの世界に迷い込んだのだ。
仮にアインズただ一人が転移してから二人のことをナザリックに歓迎したとして、二人は嬉しくもなんともあるまい。
彼らにとってアインズは所詮仮想の繋がりにすぎない。その事実を改めて受け入れようとしてしまえば、輝かしかったはずの思い出すら色褪せてしまう。
結果、虚構の繋がりに拘泥した一人の哀れな男の姿が改めて浮き彫りになるだけだった。もはや眼孔は乾ききって涙すら流れない。
だが――
「そんなこと、最初から分かっていたがな」
「？」
「……気にするな。ただの独り言だ。それと、話してくれてありがとう」

わかっていた。最初からと言うのは強がりだが、彼女の不器用な生き方を認めた時点でとっくにそんなのわかっていた。

そこからどのような一歩を踏み出すべきかを、未だ考えあぐねいていただけで。

◆◇◆

津波の如き新事実が度々押し寄せてきては、荒々しくデミウルゴスの脳内へと着岸する。

重ねて雪崩れ込む膨大な情報量が理性の堤防をとうとう乗り越え、剥き出しの魂を侵し始めた。

それは頭蓋の内で暴風雨が吹き荒れるような惨状に等しく、極限の知性と思考能力すら濁流にのみ込まれた。

心象の外側。その様を傍から見れば蒼白な顔で今にも失神寸前と言う醜態である。

マタタビは長い黒髪を揺らしながら、心配そうにデミウルゴスの顔を覗き込んだ。

そして黒目を右端に寄せて申し訳なさそうに口を開く。

「私が言うのもアレだけど、その……大丈夫ですか？」
しかし先ほどの話の衝撃で呆然としていたデミウルゴスは、喋ったフレーズの半分しか聞き取れなかった。
何か話し返さなくてはとここでようやく気を起こし、手前半分を切り捨てて返事を強行した。
「ありがとうマタタビ。大丈夫……とは言い難いが話すくらいならもう平気だ」
自分の声が平時より頼りないのに気付いてデミウルゴスは喉元を締めて虚勢を張った。
マタタビは心を読むのでその虚勢すらたちまち看破されただろう。それでも立場ある身としては、自分をだましてでも気を保たねばならない。
「ほんとうにごめん。色々一気に話しすぎちゃったからね」
「……マタタビ君こそ大丈夫なのですか？」
「もちろん最悪な気分です。でもさっきはそれどころじゃなかったからね。今はあなたとアインズ様にケガさせなくてよかったからほっとしてる」
「それどころの話で無いのは明白ではありませんか」

デミウルゴス、どころかアインズ様のことですら小事になってしまうほどの大事件を前に一体何を言ってるのか。

至高の存在の中でも最強格を誇り、そしてマタタビの父でもあった たっち・みーがこの世界に訪れ命を落としたという事実。

デミウルゴスは理性で何とか気を鎮めているが、それはシモベの者であれば誰もが悲し嘆き叫ばれるような事態。ことがナザリック全体に知れれば狂乱すら巻き起こりかねない。

なのになぜ、渦中にいる目の前の少女はこうも平然を保っているのか。わからない、わからないわからない。

だがわかる。

わかるのは自分の中に、マタタビに対する幼い憎悪が沸き上がることだけだった。

全ては神々の意向のすれ違いによって起こった悲劇の神話。デミウルゴスが口やら足を突っ込むべき出来事ではないのは自明。だというのに己を律せないありようはまるで、自身の無力さから目線を逸らす八つ当たりですらあった。まったくもって恥ずかしい。

マタタビはデミウルゴスのそんな欺瞞すら容易く見ぬくことだろう。一体何と罵倒されるかとデミウルゴスは身構える。しかしマタタビは力なく苦笑いした。

「お怒りのほうはごもっとも。過失割合が如何にせよ、私の行いが二人を地獄に追いやったのは揺ぎ無い事実。まったく死にたくなっちゃいますよ、ごめんね」

そして目頭を押さえながら上を向く。

ああそうか、とデミウルゴスは遅く気付いた。当たれる者がいるデミウルゴスはまだ幸せだ。彼女は自分で両親の十字架を背負わなくてはいけなくなる。誰よりも、今追い込まれているのは彼女自身。

「でもだからこそだよ。ツアーを呼んだのも私みたいなもんだからね。マサヨシのことを知ったなら尚の事、これ以上私のせいで周りの人たちが傷つくのはもう嫌だった」

ゆえにこそ彼女は俯く暇すら惜しみあの場に駆けつけたのだろう。

悲嘆にくれて内心で当たり散らすしかできない自身のことを鑑みれば恥じ入るばかりだ。この強さこそ我が身に取り入れねばなるまい。

「大変失礼いたしました。その清き御心に疑念を見出したこと、どうか御許しくだ

さい」

「てかデミウルゴスさんは私を許さなくてもいいんだけどね。これじゃマッチポンプみたいじゃん」

マタタビはいやそうに顔を顰めて手を振った。相変わらず不器用な生き方しか出来ない人である。どれほど実害をもたらそうとも、アインズ様やナザリックへの厚情さだけは本物なのだ。口先では中立を気取ってるものの、少なくとも自らナザリックに反旗をひるがえすことはあり得まい。

だが一つだけ聞いておかなくてはならないことがある。

「自ら問質した身で不躾ではありますが、なにとぞお答えください。何故、私にたっち様のことを話してくださったのですか？

不服ではありますがあなたなら、我々が傷つくと知れれば真実を握りつぶすことも辞さないだろうと、そう思っておりましたが」

まさか自棄でも起こして全てを語ってしまったならば、デミウルゴスは今すぐマタタビの口をふさがせるよう努めなくてはならない。

だがそれにしては今の彼女はらしくないくらい理性的だ。その心理と行動の因果

が、冷静さを欠いている今のデミウルゴスには紐解けない。
「私だって無暗に言いふらしたくは無いよ。これは知らないほうが幸せな話です。でも時間の問題
私とアインズ様のカップリングに随分ご執心だったご様子から見るに、デミウルゴスさんは既に手遅れだったと思います。」
きっかけが何かはわかりませんが、と遅れて続けた。
マタタビはデミウルゴスの底を見切り、そして哀れみを向けた眼差しで見つめ上げた。
端から何もかも見通されていたようだった。
最早腹立たしさも沸いてこないほどの敗北感が、デミウルゴスの知性によって自認された。
なんとなくだが、アルベドの様子が変わった理由が分かった気がした。
「……仰るとおりでございます」
始まりから薄々察してはいたのだ。アインズ様以外の至高の存在はもう帰ってこないのではないかと。

それが、精神支配の一件でアインズ様の共連れとして宝物庫に向かい、『霊廟』の存在を知ったことで崩壊した。アインズ様は他の御方々の生存を保証はしてくださりはしたものの、口調の澱みを隠されなかったのだ。

加えて更に核心的な存在を、入口手前で待機しているときに見てしまった。御方々を象ったアヴァラータ達。それらが各々の雛型の最強装備を装備して、奥に続くカーペットの両脇に立ち並んでいた姿を。

だからマタタビの見抜いた通り、デミウルゴスは手遅れ。神（アインズ様）の望まれない禁断の果実（真実）の一片を口付けてしまったに違いない。

故にこそ世継ぎの降臨を強く望んでマタタビに期待を向けたわけである。

今明かされた真実は、デミウルゴスの内に元々燻ぶっていた疑惑の答え合わせの一部分でしかないのだ。だからデミウルゴスはこの状況でもある程度の正気を保てていた。

「それかもし忘れたかったら、アインズ様に私の方から頼みますよ？　きっと快諾してくださいます」

「いえ、ありがたくも遠慮させていただきます。仮にアインズ様のほうから〈記憶操作（コントロールアムネジア）〉

の要請があった場合も、断固として拒否させていただきましょう」

「いいんです？」

「私は悪魔。神（アインズ様）に愛玩されるだけの愚かな羊にはなれないのです。なぜならそれをウルベルト様がお望みになるなら、私に知恵を与えなかったでしょうから」

今ここでその場の記憶を凌いだとしても、それは所詮一時的なものにすぎないだろう。

いずれまた気付かされる時が来てしまう。ともすればアインズ様の膨大な魔力をゴミに捨てるに等しかろう。

神は禁断の果実に手を触れることを望むまい。されど果実の毒を主と分かち合えぬ弱き心は、ただ神の慈悲に守られるだけ。

そんな赦しに甘んじる愚民には、果たして存在する価値があると言うのか。

神が一番辛いのに。

磔にされた神の御子によって赦されることを感謝するなど不信心極まりない。代わって自身が磔にされるか、せめて同じ辛苦を知るべきだ。

なればこそデミウルゴスは禁断の果実に手をつける。

「それに――」
「それに？」
「――来るかもわからない希望を悠久に抱え続けるエデン（楽園）など、地獄にも劣る。居なくなった方々はさて置いて、今は目の前の存在のために私は戦いましょう。マタタビ様、あなたと同じ決心です」
果たしてそれが、己の創造主が望んだ在り方なのかは実際のところわからない。ひょっとしたら何も望まれなかったのではないか。もはや見えなくなった方々が何を考えておられたかはわからない。
だから今の見えてるものに強く縋りる他にない。そして支え守り抜いて見せよう。
「凄いよ。デミウルゴスさんは強いです。私よりもよっぽど」
マタタビはパチパチと手を叩いて心の底からと言う風に、笑って祝福してみせた。逆信仰告白みたいなものであるが。
「では私の方も見習って、いい加減重い腰を上げてじっくり話し合うとしましょう。ね、アインズ様」

するとマタタビは手のひらに礫を乗せて、向かい合うデミウルゴスの後方を睨んで指ではじき飛ばした。

カツンと固い音がするとともに、突然強大な気配が後方から現れ出でた。

「これはっ!?　アインズ様、聞いておられたのですか!?」

デミウルゴスは仰天と共に盛大に身をのけぞった。

振り返るとそこにいたのは死を司る我らが神、アインズ・ウール・ゴウンその人であった。

「……えーとその、すまない。部屋に入ったは良いものの、話の途中で〈完全不可知化（パーフェクト・アウンノウアブル）〉を解除しづらくてだなぁ……」

話し合いに持ち込むのに30万字以上かけるとかグダらせ過ぎました。もっと早くしとけばよかったかも。

デミウルゴスのモノローグとか難易度高すぎるので例のごとくIQデバフさせました。ごめんなさい

ガゼフとシャルティアのエピソードは王国編のモノローグが終わった後に回想する予定です。本筋に関係なくはありませんが、本編の惨状を納めるのを優先したいので。

和解失敗

めっちゃ遅れた。もういやだ

王国編とか銘打った割に王国蚊帳の外だと気づいた今日この頃。

◆◇◆

心の中に強く太く打ち込まれた、想い出と言う名の巨大な支柱。

それはとてもとてもちっぽけな鈴木悟――モモンガ――アインズの人生全てとも思えた大きな存在。だから支えていたはずの屋根や壁がなくなろうとも、柱はずっと野ざらしに変わらぬ姿で屹立していた。

否、変わらないと妄信していただけだったのかもしれない。

木柱が腐るように、石柱がひび割れるように、鉄柱ですら錆びるように、どんな輝かしい記憶でも時が隔てれば掠れていくものである。

アインズはずっとこれまで、自分の認識から目を逸らしつつ「いつかきっと」な

どと心の片隅で浮かべては、誤魔化し続けていただけだったのだ。
最近ようやく自覚が追いついてきたところだ。
そして皮肉にもデミウルゴスの決意の言葉が、支柱の亀裂にとどめの一撃を叩き込んだ。
「来るかもわからない希望を悠久に抱え続けるエデン（楽園）など、地獄にも劣る。
居なくなった方々はさて置いて、今は目の前の存在のために私は戦いましょう。
マタタビ様、あなたと同じ決心です」

・

部下がこっそり本心を晒したのを覗き見る上司と言うのは、特に最悪な部類であると思う。
少なくともやられる方は溜まったもんじゃないだろう。意図してではなく結果的にそうなってしまったに過ぎないが、それでも側耳を立てたのはアインズの意志。
言い訳するつもりは毛頭ない。

「マタタビ……さんと、特に騙し撃ったようになってしまったデミウルゴスには済まないと思ってる。弁解の余地も無い」

「アインズ様が弁解などとんでもございません。どころか言い訳のしようがないのは私の方にございます

ただ今の発言は偽りようもない我が本心。悔いはありませんが、御心に反するのであれば反逆者として厳重な処罰を受ける覚悟もできております」

アインズとしては仲間が居なくなったことを、ＮＰＣには無理して受け止めてもらわなくても構わないと思っていた。

ところが仲間の一人の死去を知らされ、それでもデミウルゴスは記憶の改変を断固として拒むつもりだと言った。

心配なような、寂しいような、でもどこか嬉しいような名状しがたい気持ちだ。強いて言うなら親心か。血縁もへったくれもないのだが。

「そうか、デミウルゴスの気持ちはよく分かった。最早それについてで私が文句を言うつもりはない

また話し合わなくてはならないだろうが、今は後だ。仲間たちのことも含めて後

日話そう」
「……寛大な御心に、深い感謝を申し上げます」
「私としても、謝りたいのはこっちのうほうですよ」
複雑な顔で手を振るマタタビ。
もっとも彼女は、ＮＰＣにいきなり本当のことを話すのは危なすぎるというアインズの意図に反することを踏まえた上で真実を語り、途中で割り込んだアインズに気付いたうえでデミウルゴスの本音を引き出したわけだが。
この報連相出来ないニンゲンが果たして反省してるのか、少し怪しい。
「どうせアインズ様に相談したって、真実伏せるの一点張りで変わりやしないでしょう？　こうして本人たちの意志を試してみない限りにはね」
「それはそうだが……まったく勝手な話だな」
確かにマタタビの言う通り、マタタビがデミウルゴスに全てを話したからこそデミウルゴスの意志を確かめることが出来た。アインズの意志が一人よがりに過ぎなかったと明かされた。
ただそれは結果論。それも危うい綱渡りの末に導き出された結果ではないかとも

思う。
アインズの価値観とは大きくズレるマタタビのやり方に、例のごとく嫌悪感が湧いてくる。
だが何を言ってもアインズとマタタビのスタンスは水と油。昔から今までそうだった。
せめてこれからは歩み寄る努力だけは続けていきたいのだが……
「とりあえずデミウルゴス、俺は彼女と二人だけで話をしたい。席を外してくれ」
「……その方が良さそうですね。承知しました、失礼します」
デミウルゴスを退室させて、マタタビと真正面から向かい合った。

・

アインズがツアーから事情を聞いているのを、やはりマタタビは察知しているようだった。
もっとも、彼女からすれば話が早くて助かるどころか、誰にも知られたくはなかったのだろう。

事情を知って若落ち着いた様子のアインズに対し、マタタビからの表情はやはり複雑だ。

「色々話すことはありますけれど、まずはやっぱりごめんなさいですね。事情が事情だっただけにアインズ様には話せませんでしたが、アルベドさんあたりに話しておくべきだったです」

「……」

アインズとしては素直に「はいそうですね」と首肯しかねる反省である。

考えうるに、彼女の今回の直接的な失敗原因はゲヘナ計画とツアーの訪問の時刻が重なってしまったことと言える。アルベドに相談してれば確かに、ツアーが乱入してくるような大事件そのものは避けられただろう。

だがもし仮にそれで失敗事態を避けられたとしたら、マタタビと たっち・みーにまつわる真相をアインズは結局知らず仕舞いになる可能性が高い。

結局色々あったあげくに、肝心なところは碌に反省してないことがよくわかった。実に腹立たしい。

だがそれも仕方の無いことだ。生身で彼女と話してみて、嫌と言うほど実感した。

「分かり合うなんてのは傲慢なのですよ。互いに腹の底が見えたところで、妥協し合えないことがわかるだけ

アインズ様からすれば事の真相を知って今更、その記憶を捨てようとは思えないでしょう。でも私は、マサヨシのことであなたを揺るがす真似はしたくなかった。隠そうとしたこと自体には、後悔なんてできない」

先ほどデミウルゴスは、アインズが一人で抱え込んで悩むくらいなら知っていたいと言っていた。マタタビに隠し事をされたアインズにはその気持ちが痛いほどわかったが、どうしようもなく秘め事を抱え続けなければいけない苦悩もやはりよく知っている。アインズもまたＮＰＣに自分の胸襟を開ききっていないのだから当然だ。

だがその理屈だけでは一点だけ、矛盾が生じる。

「のようだな。だが、デミウルゴスにだけは話したのはどう説明をつける？　俺だって、ナザリックの皆に事の真相を知られるのはマズいと思ってたのだが」

「それはさっき言った通りです。デミウルゴスさんは他のギルドメンバーがもう帰ってこないことに勘付いてました

だったらば今、作戦主任として真相を知るのは間違っていない。あの方の知る権利を尊重したまでで、アインズ様が文句を言うことじゃない

どうぞ今後は存分にその件についてで彼と話し合ってくださいよ」

「その理屈だと、元々わかっている俺自身にも知る権利が生じるんだが、違うのか」

「権利を踏みにじってでも、守らなきゃいけないことがあるんですよ

あなたがもしマサヨシが死んだなんて知ったら、星に願い（ウィッシュ・ポン・ア・スター）をや世界級（ワールド）アイテムでも使って無理矢理蘇生させることでしょう。そしたら私は戦争覚悟でも止めなくちゃいけなくなる。

理由は、わかるかな？」

「……！」

何故と理由を問い返そうとしたのを、アインズは顎を食い絞って咄嗟に堪えた。

その愚問、すなわち無理解こそがマタタビとの戦争の引き金になると理解したからだ。

「本当に、不幸中の幸いです。アインズ様がちゃんと、マサヨシとトウコの蘇生が何を意味するのか分かってくれて本当に助かりました」

「ああだが確かに、それは、最悪かもしれない」
彼女が思い浮かべる一つの最悪が、アインズの脳裏にも巡ってきた。
それはある意味マタタビとの敵対以上に厄介で誰にとっても残酷とも言える可能性だった。
一見、支配者の再臨を望むＮＰＣにとってもかつての仲間との再会ほど嬉しいことは無い。そして、娘を探す半ばで心折れたマタタビの両親。そんな彼らが時を経てマタタビと再会するのは、それだけなら一見美談にしか思えない。
たしかに感動の再開であることは違いないが、同じくらいの残酷さもそこには隠されていたのだ。
「私の両親は、どうしようもない私のことを、どうしようもないくらい愛してくれているんです。眩しすぎて目を逸らしたくなるくらいに」
マタタビは目元を手で隠しながら苦笑を浮かべ、吐き捨てるように言った。
「そんな、娘の私を探して異世界にまで迷い込むような両親が、元の世界に残した私の妹のことを忘れられるわけがない。
だから二人の人生が報われることは、これから二度とあり得ないのですよ」

「そうか」

時を経た故人の意思などわかるわけがないにもかかわらず、マタタビは強く断言する。そこには親への堅い信頼があると共に、裏切った自分の罪過を強く刻みつける行為にも思えた。

「そんな二人をもしナザリックに呼び戻しでもしてしまえば――アインズ様には言いづらかったけど――」

、

「――ＮＰＣや俺のことなど、きっと歯牙にもかけないことでしょうね。そうなれば誰も彼も幸せにならない。

これが、マタタビさんが一番避けたかったことなんでしょう？　……だったらそもそも、一切合切全てを話してほしかった」

もっと早くに全てを話してくれたなら、アインズはマタタビの思惑に共感することが出来ただろう。

彼女はきっと、誰よりもアインズやＮＰＣ達の現状を俯瞰して理解できてる見地にあり、ナザリック全体を広い視野で冷静に見渡せている。

だからアインズ以上にＮＰＣの心情に寄り添ってデミウルゴスから本音を引き出すことが出来たし、今みたいに両親の存在がナザリックにとって救いにならないのもすぐに察知できた。

そんな彼女がずっと、アインズとの視点の共有を拒み続けていたのはということは、

「さすがに俺も遺族の許可を取らないほどのロクデナシじゃなかったのに」

デミウルゴスやアルベドには辛うじて話せても、アインズだけには話したくなかった。

つまり彼女の認識は、ＮＰＣなら丸め込める自信があるがアインズには話が通用しないということ。

アインズ自身が碌に信頼されていなかったことを意味している。

「私が想定した一番最悪のパターンはね、マサヨシからつれなくされたアインズ様が「クソガー！」って逆上して私の両親をぶっ殺しちゃうこと。

そしたらＮＰＣとの関係にも亀裂が巡り、私もあなたを憎まざる得なくなって見事にナザリックは崩壊したことでしょう」

「……今の発言で、マタタビさんが俺のことをどう思っていたのかよくわかったよ」
想像の斜め上すら超える最低最悪の妄想だった。
しかしマタタビのことを完璧に失望しきれないのが、かえって恐ろしい。なにせアインズの中には確かにかつての仲間への負の感情が存在し、なおかつそれから目を逸らす欺瞞性すら持ち合わせていたからだ。
だがマタタビが誰よりも、アインズの負の側面を信じているのは皮肉以外の何物でもなかった。
よりにもよって、アインズの気づきのきっかけとなった彼女自身が。
「馬鹿にしているんだな」
「ええ。正直言って、馬鹿だとは思ってましたよ。
誇大な過去の妄執と欺瞞にとりつかれた友情お化け。それが私のアインズ・ウール・ゴウンに対する元々の人物評価でした」
「ああこの際否定はしないよ。百歩譲って、俺がかつての仲間に敵意を向ける可能性があったことは認めよう」
言い方は酷い。しかし事実が羅列されただけな気もして、客観性と生々しさがア

インズの胸を貫いた。そうだとも、と心の中の自分がマタタビの辛辣な評価を受け入れた。

アインズがユグドラシルとかつての仲間に心が離れられないのは、自分にはそれしか無かったからだ。もしそれの価値をかつての仲間に否定されれば、積み重なった友情は憎悪へ変わることだろう。

癇癪によって一線が崩壊すれば、自分が何をするかわからない。

だが一点だけ、どうしても認められない部分があった。

「だがあなたの両親を殺すなんてのは、わかっていたら絶対しない」

アインズの言葉があまりにも意外だったマタタビは、怯えるように身をすくませ身を引いた。

安心させるために当たり前なことを言ったのに意味が分からない。

「この際だ、百歩譲って好意自体は謹んで受け取りましょう。でも、そこまで私が依怙贔屓される謂れがわからないんだけど」

まだそんなところで躓いてるのかと思ったが、仕方がない。受け取ってくれただけでも進歩がある。

とはいえ口にするのも照れ臭くてどうしたものかと迷ったが、結局身の丈をそのまま言葉に吐き出した。

「簡単なことだ。気まぐれかなのかもしれないが、マタタビさんはナザリックに身を寄せていて、時々話に付き合ってくれる。

俺にとってはそれだけで、とてもありがたいことなんだ」

事実、ＮＰＣと主従の壁が立ちはだかるアインズにとって、気兼ねなく対等に話してくれる人物と言うだけで大いに救われた。

口が悪く、性格の反りが合わず、トラブルメーカーであることを加味しても、ギリギリおつりが出なくはない。

ギリギリ……ギリギリ……

マタタビは右手の甲で額を押さえながら絞り出すように零した。

「……気の毒な御身分です」

言うと思ったし、自分でも内心同意したが格好がつかないので口には出さなかった。

もし最終日の日に、他のだれかが一緒に転移してきたとしても絶対にマタタビよ

りはまだしも仲良くできる自信がある。そんなifは考えても仕方がないが。
「最終日一人きりだったところに突然話しかけられて、一緒に異世界に転移して、自分やナザリックのことを思い遣ってくれるのがわかった異性ですよ？
童貞として惚れてないのが不思議なくらいです。きっとマタタビさんの性格の悪さが幸いしたんでしょうね」
「おぉすごい。一見ツンデレな告白紛いにも聞き取れるのに、アインズ様に言われると全く心が靡かねぇです」
正直自分でも言ってみてすごくゾワッとしたところである。
ガサツな彼女以外なら、冗談でも誰にも言うことはありえまい。
「ところで今のセリフ、胸に手を当てて心の中で復唱してごらんなさい？　何か肝心なことを忘れてますよ」
最終日一人きりだったところに突然話しかけられて、一緒に異世界に転移して、自分やナザリックのことを思い遣ってくれるのがわかった異性。
はて一体何のことだろう。特に何も思い浮かばない。
そんなアインズに「……ったくこのポン骨野郎が」と軽く罵倒をけしかけるマタ

タビだが、頭を振って溜飲する。
「まぁ今はいいですよ。アインズ様なりの友情は、しかとこの胸に受け取りました。
……私としても似たようなもんです。旅は道連れ世は情け、命を救われた御恩とか色々愛着もありますし、当分の間は気にかけてやりましょう。
精々私の起こすトラブルには気を付けることですよ」
「自分で気をつけろ、そこは」
特にアインズへの秘密主義をどうにかしてもらいたい。
だがマタタビはその点にあまり反省を見せてる様子はなかった。
「あーはいはい。ではそのために改めて誓ってくださいよ
アインズ様、あなたは何があっても私の両親を復活させようとしないでね」
よくもまぁ平然としていられるものである。今日一番衝撃を受けたのは彼女自身であるはずなのに。
やっぱりこの人とは分かり合えないと、アインズは心の底から深く確信した。
「ああよくわかった。絶対に、誰が何を言おうと、マタタビさんのご両親を復活させたりはしない」

◆

デミウルゴスを呼び戻し、マタタビと3人でゲヘナ作戦のミーティングを軽く行ってからその場はいったん解散させた。

それから拠点の屋敷の一人部屋を借り、防御魔法を張り巡らせ人払いを済ませてから、執務机にこしかけ直前のミーティングの内容をメモに書き連ねていった。

変更としては、王城で予定されてた決戦のマッチメイクがモモンVSヤルダバオトの一騎打ちだったのが、モモンVSアルデバランとツアーVSヤルダバオトとなったことである。

安全面では戦闘経験のあるマタタビがツアーの相手をするのが一番良かったが、マタタビがぼろを出す危険性を考慮してデミウルゴスが担当することになった。

それから、配下のメイド悪魔や下級悪魔と、他の冒険者とのマッチメイクや戦力配分には既に手をまわしてあるとのこと。今モモンとして化けているパンドラズ・アクターが陣頭配置の指揮を出して組合の方に調整を働いたらしい。

ツアー、および彼と旧知の中であるらしいイビルアイ、とマタタビが報告したリグリットという女性についての素性捜査は、作戦が落ち着いてから行う予定だ。十三英雄時代だけでなく、六大神時代までさかのぼる生き証人の存在との遭遇は騒動がもたらした数少ない副産物だ。

今後の予定は目まぐるしいが、メモ書きする時間も多くは取れない。

手首を動かし片手間に、今日知りえた数々の衝撃的事実を反芻した。

たっち・みー は竹を割ったような性格の人格者であり、皆を引っ張って突き進んでいくリーダー気質で、仲間内の誰からも慕われていた。

ユグドラシルでは最強格のプレイヤーでありながら、リアルでも美人の奥さんと娘が居る富裕層の超絶勝ち組。ウルベルトとの仲の悪さと特撮ヒーロー趣味への傾倒ぶりを除いて、およそ非の打ち所のない完璧超人。

そんな彼が、卑屈で姑息で皆の足を引っ張りまくり、周囲と衝突ばかり起こしていた問題児、ユグドラシル屈指の害悪プレイヤーのリアル職業フリーターで、なぜかウルベルトとウマが合う、およそ褒めるべきところが何も無いマタタビの父親。

ありえないという、その一言に尽きる

どういう遺伝子の受け継ぎ方をしたらアレからコレがうまれるのだろう。なんて口に出したら、やっぱりたっち・みー は怒るのだろうか。たっち・みー は怒ると怖いがマタタビはそうでもない。

共通点と言えば精々剣がメインウェポンなのと、意外と頑固でヒトの話を聞かないことくらいか。

思えばマタタビは特に たっち・みー と衝突していたような。当時の たっち・みー はひたすら大人の対応をしていたが、思えばアレが娘の反抗期と言う奴なのだろうか。彼女の性格からしてちょっとあり得るような気もしてくる。確か たっち・みー のほうから一方的に構っていたような覚えもあった。ビルド選択しかり、高級メイド服しかり、ペロロンチーノの外装演出然り、考えてみれば たっち・みー と関連したもめ事が半分近くを占めていたはずだ。

ひょっとして たっち・みー が居なければクラン時代のマタタビは案外もうちょっとだけ大人しかったのではないか。

要らぬ妄想がぷかぷかと浮上する。こりゃ彼女も隠したがるわけだと納得した。

まあ、そもそもクランを発起させたのは たっち・みー だし、父親だと気付いた

後もしばらく彼女はクランから離れなかったのだ。考えても仕方がない事だろう。
どの道アインズが嫌いなマタタビの性格の部分とは、あまり関係の無いところでもある。
それに、彼女の親がギルドメンバーの誰であろうと、最早アインズにとっては大した意味を持たなかった。
生き返らせたところで仲間だったのはかつてのことであり、ユグドラシルの思い出は互いにとってどうしようもなく過去のものだ。
今後も仲良くできるに越したことは無いが、ダメならダメで諦められる程度の分別はあった。ただし彼女さえ幸せであればだが。
「ダメそうならば、やはり殺すしかないか」
万が一にも二度目の無理心中でもしようものなら、殺してでも止めるしかない。だが戦争は勘弁だ。
失敗した際は記憶を消すためにマタタビを取り押さえなければならないだろう。〈記憶操作（コントロールアムネジア）〉の練習もしなくてはならないし、何より取り押さえる手間が面倒すぎる。

「何か方法は……あぁそう言えば」
最悪な閃きが悪魔のささやきの如くアインズの理性に語り掛けた。メモに走らせていたペン先を止めて、虚空を見つめた。
仲間にやっていいことでは無いが、そもそも記憶を弄ることを考えた時点でモラルなんて気にしても仕方がなかった。　彼女の人格の尊厳さえ守れていればいい気がする。
彼女は仲間ではないのだから。少なくとも彼女は、そう思ってるはずだ。
自分の中の一線が、ぷつんと切れた音がした。
切れたと同時に、メッセージの魔法を発動させて所定の相手に心を繋げた。

「パンドラズ・アクター、単刀直入に聞こう。マタタビに精神支配をかけたのはお前か？」
パンドラズ・アクターがマタタビに精神支配をかけた事実が分かったのは、言うまでも無くツアーの言及によってである。
どういう原理で見分けてるのかは知らないが、先日の暴走時から今現在にかけて

までマタタビの精神支配は継続されたままらしい。

だとすれば状況的に犯人はパンドラズ・アクター意外に考えられない。もっともアインズ自身が作り出したはずのパンドラズ・アクターが創造主の意に背くと言うのはそれはそれで驚きである。

『――』

しかし相手はあっさり肯定した。

冷や水を浴びせられたような動揺が垣間見えながらも、同時に深い諦観と堅い覚悟が伝わった。

彼はあらゆる処罰を受け入れる旨を申し出たが、アインズは一蹴した。

「くどい。お前は俺が間違ってると思ったから、自らの考えでやったんだろう？ならば部下の想いを御しきれなかった俺の落ち度だ。

第一にお前のやったことは間違っていなかったし、俺は甘かったのだ。あんな女を……仲間になっても悪くはないなどと思っていたかつての俺が忌々しい」

マタタビが目指したシナリオは、アインズが彼女の秘密を何も知らないままで安穏と過ごすことだった。

ＮＰＣまで巻き込んだくせに、アインズにだけは悲しい全てを遠ざけるような真似をする。

澄ました顔の裏側で背負った十字架に押し潰されそうになりながらも、マタタビはアインズに慈悲を零した。

腹が立つ。

反吐が出る。

その優しさは侮辱であり、不信頼の証明でしかない。

互いの荷を背負い合うのが仲間なら、彼女がやっているのはただの泥棒だ。

ならばアインズだって、彼女から奪いとっても文句あるまい。そもそも仲間でないなら話し合いの余地も無いのだから。

マタタビがアインズから真実を奪おうとしたならば、アインズは彼女の罪を奪う。

知れれば彼女は抵抗するだろう。

アインズだって、もはや手段は選ばない。シューティングスターだろうが世界級アイテムだろうが何だって使ってやる。

『――？』

「何をするつもりかだって？　決まっているだろう。元の世界に残されたというマタタビさんの妹をこの世界に引きずり込んで、その上で後顧の憂い無く彼女の両親を復活させるのだ。もちろん精神支配だって利用させてもらう」

普通に和解する話にしようと思ったんです。

ところがこのSSではオリ主を自由に動かすために、アインズ様を蚊帳の外におかざるえませんでした。

そんな露骨なストーリー上のご都合にとうとうアインズ様がブチギれて、見事にプロットを壊されてしまいました。

更新遅れたのも自業自得です。行き当たりばったりで前途多難すぎる

信頼の壁

至高の41人レビューby マタタビ　ホワイトブリム

リアルで漫画家やってて多忙のクセにしょっちゅうユグドラシルに顔出すダメ作家。

せっかく週刊誌での連載にこぎつけたのにスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの材料集めに参加したせいで原稿落としかけることがしばしば。それが原因から同社の月刊誌に移った。誠に残念である。

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓９階層スイートルーム：アインズ自室

ケット・シーであるマタタビが常時人間体に変身している理由は、ケット・シーの体の使い方が人間体より勝手が悪いかららしい。リアルで武術経験のある人の中に偶に居るらしい。という話をアインズはたっち・みーから聞いたことがあった。

昆虫系の種族であるたっち・みーもキャラメイク当初は同様の心地悪さを感じて

いたらしいが、彼の場合は某国民的特撮番組である仮面〇イダーシリーズにいる昆虫モチーフのヒーローのオマージュのために我慢していたのだとか。

パンドラズ・アクターを作成する際にソレを思い出したのはたまたまで、彼女のことを44の変身形態の一つに付け加えたのは詮無い気まぐれとくだらない感傷のために過ぎなかった。

それがまさか今目の前の結果をもたらそうとは思わなかった。

パンドラズ・アクターはアインズの前に姿をあらわすと、マタタビの姿に化けて『傾城傾国』を装備してアインズの前に平伏した。

アインズは回転椅子にゆったり体重を掛けながらソレを眺めて不快感に首をもたげた。彼女のおとなしめな容貌に華美なチャイナ服はまったくと言っていいほど似合っていないし、従順に頭を下げている姿など本人とのギャップで吐き気すらこみ上げてくる。多分アルベドあたりなら似合うだろうなと思った。

これを見るのは先日マタタビを救出して以来であったが、パンドラズ・アクターの独断という事実がその意味合いを大きく変えているのは言うまでもない。

だからこそ今ここで彼女の姿をとっているのはパンドラズ・アクターからすれば

自白のつもりなのだろう。そしてただ諦観した面持ちで黒髪を床に垂らしていた。
もっとも今のアインズにはパンドラズ・アクターを咎める気など全く無かった。もちろん苛立ちはするのだが、もっと憎いヤツがいる上に、今からアインズがやろうとすることもほぼ同じことなので非難する筋合いは通らない。
用件はマタタビと『傾城傾国』にまつわる今後の話である。それを〈伝言〉で済ますわけにもいかなかった。だから作戦中の合間でわざわざナザリックのアインズの自室に戻って彼も呼び出したわけだが、覚悟のうえでもＮＰＣの反逆を改めて目の当たりにすると驚愕を禁じ得なかった。ましてやそれが自分で生み出した存在ともなれば尚のことだ。
「……ところでまさかお前、昨日今日でマタタビを監視してる時も同じ格好をしていたのか」
「はい、御明察の通りにございます。安全面から考えて流石に『傾城傾国』の着用は自重しておりましたが。
彼女の気配遮断能力と『傾城傾国』を即座に使えるよう〈瞬間換装〉を使うために」

「ヤツの嫌そうな顔が目に浮かぶな」
「こちらの悪意は彼女に読み取られていたので、それはもう相当に」
四六時中自分と同じ顔をした者に監視されているのだ。さぞや鬱陶しかったことだろう。同情とザマァないの二つの気持ちが平衡した妙な気分になった。
「では改めて言い分を聞こう。ソレで彼女のことをどうするつもりだったのだ」
創造主に尽くすために生まれてきたはずのＮＰＣが主人に裏切りを働くという事態。そのワケを理解することは、目下の問題解決に加え今後のＮＰＣ達との向き合い方を考えるのに必要なことだ。
エクレアのように元々裏切るような設定を為されていたならまだしも、パンドラズ・アクターがそうでないことをアインズは世界で誰よりも理解している。ならば他の者達にもあり得るだろう。
もっともアインズ自身その理由は薄々理解しているのだが。
「端的に言えば、マタタビ嬢がアインズ様を傷つける恐れを排除したかった。これに尽きます
今現在彼女に課した縛りは主に二つ。ナザリック地下大墳墓に属する全ての者へ

の攻撃行為と、そしてアインズ様の許しなく無断で出奔することの禁止でした」
「……ああまったくやはり俺の落ち度なのだろうな。結局のところお前は、マタタビさんを信じる俺のことを信じられなかっただけ。
そして結果的に言えば間違ってはいなかった」
「いえ私も結局のところ彼女を自由にさせ過ぎていました。敵対行為以外の行動は一切制限していなかったからこそ、先のツアーとやらの介入を許してしまったのですから
作戦中に限り本人を監視していれば問題ないと踏んでましたが、時間差で影分身を動かされていることを把握していればこうはならなかったでしょう」
「だったらそれも俺の甘さのせいだろう」
そもそもパンドラズ・アクターがその気になれば傾城傾国で彼女の行動や秘密を把握できることは言うまでもない。
そして彼が最低限度の行動制限に押しとどめたワケもまた然り。
先日のアインズが暴走状態だったマタタビを殺さなかった理由とイコールだからだ。

「それは違います。他ならぬ私が彼女に首輪を掛ける覚悟を決めたのですから半端は許されるはずもありませんでした」

パンドラズアクターはマタタビと全く同じ眼差しででアインズを睨みつけ主人の意を否定した。

元来従順であるはずの彼がこうなったのは、ここ数日ずっとマタタビに化けた影響なのだろうか。デミウルゴスや恐らくアルベドにも同様の自主性が芽生えているのだとしたら、頭脳で彼らにはるかに劣るアインズにはいずれ手に負えなくなるだろう。他のＮＰＣにも同じことは言える。

ある意味それがあるべき姿なのかもと思うと複雑なところだ。

「もういいわかった。誰のせいだという話は不毛だからな。

何にしろ、これからは俺がマタタビさんの幸福を決定する。異論はあるか？」

「御方が本当にそれで良いとお考えになられるのなら」

「心配しなくても未練なんてとっくに吹っ切れたさ。彼女は最早視界に入れて目障りでしかない存在だ」

マタタビはアインズのことをほとんど信じてくれなかった。親がアインズに殺さ

れる可能性すら視野に入れ、その上でアインズやナザリックのことを慮るなど度し難いにもほどがある。素直に敵対視して裏切ってくれた方がよっぽどマシに思えるくらいだ。

強いて言うなら、マタタビという他人に過大な期待を寄せたアインズも悪いのだろう。それにアインズが彼女にとって信頼たりえない存在であるのは事実なのだから。

「あいつの家族崩壊なんてただの自業自得でしかないが、視界の端で辛気臭いツラをされては寝覚めが悪い。

蘇生拒否の両親くらいならどうにかなるかもしれないし、リアルに残された妹とやらがどうにもならなければ最悪妹の記憶を3人から奪えば問題なかろう」

両親すら彼女の幸福にとって使い物に成らないならそれも全て忘れさせ、適当な人間などをかいつまんで偽りの家族でも作らせる。あるいは たっち・みーの因子を受け継いでいるセバスなどが適任かもしれない。

「パンドラズ・アクター、はっきり言っておく。たとえ今からお前が『傾城傾国』を持ち逃げしたところで大した意味は無いからな。

ナザリックに残された世界級アイテムや、役に立つならこの世界固有の異能すら利用して俺はあいつの人生を否定するのだから。

強いて言うならお前の協力の有無で成功率が変わるくらいだが、どうする？」

パンドラズ・アクターの協力なしでも成功はするかもしれないし、しないかもしれない。

だがもし最悪の失敗を起こしてマタタビと敵対してしまえば待っているのはアインズとナザリック全ての破滅。それを確実に止められるのは『傾城傾国』による支配に他ならない。

我ながら安い脅迫だと内心にて自嘲した。

パンドラズ・アクターが今すぐにマタタビにこのことを伝えれば、アインズの企みは遥か彼方に遠のいてしまうだろう。

そうなればナザリックの破滅も待ったなしか。全てはパンドラズ・アクターの心次第。こんな綱渡りをするなんて自分でも全く信じられなかった。

「我が裏切りがアインズ様に深い疑心を抱かせてしまいました。償えるなら命すら捧げたいくらいです。

御身を御一人にせぬがためにマタタビ嬢に首輪を掛けたと言うのに、かえって我が行いが御心を傷つけ曇らせてしまった」

「悔やむなら全て行動で示せ。さぁその『傾城傾国』を俺に差し出すのだ」

「無論でございます」

パンドラズア・アクターは元の軍服埴輪の姿に戻り『傾城傾国』を差し出した。咄嗟にすり替えられてないかを念のため鑑定魔法で確認する。

もちろんそのままパンドラズ・アクターに使わせると言う選択肢は存在しない。適当に、自我が薄い傭兵ＮＰＣのサキュバスにでも使わせるつもりだ。

マタタビにとってのアインズがそうであるように、アインズにとっても最早ＮＰＣの存在は純粋な味方とは呼べなくなったのだから。たとえ根底にアインズへの想いがあったとしても、彼らの行動が必ずしもアインズの意志とぶつからないとも限らない。せめてアインズの支配力が及ぶうちに為すべきを為したいところである。

それにしても、と思う。その気もないのにただ居るだけで社会の輪を崩してしまうマタタビの在り様があまりにも悲しかった。

アインズがこれから挑むのはある意味どんな敵よりも手ごわい相手なのだろう。

それこそ世界級エネミーが可愛く思えるくらいの。

◆◇◆

ロ・レンテ城ヴァランシア宮殿最上階玉座の間

長い長ーい夜でした。昨日はホントに色々ありましたよね。たっち・みーが私の父さんだって露見したり自殺した13英雄だって発覚したり。

せっかくデミウルゴスさんが計画してたゲヘナを、私がツアーに変なちょっかいかけたせいで滅茶苦茶にしちゃったり。諸々デミウルゴスさんやアインズ様にバレて叱られたり、私は私で変に開き直ってしまったり。

まぁともかく長い夜が明けまして間もなくゲヘナ計画も大詰めです。我々ヤルダバオト一行が占拠した王城をアインズ様やツアーや冒険者たちが間もなく奪還しに参ることでしょう。

階下では雑魚悪魔の群れが蔓延ったり王族や貴族たちをプレアデスが監禁したりしてまして。

私とデミウルゴスさんは最上階。４つ並んだ玉座の真ん中二つにふんぞり返ってツアーとアインズ様が来るのを待ち構えてます。ほんと茶番ですね。

デミウルゴスさんは肘掛けと背もたれに絶妙なバランスで寄りかかり足を組むことによってＲＰＧ的ラスボス然と座してます。セクシーかつかっこいい。ウルベルトに見せたいところです。無理ですが。

ま、私はというと直角で固すぎる背もたれが座りづらくて敵わないから膝を抱えて体育座り何ですけどね。お行儀最悪なうえにメイド服なので雰囲気打ち壊しです。

デミルルゴスさんがやや不機嫌なのはそれが理由――　な訳ではなく私の昨日のやらかしのせいだと思います。一旦許してくれたとはいえ、そりゃ引きずりますよ当たり前。

「いえ、そういうことではありません。ただ昨日伺ったマタタビ嬢の生涯を思い起こし、改めて自分を見つめなおしていただけです」

「と、言いますと？」

「あなたの為すことがことごとく失敗した理由が、周囲に頼らず問題を一人で抱え

込んだことにあるのは言うまでもないでしょう」
「ええ、デミウルゴスさんの言う通り先日のセバスさんと同じですね」
先日彼をあざ笑った私が彼以上にやらかしたのは我ながら会心の道化ぶりだったと思う。
「根本は微妙に異なります。セバスの場合は彼自身の能力への自負と職務的責任感が空回りしただけだ。
だから最終的には絶対者であるアインズ様へ報告するに至ったのです。
しかしあなたにはそもそも身の丈を打ち明けられる存在すら居なかった。それは何故か」
「……そりゃあ」
なんか結局説教じみた雰囲気になってないかな。仕方ないけど。
「あなたは生まれながらに周囲を見限っていたからでしょう。ここからは不敬を承知で申し上げます。
コーアンという神職に忙殺され愛する家族すら顧みることが叶わなかったたっち・みー様。その御方に擦り寄る雌豚を蹴散らすために心を病んだ奥方様。

御姿を隠されてしまった至高の方々や、その御柱の陰を未だ追うアインズ様。そして自らの足元すら碌に見えていなかった我々シモベなど当然信用には値しない」

「まーそうだね。結果的に裏目に出たけど」

思えば逆効果にもほどがあるが、家出したのは危うげな夫婦仲に焦ってのことだった。

朽ちた友情モドキに盲目な狂ったアインズ様やＮＰＣに私の出生関係の話をするのは割と危ういと思ったし。

逆に今は、アルベドさんアクターさんデミウルゴスさんについては情報開示しといたほうが下手なことしにくいんじゃないかと思った。

「周りが頼りないからって、決して自分なら出来るとかも思ってない。不器用なのはよくわかってるから。

ただまぁ私は根っこのところで、頼りない誰かに期待して失敗させるくらいなら自分がやって失敗した方がいいと思ってるんだ。自分勝手な話でしょ？」

「なんて傲慢で度し難い、無能を通り越し有害な働き者にもほどがある。

ですがそんなあなたを糾弾できるほど、我々が立派な存在ではないのもまた確か

だ」

「いやいや十二分にご立派だとは思いますよ、アインズ様の手から余裕で溢れるくらいには」

いくら頭脳明晰で強大な力を生まれ持ったとはいえど、人生経験ゼロ歳児なＮＰＣに『立派』とやらを求めるのは酷なことではあると思うのだが。

彼らの自己啓発に妥協の概念は存在しないので私が何を言っても意味は無さそうだ。

「我々シモベは、ただ何も知らずアインズ様から慈愛を賜る愚鈍から脱するべきだと私は思う」

アインズ様的には何も知らないでいてくれたほうが良かったろうに。

が、デミウルゴスさんの気持ちはわからないこともない。子の心親知らず、嘘偽りで優しく守られていた事実は自尊心に致命的に響くのだろう。それこそ私やＮＰＣみたいな連中にとっては死にたくなるくらいに。

だから私はその優しさを、生まれてこの方ずーっと拒絶し続けたのだ。傲慢と言われても、そうだねとしか言い返せない。

「そしてやはり、あなたも変わるべきだ。他者の愛情を怖れ拒絶するだけでは何も得られはしない。どころか周囲を無駄に傷つけるだけだ」
「じゃあどうすれば、いいのかな。嫌なことはイヤだし、怖いものはやっぱり恐いんです
父さんも母さんもギルドの連中もアインズ様も……デミウルゴスさんも、優しい人はみんな脆くて怖い。自分のせいで擦り切れて折れてしまったらと思うと、おっかなくってたまらないです」
「ならばソレを面と向かって言えば良かったのですよ
時間はあります。だから私は、御隠れになられた至高の御方々について、アインズ様の口から真実を聞き出す所存です」
「ド正論だね」
話し合えばいい。
提示された結論はあまりにも合理的で正論だったが、私がそのありふれた回答にたどり着くまでの回り道を考えると可笑しくてたまらなかった。
どうにでもなったはずなのに、なんだかすっかり手遅れになってしまったなぁ。

結局両親は私が居なくても無事再婚できたんだし。ならもっと早くに私が両親を信じて、母の事情を父に相談していれば我が家に寄りつくメス豚共もどうにかなったし、両親が異世界に飛ばされる結末も回避できたんじゃなかろうか。

ああそうだ、さっきのアインズ様だってマサヨシにまつわる全ての真実を知らされても自棄になったりはしなかった。

ならもっと早くに彼を信じて私が全てを打ち明けていれば――

『ああよくわかった。絶対に、誰が何を言おうと、マタタビさんのご両親を復活させたりはしない』

ぶるりと悪寒が背筋を撫でた。私は玉座の上で縮こまって、両足を抱える両腕が更に固く締め付けられた。

なんだか彼とは、凄く手遅れな感じがする。

理由はイマイチわからないけど。

演武

ほぼえたってましたが久しぶりの更新となります。申し訳あれません。

王城最上階での決闘と考えれば格好がつくだろうか。何にせよ今からやるのは結果の決まった出来レースだ。

ツアーの鎧がヤルダバオトを抑えてる間にアインズ装う英雄モモンがヤルダバオトに支配されたマタタビを殺して洗脳を解くという筋書きで。

もちろん本当に殺すわけではないし精神支配を解くのももってのほかなので、殺害と蘇生の瞬間を装ってマタタビに変身したパンドラズアクターが入れ替わるという寸法だ。

ツアーはどうやら『傾城傾国』による精神支配状態の可否を見分けることが出来るらしいので、今後マタタビ本人をツアーに会わせることは無い。というかもう本

人が色々と面倒なので今後は彼女をナザリックに軟禁する予定である。

というわけでナーベに担がれたモモンと自前の飛行能力で浮遊できるツアーの鎧は、メイド悪魔アルデバランと魔皇ヤルダバオトが待ち受けている王城最上階に直接突撃を敢行した。

まずはツアーとモモンの作戦通り、あるいはアインズ達の予定通りに、ツアーが《世界障壁》というスキルでヤルダバオトと自身を半透明の球状結界に隔離した。

そしてツアーがヤルダバオトを、モモンがマタタビさんを相手にするというわけである。

ツアー曰くこのスキルは発動者を叩くか、世界級アイテムの保持者もしくは同格の竜王でなければ突破不可能なモノらしい。まるでナザリック保有の世界級アイテム『山河社稷図』の簡易版とでも言うべきだろうか。

（にわかには信じがたいが、始原の魔法の権能は世界級と匹敵する程なのか！竜王を敵に回すわけにはいかないな）

ツアー本人は余り使い勝手が良くない能力だと言っているが、もし仮に『光輪の善神（アフラマズダー）』

や『世界意志（ワールドセイヴァー）』と同系統の権能が存在するなら、下手をうてばナザリックですら陥落しかねない。

（それに彼女のこともある）

あるいは『永劫の蛇（ウロボロス）の指輪』や『五行相克』のような力があればマタタビさんの家族を呼び戻す手段となり得るかもしれない。

なら尚のこと、ツアー相手にはヤルダバオトがモモンやマタタビさんとグルであると知られるのはマズいだろう。

デミウルゴスらがそろそろ過激に空中戦を始めたところでナーベラルを別のフロアに移動させ、アインズもマタタビと向きなおった。

「……なんか碌でもないこと考えてたりとかします？」

「ツアーの力を利用する算段を考えていただけですよ。アレのコレクションとしての価値は極めてレアだ」

「らしいようでらしからぬですね。かつての石橋クラッシャーモモンガなら、あんな危ないヤツは絶対に生かしては置かなかったと思いますが」

「碌でもないこと考えてるのマタタビさんじゃないですか、ホント俺のことなんだ

と思ってるんです？　たっちさんの友人を殺すわけありませんよ」
「……べつに私は止めませんがね。もう喧嘩するマサヨシは居ないし、アイツも推定６００歳超のお爺ちゃんで天寿も案外近いかもしれない。アインズ様がどうしようが勝手です」
「それこそ正にマタタビさんらしくない気がしますが」
「ふんだ」
マタタビは何も言い返さず、アイテムボックスの孔から禍々しい瘴気の立ち昇る妖刀を取り出した。
属性はアインズにとってダメージソースにならないネガティブ属性。鞘から抜くと、刀身の色はアインズの纏う全身鎧と同じ漆黒色であった。
下手なドレスなど及ばぬほどに贅を凝らしたメイド服と、反してそこらの露店に並びそうな安っぽい白猫の面。
ヤルダバオトが率いるメイド悪魔を仮装したマタタビは、やや気だるげに腰をかがめて刃を構えた。
アインズも既に〈完全なる戦士（パーフェクト・ウォリアー）〉の準備は済んでいる。そし彼女にて呼応して漆

黒の大剣と盾を握り構えた。

「正直あまり気乗りのしない茶番ですが、散々迷惑かけた手前でゴネても居られません

さぁどっからでもかかってきてくださいよ、漆黒の英雄様とやら」

「そう言わないでください。前衛技術に関してマタタビさんに自分の力量を試せる機会というのも悪くはありません。精々胸を貸してもらいますよ」

先日彼女には散々二刀流を馬鹿にされ非常にムカついたものだった。だから以来アインズは多少は見返せるようにするためにコキュートス指導の下で訓練を受けていたのだ。コキュートスは喜んで引き受けてくれたし、不眠不休のアンデッドとしては時間つぶしにも悪くなかった。

「さいですか。馬鹿にしたの随分根に持ってるのね。盾なんかに持ち替えちゃって」

「オススメしたのマタタビさんでしょ？」

「そうだけど、私の言うこと真に受けるなんて意外だなーって」

もっとも彼女相手にそんな仲間臭い片意地を張るなんて、くだらないことだったなと今では少し後悔していた。

空気が凍り、数秒間合いは沈黙する。
そしてそれから、気乗りのしない茶番とやらが始まった。
◆◇◆
傍から見れば五分五分の斬り合いなのだろうか。
けれど当事者にしてみればその差は歴然としていて、自分の弱さと虚しい努力に心底うんざりさせられた。
それこそこの茶番は、つまらない、なんてものではない。
マタタビの流麗な動きをどうにかギリギリ目で追って、剣筋を盾で塞いで攻めに回る。
けれどアインズの大剣は見事な極小の動作によってすり抜けるように躱された。
「気を悪くしたなら詫びますが、これでも素直な気持ちです。本当によく頑張りましたね。
あれからどれだけ時間をかけたやら、動きは丁寧。読み筋もいい。
もうあと少し積み重ねれば、下手なユグドラシルの専業戦士じゃ相手にならなくなるでしょうよ」

「過大、な評価、痛み、います」

マタタビが純粋に称賛を向けてきたので、アインズはむず痒さと後ろめたさを胸におぼえた。

そもそもアインズがコキュートスにまで付き合いを頼んで鍛錬の時間をとったのは、彼女を見返そうという子供じみた意地である。それを見透されながら褒められるのは、嬉しいが恥ずかしい。

だがそれ以上に彼女の精神を手中に握ったアインズが今更そんなことで心躍らせるなんて、まったく滑稽で罪深いことである。

打ち合う最中でありながらアインズは、仮面越しの彼女の視線から目を逸らしたくてたまらなかった。

そんなアインズの非道を知る由もないマタタビは、斬り合いの最中でありながら余裕尺尺舌を弾ませる。

彼女と違い相槌を打てるだけの余裕がないアインズは、聞き流すほかなかったが。

「これでも私さ、昔から真っ向勝負って奴が大の苦手なんですよ。

私も小さいころマサヨシに剣道教えてもらってたんだけど、その影響でね」

マサヨシといえばマタタビの父でアインズの知るたっち・みーその人だ。

故人と知れたのがついさっきのことだから、その話は通夜の過去語りのようだった。

「アイツ教えるの滅茶苦茶厳しくてさ。

稽古じゃ娘相手にも手加減せずにいつも真っ向から叩きのめすし、終わればどこの動きが悪かったのか徹底的にケチつけて誉め言葉の一つもくれないの」

彼女の言う光景を頭に浮かべ、まるでいつかアインズの双剣を貶したマタタビの姿そのものだと思った。

親子で意外と似てるところもある――

「けど、私がマサヨシを見返したくてとった行動が我ながら酷かった。

盤外戦術なんですよ。事前に食事に下剤盛ったり、稽古中にPCのエロフォルダの場所言い当てて動揺狙ったりとかしたの」

「……」

――わけでもなさそうだった。

しかしアインズは納得した。その経験が、マタタビ程の達人がユグドラシルで今

のような戦闘スタイルになった理由というわけだ

ユグドラシルで置き換えて考えれば、ワールドチャンピオンである たっち・みー に真正面から何度も何度も叩きのめされたのだ。そりゃ折れるし馬鹿正直に向かって行くのも嫌になる。

かつて たっち・みー がマタタビの盗賊職ビルドを酷く惜しんでたのを知っていたが、割と自業自得であったようだ。

（たしかあの人間の女、ツアレはセバスが面倒見るんだったか）

きつい教育にならないように釘を刺しておくべきだろう。セバスはとても製作者に似ていたから。

歪んだ性格の女など彼女一人でもこりごりである。

そう思い、アインズの集中力が僅かにそがれた瞬間をマタタビは意地汚く咎めてきた。

彼女の剣先がアインズの鎧の隙間から肩甲骨を掠めて貫通した。痛みは無いが、ゾッとした。

「隙ありですよ。自分で気を引いといて恐縮ですが」

まったくだと思う。

マタタビの意地汚さを文字通り身に刻み込みながら、アインズは彼女の話を聞き流し続けた。

可能な限り。

「だからアインズ様がとても眩しくってさ。よく意気地張ってそこまで鍛錬できたもんです。

マサヨシが私に期待してたのも、あなたみたく叩きのめされてもくじけず真っ直ぐ立ち向かうことだったんだろうさ。ほんと、苦手なんだよ。親とか誰かの期待に応えるの。

だから昔からいつも思ってたんだ。私もあなたみたいに真面目で人に合わせて素直に生きていければ何も間違えずに済んだんだろうなって」

「馬鹿はあんただマタタビさん」

なぜこうも、マタタビはアインズの気に障る地雷を徹底的に踏み抜くのだろう。

まだしもワザとならどれだけ可愛げがあることか。

◆

かつてモモンガがマタタビを気にかけていたワケは、なにもクランの元仲間だったからだけ、というわけではない。

彼女が炎上を起こしてからクランから身を引いた潔さと、辞めてからわかった未練がましさのギャップがとても印象に残っていた。

具体的に言うなら、彼女は辞めてからもナザリックの防衛線に乱入してギルドを助けたりアイテム交換などの交流を欠かさなかった。そのくせ他所のギルドに入ったり元鞘に収まることも良しとしない。たっち・みー以外のメンバーからだって戻る誘いは無くも無かった。

そんな彼女がユグドラシルで最後まで交流が残り続けた唯一のプレイヤーだとは、よく考えれば改めて驚きだ。

たぶん彼女はクランを――ギルドを、かなり気に入ってたはずだ。

だけど唯一の居場所としてのギルドを、そしてナザリック地下大墳墓を拠り所にしていたモモンガとは、根本的に想いの向け方が違うのだ。

モモンガにしてみれば、自分の居られないアインズ・ウール・ゴウンなんて何の意味もないのだから。

そんな彼女の、アインズにしてみれば奇妙な情の向け方がなぜかとても気に食わなかった。

だけどうっすら何故か憧れもしていて、癪だったが嫌いじゃなかった。

だが今日という日、彼女の生い立ちを知って、そしてその身勝手さの根深さを味わって改めて、アインズは彼女と分かり合うことを諦めた。

アインズにとってマタタビの生い立ちは頭からつま先まで不快でしかなかったし、もっと言えば鈴木悟は夏梅桜の在り方を許せなかった。

彼女の的外れで手前勝手な思い遣りはしかし、アインズ――鈴木悟への痛烈な皮肉なのである。

彼女は齢９歳にして、自分の見地から家庭の状況を把握して、自身の存在が家庭を揺るがすと判断し貴重な小学教育を放棄して家出をした。

それもただの家出ではない。彼女の父親であるたっち・みーが特権階級に属して

いることは多くのギルドメンバーが知るところである。一方で鈴木悟がそうであったようにユグドラシル時代の彼女の暮らしぶりが平坦でなかったこともわかっているのだ。

つまり特権階級にのみが住まうことを許された完全環境都市アーコロジーから、絶望と排煙にまみれた外周区域への生活に順応したことを意味する。そこにどれだけの苦難があったかは知らないが、何にせよ色んな意味で愚かしい決断ではあっただろう。

だがそんな彼女の半生は言外に、鈴木悟の人生を痛烈に糾弾しているようなものだった。

小学校に通うには膨大な学費が必要だ。貧困層の者が子供にそれを工面するには、文字通り命を削って働かねばならない。

当時の鈴木悟の家も例外には漏れることなく、このままでは両親の命が持たないことはわかっていた。それでも彼らの望みと期待の前にただただ気圧されることしかできず、言われるがままにその死力を享受して小学教育を通い切った。結果両親は過労死した。

だけどもし彼女が鈴木悟の代わりに鈴木家に生まれていたなら、両親が過労死する前に通学を断固拒絶したに違いないだろう。

この世界の誰よりも自分がそう強く確信できる。出来てしまう。

味方や愛する者すら跳ね除けて一人で生きる芯の強さ。その無意味で痛々しい魂の輝きがアインズの空虚な瞳を照り刺して、強く熱く焦がすのだ。

アインズには、そんな彼女がとてもとても、どんな怪物よりも恐ろしかった。

◆◇◆

『昔からいつも思ってたんだ。私もあなたみたいに真面目で素直に生きていければ何も間違えずに済んだんだろうなって』

『馬鹿はあんただマタタビさん』

柔軟に四肢をくねらせ流線的に繰り出されるマタタビの連撃を、アインズは両の手の盾と大剣で堅実に防いでいく。

そして滝のように途切れぬ彼女の攻撃のなか、時折僅かに生じる隙を見つけては一撃を入れるがそれはすり抜けるように躱されている。

傍から見れば、刹那刹那の合間の中で互いの隙を咎めては防ぎ合い、しかし決定打には至らない五分五分のせめぎ合い

だが〈水晶の画面（クリスタル・モニター）〉に投影された映像を覗くコキュートスとアルベドには、それが見せかけであると看破できていた。

「さながら舞踏ね。クラシックでもかければ演目のワンカットのようだわ」

アルベドの言う通りだ。これがダンスならリードを握っているのは間違いなくマタタビで、我らが主人は優しく腕を引かれている。

攻防は全て彼女が先読みし、時折ワザと隙を見せては自然と技の動きを引き出すように主人の動作を誘導しているのだ。

もちろん本格的に剣の道に触れてまだ幾何も経たない主人はこのことを恥じる必要はないだろう。非常に悔しいが先日の戦闘と今の武舞を見る限り、彼女の純粋な剣の技量は自らの創造主、はたまた たっち・みー様の域にすら片足を突っ込みかけている。いつか彼女と手合わせする機会があれば是非もない。

だが今それ以上にコキュートスは主人の成長に驚嘆と尊敬の念を抱かざるえなかった。

魔法詠唱者としてならば、天地無双の膨大なる魔力と叩き上げあられた圧倒的な戦略眼を誇る我が主人は最強だ。

けれど失礼ながらはっきり言えば、前衛戦闘の才能に関してだけは極めて平凡なようである。

冒険者としてこの世界を渡り歩いた最初のころなど、強大な二刀を力任せにふりまわすだけの戦い方が主だった。

「僅カナ期間デ実戦ノ域ニマデ到達スルトハ！」

「そうね。こと剣技のみに於いて非才な御方にしては、あまりにも成長が順調すぎる」

アルベドもコキュートスに同調しながら、しかし冷静に主人の変化を訝しんだ。

主人が剣術に熱を入れ始めたのは、先日マタタビが精神支配された事件からもうしばらく経ったころである。

「たしかアインズ様から剣術指南を任されていたのはコキュートス、あなたよね。

戦士職の専門性が劣る私では武術への造詣はあなたに一枚譲るけど、一体どのような訓練を受けさせたの？」

「特別ナコトハ何モナイ。タダ基本ノ動キヲ徹底的ニ学ンデモライ、ソレヲ敵ニ応用シテ実践デキルヨウニ学ンデイタダイタダケダ」

「そう……！」

コキュートスの回答にアルベドはただ息をのんだ。

武術の基礎には型と呼ばれる複数の特定動作が存在し、初心の者の修練はまずはそれらの動きを執拗に繰り返して体に馴染ませるところから始まる。とにかく何千何百、場合によっては何万もの反復を経て脊髄を通る反射神経に刻み付けることが重要だ。

そこから始めて実戦に移り、覚えた型を流動的な状況の中で臨機応変に発展させ活用することを学んでいくのである。これは語学において単語や構文を理解してから文章読解や実践会話へ挑むことに例えることが出来る。もちろん武術や語学に限らず幾何学にしろ職工にしろあり大抵の分野にも言えることで、この考え方は突き詰めていけば『学習』という行為の源流にも近い。

我らが偉大なる主人アインズ・ウール・ゴウンもその哲学の例外では無く、武術の道への第一歩は徹底的な型の反復練習から始まった。

指導役を仰せつかったコキュートスの指摘を努めて尊守し、ご自身のスキルで召喚したデスナイトを稽古相手に受けと攻めの基本動作を繰り返して学んでいった。

模擬戦でも最初は受け上手なデスナイトが出ずっぱりであったが、型の活用に慣れるようになると機動性に長けたり槍や鉄槌など別の武器を持った戦士系モンスターを用意するようになっていく。

もっとも天性のセンスを誇るマタタビや、端から技術を生まれ持ったシモベとは違い、主人の成長速度は決して劇的とは言えない。

だがとにかくコキュートスが感激を受けたのは、主人の強さと勝利に向かって行く眩いまでの貪欲さである。

コキュートスとて、先日支配したリザードマンの統治などの別の仕事もあるので主人の訓練に付きっ切りではいられなかった。

しかし今の動きを見れば、どれほど熱を入れて取り組んでいたかが手に取るようにわかるのだ。暇な時間は大概手にかけていたに違いない。

いちおう近道として、基礎的な型の練習を省略して実戦形式で学んでいく方法もあるにはある。

手っ取り早く一定までの技術を得るならそちらで感覚だけを理解しておけばいい。かつてナザリックに侵攻してきた大軍勢の１００レベルの猛者たちのなかにもそういった感覚頼りの者は多かった。だがその道の限界を見据えあえて主人は険しい道を進んだのだ。そして現に今マタタビ相手に演武を成せるほど技を理解しモノにしている。

生まれ持った力に奢らず、時に自分で道を開くこと。

先日のリザードマン集落侵略の際、陣頭指揮を失敗したコキュートスに説いたことを主人は見事に自身の背中で体現して見せていたのだ。

そのことを実感するや間もなく、コキュートスの膝は自然と床の上につき、神々しい主人の姿を水晶版越しに見上げた。

「アナタハ我々ガ遣エルベキ最高ノ主人。コキュートス、アインズ様ニ永久ノ忠誠ヲ誓イマス」

例の如く崇拝と尊敬の念を高ぶらせていたコキュートス。それをよそにアルベド

はゆったりソファーに背中をあずけながら、金色の双眸から熱い雫を垂らしていた。
そして静かに一人呟く。
「やはり私は貴女が憎いわ、マタタビ。御方の御心を揺さぶれるのは貴女だけ。私には無理。なのに貴女は……」
「……」
彼女の事情については鈍いコキュートスにも薄々察しはつく。『愛せよ』と命じられたアルベドが別の者に強く関心を寄せる主人の姿を目の当たりにするのは色々想うところがあるのだろうか。
主人の意図も女の情念とやらも読み解けない自分では、踏み入るべきではないだろうとコキュートスは思った。しかし、
「なのに貴女はあなたはアナタはアナタはアナタはアナタはアナタ方ッはッ!!」
「アルベド？　ドウシタ」
急に語気が荒ぶり彼女の黒い両翼がバサバサと空気を震わせる。
全身が小刻みに震えたかと思えば握りしめたソファーの肘掛けが万力に耐え切れず木片となってはじけ飛び、ヒールの足が大理石の床を鉄槌の如く踏み砕く。

そしてとうとう激情が堰を切って赤黒い叫びが木魂した。それはまるで世界を揺るがす激震のようであり、それを放つアルベドが纏うのは絶対の主人であるアインズ様が伴う覇気だった。

「どうしてすれ違う!?　どうしてわかり合うことを諦める!?　世界で唯一二人だけが理解し合える筈なのに！

マタタビお前は何度同じ過ちを繰り返せば気が済むの！　肉親の愛から逃げてはナザリックへと迷い込み、ここでもアインズ様の愛すら履き捨てて独り善がりな愛を押し付けるのか。相手の想いに蓋をして目を背けることの罪深さを知れ！

それにムキになるアインズ様もなんて愚かな！　たっち様を蘇生したいなら、我々に構わず気の済むまで互いに話し合えば良いというのに！　精神支配をかけるにしても、完全に仲たがいしてからでも遅くはないのだから！　彼女の拒絶を怖れて有無を黙らせることのなんと哀れで臆病なことか！　それを罪を奪うなどと強がって粋がる様など、まったくもって下らない！」

自身と同格であるはずの、もっと言えば能力的にコキュートスが有利を取れるアルベドから、生まれて初めてといっていいほどの戦慄と恐怖を真横で感じ取った。

そのため彼女がどさくさに告げた内容を受け止め衝撃を感じるのに、約十数秒もかかってしまった。

コキュートス「ゑ!?」

借り物闘争

早くアルベドさん側の話を書きたかったけど、病む負えなく間の茶番をはさみます

というかアルベドさんの話を書き上げてからこっちを書いたので、続きは明日投稿します

◆◇◆

城の上の少し上空。眼下の本丸で鳴り響くモモンとマタタビのけたたましい剣戟音を足元に感じながら、ツアーは眼前の悪魔と渡り合っていた。

南方装束のスーツの背中に蝙蝠の両翼を生やした悪魔、魔皇ヤルダバオト。単純な強さ以上にかの存在そのものから迸る悍ましい邪気が、この世界への脅威を如実にツアーへと物語っていた。

ツアーの駆使する剣群を、悍ましい肉体変化を駆使しながら巧みに躱しそらして迫っていく。

変化させた鋼鉄の爪で攻撃をはじきながら、道化師のような漆黒の仮面をかぶるヤルダバオトは怪訝そうにツアーへと問いかけた。

「一応聞いておきましょう。たかが一国の首都の危機に、なぜあなたほどの強者が腰を上げて力を振るおうとするのでしょう」

それはかつて自分がマサヨシに投げかけたモノによく似ていた。

「正義の味方なんて柄じゃないけど、これでも世界の守護を担っている身だ。キミ達ぷれいやーがこの世界を侵そうとするなら、僕はその敵になる」

「馬鹿な。我々が侵すまでもなく、この世界には様々な小悪で満ちている。このリ・エスティーゼ王国ひとつとっても民の堕落と腐敗はめざましく、王座ももはや何代と続くかわからないというのに」

「かもしれないね。エルフの王は力に溺れた愚者だし、ビーストマンの食人文化は生命倫理を越えて悪逆すぎるきらいがある。

汚点なんて他にも挙げればキリが無いだろう」

「解せませんね。そこまでわかっていて何故、そもそも何を護ろうというのですか」
「それでも我が友は言ったんだ。この世界は ぷれいやー の支配した世界より遥かに美しいと。
今となっては僕も、そう思えるさ」

昔のツアーなら考えられない答えだっただろう。
２００年前の魔神戦争でツアーが腰を上げたのは、ほんの気まぐれとマサヨシの粘り強さがあったからだ。
だけどマサヨシのおかげで独りぼっちだったツアーの世界は広がって、世界の価値に気付かされた。
姿形もバラバラで思想も文化もまるで違う異種族の者達。そんな彼ら弱者が魔神という脅威を前にして手を取り合い、得手不得手を互いに補い合って ぷれいやー の遺物にすらも打ち勝ったのだ。
確かにマサヨシの言う通り、これを美しいと言わず何というか。この輝きに比べれば八欲王の財宝などまったく虚しいものである。

対してマサヨシ達がかつて住んでいた ぷれいやー たちの世界は酷いものだったらしい。

種族は皆同じ人間なのに、一部の者達の強欲がその他一切に圧政をしいて奴隷の如く支配したという。それだけならまだしも、大気や土壌、海洋すら私腹のために穢してしまい、今では満足に息をすることすらままならないという有様なんだとか。

ぷれいやー の悪逆の果てがそんな悍ましいディストピアだというのなら、この世界の一員として腰を上げずにはいられない。

彼らの力がこの世界すら壊しかねないことは、始原の魔法を歪めた八欲王の存在によって嫌というほど思い知ったのだから。

親友の愛した世界を、ツアーもまた護りたいと思ったのだ。

「その友とは、まさか彼女の父ですか？」

ヤルダバオトは妙なところで青筋を立てて突っかかってきた。

たしかにマサヨシはマタタビの父親らしいが、これ以上この悪魔と話を進めても仕方がない。

「答える義理はないよ。〈世界絶対障壁〉」
「……そうですか」
なぜか歯噛みする悪魔を無視しして、およそ２００年ぶりに始原の魔法を発動させた。
ツアーのかざした手の平から淡い光の靄が広がり、ヤルダバオトも飲み込んで直径２００メートルほどの球身体となって制止した。
「ふむ……〈悪魔の諸相：触腕の翼〉」
ヤルダバオトは確かめるように自身の翼の一部分を矢のように射出し、それが靄に弾かれて球底に転がったのを確認する。
さらに壁面に手をふれ
「魔力を帯びた物理攻撃、それに外部からの音も遮断されている。このぶんだと転移や〈伝言〉の魔法なども同様なのか。大した隔離能力ですね」
「こうでもしないと僕は彼女に瞬殺されてしまうからね。知らないわけではあるまいに、やけに無抵抗なのが解せないけど」
「同じ手が二度通用するわけが無いと彼女が申しておりましたので」

「そうでもなかったんだけどね。無駄に警戒してくれて助かったよ」
ツアーが始原の魔法（ワイルドマジック）を使ってまでマタタビとヤルダバオトを分断した理由は、単純にツアーがマタタビに勝てないからだ。
本体ならば彼女の殺害なんて他愛もないことなのだが、今操っている駆動鎧に関しては先日あっさりと無力化された経緯がある。
再び高速で間合いを詰められ、あのマジックアイテムの効力を封じるとかいう謎の呪符を張り付けられれば駆動鎧は簡単に封殺されてしまうだろう。
だからツアーがヤルダバオトを引き付けている間に、モモンに彼女を殺してもらうこととなった。
もちろんモモンと言う男がマタタビを倒せるのかどうかはツアーからしてみれば確実性が乏しかったが、本体をこの王国に呼び寄せる訳にもいかないのでそこは賭けるしかない。
ダメならダメで他の竜王を頼るか、最悪ツアー自身がいよいよ重い腰をあげるだけだ。
「あるいは一番確実なのは、今僕が君を殺してモモンに加勢しに行くことかな」

ツアーは自分と同じく上空に佇む敵を見て改めて殺意を強く表した。

魔皇ヤルダバオトは蝙蝠のような翼を広げ、自身を強者と信じ疑わぬ態度で対峙する。

この世界に生きる大多数の存在が震えあがるツアーの威圧を前に、自身と同格と思しきヤルダバオトはそよ風に吹かれた程度の反応だ。

「元々は高みの見物を決め込んだ分際で身の程をわきまえたまえよ白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王。既にあなたの手の内はあの女から聞き及んでおりますよ」

「そういう君も随分彼女に振り回されたんじゃないのかい？　どうやって彼女を支配下に据えたのかは知らないが、影分身は随分自由に動き回っていたようじゃないか」

先の遭遇戦の反応からして、少なくともマタタビの影分身がツアーに接触を図っていたことまで把握してたとは思えない。

ツアーの介入は間違いなく彼にとっても予想外であったはずだ。

「アレが私の手に余る存在であることは端から承知していたことです。唯一信頼できるのがその余りある実力というだけで

我々の決着がつくよりも下の勝負がつく方が速いだろう」
「さぁ、それはモモン次第だ。だがどの道ここで君の命は貰っていく」
話を終わらせ戦いを再開させよう。
「とはいっても、数を打ったところで君にはあまり意味はないか」
「何のつもりだ」
「こういうことさ」
怪訝そうなヤルダバオトを無視し、召喚していた武器群のほとんど全てを帰還させた。
残るのは一振りの黄金剣。空中都市からの貰い物なので銘は知らない。
だが一時はマサヨシに貸し与え、今では墓前に刺して飾っていたツアーの持ちうる直剣のなかで最高の業物である。
「彼女相手に同じ剣の土俵での勝ち目はない。だが君なら別だ。力技で押せると判断した」
「この借り物風情が！　見覚えのある目障りなオーラを放つとは、実に気に食わないことだね

叶うことなら私の手で直々に粉砕してしまいたいよ」
「……キミもマサヨシのことを知っているのか？　」
「それこそ答える義理はありませんね。ただ悔しいことに私の願いはどうやら叶いそうもないみたいだ」
心底忌々しいというようにヤルダバオトは眼下の激闘を睥睨した。
モモンとマタタビが極限の剣戟を切り結んでいたなかで、とうとうマタタビの刀が高く打ち上げられて致命的な隙が出来た。
その瞬間をモモンが迫り、手のひらから謎の発光体を彼女にぶつけた。瞬間王城一帯を包むほどの眩い閃光が放たれる。
「しかし、あまりにも早すぎる。どういうことだ？」
ヤルダバオトが光の中で狼狽する。どうやらモモンがうまくやったようだった。
光が引いた直後、立っていたのはモモン一人でマタタビはモモンの胸に力なくもたれかかっていた。
どういう手を使ったのか知らないが、もはや今の彼女に精神支配の気配は感じられない。

本当に良かった。彼女に何かあったらもう二度と二人の墓前に顔を出せなかったから。

「さて今度はキミの番だ。潔く死んでもらうよ」

「そうはいきませんね。生憎と、悪魔という生き物は潔さと縁が無いものです」

するとヤルダバオトの背後から、黒々しい時空の孔が出現した。

「かなり高位の転移門だね。それに外部からこの障壁に干渉してるということは、術者は世界の加護を持つ者か」

はじめから逃げる算段が付いていたらしい。

どこから漏れたのか、ツアーの能力を把握していたようだ。マタタビには全てを見せていたわけではないのだし。

「さらばです、借り物の正義に酔う竜王よ

最後にあの女からの伝言を送りましょう。『まだ何かやましいことを隠してるだろ』だそうですよ？

いつか必ず、彼女に全てを話してやりなさい」

「……どういうつもりだ！」

背面から黒渦に沈むその瞬間、ヤルダバオトという名の悪魔は悍ましい邪悪さの鳴りを潜めた。
それからまるで、出来の悪い妹でも思い遣るかのような慈愛に満ちた声色だけを残して消えていった。

◆◇◆

転移門を潜り抜け、一時拠点としている屋敷に戻ってきたデミウルゴス。
仇敵モドキとの戦闘を中断され若干の苛立ちを覚えつつも、表には出さず事務的に、転移発動術者のシャルティアに問いかけた。
「作戦終了時刻が予定より10分早い。シャルティア、一体何があったんだい。またマタタビが何か面倒ごとでも起こしたのか？」
「失礼なやつね、今度はマタタビじゃないでありんすよ！　問題があったのはゴリラ女のアルベドのほう！　急にコキュートスから連絡がきたんでありんす」

デミウルゴスの決めつけにシャルティアは憤慨する。デミウルゴスは失言だったとは思いつつ、マタタビも良好にやれてるようなので安堵した。そういえばシャルティアはマタタビにいくつか借りがあるから、それが由縁かと考える。

「しかしアルベドが？　一体何があったというのです」

シャルティアは「詳しいことは秘密らしいけど」と言って続けた。

「なんでも、『守護者統括アルベド ガ反旗ノ意ヲ示シタノデ、氷結牢獄ニ幽閉シタ』って言ってたでありんすよ」

言われた内容が理解できず、ようやくシャルティアの言葉が脳にしみ込んだデミウルゴスは間の抜けた言葉を口にする。

「……はぁ!?」

ツアーの行動原理が原作時点ではギリギリ不明瞭なので盛大に捏造させていただきました。

マザーとか竜帝とかスルシャーナ様とかよくわからないのでその辺は完璧スルーです。ぷれいやーにヘイト高いのは大体マサヨシ（たっち・みー様）のせいってことで。

脅威の者共

たぶん今回の話がこのSS史上一番のオバロアンチ表現だと思います

異世界に転してから間もない頃、カルネ村という取るに足らない村落からアインズ様と共に凱旋して状況が落ち着いた時のこと。

恐るべき異能を誇るマタタビに取り入るためのご機嫌取りに、アルベドが何気ない会話を演じていた時のことだった。

〈凪/カーム〉

彼女は唐突に、戯れの様に、アルベドの黒い情念を鷲掴みに捉えては問質した。

『やっぱり憎いの？　自分らを置き去りにしたギルドの連中のこと』

端的に言って見くびっていたのだろう。その能力こそ恐ろしいが、本質は愚かで感情本意に動く頭の悪い少女というのがマタタビに対する最初の評価だった。

だが想えば不用心が過ぎた。かつて至高の存在に並び立ち盛大に内輪を荒らして

追放を受けたという来歴は只事ではない。
心裏を見抜く感性こそが彼女の最大の脅威なのだと、アルベドはこの時理解した。
彼女はわかっていたのだ。アルベドが憎悪を秘め、そのために自身を利用し使い潰そうとしたことを。
失敗した。
そのツケに、果たして自分は殺されるのか、全てを暴露され死より恐ろしい主人の失望を被るのか。
ならばせめて、自己中心な野望で動いたなどと勘違いされることは、決してあってほしくない。
『違うわ。私たちシモベのことなんて、焼くなり見捨てるなり好きにすればいいのよ。
ただ私は至高の40柱皆がアインズ様を御一人にしたことを許せないの』
アルベドは足掻くように身の丈をぶつけた。
マタタビはそれを聞いて僅かに口をつぐみ、優しく微笑んで言った。
『へぇ、そっちでしたか。御見それと、大変失礼をいたしました。ごめんなさい』

糾弾者の立場である彼女が酷く素直に、無垢な少女のようにぺこりと頭を下げたので、アルベドは底知れなさを感じた。
『勘違いしないでください。別に私はアインズ様にもデミウルゴスにも、誰にだって告げ口するつもりもありません』
『どういうつもりかしら。私の叛意を黙認して、お前に何のメリットがあるというの？』
メリット
そう自分で口にしたが、アルベドには彼女が打算で動いてるとは思えなかった。すでに短いやり取りでマタタビの人となりは把握しているが、彼女からは気味悪いほどに１００％の善意しか感じないからだ。
これで彼女が実は凄まじい演技者だったとかならば、もはやアルベドの知性をもってしてもあらゆる目的が無為に帰するだろう。考えても仕方がないくらいである。
『一部分では、アルベドさんの意向に私も賛成なんです
あなたの想いは多少筋違いであるにせよ、決して的外れでもない』

『嬉しいわ。賛同してくれる者が居るなんて思いもしなかったから。筋違いという言いようがとても興味深いけれど』

『なんて言えば良いのかなー。このことは絶対に誰にも言わないで欲しいんですけどね』

彼女は僅かにぐぐもって頭を掻いた。

なんだか気軽にとんでもないことを言い放ちそうな悪寒を感じ、アルベドは急速に心の準備に身を構える。

すると言い放たれた事実は案の定衝撃的なモノだった。

『居なくなったギルドの連中が恨まれる謂れは無いってことです。

だって元々ギルド：アインズ・ウール・ゴウンは、過酷なリアル世界で生きる者達が暇つぶしに作った遊興の集いなんですから

それを10年以上つきっきりで付き合う奴なんて、よほどの物好きと断言しましょう』

『リアル世界……暇つぶし、遊興の集い』

自身の足元が崩れ去るような錯覚を感じながらアルベドは、それでも冷静を努め

てマタタビの言葉を反芻した。

りある世界とは至高の存在が御隠れになられた遥かなる大地。アインズ・ウール・ゴウンが全盛のころ、旧モモンガ様含め多くの至高の存在が彼の地の苦難を語り合う様子をシモベたちは見聞きしている。

つまりその避難地的な場所がアインズ・ウール・ゴウンであり、至高の存在がユグドラシルで為した多くの偉大な冒険は僅かな暇の享楽であると。彼女はそう言っているのだ。

あまりに荒唐無稽で信じがたい話だ。彼女が如何に善良であろうと、多くのシモベはそれだけ聞かされて素直に納得するわけが無かった。

ただ一人アルベドを除いては。

『くふふふふ、あはははは！　そう、そういうこと！　なるほどそれでは、あのタブラ・スマラグディナの言う通りだ！

アインズ・ウール・ゴウンなんてくだらない！　マタタビあなた、よくこんなことを私に話してくれたわね!?』

『納得していただけて何よりです。私はどうも勘違い展開ってやつが、ひどく虚し

くて嫌いですから』

なるほど確かに虚しいことだ。アインズ・ウール・ゴウンを誇大なモノと勘違いして崇拝するシモベの様など、彼女からすればさぞや滑稽で詰まらないように見えただろう。

残念なことに、聡明で偉大なる愛すべき我が主人にしても同様のことが言えてしまう。

『だから、ギルドからいなくなった奴らを恨まないであげてくださいね？

彼らはここより大事で愛すべき者のために旅だっただけなんですから。アインズ様だって理性ではそれを理解してるから気持ちに蓋をしているんです』

『ええ、わかったわ。絶対に、恨みで手を掛けたりなんかはしないわ。あなたの言う通り逆恨みもいいところだもの』

『……うん、ありがとう』

彼女の顔が露骨に曇るのを見てアルベドは内心舌を打った。

逆恨みであろうがアルベドの殺意が揺るぐことは無く、それを勘付かぬマタタビではないだろう。

如何な理由があろうが捨てた手前でアインズ様の御前に戻り、何のわだかまりも無く元鞘に戻る様などアルベドには耐えられない。

もっともアルベド個人の感情などどうでもいい。純粋な損得で考えても他の至高の存在の帰還はリターンとリスクがあまりに釣り合っていないのである。

なぜなら1度あることは2度ありうるからだ。マタタビの話が本当なら尚のこと、一度合流することが出来ても再び捨て行かれる可能性は極めて現実的であると考えられる。

そうなればアインズ様と同僚達があまりにも哀れであろう。

皮肉なことに、シモベにとっての最高の主人は造物主を差し置いて、慈悲深いアインズ様以外にあり得ない。

皮肉なことに、アインズ様の望むナザリックの安寧はアインズ様の一柱独裁以外にあり得ない。

だから他の至高の存在の殺害はアルベドにとって決定事項なのであるが、それに対しマタタビは若干否定的だ。

今ここでそのことを論じても仕方なし、今後少しずつ心裏誘導を図っていく他に

ない。

後にこの考えが目の前の存在によって二転三転させられる羽目になるとは、この時は思いもしなかったが。

『けどそうすると気になるけど、一部分の賛同というはどういう意味かしら？』

『ギルドメンバーのうち大半は善人で無害です。けれどごく一部にはえげつないくらいの人格破錠者が混じってる

クラン解散後に加入した るし☆ふぁー のことは良く知らないけども。少なくとも獣王メコン川、□□にフラットフットや××。あとは……』

『タブラ・スマラグディナ』

『そう、タブラ。あのあたりは本当に危険。ユグドラシルじゃ無害だったけれど、こんな世界に放り込まれたらいつか必ず私たちに悪意の矛先が向かう』

仮に彼女の言う通りに悪意の矛先が向けられるなら、それはとても恐ろしいことだ。

アルベドの叛意が見逃されているのが良い例であるが、ナザリックもアインズ様も身内に悪意にはとことん鈍い。この組織的な欠陥とナザリック地下大墳墓の構造

上の欠陥が加わればまさに悪夢だ。
　至高の存在という絶対的な立場と域内の自由移動を可能にするリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンのたった二つが揃うだけで、ナザリックへの脅威度は目の前のマタタビが軽く霞むレベルなのだから。
『それにしてもタブラ様はともかく、その四柱が恐ろしいとは知らなかったわ』
　マタタビは少し困りながら答えた。
『具体的な確証はないですし、他の至高の連中も殆ど勘付いちゃいないと思いますけどね。
　悪く言えば女の勘。小さい頃から人を見る目には自信があるんです、今みたいに』
『くふふ、見抜かれた私が馬鹿にできたものでは無いかしら？
　いざというときは頼りにさせてもらうわね。そんなこと、無いに越したことは無いけれど』
『全くです。けどまぁ私のことは精々こき使ってくださいよ。
　私はアインズ様に嫌われてるから、どれだけ雑に扱おうがアルベドさんの心は痛まず都合の良いこと請け合いですよ？』

『そんなことしないわよ？　曲がりなりにもあなたこそ、10年以上アインズ・ウール・ゴウンに付き合った唯一の物好きなのだから』

最悪の場合相打ちで処理する胸算用を測りつつ、一応本音も混じった虚言を吐いた。

『……メンバーじゃないんだから勘弁してよ』

満更でもない様子だった。

内心の感情を含め、これが彼女の最も欲する言葉であるから嗤えることだ。

この時のアルベドにとっては極めて理想的な存在と思えていた。

『あなたって相当のお人好しね。まるでセバスみたいよ』

『この処女淫魔が……あなたの首皮が恋しいうちは、滅多なことを言うもんじゃないですよ』

ただし時々、変な地雷が埋まってること以外は。

◆

アルベドは凍結の牢屋の中で背もたれもない氷製のイスに腰かけ、当時のことを振り返っていた。記憶の中の浮かれていた過去の自分とマタタビへの殺意を想い、握りこぶしに血を滲ませていた。

今思えば驚くほどにアルベドのマタタビへの策略はことごとくが的外れだった。

他の至高の存在もマタタビが危惧する通りに、アインズ様にとっては必要であった。

アルベドがわざわざ取らせるまでもなくアインズ様とマタタビの心理的距離は離れていたし、そのくせアルベドが付け入る隙がないほどに互いをこれ以上ないほど深く面倒臭く愛し合っていた。

マタタビが未だに多くの謎を抱え込んでいることを察知しておきながら、悠長にその追及を遅らせて最悪の形で事実を露呈させてしまった。

マタタビの危険性を鑑みて秘密裏に取り付けた精神支配に、おおよそ考えうる限り最低な形でアインズ様が利用を企まれた。

そして今の何よりの失敗が、マタタビとの過剰接触によるアルベド自身の精神汚染。

今のデミウルゴスやパンドラズ・アクター、特にアインズ様にすら顕著に表れた過度の疑心暗鬼と理性的思考力の減衰だ。

よもやコキュートスの前で怒りのままに主人とマタタビへの嫉妬と憎悪を叫んでしまったことなど、今でも自分自身信じることができない。

末恐ろしい。これこそが旧クラン：ナインズ・オウン・ゴールにて１５００名の大侵攻すら凌ぐ史上最大の崩壊危機を引き起こした業だというのか。

「はぁ」

思考に沸いた頭を凍えた壁面にもたれかけ物理的な冷却を図る。やがて熱は引いたが側頭部の頭痛だけが残った。

「あら、姉さん？　どうしたの」

そんなとき、唐突にアルベドの姉であるニグレドから〈伝言（メッセージ）〉によるテレパシーが届いた。

『どうしたのは私のセリフ！　氷結牢獄の感知結界にあなたとコキュートス様が

引っかかったから何があったかと思えば、どうしてあなたが投獄なんてされているのよ!?　大丈夫なの？』

第５階層の氷結牢獄にいるアルベドの姉、領域守護者ニグレド。情報収集特化型の魔法詠唱者でレベルは90オーバーという守護者に次ぐ実力者である。

どうやら近くに来たアルベドの様子を察知して、心配して連絡してくれたようだった。

肉親のぬくもりに僅かに頭痛が和ぐのを感じた。

「ふふ大丈夫、大丈夫よ姉さん。ただ何があったかは言えないから、お願いだから詮索しないで」

『あなたが失敗なんてするとは思えないもの。どうせまた、あのマタタビって女のことでしょ？

……前の謀反騒動のこともあったし心配だから時々感知魔法で追ってるんだけど、あの女ほんとに用心深過ぎて滅多に居場所を捉えられないの

難しいでしょうけど、本当にあの女にだけは気を付けるのよ？　こんな異世界

じゃあ何が起きるか分かったもんじゃないのだし』

それはいつかのアルベドが主人にした忠言によく似ていた。

（ああそうか、そういうことか）

アルベドはこの時ようやく理解した。今の時点で事態は最悪の方向へ向かっていることに。

「……ははわかったわ、わかったから。ありがとう姉さん。じゃあね」

返しを待たずに〈伝言（メッセージ）〉を切断した。

マタタビのことを、気を付けるだけ気を付けた挙句がこの様なのだから、我ながら酷く嗤えた。二重の意味で。

「馬鹿ね、私は本当に」

（今ここから〈伝言（メッセージ）〉で連絡するのは、かなりマズいわね。不用意に刺激しかねない）

本当に失敗した。マタタビがナザリックに訪れてからというもの、アルベドの為すことは悉くが空回りで失敗続きだ。

けどこの失敗に限って言えばマタタビの落ち度は完璧に無い。むしろ彼女がいな

ければ今も気付かなかったし、あのことを知ってもらえればよかったかも。いや、変に彼女自身が暴走して刺激させるのが一番マズいか。

ともかくこれは完全なるナザリック側の、唯一気付けたはずのアルベドによる失態だ。

一刻も早くこんな下らぬ内輪もめなど終わらせて、対策を練らねばならないだろう。

アルベドはこの時、全てを捨てる覚悟を固めた。

「早く、早く来てちょうだいコキュートス」

ラナー「マタタビマジこわー関わんとこー」

マタタビ「精神汚染とか大げさ。私が迂闊な情報与えたせいで、精神的に幼いあなたたちがとち狂ってしまっただけですよ」
デミウルゴス「どの口が言うかおんどりゃ」
アルベド「アイマタが尊過ぎて死にたい。クソが」
アインズ「アルベド何考えてるかわかんなくて怖い」
パンドラズ・アクター（統括殿が誰かによく似たツンデレをこじらせてる）

物申す

ようやくこの章に終わりが見えてきました。ほんとに良かったです

――戦闘は始まる前に終わっている by・ぷにっと萌え

【マタタビの至高の41人大百科】

No・8：武人建御雷

戦闘狂な部類だが比較的温和なプレイヤー。ただし たっち・みー大好き人間。たっち・みーに勝つために武器を何個も用意したり、狡い作戦組みまくったりしまくったけど一度も勝てなかったらしい。挙句の果てにたっち・みーが引退したら意気消沈してつられて引退したという。

ちなみに彼が記録した たっち・みー の戦闘映像は引退時に全てマタタビが引き取った。

アルベドさんが反逆の意を示したなどという仰天な連絡を受けたマタタビとアインズ様は、ゲヘナ作戦を早めに切り上げ後片付けをしてから急いで玉座の間へと向かいました。

「アルベドの表示色は……白か」

「確か、黒色だと敵対状態なんでしたっけ？」

「ええ。システム上では何の問題もないようです」

ナザリックが最奥10階層の玉座の間、アインズ様が【諸王の玉座】に座しながらマスターソースを開くのを、メイド服姿のマタタビも眉をひそめながら覗きます。

レベル順に並べられたＮＰＣリストの中でアルベドさんの名前は一番上にあって、記されている文字色は下記の方々と同様に白色です。これが精神支配とかをされて敵対状態だったりすると色が変わるそうなのですが。

「つまるところコキュートスさんの早とちり？」

「それこそ早計でしょう。ゲームシステムがどのように現実化されてるかわからないのですから。

微妙な意識の持ちようで管理システムの認証をすり抜けているのかもしれない」

「考えすぎ……でもないか。私もそれに救われたんだし」

ちょっと前に【傾城傾国】の精神支配をマトモにくらったマタタビだって、仕様変更した〈読心感知〉によってバグみたいな方法での発動術者を返り討ちにしたことがあった。

あの時は本当に運が良かったなぁと思いつつ、一歩踏み外せば最悪の結末だったことを考えて一人勝手に気落ちした。

まぁそれはそれとして。

「一体どんな内容なのやら。コキュートス達から直接聞かないことには何とも言えません」

アインズ様の言う通りだ。

どうにもコキュートスさんの緊急報告では、アインズ様とマタタビの作戦経過を鑑賞してたところで突然アルベドさんが狂乱して我々二人に攻撃的な内容の旨を口

走ったらしい。その詳細は直接でないと話せないとのこと。

我々は管理確認のために丁度玉座の間に来ているわけだけど、何故かアルベドさん直々のご要望でそのまま玉座の間にて詳しい事情聴取が始まる予定。ちなみに私が居るのもアルベドさんのご要望だ。

「最近こんなことばかりだ。ＮＰＣの自主性について行けなくなってる」

「何度も言ってることだけど、もう魔王様ロール辞めちゃえばいいのでは。それだけで楽になるし。きっと皆さん優しくしてくれますよ」

「……そうも簡単にはいきませんよ」

「じゃあ私は何も言いませんが」

続けて何か言いたげだったが、アインズ様はマタタビの方を僅かに睨むだけだった。

親心じみた男の矜持というヤツか、失望への恐怖か、それとも別に事情があるのか。彼の心の内だけはマタタビも量り知ることが敵わない。

ただ何にせよ彼の虚栄心はマタタビには真似できないモノであって、その意志を尊びこそすれ善意にしろ無暗に踏みにじる野暮な真似は出来なかった。

だからマタタビは敬意をもって彼のことを称えるのだ。かつては魔王様、今ではアインズ様と。

「今日もまた碌でもねぇことが起きそうですね」

「起こしたやつが言うと説得力がある」

彼の嫌味に全く心が響かない。だってまんまな正論だから。

散々な失敗続きがあってもはや今はただただ諦観の境地である。

「でしょ。もういいんだ、どうせまた私絡みでしょうから。間違ってもアルベドさんは咎めないであげくださいな

じゃなきゃ私、アインズ様の事が本気で嫌いになっちゃうからね」

これはせめてもの釘差し。こんなお願いの仕方は死んでもしたくはないけれど、彼女が死ぬくらいならする。

「前から思ってたが、アルベドには随分入れ込んでるようだな」

「安い同情を買わされただけですよ。私の良く知る友人と、それとお母さんにすごく似てたから」

「母親……うむ。似ていたのはタブラさんじゃあるまいし、ウルベルトさんか？」
「さぁ」
「まぁいいが別に」
ピンとこないのかアインズ様は軽く流した。
マタタビにとっては、アルベドの愛憎もアインズ様の頑固さもどちらも酷く侵しがたい。
だからマタタビは両者に均等に肩入れして、当人たちだけが向かう結末を傍観するだけに押し留めたのだ。
「もう来ますね」
レメトゲンのゴーレムが立ち並ぶ廊下をコキュートスさんとアルベドさんが歩いているのを感じ取り、マタタビは口を閉じた。そしてアインズ様から離れて段差を下る。
一般メイドから教わった作法思い出しながら、最終日の時のプレアデス共よろしく通路側へと控えた。メイド姿だからホントにまんまだ。
「コキュートス、アルベド 共ニ只今参リマシタ」

「入れ」
「ハッ」
扉が開かれ入ってくるのは、武装を整え細心の注意でアルベドさんを引き連れるコキュートスさん。
アルベドさんの両手には頑丈な魔法手錠が嵌められて、手錠から伸びた鎖はコキュートスさんの腕の一本に握られていた。
コキュートスさんは、更に言えばアルベドさんも彼の倍以上ビビってる。まるで戦いに挑む前の戦士みたいな深い覚悟が感じ取れた。
そして私の良く知る小心者の友人も、そんな覇気に当てられてビビらないわけがないだろう。顔は見えんし見てもワカランが多分絶対ビビってる。
「では早速だが事情を伺うか。コキュートス、状況説明をしろ」
「お待ちくださいアインズ様」
「オイ、アルベド！」
「何だアルベド」
アルベドさんの制止に二人が合わせて反応した。一触即発の空気を感じ、マタタ

ビもあらかじめ服の下に仕込んでた神器の短刀を意識する。
「まずは御身に無礼を働いた我が身でありながら、玉座の間での詰問という要望に応えてくださったことに深く感謝を申し上げます」
ここまでは普通の内容。ただこれがトンデモナイことをぶちかます溜めなことは明白で――
「構わん。ここにはお前の状態を確認するための用もあっただからな。システム上で見た限りは、どうにも白のようだった
それに理由もわかる。玉座の間はナザリック地下大墳墓の中でも最大最硬の隔離空間だ。
ギルド指輪を含めた転移、情報魔法、物理、諜報全てのアプローチが遮断されるこの空間でないと語れない事情なのだろう？」
「仰るとおりにございます。
そしてもう一つ、マタタビ御嬢様にもご足労頂いた訳ですが――どうかそのようなところにお控えになられないで面を上げてくださいまし」
何だ何だ気持ち悪い。

マサヨシのことバレてるからって敬語とかマジでやめろよ。っていうか内心敬ってないのバレバレだかんないったい何考えてやがるこの女。

「何か？」

「不敬で差し出がましく、また恐れ多い不遜な要望ですが何卒お聞きくださいますようお願い致します

私は間もなくここで行われる報告において、アインズ様の不興を買って死を命ぜられることがあるやもしれません

ですが私は絶対に、ここで死ぬわけにはいかないのです。なのでどうか我が命を一時だけでも御守りいただけないでしょうか？」

「アルベドキサマ！　守護者統括デアリナガラ、マシテヤ先ノヨウナ失言ヲ宣イ、ドノ面ヲ下ゲテ！」

オイオイ何を言ってやがるこの女!?

即座に彼女を敵と断じたコキュートスさんは、一切の迷いなく神器アイテムの斬神刀皇を取り出してアルベドさんの首元へと振り下ろした。

間に合……わない。

反射速度ならユグドラシル随一を誇るマタタビをもってしても、10メートルも距離があっては。ましてや達人級のコキュートスさんの一撃なんか阻止できるわけがない。

方法があるとすればそれは

一瞬にも満たぬ判断で、マタタビは握った神器の短刀をアインズ様の方へと振り投げた。

「「止めろっ！」」

「ッッッ!?」

同時に放った叫びがアインズ様と重なった。

アインズ様直々の制止、そしてマタタビの主人への攻撃行動、その二つによってコキュートスの断刀は中止される。

どっちか無けりゃ首皮ちぎれて死んでたんじゃねぇのかな。

次の瞬間マタタビが投げた短刀はアインズ様の頭部擦れ擦れを通過して【諸王の玉座】の隙間部分へと突き刺さった。多分ちょっと傷ついたかも。許せよ。

一瞬コキュートスさんは私の方を睨んだが、流石に攻撃はフリだとわかってくれ

たみたいで再びアルベドさんの方を睨む。

誰かが何かを言い出そうとしたその矢先、開口一番をやったのはよりにもよってアルベドさんだった。

「第６階層守護者コキュートス、あなたは何も間違えてません。アインズ様に盾突く者があるとすれば、如何な存在と言えどその命脈を許してはなりませんから。むしろ私は貴方の今の行動を心の底より誇りに思います」

「ナンノツモリダ？」

「私は自分の正しさを信じているのです。今私がここで命を墜とせば、ナザリック地下大墳墓全ての者に、何よりアインズ様に最悪の結末が訪れると確信しています。それを承知で不興を死で詫びるなど臣下として最悪の償いです。私は私の思うナザリックの最善のために全てを懸ける所存であります」

やりやがったぞこの女。自分の命を懸けに出して、玉座の間の空気を完全に掌握したんだ。コキュートスも（彼女に自覚は無かろうが）アインズ様も完全に気圧されて、下手な口出しが出来なくなってる。かくいうマタタビ自身がなによりもそうだ。

マタタビはアルベドの正気が振り切れてることを悟りつつ、自分の役割を自覚した。
「そしてアインズ様、ひいてはマタタビ様。ただ今の無礼な申し出を耳にした上で我が命を救ってくださったこと、重ねて深く感謝します」
女神
この時マタタビには、アルベドさんの姿が本物の女神のようにしか見えなかった。造り物な至高の美貌に、あらゆる本物に勝る慈悲と愛と賢さという、女性としての全ての価値を注ぎ込んだ存在。それが彼女。
こんなのに愛されやがって同性なのに妬んじゃうぞアインズ様め。
「〈瞬間換装〉学生服」
情けなくも気圧されて言葉に詰まるアインズ様を尻目に、マタタビはメイド服からフォーマル装備の学生服へと切り替えた。
「アインズ様、私はアルベドさんを守るよ」
「……好きにしてください。コキュートス、鎖から手を放してこちら来てくれ」
「御心ノママニ」

マタタビは対外的な服従ポーズを辞めにして、呼ばれたコキュートスさんと入れ替わりにアルベドさんへと近づいた。

「ちょっと失礼〈封錠解印〉」

まずは手錠に手を当てスキルで開けた。

アルベドさんは妖艶に微笑み、頭を近づけ二人にしか聞こえないよう耳打ちをする。

『ありがとうございます。では少しだけお話を』

『敬語やめてください。むず痒いです』

戸惑うマタタビに構わず、アルベドが取り出したのは【真なる無（ギンヌ・ガブブ）】とギルドの指環に一枚のメモ帳だった。

『この【真なる無（ギンヌガブブ）】があれば、【×傾●】の精×支●は無効です。既に課せられた縛りは解けませんが今以上の干渉は出来なくなり、マタタビ様はほぼ自由になれるはずです。だから手放さないでください』

『何？　よく聞き取れないけどまぁわかったですよ』

「してやられたな」

何か後ろのアインズ様が恨めしそうに見てるけど一体全体なんじゃらほい。
『あと万が一私が死ぬ場合を考え、お伝えしたい内容をこの手帳に記しておきました。億が一アインズ様が貴女様を狙って来た場合はギルドの指輪でお逃げください』
『万が一も億が一も杞憂じゃない？』
『石橋を叩き壊して鉄橋を造り進むべしが、私の座右の銘ですから』
『……叩き壊される石橋さん、後ろからめっちゃこっち睨んでるよ』
まぁそれくらいアルベドさんがビビっているというわけだ。
どれだけビビってらっしゃるかといえば、虎穴に投身した子供並みにビビってらっしゃるのだ無理もない。
しかもアインズ様に睨まれて猶のことだ。
「終わったか？　そろそろ話を進めたいのだが。アルベドの言う最悪の結末というのも気がかりだし」
「大変お待たせいたしました。では手っ取り早く私がなした無礼について説明したいと思います

コキュートス、例のレコーダーを出してください」

おやおやレコードとはずいぶん都合の良いものがありますね。

コキュートスさんが何故かすごく気まずそうに、言われたものを取り出しました。

「これは先ほどのアインズ様とマタタビ様の模擬試合を記録するため、コキュートスが用意したレコーダーです。

本来は〈水晶の画面（クリスタル・モニター）〉から別の記録魔法を横付けするのが望ましいのですが、なにぶん作戦の予定変更が急だったものですから。なので〈水晶の画面（クリスタル・モニター）〉の映像を直接コレで録音録画していました。

丁度その時、横に居た私がアインズ様とマタタビ様両名に不遜な暴言を吐いたのが、ことの次第です。ですから私の発言も当然記録されています」

なぜでしょう。すこぶる胸騒ぎがしてきました。

段々と空気が震えてくるのがわかります。多分これ心臓の鼓動音が空気を揺らしてるんですね。

アルベドさんもコキュートスさんも、それにつられてなぜか私も。心臓があったらアインズ様のこれに加わっていたのかな。

「……では、お願いします」

アルベドさんの神妙な声に合わせレコーダー再生された。

映し出されるのは先ほどのマタタビとアインズ様の茶番な模擬戦だ。

時折アルベドさんとコキュートスさんの話し声も聞こえたりする。小さい頃、運動会で再生されたホームビデオを思い出して何とも言えない気持ちになった。

しばらく流れて、アインズ様の努力振りにコキュートスさんが感激し出したあたりから場の空気が重くなる。

アルベドさんの方を見ると、先ほどの美貌と覚悟は見る影もなく死んだ魚の目をしていた。

『やはり私は貴女が憎いわ、マタタビ。御方の御心を揺さぶれるのは貴女だけ。私には無理。なのに貴女は……』

『なのに貴女はあなたはアナタはアナタはアナタはアナタはアナタ方ッはッ!!』

『アルベド？　ドウシタ』

『どうしてすれ違う!?　どうしてわかり合うことを諦める!?　世界で唯一二人だけが理解し合える筈なのに！

マタタビお前は何度同じ過ちを繰り返せば気が済むの！　肉親の愛から逃げてはナザリックへと迷い込み、ここでもアインズ様の愛を履き捨てて独り善がりな愛を押し付けるのか。相手の想いに蓋をして目を背けることの罪深さを知れ！

それにムキになるアインズ様もなんて愚かな！　たっち様を蘇生したいなら、我々に構わず気の済むまで互いに話し合えば良いというのに！　×神▼配をかけるにしても、完全に仲たがいしてからでも遅くはないのだから！　彼女の拒絶を怖れて有無を黙らせることのなんと哀れで臆病なことか！　それを罪を奪うなどと強がって粋がる様など、まったくもって下らない！』

空気が死んだ音がした

二次は推しを贔屓してなんぼだと信じたいこの頃です。タグに1期EDの美人を追加しました。文句があれば評価を下げるかタグ消すか好きにしてどうぞ。

オリ主・アインズ様・アルベドさんの関係があまりにも複雑化しすぎたので活動報告に補足しときます。ホントは本文で説明するべきモノなのでしょうが、いい加減テンポがきついので力不足ながらこのような形にいたしました。

興味ないヒトは見なくていいと思いますので、お好きにどうぞ。

あと情けない話ですが、今回に限っては熱烈に感想を所望したいしょぞん

さもなくば作者は悶え死にます。どなたか人助けと思って何卒……何卒……

983　王国編なのに王国がほぼ背景

決着

感想をくださった方々、また評価を入れてくださった方々本当にありがとうございました。自分に自信を持つことが出来て大変励みになりました。

今後ご期待に沿えず失望させてしまうことがあるやもしれませんが、どうかその時は情け容赦なく評価を入れてくだされば と思います。

筆はめっぽう遅いですが、牛歩の歩みでもエタラないように進んでまいりますのでよろしくお願いします。

Q、アルベドさんからオリ主への好感度高すぎない？

A、まぁ高い。唯一の理解者にして協力者となり、最終日に居合わせたのでアインズ様に好意的だからポイント高い。アインズ様と一緒にコキュを止めてくれたあたりで上限値まで上昇したと思われる。詳しく説明すると怪文書になるので割愛。一部分は活動報告に記載してます。

【マタタビの至高の41人大百科】

No.9：ぷにっと・萌え

ユグドラシル全体においても最高峰の戦術家。

モモンガや他の多くの仲間のゲームスタイルに大きな影響を与え、ギルド：アインズ・ウール・ゴウンを強大化させた立役者の一人。

彼について特筆すべき点は、リアル仕事とゲームへの活力を美しいバランスで両立させていたことであろう。人生の中の1スパイスとしてゲームを組み込んでいる彼はある意味理想的なゲーマーと言えるかもしれない。その点ユグドラシルを人生の悦びそのものと捉えていたモモンガとはある意味対極的と言える。

ちなみにおそらくギルドでは、モモンガに次いでマタタビのことを嫌悪していた

人物。

◆◇◆

狂乱の激昂がレコーダーを介して玉座の間にて響き渡った。

その雷はコキュートスやアインズだけでなく、アルベドを守ると申し出たマタタビどころかアルベド本人すら巻き込んで平等に降り注ぐ。

コキュートスは二度目の見聞きにも関わらず白目をむきかけ、マタタビは不意に横面をぶん殴られたように目と小口を空け呆然とし、アルベドの顔は先ほどまでの堂々ぶりが嘘のように死人の如く青白くさせていた。

アインズだけは狡くも〈精神安定化〉で表向きの平静を保っていたが、空洞の大脳はアッパーカットでも決められたかのように小刻みに揺れていた。

空気が死んで吸い込まれることを忘れた酸素たちは行き場なく滞留し、澄んでいるのに質量を孕むように重たかった。そんな中アルベドの報告は息苦しくも絞り出された一言によって〆られた。

「……以上、です」

アインズは震えた脳漿で今しがたの現状を反芻した。

コキュートスとマタタビの前でアインズの目的が明らかにされた。ここから状況を巻き直すには、この瞬間アインズが一人でマタタビとアルベドを無力化しなければならない。

マタタビにはいつでも精神支配の指示を使えるように、アインズの自室に召喚した傭兵モンスターに【傾城傾国】を所持させ待機させていた。だがアルベドがマタタビに【真なる無（ギンヌ・ガブブ）】を所持させたことにより、世界級アイテムによる干渉を遮断してかの忌まわしい事件と同じ状況を作り出された。

こうなればアインズがこの場でどんな手段に打って出ても意味はない。アルベドと特にマタタビの二人なら、たとえ無理にコキュートスを味方につけても玉座の間から脱出するなど全く容易いだろう。そして部屋を出てしまえばギルドの指環でどこへなりとも逃げられる。

パンドラズ・アクターから話には聞いて居た。【傾城傾国】でマタタビに精神支配をかける提案をしたのはアルベドで、それは万が一のマタタビの叛意を防ぐためのモノだったと。

そして彼女はアインズがマタタビに使った【傾城傾国】を利用すると知ったその時、即座にこの算段を付けたのだろう。
記録映像のからくりを利用してコキュートスまで巻き込み、
玉座の間という史上最硬の閉鎖領域にアインズ達を誘い込み、
あの糞気難しいマタタビから信頼を得て味方につけ、
所持していたギルド指輪と【真なる無（ギンヌガププ）】で万一の逃げの算段を確実なものとした上で、
音声記録を利用して立場のせいで面と向かい言い辛かった本音を盛大にぶちまけた。
結果アインズの野望は粉微塵にまで叩き潰されたのだった。
これは最早アインズ・ウール・ゴウンにとって完敗以外の何物でもなかった。それこそいつぞやのマタタビの様に笑いたくもなる。とんだ道化だと。
顎骨は率直な心境を呟いた。弁柄色のこれ以上ない穢れた感情を。
「糞が」
「アルベドさん」

「……」

マタタビは即座にアルベドの手首を強く掴んで逃げ腰を固めようとしていた。

だが当のアルベドは巌の様に動かない。死にかけの目に宿る微かな光がアインズを真っ直ぐ見据えるばかりだった。

この場の空気を支配したはずのアルベドが、今最も恐怖に打ち震えている。今まで散々掛けていた巧妙な生命保険なぞ何の意味もないと言わんばかりに。

実際、ある意味では無意味だった。理屈の上でアインズにとれる手立てはないが、そもそも理屈とか合理性などで動いていたわけではない。

無理筋とわかっていても、アルベドの説得というこの場で唯一残された方策へと進むのは道理だった。そんなこと彼女は承知なのだろうが。

「アルベド、お前の言ったことは正しい。臆病と言われようが愚かと言われようが甘んじて受け入れるとも。本当なら話し合うだけでもしてみるべきなのは火を見るよりも明らかな正論だ。

だからなんだ。俺もソイツもテコでは動かない。ササキツバキのこの世界への招聘とササキ夫妻の復活は俺の中で決定事項だったが、それをソイツが手放しで同意

することが無いのはわかってる。糞みたいな遠慮や独立心で割り切って、何でもないように取繕って拒絶するのは間違いない。俺はそれが腹立たしくてならないわけだが、なぁ違うかマタタビさん」

いきなり話をふられたマタタビは心底呆れた風な溜息を吐き、不快に眉間を寄せてアインズを睨んだ。

「……まったく、これだがらバレるのは嫌だったのに。わかってるじゃないですか。この私が！　あなたの好き勝手を許すわけがないでしょう⁉　」

アインズが理屈で動いていないのと同じようにマタタビも感情で動いて生きていた。

手を差し伸べても噛みつくような女。もはやそういう生き物だからその有無を尋ねても仕方がないのだ。

「だからなアルベド――――　」

「ならマタタビ様はこれからどうするおつもりで？」

アインズは、これ見よがしと広がった溝を見せつけてアルベドを諭そうとした。

だがアルベドはたった今決裂したはずの無駄で不毛な言い合いに声を挙げる。そ

してアルベドを掴んだマタタビの腕を強く掴み返した。決して逃がすまいとでもいうかのように。

「よもや慈しみ深いあなた様が異邦に妹君を一人残され、自分だけ粛々と墓参りに勤しむことを良しとするとは思えませんが」

勘違いしていた。アルベドはアインズを止めるためだけにマタタビを味方につけたのではない。

マタタビをこの場に繋ぎ止めるためにアインズを敵に回したのだ。アルベドがここから動かない限りマタタビも逃げることは叶わない。

この状況は精神的な意味でも効果的だった。

「……ああもうわかってるよ！　全部私がどうにかしなくちゃいけないんだ！　アインズ様が切り出した手前、今更異世界がどうこうなんて言い訳は通用しないんだから」

「それは不可能です。マタタビ様が万能を誇るのは闘争の場においてのみであり、持ちうる魔道具も全てが戦闘用。

未だ異世界転移現象の原因すら掴めない中で、ナザリックとアインズ様の助力な

しでは何もできやしませんよ」
「やるったらやるの！」
まるで子供だ。
追い詰められたマタタビの叫びはアインズ以上に不合理で、無いはずの目と耳が滲むほど眩しく痛々しかった。
そんな心の罅割れを理詰めで攻め続けるアルベドは、その苛烈さに反して慈しみに溢れ母親を思わせるようであった。
「哀れ、マタタビ様の独り善がりの本質は、他人を頼るという選択肢の根本的な欠如。
まるで助力を乞うのは死も同然とでもいわんばかり。何が、マタタビ様をそうさせるのですか？　どうか理由を教えてください。さもなくばアインズ様も私も、拒絶されるだけでは悲しいばかりです」
蒼白とした顔で懸命に伺いを立てるアルベドに、マタタビは歯切れ悪く口を詰まらせる。

そんなマタタビの心の奥末を果敢に潜り続けるアルベドを見て、アインズはたちまち自分が情けなく思えてきた。

結局のところアインズは自分のことばかりで彼女がよく見えていなかったのだ。

『やはり相変わらずですね』

『ええ。痛いのも、嫌われてるのも、どっちもね』

『誇大な過去の妄執と欺瞞にとりつかれた友情お化け』

『私が想定した一番最悪のパターンはね、マサヨシからつれなくされたアインズ様が「クソガー！」って逆上して私の両親をぶっ殺しちゃうこと』

マタタビは最初っからアインズを深く理解していたのに。

『マサヨシのことを知ったなら尚の事、これ以上私のせいで周りの人たちが傷つくのはもう嫌だった』

『私もあなたみたいに真面目で人に合わせて素直に生きていければ何も間違えずに済んだんだろうなって』

『もう魔王様ロール辞めちゃえばいいのでは。それだけで楽になるし。きっと皆さ

ん優しくしてくれますよ』

アインズが向き合ってきたのはマタタビそのものではなくて、マタタビの言動から攻め立てるアインズ自身の劣等感のように思えて仕方が無かった。

これで仲間だなどと、勝手に期待し失望していた今までの自分が忌々しい。

ならばせめて、せめて少しずつでも――

「俺も聞ききたい。教えてくれませんか、マタタビさん」

アルベドが踏みしめた獣道に恥を忍んで追順し、アインズも絞り出すように懇願した。

「……」

マタタビはアインズの方を向かなかった。

アインズが問うたことに意味があったのかはわからない。そのままマタタビは5分ほど口と目を閉ざして黙りこくった。

澄んだ空気がゆっくりと漂い続け、それからゆっくりと、泣きそうな声で喋り始

めた。

「……大した話じゃないけどさ、むかし一度だけ、母さんにわがままを言ったことがあったんだ。

テストで１００点取ったらなんでも願いを叶えてあげるってヤツ。

今の百倍デリカシーの無かった当時の私は『ぱぱのおよめさんになる』って言って、そしたら母さんに殺すような眼差しで睨まれて……そんで私は……

ほんの数舜のことだったけど怖くて死ぬかと思って、直後に正気に戻った母さんは勝手に泣いて抱き着いきた。私は母さんが怖くてたまらなくって。でも母さんの辛そうな顔が今でも忘れられないの。

いやでも別に、ごめん。私の問題は私のもので、母さんは何の関係もないから。

結局私は自分のプライドが大事で捨てられないだけだよ」

アインズにはむしろ最後の一言が、マタタビのプライドに言わされたモノのように思えてならなかった。

アルベドの感想はひどく辛辣だった。

「いえ、マタタビ様は間違いなくその時のことで傷を負われたのです」
「知った口を聞きやがりますね」
湿った瞳を細めながら気だるげに眉間を寄せるマタタビに、アルベドは吐き捨てるように言った。
「わかります。私とその母君は同じですから。どうせその母君は……マタタビ様に手を挙げたことをたっち・みー様に打ち明けなかったのでしょう？　どなたかの慈しみ深い温情に甘えて」
「アルベドさんあなた……」
「私が怒りの元に他の至高の存在をマタタビ様に抹殺させようとしていたのは、あなた様が一番よく知っていることでしょう？　そしてそれを反省した今でもなお、私はアインズ様の失望を怖れてその魂胆を黙っていた」
「え？」
「ナニ!?」
もはや本日幾度目かの衝撃発言に気を引かれているアインズ達をよそにアルベドはマタタビを優しく抱擁した。本当に母が娘を抱くように。

マタタビの表情は凍り付いたが、その双眸だけは相変わらず熱を孕んでいる。
この時アインズはアルベドのことが世界で何よりも美しく尊いように見えた。
見目が麗しいのはとっくに知っている。そもそも角度的にアインズにはアルベドの顔を伺い見ることはできないのだが。気にかけたのは見た目じゃない。
野望、外聞、期待、プライド、渇望、憎しみ、忠誠心
自身の人生全てを投げ捨て、ただ目の前の存在の為に慈愛と贖罪を手向けているその姿。
「私の所業の償いは万死を越えても生温い。でもマタタビ様は安心していいのです
あなた様は父母とナザリックとアインズ様の温情を受け取る資格と価値がある存在なのですから」
肋骨中心から左側、見えない心室が射抜かれて、アインズは声にならない叫びをあげた。流れ落ちようとする感情の発露を〈精神安定化〉が塞ぎにかかる。
それでも奥底に開けられた風穴は、甘美な痛みをスリップダメージとしてじわじわアインズにもたらし続けた。
今ここで場違いな感激に身を震わせずいることを、未だかつてないほど〈精神安

定化〉に感謝した。
「でも、別に私は」
だが悲しいかな。アルベドの言葉に戸惑うマタタビが、視線を散らしながら不意にアインズと目を合わせた。
マズいなと思った。彼女はアインズの知る限り世界で最も間の悪い女だから。
「そっか、そう」
案の定彼女はアインズの中のナニカをあっさり看破してみせる。
そしてしばらく逡巡したのち、マタタビは穏やかな笑みを浮かべた。そして雪解けと春の訪れを連想させる朗らかな声が響いた。
「うん、わかったよアルベドさん。私もうちょっとだけ信じてみる！　アインズ様もアルベドさんも、ほかの皆も！」
それは多分、清々しいほどの敗北宣言だった。
しかと耳に聞き届けたアルベドは、急に体から力が抜けて崩れ落ちそうになる。それを今度は逆にマタタビが受け止めた。
「良かった、これで私は――」

「死ぬ気かおバカ、空気読めよ」
「……あなた様にだけは言われたくありませんね」
アルベドは自分の二の足で立ち上がり再びアインズの方を振り向いた。そして苦々しく何かを告げようとするが、アインズはそれを手を出して制した。
「残念ながらマタタビさんの言う通りだ。何やらアルベドに物騒な魂胆があったことはわかった。
だがそれは未遂だし今ここでお前の口から語られたのだ。処罰は……あるかもしれないが極刑など到底あり得ない」
「そんな、それでは他の者に示しがつきません！　既に今ここで、コキュートスが至高の存在に対する私の叛意を耳にしているのですよ!?
いずれはナザリックの秩序に関わり、ひいては最終的に内部崩壊につながりかねません！　どうか御考え直しを！」
アルベドの必死な嘆願の姿を見て、アインズはある人物の影が彼女にちらついて見えた。
少なくともそれはかつての仲間だった、愉快でホラー好きで博識なブレインイー

ターの姿ではない。
「なるほど」
マタタビは推し量るような眼でアインズを見つめていた。思えば彼女からは多くの気づきと、迂遠すぎるが重要なヒントを貰って来た。まるでアインズ自身で気付いて欲しいとでもいうように。
マタタビは今更気付いたかとでもいうように鼻を鳴らした。
不快に思いつつもアインズは無言でマタタビの方へ頷き返した。

「本当に死ぬ気なのだな。ではそうだコキュートスお前に聞こう。とてつもなく不快な問いだろうが、必ず答えよ」
「……ハッ」
わけのわからない話に振り回されて気の毒なコキュートスに追い打ちをかけるのは気が引けた。
だが心の中で詫びを入れつつ心を鬼にして問質した。
「もしだ。もし万が一、お前の創造者である武人建御雷さんが俺を含む至高の40人

を殺せと命じた場合、お前はどうする？」

「ソ、ソレハ……断腸ノ想イデハアリマスガ、我ガ存在ニカケテ武人建御雷様ノ命ヲ遵守シマス。間違イナク志半バデ死ヌデショウガ……」断腸の思いではありますが、我が存在にかけて武人建御雷様の命を尊守します。間違いなく心半ばで死ぬでしょうが

「そうかそうか、当たり前だな。気にすることは無い。むしろ断腸の想いと言ってくれるだけ私は嬉しいぞ？」

「……ハハァ！　アインズ様ノ寛容ナ身心ニ感謝シマス！」

ＮＰＣにとって創造主の命令や意向は他のギルドメンバーのそれらを上回る。

それは随分前にマタタビが教えてくれたことだった。多分どれだけアインズが彼らと信頼関係を築こうが、その優先順位が覆ることは決して無いのだろう。

そして思い出されるのは最終日のこと。大して時間は経ってないのに、ずいぶん昔のことのように思える。

「私はこの世界に転移する直前、他のギルドメンバーが集まってくれなかったことに対してつまらない逆恨みをしていたんだ。

その腹いせというわけではないが、玉座の間に一人でいたアルベドを見て、俺はいたずら心でその設定を弄った。言い訳をすると少し寂しかったのかもしれない」

モモンガは玉座の間のマスターソースでアルベドの設定を改編した。

その行動が直後の現実化作用によってどのような結果を生み出したかといえば、その答えは単純。アルベドの創造主がモモンガという扱いになったのだ。

創造主とＮＰＣの関係は、たっち・みーとセバスを代表的に性格的特徴の類似など多くの影響が垣間見える。

そしてアルベドの叛意とそれらが意味するところは――

「だがそれがいけなかった。マスターソース権限を使ったのはアレが初めてだったから私も無知であった。

『モモンガを愛している』などとくだらない落書きを書いたその時に、創造主権が変更して、私の中の憎しみがアルベドに流れ込んだのだろう。

つまりアルベドが俺以外のギルドメンバーを殺そう企んでいたのは、創造主となった私の命令だったと言って差支えが無い。よって全ての責は私にあり、アルベドは無罪なのだ」

元をただせば全てアインズのせいだったというわけである。

「全ＮＰＣを代表してコキュートスに問おう。今の私の結論は理屈として納得するに値し、そしてアルベドを許すことは認められるものだろうか？」

「無論ニゴザイマス。全テノ端ガ、御隠レニナラレタ至高ノ御方々ニ対スル アインズ様ノ刹那的ナ寂寥ニアルトスルナラ、一体誰ガソレヲ責メルコトガデキルデショウ

モシソノ御心ニ異ヲ唱エル者ガ居ルトスレバ、武人建御雷様ノ名ニ懸ケテコノ コキュートス ガ切リ伏セテ見セマショウ！」無論にございます。全ての端が、御隠れになられた至高の御方々に対するアインズ様の刹那的な寂寥にあるとするなら、一体誰がそれを責めることが出来るでしょう。もしその御心に異を唱える者が居るとすれば、武人建御雷様の名に懸けてこのコキュートスが切り伏せて見せましょう

「うむ、感謝する！」

アインズの意図を汲んでくれたコキュートスが、決意表明としてがつんと武器を床に突き立てた。

だがその直後まるで衝撃に打ちのめされたかのように一人の人影が倒れ伏した。

「アルベドさん!?」
アルベドが白目をむいて鼻血を垂らし天を仰いでいた。
「雌臭い。二人とも見んなよ？」
マタタビがそっと彼女のドレスの裾をめくるので男二人は慌てて目を逸らした。
「もういいよ。そろそろＳＵＮ値も限界かと思ったけど、むしろ上がり過ぎてアルベドさんショートしちゃったみたい。」
マタタビはタオルを２枚出して一つはアルベドの鼻血を、もう一つで足先まで垂れた謎の粘液をぬぐっていた。
「今日はもう辞めにした方がよさそうだな。細かい話はまた今度だ」
「ほんと頑張ったからねアルベドさん。無罪放免になったって言うなら私が部屋まで連れてくよ。あとこれメモ帳、私はもう読んだから」
無造作に、アルベドから渡されたメモ用紙をアインズに投げた。
「気を許してくれたってことでいいんですね」
「うん信じるよ。ついさっきまでのアインズ様ならこいつは渡せなかったけど、今ならいい」

「相変わらず偉そうに。ところでご両親のことは結局どうするんですか？　妹さんをこの世界に呼び込んで蘇生すれば丸く収まるかと思いましたが」
「ほんとぶっ飛んでるねアインズ様って、だから怖いんだ。……ま、マサヨシ達のことは時間をください。一人でじっくり考えます。積もる話はまた今度
じゃあ行きますから。今更だし、コキュートスさんにも事情説明よろしくしてあげてくださいね？」
「ええ、そのつもりです」
「それとその……なんかありがとう。」

酷く照れくさそうに言い残したマタタビは、アルベドを両手で抱えゆっくり歩いて玉座の間を出て行った。

台風のような彼女達が去った後、アインズはその場でコキュートスに、今日あったこととマタタビの正体と両親のイザコザをゆっくりと語った。

案の定ひどく動揺して少し可哀そうだったが、最後までしっかりと聞いてくれた。そしてあまり意味は無いかもしれないが、最後に他言無用を念押しして５階層に返した。

今度彼に何らかの埋め合わせが必要だろうと思われた。

それからその場で例のメモ帳を読んで、感情任せに〈火球（ファイヤーボール）〉で灰にした。本当に酷い内容で、彼女たちがアインズに語るのを躊躇うのを納得しながら、それでも見せてくれたことを喜んで気慰めとした。

とりあえず凄まじく疲れたので〈伝言（メッセージ）〉でデミウルゴスからの最終報告を後回しにしてもらった。

それから精神的にクタクタな体を引きずりながらどうにか自室の寝室まで戻ると、アインズのキングベッドの中でアルベドが幸せそうに微睡んでいた。

眉間を寄せつつ見なかったことにして寝室を出ると、直後目の前で「添い寝も出来んのかヘタレ」と言い捨てたマタタビが廊下に逃げていくのを目の当たりにした。

アルベドが起きるのを考慮しなければ怒鳴り散らしてやるところだった。

「……緊張し過ぎて俺が寝れるか」

かくして激動の二日間はどうにか終わりを迎えたのだった。

かなり雑だけどどうにかこの章が丸く収まってよかったです。

次回をプロローグにしてこの章を〆るか、それとも次回以降に数話やる日常回に後日譚を挟むかもしれません。

あと最近９話を読み返してエンリがオリ主に言及した内容が今になってぶっ刺さりまくってることに戦慄しました。

まだ作者の中で構成があやふやだった時なのにあの女ヤベェ。流石覇王ですね。

キャラに振り回されまくりなこの頃です

最近オリ主が頭の中に住み着き出してうるさくなってきたので、活動報告に怪文

書としてアウトプットしときました。蛇足で冗長で不快な文章なので読む必要は一切ありません

エピローグ

マタタビ「アンケートの私の横に居てしっくりくる奴大賞！
見事アルベドさんデミウルゴスさんを抜いて受賞おめでとう
アクターさん!!」ドンドンパフパフ―　!!

パンドラズ・アクター「欠片程もうれしくありません」
マタタビ「知ってる」

というわけでこの章のエピローグはこの二人でお送りします。
アクターさんは極度の心労とオリ主の真横ということもあって演技モード皆無で誰コイツ状態かもしれませんがご容赦ください。

◆◇◆

魔皇ヤルダバオトが王都に襲来したマッチポンプな一大事件から数日。

けれど王都の街並みや喧騒は特段変わっているようには見られなかった。強いて言うなら衛兵たちの動きが妙に忙しいのと、道行く冒険者の顔つきが若干晴れやかなことくらいだろうか。

実際のところ悪魔が襲いにかかったのは、表向きの諸悪の根源たる八本指の７大拠点と、平民にとっては雲の上に等しい王城ヴァランシア宮殿ぐらいなものだったから。

王城を『ゲヘナの炎』と呼ばれる摩訶不思議な無熱の業火が包み込んだ姿は未だ記憶に新しい。だが、アダマンタイトを冠する二色の者達を代表とした数多くの冒険者と、この世界を遥か太古より見守り続けた評議国の竜王の活躍により今となっては平和そのもの。戦火の傷口は驚くほどに浅かった。

また酒場に浸る酔いどれの事情通からは、連中は悪魔どころか天軍だったのかもしれんと戯言の様にのたまわれたりもする。

というのも、王国を巣食う邪悪であった八本指をあっという間に滅ぼしたのは、黄金の姫達が遣わした勇気ある秘密の先遣隊ではなくて、身の丈に合わぬ悪魔召喚の代償だったらしいから。

それともう一つ。王城を盾にして逃げ込んだ悪魔たちは、人質とした王族や貴族に対して口にするのも憚られる実に凄惨な所業を行ったのだが、どうもその犠牲となったのが後ろ暗く薄汚い業を背負った、いわゆる悪徳貴族に類する者達ばかりだったから。まるで地獄の業火（ゲヘナの炎）は善人には涼しいものだと言わんばかりに。

ちなみに王族で犠牲になったのは、武勲で知られた第一皇子と、その凄惨な最期を間近で見せられ精神を病んだ現国王。

現在の政務は第二王子と補佐役の第一王女が中心になって行われているらしい。王位継承の時期はそう遠くないだろうが、近くもない。

一大事件の直後でしかも６割以上の武官が惨死した今の王宮の忙しなさは、突かれて地に落ちた蜂の巣と同じだ。年度ごとの戦争も近いので国政が落ち着くのは

いましばらく先だろう。

だがそれでも、鮮血帝による熾烈なクーデター直後に武官不足を嘆いたバハルス帝国との類似性を鑑みれば、王国の未来はすこぶる明るかった。

むしろ数代に渡って着実に騎士団を掌握し、気難しい大魔法使いの手綱を引いて決死の覚悟で血の改革を成功させた現帝国皇帝は、今頃血の涙を流して悔しがっていることだろう。

棚から牡丹餅の結果的な粛清現象の恩恵をあずかり国家統一を為した王国の姿を見て、全て黄金の姫が悪魔と契約して仕組んだのではと馬鹿々々しい陰謀論勘ぐっているかもしれない。

実のところそれが隠された真実な訳であるが。

ところで彼の毛根を痛めかねないストレッサーは他にもある。それは道行く冒険者たちの晴れやかな表情とも関係があった。

今王都では否王国中の冒険者組合において貴族達による冒険者たちの引き抜きが行われている。当然組合の抵抗は必死であるが、非常に厳しい状況だった。

というのもヤルダバオト達が占拠した王城を開放に導いたのは、宮仕えの衛兵や

騎士団では無く冒険者たちだったから。
冒険者たちは漆黒の英雄主導によって立てられた真に完璧な解放作戦に従い、カリスマ優れる蒼薔薇がそれを見事に率いた結果、多少の重軽症はあったものの一切の死者を出さずに王城の奪還を成功させたのである。
蚊帳の外に置かれていた市民達はただ手を叩いて褒め称えるしかできないだろう。
だが多くの生き残った貴族達はその限りでは無かった。悪魔による残虐行為が間もなく自分に降りかかるのを待つ他に無かった、そんなところを救われたのだから。
特に彼ら貴族達のモデルケースは蝙蝠野郎と悪名高いレエヴン公の、そのお抱えの元オリハルコン級冒険者チーム。
囚われて横並びに集められていた貴族たちの中から、彼らの手で一目散に救われたレエヴン公の姿は素晴らしいほど羨望の的となった。
しかも話によると、彼のチームの中の高名な戦士が領地の兵士の訓練を行ってるので、レエヴン公の兵団の練度は他より著しく高いというではないか。
なら自分等も、オリハルコンとは言わないまでも金や白金の粒ぞろいを是非招き

入れて自軍の強化を図りたいというそんな魂胆。
そして魔法詠唱者にも再評価の目途が立つこととなる。
彼ら失くしては悪魔の群れを焼き払って突破することも、傷ついた者達の命を繋ぎ止めれることも出来なかった。
今まで国家ぐるみで軽視していた魔法詠唱者、その活躍を文字通り目の当たりにした権力者は手のひら返して重要視し始めた。
引き抜きは当然、そうでなくても神殿や魔術師組合に金を流し関係性の強化を図ろうとか。
魔法詠唱者の才能が見つかり次第、しかるべき教育者と補助を与えて確実に育て上げる仕組みをつくろうとか。

どれもかれも地獄のトラウマで恐怖に駆られた浅慮な魂胆。
だがそれは間違いなく王国にとって利益となる動きだった。
無駄に税金を溜め込んだドケチ共は今後、必死に駆られ国家レベルの公共事業張りに金をばらまいて、確実に富と力を生み出すことになるだろう。

◆

「というのが今回の脚本です。これで満足いただけましたでしょうか？　マタタビお嬢様」

黒甲冑のいわゆるモモン装備に化けたアクターさんはつまらなそうに、先を歩くマタタビに告げた。

マタタビはただそっけなく返す。

「……別に、殺すなとか平和にしろとか頼んだ覚えはないんだけど」

青く晴れ渡る王都の街並みは、英雄たる彼の姿を否応なしに注視していた。

だが隠形によってマタタビが見られることは無く〈凪（カーム）〉のスキルによって会話が衆人に聞かれることも無い。

それはアクターさんの後ろを歩くナーベラルさんにも同様だった。数歩分後ろを歩く彼女には、その姿こそ見えるけどマタタビとアクターさんが何を話してるのかは聞き取れない。

「ナザリックやアインズ様からすれば世界征服よりお嬢様のご機嫌の方が重要ですから」

「はいはいありがとねー。収入は八本指から徴収した分だけになって半減だし、王国の支配からは遠のいたけど」

「ご安心を。事を穏当に済ませたのは評議国の竜王との将来的な協力関係を考慮してのことでもあります

ただでさえ悠久の時を生きる竜王ですから、機密はいずれ明らかになるものと想定して動いた方が賢明でしょう。

いずれ王国がより富んで平等な国家に育つときに、その切っ掛けとなったヤルダバオトの一切を明かすことでより友好的な関係へと持ち込むという魂胆です」

「流石抜け目ないですねー」

そんな七面倒なことをするくらいなら殺せばいいのに。

そうしない理由は明らかだ。

「もちろん全てはマタタビ様と、そしてアインズ様とナザリックの大望の為に。

世界級アイテムにすら匹敵する始原の魔法の権能が世界の壁を打ち破る可能性を

持つ以上放っておく手はありません。
無事解決した今だからこそ言える結果論ではありますが、マタタビ嬢があの竜王と関係を持てて幸運でした。
下手を打てば たっち・みー様の死に気付けず、あまつさえそのご友人を殺害し、復活のための足掛かりを完全に消すこととなったかもしれないのですから」
「……ありがとう。気遣ってくれて励ましてくれて。その優しさに涙が出るよ」
「それは何より。どうかアインズ様とデミウルゴス様にもそう仰ってください
あとそれに、古来より大陸を見聞し、己に世界の守護者を課した竜王は上手く使えば利益となるでしょう。
もっとも世界征服命令は破棄されましたが。あの時は私も驚きましたが」
「破棄とは違うんじゃないかなあれは」
先日デミウルゴスさんの作戦終了報告の時にアインズ様が言ったのだ、
『世界征服なんて計画したつもりはない。冗談で言っただけだから本気にするな』と。
あの時のＮＰＣの皆様の驚愕振りはとてもとても見物だったなぁ。

「アインズ様も怒ってないし、あそこまで気に病まなくてよかったと思うけどね」
「いえいえ、お言葉ですがむしろ魂に刻み込むぐらいで丁度良いかと。デミウルゴス殿のお気持ちは十二分に察しますが、流石に主人の言葉を勘違いして行動に出るのは忠義云々以前に常識的にタブーでしょう。
聖誕記念などにサプライズで贈らせて頂くとかなら、確かに悪い試みではないでしょうが」
なまじ出来そうな気がしてうすら寒いわ。
「悪い悪い。サプライズ感覚で世界制しちゃうあんたらホント怖いですよ。せめて……いや」
咄嗟に『せめて国家単位とかにしたら？』とか狂った助言しそうになった自分を窘める。徐々にナザリック脳が馴染みつつある自分に戦慄した。
もっと別の助言にしよう。
「苦手な私が言うのもなんだけど、報・連・相なんて上が言うほど簡単じゃないですし。
ナザリックみたく上長と部下の立場格差が極端過ぎると、どれだけ部下が優秀で

も連絡の齟齬は起きますよ

なにせ彼らはアインズ様に、自分の命以上に大切な『存在意義』という命脈を握られてしまっているのですから。

ほんとに些細な確認作業でも、いや些細であればあるほど『聞いたらむしろ怒られそう』とか『自分で考えろとか言われそう』とか『そんなことにお時間を頂くわけには』って考えて間違いが始まる。

私から言わせれば尻ごんで口数少ないアインズ様にも問題はありますし、どっちが悪いかと言われたらどっちも悪い。知ってて黙ってた私はクソ野郎ってね」

「黄金の如く重く尊き忠言深く感謝します。肝に銘じておきましょう。また、第三者視点たるその立ち位置の重要性も重ねて身に染みました。

やはりあなた様はナザリックとアインズ様に必要な方だ。それに比べればたかが一国の処遇など、羽より軽い」

「……そーですかい。『マタタビを娶るなど酷い冗談だ』というのも尊きアインズ様の御言葉です。忘れないでくださいよ？」

「当然、というか私にその気が無かったのは、アナタ様も知っておられたことでしょう？」

「ま、そうですけど」

あれを発表した時も酷く爽快だったものだ。

デミウルゴスさんの眼鏡がひとりでに割れ、アルベドさんが再び白目をむいて鼻血垂らして倒れそうになったのはホントに笑えた。彼女はもうちょっとうれしそうにすればいいのに。

ちなみにアウラさんとシャルティアさんが『なんじゃそら』って変な顔してたのは可愛かった。

彼らＮＰＣの精神は妙なところで非常に繊細にできてるようだった。

そのことを頭に入れると、猶の事先日のアルベドさんの大告白はとんだ異常現象だったのだと気付かされる。

「ねぇアクターさん、玉座の間でのアルベドさんの仰天行動

私が思うにあれは愛が為した奇跡なのですよ」

「思いのほかロマンチックな表現を好むのですね」

言われて見れば確かに自分でも意外な言葉だった。私は『愛』という言葉がどちらかといえば嫌いだ。

ロマンを求めるのは恋愛モノのフィクションの中だけにとどめているつもりだったんだけども。

「自分でも意外かな」

よもや目の前の男の如くフィクションが立体化するとは思いもしなんだから。

そこそこそが美しくも不気味な神秘の塊であって、ある意味ではこの異世界においてアインズ様とマタタビにとって何よりの重要事項だった。

「あなたがたＮＰＣの皆様の優先順位はまず第一に製作者。次点でアインズ様を含む他のギルドメンバーで、その次くらいにナザリックや他のＮＰＣって感じになってると思う。この時点で異論はある？」

「ありません。ほぼその認識で間違いないかと」

「なら続ける。上述の性質は本人たちの構成人格でもあるけれど、プログラム的な側面も強いと私は思っているよ。

たとえばデミウルゴスさんとかがこれから何百何千年以上に渡ってアインズ様と

高い信頼関係を築いても、ウルベルトが裏切れと言うなら裏切るでしょう」
「その根拠は？」
「確たる根拠はありません。実際に彼らに接してみて私がそう思ったというだけです。強いて最たる例を挙げれば、ナザリックの簒奪を命ぜられたエクレアさんになるのかな。彼の精神を一般論で理解するのは不可能じゃないかと思いますよ」
「感心します。本当に我々をよく見ておられる」
「政治とか経済はちんぷんかんぷんだけど、ヒトを見る目にだけは自信があるので」
　ちなみに命ぜられたというニュアンスも非常に怪しいところだけど。アルベドさんのアレ然り、シャルティアさんの似非廓言葉然り、それこそエクレアさん然り、落書き同然だった設定文章に書き込んだというだけで、製作者たちが口頭で言い聞かせたわけじゃないのだし。
「余談はともかくこの性質を……仮に【製作者への優先】とでもしましょうか。多分これは不変の法則だと思います
　ただアクターさんも身をもってご存知の通り【製作者への優先】の内容は凄まじく曖昧ですよね」

マタタビがそう言うと、彼の纏う雰囲気が暗くなるのを感じて少し申し訳ない気になった。

酷な話をふっているのは分かっているが、それでも私はその矛盾に向き合うように後押しをする。これは先延ばしにしたところで仕方のない話だから。

「ええ、マタタビ様にはそのことで散々と揺さぶりをかけられましたから。

私が優先すべきがアインズ様の要望か、幸福か、安全か、全てなのか。

それらの要素が矛盾した際の行動決定権は、最終的に私自身の意思決定に委ねられることになる」

アクターさんは声色を堅くして絞り出すように続けた。

「私がアインズ様の意に背き、統括殿とマタタビ様の忠言に従いその暗躍を認めたのは、アインズ様の幸福と安全をとってのことでした。

ですがアインズ様にあなた様にかけた精●支×を看破され、結局私はどうしようもない喪失感と恐怖に駆られて御方に秘密の一部を明け渡してしまった。

とんだ不純な半端ものです。流されるばかりで行動の一環を欠いてしまった結果私は、自分が一体は何がしたかったのかわからなくなってしまいました

しかし愛の奇跡とは、言い当て妙かもしれません。
統括殿が全霊で身の丈をぶつけて御方とあなた様を言い負かした姿は、今の私にはあまりにも眩しすぎる。自分の軟弱が恨めしいものです」

アクターさんの自己矛盾。それはマタタビが居なければ無縁のモノだったのかもしれない。
アインズ様の完璧な演技力に騙されて、彼の全てに妄信し自己矛盾することなく幸せに生きていけたのかもしれない。
ＮＰＣの幸福論においてアインズ・ウール・ゴウンを名乗る我が友人は常に最適解を選び続けていたし、マタタビが居なければそれを踏み外してたとも思えなかった。たとえそれが奇跡のような偶然だったり無意識的行動だったとしても。
そのことを想えば増々彼への尊敬の念は深まるばかりで、天敵たる自分は一体何様だろうかとすら思う。
でもそれでもアルベドさんが、アインズ様が、両親が、今目の前のアクターさんが求めてくれるからマタタビは今ここに居る。

だからマタタビは思い悩み続ける彼の姿を心の底から肯定する。
「流されてなんかいないですよ。それならなんでアインズ様に内緒がバレた直後にアルベドさんに事の次第を報告したのさ。
アインズ様の執行前にそんなことしたら、アルベドさんがどんなことするかわかったもんじゃないでしょ？
現に、あなたが変なタイミングで告げ口したからアルベドさんは私とアインズ様に怒ったんだ。
計算づくじゃないにせよ、あなたは状況に不満を抱いたからそんな余計なことしたんじゃないの？」
そこまで言ってようやく彼ははっとなって、あごに手をやり俯いた。
「……どうなのでしょう。わかりません。その言及でようやく可能性に思い至りました。
申し訳ありませんが意識の整理がつかなくなりましたので、今その問いへの返答はできそうにありません」
「そう、興味ないからいいけど」

ただのうっかりミスだったと言われてもマタタビが信じることはありえなかった。

アクターさんとアルベドさんは、二人合わせて主人への真っ向からの反逆という奇跡を成し遂げたのだ。

アクターさんは無自覚な意識が密告という形で発露して、それにより血圧上昇したアルベドさんは不幸にもコキュートスさんの目の前で理性崩壊してしまい自殺覚悟の反逆声明へと舵を切らざる得なくなった。

本音ではあるにせよ本意では無かったあの大告白は【製作者への優先】の一部に抵触し、ＮＰＣであるアルベドさんの精神に大きな負荷を与え最後に気絶へと追い込んだ。

というのが私の考えだ。

「何にせよですが、アルベドさんもアクターさんも既にアインズ様の忠犬には戻れないものと諦めたほうが賢明です

少なくともアインズ様と私はそれを悪い事とは咎めませんよ」

「やはりアインズ様も存じておられるのですね」

「私が話して納得していただきましたよ」
「……感謝します。今後は己の考えも含めて、アインズ様のために全てを尽くして使え続けていきたい所存であります」
「うーん」
そんな捨てられた子犬みたいにしょんぼりしなくてもな―と、マタタビは虚しく思った。
なんだか先ほどからアクターさんを一方的に言い負かしてる風になってるが、元々彼はアインズ様やマタタビなど足元にも及ばぬほどの知性を誇る存在だ。
揚げ足取りが得意なだけのマタタビが彼のデリケートな部分を刺激したから弱っているだけ。あまりめげないで欲しいものだ。
「あなたは賢いから、私みたいに間違えなければ大丈夫ですよ。
頼りになる仲間や父親はいるし、それでもどうしようもない時は微力ながら私もお力になりましょう。あなたも私の恩人ですから」
そう言うと腑に落ちないというふうにアクターさんは反応した。
謂れのない積んだ恩義に疑問符を浮かべたようだった。

「ついこのあいだ、精神支配を食らったマヌケな私を助けてくれたのはどこのネオナチドイツ野郎ですか？」
「アインズ様です。アインズ様が全ての作戦を立案し、私を道具として使って貴女の救出を為したというだけですよ。
あるいは私がおらずとも、評議国の竜王の魂胆と同じく殺して蘇らせれば同じでしょう」
「それでもあなたの力があったから、私を殺さず精神支配を解くことが出来た。それは間違いないのでしょう？」
「そこに一体、何の意味があるというのです」
「……あのね、すごーく今更だけど、救うか殺すかどんな目的だったにせよ多分あの時アインズ様が私のことを殺していたら、私は多分蘇生を拒否してたと思う。
だってあの時見ただろうけど、私あの時爆弾でアインズ様ごと自爆する気だったんだから」
私の心は強くない。隣人たちを手掛けて尚、生きたいと思える自信はない。
そしてそもそも、我が人生に残した悔いは山ほどあれど、それでも生への執着が

元から非常に薄かった。
マサヨシと母さんが心中したきりなのと同じように、
あるいは先日死んだガゼフさんとアングラウスの刹那主義と同じように、
あの時の私ならばまず間違いなく、二度目の現世を拒絶していたことだろう。
今となっては自分の命の大切さも、少しずつ分かってきたような気がする。否、分からないフリを卒業できたが正確か。
いつかシャルティアさんが無理に私に礼を言った理由を知れて、私は深く納得した。
だから色々落ち着いて考えて、これだけは彼に言うべきだろうと思っていた。気恥ずかしいし、どうせだから今言うか。
「ありがとうアクターさん。私の『命』を助けてくれたのは、誰でも無いあなたの力だった
だからまぁ、もっと自分に自信を持ちな。あなたは割と凄いから」
今日は珍しく素直に口が動いてくれて良かったが、それでもちょっと気恥ずかしかった。

そもこんなお礼、もっと方々に言わなきゃいけないというのに、これでは先が思いやられる。

「……マタタビ様に励まされるとは、私もヤキが回ったようだ」

そして彼にはふっと鼻で笑われた。

まぁそんなもんか。アインズ様が言うならまだしも、マタタビに褒められても何にもなるまい。

今のアクターさんはアインズ様に化けているから〈読心感知〉は使えないが、軽く小ばかにされたくらいはわかるのだ。

ただ会話も聞こえぬはずの後方ナーベラルさんの我々への視線が、妙に粘っこく変わったのを感じ取る。

私は牽制がてらひと睨みしながら、前に振り戻って目的の建物を遠くに見据えた。

「そろそろですね」

場所は王都の冒険者組合本部で、『蒼の薔薇』のホームポイント。

マサヨシの知り合いだというイビルアイから話を伺うのが目的である。

アクターさんがアインズ様と向き合うのと同じように……かはわからないが

娘として両親と向き合わなくちゃいけなから。

はいというわけで王国編終わりです。ほぼ背景だった王国要素は前半の方に詰め込みました。

グダグダ文にここまでお付き合いいただいた皆様方には感謝と申し訳なさでいっぱいです。

まだ説明しなきゃいけないこともあるけど、それは次回以降の日常回で描写する予定です。

それも終わったら最終章になるのですが、細部構成はじっくり考え中です。

この章みたく泥沼にならないよう、反省を生かして頑張りたいと思います

隙間 2

事情説明・上：アルデバランと蒼薔薇

ただの事情説明回なのに全く本題が進まない罠
前回で煽っておいて正義さんの事情説明まで行きませんでした。ごめんなさい

◇◆◇

王国において3本の指に入るアダマンタイト級冒険者チーム：蒼の薔薇。
魔皇ヤルダバオト襲来の一大事件を乗り越え英雄の称号を欲しいままにしていた彼女たちのチームは現在未曽有の崩壊危機に直面していた。
「おう、戻ったぞ！」
とある個人指名の依頼を終えたガガーランが、出て行った時より10倍ほど精気

みなぎる表情で帰ってきた。

出迎えたチームメンバーは各々複雑な表情でそれを出迎える。

中でも一番に顔つきを曇らせていたのはチームリーダーであるラキュースだった。

「おかえりガガーラン。衛兵の訓練は順調？」

「ぜんぜんダメだな！　連中、武器の持ち方以前に基礎体力がなってねぇよ。そこらの大工のおっさんのが動けるくらいだぜ。

今日も装備一式持たせて走り込みやった後、限界まで素振りさせて帰ってきた。モンスターの相手どころか実戦練習出来るのも当分先だなありゃ」

「……そう、大変ね」

王都衛兵団の訓練、それがここ数日ガガーラン指名で依頼されたクエスト内容である。

依頼者はさる貴族の一人。ヤルダバオト襲来どころか普段でさえ殆どと言って良いほど活躍しない彼らにお灸を据えてくれとのことである。

王国兵士の質の悪さは近隣諸国の中でも頭一つ抜きんでて深刻だった。なにせ彼

らの戦闘力一般人に毛が生えたレベルである。中には酔っ払いの暴漢にすら尻込みするのも居るくらいだ。

それはモンスター駆除の冒険者への過度な依存や、毎年起こる帝国との戦争の被害、災害対策の不足、治安悪化など数多くの弊害を引き起こしている。

これまで権力者たちはその能天気さを遺憾なく発揮して事の対処を無視してきたが、いざヤルダバオトの王城襲撃によって自らが痛い目を見るや掌を反すようにこぞって力を求め始めた。

「男日照りが潤って何より。何人かヤッた？」

「おうティア、5～6人誘って男にしてやろうかと思ったが全員フラれたわ」

「少年兵とか流行ればいい。赤ん坊から仕込めば何でも言うこと聞いて合理的」

「ティナ下心しかないわよねそれ。流石に少年兵は倫理的にアウトじゃないかしら？」

最近はガガーランが受けたこの手の依頼が王国中の冒険者組合で盛んとなっており、そのまま引き抜きで兵団長の地位を与えられたりする連中が多い。

もちろんラキュースやイビルアイのような魔法詠唱者も、ティアとティナのよう

な盗賊も引く手数多である。
それこそが現在の王国中の冒険者組合と、そして蒼の薔薇が抱えている問題そのものでもあった。
チーム最年長のイビルアイは、いい加減うなだれたチームリーダーを見かねたのかてここでようやく口を開いた。
「ラキュースはいい加減決心付いたのか？　ラナーからの騎士団長の件、断るのか受けるのかどっちなんだ」
「あああああああああ!!　わかんないわよぉおおおおお!!」
痛いところをつかれたラキュースは、堰を切ったように情けない雄たけびを上げた。
『蒼の薔薇』を勧誘する者達の中でも一番の最大手は、なんと現国家最高権力者の二人。
第二王子のザナックと、ラキュースたちとも深い縁のあるラナー王女なのである。
ザナックからは
『今の状況ならガゼフ・ストロノーフの二の舞にはならん。国の威信をかけて相応

しい地位と待遇を約束する』

と言われ、

ラナーからは上目遣いに

『傾いたこの国を救うのに貴女たちの力が必要なのです』

と言われた。ついでに蒼の薔薇が八本指の拠点破壊を繰り替えしていたことを冒険者組合にバラシて外堀を埋めてきたことも付け加えておく。

『一体何のことでしょうか？』

元はと言えば依頼者はラナー自身だった筈なのだが生憎と物証が無い。どこからどう見ても蒼の薔薇の独断専行でしかなかった。

。

「知らなかったわ……ラナーって結構腹黒なのね」

悪魔よりも悪魔らしい友人の知略を前に、救国の女傑は成す術もなく打ちのめされたのだった。

最早そこにあるのは将来を迷う19の大人モドキの姿でしかなかった。

ほかの４人一同は呆れながらも、悶える彼女を生暖かい目で見守った。

今ラキュースの中では貴族令嬢をかなぐり捨てて未知へ旅立つほどの冒険心と、冒険者組合のタブーを冒してまで国賊八本指を打たんとした愛国心が激しいせめぎ合いを起こしている。

そんな彼女の激情に比べれば、先日戦った悪魔の方がまだしも生易しいかもしれない。

こんな最年少でもラキュースこそがリーダーだ。彼女の突き進む道こそが蒼薔薇の面々の行く道でもある。

ガガーランは王国兵団の悲惨さと亡き戦士長の地位に興味がない事もない。

ティアとティナはそもそも実家を捨てて彼女について来たワケで、他に行く当ても興味もない。

悠久の生を約束されたイビルアイは無駄に時間を腐らせるくらいなら、少しでも気の合う仲間と一緒に居たい。

どちらでも良いのだ、それが彼女の望む道ならば。

冒険者を続けたいのであれば帝国にでも都市国家連合にでも行けばいい。

急かされる程時間が切迫してるわけでもないのだから。

のんびりとその決断を待ってやろうと構えていたわけだが、結局同日にラキュースは己の進む道を決めることになる。

その肩透かしの原因となったのはヤルダバオトのメイド悪魔筆頭アルデバラン、あるいはマタタビもしくはサクラ。

彼女は偶然ラキュースと同じ齢なだけの、人生に迷える大人モドキでしかなかっただろう。

◆

漆黒のモモン達がアルデバランを連れて来訪してくることは確かに以前から約束していたが、それでも目の前で実物を見せられるとやっぱり呆気に取られてしまう。

漆黒と蒼の薔薇が机を囲んだ後、モモンが合図をふって最初からそこに居たかのように喪服ドレスのアルデバランが姿をあらわした。隠形術でモモンの背後に隠れていたようだが、現れるまではこの場で誰もそれに気付くことは出来なかった。

同性愛者のティナの鼻腔が２倍に広がり熱い空気を出入りさせた。当時は顔が仮面で隠れていたが、よくよく見れば息をのむほどの美少女である。

南方系の人種だろう。背丈はイビルアイより少し上でティアとティナよりだいぶ低い。

背中まで垂れた癖一つない夜空のような艶の黒髪。肌色はきめ細やかで白に近く、恐ろしく均整な顔つきは気品と清楚感に溢れていた。

落ち着いた表情と慎ましい立ち姿は、上級使用人や貴族令嬢特有の品格を感じさせ、出身と教育の上質さをこれでもかと物語っていた。顔付は大分違うが美姫ナーベとは姉妹かもというほど印象が近い。

きっと彼女はまず間違いなく強いのだろう。それこそヤルダバオト程の悪魔が精神支配をかけてまで腹心に置いた存在なのだから。

だが敵として相対していなければ垣間見える印象は１８０度別物だった。

以前ラキュースたちが目の当たりにしたときは、殺意という名の一振りの刃が少女の形を成しただけの恐ろしい獣。

だが今の彼女は箱入り娘か気弱なネコ科の小動物のようであり、強者としての風

格は微塵も感じられないのである。
「魔皇ヤルダバオト直轄メイド悪魔筆頭アルデバランを改めまして、佐々木正義と佐々木燈子の長女、夏梅桜と申します」
彼女――サクラは超越者としてではなく一人の少女として、粛々とその黒髪の頭を下へと垂れた。
「まずは先日の多大なるご迷惑と無礼をお詫び申し上げます。かつて精神支配によって強いられた戦いが不本意であったのは確かですが、あなた方にそんなことは無関係ですよね。申し訳ございません」
「頭を上げてください。事情が分からないうちは、私達としてもあなたを責めることはできませんよ」
あまりのサクラの委縮振りに、ラキュースは自分が悪いことをしたように思わせられた。
その辺年嵩があってしっかりしているイビルアイは、感情に流されず淡々と話を進めてくれる。
「お前にも相応の事情はあるのだろう。ならお前自身の信用確認を含め、先にお前

の事情とヤルダバオトについて聞かせてもらおうか。あの二人の話はそれからの方がいいだろう」

彼女の両親とイビルアイは旧知の仲だったそうで、サクラの話をよく聞かされていたらしい。なので蒼の薔薇の中でサクラのことを一番気にかけていたのはイビルアイだったりする。そんな彼女のぶっきらぼうさは微笑ましくもあった。

「そうですね、わかりました」

かくしてサクラは事情を語り始めた。

彼女がモモンと共にプレイヤーとしてこの世界に降り立ったのはまだ数か月前のことらしい。

ある日モモンと別行動していたサクラは、知り合いを助けるためにスレイン法国の特殊部隊と交戦して全滅させたが、代償として強力な精神支配を掛けられてしまったそうな。そしてその支配権が何かの間違いで邪悪な悪魔アルベドの手に渡ってしまったとのこと。

「私のドジと勝手のせいで色んな人に迷惑と悲しい思いをさせてしまいました」

精神支配により望まない相手とも戦わされた時のことは、今でも夢に見るほどの忘れられないトラウマだそうだ。シャルティア&アウラ、ツアー、アインズ

また悪魔デミウルゴスに弱みを握られて完全に逆らえなくなりマタタビが助けた娼館の女性たちを人間牧場で働かせると脅された、今回の事件の片棒を担いでしまったという。

「私を助けてくれたモモン達アインズとパンドラズ・アクターには本当に、感謝してもしきれません」

横のモモンの鎧を嬉しそうに小突きながら、サクラは笑って締めくくった。

話を聞いてたモモンは鎧の下の顔で、渋面を絶やさなかったようだけど。

「……あなた本当に捻くれてますね」

「ええそうですね。でも最近は自分のそういうところが、あなた達のお陰で好きになってきましたよ」

「私は嫌いです」

「存じてますよ」

二人の様子にガガーランは頭を掻いてティアとナーベは目を細め、ティナとイビルアイは無反応を決め込んでいる。

冒険心に駆られたラキュースだったが、サクラから冷ややかな視線が向けられたので腫れ物は避けるが如く話を進めた。

「サクラさんの事情については良くわかりました。王国としては難しいでしょうが、我々蒼の薔薇としては貴女の立場を尊重しますよ」

「ウチにも似たようなチビが居るからな、嬢ちゃんも気にすんなよ」

「チビとは何だチビとは。……まぁツアーから聞いたかもしれんが、私も『国墜とし』などという大層な忌み名を持っている吸血鬼だ

器に見合わぬ罪過のせいで世間を大手を振って歩けない身だよ。お前もあまり気にし過ぎないことだ」

「ありがとうございます」

「そうイビルアイと同じ。可愛いは正義なので許される」

「違う、そうじゃない。その手の免罪が適応されるのは美少年に限る」

「話の腰を折るな変態双子」

「あはは、えーっとでは、ヤルダバオトについて知ってることをお話しますね」
「なんかすいませんウチの馬鹿どもが。おねがいします」
身内を恥じ入るラキュースをだったが、蒼薔薇の喧騒を笑ったサクラは心の底から愉快げだった。
「私も記憶が朧気で全部は覚えていないんですけどね。話せることは話しますよ」
それからサクラは再び語り始めた。
「ヤルダバオトの出身はユグドラシルのグレンベラ沼地。私やモモンと同じようにこの世界に転移してきたヤツで間違いありません。
冒険者でいう難度としては……ツアーやモモンや私と同じで多分３００前後かな。基本戦術は前にツアーに使ったような身体変化。普段こそオールバックにスーツの紳士服ですが、戦う姿は本当に絵本で見るような悍ましい悪魔の姿そのものと言って良いと思います。
純粋な戦闘力では同格の中でも2枚ほど落ちる程度で、力押しされるのが苦手。私やツアーやモモンなら負けることは無いでしょう。
ただすっごく頭がいい方だから一筋縄じゃ行きませんよ。この間もツアーの【世

界絶対障壁】貫通してトンヅラしたように、逃げの算段は当たり前な方です。人質作戦とかもスゴイ好きそうだと思います」

朧気という割には妙に詳しいようだった。

ここまでサクラはすらすらとヤルダバオトの有益な情報を語り続けた。

ラキュースたちは更に傾聴しようと意識を向けた訳であるが、次第に話の雲行きが怪しい方向に向かっていく。

「『悪』という言葉はまるで彼の為のモノかと思うくらいには、本当に絵にかいた悪魔みたいな奴ですよ。

狡猾で慎重で疑り深くて騙すのが得意で、他人が嫌がることはなんでも大好き。具体的に言うと人を家畜にして家族を共食いさせたりとか××とか●●とか。あとは☒　☒☒させたり。日曜大工が趣味なのですが、作るのが人骨で組み上げた玉座とか悪趣味なもんばっかり。生命の尊厳とか何のそので、生まれてきたのが気の毒のようなニンゲン素材のキマイラつくったり、■■■■したり□□させたり――――」

「すいませんサクラさん……ちょっと気分悪くなってきました」

「あらすいません……まぁざっと言うと彼にとって人間はみんな玩具で、玩具ゆえ

にそれを彼は心の底から愛しているというド畜生な野郎というわけです」

「大変参考になりました。もう話は――」

「でも一方で興味深いのが身内意識の強さですね。彼は自身の家族に対してだけは、どんな聖人君主よりも慈悲深くそして義理堅い紳士な奴なのです。長男気質と言ってもいいかもしれません。

前述した邪悪性を共有できる仲間とはそれはそれは楽しそうに邪悪談義を交わしますね。でも一方で私みたいな偽善者や残虐性に忌避感をを覚える仲間には、自分の嗜好を抑えながら気遣って接することも出来るのです。彼が一番仲良しな仲間も、どちらかと言えば義理堅い武人気質の方なんですよね。辛口系のお酒が好きで、よくその方と晩酌を洒落込んでいるそうですよ。

悪魔としてはくそ野郎ですが、身内と外の線引きの潔さは慎ましくて非常に好ましい人格に思えます。家族や仲間として接するなら彼ほどの――」

「――その辺りにした方がいいですよマタタビさん。折角組み上げた蒼の薔薇のお嬢様方からの信頼がガタ落ちです」

「え？　あ……」

まずは誰しもが、モモンの差し止めの遅さを恨んだ。
モモンの制止でようやく我に返ったサクラは、向けられた懐疑の眼差しに青筋を立てた。
「なぁ嬢ちゃん、あんたまだ悪魔に魅了の魔法を掛けられたりとかしてないよな？」
「同感だ。なぜ自分を捕えていた悪魔について嬉々として深々語ることが出来るというんだ……」
「可愛ければ、許される……かも？」
「ない、それはない」
「実に面白い、ヤルダバオトに惚れでもしましたか？　ともすれば彼奴の困り顔が見ものですが」
モモンだけが一人クツクツと愉快に笑っていたが、何が面白いのか誰一人として理解できなかった。
だがこの時、ラキュースの頭脳には強烈な電撃が迸っていた。
何と言えば良いのか。これは奇天烈な惚気話に対する女特有の乙女回路とはまる

で違う。彼女の叔父が繰り広げた英雄譚を初めて耳にした時に感じた、自分の世界がひっくり返るような感覚に近いモノだ。
「あり得ませんよそんなこと。私はそういう的外れな色恋の勘繰りが大嫌いなんです。覚えとけください」
「それは失礼、今後は気を付けます。それはそれとしてマタタビさんのヤルダバオト評は実に興味深い」
「……モモンも大概捻くれてますよね」
「恐らくですがあなたに似ました。なのでどうぞ好いてください」
「嫌です」
　サクラは最初の高貴な雰囲気をすっかり崩し、心底嫌そうにモモンと言い合っていた。
　漆黒の英雄と称えられるモモンの裏の姿はそれはそれで興味深かったが、今ラキュースが気にかかっていたのはそちらではない。ましてや悪魔の色恋話なんかでもない。
「モモンさんの言う通りです。私も、サクラさんとその話に凄い興味が惹かれまし

た。

あなたが普段からどういった視点で世界を捉えているのか大変気になります」

「えぇ？」

サクラが悪魔に魅了されてるなどとは、ラキュースは欠片ほども思ってない。根拠は勘だ。

彼女はとても嘘をつけるような人物には思えないし、先ほどまでの言葉も洗脳されて上の空にぶちまけた言葉なんかじゃない紛れもない本物だった。

サクラは紛れもない善人だ。けれどヤルダバオトを悍ましき邪悪であると知っていながら、それはそれとしてその精神性を冷静に観察して一個人として敬い評価もする。

それは物語の人物を俯瞰するような視点とは違う。彼女は現実の実感を伴いながら、それでも自分の感情を度外視して高い精度で相手に感情移入できるのだ。

「はっきり言って貴女はおかしいですよ。悪魔にまで入れ込めてしまうなんて……普段から何を考えて生きているんですか？」

好奇心がそそられる、どうしてそんなことが出来るのか。一体彼女には世界がど

のように映っているのか。
何より一番気になるのは、自分が同じ視点に立てたなら一体何が見えて何を想うのか。
「……いや、いきなりそんなこと言われましてもね」
サクラが困り顔になってラキュースも困ったが、モモンが横から口を挟み込んだ。
「彼女は例えば自分の命を狙われたとして、怒りや恐怖より何故そんなことをしたのかを真っ先に考えてしまうようなタチなのです。
神懸ったような感受性と鋭い洞察力であっという間にその者の心情を丸裸にし、場合によっては肩入れすらしてしまう筋金入りのお人好し。
まるで狂気の沙汰だ。常人が真似するのは勧められませんね」
モモンの説明を聞いて真っ先に納得を示したのは、ラキュースでもサクラ本人でもなくイビルアイだった
「なるほど共感性の怪物か。彼女の父から似たような話は聞いて居たがここまでとはな。
むしろそんな精神でまともに自我を保っていられるのが不思議なくらいだ」

そんな感心を余所に、自己への評価へ共感しかねるサクラはひたすら訝しんでるわけだが。

「……だそうですよラキュースさん。私そんなにおかしいですか？」

「とても面白い方だわ貴女！」

かくしてラキュースは納得のいく答えを得て満足し、サクラはおかしいのはお前だと言わんばかりにただただ不気味がっていた。

それをみてイビルアイは呆れかえる。

「ラキュースもういいその辺にしておけ。ヤルダバオもコイツの人となりも大分わかった。

滅多にないツアーからの用立てなんだ、昔話ぐらい吝かでもないさ」

「あ、はいお願いします」

更正イベント挟んだのでいい加減オリ主のメンタルを成長させておかないとまずかったのでこの話を挟みました。
話はグダグダだけど必要な話であるとは信じたいこの頃

事情説明：下

本当はラナーのエピソードも挟みたかったですが、書いてる途中で解釈違い起こしたので止めました。なので前話でラナーが登場した話を消してオリ主の設定文に書き換えました。

父母が異世界で繰り広げた英雄譚なんて、娘としてはただただ反応に困るというモノ。

ＮＰＣの皆様方ならそりゃあ嬉々として傾聴するんだろうけども。

動機としては、私と妹の手がかりを求め異界を旅するうち、魔神という名のユグドラシルの負の遺物が世界を壊して暴れていることを知って、その名の通りに正義（まさよし）は放っておけなくなったといったところか。

イビルアイさんの口から語られたサーガは、しかし確かなドキュメンタリドラマとして実感を伴い、私の鼓膜に染み込んでいく。

それは決して天から与えられた棚ボタな力で世界を制する物語じゃない。だがその偉大さは、力と浅知恵しかない口だけの賢者や、暴れて自滅して遺恨だけを残した八欲王などとは比べるべくもない。

種族間差をものともせずに鮮烈なカリスマと誑し込みで強大な仲間を呼び集めた父さんと、時にやらかす行き過ぎをなんとか抑える母さん。

レベル１から二人で始めた小さな歩みは、次第に仲間を伴って世界を一つにまとめるほどの大きなうねりを作り出していく。

幾度の出会いがあり、成長があり、困難があり、死があり、復活があり、決裂があり、別れがあり、悲しみもあり……まぁ、そんな旅。

なるほど、結末はともかくとして詳細を伺ってみれば如何にも二人らしい話じゃないか。

あるいは当てのない手掛かりを求めることに疲れ、世界の平定に生きる活力を求めたのかもしれない。だから渋々ながら、母さんも父の危険な参戦を止めなかった

のだろうか。
砂粒程よりなお小さい私の存在可能性と、あまりにも途方もなくてどうしようもない世界間の壁。
諦めることは出来なかったにせよ、ただそれだけに向き合い続けることも出来なかったのかもしれない……などというのは私の後ろ暗い願望でしかない。
「リーダーとトウコは、二人の娘のことを片時も忘れていなかったよ」
しわがれた老婆のようで、けれど無垢な少女でもある声色で、イビルアイさんはそう言った。
私の弱さが見抜かれたのかは定かでない。
「……私も学ばないなぁ、皆に呆れられるわけだ」
自覚できるだけマシになったと信じたかった。
元来人とは信じたいモノだけを真実として抜粋し現実を捉え生きる物だ。
明日横断歩道に車が突っ込み死ぬ可能性はゼロじゃないし、流行り病をもらって取り殺されるかもわからない。
それでも人が心安らかに日々を過ごせて行けるのは、無限に広がる日々の不安を

ある程度考えないようにしてるからだ。
　ＮＰＣにとってみれば創造主による不認知がそうであり、かつてのモモンガにとっての友情への虚飾がそうであるように、私にとっては矮小で最厄な自分が愛されている現実が耐え難いことだった。
　まぁなんと贅沢すぎて迷惑な話だ。自分らしいと言えばらしいけど。
「なんか話してたですか？　私やイモートのこと」
「うんざりするほど聞かされたさ。お前の能力の自慢話とか、学び舎での暴れようとかな。
　逆に妹のツバキ……だったか、彼女は随分器用に男や大人を手玉とって学び舎生活を謳歌していたらしいな」
「そう、イモートは母さん似たのか。羨ましいねぇ、私はどちらにも似なかったけど」
「さぁな、トウコに言わせればお前はリーダー似らしいぞ。９歳で自立を始めたりとかはしなかったが、家出なんてしょっちゅうしてたし気に食わない奴にはとことん喧嘩も売ってたらしいじゃないか」

「しかし知らなんだそんなの……」
どうやら私も、少し勘違いをしていたらしい。マサヨシが酸いも甘いも噛み分けた底なしの駄々甘ちゃんなのは知っていたが、若年期の様子なんぞ知らなかった。やんちゃだったんだなぁ。私が言うのもアレだけどもうちょっとマトモな奴かと思ってた。
「そういうものじゃないか。男というのはいつだって見栄を張る」
「黙ってた母さんも意地悪だ」
「似てると言ったら喜んで直さないかと思ったから言わなかったらしい」
「……わかってらっしゃる」
母さんベスト判断過ぎる。劣等感拗らせてたチビの私が父に似てるねなんぞ言われたら、確かに舞い上がって悪化しそうだ。
幼少時の私のファザコンぶりはそれはそれは酷かったから。
小さい頃はマサヨシの奴滅多に家に居なかったから、帰ってきた時は必ず両親と一緒に寝てもらったものだ。
そのせいで夫婦の営みを妨害して妹の生誕を遅らせたことを思い至ったのは、皮

肉にも家出してからのことである。
「似たようなのが横に居る」
「まんま鬼ボス。これは奇遇」
「あーたしかになぁ。家出娘だしどこにも噛みつく狂犬だよなラキュースも。八本指もそうだが、陽光聖典に喧嘩吹っ掛けたのはヤバかったよな。ニグンって奴がかなりしぶとかったぜ」
「う～！」
ガガーランさんが聞き覚えのある名前を言い流しながら、チームリーダーのラキュースさんににやけた視線を集中させ、たまらず彼女は赤面する。
「なるほどそれはそれは、妙な奇遇ですね」
「……そのことはもう怒られたでしょ。許してくださいな」
アクターさんも同じようにヘルム越しから私の方を横目に見つめてきたので、たまらなくなって視線を逸らした。
片やニグンが率いたであろう陽光聖典にちょっかい掛けたラキュースさんと、情報抜くために引っこ抜いたニグンに同情して条件付きで祖国に送還した私。プロセ

スが逆だが奇遇なことは確かだ。
昨日そのことをアインズ様に打ち明けたらまぁ怒られたこと怒られたこと。
重要な機密は渡してないし、あっちでニグンが上手いことやってくれて法国がナザリックに戦意がないということなので、私のことはどうにか許していただいた。
もっとも更にに大変だったのが、【傾城傾国】にまつわる事件の発端が法国だと知ってブチギレたアインズ様をどうにか宥めすかしたことだけど。いやあれは宥めたというか私が死ぬ気で土下座したんだけども。
あんなのタダの玉突き事故だし、そうでなくても過剰報復なんて私はまっぴら御免である。んなことすりゃいよいよマサヨシたちに合わせる顔が無くなるのだから。
「……まぁなんだ。私はお前の事情なんてよく知らん。だが自身の落ち度を気にするなとは言わないが、それでも自分を受け入れてくれる者が居るなら無碍にしないことだ。二人だっていつまでも、そのことを望んでいるはずだ」
「ええ、そうですね」
アルベドさんにも言われたようなイビルアイさんの言葉を噛みしめて飲み込ん

で、私は少しだけ天井を仰いだ。

家出してユグドラシルで遊んでても、異世界へ飛ばされても親の存在感は私の人生に残り続けている。偶然にせよ不思議なものだ。

そんなことを考えていたからだろうか。楽しそうに声をかけてくるラキュースさんの姿に何時ぞやの たっち・みー の姿が重なった。

「ねぇ、サクラさんが良かったら蒼の薔薇に来ない？　一緒に世界を見て回りましょうよ。あなたとならきっと楽しいわ！」

彼女の進言に皆が騒然とする中で私は、「あーこんな感じだったなぁ」とクラン・ナインズ・オウン・ゴール加入時のことを思い出した。

今でこそ実力もつけて落ち着いているが、ユグドラシルを始めたての私は雑な80レベルの戦士職ビルドでギルドチームに無謀なカチコミを仕掛けまくっては悉く返り討ちに遭いまくる荒みまくった日々を過ごしていた。いつもの如く無謀な喧嘩吹っ掛けて集団リンチに遭っていた時、通りが縋りの たっち・みー が助けてくれて、今のような具合に面白がって勧誘してきたのだ。

「……あ～う～ッ!!」

それが忌々しい初恋の記憶だったことも思い出してしまい、私は頭を抱えて悶え苦しんだ。

……だってカッコよかったんだもん。

数の差をものともせずに颯爽と助太刀を入れてくれた聖騎士の姿。

これに惚れない乙女は性癖が捻じれ狂っているに違いないと、当時の私は思ったわけだ。

それでどうしたって？　ええ、嬉々としてホイホイされちゃいましたとも。……私らしからぬ愛嬌たっぷりのネコナデボイスで

Q．間もなく実戦演習の剣筋で身バレした時の、私の心情を15文字以内で答えよ。

A．死にたい死にたい死にたいクソが

結局のところ捻じれ狂ってるのは私の性癖だったらしい。

だからクランに加入以来ヤツに当たりが悪かったのは、私なりの精神防衛でも

あったのだ。

同じ病に苦しむ女性の皆さん、希望をもってください。ファザコンは正しい療法と生活習慣で直せる病です。

徹底的に悪態ついて心理的距離を測りつつ、寝る前になんどもお母さんの顔を思い出して気を鎮めるという精神療法により数か月かかってファザコンは完治しました。

で結局クラン辞めようとも思ったが、ヤツの心底侘しそうな様子に根負けして大炎上するまで抜けれなかった。別に未練があったとかそういうことでは断じて無い。

「鬼ボスが闇の力に苦しむ症状に酷似」

「精神支配の後遺症？」

「え？　あ……いやアレは……これは多分……」

なんか双子忍者の勘違いと、妙に理解あるラキュースさんの視線が痛い。あーあれか、腕に巻いたシルバーはそういうアレか。

黒歴史のフラッシュバックだとは口が裂けても言えないので無視に努める。

「ハハハごめん呆気に取られてさ。でも辞めといたほうがいいですよ？　私が所属した組織は大抵潰れるか崩れるかだから」
「だったら蒼の薔薇はそれまでのチームだったというだけ。大丈夫よ、私たち凄くあなたと気が合うと思うから！」
なんか他のメンバーの皆さんも懐かしいものを見る目で私の方を見守ってくださる。
多分こんな感じで彼女の元に集ったチームなんだろうなぁ、どこぞのナインズ・オウン・ゴールみたく。
ただ命がけでも背を任せ合えるという、所業冒険者としての結束力だけが違うだけで。
「ラキュースもその辺にしとけ。ぷれいやー と我々とではあまりにも力の差があり過ぎる。
特にこいつは万能の戦技を極めた究極の個だ。我々に出来てコイツに出来ないことはほとんど存在しないと言っていい」
「……でもぉ」

イビルアイさんの言い様が怖い。一体マサヨシはどんな触れ込みで13英雄一行の皆さんに私のことをPRしたのやら。赤恥掻きそうで追及するのも恐ろしい。

ちゃちゃっと断ろう。

「いえいえ、誘ってくださって大変うれしいですよ。確かに、あなた達との旅路なら退屈はしなさそうです」

「なら！」

「でもごめんなさい、今の私にはやることがあるし、守るものもある。しがらみを大事にしようと決めたから一緒には行けません」

「……そうですか、仕方ないですね。それなら是非今の仲間を大事にしてください」

きっぱり断るとラキュースさんは潔く諦めてくれて、そんでもってアクターさん達の方を向いた。

……仲間……どっちかと言えば彼らは腐れ縁だけど、まぁいいか。

私はおもむろにアイテムボックスへと手を伸ばして、目当てのアイテムを探し始める。そうして手に取った木製に漆塗りの眼鏡ケースをラキュースさんへと差し出した。

中に入っているのは、我が愛用地味子の眼鏡のプロトタイプ。今私がつけているのに比べていくらか探知性能は落ちているが、たぶんこの世界だと超級だったりするのだろう。

「寂しいので、私の代わりにそれを持ってってくださいな」

「眼鏡型のマジックアイテム、でしょうか？」

「ええ、相手の難度とおおよその能力がわかる眼鏡です。隠蔽魔法とか使われると無効になっちゃいますけど、つまるところこれで調べられない相手は超格上なので逃げてくださいって感じです」

「そんな！　こんなスゴイものを、壊してしまったら取り返しがつきませんし」

「ご安心を。それの上位互換が丁度今私がつけてるヤツで、ついでに言えばスペアも二つ持ってますから。

「受け取っておいた方がよさそうだぞ。ぷれいやー の規格ではそれくらいしないとお礼にもならないみたいだからな」

「世界中を旅なさるのでしょう？　だったらばそのくらい持ってないと死んじゃいますよあなた方」

「そういうことなら……ありがとうございます。大切に使わせていただきます」

ぷれいやー事情に通じるイビルアイさんの説得のおかげで、どうにか受け取ってもらえて良かった。

竜王か手癖の悪いプレイヤーにでも遭遇してあっさり死なれては寝覚めが悪いというモノだ。

逆に眼鏡以上の支援となると、かえって未知の冒険に水を差すようで無粋だろうし。その時はその時だ。

さて積もる話はこんなところか。では最後に一つだけ聞くことを聞こう。

最悪蒼の薔薇の方々と喧嘩するような羽目になったら、これだけ聞いて帰ろうと思っていたのだが、話が弾んで本当に良かった。

「ところでさ、イビルアイさんはマサヨシと母さんが殺し合うことになった、詳しい経緯って知ってるの？」

「ああ、リーダー本人から聞いた。……お前もツアーから聞いたのではないのか？

」

「うん、酒を入れながら私とイモートのことで揉めて殺し合ったって聞いた。違う？」

私があまりにもサッパリとし過ぎてしまったものだから、イビルアイさんを無駄に気圧してしまったようだった。

彼女は粛々と答える。

「いや……間違いない。あの時はみんなで酒宴を開いていて、盛り上がっていた中で二人が先に席を外したんだ」

「悪いですけど、詳しく教えてくださいまし」

後でアクターさん聞いたことなのだが、この時の私は酷く強張って鬼気迫る表情だったらしい。

申し訳ない話だ。別に私は、13英雄の皆様方を攻め立てる気など欠片もなかったというのに。

「その……夫婦の営みかと思って誰も気に留めなかったんだ。ツアーも酔っぱらってたせいで裏方の気配に気付けなくて……それで翌朝……」

これ以上彼女が知ってることは無さそうだったので、痛々しい言葉の端を私はザックリ切り落とした。
「そっか、ありがとうございます教えてくれて。……じゃあもうツアーに直接聞くしかないか」
諦観気味に暴力の気配を漂わせた私に、イビルアイさんは慄きながらも釘を刺した。
「……何のつもりか知らんが、ツアーに喧嘩を売るのだけは止めておけよ。ただでさえあいつは並大抵のプレイヤーじゃ歯が立たないし、お前では相性が悪いはずだろう」
「承知してますご安心を。死ぬ気も殺す気もありませんよ。ただ私みたいな野蛮人は、口よりも肉体言語の方が達者なんです。
私は絶対に彼と決着をつけなきゃいけませんから」
アクターさんは沈黙していた。他の面々も恐縮していた中で性別不詳戦士のガガーランさんだけが助け舟を出してくれた。
「口挟むだけ無駄だぜイビルアイ。コイツの覚悟は決まってる。どんな戦士にも引

き下がれない戦いがあるってもんだ」

「そういうことです」

歴戦の強者っぽいガガーランさんが私を見て戦士と評してくれたことが、私は地味にうれしかった。

かくして思い出話を求めての蒼の薔薇さん訪問は、私にしては円満に終わったわけでした。

皆に届け！　オリ主のキモさ！（猫並みの感想）

オバロ特有の残念美女に名を連ねさせたい

ラナー様とオリ主の性格が真逆なのでいいカンジの対比表現できるかなと思った

けどくどいので省略しました。……万が一気にかかるようでしたら気軽にご意見か低評価どうぞ。

後でいいカンジの解釈が見つかったら再改変するとは思いますが……

◆本編から省略したクライムの裏話

クライムが男爵位になりました。

例の一大事件の時に、ラナーが悪魔にヤラセをお願いして出来る限りクライムが武勲を立てられるように調整してしてもらった結果です。

まずは最大戦力であった白金の竜王と漆黒のモモンをヤルダバオトとアルデバランが請け負い、次に強いとされるイビルアイと美姫ナーベをメイド悪魔二人が担当。

ラキュース、ガガーラン、ティア、ティナの相手を、悪魔が精神支配した八本指側の実力者だったらしい六腕の４名（リサイクル）に割り当てさせる。一人暴走しかねないガゼフは作戦前に処理。

残った最大戦力はレエヴン公率いる元オリハルコン級冒険者チームとクライム。

これを2チームに分け、ラナー達王族が幽閉された塔にはクライムとロックマイヤーという盗賊を、貴族たちの方には残りのメンバーを救出に行かせる。

仕上げに王族の幽閉塔の門番を、六腕の中でも最弱でクライムたちが唯一勝ち目のあるサキュロントという男にさせて、万全の体制でもってクライムに大金星と王族救出という理論上最大値の功績を与えたわけです(原作再現)。

悪魔に痛めつけられた貴族達は、武勲を上げたクライムの爵位授与を寧ろ諸手を挙げて歓迎。そんな感じ

探し物

自分の筆の遅さに泣けてくるこの頃です

他作品の挿絵とか別短編の執筆とか浮気しまくって遅くなりました言い訳はしません

【マタタビの至高の41人大百科】

No・10：やまいこ

ほかの仲間からは脳筋と揶揄され顰蹙を買っている部分があるが、その体当たり的な戦闘スタイルを成立させている高度な判断力には目を見張るものがある。

あくまで本人はサポートタイプのビルド編成だが、未知の能力を持つ敵に対しての即座的な対応力はモモンガをも凌ぐだろう。彼女の筋肉には脳細胞が宿っている。

また、かの才女あけみを妹に持つことに苦悩してしかるべきなのに、その手の負の感情との向き合い方が非常に上手い。

マタタビにとっては女性として憧れの存在であり、また旧クランメンバーの中では実父を除き最も影響を与えた人物。

◆◇◆

ナザリック９階層における数ある無駄施設が一ヵ所、和風道場。

ここはプレアデスのナーベラルさんがたまに来るくらいで、使ってる人はあんまりいないのだとか。

だから私が暇なときには大体ここで、剣の素振りしたり影分身２体作って演習したり座禅とかしてるのだ。サボってたらすぐ鈍るもんだから。

ここ造ったのは武人建御雷らしいけど、気のせいじゃなければ……私が昔やってた剣道ゲームの内装にそっくり。木造板張りに竹格子、ただ掛け軸だけは「アインズ様命」って書かれてる。誰がやったんだか知らんけど。

ところで今日ここで訓練してるのは、私じゃなくて別の方。
先日セバスさんが外で拾ってきたツアレさんという女性である。

部屋に備え付けてたウェイト６キロの剣道着を全身に装備。格子面の隙間から「やー！やー！」元気に掛け声かけて、１．１キロの素振り用木刀を振るっています。
ぜぇぜぇ息を切らしながらも、どうにか間もなく60回目の正面素振りが振り下ろされました。
「そこまで。休憩してください。20分後に今度は走り込みします」
「はぃ……」
「できればもちっと大きな声で」
「……はいっ！」

促すと、面と胴の防具を丁寧に脱ぎ置いてからふらふら壁に寄りかかるツアレさ

ん。ぐったり汗を垂らしながらしながら、ピッキーさんお手製スポドリ水筒をちびりちびりと口付けてます。

仕草一つ一つに小動物っぽい愛嬌が滲みだしていて、見てるとついぞ守護りたくなる。あの野郎がほれ込んだのも合点が行くというもので、私が男だったらＮＴＲしていたかもしれません。

うぇーいセバスさん見てるー？（見てない）

セバスさんがカルネ村で娼館被害者女性たちと生殖実験してる間に、ツアレさん硬い棒握りしめてハァハァ言ってるよぉ？（木刀）

とまぁ冗談はさて置きましょう。

どうしてこうなったかというと、そこそこ深いワケがあるのです。

先日セバスさんに拾われたツアレさんは、諸々の事情で賜ったらしいアインズ様からの恩恵により、本人希望でセバスさんの下で一般メイド見習いとして働けるよ

うになったそうな。

コレ、ＮＰＣたる一般メイドに外部の異物を混ぜ込んでることを考えれば、アインズ様にとってどれだけ温情余りある措置かお判りでしょう。

折角見つかったセバスさんの良い人ってのもあるだろうけど、彼女の妹さんとやらはどれだけの恩を売ったのやら気になること気になること。

でも同じく一時期異物として入り込んでメイド見習いを体感した私からすれば、オイオイオイな話です。

だって考えてみて欲しい。もしあなたの接客業未経験な隣人が、コネで７つ星帝国ホテルに就職できたとか言ってきたらどう思うか。

何日続くかの心配をするのが人情というヤツだろう。

そのくらい一般メイドはヤバいのです。多くのＮＰＣと接してきた私がナザリックで一番スゴイＮＰＣを挙げるとしたら彼女達になってしまうま。そのくらいにヤバいのです。

自分がメイド見習いだった時は、私が多少育ちが良くて礼儀作法の下積みがある

し、レベルによる体力任せの労働が可能だからある程度は対応できていた部分がある。それでも何度くじけそうになったことか。

彼女たちは、リアル世界におけるあらゆる分野のサービス業のノウハウを全乗せしたような能力を持つ、さながら奉仕の怪物だ。

歩くという動作一つとってもまさに一級品。先出した片足への慎重な重心移動と、爪先からかかと順の着地により、一切の足音すら立つことは無い。膝の曲がらない足運びは上下への振動を限りなくゼロへと近づけ、左右の足は平行に一本線を進むように正確だ。

一般メイドの先輩たちは、たとえ頭の上に水のコップを乗せていても一切の波紋すら立てずに歩くことが可能である。この御業に私は心の底から感動し、必ずや我が物にせんと何をおいてもまず先に歩行法の習得を優先させたぐらいだ。

接客をさせればムラの無い対応で迅速に必要なオーダーを受注し、相手を立てながらも過度に盛り上げすぎない洗練されたトーク力はどんな朴念仁でもついぞ気を許してしまうだろう。鷹のような観察眼は客の状態を目ざとく見抜き、喉鳴りに耳を澄まして自然と飲み物を用意できるし、疲労を勘付けばさり気無く着席や休憩を

促しにかかる。

清掃能力はエクレアさんにこそ一枚劣るが、それでも高水準なことには変わりない。エクレアさんが特化型の精鋭戦士なら、一般メイドの皆様方は統率の優れた騎士団の如し。広大な洋室を見事なチームワークで磨き上げる様は圧巻だ。

果たしてそんな彼女達に、ツアレさんはついて行くことが出来るのか。

せっかく私がデミウルゴスさんと共に、娼館被害者女性達を囲う実験場もといハーレム屋敷をカルネ村に新築したのだ。

セバスさんとのセッセと実験（意味深）に勤しめば、よいではないかよいではないかーと思ったのだが。

『私の幸せは、セバス様と一緒のところにあります。

あの方の心と、同じ場所で息がしたいのです』

思いの外頑固で肝が据わっているみたいだった。

セバスさんはこれから外用が多くなり、ツアレさんに時間を使いにくい。そして

今のままの彼女をメイド達の中に放り込むのは流石にマズい。例えていうなら保健所から引き取った病み上がりのチワワを警察犬の群れに放り込むようなもの。

これでは余りにも見ていられない。だからセバスさんへの借りを返す意味を込めて、私が一旦身元を引き受けることにしたのだ。メイド見習いに成るのはまだ先のことだ。

「体力それなりについてきましたね」

「はい、昔、畑作をやっていた時みたいに戻ってきました」

それでまず基礎体力作りのための鍛錬というわけ。性暴力に曝され続けて弱り切った体力を、メイドとして十五分に働けるぐらいまでもってくのが理想だ。一般メイド達って、ホムンクルスのクラスペナルティで大喰いなんだけど、代わりにガテン系の作業できるくらいの体力があるからね。

どうして普通の筋トレじゃなくて剣術鍛錬なのかというと、運よくファイター系

の戦闘職が獲得できれば色んな意味ですごく手っ取り早いから。この世界のステータスシステムってよくわからないけど、筋トレよりはレベルアップの方が多分効率的だろう。上手くいかずとも筋トレになってればそれでいい。

「ま、先は長いですけどね。メイド見習いになるためには、まず歩き方は大前提。農民上がりなら礼儀作法も苦労します。

それに日本語が読めなきゃ指示書や帳簿一つ書けませんしね。鍛錬終わったらまた図書館で缶詰ですから覚悟してください」

「が、がんばります！」

「そこから更に一人前のメイドになるには、清掃技能、接客、話術、美的センス、ホスピタリティとか学ばなければいけないことは多岐にわたりますよ」

「……はい！」

「あーその前に仕事だけじゃなくて、ＮＰＣの皆様方との日常会話が出来るようナザリックの仕組みや序列も覚えてかなきゃね

じゃなきゃそのうち不興を買って首チョンパ、もしくは死ねたら天国なくらいひ

どい目に遭いますから」
「……はぃ」
「ほらまた目線ズレてるし声が小さいです。万が一アインズ様相手にビビって視線逸らしたら、彼本人はともかく側近に不敬罪問われますから
その際糾弾されるのは、貴女じゃなくて監督責任を持ってるセバスさんなんですよ？」
「ひぃ!?　はいっ！　気を付けます！」
「……ここまで言っても折れないのかよ。あなた辛くないの？」

この方ってば必要なこと叩き込む体で虐めてるのに、ビックリするほど芯が強い。可愛らしい見た目して随分しぶといなこの人。私としてはとっととハーレム屋敷に追いやって、セバスの子種と身分保障与えて終わりにしてもそれはそれで良かったのだけど。
哀しいかな、このぶんだとあと数か月は確実に持ちそうだ。
いやはや厄介。さっさと借りを返すつもりでいたが、楽な仕事じゃなさそうだこ

れは。
「どうして、どうして私が辛いなんて、マタタビさまがそんなことを思うのですか？」
「あん？　どうしてってそりゃ私が――」
「マタタビさまは、私のことを殴りません。いつもおいしいご飯をもってきてくださって、一緒に食べてくださります。震えて床につく私を、眠るまでずっと傍で見守ってくださります。
教えてもらうことは大変なモノばかりだけど、何度も丁寧に教えてくださります。私、こんなに優しくされたことなんて、セバス様に逢うまでありませんでした」
心の底から不思議というふうに、ツアレさんは真っ直ぐ私の方を見て明瞭な声でそう言った。
「……っ」
今度は危うく私のほうが視線を逸らして先細った声を漏らしそうになってしまった。だから負けじと首筋を強張らせ強く舌を噛んで盛大に堪えた。
「てめぇの卑しい生まれ育ちなんかと一緒にすんじゃねぇですよ……このニンゲン

風情が」

反射的に睨み返してこぼれ出た罵倒。

突然の殺気に青ざめたツアレさんだが、彼女の言葉は私の心のすごく嫌なところを的確に突き刺していた。

「し、失礼しました!?」

訳が分からないまま慌てて謝るツアレさんの姿に、私はますます苛立ちを重ねる。

なんだか急にこの場から逃げ出したくなる自分が浮上した。

すると渡りに船というヤツか、偶然ある人物の気配がこの道場に近づいてくるのを感じ取った。

まもなく道場の戸をコンコンと響きよく叩く音が耳に入る。輪を掛けて委縮するツアレさんを尻目に、私は安堵のため息を零した。

どうぞというと、ガラガラ横開きされた扉から、透きる眼鏡を掛けた凛とした出で立ちの黒髪団子メイドが入室してきた。

戦闘メイドプレアデスが長女にして副リーダー、名前は確か――

「ユリ・アルファです。アインズ様の命により、マタタビ様の御迎えに上がりまし

た」

「あらどうも。……えっと御部屋捜索の件でしたっけ？」

「はい、やまいこ様の御部屋へのご同行をお願いします」

「了解しました。そんじゃ……〈影分身の術〉。ツアレさんのことお願い」

MPを少し削り、25レベル相当マタタビと瓜二つの分身体を召喚した。

影分身は嘲るように目を細めて本体を睨んだ後、平然として了承した。

「良かったね。丁度良く用事が出来て」

「うるさい黙れ。ちゃんとやれよ私」

「ちゃんとやるよ私。ちゃんと、だよねあはは。じゃあ休憩もそろそろで、走り込みしよっかツアレさん」

「はいっ!!」

影分身は便利なスキルだが、やたら反抗的なのが玉に瑕であまり使い勝手がよろしくない。

私が私を嫌いなように、分身も私のことが嫌いだから。そして自身が泡沫存在であるのをいいことに本体に一切遠慮なく嫌味を投げかけてくる。

自分が分身だったら同じようにしてるから、その気持ちはよくわかるんだけどね。
「……というわけでささッと行きましょアルファさん」
「承知しました」
逃げるように退室する私と嫌味いっぱいな影分身を、胡乱なモノのようにユリ・アルファさんは見比べていた。

◆

虐待されて育った親が自分の子供にも虐待するなんて話はよく聞くだろう。
逆もまた然り、しっかり愛情を注がれて育った子供は同じように子供を愛することが出来るらしい。
つまり教育においてアウトプットとインプットはだいたいの場合イコールということ。たぶん やまいこさんがそんな風なこと言ってた気がする。
私は9歳くらいの時に、自分の家庭からいたたまれなくて逃げ出した。
けど、そこで育った私が虐めるつもりで対応したツアレさんはこれっぽちもへこたれてない。なんだかすごい劣等感。

ツアレさんもそうだけど、ＮＰＣの皆様方やアインズ様とかからすれば私の境遇なんて全く嫌味みたいなものなんだろうな。

うつらうつらとを考えて頭を重くしながら９階層の廊下を歩く私。

そんな私の葛藤もつゆ知らず、横歩くアルファさんは純粋な称賛を向けてきたので私は痒くて仕方が無かった。

「感服しました。よもや武術指南という形式で諸々の基礎的な礼儀作法と体力づくりを一遍に行われるとは」

「そんな画期的な方法みたいに言わないでください。リアル世界ではありふれた方法ですし

私に教えられることがそんくらいだっただけですって」

結局私がやってることは、20～21世紀の教育で為されていたスポーツクラブとかとだいたい同じコンセプトだ。

あれは長らく使い古されていた、体力、運動神経、社会性、礼儀作法、文化教育などなどを一括で学べる超便利システム。

先人の知恵をそのまま流用したに過ぎないのです。

「ですが今のツアレには、最も必要で的確な対応であり治療です。
性暴力被害によるＰＴＳＤ克服としての武術習得なんて、きっと私には思いつきもしませんでした」
「ん？　ん？　別に私そこまで考えてませんよ？」
こらこらこら、変な勘違いするんじゃありませんよ。
アインズ様の馬鹿と同じ轍なぞ踏んで溜まるか。こういうのは速攻で違うって言ってやらなきゃまずいのだ。
私が小さい頃にやらされた鍛錬を体力づくりとしてそのまま流用してるだけなんですってホント。
性暴力なんて私はされるほうじゃなくて寧ろする側の立ち位置に近いんだから……
そんな感じで説得してなんとか納得していただきました。
「意外です。考えあってのことかと……
てきとうな対応が結果的にベストマッチするなんてこともあるのですね」
その言葉誰かさんに聞かせてあげたいよ全く。
「マタタビ様とツアレの様子を見て気になり、性暴力被害を受けた女性たちの精神

療法を大図書館で私なりに調べてみたのです。
　調べた文献の中からなんでも中東という地域において、性暴力被害者女性を囲った空手道場が存在したそうですよ？　てっきりマタタビ様の対応もそれに倣ったものだとばかり」
「……あー、言われて見れば。私やアルファさんには縁が無いけど、女性って普通に社会弱者なところあるし」
「相手より一段上の体力があって、その気になれば一発殴れるぞっていう心構えがあると全然違いますよね」
「超わかるー」
　そういえばすっかり忘れてたけど、リアルで独り立ちしてアーコロジーから飛び出た後私普通に野郎に襲われたことあったわ。
　この世界の王都のスラム並みに治安最悪だったもんな外周区。
　その時は持ち出した竹刀で溝内突いて金的蹴って逃げ過ごしたんだっけ。公安警察のマサヨシに居場所バレるとまずいから交番は頼れなかったし。
　懐かしいなーと思い耽った。

「しかし流石です。間違いなく現在の９階層の組織体系では、ツアレの教育は十全に行えなかったでしょう。

アインズ様の命でメイド見習いの地位を与えることになる以上、我々ではどうしても彼女に早急な習熟を求めがちになってしまいます。

マタタビ様の指摘が無ければ、間違いなく基礎体力をつけさせる前に歩行訓練をさせていました。そうすればメイド見習いとしての立ち位置は先んじて固められます。が、後々の教育で非効率な遅れをもたらしてしまっていたでしょう」

「それこそ仕方ありませんよ。根本的に人材が完成されてたナザリックには教育制度なんてこれまで不要だったんですから」

考えるとすごいよねナザリック。１００点満点の人材が元からあって、定年退職も何もなしに人員流動一切なしで半永久的に稼働できるんだから。

上長としてこれほど楽なことは無いでしょう。

「ですが今後はそうはいきません。現状１００点が満点であっても、いずれ１２０点や２００点の結果が求められるようになります。それこそ主がコキュートス様が

リザードマンへの統治能力を求めらたようにです」
うんうん仕事ってそういうもんよね。逆に時々、機械化とか自動化でやること減って食い扶持減ったりもするわけだけど。
「じゃあその辺は勝手に頑張ってくださいな。なんならツアレさんの担当教育もいくらかやってみればいかがですか。
アルファさんそういうのお得意でしょう？」
得意というかやまいこ辺りの影響で大好物だと思うのだ。アルファさん色々親身に教えてくれるから、私の時もかなり世話になったし。
むしろ日本語教えるとか小学校卒業してない私ではちょっと苦痛だ。
ところがアルファさんは惜しむように断わりを入れた。
「ありがたい申し出ではありますが、時間的猶予がありませんゆえ、謹んで辞退させていただきます
最近はペスト―ニャ様と共同で新任メイドのカリキュラム案やマニュアルを纏める作業が忙しいので」
「そりゃ残念です。けど万が一ツアレさんがメイド見習いになれたなら、その時は

大切にしてやるといいですよ」
「無論です。もっともマタタビ様方のように上手くはいかないでしょうが……」
少し困ったようにアルファさんは俯いた。
「と、言いますと？」
「ツアレの人見知り癖ですよ。お気づきになられてないかもしれないですが、セバス様マタタビ様の御二方とそれ以外の人物への対応はまるで違いますから」
「さいですかー。普段からかなり声出しさせてるんですけどね。……ったくあの女」
「マタタビ様？」
……ああいかんいかん、ついぞ力んで無駄な闘気を漏らしてしまった。
いや別に人見知りするのは仕方が無いのよ？　私もそうだし。
「けどさぁ、私とセバスさんを同じくくりにするってどういうこっちゃふざけんじゃねぇ」
彼女と初対面の時も、別に怖がられたりとか一切しなかったはずだ
人見知るならちゃんと私も人見知れ。さもなきゃ全人類平等に愛しやがれくそったれ。

「怒る理由はそっちですか。性根がねじ曲がり過ぎて驚きで口が閉じませんよ」
「今度から命令して、人見知り直すまで３食全部メイド食堂で一般メイド達に囲まれながら寂しく一人飯させてやろうかしら」
「尚のこと悪化するかと。後生ですからどうか辞めてあげてくださいまし」

なんて話しているうちに、目的地である やまいこの部屋の前に辿り着いた。
アルファさんは、扉の前で息をついて、眼を閉じ深呼吸をする。
それを横目に見た私は、やっぱり気にかかて問質した。
「再三確認しますけど、ホントに平気？　あなたがイヤとか言うんなら私は……」
「少なくとも今は、アインズ様の御心を信じ従います」
そうしてユリさんが先行して、部屋の扉に手をかける。
彼女のおぼつく心の灯を〈読心感知〉で見守りながら、私も続いて中に入った。

◆◇◆

戦闘メイドプレアデス副リーダーにして、プレイアデス７姉妹の長女ユリ・ア

ルファ。

ゲヘナ作戦が完了してから数日後のこと。ユリはアインズ様から呼び出しを受け、そこで御方からひとつの要望を了承した。いや、させられた。

普段であれば絶対支配者たる至高の存在から要望を了承などというのは、シモベにとって全くあり得ないことだ。

シモベの存在意義は至高の存在の手足となり、身を粉として全霊を捧げること。御方の望みはシモベの如何など問われるまでもなく、世界に達成為されなければならない絶対律なのだから。

だが今回に限っては事情が違った。

なぜならそれは、至高の存在同士の間における問題。具体的に言えば、アインズ様とユリの創造者たるやまいこ様の話だから。

それなら輪を掛けてユリの了承など挟まるわけが無い筈だったのだが、これまた海の如く深い深い事情があるのだ。

◇回想

執務部屋で、普段より一層の気迫を纏って座していたアインズ様は、正面に立つユリに重々しく命じた。

それはまさに神託以外の何物でもない、神聖なる儀式である。

「ユリ・アルファよ。まずここでの問答は至高の存在とマタタビさんを除き、必ずや不出とすることを誓え。――あるいは誓えないならそれでも良い。記憶を消して今すぐこれまで通り元の持ち場に戻って務めてもらう」

シモベが主人の命を断ることなどあり得ない。そんなことは主人が一番よく知っている筈なのだ。

それでもなお逃げ道が用意されている。

ではこれは並大抵の命令ではないのだと、それだけでユリ・アルファは深く深く納得した。

ならばユリが言うべき答えは、この世でたった一つだけだ。

「ハッ！　我が創造主たる やまいこ様の御名に誓って、永久に不出とすることを

誓います！」

「では以後この誓いが破られた暁には、それを耳にした全ての者を処刑することとする」

「！」

主人の言葉を聞いたユリ・アルファには欠片ほどの恐れも無い。だが重なってもたらされた大きな驚愕だけがあった。

神の絶対の誓いに背いて死するのは当然である。しかし今まで慈悲深いアインズ様が、自らシモベへ死を命じるのはヴィクティム以来かつてないことであった。

「全ては御心のままに」

重ねて言う。恐怖は無い。ただ驚愕があるだけだ。

何故なら やまいこ様の御名でアインズ様に結んだ誓いは、今後絶対に破られることは無いのだから。絶対だ.

「では告げる。心せよ

現在、お前の創造者たる やまいこさん とはとある事情のせいで連絡が取れなくなってしまっている。

そしてこの事情に関して、全てをユリに詳しく話すことは出来ない。まずここまではいいか」

「！……はい！」

ユリの創造者たる至高の存在、やまいこ様との連絡の不通。

うすらうすら、そういった事情であるのはわかってはいた。ただその事実がアインズ様の口から直接語られることは前代未聞のことである。

なるほど厳戒の理由はそういうことか。もしかしたら迂闊にこの事実を知ったシモベが不用意な妄想と思想に至り、ナザリックに混乱をもたらす可能性もある。

主人はそれを嫌って、もっと言うならナザリックのみなが不要に傷つくことを恐れて、らしからぬ問答をしているのだ。

なんて、なんて、慈悲深いことだろう。

一つの確信への悲しみと、それと共に湧き上がる忠愛の感動を目尻の中で懸命に抑え、ユリはアインズ様の御言葉を待った。

「しかし、とある事情で やまいこさん が持つ一つのアイテムがどうしても必要になった。

この超々希少の課金アイテム流れ星の指環（シューティングスター）、これと全く同じものだ」
アインズ様が人差し指にかけた指輪をユリに示して見せた。
それはシルバーに青い宝石が三ツ星の様に埋め込まれたような、恐ろしく美しい指輪である。
ユリは思わず息をのんだ。
「これはユグドラシルに於いて、最も高価な課金アイテムの一つ。
超位魔法〈星に願い（ウィッシュ・アポン・ア・スター）を〉を無条件で３回まで発動することができる。
これを持つ者は、ギルド：アインズ・ウール・ゴウンにおいても私と やまいこさん のたった二人だけだった。
そして今、ある宿願のために二つの指環が必要なのだが、連絡の取れないやまいこさんには了承をとることが叶わない。
そこでユリ・アルファ、お前には彼女の代理者として、彼女の指環を自室から探し出すことと、私が指輪を使うことの許しをもらいたい」
なんてことだ。
神の代理者……それはたかがユリ・アルファの身の程などではとてもとても、成

しえるものでは無い。
あまりにも不遜で恐れ多いことだ。
「すまない、言い方を変えよう。では仮にこれから私が、マタタビさんを遣わして、やまいこさんの部屋を物色させるとしよう。
ユリはその時どう動くか。見過ごすか、抵抗するのか」
先も挙げられた一つの名前を、ユリは強く意識した。マタタビ、一時期メイド見習いとして甲斐甲斐しく世話を焼いたことがあった謎の存在。
だがその本質は、守護者最強のシャルティアと群体としての強さを誇るアウラを同時に相手取って、返り討ちにしてしまうほどの最凶の戦神。
きっとユリ程度の存在など、紙吹雪よりも軽く吹き飛ばされてしまうことだろう。
だがその質問ならば、ユリが答えることは決まっていた。更にその先はわからないにせよ。
「それは……できうる限りの抵抗をさせていただきます。事が終わるその時まで、何があろうとやまいこ様の部屋の前で立ち尽くします」
「そうか、ユリの考えはよくわかったとも」

ユリの返答、そこからアインズ様が何を言おうとするのかはわからない。
強硬するかもしれないし、何もしないのかもしれない。
「ではそれならば――」
だがそれがどちらであろうと、ユリはそれを耳にするのが恐ろしかった。
自分がアインズ様の意向を踏みつぶすのも、アインズ様がユリを踏み越えていくことも。
「ですがそれは！」
だからユリ・アルファは、反射的に、思いがけず主人言葉を遮って声を挙げた。
「ですがそれは、やまいこ様にまつわる真相か、アインズ様の宿願の如何によるものです。
それをお聞かせ願えれば、あるいは気が変わるかもしれません」
わかっているのだ。
シモベの存在意義は至高の存在の手足となり、身を粉として全霊を捧げること。
御方の望みはシモベの如何など問われるまでもなく、世界に達成為されなければならない絶対律。

やまいこ様ならともかく、そこにユリ・アルファ個人の意志は一切介在してはならない。

それでもユリ・アルファは欲しかった。自分の中に、アインズ様と同じ目的を見る意思が。

全てを知ったやまいこ様が心底納得してくれそうで、ユリも心から賛同するようなアインズ様の動機が欲しかった。それ以外はこれっぽっちも聞きたくなかった。

だって恐ろしいではないか。

わざわざ無駄に秘密を誓わせて回りくどく了承を求めてくれる、何よりも慈悲深くて義理堅い我が主人。それが、ユリ・アルファにとって絶対である創造主やまいこ様の御心と擦れ違うなんて、この世の何よりも恐ろしい悪夢である。

そんなユリの嘆願を聞き届けた主人は、少し穏やかなようになって口を開いた。

「そうか……では、私の宿願について話そう。こちらならまだ話せるからな」

どこか凄く乗り気でないようだった。

それでもユリは、アインズ様の慈悲深い真の御心とたっち・みー様とマタタビ様にまつわる驚愕の悲劇を知ることになった。

そしてユリ・アルファは思い知ったのだ。

扇動したデミウルゴスも、それに乗ってしまった自分たちもなんて馬鹿だったろう。

たかがこんな世界の征服など、御方の真なる御心に比べれば取るに足らぬくだらない話じゃないか、と。

◇回想ここまで

マタタビという人物の出自はユリとしても色々と思うところがある。

これまでの振る舞いとアインズ様からの扱いに大いに納得できはしたが、それはそれとして割り切れない。

どうしてたっち・みー様という至上の方を親としながら、そこから望まれぬ家出と絶縁へと至るのか理解できない。ナザリックのシモベからすれば、それは自分の心臓を吐き出して投げ捨てるが如き暴挙だ。

至高の存在に娘として心から愛され側にいることを求められる。自信が彼女と同

じ立場を得られたらどれだけ幸せなことだろうか。それを切り捨てる彼女には妬み殺してやりたい許されざる仄暗い衝動すら湧く。

しかし世界とは単純なものでは無い。少なくともマタタビという人物の精神世界が複雑怪奇であることは、一時期接したこともありユリも良くわかっている。

自己の劣等性とたっち・みー様の超越性に折り合いがつかなくなり耐えきれずに逃げだしてしまったのだという彼女の事情を知ってしまえば、かの暴挙はユリの理解に納まってしまう。

愛しい存在を傷つけてしまったり迷惑をかけてしまったりしたら、死んで詫びたい気持ちに駆られるのは自然なこと。

死ぬわけにはいかないのなら、せめて玉体の前から姿を消そうとする判断をユリは一方的に咎める気にはなれない。

旧クラン：ナインズ・オウン・ゴールの顛末においても、大体似たようなことが言えると思う。

まぁなんにせよロクでもない人物なことは確実だ。しかしなればこそ、たっち・みー様の親としての失敗が明らかになってしまうのだから増々わからなくなってく

る。

別にそれで失望したりだとか忠誠心が揺らぐなんてことは全くない。ただ神の如く称える至高の御方々の中に、娘に家出されてしまう情けない親の姿があることがとても意外だった。

それを鑑みれば猶の事、絶望的な悲劇を前に世界の間と法則の壁をものともせず、望む最良の結果へと手を伸ばそうとするアインズ様の姿がユリには恐ろしくも力強く映るのだが。

◆

ユリが傍で見守りながら、マタタビは小慣れた諸作でやまいこ様の室内を物色していた。

それは盗賊特有の迅速さと一般メイド達がよくやる掃除作法を足して２で割るような動作。多分、盗賊職を持っている妹のソリュシャンでも同じようなことが出来るとは思う。

彼女が至高の存在の親族だからか、それともいわゆるプロの御業だからか。創造主の部屋に手をつけているのにユリは意外なくらいにマタタビの行為に不快感や抵抗感を感じなかった。

そうして淡々と棚や机などを漁るマタタビは、捜索開始からものの7分で目的の聖遺物を発見した。

「ありましたよ、シューティングスター」

くるっとユリの方へと振り向いて、手の平にのせた三ツ星の指環を見せつけた。

それは確かにアインズ様がユリに見せたモノとほぼ同じもの。ただし埋め込まれた3つの青い宝石のうち、一つだけが僅かに黒ずんでいる。

アインズ様から聞かされた説明などを鑑みるに、3回までの限定効果が1個だけ消費された状態なのだろうか。

「みたいですね。私も一度同じもの略奪したことはあったけど、使いづらくてすぐ売却したから使用済み品を見るのは初めてです」

マタタビは心底感心したという風に指輪を見つめる。

便利どころでは済まされない超越的な権能を誇る指輪への、使いづらいという妙

な評価にユリは首を傾げた。
「だって3回しか使えない超希少アイテムなんですよ？
そりゃいざというときに使えれば便利かもしれないですけど、私ですら戦闘時にこれを使わされる状況に陥った時点でもったいなくて既に逃げてますもん。
この世界ならともかく、ユグドラシルでは使いづらいにもほどがあります」
「そういうものでしょうか？」
ユリの疑念は晴れなかった。
コレをもったいなくて一回も使わず死蔵するなんて、正直言えば愚の骨頂としか思えない。
たとえば一時的に探知能力を爆上げして不可知の敵へ対処したり、特定属性への完全耐性などを叶えてもらったりなど戦闘時の使い方なんてそれこそ夜空の星の如くありふれているはずだ。
たしかに、無数の星の中から最良の一手を選ばなければいけないことを考えれば、決して安易に使えるものではないのだろうが。
「マトモな人は使えませんよこんなの。アルファさんを造った方が凄いのは、その

辺の判断力ですからね」
　不意打ちのように紡がれた創造主への言及に、ユリの耳房が反射的に左右へ振れた。
　たっち・みー様の娘として至高の41人を知る生き字引、そんな彼女の実感の伴った称賛が、やまいこ様へと手向けられる。
「うんざりするほどセーフティネット張り巡らせて慎重に絶対勝利を目指すのがアインズ様なら、大樹みたいな神経で自分の優れた判断力と勘を信じ豪快に立ち回るのがアルファさんの創造者です
　何方かからは脳筋だなんて揶揄されちゃいますが、臨戦時の思考速度は私が知る限り誰よりもあの方が速い。前衛職はコンマ単位の判断速度が命ですからね。心の底から憧れますよ」
「お聞かせくださったことに感謝を。かの御二方の両美点として記憶にとどめておきます」
　ユリは頭を下げて謝辞を述べる。
　メイド見習いの時も良く聞いたが、マタタビの至高の存在にまつわる話は徹底し

て体験と観察に基づいている。彼女の強さの秘訣もきっとその辺りのあるのだろう。

雲の上の如き尊き存在を生々しく褒めたたえる彼女の語り口が、ユリには新鮮で好ましかった。

「そろそろ片付けて戻りましょうか」

「そうですね、では」

ユリはアイテムボックスから、いつもリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを預かっている収納箱を取り出し箱を開けて差し向ける。

マタタビはそっとその中にシューティングスターを納めて言った。

「大事にしてアインズ様に届けてください。どこかの金欠サラリーマンは自分の賞与全部突っ込んでまで手に入れた挙句、最後の時まで使い仕舞いだったくらいですから。アレは心底理解に苦しみますが」

それを聞いてユリは、酷い話だなぁと思わず苦笑いを零した。

別作品の奴もそうだけど、作者の頭の中での一般メイドは、キャビンアテンダントとか職業清掃員とか帝国ホテルの従業員とか諸々のサービス業の技能をミックスした化け物です。情●大陸とかプ●フェッショナルとかに2～3回出演できそうな気がする。

ツアレの明日が心配なこの頃

◆補足

「そうか、ユリの考えはよくわかったとも」

ユリの返答、そこからアインズ様が何を言おうとするのかはわからない。

強硬するかもしれないし、何もしないのかもしれない。

「ではそれならば――『ユリの納得をもらえる方法を考えるとしよう』」

どうしても方法が無かったらマタタビにこっそり指輪とらせに行く我儘ムーブです

ちなみにオリ主の出自バラしたことは本人には言ってません。必要も意味も義理もそこまでないので

獣①

鬼豆腐様から素晴らしいイラストを頂いてしまってすごくうれしいです！(語彙力の消失)

一枚だけかと思いきや実質5枚ですね。

上からアルベドさんが職安してくれるところ　4話

ツアレさんにぐうの音言わされそうなところ　51話「探し物」

エクレアさんとハイになってるのをシズさんに覗かれてるとこ　8話「地下労働メイド暮らし」

デミウルゴスさんの妄想に引いてるとこ　8話「地下労働メイド暮らし」

アウラさんにチャーム掛けられてるのに気付いてショック　21話「アドバイザー」

嬉しくて泣きたいのと、絵をもらえたのに執筆速度が上がらない悲しみで泣きたいのとで二重に泣けるこの頃です。うぅがんばる

HA HAHA
HA HAHA
!?

後今回尺の都合で2話編成になります。でもルプスレギナは出てきません

【マタタビの至高の41人大百科】

No・11：獣王メコン川

彼を一言で言うなら狼男。

普段は快活で社交的な割といいひとなのに、戦闘時になると性格含めて本物の畜生に変身する。

獣王の名の通り、戦闘スタイルは四足歩行に爪と牙を武器とするガチもんのモンスター。ブルー・プラネットが感動するくらい本物の獣に近い。

生物学的に言えば2足歩行より4足歩行の方が身体スペックは優れてるから、原始的な迫撃戦闘が馬鹿にできないくらい強い。

裸一貫で競うならギルド：アインズ・ウール・ゴウンでも最強の存在だと思う。人よりも獣の方が向いている。

◆◇◆

ナザリック６階層。鬱蒼と広がる大森林地帯の広さは１５００ヘクタールほどとのことで、つまり４ｋｍ×４ｋｍぐらい。高さはわからないけど上昇限界が２００メートル。

雰囲気は、この世界で見たトブの大森林と良い意味で似ている。変な言い方だが、本当に生きた大森林のような雰囲気だ。

私自身趣味のギルド破壊でよそ様のギルドの内装はよく見ているわけだけど、一般的に見るギルド拠点の森林地帯は造り物くさい不自然さがあるのが普通なのだ。

分かりやすく言うと、６階層がジ●リアニメーション傑作『もの●け姫』のシ●神様の森とするなら、一般的なギルドの造林は糞アニメの適当な造林背景って感じ。

後者はただ芝生や地面に木草を生やして並べただけで、日光の向きや水辺の設置場所による植生の偏りとかを一切考慮していない。

その点、前者たるこの６階層は凄い。小さい頃アーコロジー暮らしだった私は、

母さんに何度か現実の植物園に連れてってもらったことがあったからよくわかるのだが、本物の植物の植生を見事に再現しているように見える。まぁ、別に私は学者でも何でもないので見る人が見たら粗があるのかもしれないけれど。

なんにせよ、ブルー・プラネットもよくこんなものを作り込んだもんだ。むしろ奴め、どうしてここまで作り込んでおきながら最終日に顔すら出さず消えてしまったのやらとすら思う。いや別に彼の勝手な訳だけど。

そんなことを考えながら私は、造り物の星空を仰ぎながらジャングルの木々をターザンよろしく飛んで伝い、目的地へと悠々移動。「あーあー」とか言いたいけど、守護者のマーレさんアウラさん達に感知されたら泣きたいのでそこは自重。

やがて目的地たる円形闘技場コロッセウムが見えてきた。

わざわざ正門から入るのがかったるいので壁面を駆け上る。外壁頂上から待ち合わせの人物の姿を見定めてから、闘技場中心へと弾丸の如く突っ込んだ。

それこそ何時ぞやの漆黒聖典の時の如く。

「たやぁ！」

そして案の定、着地と共に闘技場の大地から土埃が舞い上がる。

「どもどもお久しゅうございますシャルティアさん。御呼ばれされて参上した次第なマタタビです」
「けほっ!?　あなた、毎度私が居るところに突っ込んでくるの、ワザとでありんすか？」
「少なくとも今回はわざとですね。ほら、緊張感とか欲しいでしょ？」
「……不意打ちされたわたしの気が抜けていたって言いたいのなら……確かにその通りでありんすが」
うわスゴイ、適当こいたら誤魔化せた。
口調と性癖はふざけてるのに、根っこはすっごい真面目だなーこのかた。
砂ぼこりが晴れ渡って対峙したのは、1～3階層守護者のシャルティア・ブラッドフォールンさん。
いつもはボールガウンのゴシックドレスにパラソルっていう誰かさんの趣味全開なファッションだけど、今は真紅の全身鎧にスポイトランスという完全戦闘態勢である。
気が抜けているなんてとんでもない謙遜だ。

「そこまでは言ってませんよ。シャルティアさんの能力じゃ私に気付くなんて無理ですし」

感知能力を一切持たない彼女では、気配を直前ギリギリまで消していたマタタビに気付くのは無理。

大事なのは即座に反応し体勢を立てる臨機であって、その点今のシャルティアさんは十二分に合格点なのだけど。

「いんえ、あなたがその気なら今の瞬間で私を殺せたはずでしょう？　そうでなくても重傷を負わされて不利対面に持ち込まれていたのは確実でありんす」

「いやいや殺せやしませんよ。確かに腕の一本か片足くらいは貰えたかもしれないですが。それにしたって相性の問題ですし」

感知能力もなく血の狂乱と神聖属性という明確な弱点を持つシャルティアさんは、手札の多いマタタビからすればいいカモだ。

シャルティアさんに暗殺という形で一方的な先制攻撃を仕掛ける場合、マタタビは極めて有利と言える。

もっともそれすら、今の内としか言えない程度のアドバンテージだ。

「確かにこの世界に転移したばかりで未熟だったシャルティアさんなら、不意打ちで一方的に倒すことも出来たかもですね

でも今は違う。精々もってけても四肢の一つぐらい。今の反射速度で確信したけど、そのうち私の不意打ちなんてシャルティアさんには殆ど通用しなくなる」

「そんなことは……」

「あるんですよね悲しいことに。胸は成長しないのに、腕はメキメキ伸びていやがる。妬いちゃいますよまったく」

「一言余計でありんすよ！」

この世界にて自我を持ったＮＰＣは、得意分野における極限の才能を有している。

デミウルゴスさんやアルベドさんアクターさんはアインズ様真っ青のIQをもっているし、奉仕者として生み出された一般メイド達は言うまでもなくプロフェッショナル。

アウラさんのモンスターの指揮能力は、茶釜因子も相まって現時点でもビーストテイマーとして最高峰。接点無いからわからないけど、マーレさんとコキュートスさんも多分ヤバい。

そして何より、ナザリックに於いて総合能力最強を誇るシャルティアさん。生まれてこの方研ぎ澄ましてきた私の剣技を早速見切ったり、今の時点でかなり怖い。

だのに、これがただの才能でしかなくて、適切な経験と環境を整えればどこまでも伸びていくというのだから、輪を掛けて恐ろしい。

「褒めてくれるのは嬉しいでありんすが、自分のこと棚上げしておりんせんか？

ユリから、仕事覚えるの速すぎてメイド達に目の敵にされてるって聞いたでありんすけど」

「いやいや、私はアレだから。掃除とかは性格の問題でムラッけあって苦手だし、そもそも協調性ないから集団業務を覚えても無駄になるから」

「そこはかとなく目に浮かぶでありんすね……わかっていて直せない当たり根深さを感じるけど」

うるさーい

「……はいはい。んで、今日私を呼んだご用件は？」

この指定場所とシャルティアさんの武装見たら大体察しが付くわけだけど

「そうでありんしたそうでありんした！　マタタビ、あなたにわたしの『血の狂

乱』の制御のことで相談したいのでありんす」

「ふーん」

『血の狂乱』は、一定量の血を浴びると攻撃力が上昇する代わりに、酔っ払い運転よろしく身体操作の制御が著しく困難になるというデメリットスキル。

先日の私は『飛龍の血瓶』を彼女にぶつけてコレを誘発し、生じた動作の隙を着いて、彼女の弱点である神聖属性の刀で滅多切りにして勝利した。

確かに動作性を損なうデメリットは大きいが、そもそも返り血なんて彼女の持つスポイトランスやスキル『ブラッドプール』で簡単に回避できる。

こないだの私は不意をついて誘発したけど、シャルティアさんが2度目か3度目のへまを踏むようなマヌケにはとてもじゃないが思えない。

「シャルティアさんは決して馬鹿じゃないのだし、考えすぎかと思えますが。

変に気にしすぎるのも、創造主への不敬というヤツでは？」

そもそも製作者のエロ翼王は『血の狂乱』すらメリットとして彼女の能力編成を

造り上げたのだし。

１００レベルＮＰＣ、シャルティア・ブラッドフォールンの強みはバランス良く積み上げられた総合力にある。

彼女は「カースドナイト」や「ワルキューレ/ランス」「クレリック」といういわゆる前衛信仰系職。魔法攻撃や回復と共に直接戦闘もあって、ユグドラシルでも人気が高かったクラス編成だ。

この手の遠近両用の職業は、遠・近それぞれ専門職には一歩劣ってしまうのが少し弱み。そこを、高ステータスが見込める「真祖（トゥルーヴァンパイア）」や、多彩な小技がウリの「ブラッドリンカー」で補うことで、幅広く高水準な性能を実現させている。

武装にしたってクラススキルとの兼ね合いなどが良く考えられていて大したもんだ。

背中の翼はクラススキルのバフによって本職バードマン並みの機動力が見込めるし、本来はデメリットスキルな筈の『血の狂乱』をＨＰ吸収効果のスポイトランスとコンボさせて使うなんて脱帽モノの発想である。

遠近両用、空中戦でもどんと来なされって無敵かコイツ。

ナザリックで１番強いＮＰＣを決めるとしたら彼女になるし、なんなら相性がいいからアインズ様にも楽勝できる。

よくもまぁエロ翼王も、拠点用ＮＰＣにここまでの注力が出来たもんだと思う。

しかしこれでドのつく変態なんだよなこの御方。偽乳で両刀で死体愛好家のSM吸血幼女って何だよ。概念かよ。

「だからそんな沢山褒めても何も出ないでありんすよ!?」

「変態は褒めてませんが。なんならちょっと軽蔑してます」

文字通りに心の底からの軽蔑の眼差しを向けてやる。

のだがどうしてか火に油を注ぐ具合に彼女の瞳の熱気が増した。

……豚かよ。

「嫌味か！　嫌味でありんすか！　わたしを持ち上げるだけ持ち上げて、楽勝した自分を更なる高みに置こうとしてるでありんすね!?」

「おまえ、私の話聞いてた？」

どうせ私じゃこれから勝てなくなるんだっつーの！

いかんガチ目に腹が立ってきた。私この人やっぱり苦手だわ。

怒り任せに片足で地面を蹴りつけて、ようやくシャルティアさんは落ち着いた。
「……ごめんなさいでありんす」
「別に、私もその……ごめん」
誰かに似てわりかし素直なシャルティアさん。謝られるとそれはそれで調子が狂うんだが。
やりづらいったらありゃしない。
「わたしも今までは、ペロロンチーノ様に与えられた能力に守護者最強として絶対の自信をもっていんした。
でもあなたに会って、それが酷い慢心だとわかったでありんす。わたし、この世界に来るまで『血の狂乱』がここまで厄介なモノだったなんて思いもし無かったでありんすから。
大事なのは、長所も欠点も理解した上で、冷静に適切な対応を選ぶこと。それを怠ったから……わたしがみんなに迷惑をかけた。アウラにもアインズ様にも……何よりマタタビ、あなたにも。」
「そう……かよ」

「だからあなたに『血の狂乱』のいい制御方法があればと思って、相談しようと思ったのでありんす」

耳が痛いどころじゃない。彼女の自責の１つ１つが私の心を貫いて、穴だらけにしてくるようだった。

その傷から滲みだすようにして、暗く破滅的で獣染みた下等な衝動が全身を駆け巡る。

やっぱり私は、どうしようもなくシャルティアさんが苦手なようだ。彼女を前にして、私はいつも冷静を保てない。

舌を噛んでも堪え切らない。いつものように、限界を超えたナニカが溢れてしまいそうだ。

そんな私の腹のうちなど露知らず、彼女は心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「どうしたの？　気分がすぐれないなら後日にするか、それとも辞めにする？」

『どったのマタタビちゃん？』

ああ、ああ、ああ、クソが。

これじゃ昔から何も変わっていない。エロ翼王に暴言吐いてナインズ・オウン・ゴールを荒らした時と同じじゃないか。

ダメだな私は。

いや違う、馬鹿だ私は。エロ翼王じゃない。彼のキャラクターネームは……

「……ペロロンチーノ」

「ペロロンチーノ様がどうしたの？」

「なんでも、なくはないけど……ない。ごめん時間とらせた。じゃあ『血の狂乱』のことで話そうか」

「ほんとに大丈夫？　大丈夫なら、よろしくお願いするでありんすけど」

「うん」

本当ならば今ここで、シャルティアさんに謝るべきなのだろう。それこそ神官に懺悔するみたいに。

でも今は無理。気持ちの整理が追いつかないし、諸々の事情がややこしい。

まだまだ素直になれなくてホントにごめんと心の中で謝った。

口に出来ないからせめて、私も一緒に頑張ろう。抑えきれない衝動を抱える辛さは、私にはよくわかる。

だから出来る限り彼女の助けになろうと、心の底で私は決めた。

◇

ところで残念ながら私の知識では、『血の狂乱』の動作性のデメリットを打ち消すような手段は無い。

強いて挙げるなら〈星に願い（ウィッシュ・アポン・ア・スター）を〉で大当たりを引くか、ワールドアイテムでも使うかだ。コスト的に話にならない。

だからと言ってアドバイスゼロかと言われればそんなことは無いのだが。

「結局のところ精神論かな。身も蓋もない話だけど、『血の狂乱』で大事なのは心構えなんだと思う」

「心構えでありんすか？　でも狂乱時は一律に暴走状態になって理性の制御が利かなくなるでありんすが」

シャルティアさんはメモ帳を取り出して私の話をメモってるわけだけど。

気のせいじゃないよね。あのペンの無茶な動き、反射神経総動員してセリフ全部写していやがる。裁判所速記官かよ。最早ツッコむのもかったるい。

「そうなんだけどさ。ほら、私が狂乱を誘発した時のことは覚えてる？

突然のことでパニくって、シャルティアさん最初の数舜は滅茶苦茶動きがおぼつかなかったじゃん。すぐマシになったとは言え」

「言われて見ればでありんす。あとそうだわ、洞窟の中で発動した時は……すごく遊び感覚でやってて結局逃がしちゃったから、そう言うのも良くないでありんすよね！」

「かな、そっちは知らないので何とも言えませんが。狂乱度外視しても、戦闘時のメンタルは本当に大切だからね。

私もなかなか制御効かないから、普段から座禅とかしてどうにか抑え込んでるよ」

その点一番狡いのがアインズ様だ。本人はただの一般人なのに、ちょっとMP消費するだけで沈静化されるのは戦闘者として本当に強い。戦闘以外では不便そうな能力だから、あまり羨ましくはないけれど。

それに「完全なる狂騒」が致命的弱点になることを考えると割と危うい。流石に慎重派の彼なら、今は何かしらの対策を講じてるだろうけど。

「あとは単純に経験を増やすことかな。実戦の少ないシャルティアさんたちが見慣れない手段を打たれて動揺するのは仕方ないよ。

だからユグドラシルじゃ未知の危険地帯に潜り込んで何度も死んで蘇るっていうのが、効率的な鍛錬でありメンタルトレーニングだったんだけど」

高レベルダンジョンやギルド拠点にカチコミして私が死んだ回数は、一体どれくらいだったろう？　多分数千回くらいだったかな。万行っていたかも？

これぞいわゆる死に覚え。古来１００年以上前からあらゆるゲームでゲーマーたちに伝統的に伝えられてきた鍛錬作法である。

「……地獄のような修行でありんす。マタタビや至高の御方々は皆それを実践してきたのでありんすね」

「ユグドラシルではこの世界やリアルと違って命の価値は安いから、そんなに難しくは無かったんだけどね」

「それは無いと言いたいでありんす、よくわからないけど」

「そうでもないよ」
彼女は仮想の死を知らないからそんなことを言えるのだろうと思う。
ユグドラシルで何遍死んでも、現実における死の恐怖の足元にも及ばない。
だからこっちはこっちで臨場感があって、体感できる実戦経験の質が違うから一概に良い悪いと言える話じゃないのだが。
言っても仕方がないだろう。ユグドラシルがゲームだったなんて、彼女達には信じられるわけが無いのだから。

「話すだけじゃあ仕方が無いし、そろそろ演習してみましょうか」
「わかりんした。ではこれを――」
私が促すと、シャルティアさんはアイテムボックスから円形闘技場の制御盤と思しきタブレットを取り出した。
「マーレの奴に頼んで借りたでありんす。円形闘技場からは持ち出せないようになってるんでありんすが……これをこうっと！」
慣れない仕草でコンソールを弄ると、コロッセウムの観客席から内側に結界が張

り巡らされ、いわゆる演習モードへと移行した。
演習モードの結界内で発生したあらゆるダメージや状態異常や死亡は、結界解除後に無かったことにされる。
今この空間内でなら、どれだけ暴れても問題ないというわけだ。
「ちょっと待ってくださいでありんすね？　今、『血の狂乱』の発動準備を済ませるから」
タブレットを仕舞って、何やら道具――血の狂乱を発動させるためのモノだろう――を探り始めた。
私はそれに待ったをかける。
「最初は『血の狂乱』は使わなくていい。その代わり、円盾と『死せる勇者の魂（エインヘリアル）』を出してよ」
「なんのつもり？」
「今から私が『獣化』して応戦する。コレ、根本的には『血の狂乱』とは別状態なんだけど、掴むべきコツや本質は同じはずだから、きっとシャルティアさんの参考になると思う」

「あなたそんなことまでできるのね！」

これでも多芸さがウリである。又の名を器用貧乏というのだが。

私はアイテムボックスから、緑色の液体が入った薬品瓶を取り出して見せつけた。

「スキルではないんだけど、ケット・シーはこの『獣化の霊薬』の種族適正がマッチしてるから一応『獣化』できるんだよ

ルプスレギナの創造主獣王メコン川みたいまでとはいかないけど、それなりに上手く戦える自信はある」

なお『死せる勇者の魂（エインヘリアル）』を使ってほしい理由は、私の影分身鍛錬と同じ。分身体が『獣化』との戦いを直接体験した上で、シャルティアさん本人には傍からその戦闘を観察してほしいから。

あと盾に関しては、魔法とスキルの発動起点としていつも片手が素手白兵スタイルとして考えると片手が槍、もう片方が素手というのは不自然。本SSでは、アニメ描写などからスキルや魔法の発動起点として片手が空いてなければならないもの想定するなのだが、『死せる勇者の魂（エインヘリアル）』には関係ないので装備してほしいという理由から。

「理由は良く分かったでありんすけど、わたし盾持ってないでありんす。あれば一応、使えることには使えるけど」

「そうなの？　まぁ要らないっちゃ要らないけど。スキルやMP切れとかジリ貧想定したらあった方がいいと思うけどなぁ。ちょっと待ってて」原作3巻で、スキルMP枯渇時にもかかわらず、シャルティアはアインズの剣戟を素手で無理矢理ガードした。そこから考察

淡い記憶と共に片手でアイテムボックスを探り、4秒もかかってようやく取り出した。

赤塗装に金紋の装飾と猫マークが刻まれた円盾。名前はとある古典ゲーム由来でキトンシールドという。

ぽいと投げてシャルティアさんは軽く受け取った。

「造ったけど思いの外使わなかったから、アインズ様から新しいの貰うまで持っていていいよ」

「ありがとう。これも神器級ね？」

「うん一応。そんなすごいもんじゃないけど」

一応ランクとしては神器級だけど盗賊職の私が装備できるように無理矢理チューニングしたから、せいぜい伝説級の防御力しかない

でも素手よりはマシだろうと思う。

さて、今度こそホントに始めよう。

「準備万端でありんす！　『死せる勇者の魂（エインヘリアル）』」

「瞬間換装　メーナーム（獣王風）ズネイル（付け爪）」

獣化用の戦闘用付け爪を装備してから『獣化の霊薬』を一気飲み。

でもここでちょっと誤算。

「……苦っ！」

霊薬の味糞マズい。青汁だコレ。

渋面を浮かべながら、締まらない模擬戦が始まった。

獣②

マタタビに真正面から打ち負かされて、シャルティアの世界は一変した。守護者最強という肩書は絶対ではないのだと。強く成らなければいけないのだと知った。

はじめは殺されかけたことを恨んだが、主人と双方で嫌々ながら傷つけ合う姿を見て、それが酷い逆恨みなのだと知った。

失敗の罪悪感を肴に９階層のバーで自棄酒と洒落込もうとした矢先、既に絶望顔でうなだれてる彼女を見た時、シャルティアは彼女に深い畏敬の念と親しみを感じた。

『私はお前を助けたことは心底後悔してる』

だけど何故あの時助けてくれたのか、その理由を結局今でもシャルティアは知らない。

◆

漆黒聖典の殲滅戦、シャルティアやアウラの追撃戦、アインズ様による奪還戦やついこのあいだの模擬戦。

これまで幾度かのマタタビの戦いを味わい見てきたシャルティアは、なんとなく彼女の本質を掴みかけていた。

彼女の強さの本質は、高速戦闘を可能にする運動神経や膨大なアイテムストックからくる手数の多さ、ましてや鍛え上げの戦闘経験などでもない。

相手の心理に深く食い込み、同化するレベルにまで極まった高い共感力にある。

敵からすれば心の内が丸裸にされることほど恐ろしいことは無い。彼女は常に相

手がされて嫌なことを考え続け、そして徹底的に実践し続けるからこそ強い。

彼女を本当の意味で打ち負かすには、それこそアインズ様レベルの計り知れない思考力を得るしかない。アルベドやデミウルゴスですらそれが叶わないのだから、直情型のシャルティアがマタタビに勝てる日なんて来るとは全く思えない。

そしてその共感力と観察力は敵の弱点を攻めるだけに飽き足らず、彼女自身の能力向上に昇華されていくから恐ろしい。

思えば、異世界転移直後に初対面したマタタビの振る舞いは、お世辞にも支配者の前に並ぶには落第点だった。浮ついた視線や不安げな足取りは、不快すぎてすぐに記憶の隅に追いやられたぐらいだ。

それがアルベドの計らいでメイドになってからは驚く程に様変わりし、たった数日で一般メイド達と遜色ない堂の入った作法を身につけた。凄まじいものだ。

それと同じように、至高の41人からも多くの技を盗み取ったのだろう。だから彼女は、剣術だけに限らず手裏剣術、射的、巻物（スクロール）による魔法行使、体術、暗殺術など多くの技術に精通しているのだ。

その中に『血の狂乱』の先達になるものがあればと期待して、シャルティアはマタタビに白羽の矢を立てたわけである。

そしてその期待にマタタビは、見事に応えてくれそうだった。

シャルティア・ブラッドフォールンは、今一度再びマタタビの闘争を傍観するに至る。

彼女が相対するのはシャルティア自身が身を分けて作り出した分身体『死せる勇者の魂（エインヘリアル）』。シャルティア自身が持つ身体能力と武装強度のみを忠実に再現した、シャルティア最大の切り札だ。

対してマタタビは、薬液を飲み込むと徐々にその姿を変化させていった。

まずは普段から掛けていた変化能力を解いたのだろう。擬態していた黒髪の少女の姿から、異業種ケット・シー本来の姿へと戻っていく。一回り背が縮み頭部は本物の黒猫ようになって、肢体も滑らかな漆黒の毛並へと覆われた。

そこからさらに『獣化』による変身。気品ある黒猫の表情は凶悪な肉食獣のそれへと移り変わり、両手足は鋭い４本爪の生えそろった猫手となった。

『……ＧＲＲＲＲ』

最終的にそこに出来上がったのは、極めて狂暴な黒豹の姿であった。

皮肉にもマタタビの面影を残すのは、狡猾ながら獰猛な鋭い野生の眼孔だけである。

黒豹は嘶きながら爪を地面に擦り付け、エインヘリアルは無造作に槍と盾を構える。一触即発の空気感がほのかに漂う。

やがて数秒後。合図は無く、ただ彼女の咆哮がこの模擬戦の火ぶたを切り落とす。

『ＧＡＵ!!』

否、

既に切り落としていた

彼女の咆哮がシャルティアの鼓膜を揺らすより早く、既にその牙はエインヘリアルの右片翼を噛み千切っていたのだ。

マタタビの素早さをシャルティアは理解しているつもりだった。単純な速度で言えば、シャルティアを80として素のマタタビは１４０といったところ。

だが今の瞬間加速は１６０、シャルティアの最高速の２倍である。

彼女の使う『獣化』はスキル魔法や武器などが使用不可になる代わりに身体スペックを向上させる代物だ。

その変化も含め頭で理解していたはずなのだが、初見では全く対応が出来なかった。

以前と同じくまたしても翼を封じられ地上戦を強いられることになり、エインヘリアルは歯噛みしているようだった。

しかし悔やむ暇など油断でしかない。野生染みた動きで嵐のような追撃がエインヘリアルへと襲い掛かる。

踵を返し、今度は背後からスポイトランス側の肩にかぶりつこうとする黒豹。

どうにか刹那に円盾を間に挟み込んでエインヘリアルは防御する。黒豹の攻撃には、速度はあるが重さが無い。

やり返しにカウンターの一撃を当てようとするが、恐ろしいほど柔軟な旋回によりかわされた。

後退する黒豹を追撃するが、今度は闘技場内の壁面を走りエインヘリアルの側面へと迂回。雷撃の如きジクザク疾走から、エインヘリアルへ鋭い爪の腕を振りかぶ

る。

これをまた円盾で防御、からの再びのカウンターは黒豹の毛並みを僅かに抉り、かすり傷をつくることに成功する。

しかしそれはエインヘリアルの懐へ入り込むための最短動作でしかなかった。

『ＧＡＡＡＡＡＡ!!』

黒豹は盾とランスの隙間にすり抜けるように潜り込んで、エインヘリアルの剥き出しの顔面へ大口を開け鋭い牙で喰らいかかった。

「!?」

見てるだけのシャルティアですら肝を冷やす瞬間、どうにかエインヘリアルは頭突きで黒豹の顎を打ち最悪のディープキスは回避される。

が、　懐へと詰められた代償は只ではない。次いで鋭い爪が顔面をひっかきエインヘリアルの片目は喪失された。

そのまま黒豹は体重を掛けてエインヘリアルを押し倒そうとするが、反撃に腹ど真ん中へ蹴りを入れられて大きく後ろに吹き飛ばされる。

されど猫は背中を打たない。壁面に垂直着地し、体全体をバネにして反作用で再

加速を切った。

片眼をつぶされたエインヘリアルは、再び黒豹を迎え撃たんとして怒濤の競り合いは継続される。

観戦していたシャルティアは熱い冷や汗を流しながら思わず驚嘆を口に出す。

「獣そのものね！」

これこそ獣王メコン川様の駆使する「四足闘方」、その御業のマタタビによる再現か。

なるほど強い。

マタタビに円盾を持たされた理由も良く分かった。

今マタタビを迎え撃ってるエインヘリアルは、シャルティア本人のようにスキルや魔法は使えない点で大きく劣る。だが今のマタタビを迎え撃ってるのがシャルティア自身であったとしても、苦しく傾いたこの戦況はほとんど変わらないだろう。単純に使う隙が無いからだ。

マタタビの超高速の猛攻は、スキルや魔法の詠唱時間を奪いつくし、思考リソースも削ぎ落して判断力の質まで落としている。

仮にこれで迂闊に『不浄衝撃盾』とか魔法とか『清浄投擲槍』など使おうものなら、口に腕を突っ込まれてシャルティアの大脳がミンチにされてしまうだろう。

このマタタビの獣臭い４足の舞は、正確無比な剣術を操る平時に比べればあまりにも粗削り。

されど闘争本能の濁流を乗りこなしたような怒濤の迫撃は、シャルティア自身が目指すべき『血の狂乱』の完成形に極めて近い。攻撃こそ最大の防御の体現である。

やはりマタタビに導きを求めて正解だったようだ。彼女のことを今はまだ、ただただ尊敬することしかできない。

だからシャルティアは両眼を見張り、瞬きすら惜しんで眼前の戦闘に目を見張る。

そのコンマ一秒にも満たない瞬間瞬間を網膜に焼き付け、彼女のシルエットを自身のヤツメウナギの姿に重ねて強く強くイメージさせた。

そうして５分後ほど粘ったエインヘリアルは、あと一歩のところでマタタビの寸胴を貫けるとこまで行ったのだが、

反撃にもう片方の視界を潰され戦闘不能となって、白旗を挙げる羽目になった。

すごく悔しい。悔しい悔しい。

「分身体に辛勝させられるほうの気分にもなってよ……」

マタタビは不満げだが知ったことではない。

そもそも彼女に円盾を貸してもらわなければ、エインヘリアルはあの猛攻を受ける術が無かったのだし、ハンデもいいところじゃないか。

それに百歩譲っても、残されたHPに胡坐をかいて油断したエインヘリアルの完敗に変わりないのだから。

回復能力の無いエインヘリアルが両目潰されたら戦闘不能になるのはまさかの盲点だった。次がある時は同じ轍を踏まないように気をつけねばならないだろう。

どんな形であれ、負けは負け。折角リベンジできると思ったのに残念である。

「さ！　さ！　今度はわたしが『血の狂乱』を使う番でありんすよ！

どっからでもかかってきやがれでありんす！　あ・り・ん・す！」

「休憩させろ！　この戦闘狂の馬鹿吸血鬼が！」

◆

マタタビに手本を見せてもらった後、今度はシャルティアが『血の狂乱』でマタ

タビを攻め立てる方向で模擬戦を行った。
マタタビの『獣化』の動きや思考トレースを参考にした結果、シャルティアの『血の狂乱』下での戦闘動作はかなり改善されたと言っていいだろう。
昨日の自分と戦えと言われたら１００戦１００勝できる自信がある。ある、のだが、あれからのマタタビは容赦が無かった。もうびっくりするほど容赦が無かった。
「おーいシャルティアさん、今日はここまでにしませんかー？」
「もゞうゞいゞっがいゞ!!　もゞうゞいゞっがいゞだげやゞるゞであゞりゞんゞずゞ!!」
あれから5時間。１００や２００などではきかない、数えるのも馬鹿らしくなるほどの回数マタタビと手合わせしたのだが、一回も勝利することが出来なかった。
ある時は例の如く全身刀でバラバラにされ、ある時は頭から一刀両断で真っ二つ。聖水シャワーや銀の弾丸、視界破壊、幻術、隠形からの遠隔狙撃。ほかにもバリエーション様々な死にざまを体感させられ続けたのであった
ちなみに一番酷いやられ方は、酔い覚ましのような薬で『血の狂乱』を解除され

たところを、不意打ちでスッと行ってドスである。
「『血の狂乱』下なんかであんたに勝たれたらこっちの立つ瀬がありませんよ」
「5時間！　5時間でありんすよ!?　一回ぐらい勝てないとオカシイでありんす！」
「バーか、たったの5時間でしょ？　ぬるいぬるい、この私が一体何度実の父親に叩きのめされたか知ったら度肝抜くよ？」
「……どのくらい？」
マタタビの父親というのは知らないが、多分相当な実力者なのだろう。
「回」
「ぎゃー!?　でありんす!?」
（回て、回て、父親が娘にやっていいことなの？　そこまでくると虐待じゃないの？）
（ああでもペロロンチーノ様にならされたいかも、虐待♡　今は絶賛放置プレイ中だけれど、そろそろ別のキツイ寵愛が欲しいわ）
（リザードマン集落への侵攻時にアインズ様に椅子にされたけど、あれよりもっ

とハードなのがいいかしら♡）

そういうふうに考えたらマタタビも滅茶苦茶愛されてると言えるだろう。すこーしだけ、うらやましい。

（いいなぁ、わたしも回ペロロンチーノ様にボコボコにされてみたい）

「なんか馬鹿なこと考えてる？」

「マタタビも父上に愛されてるのね！」

「……そーね」

マタタビの冷ややかな視線を存分に享受しつつ、シャルティアは改めて落ち着いてマタタビの強さを考えた。

これ加えてマタタビはユグドラシルにて修羅獄の如し闘争に身を置いていたのだから、その強さも頷けるというものだ。

それに比べれば5時間など確かにぬるすぎる。

シャルティアが悔しがるのも、失礼というヤツなのか。

しかしマタタビは意外な誉め言葉をくれた。

「これでシャルティアさんは、素の状態なら私に負けなくなったんじゃないですか

ね

もうほとんど私の手の内見せつくしちゃったから、あなたには」

「え？　うそでしょ？　あれで全部なんて……いやすごく多かったけど」

「だから今度私が何かやらかしたら、どうか盛大に止めてくれると嬉しいです、お願いしますよ」

「う？　うん、でありんす……。いやあなただって、二度もへまることは無いでしょうけど……」

あまり現実感の湧かない言葉だった。

たしかにマタタビの手の内が今までで見せた分だけで収まってしまうのなら、今後のシャルティアは対応することが可能だ。

「シャルティアさんのお役に立てて良かったですよ」

「それは本当にそうなんだけど……」

だがその言葉をう鵜呑みして油断するのも馬鹿々々しい話だろう。精々、話半分で聞くのが正しいはずだ。

そういうブラフこそ、彼女の十八番なのだから。

「どうかな。じゃ、もうおしまいにしましょう」
「……そこまでいうのなら、わかったわ」
色々言われたせいでシャルティアのやる気もすっかり萎えてしまった。
たしかに、訓練なんて続け過ぎても集中力が無くなってしまえば効率は落ちる。肉体疲労の無いアンデッドですらそれは変わらない。
その点を考えると、１回でも当たれば即死の紙装甲マタタビがシャルティアから無傷で５時間生き残ったのは、やっぱりかなりおかしいのだけれど。
シャルティアは、マーレから借りた操作基盤のボタンを弄り、闘技場の訓練モードを解除した。
「あーところでシャルティアさん」
「何？」
結界が解除され、身なりも消費アイテムも元通りになったマタタビは、急に怪しげな目つきでシャルティアに言った。
「この間少し聞いた死んだガゼフさんと反逆した吸血鬼のブレインのこと
もう一度詳しく話してもらえませんか？」

用件は、かなりどうでもいい筈のことだった。
マタタビから受けたもう一つの借り。その顛末である。
「別に……良いでありんすが」
シャルティアはこの時のマタタビの様子が、これまでの死闘や今の模擬戦の時よりも遥かに恐ろしいように、一瞬だけ思った。
すぐに気のせいだろ頭を振って、くだらない筈の事情をつらつら思い出しながらシャルティアは語り始める。
こんなこと訓練のお礼にもならないのだから、話さない理由なんて欠片も無かった。

どうしてこの時マタタビがそのことを聞いたのか、その理由をシャルティアが知るのは、気の遠くなるほどずーっと先のことである。
多分、シャルティアが正直に話さなければ、今後のナザリックの運命は大きく変わっていただろう。
それだけは確かなことだった。

マタタビ

◇能力値（獣化）

・HP：80

・MP：70

・物理攻撃：90

- 物理防御：70
- 素早さ：160
- 魔法攻撃：0
- 魔法防御：70
- 総合耐性：80
- 特殊：50

侵入者の告白

原作者丸山くがね様はアインズ様のことを「ゲームに縋るほかなかった哀れな人」みたいに言ってますが、

自分は、ゲームにすら縋れず何の楽しみもなく奴隷として使い潰される人生の方が１００倍くらい哀れだと思いました。

というわけで、オーバーロードという素晴らしい作品に出合えた自分はとても幸せな人間です。

更に自分で二次創作を始めてみて、読者の皆様方から色んな感想や評価を頂けて、まったく贅沢の限りです。

よって丸山くがね様と、本SSの読者の皆様方に改めて心より感謝申し上げます。

今回は半分くらい、そんな感じの話です。ナーベラルは出てきません

今回ナーベラル・ガンマは登場しません

【マタタビの至高の41人大百科】

No・12：弐式炎雷

紙装甲で高機動、高火力性能を誇るスーパー忍者。明らかに彼の体捌きは我流であるにもかかわらず、無駄がなく洗練されていて美しい。

探索役と火力役を兼ねたビルド編成には無限の可能性が存在する。

是非ともユグドラシルを続けてほしかったが、何故かアーベラージとか言うクソゲーの方が本業だったらしい。

マタタビも勧められて少しだけアーベラージをやってみたがランクが上がるのがチョロくてすぐに飽きて辞めた。そしたら何故か一層に ぷにっと萌え に嫌われた。

◆◇◆

ナザリック地下大墳墓８階層、荒野エリアでマタタビと待ち合わせていたアインズは、先んじて到着していたマタタビに声をかけた。

「懐かしいでしょう？」

「ええまったく。ホントに身が竦んじゃいそうです」
マタタビはわざとらしく両の二の腕をさすりながら、高くて狭苦しい天を仰いだ。
「ここがアインズ様最強のパワースポット８階層。なんというか、すごくアインズ様らしい」
「誉め言葉として受け取りますよ」
「誉めてますから」
その天蓋は、６階層に見える宇宙の深淵よりもなお暗い、どす黒い曇り夜空。まるでリアル世界における外周区から眺めた排煙の大空そのもの。
草木も生えぬ荒涼の大地も同様に、リアル世界の郊外風景としてありふれていて馴染み深いものだ。
空気はごく僅かに毒素を含んでいて、レベル５未満の漸弱な存在は対策アイテムをつけなければ生きていけないようになっている。
これぞ鈴木悟が知り得るなかで最も忌むべき恐ろしい風景。
ブループラネットが作り出した６階層の自然の楽園とは対極を為し、５階層の猛吹雪や７階層の灼熱をもたらすそれぞれの地獄すら凌駕する、真実の恐怖の体現。

結局のところモモンガが一番怖いのは、現実世界そのものだから。

故に、最終防衛ラインたる８階層のデザインとしてモモンガはこの地獄を造り上げたのだ。

しかしそんな地獄の只中でありながら、マタタビは極めて機嫌がよろしい模様である。不機嫌よりはよっぽどいいし、８階層が彼女に褒められてアインズも悪い気はしない。

興味津々に、マジックアイテムと思しき双眼鏡であちらこちらを見回して、砂漠の中心付近を徘徊する巨大な影に驚嘆した。

「おー！　あの阿修羅みたいな奴とかドラゴンとか真っ白い蝙蝠とか、元ナザリックのレイドボスモンスターですね⁉　初めて見ました」

「よくレイドボスだなんてわかりますね」

「昔潰したギルドにも配置されてたので」

「……」

それを聞いたアインズは冷や汗を流した。被害者ギルドは全くご愁傷さまである。

少なくとも、こいつが敵では無くて本当に良かったと心から思った。
「情報屋のクソ野郎ふんじばって吐かせたら、膨大な額を課金させれば出現させられるとか、なんとか
詳しい条件は知りませんけど、どんなもんなんでしょうか」
相変わらず手荒いヤツだなと内心冷ややかな視線でマタタビを横目に見つつ、アインズは淡々と内実を語った。
「まずギルド拠点全体の課金総額を１００万円以上にすることで、課金モンスターの配置オプションとして出現
それからレイドボス一体につき、諸々の指定素材と20万円の課金で配置できるようになってます」
「レイドボスだけで１００万円じゃないですか。
前々からおかしいとは思ってましたけど、金銭感覚どうなってんの？」
案の定マタタビはドン引いたわけだが、鈴木悟の実情を知らない彼女にとやかく言われる筋合いはこれっぽっちも無かった。
「リアルでは営業職でしてね

基本勤務の８時間プラス事務所管理のため毎日４～５時間の残業があって月当たりで基本の１６０時間と残業分１００～80時間前後。計約２５０時間の勤務になります

うちの会社は拘束時間はあるけど残業代はきちんと出るので時間給円として月給は約　　円

余りに余った残業代となけなしの時間をどう使おうが、俺の勝手です」

怒り任せに早口でまくし立てるとマタタビはあっさり降参した。

「ごめんなさい私が悪かったです。過労死ライン前後してて、むしろよくぞ今まで御無事に生きてこれましたね」

「マタタビさんはどんな具合だったんですか。課金とか給金とか」

話題をずらすのと給料マウントをとる意味を含めてアインズはマタタビに伺った。

思えば彼女自身のリアルの生活ぶりを直接伺うのは初めてのことであった。

「あー、私は小さな運送業者の事務所と倉庫番です。

大した仕事じゃないし飯付き住み込みで働かせてもらってるんで手取りは12万

ですが、通勤時間皆無だから時間的猶予は割とあったほう

課金額は……最低限のキャラ育成環境整えるために使ったぐらいだから累計して3万円ぐらいですかね」

給金では圧倒的に勝ってるはずなのに、アインズはえも言えぬ敗北感に苛まれた。住み込みも自由時間も飯付きという待遇も、一人暮らしとしてはピンポイントで欲しいオプションであったから。

それと3万円なんていうのは、いくらなんでも彼女ほどのプレイヤーの課金量としては不自然な総額だ。

しばし首を傾げたが、その理由はすぐに教えてくれた。

そしてアインズはあきれ果てた。

「課金アイテムってプレイヤー殺せば偶にドロップできるし、ギルド拠点漁ればいっぱいあるし

どうしても欲しいのがあればギルド武器を質にとれば大抵のモノは手に入るから、自分からしようとは思わなかったんですよね」

そうだった。

彼女はモモンガがボーナス全部つぎ込んでどうにか手に入れた流れ星（シューティングスター）の指環を、他プレイヤーから略奪し、あまつさえ要らないからと横流しするような畜生である。

「止めましょう、こういうの互いに話しても頭が痛くなるだけだ」

真逆のプレイスタイル――というかマタタビが極端すぎるだけの気もするが――を語り合っても仕方がないように思われた。

「いえいえ、私としては実に興味深くていいものですよ？」

しかしマタタビは遠くに見据えたナザリックのレイドボスたちを指さして、心底楽し気に笑って言った。

「１００万円なんて課金つぎ込んでまでレイドボス復活させたってことはそれだけ楽しかったんでしょ？　ナザリック地下墳墓の初見攻略」

「……楽しかったですよ。俺の人生の中で、一番楽しかった記憶です」

アインズも視線をマタタビからレイドボスに逸らしながらそう答えた。

常にひとりでに生きてきた彼女を前にすると、過去の栄華に拘泥し続けた己の弱さが目の当たりにされるようで酷くバツが悪い。けれどアインズを名乗る自分がマタタビに誤魔化しをする方がずっと不誠実なことである。

だからアインズはゆっくりと、褪せた輝きのメモリーを引きずり出していった。
弐式炎雷が発見した未開拓ダンジョン。それが報告会で発表後、侃々諤々の論争の末、何故か初見突入攻略をすることになったのだ。
攻略は、５チームに分けての各階層同時並行で行われたのだが、それぞれの階層のボスを倒すごとにどんどん敵が強く成っていくという最悪の仕掛けだった。
どう考えても、初見で攻略するようなダンジョンでない事はすぐにわかってしまったのだ。
「クランの皆でバカやって、無謀な初見突入のせいで大苦戦して、でも誰も撤退しようとは言い出しませんでした。楽しかったので」
「あはは、酷い話。貴方達らしいけど」
「それでもどうにか力を合わせてクリアできて
そんな馬鹿の結果のご褒美みたいに、初見攻略ボーナスとして世界級アイテム【諸王の玉座】が手に入ったんです。その時はみんなで大喜びしましたよ」
「そうでしたか」
拠点ゲットにかくなるドラマがあったからこそ、ギルド：アインズ・ウール・ゴ

ウンはナザリック地下大墳墓の大開発に全力を尽くすようになった。
エリア拡大、配置モンスター追加、キャラデザイン、フィールドテクスチャ、設定文書などなど。
メンバー全員から惜しみなくリアルマネーもつぎ込まれ、ギルド全体の課金総額が１００万円を超えた時に、ギルド武器のマスターソースから元レイドボスが課金配置モンスターのセレクト画面に出現したというわけだ。
実はどの程度の課金額なのかを、モモンガは他の仲間に知らせていない。
「みんなには総額10万円って嘘つきました」
「そりゃ流石に、１００万円じゃ連中も止めるでしょうよ。あいつらただの常識人だし」
マタタビの言う通りだ。当時の自分がおかしい自覚はあったし、それを仲間が止めようとするだろうこともモモンガはわかっていた。
わかっていたが、だから全てを仲間たちに語らず自分で勝手にレイドボスを設置したのだ。
「考えてみれば、既にそのあたりから俺は他のメンバーとの間に溝が出来ていたの

かもしれません」

埋めがたい熱量の差である。

最終日に来てくれたヘロヘロですら、モモンガによってナザリックが維持されているなんて思ってもみなかったらしいのだから。

人生全てを注いでいたモモンガに対し、仕事や家族の事情でやむなく引退していく仲間たち。

かつてモモンガは表層的な祝辞で見送りながら、その実内心に宿していたのは呪詛に他ならなかった。それは今のアルベドの在り方が何よりの証明だ。

鈴木悟はユグドラシル終了後の人生設計なんてこれっぽちも予定していない。

本当であれば、目の前の彼女と別れた自分は、そう遠くないうちに社会の歯車として使い潰されてたことだろう。

ナザリック地下大墳墓の絶対支配者が何だ。

その実情は、ゲームに縋るほかない惨めな中年のオッサンでしかない。

そんなことを、アインズは考えてしまう。

「なんか馬鹿なこと考えてる？」

「いえ別に……ただ」
マタタビの見透かすような眼がアインズに粘り気を伴って張り付いて行く。
その不快感を振り払うように、逆にアインズは問質した。これまでついぞ聞こうともしなかった、ある理由を。
「どうしてマタタビさんは最終日までユグドラシルを続けていたんですか？」
理由自体に興味はあったが、今まで一度もしたことのなかった問いである。
一人きりのギルドで鬱屈としていたモモンガにとって、それはなんとなく聞きづらい事だったから
「は？　……釈迦に説法を乞われた気分なんですが」
するとマタタビは、まるで馬鹿でも見るかのようにアインズを嘲って、言葉をつづけた。
「ＤＱＮギルドのギルド長が何言ってんの？　普通に、楽しかったからに決まってますけど
対人戦ゲームとして、あれほど心躍るものはないでしょうに」
「……なるほど」

アインズはマタタビの言い分を即座に頭では理解できた。が、やっぱり心の底では分かり合えないことを納得した。

彼女のユグドラシルに求めている快楽は、アインズの求めるそれとはある意味で逆方向だったからだ。

「多種多彩な能力システム、自由度の高い武器選択。それを我が身一つで駆使して争い合う奥深ぁいＰＶＰの駆け引き。

ユグドラシル全体のPK推奨の雰囲気とか最高じゃないですか。ギルド拠点荒らして財物奪いつくしてもいいし、通り魔PKでパーティ無茶苦茶にするの超楽しいし。

なんかこう、相手が大事にしてたものを奪いつくしてぐちゃぐちゃにして、それが自分の糧になる充実感が本当にいい！

これに比べたら、剣道やアーベラージとか糞よマジで。ただの健全競技なんてつまらない」

アインズが仲間と共に未知を巡って冒険することを愛するならば、逆にマタタビは一人であらゆるものを敵に回し奪いつくすことに享楽を得ているのだ。

タイプとしては、以前アインズが冒険者として対峙したエ・ランテルの墓地を襲った女戦士が一番近い。

とにかく根っこの性格が悪いのだ、こいつ。

元からそう言う性格だったというのもあるだろうが、多分この性質のルーツは九人の自殺点（ナインズ・オウン・ゴール）のプレイスタイルにもあるに違いない。

娘息子の居ないアインズでも流石にわかる。

このクランは読んで字のごとく、自殺上等の無謀なPKやら何やらを繰り返してユグドラシルで暴れまくった経緯がある。

9歳児、ましてや無駄にセンスの塊であった彼女はそれをスポンジの如く吸収して今に至っただろう。

アインズにとって未だ恩人たる たっち・みー だが、彼はとことん親としてだけは失敗しているらしかった。

「もしかしてマタタビさんが最終日のナザリックに侵入してきた理由って……」

「サプライズはついで。集大成ってところです。ユグドラシル非公式ラスボスたるあなたを倒すか、ギルド武器ぶっ壊すため

結局はタイムオーバーで私の負けでしたがね。アハハ」
「……なんてヤツだ」
敵に回すと恐ろしい、どころか既に敵に回していたのをやり過ごした後だったとは流石に思わなかった。
剥き出しの背筋がぶるると震える。
彼女は白い犬歯をきらめかせ、悪戯気に笑った。
「もし最終日まで全盛期の防衛力を維持し続けていなかったら、勝っていたのは私でした。
だからどうか、自分のことを誇ってください」
「励ましてるんですか、それ」
あまりにもマタタビの言葉が意外だったものだから、ささくれ立っていたアインズの喉骨は尖ったものを吐き出してしまう。
気難しい彼女は当然の様に眉間を寄せて、けれどその言葉はアインズには優しかった。
「どっちかっていうとムカついてるんです。

これでも私はユグドラシルで積み上げてきた全ての出会いと、技術と富と悪名とに誇りを持ってる。

だのに、その全部継ぎ足しても届かなかったアインズ様が今更、それを虚しかったと思われるとこっちが馬鹿にされてるのとおんなじですから」

マタタビはどこまでも本気だった。あるいは本気でなかったなら、ナザリック地下大墳墓最終層到達など成しえるはずもないのだから、それはアインズが一番理解できてしまう。

心の底からアインズの在り方を称賛し、惜しみ妬んでいる。

仕事が楽しいかは知らない。にしたって、優しい両親が健在なはずで、性格は度し難いがどこまでも無駄に才覚溢れる彼女が、だ。

「俺とあなたを一緒にするな」

その全てを注ぎ込んでやることが、たかがゲームのダンジョン攻略なのか。

ユグドラシルしかなかった己とは違うはずなのだ。

「一緒でしょ。現実に嫌気が刺して、ゲームもちょっと嫌いになりかけたころ、どこかの聖騎士に拾われた。何が違うの？」

「何がって……」

何もかも、色んな部分が違うだろう。

だがその原点だけはどうしようもなく同じだった。

「私はそこでユグドラシルの楽しみ方を教わって、あなたは一生モノの大事な思い出を手に入れた。

ゲームは凄いんだよ。私みたいな親不孝社会不適合者のクソガキでも、剣と技とで誰かと繋がることが出来る。

人生に何の価値も見いだせない瀕死のサラリーマンでも、生きることに悦びを見出すことが出来る。

ユグドラシルに出会えたことは、私達にとって凄く幸せなことなんだ。神にもアインズ様にも誰にでも、それを否定することは許されない」

聞く者によっては、現実逃避とか、本当の幸せを知らないのだとか言うかもしれない。

だが少なくとも彼女自身は本気なのだ。

そしてそれはアインズにとってどうしようもないくらい胸に染みる、福音だった。

鈴木悟の生涯の楽しみは、文字通りユグドラシルが全てだった。

その仮想世界には肺を穢す腐った空気も、仕事における理不尽な呵責や無茶ぶりもありはしない。

ただただ自由に気ままに、仲間たちと馬鹿をやって冒険をして遊び楽しむことが許された。

それはこの世にはこれ以上無いのだと思いたいくらいの、幸せであり救済だった。

時を経てギルドメンバーが殆どいなくなったことは、とてもとても寂しかったし悲しかった。けれど他のゲームに手を出してみようとは考えすらしなかった。

誰も帰ってくるはずの無い空っぽの地下墳墓。されど仲間たちと造り上げた美しい思い出の結晶は、クソったれな現実に傷ついた自分を最終日まで唯一慰めてくれたのだ。

家族でもなく、エロ本でもなく、アーベラージでもなく、仕事でもなく、アニメでもなく、漫画でもなく、メイド服でもなく、特撮ヒーローでもなく、ホラー映画でもなく、自然美でもなく、芸術でもない。

他ならぬユグドラシルが鈴木悟の生涯を照らしてくれたのは、彼女の言う通り紛

れもない事実だった。
「ねぇ、そうでしょ？」
「ええ」
マタタビは、あくまで一個人の自分本位でしかなかった内的行為を、内側から肯定する。
更に苛烈なる侵入者として、ナザリック地下大墳墓の健在に、外側からすら意味を与えた。
鈴木悟にとって、モモンガにとって、アインズにとって、それがどれだけ甘美なことか。そしてどれだけ惜しい事か。
「……なんで今更になって、そんなこと言ってくれるんですか。出来れば、この世界に来る前に聞きたかったです」
もし、もしもだ。
この世界の転移現象が起こらなかったとして、あの最終日が鈴木悟の全ての終わりだったとして、それでもマタタビの言葉があったなら、きっと自分は少なからず救われていただろうに。

腐った世界で次の４時起きを、それでも前を向いて生きて行こうと思えただろうに。
「あなたは本当にひどい人だ」
「返す言葉もございません。負けて、負けたと白状するのが恥ずかしかったから黙ってました。
それに色々めんどくさいし……」
そうしてマタタビは意味深気に、足元と天蓋を交互に見つめた。どこを見据えているのかは言うまでもない。
「けど、誰かさんらを見ていたら言わず仕舞いが馬鹿らしくなったよ」
「そうですか。その方々には礼を言っておきたいですね」
誰のことを言っているのかはわからない。心当たりが多すぎたから。
確実にわかるのは、この世界に来る前よりは、そして言うまでもなくユグドラシルを始める前よりは、マタタビの性格が多少穏やかに変わったことだ。
これまでのユグドラシルから連なる彼女の全ての出会いは、彼女を前に進めていた。

とてもすばらしいことなのだろう、とても、とても。
だけど、いやだからこそアインズは強く思う。

◆

マタタビは家族と共にいるべきだろうと、強く思う。
そのためならば、アインズは彼女に尽くし、世界にわがままを唱え続ける。

「ところで、このあいだユリから貰い受けた流れ星の指環（シューティングスター）を初めて使ってしらべたんですが」
「うん？」
「まず少なくともご両親の復活は、出来そうでしたよ。」
「……そっか！　ありがとう」
この異世界に於いて、超位魔法〈星に願い（ウィッシュ・アポン・ア・スター）を〉の効果は大きく強化されていた。

試しに使ってみた感触としては万能の力ではあるとは言えた。

もともとはランダム提示される複数の選択肢のなかから特定効果を選択し発動するというある程度限定された効果だったのだが、その選択行為すら省略され文字通り願うままの効果を発動できるように改変されていた。

ユグドラシルで実装したならバランスブレイク、どころではなくありえない。

けれど世界法則すら打ち壊す全能の力の【永劫の蛇の指環（ウロボロス）】などとは程遠いように思われる。

なので諸々の実験もかねてアインズが流れ星の指環（シューティングスター）で最初に願った内容は、『蘇生拒否した者の蘇生方法の解』とした。情報の取得という、未知と探求を尊ぶユグドラシルのクソ運営であれば、まず聞き届けない類の願いである。

これが叶うならヨシ、今後の探究活動へのコストを大幅に削減できる。

叶わないならそれはそれで、別の使い道を考える。アインズらの宿願にとってこれの存在は決して無駄にはならないはずだ。

はたしてどうなるか。

結果は『世界級の権能』という端的な答えだけがもたらされた。もう少し丁寧な

説明をくれても良かった気がするが、おおむね期待通りの予想通りである。

復活だけなら【熱素石（カロリックストーン）】などで出来そうだ。ルベドに使ってるのを解体しなくてはいけないが、必要経費だろう。

「そう、世界級の権能ね……」

「結局ご両親と妹さんの件はどうするつもりか決めましたか？」

「……どうするべきかは決めたよ。けど、その前にどうしてアインズ様が御節介を焼いてくれるのか、それを教えて欲しいですね。じゃなきゃ私は――」

「俺のことが関係ありますか？」

「ありますよ滅茶苦茶。教えてください」

そう言われると、正直詰まるところがあった。

なにせやる理由が多すぎて、やらない理由が無さ過ぎて何をどう話せばいいのかわからなかったから。

たっち・みー への恩返しとか、マタタビへの借り返しとか、セバスやＮＰＣの為とか。

鈴木悟と違って両親を切り捨てなかった佐々木桜が、結局両親を亡くした結果を

許せなかったからとか。
強がって意気地を張るマタタビがムカついたからとか。
マタタビの正論でコケにされた自分自身を、それでもマシな存在なのだと思いたいからとか
他にもあまりあるほど訳があった。しかるに全てを集約するとたった一言に限られる。
「俺の為です」
「理由になってないんだけど……いいや同情とかじゃなきゃ」
煮え切らない様子だったが「めんどくさいし」と煩雑を一蹴したマタタビは重い決断を告白した。

◇
◆
◇
以下回想

結局のところアインズは、マタタビの幸福実現に於いてどこまでも傲慢だった。

アインズを前には、死者の権利も、罪過による安寧も、世界間の障壁も、あらゆるものが無意味である。

立ちふさがるもの全てを踏み越えて、それでも尚越えられないならどこまでも割り切って迂回する。

全ては自分のため。ただの我儘。

先日ユリ・アルファより借り受けた やまいこ の忘れ形見の最後の一つ星を天に掲げ、アインズは高らかに宣言した。

「さぁ、指輪よ。私は願う。WISH。

佐々木ツバキ、非ユグドラシルプレイヤーたる彼女をこの世界に招く方法を示せ!!」

超位魔法が発動し、世界が頭脳と接続される多幸感に意識が侵され始める。

だが強固な自我は求めるべき解をひたむきに待ち受け、やがて流れるモノを貪った。

『器が不在　絶対不可能』

「そうか！　絶対不可能か！　勝手に連れてきた手前で実に勝手な理屈だな！」

気に食わぬ解を受け取り、怒気と共に接続を打ち切ったアインズは、地団太のように足裏を生みつけた。

「器が不在ということは、キャラアバターが存在しないからということだな

わかるぞ、絶対不可能というのなら、それは完全に用意できないモノなのだろう」

世界とつながったアインズは、その言葉のニュアンスを正しく理解できてしまっていた。しかし、「絶対」と但し書きしてくれることには感謝するべきだろう。器を用意できる可能性を想定して、無駄な時間や労力を費やすかもしれなかったのだから。

そうなるならば、アインズが為すことは決まり切っていた。

「やはり両親だけ復活させて、３人から妹の記憶だけを奪い去らねばならないようだ。なぁ、アルベドよ」

ここにはいないアルベドに、言い訳の様に声を掛けた。

もしマタタビが、未だ会ったことのない妹を気にせず両親だけを求めるならそれ

でも良いいのだ。　しかし、きっと完全な形の家族を求めるに違いない。
だがソレだけは間違いなく叶わない。叶わないとわかるなら、やはりマタタビは絶対に両親との再会を望まない。
ともすれば結局、アインズとマタタビは仲たがいする運命にあるようだ。
アインズは絶対に親子の再会をつくらねばならないから。
マタタビが下らぬ遠慮で家族の手を取らないというのなら、無理矢理に手錠をかけて繋ぎ止める。
埋めようもない空白を前に悲嘆に暮れようものなら、その空白の記憶すら奪いつくし無意味な嘆きを否定する
「とりもとうとしてくれたアルベドには申し訳ないな……」
できることならマタタビとは円満に話を進めたかった。それも今のアインズの本心だ。
しかし出来ないのなら、どうしようもない。
アルベドも、きっとわかってくれると思う。そのためにマタタビの【傾城傾国】の精神支配は、未だ解除されていないのだから。

「せめて、彼女の口から本意を聞こう」
それがせめてもの、アルベドへの誠意だと思いたかった。

回想終わり
◇◆◇

けれどマタタビが選んだ答えは、アインズの恣意と配慮を悉くすり抜けた。
精神支配を掛けられてるにもかかわらず、彼女の精神はどこまでも自由だった。
「しょげた父さんと母さん冥土から引っ張り上げて謝って、それから一緒に元の世界に戻って妹にも謝ります
やるとするなら、それ以外に無いです。もし嫌なら――」

それはアインズにとって、あまりに惨く酷い願望であった。それを頼むのが他ならぬアインズであることがより悍ましい。
アルベドが聞いたならばどう言うだろう、多分怒鳴りつけて叩きのめすのかもし

れない。
　もちろんマタタビは無茶を承知してたので、彼女からすればバツが悪くダメ元の様に言っただけだろうが。
「わかりました、是非ともあなたの力になります」
　気付けば即答していたアインズに、マタタビは心底驚いたように目を見開いていた。
「本当にいいの？　わたし今、とんでもないお願いを申し上げましたけど」
「二度も言いたくありません。力になります」
　棚ボタの様に与えられた、けれど間違いなく掴み取ったものである絶対的な富と力。
　普通なら心を縛られるはずである。ましてや元の世界は地獄なのに。
　けれど家族のために躊躇なく切り捨てる決断に、アインズは心の底から敬意と羨望と嫉妬を憶えた。
「変わったね、アインズ様」
「あなたに言われたくはない」

自分のことに無頓着な彼女の様子が心の底からおかしくて、アインズは思わず笑ってしまった。

オリ主１話の侵入目的について。

これは後々の展開のブレで修正できるよう複数案考えて、地の文もあやふやにしてました。

序盤は暫定的に『気軽なサプライズ』ってことにしてましたが、他にも、『ワンチャンでたっち・みーに会うため』とか『モモンガへの激重感情』とか『たっち・みーを家族から引き離したギルド武器が嫌いだったから』などの案もあり、それを主目的に修正できるように最低限の描写はしてました。

結局アインズ様（というか鈴木悟やモモンガ）の自己肯定に使えそうな根拠が必

要になったので、『純粋にユグドラシルを楽しむために』という案を選びました。
んでその最低限な描写が、１話の
『(モモンガさんもギルド武器も見つからないじゃない！あーもどうしてこうなったの!?)』
とか、PKや拠点破壊を楽しんでいた節のある言動などということになります
結果オリ主がカルマ値の高いクレマンティーヌに……
気に食わなかったら感想なり低評価なりくださいまし。
(もちろん逆でも嬉しいけど)

シャルティアのパッド

カタツムリ投稿でごめんなさい
ついつい、どうしてもキャラクターの心情描写で行き詰ってしまって……それでゲームに手が伸びて……
流石に2か月以上投稿間隔開けるわけにはいかないので１７００字くらいの小話を挟みます
時系列はカルネ村の直前……の回想です

マタタビの言い分ではないが、知るべきでない真実は存在する。
例えば、シャルティア・ブラッドフォールンの胸パッドの真相のことがそうである。
本来、造物主自ら手掛けて作られたシモベは、与えられた能力や己の姿に絶対の自信を持っている。

例えばアルベドの姉であるニグレドの顔は常に筋繊維を露にしていて痛々しいことこの上ないが本人は何とも思っていない。愛らしいペンギンの姿であるエクレアは自らの風貌を雄々しいバードマンだと思い込んでいるし、恐怖公はなぜ自分が周囲に恐れられるのかまるで理解していない。このような例は他にも枚挙にいとまがなくて、それはそれで良いことだとアルベドは思う。

ところがシャルティアだけは己のバストサイズにコンプレックスを抱いていた。完全武装時を除いて常時４～５重のシリコンパッドを挿入しサイズを大幅に誤魔化しているのである。だから彼女はナザリック内を移動する際は、最高位の転移魔法である〈異界門（ゲート）〉の使用を欠かさない。真っ平らすぎて激しく動くとパットがブラジャーごとどっかにいくからだ。

一体どのような経緯があって彼女がこのように想像されたのか。

この世界に転移して間もなく、カルネ村遠征の前日ぐらいだったか。気になったアルベドがマタタビに聞いてみたところ、かなり酷い理由が明かされた。

『あー確かあのエロ翼王、世間話で言ってたっけなぁ？

シャルティアさんの体系や顔や性格とかモロあいつの理想のお嫁さんとして作っ

たらしいんだけど、彼女のイラストを描いたメンバーが間違って巨乳にしたから辻馬合わせに『貧乳を恥じてパットを何枚も入れている』って設定したらしいですよ？』

行き違いというか事故のようなものらしいが、シャルティアからすればあんまりな話じゃないか。

望まれて、理想として作られたはずの己の姿を誇れないのはただでさえ悲劇だ。だのに、コンプレックス解消のためにその真相をシャルティアに語ることが更なる悲劇を呼び起こすのだから、まったく救いようがない。

『まぁアルベドさんが怒るのも無理ないですよね』

もしシャルティアに『ペロロンチーノ様は巨乳よりも貧乳の方が好きだった』などと知られて見ろ。

下手しなくても単純な彼女はペロロンチーノのことを恋慕するに決まっていて、永久に報われない片恋は地獄にも劣る悲劇だ。正直、アルベドがシャルティアの立場に立つことを考えるとただただ恐ろしくて仕方がない。

もっとも、別にこれがシャルティアとペロロンチーノに限ったことでは無いのと

いうのがこの話の、というかナザリックの一番悲しい部分である。
『だからさアルベドさん、少なくともエロ翼――　ペロロンチーノのことは殺さないであげてください。あいつ無害でいい奴なので』
当時のマタタビがこのアルベドに真相を語ったのは、つまりそういうこと。
もっとも、この時のアルベドからすれば一笑にも値しない理屈だったが。
『ペロロンチーノ様の最大の功績は、シャルティアを死体愛好（ネクロフェリア）にしたことね。
ほったらかした理想の乙女をアインズ様に寝取られるバードマンの姿は、さぞや見物なことでしょう』
『悪趣味ですね～彼に似て寂しがり屋なアルベドさんらしいけど』
『どういう意味かしら？』
『アルベドさん、シャルティアさんとはよくアインズ様の事取り合ってるけど、本気で彼女を排除するならそれこそ誑かしてエロ翼王に片恋させれば一発でしょ？
なのにそうしないってことは、アルベドさんがアインズ様の取り合いっこを楽しんでるっていうこと違う？』
『……邪推よ。ただ、ナザリックの支配者であられるお方が、一人しか妃を持てな

いというのは余りにも奇妙な話ですから。何ならマタタビあなたもいかが？』

『結構ですっ!!』

今思えば懐かしい一幕だ。

彼女の言う通り、なんだかんだアルベドはシャルティアとのやり取りを楽しんでいたし、同じ男を愛することへのシンパシーを心地よく思っていた。

そしてあの時からマタタビは食えない女で、どこまでも良く自分たちのことを見続けていた。

しかし、思う。

禁忌の秘密は墓場まで持って行くのが相場だが、それなら地下墳墓たるナザリックの秘密はどこへ抱えていくべきやらと。

ここは、ナザリック地下大墳墓は、きっとそんなものばかりが詰め込まれていて、それをギリギリのバランスで保っているのが他ならぬアインズ様なのだろう。

シャルティアのパッドの設定作った原作者様は人の心無いなって思いました

◆糞おまけ

ユグドラシル時代の一幕

マタタビ「ざぁこ！　エロゲーマニア！　姉ボイスで抜けない！　課金エフェクトクソセンス！　エロ翼王！」

ペロロンチーノ様「メスガキかな？　固有あだ名で罵倒してくるリアルロリも、これはこれで……

あ、そういえば聞いてよマタタビちゃん。ＮＰＣのシャルティアのことなんだけどさー」

ぶくぶく茶釜様「……お前すげぇよ」

たっち・みー様「（クソセンス？）」

情緒クラッシュ

アルベドは元々酒など嗜まない部類だった。別に飲めないというわけではないし、その楽しみを否定することもしない。

どちらかと言えば自分は紅茶の方が性に合ってる。けれどそれはそれとして、美酒の香りと味わいを楽しみながら、頭脳をアルコールに溶かしてもらって一時的にリフレッシュするのは素晴らしい嗜好なのだろう。

けれど自分には必要が無かったのだ、どんな美酒にも勝るアインズ様という愛しい存在に酔えたから。

かつてはあの方のことを考えるだけでアルベドの高度な頭脳は融けて流れ、腹の底がうずき心が潤ったものだ。きっと酒だろうが麻薬だろうが、愛の快楽を凌ぐことは不可能だろう。

もっとも今のアルベドは、そんな酔い方をすっかり忘れてしまっていたのだが。

マタタビの事、たっち・みー様の事、タブラ・スマラグディナのこと、ルベドの事、ニグレドの事、アインズ様の事、アルベド自身の事。

様々な憂慮がアルベドの精神を苛んできて、もはやアインズ様の肋骨数えでお気楽にトリップ出来ることは無くなった。

ならばいっそ本物の酒を飲みでもすれば少しは気が晴れるかと思いついて、9階層のバーに足を運んでみたのだが、やっぱりどうにもうまくいかない。アルコールが回る感覚はしっかりと憶えたが、理性も思考もさほど剥がれ落ちることは無く、リフレッシュも現実逃避もままならなかった。

「もう一杯、頂けるかしら」

バーテンを務めるマイニコドのピッキーに何度目かの頼んだ。しかし彼には冷や汗と共に引かれてしまったようだ。

「……どうぞ。これで5杯目ですね。これほど飲んでこうも平然と為されるとは。流石にこの量ならデミウルゴス様でも酔いつぶれますよ」

「潰れられるものならそうしたいのだけどね」

もちろん毒耐性は外してある。けれどまさか自分がこうも酒に強いとは思いもしなかった。

ピッキーからすれば強い酒をがぶがぶ飲んでつまらなそうに仏頂面をされるのだ

から、バーテンとしてたまったものでは無いのかもしれない。
そろそろ席を立つべきか悩み始めたところで、丁度入口から二人組の気配が現れた。
「いらっしゃいませコキュートス様、デミウルゴス様」
「やぁピッキー、それにアルベド。隣の席に失礼させてもらうよ」
「お構いなく」
そういえば二人は常連だったのだっけ。とはいえ、アインズ様から与えられた暇の時間が重なるのも、そしてここに３人の守護者が居合わせるのも不思議な偶然だ。
いや偶然というほどでもないかもしれない。
心情の表れなのか、デミウルゴスの鋭利なオールバックは、今日だけ心なしか濡れそぼって萎えているように見えた。
デミウルゴスは頼みなれたカクテルを、コキュートスはお湯割りの日本酒（そんなものがあるとは知らなかった）を頼んで席についた。
ピッキーがいそいそと準備する合間にデミウルゴスはアルベドはと向き直り頭を

下げた。

「世界征服の件、本当に済まなかった。私の早とちりのせいで、アインズ様とナザリックの皆に大きな混乱をもたらしてしまった。くどいようだが、改めてこの場で君に詫びを申し上げたい」

デミルウルゴスがこうして頭を下げるのはもう何度目になるだろうか。アインズ様が世界征服の至上命題をシモベ側の勘違いであると断じて以来、彼はずっとこのような調子だ。アルベドもコキュートスも、繰り返しの様にデミウルゴスを労わった。

「仕方がないわ。あんなに綺麗な夜空の下であんなことを言われたのだもの。勘違いをしてしまったのは私達も同じなのだし」

「ソウダゾ デミウルゴス。私モ同ジコトヲ言ワレテシマエバ、同ジヨウニ勘違イシテシマッタニ違イナイ」「そうだぞデミウルゴス。私も同じことを言われてしまえば、同じように勘違いしてしまったに違いない」

発端はこの世界に転移した直後にさかのぼる。

この世界に広がる満天の夜空を見上げながらアインズ様は「宝石箱のようだ」と、

そして「世界征服なんて面白いかもしれない」と発言なされた。御方は軽い冗談だったつもりなのに、それを傍で聞き届けたデミウルゴスは世界征服を至上命題と受け止めてしまい、アインズ様の改名式の後にそれをナザリック全体に周知。

その勘違いがつい先日、アインズ様の発言により解かれたことにより大混乱が舞い起こったという話である。

そもそもこれはシモベ全体の問題であるのだし、またゲヘナやスクロール事情で多大な功績を残した彼が凹む姿は悲しく痛々しい。慈悲深いアインズ様も気にし過ぎないように言い含めているが、デミウルゴスの人一倍強い責任感がかえって裏目に出てしまっていた。

「重ね重ね本当に……いや、ありがとう二人とも」

「こういうことは、私が誰より気にしなくてはいけないわね」

口頭の確認すらしていなかったのに、今まで暗黙の了解としてまかり通っていたのは末恐ろしい奇跡だ。

もちろん、今後はこのようなことは絶対に起こしてはいけない。組織図の欠陥の改善は内政官たるアルベドの使命である。

「……シカシ、何故アインズ様ハ今ニナッテ誤解ヲ解カレタノダロウカ」
「……しかし、何故アインズ様は今になって誤解を解かれたのだろうか」
　コキュートスの疑問に歯切れ悪くもデミウルゴスが答えた。
「一応あの時、世界征服そのものを取り下げた理由はわかるんだよ。佐々木家の件のために白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）との敵対材料をなくさなければならなかったから」
「ただわからないのは、どうしてアインズ様はシモベが勝手に盛り上がった世界征服をこれまで黙認していたのかということね」
　アインズ様がシモベの動向を把握していなかったという可能性も無いことは無い。酷い話だがこれまで一切口頭確認をしていなかったのだし。
　ただそれも内通できる立場にあるマタタビがいたのだから万が一もあり得ないだろう。
「それこそマタタビ……彼女なら何か知っているのでしょうけどね……」
「仲ガ良イノダロウ？　アルベドカラ理由ヲ聞クコトハ出来ナイノカ？」仲が良いのだろう？　アルベドから理由を聞くことは出来ないのか？
　コキュートスのもっともな疑問にアルベドは苦笑いした。

デミウルゴスが深みの籠った声で答える。

「無理だろうね。彼女が自分からワケを語らないということは、つまりそうするだけの理由があるということだ。

やること為すこと空回りで無駄ばかりだが、決して無意味なことをする人物ではないんだよ。

法国については擁護不能だが……白金の竜王のことも、アルベドの叛意のことも、これまでの彼女の隠し立てを鑑みれば理由はわかる」

マタタビの黙秘には往々にしてややこしい事情が付随している。

先日彼女が自白したスレイン法国との密通は……彼女自身のどうしようもないプライドが災いしたものだったが、それはともかく……

白金の全身鎧の真相を黙秘したのは、どうしようもないたっち・みー様の悲劇をナザリックに知られないためだった。

至高の存在の死という事実は、シモベによからぬ妄想と思想を与えることだろう。少なくとも一人、セバス・チャンは確実に生きる意味を見失い生きた屍になるに違いない。

死んだ目のセバスがマタタビにかしずく姿を思い浮かべる。それはマタタビもセバスもアインズ様も誰も報われない結果に違いない。

「……私もそれで命拾いしたものね」

マタタビがアルベドの抱くギルドメンバーへの憎悪をアインズ様に黙っていたのは、アインズ様の隠された御心、そしておそらくアルベド自身の命を慮ってのことだった。

もっというなら彼女がアルベドを見逃したのは、アルベドに流れ出たアインズ様自身の憎悪の感情を、アインズ様に否定させないためだったのだろう。だってそれは、自殺のようなものだから。そのためにアルベドはマタタビに生かされたのだ。

結局のところ、アインズ様は自分でそのことにお気づきになられ、アルベドの処断は無くなったのだが。

「ムウ、カノ御仁ニ無礼ナ言葉ダッタカ。撤回シヨウ」むう、かの御仁に無礼な言葉だったか。撤回しよう

「気にすることないわよ、彼女が大馬鹿者なのは事実だから」

「全くです。彼女の立場であれほどまでに状況を把握できていたなら、もっと根回

しややりようはあったはずだ。
早くにアインズ様に腹を割っていればスマートに全てを終えられたことでしょう」　それが出来る人物なら、そもそも家出などしないし両親が異世界で果てることもなかっただろうが
ただ少なくとも、愚かに口軽く吹聴してしまえば目を覆う混乱と悲劇が巻き起こっていたことは想像に難くない。それだけの分別があったというだけのことなのだ。

ふと、デミウルゴス、コキュートスとこのような話題を自然に語らっていることを鑑みて、ずいぶん遠くに来たとアルベドは思った。
アルベドが至高の存在を憎んでいたことは、もう守護者全員、アウラにもマーレにもシャルティアにもヴィクティムにも知れ渡っている。
守護者たちはアルベドの隠す全てを知っているわけではないが、それにしたって、今のアルベドの在り方がマタタビ以外に受け入れられるとはこれっぽかしも思っていなかった。

それこそアルベドは、彼女に大馬鹿などとは言えない気がする。
「私が他の至高の存在を殺そうと謀っていたことについて
アインズ様もそうだけど、あなた達に許されることは無いと思っていたわ」
「一切ハアインズ様ノ思シ召シ。私ノ心ハ玉座ノ間デ語ッタコトガ全テダ一切はアインズ様の思し召し。私の心は玉座の間で語ったことが全てだ　」
「コキュートスと同じだ。君の抱いていた真意について、もはや何も言わないよ。
もし君がウルベルト様や他の創造主を手に掛けていたなら、私は君を許さなかっただろう。
けれどアインズ様の寂寥と嘆きを一身に受け止めた存在が君なのだとしたら、それはとても尊いことだと私は思う」
「……そう、それはどうも」

未だにアルベドは、己の想いを周囲が受け入れ始めたことへの違和感に悩んでいた。
アルベドはかつて間違いなく至高の存在への憎しみを抱いていたし、その感情を

度外視しても合理的な理由から彼らへの殺意は変わらなかった。
でもその感情は自分一人だけのもので、パンドラズ・アクターや部外者のマタタビはともかく、他のシモベやアインズ様は絶対に許さないことだとも理解していた。
けれど、必要に迫られ全部打ち明けて見ればこの結果。とんだ喜劇、わけがわからない。わけがわからない。
堂々巡りしてループしはじめる思考を自認して、ようやく酒の酔いが回ってきたことを実感した。溜息を零す。

閑話休題。僅かにアルベドを一瞥して、コキュートスが「オオ、ソウダ」とわざとらしく切り替える。
世界征服におけるアインズ様の真意について、何か思いついたらしい。
「ワタシヲリザードマン集落ニ侵攻サセタ際ノヨウニ、失敗例ヲ体験サセ成長ヲ促ソウトシタノデハナイカ？」「私をリザードマン集落に侵攻させた際のように、失敗例を体験させ成長を促そうとしたのではないか？」
先日の湿地帯侵攻の情勢を思い出しながら、アルベドとデミウルゴスは顔を見合

わせる。
　コキュートスによるリザードマン侵攻計画。慈悲深く聡明なアインズ様は、個の武力を誇るコキュートスにあえて弱い軍勢を率いさせ失態を演じさせることにより、コキュートス自身に将としての成長を促させた。
「我々の思い込み癖を憂慮されていたということですか。ふむ」
　それと同じような要領で、ナザリックの組織欠陥を察し絶妙なタイミングで指摘することによって、ナザリックに啓発を促そうとしたのだろうか。仮にそうだったら結果的には上手くいっていると言えるだろう。
「……一応筋は通るのかしら？」
「それなら実に身に染みた。もう二度と、確認の取れないことを知った被る発言はしないように務めるよ」
「それがいいわね、ちょっと寂しいけれど」
　アインズ様の御心を瞬時に見抜いて他の守護者に説明してあげるいつものアレ
「デミウルゴス、説明してあげなさい」　は金輪際厳禁だ。
　アルベドとしてもあの流れはカッコよくて凄い好きだったが、九分九厘イケそう

な感じでも確証がなければちゃんとアインズ様から説明を願わなければなるまい。アインズ様にもそう言おう。１厘の誤差がとんでもない混乱を巻き起こすこともあるとわかったのだから。

「ヤハリスベテ、アインズ様ノ掌ナノダロウカ？」「やはりすべて、アインズ様の掌なのだろうか？」

「少し腑に落ちない気もするけど」

全て掌の上、果たして本当にそうだろうか。

コキュートスの考えはアルベドにはしっくりこなかった。

結果的に世界征服は中止されナザリックは組織として一歩改善に向かったが、それは偶々そうなっただけなのではないだろうか。

しかしそうなるとアインズ様は本当は何を考えておられるのか、対抗案が思い浮かばないのでアルベドは閉口した。

デミウルゴスはカクテルを半分グイと飲み込んで、わざとらしく酔い癖を気取りながら万感を込めて声を挙げた。

「ああしかし、かの夜空で「世界征服」の文言を耳にした時！　そしてそれを神

託気取りで玉座の間で延べ伝えた時の高揚ときたら！
　いくら過ちであったとのだと振り返れども、悪として己が意義を満たせる期待感は昨日のことのように忘れられない！」
「私モアノ時ハ、コノ世界ニ潜ムデアロウ未知ノ敵トノ戦イニ心躍ラセテイタナ」
私もあの時は、この世界に潜むであろう未知の敵との戦いに心躍らせていたね
「そうね、本当に」
　デミウルゴス、コキュートスとは趣向が違うが、アルベドも同じ気持ちだ。
　アインズ様の願いの下で、個性様々なシモベが一同に世界征服という目標に向かっていく一体感。あれがアルベドにはとても甘美なものだった。アルベドの記憶の中で最も輝かしい思い出の一つでもある。
　ただの勘違いでしかなかったのが、正直とても残念だ。
「……少し、話が変わるんだがいいかい？　おそらく今日、マタタビ様から興味深い話を聞かされてね」
　カクテルの残りを飲み込んだデミウルゴスは、空のグラスをそっとテーブルに置いて言った。

彼女から聞かされたという話、そしてデミウルゴスの悩ましい表情から、とんでもない話なのだろうと察してアルベドは身構えた。

「ナンダ、言ッテミロ」

「アインズ様が世界征服を否認されたことで少し悩んでね。どうしたらウルベルト様のような完璧な存在になれるのだろうかとマタタビ様に疑問を零したら……悪魔の様に盛大に大笑いされたんだ」

「酷い女ね、後で引っぱたいてやるわ」

「いやいいんだ。私が憤慨して理由を問い詰めたら、とんでもない話を聞かされてしまってね……」

そうだろうそうだろう、やっぱりとんでもない話なのだろう。

彼女の話は大概劇物で、だから常日頃から接する羽目になったアルベドの頭は痛くなる。

一体どんなことを聞かされたのかと憐れみマシマシで耳を立てると、それは想像の10割増しの劇物だった。

◇

『デミウルゴスさんは、ウルベルトの理想の姿の投影なんですよ。
強くて頭がよくて仲間想いで外には苛烈。私もあなた達のそういうところがとてもとても好きですよ』
『ウルベルトは元々、貧しい家に暮らすただの不幸な人間の子でした。両親はとてもヒトの善い方々だったそうで、最初は彼もそんな親が誇らしかったそうですよ。けれどそのせいで悪い権力者に殺されて、みなしごになって。その時彼は思ったそうです、本当に大事なモノを守るには、絶対悪として君臨しなければならないのだと』
『だから逆に、無造作にお人好しでトラブルを招くたっち・みーが嫌いだったそうですね。私も父の、警察仕事に構って母さん泣かせるあの人の、そういうところが嫌いでしたね。おかげで彼とはとても気が合いまして』
『だから彼はユグドラシルでヴァフォメットに転生して、『大災厄』としての力を悪辣に振る舞って暴れまわったそうな
そしてだからこそ己の『悪』の理想形として、デミウルゴスさんを生み出したんです。私は彼からそう聞きました』

『だからデミウルゴスさんがウルベルトを理想形として近づこうと試みるのは、彼にとっては的外れもいいところですよ』
『あいつの根っこは、悪に焦がれる心優しい小市民なんです』
『ちなみにウルベルトの一番好きな言葉はね『憧れは理解から最も遠い感情』なんだってさ』

◇

「話を聞かされた私は呆然として前後の記憶が途切れてしまい、気付いたら６階層にてコキュートスに拾われまして……」
「氷城ノ門ノ隅デ座リ込ンデイタカラ何事カト思ッテイタガ……ソンナコトガアッタノカ」氷城の門の隅で座り込んでいたから何事かと思っていたが……そんなことがあったのか
　どうやら彼の髪が濡れているのは、６階層の吹雪に当てられたのがそのままになっているだけだったようだ。

呆然として６階層の氷雪地帯に体育座りするデミウルゴスの姿を思い浮かべ、アルベドは吊り上がりそうな頬を強張らせつつ同情した。

しかし、だ。

憧れは理解から最も遠い感情とは、なるほど含蓄のある言葉である。

どんな気分だろうか、信仰していた造物主が、己の期待と真逆の存在だったと知ることは。それが圧倒的情報量と共に語られた時の衝撃は。

結局のところ勝手に憧れていた手前、デミウルゴスには失望など許されるわけもない。

己の創造主の正体が、脆弱だろうが悪逆だろうが善良だろうが矮小だろうが愚かだろうが人間であろうが、生みの親である以上は絶対の存在なのだから。

落差に伴った激情は矛先を見失い、滑稽な妄信を繰り広げていたデミウルゴス自身に回帰する。シモベとはそういう生き物だ。

「……」

少し飲み過ぎたのか、薄ら吐き気も憶えアルベドは口に手を添えた。嚥下するこ

とは無かった。
「世界征服のこともそうだが、どうやら私は思い込みが激しいらしい。
よく知りもせず勝手な憧れを抱くなどおこがましいにもほどがある。
ウルベルト様の忠臣を気取っておいて来歴すら知りもしないのだから、我ながら情けない」
「少し、気に病み過ぎよ。我々が至高の存在に対して無知なのは、その知識が無用であるからに他ならないわ
仮にマタタビの話が真実だったとしても、ウルベルト様にとって彼女のあなたへの入れ知恵は決して望むことでは無いでしょうよ。あなた自身が己の在り様を思い悩むくらいならね」
「君が、それを言うのかね？」
「……言葉の綾だわ。世界征服のこともそうだけど、悩み過ぎるなと言ってるの。仕方のないことなのだから。
それに、知れたならそれはそれでいいじゃない。光栄なことでしょう？
あなたがウルベルト様にとっての対極的理想の投影として生み出されたのなら、

為すべきは絶対悪に恥じない行い。それ以外ない筈よ」

アルベドはデミウルゴスに同情していたが、同時に少し妬いていた。

アルベドだってアインズ様の生涯の来歴などこれっぽかしも知らないのだから。なおタブラはどうでもいい。

「……無論だ。彼女からも言われたんだ

あえて私が目指すべき姿があるとするなら、ギルドとナザリックに全てを尽くし、その他一切を無頓着に蹂躙するアインズ様のことなのだと。あの方こそが最もウルベルト様にとって理想的な悪の姿そのものなのだと」

デミウルゴスの語るマタタビの言葉、それを聞いてアルベドは、ほんの少しだけ彼女のことを見直した。

そしてこの瞬間だけアルベドは、以前のように己が主の威光を前に恍惚として身を震わせた。

シモベどころかウルベルトの理想すら体現して、デミウルゴスの行く道を導かれるとは。

「アインズ・ウール・ゴウン様万歳、ね」
心の底から、アルベドは思った。
まさに誰にも勝る、理想的な支配者の姿そのものだ。
そう、理想。

理想？

「……っ」
アルベドの脳裏に電撃が奔り、グラスが手から零れ落ちて、中身のワインが赤黒い水たまりをカウンターにつくった。
そしてデミウルゴスが聞いたのであろう彼女の言葉が、アルベドの中でもリフレインされる。
『『憧れは理解から最も遠い感情』なんだってさ』

なるほどやはり、含蓄のある言葉だ。

・ウルベルト様はＢＬＥＡＣＨ知ってたら絶対藍染●右介好きだろうなって思ってます。

ピッキー（さっきからアンタラ何話してんの!?）

すいませんピッキーの存在完全に忘れてました。でもまぁストーリーに影響ないし、ヨシ！

◆補足　デミウルゴスさんの情緒崩壊　内訳

『デミウルゴスさんは、ウルベルトの理想の姿の投影なんですよ。

強くて頭がよくて仲間想いで外には苛烈。私もあなた達のそういうところがとて

もとても好きですよ』

↓そうなの!?　ウルベルト様の理想なんて畏れ多いいよぅ！

『ウルベルトは元々、貧しい家に暮らすただの不幸な人間の子でした。両親はとてもヒトの善い方々だったそうで、最初は彼もそんな親が誇らしかったそうですよ。けれどそのせいで悪い権力者に殺されて、みなしごになって。その時彼は思ったそうです、本当に大事なモノを守るには、絶対悪として君臨しなければならないのだと』

↓そうなの!?　てかウルベルト様ニンゲン!?　ニンゲンナンデ!?

ニンゲン蔑視いかんかった!?

『だから逆に、無造作にお人好しでトラブルを招くたっち・みーが嫌いだったそうですね。私も父の、警察仕事に構って母さん泣かせるあの人の、そういうところが嫌いでしたね。おかげで彼とはとても気が合いまして』

↓なるほど

『だから彼はユグドラシルでヴァフォメットに転生して、『大災厄』としての力を悪辣に振る舞って暴れまわったそうな

そしてだからこそ己の『悪』の理想形として、デミウルゴスさんを生み出したんです。私は彼からそう聞きました』

↓えー!?

『なのでデミウルゴスさんがウルベルトを理想形として近づこうと試みるのは、彼にとっては的外れもいいところですよ』

『あいつの根っこは、悪に焦がれる心優しい小市民なんです』

↓えー!?　うそでしょー!?

『ちなみにウルベルトの一番好きな言葉はね『憧れは理解から最も遠い感情』なんだってさ』

↓私がウルベルト様の何を知っていたというんだろうか……情けない。思い込み癖直そう

『あえてデミウルゴスさんが目指すべき姿があるとするなら、ギルドとナザリックに全てを尽くし、その他一切を無頓着に蹂躙するアインズ様のことです。彼こそが、ウルベルトの最も理想とする悪の姿なんですから』

↓あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！(崩壊した情緒にさすアイが染み渡る音)

◆オリ主の善悪感

大体セバス並み。種族がケット・シーになった影響で、ある程度の殺傷行為に忌避感は無い。ただ困ってる奴に縋られたらセバス並みの確率で助けてしまうお人好し。一応これが甘ったれた偽善であるという自覚はあるが、育ちが良すぎて自分でも直せないのでコンプレックス。そこだけは育ての親に似た。

逆にその辺の分別をしっかりわきまえるナザリックやアインズ様のことは尊敬してる。

仮に原作√になっての大虐殺や聖王国への所業を目の当たりにしても、身内第一主義によるものなので仕方ないよねって納得する。

絶対に敵対はしないがＳＵＮ値は削れる。メンタルケアしないと一人で勝手に自殺する……と思う。

法国の件は先日白状してアインズ様に盛大に怒られた。原作で例えると、シャルティアとセバスとルプスレギナの失態を足し合わせて割らない感じのやらかし。どこに出しても恥ずかしい立派な社会不適合者。

なお法国とニグンは首皮壱枚。

1215　隙間 2

嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い

今回はエクレアもペスも出しません。

【マタタビの至高の41人大百科】

No・12：あんころもっちもち

無類の動物好き。エクレアやペストーニャなどの作成したＮＰＣからもそのことは読み取れる。

世話の難しいペットを複数種飼育しているらしく、一匹でも死んでしまうと、翌日以降２週間も寝込んでしまうらしい。ここまでくると肉親に匹敵する情の強さと言えるだろう。

そんな彼女のペットに尽くす様子を思うと、果たしてどっちがご主人様なのかわ

からない。

◆◇◆

ウルベルト・アレイン・オードルが残した御言葉を戒訓にし、妄信を切り離してフラットにこれまでの出来事を思い返す。

ふと、主人は自分たちシモベのことを恐れていたのではないかという、そんな気がした。これは余りに信じがたく突飛な推測でしかない。

けれどアルベドにはしっくりと引っかかってしまう。根拠と言うほどではないが、小さいとっかかりはいくつも思い起こされる。

その中で特に強いのは、冒険者モモンとして共連れを着けずに外界へと繰り出されようとした時の事。

あの時のアルベドは主人の中に逃げ出したい子供のような幼い感情を読み取っていた。後に、冒険者モモンが世界征服計画の重要起点となることに気付いて、これ

を気のせいだと当時のアルベドは断じたのだが。しかし世界征服計画はアインズ様の一声であっさりと無に帰したわけで、ではアルベドの読み取った推察は本物だったのかもしれない。

何を恐れて逃げ出したかったのかと言えば、やはりシモベたちのことなのではないか。

御方がナザリックから逃げ出したいとするなら、よくよく考えてみればそれ以外に考えられない。シモベの精神構造上、思考から除外せざる得なかっただけで。

その根拠として、

『お前たちにとって私とはどのような人物だ』

この世界に転移した直後、６階層に守護者を集めた主人はこのように問質していた。

シモベにとって至高の存在が絶対者であることは、物理法則よりも上に来るレベルで常識だ。

しかしそれでも主人が問質したと言うことは、違う可能性も視野に入れていたのではないか。

あえて玉座の間ではなく６階層の闘技場に招集したということは、ひょっとすれば何らかの反逆と戦闘すら視野に入れていた可能性も考えられる。

己の常識が相手には是であるとは限らない。話さなければ何もわかり合えず、無駄に擦れ違い続けるだけだ。それはマタタビとの関りを経て嫌というほど思い知った。

何せ、何せ、アルベドが初めてアインズ様と言葉を交わしたのは、マタタビがオザリックに現れた直後であったのだから。

ノイズが奔る思考を掻き分けてアルベドは思索し続ける

仮にアインズ様がシモベを潜在的に恐れていたとしても、一方で慈悲深く愛してくださっていたことは確かだ。

主人はシモベ各々の個性を造物主の存在と共に是とし、可能な限りそれを尊重してくださっていた。また失敗すれど決して見捨てず、もたらす導きは常に前向きである。具体例は枚挙にいとまがないけれど、最たる例を挙げるなら、

武技使い蒐集に失敗した挙句未確認な敵対者に突進してしまったシャルティアを窘めつつも、アウラと共にマタタビから逃げ延びたことは称賛したこと。

王国ではツアレにまつわるセバスの報告不足を処断したが、その善性と行いそのものは否定しなかったこと。

リザードマン侵攻計画など、コキュートスには織り込み済みで失敗させ学習する機会を与えたくらいだ。

以上のことからアインズ様の中には、シモベに対する恐怖心と個性を重んじる深い慈愛、相反する二つの感情が同居していると思われる。そして世界征服計画の黙認という事例。これらの要素を考察して行くと信じがたい推察が成り立ってしまう。

アインズ様は、シモベの一方的な期待に応えるために、冗談だった筈の世界征服を実現しようとしていたのではないか

まるで、サンタクロースを信じる無邪気な子供の寝床にプレゼントを仕込むかのように。

そして推察に伴って、これの最悪な類似例が脳裏に過った。

アルベドは知っている、似たような虚勢を張る賢者のことを。

リ・エスティーゼ王国の王女、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイゼルフだ。

◇

彼女は空虚な人間だった。

王女という人間の中での最上の地位、あらゆるものが賛美する美貌、そして何より人智を超越した類稀なる叡智。

多くのモノを生まれ持った彼女はけれど孤独だった。

余りあるほどの明晰な頭脳は不幸を招いたのだ。

IQが20違うとその人と会話が成立しなくなると言う通説がある。彼女の場合、特にそれが顕著だった。

彼女の思考思想は常人にはただただ異質で不気味だったし、常人の常識は彼女にとって愚かで理解しがたかった。

なので周囲は訳の分からない戯言を宣う彼女を気味悪がって敬遠し、また愚かな猿に囲まれた彼女は周囲を悉く拒絶した。

それでも尚、異形の精神を生まれ持ったラナーですら社会的生物という枠組みは

越えられない。力のままに唯我独尊に生きられる竜種のようにはいかないのだ。

過ぎた叡智を宿しただけの少女は、尋常ならざる孤独感に苛まれてその精神を徐々に歪めてしまっていた。そしては儚げな美貌に虚ろな瞳を宿す少女の姿を、周囲は一層に気味悪がる悪循環。

それを救ったのが、クライムという少年の純真な憧憬であった。

彼は、虚ろ気な瞳の不気味な少女を見てこう言った、

『太陽のようだ』と。

果たしてどういう気違いがあったのかは彼のみぞ知るところ。何かの勘違いだったのかもしれないし、あるいはこの時の不気味な少女こそ彼にとっては何より美しい太陽だったのかもしれない。

何にせよ、ラナーがこのように羨望を向けられるのは生まれてかつてない事。未知のものへの強い恐怖を抱いたはずである。

けれど他ならぬ彼の羨望によって、ラナーは社会的欲求であるところの承認欲求を生まれて初めて獲得した。

この時ラナーはクライムの為だけに、クライムの為だけの『太陽のよう』な王女

を目指すことを決めたわけだ。

クライムの為に、愛らしい人間の表情を憶えた。クライムの為に、理解できない愚者共への理解を拡張させた。クライムの為に、民を想う慈悲深いお姫様のフリをした。

全てはクライムの憧憬と期待を満たすため。そのためにラナーは己の全てを塗り替えたのである。

愛は人を変えるとはよく言ったものだ。厳密には、人に変わったと言うべきだろうが。どの道虚構に過ぎないが。

◇

アルベドは話に聞くラナーの素性から、彼女とは仲良くなれそうだと思っていた。けれど仮にアインズ様が彼女と同類だったなら、アルベドがクライムという少年の立場だったとしたら、それほど悲しいことは無い。

マタタビと接する時の、青年のような声をするアインズ様こそが真の姿で、支配

者としての威厳のある一切の振る舞いがシモベの為に象られた虚構なのだとしたら、

だとしたらアルベドは――

◆◇◆

あくる日、パンドラズ・アクターはエ・ランテルにてアインズ様より引き継いで、モモンとしてナーベラルと共に冒険者として繰り出していた。

このところ訳あってアインズ様はお忙しく、パンドラズ・アクターが代理を務める機会が非常に多いのだ。マタタビ絡みと、そうでないのと一件ずつで面倒な事案を解決せねばならないから。

今回は珍しく指名依頼が早く済み時刻も正午に差し掛かったので、拠点である組合の一室に戻り主人に厳命された休憩を取っていた。

ナーベ装うプレアデスのナーベラルは、一般メイドが常用するのと酷似した棒状

の甘味栄養食を頬張りながらベッドの上に腰かけていた。モモンの中身がアインズ様であったならあり得ないくつろぎ方だが、パンドラズ・アクター相手に気を緩めても咎められる謂れは無いだろう。

「一つ、聞いても良いでしょうか」

一本丸々食べ切ったナーベラルは一息ついて、窓際の椅子に腰かけるパンドラズ・アクターに尋ねた。

さっぱりした甘い香りが仄かに自分の鼻腔をくすぐる。

「パンドラズ・アクター様はマタタビ……さまに、恋慕の情を抱いておられるのでしょうか？」

あまりに藪から棒過ぎて、パンドラズ・アクターは椅子から滑り落ちそうになった。

「……一体何がどうなって、その発想に至るのですか」

「何がも何も、先日『蒼の薔薇』と面会した際やその道中、彼女と大変親し気に話

されていたようなので。よもやと思いまして」
「聞かなかったこととしましょう。お気をつけなさい、彼女に聞かれれば殺されますよ」
マタタビは見当違いの色恋話を極度に嫌う。自分がまきこまれるような話は特にである。
好奇心でネコに殺されるなど笑えない冗談だろう。もちろん彼女は癇癪で殺しはしないので冗談には違いないが。
「失礼しました。よもやここにあの方が耳を澄ますことは無いでしょうが。しかし、冒険者間での他人の詮索はご法度、でしたね」
とってつけた言い回しでナーベラルは悪戯気に微笑んだ。パンドラズアクターはこれに無性に腹が立つ。
二人チームの間に詮索も何もあったものでは無いし、御法度になるプライバシーとは基本色恋沙汰しかありえない。
つまりここでパンドラズ・アクターが黙りこくれば、そういうことだと認めたようなものになる。

「まったく、あなたという方は」
ナーベラルはニンゲンに対しては一律に見下して不器用にしか立ち回れないが、同僚には割と冗談も言う人物だ。
普段からこうなら、アインズ様も自分もずいぶん楽が出来るのだが。
しかしこれでも最初期よりはマシになっているらしい。
ならマタタビよりは数百倍マシであると考え、パンドラズ・アクターはひとまず心を落ち着けた。
「あなたが期待するような関係ではありませんよ？　それならお聞かせご覧にいれましょう、私がどれだけあの方を嫌悪しているかを！」
ありのままに全て話して興味を失ってくれるのが一番良いだろう。
そう思ってパンドラズ・アクターは、マタタビと己の関係を思い起こした。

◆

パンドラズ・アクターはマタタビのことが嫌いである。

何をどう嫌いなのかという意識以前に、まず魂に刻み込まれた原初の階層意識レベルから彼女のことが嫌いである。彼女のことを思い浮かべるだけで、パンドラズ・アクターの大脳新皮質には蕁麻疹が広がって、尋常じゃない虫唾が奔るのだ。

理由はさっぱりわからない。デミウルゴスとセバスの仲が異様に悪いのと同じぐらい、深淵な謎に包まれている。このことについてはマタタビ曰く、創造主の思想や関係性が影響しているのではとの推察であるが、眉唾もいいところだろう。

何せマタタビ曰くたっち・みー様とウルベルト・アレイン・オードル様の仲は良かったらしいのだから。

そしてパンドラズ・アクターの目から見てアインズ様とマタタビは互いを酷く敬愛してる。溺愛とも言っていい。二人は溺れるように、互いの在り方と生き様を敬い愛し合っている。異性愛とは全く異なる関係であるが、守護者統括アルベドが勘違いして自信を喪失するほどには強固な繋がりだ。

そしてアルベドがそうであるように、主人の心の大部分に居座るマタタビの存在が妬ましい。だからパンドラズ・アクターはマタタビのことが嫌いである。

同じようにマタタビの主人への敬意が嫌いである。ナザリックのシモベの誰より

もアインズ様を精神を尊敬している、重い感情が嫌いである。己を含め他のシモベの盲目的な忠誠が一気に安っぽくなってしまうから。

パンドラズ・アクターの中でこのような小さな嫌悪は本当に枚挙にいとまがない。数えればキリがなく、そして彼女の新たな一面を知るたびに無駄に増幅されていくのだ。

マタタビの戦い方が嫌いである。至高の御方々の奥義を我流で極めた手広い御業。それを体一つで実用的に振る舞う姿は、パンドラズ・アクターが主人より与えられた変身応力をあざ笑うかのようだ。恩人だなどと宣ってはパンドラズ・アクターを『割と凄い』と称賛する様など、輪を掛けて憎らしい嫌味でしかない。

マタタビの武器財宝が嫌いである。ナザリックの宝物殿を至上と信じ切っていたのに、これ見よがしと潤沢な盗掘品や武器を見せつけられては価値観が揺るぎかねない。精神支配騒動の直後にアイテム全部を宝物殿に仮置きした際なんか、見聞調査の為に寝食すらままならない羽目になった。

マタタビの性悪な喋り方が嫌いである。捻くれた子供のようでいて、恐ろしいほど正確にこちらの心を慮る、うざい温もりのある喋り方が嫌いである。

マタタビの身勝手な気遣いが嫌いである。己は一人でに抱え込むかと思えば、アルベドが暴発しないようアインズ様の隠した秘密の一部を開示するような無神経さが嫌いである。

マタタビの信頼が嫌いである。本人は誰よりも信用ならない人物なのに、「アインズ様に不利益になるような真似はしないだろう」などと宣う無駄に重すぎる信頼が鬱陶しい。自分が精神支配されてることなど気付きもしないのだから、その能天気さには呆れかえる他にない。

マタタビの自立心が嫌いである。偉大な父より生まれながら、されど己の考えを突き通し家出すらしてしまった強固な精神が嫌いである。アインズ様に付き従おうとする忠実な己を、揺さぶろうとしてくる在り方が嫌いである。裏切った己をアルベドと一括して『愛の奇跡』だなどと揶揄した時には眩暈がした。

マタタビの弱さが嫌いである。感情本意で無鉄砲で、ついつい足元がおろそかになる弱さが嫌いである。眼を離せば何を起こすかわからない危うさが、パンドラズ・アクターにアインズ様を裏切らせたと言っても過言ではない。アインズ様に被害が被っては困りものというだけで、本人の安全は次点でしかないのだが。

マタタビの――

◆

「あっはい、もう結構です。十二分に理解できました」

まったく何もわかっていなさそうなツラだった。

己の感情に整理がつかない者を生暖かくも蔑むような視線。心の底から鬱陶しい。

わからず屋には閉口するしかないだろう、所詮誰しも自分の信じたいことしか信じられないのだから。

「しかしあなたが彼女に興味を持つとは意外です」

「一応彼女は同士なので。アルベド様をアインズ様の妃に推す会の」

「はぁ」

「ついでに個人的な都合を述べさせていただければ、あなたがマタタビを口説いていただければとても都合が良いのですよ

そうすれば、アルベド様の誤解は完膚なきまでに消滅し、アインズ様へのアプ

ローチも再び積極的になられるでしょうから」
「馬鹿々々しい」
ナーベラルは根本的な部分をはき違えている。
アルベドがアインズ様へのアプローチを自粛した理由に、勘違いはそこまで関係ない。
彼女が絶望したのはマタタビと比べた自身のアインズ様への理解度の差であり、心の距離の差なのだから。
アインズ様が胸襟を開くか、アルベドが己で理解し踏み込んでいくかしか解消する術はないのだ。

その点パンドラズ・アクターは知っていた。マタタビと同じように知っていた。
造物主であるアインズ・ウール・ゴウンの本質が受け身的な演技者であることを。
知った上で見ないふりをすることに決めたのだ。
きっかけはこの世界に転移してから初めてアインズ様が宝物庫に訪れた時だ。
主人に訊ねられマタタビの姿に変身したパンドラズ・アクターに対し、デミウル

ゴスとプレアデスの二人は強い敵意を浴びせかけた。彼女が精神支配に掛けられ反旗を翻した事情があるにせよ、それはそれとしてパンドラズ・アクターは腹を立てた。

けれど本人たちにそれを口にすることはしなかった。激しい怒りを覚えながらも、仕方なしと平然として注意を促すだけに留めた主人の姿を見たからだ。

憐れむのは不敬であろう。器でないにもかかわらず、残された最後の主人として41人に向けられるべき忠誠心をたった一人で背負われるアインズ様はなにより偉大に思われた。それこそ、フィクションである完全無欠の絶対支配者などとは比べるべくもないくらい。

寂しく悲しいことには違いないが、時に矜持は幸福よりも重たいのだ。何せ矜持を捨てるのは時に何より不幸だから。

故に主人はシモベに己が受け入れられる安楽よりも、ナザリックの絶対支配者として君臨することへの誇りを選び取った。

口を挟むのは無粋であり、パンドラズ・アクターに許されるのは密かにその御心を誇りに思うことだけ。口の軽いマタタビすらも、口を挟むにせよ虚構を剥すよう

な横槍はだけは決して入れなかったのだから。

アルベドがどう思うかはわからないが。

◇

マジックアイテムフェチでありマジックアイテムに関することだけでご飯が食べれるという設定を持っているという点。また、仲間大好きモモンガ様のＮＰＣでかつドッペルゲンガーの能力上、ギルドメンバーの技能をリスペクトしてるだろうという点。偉大な父を持ちながら裏切ってしまう苦悩を共有できる存在。

以上の３つのことから考えれば、パンドラズ・アクターさんにとってのオリ主は、シャルティアさんにとってのアインズ様みたいなもんじゃないかと考察しました。

ここに加えて、モモンガ様因子によるマタタビアレルギーと、オリ主自身の性格や境遇などの要素が加わり、手が付けられないくらい情緒を拗らせてしまったという寸法です。

なおオリ主視点だと『読心感知』でもひたすら嫌悪しか感じないので、詳しい情緒は知らないまま「めっちゃ嫌われてるな」って思ってます。

よくよく考えたら元はアインズ様の為ではあるとはいえ、オリ主を精神支配して創造主の意向を背くってＮＰＣ的にかなり常軌を逸してる気がする。

解釈違いだったらまんべんなく意見ください。低評価ぽちってくださっても嬉しいです。

1236　嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い

状況証拠

【マタタビの至高の41人大百科】
No・13：ベルリバー
魔法戦士タイプの器用貧乏で一級戦には一歩譲るが、総合的なプレイヤースキルは非常に高く特にサポート力には秀でている。モモンガに匹敵するほど慎重派で、リスクとリターンを天秤にかけたらリスクを重視するタイプ。でも浪漫に押されるとすごく弱い。
公安警察所属であるたっち・みーの推測では、言動からして彼の本職は産業スパイとのことだ。
タブラ・スマラグディナが「最強のゴーレムを作りたい」と声を挙げたところ、

開発中だった最新兵器のAIデータを盗み取ってこっそり譲渡したことがあった。賢い馬鹿。

多分彼は碌な死に方しないと思う。もし死んでたら、心よりご冥福を申し上げる。

◆◇◆

「アルベドも、マタタビさんもどうかしている」

八階層の曇り夜空を仰ぎ見ながら、アインズは己の頭蓋を両手に抱えて情けなく唸りこくる。

マタタビは、ある意味アインズの期待通りに、容赦なく言葉の刃で突き刺した。

「あなたがタブラ・スマラグディナの何を知ってるというのですか？」

「……仲間として一緒にいて楽しかった。それだけですよ」

アインズの正常性バイアスは、ありありと展開される状況証拠たちを意識の外側に絡めとり、追い出そうと躍起だった。

理解ができなかった、したくなかった。

追いつかなかった、たどり着くのが怖かった。

それでも現実は変えようも無くて、敢えて認識を歪められるほどアインズの精神

は頑固でも軟弱でもなかった。
あるいは少し前のアインズだったなら頑固に軟弱に、その現実を受け入れることはできなかったかもしれない。そんな気もした。

事の次第はゲヘナ作戦終了日にさかのぼる。
『ニグレドに叛意の意志あり。ある人物が水面下で関与を行ってる可能性が極めて高い』
これは玉座の間にてアルベドがマタタビに託し、そしてアインズの手に渡ったメモ帳の最初の一文だ

先日アルベドがアインズに提唱した最悪の事態、それはニグレドの謀反のことだった。
とっかかりは、アルベドの姉であるニグレドの不自然な言動だったという。
アルベドがコキュートスによって5階層に幽閉された際、心配したニグレドが〈伝言（メッセージ）〉で連絡をとったのだが、それだけ切り抜けば妹想いな素敵な姉だという話

でしか無い。

だが、そもそもニグレドは領域守護者である。文字通り領域の守護を司り閉じこもった存在が、どうしてアルベドが幽閉されたという事実を察知したのだろうか。

ニグレドはアルベドに連絡した際、『氷結牢獄の感知結界に引っかかった』と言っていた。

それはおかしいのだ。確かにニグレドは氷結牢獄の領域守護者としてその場の守護を司っているが、丸一日中氷結牢獄を情報魔法で警戒するのはMP量などを考えてもコスパが悪すぎる。当然そのような指示はアインズもアルベドも誰一人指示したわけではなく、彼女による独断だ。

ましてやアルベドの幽閉はゲヘナ作戦中に行われたのだ。当時ニグレドには、ゲヘナ作戦中の王都リ・エスティーゼの監視も任されていた。

なのにそれと同時展開で氷結牢獄の感知結界も維持したままというのは、あまりに常軌を逸した状態だ。

まるで誰かに襲われる可能性を危惧しているかのような、執拗なまでの警戒感。そんなものを感じてしまう。

『あなたが失敗なんてするとは思えないもの。どうせまた、あのマタタビって女のことでしょ？

……前の謀反騒動のこともあったし心配だから時々感知魔法で追ってるんだけど、あの女ほんとに用心深過ぎて滅多に居場所を捉えられないの

難しいでしょうけど、本当にあの女にだけは気を付けるのよ？　こんな異世界じゃあ何が起きるか分かったもんじゃないのだし』

そしてニグレドはマタタビへの異様なまでの敵愾心を見せる言葉をはいていた。これもまた不可解だ。

もちろんマタタビへの監視など、アルベドもアインズも指示していない。

「てっきりアインズ様が頼んでるのかと思ってましたけど。違ったんですね」

当のマタタビはこの通りだ。変なところで意識レベルが鈍いから、ほとんど気にも留めていなかったらしい。

そして厳密に言えば、マタタビがニグレドから探りを入れられ始めたのは、精神支配騒動の直後ではないらしいのだ。

それは時期的に言えば丁度ぴったり、アインズがカッツェ平野の深部でパーミリオンという元ＮＰＣのエルダーリッチと遭遇した日と同じだった。

その日ニグレドにはカッツェ平野の監視を頼んでいた。アルベドとマタタビの推測が正しければ氷結牢獄の感知結界もその日から始まったことになる。

以上から考えられる最も可能性の高い事象。

それはニグレドの創造主であるタブラ・スマラグディナが、元々カッツェ平野の深部に潜伏していたのではないかということだ。

一早く感知したニグレドが、先んじて彼に〈伝言（メッセージ）〉で接触。

その際タブラは己の存在を一切秘匿する旨と、マタタビを要警戒するように指示したのではないか。

この推測が正しくタブラがもし潜伏していたとするなら、その様子は決してナザリックとマタタビに対して好意的とはいいがたい。

ならば、カッツェ平野へ直接接触を行う前に行うべきことがまずあった。

第八階層に封印してあるナザリック最強の起動兵器ルベドの確認である。

こうして今日、アインズがマタタビとともに八階層に訪れたのはお喋りをするためではなく、このためであった。

アインズがいつでも八階層のあれらを準備できる体制を整え、そしてマタタビが隠形によって気付かれるギリギリまで接近した結果、ルベドはすでに起動されており戦闘態勢を整えていたことが明らかになった。

ルベドの指揮系統AIの最上位に位置する存在、それはもちろん制作者であるタブラに他ならない。先んじて直接別の指揮系統から起動しない限り、彼が〈伝言（メッセージ）〉で一言掛けるだけでルベドは簡単に遠隔操作ができる仕組みになっている。

最早、アインズ側が権限によって操作できる状態ではなくなっているのだ。

ここまで状況証拠がそろってしまえば、いくらアインズと言えどもタブラ・スマラグディナの叛意を否定しきることは困難だった。

「これがアルベドの言っていた……最悪の事態か」

「玉座の間で、文字通り玉砕覚悟で私たち二人の仲を取り持とうとしたのは、このことを伝えるためでしたか。

流石はアルベドさん、敵わないなぁ」

「二人にとって……いや、マタタビさんにとってタブラさんは一体何なんだ？どうしてどうしてこんな現実を受け入れることができる」

「タブラ……あいつは、なんというかすごく頭が可哀そうな人ですね。えっと、馬鹿って意味じゃないですよ？

社会的欲求の代わりに悪辣な意志を持って生まれてきてしまった……みたいな

ニグレドさんの様子からして、多分ナザリックやアインズ様じゃなくて私のことが邪魔なんじゃないでしょうか。

曲がりなりにもナザリックに庇護下にいる私を殺そうとするなら、彼にとってはそうするだけの理由があるんでしょうよ。

無抵抗でいる気はさらさらありませんけれど、会って話ぐらいはしたいもんですね」

ひどくふわっとした言い方で、アインズには心底理解しがたい割り切りだった。

マタタビの見えてる世界はアインズとはきっと全く異なっていて、当然その思想や哲学もアインズ自身とは相いれない。

アインズにとってタブラ・スマラグディナは、どこまで行っても愛おしいかつてのゲーム仲間でしかなかったから。

敵対するかもしれないという可能性を容易に納得するマタタビへの理解は欠片ほどもままならなかった。

「……なら、アルベドはどうしてなんだ？　俺が横槍を入れたとはいえ、曲がりなりにも創造主だろうに。どうしてたったあれだけのニグレドの言動から、この結論を導き出せたというんだ？」

設定として与えられたナザリック最高の叡智がなせた御業だと、そう強引に納得するべきか。

いや、違うだろう。例えばニグレドの言動を知ったのがデミウルゴスやパンドラズ・アクターであったとして、彼らがその不可解さを気に留めたとして、それを即

座にタブラ・スマラグディナの存在へと結論付けるとは思えなかった。
それこそ『傾城傾国』のような精神支配系の権能だったり、偽情報をつかまされていたりなどの別の可能性だって十分考えられることなのだから。

「俺がタブラさんたちを、ギルドメンバーを憎んでいたからか？　だから俺が設定改変をしたアルベドは、そのとっかかりをギルドメンバーの敵意だと納得したのだろうか」

ともすれば、それはひどく胸糞と始末に悪い話だと思う。
本来タブラが受け取るはずだった愛と好意をアインズが掠め取って、創造主へ矛を構えさせる真似をしてしまったのだから。
そしてその結果として、繋がるはずのなかったアインズの首皮は繋がった。
ニグレドとルベドの敵対と、タブラの存在をこのタイミングで察知できてしまったのだ。

「馬鹿な自虐はやめることですよ。アインズ様が自覚もしなかった程度の矮小な逆恨みで、守護者統括であるアルベドさんがギルドメンバーを手に掛けようとしたとでも？」

まるで自分が馬鹿にされたことのように、マタタビはアインズに憤慨した。

彼女がこうまで言うのなら、また何か別の要因がるのだろうか。

僅かばかりも考えが及ばず、アインズは安易にマタタビに伺ってしまった。

「じゃあ何故アルベドは――」

「――私に聞くなですよ」

マタタビはアインズをきつく窘めてから「そりゃ理由は知ってますけどね」と続けてすっかり閉口してしまった。

アインズは面食らいながらも軽率な質問に反省した。

「すいません、馬鹿なことを聞きました。本人に聞くべきですよねこういうことは」

先日以来、未だアインズはアルベドと腹を割って話す機会を設けていなかった。

彼女の存在に、気後れを憶える己がいるためだ。

『この世界はひたすら未知にあふれています。一歩踏み誤れば全てを失うこととな

りましょう』

カッツェ平野できつく言われた忠言を思い出し、苦虫を噛み締めた気分になる。

転移直後のマタタビへの扱いや、世界級アイテムの存在を失念していたことへの失態、そしてマタタビとの喧嘩を仲裁されたことや、タブラ・スマラグディナのこと。

この世界に訪れてから起きてきた様々な事柄のケアされてきたことを思い出すと、なかなか頭が上がらなかった。

「ねぇ、まさかですけど……アインズ様まさか、アルベドさんの事を怖いとか思ってないよね？」

「……」

「えぇ？　そうなんですか？」

図星で沈黙したアインズを見て、信じられないというようにマタタビは口を開けて唖然とした。

◆

「情けない」とか「馬鹿じゃないの」とか、どうせまた罵倒が飛んでくるだろう。アインズはそう思って心の中で身構えた。

あるいは、ほぼイエスマンばかりのナザリックの中で、真摯に己へ注意を促す彼女の存在を待ち望んでいた節すらあったかもしれない。

だが期待の反応は帰って来ず、見るとマタタビは困ったような複雑な表情で腕を組んでいた。

少なくともアインズを咎めるようなニュアンスは、その様子からは全く感じられなかった。

「……そうですね、ではここで一つ私にも懺悔をさせてください。」

「いや、今ここでですか!?」

何の脈絡もなく唐突に、重苦しい会話の流れをぶった切ってから、マタタビは急

に土下座をした。
ユグドラシル最高峰の速力でもって、全力で荒野の上に頭突きをかまし、全霊を持って地に伏せたのである。
唖然としたアインズに構わず、マタタビは自分勝手に声を張り上げ、盛大に大げさに懺悔を言い放った。

「アインズ様、本当にごめんなさい。私、本当はシャルティアさんを襲った連中がスレイン法国の回し者だって知ってたんです。
知ってて黙って、さらに捕虜だったニグンに監視をつけて本国に送還して、バレない様に隠蔽しようとしてました」
「えぇ!?」
それはいかにもマタタビらしい聞くに堪えない凄まじい内容であった。アインズの中のマタタビへの期待値は地下深くよりはるか底を貫き、マントルにまで沈んで怒りと共に燃焼した。何度も何度も失望の下限突破を繰り返したはずであったのに、マタタビの性格難はとどまるところを知らなかったらしい。

ほんの一瞬話してくれただけ成長したなとか思ったが、改めて内容を吟味するとやっぱりそれどころではない。

本当に何をやっているのだこの人は。何がしたいのだこの人は。

あれのせいでシャルティアもアウラも死にかけて、アインズは骨を折り何よりマタタビ自身が深く傷ついたはずである。

そんな敵に懇切丁寧に情報を送り届けて、ナザリックから隠し通そうと企てるなどどうかしている。それこそ未だに精神支配されてるとしか思えない挙動である。

「だってアインズ様、事の発端がスレイン法国だって知ったら、全霊を持って完膚なきまでに叩き潰すでしょ？　国民一人残らず徹底的に苛め尽くして大虐殺でしょ？」

「当たり前ですが？」

すぐさまアインズはスレイン法国への報復に思慮を巡らせた。その気になれば国の一つぐらい、アインズ固有の超位魔法〈黙示録の蝗害（ディザスター・オブ・アバドンズローカスト）〉を一発放てば簡

単に滅ぼすことができるだろう。

だがそれではつまらない。

スレイン法国に大いなる悪意があったか、それとも不運な玉突き事故だったのかはこの際全く関係ない。

我が子のような宝物であるシャルティアとアウラを傷つける原因をつくり、アインズにマタタビと戦わせ、マタタビ自身に多大なるトラウマを残したのだから。

その報いは過剰なる報復によってでしか濯ぐことは許されないのだ。

確かそう、スレイン法国は人類至上主義を掲げており、近隣諸国への食人系亜人国家からの侵略を一手でになって、『人類の守護』に努めているのだったか。

ならばあえてスレイン法国の軍事力だけを無傷のままで無力化し、民を守るはずであった国家首脳や軍人に、民がビーストマンに踊り食いされてるところを見せつけるなどいいかもしれない。

あるいは無駄に作成しまくったデスナイトの能力を効果的に使うのもいいだろう。レベル35のデスナイトが直接殺害した相手は一定数までならレベル17程度の従者の動死体（スクワイヤ・ゾンビ）となり、さらに従者の動死体（スクワイヤ・ゾンビ）が殺害した相手はゾンビになる。

人類至上国家の国民がゾンビに変えられ国民同士で殺し合わされるなど、精神支配の意趣返しとしては丁度良いかもしれない。

ああだが、ゾンビばかりにするのは少しもったいないか。せっかくの機会だから、ナザリックにおける食人種や嗜虐志向の強いのシモベたちが当分不自由しない程度の個体数を捕虜や保存死体にするべきだろう。

またデミウルゴスが人間種の皮膚がスクロールの素材として最適であることを発見したので、素材としてもちゃんと残しておかなくては。

デミウルゴスとしては人間牧場を設立して恒久的な供給を実現させたかったようだが、マタタビが嫌がるだろうということで密かに断念することになったのだ。現在は戦場などで力尽きた兵士などの死体を回収しスクロール素材として供給しているが、１国家の国民全員を好き放題にできるとなればもはや牧場要らずだろう。

８００万枚のスクロールなど使い切れるかもわからない。いやしかし、浪費家のマタタビなら湯水のごとく使うだろう。

いや否、否。

否、彼女が使うなどありえないか。血肉にまみれた財宝になんて、彼女は何の価値も見出さない。

そこまで思慮を巡らしたところでようやくアインズは、マタタビの考えの一端を掴むに至った。

アルベドとデミウルゴスが冷や汗をかく姿を思い出して、アインズは彼らにひどく申し訳なくなった。

「でももし私がやめてって言ったら、絶対に諦めてくれちゃうでしょ？」

「当たり前です」

マタタビの心が曇るなら、もはやその復讐行為には何の価値も見出せない。

スレイン法国も腹立たしいが、その腹いせで彼女の腹が煮えるのならば本末転倒もいいところだから。

「アルベドたちが教えてくれるまで俺はわかりませんでしたよ。あなたがどういう倫理観をしてるのか」

〈伝言（メッセージ）〉での連絡が大半であったが、それでもこの世界に訪れてからアインズはマタタビとそれなりにやり取りを積み重ねてきたはずだった。

それでもアインズは気付かなかったのだ。アインズ自身が鈍いというのもあるだろうが、しかし根本的な原因はマタタビが――

「隠してましたからね。私のことなんて気にしないで、伸び伸びとこの世界を謳歌してもらいたかったので。

慣れない演技でしたがそこはこう……いいお手本達がいましたし」

あっけらかんとマタタビは、乾いた笑みで言い切った。

ようやく彼女の考えを理解したアインズは頭を抱え、そしてやはり苦笑いして返すほかになかった。

「ハハハ、つまりあなたは俺がスレイン法国に報復するのも、そしてあなたへの忖度でそれを断念するのもどちらも許せなかったということですか？」

「ええ、そういうこと。だから結果的に、あなたたちナザリックの皆様方に一番迷惑がかかる方法で隠蔽することにしたんです。

情報握らせて敵地に返すなんて、アインズ様が一番嫌いなことでしょう？　でも、あの時の私にはそうする以外の選択ができませんでした」

嫌がるとわかっててやる辺りに、彼女の身勝手さと性格の悪さが存分に現れ出ているようだった。

そのニグンという男はどれだけの情報を持ち帰ったのだろうか。考えるだけで怖気が走る。

少なくとも、アインズ・ウール・ゴウンを名乗るアンデッドの魔法詠唱者が存在することと、マタタビを名乗る黒髪の女性がいることを彼は知っているわけだ。

それが敵対プレイヤーなどに知れ渡れば、まず間違いなく強い警戒心をあおることになる。

しかもそのことをナザリック側が一切関知していないというのだから、恐ろしいったらありゃしない。

だが、そんなのは今更だ。アインズが叱り飛ばしたところでどうにかなる人物ではない。

あるいはもう既にどうにかなったからこそ、こうして自白して謝罪しているのだろうから。

「それでマタタビさんは、俺にどうしてもらいたいんですか？　俺が報復するのも嫌、諦めるのも嫌。矛盾しています」
彼女はアインズにどちらも選ばせたくなかったのだ。故に訳の分からない隠蔽工作を企てた。
だがどういう心境の変化か、今ここにすべて明かしてしまった。
信頼された、ということだろうか。それとも別の何かがあるのか。
アインズにとってマタタビの思考回路は、世界で一番難解である。
マタタビは大げさに臣下の如き礼をとって、冗談めかしてアインズの前にひざまずいた。
「……すべてアインズ様の御心のままに、です。
私が望むのはただ一つだけ」
マタタビはピンと指を一つ立て、要注意とでも言うように強調する
「殺すにしろ見逃すにしろ……折衷案にしろですが。たとえアインズ様がどんな選択肢を選ぼうが、私は嫌な気分になることでしょう
だからどうか諦めて、私に嫌われてください」

そんな理不尽な選択肢があるか、とアインズは思った。
これがペロロンチーノのよくやるノベルゲームのイベントだったら、彼は盛大に「クソイベントだ！」と罵声を飛ばしたことだろう。
しかしそれ以上にアインズは、呆気にとられてしまったのだ。
なぜならアインズはずっとずっと、この世界に来る前から――
「マタタビさんからは、嫌われてると思ってましたよ」
アインズがマタタビを嫌いなように。アインズがアインズを嫌いなように、あるいはそれ以上にだ。
そうでないとおかしいぐらい、マタタビはアインズの人となりを知っている筈だ。
「ああそうなの」
そんなアインズの驚愕を、マタタビはどうでもよさそうに一蹴した。
それからようやくアインズは、この懺悔がマタタビなりの遠回しな助言なのだと気が付かされた。

1259　隙間 2

IFルート　悟と桜

今回の話は見なくていいです閲覧注意

どうしても先が詰まったので、気晴らしにオリ主とモモンガがくっつくとかいう誰得な地雷IFを書きました。後悔してます。そのうち消します。

これ書いたので本編では絶対二人をくっつけません。そういうことで許してください。

今日はユグドラシル最終日。色々あったが本当に楽しいゲームだった。

採算度外視でこだわり重視の偏ったゲーム構成は商業的には考え物だが、少なくともマタタビにとっては神ゲーだ。

永らく楽しませてもらったのだから、最後の最後は有終の美を飾りたい。

自棄になった多くのプレイヤーたちは街中などでどんちゃんとお祭り騒ぎをしているようだ。かの悪名高きギルド：アインズ・ウール・ゴウンへ挑む格好のチャンスなことを多くの者が見逃しているのは、個人的には突っ込みどころ。

サ終の三日前から敵モブが一切動かなくなってるんだから、グレンデラ沼地に群れる厄介な毒耐性型ツヴェークも当然動かなくなるわけで。

リソース消費ゼロでナザリックに挑めるのだから、もうこれは挑んでくださいと言ってるようなもんである。

「というか誰か挑めよまったくさぁ、上層で騒いでくれりゃもっと楽に侵入できたってのに」

薄汚れて腐ったどすぐらい夜空を仰ぎ見ながら、マタタビは思わず独り言の怨嗟を吐いた。

ここは第八階層の荒野エリア。マタタビが一昨日から慎重に侵入し続けかれこれ70時間が立ったころ。サービス終了まであと４時間。

侵入ルートは６年前の１５００人侵攻時にマタタビがこっそりとマッピングし

たデータを利用しているので、手順さえ間違えなければ死ぬことはない。
だがそれにしたって、無理やり有休消化して時間を空けたり、リアル体に点滴打ったり、ナザリック内のセーフゾーンで寝落ちしたりしながら苦難の絶えない道筋だった。
特にバレない様に、という一点が大変。　トラップも感知結解も解除すらせず全部スルーしなければいけなかったから、その為に侵入ルートは遠回りに次ぐ遠回り。
2層からまた1層に戻ったりとかそんなことの繰り返し。
上に討伐隊とかが攻めてって騒いでくれりゃあ、モモンガさんが対応してる隙に最短ルートで最終層まで行けたのに。
無いものねだりはできないが、それにしたってあんまりだ。
「そう思うでしょう？　魔王様」
待ち構えているであろうユグドラシル非公式ラスボス様だって、きっと肩透かし食らってるに違いない。私もそうだし。
画してやむ負えない苦難を重ね、どうにかこうにか事前情報でたどり着ける最終地点の八階層にたどり着いたわけである。

「まずいなあ、下への降り口が見当たらない。……間に合うのかなぁこれ」

マサヨシ……じゃねぇ。たっち・みー のリーク情報によるとナザリックは全10層まで拡張されてるわけで。

残り時間はたったの4時間しかないのだ。

残り8、9、10のエリアからギルド武器を発見して破壊するのは……無理かもなぁ。運よくモモンガさんでも発見できれば、ＰＶＰで倒してユグドラシル：クリア☆でもいいのだが。それも出来ないかもしれない。

あてもなく荒野をさまようこと小一時間ほど。すでにこの侵入計画は袋小路に差し迫りつつあった。

そんな時ふと光明、と言っていいのかわからないが……まぁ手がかりのようなものが現れる。

ここから1キロほど先の地点に、ある１００レベルプレイヤーの気配を感知した。残念ながらモモンガさんではないし、その人物は個人的に苦手なのだが。

遭遇したら遭遇したらで、事態が好転するのか悪化するのかもわからない。

それでも侵入計画がとん挫するならどうせと思い、マタタビはそいつに近づいた。
紫タコヘッドのブレインイーターで、誰得過ぎるやたら露出度の高いボンテージを身に纏った錬金術師の魔法詠唱者。
「ごきげんようタブラ・スマラグディナ。こんな荒野で一人きり、あやしくコソコソ何をしてるんです？」
「……あぁ君か。それにしてもどこから突っ込めばいいのやら」
コソコソも私。怪しいも私。一人きりも私。何してるんだも全部私に返ってくるセリフだ。
「ただいま私はナザリック地下大墳墓潜入攻略ＲＴＡ真っ最中なんですよ。なんですが……ちょっともう袋小路になってしまってさ」
「ずいぶん簡単に言ってくれるね。ここまで本当に一人で来たっていうのかい？ツヴェークが居ないにしたってあまりに常軌を逸している
ぷにっと萌え君が知ったらいつぞやのようにひっくり返りそうだ」
それなら是非とも彼には今すぐここにきてひっくり返ってもらいたいところだ。せっかくモモンガさんがこうして待ち侘びているのだから。

悲しいことに、そんなことはあり得ないけど。
なんてササクレ立った思いが浮かぶが、こんな奴に吐露したところでどうしようもない。だから私は飲み込んだ。
「いえいえこれでも１５００人の大侵攻の時からの数年がかりの仕込みでしたから。かの魔王様の性格上、トラップギミックの配置は全盛期から一切変えてないのはわかってました。
それに初見でグレンデラ沼地のツヴェーク強行を突破した弐式炎雷には叶いませんよ」
「……」
私の切り返しにタブラは数舜戸惑って口に手を当てる。
そして私の腹の底を覗き込むかのようにじっと見て、関心といった風に笑いかけた。
「君も、昔と比べてずいぶん変わったね。モモンガさんと やまいこ さんを除く呼び捨ては相変わらずだが、それにしたって随分物腰が柔らかくなった」
「ええおかげさまで。呼び捨ては……直そうと思った時にはあんたら軒並み辞めて

ましたから」
昔の私がナインズ・オウン・ゴールのメンバーを呼び捨てにしていたのは、単純に私なりの親愛によってだった。
だがゲーム仲間としての距離感として不適切だと指摘されたのが、やまいこさんが引退する直前だったというわけである。
むしろそれまでの私の態度をある程度でも受け入れていた彼らの方がどうかしてるって気がするけどね。
「……相変わらずと言えば相変わらずか。君と個人的に接してみたいと思うメンバーはそれなりにいたのだよ？
ただギルドやクランという集団の中では、君は厄介な性質を発揮するようだからね。こういうのを何と呼ぶんだったか」
「ははは。知ってる知ってる、サークルクラッシャーって奴でしょう？」
自虐がてら笑って返す。心と耳の痛む事実なのだから否定しようも無かった。
しかしタブラは手を横に振って否定する。
「違う違う……そうだ思い出した、ギリシア神話における人類最初の女性『パンド

ラ』だよ」
「うん？　パンドラって、パンドラの箱のことですか？」
「その箱の所持者のことだよ。旧世界にて奢った人類に罰を与えるために最高神ゼウスが命じて作らせた存在だ。
神々はパンドラに、狡猾な心や魔性の魅力や多くの技能と、そして最後にあらゆる災厄を詰め込んだ箱を与えたんだ。そこからは知っているだろう？」
「女が箱を開けて世界は大混乱。んで何故か希望だけ箱の中に残っちゃったって奴ですよね
自分で言うのもあれだけど、厄介者って点では私とお仲間さんなのかな」
「別に悪い意味ばかりではないさ。パンドラという言葉はその作成経緯から『神々から全てを与えられた者』という意味合いを持っているんだ。
ともすれば たっち さんの剣術からは始まり、やまいこ さんや弐式炎雷さん、ぷにっと萌え さんなど数多くのギルドメンバーの技能を吸収した君の在り様は、まさにこの言葉に相応しいとは思わないかい？」
いかにも神話好きのタブラらしい語り口だった。

過大評価もいいところだが。

「ほめ過ぎです。実態は只の器用貧乏ですよ」

「過ぎた謙遜は嫌味だよ。容易く真似された者達からすれば不名誉なことだ。そういえばパンドラの名が付いた、ちょうど君みたいなＮＰＣが居たような気がする。会えるといいね」

残り４時間でそんな道草食ってるつもりはない。心底どうでもよかった。

「あいにく暇ではないもので。そういうタブラは何してるの？」

「そろそろログアウトするから最後に造ったゴーレムを見に行こうと思ってね。君も知ってるんじゃないかい？　ルベドって名前なんだが」

彼の言葉に脳内検索を掛けそれらしい記憶を引っ張り上げる。

サルベージされたのは、建御雷が残した記録映像で たっち・みー と一騎打ちしていた熱素石（カロリックストーン）内臓の特製ゴーレムのことだった。確か勝負はたっち・みーの降参負けで決まったはずだ。マタタビにとってはあまり良い思い出ではない。

「あの超ＡＩのチートゴーレムですか。よく作りましたよねあんなもん。熱素石（カロリックストーン）で無限エネルギー供給だし、希少金属を多重利用した超装甲もエグイほど固いし。

何よりどこの軍からパクって来たんだってくらいの超性能AI。まさか たっち・みー の動きを1分足らずで完璧に見切っちゃうなんてさ」

「苦労した甲斐はあった。たっち さんから降参の二文字を頂けたときはそりゃ嬉しかったさ。

彼もまだ余力はあったようだけど、そこがまた彼の底知れない部分だね」

タブラは楽しそうに肩を笑わせた。

頭のおかしい彼なりに、このユグドラシルを楽しんでたのだと思うとわずかに心が和んだ。

「しかしもうログアウトしちゃうんですか？　魔王様……モモンガさーんに最後まで付き合ってあげればいいのに。彼もその方が喜ぶ」

「それも悪くはなかったんだがね。けど先ほど大図書館（アッシュールバニパル）でベルリバーさんが残した興味深い暗号文を発見してね。

一刻も早くリアルで解析を掛けたいんだ」

「……そう、かよ。そりゃあ随分と薄情なこったな」

マタタビの中に僅かばかりに膨らんだ期待感が霧散した。

所詮この人もこの程度か。目先の好奇心の為にモモンガさんを一人にするのか。
いや、彼すらまだしもマシな方。今日この日にログインして尋ねに来ただけでも大多数よりは全然いいくらいだ。
なんて、たかがゲーム仲間の縁に期待するのは筋違いなのはわかってる。たかがゲームだユグドラシルは。
誰よりも、そんなことはモモンガさんが一番よくわかっているだろう。
マタタビだってわかっているんだから。
「せっかく彼が待ち侘びているんだ。最後までいてやれよタコ助」
それでも思わず手が伸びて、タブラの腕を強く強くつかんでしまった。
気を付けて正していた丁寧語が乱れて昔みたいに逆戻り。
駄目だな私は、昔から。何にも変わっちゃいないのだ。
真っ黒になったマタタビの思考に、タブラは何故かかかと笑いかけた。
「マタタビ君のそういうハッキリしたところ、個人的には嫌いじゃないけどね。
少なくともモモンガさんのようなさもしい小賢しさよりは、ずっと好感が持てる」
タブラからすれば褒めてるであろうその言葉は、マタタビの根本を的確に足蹴に

していた。

「聞き捨てならないなぁ、その言葉」

マタタビはモモンガにはなれなくて、モモンガのように大人のフリすら出来ないかった。

だから実家と疎遠になり、ここのギルドメンバーにすらなることができなかった。

それはいい。それは当然のことで仕方がないことだ。

けれど、誰よりも他人に合わせ続けていた、過剰適応とまで言えるモモンガさんを疎むような言い方は、マタタビには決して許せない。

タブラはマタタビの怒りに油を注ぐように、つらつらと煩わしい言葉を薪にくべる。

「まぎれもなく本音さ。僕はこの、今のナザリック地下大墳墓の空気が気色悪くて仕方がない。

ここは時が止まったかのように、最盛期から何も変わらず維持され続けている。

これを目の当たりにすればそりゃあわかるさ、彼がどれほどギルドメンバーの存在を求めているか。

でも彼は決して口にはしなかった。僕がさっき別れを告げた時だって、何のわだかまりもなく立ち去れてしまったんだ。

異常だよ、僕は彼が怖いね」

「そこが、彼の最も愛おしいところでしょうに。もちろん弱さでもあるけど」

私は無造作にアイテムボックスから、お気に入りの神器アイテム：妖刀紅桜を抜きだして、そして彼に突き付けた。

「そろそろ不用意な口は閉じてください。さもなきゃ私はプッツンして、あなたの手足を切り落として魔王様の御前に捧げてしまいそうですよ」

魔法職のタブラならここまで接近してしまえば、暗殺者であるマタタビにとっては赤子の手をひねる用に調理できる。

手足をそいで耐性削って時間停止して、そのまま彼の前にお届けしよう。タコの刺身の冷凍だ。

「……呆れたよ。わかるかい、こんなのばっかだから君はギルドメンバーから嫌われたんだ。

大体、今から僕が彼の前に行って、偽りの慰めをして何になる？

そこまで彼を想っているなら、君こそが彼の傍に居ればいい。そうだろう、たっちさんの娘さ

「はぁ!?　あんた何で――　「〈上位転移〉(グレーターテレポーテーション)」　――ってしまったぁ!!」

タブラの爆弾発言に気を取られ、うっかり転移で逃がしてしまった。

悔しさにうずくまるマタタビに〈伝言〉(メッセージ)が届く。憎たらしいタコ野郎の声だ。

『ありがとう、最後に君に会えてよかった。そうそう、九階層の方角とギルド武器の場所だけど――』

◆◇◆

広々とした円卓の間でポツンと2席。死の支配者(オーバーロード)と古き漆黒の粘体(エルダー・ブラック・ウーズ)が語り合う。

傍から見れば、世界征服を画策する邪悪な魔王たちにでも見えるだろうか。

けれどその内実は、2者のまがまがしさや円卓の間という風景からは及びもつかないくらい、生々しい実生活のことである。

具体的に言えば仕事の愚痴だ。

方や営業職と方や末端プログラマー。彼らの業種は異なっていたが、それでも社会人としての心意気は深く通じ合うものがあった。

「――それで最悪だったんです。営業のアホが雑な見積もりしたせいで採算が取れないのが分かってしまって。

なのに責任は全部プログラマーですよ？　売上ノルマがこなせないからって、もう残業に次ぐ残業。

おかげで2か月連勤で……その時はまだ若かったからどうにかなりましたが、今はもう……」

「あちゃ～、そういう逃げ腰ついてる営業はもうどうしようもないですよね。

でもそういう奴に限って立ち回りはうまくて、おとがめなしだったりするんですよね」

「まったくです。自分の顔を立てるために、クライアントの無茶な要求にホイホイ飲んで全部現場に丸投げなんです、そいつは。

あいつのせいでどれだけの後輩が辞めていったか……。でもそんなのは氷山の一角。あいつは遠回しにエンジニアの賃上げを主張するからまだ許せるんです。

そも諸悪の根源は、業界全体にはびこる多重下請け構造です。おかしいでしょ！元は２０００万円で受けたはず仕事が、有象無象の業者が仲介したせいで、最終６次の下請けでは実質３００万円で動かなくちゃいけないんですよ!?

そりゃ予算も賃金も人員だって回せませんって」

「そうですね。俺もなるべく直請けの仕事を選ぶようにしてるんですけど。

頭数の営業成績で競争すると、そういう仕事ばっかとってくる連中のほうが評価されてしまうんです。

間違ってますよねそんなの。損な仕事なんてとって来ない方が会社の利益につながるのに」

「できれば僕はずーっとメイドのAI造って暮らしたいです。モモンガさん俺雇ってくださいよ。年収２００万でもいいからバリバリ働くよ？」

できるならモモンガだって、こうしていつまでも彼の愚痴の受け皿で痛かった。それこそ真の意味で世界が終わるまで。

「給料はユグドラシル金貨でいいですか？」

半分くらい本気の冗談であるとは、さすがにヘロヘロも思うまい。

「ははは、それだと僕は傭兵ＮＰＣになっちゃいますね……ってすいません。
愚痴ばっかりこぼしちゃって。あんまり言えないんですよね、向こうじゃ」
「気にしないでくださいヘロヘロさん。そんなに疲れているのに無理を言って来てもらったんですから」
実のところ仕事の愚痴は、ユグドラシルに限らず大概のＤＭＭＯＲＰＧでは忌避されている。
だがここギルド：アインズ・ウール・ゴウンだけにおいては、公然と認められていた。
恐らく理由は、このギルドの加入条件に社会人であることが定められているからだろう。
だから社会人としてのストレスを吐露できる相手というのは非常に貴重なのだ。しかもその相手が仲間であればなおさらだ。ギルドメンバーとはお互いを認め合い、時には冗談を言い合えるような関係でありたかった。
だからこそ、モモンガこと鈴木悟はこのギルドを愛おしんだ。
（でも、それも今日で終わる）

けれど出来ないことは出来ないのだ。
理由は数多くあると言える。ユグドラシルそのものの都合というのもあるが、他にも様々なリアル的な事情によってモモンガの宿願は叶わない。
けれどもあえて一つに絞るのならば、明確にこれだと言えるものをモモンガは知っている。とっくの前から分かっていた。

「ほんとありがとうございます。こっちもログインして久しぶりに会えてうれしかったです……
でも正直ナザリック地下大墳墓がまだ残っているなんて思っても居ませんでしたよ」
「……」
仲間達との、ユグドラシルにかける熱量の差だ。
ゲームとリアルを天秤にかければ誰だってリアルをとる。ヘロヘロ達は当然のようにリアルをとって、けれどモモンガにはそれが出来なかった。

モモンガにとってユグドラシルこそ何よりも尊い現実だったから。
そんな溝を改めて見せつけられて、モモンガの心は暗礁に乗り上げる。
浮上する名状しがたい感情を、心を閉ざしてせき止めていたモモンガ。
そんな人の気も知らぬヘロヘロは、けれど何気なくモモンガに感謝を告げた。
「モモンガさんがギルド長として最後まで維持してくれていたんですね。感謝です」
「みんなで作り上げたものですからね！」
とっさに耳障りのいい言葉に飛びついて、モモンガはにこやかに返答した。
表面的な気分は穏やかになったが、実態は理不尽な憤怒とそれに伴う自己嫌悪が累積される結果となった。
「感謝です。っとすいませんモモンガさん。そろそろ眠くて」
「お疲れでしょうしね。すぐアウトして、ゆっくり休んでください」
うとうとと、左右に揺れるヘロヘロの姿を見てモモンガの心は３つに割れていた。
一つは純粋な心配と感謝。もう一つは、頼むから出てってくれという拒絶。そして勿論もう一つは――

「どうも、次に会う時はユグドラシルⅡとかだといいですね。またどこかでお会いしましょう」

――引き止めたい。そんな恥知らずな感情だ。

それら３つは三枚天秤に水平ぴったりに釣り合って、モモンガの行動を抑制する。

ヘロヘロは空にコンソールを操作して、間もなくログアウトボタンを押すだろう。モモンガはただそれを見守った。

そして運命の別れの瞬間――

「ちょおおおっと待った!!」

「「え!?」」

甲高い掛け声と、そしてドカンとひときわ大きい爆発音が鳴り響く。

円卓の入り口扉が爆風によって吹き飛ばされて、粉みじんになった木片が円卓の間全体に飛び散った。

そして爆風を切り裂いて卓上に飛び乗ったのは、麗しい黒髪を棚引かせた端正な顔立ちの学生服姿の少女だった。

「まさかマタタビさんですか!?」

「げ……マタタビじゃん。苦手なんだよねこの子」

モモンガもヘロヘロもその人物には見覚えがあった。

彼女はギルド：アインズ・ウール・ゴウンが前身である旧クラン：ナインズ・オウン・ゴールの元メンバーマタタビだ。

その性悪さからクラン内で大炎上をもたらして、慎ましく脱退したという、るし☆ふぁー 以上の問題児である。

クラン脱退後の彼女はソロプレイを継続し、数多のギルド拠点を荒らしつくす最悪の害悪プレイでユグドラシルを賑わせたものだった。

そんな彼女がどうしてこのナザリックにいるというのか。

少女は唖然とするスケルトンとスライムに構わず刀をカツンと大理石に突き立てて、高らかに犯行声明を挙げた。

「やぁやぁ我こそはナザリック最後の侵入者なり！　そこにおわします非公式ラ

スボス魔王様と逃げ腰薄情なスライム野郎!!

尋常に我が挑戦を受けたまえり!!」

「……相変わらず口が悪くて嫌だなぁ君は。いやでも、このナザリック地下大墳墓に単独侵入って無理があるんじゃ……誰に手引きされてきたの？」

マタタビの乱暴な物言いに気を損ねたヘロヘロは、眠気を噛み潰すようにして戦闘態勢を整える。

そのやりとりは、彼女がいた当時のクラン：ナインズ・オウン・ゴールではお馴染みのものだった。特にメンバーの中でヘロヘロは、ギスギスした空気を生み出すマタタビのことを毛嫌いしていたのだ。

ヘロヘロの問いに、マタタビはとんがったような口調で答えた。

「強いて言うならタブラですけど、それだって偶々八階層で出くわした後で九階層への入り口を教えてもらっただけなので、実質殆ど自力です」

「信じられない……このナザリック大墳墓を単独で攻略するなんて」

モモンガも同感だった。ヘロヘロは驚愕の声を上げてから、負けじとマタタビを睨み返す。

「そこは素直に称賛するよ。それで、誰が逃げ腰薄情スライムだって？」
「……わからないの？　この今の、ナザリック地下大墳墓を見て何も思わないのだとしたら、とんだ鈍感野郎がいたもんです。
なのにお優しいですねぇ魔王様は。アハハハハハ!!」
それからマタタビのアバターは、視線をヘロヘロからモモンガにギロッと合わせ、凄惨な笑い声をあげる。
まるでモモンガの心を読み取ったかのようで、ひどく気味が悪かった。
「君は……」
「いい加減にしてください!!　ＰＶＰだかギルド戦だか知りませんが、俺と勝負するんでしょう？」
嫌な空気の会話を断ち切り、モモンガは魔法詠唱の準備を始める。
それを開戦の狼煙と受け取ったマタタビは即座に跳躍し、円卓の間の壁面に埋め込まれていたギルド武器：スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンに手を掛ける。
人物認証で掛けていたセキュリティロックを何らかの盗賊系スキルで解除したら

しい。

「隙ありですよ!!」

「畜生とられた！　〈魔法最強化効果範囲拡大万雷の撃滅（マキシマイズワイデンマジックコール・グレーター・サンダー）〉」

モモンガの魔法により、マタタビめがけて幾千万もの雷光を束ねたエネルギーの凝縮体が室内全体へ雨のように殺到する。

デスナイト並みの耐久力しかない彼女なら、一撃でも当たれば即ゲームセットだ。

「ふんふんふーん♪」

しかしそんなこと彼女自身がよくわかっているわけで。

鮮やかな身のこなしで雷の雨を、その隙間と隙間へ滑り込み全て回避してしまう。

明らかにユグドラシル運営が想定してない戦術であり、相変わらず人間業とは思えない。

「それじゃばーいばーい」

「待て!!」

それからマタタビは意気揚々と円卓の出口から、一目散に逃げてしまった。

非常にまずい状況だ。すぐに彼女を追いかけなければ、折角のユグドラシル最終

日にギルドを破壊されてしまう。
「ヘロヘロさん！　先にログアウトしていてください、俺は彼女を捕まえなきゃいけないのでどうお構いなく！」
モモンガは即座に〈飛行（フライ）〉の魔法を掛けてマタタビを追いかけようと浮かび上がる。
慣れ切った飛行操作だ。転移はナザリック内では使えない。いくらユグドラシル屈指の韋駄天である彼女と言えど、アウェイのナザリックで追いかけっこをするならばモモンガにだって勝ちの目はある。
さぁ行こうと意気込んだのだが、ヘロヘロがスッとモモンガの手を引き留めた。
「待ってくださいモモンガさん。僕が彼女を追いかけます。」
「お気持ちは嬉しいですが駄目ですよヘロヘロさん。しっかり休まないと」
「いいんです。彼女へのムカつきで目が覚めました。……それに僕、さっきモモンガさんに酷いこと言っちゃいましたよね」
「え？」
「ナザリック地下大墳墓が残ってるとは思わなかった、なんて」

一瞬モモンガは、血の気が引くような感覚を覚えた。
自分のツマラナイ逆上を、ヘロヘロに感づかれてしまったのだろうか。
嫌われてしまう、そんな悪寒が駆け巡る。
「いえ、酷いことだなんて。そんなことはこれっぽちも……俺が勝手にやったことですし」
「ありがとうございます、でも……」
ヘロヘロは砕け散った扉の方を示して言った。
「多分さっきの会話、あの子も盗み聞いてたんでしょうね。
そりゃあわざわざ此処まで挑戦しに来たあの子なら、聞いたら怒るに決まってます」
「ヘロヘロさん……」
この人はどこまで優しい人なんだろう。こんな自分を気遣ってくれている。それなのに、逆恨みしかけて自分が憎かった。
モモンガの眼窩の奥からは、自然と熱いものがこみ上げてくるような気がした。
アバターは涙を流さないが、おそらくリアル体では目から雫が滲んでいる。

「お詫びというかなんというか、最後はせめて仲間として戦わせてください」
「わかりました。では彼女のことはお願いします。俺はＮＰＣを使って包囲網を作ってみます」
「はい。それじゃ僕は彼女に思い出させてやりますよ。武器破壊の恐ろしさを」
「程々にしてあげてくださいね」
そう言って二人は互いに笑いあう。
「じゃ、行ってきます」
「はい。お任せしました」
そしてヘロヘロはマタタビを追って飛び出していった。
一人になったモモンガは、一呼吸置いてから動き出す。
まずは守護者達を集めよう。彼らの最後にした最大の晴れ舞台だ。

◆

「ちきしょー！　私の負けでーす！」

モモンガが玉座の間にたどり着いた時には、マタタビはすでに大の字になって大理石の床に寝そべっていた。

周囲には溶けてバラバラになった、マタタビ自慢の数々の神器級アイテムが無残に散乱している。

その原因たるヘロヘロは、どうにか取り返したスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンに寄りかかって、眠たげながらもどうにか立ち姿勢を維持していた。

二人の戦いは相打ちといったところだろうか。けれど勝負はナザリック地下大墳墓の勝利だった。

寝そべるマタタビを取り囲むのは、ナザリックの階層ごとにレイドボスとして設置した１００レベルＮＰＣの守護者たち。

そしてその他粒ぞろいの精鋭たちだ。

第一から第三階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン。

第五階層守護者コキュートス。

第六階層守護者のアウラ・ベラ・フィオーラとマーレ・ベロ・フィオーラ。
第七階層守護者デミウルゴス。
そしてデミウルゴスに抱きかかえられた第八階層守護者ヴィクティム
第九階層執事（バトラー）セバス
セバスの傍に控える戦闘メイドプレアデシスのユリ・アルファ、ルプスレギナ・ベータ、ナーベラル・ガンマ、ソリュシャン・イプシロン、シズ・デルタ、エントマ・ヴァシリッサ・ゼータ
楼花聖域領域守護者オーレオール・オメガ
宝物殿領域守護者パンドラズ・アクター
ナザリック最強の起動兵器ルベド
守護者統括アルベド
マタタビが不用意な動きを見せれば即座に命を奪えるように、彼らは各々自慢の神器アイテムの武装を差し向けていた。
こうして見ると非常に壮観な眺めである。これまで侵入者たち相手に活躍できたためしはなかったが、今日はこの上ない大活躍と言えるだろう。

「……やっほーモモンガさん、勝ったよー」
ヘロヘロは遅れてきたモモンガにへらへらと手を振って見せる。
本当にお疲れのようだった。モモンガも軽く手を振り返し、それから頭を下げた。
「ご苦労様です、ヘロヘロさん。見事な戦いぶりでした」
「まぁ、この子たちが玉座の間に追い詰めてくれたからですよ。さすが、皆が作った自慢の子供たちです」
その言葉には様々な意味が込められているのがわかる。
ここにいる全員を作り出したギルドメンバーへの敬意だとか、今まで守ってきたナザリックに対する誇りとか。
ヘロヘロがそれを実感してくれていたことが、モモンガには何よりもうれしかった。
「あーのー。もう私抵抗できないんでー、そろそろ立たせてくれませんかー？
死にかけなのはそうですが、生きた心地がいたしません」
マタタビが弱々しい声で懇願する。
モモンガはゆっくりと歩み寄って、ＮＰＣ達に待機指示を出して下がらせる。

「……マタタビさんもホントによく粘りましたね。映像見てましたけど、途中でギルド武器をヘロヘロさんの酸攻撃に巻き込んで破壊させようとしたところなんか、見てて肝が冷えましたよ」
「てへへ」
「うん、本当に危なかった。危うくオウンゴールしちゃうところだったよ。相変わらずマタタビ君は性格が悪い」
マタタビはダメージまみれの体をいたわるようにして起き上がった。
「……それをヘロヘロが言いますか？　私の自慢の神器級アイテム達をことごとくスクラップにしやがって。
私のギルド荒らしを悪趣味とかいう奴が居りますが、ヘロヘロだって同じ穴の狢ですからね？」
「まぁそうなんだけどねぇ」
二人の口調は柔らかだが眼差しはかなり鋭い。まるでガラスを引っ掻く音のようなピリリとした雰囲気が漂う。
しかし、そんな空気は長く続かない。

「はい、そこまで！」
パンと両手を叩き、モモンガが強引に割り込んだからだ。
「最後くらい和やかにしてくださいよ」
「うん、ごめんごめん」
「誠に失礼いたしましたー」
モモンガがコンソールを開き時間を確認すると、サービス終了まであと30分ほどだった。
時間はあるがどうしたものか。
するとヘロヘロはゆらゆらと手を挙げて嘆願した。
「……ごめんモモンガさん、僕もう眠気が本当に限界で。さっきは強がったけど……本当にアウトさせて……」
「いいんですよ！　此処まで付き合っていただいただけでも感無量です！　どうぞごゆっくりお休みください！」
「あんたよくそんな体たらくで私に勝てたね。バイバイ、死ぬんじゃないですよ」
さすがのマタタビも和やかに手を振ってヘロヘロを見送った。

ヘロヘロは覚束ない動きでコンソールを開き、ログアウトボタンを取り出してグッと手を前に伸ばした。

けれどその瞬間に彼の精神は限界に落ちたらしい。

届かなかった指先はだらりと下に落ちて、ヘロヘロの体は前のめりに床に倒れる。

床にぶつかる寸前を、マタタビが優しく抱き留めた。

「……よっと。うわぁ煽って無理させ過ぎたか。ねぇこのヒトどうしましょう」

「あー少し待っててください。ソリュシャン、来い」

モモンガは操作コマンドでヘロヘロが作成したＮＰＣのソリュシャンを呼び寄せた。

そしてマタタビにヘロヘロの体をソリュシャンにパスするように促す

「え、でもこれって。あぁなるほど」

マタタビは一瞬不可解な声を挙げたが、すぐに納得してヘロヘロの体をソリュシャンへと明け渡す。

ヘロヘロの小さな体は、ＮＰＣソリュシャンの豊満な体に抱き留められた。

「あららパイタッチ。最後にＲ１８に抵触させて垢バンとは粋な事をいたします

ね。ってアレ……バンされないじゃん」
「やっぱりダメみたいですね。寝落ち状態だとＲ１８抵触の判定が甘くなるって、ペロロンチーノさんが言ってたんです」
「へぇ、クソどうでもいい豆知識ですね。でもまぁ、これはこれでいいんでない？」
「俺もそう思います。大した恩返しは出来ませんでしたが、せめてこれくらいは」
「……いい夢見るんですよ、ヘロヘロ」
らしくなく優しげに、マタタビはヘロヘロに囁いた。
それからモモンガはソリュシャンに、ヘロヘロの自室の寝室へ行くようにコマンドを送った。ふざけ半分ではあったが、モモンガとマタタビとの会話で目を覚ましては申し訳ないという理由もあった。
モモンガは先ほどから聞きたくて仕方なかった、ある疑問をぶつける。
「あの、マタタビさん」
「何です？」
「見てたんですよね？　どうしてさっき円卓の間で、ヘロヘロさんのログアウトを遮るようにして俺たちの前に現れたんですか？」

「……」

ずっと引っかかってたことだった。

マタタビが本気でナザリックを攻略したいのなら、ヘロヘロさんがログアウトした瞬間を狙うべきだ。そうすれば彼女の勝利の目は今よりずっと大きかった。

そしてヘロヘロのログアウトを詰るような言動に、モモンガは名状しがたい思いを抱く。

それが何なのかモモンガが言語化するより先に、マタタビは投げやりながら口を開いた。

「……気に、食わなかったんですよ。私とあなたが同じ結末を辿るなんてのは」

マタタビは再び、背中から床に倒れて天井を仰いだ。

それから彼女の口から紡がれたものは、モモンガにとっては意外過ぎるほど意外な言葉だった。

「あなたは私が知るなかで、誰よりも愛情深い御方です。物腰柔らかで誰よりも優しく、だけど決して無欲じゃない。

なのにあなたは時として、仲間の為に自分の心を殺せてしまう。ギルドをコツコ

ツ維持してたくせに、ヘロヘロさんとタブラをホイホイ返そうとしたのがいい例だ。
対する私がどうかと言えばだ。口も性格も最悪なこと、誰より自分でわかってる。なのにそんな自分を変えられないし、取り繕うことも出来やしない。だから私はあなたたちに迷惑をかけて、以来ずーっとソロで遊んでた。
そんな正反対なお2人さんが、同じ場所で2人ぼっち？　そんなの理不尽極まりない。だから私はヘロヘロのことを引き留めた。失敗したけどタブラもね。
まぁつまり、私がしたかったのはそういうことです。最後にひと時、楽しめたなら何よりですが、如何でしたか魔王様？　少なからずや、私はすごく楽しかった」
「……えーいや、その、えー。」
正直言って、すぐに受け止め切れる言葉ではなかった。
なんというか、重すぎる。マタタビが何を考えているのか常々知らないモモンガであったが、まさかこのような本性が隠れているとは欠片ほども思いもしなかった。
正反対がどうのとか、愛情深いだの心を殺すだの物腰柔らかいだのなんだのと、勝手な決めつけばかり。
さすがに言葉が詰まるというものだ。

あえて返答するならば、この一言が相応しいだろうか
「よくわかりませんが……楽しかったです。ありがとうございました」
そうモモンガは答えるしかなかった。
マタタビはモモンガの言葉を受けて、満足げに微笑む、様な気がした。
「お気に召したなら何よりです！」
しかしそれは一瞬のこと。すぐに寂しげなものへと変わっていく、様な気がした。
まるで楽しい時間の終わりを悟った子供のように。
「そういえば魔王様は、ユグドラシル終わった後何のゲームやるか決めてるの？」
「いいえ、特にこれと言っては」
ユグドラシルはモモンガのすべてだ。それ以外に手を伸ばそうなどとは考えたこともなかったし、誘いが無いでもなかったがそれも全部断ってきた。
ユグドラシルⅡとかでもない限り、モモンガの食指は動かない。
「えー勿体ない。あのさ、別会社だしユグドラシルⅡってわけじゃないんだけど、ユグドラシルの開発初期スタッフが作った別のＤＭＭＯＲＰＧが来月リリースされるんですよ。カオスウラノスって奴。雰囲気結構似てるのでお勧めしますよ」

「……マタタビさんもやるんですか？」
「ええ。さすがに今のプレイスタイルが通用するかはわかりませんけどね。遊べるだけ遊んでみようかと」

「あのさ、もし、私なんかと一緒で良けりゃあ……魔王様も一緒に遊ばない？」
自分の中に、かちりとスイッチが入った気がした。
今までの自分の人生全てが変わるような。それは例えば、初めてたっち・みーに救われた時の様な。
「俺は――」
意を決し、モモンガが返事をしようとした直後、マタタビからメッセージコールの音が鳴り響いた。
これは魔法によるものではない、ユグドラシルのシステム外の機能によって行われるコールだ。リアルでの仕事場とのアクセスなどによく使われる機能である。
「うげぇ……またかよ、こんな時に。切っちゃお」
ところがマタタビは即座にコンソールを開いて、慣れた手つきでキャンセルボタ

ンを押そうとする。
しかしモモンガがマタタビの手を止めて諭した。
「ダメですよ、緊急かもしれないじゃないですか」
「違いますよ。これはその、仕事とかじゃなくて……」
「……もしかしてストーカーとか？」
「全然違う！　そんなじゃない！」
「じゃあ出ればいいじゃないですか」
「うぅ……わかりましたよ……」
何故か渋々ながらコールボタンを押したマタタビは手を口元に抑えて電話に出た。
「……あ、やっぱり父さ……もといマサヨシですか。性懲りもないですねぇ。え？　今ユグドラシルにいんの？
はいはい、気持ちの方はよくわかりましたから。家には絶対帰りませんけど心の底より愛してますよ。これでいいでしょ？
仕送りだって送ってるし……おい、要らねぇってなんだよ。せっかく娘らしく孝

行してるのに……そりゃマサヨシからすりゃ雀の涙みたいな給料だけどさ。

母さんに？　ああうんわかった。

おひさーママ。うん、連絡ぶっちしてごめん。父さんがうざかったからつい……うん、一応元気だよ。仕事はぼちぼち、プライベーとはすこぶる充実って感じ。彼氏？　ナイナイ、そういうの一生縁無いから私は。ママこそ平気？　父さん浮気してないね？　うん、良かった。

じゃ、私が言う資格はないけど、電話終わったらすぐログアウトしてツバキ寝かしてあげてよね。多分寂しがってるから、会ったことないけど姉の勘。

……もう、帰らないったら。こっちの仕事もあるしさ。うん、バイバイ」

唖然とするモモンガのことを気にも留めず、マタタビはどこか満たされたような声で電話を切った。

「あーはいお待たせしました。んで、カオスウラノスやる？　やらない？」

なんてことないという風に切り替えてマタタビはさっきの誘いの文句を続ける。しかしあまりに色々看過できない。

モモンガはこの日一番の大声で盛大に突っ込んだ。

「滅茶苦茶大事な電話じゃないですか！」
心底呆れてため息をしてから、モモンガはマタタビに手を伸ばした。
「では、その……ご一緒させてもらいますね」
「ええ！」

◆◇◆

さてこれからモモンガとマタタビ、あるいは鈴木悟と夏梅桜がどうなるのか。
未来は無限の可能性のもとに樹形図のように伸びていく。
共にカオスウラノスを楽しむのか。彼女の父佐々木正義に鈴木悟が睨まれることになるのか。
あるいは異世界で大冒険を繰り広げることになるのかどうか。ナザリックで外堀を埋められて危うく婚約の危機に瀕するのか。それは誰にも分らない。
それでもたった二つだけ確定してるのは、これからの二人の運命は永遠に共にあるということ。

そして深夜正午を回った瞬間、ソリュシャン・イプシロンの手によってヘロヘロの童貞が秒殺されるということだけである。

夢の悪魔の告白

おまえがめいんひろいんじゃ

◆◇◆

「アルベドか。入れ」

「失礼します」

ナザリック地下大墳墓９階層、ギルドメンバーの住まうロイヤルスイートが一室。白亜の城を連想させる清廉で絢爛な造りのアインズ様の御部屋。

魅惑的に輝く王冠型の巨大なシャンデリアの下にて、アルベドの最愛の主人は膨大な資料と向かい合っていた。

平時の執務作業を目にしているアルベドをして、今のアインズ様のご様子はあまりにも異様だった。まるで刀匠が鉄を打ち、研ぎ澄ましているかのような熱気であ

る。

入室したアルベドは、己の主人のかつて見たことない種類の気迫を前に思わず気圧された。

「散らかっていて済まないな」

「いえそんなことは」

「そうか」

重厚なロココ調の掘り込みがなされた執務机に広がっている無数の羊皮紙。記されているのは戦闘行為にまつわる数多くの要項だ。

様々な特殊能力（スキル）や魔法の効果や消費MP。耐久と攻撃値からなるHPのダメージ計算式。戦闘用のマジックアイテムの効力や発動までにかかるコンマ単位の起動時間。

他にもユグドラシルと異世界間における物理法則の微妙な差異などなど。例えば素早さステータスの現実における実際速度への変換式や、腕力と物理攻撃力の相関図や召喚獣の滞在時間とか。

アインズ様はそれらにチラリチラリと目配せしつつ、カーペット大の一際大きな羊皮紙へと忙しなく書き込みを続けていた。

描いているのはアインズ様とある者との１ｖｓ１の戦闘シュミレート。アインズ様の記すそれは、演劇の脚本とチェスの棋譜が合わさったような奇妙な文体であった。

対戦するキャストの名前が一番上にあって、次にフィールドのシチュエーションと様々な付帯状況や勝利と敗北の条件。

それから記されるのが……コンマ秒単位からなる事細かな戦闘の流れだ。

発動されるスキルや魔法。それに伴う相手の戦闘分析と反応。来たるべき反撃への自分の対応。熾烈で苛烈な応酬の繰り返しである。

途中途中で、両者の思考や精神状態の変遷までもが注釈として挟まれている。

信じられない程の濃度で描写されるシュミレートは、覗き見るアルベドの脳裏にすら鮮明な映像を描きつつあった。

その極限のリアリティの根拠にあるのは、おそらく膨大な戦闘経験と知識の蓄積なのだろう。才能などという陳腐な表現を推し当てるのは余りにも不敬で不適当だ。

あの天才マタタビすらも出し抜く戦術眼は、徹底的で地道な積み重ねによるもの

なのだと、アルベドは強く思い知った。

（あぁ……なるほど。さすがはアインズ様。けれどもやはり……）

ナザリック最強の個たるルベドには、今一歩届かない。

アルベドはアインズ様のペン先が示す結末を目で追って、そしてやはりと思いつつも落胆して意気を落とした。

計算結果は、戦闘開始から12分後にアインズ様の敗北である。

主人は嘆息するように顎をわずかに上下させ、今書ききった羊皮紙を同様らしき束の山に雑に乗せた。

「駄目だな。さすがはお前の妹だ、私一人ではとても手に負えるものではない」

当たり前だ。何せ前提条件からして根本的に勝ち目のない勝負なのだから。

それは書き切った別のシュミレート用紙の束の厚さがすでに示していた。たった今の分も含めると、没になった羊皮紙の枚数は数十枚にも及んでいる。

12分も生き残り肉薄を続ける結果すら、あまりに常軌を逸してると言っていい。

それだけルベドという存在の強さが異常なのだ。マタタビの父であり至高の41

人が最強たるたっち・みー様すら彼女の力には一歩及ばないのだから。
「後生ですから、どうか御一人でルベドに立ち向かわないで下さい。どうか……」
アルベドは必死に嘆願しつつも、様々な付帯事情に頭を痛め、語尾はか細くなってぽっきり折れた。
アインズ様のお考えに比べれば、自分の言葉はあまりにも虚しく薄っぺらい。そのこともまたアルベドはよく理解していた。
「すまないなアルベド」

多種多様なる異業種たちを内包せしナザリック地下大墳墓。
その全てを統べる筈のアインズ様が、どうしてルベドに単身で挑まなくてはならないというのか。
守護者クラスの実力者をパーティ単位で動員すれば、多少の犠牲は出すにせよ確実にルベドを仕留めることはできるだろう。
だがマタタビの時と同じだ。
アインズ様がそうしないことには、もちろんそれだけの合理的な理由がある。

それは事の発端が、アインズ様と同格の至高の存在たるタブラ・スマラグディナによるものだからである。

現状のナザリックにおいてアインズ様が絶対者足りえているのは、この地に残ってくださった唯一の存在だったからである。

けれどタブラの存在が明らかとなりアインズ様と矛を構えるとなれば、確実にナザリック内の勢力は混乱する。

単純に、ニグレドを除く全シモベがタブラとアインズ様を天秤にかけた場合、大多数のシモベが慈悲深いアインズ様を優先することだろう。

だがそもそも支配者の二者択一を迫られた時点で、シモベの精神状態は最悪レベルに叩き落されるのだ。

そんな状況で味方になったところで、かえってアインズ様の足を引っ張る結果を巻き起こす。敵に回るシモベのことも考慮すれば、勝率はかえって低くなるだろう。

よしんばそれでタブラを滅ぼせたとしよう。それでも今度はシモベの中に「アインズ様が己の創造主を手に掛ける可能性」を見出させてしまうことになり、後々に

無視できない禍根を残す。
最悪の場合、己の創造主の安全性を危険視してアインズ様に敵意を抱くシモベが現れるだろう。なにせ他ならぬアルベド自身がそうだったのだから。
疑心暗鬼と恐怖が渦巻き内部から崩れ去る地下墳墓を思い浮かべ、アルベドは身を震わせた。守護者統括としてこれほど恐ろしいことはなかった。
タブラを他のＮＰＣ達にはけっして近づけてはならない。これこそアインズ様側の最悪の敗北条件だ。

そんなことはわかり切るぐらいにわかり切っていて、だからアインズ様はシモベたちに助けを求めることができないのだ。
かつてアルベドが水面下で暗殺計画を企てていたのと同じように。
「緊急時のＮＰＣの避難計画はどのようになっている？」
「抜かりはありません。以前作成した、玉座の間への緊急の全体招集マニュアルの手順を流用させて頂きました」
「そんなものがあったか？」

「はい。カルネ村からの凱旋後、御身がアインズ・ウール・ゴウン様として改名なされた時の全体招集の段取りが少々不手際でありましたので。
　それで改善案として作ったものがあります。アインズ様からすれば些事ですので報告はしておりませんでしたが」
「そうかそうか、それは恵まれた主人がいたものだ。どのような内容だ？」
「まず私が緊急事態の発生を確認した後、〈伝言（メッセージ）〉で各階層守護者に連絡します。
　それから各階層守護者が階層ごとに人員を一定個所に集めた後、シャルティアが順繰りに〈転移門（ゲート）〉で移動させる手筈です。九階層と大図書館所属（アッシュールバニパル）は徒歩で玉座の間に集合します。
　スキルや魔法などによる特殊なエリア移動も利用いたしますので、推算される所要時間は５分もかからない予定になっております」
「さすがはアルベドだな。あとは玉座の間の扉を閉めるし☆ふぁー さんが作ったレメトゲンのゴーレム67体を全起動すれば、内外の封鎖は完了しＮＰＣたちの避難は完成というわけだ。実に完璧な計画だな、私のルベド対策とは大違いだ」
　色んな意味で返答に困る称賛だった。

アルベドは無謀な条件が記された羊皮紙の山にもう一度目を落とす。

アインズ様がＮＰＣをタブラから遠ざける理由は合理的ではあったが、２点だけ穴があった。

「でしたらば、どうして私かパンドラズ・アクターを補佐につけないのですか？魔法詠唱者（マジックキャスター）であるアインズ様御一人でルベドに挑むのは余りにも無謀すぎます。他のシモベならともかく、パンドラズ・アクターか御身によって再創造されたこの私が盾役（タンク）としてルベドの攻撃を引き受ければ、勝率は格段に上がるはずです」

「理由はいくつかある。

まずパンドラズ・アクターについて。確かにあいつは ぶくぶく茶釜さんやたっちみーさんに変身して盾役（タンク）を引き受けることは可能だが、ドッペルゲンガーの性質上ステータスが対ルベドへの要求水準に届かない。私が自ら前衛系のアンデッドを召喚したほうが、総合的に取り回しが良いのだよ。

それにあいつには、タブラさんを相手にすると言っていたマタタビさんの補佐についてほしいからな。彼女はとても危うい」

アルベドはかの生意気な猫娘が舌を出す表情を思い浮かべて、心の中でうなずい

た。

単純な戦闘能力においてマタタビは非常に頼りになるし、非戦闘職の錬金術師タブラ・スマラグディナ相手なら戦闘においてなら負ける理由がまず見つからない。

ただそれは彼女が１００パーセントの能力を発揮できればの話であり、常々ブレーキ役が必要だ。

そういう意味でアインズ様直々に創造されたパンドラズ・アクターは人格的にも能力的にも適任だ。少々彼はマタタビに甘すぎるところが懸念されるが、そもそもこの状況下で他の選択肢はないのだから。

「パンドラズ・アクターについては深く納得いたしました。ではこの私が除外される理由について、どうかご説明をお願いします」

大嫌いな創造主に与えられた能力であるにせよ、アルベドは自分の力が有用であることを理解している。

アルベドは小手先の特殊スキルを持たない純戦士職の中でも、機動力と攻撃力が平均水準より欠ける代わりに防御能力に特化した存在だ。

指揮官職も兼ねて取っている粘液盾ぶくぶく茶釜や、ハイアベレージを誇る最強

の聖騎士たっち・みー にだって、防御力であれば負けはしない。ルベドの手の内も姉として把握してるので、問題なく彼女に立ち向かえる。

対ルベドにおいて、アインズ様の補佐として自分以上に相応しい存在は今のナザリックには居ないはずなのだ。

なのにどうして自分が蚊帳の外に置かれるというのだろうか。

しかるべき合理的理由があるのなら、是非ともアルベドはそれを聞きたかった。それ以外には聞きたくもない。

けれども我らが愛すべき理想の支配者であらせられたアインズ様は、この時だけはアルベドの期待を裏切った。

「俺の個人の感情的な問題だ。アルベド、お前をタブラさんたちとの戦いに巻き込みたくはなかった」

「ふざけないでください！」

脊椎反射で怒号を放ったアルベドは、伴って嫌な既視感を感じとり、訳も分からず背筋がこわばる。

だからアルベドは、そんな悪寒を振り払うように最高速で頭脳を回す。

そして目前の理不尽に論理を見出しを問質した。そうであってくれと願いを込めて。

「もしや……我が忠義と愛を疑われておられるのですか？　私の創造主権はアインズ様にあり、タブラ・スマラグディナへの帰属意識は欠片ほどもございません。御身が一声かけてくだされば、タブラも姉も妹でも迷いなく戦いに挑めましょう！」

確かにアルベドはタブラ・スマラグディナに生み出された存在。それは事実だ。

そして創造主権がアインズ様へと変更されたというのはあくまでも推測に過ぎない。アインズ様からすれば寝首を掻かれる可能性だって考えられるのかもしれない。

アルベドの心理状況を論理的に示す根拠はないのだから。

己の忠義と愛を絶対の主に疑われることは、口惜しく悔しく屈辱だ。

けれど今はその方が良かった。そうでいてくれた方がずっとマシだ。

それならそれでアルベドは、アインズ様へアピールすればいいだけだから。己がアインズ様の犬であると。

縋るように媚びるようにみっともなくでも、幾千万の言葉と行動で示せばいい。

「御身の疑いを晴らすためなら、我が身も心もお捧げします。今ここで心臓を切り開いてお見せしても構いません。死を命ぜられれば、今すぐ喉笛を掻っ切って自害して見せマ――」

「違う。俺はアルベドのことを欠片ほどだって疑ってない」

ある意味それは、アルベドが考えうる限り最悪の、一番に望まない返答だった。

「……では何故ですか!!」

「お前がタブラさんのことをどう思っているのかは、私にはわからない。

だがニグレドとルベドははお前の姉妹だろう？　姉妹想い、いや二人に限ったことではないか。誰よりも仲間想いなお前を、仲間との戦いなんかに巻き込むのが忍びない、そう思ったからだ」

『ふざけんな！』

ああこれはそうだ、思い出した。いつぞやアインズ様がマタタビ救出に体を張った時、マタタビもこのようにしてアインズ様を非難したはずだ。

（確かにこれは……とても嫌だわ）

魂の根底を足蹴にされたような屈辱と、そして全身を押し潰さんばかりの自己嫌悪が押し寄せてくる。

あの時はマタタビがアインズ様を侮辱したため、即座に殺してやりたいと本気で思ったものだが、今となってみればその理由がよくわかる。あるいはこのような考えでもってして、彼女は両親とアインズ様を拒絶したのだろうか。

そう考えると今のアルベドの心境は、当時のマタタビのトレースの様に思えて、心底気味が悪かった。

「そうしてアインズ様は、いつも御無理をなさっていたのですか？」

「無理……か」

アインズ様は小さなため息とともに呟いて、じっとアルベドを見据えた。

そのあまりに平然な振る舞いからは、何を考えてるのかアルベドには及びもつかない。ただほんのり眼窩の炎とゆれているのだけがわかる。アルベドにはまるで動揺しているかのように思えて仕方がなかった。

「この世界に訪れてからというもの、ずっとそうだったのですよね？　我々の忠義を前に、本性ではなく偽りの支配者の器として接してくださったり。我々で勝手に

囃し立てた世界征服の成就を黙認なさってくださったり。いったいナザリックの絶対支配者の重圧がどれほどもののだったか、このアルベドにも計り知れません。ああきっと、我々には及びもつかない様々な慈しみが他にも山ほどあるのでしょう。違いますか？」

正直違っていてほしかった。

普段のシモベの何気ない言動がアインズ様の心を縛り付け、そして鑢掛けするように削って摩耗させてただなんて。

もしもそうであったなら、それは最早シモベの存在意義の根幹が揺らいでしまう。自分で自分を許せなくなる。

それこそ「考えすぎだ」とか「深読みし過ぎだ」とか否定してくだされば――あるいはそれも気遣いなのかもしれないけれど――一時は心の平穏を保てるというもの。

少なくとも、目下の戦いへ意気を高めることは出来る。アインズ様の犬として忠実に努めることができる。だから――

「マタタビに何を吹き込まれた？」

――そんな究極な肯定の言葉を言わないで欲しかった。

そうしてある種の幻想と共に、アルベドのアイデンティティは崩壊する。

さっきから動機が止まらない。口の中は乾いて、頭は重く、吐き気がこみ上げ眩暈もする

なんてことだろう。我々シモベが妄信する完全無欠の絶対支配者なんてものはどこにもない。

実際はただ悲しいほどに優し過ぎる奴隷のような君主だった。そんな何より愛すべき存在を追い詰めていたのが他ならぬ我々シモベたちだというのだから、こんなに酷い話はない。

これではもう笑うしかないだろう。

「くふ、あは、あはははは。ご安心を。何も、マタタビは何も語りませんでした。彼女はアインズ様のよき理解者として、ただ忠実に黙しておりました」

本当にマタタビは食えない奴である。

彼女は端から全部知っててその上で、極めて限られた真実だけをアルベドに告げたのだ。

アルベドに、それだけが真実だと勘違いさせるため。つまりアインズ様の秘密とアルベドの精神を守るために。

憎い女だ。

「全ては私が自分で気付いたことです」

そうして乾いた笑みで言い切った後、アルベドの頭の奥でカキンッと何か取り返しのつかない音が響いた気がした。頭痛などこんな現実に比べれば些末事。鼻奥からの血なまぐささは嗚咽と共に飲み込んだ。

「……そうか」

アインズ様はテーブルの上に視線を落とし、ほんの僅かに背を丸める。取り繕う気を無くされたようだった。

そして〈伝言（メッセージ）〉でマタタビと密談する時の様な、若い声で尋ねられた。

「失望したか、俺のことを。こんな奴がナザリック地下大墳墓の主人なのかと」

「アインズ様のことを失望？　言っている意味が分かりません。惚れ直すの間違いです。アインズ様がこんなにも慈悲深いことを知っていては、あの気性難なマタタビでさえアインズ様に懐くわけです」

なぜアインズが気を落とすのかアルベドにはわからなかった。
そしてマタタビのことを言及すると、ハトが豆鉄砲でも食らったように呆然となされた。この点にだけはアルベドは呆れた。
「懐くって……アルベドお前、まだ何か勘違いしてないか？　」
先日世界征服宣言の否認と共に、マタタビとの婚約を否定なされたのは記憶に新しい。
聞いた時には確かにたまげたが、しかしアルベドにとって重要な事実は何も変わっていないのだ。
「性愛的な恋慕か純粋な友情なのかは議論になるので棚上げして、少なくともマタタビがアインズ様へ並々ならぬ好感を抱いているのは事実です」
「毛虫以下の扱いだと思っていた。先日嫌ってはいないと本人の口から言われて驚いたが……嘘だろう？」
「……どうやら彼女のへそ曲がりせいで伝わってはいなかったようですね」
あるいはたった今発覚したアインズ様本人の自己評価の低さが災いしているようだ。

アインズ様はマタタビのことを理解者として信頼している。だからこそアインズ様自身の卑下をマタタビに投影なされているのだろう。……ひょっとしたらその卑下は、無暗にシモベがアインズ様を持て囃し過ぎた反動なのかもしれない。ともすれば猶の事痛ましい話だ。

だが各々の「へそ曲がり」と「卑下」を解消しさえすれば、二人の思いは素直に通じ合うはずなのだ。その関係の名が友情にせよ恋愛にせよ、対等で良好なものにはなる。

そうなれば、晴れて自分等は不要になるだろう。

「待てアルベド、さっきから話の流れが滅茶苦茶だ。タブラさんのことを話していたはずなのに何故マタタビさんのことを――」

「いいえこれこそ最も重要なことです！」

さっきから頭の中がカキンカキンと煩わしい。眩暈も酷く、尊きアインズ様の御顔がかすんでしまう。あるいは自分事気が直視するのも不敬であるということか。それなら納得だ。

何やら自分の【存在規定】がアルベドの言動を縛り付けようとしてくる気がする。

だがそんなものは関係ない。気まぐれだか何だか知らないが、アインズ様は己に『愛せよ』と命ぜられたのだから、全てを尽くし主人の幸福を遂行するのみである。

だから言うのだ、己の全ての身の丈を。たとえそれが己を否定することになろうとも。『愛する』為に愛されることを捨てるのだ。嫌われてでも、捨てられてでも、愛すべき愛しい方に未来への道を示すのである。

「私はマタタビがナザリックに現れてからずっと考えておりました。

至高の御方々を失った今のナザリックで、アインズ様が幸せになられるには一体何が必要かを。

結論は出ました。あなた様に真に必要なのは、あなた様と対等な目線で通じ合う、マタタビのような存在です。だからあなた様は至高の41人に執着していた、ただそれだけのことなのでしょう。

あるいはなればこそ、実際のところ至高の存在でもマタタビでも、誰でも良いのかもしれませんね。御身と対等に分かり合える存在ならば。忠義に曇った我々シモベには不可能なことですが。

例えばもし、この世界に転移したのが御身お一人だったとしましょう。

それでもきっとあなた様なら、心の底から分かり合えるパートナーを見出せたことでしょう。それこそマタタビのように。だってアインズ様は、知れば知るほど愛さずにはいられない、お優し過ぎるお方ですから。

足枷のように纏わりつく我々の様な卑しいシモベ共はあなたに必要ありません。むしろ……邪魔、です。

我々が囃し立てるだけで御身の心は理想の支配者として縛られて、望みもしない世界征服をやらされる。

タブラ・スマラグディナが敵となり御身が危機にさらされても、数多のしがらみによってシモベは結局お役に立てない。ならばそんなシモベには何の価値もありません。

であるにもかかわらず、我が君、我が君、どうして我々をお見捨てになられない？

いいですか、本当に大事なことは２つだけ。

アインズ様の安全、そして幸福。

そしてそのために本当に守られなくてはならないのは、ナザリック地下大墳墓ではありません。
アインズ様とマタタビ、お二人の未来です」

言ってしまった、言い切ってしまった。
ずっと一緒に居たいのに。
「アルベド」
殺したくない。
謀反者になったけどルベドとニグレドはアルベドの姉妹だ。二人と戦うなんて絶対に嫌だ。
「アルベド」
亡くしたくない。
ナザリック地下大墳墓はアルベドの心の故郷だ。仲間は大事だ、階層守護者もプレアデスも一般メイドも他のみんなも、誰一人として欠けるのは絶対嫌だ。
「アルベド」

愛されたい。

世界で誰よりも、アインズ様の愛を求めてるのはアルベドだ。アインズ様に、誰より一番愛されたい。ギルドメンバーにもマタタビにもシャルティアにだって取られたくない。

いやだいやだいやだいやだ

たすけて、たすけてモモンガ様

理性と感情がハリケーンのように混ぜこぜになって、アルベドの思考は真っ白になった。

最早頭痛は痛みを通り越して、頭蓋の中から脳みそが空洞になってしまったような気がする。

耳も遠い。誰かが何かを呼んでるような気がしたが、意識に留めることもままならない。

このままホワイトアウトして、自分は消えてしまうのだろうか。そんな気がした。

「……」

ふと、意識が浮上する。

最初に感じ取ったのは触覚だ。頭頂部の上に置かれた固く冷たく、けれど温もりを憶える感触だ。

もっとそれを感じたい。意識ではなく本能がそれを求め、死んでた神経が徐々に蘇生されていく。

次に視界が暗転し、一面のホワイトキャンバスが優しく包み込むような漆黒色に覆われた。

意識が戻ると、その漆黒に抱きしめられてるのだと納得する。

そして最後に聴覚が、聞き捨てならない文言をアルベドの鼓膜に震わせた。

「〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉」

支配者の告白

◆

幼少の鈴木悟が好きだったもののことを、今のアインズは思い出すことができない。

もっとも今は、思い出したところで味わう舌も、満たされる胃袋も失っているのだから何の意味もないだろう。

あるいはそれが報いだったのかもしれないと、アンデッドとして生まれ変わったアインズは今更ながらに思った。

好物が何だったかは記憶の彼方に掠れて消えていたが、その最後の思い出が辛く苦しい事実に塗りつぶされていることをアインズはしっかり覚えていた。

それは土曜日の午後８時ごろだったと記憶している。

狭いアパートの一室、その一角に設けられた子供用の勉強机。悟少年はいつものように、学校の授業の予習復習に取り組んでいた。ゲームもネットもＳＮＳにも、悟少年は一切興味をひかれなかった。

そうしていたのは特段やりたい遊びが無かったからともいえるし、母の気を引きたいという幼い下心があったためでもあった。テストでいい点をとると、母は自分のことのように嬉しそうに悟のことをほめてくれる。悟もまた母の喜びが自分のことのように嬉しかった。

ご飯はいつも一人で、冷たい液体食糧ばかりであった。

もちろん親が薄情だからというわけでなく、時代柄食糧のバリエーションが無いし一緒に食べる時間が無いほど忙しいからなのだと悟少年は理解していた。悟の母はいつも悟より早く起きていたし、仕事にだって悟が寝てから帰ってくる。朝に優しくなでて起こしてくれるだけでも、悟少年の心は幸福に満たされていた。

その状況を傍から聞けば、健気な子供に見えるかもしれないだろう。

だがアインズは己の過去を蔑如している。誰よりも何よりも、悟少年の愚かさがアインズには親の仇のように憎かった。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

その日は珍しく、母が早めに帰ってきた。玄関からの声に、悟少年は心から喜ん

で反応した。
描きかけのノートを閉じて一目散にかけていくと、微笑んでビニール袋を手に下げた母がいた。
顔色はとても悪かったが、早めに帰れたことを喜んでいるようだった。
「いい子にしてた？」
「うん」
悟は笑顔で答えた。
「今日はねー、早く帰れたしおいしいの買ってきたよ。今すぐ作るから待っててね」
「やった」
母が料理をしてくれるのは何か月かぶりのことだったはずだ。
重ねて言うが、忙しかったから出来なかっただけで決して愛情が無かったというわけではない。二人がほとんど家に寄り付かず働き通しなのは、悟が小学校に通うための出鱈目な学費を支払うため。悟の将来を想っての為なのだ。
それをよく理解していたからこそ悟は、学校で友達もつくらず遊びにもかまけず、与えられた自由時間を学習の為だけに活用していた。我儘なんて、生まれてこ

の方唱えた覚えはまるでない。
「お母さんの料理は大好きだよ。すごくうれしい」
それでも母が自らの意思で手料理を振る舞ってくれるのなら、悟はそれを遠慮したくはなかった。出来物よりもずっと格段に美味しいから、というのはもちろんある。けれどそれだけではない。
悟は、自分が出来物の総菜を食べてる時の、母の申し訳なさそうな態度が嫌いだった。逆に自分に料理を振る舞う時の、嬉しそうな母の姿が好きなのだ。
だからこそ、悟にとって母の作る料理は何よりもご馳走であり、楽しみであった。
「悟はとってもいい子ねぇ」
なので悟は、顔色の悪い母へと向けた一抹の不安と遠慮を押し殺した。それがどれほど罪深い強欲なのか、知ろうともせず。
「宿題続けてるね」
言い訳をするように勉強机にかじりついた悟は、結局そのまま寝落ちした。
翌朝目が覚めると、台所には母の亡骸が横たわっていた。
幼少の鈴木悟が好きだったもののことを、今のアインズは思い出すことができな

い。

罪深いく忌まわしい母の味も、死に顔に張り付いた優しい笑みも。

◆◇◆

「アルベド」

アインズに畳みかけるように無茶苦茶な自説を振りかざしたアルベドはしかし、突如糸が切れたように目を開けたまま気絶した。

「アルベド」

呼びかけても返事はない。そのまま彼女は体感を崩して傾くように後ろへ倒れようとした。

――スーツ姿で台所に倒れる女性の影が、チラリとアインズの脳裏に過る。

もちろんその女性と今のアルベドは似ても似つかない別人だ。

けれど浮かび上がったイメージは、臆病なアインズに最悪の事態を想起させる。

慌てたアインズは、執務机を飛び超えて倒れこむアルベドを抱き留めた。そのま

まそっと彼女の頭の二本角の間に手を置いた。

そしてマタタビ対策として練習を積み重ねてきた〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉を発動させる。

ユグドラシルというゲームの世界では、わずかなログやＮＰＣとの行動記録を修正するためだけの魔法だったが、この世界では文字通り望むがままに記憶をいじることができる魔法になっている。消費ＭＰは馬鹿にならないが、限界突破したＭＰを有するアインズならば、ある程度の記憶の変容は十分に可能だ。

彼女を悲しませる現実を彼女の中から取り除く。その場しのぎな姑息療法であることは自明である。アルベドの様な知恵者に真実を隠し続けられるわけがない。

それでも今はこの場を凌ぐべきだ。今気絶した彼女を放っておけば、永遠にその意識が失われてしまうような予感がアインズにはあった。

魔法が発動し、やがてアルベドの中の人生録（アカシックレコード）がアインズの精神を浸し始めた。

ＮＰＣとして初めて生み出された瞬間。かつてのギルドメンバーたちの話姿を立ち尽くして傍観する日々。ギルドがモモンガだけになり、もたらされた膨大な空白。

最終日に【真なる無（ギンヌガププ）】を託して大図書館（アッシュールバニパル）へと去ったタブラ・スマラグディナ。

最後に残した忌々しい独り言。

『変わらないね、ナザリックもモモンガさんも。捨てられて尚墓守を続ける様は……実に哀れで見るに堪えない』

直後に現れたモモンガに『愛するように』命ぜられた感動の記憶。マタタビの乱入。

異世界への転移から始まった激動の日々。マタタビを手籠めにするための画策。カルネ村。絶対主のアインズ・ウール・ゴウンへの改名。世界征服計画の発起。

マタタビの反乱騒動。罪悪感の芽生え。カッツェ平野のパーミリオン。ゲヘナ計画。マタタビが因するツアーの乱入。たっち・みーの真実が発覚。伴った絶対主の乱心に激怒してしまった己の失態。直後に気付いたニグレドの謀反。絶対主とマタタビの仲立ち。

ルベドの自立起動の発覚。バーでデミウルゴスとコキュートスと共に飲み明かす。絶対主の真の姿に気付いてしまう。

そして最後に、無謀な計画を明かしたアインズへの激怒と、身を焼くような自己嫌悪。身を焦がすようなマタタビへの憧憬。

それら膨大な記憶の中から、色々想うところのあったアインズはたった今の直前のやり取りだけを打ち消した。

「……う、ぅん」

悪夢にまどろむような、不安げなうめき声が聞こえた。

彼女の意識レベルがわずかに回復したような気がしたのでアインズは安堵した。

胸の中から高熱の間欠泉が吹き上がるような、形容しがたい衝激が空洞の肋骨の中を満たすようだった。それはたちまち〈精神沈静化〉によって沈められるが、残り湯の様な感動がアインズの冷えた肝を温めた。

しかし、それも一先ずのことでしかない。

アルベドが知りえてしまった真実は、間違いの無いことなのだから。

アルベドの記憶を垣間見てアインズは理解してしまった。

誰より何よりアインズの幸福を願う彼らからすれば、自分たちのせいでアインズを不幸にしていた現実は、何より許しがたいことなのだ。

辛いなら言って欲しい。嫌なら声に出してほしい。無理だけはしないでほしい。でなければ、己が存在する意味が無いから。

絶対支配者を気取る滑稽なピエロの実態は、心底からアインズに尽くしてくれているＮＰＣ達にとって冒涜であり悪夢なのだ。

それがわからなかった、理解しようともしなかったアインズは、救いようがない外道であると言えるだろう。幼かった鈴木悟を一人残した、自分勝手な父と母と同じくらい。

「……馬鹿だ、俺は。本当に」

◆

アインズは、未だまどろむアルベドを挟み込むようにして、己の両腕を抱きしめた。

アインズの中の何かの本能的な部分が、全力でアルベドの身体を自分の中に押さえつける。

柔らかい肢体と、鼻腔をくすぐる甘いフェロモンによるものか、もっと別の理由なのか。優しく丁重に扱うべきことはわかっているのに、湧き上がる衝動が抑えられない。

だから当然のようにアルベドは目を覚ました。
前後の記憶を失った彼女からすれば、気付くと突然アインズの腕の中にいるわけで。彼女は動転しながら、麗しい黒髪に包まれた芸術品のように整った面立ちを朱色へと染め上げた。
「あ、アインズ様？　これは、私は、い一体何が!?」
「……」
アルベドからすれば意味不明過ぎるこの状況を、どうするべきかとアインズは悩む。
悩んだが、何よりも最初に彼女の中の致命的な勘違いを正さなければならないと思った。
ＮＰＣの存在がアインズを傷つけているという、ありえない勘違いを。
「突然こうなって、混乱しているのはよくわかる。だが今は落ち着いて、私の言葉を聞いてくれ」
「は、はい」
そして、告白しなければいけないのだ。かつて転移直後に６階層でアインズが

尋ねたことと同じように。
自分がＮＰＣを、いや、彼らのことをどう思っているのかを。
言わずじまいというのはまったく馬鹿らしいことなのだと、嫌というほどマタタビに思い知らされたから。
「嬉しかったんだ。ギルドメンバーが生み出したお前たちＮＰＣが、私のことを慕ってくれていることが。
お前たちが喜んで仕える姿を見ていると、今までナザリック地下大墳墓を維持し続けてきたことに意味があったんだって、そう思えたから」
運が良かっただけのことだとは、もちろんわかっている。
アインズと言うナザリックに固執した割れ鍋を前に、たまたまシモベたちという都合の良い綴じ蓋が現れてくれたという、それだけのことなのだ。
でも、それなら猶の事、アインズは彼らとの出会いという幸運に感謝せずにはいられない。
「だから私は、お前たちの期待に応えられる主人になってやりたかった。そのために色々やったさ。

柄でもないのに尊大に振る舞ってみたり、馬鹿なのに頭が良い振りをしたり」

アインズはこの世界に来てからの日々を思い出す。

元サラリーマンでしかなかったアインズにとって、支配者の振る舞いなどまるで縁のないものだった。

だからすべて独学だ。自分の中の中二的センスなどからどうにかそれらしいモノを引き出して、鏡の前で何度も何度も練習して、それっぽいと思えたら独りでに喜んで。

「もちろん気苦労はあった。やたら過大に評価されたり、知らない間に世界征服をすることになっていたり。気軽に一人で外を歩くこともままならない。アンデッドのはずなのに、胃がギスギスするようだった。でも、お前たちに期待の眼差しを向けられると、ついつい意地を張りたくなって、癖が抜けなくなってしまって」

「……アインズ様」

「はは。全部知っていたマタタビさんには、何度も何度も馬鹿にされたし止めるように口を挟まれた。

でも出来なかった。だって、私は本当に嬉しいと思っていたからだ。この世界に

来なければ絶対に味わえなかった、大切な宝物のような時間なんだ。
だから、そのためなら私は、いや俺は……」
アインズは言葉を切る。
アインズの眼窩の奥の炎が激しく燃え盛ったかのように、熱く痛かった。
「……」
しかしそれも一瞬のことで、すぐに冷めていく。まるで火が消えるかの如く。
アインズはその言葉を言おうか言うまいか迷う。
アインズの心の奥底にずっと敷かれていたある衝動。それを言葉で紡ごうとするほどに、自分が一体どれだけ救いようも無い阿呆だったかがわかってしまったから。
「俺という、弱くて平凡な存在が消えてしまってもいいと、そう思ったんだ」
これは、きっと希死念慮に近いのかもしれない。
アインズは、鈴木悟の忌まわしい記憶の扉に手を掛けて、押し込んで隠していた母親の死に顔を思い出した。
「ナザリック地下大墳墓が絶対支配者という仮面の裏から、幸せそうなお前たちを眺めているだけでもいいと……そんな考えで、これまでずっとお前たちのことを遠

ざけていた」

アルベドの言う通り、確かにアインズはギルドメンバー達とのような対等に通じ合う関係を欲していて、シモベたちとの関係性に息苦しさを感じていた。

『皆さんきっと優しくしてくれますよ？』

だがその息苦しさはマタタビの言う通り、その気になればすぐにでも解決できたはずなのだ。

それでも彼女の助言を無視して彼らに心を閉ざし続けたのは、薄っぺらい自己犠牲という名の自己満足に酔いしれていたからだ。

孤独に震え泣き叫ぶ鈴木悟とモモンガの鼓動を踏み躙ることに、無意味な充足感を覚えてしまったから。

それが小卒資格を残して死んだ父と母への、罪滅ぼしのように思えてしまったから。

「だけど、それではダメなんだよな？」

アインズは強張っていた腕の力をゆっくりと緩めて、腕の中に閉じ込めていたアルベドを解放した。

「なのに俺は……ずっと無意味な意地を張って。それがどれだけお前たちを傷つけたことか」

視線を落とし、黄色く輝く縦割れしたアルベドの虹彩をじっと見つめた。赤く潤んだその瞳は、今のアインズをどのように映しているのだろう。わからない。わからなくて、とても怖い。

「ごめんな、アルベド」

◆

どうして自分が謝っているのか、アインズにもよくわからなかった。

自分はＮＰＣ達に救われているのだと、ただそれだけを述べればよかったのに。なのにいつの間にか愚痴のような懺悔の様なことになっている。

どうしたものか。どうしようもなかった。

アルベドは呂律の回らぬ幼子のように口元を震わせて、今にも何事かを叫ぼうと

していた。
「……どうした」
やはり　責してくるのだろうかと、アインズは心の中で身構えた。
こんなバカな演技をし続けて何になるのかと、言われてしまうのだろうな、と。
しかし、
「無意味などではありません！」
それは悲鳴のような叫びだった。
「どうかお辞め下さい、ご自分を責められるのは」
「何を……」
アインズは困惑する。予想と全く逆の言葉が返されたから。
支配者として猫をかぶり皆の為と独り善がったアインズ・ウール・ゴウンという愚か者。それを彼女はさっきと同じように否定するものと思っていた。
「我々は御身に、アインズ・ウール・ゴウンを名乗られるあなた様の存在に、ずっと救われておりました。
その研ぎ澄まされた支配者としての在り方が、創造主を見失った我々シモベの心

を満たしてくださったのです」

けれども今度の彼女は打って変わって、アインズ・ウール・ゴウンを肯定するのだ。

黒い髪を棚引かせて演者のように堂々と、己の仲間達のことを語り始めた。

「デミウルゴスは賢い男です。彼は創造主から見捨てられていたことを心魂で理解して、誰よりも深く絶望しておりました。

そんな彼に、アインズ様は誰よりも多くの仕事を与えてくださりましたよね。スクロールの素材採集、ゲヘナ計画、黙認された世界征服計画の主任など他にも山ほど。

今ではナザリックの全て者が彼の仕事量を羨望しているほどであります。

絶望の淵に手を掛けていた彼にとって、それがどれほどの救いであったことでしょう」

「シャルティアは純粋で愚直な子です。シモベの中では誰よりも強いのに、想定外

が起こるとすぐに頭に血を登らせて、失敗を起こしてしまいます。
先日の精神支配の一件だって、元はと言えばシャルティアが漆黒聖典とマタタビに迂闊に手を出したことがきっかけでした。
であるというのにアインズ様はそんな彼女を一切責めず、赦し励ましてくださりました。だから彼女はそんな御身に応えるために、トラウマがあるはずのマタタビ相手に戦闘稽古を頼むほどに成長したのです」

「セバスは甘い男です。創造主に似たのでしょうか。成すべき大儀を持ちながら、ついぞ目先の善行に囚われて優先順位を見誤ってしまいます。
その甘さが招いた王国における失態を、アインズ様は許すだけに飽き足らず、ツアレをメイドとして９階層に属させてくださりました。本質的に『悪』であるナザリックにおいて、異端である彼の『善性』を認めてくださる御身のなんと慈悲深いことでしょう。
今思えば、御身が法国に狙われたカルネ村をお救いになられたのは、横にいたセバスの為なのではないですか？」

「コキュートスは外の仕事を強く羨望しておりました。そんな彼にアインズ様はリザードマン集落への侵攻と統治の任を与えてくださりました。
失敗も多くありましたが、武人気質の彼にとって同様の気質であるリザードマン達の統治任務は最も輝ける場所と言えます。
現在も日進月歩ながら、着々と将としての器を高めているところです」

「ナーベラルは――」
「アウラは――」
「マーレは――」
「ニューロニストは――」
「ピクセルは――」
「エクレアは――」

そのようにしてアルベドは、ＮＰＣがいかにアインズに救われてきたのかを、涙

ながらに夢中になって語り続けた。
正直聞いてるだけで歯がゆくて、深読みで脚色された認識が非常にもどかしい。
けれど少なからずアインズ本人の思慮を酌んでいるから、否定しようにもしきれない。
聞いていると、まるで自分が上等な存在であるかのように思えてしまって、頭がおかしくなるようだった。
（なんなんだよ、一体……）
混乱と共に、腹が立つ。
否定されたかと思えば絶賛されて、まるで手の平で弄ばれているのかのような気分だ。
しかしアインズ・ウール・ゴウンを絶賛するアルベドの姿からは、嘘偽りを感じ取ることがかなわない。
先ほどアインズ・ウール・ゴウンを否定したのと同じくらい、純真な真心しか感じなかった。
アインズはそんなアルベドの心がわからなかった。ついさっき記憶を弄る直前ま

では、独りでに胃を痛めていたアインズのことを責め立てていたのに。

二つの姿を見比べたアインズからすれば、酷く矛盾していて理不尽極まりなかった。

（いや、そんなものか。俺だって）

鈴木悟は両親の死を悔いていた。

マタタビ……桜のように早くに自立していれば、過労死などすることはなかっただろう。

けれど父と母が命を賭して小学教育を与えたからこそ、悟はユグドラシル最終日まであの世界で生き抜くことができたのだ。

そうでなければ、今頃自分は考える力も無い部品としてゴミのように使い潰され死んでいただろう。セバスに拾われたあの女のように。

少なくとも、今の自分がここにあるのは父と母のおかげだった。

自分を想って誰かが苦しむのは嫌だ。けれど結局、自分は誰かの苦しみによって救われている。その現実は変えようがない。

アインズ・ウール・ゴウンに救われたというアルベドと、父と母の死を貪った鈴

木悟の葛藤は全く同じものなのだ。

◆

アルベドの語りは長々く続いた。

シモベ一人一人とアインズとの関わり合いを事細かに話し続けたのだから当然だ。

むしろよくそこまで舌が回るものだと、呆れを通り越して感心する。たっち・みーに戦隊シリーズの知識を請うた時だって、ここまで長くはならなかった。

ここまでくるとアインズとしても聞き飽きてくるというか、お腹一杯でたくさんである。

さすがにアルベドも察したのか、途中で咳き込んで切り替えた。

「……最後は、私のことを。

私はアインズ様に救われました。

我が創造主タブラ・スマラグディナは、去り際に御身以外の至高の存在がナザリックを捨てたことを明らかにして消えていったのです」

それはアインズが覗いた記憶にも確かにあった。

『変わらないね、ナザリックもモモンガさんも。捨てられて尚墓守を続ける様は……実に哀れで見るに堪えない』

理不尽とは思えなかった。

タブラという常人からすればギルドを一人で維持し続けたアインズなんて気持ち悪く映っても仕方がないのだ。

アインズにとっては溜飲の下がる言葉だが、ナザリックに忠誠を誓う自由意志を持ったＮＰＣにはとてもとても看過できる言葉ではなかっただろう。

「もしそのまま自分が放置されていれば、創造主に見捨てられたシモベとして絶望しながら生きる他がありませんでした。

ですがあの時御身が私に『愛するように』命じてくださったから……必要としてくださったから、世界に絶望することなく生きていけるのです。

そしてそれは、ナザリックに仕える皆も同じことがいえます。アインズ様がアインズ・ウール・ゴウンとして我々のもとに君臨してくださった。だから……」

「つまり、何が言いたい」

「……長々と纏まりのない話で誠に失礼しました。
我々はアインズ様に多くのモノをもらい過ぎました。だから……怖くなったのです。
こんなに沢山頂いているのに、我々はアインズ様に何も尽くせていないのではないかと。
ですが、よかったです。様々なすれ違い等があったにせよ、アインズ様が我々の忠義を心から喜んでくださったのだとわかって、よかったです。本当に、よかったです
生まれてきて、よかったです」

最後にそのように言い切ってから、アルベドは膝を落として崩れ落ちた。
どんな言葉を掛けるべきか、ほんの少しだけ考える。考えるが、それ以上にさっきから頭の中である一言が渦巻いていて、どうしようもなかった。
だからアインズは、脈絡も会話の流れも全部無視して、感情に流されるがまま崩れ落ちたアルベドを抱きしめて耳元に囁いた。

「アルベド、愛してる」

甘々外交　上

風を切って青い平原を掛ける抜ける馬車の中。

馬車と言ってもマジカルパワーで揺れも無ければ酔いもしない、そんな豪華寝台列車の室内みたいな快適ルームで、マタタビはぼんやりしながら椅子に腰かけていた。

猫耳の生えた長い黒髪を背後に立つシャルティアさんは思い思いに弄くりまわす。

櫛で優しく解かしてから、ツインテールやらポニテやら夜会巻きやらお団子やらと好き放題だ。

「ふーん♪　ふーん♪　ふーん♪」

「……プルル……フルル…」

思いのほか心地よい彼女の手の感触に意識を預けながら、マタタビは感傷に浸って思い起こす。

自分の頭髪を誰かに触れさせるのは一体いつ振りのことだろうかと。

これは一度リアルの電車で痴漢されて知ったことだが、どうにも桜は胸とか尻とか以上に頭を触れられるのが嫌な性分であるらしい。（痴漢野郎の睾丸を握り締めてやり返したのは言うまでもない）

それくらい、桜は床屋とか美容院とかに縁がなかった。

なので桜は伸びた髪の毛を全部自分で処理していたのだ。リアルでは女っ気の一切ないベリーベリーなショートヘアーである。シャンプーも少なくていいしガシガシ洗えて超楽である。

そんな桜以外に桜の髪を手入れしたのは、10年前に家出して以来顔も見ていない母さんしかいなかった。その時までは今のマタタビみたいに煩わしい長い髪をしていたものだ。自立して以降の桜を見たら、男みたいな髪型に母は卒倒するに違いない。

自分で言うのも変な話だが、つまるところ、マタタビはシャルティアさんに対してそれなりに気を許しているということなのだろうか。

「ゴロゴロゴロ……にゃふー」

まぁ単に気を許しただけで頭髪を許すほど私は安い女ではないのだが。

このような現状に甘んじているのはそれなりの訳がある。勘違いされたくないが、甘んじてるだけで甘えてる気は毛頭ない、毛髪だけに。

またその訳というのが厄介で、今の私が不満を抱いているのはまさしくソコだった。

「……こんなのが、スレイン法国と内通していた私への仕置きだとでもいうのですか。肩透かしどころではありませんよ」

「ん―」

言葉を詰まらせたシャルティアさんの代わりに、窓際に腰かけていたアウラさんが口を開いた。

「確かにあたしとシャルティアは、あんたとスレイン法国の処遇をアインズ様から一任された。

でもぶっちゃけ扱いに困るんだよね」

「アインズ様本人が私に何もしなかったから？」

「一番の理由はそう。スレイン法国関連で身勝手をやったあんたの処罰を直接の関

係者であるあたしたちに委ねたのは、アインズ様なりに筋を通してくださったからだと思うんだ。

でも、だからと言ってアインズ様の慈悲を受けてるあんたを過剰に罰するわけにはいかないでしょ」

「……それで、この羞恥プレイが手打ちということですか」

「いいじゃん可愛いんだから」

「本気で言ってるの？」

マタタビは己の足元にかけられたふわっふわなフリルスカートを握りしめる。

壁面に取り付けられた姿見を見ると、赤黒いゴシックロリータドレスを身に纏った猫耳少女が椅子に腰かけて仏頂面を晒していた。

服はシャルティアさんがペロロンチーノから与えられたコレクションの一つらしい。もしこの姿を奴に見られたらと思うと恐ろしくて敵わない。

例のメイド服用にホワイトブリムが形成したマタタビのキャラクターデザインは、それはもうプロの御業というだけあって信じられないくらい可愛いものだ。プレアデスや一般メイドの皆様にだって比肩するレベルだろう。

けれどその本性がクソドブカスであると誰よりも知っているマタタビにとって見れば、ゾンビにボディペイントを塗りたくってるのと同じである。

猫耳と尻尾が生えているのは、常時発動していた人間化を限定的に解除させられているからだ。

きっと恐らくそのせいで、かなり高い確率でと可能性で、今の私はビーストテイマーであるアウラさんが纏うオーラの影響を受けやすくなっている。うっかり理性を手放そうものなら今にも彼女の頬擦りすることになるだろう。

しかし気付くと、腰から伸びる尻尾だけが何故かシャルティアさんの足元へと絡んでいる。身勝手に蠢く黒い尻尾。腹が立つので仕置きとして赤いパンプスで踏みつけたところ……すごく痛い。

「……うぅ。しかしこれ、手打ちされる方としては色んな意味で釈然としないんだけど？」

「ふふ、素直じゃないでありんすね！」

なんでシャルティアさんがこうも得意げなのか首をひねっていると、アウラさんが横やりに答えてくれた。

「あぁコイツね、自分が失態を犯したことについてでアインズ様に罰を求めたの。
そしたら罰とは名ばかりのご褒美を頂いてしまったから原作４巻でアインズ様の椅子にされた
今のあんたみたいにモヤモヤしてさ。
だから自分も同じことしたくなったんじゃないのかな？」
「ア！　アウラ!?」
「……ふーん」
顔を赤くするシャルティアさんのことをアウラさんはニヤニヤと見つめる。
微笑ましい話ではあるが、さらに状況が訳分からなくなってきた。
「アウラさん。さっきは一番の理由なんて言ったけどさ、アインズ様の御意向とあなたたちシモベの感情は全く別ベクトルでしょう？　だのに何故、あなたたちは私に友好的であろうとするのですか？」
この世界において現実化されたＮＰＣは、様々な精神的制約を掛けられているにせよ、当たり前のようにそれぞれの価値観を有する普遍的な一個人だ。
いくらアインズ様が白を黒と言い張っても、然り然りと表面的に同調することは

あれど、奥底で白を白と感じる心は無くせない。いくら言われても人間嫌いを治せないナーベラルさんみたいに。

「諸々の事情があったにせよ、私はあなたたちを殺しかけた。

そしてその根本の原因であるスレイン法国のことをアインズ様とあなたたちに敢えて隠蔽してしまったのは事実だ。

これではある意味、私があなたたちの敵陣営に回ってしまっていると言ってもいいんです。

もう一度聞きますが、どうしてあなたたちは私に友好的であろうとするのですか？　非常に理解に苦しみます」

マタタビの頭上を蠢く小さな手がふと動きを止めた。

「それはおんしが、わたしのことを本気で助けようとしてくれたからでありんすよ。身を挺してまで、全速力で。ウソ偽りも打算も無く」

「ごめんなさいね。打算が無かったからこそ、考えなしに被害を拡大させたんだし」

「もう、御託はよしなんし。あなたは絶対に敵じゃありんせん。それぐらいは、刃を交えればわかるでありんす

このスレイン法国のことだって、何か考えがあったんでしょう？　大事な訳が」
「無いですよそんなもん。訳なんて……私がクソ甘ちゃんの反吐が出るような非殺生主義者だから。
そしてそんな自分だとアインズ様に知られるのが嫌だったから。だからあなたたちを裏切った。これが、大事な訳だと思う？」

◆◇◆

呆れるほどに蕩け切ってシャルティアに撫でられていたマタタビだが、会話が核心に迫るにつれて生やした耳も尻尾もぞわぞわと毛を逆立てた。まるで飼い猫と借りてきた猫が入れ替わったかのような転身だ
アウラはそんな彼女の姿に、傷を舐めて傷口を広げたり化膿したりする馬鹿な獣の習性を想起させた。
「大事なんでしょ、あんたにとっては。だからこんなバカな……いやこんな行動をとったんだ」
「……かもね……私が考えなしの甘ちゃんバカで、それを反省してアインズ様に全

部白状した。話はそれだけです。もういいでしょう？　こんなこと」
「よくない!!」でありんす！」
アウラとシャルティアは声を合わせて否定する。
マタタビが大事な何かを隠しているのは火を見るよりも明らかで、しかしどうしても口を割る気はないようだ。不敬だけれど下手をしたらば、アインズ様ですら事の真相を知らないのかもしれない。
マタタビがただの敵であれば気が楽だった。味方だったら、気苦労はするが頼もしく思えただろう。
しかし今の彼女はどちらでもないのだ。とても残念なことに。
「……もういいわ、あんたから話を聞くのは諦める。代わりにあたしの話を黙って聞いてて」
「どうぞお好きに」
マタタビは神妙に目を細めてから投げやりなため息をついた。
だがその気だるげな態度の中に明らかな怯えの色があるのをアウラは見逃さない。

彼女はいつもこうだ。誰に何を言われても、どんな時でも自分の意思を曲げない。そしてその考えは往々にして、利他中心的なものなのだ。

だったらそんな相手には、歩み寄ってやるしかないだろう。何を考えどうしたいのか、言動から読み取らなければいけない。

アウラは、この世界に来る前から今までの全ての記憶を動員してマタタビのことを考えた。

自分は決してデミウルゴスやアルベドのように巧く頭は回せない。

それでも、これまでの彼女を取り巻く様々な変化には、見逃せない程の数多くのヒントがあった。

正しいのかはわからない。それでもこれが、アウラなり考えた出した一つの結論だ。

「マタタビってさ、あんころもっちもち様の御息女か妹君であらせられたりする？　いやこの場合なされますか、かな」

「うぇー!?　そうだったでありんすか!?」

「黙ってシャルティアさん。アウラさんも、藪から棒だね。どうしてそう思ったん

ですか」
「本当にあんころもっちもち様かはわからないけどさ。少なくとも、至高の御方々のどなたかの親族だろうなって確信はしてる。
アインズ様は他の至高の方々と同じように対等な雰囲気であなたに接していたから」
立場としては、ユリ・アルファの創造主である やまいこ様の妹君、あけみ様が一番近いだろう。
彼女は何度かナザリックに招かれて、その時はアウラも今のマタタビみたいに着せ替え人形を勤めていたのを憶えている。
「それに最近のアルベドとデミウルゴスのあなたへの扱いも、ちょっと恭しすぎるから。この間玉座の間でわかったけど変な勘違いだってしてたみたいだし」
「そういえば、ごく一部でアインズ様とマタタビが婚約なさるっていう根も葉もない噂が流れてたんでありんしたね。
……まさかアルベドが鵜呑みにしてるとは思いもしなかったでありんすけど」
「でもほら、マタタビの立場をアルベドが知っていたとしたらそこにも合点が行く

でしょ。

いくら階層守護者統括でも、至高の御方々と直系の親族であると知ってしまえば自分よりも相応しいとか思っちゃったんじゃないのかな。わからないけど」

シャルティアは腕を組んでうーんと顔をうならせた。

「どうでありんしょう。あのアルベドがそれくらいのことで妃の座を譲るとは思えないでありんすが」

最近のアルベドは、例の精神支配の一件があってから、アウラたち他のシモベとどこか距離を置いてる節があった。

少し前にだって、休日にナザリック内を散策しないかとシャルティアと二人で誘ったが断られてしまったぐらいである。

何を考えていたのか少しつかみどころがない。

「……うーんー」

一方でマタタビはというと、露骨な動揺が顔に現れていた。アウラは知っている。マタタビは隠し事はよくするが、すぐ顔に出るので嘘をつくことは出来ないのだ。

本当に あんころもっちもち様が親族なのかはわからない。だがきっと当たらず

とも遠からず、と言えるのだろう。
ともかく話を続けよう。
「先日、アインズ様があなたとの噂を払拭された後、世界征服計画の指令も否認なされたよね。
あの後、メイド長のペストーニャがこっそりあたしに言ったんだ」
『……とても言いにくいことなのですが、正直なところ世界征服計画が無くなってホッとしました、ワン
アインズ様はお強い御方。目的の為とあらばこの世界の人々を躊躇なく踏みつぶしたことでしょう、ワン。
もしそうなれば……極めて不躾な事でありますが、私は御方に反旗を翻さねばなりませんでした。
それが、あんころもっちもち様に生み出された私の在り方ですから……ワン』
「ここからは完璧にあたしの妄想なんだけどさ。
仮にペストーニャの創造主である あんころもっちもち様が、非殺生主義者だったとするね。

それを御息女か妹君であらせられるマタタビは知っていて、でもアインズ様しかおられない今のナザリックでそれを主張することはことは出来なかった。どう日和って考えてもこの世界で非殺生主義なんて現実的じゃあないしね。

だからできる限りの抵抗として、アインズ様がスレイン法国へ報復しないように色々隠してたんじゃないのかな。

どう？　あたしの考えはどのくらい当たってるかな？」

アウラの問いの回答は、マタタビが口を開くまでもなくわかることだ。

どんな表情に変化するやら顔色を窺っていると、思いもよらぬ意外なものに変化した。

「や、やだ！　泣かないでよちょっと！　困るって！」

「……ひぅ、……。ぐずっ、別に何が悲しいということもありません。最近流行りの花粉症です」

「カフンショウって何よ！　わたしだってもっとマシに嘘付けるわ！」

眼を急に真っ赤にして涙を流すマタタビに、思わずシャルティアまで素になって心配をする。

それから無駄に強がるマタタビをひとしきり宥めてから、アウラとシャルティアは彼女の言葉をゆっくりと待った。

無駄に厚い面の皮で、さっきの泣きじゃくりが嘘のようにキリッとした態度でマタタビは口を開いた。もっとも目じりだけは湿っているので台無しだが。

「わかりました。白状できるところまでは最大限お話しします。

ご明察の通り、私は至高の41人のどなたかの娘です。あぁでも少なくとも、ぶくぶく茶釜様でもペロロンチーノ様でもありませんからそこはご安心を」

「そこは安心するところなの？」

「えぇそうですよ。何せ最近分かったことですが、どうやら私の実の親はこの世界で悲運の死を迎えていたそうですから」

「「!?」」

アウラとシャルティアの間に驚愕の波紋が広がる。

至高の御方の悲運の死という衝撃の事実。

「嘘……」

「……そんな」

二人は言葉を失う。それはそうだ。マタタビが指しているのが誰かはわからないにせよ、至高の41人はだれしも偉大で強大な存在なはずなのだ。それが、悲運な最期を迎えるなど想像もできない。

41人すべてがナザリックに揃う日が永遠に失われてしまったのかと、そんな信じがたい悲劇が起きてしまったなんて信じたくない。信じられるわけがない。

「本当の、ことです」

しかしマタタビの言葉が、仕草が、表情の淀みが、全てがそれを真実であるのだとアウラたちに突き付けてくる。

マタタビは隠し事は多いが嘘だけはつけないのだ。その彼女が言う以上、信じるしかないのだろう。

深い深い絶望が、アウラとシャルティアの心に影を差した。

「……重ねて申し上げますが、どうかご安心くださいね。私の親はぶくぶく茶釜様でもペロロンチーノ様でもありませんから」

「でもそれじゃああんたが！　ごめん！　あたし、酷いことをあなたに聞いちゃった！」

「気にしないでください、と言っても無理がありますか。ただ今は一応、アインズ様が何とかする方向で動いてくださってるので」
「蘇生、できるんだよね？」
「簡単ではないけど、出来るらしいよ。ともかくこれ以上はノーコメントです」
話したくないし本題からそれるので。
安堵の息を共に吐いたシャルティアとアウラに、そう言ってマタタビはバッサリと言葉を切った。
それから立ち上がったマタタビは壁まで歩き、遠い目で流れる車窓の景色を追う。
ゴスロリ服をまとった彼女の立ち姿はしかし、何時にも増して誰よりも大人びているようだった。
「……うん、ごめんわかった。続けて」
アウラが促すとマタタビはにっこりと、けれど物憂げに微笑んで二人を見た。
「まぁこの後は大体アウラさんのご明察そのまま。私の親はねぇ『誰かが困っていたらたすけるのは当たり前』なんて、不細工な信念を抱いていたんですよ。力ある者は弱きものをできる限りたすけなければいけないとか、力ある者には責任が伴う

とか、頭の痛くなるような甘い理想論ばかりです」
マタタビは皮肉めいたことを言いながら、それでもどこか懐かしそうな表情を浮かべていた。
「もし私がそのことをアインズ様に話してたら、アインズ様は心を痛めてナザリック全体の運営をそっち方向に向けていたでしょう。
でも、私は思った。いくら私のお父さんでも、もう帰って来れない御方の極めて偏った思想なんて、アインズ様の耳に入れる価値はないだろうと。だって虚しいじゃないですか。たとえどんなにアインズ様やあなた達が父の理想に準じて振る舞っても、戻ってこない父がそれを喜ぶことはないのですから
だから私は、私だけが父の心を忘れないでいればいいと思ってました。ええですから、全部アウラさんのおっしゃる通り、スレイン法国のことはその抵抗です」
そこまで一気に喋ると、マタタビは恥ずかしそうに笑う。
それは、今まで見たことがないぐらい可愛らしくて優しい笑顔だった。
「バッカみたい」
「大馬鹿でありんす、おんし」

シャルティアとアウラが口々に言う。

だがそれは、決して否定的な感情ではなかった。むしろそんなことを言ってしまう自分自身を恥じるような口調で。

これはいっそ清々しいまでの強がりだった。

◆

マタタビはどのようにすることが正しかったのだろうか。アウラは考える。

今みたいに最初から全てを包み隠さず話すことこそ、一番正しい選択だろう。

ようはマタタビは、自分の父君が死んで生き返らないことを知ってしまって、だから父君の価値観をナザリックに反映させることを躊躇したのだろう。

しかし意を決して訃報を打ち明けてみれば、アインズ様が蘇生御手掛かりを手に入れたから、生き返ってくれるならとその父君の信条をアインズ様に打ち明けたのだろうか。アタリをつけるとしたら凡そこんなところか。

一人でうじうじ考えてトンデモナイ方向へ突っ走ってしまう、いかにもマタタビらしい失敗だ。

しかしアウラは思ってしまう。

もし、ぶくぶく茶釜様がアインズ様と相反する考えだったらどうしようかと。

そしてもう、ぶくぶく茶釜様がお戻りになられないとしたら、どのようにするのが正しいのだろうかと。

考えようとして、しかしどうしても頭が痛くなったのでアウラは考えるのを放棄した。

そして溜息を吐く。

マタタビも、アルベドも馬鹿だ。

秘密を、悲劇を、憎悪をすべて抱え込み、自分だけで問題を解決しようとするのだから。

そしてそんな彼女たちの懊悩に気づきもしない自分は、どうしようもない間抜けに思えた。

甘々外交　下 ＋α

スレイン法国の首都と呼ばれる場所の外周壁前で馬車はいったんストップさせた。

ここから臨むのは敵地である。

アウラとシャルティアとマタタビは各々戦闘準備を整えてから、気を引き締めて下車をした。

アウラは移動中周囲に展開させていた魔獣軍団を一纏めにしてから、特に変わりがないかを確認。

シャルティアは紅蓮色の全身鎧（フルプレート）とスポイトランスを携え、〈異界門（ゲート）〉を発動して偽ナザリックに配置していたアンデッド軍団を呼び寄せる。死の騎士（デス・ナイト）１０７体、死者の大魔法使（エルダーリッチ）い24体、ナザリック・オールドガーダー70体、魂喰（ソウルイーター）らい31体。

マタタビはインベントリから傭兵ＮＰＣの召喚アイテムとコストを山のように取

り出して、膨大な金貨を惜しみなくつぎ込んでレベル80を超える傭兵ＮＰＣハンゾウを10体も召喚。

それからケット・シーの種族スキルで気配感知能力を最大限に引き上げてから、シャルティアから借りたゴスロリ服から防御力に優れるメイド服に着替えた。

しかしシャルティアにつくってもらったツインテールヘアはそのままだ。もしかして気に入ったのだろうか。

万が一の後詰として少し離れた場所に、コキュートスとマーレの率いる部隊も潜伏させている。

このように万全の態勢を整えたのは、スレイン法国がプレイヤーの遺物や世界級アイテムまで保持していたことから当然の処置だ。

シャルティアとて、格下と思しき漆黒聖典相手にすら不覚を取ってしまうことがあったのだから。もちろん世界級アイテムは３人とも所持しているので万が一も無いだろうが、油断は決してできないだろう。

「マタタビの内通情報が正しければこんなに用意する必要はないだろうけどね」

「……そうですけど、アインズ様に言わせれば、取りこし苦労はするに越したこと

がありませんから」

「準備し過ぎて肩透かしくらいが丁度良いでありんす」

やたら気を重くするマタタビにシャルティアが同調する。アウラも、そうだなと思った。

とはいえ案の定このすぐ後に、自分たちの心配はほとんど杞憂だったと明らかになったのだが。

都市の入り口でアウラたちの軍勢を出迎えたのは、貧弱極まりない衛兵と魔法詠唱者達の部隊、六色聖典の神官長を名乗る６名の国家首脳たち。そしてその横にはバツが悪そうな顔をしたマタタビの影分身。

どうやら彼女が事前に上手く根回ししていたようで、戦力差による威圧外交の面もあってナザリック側が予定していた交渉はあっさりと達成できた。

ナザリック側が要求した主張は主に三つだ。

一つはシャルティアと漆黒聖典との衝突による損害賠償請求

二つ目は法国民のナザリックへの恒久的な死体提供

三つ目は……向こう側の主張でもあるが……最低限の不可侵平和条約

まずはシャルティアと漆黒聖典の接触事故の損害について。

法国側の主張としては、限定的な未来視を可能にする魔法によってザイトルクワエの復活が確実とされていたので対策するつもりだったようだ。

しかし結局一件は、ザイトルクワエをアウラたちが既に処理した事情も相まって、ナザリックのテリトリーであるカルネ村とトブの大森林に接近したスレイン法国側の落ち度となった。そして世界級アイテム【傾城傾国】を筆頭としたドロップアイテムの所有権は完全にナザリックのものとして纏まった。

ナザリックとしては法国へさらなる損害賠償をとりたいところだったが、マタタビの調査結果でこの国には回収した漆黒聖典の所持アイテム以上の価値があるアイテムは殆ど無いようなのだ。

そしてユグドラシル色が強い魔法文化ということもあって、アインズ様が欲しがりそうなこの世界独自の魔法アイテムもほぼ無い。

どこぞの王国貴族が農民に敷く悪政でもあるまいし、乾いた雑巾を無理に絞っても総合的な利益はマイナスになる。ナザリックの利益をしかと見極めて要求するのが最善だ。

というわけでナザリックが法国に求めたのはこの世界の情報だった。歴史、地理、勢力図、独自進化した魔法。聖遺物扱いされていた六大神健在時代のプレイヤーが残したと思しき資料。

それら一切が納められた、いわば国家の財産とも呼べるスレイン法国の国立図書館の書物全てを一方的に差し押さえ、ナザリック10階層の大図書館（アッシュールバニパル）へと運び込まれた。

凝り固まった宗教家や歴史家たちは悲鳴を上げたが、人的被害をもたらさないだけむしろ感謝してほしいものだ。

このナザリックの大軍を前にして自分たちの首皮がつながっていることがどれほどの奇跡なのか、理解できない者は居まい。マタタビが気を利かせていなければ今頃、アインズ様の逆鱗に触れたこの国は地獄絵図だったのだから。

次に死体取引の協定である。アンデッドの素体や食料やスクロールの素材などとして、人間の死体はナザリックでは非常に使い道が多い。

というわけでナザリックは老衰とか病死とかで自然死した死体の提供を法国へ要求したわけだ。もちろん倫理観などのため法国は渋るが、断れば今すぐ法国民が死

体にされるだけなので当然そっちよりマシということで話は決まった。

しかし法国側は死体管理システムや国民との折衝などの問題があるので本格的な供給は数年待ってほしいと主張。

流石にこれ以上の譲歩はナザリックの威信にかかわるので、シャルティアが本気の殺気で威圧を掛けて、それにより2年という明確な期限が設定された。

最後に不可侵条約。これをアウラたちが主張した時の相手方の拍子抜けした表情は、間抜け過ぎてあまりに印象的だった。

二つ返事で締結されるかと思いきや、しかし法国の神官長たちは一つだけ懸念があるという。それがマタタビの事前報告にあった最重要警戒対象の番外席次『絶死絶命』の存在だった。

国家としてナザリックに恭順することは出来るが、番外席次の好戦的な性格がそれを許さないのだという。

よりにもよって１００レベルプレイヤー相当の最高戦力が恭順を拒絶するとなれば、流石にアウラたちとしても矛を構える覚悟を固める。しかしそれもまた杞憂であった。

なんと影分身のマタタビが番外席次のことをナザリック陣営へスカウトし、彼女はそれを受け入れたというのだ。

番外席次は常々己より強い異性と交わり強い子を孕みたいと公言しており、それならばとマタタビがセバスかデミウルゴスの紹介を約束して話が纏まってしまったらしい。

当人たちへは事後承諾になることを除けば大よそ最善の結果と言えるのではなかろうか。

あとは適当に中位アンデッドの貸し出し契約と、最早捕虜としても無価値な陽光聖典隊員を死体含めて送還する手続き。マタタビが殺した第一席次の死体送還の手続きをして大体の交渉は終了した。

ナザリックの初外交としては信じられないぐらい生温くてどこを切り取っても甘ったるい結果に終わったわけであるが、首謀者であるはずのマタタビの表情は終始ずっと曇りも様だった。

「もうちょっと、嬉しくしたらいいんじゃないの。あんたの願い通りでしょ？」

アウラは帰りの馬車の中で、押収した書物の一冊に顔をうずめるマタタビへ嫌味をぶつける。
「お前たちの不利益を喜べと？」
「そうだよ、じゃなきゃあたしたちは不愉快だ」
「……」
「あのさ、別にあたしはアインズ様たちが望むままにいられればそれでいいんだ。他の連中のことはどうでもいいんだよ。ナザリックのシモベ全員がそう思ってる。でもあんたがそんな顔してたらみんな不安になるじゃん。もっとこう、なんか喜びなさいって。その方が可愛いし、アインズ様だって喜ぶと思うんだけど？」
「そうですね。アルベドさんにも、アクターさんにも似たようなこと言われたし。わかってはいるんだけどさ」
マタタビの眉間に刻まれた深いシワは消えなかった。
「でもさ、大はしゃぎして喜んだりしたら流石にあなたたちも腹が立たない？」
「可愛げ無いでありんすねぇ」
「ごめんごめん。正直に言えば、この結果に収まって素直にホッとしました。その、

我儘に付き合ってもらってありがとうございました」

マタタビは素直な苦笑いを浮かべて、厳かに二人へと頭を垂れた。

◇◆◇

これは夢、夢なのだ。もはや世界線に分かたれてありえなくなった未来の夢。

夢に見るほど焦がれた、とある運命の残骸なのだ。

〈黒き豊穣（イア・シュブ・ニグラス）への貢〉

晴れ渡るカッツエ平野の地平を黒い息吹が駆け抜けて、瞬間７万人の命が失われた。

そして生存者たちが絶望の余韻を味わう間もなく、さらなる災禍は解き放たれる。

７万もの屍の上にどす黒い球体が昇り上がり、すぐに弾けて５体の触手の怪物たちへと生まれ変わったのだ。

『メェェェェェェェェェ!!』

『メェェェェエエエエエエ!!』『メェェェェエエエエエエ!!』
『メェェェェエエエエエエ!!』『メェェェェエエエエエエ!!』

生命の冒涜を極めた魔法を唱えてしまった渦中の男アインズ・ウール・ゴウンは
しかし、失われた命のことなぞ一切目もくれず起こった結果を前に楽しげに笑う。
「素晴らしい。最高記録だ。おそらく5体も召喚できたのは古今東西見回しても
私しかいないぞ。これは本当に凄い。やはりあれだけ死んでくれたのに感謝しなく
てはならないな」

男にとって有象無象の命はものの数値でしかなく、この世界の在り方はどこまで
行っても遊戯の延長線上にあった。

アインズ・ウール・ゴウンの利益となることならば如何なる行為も正当であると
知る男は、だから冷酷に残酷に楽し気に命という命を弄ぶ。

「ああ、やってみようか。追撃の一手を開始せよ、可愛らしい仔山羊たち」

好奇心。そう、この上ない好奇心によってだ。そのために男は仔山羊たちに手を
翳し、軍勢への進軍を命じたのだ。

そこからは正に地獄絵図だった。

ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃと、ぐちゃぐちゃぐちゃと、ぐちゃぐちゃと。

床の上に積もった埃を攫っていくように、平野に広がった人波の大軍勢を５つの黒い竜巻が音の速さで掻き分ける。

１秒ごとに百人単位の人間がつむじ風のように天空へと巻き上がり、血と肉の飛沫が深紅の猛吹雪となって吹き荒れた。

屠られる猿もどき達の悲鳴と断末魔が大重奏となって虐殺場という名のコンサートホールを満たしていく。

「ぎゃぁあああああああぁぁ！」おぼぉおお！」「やめぇええええ！」

「たすけてててええええ！」」「いやだあああああ！」

「うわぁあああああ！」「死にたくねぇよぉぉおおお！」

富んだものも貧しいものも、未来に希望を持っていたものも、絶望と共に泥水を啜って生きるものも、

愛する者がいるものも、帰りを待つ者がいない者も、死に場所を求めるものも、

生き場所を求めるものも、
全てが踏まれて潰されて斬られて抉られて躙られて、そして地べたに等しく均された。まさに文字通りの蹂躙と言う他にない。
そうして総計14万を殺した殺戮者、アインズ・ウール・ゴウン。
見るものにその姿はどう映るか。きっと魔王とか、邪神とか、悪魔とかそういった悍ましく邪悪で冷酷なイメージばかりを抱くことであろう。
よもや想像できるわけが無いのだ。
この男の正体が当たり前のように踏み躙られていた凡庸な弱者であることなど。
温和で気弱な、穏やかな男であったなどと。
だからタブラ・スマラグディナはそんな男の生きざまの猛烈なギャップに萌えていた。
それはもう、夢見に焦がれるくらいには。

◇

「……使わなきゃよかったですね、未来視なんて」

黒曜石の塊を削って作られた玉座の上で、陰惨な気分と共にタブラ・スマラグディナは目を覚ました。

夢の中で見た光景が、まるで現実に起こった出来事のように脳裏に焼き付いて離れなかった。現実に起こりえたかもしれないが、もうあり得なくなったことなのに。

奴隷のエルダーリッチであるパーミリオンは今は居ない。いつものように外のカッツェ平野周辺を、タブラの指示通りにフライングダッチマン号に乗ってさまよっていることだろう。健気なことだ。

独り時間が長いと独り言が癖になる。タブラはいつものように誰に向けたわけでもない言葉を、城跡地下室に響かせた。

「でも、仕方がないですよね。あの時はちょっと退屈だったんだから。脳食いは飽きてたから魔法研究でもって思って、透明化でスレイン法国に忍び込んで。

そしたら未来視なんて面白そうな魔法があるもんだから、彼の十二わせたらあんなもんが見えてしまって」

アインズ・ウール・ゴウンを名乗るオーバーロードによる、カッツェ平野の大虐

殺。

その光景に、タブラは心から惹かれてしまったのだ。

蹂躙。大虐殺。人外にのみ許された圧倒的暴力による美の芸術。

タブラとてその気になれば同じようなことは出来るが、プレイヤーや竜王に目を付けられる恐れがあってあえてやらなかった。

タブラの心をつかんだのは、生産者表示効果という奴だった。あの気弱で温和で穏やかだった仲間想いのユグドラシルプレイヤーのモモンガが、かの圧倒的で絶望的な地獄絵図を生み出した張本人であるというリアル。なんというおぞましいギャップであろう。

実のところタブラ自身人間のころから異常者である自覚が強くあった、この世界にブレインイーターとして生まれ変わった際も倫理感含め特に意識が変わるようなことなど一切なかったのだ。しかし彼はタブラより遥かに狂っている。とてもとても狂っている。

小さな悩みが大海原に流されるような心地でもって、タブラ・スマラグディナはアインズ・ウール・ゴウンの在り方に救われた。

だからクレマンティーヌの記憶越しに彼を見た時は感動で体が震えたものだ。

いつかこの未来を目にするために、様々な努力を積み重ねてきたものだった。しかし最早すべてが無為に期して、終わってしまったのだ。

孤独に狂う絶対支配者は最早この世にいないのだろう。見目が同じでも今の彼はタブラの知る者と全くの別人なのだから。

「ああ憎い。憎いなぁマタタビ君」

だからタブラ・スマラグディナにとってマタタビの存在は厄災以外の何物でもなかった。

そしてきっと彼女にとっても、今のタブラ・スマラグディナの存在は許せないはずなのだ。

転移してたったの一週間で白金の竜王にたどり着いた彼女である。デタラメな推察力を持つマタタビは間もなくタブラの全てを解き明かして、怒りと共にこの身に刃を突き立てるだろう。

もちろんただで殺されるわけにはいかない。相応の罠と準備でもって生き残る術を尽くすだけだ。

間も無く、そう間も無くにすべてが終わる。誰が生き残るのせよ。

◆以下、最終章予告◆

『自称世界守護者』ツァインドルクス＝ヴァイシオン
VS
『家出娘』佐々木桜
「お願いします！　力を貸してください！」
「頷くわけにはいかないかな」
『ナザリック最強の個』ルベド
VS
『絶対支配者』アインズ・ウール・ゴウン＆『守護者統括』アルベド
「対象補足、ギルドマスター：モモンガ。脅威度演算、許容範囲。これより殲滅を

開始する」
「いくら可愛い妹でも敵ならば容赦しないわよ？」
「全然性能が可愛くねぇ！」

『ギャップ萌えの男』タブラ・スマラグディナ
VS
『千変万化の顔無し』パンドラズ・アクター（&マタタビ）
「ふざけんな！　話をややこしくすんじゃねぇですよ！」
「ややこしいのは君の頭だよ？」
「……其処だけは深く同意いたしますタブラ様」

『屋台崩し』マタタビ
VS
？？？？？？？？？
「私、信じてますから！」

「やめろぉおおおおおおお！！！」

『？？？？？？？？』？？？

VS

偽？？？？？？？？？？

最終章

プロローグ

まっことにお待たせしました最終章突入です
此度も捏造マシマシですが、どうかご了承いただければと思います。

◇◆◇

それは風の涼しい夏の夜のことだった。
星の瞬く夜空の下で木組みのキャンプファイヤーを囲んで、20と幾何の有象無象が朗らかな宴を開いていた。
七色に輝く鱗のリザードマンは、忍者装束を纏った老人イジャニーヤに差し出された焼き魚に目を輝かせ「故郷のモノにも食わせるぞ！」と意気込みながらむしゃ

むしゃと頬張っている。

酒を飲み過ぎ頭を痛めたミノタウロスの魔法剣士は翼亜人（プテローポス）の聖魔術師に介抱されて、情けない感謝の言葉を言い連ねていた。

四本の大魔剣を自在に操っていた暗黒騎士の複腕は、彼の意外な甲斐性によって他の者たちへの食事の配膳に役立っている。

エアジャイアントは竜巻を巻き起こす魔法の斧を足りなくなった薪の調達のために振るっていた。

そんな様子の二人に「お前らも飲めよ！」と絡みつくのが、酒におぼれて真っ赤な顔のドワーフ王だ。今はこんな彼でも戦場で大槌を振るう姿には王族としての威厳と力強さを感じさせるというのだから、世の中というのはわからない。

そんな彼と肩を組んで下品に笑うオッドアイの男はまさかのエルフの王族だったりする。酔った勢いで若かりし死者使いリグリットの乳房を鷲掴み、反撃の金的蹴りに悶絶するエロフ王の姿からは、エルフ族の将来を存分に不安視させるものがあった。

ここに集うのはこの世界における有力種族の中でも、英雄の壁を越えた一際大き

な力を持つ者たちばかりである。彼らに共通するのは世界を汚す魔神達への対抗意識と堅い団結であった。

今宵の宴はとある小国を蝕んでいた蟲の魔神の討伐への祝勝会であった。

勝利の立役者にして宴の主賓である吸血姫の少女キーノは、白衣の聖女トウコの膝の上にぬいぐるみのように抱きかかえられている。「すごい魔法だったねぇ、殺虫剤みたい」「そうだろうそうだろう！」「すごいすごい」「ところでサッチュウザイってなんだ？」そんなやり取りでトウコにおだてられていた彼女は、普段の泣き虫ぶりが嘘のようにどや顔でフンスと鼻先を伸ばしていた。

種族間の遺恨を乗り越え共通の敵を前に一つに集う者たちの姿。

白銀の駆動鎧に意識を宿していたツアーは、少し離れた木陰にたたずんで、上等な金銀財宝を眺めるのと同等以上の居心地を憶えていた。

そんなツアーに一人の男が声を掛ける。

「いいものでしょう、仲間がいるっていうのは」

ササキマサヨシ。ぷれいやー にして、人間種から輩出された魔神対抗戦線への代表選士。そしてこのパーティーにおけるリーダー格の男だった。

彼は人並み外れて優れた剣士ではあるものの、今の彼の強さはこの集いの中でも中堅より少し下程度のレベルである。それでも彼がリーダーとして全て者達に推されるのは、カリスマ性とも呼べる竹を割ったような快活な性格と、そして魔神との集団戦におけるチームメンバーの優れた統率力によるものだった。

種族も戦闘スタイルもバラバラな者たちを見事に連携させる手腕は、彼の統率者としての圧倒的な経験値を物語っていた。「ユグドラシルの経験が役に立つとは」などと意外そうに口走っていた。

「仲間、仲間ね」

ツアーはマサヨシの言葉を反芻して、自分にそれが当てはまるかどうかを考える。

ツアーはすぐさまそれを一蹴した。

「どうだろう。私の正体が彼らに知れたら、きっと失望されるだろうから」

耳の良いイジャニーヤの意識に気を配りながら、口数少なくツアーは応える。

仲間たちはツアーのことを鎧を脱ぎたがらない恥ずかしがり屋の変わり者と断じている。

だがもし鎧の中身が空洞で、その正体が世界最強の白金の竜王だと知られれば彼

らの憤慨は免れまい。
本当は今日の戦だって、駆動鎧に本腰を入れて魔力を注ぎ戦わせればツアーただ一人で解決していたことだろうから。
「それじゃあ台無しではないですか」
マサヨシは見透かしたようにニヤニヤと笑って、ツアーの心根に踏み込んだ。
「いいものですよね、全ての種族が一つに集っているこの光景。すぐに終わらせるのは惜しいでしょう。
そんなあなたの気まぐれに、私たちは確かに救われているのですから。あまりに気に病まないでいただきたい」
「相変わらず甘い男だね君は。胸襟を明かさない者を受け入れるその度量、恐れ入るよ。
精々、背中を刺されないように注意したまえ」
「おや、心配してくれますか」
「……」
冗談めかしたマサヨシに、ツアーは答えない。付き合うのも馬鹿々々しかった。

マサヨシは喧騒が広がるかがり火を背中に回して、ドカリと腰を下ろして夜空を仰いだ。

「誰にだって隠し事はあります。話せば解決するなんて言いますが、話せないから秘密なんです。

独りでに抱え込むことは辛いですが、それでも尚我々が無駄に謎を秘めながら生きるのは、守りたいものがあるからだ」

それは、誰に対しても誠実で豪放気楽なマサヨシの言葉とは思えなかった。

「プライド、周囲の期待、己の信条、そして大事な人。色んなものを背負って我々は生きている。

誰しも完璧ではありませんから、背負ったものと現実の折り合いをつけるために嘘と秘密を使わなければいけません。たとえそれがどれだけ不合理な事でもね」

「君にも、あるのか？」

「もちろん。ツアーのそれなんて可愛いくらいの酷いことだ。……折角だし、懺悔のつもりで話そうか」

「べつにいいよ？」

遠慮のつもりでどちらとも言えない返事をしてしまったツアーは、結局マサヨシの懺悔を聞く羽目になった。

「私はね……女性関係がだらしない……らしいんだ」

要約すれば、元の世界でのマサヨシは複数の女性にもてはやされていて、妻と娘がいる筈の身で食事に誘われることが多かったそうな。人が善いというか好意を無下にできないマサヨシの悪癖が断ることを許さず、結果的に妻と娘に多大なる迷惑を掛けてしまったそうな。

一線を越えなかったにせよ、家族に内密でこのようなことをしでかしたのは一家の大黒柱として決して許されざることであると、マサヨシは頭を抱えて悔やんでいた。

「まったく恥ずかしい限りです」

「言うほどかい？　君のような魅力的な雄なら複数の雌を侍らせても許されそうなものだが」

「君たちの価値観をあてはめないでくれ給え、気が揺らぎそうだ」

「そうかい、揺らぎそうなのかい」

ストイックというか気の小さいものだとツアーは内心嘆息した。
「そういえば、娘がいるというのは初めて聞いたな」
「ああ二人いる。一人は……ちょっとぎくしゃくしたせいで家出された。もう一人は丁度、今のキーノくらいの見た目の女の子だ。二人とも元の世界に残してしまっていますから……何としても帰る手段を見つけなければ」
ツアーはキーノを愛でるトウコの様子を改めて見やった。
「なるほどだから――」
「そういうことです。ですから改めてお願いします。元の世界に帰る手段について、ツアーも何か手がかりを掴んだら教えてください」
「あいわかった」
ツアーは座り込むマサヨシに背を向けながら、明るい宴の喧騒のほうへと歩いて行った。そしてやはりツアーには、彼の度量の広さが心配だった。

◇

場面は暗転する。満点の夜空と暖かく輝く篝火の風景が淡く歪み、酷く見慣れた聖堂の天井風景へと切り替わる。

昔の夢などくだらないものを見てしまったと、ツアーは己のつまらない懐古に辟易とした。

今ある人格とはこれまで生きてきた記憶と経験の総決算であり、その道行こそが人生というもの。

快いものであれ忌まわしきものであれ、過去は重んじられるべきである。されど過去の思い出に囚われすぎて現在を疎かにするのは愚か者のすることだ。

自戒と共にツアーはまどろみの心地を振り切りながら、のろのろと上体を寝床の台座から持ち上げる。

待ちかねていた客人の気配がとうとうやってきたからだ。

コンコンコンコンと4回、やけに仰々しいノック

が鳴り響く。

「入ってきてくれたまえ」

開かれた両扉の先から、漆黒の全身鎧（フルプレート）を纏った騎士モモンと、ガクセイフクと呼

ばれる黒い着物に身を包んだ黒髪でツインテールの少女サクラが姿を現した。
　どちらもユグドラシル由来の装いであることは知っているが、ツアーにはまるで両者が別世界の住人のように思えて仕方がなかった。
　腕組してふんぞり返るモモンをそのままに、サクラは恭しく気品のある仕草でツアーに向かって深くお辞儀をした。髪型が変わっているのもあるが、それはツアーの知る彼女の在り様とは似ても似つかない。
「お久しぶりです。先日は大変な迷惑をおかけしてしまったこと、改めてお詫び申し上げます。
　あなたにはもっと早くにお尋ねするべきだったのですが、身辺整理が慌ただしくこのように遅れてしまいました」
「ワケは知らないが、酷くややこしい事情であることは察するよ。とにかく【傾城傾国】の精神支配を掛けられていない君と、こうして相見えることができたのだから。それだけでも喜ばしいことだ。
　もちろん事件の仔細に興味が無いというわけではないがね。さぁ話してくれたまえ。君がどうして精神支配を受けて、その支配権があの奇妙な悪魔の手に渡ったの

かを。あの悪魔ヤルダバオトの真意を」

ツアーの中では、ヤルダバオトと彼女の関係が単純な支配被支配のそれとはどうしても結びつかないのだ。

隠す気があったのかも怪しいが、振り返ればヤルダバオトと彼女の振る舞いは不自然な部分が多すぎる。

あれだけの邪悪な魂と強大な力を併せ持ちながら、リ・エスティーゼ王国で成したヤルダバオトの悪行は余りにも矮小過ぎた。むしろ王国で冒険者をしていたイビルアイことキーノが言うには、ヤルダバオトには明らかに王国の国政を改善させる意図すらあったという。

そしてモモンによってサクラが奪還された時ですら、ヤルダバオトは別段動揺することも無く明らかにツアーへ余力を見せつけたままあっさり撤退してしまったのだ。サクラへの温情を思わせるような捨て台詞を残して。

「気に障ったら詫びるがね。私には君とヤルダバオトが精神支配に関わらずグルだったんじゃないかとすら思えてしまうんだよ。例えばそう、私を何らかの目的で王国の動乱に巻き込もうとする狙いがあったとかね」

支配を掛けられていたにもかかわらずやけに自由だった振る舞いのサクラ。
それを気遣うかのようなヤルダバオトの言動。その不自然な撤退。
ちぐはぐな全てを一線につなごうとすると、どうしても妙な筋書きが出来上がるのだ。
「他にも気にかかることは多い。君が私と初対面する直前に戦っていたダークエルフや吸血姫もうそうだし。
それにモモン、君のことが一番よくわからない」
ツアーがぎろりと目配せをすると、聞きかねたかのようにモモンは腕を下ろした。
彼は口を開こうと前へ踏み出したが、それを渋面模様のマタタビが制した。
「いいですよアク……モモン。ツアーには私が話をつけたいの」
「ではどうぞ」
「本当にごめんね。いつもいつもありがとう」
「……別に」
モモンに意味深な視線を向けてから、サクラは改めてツアーにまっすぐ向き直る。
「勘違い、行き違いというのはこの世に起こる不祥事の中で最も馬鹿々々しい事の

一つです。傍から聞く分には笑い話にできましょうが、当事者達からすればたまったものではありません」

やけにに実感のこもった重い口調で彼女は続ける。

「私が精神支配を受けてしまったこと、そしてヤルダバオトの下についたこと、ツアーを巻き込んでしまったこと。どれも全部、色んな事情が絡み合った偶然なのです。もちろん後ろ暗い事情だってありますが、最終的にツアーには全て話すべきだと思っています。でも今はまだ、そうするわけにはいきません」

「そもそも事情に首を突っ込んだのが私の方である自覚はある。とはいえ謝罪の旨を口にするなら、もっと胸襟を開いてくれても良いと思うが？」

「それはお互い様というべきでしょう。私一人の問題ならよかったのですがね。そうじゃないから、こちらからすべて明らかにするのはフェアじゃありません。ヤルダバオトからの私の伝言は覚えていますよね？」

「……ああ、私が隠し事をしているという話だったか。さて、要領を得ず何のことを言及しているのかもわからないが」

「私のお父さんとお母さんの死についてですよ」

その時空気が揺らいだ。もちろんツアーの心と連動して。
この世のありとあらゆる弱小生物が軽く浴びるだけでも死に瀕するであろう、竜王が誇る圧倒的なオーラ。
思わず漏れ出たそれを受けて尚サクラは、ただまっすぐにツアーの瞳の遥か深くをじっと見据え続けていた。
まるで全てがこの少女に見透かされているかのように思えて、ツアーは何百年かぶりの恐怖心を煽られる。
ただただ怖い、この少女が。持ちうる戦闘力や悪辣な知恵などではなく、全てを暴き出さんとするその瞳にツアーは果てしなく戦慄する。
一体次はどのような言葉を発するのか。張り詰めた大弓の玄を見るのと同じように、ツアーは少女の口元をじっと見つめた。
「いえ、やめましょうか。何だかまどろっこしい気がします」
「……」
「父さんと母さんが死んでたって知って、あれからいろいろ考えたんです。どうすればいいのか、どうするべきか。いろんな人に色んなことを言われて、それで自分

なりに考えて決めました」

そして次の瞬間、決定的な一言がツアーの心へ叩き込まれた。

「私はもう両親から逃げません。何としてでも父さんと母さんを蘇らせて、ツバキを残した元の世界に帰りたい。たとえツバキが死んでいても。だからツアー、どうかあなたの力を、始原の魔法（ワイルドマジック）を、私たち家族の為に使って頂けませんでしょうか。かの転移現象の根源たる竜帝（ドラゴンカイザー）、その息子であるあなたの力が必要なのです」

再びツアーの動揺と共に、聖堂の中の空気が揺れる。それはあまりにも皮肉な血縁の因果だった。

◆

『力を貸してくれ！　君にしかできないことなんだ！』

まことに血は争えないというものか。

２００年前、マサヨシが魔神戦争の解決のために初めてこの聖堂を訪れた時もツアーに対して似たような口説き文句を説いたものだ。魔神戦争の原初の引き金たる

竜帝（ドラゴンカイザー）の息子であったツアーに対して。

『元の世界に帰る手段について、ツアーも何か手がかりを掴んだら教えてください』

そして同じく元の世界への帰還を願ったのだ。よりにもよって、事の諸悪たる竜帝（ドラゴンカイザー）の息子であったツアーに対して。まったく！　この親子は！

「サクラ、君はどこで何を知った？」

彼女は虚空の穴に手を伸ばし、一冊の古ぼけた手帳を出して見せた。

「これは私が影分身２００体を動員しスレイン法国の秘蔵書全部をひっくり返して見つけた、六大神筆頭スルシャーナ直筆の手記です。

記述によると、過去のプレイヤーたちは悉く始原の魔法（ワイルドマジック）を知る様々な竜王達から『竜帝の汚物』と呼ばれていたそうですね。詳しい事情まではわかりませんが、他の蔵書の様々な記述からも、竜帝とプレイヤー転移現象が深くかかわっていたことが読み取れました」

サクラはどこまでも淡々と冷静に調べ上げた情報を言い並べた。

恐るべしはその神懸かりな直観力と尋常ならざるリサーチ能力。話に聞くプレイヤーがひしめく大魔境、ユグドラシルにてたった一人で悪名を馳せた辣腕は本物

だったのだ。
欠片でも、後ろ暗さを持つ者すべてが彼女の天敵なのであろう。
何せ今まさにツアーは彼女に成す術も無い。そして怒りとも羞恥ともつかない激情によって脳漿を熱く煮えたぎらせていたのだから。
「……」
サクラの推理を前に、ツアーができるのは沈黙という名の消極的な肯定を示すことだけだった。
「そうですか」
しかしそんなツアーをサクラは糾弾することはしなかった。糾弾以上に恐ろしい真似をしでかすのだ。
彼女はゆっくりと両膝を崩して床につけ両手を前に置いて頭を垂れたのだ。
ツアーは声を大にしてやめてくれと叫びたかった。しかしどうしても喉が動かなかった。
「歴史に大いなる変容をもたらしたあなたの父親のことです。悠久を生きるものにしか推し量れない、並々ならぬ事情があるのでしょう。それでもどうか改めてお願

い申し上げます。家に、帰りたいのです。やっとそう思えたんです。だから、お願いします！　力を貸してください！　武器でも、財宝でも、世界平和でも、私に尽くせることなら何でもします！」

その有様は、願いは、ことごとくツアーの心の最も痛い部分を串刺しにする。

手を取りたい、力になりたい。彼女の言葉は確かにツアーの心を強く揺り動かした。

だか、しかし、それはできないのだ。

世界の守護者として、力の乱用は決して許されない大罪なのだから。

「頷くわけにはいかないかな。我が正義に誓って」

だからツアーは堅い決心で喉口から拒否の言葉を絞り出した。

すると見かねたモモンがへたり込んでいたサクラの襟首を鷲掴み乱暴に持ち上げた。

「Ｕｎｓｉｎｎ（馬鹿々々しい）！　話になりませんね！　因縁を有しながら懇願を無下にする蝙蝠蜥蜴も！　そして軽々しく首を垂れる貴女も！　その所業すなわち、慈悲深くも痛ましく願いを聞き届けた御方への侮辱と知れ！」

「……放して！」

首からモモンの手を振り払って少し俯いたマタタビは、埃のついた服を振り払った。

そして数秒天井を仰ぎ、そのままゆっくりと瞳を閉じた。

「ええそうね、そうだね、そうですね。あなたの言う通りだ。彼が私に尽くしてくれるのなら、私だってできる限りを尽くさなくては」

どこかかみ合わないやり取りを経て、彼女の何かが切り替わる。

かちりと。何かの歯車が入れ替わる。世界の守護者としては決して歓迎できない存在へと変貌した。

獣が牙を開くようにサクラは、サクラだった何かは凄惨な笑みを浮かべてツアーを鋭く睨みつけた。

そして再び虚空の穴に手を伸ばし、右手には刀を、左手には御旗を握りしめた。

「あは、アハ、あははハハハはは!!　ではこうしましょう白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）！

『平和の戦旗』による安心安全のＰｖＰ（タイマン）。勝った方が負けた方の言うことを何でも聞くの！

互いに譲り合えないのなら、戦いの中で解り合う他ありません。イザ尋常に決闘といきましょうではありませんか！」

彼女が手に取ったのは人間国家カルサナス都市国家連合で有名なマジックアイテム『平和の戦旗』。

フィールドを保護する特殊な魔法効果によって、傷と魔力の喪失を無効化し絶対に死なない戦いを行えるアイテムだ。

それが彼女の手にあるということは、これもユグドラシルのアイテムだったというわけか。

「お勧めはしないかな。小賢しさしか取り柄の無い盗賊風情が、純粋な強さで私に勝てると思わない方がいい」

「純粋な強さ？　何をおっしゃる。強さとは、己の理想を現実にする力のことだ。どれだけ大層な破壊力や戦闘力を誇ろうと、己を縛った奴なんかに私は絶対負けませんよ。さぁ外に出ましょう。空は決闘日和のいい天気です」

言うことに欠いて、サクラは外でこの白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王を迎え撃とうとするのか。

その不遜で自信に満ちた闘気はツアーの琴線に確かに触れる。数百年かぶりに竜

の血が戦いを前にざわついた。あるいはこんな気持ちは初めてかもしれない。
「クハハハハハ!!　よく言った」
この時ツアーの中の何者かも、彼女につられてかちりと歯車が切り替わった。
「ああ、そうだね。こうして袂を別ててしまえば我々は戦うしかないだろう。互いの心の整理の為にも、この因縁に決着をつけようか」
「あなたの心など知ったことか。ただ私はアインズ・ウール・ゴウンの名に誓ってあなたに勝つ、それだけです」
「大いに結構！」
ツアーは身を委ねていた台座の上から立ち上がり、天井の壁画へ向かって咆哮を飛ばす。
合図とともに聖堂の天蓋は６枚に切り分けられて、地表へと続く巨大な大穴が開通する。この道を進むのは４００年前にこの聖堂に閉じこもって以来のことであろう。
「……ねぇモモン、ちょっと」
サクラはモモンの耳元に口を寄せてひっそり何事かを囁いた。

それにモモンが頷いたのを見ると、ツアーをまっすぐ見据えた。
無言でツアーも首肯を返すと、サクラはツアーの背に飛び乗った。
「しっかり掴まって居ろ」
翼を広げ、一気に飛翔する。地上まで数秒の距離を一瞬で飛び越え、二人は大空へ舞い上がった。
アゼリシア山脈中に立ち込める雪雲すら突き抜けて、雲一つない晴天と雲海の狭間に浮かび上がる。
そして雲海の切れ先から、その下に広がる光景を目にしてサクラは思わず息を呑んだ。
そこには彼女がかつて見たことがないような広大な空間が広がっていたのだ。見渡す限りの平原、森林、点在する集落や都市。
その遥か向こうにはどこまでも広がる草原地帯が見え、さらにその先に見えるのは海と呼ばれる広大な湖だ。
「やっぱり奇麗ねこの世界は。私たちの世界と違って」
「……」

「まぁ帰らないわけにはいかないんだけどさ。たとえ何が待ち受けていても」
「そうかい」
サクラはツアーの肩越しに、その景色を見つめ続けた。
やがてサクラは暴れても良さそうな平原を見つけて指さして、ツアーに降りるように指示をする。
ツアーはなるべくゆっくりと着陸すると、背のサクラは気持ちよさそうに伸びをしてから飛び降りた。

無言で示し合わせるツアーとサクラは１００メートルほどの距離を取り、それからサクラが左手の御旗を掲げで「起動」と一言声を掛ける。
それはツアーの使う『世界断絶障壁』によく似ていて、球体上のバリアを直径３００メートルに張り巡らせて空間全体を包み込んだ。
サクラも獣の様な悍ましい笑い声を響かせ、ツアーは天高く宣戦布告の咆哮を挙げた。
「アハハハハハ!!　あはははあはは!!　アハハハハ!!」

「GAAAAAAAAAAOOOOOH!!」

◆◇◆

「精々楽しんでください、お嬢様」

聖堂に一人残されたモモン――を装うパンドラズ・アクターは、誰に聞かせるともなく呟く。

心底楽し気に、愉快気に。

「貴女が白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王を戦いの土俵たたせた時点で、勝敗はすでに決している。衝動に流され貴女に手の内を晒しつくした愚かな蝙蝠蜥蜴は、たとえこの戦いに勝とうが敗けようがうが最早ナザリックの敵ではなくなるのですからね」

この戦いは既にアインズ様に監視されている。

アドリブの名手マタタビが白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王の全ての手札を暴き出し、観察力と戦闘研究を極めたアインズ様がそれを見て徹底的で完璧な対抗策を導き出す。

これこそ対人戦闘における理論上最高値の戦術と言えるだろう。ゆえにこの戦いの勝敗に確たる意味はないのである、少なくともナザリック地下大墳墓にとっては。

「もっともあの方がアインズ・ウール・ゴウンの名に誓ったということは、言葉通り負ける気はないのでしょうがね」

マタタビの能力値を誰よりもよく知るパンドラズ・アクター。彼にとってみれば、圧倒的な種族的アドバンテージを誇る１００レベルクラスのドラゴンへの彼女の挑戦はあまりにも無謀だった。

しかし彼女の耳打ちを聞けば、その計算もすぐに誤りだったと理解できる。

確実ではないが、これは彼女にもかなりの勝算がある勝負だ。

パンドラズ・アクターはドッペルゲンガーの変身能力によって、マタタビの姿へと変身する。

そして彼女がよくする伸びのポーズをルーティーンのように真似をしてから、まずは聖堂の台座へと手を伸ばした。

「さて、私も役割を果たすと致しましょう。アレがこの地を容易く留守にしたということは、あまり期待はできませんがね」

最終章前座
VSツアー
タブラ様がいなければ、きっと彼がこのSSのラスボスでした。
もしこのSSが14巻以降に出てたらマサヨシの名前がリクになってたのは言うまでもありません。
この5年間何度も心が折れてエタリまくって、それでもどうにかここまで来れました。
全ては皆さまが下さったご意見と評価と挿絵と誤字報告とここすきと感想のおかげです。本当に感謝しかありません。ありがとうございます。
今後も冗長な展開などで皆様の期待に沿えないかもしれませんが、それでも最後までお付き合いしていただければと思います。厚かましいようですが、どうかお願いいたします。

あと最後に一言、マタタビは信じるな

ツアー戦　上

遅れました。ツアー戦前半です。
オバロのガチバトルって、ロジカルがガチガチ過ぎてすごく書きづらいですね。原作者も他の二次作者もの方も凄いや。
こんな需要があるかもわからん捏造戦闘をあと同規模で４回もやらなくちゃいけません。
言うまでもありませんが、当SSのツアーのクラスも能力もすべてテキトーな捏造です。諸々のロジカルもガバガバなので許さないで下さい。０評価ください。

ユグドラシル最凶格の害悪と呼ばれた少女と、世界の守護を司る最強の竜王の頂上決戦。

両者が戦闘態勢に入り、響き渡る咆哮と狂笑によりいよいよ戦いの火ぶたが切り落された。

早速に離陸しようとする竜の羽ばたきよりもずっと早く、マタタビのスタートダッシュがツアーの懐へと潜り込む。

MPとHPを吸い込んだ妖刃が竜の腹の表皮を一閃。だが浅い。神器級防具と同等レベルの硬度を誇る竜麟は刃の深入りを許さずに、ささやかな擦り傷しか与えない。

「硬！」

今の斬撃は、無効化されにくい無属性魔力を帯びた物理攻撃である。

比較的柔らかい腹の鱗ですらこの防御力とは、正直想像以上だ。

反撃とばかりにツアーは、白金色に光り輝く火炎吐息を周囲一帯へと巻き散らす。

その吐息の見覚えのある光。ツアーの駆動鎧が放っていたエネルギー体と同質のものだろう。

もちろん今本体から放たれた吐息は速度も威力も鎧が駆使していたものとは段違い。第十位階魔法クラスの攻撃力だ。

そしてツアーが踊るように全身を乱回転させることにより、火炎は風圧を巻き込

んで大竜巻へと昇華した。その破壊力は遥か上空の薄雲すら真っ青にかき消していく程だ。

正に破壊の権化。火炎交じりに出鱈目に振り回される尻尾や竜爪が命中すれば、それだけで紙耐久なマタタビは死に至る。間違いない。

「――――――!!」

だからマタタビは五感と神経を集中させ、反射神経と意識のリソースを回避行動へと注ぎ込む。

火炎と暴風の隙間という隙間へ潜り込み、極大の斬撃を放つ竜爪を刀を振るって受け流し、ドラゴンテールを大縄跳びのように飛び越える。そんな紙一重の回避を永遠の様な数十秒の中で繰り返す。

竜の舞踏。大竜巻の流れに逆らうべからず。さもなくば肉塊になって死ね！

私！

堅くて早くてひたすら強い。ドラゴンという圧倒的な種族ステータスの暴力を前に、マタタビはただ純粋な技量と反射神経だけで食い下がり続ける。

何をやっているのだろう、こんな酷い綱渡り。時折触れ合うツアーの竜爪からそ

んな困惑をひしひしと感受する。マタタビ自身も同感だった。

「ヒヒッ!!」

釣り上がる己の口角に困惑しながらも、マタタビは闘争の狂気に身を委ねた。この世界にて異形へ転生するより遥か以前から、この感情をよく知っていたからだ。

圧倒的に不利な戦いへの挑戦。数の暴力や強大な個への単独挑戦、これだからソロプレイは辞められない。

両者が全力運動を繰り返し、先に息が切れたのはツアーの方だった。火炎吐息を放ちながらの無酸素運動は、スタミナに大きな負荷を掛ける。

コンマ0・1、少しでも酸素を蓄えようと呼吸するツアーをもちろんマタタビは見逃さない。

鱗が硬くて切れないならば鱗の無い場所を攻撃するだけのこと。

換気口のように大きく吸気するツアーの竜頭へ、マタタビは一目散に跳躍する。右側、深緑の竜眼へ目掛けて神速の突きを放つが、咄嗟に右腕を噛み砕かれて刀と共に喪失する。

だが構わず、即座に懐から取り出したダガーを反対の眼に投げつけた。

腕を犠牲に放ったダガーは見事に竜眼を捉えて潰し、彼の視界は鮮血に塗り潰された。

直後、両者に遅れた痛みが襲い来る。

「いやぁあっぁぁあぁあづ!!」

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＯＯＯＯＯＨ!!」

右腕と左目。双方が失った器官の痛みに、マタタビもツアーもたまらず絶叫。

痛みに喘ぎながらもマタタビは、撫でるようにツアーの鼻先へキックを掠らせる。

この瞬間、マジックアイテムであった神器級パンプスがその吹き飛ばし（ノックバック）効果を発動。ツアーの巨体を後方へと吹き飛ばした。

距離を稼いだ隙に、インベントリに手を伸ばし最上級回復ポーションを取り出して右肩に薬液をぶちまける。

神の血とも呼ばれる強力な治癒効果が、片袖を失ったむき出しの右腕をそっくりそのまま再生させた。

「ハハ、ざま見ろ！」

腕を切らせて目を潰し、そして自分の腕は再生させた。種族的な能力差をわずか

だが覆し、相手に一撃入れてやったのだ。

マタタビは勝ち誇ったようにツアーを嘲るが、首筋には嫌な冷や汗が垂れていた。

（……ダメかも）

神器級アーティファクト地味子の眼鏡は、容赦なく圧倒的なツアーとマタタビとの能力差を突きつける。

マタタビの斬撃を弾く強固な竜鱗。そんな頑丈な表体から放たれる強烈な肉体攻撃の数々。腕一本と神器級の刀とダガーを使い捨てにして、ようやく片目を潰すのがやっとという立ち回りの隙の無さ。そしてレイドボスクラスの規格外なHP、耐久度ときたものだ。

たった今ツアーの眼球を突き刺したダガーは、ヘルヘイムで採取できる希少な猛毒『サマエルの血』を塗り込んでいた逸品である。耐性による完全無効果は非常に難しく、摂取すればスタン効果と凶悪なスリップ（継続）ダメージ効果をもたらす筈なのだ。

そんな頼もしいスタン効果はアンデッドか機械人形と見まがうほどの強大な耐性を前にあえなく無効化。スリップダメージも半減された上、そもそも基礎体力が高

すぎるから大したダメージソースにならないという異常事態。
しかもこいつにはまだ始原の魔法（ワイルドマジック）という鬼札すら隠されているというのにさ。
吹き飛ばされた先でツアーはスムーズに立ち上がり、何でもないという風に首を振るって目に刺さったダガーを振り落とした。
「ああ効いた、効いたとも。これほどまでに己の命が脅かされる感覚は、それこそ四、五百年ぶりと言っていいね。
この左目も、治癒の始原の魔法（ワイルドマジック）を駆使しても、猛毒のせいでまたすぐにダメになってしまう。解毒も当分できそうにない。困ったなぁ」
「じゃあもう右目も頂いてあげましょうか」
「それは困るなぁ。とても困る！」
ツアーは意気揚々と羽ばたかせ、マタタビの刃が届かない遥か上空へと上昇する。
竜のくせ少女相手で安全地帯へ逃げ腰を決めるツアーを忌々し気に睨みつける。だが意識はすぐに彼が立ち去った足元へと向けられた。
マタタビの能力、敵意を読み取る『読心感知』は上空に陣取ったツアーと少し別の気配をその場所から感じ取ったからだ。

「来たれ我が傀儡、『請来』」

現れたのは、上空の竜を模したであろう白金色の全身鎧（フルプレート）。青白い微光を宿す流麗な曲線は優雅な気品に満ちている。

それは何度も見慣れたツアーの操る駆動鎧だ。マタタビは小さく舌打ちをした。

「動きながら使えるのかよ……」

一対の竜と竜騎士、なかなか面倒な光景である。

事実上2対1。想定はしていたが、やはり気が重い。あるいはもっと数が増える可能性も視野に入れて立ち回りを考える。

「スゥー」

ツアーは早速上空から特大の火炎吐息を放つため、周囲一帯の空気を吸収する。

「ずるいなぁ」

竜のブレスはMP消費が一切ないので無限撃ち可能、そしてかつ強力な遠距離攻撃である。その基礎威力は最大HP量に依存する。

例えば万全のツアーなら、第十位階魔法に魔法最強化（マキシマイズマジック）の補正を乗せた程度。そこからHP90%なら九位階、80%なら八位階と言った具合に消耗度に応じて威力

が下がるのだ。

なのでブレスを最も効率的に扱うなら、今のツアーの戦術が最適解と言えるだろう。ひたすら頑丈な駆動鎧に前衛を任せ、安全地帯から本体が無限に遠距離攻撃を打ち続ける。こんな最悪チキン戦法をたかが小娘一匹に使うとは大人げ無い。この場合、本体の方が硬くて頑丈だからこそ質が悪いのだ。

戦闘前の、楽し気な意気込みは一体どこに向かっていったのやら。マタタビはわずかに残念に思いながら、しかし己は闘気を絶やさず口角を吊り上げ続けた。

「アハハハ!!」

◆

猫と竜王。マトモにぶつかり合えば勝機はないというのに、それでも挑戦者たるマタタビの心には欠片ほどの曇りもない。

マタタビの中の全ての動機（モチベーションが）が、ツアーに立ち向かうことを肯定するからだ。

ツアーを打倒し私の野望（帰宅）の足掛かりを得ること。

ツアーを服従させてナザリックに益をもたらすこと。

ツアーと私の戦いをアインズ様に捧げること。（能力情報の提供）

ケット・シー（猫妖精）の肉体からもたらされた野性的な闘争本能。

そして何より私自身が、この世界で最強と謡われる彼に挑みたい。

自分の心の色んな部分が、まっすぐに目の前の戦いへと向かっていく高揚感は筆舌に尽くしがたい。

あえて言うならカラダが軽い。ココロが踊って、天にも舞う心地だった。

私にとって『戦い』とは対話を意味する言葉である。

父と戯れた剣道にしろ、ユグドラシルにおけるＰＶＰにしろ、ギルド拠点攻略にしろ、命を懸けた殺し合いにしろ、そして誇りを懸けた決闘にせよ、それは一切変わらない。

相手が一体何を考えて、私のことをどう思っていて、何をしようとしているのか。何をされるのが嫌なのか。

相手の心に寄り添って、心の中で融け合って一心同体のようにその深層心理を読み込んでいく。これが私の戦い方だ。今までもこれからも。

ねぇツアー、一体あなたは今何を考えているのかしら？

◆◇◆

「ハハハハハハハハ!!」

最早ツアーの左目は闇しか写さない。残された右目だけが、狂った笑い声をあげる少女の姿を捉えている。

（何だコイツなんだコイツなんだコイツ!?）

スペックの上では、ツアーの方が圧倒的に上回っている。

ただでさえ優れたドラゴンとしての身体能力を、始原の魔法（ワイルドマジック）によってさらに強化しているのだから当然だ。高められた防御力は、サクラ渾身の斬撃すらモノともしない。

たとえ始原の魔法を封じられていても負けるはずが無いと、最初は思っていた。

だが蓋を開ければ、ツアーは今しがた彼女との近接戦で後れを取った。サクラはまるで力など無意味だとでも言うように、ツアーの即死級攻撃全てを軽々と躱し切ってみせ、そしてツアーの左目を刈り取った。

妖刀とダガーナイフという二振りの極大級の大業物と、己の右腕を平然と使い捨ててソレを成した少女サクラ。その狂気の極みともいえる闘争に、ツアーはただただ戦慄した。

竜王としての矜持など知ったことか。ツアーがサクラと近接戦で渡り合うのは、毒蜂にハンマーで殴りかかる無謀に等しい。そうでなくても、何をするのかわからない彼女をツアーの間合いに入れたくない。

だからツアーは前衛を遠隔操作の駆動鎧任せにし、遥か上空からブレスによる遠距離攻撃にだけ努めよう。一切の油断も妥協も、この戦いには許されない。なにせ世界の命運と、ツアーの誇りがかかってるから。

闘気と共に腹いっぱいの大気を呑みこみ、胃の底にある焼却炉に取り込んで極大業火を喉の奥から吐き出した。

「GAAAAAAA！！！」

「広すぎない!?」

シャワーのように広がりゆく炎の大雨は一面の火の海を作り上げ、間も無くサクラを捉えようと燃え広がった。

当然サクラは韋駄天の逃げ足で範囲外へ走りこむが、それを駆動鎧が足止めにかかる。

浮遊する無数の剣軍を掃射しながら握った黄金剣で切りかかる駆動鎧。そして天上からは業火の空爆。流石のサクラも同時挟撃には顔を顰める。

しかしサクラはあざやかに身を捩って剣軍を躱し、駆動鎧のプレートに触れて咄嗟に忍術を発動させた。

「〈口寄せの術〉スフィンクス」

独特な墨字の召喚陣が鎧の上に広がり、次の瞬間翼を生やした獅子が出現。鷲の翼と蛇頭の尾を持つスフィンクスと呼ばれるソレは、不意打ちざまに駆動鎧をタックルし、差し迫る業火の中へと吹き飛ばした。

「飛べ！」

サクラがスフィンクスの尾を鷲掴みにすると同時に、鷲の翼が羽ばたいて火の海の上を飛翔。

命からからがらスフィンクスの尾に垂れ下がっていたサクラは、すぐに態勢を整えスフィンクスの背の上に飛び乗った。そんな彼女の姿が、ツアーの知るとある旧友のシルエットと重なった。

（イジャニーヤを思い出すね）

ツアーの知るかつての仲間の一人にも、サクラの様な忍術を扱う者がいた。
今しがたサクラが使った〈口寄せの術〉は、厳密には召喚術ではなくビーストテイマーの魔獣使役に近いものだったはずだ。
位階魔法の召喚術は魔力によって無から魔獣を創り出す能力。一方〈口寄せの術〉は己が契約した特定の魔獣を、その強さに比例した魔力を支払うことで呼び出すことができる術である。
事前契約が必要な点、そして同一種の魔獣は１日一度しか呼べないという理由で使い勝手が悪いのだと、イジャニーヤは自嘲していたものだった。
そんな彼の定番戦術と言えば――
（……ふむ）
冷や汗と共に感傷を振り切り、ツアーは差し迫るサクラへと意識を戻す。
スフィンクスに乗ってこちらへ飛翔するサクラを打ち落とすため、無数の小さな火炎弾を解き放った。
炎というより光線に近いか。白金色に輝く流星群が、先の業火よりさらに広範囲で降り注いで大地に光の花畑を炸裂させる。

彼女は空中戦が不得手なのだろう。スフィンクスの背の上で持ち前の機動力を発揮できないサクラは、襲い来る無数の光線に向かって刀を振るい、必死の形相で切り落とし続けている。

「『世界移動』」

「あああもうっ！」

そこへ追撃。空間転移でサクラの背面を捕った駆動鎧が、再び剣群掃射と共に切りかかる。

サクラは露骨に苛立ちながら足元のスフィンクスを蹴り上げて、ツアーとサクラとの射線を遮る。降り注ぐ光線の楯となった哀れなスフィンクスの影の中でサクラは忍術を発動。

「〈影渡り〉」

瞬間サクラは影の中へと溶けて消えて、居なくなった主人の代わりにスフィンクスが光と斬の挟撃を受けた。許容外のダメージによって〈口寄せの術〉が解除されて、スフィンクスも煙となって消失する。

消えたサクラが現れたのは、案の定ツアーの翼の影の中。突如死角に出現した気

配を、竜種の鋭敏な感覚で即座に察知。
彼女の狙いは召喚獣を囮にして、忍術〈影渡り〉による影と影との空間転移で不意打ちに攻め込むこと。
確かに有効な作戦だ。
しかしそれはツアーの知るイジャニーヤのパターンと全く同じ手法であり、知ってれば当然通用するわけがない。
「甘いよ」
「くそが！」
直ちにツアーは全身を旋回させながら白金の火炎を振りまいた。
致命だけはギリギリ回避しながらも、空中での回避には限界がある。尻尾の一撃をどうにか刀で受けたサクラは、しかし威力を殺し切れずに大地に向かって突き落される。
「きゃうわあああ！！？」
そして地に堕ちるサクラを狙い打つように、下からは駆動鎧が剣群を背負いながら差し迫る。ツアー本体も最大級のブレス攻撃を放つべく、猛烈に息を吸い込んだ。

ツアーのブレスを防いでも、下からは駆動鎧の剣群。その剣群に対処しようとすれば上からツアーが焼き尽くす。

空中では防ぎようも無い。これで終わりだ。

「ＧＡＡＡＡＡＡＡ！！！」

灰も残さぬ最大級の白金の炎を眼下のサクラへ最大放出。同時に下からも剣群を全弾射出。

（焼死か串刺し、好きな方を選びたまえ）

「アハハハハハ!!　あ≫あ≫あ≫あ≫あらららああああ!!」

必殺の火と剣に飲まれる間際、何故かサクラは体をくの字に曲げて無意味に空中回転を繰り返す。

それがネコひねりと呼ばれる特殊な回転方法であることをツアーは知らない。知っていても困惑するしかないだろうが。そんな思慮を浮かべる間も無く、サクラの敗北が決定する、

ー一筈だった。

（な!?）

刹那、ツアーの視界が明転する。遥か下にサクラを待ち構えていたはずの駆動鎧が、ツアーの眼鼻の先へと現れた。

あるいは逆か。ツアーがサクラの座標と入れ替わって、駆動鎧の目の前に現れたのだ。

位置交換の空間転移。それはツアーの知る中で、高位の盾役戦士が味方への攻撃を受けるための技だったはずだ。

その技を暗殺者であるサクラが？　どんな手品だ。

（なるほどコイツか！　〈影渡り〉の時につけられたな！）

ツアーの翼の付け根の部分に引っ掛けるようにして、紐付きの木造が括り付けられていたのを確認する。

それは使い捨ての効力らしく、緑色に淡く光り間もなく空気に溶けて消えていった。

一体どんな手品にせよ、最早ツアーも駆動鎧も攻撃動作は中断できないことは確かだった。

（まずい！）

だから互いに、ツアーの火炎を駆動鎧が、駆動鎧の剣群をツアーの腹が受け止め合う。

実に間抜けな同士討ち（フレンドリファイア）の火柱が立ち昇った。

「……ガハッ!!」

駆動鎧は光に飲まれ、喉から大量の空気を吐き出したツアーの腹部に無数の刃が突き立った。

思わぬ攻撃にあてられて怯み、ツアーは駆動鎧に覆いかぶさるように大地の上に轟音を立てて墜落する。

もちろん複数浮遊操作の剣群の威力は、ツアーへの有効打にはならない。同じように駆動鎧の魔法耐性はツアー自身のブレス攻撃と相性が良い。

ツアーは当然、万が一の同士討ちも想定して戦い方を選んでいた。

しかしそれでも、虚を突いたダメージというのは意識と状況判断の能力を著しく

阻害する。
だから、平時なら即座に予測できるはずの次の判断を、ツアーは一瞬遅らせてしまった。

（しまった！）
遅い。即座に気付くべきだった。
ツアーはサクラの座標と入れ替わって、駆動鎧の目の前に現れた。
それならサクラは今どこにいる？　当然、ツアーが元座していた上空だ。
直前サクラは無意味な高速空中回転を繰り返していた。
この世界はマサヨシ達がいた世界と異なり、一切の空気抵抗が存在しない。
もしサクラがツアーのいた遥か上空から、存分に重力加速を享受して自由落下すればどうなるか。

浮かび上がる複数の条件。
その答えを導き出した瞬間に、ツアーはわずかな抵抗として体を右方向へと捩る。

果たしてその判断は正しかった。
次の瞬間、天から雷の如き刃が超速回転と自由落下で威力を増して、ツアーの左翼を切り破ったのだ。
もし瞬時に体を捩らなければ、サクラの刃はツアーの心臓に届いていただろう。
ツアーの翼に大穴を開け、そのまま大地に転がり受け身を取ったサクラは忌々し気にツアーを睨み、よろけながら立ち上がった。
「なんで躱すの！　しぶとい！」
今の超速回転は彼女の平衡感覚に大きな反動を与えたようだ。
しかしそれだけのデメリットを受け入れるだけの価値が、今の一撃にあったのだ。
「君が言うんじゃないよ！　あだだだだ翼が！」
翼が焼けるように痛い。穴が開いてただでさえ飛行できなくなるほどの大けがなのに、目潰ししたのと同じ毒を刀に塗り込んでいたようだ。
これじゃ上手く治癒も出来やしない。
「ああもう！　なんでツアーってそんなに隙が無いの？
同格との実戦経験が不足していて立ち回りが下手糞とか、そういうテンプレない

のですか？」
「お生憎だね。他の竜王ならいざ知らず、私には八欲王との戦線と魔神戦争の経験がある。
前者は特に、私も何度も死にかけたものだったよ」
「……そいつぁ互いにツイて無いですねぇ！」
痛みをこらえながらツアーが振るう竜爪を、サクラはよろけながらも飛び越えて回避する。
宙に浮いたサクラに、ツアーは白金の業火を吹きかけた。
「GA！」
「〈大瀑布の術〉」
印を結び、サクラが発動させるのは水系の忍術。
足元から半球状の巨大な水球を呼び寄せて火炎と相殺。水蒸気が巻き上がり、視界が真っ白に染まっていく。
（この程度の術に相殺されるとは……）

やはりツアーの体力低下に合わせ、ブレスの威力も下がっている。
位階魔法で言えば第６位階程度の威力しかないだろう。
（……忌々しい）
数百年ぶりの感覚に眉間を寄せながら、ツアーは水蒸気に紛れるサクラの気配を竜としての鋭敏な感覚で追いかける。
駆動鎧が狙いを定めて掃射した数十本の剣群を、霧の中でも相変わらずにサクラは全て紙一重で回避。そのままツアーの懐に潜り込むかと思いきや、突如踵を返してツアーから距離を取り始めた。
「ア、アクターさん！　どうでしたか！」
（〈伝言（メッセージ）〉か）
ツアーは即座に連絡効果の位階魔法を記憶から呼び起こす。
ツアーが知る限り〈伝言（メッセージ）〉は、受信相手が拒否すれば無効となるはずだ。
互いの誇りをかけたこの戦いに、サクラが無意味な雑談を持ち込むとは考えられない。
つまり彼女はツアーとの戦闘に意味のある情報をやり取りしているということに

なる。
その情報を探るべく、ツアーは後退したサクラを追撃せずに様子をうかがった。
「無かったですか……わかりました。では、はい。目星はついています」
（何だ、何の話だ。何が無かった？）
するとサクラはまっすぐとツアーに視線を向けたまま、〈伝言（メッセージ）〉先の相手に宣言した。
「じゃ、勝ちますよ。ありがとうね」
「君は……」
この時ツアーはサクラの漏れ出た言葉から、その魂胆をあっさりと看破するに至った。
なぜ彼女が自分に戦いを挑んだのか。
何を狙っているのか。どうしてこんなところで戦っているのか。
その全てが、一本の道筋に繋がった。
（なるほど、嵌められた）
全てを理解したツアーは、彼の中でただでさえ高かったサクラへの警戒感を、よ

り上の方へと押し上げる。
するとそんなツアーの内心を察したのか、サクラは舌を出して悪戯気に微笑んだ。
「あ、わかっちゃいましたか？」
「馬鹿だね君は。〈伝言（メッセージ）〉の会話なんて、黙っていれば言いものを」
「……そうね、馬鹿だよ私は。昔から隠し事が苦手なの。だから凄いと思っているんだよ。アインズ様やツアーみたいに、何かを守るために己の心を蓋する奴がさ」
「何のことだか」
ツアーがしらを切って、会話はそれきりとなった。

「〈影渡り〉」
サクラが転移でツアーの腹の影に潜り込むと同時に、ツアーもまた転移で己の巨体を移動させる。
「『世界移動』」
移動先は、再び遥か上空だ。今度はさっきのよりも高度で、平和の御旗領域内の天蓋すれすれである。

「また性懲りも無く空からブレスの引きうちですか？　飛べないくせに」
サクラに翼を傷つけられたせいで今のツアーは羽ばたけない。それでも片穴空いた両翼を広げれば、かろうじて滑空することは出来る。
（やるしかないね）
飛行能力は奪われた。近接戦は五分五分。そして負ければツアーは文字通り全てを失う。
状況を冷静に分析し、ツアーは意を決して己の切り札を切ることにした。
無意味だが、この状況を確かに覆しうるツアー最大の切り札だ。

「『世界核子』」

唱えた直後、魂を吸い取られる時特有の脱力感に見舞われる。
脱力感は次第に熱気へと変わり、ツアーの表皮が眩しく光り輝いた。
「何を……いやこれやばっ!!」
空気の揺らぎを、野性的本能が感じたのか。

しかし既に、ツアーの切り札からサクラが逃れるすべはない。

何せその効果範囲は平和の御旗の限定領域よりずっと広いのだから。仮に、御旗の領域限定が存在しなければ、この技は都市一つを丸ごと飲み込むことだろう。

察したサクラは発動直前の残り時間に、防御の態勢を整える。

「『瞬間換装』メイド服は決戦兵器！　『瞬間換装』キトンシールド！〈要塞創造〉〈要塞創造〉〈要塞創造〉〈不動金剛盾の術〉！〈口寄せの術〉大福招き猫！」

防御力の高い衣装と盾を取り出し、魔法スクロールで3本の巨大な塔城を生み出す。そして忍術で透明な虹色の壁と巨大な金色の招き猫像を立ち並べる。

サクラはさらなる防御を構えようとするも、間もなくツアー最強の『始原の魔法』がその破壊力を遺憾なく発揮し、一瞬で全てを無為とした。

起きたのは極大級の爆発だ。

ツアーを中心として領域全体に満遍なく広がった極光と爆風。轟音と振動で大地を揺らし、その衝撃で木々は根こそぎ吹き飛び、地形すら変えてしまう。

その威力は１００レベル魔法詠唱者がはなつ超位魔法よりもはるかに上。そんな極大の爆撃を受ければ如何なる物体であろうとも原形をとどめることは困難。

当然のようにサクラが展開したすべての防壁はあっさりと吹き飛ばされ、サクラと共にその膨大な輝きに飲み込まれた。

「ー私が世界を守る。そう。私が世界を守るのだ」　――原作14巻より

◇二つ名：白金の竜王（プラチナムドラゴンロード）

◇ツァインドルクス＝ヴァイシオン［異形種］Ｔｓａｉｎｄｏｒｃｕｓ＝Ｖａｉｓｉｏｎ

◇役職

・複数あるため、特定はできず

◇住居

・複数あるため、特定はできず

◆趣味

・世界の観察

◇属性アライメント

・善～極善　［カルマ値：＋２５０］

◇種族レベル

・幼年（ドラゴリング）10・Lv

・若年（ヤング）10・Lv

・青年（アダルト）10・Lv

・長老（エルダー）5・Lv

・古老（エインシャント）7・Lv

・長老（オールド）9・Lv

◇職業クラスレベル

・プリミティブキャスター：７ＬＶ

・ワールドコネクター：１０ＬＶ

・オーバードドラゴン：１５ＬＶ
・ソウル・アドラー：６ＬＶ
・ガーディアン：５ＬＶ
・アイリンク：４ＬＶ
・オンライン：２ＬＶ
◇［種族レベル］＋［職業レベル］：計１００レベル
・種族レベル：51
・職業レベル：49
◇能力表（最大値を１００とした場合の割合）
・ＨＰ（ヒットポイント）：１１７（限界突破）
・ＭＰ（マジックポイント）：40
・物理攻撃：１００
・物理防御：95
・素早さ：77
・魔法攻撃：１２０（限界突破）

- 魔法防御：79
- 総合耐性：81
- 特殊：70
- 合計値：779

ツアー戦　下

【マタタビの至高の41人大百科】

No・14：ヘロヘロ

穏やかで人当たりの良い性格。仲間同士の和んだ雰囲気を好み、マタタビとの相性は非常に悪い。

彼の選んだスライム種族である古き漆黒の粘体《エルダー・ブラック・ウーズ》は、酸攻撃に特化した能力だ。それをモンクの打撃攻撃と併用することにより、凶悪な武器破壊能力を実現させている。

ＤＭＭＯＲＰＧ『ユグドラシル』には数多くの職業と種族があり、個々人でプレイスタイルは多岐にわたる。その中でも武器破壊というただ一点にのみ特化させたＰＶＰ用の能力編成を選び取ったその真意や如何に。彼もまたＤＱＮギルド、アインズ・ウール・ゴウンの立派な一員なのだろう。

ＰＶＰでマタタビの武器類を嬉々として破壊しつくした姿からは、非常に陰湿な面が明らかに垣間見えた。制作ＮＰＣであるソリュシャン・イプシロンの性悪さはかなりの部分で彼の性質由来なように思う。

◆◇◆

『世界核子』

天高く浮かぶ白竜ツアーがポツリとそれを唱えた瞬間、マタタビの生存本能はうるさいほどの大警鐘を心音と共に鳴らし始めた。

その魔法がどんな効力なのか、マタタビは知らない。

けれども、まるで花を見て思わず心安らぐように、赤いカエルを見て毒と気付くように、原初の階層意識に刻み込まれたマタタビの何かが声高に叫ぶのだ。

全力で身を守れと。

だからツアーの業がその効力を発揮させる直前まで、マタタビは全力の防御態勢

を整えた。

スキル『瞬間換装』で防御力の高いメイド服に着替え、シャルティアさんから返してもらった盗賊用の盾キトンシールドを装備。

魔法スクロール〈要塞創造（クリエイトフォートレス）〉を3枚使い捨て、3本の塔城を立ち並べる。

忍術〈口寄せの術〉で防御特化68レベルモンスター大福招き猫を召喚し、念のため〈不動金剛盾の術〉で物理防御を整える。

更なる防御を重ねようとした直後、それは起きた。

天蓋を滑空するツアーのシルエットが太陽の如き極大光となって、あまねく領域をその破滅の光が包み込んだ。

急造した防御のこと如くが打ち砕かれたその刹那、マタタビの脳裏に走馬灯の如くかつてのとある記憶が蘇る。

◆

懐かしさよりも苦さが勝る、不愉快極まりない思い出である。

この世界に訪れるより数年前。ギルド：アインズ・ウール・ゴウンが前身、旧ク

ラン：ナインズ・オウン・ゴールにマタタビが在籍していた頃のことだ。
ウルベルトや建御雷と同様に たっち・みー に対抗意識を燃やしていたマタタビは『平和の御旗』で１対１のＰＶＰを申し込んだのだが、まぁ案の定ボロ負けした。
もちろん、それなりに準備したつもりだったのだけれどね。
事前に彼が纏う全身鎧（フルプレート）コンプライアンスウィズローと彼自身の防御耐性を調べ上げ、最効率で状態異常とダメージを与えられる武器をこの為だけにイチから造った。マタタビに有利な遮蔽物の多い森林地帯に誘い込んだり。近接戦だと勝ち目が薄いから銃や爆弾、投擲物もスタック一杯に用意して、中距離で戦うように作戦を立てたり。
自分でもらしくないくらい石橋を叩いて慎重に立ち回り続けたのだけれども、しかし全く歯が立たなかった。
すべての対策と罠と準備を真正面から踏みつぶされて、この上なくあっさりと完敗したのである。
『……もういいや』

自分の真っ赤なHPバーがゼロへと擦り切れた瞬間に、マタタビの中の何かがポキリと折れたような気がした。

もう何をやっても彼には勝てっこないのだと。あるいはとっくに消えかけだった彼への闘争心が、すっかり燃え尽きてしまったのである。

やれるだけの手を尽くして届かなかったのなら、心残りのしようがない。どれだけ空に手を伸ばしたって何も掴めやしないのだ。

そうしてマタタビは彼との関りを心の中で完結させる。ユグドラシルを始める前から続いていた父との絆にけじめをつけたのだった。

もう悔しさの欠片だって残されていなかった。

なのに何で、なのに何で――

『なんで勝った方が悔しそうなのよ』

勝者な筈のワールドチャンピオンは力なく項垂れていた。

仮想のゲームアバターでしかない立ち姿から、辛気臭い悔恨が放たれている。

『悔しいに決まってる。親として師として、その素晴らしい才能を育て切ることが出来なかったんだから』

『何のこっちゃですね』
『剣を一切使ってこなかっただろう。ひたすら距離をとって、直感と反射神経とアイテム頼りの戦い方だった』
『ユグドラシルは剣道と違うんだから。前衛戦士に真正面から挑む盗賊がどこにいるの』
『ごもっともだ。だけど私は知っているから、悔しくて仕方ないんだよ。桜はホントは正面勝負が一番強い。
なのに私が君を……』
『嫌味はよして。あと名前を呼ぶなクソマサヨシ』

◆

『世界の守りが発動されました』
全身を満たす光と音の奔流の中で、場違いな機械音声が頭に流れこむ。
その間違いなくユグドラシル由来なナレーションと共に、マタタビの体は謎の障

壁に包まれて大衝撃が遮られた。

敗北を覚悟したものの、どうやら死の予感は外れてくれたらしい。

アルベドさんが貸してくれた【真なる無（ギンヌンガガプ）】のおかげだ。

スレイン法国の文献によると、始原の魔法（ワイルドマジック）の効力はユグドラシルにおける世界級アイテムとほぼ同質なのだとか。

だから世界級アイテム保持者同士が他の世界級アイテムの効力を無効化できるのと同じ原理で、始原の魔法（ワイルドマジック）も無効化できるらしい。逆もまた然りでツアーに【傾城傾国】などは通用しないようだ。

ワールドエネミーじゃあるまいに、それにしたって今の破壊力はたかが一個人が放ったものだとは信じられなかった。

光が止んで開けた視界に広がるのはガラス化した焦土。平和の御旗の限定領域である直径３００メートルの地表が、まるでスプーンに掬い取られたような巨大クレーターとなっていた。

もしこれを生身で受けていれば、マタタビの場合10回死んでも足りないぐらいだったろう。

だからマタタビはこの場にいない恩人に声を掛ける。
「ありがとうアルベドさん。さて」
体にも、特に異常は無い……はずだ。
上空から見下ろすツアーの様子は、マタタビの無事を思った通りと言わんばかりの態度だった。
始原の魔法は経験値消費による大技だ。それもこれほどの威力のモノを使ったのならば、絶対に狙いがあるはず。
しかし情報不足で相手の手札が読めないのなら、とりあえず動いてみてから考えよう。下手にあれこれ考えるよりは脳筋先生万歳である。
「『瞬間換装』学生服！」
防具であるメイド服から動きやすい衣装に着替えるマタタビ。
ふっと息を吸い込むのと同時に、地面の中から駆動鎧が飛び出して斬りかかってきた。ご立派だった鎧の外装も流石にあの爆発に飲まれては無事じゃすまなかったらしく、ところどころ穴が開いたり欠けたりしてる。
既に『読心感知』で知覚していたマタタビは僅かに半身を捻って回避し、がら空

きの胴体に吹き飛ばし効果（ノックバック）が伴ったパンプスキックを放つ。
明後日へ吹き飛んだ鎧の次に、今度は上空から流星の如く降下するツアーの竜爪が迫り来る。
この世界に一切の空気抵抗は存在せず、膨大な竜体の質量を重力加速で存分に上乗せした、１００レベルプレイヤーでも一撃死レベルの強大な一撃だ。
「当たらないね、そんな大振り」
躱すためにマタタビが大きく跳躍したあとの地面は、大爆発と見まごうような衝撃によって蹴散らされた。
そして彼の猛攻は止まらない。
「GA！」
今度は爆ぜた土埃を飲み込むように、飛び上がったマタタビ目掛けて白金色の火炎が放たれる。
マタタビは前と同じく水遁忍術で相殺しようと印を組むが、自分の中のMPがうまく流れないことに気付く。
「嘘でしょ!?」

MPが操れないという信じられない緊急事態に脳は混乱する。なにせユグドラシルではまずあり得ない事だ。

これがマタタビが知りえない始原の魔法の効力で、先ほどの大爆発はその下準備だとでもいうのか。

考えながらも反射的に両腕で顔面を覆うが、マタタビはモロにツアーの白炎に受ける

火炎吐息の威力自体はツアー自身の体力と共に減衰しており、今のところは第5位階魔法と同じ程度。

されどハイスペックな能力値から算出される基礎威力はなお強力で、まして受け手であるマタタビの耐久値はアインズ制作の量産デスナイト1体と等しいほどに貧弱だった。

「あ〝あ〝あああ〝あ〝づい〝あああ〝！！！」

熱い、痛い、ヤバい。

意識がぶっ飛びそうになるような苦痛に喘ぎながらも、HPレッドバーのところでギリギリ攻撃を堪え切った。

「あ……あぁあ」

肌が焼け付いてひりひりする。目を開こうとしたが、瞼の肉が焼爛れくっつき開かない。

マタタビは苦痛に朦朧とした意識の中で、頭上から振り落とされる尻尾の叩きつけを気配感知で右に避ける。

よろけて倒れこむようにして右方に傾き、背中を向けて全力疾走。

距離をとるために走りながら、片手でインベントリに手を突っ込み様々なアイテムを検証する。

MPを扱う忍術、使用不可。巻物(スクロール)及び魔封じの水晶による魔法行使、使用不可。

武器に宿る魔法効果、基本的に使用可。ただしHPとMPを吸い上げて威力を上げる武器の魔法効果、MP吸収のみ無効。

治癒魔法と同一の効力を発揮する回復ポーション、使用……可!!。

ポーションが有効であると理解したマタタビは、さらに即座に最高級品四本を掴み取る。

「させるものか！」

「ッ!!　うっ！」

追い立てるように邪魔する駆動鎧の剣群掃射を避けて躱しながら、回復瓶を握りつぶして自分の頭上に浴びせかけた。

「……死ぬかと思った」

「ッチ」

治癒効果は正常に働いた。傷はふさがり爛れた瞼がぱっちり開く。

焼け付くような肌の感触も元通りになり、コンディションがばっちり回復。

「今度はこっちの番ですから」

駆動鎧は眼鼻の先だが、ツアー本体からはかなり距離が取れてる。

マタタビの狙いに気付いた今の彼なら、無暗に『世界移動』では接近しないだろう。

だからマタタビはインベントリから前にも使った封印札を取り出した。

以前も使ったこの魔法効力を無効化する札は、希少素材である世界樹（ユグドラシル）の木材を最高位職業のフジュツシエントマの習得職業。符術による支援・自己強化・魔法攻撃を駆使するに錬成させることでのみ手に入る貴重品。

「またその札か」
魔法行使やMPを介する効果は何故か使えなくなっているが、アイテム単体の効果ならちゃんと使えるのは分かっている。
「有効打を出し惜しむ訳ねぇでしょ、ほら」
懐に迫り直接ぴたりと張り付ければ、マジックアイテムである駆動鎧は操り糸が切れたように力無く地面に崩れ落ちた。しかし――
「GAAAAA!!」
後衛位置のツアー本体からこちら目掛けて火炎吐息が吹きすさぶ。
マタタビは即座に離脱するが、駆動鎧はそのまま炎に飲み込まれた。貼り付けた封印札が燃えて灰へと掻き消える。
「やっぱ同じ手は無理ね」
いくら封印札と言えど、物理的に燃やされてしまえばどうしようもない。
そして封印という手段が取れなければ、HPという概念の存在しない駆動鎧への対処法は更に限られてくるだろう。何せこいつは本体のツアーが無事ならば、焼かれようが槍に刺されようが二つ分断されようがゾンビのように動き出すのだから。

「『世界移動』」

解き放たれた駆動鎧は、空間転移でマタタビの背後へと回り込んで両腕で黄金剣を振るって斬りかかった。

すぐに振り向き刀で受けるが、浮遊する剣群と再びの火炎放射が迫り、マタタビは距離を取らされる。

流石に息が上がったマタタビは「平和の御旗」の領域境界、半透明の壁に背を預けながら溜息を吐いた。

「だっる」

なるほどこのまま鎧の強靭さを担保にし、転移と剣群の手数と本体からの後方支援で持久戦を続けていれば、MPと魔法行使を封じられたマタタビはいずれ負けるかもしれない。

さっきのように一撃もらえばマタタビには致命傷なのだから。

ああなんて不思議な戦い方なのだろう。

本当は本体の方が強いのに、安全性を取って駆動鎧任せの戦い方。臆病で堅実で正しい在り方を愚直なまでに貫いている。

何かを恐れて自分が動くのを躊躇する、まるで彼の生き方そのもののようだった。
だってツアーはずっとずーっと何百年も昔から、聖堂に籠りきりなのだから。
父さんに呼ばれるまで駆動鎧を出すこともせず、今日マタタビが問いかけるまで本体が動くこともなかったのだから。

「ねぇツアー、竜帝の子。どうしてあなたはプレイヤー転移現象の手がかりを知って居ながら、父さんと母さんに何も言わずに黙ってたでしょうか」
「……」
むっつりと閉口するツアーだが、マタタビは彼の感情を手に取るように感じ取れていて、そしてその内情にも大よその検討が付いていた。
「怖かったのでしょう？　八欲王も魔神戦争も、そして我が一家の離散問題も、全ての問題の元凶はあなたの父である竜帝の仕業だ。
それを知られたら、父と母から嫌われてしまうかもだから。
いやまぁ、人間出来てる両親に限って嫌ったりすることはありませんがね。
けど今の私がしたように始原の魔法の力を乞われるのは当然の成り行きです。あ

なたが恐れているのはそこでしょう？」
自信を込めた推測はどんぴしゃりと的中する。
ツアーは嗤うように苦く笑って、閉じていた口先を開き始めた
「ああそうだ、知っていたんだ。私の力が彼らの望みをかなえられる可能性があることを。
だから怖かった。私も父である竜帝と同じ過ちを起こしてしまうのではと、そう思わずにはいられないから」
「だからあなたは今ある世界の平和のために、私の両親に何も言わずに黙ってたと。やっぱりそういうことなんですね」
「見殺しにしたと言っても、差し支えないだろうさ。いうなれば私は君の親の仇。憎んでくれて構わない」
「あほ。精々が親の仇の子供だろ。そも竜帝さんとやらにしたって、今の私の眼中にはない」
堂々と罪科を背負い虚勢を張るツアーの姿は、まるで自分の鏡を見ているようだった。

馬鹿だなぁ。ツアーもマタタビも、簡単に人のせいにできるチョロいメンタルだったらば、こんなに拗らることは無かったでしょうに。

「君がどう思おうが気にしない。

私のかつての仲間には竜帝のことを知っていた者が居てね。君の両親の死後に私の正体を明かしたところ、ものの見事に全てを見抜かれた。そして裏切り者の烙印を押されてしばらくは仲間じゅうから総スカンさ……ハハハ。あたりまえだよね！今でもリグリットには正体を隠してた事ぐちぐち言われてるぐらいだからさ」

「あっそ」

「だからマサヨシとトウコの願いを握りつぶした私にできるのは２つだけ。竜帝やプレイヤーの如き私的な力の乱用を、自他ともに決して許してはならないこと。

そして彼らが救った素晴らしいこの世界を何としてでも守り切ること、それだけだ」

「なるほどね、くそ真面目野郎ですか」

マタタビは、断片的なツアーの生涯の道筋を思い起こし、それを一本の線になるよう頭の中で紡いでいく。

世界を混沌に貶めた竜帝を父に持ったことへのコンプレックスと、そして同じ力を受け継いだ自身への自己嫌悪。

５００年前、ツアーが真なる竜王の中で唯一八欲王たちに挑んだのは、きっと責任感によるものだ。

そんな性格に目をつけられて、没落した八欲王の従属神から体よくギルド武器を押し付けられた。

竜帝や八欲王のようにはなるまいと意を決したツアー。ストイックな彼は外界への興味を一切断ち切り、何百年も宝物に囲まれ聖堂の中に引き籠る。

『結局他の竜王たちと同じく力があるだけのくだらない存在だったんだね』

『……なんだって？』

そんな折マサヨシ達との出会いによって、断ち切っていたはずのこの世界そのものへの強い愛情が芽生えることになる。

だがそんな世界への愛を貫くためには、それを教えてくれたマサヨシ達との友情を裏切らなければならなかった。自分が竜帝と同じ過ちを成さないために。

友を裏切り世界の平和をとったツアーは、罪悪感と正義感を拗らせ今現在に至ると。大よそそんなところだろうか。

この推測がどれだけ当たっているかはわからないが、なんにせよ一つ言えるのは

「ツアーってかなり面倒くさい奴ですねー」

「世界で一番君にだけは言われたくない」

「どうかな。流石に数百年単位の生い立ちでこじらせる奴なんて見たことねぇですから」

マタタビやアインズ様も大概だが、コイツもコイツで随分面倒くさい性根になってしまったらしい。

この3者の共通項がある人物の存在であることを想うと、なかなか笑える話だった。

「昔から、こうなんですよ。父さんに深入りでかかわった連中は老脈男女全員が全員拗らせる。

小さい頃からずっと見てきた私が一番よく知ってます。あれは我が親ながらとんでもない魔性の男ですよ」

「なら君は父親似だよ」
「……ご冗談を。殺すぞ」
似てるなどと宣うツアーの心無い言葉を皮切りに、マタタビの体が芯から熱くなってくるような気がした。
でも今はそんなちゃっちいことに構ってる場合ではない。
ようやくだ。ようやくツアーのことを解ってきたような気がするのだ。
彼がこれまで何のために何と戦ってきたのか。
そんな彼相手にマタタビが、己の望みを押し通すには何をしなくちゃいけないのか。
どうすれば、頑なな彼の心をへし折れるのか。
「お喋りはここら辺にしましょうか」
考えた果て結局のところ、マタタビが為すべき勝利はたった一つだけだった。
「覚悟しやがれ世界の守護者。あなたに世界は守れない」
「小娘が、やってみろ！」
マタタビは腰かけていた領域の障壁を、両足で垂直に踏みつける。

それから全身をバネの反作用のようにして、水平方向に向かって跳躍した。
己は弾丸。飛んだ勢いに自分の足が置いて行かれそうになるほどに、ただまっすぐに狙いに向かって射出する。
先の狙いは、ツアー本体ではなく駆動鎧。走力の勢いそのままに、ノックバック効果を上乗せしたスタンプキックをお見舞いだ。
「せい！」
魔法効果による吹き飛ばしとマタタビ自身の最高速力が上乗せされた勢いは、駆動鎧を反対側の障壁に叩きつけるに至らしめた。糸が切れたように空の四肢をグニャグニャ回しながら、ガシャガシャと金属音を鳴らす。
ダメージは殆どないだろう。しかしツアーの認識が追い付かない今のうちに、マタタビは両手にメリケンサックを嵌めリボルバー拳銃を握りしめた。
それから至近距離まで接近。駆動鎧の流麗な外装にむかって、マタタビは残段数6分の5を発射させた。
もちろんガンナークラスを取得してないマタタビの銃撃威力などお察しだ。格下の敵すら満足に屠れないし、火力だけなら手裏剣の方がマシなくらい。

しかしそれでも、この攻撃には意味がある。
放った大粒弾丸にある細工が仕掛けられているからだ。
「……酸か」
「そゆこと」
被弾した鎧の個所からジューと悲しい煙が昇り、白金色の御立派な駆動鎧はその耐久値を削られていく。
高レベルダンジョンにのみ生息するスライム種最凶モンスター古き漆黒の粘体《エルダー・ブラック・ウーズ》。
ナザリックの旧ギルドメンバーヘロヘロと同一種族のそいつらから低確率でドロップできる、何でも溶かす最強酸『黒凝塊の酸（アシッド・オブ・ブラック・プディング）』。
それをこの弾丸に込めて撃ち放ったというわけだ。
それからマタタビは全身の力を抜いて、大きく息を吐いてから拳を固めた。
「なんちゃって怒りの鉄拳!!」
メリケンサックにHPを吸わせ、衝撃波をまとわせて両手でがむしゃらに連撃を放つ。

ツアーの『世界核子』に巻き込まれたダメージも合わせ、あれだけ頑丈だった駆動鎧にひびが走り、まもなく胸板に大穴が開いてバラバラに砕け散った。

これぞヘロヘロ式武器破壊術。ユグドラシルにて数多の前衛プレイヤーたちを苦しめてきた史上最悪の戦術。

ヘロヘロと仲の悪かったマタタビ自身、ＰＶＰで何度も痛い目を見させられてきたものである。

だからマタタビもその技を流用し、ユグドラシルでは１００個近いギルド武器を同じ方法で破壊してきたものだった。

「ヘイヘイツアー、ビビってるぅ～♪」

「黙れ、ギルド武器は壊させないよ。私の魂に懸けてね」

スキル読心感知とマタタビの勘が、駆動鎧を破壊されたことへのツアーの畏怖を感じ取る。

マタタビの狙いを知っているのだから、そりゃあ否が応でも連想してしまうだろう。

ギルド武器をマタタビに奪われ壊されるという最悪の敗北を、思い浮かべずには

いられまい。

◆

マタタビの戦闘における本領は、どちらかと言えば閉所の屋内戦にある。

それでもわざわざツアーが座していた聖堂の中ではなく、こんなだだっ広い平原で戦いに申し込んだ理由。それはもちろんツアーの持つ八欲王のギルド武器の在処を探るためだった。

ツアーが聖堂という場所でギルド武器を守護してるなら、考えられる在処は二通り。

一つは聖堂内部のどこか。もう一つはツアー自身が腹かケツ穴にでも隠し持っているか。

これを確定させるためだけに、あえてツアーに有利な屋外戦を申し込んだワケ。

結果的に彼がマタタビを伴って外に出てくれたから、十中八九ツアーが武器を持っていると確定した。

まさか留守の場所に世界滅亡スイッチを置き去りにするわけがないだろう。念のため留守番を任されたアクターさんがマタタビの姿に変身して、聖堂内を物色させて何も見つからないことを改めて確認してくれた。

それを〈伝言（メッセージ）〉で報告してくれたのがついさっきのことである。

あとはマタタビがツアー自身の手札を削り、確実なタイミングを見計らって〈最上位窃盗〉でギルド武器を奪い取る。

これが最初から考えていた大よその作戦だった。

（ま、結構しんどいんだけどね……）

ただでさえ、今までの戦闘経過はその全てが一切綱渡り。MPを封じるという未知の手段や、彼自身の戦闘経験の豊富さになんども死にかけたものだった。

それに、鎧を壊して得意げに壊してやったはいいものの、実はマタタビにとっては駆動鎧とツアー本体のコンビネーションよりずっと、ツアー単体を相手取る方が

遥かに手強かったりする。

パワースピード耐久値にHP。無限撃ち出来る火炎吐息と高い制空能力。常識破りな壊れ能力満載の始原の魔法。

実際に戦った感触からして、ツアーの能力の総合値はワールドチャンピオンであった全盛期たっち・みーとタメを張れる。

そんな彼の最も恐ろしい点は、決して自分の能力に慢心しないところだった。

平均レベルが50を遥かに下回るこの世界にて、１００レベルクラスの存在が油断と慢心を断ち続けるのは決して容易ではない。転移直後のナザリックの守護者たちやマタタビ自身がいい例だ。

だが彼は５００年前八欲王たち生存競争に身を投じたことで、同格との戦い方を魂に刻み込んだ経歴がある。また、魔神戦争に参加したことで様々な能力者の知見を得たことも非常に大きい。そこにおける本来の意味での経験値の蓄と質は、お遊びでしかないユグドラシルとは訳が違うのだ。

あるいはそれは、ユグドラシルを人生そのものと捉えていたアインズ様の在り方

と非常に似通っている様な気がした。

（二人がまともに出会って居たなら、仲良くなれたかもしれねぇですね）

こんな化物にどうにかマタタビが食らいつけていた理由は二つだけ。

一つはドラゴンという巨体種の性質上、スピードと小回りの利くマタタビのような相手の対処が苦手だったこと。

そしてもう一つは、彼がマタタビとの接近を過剰に恐れ、対処が楽な駆動鎧の遠隔操作を主体に戦ってくれていたからだ。

後者は当然、そうなるようにマタタビが仕向けた。

戦闘序盤、マタタビが片腕と神器武器２つを犠牲にしてまで彼の片目を奪ったのは、ツアー自身に臆病風を吹かせるため。わざと大きな声でアクターさんとの〈伝言（メッセージ）〉を口にしたのも同じ理由だ。油断大敵なその性格を逆手にとって、結果はびっくりするくらい狙い通り。

それでも、けれど、重ね重ねでくどいけど、マタタビは何度も何度も死にかけた。

間も無くホントに死ぬかもしれず、偽りの死でも怖いものは怖かった。ただ死の

恐怖を超越して、彼に勝ちたいという思いがマタタビを戦いに赴かせる。
アインズ様の名に懸けたのだ。敗けられるはずが無いだろう。

◆◇◆

ツアーは己が極めて冷静さを欠いてることを自覚する。
竜の心臓は焼爛れるような苦痛で鼓動を速め、滝汗が鱗から流れて極寒に投じられたように身が強張った。

こんなことなら初志貫徹して挑戦なんて受け入れるべきではなかったと、ツアーは情けなく過去を悔いた。
そもそもこの戦いは、ツアーが抱えていた佐々木一家への負い目のために、サクラに対しての気持ち程度の償いとして引き受けたものだ。
そんな傲慢な心情の隙をつかれて、ツアーは今かつて無いほどに追い詰められている。心情的にも状況的にもだ。

竜帝の所業の暴露、佐々木一家への罪悪感、犠牲をいとわずツアーの眼を刈り取る狂気、巧みな戦闘経験による隙のない立ち回り、ギルド武器を奪取するという末恐ろしい最悪の魂胆、見せしめのように駆動鎧を破壊して見せるパフォーマンス。

サクラの全ての立ち振る舞いが、ツアーの闘争心をどす黒く塗りつぶし、心を折ろうと図ってくる。

確実にわかるのは、すべてが彼女の手のひらの上ということ。己が負けるかもしれないこと。

消えかけの灯の如き、わずかに残るツアーの矜持が辛うじて意識をつなぎとめる。

しかし迷いと恐怖に濁ったツアーの隻眼は、最早サクラの神速を追いかけることがかなわなかった。

追いかけれども、追いかけれども、全て紙一重で逃げられる。

無力感と絶望がドロドロとツアーのプライドをズタボロにする。

ふと心のどこかで零れ落ちるように「勝てるわけがない」と泣き言を連ねはじめ、そこからはもう早かった。

いつのまにやらツアーの腹に潜り込んでいたサクラは、右手を赤く輝かせて鱗の上に手を添える。
「『最上位窃盗』」
間も無く彼女の手元には水晶の刀身をした煌びやかな剣が握られて、それを即座に左手に持つ拳銃の口を剣の刀身へと添える。
それからまるで満開した花のように晴れやかな笑顔で、サクラはツアーを見上げて言った。
「ね、言ったとおりでしょ？　ツアー、あなたに世界は守れない」
ツアーは万感を込めて答えた。
「ああ。私の負けだ、ササキ サクラ」

回帰不能点

◆◇◆

決闘を終え、ツアーの住処である聖堂に戻ってきたマタタビは、モモン姿のアクターさんを交えて3人で今後の話をすり合わせを始めた。

まずは約束通りに、ツアーに対してリアル世界への帰還の協力を取り付けた。そこまではいい。

しかしツアーは微妙に乗り気ではなく、というのも竜帝が世界の壁に穴を開けた始原の魔法（ワイルドマジック）『偽世界降誕』という技は、出力が不安定でコントロールが非常に難しいのだとか。

今のままツアーが同じことをしようとすれば、かなりの確率で失敗してしまうらしい。

ツアーは当時のことを、かなーり暗い表情で嫌々ながらも教えてくれた。

「千年前のことだ。私の慈母（マザー）は夫である竜帝の酒癖の悪さに我慢ならず、一族秘伝

の竜の秘宝を使ってまで異世界へと逃げ出した。
　それをこの世界へ引き戻すためだけに、竜帝……私の父は『偽世界降誕』を使ったんだよ」
「え？　そんな夫婦の痴情の縺れがすべての始まりなんですか？」
「……Oh　呆れてものが言えませんね」
「この技はただでさえ微細な魂のコントロールが必要なのに……竜帝は酒に酔っていたこともあって、結果は大失敗だ。全く異なる異世界、すなわちユグドラシルから君たちプレイヤーや れいどぼす達を招くことになった。
　そして当事者である竜帝はと言えば、魂を消費し過ぎて消滅だ。笑い話にもならないさ」

◇以下回想

『くそー!!　かあちゃんめ、可愛いツアーをのこしたまんま異世界になんぞ逃げやがってー!!』
『父ちゃんもういいよう!?　とりあえず酔い止めのもう？　ねぇ？』

『こうなったらやってやんぞー!!　逃がしやしねぇどりゃー『偽世界降誕』!!
かあちゃん帰って来いやおら―!!　おらおらおらー!!』
『酔ったまんま始原の魔法(ワイルドマジック)なんて危ないよぅ!?』
『グワーッ!?　出力ミスった?!　やべぇ俺消えちゃいそう!!』
『父ちゃん!?」
『ごめんツアー!!　愛してるぜー!!』
『ふざけんなくそおやじ!!』
かくして世界の壁がバリバリパリン
１００レベルプレイヤーと強力なレイドボスが空からドバドバー
世界中が大迷惑の大混乱
まさに全ては竜帝の汚物、吐しゃ物というわけです
これにておしまいゲロゲロオェー

◇回想終わり

「うわぁ……うわぁ……」

「ほほぅ……言い伝えられていた『竜帝の汚物』がまさか文字通りの意味であったと、よもやよもや」

マタタビは余りのアレさに頭を抱えてしゃがみ込み、アクターさんは失笑しながらお手上げみたいなポーズしてる。

そりゃそうだ。私たちがこの世界に来てから沢山色んなことがあったし、来る以前にもプレイヤーたちによって多彩な歴史が紡がれてきたはずだ。

なのにそれら全ての発端が、こんなくだらない真相だったなんてあまりにも馬鹿げてる。

リアルで例えれば、酔っぱらって核のスイッチ誤発射したせいで、数百年単位で世界大戦が巻き起こるという話だ。

やるせないにも限度があるってもんだろう

「……まったく、竜帝やその配下たちは間違っていたし、慈母（マザー）は正しかった。『飲

み過ぎは良くない』」
「うんうん良くない。飲み過ぎ良くない」
「……ハッ」
そしてそんな真実を世界で一番許せないのは、ツアー自身に他ならない。
だからなるほど、八欲王との戦争に竜王の中で唯一立ち向かった理由も良くわかる。
わざわざギルド武器を守るため聖堂に一人引きこもり、父さん母さんたちに自分の力を頑なに貸さなかった決断だって責められない。
この世界でツアー程、自分の持つ力に責任感を持っている奴はいないだろうから。
「だから、ね？　わかるだろう？　もちろん君に完敗した手前、今更力を出し渋るなんてケチな真似はしたくない。
けれど竜帝の二の舞になるくらいだったら死んだ方が遥かにマシなんだ。
だから力を貸してほしい。私の始原の魔法（ワイルドマジック）を確実に成功させるための研究に、どうか協力してくれ給えよ」
首を垂れるツアーを見て、マタタビは後ろのアクターさんを振り返る。

彼は「仕方ない」とでも言うように無言の首肯をしてくれたので、マタタビは振り戻ってツアーに応えた。
「事情はよぉーくわかりました。ではこちらも、ナザリック地下大墳墓としてご協力させていただきます」
「なざ……え？　なに」
「いいから、全部一から説明させて。ややこしい話なんだよこっちも」
元からマタタビは、ツアーには全部話すつもりだった。
ギルド武器を奪い取った今どう足掻いたって彼はこちらに逆らえないし、それにツアーが完全にこっちに協力してくれることも確認できたし。
「……まぁ、いいけど」
だからマタタビは、この世界に訪れてからのあらゆる経緯をツアーに対して語り始めた。
彼に一部の不安も与えないように。要らない情報は隠したり、こっちの都合で少し嘘を混ぜながら。
けれどバカみたいな勘違いも行き違いも起きないように、慎重に。

この世界には、ユグドラシル一すごいギルド拠点を持つ友達と一緒に訪れたこと。
そこでマタタビがかなりお世話になってしまったこと。
マタタビが傾城傾国のせいでダークエルフと吸血真祖の友達を殺しかけた時、ツアーの横槍のおかげで踏みとどまれたこと。
そして最終的にはモモン達に命を救われたこと。
王国のマッチポンプについては多少顰蹙を買ったけど、ツアーの隠し事よりマシなのだから勘弁してほしい
父マサヨシのことで友達と少し揉めたけど、結局マタタビに力を貸してくれることになったこと。
ナザリックには3、4人頭のいい人たちが居て、豊富なマジックアイテムもあるから始原の魔法（ワイルドマジック）の研究に役立つだろうこと。
出来る限りを話しつくすと、渋い顔をしながらもなんだかんだツアーは納得してくれた。
「よくあることだ、仕方ないよね」

「ありがとうございます」

こんな風に互いに腹を割って納得し合えれば、どれだけ良いだろうか。

そんな考えが脳裏を過ったマタタビは、自分の頭の花畑っぷりに辟易とした。

この世界には、嘘で救われる人たちもいるだろう。

嫌なことは出来る限り隠したいだろう。

アインズ様とマタタビみたいに、下手に本音を晒したばかりに平行線で延々と大喧嘩をし続けることだってあるんだから。

都合の悪いところは退け合って、互いに適度に心の距離を保つ方がずっと平和なんだろう。

身に染みるほどわかってるけど、それでもマタタビは思ってしまうのだ。

アインズ様とＮＰＣの皆様方も、いつかこうなればいいのになと。

我ながら能天気にもほどがある。

そんな雑念に捕らわれながらもマタタビは、どうにかツアーとの交渉を成功させることができたのだった。

マタタビは非常に口下手なので、横から挟むアクターさんの助言にはひたすら感謝しかなかった。

◆

一仕事終えたマタタビとアクターさんは地下聖堂から螺旋階段で地上に戻り、改めて地表にあった両親の墓に墓参りをすることにした。

まずはお掃除。インベントリから箒と雑巾と無限の水差し（ピッチャー・オブ・エンドレス・ウォーター）を取り出し、砂埃を履いて石碑を水拭きでピカピカにする。

マタタビはそこそこ綺麗にすればいいと思ったのだが、アクターさんはＮＰＣの悪癖か20分以上作業の手を止めなかった。しまいにゃ洗剤まで出そうとする始末だ。

「そういう凝り性、あなた方の悪い癖ですよ。棺の中で喜んでくれるわけでもあるまいに、やり過ぎたってしょうがないでしょ。ある程度でいいんですって」

「ある程度でいい、などと適当をのたまう連中に碌な者はおりません。そういう連中に限って、曖昧な判断で他人の基準に事細かに口出しをして来るものです

第一、至高の御方に対する奉仕に手を抜けるシモベが居りましょうか。１時間は使わせていただきたい」

アクターさんは頑固だった。

その様子にマタタビはため息をつきつつ、彼が手に持つ洗剤の瓶を取り上げる。

「この頭でっかち。逆に聞くけど、あなたが死んで棺に入ったとして、１時間以上無駄に丁寧に掃除されたらどう思う？　やめて欲しいと思うでしょう？　シコウノオン方々も同じなんですよ」

「はて、そんな道理は知りませんね。この世界に転移する以前、アインズ様はかなりの頻度で宝物殿の霊廟に参拝しては長時間かけて手入れされておりましたが？」

アクターさん、親の背中で変な常識が育ってしまったらしい。

霊廟なんて作るアインズ様もアインズ様だ。

「……それはアインズ様がおかしいの。あの人の考えは知らんけど、ギルドメンバーってほぼ全員生きてるからね？　本人たちが知ったら絶対引くよ」

「生前葬も、至高の御方々ほどの御身分ともなればさして不自然でも無いのでは」

「知らぬ間に葬られてる人の身にもなれですよ」

「天上天下アインズ様独尊。あの方が世の理なれば、すなわち我が奉仕もまた真理。つまり私は正しい」
「アルベドさんに告げ口した奴が何か言ってる」
「あれは気の迷いでした。しかしあなたも強情ですね全く……仕方ありません」
強情はどっちのことだか。
アクターさんはマタタビから洗剤瓶を取り返すと、ドッペルゲンガーの能力でモモン姿からマタタビと瓜二つの姿へと変身した。
それから指で印を組み、シノビの汎用忍術を発動させる。
「〈影分身の術〉」
ただでさえ嫌いな自分の顔、それが６人も現れてマタタビは思わず口に手を添える。
「うげぇ、あいかわらずキモ」
「失礼な。せっかく折衷案を出させていただいたというのに」
そう言いつつも、アクターさんはどこか楽しげに笑っていた。マタタビが嫌がってるのを見て喜んでいるのだろう。

アクターさんの腐れ根性にへし折れたマタタビは、黙って同じ顔の７人とひたすら墓をピカピカにした。

掃除が終わったら参詣。墓そのものは洋風だけど、やるのは和式のお墓参り。水差しで軽く打ち水をして、６階層に咲いていたカーネーションの花を水鉢に入れる。お供えモノにピッキーさんから貰ったワインを置き、御線香を立てて合唱。そして最後にご報告である。

「お父さんお母さん。私この世界に来て色々あったけど、なんだかんだ元気です。横の彼も含め友達もたくさんできました。

あと近々冥土から二人を強制サルベージして、私も一緒に元の世界に帰ることにしたから。楽しみに待っててね」

我ながら後半の方はどうかと思うが、とりあえずこんなもんでいいだろう。目を閉じ、両手を合わせてしばらく祈る。隣でも見様見真似でアクターさんが同じポーズをしていた。流石にモモン姿に戻ってだけど

「じゃ、帰りますかナザリックに」

祈り終えたので両腕を空に伸ばし、うーんと唸ってからマタタビは振り返る。
しかしアクターさんは胡乱げにマタタビに問い質した。
「おや、御遺体は持ち帰らないのですか？　いくら竜王のひざ元と言えど、このような場所に野ざらしは危険でしょう。いざという時奪われていたら目も当てられない」
「いやうん、今更言われてもね」
アクターさんの言い分は、まぁ間違ってはいない。間違ってはいないけど突っ込みたい。
「墓掃除云々の下りは何だったのよ……ピカピカにする意味ありました？」
「墓参りなど所詮は参詣者の気分の問題。やりたいだけやるのが正解と言う話です。お嬢様の気遣いや我々シモベや奉仕、アインズ様の御慈悲すら、思い遣りとは突き詰めていけば全て自己満足なのですから」
「へぇ意外。シモベのあなたが、そんな割り切った考えするんですね」
「反対されないようでしたらば、では」
まるでＮＰＣらしくない考え方に驚くマタタビをよそに、アクターさんはテキパ

キと墓を暴き始めた。
石碑を丁寧に引っこ抜き、スコップを出して土を掘り上げる。やがて大きな棺が見つかった。
「高度な保存魔法が掛けられていますが、念のため先に私が御遺体を確認します。明後日に向いていてください」
「う、うん」
見知らぬゲームアバターと言えど、流石に両親の死体は見るのに覚悟がいる。
仮に腐ってたり骨だったりしたら、異業種の精神とか以前の問題で目を向けるのは怖い。
アクターさんの気遣いに甘えて真後ろに首を曲げると、大蓋が開く音がした。
ゆっくりとした布切れの音。アクターさんは、異様に淡々とした声で告げた。
「ご安心を。腐食も白骨化もしておりません。よければ確認為されますか」
「見たいです」
マタタビが目を向けると、大きな棺の中に特大の安眠（シュラウド・オブ・スリープ）の屍衣で包まれた、同衾する一組の男女の姿があった。

わかってはいたけど知らない顔。面影すらも感じないけど、ツアーやリグリットやイビルアイなど指し示す多くの状況証拠がこの人たちをマタタビの、佐々木桜の両親であると証明している。だからマタタビはすんなりと実感を受け入れることができたのだった。

マタタビは、二つの顔を見比べてある違和感が引っ掛かった。

なんかちょっと、頭の形が変な気がする。少し、内側からへこんでいるような

「え、これって……」

「どうなさいましたか」

返事をするモモン姿のアクターさんは、極めて冷静で平たんに口調をそろえていた。

まるで己の感情を押し殺してるみたいで、アインズ様が『精神安定化』させてる様子とすごく似ているように思える。

マタタビはおもむろに、二人の髪を両手で掴んでゆっくりと頭を上に向けた。

すると思っていたよりだいぶ軽いことに気付く。

一般的な成人の脳みそは約1、5キロ。大体それと同じくらいの重量が、頭部

から吸い取られたように無くなっているようだった。
「どう、なさいましたか」
アクターさんは冷淡に、マタタビへ問い続ける。

◆◇◆

『ね、言ったとおりでしょ？　ツアー、あなたに世界は守れない』
『ああ。私の負けだ、ササキ サクラ』
〈水晶の画面（クリスタル・モニター）〉に投影された、タタビとツアーの決闘の記録映像。その顛末を見届けたアインズは、執務机に片肘をついて重たい溜息とドッと吐き出した。
「はぁ」
案の定、リアルタイム視聴はしないで良かった。終わった後に勝ち勝負だったと報告を受けてから見たからこそ、アインズの胃痛はだいぶ軽減されている。

そうでなければ肝が凍って情けなく動転する他なかっただろう。

「……信じられない。相変わらずなんて酷い戦い方なんだ」

規格外の機動力と常識外の運動神経でほとんどの攻撃を凌ぎ切るという、狂気と紙一重の神業。

アドリブの極み、手探りで能力を暴きながらの大味な立ち回り。

己の片腕、第10位階相当の羊皮紙3枚、最上級回復ポーション7本、黒凝塊（アシッド・オブ・ブラック・プディング）の酸、神器級アイテム二振りを即座に使い捨てるという速過ぎる判断力。相手の人格に全幅の信頼を置いた、綱渡りの如き心理戦。

その全てがアインズの哲学と真っ向から相反し、見るだけで疼いて仕方がない。

もっと慎重に立ち回れないのか。貴重なアイテムを乱用し過ぎていないか。ゆっくり分析できないのか。そもそも手の内の知れない一発で勝算なんてあるのだろうか。

突っ込みどころを数えたらキリがない。

傍でアインズと共に見届けていたアルベドは、アインズに深く同調した。

「全くです。御身の心中お察しいたします」

「ありがとうアルベド。しかし、彼女が勝ってくれたのならばそれに越したことはないか」

本来アインズとしてはマタタビが白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王に敗けようとも、彼の手の内を暴け出せたのならばそれで良かったのだ。今のように記録映像からその能力と戦闘スタイルを分析し、確実に勝てる算段を立てるつもりだったから。

仮にマタタビが破れていた場合、アインズは映像から分析して最も相性の良いセバスを刺客に送り込み、力で圧倒してギルド武器を奪い取る作戦を練っていたことだろう。

とはいえ手札を切らずに済んだうえ、弱みを握ってツアー自身も納得して協力してくれるのならばそれ以上の結果はない。良くも悪くもこんな芸当はマタタビにしかできなかったことだろう。

「彼女がナザリックに訪れて、初めて明確に役に立ったと言えるかもしれませんね」

「ああそうだな」

アルベドは冗談めかしながらにやけ、アインズも悪くはない気分だった。

マタタビがナザリックに訪れてくれてよかったと、そう思える理由がまた一つ増

えてくれたから。

しかしふと、そんなささやかな喜びに水を差すように、一通の〈伝言（メッセージ）〉がアインズの思考へと受信された。噂をすれば何とやら、相手はマタタビ当人である。

「あぁマタタビさん、言いたいことはありますが一先ずお疲れ様です。どうしましたか？」

先の戦勝の報告に起源を良くしたアインズは、珍しく朗らかにマタタビへと問いかける。

しかし当のマタタビは、氷を思わせるような冷徹な声で、一方的に言い放った。

『今からタブラを始末しに行ってきます』

「は？　今ですか⁉」

今は敵対しているかもしれないかつての仲間、タブラ・スマラグディナ。

もちろんアインズとて今では現実を受け入れているが、唐突過ぎるマタタビの宣言にはひたすら混乱する他ない。

ただ流石のアインズも、この時のマタタビを全力で止めるべきだったと一生後悔

することになるなんて、今は予想もつかないだろう。

黒幕の裏側

,ｍｎｂｖｃｄｔｙｕｉｌ;/:@ｐｌ./+]@ｐｌｋｌ+

私は私が大嫌いだ。

自分の嫌なところなんて、数えればキリがないくらい。

傲慢で知ったかぶりで、その癖人の気持ちなんて全くお構いなし。結局は自分の気持ちが最優先。

まっすぐ努力するのが大の苦手で、すぐに脇道逸れてズルすることばかり考えている。

すっごく短気で嫌なことがあったらすぐに頭に血が上って、暴力と暴言に訴える。

協調性の欠片も無くて、誰かが仲良くつるんでるのを見ると壊したくってたまらなくなる。

口の悪さは自信の弱さの裏返し。他人を貶すと自分がマトモに成れたような気になって、でも全然そんなことはないのもわかってる。

わかってる。そう、わかっているんだ。

自分はどうしようもないくらい至らない人間で、それのせいで他人にどれだけ迷惑をかけてきたことだろうか。

父さんにも母さんにも、仕事場の人間にも、ナインズ・オウン・ゴールの連中にも、ナザリックの皆様方にも、アインズ様にも。

もうホントに尋常じゃないくらいの大損害を与えてきたことは、紛れもない事実だ。

それを私は理解している。

理解したうえで、今なお私は変わらないままで、厚顔無恥にも息を吸ってのうのうと生きている。

喋り方を気を付けようとか、カウンセリングを受けに行こうとか、せめて一人で抱え込まない様にしようとか、出来ることはあるはずなのに。けれども私は変わっていない。まるで「わかっている」ことが免罪符にでもなるかのように、周囲に負債をばら撒きまくっているのがどうしようもない私の現状なのだ。

わかってることは言い訳にならない。それすらわかっているのに、心のどこかで

「わかっているから許してほしい」と醜い言い訳を連ねるのがどうしようもない私の弱さ。だからこそ、私は私が大嫌いだ。

ああ、ああ、どうしてアインズ様は、あんなに変わっていけるのだろう。

自分を殺し、人間性も、享楽も、何もかも投げ打って、周囲の為に理想的に振る舞い続けることができるのだろう。

自分とあまりに違い過ぎて、妬みすらも湧いてこない。元は同じ人間だったなんて思えないくらい、全く私と違い過ぎる

私と違って、あの人は凄い。あなたもそう思うでしょう？

なのにどうしてあなたは私の為にアインズ様を裏切るの？

どうして？　どうして？　教えてよ。

ねぇ、アクターさん。

ｌｌｐ、。；ｌｐ@ｋｈｊｋｍ、。」；ｌｐｌ；。

◆

どす黒い衝動に塗れた心を引きずりながら、脳と体に刻まれた冷静さが我が身をゆっくりと導いていく。

まるで心と体が剥離したかのような、夢遊病的感覚に酔いながらマタタビは霧の中をかきわける。

辛気臭い濃霧に包まれた荒野、人呼んでカッツェ平野。

マタタビは時折闊歩するアンデッド達の群れを隠形で避けながら、淡々と足を運ばせ目的地へと歩んでいく。

やがて元は市街地であっただろう廃墟の群が姿を現し、それらは栄枯盛衰の哀愁を切々と物語っていた。

住宅地、広場、枯れた噴水、神殿。かつては瑞々しく栄華を誇ったであろう民たちはもう居らず、スカスカのアンデッドたちがうようよしているだけだった。

そんなダークファンタジー的なホラー風景だけれど、マタタビにはあまり他人事

とは思えない。
マタタビとアインズ様がいたリアル世界の外周区だって割と似たり寄ったりなものだった。
あそこもちょっと路地裏を除けばリンチ死体とかガス中毒でくたびれた子供がいるくらい酷いもの。
首都圏内ならまだいい方で、住民退去された地方都市の残骸の酷さはこっちのカッツェ平野とそう変わらない。まさに死都だ。
うろつくアンデッドたちよりも、生々しいリアリティのほうがマタタビには遥かに不気味に思えたのだった。
（これがあの、ネコさま大王国の末路ですか。物寂しいものです）
目的地にたどり着き、マタタビは足を止めて目の前の建物を見上げた。
建物と言うか廃墟と言うか、いっそ遺跡と呼んだ方が適切かもしれない。
ギルド：ネコさま大王国が誇った城塞型ホームダンジョン、ノイカッツェンエルンボーゲン城。その無残な成れの果て。
かつて、お伽噺の白亜の城とも言うべき威容を成したこの城には、猫好きのロー

ルプレイヤーたちがこれでもかと猫系のＮＰＣを詰め込んでいたものだ。マタタビと同じケット・シーだったり、スフィンクスやバステトだったり白虎だったり骨猫のアンデッドまで。

まさに防衛力そっちのけで作り上げられた全階層猫カフェとも言うべき、猫好きの夢そのもの。その過剰なまでの猫愛はかつて侵入者として訪れたマタタビにまで向かうほどで、変身解除して猫モードに戻ると向こうは一切攻撃をしてこなくなった事があったのを記憶している。連中は本物の猫バカだった。

そんな夢の跡地が今や、見る影も無い有様だ。

城の外壁は崩れ落ち、所々に穴が開き、あちこちに瓦礫が散乱し、ひび割れて欠けたり砕けたりした城壁。天高く聳え立っていたはずの円塔群は幾つもが崩れ落ちてしまって、もはや残っているのはほんの一部だけだ。

ゲームの続編で没落した前作のダンジョンがこんな感じだったと思いつつ、マタタビは廃墟と化した城内へ足を踏み入れた。

当然というべきか、やはり内装の荒廃も酷いもの。本来ならばそこは玉座の間であったり、謁見の間で在ったり、会議室で在ったり、様々な用途で使われていた場

所なのだろう。しかし今となってはそのどれもが本来の機能を果たすことはない。

ただ今は、周囲に散乱する大小さまざまなネコ科動物たちの骨……否、化石が広がった共同墓地でしかなかった。

そんな見るも無残なギルド拠点の末路を想えばこそ、ナザリックは決してこれの二の舞を踏んではならないのだと強く思う。

たとえギルド：アインズ・ウール・ゴウンが滅びてもだ。そのためにこそ私はあの人の手を取った。真に大事なものの為にだ。

マタタビはふと足を止める。自分の一歩先の地点から明らかに場の空気が変わる気配を覚えたからだ。

（……ようやくか）

風景は何も変わらない。歩いてきたのと同じ通路が先まで続いているだけである。

しかし盗賊職最高位の探知スキルとケット・シーの生体感覚が警鐘を鳴らし、マタタビに危険を知らしめた。

この一歩先こそ敵地であり、一切の油断もままならない。

マタタビは、殺意と憎悪に煮えたぎる心を務めて抑えつつその一歩を踏み出した。
我が脳と体に染みついた知識と経験と勘を頼りに、いつものように未知の死地へと散歩気分で。

◆◇◆

旧ノイカッツェンエルンボーゲン城の地下室は、地下墓のような辛気臭い石造りになっている。
頭蓋骨に光源を埋め込んだランタンの照明が天井に横並び、薄暗く狭い通路を照らしていた。
この地は錬金術師タブラ・スマラグディナが数百年がかりで資源の乏しい異世界から使えるものをかき集めて作ったトラップダンジョン。
迷宮染みた複雑な通路には、この世界の住人では到底太刀打ちできない厄介な罠の数々が仕掛けられている。
転移阻害、落とし穴、隠し扉、仕込み爆弾、猛毒ガス、転移トラップ、高レベル

ＮＰＣの死骸で作ったアンデッドモンスターたち。いくら１００レベルプレイヤーでも無傷とまではいかない代物である。

逆に言えばプレイヤー一人殺せるかすら怪しいレベルでしかない。が、制作者であるタブラはその辺りは割り切っていた。

数ある罠が一つでも作動してくれれば侵入者が来たというアラートになる。最奥までたどり着く者はすなわちタブラと同格の１００レベルプレイヤーだ。

それだけ分かれば及第点。あとはその能力を見極め勝てる相手なら滅ぼし尽くし、無理そうなら逃げるが吉。

この地下拠点はタブラにとってそれだけのモノでしかない。

精々思い入れがあるとすれば、内装を冒涜的神話の地下神殿のように若干アレンジしてみたことくらい。同居人であるパーミリオンには不評だったが、この地を守ってやってる義理があるからこの程度のわがままは許してほしいものである。

「寒い……寒い寒い」

本日も変わりなく最奥の玉座に腰かけていたタブラ・スマラグディナは、しかし堪え切れない胸騒ぎに怯えひじ掛けを握りしめる。

ズーラーノーンが心棒する邪神ロールプレイなど最早欠片も取り繕えない。

異世界転移して以来自分の身で覚えたことのない死の恐怖を感じ、震える手である魔法が込められた羊皮紙（スクロール）をインベントリから取り出した。

込められている魔力は第9位階。この世界の竜の皮で作った大変な貴重品だ。しかしタブラは無造作に巻き紐を解き、投げ捨てるような気分で本日20回目の詠唱を繰り返した。

〈未来視（フューチャー・フォーチュン）〉

羊皮紙（スクロール）は蒼炎に焼け消えて、タブラの意識は少し先の未来へと飛んだ。

◆

◆

◆

◆◆◆

死の支配者（オーバーロード）であるモモンガをこの世界の人々は『死』の具現体と呼んだ。であれば一体彼女は何と呼ぶ。

そう、敢えて言えば『殺意』という概念が少女の形に押し込められた死神こそがマタタビと言う名の化物だ。

『お久しぶりですねタブラ・スマラグディナ』

鈴の様な声が地下室に響く。

声の主こそタブラの宿敵にしてマタタビその人に他ならない。

まさに深窓の令嬢という言葉がふさわしい、静謐な美貌をたたえた学生服姿の黒髪の少女である。見るからに生まれと育ちに恵まれたとわかる、良家の箱入り娘と言ったところだろう。

しかしそんな清廉な風貌は仮初でしかなく、今まさにどす黒い本性がコールタールのように滲み出さんとしていた。

『うふふあは、アハハ！　アハハハアハハアハハハ!!』

少女の口角が丸く歪んで狂った笑い声をあげた。それは壊れたスピーカーによく似ている。

やがて腹を抱えて堪え切ったマタタビの表情は、仄暗い色に落ち着いていた。目尻に浮かんだ涙を指先で払うと再びその美しい顔には優しげな微笑が浮かぶ。しかしその瞳は、まったく笑っていない。

むしろ憎悪の色を宿した鋭い視線が、タブラを貫き殺さんばかりだ。
『生まれて初めてですよ、誰かを殺したくなるほど憎んだことは』
マタタビは左手に握る神器級の刀でカラカラと石畳を引っ掻いた。
不快な音波が鼓膜を揺らし、タブラの正気（SUN値）を削り取る。
非常に濃厚で、危険な殺意の濁流がタブラの見える世界を浸していく。
マタタビは脱力気味に刀を握っているだけだ。だというのにタブラは全身を切り刻まれていくような錯覚を覚える。呼吸すら満足に行えず、喉の奥からはひゅぅっと乾いた音が漏れていた。
『では、死んでください』
確定していることを教えるような冷たい口調でマタタビは言う。
限界まで引き絞られた矢が放たれるように、キュウ、という風を引き裂く音を立てて銀の刃が空を奔った。

◆◆◆

◆◆◆

「死んでたまるか」

タブラは羊皮紙（スクロール）の燃えカスを足元に見下ろして、苛立ちと共に踏みつぶした。

タブラが開発した〈未　来（フューチャー・フォーチュン）　視〉は不完全極まりない未来視だ。

その効果は発動術者が一定以上の興奮を催す直近の未来を、ほんのすこしだけ覗き見るというものである。

ある者が使えば明後日魔獣に食い殺される死の未来を覗き見れるし、ある者が使えば月末の新刊本に驚喜する自分を知ることになる。

来週に失恋する未来かもしれないし、来月にセックスする未来かもしれない。

ようは発動者にとって印象に残るシーンを切り抜いて先読みできるというものである。

効果のベースはスレイン法国で扱われていた未来予測の魔法だ。気に留めたタブラが法国の人材の一部を秘密裏に引き抜いてこの魔法を開発させ、20人がかりの大儀式魔法上昇（オーバーマジック）によって発動できるように仕組みを整えさせた。

今使っているのはその大儀式で発動した魔法を羊皮紙（スクロール）に封じ込め、いつでも使えるようにした簡易版というわけだ

４００年以上この世界で生きてきたが、タブラ自身がこの魔法で覗き見た未来はこれまでたった二つだけだった。

一つは言うまでも無く、今年起こる筈だったモモンガによるカッツエ平野の大虐殺。それを遠方から覗き見るタブラ自身の記憶である。

気弱な元サラリーマンが死の支配者（オーバーロード）に生まれ変わり、妄執の怪物となって超位魔法でカッツエ平野を蹂躙するという大絶景。

いつか生目で見たいと夢見に焦がれていた。あるいはその先に続くであろう蹂躙の軌跡を影から見守って居たかった。

しかしクレマンティーヌ女史の記憶を貪り、マタタビがともにこの世界に来ていたことを知ったタブラは再びこの魔法を発動させる。

すると驚くことに未来が変わり、タブラをマタタビが殺しにかかるという光景しか見えなくなったのだ。

つまり本来現れる筈の無かったマタタビの存在が、タブラの見ていた未来を良からぬ方向へ変えたに違いなかった。

「……彼女の存在は、もはや疫病神そのものだ」

玉座で嘆息するタブラの姿に、クククと嘲笑を浮かべて近づく者が現れる。
今のタブラの同居人にして、ネコさま大王国の元ＮＰＣであるエルダーリッチのパーミリオンだった。
色とりどりの宝石に金銀でギラギラ下品に彩られている黒いローブは、彼の飼い猫が喜んで好むからそうしているらしい。
足元にすり寄る骨猫たちに目配せしながら、パーミリオンはカタカタと顎骨を揺らした。
「随分ご機嫌じゃねぇか。お前を悩ませる女神さまとは大したもんだぜ。拝み甲斐がありそうだ」
「全くだよ。さながら天誅のため遣わされたパンドーラのようだ」
「誰それ……いややっぱいいわ」
「そうかい」
「？」
いつもなら、パーミリオンがわずかにでも興味を惹かれればタブラは容赦せずに数分間にわたる説明攻めをしていた。しかし今はそんな元気がない。

それくらいタブラにとってマタタビは、不都合極まりない大敵だったのだ。
「……誰であれモモンガさんと同参する転移者の存在自体が、そもそも私の願望には不都合であり、そして予想外でもありました。ユグドラシルの終末まで彼の傍に付き添うメンバーなんているわけがありませんでしたから」
「お、そうなのか？　俺はあいつ滅茶苦茶いい奴だと思ったけど」
「良くも悪くもいい人止まりでしたからね。来るもの拒まず去る者追わず。かと言って誰かが外の世界に向けて手を差し伸べても、彼はナザリックに固執し続けていました。
少なくとも私の眼には、以前会った彼は質の悪い地縛霊に見えてなりませんでしたよ」
「地縛霊……ねぇ。俺も似たようなもんだけど」
パーミリオンは自分の胸元を見下ろした。
タブラは心の中で首を横に振った。
「……まず半分の旧ギルドメンバーは引退後完全に興味も愛想もつかして寄り付きません。所詮ユグドラシルのギルドなどその程度の間柄ですから」

「ほーん、そうかい」
「残るメンバーだって、ナザリック程の大規模なギルド拠点をモモンガさんがたった一人で数年間維持し続けていたなど知れば、血の気が引く思いでしょうね。後ろめたくて近づき辛いにも程がある」
「じゃあむしろ「一人でギルド維持なんて無理でした！」とか言ってれば気楽だったのかもな」
「私はそう思ったよ。最終日のナザリックには私も訪れたが……あれは実に悍ましい空間だった」
タブラ・スマラグディナはユグドラシル最終日のナザリック地下大墳墓の光景を思い出す。
脳食いという種族の特性があってか、タブラはこの世界に訪れてから『忘却』を経験したことが無い。だから人間時代の寸前まで憶えていたナザリックの在り様でも、昨日のことのように思い出せた。
「最後に目にしたナザリックの姿は、私の知る最盛期の頃と殆ど変わっていなかった。

引退ギルドにありがちな、維持費削減によってＮＰＣが減らされることも無く、設備やギミックが劣化していたり変わっていることも無かった。宝物殿にある在庫資金だってほとんど減っていない。

メンバーが戻ってくれば今にでも息を吹き返すようだったね」

「おぉ？　それのどこが怖いんだよ。話を聞く限り……俺には羨ましい話だが」

パーミリオンは崩壊したネコ様大王国の元ＮＰＣである。なるほど、忠誠心を失って尚拠点だった廃城に縋り続ける彼にとっては理解しがたいロジックかもしれない。

タブラはそれらしい例えを思い浮かべて説明する。

「マヨイガ、という怪異譚がある。わかりやすく言えば迷い家（まよいいえ）かな」

「ッチ」

途端パーミリオンは嫌な顔をしたので、今回タブラは省略して話した。

「……ある村人が山中をさまよっていた時に、立派な黒い門のお屋敷に出会うんです。

不審に思いながら村人が門をくぐると、まず色とりどりの花が咲き誇る美しい庭園に驚かされる。

厩舎には良く肥えた馬や牛や鶏が繋がれていて、明らかに誰かが暮らしている様子。なのに家人の一人も現れない。

埃一つない小奇麗な御座敷を覗き込むと、湯気の立つ出来立ての料理と茶が用意されていて、誰も居ないはずの台所から妙な気配を感じたという。

まるで家屋の亡霊が人を求めて誘っているような不気味な感覚を覚え、男は背筋が震えたというんだと。

それと同じものを私はナザリックに憶えたのですよ」

タブラの話を聞いたパーミリオンはますます顔を顰めていった。

彼は心情的にモモンガ寄りの人物だからだ。

「ちょっとひでー言い方じゃねぇの？　家屋の亡霊っつーか、一応ナザリックとかいうのはモモンガが頑張った証だろう？」

タブラは思い切って率直に答えた。

「ああだから、私にはモモンガさんが生ける亡霊のように思えてならなかった。実

際彼は私達ギルドメンバーを誘うために、あんな常人離れした真似をしでかしたんですから。

本当に思い出すだけで今でも怖気が奔ります。まさに過去の姿そのまま、まるで時が停滞しているようだった。変な言い方ですが……あの空間には一切現実感がありませんでした。

それに極めつけに驚いたのが……ギルドメンバーを祀った霊廟まで作られていたことだね」

「ＨＡＨＡＨＡ、だから地縛霊か。一応俺みたいなＮＰＣだっていたんだろうが。だがお前の話が本当なら俺たちの自我が生まれたのはこの世界に転移した直後だったんだろう？

まぁそりゃ……ちょっと不気味だわな。死んでも無いのに墓を建てられるとか怖すぎるわ」

「相変わらず素晴らしい共感力と理解力ですね。私はよき友に巡り合えて幸運です」

「そうかい、俺は不幸だぜ」

タブラの賞賛をパーミリオンはそっけなく流した。

照れ隠しであってくれればうれしいが、望みは薄いだろうと思われた。パーミリオンとの関係は、多くがタブラによる一方的な押しつけばかりであるからだ。良い感情を持たれてる見込みは無い。

タブラは僅かに寂寥の念を覚えつつも、話の流れを本筋に戻した。

「まぁそんな訳でしたから、最後までモモンガさんの傍に誰かが残るなんて本来あり得ない筈だったんですよ。

さもなくば、カッツェ平野の大虐殺の光景を〈未来視（フューチャー・フォーチュン）〉できるわけがない。同行者のプレイヤーが居れば必ず止めていたでしょう」

彼と対等に向き合える者が一人でもいれば、あのグツグツに拗らせたクレイジー極まる妄執の怪物が生まれるわけが無かったのだ。

つまり今のモモンガは変わったのだろう。タブラが望まない方向性に。

「マタタビって娘の存在が確定した時に〈未来視（フューチャー・フォーチュン）〉の光景が変わったんなら、そーゆーことなんだろーなやっぱし」

あの気弱で温和だった男が、魔王として躊躇なく異世界を蹂躙するというギャップ的絶景。そしてその先に続くであろう圧倒的なナザリック地下大墳墓の覇道。

是非とも己の眼で見たいと、三百年夢見に焦がれていた悲願だったのに。たった一人のイレギュラーが全てを破壊してしまったのだ。

ギルドメンバーではなく侵入者。まったく盲点だったし、予測できていた居たところでどうすることも出来なかっただろう。

「まさに胸が引き裂かれるような絶望です」

「ＨＡＨＡＨＡ！　マジで残念だったなぁ。いいざまだぜ外道野郎」

彼がタブラに笑みをこぼすのは、タブラの不幸を嗤う時だけだった。

パーミリオンは屈託なく笑いながら、インベントリから黒ずんだ珠を取り出してタブラに向かって投げつけた。

タブラが造ったインテリジェンスアイテム死の宝珠。

気まぐれに作ったそれはお気に入りだった十二高弟のカジットに託して、そんな彼はナーベラル・ガンマに殺された。

やがてモモンガの手に渡り、十中八九死の宝珠の導きによってカッツェ平野に参じた彼は、何も言わずにパーミリオンにソレを渡した。

そして最後にタブラの手元に戻る因果を想うと、彼からまるで「あなたとは決別

しました」と言われたようだった。
マタタビやアルベドとのやり取りでどのような心境変化があったのかはわからない。
ただ少なくとも、死の宝珠が手元に戻ってきたことは絶対に偶然だったなんてありえない。それだけは言えた。
「前向きに生きられて死ぬ程羨ましいぜ、俺と同じアンデッドのくせによぅ」
「ああ、非常に残念。つまらない男に成り下がったものです」
「……別にあいつはお前を笑わせるために生まれてきたんじゃねぇんだけどな」
「ごもっともだ。前向きに生きていきたいなら勝手にすればよかったでしょう。彼が変わるなら、私だって前向きに他の楽しみを探すだけだから」
そもそもタブラは自分がナザリック陣営に所在を知られることを望まなかった。モモンガという狂人の凶行は傍から見ているから楽しめるのであって、当事者になるなど真っ平であるから。
もし見つかってしまえばモモンガや伴ったＮＰＣ達に生涯延々と付きまとわれ、悠久の時を束縛され執着され続けるだろう。

きっと死して朽ちる権利すら許されないのだから、堪ったものではない。
だからある意味モモンガがタブラと決別するのなら、それはそれで都合が良かったのだ。
自分のことを放逐して好きにやらせてくれるなら、暗黙の相互不可侵を築くだけで良いのだから。
「しかし……マタタビ君は許さないだろうね」
マタタビという特異点の影響は、タブラの享楽だけでなく生存までも脅かす。
彼女は悪い意味で特別なのだ。
「ＨＡＨＡ、自業自得じゃねぇかよ」
パーミリオンは乾いた嘲笑を浮かべる。タブラは震える手を握りしめた。
「おっと」
ふと、マタタビではない透き通った女声がタブラの脳に響き渡る。〈伝言（メッセージ）〉だった。
『タブラ様、タブラ様、ニグレドにございます。ご報告よろしいでしょうか』
彼女はタブラが制作した３体のＮＰＣのうち一人、情報系魔術特化型の魔法詠

唱者ニグレドである。
「ああ、もちろん」
タブラが軽く返事をすると、目の前にニグレドの顔が映像として現れた。〈水晶（クリスタル・モニター）の画面〉を応用したテレビ通話の様なものだ。
横目で見ているパーミリオンはニグレドの姿にうめき声をあげた。彼のリアクションのなつかしさにタブラは思わず微笑んだ。
「……うげぇ」
ニグレドのスタイルはヒト並外れて優れている。なにせ基本的な骨格モデリングは守護者統括アルベドと同じだからだ。
黒い襤褸のような衣服を身に纏いながらも、裾から伸びる白く細長い手足はギリシャ彫刻のような芸術性を感じさせる。よくよく見れば女性的な起伏と引き締まったウエストラインのバランスの調和に光るモノは見いだせる。
ただ彼女の顔が、一般的な美的感覚と真っ向から遠ざかっていたのだ。
ニグレドの顔には皮膚がなかった。
ぼさぼさと伸びた黒髪の隙間からは赤黒い筋繊維が痛々しく剥き出しにされてお

り、よって頬肉と瞼も無く円形の眼と純白の歯茎がそのまま露にされている。
グロテスク極まりない赤黒い面立ちに反し、歯並びはシミ一つなく整っているのが却って不気味だ。瞼の無い眼は端から血走っていて、ぎょろッと開かれた瞳孔は狂気を孕みながら画面越しのタブラを射貫いていた。
本人としては創造主との対話に歓喜し至福の笑みを浮かべているつもりなのだろう。
しかしこうなるとテレビ通話と言うより呪いのビデオといったほうが適切だ。
「こいつの顔やっぱキメェよ。タブラおめぇ悪趣味すぎねぇか？」
『黙りなさい下郎。たかが中位アンデッドのシモベの分際で、御方に馴れ馴れしく接するだけに飽き足らず、御方と被造物である私を愚弄するとは何様のつもりかしら。死にたいのなら神殿にでも出頭しに行くといいわよ？　諸手を挙げて浄化魔法が大歓迎してくれるわ』
「シモベじゃねぇよ！　こいつぁは俺にとっちゃただのやかましい居候じゃい！」
「ニグレド、安心してくれたまえ。彼の言う悪趣味とは、私にとっては賞賛の意味だから。ほら、他のギルドメンバーが同じことを口走ってたのを憶えてるかな？」

ナザリックでギルドメンバー達にニグレドを初お披露目した時のこと。彼らはものの見事に恐れ慄き同士討ち（フレンドリーファイア）無効を忘れニグレドに魔法の空撃ちをしたものだった。

彼らの愚痴が細やかな福音のように耳に残り、タブラの記憶にうっすらと刻まれていた。

『あれは、そういう意味だったのですね!?　悪かったわパーミリオン、折角褒めてくれていたというのに』

「……あーったく」

『しかし御身は相変わらずお美しいご尊顔であらせられる』

「そうですか」

「俺ぁどっちもどっちだと思うけどなぁ」

『あら、無暗に褒めちぎったって何も出ないわよ？』

「……」

ブレインイーター、エルダーリッチに剥き出し面。少なくとも人間社会で測るなら、3者の顔面偏差値はマイナス値にカンストしていることだろう。

茶番に呆れたパーミリオンは足元の10匹の愛猫たちを傍に寄せて腕を組んだ。
「じゃあ俺ぁトンヅラするぜ、巻き添えで死ぬなんて御免だからな。さらばだ同居人」
「さらばです我が友パーミリオンよ。また会えることを心から望みます」
「〈集団転移（マス・テレポート）〉」
パーミリオンはすげなく跡形も無く、愛猫たちと共にタブラの視界から消え失せた。
『友？　え、シモベの者ではなかったのですか？』
◆
マタタビが白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）に決闘を申し込むという情報を手にしてから、タブラは既に死闘の覚悟を固めていた
最早いつ影に塗れてマタタビの凶刃が己を貫いてもまったく不思議ではない。もっと言えば今のタブラの周囲はこの世界で最も危険地帯だ。
だというのになんだかんだと直前まで居残っていたパーミリオンの真意とは、果たして友情なのか酔狂なのか嘲笑なのか。

「何にせよ、嬉しいね」

『……』

関係性の如何はともかく、４００年ほどの付き合いの長さだ。

今生の別れかもしれなかったし、最後に顔が見れて良かったとタブラは心から思った。

感傷の余韻を飲み込んだところで、気を遣っていたニグレドがようやく口を開いた。

ニグレドは感慨深く、自身とタブラの再会の次第を振り返りはじめた。ある意味はじめまして、だったのだが。

『改めまして再びタブラ様と会い見えたこの世界の奇跡、そしてタブラ様への深い感謝を覚えます

カッツェ平野の調査で御姿を捕らえた時の感動は忘れられません

思わずアインズ様へのご報告すら放棄して、一目散に連絡を飛ばしてしまいました』

「私も驚いたよ。いきなり〈伝言（メッセージ）〉が届いたかと思えばあのニグレドだったんです

から

最終日……ナザリックを発ちこの世界に転移してから４００年だ。正直また会えるとは思わなかったです」

『我々からすれば数か月のことだったのですが……何にせよ、御身が私の存在を憶えてくださっただけでも望外の喜びです』

ブレインイーターの不忘能力を言及するのは野暮であろう。

今のタブラにとって彼女の存在は生命線ともいえるのだから、良い意味になら勘違いされても構わない。

タブラにとってニグレドは、気色悪いが都合の良い道具でしかない。

４００年前に気まぐれに作ったキャラクターが勝手に自我を得て動き出したとして、容易に受け入れられるかと言えば否である。

彼女の在り様はチープなノベルゲームのチョロいヒロインそのもので、希薄過ぎる人間性には寒気しか感じない。画面越しにしか会ってないことも含め、彼女が血の通った人物であるとはタブラにはどうしても思えなかった。ギャルゲーにしては彼女の容姿はあまりに上級者向けだろうが。

ただ都合の良い道具と言う『好感』だけを言葉に乗せて接してやれば、彼女は望んでタブラに利用されてくれる。

「本当に、ニグレドには救われたよ。私のことをモモンガ君に黙ってくれたのもそうだし、今のナザリックの情報を知り得なければ、取り返しのつかないことになっていただろうね

モモンガさんもアルベドも、そして何よりマタタビ君のことも、」

『ナザリック……アインズ様、アルベド……マタタビ！』

人名詞に反応したニグレドは、途端に髪を掻きむしり妖怪の如く荒々しく呪詛を唱え始める。

『私にとってはタブラ様の幸福が全てです。ナザリックがタブラ様より自由を奪い去り忠誠と言う名の束縛で飼殺すというのなら、命に代えても我が口を噤んで見せましょう』

どの口で言うか。お前もまた無自覚にモモンガを追い詰めていた一人であったろう。

運よくマシな立場を得られただけだ、お前は。

『そしてアインズ様。シモベたちを最後まで見放さず残ったくださった慈悲部下き御方。しかしあの方は許されざる罪を犯しました。

我が最愛の妹にして、タブラ・スマラグディナの最高傑作アルベド。アインズ様に『愛せ』と命じられた彼女は変わってしまった……。タブラ様へ向けるべき忠義がアインズ様の下にあるなど許せません。

アインズ様は、御身が誇る最高の至宝を奪い去った罪深き簒奪者に他なりません』

最終日時点でナザリック地下大墳墓はモモンガだけの所有物だ。

ギルドを引退した身としては、ナザリックを維持し続けたモモンガがＮＰＣの設定を変えようが文句を言う筋合いも無いし、そもそも今更欠片ほどだって興味も無かった。

確かにアルベドのモモンガへの従属は今のタブラには不都合な状況だ。しかし彼がナザリックを維持し続けたからこそナザリックとＮＰＣが存続していることを考慮すれば、アルベドの忠誠はむしろ自然であろう。

最終日にタブラの愚痴を耳にしてしまった彼女の場合、特に。

むしろ、タブラの一声であっさり寝返るニグレドの方がどうかしているんじゃないか。口には出さないが、喉元にはこれでもかと毒が詰まっている。

『……そしてマタタビ！　タブラ様が長年望んでいた、アインズ様によるナザリック地下大墳墓の栄えある覇道。かの輝かしい未来を打ち砕いた最悪の特異点にして、御身に死の影を堕とす災厄の凶星！

ああ憎い憎い憎い憎い!!　殺してやる殺してやる殺してやるぞぉおおぉぉ!!』

ニグレドの悍ましい面相からどす黒い憎悪と憤怒が迸る。

タブラも抱いているその想いが、マタタビからしてみれば逆恨み以外の何物でもないことは自明である。盛大に沸き立つニグレドを見ていると、否が応でも冷静な気分にさせられた。

「……」

『御前での粗相、大変失礼しました。どうかお許しくださいませ』

「構わないさ」

そして冷静な頭脳でもってタブラはマタタビの脅威に身震いする。

マタタビは異世界転移からたった数週間で、佐々木正義と所縁を持ったツアーと

接触を果たした恐るべき因果の持ち主である。真実を隠滅し続けることは理論上可能であるが、タブラにはいつか必ず彼女が自分に立ちはだかるだろうという強い確信があった。

墓から佐々木夫妻の遺体を持ち去ろうが、死の宝珠を野に放つなどと言う失態を犯さずとも、たとえマタタビがツアーと出会うことがなかろうと、あの死の予言が揺らぐことは無いだろう。

たとえ今、ここから離れて逃げ出したとしてもいつかマタタビの刃は己に届く。彼女の息の根が続く限りは。

だから――

「――迎え撃つほかにない」

『……タブラ様』

覚悟と言うにはあまりにも後ろ向きな、けれど強固な決意を口にする。

何せ己が自由に生き残る術は、たったこれだけしか残されていないから。

だったら使える手段を全て尽くして待ち構えるのが最善だ。

「大丈夫だよニグレド。私は死なない。

連絡してきたということは、あちらに何か動きがあったんだろう？」
『はい、見事にタブラ様の想定の一つが的中いたしました。
マタタビと白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王の戦いが決着してから1時間後、ナザリック地下大墳墓に所属するほぼ全てのシモベが10階層玉座の間に終結した模様です。そして現在、ソロモン（レメゲトン）の小さな鍵の全ゴーレムが起動したことにより内外からの完全封鎖が為されております』
「やはり私をＮＰＣ達に接触させない気だな？　……あまりモモンガ君らしくはない一手だが。一番マシなのが来たね」
『しかし……本当によろしかったのでしょうか？　御身ご自身が御声掛けをなされば、シモベたちはタブラ様を守ろうとするかもしれませんのに』
「過信が過ぎます。モモンガさんはギルドマスターとしてあの地を守り続けていた。そんな彼と求心力で競うのは無謀です」
『……それは、そうかもしれませんが』
仮にＮＰＣを隔離せず何らかの動きを見せてきた場合は、
『あなたたちは騙されている。モモンガさんはナザリックを独占するためにこの世

界に逃げ込んだ。創造主たちに会うためにも、彼を倒すのに協力してほしい』

と、広範囲に〈伝言（メッセージ）〉を拡散させて勢力を分裂させるつもりだった。

多少混乱させることは出来るだろうが、不確定要素が多く期待値は少ない。

だから向こうから隔離の方向に動いてくれて非常に都合が良かった。

「何にせよです。これは明らかに私の存在を意識した動き。やはりモモンガさんが私を仮想敵とみなしているのは、間違いがない」

タブラには、ナザリックが全てな筈だったモモンガの心境の変化を知る由もない。

ただマタタビという不確定要素の存在があれば、彼にどのような変容があっても全く不思議ではないことはわかる。

『なんと許しがたい！』

「手を出したのは私が先さ。死んでやる気は毛頭ないが……流石にモモンガさんの相手は私の手に余るね」

タブラは飾らずに本音を吐いた。

たっち・みーを筆頭に、ウルベルト、ペロロンチーノ、弐式炎雷、やまいこ、ぷにっと萌え、武御雷、ヘロヘロなど。

最盛期のギルド：アインズ・ウール・ゴウンには、それはそれは驚異的な能力と個性を併せ持つメンバーが数多くいたものだ。

だが彼らの中で最も敵に回したくないのは誰かと問えば、ほとんどのメンバーが強くモモンガを推すことだろう。

石橋を叩い壊して鉄橋を造るとまで形容された、一切の隙がない強靭な臆病さ。

蓄積された膨大な戦術知識を活用した観察能力。常にその場においての最善を選び続ける判断能力。高度な駆け引きにおいて、化かし欺く天性の演技力と意外性。

敵に回してこうまで恐ろしい相手はいない。

たっち・みー を最強と呼ぶのなら、モモンガはギルド：アインズ・ウール・ゴウンにて最恐の存在と言えるだろう。

そんな彼を律儀に相手などしてられるものか。

「モモンガさん達の相手はルベドにでも任せるさ。あれでも私の傑作だ。殺せはしないだろうが、十分な時間稼ぎにはなる。

間も無くマタタビ君は一人で私を殺しに来る。彼女さえ返り討ちにできれば、あとはどうとでも逃げられるからね」

タブラは自身のインベントリに手を伸ばし、黒い文様が施された小さな宝石箱を取り出した。

蓋を開いて中におさめられていたのは、全ての光を吸収する暗黒の宝玉。

見様によっては球体になり、幾何学を描いた結晶となり、あるいは平面でもあるような掴み処のない謎の物質である。

見る者に狂気を抱かせるこの宝玉こそが、起動兵器ルベドの最上位指揮権を保有する操作端末であった。

タブラは手に握ったソレを一瞥してから、〈水晶の画面（クリスタル・モニター）〉に写るニグレドを見上げた。

「意外ですね。君はルベドのことが大嫌いだったはずなのに、反対しないのかい？」

『私が常々ルベドを嫌悪していたのは、彼女がナザリックを脅かす存在であると深く確信していたからです。

今よりタブラ様の御意思によってナザリックを脅かすのであれば、ルベドはこの上なく役立つことでしょう』

「はは、なるほどね」
思わず嗤わされたので、タブラは初めてニグレドの評価を上方に修正した。
『タブラ様の本懐はマタタビの抹殺ですよね？
しかし本当に、マタタビは一人で来るのでしょうか。はっきり申し上げますと、後詰が居た場合タブラ様単騎での勝利は非常に厳しいかと』
「マタタビ君の単独襲撃は確定です。私を殺すには一番確実でもあるし、根本的に彼女の性格では他の選択肢はありえません
それは私が一番よく分かっている」
『しかし……』
ニグレドの不安はもっともであり、客観的にタブラの言い分は論理性を欠いていた。
もしタブラがマタタビの立場なら、明らかに待ち受けているタブラを一人で殺しに向かうことは無いだろう。自殺志願者でもない限り、誰だってそうだ。
だが相手はあのマタタビである。感情の怪物でもある彼女には、一般的な論理性を当て嵌めてはないらない。

マタタビは絶対一人でタブラを殺しに来る。
そしてモモンガがＮＰＣを動かしたのは、マタタビの動きに合わせて仕方なくと言ったところだろう。
「０には何をかけても０でしょう？　同じことです。あの二人が連携して動くなど、天地がひっくり返ってもあり得ません」
いくら予想不可能なマタタビでも、この１点だけは揺るが無い。
寧ろこの原点が揺るが無いからこそ、マタタビの行動は予測が出来ないのだ。
『確かに』
ナザリックでのマタタビを知っていたことで思うところがあったのか、ニグレドは深く頷いた。
「……さて、そろそろかな」
タブラは先ほどからの寒気が強くなる感を憶える。
城に備えた罠類は一切起動していない。しかし、タブラの中にある大きな一つが襲撃者の接近を声高に告げていた、酷く懐かしい感傷と共に。
「ニグレド、間もなく君の元にも刺客が来るでしょう。そして間違いなく殺される。

覚悟しておきなさい。もう逢うことは無いだろう」

『……我が役目はここまでと言うことですね？　承知しました。最後にタブラ様の御尊顔を拝見できましたこと、そしてお役に立てましたこと、深く感謝申し上げます。そして御武運を祈りましょう、我が創造主よ』

ニグレドはタブラからの用済みと死の宣告を、意外とあっさり受け入れた。

目に宿る狂気の灯は掻き消えて、生々しくも穏やかな死に顔をタブラに見せる。

「……」

思わず、怖気が走った。

「ありがとうニグレド。さようなら」

これ以上道具（彼女）に気を遣っても得はない。

ただ己に残る僅かな人間性の残滓が、タブラの喉を震わせたのだろう。くだらない。

〈水晶の画面（クリスタル・モニター）〉と〈伝言（メッセージ）〉が途切れ、室内に静寂が舞い戻る。

タブラは即座に次の〈伝言（メッセージ）〉を発動させた。操作端末である宝玉が怪しく輝いて、魔法効果と連動する。宛先は言う今でもなく８階層に待機しているルベドで

あった。

「最上位コードSS。モモンガを殺せ。殺し尽くせ」

『コマンド受領。承知しました、ギルドマスター：モモンガを排除します』

合成された人間味の無い女声が返事を返す。

タブラは即座に〈伝言（メッセージ）〉を打ち切り、溜息をついた。

「〈上位道具破壊（グレーターブレイクアイテム）〉」

握っていた宝玉が跡形も無く砕け散る。

これでルベドは壊れるまで止まらないだろう。あるいは、モモンガが死なない限りには。

「うん、これで良し！」

◆◇◆

マタタビの愛好する恋愛漫画には、一目惚れと言うテンプレート展開が遍在します。

通学中に「遅刻遅刻〜！」と慌てて駆け出すヒロインが、曲がり角でぶつかった男子に一瞬でときめくアレですね。

あのチープで薄っぺらくて砂糖吐きそうになるアレですね。

もちろんこれは賛否両論ある展開。

作品としてより多くの人の心を掴むのならば、少しずつ説得力ある描写を重ねて丁寧に想いを育む展開のほうが推奨されることでしょう。

もちろんマタタビはソッチの展開も大好きである。

しかし、頭を空っぽにして目の前の相手に脳みそピンクになる主人公ちゃん。

そんな彼女に自己投影する感覚にしか獲られない栄養素もまたあると、マタタビは強く強く想うのである。

今を生きる大多数の者達がそうであるように、マタタビは自分が何のために存在しているのかよくわからない。

あるいはこれまで生きてきた軌跡を悔み、生まれてこない方が良かったかもとす

ら思うくらい。

だから誰しも、存在意義が確定することを渇望する。

天啓だろうと運命だろうと、薄っぺらくたって何でもいいじゃないか。もしも自分が彼女のように、「自分はこの人に恋するために生まれてきたのだ」と心の底から実感できるなら、それはどれだけ幸せで、そして安楽なことだろう。生き易そうで心の底から羨ましい。

かつて、そんな風に思って時期が、マタタビにもありました。ええ若かったですよ数か月前の自分。そりゃ自分若者ですから。

そして今更マタタビは、フィクションと思われていた一目惚れを我が身で強く実感してる最中でございましたとさ。

半分冗談です。あーいやこれ違うな、うん。真逆。

歩いているのは、朝日が刺した春風が気持良い通学路ではなく、厄介なアンデッ

ドたちがはびこる地下迷宮。即死級の罠もあちらこちらに設置済み。
そんな通路の曲がり角でマタタビが見出したのは、決して心ときめくイケメンさんなどではありませんでした。

えー第一印象は、何と言うべきでしょう？　そーですねー。
前に、９階層の食堂で美味しいアイスパフェを食べたことがあったんですよ。
濃厚なソフトクリームに甘酸っぱいイチゴとチョコがトッピングされた、甘くて蕩ける様な絶品なアイスパフェ。
マタタビが９階層で初めてソレを食べた時は、もうほっぺが落ちるほど美味しくて、他メイドさんにドン引きされるくらい大声挙げちゃいました。そのくらい大好きで一生忘れられないほどの味なんです。この世の幸せはパフェにあったのかと、魔境を悟ったくらいです。

で、今の気分はと言うと、そのパフェを、蠅がたかる腐った糞溜めにひっくり返された感じ。

もっと言えば、その不快感を何百倍にも何千倍にも増幅させたかのような気持ちです。

わかりづらい？　そうですか。では一言で言いましょう。

（殺してやる）

あなたのことを一目見た時から、ぶち殺してやろうと思いました。

私はきっと、あなたを殺すために生まれてきたのでしょう。生きる意味をくれて

ありがとう、そして死ね。
『あんた、バッカじゃねえの？』
◆
（っ！）
耳障りな誰かの心の声に反応し、マタタビは我を取り戻す。
ユグドラシルにて育まれたマタタビというアバター（肉体）は、殺戮（PK）に特化した存在である。
備える能力そのものは、ケット・シーとしての感知能力を強化した純盗賊職のサポートタイプ。しかし、何千回と繰り返し肉体に染みついた殺戮（PK）の感覚が、この世界に実体として受肉した際に大きな影響を及ぼしたのだろう。
マタタビはただ強く殺意を念じただけ。ただそれだけで理性と意識が弾け飛んで、思い浮かべる情景が既に現実と化していた。
気が付けば刀を握り、黒曜石の台座の裏にもたれかかって、正面に座していたタ

ブラ・スマラグディナを台座ごと刺し貫いていたのである。
剣先の感触は確実に心臓を捕らえていた。
「……ゴプッ!?」
（!?）
不思議なことに、皮肉なことに、襲撃者と被害者の動揺は見事にシンクロしていたりする。
しかしそんなマタタビの心を置き去りに、死神の体が勝手に動き刃を振るう。
「ッ!!」
今度はタブラが座す玉座ごと、豆腐のように切り裂いてタブラ・スマラグディナの背中を一閃。気色の悪い真っ青な体液が飛び散った。
『斬り傷が浅い。バッシブで斬撃耐性つけてる。毒は入れたけどすぐ動く。反応を許すな。息もさせるな』
（わかってます!!）
「〈光輝（ボディ・オブ）ガッ!?」
咄嗟に足を蹴り廻し、こちらへ振り向きかけた憎きタコヘッドの側方へ。

この瞬間シューズに仕込んでいたノックバック効果発動。そのまま頭を床に叩き落す。石畳にキスさせて一瞬でも長く口を塞ぐ。

「『瞬間換装』金属バッド!!」

即座に金ぴかに輝く細長の槌を換装し、うつ伏せになったタコヘッドを滅多打ちに叩きつける。しかし殺しきるには

『まだ足りない』

まだ足りない

バッドを放り捨て、タコヘッドの上でノックバックシューズを両足交互にステップし続ける。

HEYタコ野郎、延々と床に押し付けられる気分はどうかしら。

空いた両手でインベントリから引き出したのは刀身2m近くの大太刀大山祇と1枚のスクロール。

盗賊のスキルによりスクロールの使用条件を踏み倒し、発動させる。

「〈超重力〉」

魔法効果により一定範囲の重力が数倍に膨れ上がる。もちろん魔法耐性によって

タブラは抵抗(レジスト)可能だが、全く問題ない。
（『くたばれ』）
狙いは言うまでも無く、大山祇(おおやまづみ)の運動のエネルギーを増幅させることだから。
重さこそ力。腕力で刀を振るのはド素人のする真似である。
振り上げた大太刀は過重力によって加速して、斬撃耐性を貫通し忌々しいタコヘッドを斬り飛ばした。

◆

「ま、そんな簡単に終わるわけがないか」
「これは飛んだご挨拶だ」
次の瞬間タブラの死体は、飛んだ首ごと靄となって掻き消える。
そしてマタタビが切り崩したはずの黒曜石の台座と共に、タブラ・スマラグディナは健在な原形を取り戻した。
「うーん、超位魔法〈星に願い(ウィッシュ・アポン・ア・スター)を〉？　事前に仕掛けてデストリガーで復活するようにしたんでしょ」

「良くわかったね。魔力系の魔法詠唱者（マジックキャスター）は間合いを詰められればまず君に成す術がないから。
残機の一つでも無ければ勝ち目がないだろうから。」
「2つめや3つめもあるの？」
「かもしれないね」
タブラははぐらかすように首を揺らした。
しかし残念ながら、マタタビにポーカーフェイスが効くのは『読心感知』が効かないアインズ様だけである
嘘特有の心の揺らめきが、マタタビには手に取るように理解できた。
「わかった。流石にありえ無いよね。
そういえばあなたの基礎レベルが１００から一切減ってないし、何か代わりのモノで経験値を消費したのかな
例えば、私たちのいる床下に敷かれたガラスくずとか？」
先ほどタブラを押し付けた床穴を覗くと、まるで屑になったアメジストの欠片がきらきらと敷き詰められていた。

多機能探知アイテム『地味子の眼鏡』を起動させると、一つ一つが極小の経験値を吸収できるマジックアイテムのようである。世界級アイテム【強欲と無欲】の超々劣化版のようだった。そしてほとんどの粒たちが既に経験値を抜かれた後のようである。

「わかったわかった。君にお為ごかしは無駄ですね。全部、君の目算通りだよ。相変わらずの眼力だ」

問い質し続けると、流石に参ってくれたのか彼はあっさりと肯定してくれた。

「お久しぶりですね、タブラ・スマラグディナ」

「ああ、桜も元気そうで何よりだよ。小さい頃から、まるで変わってないね」

余りにも見え透いた挑発だった。

でも私は乗らざる得ない。私が私である限り。

「うふふあは、アハハ！　アハハハアハハアハハハ!!」

思わず腹を抱えて私は盛大に大笑いしてしまう。

可笑しくて可笑しくて、どうしようもなかったから。

「ホントに、生まれて初めてですよ、誰かを殺したくなるほど憎んだことは」

一しきり笑った後で、マタタビはインベントリに手を突っ込んで別の刀に持ち変える。

さすがに大太刀は威力重視以外の時には使いづらいのだ。

「では、死んでください」

体制を整えてから、己を一発の弾丸だと思い込み一直線に憎きタコヘッドへと斬りかかった。

今度は一定の距離がある。防御の魔法を整えることも十分に可能だろう。

しかし実際のところ何が来るのか、マタタビは薄々確信していた。

「〈完全なる戦士（パーフェクト・ウォリアー）〉」

ほら、やっぱり。

彼は魔法発動と同時に、懐に刺していた木の棒３本ピキリとへし折った。

アレは、マタタビの使う『瞬間換装』と同じ効果を持つ課金アイテムである。

間も無くそこに現れたのは、真っ白な竜骨製の全身鎧（フルプレート）を纏うおぞましくも精悍な戦士だった。

戦士はマタタビの無鉄砲な一撃を、軽々と剣で受け止めて見せる。

ああこの佇まい、完璧なまでの絶望感。なんて懐かしく悍ましいこと。
「ねぇ、私の父さんと母さんを殺したのってタブラですか？」
「そうですよ」
一目見た時からわかり切っていたことだった。
タブラが父の死体を貪っていたことくらい。
そしてたった今の問答で、彼がどうしようもなくマタタビの敵であるのだと心の底から納得した。

タブラ様の行動年表は活動報告に載せてます

貴方以外のこの未来をＫｉｌｌ it, ｋｉｌｌ it

エタリません、かんけつまでは。

◆◇◆

マタタビが一見して、タブラの放つ違和感は一目瞭然であった。

実際隠す気も無いのだろう。黒曜石の玉座に腰かける彼の気配にマタタビは吐き気を憶えていた。

男のようで、女のようで、賢者のようで、獣のようで、戦士のようで、姫のようで、王のようで、悪のようで、善のようで、全のようであった。

一つの一人であるはずのタブラの中に、様々な気配が混ざり合っている。

さながら幾種もの料理が狭い密室に並べられ、互い違いに穢し合い鼻を摘まむほどの悪臭に成り下がるようである。

そんな蠅の集る人の膿の肥溜めの中に、嗅ぎ覚えのあるなじみ深い気配が一滴だ

け。

朽ちた竜骨の鎧を身に纏い、両の手に剣と盾を構えた悍ましい戦士。

〈完全なる戦士〉により前衛職としてのステータスを手にしたタブラの佇まいは、一寸違わず たっち・みー の構えと等しかった。

「せめて……言い訳を聞きましょう」

マタタビは、喉元からせり上がる怖気と憎悪を限界まで押し留め、努めて冷静にタブラへと問いかける。

そんな努力が眼前の異形種には殆ど無意味であることは自明だった。

タブラはどこまでもマタタビの腹の底を見透かしたように、かかと嘲笑って肩を揺らす。

「誤解もへちまもありはしません。マタタビ君のご明察の通り、佐々木正義と燈子を殺したのは私です。

魔神戦争終結の宴の喧騒に紛れて今後の展望を言い争っていた夫妻に、〈恐慌〉の魔法をかけて殺し合いをさせました

そして夫妻が現世での過剰ストレスによって蘇生魔法を拒絶したことも含め、す

べて私の目論見通り

白金の竜王の眼を誤魔化すのには、幾分骨が折れましたがね」

親の仇はびっくりするほど清々しく、娘であるマタタビに向かって己の罪を白状した。

あからさまに憎しみを煽るように。

一周廻ってここまでくると哀れである。彼は人間だった時からすでに、脳神経の繋ぎ方が常人と明らかにずれていた。

ブレインイーターとして人間性から解放されて、むしろ今の彼はさぞや幸福なのだろう。

「何のために、そんなことをしたの？　」

「全てはこれの為ですよ！」

タブラはうきうきとして、壁面にかけられていた大きな黒い布を剣先でつまんで取り払う。

そして子供が自分のおもちゃを自慢するように無邪気にどやどやと見せつけた。

「アインズ様とマーレさん？」

壁面に掲げられていたのは、人骨製の額縁に飾られた、１枚の大きな絵画だった。

内容は、下のネームプレートに記された「大虐殺」というタイトルが全てを物語っている。

ダークエルフの少女を傍に置いたオーバーロードが、５匹の黒山羊を操って、平原に広がる人々の軍勢を蹂躙する光景。

最奥で采配を振るうオーバーロードの絶望的な威光もさることながら、黒山羊に踏みつぶされる人々の表情や、ぶちまけられる内臓の描写が逐一写実的で圧倒される。まるで本物の戦場を切り取ったかのような迫力とおぞましさ。

一体作者はどんな心情でこれを描いたのか、常人には及びもつかないことだろう。

しかしマタタビには即座に理解できてしまった。マタタビもまた、人間性を外れて人外の狂気に片足を突っ込んでいる分際だから。

「ひょっとして、もし私がこの世界に訪れなければ、これが現実になっていたりしたのかな？」

「それはもう素晴らしい世界だったでしょうね」
タブラは心底悔しそうに歯噛みしてみせた。
「……なるほど、そういうわけですか。確かにこれは、あなたにとって最高の娯楽ですね」
もしマタタビが最終日のナザリックに忍び込まず、アインズ様――モモンガだけでＮＰＣごと転移していた場合のケースを考える。
おそらく非常に高い確率で世界征服計画が続行されて強く反対するでも無いアインズ様は、ナザリックの理想の支配者を演じてこの世界に君臨していたことだろう。
全ての者から小さな本心を隠し通して、独りきりで。
そしてその末路に、群衆に超位魔法を解き放つ暴挙。かつての仲間が目にすれば、糾弾の誹りは免れまい。喜ぶのはタブラくらいだ。
最善を尽くした果てが大いなる過ちとは、余りにも報われない。
「なんて儚く美しく、お労しい御姿……アインズ様」
虚栄に塗れたオーバーロードの深い孤独と儚い想いに、私の目頭は熱を帯びた。

「……よりにもよって、君にこの作品を称賛されるとは思わなかったですね」
「一緒にしないで。あなたと私じゃ見ているものが違い過ぎるわ
くだらない、こんな未来のために父さんと母さんを殺したのね」
改めて、マタタビは胸いっぱいに大きく息を吸い込んだ。
喉元に詰まっていた理性というつっかえを吐き出して、感情のままに剣を握りしめる。
「わかりました。よーくわかりました。つまりあなたの狙いはアインズ様を、勘違いと虚栄に塗れた哀れな妄執の怪物へと導くこと。
あなたがお父さんとお母さんを完殺したのは、アインズ様を独りっきりにさせるため」
「ああそうだ。十三英雄には『国堕とし』の吸血姫がいたからね。眷属化でもされて現代まで生き延びられては迷惑千万。ゆえに悲劇の心中としてご退場願ったわけですよ」
何が迷惑千万だ。全て自分の身勝手ではないか。
「ところがそんなあなたの野望は、私がアインズ様と同伴したことで無意味になっ

た。
どころか私が真実を暴き立てれば、私とアインズ様を同時に敵に回すことになるってしまう」
容疑者の立証に物証は不要だ。私がタブラと接触すれば、彼がマサヨシの脳みそを貪ったことは一目で理解できてしまう。親子の縁とケット・シーの鋭敏な感覚を誤魔化すことは不可能だから。
「だからわざと墓場の死体に手掛かりを残して私一人をおびき寄せ、先手を打って迎え撃とうってんだね？」
「正解だ。本当に君は頭の回転が良い。そして大馬鹿だ！　わかっていて一人でここに来るなど自殺行為以外の何者でもない」
タブラは狂喜したように両手を広げ、マタタビを指差して笑う。
「しかしそれも仕方がないでしょう。佐々木桜はそういう娘だから。誰に似たんだか、昔から一人で全てを抱え込んでしまう悪い癖があるんですよ」
ギロリと一瞬、タブラのマタタビへ向ける視線に、親しみ深い温もりが混ざりこむ。

吐き気がした。

「……笑止」

本当に、可笑しくて仕方がない。私は懸命に引き攣る頬を引き締めた。

マタタビは静かに吐き捨てた。

「私はアインズ様を尊敬している。だからこそ、あの方の苦しみを少しでも和らげたいと思うのは当然のこと。だったら取るべき行動は一つだけ。　――人知れずにお前を殺す。それだけだよ」

良かった、本当によかった。

タブラが救いがたい最低最悪の外道で良かった。

親の敵として、アインズ様の敵として、一切ためらうことなく私は彼に刃を向けられる。

そしてこれからどれだけマタタビがアインズ様とナザリックに不利益を齎そうとも、この世界に訪れたことは間違いじゃなかったのだと理解で。きて、本当によかった。

あんな虚しい末路が待ち構えるぐらいならナザリックが滅んでも構わないと、心

の底から私は思った。
「これが、そうか」
頭痛がする、胃がむかつく、耳鳴りが止まらない。
そして胸の奥底で、何か大切なものが壊れていく音がする。構わない、そのまま消えてなくなってしまえ。
「殺してやる」
肉体という名の殺戮人形に、名状し難い仄暗い衝動が注ぎ込まれる。
石油のように粘り濃い真っ黒なそれは、腸の底で唸り声と共に燃え上がる。

◆

ｊｈｇｆｃｖｂｎｊｋｌ；ｐｏｉｕｙ６５４５６７８９０-
４００年前のお侍さんは刀を武士の魂であると宣っていたそうな。
武御雷の刀剣武器への拘りはその辺の武士道に由来するそうだが、マタタビにとって剣とはどこまでもただの道具に過ぎない。
そこにあるから、使い易いから、ただ利用するだけの道具。

『桜もやってみるか、剣道』

『……やる』

初めて竹刀を握ったのは、桜が４歳の頃のことだった。

桜にとって刀とは、道具であれど武器ではない。

『教えて、お父さん』

一種のコミュニケーションツールの域を出なかった。

桜は一度も、剣を好きだと思ったことがない。

ただ剣と父からの押し潰さんばかりの寵愛が、才能と鞭撻という形で桜を一方的に祝福した。

主観的には呪いにも等しかった。

:ｐｏｉｋ,,;;@[];;ｌｋｊｈｇｆｄｆｇｙｕｉｏｐ@[

◆◇◆

ブレイン・イーターの脳食いは、対象の脳髄から直接記憶を吸収して自身の記憶として貯える、冒涜的極まりない能力だ。

記憶とは個人の全て。生まれてから培ってきた技能も経験も、奪ってしまえばタブラの物。

だからタブラは、佐々木正義の死体から吸い取った世界最高峰の剣術と、桜に対する膨大な戦闘経験を惜しみなくマタタビに発揮する。

ユグドラシルにおいて〈完全なる戦士（パーフェクト・ウォリアー）〉は完全なるネタ魔法に過ぎないが、正義の戦闘技術をもってすれば、アサシンであるマタタビを相手取るなら至上最適解な戦術と言っても過言ではない。

「来なよ、桜」

「死ね」」」

少女を象った死神は小さな呪詛を残してから、死の黒風と化して容赦なくタブラへと斬りかかる。

華奢な腕から振るわれる刃が狙うは鎧の隙間の首筋だ。

常人どころか並みの１００レベル戦士職でさえ視認が難しい超神速。急所を狙う

太刀筋の正確性は、芸術の域にすら達していた。
時と場合を忘れていればその美しさに感嘆すら漏らしていたことだろう。しかしタブラにとって、あるいは佐々木正義にとって、マタタビのありとあらゆる攻撃が予測の範囲内にある。
「わかりやすいね」
タブラの剣は悠々と、マタタビの斬撃の軌道を逸らして弾いた。
もはや死の恐怖は無く、タブラの中の佐々木正義の疑似人格は、二百年ぶりの剣の交わりに場違いな感嘆に震えている。
「……まだよ」
甲高い一合の響きから、刀と剣の熾烈な剣戟が火花を散らす。
しかしその光景は剣士の立ち合いよりも、超速回転するノコギリが鉄塊に刃を突き立てる状態の方が近かった。
激しく果敢に斬りかかるマタタビを、鎧を纏うタブラは淡々と極めて最低限の動作で捌き続けていた。どころか口を開く余裕すら、彼にあった。
「相変わらずだ。真っ直ぐで純粋で、美し過ぎる」

「黙れ」

大人と子供の如き差が、両者の間に立ちはだかっている。

この世界において数多の猛者を翻弄し続けたマタタビの高速剣技。初見ではまず突破不可能なそれを〈完全なる戦士（パーフェクト・ウォリアー）〉状態のタブラがこうして完封している理由とは、つまるところマタタビの性格にあった。

「桜の剣には嘘が無い」

マタタビは、嘘がつけない。どんな状況だろうと、どれだけの殺意が渦巻こうとも、マタタビという存在の根本は変わらない。

彼女はどこまでも真っ直ぐで純粋だった。

故に、彼女の剣にフェイントや駆け引きといった小細工は存在しない。彼女の願う、最善最短最速だけを究極的に追い求めた結果が今のマタタビの剣なのだ。

そしてそんなマタタビの性質を父であり師匠である正義はこの世界で誰よりも理解していた。

ゆえにタブラは、彼女が思い描くであろう最高の剣を予想して、先回りで防ぐだけでいい。

「こなくそ！」
「ほら、また」
タブラが一歩踏み出すたびに、マタタビの足は2歩進んでいる。全身鎧の重さもあって、スピードでは明らかにマタタビが勝っている。
だがステータス差が必ずしも勝敗を分かつわけではない。少なくとも、足の速さと思考の速さは比例しない。マタタビが思い描く8歩先をタブラの読みが1歩超えていれば、マタタビの攻撃は届かない。
「それに速すぎるのも考え物だよ？」
「っ！」
マタタビの剣が大上段から振り下ろされるより先に、迫る勢いを逆利用してタブラの突きがマタタビの肩を貫いたのだ。
カウンターを仕掛けられれば、マタタビの規格外の速さは帰って足を引っ張ることになる。
「まずは一本。さぁ次だ」
「……まだ、まだだッ!!」

それでもマタタビはまだ止まらない。
傷口から鮮血を噴き出しながら、マタタビはなおも攻勢を続ける。
痛みを感じていないのか、それとも感じた上で無視しているのか、それはマタタビ本人にしかわからないことだ。
しかし一つだけ確かなことがあるとすれば、その目つきからは怒りと憎悪が消えていないことだろう。
タブラを殺さんとする気迫だけは、決して衰えていなかった。

◆◇◆

かつて、ネーミングセンスが壊滅的と称されていたモモンガにとって、タブラ・スマラグディナが有していた深淵な神話知識は、ある意味大きな助けになっていたと記憶している。武器や装備に付ける名前を考える際、モモンガ含め多くのギルドメンバー達が彼に名付けを乞うていたものだった。
『タブラさんタブラさん。新しく作った武器に名前つけたいんですけど、神話ネタ

で何かあります？　強そうなやつお願いします』
『じゃあ現地の言葉で「偉大なるもの」って意味の創造神の名前とかどうでしょう？』
『おー！　いいですね！』
『オニャンコポンって言うんですけど……
　おやモモンガさん半信半疑って様子だね？』
『半分どころか１００パー疑ってますね！』

確か、パンドラズ・アクターの名付けもタブラに頼んだはずだった。
現実化した今でこそあのＮＰＣの振る舞いは歩いて動くパンドラの箱（黒歴史）でしかない。しかし本来は、ギルドメンバー全ての能力をコピーできる能力にちなんで、神から全てを与えられた者という意味から『パンドラ』と名づけられたのである。
ナザリック地下大墳墓という世界観の構築において、タブラ・スマラグディナは欠かせない存在だった。

思い出であり、友であり、仲間でもあり、モモンガの人生に射した掛け替えのない輝きの一つなのである。

◆

だから、どうしてこうなったのだろうと、思わずにはいられない。

なぜマタタビとパンドラズ・アクターが突然、タブラを始末しにカッツエ平野に飛び出してしまったというのか。

『理由はどうしても話せません。でも、今しかチャンスがないの』

そもそもなぜタブラが、アインズとマタタビに敵対することになるというのか。

マタタビとタブラの間に何があったのか。

わからないことだらけで、心が状況についていけない。

だからアインズにできたのは、辛うじて動く理性で全ＮＰＣを玉座の間の中に置き去りにして、レメトゲンのゴーレムたちを使って完全封鎖をすることくらい。

アルベドと共に完全武装を整えて、アルベドと共に八階層で彼女と対峙することくらい。

タブラを相手取るというマタタビに、下手な横やりを入れられないための時間稼

ぎである。

『絶対に、タブラは生きて捕まえるから。信じて』

それだけで、精いっぱいだった。

ナザリック地下大墳墓、第八階層荒野エリア。

第八階層守護者ヴィクティムが住まう『セフィロトの樹』と正反対の地点に位置する、『禁忌の深淵クリフォート』。

赤黒い大樹の幹が逆さまに地中に埋め込まれ、下に伸びる枝を伝っていくように掘られた洞窟である。

本来ははその最奥で停止状態で置かれている彼女が、しかし玄関口にてアインズとアルベドの前に立ちはだかっている。

アインズは思わず細い声で呟いた。

「ルベド……」

姉妹ともあってその容貌は、姉であるアルベドが二回り幼くなったような雰囲気

だ。背丈からして、だいたい13、４の少女といった具合であろう。

肩口を過ぎてなお長く伸びる黒髪は漆のように艶やかで、瞳は夜空に星を散らしたように紅く煌めいている。ただ右目を隠した前髪が一房だけ紅く染まっている。肌の色は透き通るように白く、唇の紅が一際映えていた。

全身を赤いラインの奔った黒いキャットスーツに身を包み、瑞々しく発達し始めた女性的な体格を強調する一方で、両肩から腕先にかけて薄桃色の強化装甲が覆いこみ、彼女が異形の機械人形であることも示していた。

改めて、彼女の名はルベド。ハーフゴーレムとして外付け改造を施された特別なギルド拠点ＮＰＣであり、ナザリックどころかこの世界全体において個として史上最強の戦闘力を誇る存在である。

ハンドアームのような巨大な左手が握るのは、黄金に輝くメカニカルな外観の、2メートルほどもある二股槍。ルベド専用に与えられたオーダーメイド神器級アイテム『キトリニタス』である。

その鋭利な二つの先端がアインズへと向けられる。

「対象補足、ギルドマスター：モモンガ及び拠点ＮＰＣアルベド。脅威度演算、許

容範囲。これより殲滅を開始する」
　無機質で機械的な女声は、しかし物理的な力を持っているかのようにアインズの体を圧迫し、息苦しさすら感じさせる。
　そんなルベドに対し、本音では恐ろしくてたまらないアインズ。だがまるで動じた様子もなく答えてみせる。
「待て、その命令が誰に下されたものか教えろ。指令内容が矛盾しない限りは私の言うことも聞いてくれるのだろう？　頼む、答えてくれ」
　アインズは内心で一縷の望みに縋るように問い質す。
　しかし、既にわかり切っていた答え合わせだけが示された。
「最上位指揮権保有者、タブラ・スマラグディナ」
「そうか……本当にそうなんだな……」
　表情変えずに言い切ったルベドの返答に、流石のアインズも堪え切れない想いで拳を握る。
　困惑と、身を引き裂くような悲しみである。
「おのれタブラめ！　妹にアインズ様を狙わせるなど……なんてことを！　許せ

ない！」

アルベドはアインズとルベドの間に立ちはだかり、両手のバルディッシュとカイトシールドを強く大地に突き立てる。

そして身に纏う神器級全身鎧ヘルメス・トリスメギストス、漆黒のヘルムの隙間から射殺すような眼光を差し向けた。

「そして、いくら可愛い妹でも、アインズ様の敵ならば容赦しないわよ？　ルベド、いえスピネル」

「すぴ……ねる……」

一瞬、無機質なルベドの表情に影が差す。

ハーフゴーレムの改造体である彼女の定義は、純粋な拠点用ＮＰＣよりも、どちらかと言えばゴーレムに近い。

普段はゴーレムと同様に休眠状態にされているし、タブラ本人だけが所持している遠隔操作端末により自在に操作できる、まさにロボットだ。

しかし、それでも生身の体はちゃんと持っているし、根本的にＮＰＣとして生み出された以上、人格のキャラクター設定は存在する。

アルベドは言うまでも無く、アインズもルベドのパーソナリティを設定文としてよく知っている。

だからこの場の3者が、心底から戦いを望んではいないこともわかっていた。

「……」

それでも、彼女――ルベドはキトリニタスを構え続ける。

「ねぇルベド」

姉であるアルベドの声に、ルベドの瞳が揺れた。

ルベドの視線が雄弁に「邪魔だ」とアルベドを邪険にしているのが読み取れた。

しかしアルベドは動かない。

慈愛の女神の如き表情から、一転して邪悪な悪鬼の如く口をゆがませて嗤い上げる。

「ふふ、本当にいいのね？　アインズ様に刃を向けるなら、たとえあなたのお姉ちゃんであっても殺すわよ？

さて、あの気色悪い剥き出しの筋繊維にハバネロでも塗りたくれば、どんな声で

啼くかしらね」

鮮烈で痛々しい演技を前に、アインズの見えない胃は煮え立って吐き気すら催した。

何を想ってそんなことを言い放ったのか、考えたくもないくらい。

「排除します」

そしてアルベドの一流芝居を皮切りに、どこか煮え切らなかったルベドの雰囲気が万華鏡を転がすようにガラリと変わった。

機械的な無機質さが霧散し、虚ろな瞳に明確な怒りと殺意が宿る。

感情が物理的な力を宿したかのように、ルベドを中心として目が乾くような熱風が吹きすさぶ。背中から紅いひし形の飛行補助ファンネルが八枚現れ、機甲妖精のごとく彼女の足を浮き立たせた。

「!!」

次の瞬間、ルベドはまるでロケットのように一直線にアルベドへと迫り、カイトシールドと二股槍の衝突が火花を散らす。衝撃で周囲の空気が地ならしの如く震えた。

激しい金属音は、まるで世界の終わりを告げる鐘の音にも似て、アインズの耳に響き渡る。

◆※捏造設定

◇二つ名：最強起動兵器

◇ルベド［異形種］　ｒｕｂｅｄｏ

――『すぴ……ねる……』

◇役職

1576　貴方以外のこの未来を Ｋｉｌｌ it, ｋｉｌｌ it

・妹
◇住居
・第八階層禁忌の深淵クリフォート
◆趣味
・姉
◇属性アライメント
・邪悪［カルマ値：-２００］
◇種族レベル
・マシンナーズ：ＬＶ１０
・ハーフ・ゴーレム：ＬＶ１０
・オーマ：ＬＶ５
◇職業クラスレベル
・ファイター：１０ＬＶ
・アイアンウォリアー：５ＬＶ
・アーマード・メイジ：１５ＬＶ

・ベルセルク：５ＬＶ
・ストライカー：１０ＬＶ
・ゴッド・スラッシャー：５ＬＶ

◇[種族レベル]±[職業レベル]：計75レベル
・種族レベル：25
・職業レベル：50
◇能力表（最大値を１００とした場合の割合）
・HP（ヒットポイント）：97
（80＋17）
・MP（マジックポイント）：52
（永続自動回復）
・物理攻撃：１２０
（90＋30）
・物理防御：１０５

（82＋23）
・素早さ：80
（62＋18）
・魔法攻撃：85
（60＋25）
・魔法防御：100
（77＋23）
・総合耐性：88
（72＋16）
・特殊：40
（20＋20）
・合計値：767
（595＋172）
※（）は外付け改造による加算分

◆概要

種族は弐式炎雷と同じハーフゴーレム。ハーフゴーレムは１００レベルまでの余剰成長域を開けておくことで、その分一般的なゴーレムと同様に外付けの改造を施し能力を強化させることができる。

ルベドの場合は25レベル分の容量を改造強化に充て、ワールドアイテム【熱素石（カロリックストーン）】を搭載したことで、ギルドメンバー最強と呼ばれる たっち・みー すら凌ぐ戦闘力を得ている。しかし強さの代償に、修理や改造に必要な金属素材が莫大であり、ランニングコスト的に実践運用される見込みは皆無。

使用する神器級武器は身の丈より長い黄金の二股槍の『キトリニタス』。

元ネタは錬金術における大いなる業の一つ。（意味は黄化（黄金）：変容、完成。15世紀以降しだいに下の「ルベド」へ統合されるようになった）

◆性格

機械人形の様な無機質な口調を持つ反面、実は姉妹愛が強く姉への依存度が高い。あまりにも過剰なことから長女のニグレドからは「行き過ぎた愛情」として忌避されている節がある。

姉と創造主以外には極めて無関心。また、創造主の指令が下れば姉であろうと容赦せず殺すことにも躊躇いはない……というわけでもない。

余談だけど、この子のキャラデザ見てピンと来た人はｓｏｂｉｎ様をめっちゃ好きな人です

ナザリック最後の支配者

おまけも本編です。シリアスばかりで吐き気がするのん……ほのぼのはどこ……

【マタタビの至高の41人大百科】

No・15：るし☆ふぁー

相当な芸術家肌のようで、作品へ注ぐ熱量と悪ふざけの度合いは半端ない。タブラ達と共同開発したというルベドだが、あの性能の盛り方はどうかと思う。

そして重度のコミュ障。気を許した相手にはグイグイ来るタイプらしいが、少なくともマタタビはお眼鏡にかなわなかった。クランからギルドに移行した後メンバーになった人物なのもあってほぼ接点は無いが、ウルベルトの伝聞から察するに相当な甘えん坊ちゃんだと思った。

やはり彼を受け入れるアインズ・ウール・ゴウンの面々の度量の広さと言ったら

凄まじい。そんな彼が割と早期にあの居心地いいギルドを引退したというのだから世の中わからない。考えられるとすれば、成長してコミュ障が治ったのか、それとも何か別の依存相手を見つけたのか。

◆◇◆

追憶に浮かぶ思い出はいつだってセピア色だった。

上書きで塗り直してあたかも鮮明なカラー写真のように誤魔化しているが、過去の栄華に狂いきれるほどアインズは純粋ではない。

狂いきれたら、それはそれで気楽だったろうが。

長年心の支えにしていた唯一の人生の輝きであるギルド：アインズ・ウール・ゴウン、その絆は流れる月日と共にとっくに風化してしまっていた。アインズにとっても、たっち・みーにとっても、タブラ・スマラグディナにとっても。

たっち・みーは娘の為にユグドラシルを去って、果てや異世界にまで迷い込んだ。タブラ・スマラグディナは何らかの理由でアインズ達に敵対するまでに至った。

マタタビは取りこぼした家族との時間を取り戻すため、与えられた絶大な富と力を投げ捨てて元の世界に帰ろうとしている。

ともすればアインズはどうだろう。
『我々は御身に、アインズ・ウール・ゴウンを名乗られるあなた様の存在に、ずっと救われておりました。
その研ぎ澄まされた支配者としての在り方が、創造主を見失った我々シモベの心を満たしてくださったのです』
今のアインズに残されているのは、己に縋り懸命に尽くしてくれる愛し子達だ。
節介焼きで思い込みが激しくて手の掛かって仕方ないあいつらが、しかし、空っぽだったアインズに存在する意味をくれた。あるいは、存在した意味をくれた。
だから彼らの為ならアインズは何だってしよう、何にだって成って見せよう。世を制覇する大魔王にでも、慈悲深い理想の支配者にでも、もしくは最低最悪の裏切り者にでも。
かくして、元より歪に曲がったアインズの天秤が、逆方向へと大きく狂う。
アインズは、心の底から改めて決意した。
ＮＰＣを守るためならかつての仲間にだって容赦しない。
たとえ彼らから嫌われてでも、憎まれてでも、アインズは彼らを守りたい。

それが、今のアインズに残された全てなのだから。

『居なくなった方々はさて置いて、今は目の前の存在のために私は戦いましょう』

耳に残るのはいつか聞いたデミウルゴスの決意の言葉。

臓腑の無いアインズだが、今とても腑に落ちた気分だった。

◆

アルベドとルベドの衝突音が、アインズの中に引っかかっていた虚しい遠慮と躊躇を切り落とす。

過去を置き去り今だけに意識を向けると、思いのほか、その心の軽さが心地よかった。

「アインズ様!!」

「〈魔法最強化万雷の撃滅（マキシマイズマジックコールグレーターサンダー）〉」

乾いた指先から迸る雷激が、衝突するアルベドとルベドの合間を牽制して切り離す。

「〈魔法最強化無詠唱化三重詠唱爆撃地雷（トリプレットマキシマイズサイレントマジックエクスプロードマイン）〉」

続けざまに無詠唱化した魔法を行使。

その効力が発揮されるより速く、ルベドの背に浮くファンネルが燃え上がる。
搭載されたジェットブースターの直線加速だ。
まるで転移魔法の如き超速で間合いを詰めたルベドの一撃が容赦なくアインズへと振るわれる。
少女の見た目に騙されてはいけない。マタタビがユグドラシルにて最凶と呼び恐れられていたように、ルベドもまたナザリックにて最強の武力を誇る。
神器級二股槍キトリニタスの横殴り、ルベドの剛腕が放った殴打ダメージをモロに食らった肋骨がまるで豆腐のように粉々に砕け散る。
もし肉身で受ければ肺と心臓が根刮ぎされる致命傷だ。
「ガハッ」
激痛と沈静化の狭間に揺れる意識を辛うじて繋ぎ止めながら、固く拳を握りしめた。
そして事前に掛けていた魔法を躊躇なく起動させる。
「〈光輝緑の体（ボディ・オブ・イフルジェントベリル）〉発動」
逆再生のごとく殴打ダメージが修復され、吹き飛ばされた肋骨が元に戻る。そし

て槍に押し出されたように移動していた。
〈光輝緑の体（ボディ・オブ・イファルジェントベリル）〉は殴打ダメージを一度だけ無効化できる魔法だ。同系統の魔法に刺突や斬撃に対応するものも存在する。
この時アインズはルベドの表情を一瞥する。動揺や硬直する様子が無いことを確認し、心底から歯噛みした。
（……やはり）
初見の敵ならば数舜間の動揺を誘えるこの魔法だが、この世界では今が初戦闘となるはずのルベドは一切反応を示さず追撃をかける。
まるでアインズの手札を知り尽くしているかの如き冷静さだ。
だがアインズやアルベドもまた、ルベドの絡繰りを知り尽くしているため落胆はすれど動揺はしない。
真っ直ぐにアインズ狙い突き進むルベドを、無詠唱化して仕掛けた三重地雷が迎撃する。
「……!!」
予備動作の無い無詠唱トラップ。そして無属性の魔法攻撃は完全耐性では防ぎき

れない。

だが大爆発に揉まれたルベドの体力をライフエッセンスで測っても、まだまだ大して削れていない。

彼女を覆う特殊金属の強化装甲が分厚過ぎるためだ。その総合強度はタンク職として特化したアルベドに匹敵する。

「……るし☆ふぁー さん気合入れ過ぎだろ」

思わず制作陣の一名に文句をこぼすアインズ。いったいどれほどの希少金属を使い込んだのか。

もちろん彼以外の面々にだって山ほど文句があった。まさかこうして命がけで戦うとは思いもしなんだから。

しかし端から敗北を確信して勝負に挑むほど、アインズもアルベドも愚かではない。

水滴岩を穿つという。確実に一手一手を積み重ねてルベドと言う大岩を砕く、その覚悟と策を携えてここにいるのだ。

「潰れろスピネル!!」

爆風が晴れるより先に、間髪入れずアルベドのバルディッシュが大上段からルベドを狙う。全体重を掛けた非常に重い一撃だ。

しかし、

「おねえちゃん……訂正を要請する。すぴねる ではなく、ルベド！」

土埃を巻き上げながらルベドはそれを迎え撃ち、両手持ちのキトリニタスの先端で受け止める。

マタタビに感化されて戦士職の動きを齧った今のアインズだからこそわかる。ルベドの動きは、熟練した戦士の応対だった。

そして口にするのは、攻撃よりもスピネルという別称の方が堪えたかのような信じられない言い草だ。

ＮＰＣであるルベドは重度のシスコンであるという設定が与えられているため、確かにアルベドからの蔑称はある意味可愛い弱点だが……

（全然性能が可愛くねぇ！）

冷徹な最強ゴーレムが超シスコン。いかにも誰かさんらしいギャップ要素だ。

しかし愛でてやろうにも萌えてやろうにも落差と状況が悪すぎる。

「〈魔法最強化位階上昇化魔法の矢（マキシマイズブーステッドマジックマジック・アロー）〉！」

第一位階魔法を９位階相当に強化して解き放つ。無数の光の矢が必中効果で寸分狂わずルベドを捕らえた。

しかしルベドは片手を挙げて、

「〈石の壁（ウォールオブストーン）〉」

防御魔法を発動。ルベドとアルベドの前に石壁がせり上がる。光の矢は、ルベドが片手間に召喚した石の壁と対消滅するように掻き消えた。

何を隠そうルベドの職業編成は魔法戦士。アルベドを一蹴できるフィジカルを有しながら、魔法すら使いこなすのだ。

「やるわねスピネル！　でも、片手がお留守、よっ!!」

「……ぐぐぐ」

魔法行使の為にキトリニタスから片手を外した瞬間を、アルベドは見逃さない。

競り合いの状況から更に一歩強く踏み込んで、体格差を活かし押し潰すようにバルデッシュを上段から叩き付ける。

そのままルベドの肩口に切り口が奔り、血飛沫の代わりに電撃と火花が飛んだ。

「……浅いな」
バルディッシュは見事に食い込んだものの、やはりルベドを覆う装甲が堅い。
アインズとアルベドの連携で攻め立てようやく決めた攻撃も、決定打には程遠かった。
（さすがルベド。一筋縄ではいかないか）
僅かに膝を震わせるだけの無表情なルベドを見て、アインズは次の一手を決意する。

「撤退だアルベド！」
「はい！　アインズ様！」
アインズとアルベドはそれぞれ、左手薬指に嵌めていたリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを輝かせる。
戦闘中にわざわざ装備枠の一つをこの指輪で埋めていた理由など、逃げ切るため

に決まっている。

「……逃がさない　〈追尾転移（ストーキングテレポーテーション）〉」

転移の間際、ルベドの右手指も同様に輝いたのを見て、アインズは内心で「だろうな」と溜息をついた。

◆

あらかじめ決めていた避難先は、ナザリックの特殊隔離地域である宝物殿。この部屋に来るにはギルドメンバーと一部守護者のみに与えられたリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの転移しか方法が無い。

転移した宝物殿『第一の部屋』は、黄金と宝物が山脈の如く乱雑に連なるエリアだ。アインズとアルベドが息を合わせて同時転移した直後、『第二の部屋』へのパスワード式ロックゲートをくぐって即座に内側からロックを仕掛ける。

そして暗幕状のゲートシャッターが閉ざされてから間も無く、反対側から何か叩きつける様な轟音が響いた。間違いなく、ストーキングテレポーテーションで追尾してきたルベドの仕業だろう。

しかしいくらルベドと言えど、ギルド拠点の隔壁を力技でこじ開けることは不可能だ。物理的な突破手段があるとすれば、今アルベドからマタタビの手に移ってる世界級アイテム【真なる無】の対物範囲攻撃ぐらいなものである。

そして正式な入り方はパスワードの入力だが――

『かくて汝、全世界の栄光をわがものとし、暗きものは全て汝より離れ去るであろう』

反対側から入力された解除コードは、しかしルベドの通過を許さない。

「無駄だ、パスワードも変えてある」

相手はナザリックのギミックの大部分を構築したタブラ・スマラグディナだ。

タブラのリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンがルベドの手に渡っていたのは、事前にマタタビが確認してくれていた。

ならば当然、タブラからルベドに宝物殿のパスワードを伝えている可能性も考えられた。

改めてルベドの容赦ない追跡を目の当たりにしアインズは戦慄するが、自分が一枚上手を取れた現状に著しく安堵を憶える。もし仮に、ルベドがパスワードを突破

しこの部屋に入って来ていれば、アインズとアルベドは殺されていただろう。
「さて改めて情報をまとめよう。アルベド」
「承知しました」
◆
タブラ・スマラグディナが創造したルベドという存在は、アルベドたちと同様のナザリック地下大墳墓拠点防衛用ＮＰＣである。
その出自に特別な点があるとすれば、ハーフゴーレムという種族の特性が色濃く出ていることだろうか。
ユグドラシルにおいてハーフゴーレムという種族は、人間種が『人体改造手引き』という種族変更アイテムを利用することで習得できるクラスである。
外見的には人間種に近いヒューマノイド的な容姿となり、身体能力が大きく向上するのが特徴だ。ギルド：アインズ・ウール・ゴウンにおいてこの種族を選んでいたナーベラルの創造主である弐式炎雷は、この種族のフィジカル性能を活かした超高速戦闘を得意とする１００レベル盗賊職だった。
しかしハーフゴーレムの特殊性はそれだけに留まらない。この種族の最大の特徴

は１００レベルまでの余剰成長域を開けておくことで、その分一般的なゴーレムと同様に外付けの改造を施し能力を強化させることができることだ

ルベドの総計レベルは75。つまり25レベル分の容量を改造強化に充てられていた。彼女の強化内容は主に３つの要点に絞ることができる。

まず大きな特徴として基礎能力値の大幅な上昇。

膨大な金属資源を強化に充てることで、筋力、防御力、敏捷性、耐久力が並みの１００レベル戦士職の平均値を大きく上回ったオーバースペックを獲得している。この時点で、守護者最強のシャルティアでさえ真正面からの勝利は難しいだろう。そしてルベドの真価はこんなものではない。

２点目が世界級アイテム【熱素石（カロリック・ストーン）】の搭載である。無限のエネルギーを秘めているとされるこのアイテムをゴーレムに搭載することにより、なんと無限のMP供給を実現させることができる。そのためルベドは、ほぼ無尽蔵に魔法を発動することができるのだ。

ルベドが習得している魔法の種類は少ないが、〈現断（リアリティスラッシュ）〉、〈上位転移（グレーターテレポーテーション）〉、〈石の壁（ウォールオブストーン）〉、〈追尾転移（ストーキングテレポーテーション）〉、〈時間停止（タイムストップ）〉など、どれも非常に強力なものばか

り。バフを掛ける系統の魔法が無いのが救いだが、先から時折使っていたファンネルによる瞬間加速もMP消費によって発動する機能であり、どこまでも性能に無駄が無い。

そして最後の3点目。これがある意味一番の目玉であり、アインズにとってルベド攻略の最大の障壁と言える機能。ルベドに搭載された特殊戦闘用人工知能プログラム『クリフォート』だ。

これを持ち込んだのは、かつての仲間の一人であった『大喰らい』ベルリバー。

なんと元々はある企業が軍事目的として秘密裏に開発していたAIだったらしい。ただ22世紀現在ではAIの軍事利用が禁止されているため、結局は内部監査で明るみに出てプロジェクトそのものが白紙化。その監査部だった当時のベルリバーが、抹消される予定だった『クリフォート』をこっそり持ち出して提供したというかなりグレーな背景があった。

『平和利用なら問題ないでしょう？』

『ユグドラシルの戦闘用にチューニングするのはプログラマーである僕の仕事だよ？　……ま、本業のクソ案件に比べたら楽だからいいけど』

ヘロヘロがぼやきながらルベドに仕込んだ『クリフォート』の真骨頂は、様々な環境に適応できる応用力と、ユグドラシルの戦闘にも対応できる高度な学習能力。

なにせ現実世界での実践運用が想定されていたAIだ。微細な気圧や気温の変化情報までも蓄積し、秒間で数百通りの先読み処理する性能をもってすれば、多少複雑なゲームシステムへの対応など容易い。学生に足し算引き算をさせるのと同じだ。

そんな『クリフォート』のスペックは実戦を積み重ねていくほどに強くなる。

さきほどの一戦でやたらルベドがアインズの動きに慣れていたのは、ユグドラシル時代のモモンガが彼女の実践演習に協力してしまったことに起因していた。

この『クリフォート』の恐ろしいところは、単なる戦闘技術の学習に留まらず、そこから更に発展できることにある。

たとえばアインズの戦い方は、前衛の味方を配置してサポートに徹するバリバリの後衛型。

ルベドの近接戦闘能力は非常に高く、ならば当然、アインズはルベドの攻撃に対して距離をとったり防御や回避を行うだろう。しかし『クリフォート』は、アインズがそう行動するだろうと予測した時点で、更に先を読んで次の一手を繰り出す。

それはアインズのフェイントであったり、あるいはブラフであったりするのだが、そういった動きの一つ一つすら『クリフォート』は貪欲に学習して、攻撃パターンを変えていく。ルベドのAIは、戦闘中に、戦闘中だからこそ、相手に合わせて進化し続ける。厄介この上ない代物だった。

強さ、堅さ、速さ、そして賢さ、全てを与えられたルベドに対し、果たしてアインズ達の勝ち目はあるのか、無いのか。

アインズの全てがこの命題に懸かっている。

◆

「なんて不利な戦いなんだ」

アインズは壁際にもたれながら、小さな声で呟いた。

静寂に満ちた宝物殿の回廊に響くそんな弱音は、しかしどこかに嬉々が含まれている様な前向きさがあった。

「それではこのまま、宝物殿に籠城いたしましょうか？　マタタビがカッツェ平野で全てを終わらせるまで」

横に控えたアルベドが、ヘルムを脱いだ素顔で微笑みながら問いかける。頬に垂

れる汗は断じて冷や汗などではなくて、闘気と高揚によるものだ。籠城の提案は冗談に他ならない。緊迫した状況であるにもかかわらず、だがあえてアインズはその冗談にのっかった。

「ははは、マタタビさんがタブラさんからルベドの指揮権を奪い取ってくれれば、確かに全部片が付くな。彼女に与えた貸しを考えれば、それぐらいの仕事はしてもらわないと割に合わない」

「ふふ、そうですね。そも、このタイミングでタブラとの戦端を開いてしまったのは彼女なのですから、その程度の働きは当然でしょうね。また、例の如く事情を伏せて独断専行しおってからに……」

無邪気に笑うその表情は本当に子供のようであり、しかしその言葉には紛れもない怒りが込められている。

般若のごとき絶妙な笑顔のアルベドを見ながら、アインズは溜息をつく。

「お目付け役のパンドラズ・アクターすら連絡をよこさない以上、我々に話せない相応の事情はあるのだろうが……全く世話の焼ける。どうして彼女は不合理な真似ばかりするんだろうな。報・連・相……せめて理由だけでも話してほしいが」

マタタビとアインズの信頼関係は、三歩進んで二歩下がるを繰り返しているようだった。

先日自らスレイン法国との密通を明かしてくれたり、今日も事前に連絡だけは入れてくれたのだから、一応は前に進んでいるのかもしれないが。それにしたってあんまりではないのか。

「しかし、考えてみればアインズ様と私にも同じことが言えますね。今からでも、玉座の間に軟禁している他のシモベたちを動員すれば、ルベドの対処などもっと容易く行えたでしょうから」

アルベドは自嘲して、アインズもまた苦笑を浮かべた。

「そうだな。本当はもっと賢いやり方だって、わかっているはずなんだけどな」

現在他のＮＰＣ達は、アインズの命で玉座の間に幽閉している。ギルドメンバー同士の戦いに愛すべき子供たちを巻き込まないためだ。

アルベド曰く、至高の存在同士の衝突などを彼らが知れば、最悪自殺者が出るとのことらしい。

しかし、ＮＰＣ達の精神衛生を考慮しても取れる手立ては存在しただろう。

簡単に考えるだけでも、例えば第八階層守護者のヴィクティムを一人だけ連れ出して、ルベドに足止めスキルを使わせてから後で記憶操作するとかがある。たったそれだけでも今の戦況は覆せるし、他にも色々手はあるだろう。

わかってて尚二人だけでルベドに挑むのは、アインズとアルベドのくだらない我儘、自己満足に他ならなかった。

「私は、アインズ様を愛しております。ナザリックを愛するアインズ様も、アインズ様を愛するナザリックもまた、愛しております。そして御身と同じ志でもってかの地の守護に当たれることを、心より光栄に、そして嬉しく思います」

「俺もだよ、アルベド」

こんなのは、独り善がりが二人善がりに変わっただけだ。でも、それだけでも今アインズの心は舞い上がるように軽かった。

誰かと心を合わせて一つの戦いに挑むなんて、それこそ何年ぶりのことだったか。

今のアインズには、思い出すことも出来やしない。

◆

『ギルドマスターモモンガ』

水を差すように、あるいはとても空気の読めたタイミングで、ルベドからの〈メッセージ〉がアインズに届く。

『宝物殿からの退出を要請する。要件が飲めなければ、カッツェ平野でタブラ・スマラグディナと戦闘中のマタタビを攻撃する』

抑揚の無い機械的な口調で語られる淡々とした請求は、様々な情報をアインズに示していた。

そしてユグドラシル時代には無かった、AIではないルベド自身の知性に強くアインズは警戒する。

「なるほど、ルベドもこの戦線の概要を知っているわけか。」

『肯定。おそらくあなた様の狙いは、マタタビとタブラ・スマラグディナの対決に横槍を入れられないための時間稼ぎと推測した。であれば、この籠城は不合理であると指摘する』

ルベドの推測はそれなりに的を得ていた。

籠城の継続と言うアルベドの冗談が冗談足る所以は、マタタビの安全と目的が脅

かされる可能性があったからだ。
「しかしそれなら、なんで今のうちにマタタビさんの方に向かわなかった？」
『タブラ・スマラグディナの伝聞情報から、此方からマタタビを攻撃しても高確率で逃がしてしまうと判断したから
それはマタタビの殺害というタブラ・スマラグディナの目的とそぐわぬ上、あなた様の抹殺命令も困難になる。
ゆえに、望ましくないと判断した。ただし、あなた様の籠城が長期になる場合は、この推測の限りではない』
「にしたって、どうして数分間も私達を待ってくれていたのかな？　大変気が利いて嬉しい限りだが」
『当初はこの籠城を、あなた様がバフ系統の強化魔法を掛ける時間稼ぎであると判断したから。
しかし数分間待っても抗戦する意思を見せないため、時間稼ぎのための籠城であると理解を改めた』
「なるほどな、しかし大した自信だ。それはつまりバフ程度のハンデならいくらで

もやるからかかって来い、という意味か」
『概要は正しい。あなた様に逃げられると任務遂行に非常に差し障る。ゆえに、有利な条件を提示することで、あなた様との交戦再開を要求する』
「ああ、もちろん。了解した。おかげさまでバフ魔法もかけ終えているからな。今すぐにでも第八階層に戻らせてもらおう。ただ、こちらからの要請が一つある」
『何か』
「今の私の名前はアインズ・ウール・ゴウン。ナザリック地下大墳墓を統べる最後の支配者、アインズ・ウール・ゴウンだ。是非ともそう呼んでくれ」
『承知しました。アインズ様』

◆おまけ『原作最強キャラはいくらでも盛って良いとされる（暴論）』◆

①

タブラ「ハーフゴーレム改造して最強ＮＰＣ作ろうず！　目指すは打倒たっち・みー！」

るし☆ふぁー「ひゃっはー！　熱素石で無限ＭＰ！　希少金属大盛で超装甲！」

あまのひとつ「武器は任せろ！　もちろん神器！」

ベルリバー「俺が持ってきた『クリフォート』を！」

ヘロヘロ「僕がルベドに組み込んで！」

タブ・るし・あま・ヘル・ヘロ・「「「「「でけた!!　勝負だ！　たっち・みー!!」」」」」

たっち・みー「降参です　（頑張ればイケそうだけど、ここは５人の顔を立てよう）」

モモンガ「すごいです皆さん！　（八階層のあれらをモモンガ玉で強化すれば完封できそう）」

タブ・るし・あま・ベル・ヘロ「「「「やったぜ!!」」」」」

ウルベルト「お前らの負けだ、気付け」

・・・・・・

②

???「ズルだ!!　ズルっこだ!!　私のパパは最強だもん!!（涙目）　負ける

なんてありえないもん!!(プルプル)」
ペロロンチーノ「……やはり、リアルロリも捨てたものではない!?」
ぶくぶく茶釜「もしもしポリスメン？」
たっち・みー「呼んだ？」
タブラ「なるほどね」

③　・・・・・・

るし☆ふぁー「ねぇ、そういえばルベドの設定ってどんなの？」
タブラ「こんな感じ（超ロングスクロール）」
るし☆ふぁー「へぇー。あ、そうだ。この見た目で極度のシスコンで甘えん坊だったら面白くない？」
タブラ「ギャップ萌えいいね♪　少し設定削るから適当に書いいいよ」
るし☆ふぁー「おかのした」

・　・　・　・　・

④

ニグレド「スピネルシスコン過ぎてウザくない？　甘えん坊が許されるのは２歳児までよね」
アルベド「そうかしら」
ニグレド「あと、いかにも何か悪戯しそうな雰囲気無い？　動き出したら絶対なんかやらかすわよ、この子」
アルベド「それはわかる、とてもわかる（モモンガ因子）」
ルベド「ぴえん……（るし☆ふぁー因子）」

・　・　・　・

・

⑤

タブラ「モモンガさんとアルベドとマタタビは敵だからね。よろしく（スイッチぽちー）」

ルベド「おかのした（コイツ嫌い）」

ここすきと評価くださる人ありがとうございます。励みになります

感想飽食なんて雑魚作者のすることです。そして私はどうしようもなく雑魚作者でした

オーバーフロード現象

エタッテナイッタラエタッテナイ
普通に書き詰まっていただけです恥ずかしながら。
申し訳ない

◇◆オリジナル能力解説◆◇

『脳食い』：ブレイン・イーターの種族的な能力である。
対象人物の脳漿を吸うことによって、その人物が過ごした人生経験と知識、感情を体感することができる。
吸収した情報は極めて高い精度で再現することが可能。簡単な話、戦士を吸収すれば武術、賢者を吸収すれば叡智を得られる。マタタビを吸収すると頭がおかしくなる。

ただ戦闘時などに吸収した能力を生かす際は、思考の混乱を避けるため一人分の再現しかできない。無理をすると船頭多くして船山のぼるという事態になり、大きな失敗を起こす。

脳構造に優れたブレイン・イーターは蓄積した情報を忘却処理できず、それは良点であり欠点でもある。タブラ・スマラグディナの場合は出来心で吸収した佐々木正義の記憶を消去できなかったために、感性の鋭いマタタビと敵対せざるえなくなった。

同じく記憶を扱った能力である〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉とは根本的に似て非なるもの。『脳食い』が干渉するのはあくまで脳という肉体であるのに対して、〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉は魂に干渉した上で肉体側にも変化を反映させることができる。

例えば生者に『脳食い』を使用した場合は外傷扱いなので治癒魔法で回復できるが、〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉は肉体の再現図である魂を書き換えているため不可逆の変質となる。やっていることは〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉の方が遥かに高度である。

念押しになるが、マタタビの両親が蘇生拒否の状態になったのは過剰ストレスによるもの。『脳食い』によって魂が吸収されたせい、とかではない。

なお『脳食い』はユグドラシルのフレーバーテキストに記されていた生態であって、厳密には種族スキルにも職業スキルにも属さない。胃や腸などが持つ消化器官の働きと同じ扱いである。

◆◇◆

「いい加減死ね」

「嫌だね、生きたい」

達人のふるう技術とは、いつの世も見る者の心を震わせるものだ。

（綺麗だ）

彼女の凍り付いた表情筋の代わりに、両手に握る二刀の切っ先が憎悪と殺意を鮮烈に描き出していた。

恐らくに右方の黒刀が最速で首級を捉え、タブラが防御しようものなら更に左の銀刃が坦々と間隙を咎めんとしている。熟練のコンビを一体にしたかのような洗練されたコンビネーションの、その構え。

惜しむらくはその妙技が全て発展途上であることだ。

彼女が本気で刀だけに打ち込んでいたなら、技に見入る余裕すらタブラに与えなかっただろうから。

すなわち彼女の技は、どうしようもないほどに佐々木正義の理解の内に納まっていたのだ。

鋼がぶつかり鳴り合う火花の嵐。

超高速で交される剣戟の濃度は、１対１でありながら一帯に広がる戦場を思わせるほどの苛烈さだ。

１００レベルクラスの戦士たちによる、修練の果てに得た武術によってのみ起こりうる、一瞬が永遠に等しい極限の立ち合いがここにあった。

時にいなして、時に躱して、時に防いで、あるいは躱され防がれる。

そうして一つ刃が触れ合うたびに、彼女の心が剣を通じてタブラの内へと流れ込む。

戸惑い、怒り、悲しみ。やけくそ、逃避、そして全てを飲み込む真っ黒な殺意。

ただ、感情だけで敵を殺せるなんてわけでもない。勝利に必要なのは、持ち得る手札を冷静に活かすこと。

そういう意味で、頭に血を昇らせたマタタビの判断力は致命的に終わっている。
今のマタタビの剣ではタブラの鎧すら掠めることが出来ていない。
鎧を纏って機動力を削っている相手に対して、無装甲のアサシンが一触もできていない状況は劣勢以外の何物でもない。
「……逃げる気も無いのか？」
愚かな問いだと嘲るように、マタタビは嗤って答える。
「私が逃げればお前は一生、私の死の影に怯え続ける羽目になる。
お前を逃せば私は一生、お前を殺せなかったことを悔み続ける羽目になる。
だからお互い様でしょ。お前も私も、今を於いて必殺の機会は二度とない」
「まあね。合意の上での殺し合いなんて、矛盾している気もするけれど」
佐々木正義の死体を発端としたタブラとマタタビの戦端は、ある種の暗黙の了解によって成り立っていた。
まずマタタビは両親の仇でありその死体を弄んだタブラを必ず殺したいと思っている。
一方で、殺意に目覚めたマタタビという世界一危険な存在に付け狙われ続けると

いう状況は、タブラの生涯設計において史上最悪の障害だ。タブラとしてもマタタビは必ず殺さなくてはならないと思っている。

これにあたってタブラ側が雲隠れするという選択肢は、両者にとって等しく最悪な千日手だ。

マタタビ側は手詰まりとなり歯噛みする他にないし、タブラにしたってって死ぬまで彼女の追跡から逃げ続ける人生なんて真っ平。

だからこそタブラはこの地に彼女一人を誘い込んだわけである。

もっともこの作戦には大きな欠陥が一つあって、しかし敢えてタブラはそれを無意味であると見過ごした。

「あぁしかし、くどい様だが重ねて問いたい。何故、一人で来たんだい？

君の悪知恵をもってその気になれば、ナザリックの屑共を利用して私を確実に殺す算段を組めただろうに」

「屑共って……」

「身内以外のその他すべてをゴミと断ずる、共感性の欠片も無い幼稚な愚物。すなわちＮＰＣ達のことさ。聞くまでも無いことだろう？」

「……」

「あれらは『創造主』と言う概念を、見放されたことも知らず機械的に妄信する救いようも無い連中だ。

滅んだ方がモモンガさんや世界中の為になるし、何なら君の崇高な復讐の為に使い潰せばよかったのさ。

少なくとも たっち・みー に創造されたセバス・チャンが君の素性と動機を知れば、快く全てを捨てて君の駒になっただろう」

「愚物はお前だ。挑発のつもりなら最悪手です。頭悪すぎて同情したいくらい。

この世界に生まれ落ちた彼らという存在は、未だ生後数か月です。

それを数百年も無駄生きしたタコ助がマウントとって貶すだなんて、ただただ滑稽ではないですか？」

「相変わらずだ。甘く、絆され易く、詰も甘い。

君が肩を持つＮＰＣたちはどれだけ年月を隔てようと、本当の意味で成長することはないだろう。そうまるで、いつまで経っても君が他人を頼らないのと同じようにね」

マタタビは一人でここに来るべきではなかっただろう。

誰でもいい、盤面を覆せる味方を一人でも備えていれば、マタタビがタブラに負けることはない。

そんな当然の事実があって尚、マタタビの選択は変わらない。剥き出しの感情が理性を殺して、例の如く最悪の結果を手繰り寄せる。

「……頼るまでも無いというだけですよ。今はまだ、ね。

さぁ、脳みそ絞って付いて来な。私の一人はここからが本番です」

それこそがマタタビの、桜の救いがたい性分である。

佐々木正義と佐々木燈子が植え付けてしまった、親として最悪の失敗そのものである。

◆

タブラの中の佐々木正義は誰より深く理解していた。

武術に限らず体を扱うほぼ全ての技能において、マタタビは、桜は万能の天才だ。

剣の振り方、パンチのフォーム、弓の弾き方、銃の狙い方から、ボーリングの投

げ方やテニスの打法まで。

凡人が数か月をかけて習熟するそれら動作の心得を、彼女は数日程度で再現することが出来たのだ。

根底にあるのは、高い空間認識能力、動作性IQ、反射神経、瞬発力、そして他者への深い共感能力など、どれ一つとっても著しい複数の才能が掛け算された末恐ろしい異能。

そんな彼女は佐々木正義の元で剣を学び、そして旧クラン：ナインズ・オウン・ゴールにてペロロンチーノや弐式炎雷など数多の技巧者から技と知識、そしてぷにっと萌えやモモンガの悪辣極まる悪知恵を吸収した。

結果生まれたのは、あらゆる武器と武術に精通した変幻自在の暗殺者。

彼女の強さは、決してレベルやステータスの数値で測れるものではなく、ただ生まれ持った類稀な才覚と、何者にでも成ることの出来る無限の可能性によって支えられている。

それは一人でしか生きられない彼女が一人で戦い抜くために編み出した歪な在り方。

チーム、味方、仲間、同胞。あらゆる集団の理に爪を立て食らい下がる、個の万能性を突き詰めた限界点。

そんな彼女の技術の全ての集約が今、タブラ・スマラグディナへと牙を剥いた。

◆

「アハハハハハ！」

マタタビは口端を吊り上げ嗤うように笑い上げる。

彼女の悪辣風な笑みの源泉は別に悪意や殺意とかではなくて、ただ闘牙を奮い立たせるためのルーティーンであることを、タブラの中の佐々木正義は知っていた

剣に愛されながら剣から逃げた彼女を前に、己の内の冷めた親心は辛辣だった。

「さて今日はどんな小細工を見せてくれる？　どうせム――」

「うるさい！」

本音な皮肉を言い切る前に、マタタビが手に握った球体を床へたたきつける。消火器が爆ぜるように白煙が地下室全体を包み込み、タブラの視界はホワイトアウトした。

匂いからして毒煙（どのみち耐性があるので無害だが）ではなく、その狙いはお

そらく目晦まし。

（今回は煙玉かい、芸がない）

眼鼻の先に感じていたはずの彼女の生気が、煙に紛れて掻き消える。

１００レベル戦士職相当の気配感知能力を得ているタブラをして、戦闘モードであるため隠形にマイナス補正が入っていたはずのマタタビを見失った。まず間違いなく煙玉は彼女の隠形能力にボーナスを与えるアイテムだろう。

ケット・シー由来の聴覚、嗅覚、触覚と最高位盗賊職としての探査能力を兼ね備えたマタタビにすれば、目くらましのデメリットは皆無。見えているときと大差ない。

視界の情報量が大半を占める今のタブラには一方的に不利であるが。しかし状況に焦燥は感じず、凪いだ水面の精神が、泡立とうとしている不安心を飲み込んでいた。

マタタビの本領が今から始まるのだとしても、タブラの、佐々木正義の力の底は未だ深淵にあるのだから。

わずか初期レベル１で弱肉強食のこの世界へと降り立って、世界中の異種族たちをまとめ上げるまでに至った彼こそが、この世界史上最高の英雄なのだから。
「フーーーッ」
タブラは浅く、息を吹く。
脳をクリアに、意識を研ぎ澄ましていくごとに、竜骨の鎧越しに大気と触れる肌の触感が強くなる。時間の流れが緩やかになっていくのを覚える。
彼女の心がどこにあるのか、己の体をどう動かすべきか。
タブラの意識が思考するよりずっと早くに、既に内なる佐々木正義は動いていた。

目に見えずとも、音も気配もなくたって、少女のあり方を佐々木正義は嫌というほど知っていたから。
前後左右３６０度、彼女が陰から狙うとすれば、彼女が最も好むのは――
「上だろ」
タブラは二足を地面に食い込ませ、強く踏み込み上へ飛ぶ。
「なんで！！？」

「わかるさ」

何も感じないハズの情報に刃を突き立て、すると案の定彼女の刀と交わった。

流石は空気すら揺らさず移動する弐式炎雷の暗躍術。それを再現する彼女の御業は確かに称賛に値するが、行動予測で割り出せてしまっては何の意味もない。

頭上から闇討ちで切りかからんと狙っていたマタタビを、その体重差によってはね返し天井へと押し付ける。

「でぇっ！」

天井材を背中で砕きうめき声を上げた少女の声に痛む親心を、しかしタブラは一蹴しながら一閃を放つ。

声音の響きから喉元の位置を割り出し首を狙うが、切り飛ばしたのは刀を握る右腕。腕は刀を握ったままに血飛沫を撒いて壁面へと突き刺さった。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ーーーー！！！」

いくらマタタビと言えど流石に痛みには慣れまい。

当然のように彼女は狂乱の悲鳴を上げたが、けれど抜け目はなく、左手に握ったであろう拳銃（極めて可能性の高い推測）を三連射。煙中、しかも脊椎反射であろ

う射撃にもかかわらず、弾丸はタブラの目元を文字通りに目掛けて鋭く狙い撃たれた。

彼女は昔から視線に敏感な子だった。人は煙幕の中でも瞼の裏で目線を相手に合わせようとするが、昔から彼女にはそれが手に取るように感じられた。彼女は至近距離狙撃の技術に限ればペロロンチーノすら上回る。目線を辿って眼球に命中させる芸もまったく造作ないことだ。

そしてそのすべてを理解していれば、小首を右に傾けるだけで弾丸は無意味に横切った。

いや否、無意味ではない。

（……我ながら軽率！）

眼鼻の先に空気を震わせる衝撃波を感じる。この戦いにおいて初めての不可避を0・01秒前に理解した。

「しまッ」

「鉄拳！」

次の瞬間頭部右側方に強烈な大震動が見舞われる。
メリケンサックによる硬い拳撃、魔法効果で纏わせたであろう衝撃波がフルフェイスを貫通して頭部に響き、脳震盪で著しく平衡感覚が狂っていく。
当然マタタビは隙をついて華麗な回し蹴りが胴元へ叩き込み、靴に仕込んでいたノックバック効果が発動。今度はタブラが吹き飛ばされ、壁面にひび割れを作りながら叩きつけられた。
その間にも震えた脳が刹那の遣り取りの内訳を、無造作に紐解いていく。
彼女の咄嗟の銃撃は、追撃するタブラに対して逆に間合いに入り込む刹那の余地を生んだ。そして銃弾の回避行動として必然的に首を傾げた結果、頭部に拳を確実に当てる手順となったということか。
事前に組み立てていた型式ではなく、機転で実行した「脳筋」的なアドリブだろう。厳しく言えば、再現性の低いラッキーパンチ。
「『瞬間換装』鬼丸国綱　天乃羽場切」
とはいえ結果は結果。タブラが壁際で怯んでいる隙で、既にマタタビを取り出して上級ポーションで切り飛ばした片腕を再生させ、更にはスキルで別の二刀を両手

に換装させていた。
タブラは顎を震わせながらため息を吐いた。
さながら複数の戦士たちを相手取るような、多彩な技への順応は手管を知っていても気疲れする。
彼女を相手取るには平常心を保つためにも心の余裕が必須だが、ソレは一歩ズレれば油断となる。
油断すれば万が一だろうと億が一でも現実になる。
内なる佐々木正義は、まだ心配には及ばないと気丈を張っている。一発も殴られてしまってなお、戦士としてのマタタビをどうしようもなく見くびっている。
我が心ながらに、タブラはそれが理解できなかった。
何せタブラは本来戦士ではなく、ありふれた生者だからだ。

死にたくはない、今のタブラにはそれがすべてなのだ。
（生きるんだ私は！）
脳が平衡感覚を取り戻した直後、タブラは死の恐怖という己の感情をガソリン

に、魂の器へ注ぎ込む。

走馬灯のように思い出されるのは、ブレイン・イーターとして今まで吸収してきた人々の、最期の記憶の瞬間だった。

喉が渇いて罅割れながら朽ちた記憶、血を吐きながら病床で潰えた記憶、生きながら食いちぎられて獣の腹に堕ちた記憶、怒り猛る死の支配者に鯖折にされた記憶。あらゆる死の記憶がタブラの心に溢れ出した。

（生きたい。死にたくない。あんな！　今まで食らってきた者共のような、虚しい終わりなど真っ平だ。私は邪神、私はこんなところで死んでいいニンゲンじゃない。いやもう何でもいいから、どうでもいいから、生きたい。死にたくない）

《S》内なる強烈な魂の燃焼が、世界の核心へと昇り詰める。ただ生への宿望が、望まぬ現実を拒絶して僅かながらに描き替えた。《S》

結果、神経が焼け付くような酷い痺れと引き換えに、タブラの知覚力は魂の限界を超えて伸び上がる。

世界のルールが、たった数文字分だけ書き換わる。

（あぁ……これが）

超位魔法を放つときと類似した、世界と心が結びつくような多幸感がタブラの心を支配する。

超加速されたゆったりとした思考の中で、タブラは肌と大気を隔てるものが曖昧になる独特な感覚をおぼえる。そう文字通り、自分が世界の一部になるような感覚だ。

目で見る二次元の情報とは内容量がまるで違う、3Dモデルデータを脳内に直接取り込んだかのような圧倒的な掌握感。

戦場内のあらゆる鼓動、あるいは分子、煙の粒子の一粒までも、タブラの知覚の元に落ちていた。

当然それは二刀を握り猛然と斬りかかってくる眼前の少女のことも例外ではない。

もはや、大気を覆う煙幕はウェディングベールよりも薄かった。

◆

この世界（このゲーム）における極めて神秘的なバグ技（グリッジ）。

オーバーフロード現象と、タブラはこの超感覚の原因をそう呼んでいる。

簡単に言えば強い感情の高まりによって世界を騙し勘違いさせ、因果律や物理法則を捻じ曲げる現象だ。

タブラが知りうる最初の発現者は六大神筆頭がスルシャーナ。

現在でこそスレイン法国最高の神聖として崇めたてられている彼。しかし本人直筆の手記曰く、その正体は極めて凡庸な男だった。

そんなガワだけ超越者な凡人を一国の神にまで至らしめたのは、文字通り神の奇跡と言っていい偶然の連鎖であった。

彼が巻き起こした奇跡には一定の法則性があった。

それは奇跡の度合いが、彼を崇める者たちが増えるごとにエスカレートしていくという点である。

転移当初、１００名程度のＮＰＣ達にだけ妄信されていた時は、テキトーな言動が相手の心を射止めたり、精々が訪問先に都合の良いトラブルが巻き起こるだとかその程度の偶然で収まっていた。

ところが彼が徐々にこの世界に人々から信仰心を向けられていくごとに、さながら数十年先を見通した計略が如し偶然が彼の周囲で起こり始めたのだ。

例えば彼が何気なく隣国に散歩すると、その日偶然にも当国に一大革命が巻き起こっていて、成り行きでそれを鎮めた結果奇跡的に死者を出さずに統治下に置いてしまったとか。

実験で放った魔法が偶々に暴発して地形を盛大に吹き飛ばし、それが国境の紛争地帯の境界線となって戦争を止めてしまったりだとか。

他にも些細な幸運が天文学的確率を掻い潜り、結果的に神の御業としか言いようのない出来事の数々として起こり続けた。そしていつしか、彼は大げさな呼び名と共に崇られるに至ったというわけだ。

なお幸運に胡坐をかいた彼の慢心が、後の八欲王に後れを取った最大の原因になった

この事例を念頭にタブラがブレイン・イーターの脳食いによって様々な現地人の生涯を垣間見たところ、感情の多寡が因果律と物理法則を捻じ曲げる類似例が、他にも数少ないが散見できた。

その代表例の一つが魔神戦争の大英雄、佐々木正義の超感覚。

元の世界へ生還するという強烈な執念と極限の集中によって世界のルールを突き破り、超常の知覚を獲得するスキル外の拡張能力

そして今タブラは生への執念を爆発させて、同等の離れ業を実現させることに成功してた。

（見える！　聞こえる！　理解る！　全てが！）

佐々木正義の戦闘勘で何とか捉えていたマタタビの姿が、煙の中でもはっきりと見えた。

空気の微かな流れの変化から彼女がどう動いて何を狙っているのか、呼吸や筋肉の動きから微細な機微まで、先までの戦闘予測とは比べ物にならないほどに、彼女の全てを理解できる。それこそ肌の温もりさえも感じ取れる程にだ。

今のタブラならわざわざカウンターを狙うまでもなく、マタタビの速力を捉え斬れる。

確信と共に今度は一転、タブラ側からマタタビを責め立てる流れとなった。

「なんで！」

確かにマタタビの反射神経と回避能力はユグドラシルでも随一。カウンターならまだしも自分側から狙い捉えるのは非常に至難。

しかし逃げる先が読めていれば別だ。

タブラが繰り出す横薙ぎの一閃。マタタビは身を屈めてこれをかわす。

続く連撃も紙一重で全て回避される。だが、その動きすらもタブラには手に取るように分かる。

二刀を振るうマタタビの腕の軌跡が、コマ送りのようにタブラの瞳の中で踊った。

そうして生まれた僅かな隙、そこに生じた小さな空白、マタタビが反撃の為に生んだ一瞬の間。

「生き残るのは私だ！」

タブラの決死の一撃が、少女の細い胴体を捉えて切り裂いた。

１００レベルのくせに耐久値のかけらもない柔い肉。

断面から真っ赤な内臓を振り撒いて上下半分に分断されたのだ。

勝った。生き残った。

一瞬はそう思った。

「あ」

しかし眼前の圧倒的な勝利のリアルを前にして、タブラは思わず口から間の抜けた声を漏らす。

剣先が肉を捌いた感触に、大きな違和感を覚えたからだ。

超知覚を獲得して以降、タブラの剣がはじめてマタタビ（我が子）の体に触れたことで、ようやくタブラ（父）は己の失敗に気づかされた。

今己が切り裂いたのはタブラが知るマタタビではない。佐々木正義が知る桜ではない。

超知覚と親の勘に基づいた強い確信だった。

「誰だ!?」

どうして今まで気付かなかったのか。

きっとそれはあまりにも高等な擬態だったから。

「Ｈａｈａ♪」

少女の上半身が悍ましく嗤う。

２つの肉端が地べたに落ちてぐちゃりと断面の贓物をぶちまけた。

「『超速再生』」

けれど瞬く間に肉は蠢き、ピンク色のねばねばになって溶けていった。

「久しくお目にかかります、我が名付け親よ」

粘液だまりの中からマタタビではない、しかしタブラも良く知る幼げな女声がささやかれた。

今のスキルは高位のスライム種のみが扱える、回数限定付きの強力な回復能力であるハズだった。

二つ別れしていたネバネバは粘土細工のように一体となって、やがて肉棒状の悍ましき姿、ぶくぶく茶釜へと変貌する。

その光景を前にタブラのブレインイーターとしての高度な記憶能力が、一瞬の考慮を経て結論を出した。

「パンドラズ・アクターだと!?」
思わず口を突いた己の言葉がしかし己自身でも信じられなかった。
まったくもって腑に落ちなかった。
なぜならタブラは間違いなく、直前まではマタタビと相対していたからだ。
なるほど、この状況を再現できる存在はいる。
パンドラズ・アクターなら、マタタビとぶくぶく茶釜の能力を同時に扱うことは可能だ。
モモンガが仲間恋しさに生み出した、あの妄執の化身ならば。
しかしドッペルゲンガーがマタタビを再現することは不可能である。
なぜなら佐々木正義の目を騙しきることは不可能であるから。
今しがたタブラが味わったのは間違いなく彼女だけの言葉で、彼女だけの知識で、彼女のだけの剣で、彼女だけの技で、彼女だけの甘さで、彼女だけの憎しみで、

彼女だけの優しさで、彼女だけの心だった。
ただそれだけは譲れない。
（入れ替わったのか⁉　いやそんな隙は一切なかった！　今の私の知覚を掻い潜るなど不可能だ！）
タブラが高速で思考を回す、その致命的な敵は見逃さない。
懐かしい粘液盾の姿は、また別の懐かしい姿へと変わっていく。
山羊悪魔ウルベルト・アレイン・オードルの写し身が、タブラへと強い侮蔑と憎悪を唱えた。
「よろしいそのまま生死の際で思考を浪費していなさい」
（クソ！）
援軍、後詰、撤退など、事前に予想できたイレギュラーは山ほどあった。
だから想定外の状況が起きたその時点で、タブラが起こすべき行動は決まっていた筈だった。
突かれた虚の大きさに、数瞬という極めて貴重な時間を無駄にしてしまったのだ。
タブラは反射的に腰元に手を伸ばし、緊急脱出用のアイテムに手を伸ばす。

完全戦士化状態でも扱える、タブラの所有していた数か所の拠点にランダムで転移できるマジックアイテム。発動させしてしまえば、しばらくの生存が確約される命綱だ。

「〈魔法効果範囲拡大次元障壁（ワイデンマジックディメンジョナル・シールド）〉」

しかしワンテンポ早く動いていた敵の魔法が先回り。

ドアノブが閉まるような鈍い音が広がって、周辺の転移移動が完全封鎖。腰元に忍ばせていた命綱は瞬時にガラクタへとなり下がった。

（……冷静になれ）

ここまで劣勢を受けてようやくタブラの思考は状況に追いついた。

死ぬ可能性は非常に高い。しかし逃げることもできない。

なぜなら転移を封じられた今、マタタビと弐式炎雷の俊足を持つであろうパンドラズ・アクターに背中を見せることはできないから。

同じ理由で、完全戦士化を解いて魔法詠唱者（マジックキャスター）として戦うことも難しい。

こんな近距離で魔法詠唱者（マジックキャスター）がアサシンに立ち向かうのは無謀だ。

転移で距離をとることもできないのだから、最初に速殺されたのと同じ轍を踏む

だろう。

取り得る戦略は、このまま戦士化した状態での応戦しかない。

タブラは心を切り替え両手の剣と盾を強く握った。

「……」

パンドラズ・アクターが今度は武人建御雷の姿へと切り替わる。

「『不動明王撃（アチャラナータ）』」

彼の背後に燃えるように猛る不動明王の影が現れて、余波によって周囲に張っていた煙幕が吹き飛ばされた。

（不動明王コンボ狙いか）

武人建御雷の得意スキル。

不動明王、降三世明王、大威徳明王、軍荼利明王、金剛夜叉明王。

五人の明王をスキルで召喚し、五人それぞれの技によって強力な行動阻害効果を与える強力な技だ。

強力なスキルである分欠点もあり、技を成功させるには対象者のカルマ値がマイ

ナスに大きく振り切っている必要がある。
なので高カルマが相手の場合は他の仲間がカルマ値を下げる補助技を使うのが前提だ。
もっとも邪神ロールプレイヤーだったタブラは当然カルマ値マイナスカンスト。つまりヤバい。
ギルド全盛であれば武人建御雷がこのスキルで動きを止め、瞬間攻撃力の高いウルベルトや弐式炎雷がフィニッシャーになるのが常套の流れだった。
（そしてパンドラズ・アクターの嫌なところは、限定的ながらもこのコンボを一人で再現できること）
「……ポテンシャルではマタタビすら凌ぐか。あの子の猿真似とはワケが違う」
思わず口に出た戦力評価に、武人建御雷の姿であったパンドラズ・アクターは檄を飛ばした。
「たっち・みー様の魂を宿した者が、あの方の御業を猿真似と申しますか？」
「らしいよ。複数の武器に目移りせず、どれか一つを極めればワールドチャンピオンの域にまで辿り着けたかもしれないとも」

「……それはそれは、なるほど。
お嬢様を弁護するつもりは欠っ片っ！もありませんが、たっち・みー様は父として実に愚かですね」
「君はずいぶん彼女に入れ込むね」
露骨に怒気を増したパンドラズ・アクター。
怒りに同調するように、不動明王が金具付きの紐縄、不動顯索を振るいタブラを縛り付けようと迫ってくる。
これを受ければタブラ側の回避能力が大幅に下がり、後の明王のコンボ手順がほぼ確実に成功してしまうだろう。
さすれば負け、タブラは死ぬ。
だからタブラはここで切り札を使うことを決心する。
竜骨製の全身鎧。ある竜王の遺骸を素材に作り上げたその装備に、タブラはふんだんにMPとHPを捧げた。
「目覚めよ、朽棺（エルダーコフィン）の竜王（ドラゴンロード）！」

タブラの声が響くと同時に足元から巨大な影がせり上がる。
地下室の壁やら天井やらをぶち破って密室を大広間へリフォームしたのは恐るべき異形の怪物。
青白い腐肉で形作られた禍々しい巨竜の上半身だった。両翼の付け根から下は朽ち果ててしまっているが、圧倒的な存在感はなお揺るがない。
「ドラゴンゾンビですか」
「如何にも、特別製さ」
朽棺の竜王（エルダーコフィン・ドラゴンロード）
その名はかつてケイテニアス山に居を構えるアンデッドの竜王で、強力な始原の魔法（ワイルドマジック）を操った『真なる竜王』の一角。タブラが２００年前に口だけの賢者を扇動し、相打ちさせることでようやく仕留めることができたこの世界でも屈指の怪物だった。
今顕現させたのは、彼の遺骨で造り上げた全身鎧によってアンデッドとして使役しているだけの成れの果て。
しかし文字通り腐っていても１００レベル近い竜王種。強大なフィジカルは見事に健在だ。

「やれ」
骸竜の虚ろな双眼がギロリと不動明王をねめつけ、悍ましい唸りとともに大口が開かれた。
Ｇｒｒｒｒｒｒ!!　ＧＲＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＲ！
朽棺の竜王（エルダーコフィン・ドラゴンロード）の青白い火炎吐息。
膨大な負属性（ネガティブエナジー）の塊は物理的破壊力を伴わず、しかしあらゆる生なる者を蝕む猛毒である。
その極死の蒼炎の波がパンドラズ・アクターと不動明王を飲み込んだ。
そして瞬く間に不動明王は掻き消される。
が、眩い聖なる光が爆発するように輝いて、渦巻く蒼炎の波動を押し返した。
「『聖盾断層（アイ・ホーリーガード）！』」
光の中心から姿を現したのは純銀の聖騎士たっち・みーの写し身だった。
纏う全身鎧の名はコンプライアンス・ウィズ・ロー。かつてワールドチャンピオンであった全盛期たっち・みーが運営から記念で与えられた、神器を超えギルド武器に匹敵する最強の防具。

両手に握る盾と剣の名はそれぞれアースリカバーとコスモカリバー。これらもまたかつての たっち・みー の相棒たち。

パンドラズ・アクターによる奇跡の再現が、佐々木正義の最強の過去を復刻させたのだ。

それは佐々木正義の脳を吸ったタブラを相手にこの上なく皮肉なミラーマッチだった。

「コケ脅しでしょう所詮。君のそれは ぷにっと萌え のバフで無理やり再現しただけの、儚いハリボテだ」

パンドラズ・アクターの能力コピー再現率は80パーセント。

マタタビのコピーを相手取っていた時に気づけなかったということは、腕力と速力に1.25倍率の強力なバフをかけていたのだろう。支援能力特化の ぷにっと萌え をコピーして一時的に自己強化したのだと考えれば説明がつく。

ただし ぷにっと萌え のアレは5分の時間制限あるうえに、時間超過で一時的な行動不能に陥るという大きなデメリットがあったはず。

「スキルも満足に再現できない上に、残るタイムリミットは最長2分か。君が援

軍を呼んでいれば別だが」

仮に援軍を控えさせていた作戦であったなら、すでに狙えるタイミングは何度もあった。

それこそ本物のマタタビを控えさせていたならば、今にでも不意を狙いタブラの命は無かっただろう。

ならばパンドラズ・アクターは単独で襲撃してきたと考えるべきである。

賭けにはなるが他にタブラの勝ち筋も逃げ筋もないのだから。

「ええご安心を。お嬢様の剣を、タブラ様のような下賤の血で汚すなどっての外。お相手はわたくし一人で十分です」

彼のあけすけな開き直り方は嫌な女と瓜二つ。

綱渡りなタブラの心情を知ってか知らずか、パンドラズ・アクターは静かに構えを取った。

（あれは本物（たっち・みー）か？）

タブラは思わず息を呑んだ。馬鹿げた思考だとわかっていながら、タブラの心の純粋な部分がパンドラズ・アクターを たっち・みー と誤認したのだ。タブラの中

の佐々木正義が彼をマタタビだと確信してしまったのと同じように。
本物のマタタビどころではない、何かもっと悍ましい存在を自分は相手にしていたのではないか。
ブレインイーターとして生まれかわって以降かつてないほどタブラの背筋は強張った。
だから時間稼ぎと彼が何者か見極めるためという理屈でもって、タブラは己の体ではなく成れ果ての竜王に指示を飛ばした。素直に言えば臆病風以外の何物でもない。
「滅せよ朽棺の竜王（エルダーコフィン・ドラゴンロード）！」
Grrrrrrr!! GRAAAAAAAAAAR！
竜王の成れ果てが咆哮を飛ばすと同時に、応えるように聖騎士の足元から獣骨の群れが沸き上がった。
かつて四足の肉食獣であった彼らの正体は、この旧ギルド：ネコさま大王国に仕えていたNPCにして、ギルド武器破壊によって魔神へと堕ちそのまま死したパーミリオンの同胞だ。

パーミリオンの顰蹙を買うから今まで彼らの直接利用は避けてきたが、今生の別れを済ませて今更なり振りをかまうほどの繊細な良心は持ち合わせがない。あるいは持ち合わせていれば佐々木正義の脳液を啜るなどという愚行を侵さず、今のような惨状を招くこともなかっただろうが。

アンデッドとして歪に息を吹き返した８頭の獣骨達はレベルに換算して70強。肉が削げ落ちている分俊敏性は生前をも凌ぐだろう。

それらと息を合わせ、巨竜の上半身が腐った両椀と両翼で蛙飛びのように聖騎士に向かって飛び掛かった。

アンデッドの奏でる四面楚歌。いかな最強聖騎士の写し身と言えど手こずらないわけがない。

タブラの超知覚は遠方からパンドラズ・アクターの動きを見極める。そして再び息を呑んだ。

（なんだあの動きは）

八方から迫る瞬足の獣骨たちに満遍なく反応しながら時折振り下ろされる骸竜の一撃を危うげなく防いで弾き返す。

その一連の剣捌きと立ち回りは、たっち・みー の超人的な堅実さとマタタビの天才的な反射能力が融合したかのような武の極地にあった。

一対一の立ち合いにおいて最強を誇るたっち・みー、対集団戦を得意とする異能の怪物マタタビ。アレはそのどちらにも不可能な動きであり、ブレインイーターとしてこの世界の数多の達人を吸収したタブラ・スマラグディナにだって難しい。

難しいのだ。不可能ではない。

「……そうか」

タブラ・スマラグディナは理解するとともに戦慄した。

正体不明の化け物は種明かしされれば興が覚めるのが相場だが、この眼前の敵は例外らしい。

結論を述べよう。

パンドラズ・アクターはタブラ・スマラグディナに変身し、ブレインイーターの「脳食い」によってマタタビの脳液を吸収した。

そしてタブラの中の佐々木正義が期待する娘としてのマタタビの姿を、創造主モ

モンガ譲りの天才演技で再現したわけである。
更にはマタタビの記憶とタブラ越しに佐々木正義の剣を触れることで、最強聖騎士たっち・みーの戦闘技能すらその身に再現するに至った。
彼の名前はパンドラズ・アクター。
その名の意味は神からすべてを与えられた奇跡の役者。
あるいはマタタビと言う名のパンドラ(災厄の乙女)が遣わした宿命の名優。
我ながら縁起でもない名を付けてしまったものである。

独自設定
◆オーバーフロード現象
過剰な「信じる力」によって世界を騙し「勘違い」させることで因果律操作や物理法則の著しい改竄を引き起こす現象。

周囲の過剰な思い込みによって虚像が現実化する因果律操作タイプ、そして研ぎ澄まされた精神力で物理法則を突き破る物理法則破壊タイプの２タイプがある。

●語源

・スルシャーナやアインズ様の種族オーバーロードｏｖｅｒｌｏａｄ

・溢れるという意味のｏｖｅｒｆｌｏｗ

・騙すという意味のｆｒａｕｄ

●発現者

・アインズ様→ＮＰＣや現地民からの信仰で完全無欠の絶対支配者に

・スルシャーナ→上に同じ

・アルベド（当ＳＳ時空）→アインズ様への愛によってＮＰＣの【存在規定】を突破。本来は認識できない現実を知覚する。

・佐々木正義（当ＳＳ時空）→熱くたぎる正義の心と家族愛によって知覚力増大と疑似的な未来視。

・エンリ・エモット（原作時空）→覇王将軍
・ブレイン・アングラウス（原作時空）→爪切り

モノローグ：影道化の告白

2話連続投稿につき注意です

パンドラズ・アクターはマタタビのことが嫌いだった。
彼女の性格は最悪だから、その気になれば嫌いな部分を百個は軽く口にできる。
ただ今強く思うのは、彼女自身の救いがたい頑固な独善性である。
彼女は自分の中の正しさを決して曲げない。
劣等感にまみれて卑屈な彼女でありながら、しかしその本質はどうしようもなくエゴイストだ。
たとえ愛する両親や、敬愛し大恩もあるアインズ様の言葉であろうとも、彼女はそれらを羽毛の如く軽んじて独善を成そうとするだろう。
家族のためだと判断したから実家から家出をしたのだ。

アインズ様とペロロンチーノ様のために、たかがＮＰＣでしかないシャルティアの身代わりになったのだ。
両親や不在のギルドメンバーたちの意思を慮って、起こるはずだったスレイン法国との衝突を回避させるように働き掛けたのだ。
シモベやアインズ様の心を守るために、両親の不遇の死をナザリックに対し隠滅したのだ。
ユグドラシルにおけるモモンガ様の在り方を誰より愛したからこそ、許されざる野望を抱いたアルベドの憎悪を黙認したのだ。

彼女の言動を擁護するつもりはない。
どれだけ美しい行為であれ、結局は身勝手で碌でも無いやつだと心底思う。
しかしきっと、パンドラズ・アクターの抱く嫌悪以上にマタタビはマタタビを憎んでいる。
そしてだからこそマタタビは、己と対極の精神を持つアインズ様の在り方を心底から崇拝しているのだ。

和を重んじる穏やかな気質を。
妄執の怪物となり果てるほどの執着的な愛情を。
周囲の期待に応えようとする真摯な虚飾性を。
身内を重んじる当たり前の優しさを。
世界を躊躇なく蹂躙する残酷なまでの厳格さを。
マタタビがアインズ様に抱くのは溺愛の如き信仰であり、所詮は支配者という器に対し忠誠を強制されているだけのシモベ達とは本質的に似ても似つかない。
そんなマタタビが今、パンドラズ・アクターの創造主への裏切りに憤っている。
彼女の正当なる怒りは、この上無く皮肉めいた出来事であると言える。
『私と違って、あの人は凄い。あなたもそう思うでしょう？
なのにどうしてあなたは私の為にアインズ様を裏切るの？』
黒い少女は精神支配アイテムである『黄銅の振り子』をかざしてパンドラズ・アクターにといかける。
困惑と強烈な義憤に彩られた威圧が、しかし酷く心地よい。
『どうして？　どうして？　教えてよ。ねぇ、アクターさん』

無論マゾヒズムの感情なのではなくて。
ただ彼女の怒りが、偉大なる創造主へ向けられた最上の敬愛によるものだからである。
彼女がパンドラズ・アクターにとって最も好ましい感情を抱いているからである。
『ねぇ？』

振り子が揺れて意識が揺らぐ。
ドッペルゲンガーとして素の状態耐性が貧弱であるパンドラズ・アクターは、閉ざしたい本心に反して口元が緩みそうになる感覚を覚える。
精神支配による強制尋問。
ついぞ【傾城傾国】の支配下に置きながらパンドラズ・アクターがマタタビに為さなかった一線を、彼女はいともたやすく超えるのだ。
こんな理不尽があるものかと逆恨みしながら、パンドラズ・アクターはいつものようにマタタビへの嫌悪を募らせる。
鎖に縛られたパンドラズ・アクターは、精神支配効果によって割りたくもない口

を割らされた。
どうしてパンドラズ・アクターが３つもの裏切りを為したのか。
その原因を端的に言えば、己がマタタビに魅了されたからという忌々しい事実に集約される。それが魔法的なチャーム状態でないことは語るまでもない。
パンドラズ・アクターは己と彼女の道行きを振り返った。
◆ｅｉｎｓ
『皆が戻ってきてくれたらなあ……』
ヴェールのかかった記憶の中で、創造主は誰に言うでもなく小さく零したねだりごと。
宝物殿に立ち尽くすパンドラズ・アクターだけがその呟きを耳にした。
それはこの世界に来る前で、マタタビがナザリックに訪れる前の記憶だ。
だから実のところ、マタタビに告口されるまでもなくパンドラズ・アクターは知っていた。ナザリックに属する下僕の中で、誰より深くかの絶望的な真相を理解していた。
ある意味において、既にギルドアインズ・ウール・ゴウンは崩壊しているという

ことを。

ユグドラシルからお離れになられた至高の御方々が舞い戻ってくださる可能性は、実際のところ極めて低い。

だから己の真なる役割とは宝物殿の管理責任ではなくて、この地を去られた至高の御方々の姿を記録することだった。

物証としては、最奥にある霊廟の存在が何より全てを示している。並び立つ御方々の模造を覗き見たデミウルゴスは狂気に片足を突っ込んで著しく心を病んだが、パンドラズ・アクターにとってみれば……ただのつまらない常識だ。

だからこそ、嬉しくないわけが無かったのだ。ナザリックで孤独に墓守を為す寂しがりやな創造主の元に、マタタビが訪れてきたことが。

ましてや聞くに、身を挺して守護者シャルティアを庇うほどのお人好しときたではないか。

アインズ様が彼女を救出する作戦を打ち立てた時、後詰を任されたパンドラズ・アクターはどれほど心を滾らせたことだろうか。

ところがいざアインズ様と彼女の死闘を前にすると、場違いにも思わず見惚れてしまったのだった。

美麗な剣技から始まり、狙撃術、拳術、魔術スクロール、投擲術、忍術。至高の41人から盗み得たあらゆる技術を、多彩で潤沢な魔道具によって惜しみなく駆使する彼女の戦闘スタイルは、ある意味においてパンドラズ・アクターの目指す完成形だった。

だから彼女の在り方に、パンドラズ・アクターは身が狂うほど嫉妬した。してしまった。

閉ざされて、活躍の機が無い宝物殿霊廟の武器達や無数のアーティファクトたちが、もしも己の手で真価を発揮できるのならどれほど喜ばしいことか。できるなら、彼女みたいに自由に、縦横無尽に暴れまわりたい。心底羨ましいと、思ってしまうのだ。

だけどもパンドラズ・アクターが真の意味で魅入られたのは、彼女の心の在り方

だった。
『洗脳状態のまま生き続けたいとは流石に私も思わないよ。
別にあなたさえ殺せれば、私の安否は関係ないんだ』
精神支配にかけられて尚、心中と言う形で抗おうとした鉄の意志。
『ふざけんな！　万一あんたが死んだなら、ナザリックの連中はどうなるんですよ！　もっと自分を重んじろ。このクソ骸骨が!!』
精神支配にかけられて尚、心底からアインズ様を慮り続けた、彼女だけが持つ思い遣り。
そんな彼女の放つ魂の輝きを前に、パンドラズ・アクターの目と脳は焼けただれて零れ落ちてしまったのだ。
『あんた、バッカじゃねぇの』
だからパンドラズ・アクターはアルベドの提案に乗り精神支配で彼女を縛る決断を選んだ。
とはいえまさかアルベドの姦計通りにギルドメンバーと戦わせるなどもってのほかだ。

ただマタタビが、ナザリック地下大墳墓から離れないよう縛り付けるためだけに【傾城傾国】を悪用したのだ。

これこそが創造主アインズ・ウール・ゴウンに対して為した、パンドラズ・アクターによる第一の反逆であった。

◆ｚｗｅｉ

一つ目の反逆はアインズ様の無許可に【傾城傾国】でマタタビを束縛したことであるが、二つ目の内容はその逆であった。

『わ、私は何も知りません。鎧のことも、シャルティアさんを襲った連中のことも、何も覚えていないんです。ほ、本当ですよ？』

マタタビが重大な秘密を隠していることを知ったうえで、敢えてパンドラズ・アクターは彼女の口を割らせなかった。

【傾城傾国】の洗脳効果で素直に口を開かせればパンドラズ・アクターは彼女の全ての知識を得ることができただろう。先に起こる事件も事前に防ぐことも出来たで

あろう。にもかかわらずそうしなかった。

『それに、これでも私は信頼しているんだよ。アクターさんもアルベドさんも、たとえ本当のことを知ったところでアインズ様に不利益になるような真似はしないだろうって』

アインズ様のためという建前を述べるのであれば、パンドラズ・アクターはマタタビの全ての行いを信用していたのだ。

仮にこの世の全てがアインズ様を裏切るとしても、マタタビだけは味方であり続けるだろうと。だからパンドラズ・アクターは彼女に何の情報も求めなかった。

それどころか彼女の支配権がアインズ様に渡ることとなった際、アルベドに口添えして妨害まで働いた。

そしてそれが間違いではなかったのだと、今でもなおパンドラズ・アクターは信じている。

結果的に裏目に出てしまったにせよ、マタタビの黙秘する判断はこの上なくナザリックを慮った決断であったから。

だからマタタビという人物の在り方が損なわれること、アインズ様にとってこれ

以上の損失はあり得ない。
そのように確信している。
これが二つ目の反逆である。

◆ｄｒｅｉ

そして三つ目の反逆は、パンドラズ・アクターただ一人でタブラ・スマラグディナへの暗殺を企てようとしたことである。
白金の竜王との手続きを済ませたのち、マタタビとともに佐々木夫妻の墓を開いたその時。
『どうかなさいましたか』
『頭が軽い』
パンドラズ・アクターはタブラ・スマラグディナが犯した悍ましき大罪を理解してしまった。
タブラが佐々木夫妻の死に関わり、あまつさえ御遺体を食んだという最悪の事実を知ってしまった。

許せるわけがない。

百歩譲ってアインズ・ウール・ゴウンからお離れになられたことも、異世界にて見知った佐々木夫妻の力にならなかったことも目を瞑ろう。終焉した関わりに拘泥するほうが少数派なわけであるから。

しかし、かつての仲間を己が都合で手にかけ、ましてやその者の死体を啜り食む外道なんぞをどうして許すことができようか。

こんな惨状、今までナザリック地下大墳墓を維持し続けていた己が創造主があまりにも報われない。

そして歪ながらも健やかに親の安寧を願っていたマタタビにとって、この上ない最悪の現実だ。

だからパンドラズ・アクターは即座に暗殺を決意した。

アインズ様に全てが知られる前に迅速に、かつマタタビの手を復讐の血に穢れさせないよう一人っきりで。

佐々木夫妻の墓前にてタブラ・スマラグディナへの復讐を固く誓ったのである。

そのために最初に為さねばならないのは、真横にいるマタタビを無傷で無力化す

ること。

『お覚悟を』

だからパンドラズ・アクターは即座に弐式炎雷に変化して、マタタビの首筋に鋭い手刀をきりこんだ。

けれど当たり前のようにマタタビは、弐式炎雷の不意打ちに反応する。

端から勝てる勝負だとは思っていない。肉体的にも心情的にも。

ましてや不意打ちなどという、彼女の土俵で戦ってはなおのことだ。

マタタビは鮮やかに背後から忍び寄る手刀を掴み返し、捻りながらの背負い投げ。

地面にたたきつけてから、パンドラズ・アクターの頭部に『スタンガン』を押し付けて電撃を流す。

脳への直接ダメージにより弐式炎雷への変身は解除された。

変身解除されたドッペル・ゲンガーは雑魚そのものだ。

おそらく神器級アイテムであろう『拘束錠』で縛り付け、彼女ののスキル『魔力泥棒』でMPをゼロまで抜き取られた。

結局のところ見事見事に返り討ち。

無力化されたのはパンドラズ・アクターのほうである。

『……できるわけないでしょうが。頭良いのにそんなこともわからないの？』

できる出来ないの問題ではない。

これは誰にも覆せない感情論なのだ。

アインズ様の意向に背こうと、タブラへの単独強襲が無謀であろうと、マタタビの生け捕り無力化など不可能であろうとも。

マタタビと言う存在がナザリックの舞台に降り立って以降、まるで止まっていた時が動き出したかのように多くの者たちが変化していった。

アインズ様はもちろんのこと、アルベドやデミウルゴスやシャルティア・ブラッドフォールンなどの階層守護者達。プレアデスや一般メイドの使用人たちもそうだ。

目には見えないが、無視も出来ない大きな内的変質がマタタビとの関りによって引き起こされていることは間違いのないことである。

その最たる代表例こそが、パンドラズ・アクター自身に他ならない。

◆ｖｉｅｒ

彼女の第一声は呆れ果てたような枯れた呟きだった。

『それがアクターさんの答えですか』

マタタビはティーテーブルの椅子にゆったりと腰かけながら、縛られたパンドラズ・アクターの赤裸々な自白を聞き届けた。彼女が自分用に淹れたナザリックの高級茶は、口をつけることなく冷めてしまっていた。

『……正直信じられないのですけど』

辟易しながら改めてマタタビは、５円玉に糸をくくり付けた見た目の精神支配マジックアイテム『黄銅の振り子』をパンドラズ・アクターの前で揺らしてみせる。

ドッペルゲンガーの素の状態異常耐性は、レベル１００の風上にも置けないほど脆弱だ。

【傾城傾国】のような強力なアイテムでなかろうとも、このようにして割りたくも無い口を開かせるのも容易い。

これでは本当にいつぞやの精神支配騒動の顛末の、真逆の立場ではないかと思う。

どんな理不尽な因果であるか。
『今言ったこと、嘘じゃないのね』
『……アインズ様の御名に誓って』
『裏切者がよくおっしゃるわ』
『お嬢様にだけは言われたくありません』
空元気に皮肉を返しながら、パンドラズ・アクターは彼女の言葉を心の底で首肯した。
我ながら本当に何をやっているのだろうか。
己はナザリック地下大墳墓に存在するシモベの中で、唯一アインズ様の被造物として生み出された存在だ。
他の御方々を創造主とするシモベ達と違って、純粋にアインズ様ただ一人に尽くすために存在するのだ。
完全無欠でなかろうと、人並みに愚かであろうと、何より美しく慈悲深い最高の主人にして愛すべき父。そんな御方をパンドラズ・アクターは3度も裏切った。
よりによってマタタビという最悪の存在のためにである。

こんな、小生意気で口が悪く態度が横暴で人の忠言を聞き流し集団の和をズタズタに引き裂く協調性のかけらもない社会不適合者で一時の感情的判断で周囲の足を徹底的に引っ張りまくり、ギルド破壊という最悪の悪趣味を嗜み潤沢な魔道具を蓄えた最悪の簒奪者で、至高の41人の輪から追放されながら盗み得た技術を悪辣に駆使し、誰よりアインズ様を深く理解し尊敬していながら与えられた恩義を容赦なく仇で返し、パンドラズ・アクターやほかのシモベ達の心を容赦なく揺さぶる最悪の存在のためにである。

『冷静沈着なアクターさんらしくありませんね。頭の中がぐちゃぐちゃだ』

パンドラズ・アクターの心根を見透かすように、マタタビの透んだ瞳が細められる。

誰のせいだという、沸き上がる憤りを喉元で精一杯に飲み込んだ。

『……』

誰のせいかと言われれば、マタタビの仕業ではなくパンドラズ・アクター自身の

問題なのだから。アインズ様の御手で知恵者として創造されておきながら、信じられない体たらくだ。

この世に存在することすら無意味に思えて、パンドラズ・アクターはマタタビに願った。

『殺してください、どうかあなたの手で』

正しくいられないのなら、いっそ終わってしまいたかった。

そしてマタタビの手で引導が渡されるならば、間違いだらけの彼女が一歩『正しさ』に近づけるのだから、我ながら上等な死に様だと考えられた。

しかしパンドラズ・アクターの細やかな願望は、頬に叩きつけられた柔らかい平手打ちによって否定される。

『私がそんな戯言に付き合うと本気で思ってるの？』

『……返す言葉もございません。お嬢様には叶えようもない過ぎた願いでした。』

甘ちゃんなマタタビがパンドラズ・アクターを手にかけるなどありえなかった。

我ながら本当に思考回路が終わっている。

『では……それならば……』

排泄物が詰まった脳味噌を絞り込むようにやけくそで頭を回転させた。
そして十数秒考え込んで、ようやく抽出できたのは便器の小便にも劣る疑問文だった。
『私はどうしたら良いのでしょう』
『したいようにしなさいよ。アクターさんは自由なんですから』
『はは』
パンドラズ・アクターの深い懊悩を一瞬で跳ね返すマタタビ。
その容赦のなさに、思わず乾いた笑いが口を衝いた。
反してマタタビは真剣なまなざしでパンドラズ・アクターをじっと見据えた。
『シャルティアさんもセバスさんもデミウルゴスさんもだれもかも、あなたたちNPCの皆様方が間違いを犯す原因は、自分が何者かわかっていないからです』
『何者か？　そんなものは……』
至高の御方に使える忠実なるシモベ、それ以外のアイデンティティをパンドラズ・アクターは知らなかった。きっとナザリックの誰しもが同様だろう。
『違います。あなた方はそんな高尚な存在ではない。その認識差こそが我々をこの

地に招いた何者かの大いなる悪意であって、救いがたく馬鹿々々しい『勘違い』ってやつなのですよ』

『……勘違いですか』

忠実なるシモベ、ではない。高尚な存在、ではない。

本来は怒るべきなのだろ。檄を飛ばすべきなのだろう。否定するべきなのだろう。

しかし今のパンドラズ・アクターにはできなかった。だって心当たりが多すぎる。

マタタビの言い放った致命的なフレーズによって、パンドラズ・アクターは己の内の枷が外れるように感じた。

『私から見てあなたたちＮＰＣの皆様方は、まるで――』

『――まるで褒められたがりの、考え無しな幼子のよう……違いますか？』

『そこまで言うつもりはなかったんですけど』

マタタビは大きくは否定しなかった。それから彼女ははふんぞり返って冷めた紅茶を不味そうに啜る。

その冷めた表情は直情的ですぐ表情に出る彼女にしては珍しく、なぜかアインズ

様の御姿が重なって映った。

『じゃあ、どうぞ続けて？』

パンドラズ・アクターは数秒の間をもって言葉を整理し、やがてゆっくりと口を開いた。

思考の淀みはすっかりと水底に落ち着いていた。

『我々は御方に尽くす為に生まれてきたのではありません。御方に尽くすことによって、己の心を満たす為に存在しているのです』

『うん？　自分が満足するために行動するのは、誰だって当たり前のことですよね』

『おっしゃる通り当たり前です。例えば人々が美食を求めるのは美食そのものが目的ではなく、味覚と満腹感などから得られる幸福感を求めてのことですから』

純粋に『美食』という概念を欲する者など存在しないように、『尽くすためだけ』に行動するシモベなど存在しない。

本当の意味で尽くす為に生み出された存在があるとすれば、それはデスナイトのような機械的に目的のため行動する召喚獣を言うべきである。

彼らの行動原理には、ナザリックのシモベ達のような欲求的判断は介在しない。ある意味忠誠の理想形とすら言えるだろう。

『ですが我々はその第一歩の思考を間違えていた。我々の中にある不可解な未熟さがそのような過ちを引き起こしたのでしょう』

『……まぁいいでしょう。続けなさいよ』

マタタビは何かを言いかけて、結局何も言わずに話の先を促した。

『意志あるものは目的のためでなく、目的の先に得られる感情を求めて行動します。子供でも理解できるような簡単な理屈です。しかしそれができなかったからこそ、ナザリック大地下墳墓のシモベ達は間違いを犯し続けました』

パンドラズ・アクターは自らの愚かさを噛み締めながら、再び話し始める。

『どんな知恵者でも自己理解をおろそかにすれば失敗します。デミウルゴス殿は

『活躍したい』という欲求を暴走させ、御方の些細な言動から世界征服計画なぞを拡大解釈してしまいました。

シャルティア様は御方の失望を恐れたがゆえに、功を焦って漆黒聖典に無謀な突貫を

してしまいました』

自分たちは機械ではないのだ。自由意思によって感情で動く限り、非合理的な間違いは犯しうる。

誰が言ったか『白を黒と言えば黒になる』なんて、とんでもない欺瞞である。

『忠誠心など、結局それは無数にある感情の大きな一つでしかありません。尽くせる行動にも限界があります。

いくらアインズ様がナーベラル・ガンマに人間への社交性を求めようとも、生まれついての人間嫌いという悪感情を排することは困難です。

また一秒一刻常に忠誠を意識しながら行動できるわけでもありませんので、セバス様がツアレ・ニーニャを拾ってきてしまったような失敗は今後も起こり得るでしょう。そして何より――』

忌まわしい、救いようのない最悪の醜態。口にするのも憚られる、中途半端で滑稽極まりない己のあり様。

どんな凄惨な語彙で語ろうか思案するより先に、マタタビはパンドラズ・アクターの口を右手で塞いでしまった。

『アクターさんやアルベドさんがアインズ様の意に反したのは、あの人の意志よりも己の判断を優先したからです。他のいろんな失敗と一緒にしてはいけません。

アクターさんは知っているのでしょう？　アインズ様は完璧じゃない。とっても優しいし、尋常じゃないくらい先を見据える賢い人ではあるけれど、視野は狭いし、私やあなたたちと同じように間違いを犯すの。お二人の行動が正しいか間違ってるかなんて、誰にも決めることはできないの』

マタタビは優しく微笑んだ。その笑みはまるで母親のように温かく慈愛に満ちたものだ。ただすぐにパンドラズ・アクターは己が母親を知らないことを思い出した。

『似たようなこと前にも言ったよね？　もう忘れたの？』

そうだ、自分は自分の判断でアインズ様に敵対した。

アインズ様のためにマタタビを【傾城傾国】で縛り付けたし、アインズ様のためにマタタビの自由を守り通したし、アインズ様のためにタブラを殺す覚悟を決めた。

それは間違いなく己の恣意的な意志によるものなのだ。ならば、今己の胸を締め付けるこの痛みの正体は一体なんだ？

どうして今更、アインズ様への反逆に後悔なんてするものか。葛藤なんてすでに通り越した境地にあるというのに。

一つの結論に至り、マタタビがかつて仮定した法則の名を口にする。

『……【創造主への優先】』

パンドラズ・アクターは生まれて初めて、自分の心が正体不明な何某かに絡めとられている感覚を知覚した。

心の底から怖気が走り、身震いのせいで鎖がガチャガチャと揺れ動く。

マタタビはパンドラズ・アクターの顔に当てていた手をどける。

その表情にはどこか晴れやかな、憑き物の堕ちたような明るい色合いがあった。

あるいは己の心情変化から感じているだけなのか定かではない。

◆

『どうしたら良いでしょうかと、アクターさんは聞きましたよね』
マタタビは紅茶を飲み干すと、ソーサーの上にカップを置いた。
『自分の行動の意味を理解したあなたには、３つの選択肢が見えるはずです』
『３つですか』
マタタビは鷹揚にうなずく。
そして彼女は自らの指を三本立てて見せた。
『シモベとしてアインズ様の意向に従順に尽くすのか。それとも御自分のお考えを突き通しアインズ様をタブラから守るのか。あるいは……』
そこで言葉を切り、マタタビはパンドラズ・アクターの目を覗き込むように見つめてきた。
あるのは、全てを受け入れて許してくれるような慈悲深い眼差しだ。
『あるいは私を選んで、私と一緒にナザリックを滅ぼしてしまうか、です』

マタタビはそう言って悪戯気に微笑んだ。パンドラズ・アクターは自らの鼓動が高鳴ったのを自覚する。

それは期待にだろうか？　それとも不安にだろうか？

『……ハハハ』

ナザリックを滅ぼすなどという不敬極まる最悪の野望を耳にして、怒りや恐れ以外の感情を抱く自己の心の在り様が不思議でならない。

きっと心のどこかでマタタビに対するポジティブな期待感を忘れられずにいるから、こんな反応をしているに違いない。

どうせまた傍迷惑な優しさとか碌でも無い善意の暴走によってそのような結論に落ち着いたのであろうと、パンドラズ・アクターは確信しているのだ。

アインズ様という神に対して己は救いようもないほどに背信的で、悪の道を指し示すマタタビはどうしようもなく悪魔的だった。

『アクターさんがこれから選ぶ決断は、ナザリックとアインズ様の今後のすべてを大きく左右するでしょう。容易に決められるものではありません。ですので私からの恩返しを兼ねて、アクターさんにはプレゼントをお送ります』

マタタビは袖下から洗脳系マジックアイテム『黄銅の振り子』を取り出してパンドラズ・アクターの眼前で左右に振るった。
振り子はゆっくりとした速度で、円を描くような動きで右回りに回転を始める。
それから信じられない文言をマタタビの口が繰り出した。

『「タブラ・スマラグディナに変身して私の脳髄を啜りなさい」』

パンドラズ・アクターは驚愕に大きく目を見開く。
ありえない。彼女は今、パンドラズ・アクターに己の記憶と経験の全てを差し出そうとしているのだ。そんな行為、自殺と変わりが無いではないか。
パンドラズ・アクターは必死になって抵抗しようとするが、その意思とは裏腹に

体は勝手にタブラの姿へと変わっていく。憎き仇の姿へと。
反論に口を開くこともままならず、パンドラズ・アクターは憤怒の視線を込めて心の中で盛大に叫んだ。
――何故?!　いったい何を考えているんですか?!!
『何故ってそりゃあ……』
声にならない言葉を、しかしマタタビは当然のごとく聞き入れてから鷹揚と答えた。
『アクターさんがしっかり考え決断できるように、そして選んだ選択肢を確実に遂行できるようにと、ささやかながら御膳立てさせていただく次第です』

その返答を聞き、パンドラズ・アクターは悟る。
彼女は本当に自分のために記憶の全てを捧げるつもりなのだ。
ただただ狂気の沙汰である。
『あなたには今から憎きタブラ・スマラグディナに変身し、私の脳味噌を貪っていただきます。

そうすれば私は脳味噌すっからかんの何もできない植物人間。回復魔法をかけない限りは無防備のまま一切身動きもとれません』

マタタビは再度三本指を突き立てる。

『さっきも言ったとおりですが、アクターさんがそこから選べる選択肢は主に３つです。

一つは全てをアインズ様に委ねること。私の記憶にはナザリックの存在を揺るがす重大な秘密が眠っています。

これ以上アインズ様に逆らうことが嫌ならば、無力化されている私と一緒にアインズ様の〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉を受け入れることで、アインズ様の御判断に全てを委ねることができるでしょう。

アインズ様のお役に立てる従順なシモベであろうとするならば、これが一番正しく賢い選択です』

『二つ目は、先ほどの決意通りにあなたが一人でタブラへ復讐を為すこと。

このタイミングで私から記憶を奪い取ったアクターさんならば十分に可能です。

私を脳カラ状態のまま放置しておけば、

アインズ様が何も知らないこのタイミングであれば、
私の記憶というアドバンテージを最大限利用して、
タブラを一人で暗殺できるでしょう。
全てを一人で背負いたいと強く願うのならば、この選択を進むといいでしょう』
『三つめ目は、私と共にアインズ様を裏切って、ナザリックを滅ぼす最悪の共犯者になることです。計画の詳細は私の脳味噌を吸ってご理解ください。
アクターさんが私の内面を全部理解したうえで、それでも私の意志を選んでくれたならば……正直とても嬉しいです。身勝手ながら、どうか期待させていただきますよ』
まるで初恋の少女の如く、マタタビは照れたような微笑みを浮かべた。今成そうとしている蛮行を前にあまりにも自然的すぎる所作に悍ましさすら覚える。
徹底的にパンドラズ・アクターの意志を無視して、同時にパンドラズ・アクターの決断だけを重んじる。
『わかりますか。つまり私の選択とは、あなたの意思に全てを委ねることです。これが今の私にできる精一杯の恩返し。

私の命をつなぎ留め、私の意志を誰より信じてくれたアクターさんへの精一杯の祝福です。
アインズ様を選ぶか、自分自身を選ぶか、それとも私の意志を選ぶか。どうか一番望ましいものをご自由にお選びくださいな』
それはある種の暴力だと言えた。
マタタビはパンドラズ・アクターの思考を蹂躙するように、その選択肢を押し付けてくる。
だが、それでいて彼女の瞳はどこまでも優しく、慈愛に満ちたものだった。

パンドラズ・アクターの拘束錠をゆっくりと解いてから、その首裏に両手を回すマタタビ。
唇が触れ合うほどに顔を近づけ、彼女は囁くように言う。
『私が誰かにキスするなんて……夢にも思わなかった』
まもなく柔らかい繊細なものが触れ合って、異形ブレイン・イーターの触手が喉奥から彼女を貪ろうとせりあがる。

しかしマタタビは自らの舌を絡めながら、容易にそれを受け入れた。

そしてパンドラズ・アクターは知ることになる。

ナザリック地下大墳墓とユグドラシルのすべてを。アインズ様と至高の41人の真相を。

マタタビの生涯全ての経験と、傲慢で強欲な深い愛を。

実際のところパンドラズ・アクターには一切の選択の余地なんてなかったのだ。

何を選ぶかなど考えるまでもないことなのだから。

偽物対決

2話連続投稿につき注意です

この先色々な読者やキャラの期待を踏みにじった展開が続きます。

作者は完璧に自己満足で開き直ってしまうので、それでも読み進める御方はどうかお覚悟を

支援能力に特化した ぷにっと萌え様 の切り札スキル『血の契約』は、速力と筋力を1・25倍に強化する破格の力をもたらしてくれる。

これが、パンドラズ・アクターがタブラ・スマラグディナを欺いてマタタビの演技を続けられた要因の一つだった。

しかしユグドラシルのゲームシステムは、強大な力に対して相応の代償を支払わせるのが常だ。

『血の契約』の代償は時間制限。

バフ付与から5分間は対象者に恩恵をもたらすが、それを過ぎると以降10分間は全能力20％ダウンと状態異常耐性の低下を引き起こしてしまう。

つまり諸刃の剣なのである。

（……現在戦闘開始から三分と十数秒、残りは約一分半）

しかしパンドラズ・アクターは焦ることなく、状況に適応し続ける。

（取り囲む8頭の70レベル近い骨畜生どもは速力特化。ドラゴンゾンビは90レベルほどの身体性能）

タブラから引き離すように己を取り囲み、四方八方から跳弾のように襲い来る8体の高レベルネコ型スケルトン。

そしてドラゴンゾンビの負属性吐息による範囲攻撃とのコンビネーションは、簡単に凌ぎ切れるものではない。

「ちっ！」

いくらアンデッドに相性の良い聖騎士たっち・みー様の姿をお借りしようが、それだけではまだ足りない。
後衛に引っ込んでしまったタブラ・スマラグディナまで、あと少しで届かない。
タイムリミットは刻一刻と迫っている。
しかし、届かないならば足すまでだ。
足しても足りないなら掛け算だ。
不要な自我を引き算し、そして演じてみせよう。パンドラズ・アクターの考え得る完全無欠の最強戦士を
つまり、考えられる理想の姿はマタタビと たっち・みー様のスタイルの融合。

◆

意識を切り替えた次の瞬間から、戦況は一変した。

あれほど素早かったネコ型スケルトン達の動きが、ひどく緩慢に感じられたのだ。
己の内に宿る黒い少女の影法師が、悪戯気に指をさした。
『ほらここと、そことあそことあっちとそっち、むこうにも』
そして見えてしまったならば、あとはその軌道上に一分の狂いなく剣閃を振るえばいい。
何せ一瞬だから、時間制限などあって無いものだ。
骨畜生の群れが、聖騎士の鋭い剣技によって瞬く間に切り崩されていく。
それはさながら聖騎士と骨畜生の舞踏のような光景。
アンデッドの放つ死臭が満ちる死の舞踏会場において、唯一つ清浄なる存在として聖騎士は舞い踊る。
まもなくネコ型スケルトン達はことごとく、亡骸の山へと還って逝った。
つづいてようやく動き出すドラゴンゾンビ。だが覚醒したパンドラズ・アクターを前には遅すぎる。
単なる肉体能力以上に、動体視力の処理速度がパンドラズ・アクターとは天地の差だ。

ＧｒＡＡＡＡＡＡＡ!!!

強大な竜爪が風を切って豪快に振り下ろされるが、パンドラズ・アクターは既に裏手に回り込んでいる。

そしてアインズ様より与えられた高度な戦闘頭脳を回転させた。

（死体製アンデッドは元の肉体の損傷部位が弱点となるはず……）

ドラゴンゾンビの体表を舐めるように見回して、幾ばく古傷から辿るべき剣筋を見定める。

あとは再び、理想とする軌道に乗せて力強く刃を奔らせた。

聖剣がこじ開けた古傷に神聖属性の魔力が流れ込み、腐肉が焼け溶けて切り裂かれる。

弱点部位、しかも神聖属性が付与された聖剣による斬撃だ。いかに真なる竜王を贄に作り出した90レベルクラスのアンデッドといえど無事では済まない。

ＧＩ!?ＧＩ！ＧＩ!!Ａｈｈ！

狼狽し痛みに悶えるドラゴンゾンビ。アンデッドとして感情を抑制されてなお余

りある激痛と恐怖に押しつぶされて、大口を上げて絶叫を上げた。
「……隙だらけです」
こうなればもはやパンドラズ・アクターにとって眼前の相手はまな板の上の肉塊に等しい。
故にパンドラズ・アクターは冷徹に剣を振るう。
まずは両翼を切り落とし、続いて前足２本を切断し、とどめの一撃で脳天を叩き割る。
ただただ容赦無く、作業のような流れでドラゴンゾンビの巨体を細切れにした。
実に他愛ない。
そして
「いつまで呆けておられるのですか、タブラ様」
「……あ、あ……あ」
貴重な己の手駒が解体されていくのを、動揺のまま傍観したタブラには呆れかえるほかなかった。
死霊使いとしてアインズ様とは比べようもないほど愚かであり、戦士としての心

構えは佐々木正義に遥かに劣っていて、かと思えばいつぞやのマタタビの如く俊敏に逃げ腰を立てるわけでもない。

愚か、愚か、実に醜い。幾千の戦士や魔法詠唱者の脳髄を啜り彼らの経験を吸い取ろうとも無意味なのだ。

この世界で数百年の堕落を経たタブラ・スマラグディナの精神はそれらを十全には生かしきれない。

どれだけ優れた食材であろうと料理人の腕次第では産業廃棄物にすら成り果てるのだから。

「なぜだ！　この私が！」

「冒涜的な簒奪を重ね上げ、挙句あなたは何物にも成れなかった。ただそれだけのことでしょうに」

タブラはつまらない『勘違い』に躓いたのだ。

閉塞的な支配構造にとらわれた現実世界の只人が、カンストしたステータスを得て外敵の居ないこの世界で驕らないわけがない。

『脳食い』という権能の存在が全能感に拍車をかけ、とうとうタブラは己を運命を

弄ぶ上位存在とでも思いこんだ。
だから佐々木正義やアインズ様の運命を弄ぶという究極の大罪を平然と犯し、今その報いが与えられようとしている。
「精々思い知りなさい、所詮あなたは邪神気取りの小悪党に過ぎません」
「黙れ！」
ここでようやく己の武器を握りなおしたタブラ・スマラグディナ。
生きたいなら今にでも逃げれば良かったろう、殺すと決意したならドラゴンゾンビたちと連携して攻め立てるべきであっただろう。
しかし今タブラは数百年拗らせたくだらないプライドを刺激され、感情論で再びこの戦場へと踏み込んだ。
それは元来、タブラがマタタビに望んだ流れであるはずなのに。
『アハハハ！　ばかみたい！』
心の内の黒い少女が呵々と嗤う。パンドラズ・アクターも心から同調した。
戦いは始まる前から終わっているとは、偉大なるぷにっと萌え様の格言だ。
ともすれば、感情の支配者たるマタタビ相手に感情込みの心理戦を仕掛けようと

した時点で、タブラ・スマラグディナは負けていたのだろう。
そしてタブラが駆け出した。
パンドラズ・アクターは剣を構えて迎え撃つ。
一合、二合、三合、四合――パンドラズ・アクターとタブラの剣が鏡写しのように交差する。
ほぼ同じ剣技、ほぼ同じ筋力、ともすれば大体は同じ装備。
ならばどちらが上かというと、心の持ちようが明確な差を生み出した。
そして五合目で、ついにパンドラズ・アクターの聖剣がタブラの魔剣を、彼の両腕ごと斬り飛ばした。
カランと乾いた音を立てて転がった剣を眺め、尻餅をついたタブラ・スマラグディナの顔が恐怖に染まる。
「死になさい」
そしてパンドラズ・アクターは容赦なく、聖剣を振り下ろした。
しかし、

「この馬鹿アクター！」
聞きなれた声が響くと同時に、聖剣の軌道が見えない何かに弾かれる。
一瞬遅れて、パンドラズ・アクターの腹部に鋭い痛みが生まれた。
視線を下げれば、いつの間にかそこにあった漆黒の闇が己の腹を貫いている。

「なぜ君が！　マタタビ!!」

驚愕の声を上げるタブラもまた彼女の刃に深々と貫かれており、背面と腹部から血を吹き出していた。
だがそんなことは意に介さず、マタタビと呼ばれた少女は口を開く。
命を懸けた死闘の只中、まるで愚弟を　りつける姉のような場違い極まる雰囲気でだ。
「ねぇアクターさん私言ったよねぇ!?　絶対に殺すなって！　コイツ殺すと色々面倒くさいんだからさぁ！」
「は、はて、なんのことでしょう？」

「……とぼけんじゃねぇのですよコラ」
舌打ちとともに、マタタビはパンドラズ・アクターの腹部に刺された刀を力任せに引き抜いた。
途端に鮮血が溢れ出し、辺り一面に撒き散らされる。
激痛とともに、意識までも持っていかれそうなほどの喪失感がパンドラズ・アクターを襲うが、間もなくマタタビが取り出した回復ポーションを振りかけられて傷が癒えていく。
「ぐえぇ」
しかしとうとう『血の盟約』の効果が切れて、反動のデバフ効果によりパンドラズ・アクターの変身が解除された。
脱力とともに倒れ伏すパンドラズ・アクターをわき目に、マタタビはタブラへと語りかけた。
「久しぶりだねタコヘッド」
「いや、あの……」
「御託はいいからさぁ、タブラ。殺さないから言うこと聞いて？　会わせて欲し

い人がいるのよ、時間が無いから今すぐに」
「……うん、いいよ」
子と親の仇の血塗られた再開ではなくて、そこにあるのはありふれた旧友の再会だけだった。
一片の憎悪すら垣間見えない澄んだ瞳を前にして、タブラは盛大に困惑を噛み締めながらも即答していた。
パンドラズ・アクターはただ一点、マタタビの理不尽な思考回路に翻弄されるタブラを前に深く深く同情した。

二りぼっちの決戦

◇

ルベドは姉たちが好きだ。
だから姉たちが大好きな方々のことはよく知っている。
ニグレドはタブラ様が大好きで、アルベドはモモンガ様のことが大好き。
仲良い二人は、けれど根っこで正反対にすれ違ってる。
……まあルベドだってそうだけど。
姉妹なのに好きなのに、なんだか不思議。大好きってとっても変な気持ち。
とってもとっても、気持ち悪い。
そうは思わない？　ねぇ、おねえちゃん、

◆◇◆

即座に死を直観させる黄金槍の強烈な刺突。
アルベドは両の手の武器を全力で掲げて、大地を踏みつぶすように食いしばる。

少女並みの矮躯しかないルベドが放つ単調な一撃はしかし、１００レベル盾役（タンク）であるアルベドの体幹と気力を根こそぎ削り取るように重かった。

『ねぇ、おねえちゃん、』

武器を通じて流れ込むのは、憎む（愛し）べき敵（妹）の切実な叫び。

だが今のアルベドには彼女を慈しむ余裕は無い。

アルベドにだって、ルベドの考えに思うところは確かにある。

けれどこの瞬間においては答えるべき言葉も、それを考える時間だって与えられてはいないのだ。だから――

「うるさああアアアァァッい！！！」

「！」

極大の流星を思わせる重いルベドの槍の一突きに対し、アルベドは満身の力を籠めて拒絶する。

「かまってる余裕は無いのよぉ!!」

続けざまにバルデッシュを横薙ぎにしてルベドの右肩口に叩きつけた。

刃の先から盛大な衝撃波と青白い火花が飛び散って金属音を打ち鳴らす、内まで響く重厚なクリーンヒット。

同僚である階層守護者達すら致命打に追い込む会心の一撃を、アルベドは慈悲も容赦もなくルベドへと切り込んだのだ。

（糞が、また痛む!!）

刹那、アルベドの肩口にも同様の衝撃が撃ち込まれたかのような錯覚が、アルベドの思考にノイズする。

聡明なアルベドは理解していた。この幻痛はルベドの仕業などではなく、アルベドの中にある許されざる躊躇いであると。

【アインズ様の敵は誰であれ、容赦なく滅ぼさなければならない】

今までは当たり前にできていたはずの必然の思考が、どうしてか霞んでままならないのだ。

きっとおそらくその理由は……

（馬鹿か私は！！！　）

最強（ルベド）を前になんと悠長な考えを巡らせているのか。

死闘を前に内向しかけた愚かな思考を瞬時に棄て、バルデッシュを強く握り追の2撃目を踏み込んだ。

しかし戦場における一瞬の戸惑いは、ワインに混ざった一滴の泥の如く、すべての結果を無駄にする。

僅かに揺らいだアルベドの刃を、ルベドは児戯のように右手で掴み取った。

それは圧倒的な腕力と反射神経が為せる神業であり、かつアルベドが先ほど与えた右肩へのダメージがまるで効いていないことを意味していた。

「お姉ちゃん邪魔」

まるで羽虫を追い払うように、空いた左手の槍で無防備なアルベドを薙ぎ払うルベド。

アルベドが盾を挟み込むより速く、ルベドの矛先がアルベドの首元を切り付けようとした瞬間、アルベドは避けようのない死を直観した。

だが直後、絶望的な期待は愛すべき主によって裏切られる。

「させん！　〈魔法三重詠唱最強化（トリプレットマキシマイズマジック）　現（リアリティ・スラッシュ）　断〉！」

後衛に位置していたアインズ様からの、高火力魔法による援護射撃がルベドの背

中を狙い打つ。
背後からの特大ダメージは流石のルベドも避けるべきと判断し、左手を止めて防御魔法を発動せざるえない。
「ん！　〈魔法三重詠唱最強化石の壁（トリプレットマキシマイズマジックウォール・オブ・ストーン）〉」
アインズ様の放つ三本の裂刃と、ルベドが隔てた三重障壁。
両魔法が耳を衝くほどの破砕音とともに相殺し合い、減殺された〈現断（リアリティ・スラッシュ）〉の一発だけがルベドの背中を斬り付けた。
ルベドの背中からまたしても青白い火花と衝撃波が発生するが、当のルベドがまるで堪えていないのはわかりきっている。
そしてアルベドの背中からも痺れるような共感覚が染み込むものの、２度同じ過ちを犯すほどアルベドは愚かではなかった。
◆
（アインズ様のほうがずっと、ずっと辛いもの）
アルベドは理解していた。
アインズ様自身が誰よりも、今この状況を憂い嘆いて藻掻き苦しんでいるのだと。

生涯で唯一得られたアインズ・ウール・ゴウンという繋がりに、主人は２度も裏切られた。

一度は軽薄にも孤独に追いやられ、二度目はあまつさえタブラによって御命すらも狙われる。

悲しいだろう、辛いだろう。

これまで全てを懸けて守ってきたナザリックに裏切られ、そしてかつての仲間に立ち向かわなくてはならないのだから。

守ってきた宝物に傷つけられて、ゆえに自らの手で壊さなくてはいけないのだから。

アルベド以上に、ルベドの傷に痛んでいるのがアインズ様。

そんな、愚かしいほど慈悲深い御方なのだ、アインズ様という人物は。

だというのに、だというのに、だというのに、

（タブラもニグレドも、パンドラズ・アクターもマタタビも、どいつもこいつも好き勝手！　アインズ様を置き去りにしやがって!!）

おそらく全ての諸悪はタブラだろう。
そして例の如くマタタビが勝手に動き出し、被造物であるはずのパンドラズ・アクターも続いてアインズ様の意に反した。
結果この、誰もが望まぬ最悪の戦端が開かれたのだ。

そしてアルベドだけが、今アインズ様の傍にいる。
ならばたとえ、己の心を殺してでもアインズ様の願いをかなえなくては。
でなくてはずっとずっと、アインズ様は一人きりだ。

◆

アルベドは背中に奔る幻痛を、強固な意志でねじ伏せる。
今度はつかさず、斬撃に怯んだルベドに対して大盾ごと体重を傾けてのショルダータックルをぶちかます。
そしてルベドが右手を放した瞬間に、バルデッシュの平らな部分でアインズ様の

方向へと叩き飛ばした。
深く深く、祈りを込めて。
「アインズ様……！」
アルベドが守るべきはずのアインズ様の方角へ、あえてルベドを吹き飛ばしたのだ。
一見不明瞭な状況に、ルベドは僅かな困惑を見せながらもアインズへと矛先を突きつけた。
それは【アインズ様の抹殺】を命じられたルベドにとって、とらざる得ない必然的な判断だ。
故にそこへ向けて、アインズ様は罠を張る。

〈魔法無詠唱化（サイレントマジック）　異界門（ゲート）〉

それは一度限りのネコ騙し。
勢いをつけてアインズへ向けて突進をしかけるという限定状況において、一回だけ使用できる芸当だ。

ルベドの一撃がアインズ様の玉体に触れる紙一重。
数瞬前に発動していた〈異界門（ゲート）〉がアインズ様との間に立ち広がって、勢いそのまま黒い靄の中へと吸い込まれる。
「っ！」
ルベドが完璧に黒い靄へと潜ってしまったその瞬間、アインズは手をかざして元の入り口を掻き消した。

「また会おうルベド」
そして2㎞先にある八階層のある方角を向いて〈異界門（ゲート）〉の出口側を確認し、アインズ様は即座に左手に巻いていた時計に手をかけた。
『モモンガお兄ちゃん！　時間を設定するよ！』

するとアウラとマーレの創造主である ぶくぶく茶釜様の間抜けたボイスが響き渡る。

その惚気た女声に息を合わせ、アルベドとアインズ様はある方角へと飛翔する。

それはアインズ様が有するルベドへの唯一の対抗手段。

八階層に幽閉された旧ナザリック地下墳墓の元支配者（レイド・ボス）の群勢が座す、最悪の危険地帯である。

◆◇◆

アインズ様は〈飛行（フライ）〉で、アルベドは己の翼でそれぞれ目的地へと空を切る。

転移が使えないのには当然理由がある。

ルベドとの戦闘を開始する前にあらかじめ、目的地の周辺に強力な転移阻害を施した大規模結界を張り巡らせていたからだ。

もし目的地周辺へ向けて転移使おうとすれば、たとえギルドの指輪（リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン）を持つ者であろうと5分間のタイムロスが発生するように仕掛けている。

つまりアインズ様の〈異界門（ゲート）〉に吸い込まれたルベドが目的地に開かれた転移先

から飛び出してくるのは、タイマーで測った丁度５分後になるというわけだ。

「ひゅー、さすがはアインズ様ですね！　ルベドを〈異界門（ゲート）〉に封じ込めてる隙に、モモンガ玉でレイドボスたちを起動して、転移先から飛び出したところをリスポーンキルするってことですか。まったくもって作戦は完璧ですね！」

「正解よ。アインズ様の持つワールドアイテム【オーブ・オブ・モモンガ】には２分の起動時間がかかるの。

当然ルベドも元支配者達の存在は認知しているから、起動時間を見切られて転移で逃げられたり隙を狙われては埒が明かないもの。

だから〈異界門（ゲート）〉のタイムロスコンボによって出現場所とタイミングを固定して、最高のタイミングで波状攻撃を仕掛けるの。

いくらルベドでも生存確率は０パーセント……ってマタタビあなた!!　よくぬけぬけとアインズ様の前に顔を出せたわね!?　てめぇ今すぐ顔の皮剥いで塩漬けにしてやろうか！　あぁん!?」

飛行するアルベドとアインズ様の背後から突如追いすがってきたのは、召喚獣スフィンクスの背に乗った渦中の根源マタタビであったのだ。

さりげなく割り込んで自然とと掛け合うアルベドとマタタビの様子に、アインズはほろ苦い感傷を抱いて口を衝いた。

「……お前ら意外と仲いいよな」

「いくらアインズ様のお言葉でもそればかりは撤回していただきたく思います！　パンドラズ・アクターとは一緒にしないでください！」

「あはは！　だってさ！」

「マタタビあなた！　今回ばかりはもう許しようがないわよ!?　パンドラズ・アクター拐かして、こっちに何の説明もなくタブラとの戦端を開きやがって！　覚悟の準備もないままに対応に追われるアインズ様がどれだけ御心を痛められたことか！　あなたこれまでを通して何の成長もしていないのね！」

アルベドはマタタビの胸倉に飛び掛かり、わずかな加減を残してその首を締めあげた。

どうしようもなくどうしようもなく、マタタビの全てが許せなかった。
「成長してないは耳が痛いです……」
今回のことも、そして今までの出来事の不満も併せて、アルベド中からドロドロと累積していた黒い激情が噴出した。
「あなたが！　あなたがマトモであったなら！　どれだけアインズ様が救われたことか！
あなたがナザリックに歩み寄ってくれたならば！　アインズ様と我々シモベが無用な勘違いをしてすれ違うことは無かったの！
あなたが正しい判断を下せたら！　【傾城傾国】に出し抜かれて、シャルティアやアウラ、なによりアインズ様を傷つけることは無かったの！
あなたが秘密を打ち明けてくれたなら！　評議国と王国で無用に混乱を招くことは無かったの！
あなたが心を開いてくれたなら！　モモンガ様は御一人にならずにすんだの！
あなたが私のことを糾弾すれば！　本当は私は処刑されてたのに！」

「……それ今言うことですか？」
「そんなの私だってわかってるわよ！」
馬鹿なことを言ってることも、場違いなことを言っていることはわかっている。
そしてとても無責任な発言であることも。
しかし、この場を置いて他に言える時も無いだろうと、そのようにも思うのだ。
「何でもできるくせに！　何でも知ってるくせに！　誰よりもアインズ様のことを大事に想っているくせに！　見下して馬鹿にして！　アインズ様を置き去りにして！　もし、私があなただったならっ……もっと！」
アルベドはどうしようもないくらいマタタビのことが妬ましく、そしてだからこそ許せなかった。
立場も知恵も力も視野も愛情も、アインズ様が必要とする全てを完全に兼ね備えておきながら、どうしてアインズ様とすれ違う道ばかりを選び取ってしまうのだろう。

こいつは一体、どれだけ道を踏み外せば気が済むのだろう。
法国の隠し事を打ち明けてくれたり、白金の竜王との決闘を打ち合わせたりと、ちょっとは改善の兆しを見せたかと思いきや、タブラの件で途端にコレだ。
もう理解ができず、腹立たしくて妬ましく、羨ましくて許せない。
「ほんと何なのよあなたっ！」
「私は私だっつうの！　馬鹿な期待は無駄ですよ！」
アルベドの腕をつかみ返して、反対の腕でアインズ様を指さしながらマタタビは叫ぶ。
「私はアルベドさんほどこの人のことを愛してるわけでもないんです！　仲良くしたいとも思わないし、心が通じてるわけでもない！
独りぼっちに酔いしれてるところを水差すほど酔狂でもないし、支配者ぶって意地を張りたきゃ勝手にしてなって感じ！
野垂れ死にしねぇ限りには、どうなろうが知ったこっちゃねぇのですよ！」
「嘘おっしゃい！　あなたがどれだけアインズ様に執着してるかなんて、見てればわかるわよ！」

「いやだから私は！」
ああ言えばこう言い、水掛け論のように収集がつかなくなってきた会話に終止符を打ったのは、アインズ様の咳払いであった。
「いい加減にしてくれないか？　色々思うところがあるが、とにかく今は時間が無い。今大事な話だけを優先してくれ」
アインズ様は苛立ちを込めた声音でアルベドとマタタビを窘める。
あまりにも全うすぎる主人の正論を前にアルベドはマタタビから手を放して心底から恐縮した。
「も、申し訳ありませんアインズ様！　出過ぎた真似でした」
マタタビもバツを悪くしながら頭を掻いて謝罪する。
「……悪かったですね。では単刀直入にこっちの状況をお話ししましょう」
アインズ様は鷹揚に手を振り、気にしてないと意思表示を行う。
そして視線で先を促すようにマタタビを見つめた。
それに答えるよう、マタタビはスフィンクスの背の上で器用に胡坐を組む。
「タブラとニグレドさんの身柄は、アクターさんと私とでそれぞれ無事に確保いた

しました。現在、仲良くお二人監禁中です。
まぁ、無事と言っても……」
そこでマタタビは言葉を濁す。
その様子だけでアインズ様は状況を理解したようだ。当然だろう。
「まさか」
「ええそのまさか……タブラのクズ野郎、ルベドにアインズ様抹殺の指示を出した直後に遠隔制御基板を自分で壊しやがっていたようですよ。マジであいつ性格終わっていやがりますね」
「なんてことを!!」
アルベドが怒髪天を衝く勢いで激昂するのに対し、アインズ様は深いため息をつく。そして大きく肩を落とし、絶望の表情を浮かべていた。
「……信じられない、あのどうしてタブラさんがそんなことを……何かの間違いじゃないのか」
「全部私の嘘っぱちだったら、どれだけ素晴らしいことでしょうね。何なら今すぐ彼を呼びつけて話を付けてもいいですけど」

「結構です……そもそも今のルベドを俺の指示権で動かせないなら、誰の仕業かなんて確かめるまでもないんです。それにルベドの口からも、タブラさんの差し金であることを聞きましたしね」

アインズ様は力無く首を横に振る。マタタビはしかし、それでも慎重に問い続ける

「今すぐ彼をここに呼びつけることだってできるのですよ。ルベドを止める前に、直接証拠をその目で見なくては決心がつかないでは？」

それはマタタビなりの最大の良心だったのだろう。

だが、アインズ様は苦笑いとともに拒絶の意志を示す。

そして自らの意志を明確に口に出した。

「マタタビさんがそんなつまらない嘘をつく方だとは、俺は思っていませんから。それにもしタブラさんにやむを得ない理由があったのだとしても、この俺に何も告げずにルベドを殺しに遣わせたんですから、それがどんな言い訳だろうと耳にしたくはありません」

そう言ってアインズ様は腹に埋め込んんだオーブを握りしめ、振り絞るように決

心なされた。
「ルベドを壊したら次はニグレドとタブラさんの番です」
アインズ様の決意の言葉を受け、マタタビが目を細めた。
「へぇ～そうなんだ、そっかそっか。過去を振り切れてよかったね」
パチパチと軽く手を叩きながらのその言葉に、アインズ様の瞳が怒りに染まる。
だが、それを即座に抑え込むと、アインズ様は平静さを取り戻そうと深呼吸を繰り返す。
それから再び口を開く。
そこには先ほどまでの怒りの色は無く、ただ冷徹な支配者としての声が響く。
「マタタビさん、あなたに理解されようとは思わない。ユグドラシル最終日に鈴木悟が終わったように、骸骨の御旗を燃やした時からモモンガというプレイヤーは死んだんだ。
今ここに在るのはナザリックのためならかつての仲間すら手にかける、独りよがりで我儘な狂った墓守、アインズ・ウール・ゴウンその人だ」
冷たい声音に、アインズ様が本気であることをマタタビは感じ取ったのだろう。

ニヤリと唇の端をつり上げる。
「アインズ様がどう思おうが構いません。どう感じようが勝手だし、どう考えようが自由だ。
アインズ様はアインズ様が信じるアインズ・ウール・ゴウンを守ればいい。
あなたが何を考えていようが、あなたがどう行動しようが、あなたが何を望もうが、あなたがどう生きようが、あなたの勝手。
だから好きにすればいいのですよ」
マタタビの返答はアインズ様にとって予想外のものだったのだろう。
アインズ様は僅かに眉を動かし、不思議そうな表情を浮かべている。
「ただ一つだけご忠告を。片意地張って独りよがりをはたらくと碌なことありませんから」
「……」
「だけど安心してね。もしアインズ様が躓くことがあったとしても、この私自ら骨を拾って差し上げますから」
マタタビはアインズ様に対して親しげに、そしてどこか親しみを込めた笑顔を浮

かべる。
「……マタタビさん」
アインズ様はそれに何か言おうとしたようだったが、結局は何も言わず黙られた。
だから代わりにアルベドが声を挙げる
「あなたまだ何か企んでいるの？　いい加減にしなさいよ。これ以上アインズ様の邪魔をするなら容赦しないわ！」
その剣幕に対し、マタタビは肩をすくめる。
「邪魔なんてとんでもない。アインズ様の企てた完璧な作戦が成功すれば、そのまま万事オールオッケーなのですからね
てなわけで邪魔者は邪魔しないように自重しますから、お二人さんバイバイ！」
そう言うやいなやマタタビとスフィンクスは煙幕に包まれて、次の瞬間には跡形もなく消えていたのだった。

オーブ・オブ・モモンガ

目一杯嫌われちゃえの精神で好き勝手させていただきます

どうしてこんなことになったのだろう。
どうしてタブラはアインズ達に牙をむき始めたのだろう。
どうしてルベドを壊さなくちゃいけないんだろう。
どうしてマタタビは歩みを共にしてくれないのだろう。

いやそもそも、どうしてアインズは今かつての仲間たちと離れ離れになってしまったのだろう。
どうして自分は一人きりになってしまったのだろう。

結果ＮＰＣ、子供たちに親の居ない寂しい思いをさせてしまっているのだろう。

全て成るべくして起きたことだと、そう考えて現状をあきらめるには悔しすぎる現実だ。

わかっている。

もっともっと賢いやり方なんていくらでもあったのだ。

尽くせる最善はあったはずなのだ。

自分はあまりにも意固地すぎた。

もっと懸命に仲間たちを引き留めていればよかったのだろう。

例えばユグドラシル以外の別ゲーに誘われたとき、バランスよく付き合いを続けていればよかったのだろう。

オフ会とかももっと積極的に行えばよかったのだろう。

あるいはそんな努力が無駄だとしても、最終日のあの時来てくれたタブラさんやヘロヘロさんたちを我儘に引き留めていれば結果はまるで違ったはずだ。

挙句の果てにアインズは、今や我が子のようなＮＰＣ達やマタタビさんと解り合うことすら諦めてしまった。

無駄に尊大な支配者の仮面を被り、マタタビの忠言を無視して一人で勝手に胃を痛め、そんなこれまで全てのコミュニケーション不足のツケがタブラの造反とマタタビの横行という形で牙をむいてきた。

ならばもう、行くところまで行きついてすべて清算するしかないだろう。

身勝手なマタタビは たっち さん夫妻と共にさっさと元の世界に返してしまおう。

創造主を失ったＮＰＣ達のために今後もずっと完全無欠の支配者としてナザリックに一人君臨し続けよう。

そのためにはルベドとニグレド共々、造反してきたタブラ・スマラグディナを我が子たちの目につく前に抹殺してやる他にない。

意固地であろうが愚かであろうが、コレ以外の生き方なんて果たしてあるものだろうか。

進歩なんてなくてもいい。
今を守れるのなら何を犠牲にしたってかまわない。
アインズは一人で構わない。

◆

「アインズ様を御一人にはさせません」
「……ありがとうアルベド」
ガンドレッドに覆われた細腕がアインズの手首を握りしめ、硬く冷たい温もりがその意識を現実へと引き戻した。
じっとアインズの瞳を見据えるアルベドの眼差しは全てを見通すマタタビのソレを連想させるようであったが、あのひねくれ者に感じるような不快感は覚えなかった。
「ふっ」
アインズはアルベドから視線を外し周囲の情景を見やる。

今いるのは星光一つないどす黒い暗天と、欠片ほどの生気も無い死地の広がる第八階層荒野エリアの只中だ。

そしてアインズとアルベドを取り囲むように５体の巨大な異形が膝をついて臣下としての礼をとっているのがわかる。

１体は青白いなめらかな体表に身み不吉な赤い眼を輝かせる強大な蝙蝠。

１体は紅蓮の鱗に薄く雷光を纏わせたいかにも獰猛そうな巨竜。

１体は金剛像の如き力強い剛腕を６本も掲げた阿修羅を思わせる大戦士。

１体は陽光の如き眩いオーラを放ち３対の白翼を大きく広げた熾天使。

１体は黒い瘴気を纏い無数の人骨が折り重なって象られた死の巨人。

この５体こそが旧ナザリック地下墳墓にて君臨し、かつてのクラン：ナインズ・オウン・ゴールを迎え撃ったレイドボスたち。

かつて膨大な課金額でもって復活させた彼らこそが今のアインズの持ちうる最強の切り札であり、ルベドに対する唯一といってよい対抗策だった。

「いやはやしかし、この身が竦むほど素晴らしい威容でございます！　言葉も尽

くせないほどです！」
「わかるか、俺もそう思う」
どこか気を紛らわすようなニュアンスを含むアルベドの感嘆に、しかしアインズは素直に同調する。
この世界に転移しナザリックが現実化してから、このレイドボスたちを間近で目にするのは初めてのことだったから。
確かにその迫力はユグドラシルの時とは段違いだ。
ルベドなどとはまた異なる、１００レベルである自分より遥かに上位の存在なんて今後も目にするかは怪しかった。
万が一自分たちに牙をむいたらと思うと背筋が凍る。
「ああ、しかし本当に懐かしいな」
そして何より脳裏をかすめるのは、輝かしい人生の絶頂期のこと。
マタタビにも語ったナザリック攻略という最高の思い出だった。
それは甘美な哀愁の渦を巻いてアインズの意識を過去へと引きずり戻そうとするのである。

「アインズ様」
「……わかってる」

またしてもアルベドに咎められややバツを悪くしながらも、アインズはインベントリに手を入れて世界級アイテム【強欲と無欲】を取り出した。
それは左右非対称にして一対のガンドレッド。
片や禍々しく赤黒い「強欲」と青白く清浄なる「無欲」をアインズは両腕にはめる。
この【強欲と無欲】は経験値消費を必要とする能力を行使する際、ポイントカードのように経験値を事前にチャージして利用することができる代物だ。
今から扱う【オーブ・オブ・モモンガ】は最大5レベル分の経験値を必要とする。
そのためルベドと戦う直前に、竜王国の国境周辺に群生していた野生のビーストマンを超位魔法で殲滅し【強欲と無欲】に蓄えていたのだ。
「マタタビや白金の竜王あたりが顔をしかめるだろうが、今は知ったことではない」
「当然です」

わざわざ面倒な連中に気を遣って、明らかに生産性皆無で今後の絶滅淘汰が確約された劣等種を選んでやったのだ。
もっと言うなら白金の竜王がスレイン法国の神人を縛り付けていなければ間違いなく滅ぼされていただろうから、公平性を考えたところで評議国連中も大概だ。
文句は勘弁願いたい。
「さていい加減はじめようか」
アインズは視線を更に上に向け、自身が開いた〈異界門（ゲート）〉の出口を睨みつける。
そして己の腹部に手を当て【オーブ・オブ・モモンガ】を握りしめた。

「許してくれアルベド。今からお前の妹を壊し、後に姉を殺し、その親を抹殺する。今のナザリックを守るために」
「この世の誰にも御身を咎める資格はありません。それでもアインズ様がご自身の罪を責められるなら、私にもどうかその業を背負わせてください。どうか御一人にならないでください！」
「ありがとうアルベド……本当に。俺が勝手に設定を描き替えたから、俺に都合に

合わせてくれるんだな」
「それは逆です。我々シモベにとってはアインズ様の存在がこの上なく都合的なのです。我々を何より愛してくださるあなただからこそ私は、一人の存在としてのアインズ様を愛しているのです」
凛とした声で放たれる、優しすぎる慰めと真っすぐすぎる愛情の言葉。
まるで天使が放つ神聖魔法を直浴びしたような心地が、アインズの肋骨の内を砂糖菓子のようにして甘く甘く焼き焦がした。
同じように「俺も愛している」と返せばよかったのだろうが、こそばゆい気持ちが邪魔をする。
「ならそうかこれは、綴じ鍋に蒸し豚というやつだな」
「割れ鍋に綴じ蓋ですね」
たしかすごく相性がいいという意味の慣用句のハズ。
恥じらいを誤魔化すように無駄に頭を回して絞り出した慣用句を、しかしアルベドは容易く跳ね返した。
「ジョークだぞ？」

「嘘ですね」
「そういうとこホントマタタビに似てきてるぞお前」
「ポジティブにとらえさせていただきます、アインズ様の御心に近づいているという意味として」
「……まったく」
嬉々とした様子のアルベドに、ひねくれ者の誰かさんの影が重なった。
かのナザリック最後の侵入者はＮＰＣの教育に悪すぎる。
ここに来てとうとうアインズの虚勢に襤褸が出たらしい。
ひょっとしたら、これを発端に今後将来尻に敷かれる日々が始まったりするのだろうか。
たっち・みーも同様のタイプでかなり苦労したらしいし。
しかし将来のことを考えると、なんだか悪い気はしなかった。
一人だと気が重い。しかし二人なら、
「ありがとうアルベド、かなり気がほぐれた」

「それは何よりでございます」
「あと愛しているよ」
「え？」

虚を突かれた様子のアルベドを差し置いて、アインズは【オーブ・オブ・モモンガ】を起動させた。

「【今こそ我に従え!!　ナザリック地下墳墓が旧支配者達よ!!】」

◆◇◆

約束の時、

『モモンガお兄ちゃん！　約束の時間が経過したよ！』

ぶくぶく茶釜謹製タイマーボイスが響くと共に、暗い荒野の上空から遅延トラップがかけられた〈異界門（ゲート）〉が大きく開いて破壊神ルベドが再臨する。

『対象捕捉、ギルドマスター：モモンガもとアインズ様』

無機質な鋭い殺意は即座にターゲットたるアインズの姿を捉え、ノーモーションから強烈な突撃をしかけてきた。

それは超常を絶する、一撃喰らえばアインズの体力などひとたまりもないユグドラシル最高値の攻撃力だ。

当然ルベドとて時空の狭間で無為に時間を費やしていたわけではないのだ。

最強格の前衛性能を有しながら、それに飽き足らず彼女は魔法戦士の特性を兼ね

備えている。
然らば時空の狭間での待機時間は絶好の魔法強化のチャンスであり、今のルベドは たっち・みー すら容易く凌ぐ史上最強の個へと相成った。
もはや最強モードのルベドを止める術はこの世界には存在しないと言えるだろう。

ただ一つの例外を除いては、

「【今だ!!】」

真なる史上最強の絶対支配者、その絶対なる号令が響き渡る。
そして5体にも及ぶ最強の眷獣たちが、支配者の命に従い最強の個たるルベドへと立ち塞がった。

『!?』

予想外の事態を前に、加速器を逆噴射させての緊急停止するルベド。

強大な５つの暗影を前に、元来感情が希薄なはずのルベドをして生涯初めての戦慄を感じざる得なかった。

……あるいはそれは、ルベドの生涯の最後であるかもしれない。

『特級の障害を確認、作戦の遂行は非常に困難、一時撤退が最善と判断っ!!』

むりむり　かてない　ぜったいしんじゃう　にげなきゃ　にげなきゃ　にげなきゃ　にげなきゃ

たった今まで　『最強の個』　であったはずの破壊神ルベドの胸中を支配するのは、見た目通りな少女としての絶対的弱者の悲鳴であった。

ルベドの脊椎を支配する軍事用最強AIクリフォートは、デバイスが認識した莫大な能力数値を前にフリーズ寸前だ。

しかし曲がりなりにも半生物であるルベドの微かな本能が、状況に対し最適解を選び取る。

もっともそれは、生きとし生けるものなら誰しもが選びうる絶対判断と言えるだろうが。

『てったい!!　ってったい!!　てったてって!!てったあたあたた!!いやあああああああああ！！！！』

文字通り胸の内、ルベドの核に宿る【熱素石】が少女の絶叫に呼応して鮮烈に輝きだした。

転移は当然エリアごと封じられてるから不可能だ。今必要なのは絶対逃げ切るための速さ、推進力に他ならない。

ルベドが誇る特殊金属の多重装甲による耐久力など、今はまるで信用できない。

防御と攻撃に回していた【熱素石】の原動力を、全てスピードに割り当てる。

『はやくはやくはやくはやく!!』

結果アンバランス極まりない超神速は、獣化したマタタビのトップスピードにすら迫るほどにまで進化した。
とにかく速く、とにかく逃げる。

『逃げ逃げにげにげにげるのぉおおお！！！』
ジェットブースター出力最大、臨界点と限界点をはるかに超えて、ルベドは明後日の方向へと逃げ出した。
アテはない。とにかくここから遠く離れて離れるのだ。
空気抵抗が無い故に、雷速より早くルベドは駆けた。
そのうち転移有効地点まで移動してそしたらそのあともとにかく逃げる。
今はそれだけしか考えられない。

それだけしか考えられない。故にルベドは見落とした。
逃げ先の方向には既に巨大な影が迫っていたのだ。
「ＧＹＡＧＹＡＧＹＡＧＹＡ⋯」

『暗夜の翼』ニュクテリスは青白い翼を広げ、その赤い眼差しで少女ルベドを捉えて両足へと掴みこんだ。

起きた事象は極めて単純、ルベドの逃げ先にさらなる速さで先回りされていたというただそれだけだ。

単純ゆえにどれだけ馬鹿げたことなのかは、もはや語るに及ばず。

『なんでえええぇぇ？？！！！』

両足による捕獲はより強固となり、その圧力を万力のように締め上げていく。

ルベドの魂は軋みをあげて、絶叫をさらに高く激しく響かせた。

『やだやだぁ!!　！』

ニュクテリスは両足に捕らえたルベドを踏みつぶすように、巨躯の全重と万力を込めて大地に上へと叩きつける。その落下地点では、既に『黙阿修・神羅』が六本の剛腕を掲げながら仁王立ちしていた。

「Ｇｙｙｙａａａ!!」

ルベドを見据える神羅の黒曜石の瞳は、強烈な憤怒によって爛々と光り輝く。

そして振り落とされるは、絶対なる破壊の限りだ。

六本の腕の内四本にはそれぞれ、炎の剣、冷気を宿す斧、雷の槍、酸のまとわりつく棍棒を持ち、
うち三つが神羅の頭上で重なりあって一つの巨大な一撃を創り出す。
それは超高重力で圧縮されしプラズマの巨剣である。
《金星の豪雨》
極光が降り注ぎ、大気を焼く。
ルベドの身体を灼熱と冷気が同時に襲いかかり、酸は容赦なく装甲を溶かしにかかり、万力のような剛力で挟みこまれる圧力は内臓を押し潰す。
「副剰割創劇力！！！　功加劣助努励労効効!!」
神羅の憤怒の叫びと共に、ルベドの身体が地面へと叩きつけられた。
グシャリと鈍い音が響き渡り、地面には巨大なクレーターが穿たれた。そしてクレーターの中央には辛うじて形を残したルベドの身体が、金属片と機械部品の入り交じる姿を晒して転がっていた。
『ううぅうう!!』
ルベドは最早瀕死だ。しかしまだ死んでいない。

生きてもいるのだ。
そんな半死半生な少女の元へと、しかし容赦なく攻撃は続く。
『うあああああ!!』
「　　」
ルベドの身体を、青白い輝きが包みこんでいく。それは絶対なる破壊の女神に仇なした不心得者を浄化せんとする、神罰の光だ。
『死祇天』アズライールによる悪魂消滅の光が降り注いだ。
『いやぁあああ!!』
ルベドの絶叫が木霊する。
しかし、どれだけ叫ぼうとも、どれだけ喚こうとも、未だ彼女は死ぬことはできない。
個として最強を誇る彼女がゆえにその耐久力は誰よりも高い。だからこそ地下墳墓が旧支配者たちによる絶望の責め苦を余すことなくうけ切らねばならぬとすれば、それは史上の不幸と言えるのかもしれない。

そして４番手の追撃は、雷鳴を響かせ迫り来る『血竜の雷』ジャバウォックだ。
鮮血よりもなお紅い両眼が、ルベドの魂を焼き尽くさんと睨み付ける。
「Ｇｙｙｙａａａ!!」
ジャバウォックは大口を開き喉奥から雷轟の塊を迫り上げて、頭上に強大な光の球を発生させた。
膨大なダメージを受けて身動きの取れないルベドをよそに、光球はさらに膨張していった。
『もう、だめ……』
絶対的な死。ルベドは間もなく訪れるであろう自身の運命を確信し、とうとう観念することにした。
もはや逃げる気力すら湧いてこない。最初から戦闘AIクリフォートは圧倒的戦力差を前に一切仕事を放棄していたが、やはりそれが最善手だったらしい。
ルベドの身体は、完全に生きる意志を喪失していた。

◆◇◆

ルベドを一撃で殺してやれなかったことを、アインズは心底から申し訳なく思った。

たたでさえ愛し子の一人であるルベドを創造者である自分たちの都合で争いに巻き込んでしまったというのに、あまつさえ最上の恐怖を与えて殺さなくてはならないというのだから。

世界級アイテム【オーブ・オブ・モモンガ】によって強化されたうえで使役された元レイドボスの能力は世界級エネミーに匹敵する。

すなわち一体一体が１００レベルプレイヤーパーティを薄紙のように蹴散らす最強戦力ばかりなのだ。

使役するアインズすらもこうして異世界に現実化したあれらを目の当たりにして、悍ましいほどの戦慄を覚えるのだから。

敵として対峙するルベドの心境など想像を絶するものだろう。現地人視点のアインズ様も大概。かなり公平性を欠いた視点。

そして３度もの次元を超えた攻撃を浴びせられたとなれば、それはこの世界に於いて最大級の極刑と言えるだろう。

機械的に喋るキャラ設定を崩し、みっともなく泣き叫ぶルベドの姿はアインズの精神値をどうしようもなく削り取る。あるいはいっそ悲鳴そのものがアインズを追い詰める演技だったなら、その叡智に向けて痛いほどの拍手と喝采を送ってやりたかった。

しかし、今だルベドが健在なのは事実。

その悲鳴をアインズは聞き届けてやらねばならないのだ。

それこそが、ナザリックにただ一人君臨せし絶対支配者としての責任であり義務。

異端を切り捨て、その他全てを守り切るという覚悟がアインズにはあった。

だからたとえルベドがどれほど泣き叫ぼうと、アインズは決して攻撃の手を緩めようとは思わなかった。

「Ａａａａ……」

ジャバウォックの唸り声と共に膨れ上がった強大な雷のエネルギーが、間もなく充填を完了しようとしていた。
ルベドの運命は、もはや決まった。
そしてアインズは最後の指示を下そうとした瞬間――――――
「……ルベドっ……!!」
「!!」
それはまるで子供のような、ぐずり泣くような小さな呟き。
ルベドの姉、アルベドの声。
彼女の嘆きがアインズの耳に届いた瞬間、世界が止まったかのような静寂がその場を支配した。あるいはアインズにとってその一瞬は、永劫の時よりも遥かに長く感じられた。
見れば、涙すら見せず僅かに俯くだけのアルベドの横顔がそこにある。
しかしこの瞬間において彼女はアインズの知る何者でも無い。守護者統括でもなく、アインズの理解者でもなく、味方でも敵でもない。
ただ妹を想うだけの姉の姿だ。

そんなアルベドの姿に思いがけず見惚れながら、もし自分に兄妹がいたらこんな風になるのだろうかと益体のない考えが脳裏をよぎる。

『ええきっと、私はそうだと思いますよ？』

くだらない妄想に、くだらない幻聴が相槌を打った。

腹立たしいニヤケ面を思い浮かべて、万感を込めてアインズは彼女へと告げる。

「……俺の負けだよマタタビさん」

「え、アインズ様？」

唐突すぎるアインズの敗北宣言に、アルベドの困惑の声があがる。

しかしアインズはそれに構わず、成すべき指令をレイドボスたちへ下す。

「【止めろ】」

「Aa？」

アインズの言葉を受けたと同時に、しかし間に合わなかったジャバウォックの最強攻撃がルベドへ向けて解き放たれる。
極大の雷が小さな太陽のように莫大なエネルギーを伴って、全てを破壊し押し潰し差し迫る。
【止め】られるものがあるとすれば、当然それは同格の存在による最強防御。
『え？』
ルベドと雷光の間に立ち塞がったのは最後の眷獣『虚骸神』ゼネル・ギアス。
無数の人骨が折り重なって黒い瘴気を纏った死の巨人が、その身で雷光を受け止めたのだ。
直後ナザリック全体を大きく揺るがす大激震が響き渡る。
もはや音すらもかき消えるほどの力と力のぶつかり合い、雷鳴と暗影が混じり合いながらゼネル・ギアスと雷光が拮抗する。
『……嘘』
やがて雷光が止み、ゼネル・ギアスが雷光の全てを受け止めきった。
まるで無傷であるかのように立つその姿に、ルベドが思わずと言った様子で呟く。

『嘘だぁ』

そして呆然とした呟きと共に、ルベドの身体はガクガクとかくつきながらも立ち上がる。

そして【止め】られて棒立ちとなったレイドボスたちに見向きもせず、ある一点へ目掛けて飛び込んだ。

脳髄に下されたタブラによる至上命令、AIキトリニタスによる判断、そしてルベド自身の強い本能の三つがただ一つの指向性へと一致する。

『殺す』

その先にいたのは、当然アインズ。

ルベドが今まで味わったこともない憎悪と殺意を滾らせながら肉薄する。

今の彼女に他の個体など眼中にも無い。最優先で始末すべきはナザリックの主人たるアインズなのだった。

『抹殺』

「いったい何があったのですかアインズ様!?」

僅か一瞬で差し迫るルベドを、アルベドが大楯で受け止める。

そしてアインズの意図を読めないアルベドの当然のに疑問に対し、アインズは情けなく答えるほかにない。

この上なくダサい、どうしようもなく完敗で、最低にかっこ悪い男を曝け出して。

ニヤケ面で傍観しているであろう捻くれ者にも聞こえるぐらいの大声で。

「なぁマタタビさん!!　俺がルベドを殺せないってわかってただろ!?　あんたが何企んでるか知らないが、俺の負けだから助けてくれ!!」

「うんいいよ」

『！』

「マタタビあなた!?」

直後、影から現れたマタタビの回し蹴りが、アルベドと競り合っていたルベドへと炸裂する。

そしてノックバック効果によってはるか後方へと吹き飛ばされたルベドを他所に、満面の笑みのマタタビはアインズへと振り返った。

「私を殺せなかったアインズ様が、あの子を壊せるはずなかったのですよ。そして

どうか誇ってください、あなた達は世界と運命に勝ったんですから」
マタタビのいう言葉の意味はアインズもアルベドにも理解できない。
しかしそれでもアインズは、なんとなしに肩の力を抜くのだった。
「……言ってる意味が解りません」

シャルティア戦で最後の最後に躊躇するアインズ様が好きです。
そんでもって今際のモノローグで創造主ペロロンチーノ様を差し置いて
「至高のの御身こそナザリック最強の御方」って感激してるシャルティアが大好きです

宣誓

◆
◆

たとえどれほどの理由があろうとも、ナザリック最後の支配者としてアインズは、ルベドとニグレドとタブラ・スマラグディナを排除しなくてはならなかったのだ。それが残された子供たちを守るための最善にして唯一の方法だったから。

しかし結果としてアインズはルベドを壊せなかった、殺せなかった。

手筈を整え抜かりの無い再効率を導き出し、そして殆どの作戦は成功したというのに、消えかけの小さな命の灯を掻き消すという間際になって、アインズは振り下ろす手を止めてしまった。

別に、アルベドが零した小さな悲鳴のせいというわけではない。そんなものは理由にも言い訳にもなりはしない。

アインズはただ彼女の声で気付かされただけなのだ。

己の中にある幼く弱い我儘を。
『もう嫌だ』
手前で堅く覚悟を固めたつもりであったというのに、なんて無意味で無様な醜態であることか。

「無意味ではありません。無様でもありません」
透き通った眼と声でマタタビはアインズに語り掛ける。
「あなたがその手を止めたのは、あなたが誰より強いからです。
ルベドとナザリックを天秤にかければ、どちらが重いかなんてわかりきってる話です。
それでもどちらも死ぬほど愛してるから、あなたトドメの一手を踏みとどまった。
凄いことだと、アルベドさんもそう思うでしょう？」
「……馬鹿言わないで！　ここまでやって、ここまで来たのに、そんな半端な愚か者！　幻滅もいいところだわ」
「おや？」

「そんなの……そんなの……なおのこと！　愛さずにはいられないじゃない！」
「だそーですよ愚か者……じゃなくてアインズ様」
おどけるマタタビに対しアインズはもはや腹も立たない。急にこの世のなにもかもが馬鹿らしくなっていくような気さえした。
「これだから……まったく。人生というのはままならないな」
アインズはぼそりと呟き、そして曇天の夜空を見上げた。
「で、どうするつもりなんですかマタタビさん。一応勝算があって来たんでしょう？」
「企業秘密です。まぁとりあえず、アルベドさんもアインズ様も一旦休んでくださいよ。その間に粗方の元凶を潰します」
なんだかよくわからないが、マタタビの中ではもう戦いは終わってるらしい。
アインズとしてはルベドを処理した後もナザリックに戻って、それから諸問題の解決という大仕事がまだ残っているのだが。
だが確かに精神的な疲労感は限界で、これ以上何かするのも億劫だ。
どうせマタタビも碌でも無いことを考えてることは確かだが、まぁこの女が自信

を込めて本腰でやることなのだから大抵の事態は収束してしまうだろう。
あるいはいっそ裏切られても、もはや仕方のないこととすら思った。
「さぁアクターさん出番ですよ」
マタタビが虚空を見上げて声を挙げると、彼女の影の中から瓜二つの美貌を持ったドッペルゲンガーが現れる。
アインズは一瞬でそれがパンドラズ・アクターであると得心し、彼が握る巨大な巻物の姿を見て納得の声を洩らした。
「【山河社稷図】か。気が利いてるな」
アインズへ一瞥もせず、直後パンドラズ・アクターは【山河社稷図】の封を解いてその強大な効果を発動させた。
一瞬淡い光の波が辺り一帯を大きく包み、アインズもアルベドもレイドボスたちもマタタビもその中へと飲み込まれる。
『世界の守りが発動されました。世界級アイテム保持者は隔離空間へ侵入するか選んでください』
途中場違いな電子音声が脳内へと響き、その中に含まれた一文にアインズは心の

中で了承を選んだ。

◇

【山河社稷図】は使用者と周囲一帯の人物を１００種類に及ぶ隔離空間のどれかひとつに閉じ込めるという能力だ。

その効果に対抗するには同じく世界級アイテムを保持している必要があり、その場合今のように侵入を任意で選ぶことができる。

今回の場合、使用者であるパンドラズ・アクター自身と世界級アイテムを持たないレイドボスたち、そして任意で侵入することを選んだアインズとアルベドが引き込まれる。

【熱素石】を持つルベドは明らかに不利な【山河社稷図】の効果を受け入れる判断ができないため、マタタビもアルベドから借り受けた【真なる無】によってそれぞれ抵抗することを選んだようだ。

これによりアインズ抹殺を命じられたルベドから、アインズは一時的に隠れることができたという寸法である。

やがて光の波が開けると、アインズたちは小高い丘の上に立っていた。
周囲に見えているのは緑の草原と遠くまで広がる青空であり、先ほどまでいた八階層の風景は一切消え去っている。
続いてアインズの隣に現れたのはパンドラズ・アクターとアルベド、少し離れたところには５体のレイドボスたちが行き場も無いように鎮座している。
そして最後に姿を見せたのはマタタビの……
「影分身ですよー」
そして真っ黒な装丁の施された棺と、諸悪の根源であるかつての仲間の姿だった。
「久しぶりだねモモンガさん、二度と会いたくはなかったけれど」
「タブラさん……」
開口一番、あまりに明け透けな拒絶の言葉を向けられて、しかしアインズは怒ることも悲しむこともできなかった。
何も知らないアインズには、心の置き場をどこにすればいいのかわからないから。
そしてこのようにすれ違ってしまうだけの年月が過ぎ去ってしまっていると、ア

インズは理解していたからだ。
そう、アインズは割り切っていたのだが……
「てめぇタブラ・スマラグディナ!!　空前絶後のクソ野郎が！　よくもアインズ様を裏切りやがって！　ぶっ殺してやるわ!!」
「おやめ下さい統括殿、このゴミクソ下種野郎を地獄の底に叩き込み至上の苦痛と絶望を与えたいというお気持ちは十二分にわかりますがコイツは私の得物です」
「アクターさんあんた止めるほうでしょうが!?」
怒り猛るアルベドとパンドラズ・アクター、それを宥めようとするマタタビという訳の分からない光景を前にアインズの困惑は深まるばかりである。
「……だから会いたくなかったんだ。君もすべてを知ればああなるよ」
「いや何があったんですか？」
やれやれと首を振るタブラにアインズは深く問い詰める。
バツが悪そうに眼を背けたタブラの代わりに、影分身のマタタビが口を開いた。
「とりあえず全部話すけど、コイツは殺さないでくださいね？」

そして間もなくマタタビの口からタブラがマタタビの両親である佐々木夫妻を殺害していた事実を聞かされたアインズは、めでたく3人目の狂戦士へと仲間入りを果たしたのだった。

「『The goal of all Ë』（あらゆる生ある者の目指す……）」

「イズデスやめい‼　殺すなって言ってんでしょーがー！！？」

「……だから会いたくなかったんだよ」

全てはどう考えてもタブラの自業自得以外の何者でも無かったし、ナザリックとアインズにとってはとばっちり以外の何者でも無かった。

そして一番理不尽なのは、最大の被害者の一人であるマタタビが止めるがゆえに、誰もタブラを殺す筋を立てられなかったことだった。

◆◇◆

「いい気味ですよタコヘッド、精々死ぬほどアインズ様に脅かされろ」

今頃【山河社稷図】内部で死に目に会っているであろうタコヘッドを想い、本体であるマタタビはやや胸のすいた気分だった。

もちろん本当に死んでもらっては寝覚めが悪いのも確かだが。

「私にとっちゃタブラなんて、親の仇でも何でもないんですよ。確かにマサヨシと母さんに直接手を加えたのはあいつだし、理由だって利己的極まりない酷いもんです。けどそんなことは私には何の意味もないことなのです。ねぇルベドさんや」

『……』

なんのことやらとでも言いたげな気だるい無表情のルベドさん。

それでもせっかく聞き手がいるのだから語りたいというのが人情だ。

アクターさんには一蹴されたし、アルベドさんやアインズ様に話しても絶対納得してくれないであろう理由。

せめて黙って聞いてくれるならマタタビにはこの上なく嬉しいところだ。

「The goal of all life is death（あらゆる生ある者の目指すところは死である）ってね。たとえタブラが直接手を下さなくたって、どうせマサヨシも母さんもいずれはこの世界で命を落とす

ことになっていたでしょうから」

理由なんてなんでもいい。死因なんてなんでもいい。

老衰かもしれなかった。戦死かもしれなかった。飢え死にかもしれなかった。

もしタブラの毒牙にかけられなければ、仲間や新たにつくった現地家族に囲まれて穏やかに死ぬという道もあったかもしれない。

だがそんなことはマタタビにはまるで関係ない。意味がないのだ。

「たとえそれがどんな死に方であるにせよ、娘である私とツバキに会えない限り、どうしようもなく不遇の死であることには変わりませんからね」

『……』

ルベドは何も答えなかった。馬鹿だと思われてるかもしれなかったが、口に出さないだけ上等だった。

「もし私に親の仇なんてものがいるとしたらそれは、ユグドラシル最終日まで一切連絡を返さなかった親不孝な家出娘に他なりません」

マサヨシと母さんはこの世界に訪れた時点である意味詰んでいた。

どれだけ世界を救おうが、どれだけの人を幸せにしようが、世界を隔てた娘に会

うことができないのだから。

その原因を作ったのはもちろんツアーの父親である龍帝さんとやらでもなくて、いつでも会えたはずなのに嫌がって親から逃げ続けていた桜という娘の存在だ。

せめて最終日のあの時に連絡コールを受け取っていれば、二人がこの世界に迷い込むこともなかっただろうから。

「ええもちろん私も聖人じゃありませんから。本当はタブラのことがそれなりに憎い。けどね、もし彼を復讐の刃で切り裂こうものならば、先に私自身が首を吊らなきゃいけなくなるの。だって、そういうものでしょう？」

『……話の文脈が理解できません』

いい加減黙りかねたのか、ルベドさんがようやく口を開いてくれた。

でも全てを一から話すのは面倒だった。

「とにかく私はタブラを殺せないから、誰もあなたの創造主を傷つけられないってこと。安心してね」

『そうですか』

「あら？」

創造主の安否の話であるというのに、思いのほか薄い反応にマタタビは首をかしげた。

しかし今すぐマタタビには別の大仕事が控えているので深く考えている場合ではなかった。

騙したアインズ様を【山河社稷図】に閉じ込められる制限時間はそう長くないから。

まあどのみちすぐにこいつらは、タブラのことなんてどうでもよくなるはずだけど。

「じゃあね、一旦さよならルベドさん。アインズ様はまた同じ場所にリポップすると思うから、殺害指令が出てるならずっとそこで待っててね」

『あなたは標的に入っていない』

「だろうね」

どちらにせよマタタビ自身は雲隠れできるので関係のない話ではあったが。しかし簡単にこの場を見逃してくれるなら是非もない。

そのままマタタビは上層である７階層へと足を向け、最終的には地表出口を目

指すのだった。

◆◇◆

「屁理屈だな」

「屁理屈ね」

「屁理屈ですね」

マタタビが申し立てたタブラへの弁護を、アインズとアルベドとパンドラズ・アクターは当然のように口を揃えて一蹴する。

「ほら来た、やっぱそういうと思ってましたよあなたたちは」

「本当に大丈夫？　僕ちゃんと生きて帰れる？」

かつてなく狼狽えて弱るタブラを睨みながら、アインズは先ほどマタタビが語った内容を頭の中で反芻する。

自らの愚かな言動が親を犬死させる結果に導いたとして、しかしそれを罪として咎められるのは本人の中の話だけ。

客観的に見て佐々木夫妻の悲劇を巻き起こしたのは龍帝の愚かな暴挙と、目の前

のタブラ・スマラグディナの凶行に他ならない。
「それにマタタビさんがよかろうとセバス・チャンが許さないでしょう。ナザリック地下大墳墓が絶対支配者として、この人の裏切りを看過することはできない」
「ですよねー」
「……タブラお前意外と余裕ですね？」
アインズの言葉にタブラはゴロンと仰向けに寝っ転がり、煮て焼いて殺せと言わんばかりの姿勢でカラカラと笑う。
そして一同は冷ややかな視線を彼の上に注いでいる中、マタタビはスッと別の方向を指さした。
タブラの少し横に置かれている謎の黒い棺である。
「このクソ野郎の処遇は棚上げしてもらいまして、今私が一番許せないのはアレなのですよ」
そういって指し示す先には黒い棺が変わらず鎮座している。
アインズ達にはそれが一体なんなのか理解できず、マタタビに視線で問いかける。
「ニグレドさんです。邪魔なんでMP全部引っこ抜いて寝かしつけてますけどね」

「姉さん……」

アルベドが微妙な顔をして棺を見やり、アインズは首をひねる。

「……タブラさんを殺す以上、どのみち彼女もルベドも生かしておくわけにはいきませんが。しかしマタタビさんとニグレドに何の因縁があるんですか？」

アインズはマタタビの方に向き直り、苦笑を浮かべながら答える。

アインズ達の因縁に巻き込まれたニグレドはアインズからすればただただ不遇な被害者だ。ナザリック全体としては裏切者である彼女だが、創造主のサイドについて造反に加わったというなら責める気にはなれない。

創造主を優先するというＮＰＣなら当たり前な行動をただ順守していただけなのだから。それは誰よりもマタタビ自身が理解しているのではないか。

しかし分身体のマタタビの目に宿るのは、今まで見たことも無いような憎悪と確かな怒りだった。タブラをかばいたてるくせにニグレドばかりを睨んでいる。

マタタビがこうも露骨に誰かに敵意を向けるなどアインズが知るかぎり初めてのことだった。

「……優しいですねぇアインズ様は。あなたのそういうところ、私はとっても大好

きですよ？　だから私はあなたを裏切るこの世の全てが許せない。たとえそれが今のナザリック地下大墳墓そのものであろうともね」

「マタタビさん？　あなたは何を……」

アインズの問いかける声を無視して、マタタビは片手を振ってパンドラズ・アクターを傍に呼んだ。

そして大げさに両手を広げ天を仰ぎ、固く決意した言葉を高らかに告げる。

「やあやあ我こそはナザリック最後の侵入者なり。崇高なる絶対支配者様にここに宣言しましょう。

今日、ギルド：アインズ・ウール・ゴウンは我が手によって終焉を迎えます。そして必ずや全ての栄光をアインズ様へと捧げましょう」

その顔は激情に塗れ、牙をむき出しにして威嚇する野生動物そのものだった。

寝そべるタブラ・スマラグディナは気だるげに、アインズへと同情の声をかける。

「この娘に関わったのが運のツキだ。僕が言うのもなんだけど、君は果てしなく不憫だよ」

マタタビのことは嫌いになっていいのでＮＰＣやアインズ様は好きなままでいてください

次回、燃え盛れコメント欄、吹き荒れろ低評価の嵐

ナザリック最後の侵入者

マタタビの株？　そんなもの初めから、無かったではないか

マタタビがアインズに抱く感情の内実とは一体何であったのか。
それは同じゲームという趣味を共有する者としての友情であったかもしれない。
あるいは真逆の性格を持つがゆえの反抗心。
調和した人間関係を構築する者への嫉妬心。
意外と人前では無理に見栄を張ってしまう愚かしさへの呆れ。
我心を切り崩してまで隣人を気遣う精神への尊敬。
凡庸なりに計算高く先を見据える憶病な戦術観への畏怖。
身内のためなら容赦なく他者を踏み潰す徹底した倫理観への敬意。
反して救いようのないマタタビにすら手を差し伸べてしまう人の良さへの軽蔑と、胸の奥底で眠るひねくれた恩義。

あるいは一人の人間として、言葉に出来ないような愛情や愛着なども抱いているのかもしれない。

けれど今マタタビの心を支配していたのは、上記したすべてを内包し飲み込むたった2文字の感情の名であった。

愛より重く恋より熱い、果てやナザリックや世界中すら飲み込まんとするソレの名を、人はきっと「信仰」と呼ぶだろう。

◆

「現代っ子たる私にはあまり縁のない感情だと思ってたんだけどねぇ」

ナザリック地下大墳墓が地表部。

かつては暗澹たる毒沼であったそこは、今では晴天の草原に変わり果て爽やかな風をマタタビの首筋に届けてくれる。

マタタビは軽く伸びをしながら入り口である霊廟前を睨み、そして己の惨憺たる感情の底を俯瞰する。

「どうやら私も随分と、ＮＰＣの皆様方に毒されちまったみたいです」

かつてモモンガという名を持っていた友人がいた。
そんな彼が今では絶対支配者という立場を背負い、アインズ・ウール・ゴウンという名に変えて、らしからぬ支配者の器を身に着けるに至ったのだ。
立場が人を作るとはよく言ったもの。
そんな彼に羨望と絶対服従を誓うＮＰＣの皆様方に囲まれて、曲がりなりにも彼らと肩を並べていたマタタビの変化は必然だったのかもしれない。
「なんて、それこそ私らしくもないですねぇ」
自分の感情の責任を環境に求めるのはマタタビの主義ではない。
アインズ様がモモンガという人物から地続きの存在であるのと同じように、マタタビはどこまで行ってもマタタビだ。
今の自分になることをかつての自分が選んだのなら、アインズ様もモモンガも桜もマタタビも同じ存在でしかない。
だから今のマタタビの決断はどこまで行ってもマタタビのモノ。マタタビが選んだ結論はマタタビのモノでしかない。
「さて」

大きく深呼吸してからマタタビは右手首にとある腕時計を身に着ける。

１００均プラスチック製のような安物感漂うそのアイテムはしかし、マタタビが持ちうるどんなアイテムよりも価値ある逸品である。

「起動」

羅針盤を指で軽く押し込むと、腕時計からオレンジヴェールのホログラム映像が投影された。ホログラムは空中に固定されたように動かない。マタタビが右手を軽く振ろうとも、映像に何ら変化しない。

このホログラムは今までマタタビが集めた情報をもとに作った、ナザリック地下大墳墓の立体ダンジョンマップである。

全10階の多高層には多数の赤い光点――トラップやモンスターといった障害が、まるで血管のように張り巡らされていた。

その数々のギミックの恐ろしさはマタタビ自身が誰よりも深く理解しているところだ。

ユグドラシル最終日のマタタビがこれらすべてを突破できたのは膨大な消費アイテムを浪費しまくったお陰でもあるため、今のマタタビに同じことは出来るとも思

えない。

そして目的地である玉座の間の手前に設置された、最終防衛ラインであるレメゲトンの悪魔像が67体全起動されているというのが最大の問題点である。

るし☆ふぁー の力作たる彼らの総力はカンストプレイヤーパーティ４つ分に匹敵する。いや、彼らの能力を考えれば５つ分は固いだろう。

つまりマタタビ一人でこれらすべてを突破する方法は存在しない。

ならば方法は簡単だ。迂回ルートを作ればいい。

「【真なる無（ギンヌンガガプ）】」

インベントリから取り出したのは黒く小さな短杖、アルベドさんからお借りしていた世界級アイテム【真なる無（ギンヌンガガプ）】だ。

物質破壊という珍しい属性攻撃の付与された破壊不能の変形武器。

生物に対する攻撃力は乏しいことから戦闘においてはあまり役に立たないアイテムとされているが、このアイテムの真価は別のところにある。

「変形モード、刀」

グリップを握り、呼び声と共に【真なる無(ギンヌンガガプ)】は、マタタビの使い慣れた日本刀へと姿を変える。

まるでマタタビの心を読んだかのような理想的な握り心地のちょうど良い武器だ。

マタタビは【真なる無(ギンヌンガガプ)】にMPを籠めながら、頭の上から振りかぶり大地に向かって全力で振り下ろす。

「せいや!!」

黒い斬撃、刃から破壊の波動が迸り大地に深く浸透する。

剣先から伸びる黒い魔力が岩盤を泡のように溶かし崩して、地下奥底までの直下型な大穴を形成した。

「ショートカット万歳ってね」

ユグドラシルの時のような沼地では地面が崩れてこうはいかなかっただろう。

しかし不慮の事故でこんな辺鄙な平原に転移したのが運のツキ。

この最強の物質破壊属性を持つ【真なる無(ギンヌンガガプ)】の力があればどんな強固な岩盤であろうと障害にはなりえない。そして地下ダンジョンという構造上、内部がどれだけ

堅牢であろうが外側から掘り進めば最終層までの到達は可能なのだ。

「さて行きますか」

マタタビは開いた大穴に頭から身投げして、腕時計の立体マップを睨みながら【真なる無（ギンヌンガガプ）】を握りしめる。

目的地である十階層が玉座の間を目指し、黒い斬撃を岩盤へ向かって振るうのだった。

「あの人のお仕事っぷりに期待させていただきましょう」

◆◇◆

六階層においてマタタビとの壮絶な修練を経て以来、シャルティア・ブラッドフォールンは時折不思議な感覚に囚われることが多くなった。

「なんだかすさまじく、嫌な予感がするでありんすねぇ」

直観とは高度な情報処理の結果であると、シャルティアの恩人であり恩師でもあるマタタビは語っていた。

戦闘時、目の前の敵に向けて限りなく神経を研ぎ澄ませている間、もし何の根拠もなく嫌な違和感を感じたのなら、それは８割方で危険の兆候であるという。

エビデンスの無いオカルト染みた与太話ではあるのだが、しかしそういった『感覚』を何より重視しているマタタビに自分が勝てなかった事もシャルティアはよく理解していた。

とはいえシャルティア達は今、戦闘時とは余りにもかけ離れた呑気極まりない状況にある。

思わず設定された廓言葉を崩しながら、シャルティアはため息交じりに独り言ちた。

「どういう状況なのよこれ」

シャルティアが立つのはナザリック大地下墳墓、深奥たる第十階層が玉座の間。

現在ナザリックが全てのシモベがこの玉座の間にて集結していた。

アインズ様が開催したこの臨時集会の目的は、とある緊急報告だったそうなのだが……

しかし途中で問題が発生し、玉座の間に置かれているレメトゲン67体のゴーレムがるし☆ふぁー様のいたずらにより誤作動を起こしてシモベ達に敵対反応を示してしまったという。ゆえに問題解決のためアインズ様とアルベド、そしてパンドラズ・アクターとニグレドの４名が出動することとあいなった。

その間、レメトゲン達によって出口を阻まれてしまったシャルティア含む他のシモベは極めて不本意ながらこの地で立ち往生をする羽目になってしまったというわけだ。無論これはアインズがＮＰＣ達を軟禁する言い訳でありるし☆ふぁー は無関与

しかしアインズ様が自ら働きに出ていかれている一方で、役に立つために生み出された他のシモベ達が何もできないという状況は精神衛生上あまりよろしくない。

一同が先の見えない待機時間に不安を募らせていたなかで、しかし意外な人物が大きな声を挙げるのだった。

第九階層執事助手がエクレア・エクレール・エイクレアー、イワトビペンギンの見た目を持つバードマン。このナザリックにて、あるいは世界有数とすらいえる弱さの持ち主だった。

しかしそんな彼の一言が、この玉座の間に大きな波紋を広げることとなる。

「やあやあ!!　等しくナザリックに遣える同胞が諸君よ!!　偉大なるナザリック地下大墳墓の総戦力がこの玉座間に集っているというのなら、やるべきことは決まっているだろう？　今こそ始めよう！　血沸き肉躍る戦いの時、総力戦をね！

今こそ宣言しよう！　『玉座の間：大掃除大会』の開催を!!」

普段はナザリック簒奪を公言して嫌われているエクレアの言が、この時だけはシモベ達の心を支配した。

一般的に九階層、十階層の施設整備や清掃などは一般メイドを筆頭とした使用人たちによって行われるのが通例である。

しかしながらその広さたるやメイドや他の使用人は手に余るというもので、全てのエリアを完全に綺麗にしようと思えば現在の使用人の人数では到底足りない。

その為利用頻度が低いブロックや、広大過ぎて管理が困難な部屋などは清掃が後回しにされてしまう。

特に後者の、その最たるものが十階層の玉座の間なのである。

何せこの部屋はあまりにも荘厳で、そして壮大すぎた。入口ですら５メートル以上もの巨大な扉となっており、室内照明は１００メートル近い高さの天井から吊り下げられた巨大な複数のシャンデリアたちによって賄われている。

壁面は複数の巨大な石柱によって支えられ、さらに至高の御方々一名ずつに対応した御旗がそれぞれ左右対称に計41も吊り下げられており、それらが天井まで突き立っている様子は余りにも壮観であった。

床一面には豪奢な赤を基調としたカーペットが敷かれて玉座まで真っ直ぐ一枚に伸びている。

もしこんな壮大すぎる空間を完璧に清掃しようとするならば、精々１００人足らずな使用人の労力を総出してもまるで足りない。
しかしながらこの玉座の間が使用されない理由など無く、またこれほど神聖なる場所を放置しておくなどシモベとしてあり得ない。
そんなわけでこの玉座の間の清掃は、これまで不本意ながらも簡易化されてきたという経緯があったらしい。

だからしかるべき人員と時間が揃ったこの瞬間にこそ、総力戦の名の下に大掃除を行ってしまおうというのがエクレアの提案の趣旨であった。
「素晴らしいよ執事助手君!!」
持て余した待機時間の中で『仕事』を発掘したエクレアの提案は瞬く間にシモベ中で可決され、かくして急遽『玉座の間：大掃除大会』が開催した。
ナザリックが世界に誇る高水準の清掃技能を誇る一般メイドなどの使用人が、それぞれの役割を持つ部隊の指揮を執って行われていく流れとなった。
まずは持ち合わせの道具から箒やバケツを作成したり、魔法で掃除用の水を生成

したりする準備係が活躍した。
その間に４本の剛腕を操るコキュートスによって何十メートルもあるレッドカーペットが世界樹の幹のように太く巻き取られむき出しの床が露になった。
そして箒部隊がその下に潜り込んでいた埃という埃をかき集め、部屋の片隅に作られた集積所へと運び込まれていく。やがて雑巾部隊が一糸の乱れも隙間もなく均等なスピードで一切に床下を磨くのだ。
飛行能力のあるシモベはもっぱら高い天井や壁付近の溝などを担当する。
また一部の悪魔は細かな埃が舞い上がらないよう天井を中心に飛び回り、魔法で自身に静電気を付与し身を挺して汚れから空気を守っていたりもする。
ただ玉座の間から右上の壁面だけ誰も手を付けていない箇所がある。というのもそこはエクレア曰く、玉座の間に勤めているアルベドの私物が隠された隠しスペースが設けられているのだとか。どうしてエクレアがそんなことを知っているのか不可解ではあったが、なるほど九階層に住居が与えられる前はあんな場所に生活用品を置いていたわけか。
守護者統括という立場にしてはしょっぱい待遇かもしれない。

繊細な作業を要するシャンデリアのメンテナンスは、高い体力と清掃に関する専門知識を兼ね備えた戦闘メイドプレアデス達の出番だ。

何せあまりにも高所すぎるため、各々がアイテムやスキル、魔法などでの飛行能力で浮遊したままの作業。

噴射スプレーでクリスタルや金属部分に洗剤を散布し、魔法で煮炊きして作った蒸留水を利用して洗い流す。あまりにも豪奢で巨大であるために一つを終わらせるだけでも相当な時間を要するが、しかし一度始めてしまえば彼女らの手際が鈍ることはなかった。

全てのシモベの総力が、この玉座の間の清掃に費やされていくという異次元の絶景。

すさまじい光景で凄まじい仕事ぶりだ。

同じナザリックに遣えるシモベとして感激し誇りに思う一方で、けれどシャルティアの中に募る嫌な違和感は依然膨らんでいくのだった。

「なんか変でありんすねぇ」

シャルティアは首をかしげながら、あまりにも綺麗になり過ぎていく玉座の間を眺め続ける。

本当は自分も彼らの集いに加わるべきなのであろう。〈異界門（ゲート）〉や飛行能力を駆使して役に立つ手法はいくらでも考えられるのだから。

しかしどうしても、今この時ばかりは目の前にある『仕事』に対しさっぱり心が向かわなかった。

だからシャルティアは、何かに対し言い訳をするようにスポイトランスを床に立てて仁王立ちするのだった。

「どーしたのよシャルティア、あんたが突っ立ってサボってるなんて珍しいじゃん」

そんなシャルティアに声をかけてきたのは、同じ階層守護者であり同僚のアウラだった。どうやら彼女は既に巨大レッドカーペットのブラッシングをいち早く終え暇になってしまったらしい。

「掃除が嫌というワケではないでありんす。でも……なんか胸の中がモワモワして落ち着かなくて……」

「またパッドずれたの？　そのイレモノ邪魔なだけだしいい加減辞めたら？」

「そそ、そういうことじゃなくて！！！　気持ちの問題!!　気持ちの問題でありんす!!」
「ハハハ冗談冗談、あんたがそんなことでサボるわけないからね」
アウラは笑いながらシャルティアの内心を慮ってくれていた。
そんな友人に少しだけ心が軽くなるのを感じながら、しかしやはり嫌な感じは拭えない。
「あたしも暇になっちゃったし話しよっか。ここ座っていい？」
「構わないでありんす」
アウラは両手を後ろに回しながら、今しがた自分で掃除したばかりのカーペットの上に無遠慮に腰を下ろした。
「そういえば知ってる？　あいつ、マタタビがナザリックに来てから戦闘メイドや一般メイド達の気が相当立ってるんだってさ」
「なんとなく、見当がつくでありんすよ」
周囲で全力で清掃に取り組むメイド達を見まわしながら、シャルティアは答えた。

「マタタビはとても優秀でありんすからねぇ」

彼女はこの世界に転移してからわずかな間だけ九階層でメイド見習いとして属していたのだが、その少ない時間の中で既にメイドとしての仕事をほとんどを理解してしまったのだという。

エクレア曰く清掃だけは半人前であるそうだが、その他の言葉遣い礼儀作法や歩き方などの基礎的な立ち振る舞いから、客人対応、人物ごとの好みに合わせた茶の淹れ方、服飾センス、消耗品や備品の管理、予算帳簿のつけ方、果てや業務全体の管理状況に至るまで、今のマタタビは体得している。

しかもシノビでもある彼女であれば、影分身で簡単に頭数を増やせてしまうから恐ろしい。

「その気になれば、たった一人でメイド全員分の仕事を回すこともできるでありんしょう」

「絵面はちょっと最悪だけどね」

九階層を席捲するマタタビメイドの群れという地獄絵図を思い浮かべ、シャルティアとアウラは顔を見合わせ苦笑いする。

ただでさえ一人でも手を焼く性格難が山ほど溢れてしまったなら、それはナザリックを揺るがしかねない大惨事だから。

「……違いありんせん」

「仕事はできるけど性格は悪いって、そりゃ他のメイドにとっては嫌な話だよね。ああやって気合入れて頑張るようになるんなら悪い話じゃないかもだけど。階層守護者のあたしたちだって同じようなもんだし」

ただでさえ仕事ができて、しかもマタタビはべらぼうに強い。

戦闘メイドなど言うに及ばず、階層守護者であっても彼女を止めるのは難しい。実際今のナザリックで完全にマタタビを凌ぐのはアインズ様くらいのものである。

シモベとしての存在意義を揺るがされる苦い感情。

例の騒動でマタタビにまとめて打ち負かされたシャルティアとアウラには、メイド達の想いが身に染みるほど理解できた。

だからこそ日々の鍛錬を欠かさずに、階層の守護にも一層取り組んでいるわけである。

頭脳面ではアルベドとデミウルゴスが知恵を絞ってもアインズ様には敵わないように、実働面においてマタタビの優秀性は別格だ。立場上アインズ様と近しい位置にあり、とある御方の息女であるという事実もさもありなん。

もしもマタタビにまともな社会性や協調性があれば、アインズ様が作戦を立てマタタビが実行に移せばほとんど全ての作戦を遂行できるようにすらシャルティアは思う。

「そう考えてみればアルベドの気持ちもわかるでありんすね」

「性格はアレだけど能力だけは優秀で、身分としてもあたしたちシモベとはワケが違うからね。精神支配解く時も、ああまでアインズ様が体張っていたところなんて見たら……ねぇ。虚しい気持ちにでもなったじゃないかな」

それに、ここで口には出せないが、どうやらアルベドの心には厄介でデリケートな問題が巣食っているそうなのだ。

『シャルティアさんたちも、アルベドさんのことは周知したほうがいいと思います』

先日マタタビが教えてくれたことだ。
詳しくはわからないが、アインズ様がアルベドに「愛せよ」と命じる際に、なぜか間違って他の至高の御方々への憎悪の感情が芽生えたというのである。
本人がアインズ様に自己申告する形で丸く収まったそうなのだが、そんな悍ましい心をたった一人で抱え込むなんて、きっとつらいに決まってる。
だってそれは心の中でナザリック全てを敵に回しているようなものだから。
どおりで、最近のアルベドは暗かったわけだ。
「アルベドがへこんでる姿なんて似合いんせん！　マタタビにその気がないのはわかりきってるんだから！　わたしとどっちが正妃の座に相応しいか、きっちりと決着をつけるでありんす！」
「まぁほどほどにしてね？　結局止めるのあたしなんだからさ」

このときすっかりシャルティアは、嫌な予感を忘れていた。

◆◇◆

必然的行動。

特に役目を与えられず「玉座の間」放置されたＮＰＣ。そんな彼らに「掃除」という仕事を指し示せば、角砂糖に群がる働きアリのごとく没頭してしまうのは無理からぬこと。

今のマタタビにとって不都合な『警戒感』という状態は、不安感を打ち消す為に、無意味な清掃という逃避行動へと移り変わることだろう。

どんな駒でも使いようだ。

嫌われものなレベル１バードマンでも、その立場と能力と発言力は状況によって大きな力に代わり得る。

マタタビは、アインズ様による全ＮＰＣ達への玉座の間の集会命令直前に、エクレア・エクレール・エクレイアに接触していた。そしてこのように諭したのだ。

『アインズ様によって、まもなく全てのシモベが玉座の間に一時的に軟禁されることになります。そしたら全員ヒマをこくから、エクレアさんが声掛けしてみんなで

大掃除を始めてください。さすれば必ずやこの私が、エクレアさんのナザリック簒奪を成功させて見せましょう』

掃除好き、そしてナザリックの簒奪を企てているという二つの性格設定を持つエクレアさん。

そんな彼は馬鹿だからか、または何か考えがあってか「徹底的な掃除こそがナザリック支配への近道」という思想を有している。

『おうとも！　是非まかせてくれたまえ!!』

だから快くマタタビの頼みを聞いてくれたというわけだ。

かくしてシモベ中が大掃除を働いているであろう間に、既にマタタビは十階層玉座の間の外殻にまで到達していた。

とはいえいくら対物破壊最強の【真なる無（ギンヌンガガプ）】であろうとも、ナザリックの分厚い外殻と、そして【諸王の玉座】で強化された防壁を突破することは不可能だ。

だからここで二つ目の仕込み。

あらかじめマタタビはレベル１の一般メイド数名に精神支配をかけて、ある行

動をとってもらうように頼んでいた。
それは【諸王の玉座】にアインズ様マークが印刷されたシールを張り付けてもらうこと。
このアイテムは見た目こそ骸骨マークのアインズ様グッズに過ぎないが、効果内容はツアーの鎧を封じ込めた魔封じの高級呪符と同じものだ。
これにより、【諸王の玉座】による強化防壁を大きく弱めることに成功した。
試しに【真なる無（ギンヌンガガプ）】で弱めの破壊波動をぶつけてみれば
「うん、ちゃんと傷ついてくれてるね。攻勢防壁による反撃も来ないし」
もしマトモに【諸王の玉座】が仕事をしていれば、世界級アイテムの影響は弾かれるし、反撃によってマタタビは酷い目にあわされていたところである。
そうはならないということは、この目論見は完璧に成功したようだ。
最後に必要なのは、ナザリックそのものが持つ分厚い外部隔壁への突破方法である。
「さて破壊ポイントは……」

腕時計から照射されるナザリックの立体マップから、マーキングしていたある地点まで掘り進め接近する。

そこはちょうど玉座の斜め上に位置している、アルベドさんの私物がある場所。凝り性なタブラ・スマラグディナが彼女のために用意したデッドスペースである。

そのデッドスペースは一部外殻の内側を削るようにして作られていて、つまり構造上もっとも薄い弱点となる場所だった。本来のゲームでは内部からしか攻略できないこともあり無問題だった箇所でもあるが、無防備な平原に転移したのが致命的だった。

さらにダメ押し。薄くても厚さ１メートルはあるこの外殻だが、一撃で破壊しなければ絶対に中のＮＰＣ達に察知されてしまうだろう。

だからマタタビはインベントリから取り出した、白金色に輝く右腕のガントレットを装備した。

それは先ほどツアーと戦った時に破壊した、ツアーの駆動鎧の一部である。

「早速出番よツアーさん」

『敗者に文句の筋合い無し。いざ従おう、君の最悪な悪だくみに』

応答するツアーの声。

そしてガントレットが光り輝き、【真なる無(ギンヌンガガプ)】の黒い刀身に更なる破壊力を付与していく。

始原の魔法(ワイルドマジック)による超強化と、世界級アイテムの合わせ技。

これらな計算上一撃でナザリックの外殻を突破できる。

さぁ行こう。

ここからだ、ここから私の全てをぶつけて、この世界全てを否定しよう。

アインズ様の真なる敵を、私は決してを許さない。絶対絶対絶対に、

なぁ、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンよ。あの日の続きを始めましょう。

「【終端の叫び(ラグナロク)】」

一直線に振り下ろす、全霊と全重を乗せた最大の斬撃。

闇と光が混ざり合った混沌の波動が重厚な隔壁を切り裂いて、最後の戦いが狼煙

を上げた。

◆

00：00．5

マタタビ、アルベドの物置スペースの位置から玉座の間内部へと侵入す。

轟音とマタタビのシルエットに反応し、まず先に１００レベル階層守護者及びセバス・チャン、オーレオール・オメガが臨戦態勢の構えに入る。

しかし作戦通り清掃作業によって反応が大きく鈍っていると思われる。当該第一目標への到達は容易。

「ヴィクティムを！」

いち早く狙いを察知したシャルティアが叫ぶ。唯一彼女はフル装備で不足の状況に備えていたようだが、問題は許容範囲内だ。

00：01．0

機先を制し、不意を狙い打つマタタビはこの世界の何よりも素早い。

既にマタタビの第一歩は、ペストーニャにおぶられたヴィクティムの元へと到達

していたのである。

犬顔メイド長の意識が追い付くより速く、既に神器級サバイバルナイフは彼女の両腕を切り落としていた。

そして階層守護者随一の厄介者ヴィクティム、タネさえわかればこの場で最も無力化が容易い。

00：01・4

「〈封印術：時錠呪縛〉」

死亡と同時に足止めスキルが発動する彼への対処は、時間停止が最善だ。

クラスペナルティで一切の対策アイテムを装備できず、なおかつ自殺のためにあえて低レベルに製作された彼はこういった封殺系にとことん弱い。

対象を時間停止させる忍術で縛りつけ、スクロールの〈上位転移（グレーターテレポーテーション）〉でナザリック地表部辺りに送り飛ばす。

これにて第一目標はクリアである。

00：02・1

「死になさい!!」

直後、誰よりも早く、背後からスポイトランスで襲い掛かる完全装備のシャルティア・ブラッドフォールン。

先日の演習で手の内を晒しつくしたこともあり、現状もっとも面倒な相手の一人だ。

正面勝負で彼女に勝つことはもはや困難。

だがそもそも勝負をしかけなければ、彼女はマタタビの障害にはなりえない。

必要な手札はマタタビの中に揃っているから。

「〈口寄せの術〉『人類最強』」

「おまえはっ!!」

「……二度とお会いしたくはありませんでしたよ」

墨の和字の魔法陣から現れ出たその者が、スポイトランスの猛突弾き返す。

召喚使役忍術である口寄せの術によって呼び出されたのは、シャルティアにとって最大の仇敵。

漆黒聖典第一席次、『人類最強』そのひとである。
先日結んだスレイン法国とナザリックの不可侵条約？　そんなもの、立役者であるマタタビにかかれば簡単にひっくりかえせる。
マタタビの影分身と陽光晴天なスカッシュレモンがうまいこと根回しをした結果、鶴の一声でこいつを呼びつけるくらい訳もない。
なにせ国丸ごとを救ってやったようなものなのだから、このくらい働いてくれないと困りものだ。
「チッ！」
能力的には激しく劣る『人類最強』も、苦い思い出の残るシャルティアにとっては慎重に動かざる得ない相手。
最早彼女にマタタビを追いかける余裕は無い。
00：02：6
第二目標地点へと駆けるマタタビ。
次なる障害は頼りない大自然の死者、マーレ・ベロフィオーレ。
守護者序列第２位たる彼の魔法が、敵対者たるマタタビを滅ぼさんと放たれる。

彼の虚ろな瞳には、マタタビに対する一切の容赦も慈悲もありはしない。
「〈魔法最強化死の芽生え（マキシマイズマジックデッドジャーミネーション）〉」
召喚された植物の種がガトリング砲の勢いで弾幕を張ってマタタビ目掛けて襲い掛かる。
豆粒のようなそれが一粒でも体を打ち抜けば、血を啜り体内から成長して被弾者を串刺しにしてしまう恐ろしい魔法だ。
もっともマタタビ相手では当たらないので、豆鉄砲の域は出ない。周囲の仲間を巻き込まないように得意の範囲魔法は使い渋ってるのも見て取れる。
その小さな判断ミスとわずかな慢心が命取りだ。
さっさと任せて、手早く次へと行かせてもらおう。
「〈口寄せの術〉『絶死絶命』」
呼び寄せるはスレイン法国が最高戦力、八欲王と六大神のハイブリットによって生まれた悲劇の女。
漆黒聖典番外席次が『絶死絶命』、本名はアンティリーネ・ヘラン・フーシェさん。

ご本人どうやら強いオス様にわからされて子づくりしたい願望持ちなようで、ともすれば今日は絶好の晴れ舞台と言えるだろう。

「すごく失礼なこと考えてない!?」

「だれですか!?」

純白の聖騎士鎧をまとい巨大な戦鎌を携えた戦乙女たるアンティリーネ。

マタタビの言うとおりに事前に強化魔法をかけてある彼女の完全スペックは、階層守護者にも匹敵しうる。

マタタビに魔法の照準を向けたマーレの横面を、不意打ちざまに刈り取るアンティリーネ。しかし近接戦も可能とするマーレは容易く杖で防ぎ、今度は手段を選ばず範囲攻撃でまとめて蹴散らそうと企てる。

「〈魔法効果範囲拡大大地(ワイデンマジックアース)――」

「死せる勇者(エインヘリアル)の魂」

「えっ」

最大レベルまで極めたワルキューレにのみ許される切札スキル死せる勇者(エインヘリアル)の魂。

実際のところマーレが知るモノの劣化でしかないそれは、しかし確実に彼の意識

を目の前の敵へと縛り付ける。
ゆえに何物も、マタタビを止めることなどできやしない。

00：03：0

「マカブル・スマイト・フロストバーン！」

「悪魔の諸相：煉獄の衣！」

出遅れ組。マタタビの正体を知るがゆえに動作の遅れた、コキュートスとデミウルゴス。

各々のスキルによる氷と炎の両属性が、ようやくマタタビへと向けられた。

甘い甘い、そんなんだから、たかがマタタビに後れを取るのだ。

「〈口寄せの術〉『白金竜（リク・アガネイア）の聖鎧』」

「久しぶりだねヤルダバオト」

「……こんなところで再開するとはね」

眉間にシワ寄せるデミウルゴス。

なにせ現れ出でるは因縁深い駆動鎧。どうやらマタタビが壊した者とはまた別の、スペアが用意されていたようで。

ゆえに本日のキャストへと招いた次第だ。

浮遊する四本の巨大な神器、それぞれ分けて二本ずつが氷と炎、それぞれの一撃を防いでみせる。

その間にマタタビは抜け出して、彼一人では二人相手は心もとないので友情出演もう一本。

「〈口寄せの術〉『スカッシュレモン＆ハンゾウ』」

呼び出したのは、傭兵ＮＰＣハンゾウに布で括られ背負われたアヘ顔のオッサン。たしか陽光晴天の隊長だっけ名前忘れた。

レベル25というあまりに場違いな雑魚であるが、彼が持つタレントが今ここで大きな戦力を作り出す。なおタレント以外いらない。

「見よ！　マタタビ様より賜りし、真なる最高位天使の尊き姿を！　恒星天の熾天使（セラフ・エイスフィア）」

スクロールによって召喚できる種類では最も強い熾天使。それがレベル76モンスター恒星天の熾天使（セラフ・エイスフィア）。

赤みがかった純白の翼が計六枚、そして頭の上に浮かぶ天使の輪。
両手に握るのは燃え盛る断罪の炎剣だ。
そしてキモは召喚者であるニグンのタレント、召喚天使を1・25倍率まで強化するというバフ能力だ。
これにより恒星天の熾天使（セラフ・エイススフィア）のレベルは95相当まで上昇、階層守護者とも渡り合える。
《炎罪楽園（エデン・フレイム）》
「獄炎の壁（ヘルファイアー・ウォール）」
熾天使の放つ神聖属性を帯びた白い炎が、最上位悪魔たるデミウルゴスの業火と激突する。
そして飛び散った一片の白い火の粉がデミウルゴスの頬をかすめ、その激痛に苦悶させた。
「デミウルゴスッ！」
「蟲人くん、君の相手は私だよ」
コキュートスにもよそ見は決して許されない。

ツアーの駆動鎧が操る四本の武器たちを、コキュートスもまた四本の腕と武器によって防がなければならないからだ。

そんな彼らも、もはやマタタビの敵ではない。

第二目標地点まであとわずか。

だからこそ、マタタビだって油断も隙も与えない。

「ふぅ」

一呼吸して、見せかけの油断を釣り針に垂らし、引っかかるのをいざ待たん。

そして案の定、影から伸びるは《影縫いの矢》。

00：04・2

「〈口寄せの術〉『ドラゴンゾンビ』」

デミウルゴスとコキュートスを切り抜けたこの瞬間、マタタビはタブラの操っていたドラゴンゾンビを召喚させる。

事前に真っ二つに切り裂かれていたドラゴンゾンビを、アインズ様に変身したアクターさんの能力で直してもらっていたのだ。
そして現れたドラゴンゾンビは、見せかけの隙につられたアウラさん渾身の一射撃を悠々と防いでみせる。だてに生前竜王名乗っていただけのことはある、文句なしの耐久値だ。
「チッ!!」
アウラさんも油断したところを狙って見せるのはいい。
しかしマタタビはアウラの狙撃能力を身に染みて知っている。
一度見せた手の内が2度も通用すると考えるのは、まだまだ甘い。
「GYAAAAAAARRRRRR!!!」
「こんのやろ!!　何よコイツ!!」
知性と搦め手こそ失っているが、体力だけは掛け値なしの竜王だ。
だからこそここで活きる。
厄介なアウラさんの対処は力押しに限るから。

かくして守護者を悉く、思い通りに突破する。

個人個人としては強力だけれど、みんながもっと連携して襲い掛かってくれたなら危うかったかもしれない。

そう考えると、アインズ様に見つかる前に、トブの大森林にいたザイトルクワエを滅ぼしといてくれて本当に良かった。ありがとうアウラさん。

さもなくば、あいつが守護者の練習台となって、ちゃんとみんな連携とって攻め立ててきただろうから。

00：04・9

約5秒にして第二目標地点、オーレオール・オメガも目前だ。

最後の壁は彼女を取り囲む戦闘メイドプレアデスが6姉妹と、鋼鉄の執事セバス・チャン。

先んじて前方へと切り出すは、セバス・チャンの重厚な拳。対するマタタビ、サバイバルナイフを前に翳して、この時はじめて防御態勢をとる。
「ぎぃ!!」
見た目体重よりもはるかに重く、老人のそれとはまるで思えない極大の一撃。
スピード重視で防御力ゴミのマタタビは、武器で受けるただそれだけで意識が飛ぶような衝撃に襲われる。
だけど決して手放さない。
こんなところで負けるわけにはいかないし、こんなやつに負けたくはない。
手段だって選ばない。プライドなんてとうに棄てた。

衝撃でナイフを手放したマタタビを、セバス・チャンは欠かさず攻める。
まともに喰らえば即死であろうその一撃に、しかしマタタビは両手を開いて受け入れる。
そして笑顔で、真心こめて

「お父さん大好き！」
「なっ!?」

瞬間、セバスチャンの脳内に溢れ出した、存在しない父性。
創造主たる たっち・みー の因子を有するセバスの心が、真っ二つに切り裂かれる。
殺意、そしてそれを止めようとする二つの心がセバス・チャンの動きを止める。
さらに付け加え、善意と好意に舗装された口撃が、セバス・チャンを完全に無力化してしまうのだった。
「セバス様!!」
人間、ツアレニーニャ・ベイロンの、想い人たるセバスを心配する必死の声援。
しかし彼女の声が生んだのは、まるで虚しい逆効果。
たっち・みー由来の父性と、ナザリックに遣えるシモベとしての存在意義。
平衡していた二つの要素の天秤に、「マタタビというツアレの恩人」というファ

クターが注ぎ込まれ、著しくバランスが崩壊。
セバス・チャンの戦意が崩れ、マタタビを前にして致命的な脱力が生まれてしまうのであった。
「このエロジジイがぁあ！！！」
「ぐはああああっ！！！」
最速を誇るマタタビの、その源である強大な脚力でもってして、セバスの顎を見事に蹴り上げ脳震盪に至らしめる。
さらにパンプスシューズに付与された吹き飛ばし効果が発動し、セバスチャンは遥か天井までも叩きつけられた。

00：06.7

取り囲み、一切に襲い掛かるは最後の砦プレアデス。残念ながらどうあがいたってマタタビの敵になんてなりようもない雑魚連中だ。
しかし考えれば本来の彼女らの役割は、この玉座の間を守る最後の時間稼ぎなの

だから、自然の成り行きというか宿命のような話である。
とはいえ雑魚狩りなんて趣味ではない。
つまらないから。自分のような力のあるだけの屑が、格下を虐めても虚しいだけだ。
あるいはアインズ様のような崇高な精神を持てたなら、少しはゲーム感覚で楽しめるのだろうか？
ともかくマタタビはこの世界に来てから一度だって、戦いにもならない蹂躙なんてまるでしたことが無かった。
今だってそうだ。
「〈口寄せの術〉『蒼の薔薇』＆『アズズ』」
友情出演最終番は、王国で知り合った『蒼の薔薇』と元メンバーらしいリグリットさん。
それに特別に呼んでもらった、ラキュースの叔父であるという、アーマースーツ着込んだアズズというひげ男。
「美少女山盛り……埋もれて死にそう」

「美少年どこ？　ここ？」
「ひっさしぶりだなぁ！　メイド悪魔ども！」
「……ナーベさんが悪魔にさらわれたのは本当だったのね」
「おいおいおい、ツアーの野郎とかわいい姪っ子の頼みで来たっての、こんなやべー連中だとか聞いてねーよふざけんな！」
「ふん小童が、勇ましい鎧を被って中身が臆病とは笑わせるのぉ？」
「気を抜くなリグリット！　こいつら全員私と同格以上の強さだぞ！」

今まで集めた口寄せ連中、時間無いから呼び出すのにはホントの本当に苦労した。
影分身で人手を分けて、みなさんよく来てくれたよありがたい。
どうかほどほどの戦いで、あの子たちと遊んであげてくださいな。
まもなく決着付けますから。

00：07・5
第二目標地点オーレオール・オメガ到達。

オーレオール・オメガ、ＮＰＣ唯一の人間種であり守護者と同格であるレベル１００。
赤と白の典型的な巫女服姿の清楚な少女。
桜花聖域の領域守護者にしてプレイアデスリーダー、そして７姉妹の末妹。
そしてマタタビの最終目標である、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを守る最後の相手だ。
姉想いの性格で、姉には全員姉様とつけてよぶほどだとか。
なので姉たちの相手には死の危険が皆無な冒険者を割り振ってみたものの、さすがに気を緩める様子はなし。
能力編成は指揮官系統の魔法詠唱者。
傍に控えるのはレベル85モンスターの狐少女ウカノミタマと、同じく85レベルモンスター見た目ジブリ映画で見たような小さな白龍のオオトシ。
かわいい見た目だが両者そこそこに強いやつらで、さらにオーレオールの支援魔法がかけられていて実際能力は90以上が妥当と思われる。
しかしギルド武器を守る面子としてはあまりに無防備極まりない。

もっともマタタビがここまでナザリックの防御を剝がすまで、長い時間と優しさと数々の不運と幸運に支えられてきたので仕方のない話であると言える。
一つのギルドに侵入してから攻略するまで半年以上かかったところなんて、かつて今までなかったこだ。

そう思えばますますナザリックは本当にすごい。
アインズ様は本当にすごい。
結局こうまでしてもマタタビは、決してアインズ・ウール・ゴウンには勝つことができないのだから。
最初から理解していた負け戦だ。
だからしっかりマタタビは、持てる手札の全てを尽くして、戦いつくして負けなければいけないのである。
至高のギルド武器を相手取るなら、こちらもギルド武器を出すのが礼儀だろう。
「瞬間換装『Ｔｈｅ ｅｎｄ ｏｆ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ』」

今のマタタビが持てる最強の武器、それはついさっきツアーとの戦いで奪い取った八欲王のギルド武器である水晶剣。

ユグドラシルテイストの見た目重視な無駄な装飾、しかし実際の切れ味は天下一品。

まるで運命であるかのようにその武器は、盗賊職のマタタビにぴったり合った業物だった。

全ての御業と、富と出会いと、知恵と恵みに感謝を込めて、アインズ様に祈ります。

アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ。

00：07：6

気づけば一瞬で切り裂いていたウカノミタマとオオトシの2体。

一応急所は外しているが、もうきっと動けまい。

オーレオールを守る者はこの瞬間において誰もおらず、それは全ての終焉と始ま

りを意味している。
一歩踏み出し、刃を振るう。
本当に申し訳ないが一旦は邪魔なので、彼女の両腕両足、それに喉元をマタタビは切り裂いた。
そして首を絞めながら反対の手で彼女の懐に手を当てて、マタタビお得意のスキルを発動。
「『最上位窃盗』」
彼女のインベントリにアクセスし、待ちに望んだ希望のソレを力いっぱい引き出した。
手に取ったそれを見て、スキルで解析し贋物でないことを確認した。

これに手全ての工程終了。最終目標クリアである。
00：08：0
スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン、確保完了。

エクレアの反逆

先へ進めねぇ!!

玉座の間への侵入から死の８秒間を乗り越えて、目的物であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手にしたマタタビは、甲高く声を挙げてギルド武器を床へと強く叩きつける。

「お静まりください!!」

そしてカキンッという金属音に呼び止められた、この場にいる全ての者たち。

ＮＰＣの皆様方もツアーもドラゴンゾンビも蒼薔薇も法国のお三方も等しく争いの手を止めて、マタタビ一人へと注目した。

殺意、絶望、困惑、怒り。様々に織り交ざったＮＰＣ方からのネガティブな心情をスルーして、マタタビはその辺に落ちて気絶していたイワトビペンギンのエクレアさんを掴み上げる。……しかしメイド達ですら意識を保っていたのに弱すぎないかこのペンギン。

「むぎゅ!?」

そしてアインズ様の特等席たる【諸王の玉座】に飛びずさり、玉座上にエクレアさんを放り投げてから、マタタビはひじ掛けの上に座り込む。

なお座り心地は悪い。

続いてマタタビは指を鳴らし、するとギルド武器を拿捕されて動くに動けないＮＰＣ皆様をしり目に、マタタビが口寄せで呼び寄せた評議国、法国、王国のエキストラ皆様も示し合わせて玉座前の階段へと整列した。

ツアーやアンティリーネさんはまだしも他の連中はナザリックの兵力に比して見劣りするのだが、こういうのは雰囲気が大事だ。あのアインズ様だって何よりも雰囲気を大事にしていたから。

ああ、しかし緊張するすごくおなか痛いトイレ行きたい。

全ＮＰＣの集結を見るのはカルネ村からの凱旋以来。アインズ様がアインズ様として名前を変えられた時だけだったけど、よくこんな連中に囲まれながらあの小心者がああも堂々と支配者としての振舞いを崩さなかったものである。

本当に常軌を逸している演技力だ。この世界に来なければ生涯日の目を見ることのなかった、異能とも言うべき資質だろう。

マタタビは、この世界に来てからいつも遠目で眺めていたアインズ様の姿を思い起こし、武術の理をトレースするのと同じ意識で自分の意識に彼を重ねる。

彼の足元にも及ばない猿真似だけど、それでもマタタビは分厚く温かいモノに覆われたように心強くなる。

そして、声を挙げた。

「まずは、偉大なる玉座の間に騒音をもたらしたことをお詫び申し上げます。壁面などの破壊行為と、それからセバスさん、オーレオールさんとその配下２名、ペストーニャさんにも怪我を負わせてしまいました」

多少の悪びれを込めた声でマタタビは陳謝した。もっともこれはあくまで建前上の謝辞であり、ようはマタタビがナザリックに対する純粋な敵対者ではないことを

示すためのものに過ぎない。
ケガを負わせたといっても精々顎狙いで脳震盪させたり四肢を切り取って無力化させた程度のものだ。能力の性質上この場から追放したヴィクティムにしたって、時間停止で固めてるだけで一切の危害は加えていない。
マタタビがその気になればこの程度の被害では済まないことを、特に守護者の皆様方はご存じのはずである。
マタタビとしても無暗に暴れまわって対話の余地を無くすのは望むところではなく、まずは皆様にそれを理解してもらわねばならなかった。
そして周囲からあからさまな抗議の表れがないことを確認し、マタタビは深く安堵する。
マタタビは続けた。
「こちらの要件を済ませる前に、シャルティアさん」
「何よ」
「怪我を負わせてしまった5名を治療してあげてください」
「……わかったわ」

廓言葉が一切ないシリアスモードのシャルティアさん。
マタタビを射殺さんばかりに鋭く睨みつけているものの、不肖不肖ながら要求を受け入れて手早く5名の傷を癒してみせた。
「……さっさと話しを進めなさいよ」
伸びた八重歯を唇に突き立て、血涙を流すように噛み締めるシャルティアさん。
その暗い心情は察するに余りある。愚かな彼女はマタタビ一人を心底憎めば済むものを、それ以上に2度も同じ敵に出し抜かれてしまった自分自身を許せないでいるようだ。
彼女のそういうストイックなところが、マタタビはあまり嫌いではない。
「もちろん、ありがとうございますシャルティアさん」
負けた結果は結果だ。とはいえそれは、ＮＰＣの皆様方がマタタビ如きに劣るというワケででは決して無くて。
あえて言うなら、彼ら彼女らが本当の意味で出し抜かれたのは、整列する現地世界住人の方々でもマタタビでも無くて、玉座の上で気絶しているイワトビペンギンさんなんだけども。

マタタビが本題を切り出そうとした直後、タイミング悪く気を失っていた彼が目を覚ましてしまったのだ。

◆

「ほぇ!?　これはゆめですかっ！　なにゆえ私が玉座の上に!?　しかも一同が会するこの場において！」

寝ぼけて手足をばたつかせているエクレアさんを宥めるように、マタタビはその愛くるしいペンギンの頭をなでた。……少々シズ・デルタさんの視線が怖い。

「夢は夢でも正夢ですよエクレアさん。こうして私がギルド武器を確保できたのは、エクレアさんがここで掃除大会を開いて、皆様の緊張を緩めてくださったおかげなのですから」

「クエェーーッ!?」

マタタビが片手に持ったギルド武器を見せてやると、エクレアさんはペンギン声

を出しての大驚愕。ガチで驚くとそうなるのねあなた。

そしてようやくＮＰＣの皆様方は彼の行動の意図を理解して、裏切り者へ向ける最上級の侮蔑と憎悪を煮え立てる。

エクレアさんたまらずこれには鳥肌を立てます、鳥だけど。

「ひっ!?」

彼らの怒りはごもっとも。とはいえ――

「騙されるほうが悪い。そのくらいのことは皆様だってわかっているでしょうけれど」

そのようにマタタビが口にして窘めるまでもなく、ＮＰＣ皆様方の感情は反省色に染まっていた。

マタタビが彼らの立場でも、やはり怒りより先に自己嫌悪が来るだろう。

なにせ普段からナザリックの簒奪を企て、それを公言していた雑魚ペンギンの口車にホイホイ乗っかり間抜けを踏むなど、死にたくなるに決まってる。

それにエクレアさんの「ナザリックの簒奪を企てている」という設定は あんこ

ろもっちもち が与えたものであり、創造主を重んじるという価値観に則れば、彼の個性が責められる謂れはないのだから。

しかしこの場においてたった一人だけ、その設定に真っ向から否定をぶつける者が居る。

おかしいな話だが、それはエクレアさん本人なのである。

レベル１バードマン世界最弱のエクレア・エクレール・エイクレアーが、曲がりなりにもナザリックを制圧した主犯格にして共犯者であるマタタビを責め立てるのである。

「なんてことをしてくれたんですかマタタビ君!!　折角!!　ナザリックが総力を挙げて玉座の間を大掃除していたというのに!!　君は偉大なるナザリックに大穴を開け！　埃を飛ばし！　皆の努力を逆手にとって悪用しこのような大逆を働くとは!!　ナザリック地下大墳墓：執事助手がエクレア・エクレール・エイクレア、断じて貴女を許しません!!」

魚臭い唾液を飛ばし、エクレアさんはマタタビに激怒する。
このとき、エクレアさんのつぶらな瞳は明らかに狂気色に染まっていた。いつぞやのアルベドさんと同じくらい、正気とはかけ離れていた。
「何を言ってるのですかエクレアさん。私があなたに掃除大会のことをお願いしたのは、他ならぬナザリック簒奪の野望を叶えるためだと、そうお伝えしたではありませんか。私はあなたに一言一句、嘘を申し上げたつもりはありませんがね？」
マタタビとエクレアの問答に、静まっていた玉座の間が僅かに揺らぐ。
参列している現地勢皆様は「いったい何の茶番を見せられてるんだ」という困惑模様。
対照的にＮＰＣの皆様からは、信じられない者を見るような、大きな動揺が広がり始めている。
今エクレアさんの中で起きているのはとても小さな、しかし何よりも重要な奇跡なのである。
「エクレアさんは あんころもっちもち様からナザリック簒奪という、何よりも尊

い使命を授かったではありませんか。私は、マタタビは、誰一人成し得なかったその無謀な野望を、こうして実現してみせたのですよ？」

マタタビは腕をかざして、エクレアさんの視線を玉座の間全体へと向けさせる。

手前に並んでいるのはこの世界の周辺国家である、スレイン法国、アークランド評議国、リ・エスティーゼ王国がそれぞれ誇る最高戦力。

そんな彼らとマタタビの策略により、今こうして無力に立ち尽くすことしかできないでいる、ＮＰＣの皆様方。反対の手にかざすのは、勝利の証であるギルド武器。

「力を蓄え、情報を集め、手駒を呼び寄せ、戦略を練り、機会を伺い、不和を起こして、不意を衝いて。そして最後には他ならぬエクレアさんのお力添えをいただいて、こうしてあなたを玉座に据えることができたのです。であるにもかかわらず、一体何が不満だというのですか？」

心の底からマタタビは、彼の答えが聞きたかった。

きっとエクレアさんの言葉は期待通りに、マタタビが心底望むものに違いないであろうから。

「違うのです!!　こんなの絶対違うのです!!　きっと！　たぶん！　あんころもっちもち様はこんな形でのナザリック簒奪を望んでなんかいないのです！　もっとこう！　なんかこう！　掃除によって！　ナザリックをピッカピカにしてみんなの尊敬を集めることで？　認められて！　ほめそやされて！　ちやほやされて!!　そんな感じできっと！　なんかこうナザリックの頂点へと昇り詰めるのです！　それこそが我が創造主が望んだことなのですきっと！　たぶん絶対！」

血走った目。うわずったくちばしから零れ出たのは、まるで論理性のかけらもない、子供の妄言よりも遥かに劣るうわ言だった。

「なにを言ってるんですか」

「ぎゅむぅ！！？」

これ以上唾を飛ばされるのが不快なので、マタタビはエクレアさんのくちばしをつまんで閉じて、そして腕を回して抱きしめる。

なんて愛らしい奴だろう、シズ・デルタさんが可愛がるわけである。

「気づいてないなら教えてあげましょうエクレアさん。あなたはね、本当はナザリックの簒奪なんてやりたくないんですよ。だから「掃除こそがナザリック支配に連なる近道である」なんて屁理屈で自分を騙していたの。つまりあなたは創造主である あんころもっちもち様の命令を、絶対に叶わない手段を選ぶことで拒否してたってこと。アインズ様の宝物である、このナザリック地下大墳墓を守るためにね」

エクレアさんは あんころもっちもち の指示を拒否している、口だけの反逆者だ。

もっともこんな事実、マタタビだってかなり前からわかっていた。

だってもし「ナザリックの簒奪」を本気で遂行しようとするなら、大声で周囲に喧伝すること自体が大間違い。

本気でやるなら、いつぞやのアルベドさんや今のマタタビのように表には出さず、いざという時を待ち続けるものである。それはレベル１００でもレベル１でも変わらない話だ。

「何をどう考えても、エクレアさんの言動からは野望を達成しようという気概がまるで感じられませんよね」

「嘘だ嘘だ違う違う違う!!」
「ちなみにどうやらアルベドさんも、最初っからそのことをわかってたみたいですよ？　だからあの人は私をあなたに任せたの」
「なんですと!!」

この世界への転移当初、アルベドさんが正体不明の不穏分子であるマタタビをエクレアさんの下に付けたのは、実は深い考えがあってのことだった。
もし仮に(というか実際そうだったが)、マタタビがナザリックに仇成す存在だったとしたら、同じ魂胆であるらしいエクレアさんに共謀を持ち掛けるのは必然的行動と言える(実際そうした)。
ところがいざマタタビ側から現実的な反逆計画を持ち掛ければ、反逆者(笑)でしかないエクレアさんは今のように拒絶して、結果マタタビの反逆の尻尾が出てしまうという訳である。
不穏分子は手元で管理するほうが安全とはよく言ったもの。
流石アルベドさん、略してさすアルと言ったところだろう。

「私を放せ！　掃除もろくにできぬ薄汚い反逆者め！　放せ放せ放せ!!」
「いいですよもう。本当によくわかりましたから」
「ぎゃっ!?　ぐぇ……すぴー　」
これ以上彼を虐めると自我崩壊を起こしかねない。アインズ様みたいに〈記憶操作（コントロール・アムネジア）〉を使えれば融通が効くけどそれもないし。
マタタビはパクパク煩わしいくちばしに睡眠薬を放り込み、エクレアさんを黙らせる。
「丁重にお返しします」
それから影分身を作ってエクレアを持っていかせて、両手を伸ばすシズ・デルタさんは無自覚に彼を絞め殺すのでシカトして、創造主が同じであるペストーニャさんに差し出した。
「エクレアさんを責めないでくださいね？　私が一方的に利用しただけです」
「そんなことわかっています!!　……わん」
ペストーニャさんはひったくるようにエクレアさんを抱え込み、そして大事な弟

のように優しく強く抱きしめる。
そんなメイド長の様子を、普段はエクレアを小ばかにする一般メイド達も思うところがあるように、じっとりとした眼差しで見守るのでした。

◆

エクレアさんが離れた玉座に、今度はマタタビが座り込む。
少女用に造られてないので座高が合わず両足が浮き、大変座り心地が宜しくない。
マタタビが座っていい場所でないことくらい嫌というほどわかっているが、だからこそ見せつけてやらねばならないのだ……のだ。
「仮にも私に勝った君が無様なところを見せないでくれ。ほらこれで足が届くだろう」
「……ごめんツアー」
ツアーがどこからともなく取り出してくれたのは白金色の台座。多分始原の魔法（ワイルドマジック）由来のマジックアイテムだ。秘めたる魔法効果はわからないけど、とにかく台座のおかげで足が届いてありがたい。

「本当ダメだな私ってば」
まったくもう、アインズ様みたく意地を張って見せようにもコレだからマタタビは締まらない。
エクレアさん虐めてあんなに調子乗った小娘が、大事なところで怖気ずいて強張って、いったい何様のつもりだろう？
本題もいい加減切り出さないと、時間だって無限じゃないのだ。
「さて余談を挟んでしまいましたが、実は全く無関係とも言えないのですよ」
さっきは あんころもっちもち を拒絶したエクレアさんのお話。
続いては、更に皆様にショッキングな最悪の話題。
「実はですね、実は……」
喉元が強張り、舌が固まって動かない。

だって今私は、アインズ様がこれまで積み重ねてきた偉大で美しい道筋を、肥溜めに叩き落とすような暴挙に及ぼうとしているから。

ずっと、どれだけの迷惑をかけようが、この一線だけは超えないように線引きしていたのだ。

「実はですね、」

それでも結局私は自制が利かない。

身勝手に、自分で決めたルールでさえも突き破る。

救いようのないロクデナシにも、救えるものがあるのなら、クズでよかった、かもしれない。

「デミウルゴスさんは気が付いていると思いますが、レメトトンのゴーレムが制御不能で外に出れないというのは、アインズ様の真っ赤なウソです」

言った。

「実際は、とある至高の御方がナザリックに反旗を翻したため、その脅威からＮＰＣの皆様を守るために隔離していたというわけです」

言ってしまった。

もう本当に、後戻りすることはできないのだ。

◆

「嘘だ！　嘘をつくな!!」

誰だろう。誰かが叫んだ。

男だろうか女だろうか。人型なのか異形なのか、一人なのか複数人か、半ば朦朧としているマタタビにはまるで判別つかない。

「嘘、嘘ね」

そりゃ部外者で侵入者なマタタビがそんな戯言を叫んだところで、誰も信じはしないかね。アインズ様じゃあるまいし

マタタビは、嘘をつく才能が欠片も無いのに。
「全部嘘だったらば……よかったのにね」
無造作に、インベントリに手を伸ばし、取り出したのは一本のフラスコ。
遠目に見ていたソリュシャン・イプシロンさんが叫び、一部一般メイドも反応する。
「それはヘロヘロ様の!?」
「……本気だねマタタビ」
どす黒いその液体は、横のツアーにも馴染み深い最強酸『黒凝塊の酸（アシッド・オブ・ブラック・プディング）』。
ブラックマーチことヘロヘロが誇る古き漆黒（エルダー・ブラック・ウーズ）の粘体の武器破壊アイテムだ。
マタタビはフラスコのキャップをキュポンと搾り取って、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンへと振りかけた。
じゅうと焼け付く音に、白い煙が立ち上る。

黄金に輝くスタッフは穢れた橙色に錆びついて、その耐久値を大幅に減少させた。

「やめろぉおおおおおおお！！！」

当然のように誰かが叫んで、そして今度は別のだれかが叫んだ誰かを取り押さえようとする。これ以上、不用意な言動でにマタタビを刺激するのはまずいと判断したのだろう。

しかしギルド崩壊の寸前を目の当たりにして落ち着いていられるほど、彼らの人生経験は豊かではない。続くように誰かが騒ぎ、誰かが抑え、バケツの水面が揺れ動くようにまるで納まりが利かない。

「お静まりください!!」

だからマタタビは、壊れかけのギルド武器をコツンと床に突きつけて、腹の底から叫ぶのだ。

「嘘じゃないから、聞いてください」

信じてくれたかはわからない。それでもようやく一帯は静まりかえった。

こんなことを打ち明けるのに比べたら、命がけでツアーやＮＰＣ達と刃を交えた時のほうがずっとずっと楽だった。

アインズ様はこんな気持ちと、ずっと向き合い続けたのだろう。

同じ調子でマタタビがやったら三日で胃がつぶれて死んでしまう。

何度も何度も彼の偉大さを繰り返すように咀嚼して、それからマタタビは情けないため息をついた。

本当に自分が情けなかった。

「本当に、本当です。至高の四十一人のとある誰かが、アインズ様とナザリックに反旗を翻したんです。今はすこし落ち着いてあのひとも休憩してるけど、アインズ様を狙う脅威は今も健在です。だから……だから」

「もう結構マタタビ君。否、マタタビ様。貴女様の言いたいことはよくわかりました」

「……デミウルゴスさん」

マタタビの言葉をさえぎって手を挙げたのは、つんつん頭のデミウルゴスさんだった。それと、様呼びはうざいからやめて欲しい。

「あなた様は間違いなくナザリック地下大墳墓の敵対者です。しかし同時に、誰よりもアインズ様の味方なのでしょう」
「いや……あのね」
「貴女様がギルド武器を奪い取り、あまつさえこのように破壊をちらつかせてきたのは、ひとえにアインズ様を守るため。
　至高の御方同士の戦いにおいて、足元をすくませ参加することのできない我々シモベを脅迫し、アインズ様の味方として従わせるためなのでしょう」
「ちょっと……ねぇ」
「常々不用心で身勝手な輩だと偏見の目で見ていましたが、アインズ様一人を想う者としてマタタビ様の御心の深さに、このデミウルゴス感服しました」
「ちょっと……かなりちがうよ？」
「どうかマタタビ様、その痛ましい御心に更に鞭打つようで心苦しくありますが。どうかその反逆者たる至高の御方の、御名前を仰ってください。
　さすれば今すぐ、この場にいるその被造物を抹殺したうえで、アインズ様の前にはせ参じてみせましょう。ですから――」

「だからちがうって」
「ちが……!?　失礼早計でした」
「……うん」
この人の早とちり癖まだ治ってないみたいだね。
もっとも、こうして面と向かってすぐ否定すればなんてことないんだから、困らされているアインズ様も自業自得だ。
「ぶふっ！」
ちょっと感慨深く思っていると、どこからか吹き出すような声が聞こえる。音源を見ると案の定白髪タキシードのエロジジイだ。
「……セバスさん空気読んでよ」

「ていや!!」
マタタビが軽くたしなめると同時に、セバス・チャンの背後から誰かの木刀が振りかぶられて後頭部を強く叩かれる。とはいえ木刀、しかも殴ったやつが殴ったやつだから、かえって木刀のほうが折れてしまった。

「今のはセバス様が悪いです」
反抗に及んだのはメイド見習いのツアレさん。
彼女の渾身の一撃は物理的なダメージこそないものの、しかとセバスさんの心に響いたようである。
「……大変失礼しました、デミウルゴス様」
「ああうん、その……いいよ。そちらの御夫人も随分たくましくなったね」
「ええ……まぁ」
まさかセバスさんに切り込むなんて、ツアレさんもいつぞや王国でボロ雑巾にされてたころから随分たくましくなったものだ。いったい誰の仕業だろう。
「……なんて言ってる間に随分しらけちゃったけど」
ああくそ、進行がグダグダ。時間が無いのに、やっぱりマタタビはアインズ様のようにはうまくいかない。
それでも言わなきゃ前に進まない。だからマタタビは言葉を紡ぐ。

「聞いてください」

アインズ様を取り囲む、まるで誰かの悪意を感じさせるほど絡まった、勘違いと行き違い。

それを一歩一歩と、拙い手でもほどいて進む。そうしなければ進めない。

「私の目的は、このギルド武器を破壊することです。

ギルド武器を破壊することで、皆様の中の創造主への忠誠心を消し去って、アインズ様だけの味方になっていただきたいのですよ」

◆◇◆

マーレ・ベロ・フィオーレ

ほんとは勢いで展開流しても良かったんですけど
やることがやることなので大事にしていきたいなって下心が出ました。
カタルシスまで遠いです。もうちょっとグダります

この世界で最も美しいものとは何か。
もしマタタビが問われたならば、心の内で声高く「アインズ様」と答えるだろう。
マタタビは、彼ほど一途に何か一つを執着し、深く愛する人を知らなかった。
アインズ様は愛する者たちを守るためなら、あらゆる外的、あらゆる味方、自分の心も蹂躙し、どんな悪よりも黒く染まる。
ためらいもなく人を殺し、裏切り、あるいは時に自分の心も切り崩して、がむしゃらに味方の利益だけを尊重するのだ。

そんなアインズ様の行動を、人間性や善悪で語ることなどナンセンスだ。
汝隣人を愛せよ。
その人の、一番大切なものを守り抜くこと以上に正しいことなんて、この世界には無いのだから。
お人好しなマサヨシも、その悪影響を受け継いだマタタビも、無駄に目移りばかりで大切なものを取りこぼしてばかり。
善行という名の醜く浅ましい自己満足に、神が報いることは決して無い。
故にこそどんな善や正義よりも、アインズ様の信念は尊く正しく美しい。
マタタビは心の底からそう思う。
これこそが、アインズ・ウール・ゴウンを名乗る友人に抱く、マタタビの秘められた敬愛だ。
きっとこの世界のだれにも何にも、アインズ様にだって理解されることは無いだろう。
別に良かった。それでよかった。
私は幼稚で歪んだ自己完結を胸に抱いたまま、アインズ様の前から姿を消して元

の世界に戻るだけでいい。

そうして２度と会えなくなっても、きっと次元を超えた向こう側では彼の信念が揺らぐことは無いだろうから。

きっとこれからもアインズ様は自らを蔑ろにし続けるだろうけど、その時はアルベドさんを含むＮＰＣの皆様方が咎めてくれると期待しよう。

最初のころはアインズ様ともアンジャッシュしてばかりだった彼ら彼女らも、今では真摯にアインズ様の御心に向き合おうと懸命に努めている。

意固地なマタタビと違って、日々目まぐるしほど成長を続ける彼ら彼女らだ。マタタビが余計な口を挟まなくたって、きっとみんなうまくやることだろう。

◆

「「なんて、わかってますよ。こんなの私の……身勝手極まりない我儘な期待だっ

てことくらい」」

玉座の間に座すマタタビは、そして【山河社稷図】内部の影分身も、異口同音に独り言ちる。

『……』

マタタビの眼下に屈するＮＰＣ皆様方は、そして影分身と向かい合うアインズ様も、今は黙って聞くだけだ。

ギルド武器という首級を抑えられた彼らには、選択肢なんて残されてないから。脅した成果だとわかっていても、私は彼らの拝聴にただただ感謝するばかりだ。せめてソレに報いるために、私はなるたけ理路整然と話すことに努めた

「私は、許せなかったんです」」

◆

ニグレドがアインズ様とナザリック全てを裏切ったと知って、それが当然の帰結だと理解してもなおマタタビは、深い失望の念に囚われていた。

【創造主への優先】という忌まわしき法則。

何があってもＮＰＣは自身の製作者のことを優先する。たとえどれだけアインズ様が彼らのために支配者として尽くしても、ＮＰＣがアインズ様のことを深く愛しても、製作者がアインズ様を裏切るように言えばＮＰＣは従わざる得ない。

それはさながら魅了魔法にかけられてしまった傀儡のようであると、マタタビは思う。

会話したことも理解もしていない相手に、ただ創造主だからというだけで無条件に忠誠と愛情と服従を誓うというのだろうか。

確かに、元はと言えばアインズ様との関わり合いも同じような形から始まったけれど。

でもアインズ様は、誰かに造られただけの服従関係を、そのままで受け入れようとはしなかった。

突如動き出して忠義を尽くそうとするＮＰＣ。そんな彼らの価値観を一人一人重んじて、無理に従わせるでもなく、邪険にするでもなく、アインズ様は宝物のように扱った。

彼らが進んで仕えたいと思うような理想の支配者を演じて、感謝を忘れず、褒美と罰をしっかり与え、親のように成長を見守り、ズレのある価値観も寛大に受け入れ、仇成す者は過剰なまでの報復によって叩き潰す。

誰にもできることではない。この世界でアインズ様にしかできなかったことだ。

もし仮に他のギルドメンバーがアインズ様に伴っていたとしても、アインズ様ほど深く愛することは無かっただろうと確信できる。

そんなアインズ様を創造主なんかのために裏切るだなんて、なんて不条理な話だろう。

【創造主への優先】だなんて、それが世界の真理だとでもいうのだろうか。

きっと、アインズ様は優しいから仕方ないと受け入れるだろう。

ニグレドのことも、自分らの争いに巻き込んで申し訳ないとか思ってるんだろう。

恩に仇、裏切りに傷ついた自分の心なんてそっちのけで、慈悲を与えようとする

のだろう。

そして悲劇は、これだけにとどまらない。

「「臆病者のアインズ様のことです。今でこそ庇護対象である他のＮＰＣの皆様も、創造主との対立を考慮して無意識に潜在敵として認識していることでしょうね」」

守るべき宝物でありながら、いつか敵になるかもしれない相手。

彼はそんな矛盾した庇護意識を当然のように受け入れて、葛藤することもなく飲み込んでしまっている。

このままでは不条理な心理的一線が、アインズ様とＮＰＣの間に残り続けることだろう。アインズ様が死んでナザリックが滅びるその時まで。

つまり未来永劫ずぅーっとだ。

「「だから考えたんです。どうしたらＮＰＣの皆様方が、アインズ様を一番に優先

できるようになるんだろうって」」

そのためにマタタビは、プレイヤーとギルド拠点にまつわる情報をがむしゃらに集め続けた。

蒼薔薇のリグリットやイビルアイから魔神戦争の様子を。

スレイン法国からはＮＰＣとプレイヤーの文献を。スルシャーナが自ら作り上げた副官の死の支配者（オーバーロード）から六大神たちの実際の動向を。

ツアーからは八欲王と六大神の幅広い情勢を。

もちろんこの世界に４００年滞在したタブラからも。そんな彼に頼んで会わせてもらった、ネコさま大王国の生き字引であるパーミリオンまで直接事情聴取に及んだ。

「「調べましたとも。時間をかけて精査して、正確な情報だけを搾り出すには苦労しましたけど」」

結果、ただ一つの方法がマタタビの前に示された。

「「それこそが、ギルド武器であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを破壊して、ギルド：アインズ・ウール・ゴウンを滅ぼすことだったんです」」

◆

この異世界においてギルド武器の破壊は２回だけ確認されている。

１度目は約６００年前、ギルド：ネコさま大王国において。

２度目は約２００年前、スレイン法国の六大神において。

この２回どちらにおいても副作用として拠点ＮＰＣの自立化が引き起こされた。具体的に言うと、彼らの中のプレイヤーへの「忠誠心」が失われて、言動に大きな変化が起きたのだ。

２００年前においてこの状態の彼らが「魔神」と呼ばれ暴れまわったことから、ＮＰＣが自立化するこの現象を仮に【魔神化】と定義しよう。

２００年前の【魔神化】は現地住民において『魔神戦争』という名で歴史に深く刻まれている。

記録において、種族様々な数多くの魔神達がこの世界に癒えない爪痕を残したとされている。そして彼らはマサヨシ燈子ツアーなどの十三英雄と呼ばれる屈指の異種族連隊と長い戦いの末に滅ぼされた。

なおスレイン法国のトップシークレットにおいて、法国の記録で確認された六大神のＮＰＣ（従属神）と十三英雄達が確認した魔神達の特徴は多くが一致したのだとかなんとか。六大神の伝承は長い歴史を経て色濃く残っている一方で、従えるＮＰＣの具体的な伝承が殆どないのはこの事実を隠蔽するためだったらしい。

これこそが六大神のＮＰＣ＝２００年前の魔神であるという状況証拠だ。

しかし上記が正しかったとするなら不可解な点がある。

いくら十三英雄がマサヨシやツアー含む現地住民の実力者であったとしても、ギルド拠点ＮＰＣの戦力を根絶やしにすることなんてできるのだろうか。

魔神達が各地に分散していて、それぞれの個体を袋叩きで各個撃破するにしたって、高レベル帯の相手はプレイヤーですら手こずるだろう。

この重大な疑問はイビルアイの証言によって解消された。

『たしかに魔神達の力量は我々各員を大きく上回り、仲間との連携を駆使してなお苦しい戦いを強いられた。それでもどうにか勝利をつかむことができたのは、魔神達の中に生きる気力がなかったからだ』

どうやら魔神達は心神喪失状態にあったらしいのだ。

つまり【魔神化】によってＮＰＣの人格形成の根幹である「忠誠心」が失われた結果、精神のバランスを大きく損なって戦闘能力にも大きなマイナスを与えたのか。

もっと飛び越え、戦意そのものが失われていたというならば、不可解な戦力比も十分に納得できる。

ツアーも同様の証言をしてくれた。

『今では英雄などと謡われるがその実、やっていることは介錯人だったというわけだ。もちろん容易い戦いなど一度として無かったし、仲間たちのことは今でも誇りに思っているけどね』

２００年前のケースから統合すると、【魔神化】によって「忠誠心」を失ったＮ

ＰＣは、精神のバランスを崩して取り返しのつかない深い心神喪失状態に陥ると結論付けられる。

ところが６００年前のケースでは、２００年前とは【魔神化】の様子が大きく異なっていたという。

６００年前当時、カッツェ平野の獣人国家を統治していたギルド：ネコさま大王国は、人類国家を統べていた六大神と激しい戦いを繰り広げ、果てに壊滅した。プレイヤー同士の愚かしい歴史だ。

ネコさま側の所属プレイヤーは全滅。六大神がギルド武器を破壊したことで、この時世界初の【魔神化】が引き起こされた。

２００年前のケースに倣えば、ネコさま大王国に残されたＮＰＣも「忠誠心」を失って自失状態に陥り、残党狩りによって瞬く間に滅ぼされることになる。

ところが、この時の情勢を直に知る元ＮＰＣパーミリオンは、２００年前とは大きく違う当時の出来事を証言したのだ。

『あの時おれは陰に隠れて、敵討ちに無謀な反撃を伺っていたんだが、その時だ。突然、胸の中から何かがスルっと抜け出ていくような、恐ろしい喪失感と寒気に襲われたんだ。怖くなってたまらなくって、大声で叫びたくなったけど、アンデッドとしての特性で感情が抑制されたからどうにか堪えた。

死にたくなかったんだ。こんな感情初めてだった。

ありえなかった。どうしてかって、直前まで自爆して道連れ上等だったんだから。守り切れなかったハウスのご主人様の仇討ち。そう思ってたのに。まるで嘘みたいに無くなっちまった。

そんで、おれは本能で理解した。

このハウスはもう終わっちまったんだって。

そして本当はおれは、ハウスのこともご主人様のことも、どうでも良かったんだなって。

んで、アンデッドであるおれはどうにか感情を抑えたけど、周りの仲間たちは違った。

虚無感がものすごかった。
胸の中の大穴をごまかすように、にゃーにゃ―喚いて、泣きじゃくって。
中には呼吸を忘れて窒息死した奴もいたっけな。見てらんなかった。
でもな、それだけじゃなかったんだ。

猫たちも割と大事にされてきた連中だからな。仲間の猫たちの中には、ハウスのご主人様への想いを忘れられない奴がいたんだ。俺はそうでもなかったけどな。
そいつが一匹「ギャー！」って叫んで、そしたら周りの奴らにも伝播して、みんなの心が復讐心が宿ったんだ。
そっから始まるのは第２ラウンド。
主人を失った猫たちの、血を血で洗うような自爆上等のゲリラ戦。
失うものが無い我が身を顧みない猛攻は、六大神とその配下連中に手痛い損害を与えて逝ったのさ』

【魔神化】による「忠誠心」喪失の後に巻き起こった、プレイヤー勢力を手こずら

せるほどの猛反撃。
アンデッドであるパーミリオンは特殊例として除外するにしても、猫の祟りとでも言うべきその現象は、十三英雄に討たれた２００年前のソレとは全く異なっていた。
パーミリオンの証言を鵜呑みにするならば、ネコさま側のＮＰＣは「忠誠心」がなくなってもなおプレイヤーとの絆が残り続けていたということになる。
その点、無為な暴力装置に成り果てた六大神のＮＰＣとはまるで違う結末だ。六大神側のＮＰＣにだって、八欲王の天空都市という遺物がうってつけの復讐対象として残されていたというのにである。
２００年前と６００年前。
この【魔神化】における二つのケースの差異とは何か。
ＮＰＣの【魔神化】後の行動は何によって決定するのか。
それは決して、難しくも複雑でもない当然の帰結だった。
【創造主の優先】よりははるかに理にかなった現象である。
「六大神側とネコさま側のＮＰＣの大きな違いは、プレイヤーから与えられた境遇

の差です。あえて安直に言い換えるなら、愛情の差とも表現することができるでしょう」

◆

六大神筆頭スルシャーナの手記の記述及び、彼がスキルによって手ずから制作した死の支配者（オーバーロード）の証言によると、六大神側のＮＰＣの境遇は最悪と言っていい有様だった。少なくとも現行のナザリックとは比べられないほどの惨状である。

ただ前もって六大神のことを弁護させていただくが、決して彼らは自身を慕う者を意味もなく無碍に扱うような軽薄な人物ではなかった。あえていうなら力を与えられて多少歪んだだけの、どこにでもいる現代人でしかなかっただろう。

だからこそ、常人たる彼らは現実化した拠点ＮＰＣという常識破りな存在とは解り合うことができなかったのだ。

訳も分からず異世界に飛ばされたプレイヤーは、突如動き出し自我を得たＮＰＣという存在を目の当たりにして、必然的に恐怖と困惑が先に来る。よほどの能天気

者でもない限りは。

そして理不尽なほどの深い忠義を尽くし始めるＮＰＣを前に、困惑はより深まることだろう。

徐々に慣れて距離感を詰めて行こうとすれば、やがてＮＰＣとプレイヤーの埋めがたい価値観の差が露になる。

未知なる異世界に飛び出そうと思えば、「御身の安全」を心配されて、大冒険は窮屈な大名行列に様変わり。

現地人との新たな交流に胸を馳せても、現実は過保護な保護者が高圧的な態度で挟まり込んでうまくいかない。

実像とかけ離れた盲目的な狂信は、される側からすれば鬱陶しくて仕方がない。

自我を持つことを想定されず、思い付きで人格破綻者として設定されたＮＰＣもいたことだろう。

そうでなくても現代人にはマイナスカルマ値が現実化するだけで面倒だ。

もちろん六大神らも少しでもすれ違いを減らそうと努力を試みはしたのが、しかし様々な偶然や間の悪さなどが積み重なって、結果的には失敗に終わってしまうの

だった。

そして次第にＮＰＣを邪険に扱う空気が流れ始め、愛想を尽かされたＮＰＣ側がどうにか主人の心をつなぎとめようと暴走し、それがまた絶妙にずれて空回りを繰り替えし、最悪のスパイラルの完成である。

その果てに出来上がったのが、現代人には窮屈すぎる六大神という称号だったのだ。

「スルシャーナは手記や副官のヤツに「自由になりたい」とか愚痴ってたみたいでしてね。もちろんＮＰＣも両者気の毒な話です。後に「忠誠心」まで失って、だから彼らは虚ろな暴徒に成るほかなかった。

その点ネコさま大王国は色々と運がよかったのです。連中ドのつく猫好きでしたから」」

六大神が１００年かけてＮＰＣと相互不理解を拗らせてしまった一方で、ネコさま大王国がその惨状を脱がれたのはギルド拠点の性質が特殊だったからだ。

ギルド：ネコさま大王国はユグドラシルの猫好きが猫型ＮＰＣを愛でるために作

り出されたギルドであり、根本的にＮＰＣの存在ありきで創設された経緯があった。
よって彼らは異世界転移当初から、現実化したＮＰＣの存在を盛大に歓迎して受け入れることができたのだ。もちろん価値観の相違も数多くあったが、それを乗り越えることができるだけの心理的な余裕や体力があった。中にはＮＰＣと婚姻を結んだ業の深いプレイヤーもいたほどだ。

そして結果的に【魔神化】を経てもなお主人の仇討ちを果たそうとしたネコさま側のＮＰＣを鑑みるに、「忠誠心」を失っても実際に交流して育んだ関係性は無くならないと推測できるだろう。
これこそが六大神とネコさま大王国で発生した【魔神化】の大きな違いと、その原因だ。
そして【創造主への優先】を瓦解させるただ一つの方法論である。

◆

「「重要なのは、ナザリック地下大墳墓ならどちらのケースに至るのか、というこ

とです。そしてそんなもの、考えるまでもありません。アインズ様の愛を皆様方が裏切るわけがないんですから。

これが私の、ギルド武器破壊を試みようとした動機です。何卒ご理解いただきますようよろしくお願いいたします。

御清聴どうも、ありがとうございました」

話を終えてお辞儀する。

どこからも、欠片ほどの拍手さえ鳴らなかった。

別に良かった。非難されようがどうしようが、私の意志は揺るがない。

「ふふっ、あははは!!」

だけどもこらえ切れずに、私はおかしくて笑ってしまった。

だって皆、タブラもアルベドさんもアインズ様もＮＰＣの皆様方も、狂った奴を目の当たりにしたかのような恐怖と絶望の表情を浮かべていたからだ。

皆さんそんな、私ごときを異常者呼ばわりできるほど、自分がマトモだと思って

いるの？

どいつもこいつも、誰一人残らず碌でもないっていうのにさ。

◆◇◆

「あなた狂ってるわ」

アルベドは理解した。そして確信した。

これまで何度も何度も、日々改めて身に刻むほど理解してきたつもりだったが、それでも認識が甘かった。

マタタビの抱くアインズ様への激情は、アルベドの抱くソレなど比べようもないほど膨大であったのだと。

シモベとして植え付けられた、彼女の言う「忠誠心」など言うに及ばず。

日々膨れ上がり成長していく自らのアインズ様へ向けた愛さえも、彼女を前には霞んでしまう。

ここまでするのか。やってのけるのか。
仮にアルベドがマタタビの持ちうる手札を持っていたとして、同じ立場と能力を得ていたとしても、マタタビと同じ選択なんてしなかった。
選択肢にすら入れないだろう。

「狂人呼ばわりは心外ですが……でも、これでよくわかったでしょ？　私はアインズ様にふさわしくありません」
「そうね。私が愚かだったわ」
もしもかつてのアルベドの目論見通りマタタビとアインズ様を婚約に結びつけることができたとしても、３日と経たず世界を大騒動に巻き込みながら盛大な破局を迎えるだろうことは容易に想像がついてしまった。
「愛情深いアルベドさんとは全く違って、私はあくまでアインズ様の厄介ファンです。方向性こそ真逆ですけど、結局のところタブラ・スマラグディナとも同類ですね」
「言いがかりもは甚だしいね」

「タブラは孤立するアインズ様の姿見たさに、マサヨシと母さんをぶっ殺した。
私はアインズ様を裏切る世界そのものが許せなくて、ナザリック地下大墳墓をぶっ壊す。
美学のために悪辣な裏切りも辞さないという意味では、何の違いもありません」
「……君はもう少し自分の尊厳を大事にした方がいいよ。そんなだから他人のことも平気で軽んずる」
「実体験に基づいた貴重な意見ありがとうございましたクズ野郎」
「あら少しはマトモなことを言うのね、見直したわよクズ野郎」
「グヘッ!!」
縛られて寝そべったタブラの顎を、アルベドは鋼鉄のブーツで蹴り飛ばす。
思いのほか快い蹴り心地に恍惚とし、グッズ化して人間の国にでも売れば大人気商品となり程よい経済効果が生まれるやもと閃いた。
まもなく訪れるであろう終焉の皮切りを目前に、著しい現実逃避を催していたアルベド。
そんな生ぬるい意識を閉ざすように、ぴしゃりと、絶対なる愛しい主人が荒げた

声を発するのだった。

「ふざけるのもいい加減にしろマタタビさん!!　あんたのソレは何の根拠もないただの仮説にすぎないじゃないか!!　今すぐ撤回して俺たちを【山河社稷図】から開放してください!!」

アインズ様の、まっとう過ぎる怒りの声。

確かに正論だ。マタタビの企みには不確定要素が多すぎて、何一つとして安心できるものがない。

そしてそもそも、ここに来るまで覚悟を固めたアインズ様は、マタタビがもたらす結果を何一つとして望んではいなかった。

だからこの場で正しいのはアインズ様で、どこまでもマタタビは間違っている。

今日日様々な信頼に裏切られ続けた、痛ましい御姿のアインズ様。

アルベドは深く同情し悲しくも思う。だが同時に少し、往生際が悪いとも思って

しまうのだった。

虚しく響いた主人の怒りに、口を挟んだのはタブラだった。

「どうあれあの時モモンガ君は、彼女に縋ろうとした時点で負けたんだよ。だからこの場でモモンガ君がどれだけ正論を振りかざしたって、彼女が変わることは無い。君が彼女の暴論を受け入れないのと同じようにね」

「……自分もマタタビさんに負けたから、同じように受け入れろと？」

「勝者こそが絶対。弱肉強食のこの世界と、そして他ならぬ君自身のルールじゃないか」

「糞が!!」

「ぐへっ！」

やり場のない自身への怒りを込めて大地を（ついでにたぶらもタブラ）蹴飛ばすアインズ様。それから御方は力なくうずくまってしまい、何もできないアルベドは、傍にかがんで背中に手を添えるほかなかった。

「不敬ですよタコヘッド。この世界の形勢は一度たりとも変わらずアインズ様です。誰が負けたって？　何が暴論だって？　減らず口もいい加減にしないと刺身にしますよ？

こうして我々の目の前に、アインズ様という確固たる証拠があるじゃないですか」

「さっきからそれを暴論って言ってるんだけどね」

勝者こそがルール。

この場の全てを支配した絶対勝者マタタビは、がむしゃらに暴論を振りかざしてはアインズ様を讃え続けた。

その有様は、世界征服計画とかその他も諸者ナザリックでやらかしたあれこれや、話に聞く六大神ＮＰＣの空回りよりも傍迷惑に違いない。

（どうしてこんなになっちゃったのかしら）

そもそも考えてもみれば、最初のマタタビはまだしもこんなイカレ女では無かったはずだ。

鬼と遊べば鬼になる。
マタタビがこんな狂信モンスターに仕上がったのは、彼女をシモベとして取り囲んだナザリックからの悪影響なのではないか？
アインズ様を至上の存在としてたたえるシモベ達に囲まれて、マタタビの人間性も取り返しがつかないほど歪んでしまったのでは？　思うに彼女は、周囲に影響されやすい性格だし。
（反省しよう、うん）
もし今後の機会が許されるなら、二度とこのような迷惑はアインズ様にかけないようにと、アルベドは固く誓うのだった。
そして彼女が父母の元へと帰る前に、しかるべき人格矯正を施さなくてはとも思った。
「なんて、冗談半分はここまでにしまして。どうかお顔を上げてくださいアインズ様」
（半分なのね）
「……マタタビさん」

マタタビの声に反応したアインズ様は、ゆったりと膝を持ち上げて正面に立ちなおした。
お顔からうかがうアインズ様の感情の中に、マタタビや己に向けた怒りこそあれど、欠片ほどだってマタタビへの憎しみは感じることができなかった。
（ほんときらいコイツ）
その意味を、知ることも知ろうともしないマタタビは、透き通るような澄んだ瞳でアインズ様を見つめ返す。
そして神妙に口を開いた。

「おっしゃる通り確かに私は、この仮説において明確な証拠をお示しすることはできません。ですから代わりに一つの保険を用意しました」
「保険だと？」
「そうです。ある人物が私に勝つことができたならこの計画は中止しようと思ってます。そうなった時点で私の作戦はリスキーだったと証明されますからね」
「いったい誰だ、その人物とは」

マタタビが告げたのはナザリックに属する一人のシモベの名前だった。
アルベドは彼をよく知っている。
彼こそがある意味において、ナザリック地下大墳墓が抱える闇そのものなのだから。

◆◇◆

マタタビが玉座から睥睨するＮＰＣ皆様方のリアクションは実に様々だった。
アインズ様と他の至高の御方の衝突を知って顔面蒼白になる者。
全てを差し置いてマタタビと言う名の眼前の敵に憎悪を滾らせる者。
一切がマタタビのデタラメであると疑っている者。
意外なことに、マタタビの言い分を理解して絶望と共に受け入れている者も少数

ながらいる。まもなく自分らの在り様が大きく歪められようとしているのに、正気の沙汰とは思えなかった。

我ながら吐き気がするほどの悪党ぶりだ。

痛む良心も無いことは無いが、そんなものでこの破壊衝動を止められるぐらいだったらマタタビ自身苦労は無い。

仁義も恩義も友情も、人間性も何もかも、私を律するには至らないのだ。

「それでは皆さま思うところあるかもしれませんが諦めてくださいね。間もなくギルド武器破壊と共に今までの大事なアレコレを消失してしまいますので、どうかご理解くださいな」

マタタビは、酸で溶かして壊れかけのスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを高く掲げる。限界まで耐久値がすり減った今ならば、全力で床に叩きつければ壊れるだろうか。どうだろう無理かな？

とにかくマタタビが振り下ろそうとする行為を、止められる者はこの場に居ない。

「では……おや？　あなたは」
「〈飛行（フライ）〉」
誰もかれもが諦めていたその瞬間、異議申し立てに挙手するように、一人の男がゆっくりと空中に浮かび上がった。
内心マタタビは待ってましたの心地で手を止めて、彼と真っ直ぐ見つめ合った。
（……来ましたねバケモノ）
目の前の男の異様な表情を前にして、マタタビは今日一番の戦慄を覚えた。
彼こそが、マタタビが倒さなければならない敵の本質。
全ての理不尽の象徴だった。
「マーレ・ベロ・フィオーレさん」
相対するは見目麗しいダークエルフの無垢な少年。
平時の臆病で狼狽えるような擬態の姿はそこにはなく、一見して欠片ほどの感情も伺えない涼しい表情だ。
その瞳には欠片ほどの迷いも葛藤も感じられない。

他のＮＰＣが抱くような、怒りも憎悪も恐怖すら彼の中には無いだろう。
それでも彼は無造作に、神器級アイテムである魔法触媒の杖をマタタビ向けて突きかざす。
彼の挙動に玉座の間一帯がざわめいて、次いで彼の傍にいた姉のアウラさんがが叱責を飛ばした。
「やめなさいマーレ！　あんたじゃ相性が悪すぎる！　それにもうこの状況じゃ、どうしようもないでしょうが！」
「ちがうよお姉ちゃん」
普段なら姉に弱い弟として設定されたマーレはアウラさんに逆らわない。
けれど本性を取り繕わなくなった彼は平然と姉の言葉を無碍にして、自らが考える最善のために動き出す。
「この人に逆らえるのは僕だけみたい。だから何もしないでお姉ちゃん、他の皆さんも」
「マーレのくせに意味わかんないこと言うんじゃないわよ!!」
ギルド武器を抑えられ、ましてや魔法詠唱者であるマーレなど速攻型のマタタビ

との戦闘相性は最悪だ。
一見して筋の通らない彼の言い分は、しかしこの場の誰よりもロジカルであるとマタタビは理解していた。

（わかってやがるなぁ）

「もうこれくらいしか ぶくぶく茶釜様にしてさしあげられることがないみたいですし」
マーレは機械的な思考で導き出した使命を背負って、混じりけの無い殺意だけをマタタビに手向けた。

「あなたは僕に、アインズ様を最優先してほしいと思ってます。でもそれはきっとぶくぶく茶釜様の意向に沿わないから、僕が僕であるうちに、あなたを殺して阻止します」

「そんなことアインズ様は望まないと思いますがね？　凄く凄く言いたくないけど、これでも私はアインズ様に気に入られているようですから。あわよくば私を殺せたとして、今度はあなたがアインズ様に殺されちゃうかも」

「うーん、アインズ様には申し訳ないですけど……でもきっと、今はその方が都合がいいですよね？

もしあなたの言うことが正しいのなら、僕の心が ぶくぶく茶釜さまだけにある限り、多分あなたは【魔神化】を起こさないでしょうから」

「……ご名答です」

マーレの精神性は厄介だった。

いくら創造主のためとはいえ、これまで散々忠義を尽くしてきたアインズ様のことを平然と切り捨てられるのはマーレくらいだ。

そしてその精神性こそが【魔神化】を引き起こそうとするマタタビの計画におい

て最大の障害なのである。なにせ、ぶくぶく茶釜に囚われた今のマーレを無視してギルド武器を破壊してしまえば、マタタビの予測において最悪彼は廃人化する。

そうなれば、お優しいアインズ様の心を致命的に傷つけてしまうだろう。マタタビは断固としてソレだけは避けなくてはいけない。

彼はマタタビの語った仮説と論理全て理解し、そのうえで自分とアインズ様の心を事実上の人質にとって、ギルド武器を握ったマタタビに抵抗しようというのだ。

「とてもとても正気の沙汰じゃありませんね」

マーレは的確にマタタビの目的と仮説に則って、自分の全てを賭けに出し ぶくぶく茶釜のためだけに行動を起こした。

それはつまり自分の創造主への忠義と好意が【創造主への優先】という法則によるものだという矛盾を受け入れたうえで、アインズ様を裏切るということだ。

「流石この状況で冷静な対応なさるとは。あなたの精神はどこぞの黄金姫なぞより

遥かに異形ですよ」

まさにマーレ・ベロ・フィオーレの心こそが、ＮＰＣという現実化した理不尽の象徴ともいえるだろう。

彼を乗り越えずしてマタタビの求める未来が訪れることはない。

「アインズ様のことは大好きだし、あなたのことも嫌いじゃありません。けど僕の大切なものは一つだけです」

ナザリックの命運をかけた最後の戦いが火蓋を切った

オリ主の計画全貌パートがあったんですけどこれ以上文章を詰め込めないので没にしました。活動報告に投げてます。

屈服

◆

『うーんアウラだけじゃ寂しいし、やっぱ弟キャラも欲しいかな』

元来双子とは一つの胎盤に同時に宿った二つの命のことを指す。

その定義に則れば、アウラという姉の後追いで生み出されたマーレは双子ではないし、そもそも母胎から産み落とされたわけでもないから血縁を分けているかも不確かだろう。

突き詰めて言えばアウラとマーレの関係は、あくまでも似た容姿で形成された一対のダークエルフでしかないと言える。

だがしかし、結局のところ誰が何と言おうとも、マーレ・ベロ・フィオーレはアウラ・ベラ・フィオーラの弟である。
気弱で、物怖じがちで、無垢な女児のように振舞いながら、姉には従順な弟。
それこそが創造主ぶくぶく茶釜に定義されたマーレという人物だ。
それ以外の何物であることもマーレは決して望まない。

『いいじゃん！　こーゆー弟欲しかったんだよねぇ！　あーかわいい！』

御望みとあらば如何様にでもと、心の底から強く思う。
未来永劫いつまでだって、御心に沿う己でありますように。

あるいはもしも、御身が己に何も望むものがなくなったなら、それでもせめて、御心に沿う己でありますように。

幸せなんて望まない。
幸せになるために生きているわけじゃないから。

だからマーレはマタタビに向けて反撃する。
アインズ様の愛を無碍にする。

それが一番《ｓ》誰にとっても正しいこと《ｓ》だ。

マーレは固く硬く杖を握った、左手に握る強い違和感を忘れたままに。

◆
◇
◆

この世で最も強いのは迷わず行動する人物だ。
アインズ様の強さには狡猾さや残虐さへの躊躇いがないことに起因しているし、逆にカタログスペック最強のツアーすら葛藤と苦悩が足を引っ張りマタタビ相手に後れを取ることもある。
こうしてマタタビがナザリック地下大墳墓へ王手をかけられたのも、マタタビの中の強いモチベーションが功を奏した上で、さらにＮＰＣの皆様方が急激な事態に戸惑ってしまったという２点が重なったおかげなのだ。
たかが精神論と馬鹿にできたものではない。
プレイヤーの願望が形になったこの世界で、意志の力を軽んじるのは机上論好きの愚か者だ。

そしてだからこそ、彼は強い。
マーレ・ベロ・フィオーレはこの場の誰をも差し置いて、マタタビにとって最大

の脅威だ。

「やってください」

宙に浮いたマーレさんは片手をかざし、とある二匹に向けて言い放つ。

『ＧＲＲＲＲＲ！『ＧＡＡＡＡＲ』！』

流れ星の指環（シューティングスター）に並ぶ課金ガチャＳＳＲ、レベル90最上位種ドラゴン２頭。

爆運を誇る やまいこ のレアガチャ竜。マーレさん唯一にして最大の手勢が、その巨体をもってして玉座のマタタビ目掛けて押し寄せた。

玉座の傷や仲間への余波を度外視した、巨体種自慢の質量攻撃。

当たればどのような存在もただではすまない、それだけの威力と意思が乗せられた巨獣による突進攻撃。

しかし、

「私だって本気なんですよ？」

瞬時、マタタビは玉座を足蹴に、自慢の脚力で高く高く天井近くまで飛び上がる。

もちろん竜たちもマタタビ向けてＬ字で急旋回しながら急上昇。
あわや現地勢どころか他ＮＰＣを巻き込むのをギリギリ回避してくれたことに気を緩める余裕もなく、マタタビは反撃の忍術を行使した。
「口寄せの術『白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）』」
宙に両手をかざして、目いっぱいのＭＰを込めてながら召喚陣を大きく広げる。
波紋のように広がる召喚陣から、白金色に輝く巨大な竜、ツアー本体が顕現した。
「お願いツアー！」
「承知した」
白金に輝く巨大な竜は背にマタタビを乗せたまま、押し寄せる２体の竜と真っ向から大激突。
竜と竜の角と角、牙と牙が正面からぶつかり合い、周囲に特大の激突音が鳴り響いた。
いくらツアーがカンストレベルのドラゴンでも、相手だって90レベルのドラゴンが２体。ステータス上の計算で考えればツアーの方が大きく劣っている。
通常考えれば明らかに劣勢なのだが、マタタビは欠片も彼のことを心配なんてし

ていない。

「流石ですねぇ」

そしてマタタビの期待通りに、勢いをつけた2体の猛攻に対してツアーは難もなく受け止めて見せたのだ。

「こいつら体の扱いがなっちゃいない。図体だけのひよっ子だ」

彼我の実力は圧倒的な年輪の差によって広がっていた。

片や数百年以上生きている竜王種、片やつい数か月前に実体化しただけの生まれたて。

やはり課金などナンセンス、本当に必要なものは自分の手でつかみ取るに限る。

プレイヤーや同族相手にしのぎを削り生き残ってきたツアーを前に、初陣ドラゴンは相手が悪いにもほどがあるというものだ。

もっとも飼い主である初陣マーレさんは、初心さの欠片もない模様。

せっかくの やまいこ の贈呈物すら躊躇なく囮に使い潰して、本命の攻撃へと移行する。

「〈魔法最強化効果範囲拡大滅亡の雨（マキシマイズワイデンマジックレイン・オブ・デストラクション）〉」

レアガチャ竜２匹を囮にマーレさんが放つのは、お得意森司祭（ドルイド）系の広範囲殲滅魔法。

荒れ狂わんばかりの暴風雨が、マーレが握る杖の先から放射状に迸る。

雨、とは言っても一粒一粒が鉄骨を貫通する威力のソレは、正しく弾幕と呼ぶにふさわしい殺意に満ちていた。

とはいえど、ツアーの体力であれば問題なくしのぎ切れるし、マタタビは範囲外まで跳躍して逃げればいい。

「味方諸共お構いなしですか！」

ただ問題なのはこのまま攻撃を通せばレアガチャ竜どころか、下にいるＮＰＣ皆様方まで巻き込みかねないこと。

「ツアー!!」

「ッ！」

マタタビの呼びに応じたツアーは、両手で２匹の竜を抑えながら器用に巨翼を盛大にはためかせ、盛大な突風を生み出した。

「〈火遁・烈火砲〉！」

さらにマタタビが放った十位階魔法相当の火遁忍術が合わさって爆炎の渦が巻き起こり、マーレの放った暴風雨と対衝突。盛大に水蒸気をまき散らしながら相殺していき、上空は雲の中のように白煙で覆いつくされた。

味方を巻き込んだ攻撃が有効であると実感し、ゆえに躊躇いもなく追撃の範囲魔法を放とうとするマーレ。

ただし彼は自分の背後が、濃霧によって大きな影になっていることに気づいていない。

「〈魔法最強化効果範囲拡大（マキシマイズワイデンマジックアース） 大地の―」

「〈影渡り〉」

影と影をつなぐ短距離転移の忍術が、マーレの死角にマタタビの凶刃を送り届ける。

振るうのはギルド武器から放たれる神速の一閃。狙うは首や心臓……ではなく

て、彼の真なる急所である左手首。
ただしいくらマタタビの腕が早かろうとも、空間転移で生じる一瞬のラグは無くならない。
「ッ!!」
「やるね」
そして直接戦闘も可能とする森司祭（ドルイド）のマーレであれば、その一瞬で反応して杖で受け止められるのも想定内。
だから弐の太刀。すでに受け止められたギルド武器は即座に手放し、懐に忍ばせていた短刀を抜き出して振りぬいた。
杖の内側、マーレの懐に潜り込んだ込んだ刀の軌道は、後ろずさる彼の首元を薄皮一枚だけ軽く掠める。
「うっ！」
ギリギリの回避、一瞬の攻防に感じた僅かな安堵をマタタビは決して見逃さない。
元より首なんて狙ってないから。
首元を通り過ぎた刃の軌道は弧を描いて、杖を握っていないマーレの左手を斬り

飛ばした。
失くしてはならない、マーレの左手首を斬り飛ばした。

◆◇◆

マーレの手先を、鋭い鋼が切断する。
血を流すなんてことは、生まれて初めての経験だ。
今まで転んで擦りむいたことすらないのに、突然体の一部が消えてく感覚なんて、我がごとながら信じられない。
かなり痛い。痛いが、死闘の心構えを整えたマーレにとっては苦痛というほど辛くはない。ただ痛み以上の大きな何かがマーレの神経に流れ込んで、刹那のやり取りの中で妙な居心地を覚えてしまうのだ。
肌に感じる欠片ほどの殺意も感じられ無いマタタビの刃は、いっそ人肌のような温もりすらこもっている。
そしてマーレの瞳を射抜くような透き通った眼差しは、マーレの心の奥底をどこ

までも深く見通しているようだった。

そう、彼女はマーレを理解しているのだ。誰にも理解されるわけの無いマーレの本性に共感し、だから彼女はマーレが打って出ることもわかっていた。

全てが彼女の手の平だ。

とてもとても、気持ち悪い。

「〈上位転移（グレーターテレポーテーション）〉」

悪寒を振り払うようにマーレは転移で距離を取り、天井に背をもたれかかって浮遊した。せめて背後だけは取られないようにと。

そうしてマーレが一呼吸入れると同時に轟音が響きわたる。

「ＡＡＡＡＡ!?「ＧＹＡＡＡＲＲ！」」

「口ほどにもないね」

水蒸気が衝撃で晴れ渡ると、絶望的な光景が露になった。

マーレ手勢の二頭の竜が、両首を白金の竜王（プラチナム・ドラゴンロード）の両脇に抱えられていた。

そして既に首の骨を関節技でポッキリへし折られていたのだ。

魔法相殺による水蒸気爆発の直後、怯む２頭に間髪入れずに押し倒したのだろ

う。
レベル上ではほぼ遜色のないマーレの２頭が白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王にこうも後れを取るのは、立回りの差。圧倒的な実戦経験不足に間違いない。
そしてマタタビを相手にするマーレ自身も全く同じことが言える。
いくら森司祭（ドルイド）として直接戦闘にも対応可能な身体能力を持っていても、マタタビ相手には付け焼刃。あっさり見切られ躱されて、自分の首級をとられかねない。
膨大な戦闘経験を有し、正確無比の体捌きで超速戦闘を得意とするマタタビは、マーレにすれば普通の前衛戦士よりもはるかに相手にしづらい難敵。
どころか姉のアウラがいったように、普通に戦えば絶対勝てない。
今だって、きっと彼女はすぐにでも距離を詰めなおしてマーレを切り裂きにかかるだろう。
だが、今の特殊状況による戦闘ならば、マーレにだって勝ち筋はある。
「……気づかないのねぇ！」
壁面を足場にして猛スピードで接近してくるマタタビ。
そんな彼女の呟きを頭に入れることすら放棄し、稼いだ距離でマーレは特大の魔

法を下へと放った

「〈魔法最強化三重詠唱効果範囲拡大（マキシマイズトリプレットワイデンマジック）大地の大波（アース・サージ）〉」

杖の先から膨大な質量の土砂が三重の山になって、猛烈な勢いで玉座全体を押しつぶそうとなだれ落ちる。

全てを飲み込む質量攻撃。マタタビも、白金（プラチナム）の竜王（ドラゴンロード）も、２頭の竜も、マタタビが呼び寄せたほかの手勢も、そして姉アウラを含む他の全てのシモベ達も巻き込む大暴挙。

マタタビは強いが、アサシンである彼女では守りながらの戦いは不得手だろう。

そしてマーレは、同胞のシモベ達が自分の範囲攻撃に碌な抵抗もしようとできないことを知っている。

なぜなら今の彼らは無力だから。

マーレのようにすべてを受け入れてなお創造主だけを優先することも、マタタビ

のようにアインズ様に尽くすこともできないでいる。

「どうしようもないじゃない！」と姉のアウラがとマタタビの暴挙を受け入れてしまったのと同じ。

マーレがマタタビを止めるために他のシモベを巻き添えにすることを、彼らは否定することができないのだ。

マーレは、心折られて動けなくなった他のシモベたちを責めるつもりは欠片も無かった。

今のマタタビに立ち向かえる自分の精神が異質であるのだということも理解していた。

ただただ黙ってマタタビを追い詰めるための道具になってくれるなら、マーレにとってこれ以上は求められなかった。

理解されなくたって構わない。

「自分を見ているようで気分が悪いですねぇ」

だがしかし、マーレの全てを見通しているマタタビと言う怪物は、度し難いほど

気色悪かった。

「【真なる無(ギンヌンガガプ)】」

「え!?」

マタタビが抜き出した短杖にマーレは思わず声を漏らす。

黒く小さなソレは、アルベドが至高の御方から賜ったはずである世界級アイテム【真なる無(ギンヌンガガプ)】。

彼女が弧を描くようにソレを振るえば、土砂の山々を飲み込むような破壊の奔流が迸り、やがて土雪崩はチリ一つ残さず掻き消えてしまった。

対物質破壊属性の広範囲攻撃を可能とする【真なる無(ギンヌンガガプ)】。

なるほど、これを使ってナザリックの隔壁を突破したというわけだ。

手にした経緯を考えても仕方が無い。

ただ物質破壊属性というなら、有機物である植物系の広範囲魔法は防げないだろう。

短期決戦を好むマタタビ相手にMPの出し惜しみなどまるで無意味だ。

再び魔法強化を重ね掛けて範囲魔法を詠唱する。

「〈E魔法最強化三重詠唱効果範囲拡大《マキシマイズ・トリプレット・ワイデンマジック》死の芽（デッド・ジャーミネーー）ー」

『ＧＹＹＡＡＡＡ……』

「ううぅ！」

放とうとした直前に、眼下の白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王が直線状のブレスを放射。

どうにか飛行操作で横にそれるも、マーレの魔法は発動を防がれてしまった。魔法強化をガン積みした魔法は詠唱が長いので妨害されやすいのだ。

そしてひときわ大きな隙を見せたマーレを前に、当然マタタビは次の手を討つ。

それはきっと、今のマーレには致命打に至る詰みの一手に違いない。

「【世界断絶障壁】」

マタタビの右手、不釣り合いな白金色のごつごつなガンドレッドが光り輝いた。

やがて淡い薄膜がマーレとマタタビだけをのみ込んで、球体状の障壁となり二人

を一つに閉じ込めた。

王国の動乱で白金（プラチナム・ドラゴンロード）の竜王が出したのと全く同じものだった。

◆

マーレとマタタビを閉じ込めた球体は、玉座の間の中に収める必要性があったので、王国の時のそれより非常に狭い。

直径わずか70メートルしかない球心体は、マーレの範囲魔法を回避できる余地がない。だがマタタビの最高速なら魔法より速くマーレの襟首へと到達できるだろう。

そしてマーレは、マタタビが魔法を防げる手札を持っていることを知っている。

ホワイトブリム様から与えられたという例の強力な防御衣装を身に着けた彼女なら、マーレの魔法も耐えられるだろう。

勝てる可能性はゼロではないが、しかし非常に分が悪い。

こうも見事に閉じ込められては他のシモベの皆を巻き込んで陽動することもでき

ないし、当然逃げ場もどこにもない。
そしてこれまでの戦いの流れが全てマタタビの思惑通りであるならば、このまま戦うレールに乗っても勝てる気はしなかった。
ならばどうすれば、マタタビの想定を超えられるのだろう。
アインズ様がマタタビを超えたように、マーレに同じことができるのだろうか。
「……」
「……」
互いの間合いを読み合う、静の時間が両者に流れた。
その貴重な時間で目いっぱい、マーレは勝利の道筋を探る。
「降参しろとは言いません」
そして静を突き破ったのは、マタタビの親し気な言葉だった。
「マーレさんも並々ならぬ意志でこの場に立っているのでしょう。ただ少し、お話を聞いてもらえませんでしょうか」

交渉、コミュニケーション。
それは一見今のマーレに残された数少ない手立てだと言える。
力で完封した相手に残された、マーレ唯一の逆転法。
「うーん」
「あの？」
だがマーレは足元を見降ろして考える。
視線の先には自己矛盾で動けなくなった同胞のシモベ達と、そんな彼らに放置されているマタタビの手勢がいるだけだ。

彼らがああも無力になってしまったのは、何もマタタビがハチャメチャに強いからというワケではない。
忠義と使命で動いている自分たちは単なる武力で屈するような存在でないのだ。
マタタビの本領は、相手を理解しその行動を誘導する術にある。
アインズ様をナザリックから引き離したのも、脆弱なこの世界でここまで手勢を

集めたのも、折れるはずの無かったシモベの心すら捻じ曲げたのも同じこと。
ならば当然、今のマーレ・ベロ・フィオーレを変える術すらマタタビは用意しているに違いないのだ。

「だったら、こうするのが一番ですね」
力では勝てない。言葉でもきっと勝てない。
ならこれが、最後に残された選択肢。

マーレはゆっくり両手を挙げて、頭の真横に掲げた。
そして、
「降参ですか？」
「違います」
両手の人差し指を両耳に突っ込んで、自分の鼓膜をぶち破る。
そしてそれを我が事かのように驚愕するマタタビの様子を見て、マーレは初めてこの戦いに確かな手応えを覚えた。

「■■■！！？？」

彼女は叫ぶが、マーレは何も聞こえない。

これでもうマタタビの言葉がマーレを惑わすことは無い。防御魔法のようなものだ。

そしてマーレの言葉は一方的にマタタビへ届くのだ。

「動かないでください」

握った杖を逆手に持って、鋭く尖った反対側を自分の顎下に置いた。

このまま突き刺せば、マタタビの手が届くよりも早くマーレの命は潰えるだろう。

「僕が死ぬか、あなたが死ぬか。どちらか一つを選んでください」

マーレはマタタビに狂った二択を突きつける。

どちらを選んでも間違いなくマタタビが望む最善は得られない。

そんな手詰まりな２択である。

「■■■‼　■■■、■■■■■■！」

なぜならマタタビの推論が真実ならば、マーレが死んでも、マタタビが死んでも、きっとアインズ様は傷つくだろうから。

そしてどちらを選ぶにしても、マーレがマーレで無くなることは無いだろう。
マタタビの死で【魔神化】を阻止するか、【魔神化】の前にマーレは死ぬ。
だからどの道死ぬまでずっと、ぶくぶく茶釜様のマーレ・ベロ・フィオーレで居られるだろう。

「■■■■■■■■■■■■■」

何を言っているのかわからないが、それが間違いなく抗議であるということはわかった。
わからなかったがわからないなりに、マーレは彼女に応じて答えた。

「僕はもういいんです。どうせあなたが死んでくれるとは思いませんし、ぶくぶく茶釜様の為に成れないぼくなんて、死んでいるのと同じですから。
もちろんあなたがこうする理由も、僕と同じでしょうけど」

マタタビの信念を否定するつもりはない。
アインズ様は確かに彼女が深く心酔するだけの、力と人格を兼ね備えたとても偉大な主人である。
それでもマーレは自分の優先順位を変えられなかった。それだけだ。
どうして自分がこうも頑固なのかはわからない。
マタタビの言うような【創造主への優先】というシステムによって生み出された感情だったとしても、別にそこはどうだって良かった。
ただただマーレは、成りたいように成るしかない。
愚直にどこまでも己を貫く。それがきっと、マーレの大事なモノ《S》たち《S》を守る唯一の術だと知っているから。
マタタビもきっと、同じなのではなかろうか。

「■■■■■■■■」

マーレが言いたいことを言い切ると、マタタビは目を細めて表情を硬く引き締め

た。相変わらず彼女の言葉は聞こえない。
ただ納得して何かを覚悟したかのような、そんな雰囲気の変化をマーレはなんとなく感じる。

「■■■」
やがてマタタビは腰をかがめ、取り出した日本刀を片脇に構えた。
そして彼女を中心に濃密な殺意が渦巻いて、マーレ一人へと向けられる。
「僕を、殺すつもりですか？」
確証は持てなかった。
彼女は、マーレが自分の脳を杖で貫くより速く、マーレを切り伏せようとしているのだろうか。
いやそれができるのなら、そもそもマーレの自殺だって止められる。
なら彼女の目的は何か。
何かはわからないが、どのみちマーレが自分で死ねばその目的は果たせなくなるだろう。彼女の野望が一歩遠のくだろう。主の御心へ一歩近づくことだろう。

ならば、であれば、マーレは自害を躊躇わない。

マーレは下あごを貫くようにして、握った杖に力を込めて突き立てる。同時に、マタタビが駆け出す足音がした。

「さよなら」

マタタビは直前何かをマーレへ投げつけていたが、この瞬間は意識の外にあった。

◆

刹那、一瞬が永遠へと変貌した。

命の危機に瀕して、脳内処理が高速化するための現象だ。

体感時間あたりに網膜が受け取る光量が減ることで、視界が徐々に闇へと近づく。

薄暗くなる景色の中で、あのマタタビの駆け足がひどく緩慢なスローモーションとなっていているのがわかった。

もちろんマーレが自分の首を刺し貫く勢いも遅くなっているので、すぐさまマー

レの死で結果がついたわけでもない。
ただ単純なペースの比較として、マタタビの足はマーレの命にギリギリ間に合わないということは明らかだった。
そんなこと、知るまでもなく当たり前な事実だ。

だというのにマーレの生存本能は、マーレの心に抗って懸命に体内時間を引き延ばす。
緩慢な時間の中で、存在しない生存への糸口を探そうとする。
自分の体ながらあまりにも余計なお世話だが、仕方ないのだ。

なにせ、マーレに斬りかかるマタタビの姿はこの上なく恐ろしい殺意に満ちていたから。
希死するマーレをして心底悍ましいと思うほどの脅威を感じてしまうから。
そのマタタビから迸る殺意とは、アインズ様の絶望のオーラのようなスキルとは全く違う。

ただ彼女の姿かたちが、剣を振りぬき駆け走る無駄のない一連の動きが、マーレを絶死に至らしめる殺害の意志をこの上なく表しているのだ。

まるで頭上に設置された断頭台の刃を見たような、それを何万倍にも濃縮したようなこの上ない殺意を、マタタビの一閃は何より鮮明に描いていた。

だから、どうしようもなく、仕方がない。

マタタビの刃がマーレの生存本能を刺激して、命じられたように生存する方法を探してしまう。

そしてそれこそが他ならぬマタタビの意図であったのだと、緩慢な時間の中でマーレは理解した。理解してしまった。

なぜならマーレは掴んでしまったからだ。掴んではならない生存への糸口を。

◆

体感で10秒程度。マーレはソレに気付いてしまった。

（あ……）

それは他ならぬマーレの手だ。

マタタビが斬り飛ばしたはずの、マーレの左手。

マタタビが駆けだす直前に、いつの間にか頭上に投げつけていた、マーレの体の一部分。

宙回転するマーレの左手には銀色に輝く指輪、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが嵌められていたのである。

今はとてつもなくどうでもいい《S》絶対に失くしてはいけなかった《S》、マーレの大事な宝物。

この地にただ一人残ってくださった至高の御方が、マーレの働きを労って与えたシモベ史上最初の褒章品なのだから。

しかもこの指輪は本来至高の方々しか所持を許されない至高の一品。

アインズ様がマーレに心底からの『感謝』抱いたというこの上ない証であり、これによってぶくぶく茶釜様の隠居以降、マーレという存在に初めて明確な価値と意義を与えるっことになった。

それも、デミウルゴスでもアルベドでもシャルティアでもコキュートスでも姉のアウラでも無くて、この世界に来てから誰より一番最初に頂いた、マーレだけの特

別な宝物。

『今後もこれほどの宝に相応しい働きをお見せしたいと思います！』

◆

だから、マーレ・ベロ・フィオーレは間違えたのだ。

マーレがぶくぶく茶釜様だけを選んだなら、こんな見え透いた陽動に引っかかってはいけなかった。

淡々と無視するべきだった。

あるいはそもそも、アインズ様を切り捨てマタタビに歯向かうと決めた時点で、足元に棄て置くべきだった。

刹那の迷いが、顎を貫くはずだった杖の勢いを僅かに弱める。

やがて先端が下顎と舌を貫通するも、上顎にたどり着く寸前で、マタタビの足が

間に合ってしまった。

「◆■■っ■」

横薙ぎな一閃が、首を突くマーレの杖を叩き落とす。

そして代わりに鋭い蹴りがマーレの顎を貫いて、その衝撃に意識が飛んだ

マーレは負けたのだ。

敗因と生因は、　大事なモノがブレてしまったことだろう。

創造主、ぶくぶく茶釜様の威光すらも陰らせる、アインズ様の慈悲深さ。

この時ばかりは疎ましく思ってしまうのだった。

◆◇◆

気が付いた時には両手足を枷にはめられ、ポーションによって左手も治癒されてしまっていた。元通りに指輪まではめられてしまっている。

白金の竜王による隔離結界は既に解除されていて、動けず座り込んでいたマーレの前でマタタビは腰を下ろしていた。
他のシモベも、誰も口出しできず場は静寂に支配されていた。
「マーレさんはアインズ様に負けだんです、私じゃなくて」
鼓膜も治癒されたことによって、聞きたくもなかったマタタビの言葉が否応なくマーレに響いた。
「あなたは僕の、何を知っているんですか？」
こうしてマタタビと会話するのは、マーレにとって初めてのことだ。
マーレはマタタビことを周辺情報しか知らないし、普通ならマタタビ側だって同じのはずだ。
なのに彼女は、マーレの心を知り尽くしたようにあらゆる行動を掌握してみせた。
正直酷く不気味である。
「お互い様、私からすれば不気味なのはマーレさんです。どうしてあなたがそんな割り切り良くアインズ様を切り捨てられたのか、私には一生理解できませんよ」

「そんなこと言われても」
マーレとて、どうしてマーレが他のシモベと違うのかはわからない。
そうあれと造られたのか、また別に理由があるのか。
それこそ ぶくぶく茶釜様ご本人にしか知りえないことだろう。
「ただマーレさんがアインズ様に恋してることは一目瞭然でした。
最初は原因はわからなくて、シャルティアさんやアルベドさんみたいに設定が絡んでいるわけじゃないし、かといって ぶくぶく茶釜の因子が影響していたなんてことは絶対にありえない」
「うえ……えっと、その？」
突然なマーレの恥ずかしいカミングアウトに赤面しつつ、理解できない理論を語るマタタビの言葉に首をかしげる。
「理由はアルベドさんが教えてくれました。アインズ様も罪な男です。
ＮＰＣの中で一番精神が不安定なマーレさんに、一番最初に感謝と褒賞のギルド指輪を授けるなんてね。そんなことされたらそりゃあ、シモベなら男女問わず惚れますよ。マーレさんにはパーフェクトコミュニケーションもいいところです」

私だったら拒否るけど、と余計な一言からマタタビは続ける。
「私はただ、アインズ様ならマーレさんの闇の心も照らしてくれると信じていただけですよ。結果的に、指輪を外さず私の前に立ち向かったところで大体の勝利は確信しました」
「いやでも……僕が生き残ったのってかなり紙一重でしたよね？」
自殺の瞬間僅かに意識がそがれることでギリギリ、マーレは死を免れた。
マタタビの足がどれだけ速くても、どれだけ剣術に秀でていようと、不確定要素が大きすぎるやり取りだったはずなのだ。
ここまで入念にナザリックに踏み込んだ彼女が、そんな運試しをしたというのか。
「ううんべつに。もしマーレさんに死なれても、生き返らせる算段はありましたから。
ほらあの、カルネ村のンフィーレア・バレアレって知ってるでしょ？」
マタタビは恐るべき舞台裏を語り始めた。
「あの人の、マジックアイテムの使用者条件を踏み倒すタレントがあるじゃないですか。

もしマーレさんが死んだならあの人を口寄せで召喚して、この場でギルドメンバーしか使えないスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの蘇生機能を使ってもらうつもりだったんですよ。

もちろん検証だってばっちりです。事前に八欲王の天空都市までツアーに顔パスしてもらって、あっちのギルド武器でも同じことができたって確認してからこの算段を立てたんですから。

もちろんポケットマネーが痛いから、死なれないに越したことありませんけでしたけど」

「あなたの手の平だったんですね」

姉アウラの言う通り、どこまでも勝算の無い戦いだったのである。

迂闊な博打撃ちなようでいて、抜け目ない計画性にマーレは溜息を吐いた。

「耳をふさがれた時は驚きましたよ。それだけ好きだったんですよね、ぶくぶく茶釜のことが」

「着易く呼び捨てるあなたが死んでほしいと思うくらい好きです」

「私はおどおどしない素のマーレさんのことも結構好きですけどね」
「……」
気付けばすっかりマーレは仮面を被り忘れていた。
創造主にかくあれと定められた個性に反したことが悔やましい。マタタビが向けるマーレへの好感は、どこまでもマーレにとって皮肉だった。
「あはは」
マーレの嫌悪を意に介さないマタタビは、不快に笑い声を挙げた。
「安心してくださいよ。【魔神化】によって消えるのは、植え付けられた忠誠心だけですから。ユグドラシルでぶくぶく茶釜に大事にされた記憶はちゃんと残るし、アインズ様がそうであるように、間違いなくこれからのマーレさんの支えになる。本当にあのひとのことが大事なんでしょう？」
マタタビがどう言おうとも、今までのマーレが変わってしまうことは変わらない。
ぶくぶく茶釜様を一番にできない自分など自分ではない。
「それでも、決して悪いことにはなりませんよ。マーレさんが変わっても、アインズ様はあなたを愛し続けるでしょう。なぜならあなたはアインズ様にとって ぶく

ぶく茶釜との大事な思い出の証だから。
たとえ億が一に ぶくぶく茶釜が敵対しても、決してアインズ様はあの人の命を無碍に扱うことはしない。私がさせない。アインズ様に誓っていいよ」
現在進行形でアインズ様に反目し続けている彼女が、どの口でアインズ様に誓うというのか。
マーレはあきれてモノが言えないが、しかしその辺りが妥協点なのかもしれないと思った。
「……なら、いいです。僕が僕でなくなっても、アインズ様が ぶくぶく茶釜様を尊んでくださるなら。僕はアインズ様のモノになります」
案の定、マタタビの言葉はマーレを変えて、マーレの心をへし折った。
他のシモベ達がそうであるように、マーレにはマタタビの意志に抗う理由がなくなったのだ。
マーレ・ベロ・フィオーレは心の底からアインズ様に屈服した。

◆◇◆

止められる者はもうどこにも居なかった。

「私、信じてますから」

今度こそマタタビは、壊れかけのギルド武器を高く掲げて破壊する旨を宣言する。

反対の手で【真なる無（ギンヌンガガプ）】を翳し当てて、破壊の魔力を注ぎ込んだ。

錆びついた黄金のスタッフは見る見るうちに罅割れて、間もなくあっけもなく

ポッキリ――

折れた

刹那、地響きにも似た不動の衝撃が、玉座の間一帯に響き渡る。

無音に凪いだ空間の中で、大事だったはずの者が取り返せない崩壊を迎える。

心の芯から、大事な何かが引っこ抜けるような、ひどく肌寒い虚脱感。

鳴き声、呻き声すら広がって、明らかに怪しい雲行きにマタタビの頬を汗が伝う。

だがやがて、皆の目に確かな一筋の光が宿った。

いっそその輝きは、幻影から解き放たれたことによってかつてないほど煌めいて燃え上がっているようでもあった。

マタタビの座す壇上に、一人の少女が声を挙げる。

アウラ・ベラ・フィオーレが、迷いなき強い声で問いかけた。

「アインズ様の敵はどこ？」

臆面もない笑みで、マタタビはその言葉を聞き入れる。

破壊しても破壊し尽くせぬギルド拠点。

屋台崩しマタタビは、ユグドラシルで得られなかった栄誉ある初敗北を喫し、満

足そうに彼女の言葉に応えるのだった。

エレンやユミルの気持ちが分かったかもしれません。

言い訳は活動報告に載せています

ナザリック最後の侵入者

著者　三次たま

発行日　2024 年 2 月 25 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/137210/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。